

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第199集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第35集

中沢平賀界戸遺跡

第1分冊《本文編》

1 9 9 6

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第199集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第35集

中沢平賀界戸遺跡

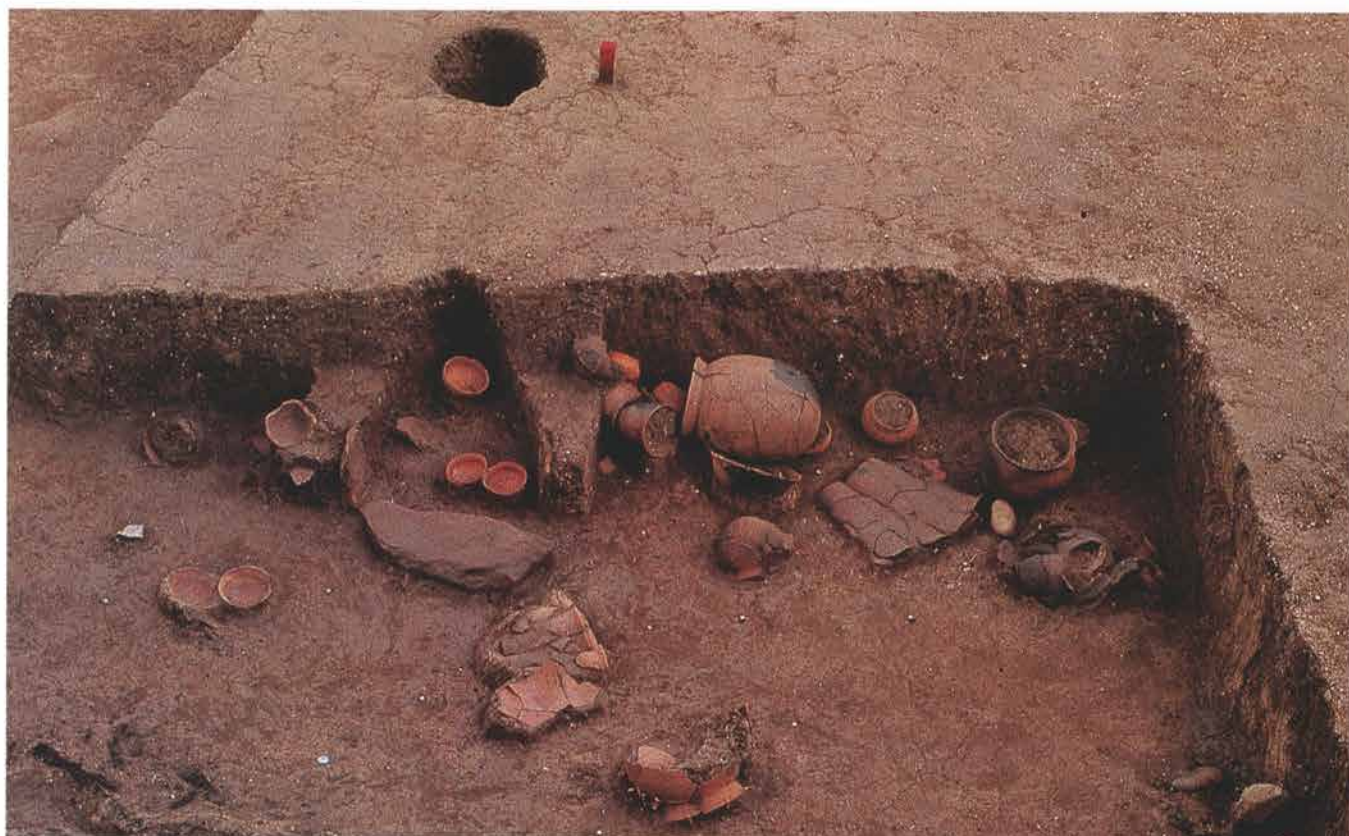
第1分冊《本文編》

1 9 9 6

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
日 本 道 路 公 団



遺跡北東上空より 鍋川上流をのぞむ



G区 26号住居 遺物出土状況



G区 26号住居 出土遺物



I区 3号住居出土 脚付羽釜

序

上信越自動車道は、平成7年11月に長野県佐久市と小諸市が開通、供用され、沿線の各都県並びに市町村にとっては、生活や経済活動において大きなメリットとなっています。

本書で報告する中沢平賀界戸遺跡は、この上信越自動車道の建設工事とともに、平成元年11月から平成3年2月にかけて発掘調査された縄文時代から近世にかけての複合遺跡です。隣接する南蛇井増光寺遺跡と共に、この地域の大規模な遺跡の一つです。この度の発掘調査報告書刊行によりこの地域の古墳時代後期、奈良時代の集落の様子が十分に伺い知れるのではないかと存じます。特に近接する式内社宇芸神社の鎮座の背景には、当遺跡の集落の解明が必要となりましょう。

発掘調査から調査報告書刊行に至るまで日本道路公団東京第2建設局、同富岡工事事務所、群馬県教育委員会、富岡市教育委員会、地元関係者等の皆様には大変お世話になりました。

これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が多くの方に活用され、またこの地域の歴史、とりわけ甘楽谷の歴史解明のために大いに活用されることを願い序とします。

平成8年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例 言

- 1 本書は上信越自動車道建設に伴い事前調査された「中沢平賀界戸遺跡」(事業名称井出遺跡)の発掘調査報告書である。
- 2 中沢平賀界戸遺跡は、群馬県富岡市大字中沢に所在する。調査時は、南に広がる南蛇井増光寺遺跡と一連の遺跡として同一事業で行ったが、中沢川以北を中沢平賀界戸遺跡とした。
- 3 本発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して実施されたものである。
- 4 実際の発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団内に上信越自動車道地域埋蔵文化財発掘調査を目的に設置された、関越道上越線調査事務所(多野郡吉井町南陽台3-15-8に所在)が担当した。
- 5 調査期間及び担当者は以下のとおりである。(() 内は当時の職名)
 - (1) 発掘調査 調査期間 平成元年11月1日～平成3年2月28日
調査担当者
平成元年度 依田治雄(専門員)、伊藤肇(主任調査研究員)、若林正人(調査研究員)
平成2年度 依田治雄、伊藤肇、桜井美枝(調査研究員)
 - (2) 整理 整理期間 平成6年4月1日～平成8年3月31日
整理担当者 桜井美枝
 - (3) 事務 常務理事 邊見長雄(平成元～4年度)、中村英一
事務局長 松本浩一(昭和63～平成3年度)、近藤 功(平成4～6年度)、原田恒弘
管理部長 田口紀雄(昭和62～平成2年度)、佐藤 勉(平成3～5年度)、蜂巢 実
調査研究部長 神保侑史
庶務課 課 長 斉藤俊一(平成4～6年度)、小淵 淳
係長代理 国定 均、笠原秀樹
主 任 須田朋子、吉田有光、柳岡良弘
主 事 高橋定義
非常勤嘱託 大沢友治、土橋まり子
臨時職員 吉田恵子、今井もと子、松井美智代、杉山ひろみ(旧姓:塩浦)、
内山佳子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子
関越道上越線調査事務所
所 長 高橋一夫(平成元・2年度)
総括次長 片桐光一(昭和62～平成元年度)、大沢友治(平成2・3年度)
次 長 徳江 紀(昭和63～平成2年度)
課 長 鬼形芳夫(昭和63～平成2年度)
庶務課 係長代理 宮川初太郎(平成元・2年度)
主任 国定 均(昭和63～平成元年度)、笠原秀樹(平成2・3年度)
臨時職員 山崎郁夫、神戸市四郎、松井留男、町田康子、本城美樹、後閑玲子
- 6 報告書作成関係者
編 集 桜井美枝

本文執筆 桜井美枝

遺物観察表 縄文土器—小野和之、弥生土器—大木伸一郎、陶磁器—黒沢照弘、前記以外—桜井美枝

遺構写真 発掘調査担当者

遺物写真 技師 佐藤元彦

保存処理 技師 関 邦一、嘱託員 土橋まり子、補助員 小材浩一、小沼恵子

整理補助 坂庭常磐（嘱託員）、新井悦子（嘱託員）、小林幸枝、山田キミ子、高柳哲子、小久保ト
シ子、小久保ヒロミ、斉藤ひろみ（旧姓：角田）、六本木弘子、飯野睦美

委託関係 プラント・オパール分析（榊古環境研究所）

残存脂肪酸分析（榊ズコーシャ）

その他 鉄滓および炉壁の分析については赤沼英男氏（岩手県立博物館）に、石器石材鑑定につ
いては飯島静雄氏（群馬県地質研究会会員）をお願いした。

7 出土遺物・図面・写真類は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターが保管している。

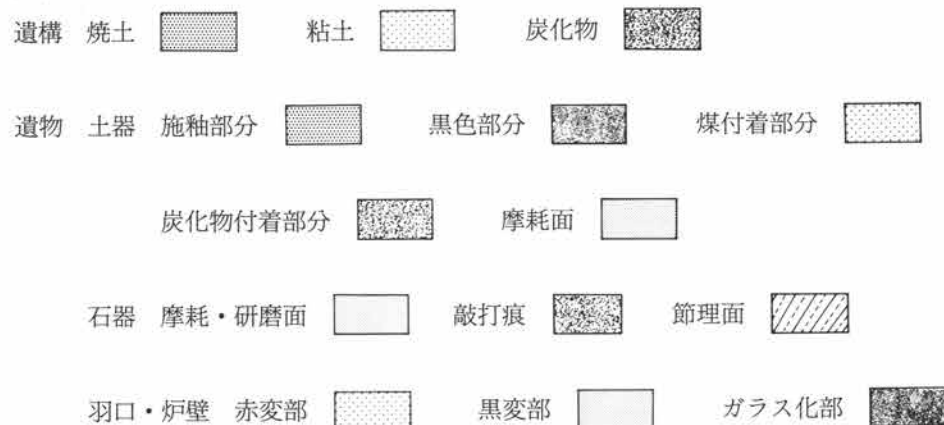
8 発掘調査および報告書作成にあたり、下記の諸機関・諸氏にご教示・ご指導をいただいた。また発掘調
査にあたっては、富岡市・甘楽町・下仁田町・南牧村の多くの方々に作業員としてご協力いただいた。記し
て謝意を表する次第である。（敬称略）

富岡市教育委員会、唐沢至朗、外山政子、五十川伸矢

凡 例

- 1 本書の遺構番号は、基本的に発掘調査時に付したものをそのまま使用している。
- 2 各遺構実測図の縮尺は、原則として以下のとおりで、基準としてスケールを配している。
住居 1/60 竈・炉・貯蔵穴 1/30 掘立柱建物 1/60 土坑・墓壇 1/30 溝 1/60
上記以外の遺構については、スケールを参照されたい。
- 3 遺構断面実測図・等高線等に記した数値はいずれも海拔標高を表す。
- 4 遺構実測図中の方位記号は、国家座標の北を表す。(国家座標第IX系)
- 5 遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりだが、統一できない部分もあり、縮尺を参照されたい。
土器 大型の縄文・弥生土器、土師器甕・小型甕・壺・甔・鉢、須恵器甕・壺・羽釜等：1/4
中・小型の縄文・弥生土器、土師器坏・皿、須恵器坏・埴・皿・蓋：1/3
石器 石鏃：4/5 白玉、紡錘車等：1/2 打製石斧・磨製石斧、スクレイパー、小型の砥石、磨石、敲石等：1/3 大型の石器：1/4
金属製品 銅銭：4/5 その他：1/2
- 6 遺物写真の縮尺は原則として遺物実測図と同じだが、一部拡大しているものがある。
- 7 遺構・遺物実測図中のスクリーントーンおよびシンボルマークは、以下のことを示す。

スクリーントーン



シンボルマーク

土器 ・ 石器 ・ 土製品 ・ 金属製品・炉壁 ・ 木製品 ・

- 8 遺構図、遺物実測図、遺物観察表、写真図版の遺物番号は一致する。
- 9 遺物観察表中の色調は、農林水産技術会議事務局監修 日本色彩研究所色標監修『新版標準土色帳』1988年度版を使用している。
- 10 住居跡の面積は、プランメーターで3回計測し、その平均値を用いている。
- 11 報告書中に掲載した第1図は、国土地理院 1：50,000の地形図「富岡」を使用した。
- 12 出土遺物の注記は、遺跡の略称KJ24を付し、次いで区・遺構名、ナンバーを併記してある。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
挿図目次	
表 目 次	
抄 録	
第1章 発掘調査の経過	
第1節 調査に至る経緯と調査の経過	1
第2節 調査の方法	3
第3節 基本土層	5
第2章 周辺環境	
第1節 地理的環境	6
第2節 歴史的環境	7
第3章 検出された遺構と遺物	
第1節 中沢平賀界戸遺跡の概要	11
第2節 F・G区	
1 縄文時代の遺構と遺物	24
2 弥生時代の遺構と遺物	26
3 古墳～平安時代の遺構と遺物	64
4 中・近世の遺構と遺物	401
5 遺構外出土遺物	421
第3節 H区	
1 弥生時代の遺構と遺物	426
2 古墳～平安時代の遺構と遺物	429
3 遺構外出土遺物	471
第4節 I区	
1 縄文時代の遺構と遺物	473
2 弥生時代の遺構と遺物	476
3 平安時代の遺構と遺物	482
4 中・近世の遺構と遺物	487
5 遺構外出土遺物	519
第4章 ま と め	
第1節 時期別の遺構分布	527
第2節 特殊な遺物について	

1 礎石建物跡出土の炉壁破片	533
2 木製緯打具	533
3 脚付羽釜	535
4 砥石素材	536

付 編

1. 中沢平賀界戸遺跡出土土器に残存する脂肪の分析	539
2. 中沢平賀界戸遺跡におけるプラント・オパール分析	548
3. 遺物の金属学的解析結果からみた中沢平賀界戸遺跡における鋼の製造と銅の生産	552

抄 録

挿図目次

第 1 図	中沢平賀界戸遺跡位置図	1	第 60 図	F-4 号住居跡③	74
第 2 図	中沢平賀界戸遺跡調査区図	3	第 61 図	F-4 号住居掘り方、出土遺物実測図①	75
第 3 図	グリッド配置図	4	第 62 図	F-4 号住居出土遺物実測図②	76
第 4 図	中沢平賀界戸遺跡基本土層図	5	第 63 図	F-4 号住居出土遺物実測図③	77
第 5 図	周辺の遺跡分布図	8	第 64 図	F-5 号住居跡	80
第 6 図	中沢平賀界戸遺跡 F・G 区全体図	折り込み	第 65 図	F-5 号住居竈、出土遺物実測図①	81
第 7 図	中沢平賀界戸遺跡 H 区全体図	19	第 66 図	F-5 号住居出土遺物実測図②	82
第 8 図	中沢平賀界戸遺跡 I 区全体図①	21	第 67 図	F-6 号住居跡①	83
第 9 図	中沢平賀界戸遺跡 I 区全体図②	22	第 68 図	F-6 号住居跡②	84
第 10 図	中沢平賀界戸遺跡 I 区全体図③	23	第 69 図	F-6 号住居出土遺物実測図	85
第 11 図	F-1 号埋甕、出土遺物実測図	24	第 70 図	F-7 号住居跡①	86
第 12 図	F-2 号埋甕、出土遺物実測図	25	第 71 図	F-7 号住居跡②、出土遺物実測図①	87
第 13 図	F-26 号住居跡①	26	第 72 図	F-7 号住居出土遺物実測図②	88
第 14 図	F-26 号住居跡②	27	第 73 図	F-8 号住居跡①	89
第 15 図	F-26 号住居出土遺物実測図①	27	第 74 図	F-8 号住居跡②	90
第 16 図	F-26 号住居出土遺物実測図②	28	第 75 図	F-8 号住居出土遺物実測図	91
第 17 図	F-28 号住居跡、出土遺物実測図	30	第 76 図	F-9 号住居跡①	91
第 18 図	F-34 号住居跡①	31	第 77 図	F-9 号住居跡②	92
第 19 図	F-34 号住居跡②	32	第 78 図	F-9 号住居出土遺物実測図	93
第 20 図	F-34 号住居出土遺物実測図①	33	第 79 図	F-10 号住居跡	94
第 21 図	F-34 号住居出土遺物実測図②	34	第 80 図	F-10 号住居竈、出土遺物実測図	95
第 22 図	F-39 号住居跡①	35	第 81 図	F-11 号住居跡①	96
第 23 図	F-39 号住居跡②、出土遺物実測図	36	第 82 図	F-11 号住居跡②、出土遺物実測図	97
第 24 図	F-43 号住居跡	37	第 83 図	F-12 号住居跡	98
第 25 図	F-43 号住居跡	38	第 84 図	F-12 号住居跡、出土遺物実測図①	99
第 26 図	F-43 号住居出土遺物実測図①	39	第 85 図	F-12 号住居出土遺物実測図②	100
第 27 図	F-43 号住居出土遺物実測図②	40	第 86 図	F-13 号住居跡、出土遺物実測図	102
第 28 図	F-44 号住居跡①	41	第 87 図	F-14 号住居跡	103
第 29 図	F-44 号住居跡②、出土遺物実測図①	42	第 88 図	F-14 号住居跡①	104
第 30 図	F-44 号住居出土遺物実測図②	43	第 89 図	F-14 号住居跡②、出土遺物実測図	105
第 31 図	F-44 号住居出土遺物実測図③	44	第 90 図	F-15 号住居跡①	106
第 32 図	F-53 号住居跡①	45	第 91 図	F-15 号住居跡②、出土遺物実測図	107
第 33 図	F-53 号住居跡②	46	第 92 図	F-16 号住居跡、出土遺物実測図①	108
第 34 図	F-53 号住居出土遺物実測図	47	第 93 図	F-16 号住居出土遺物実測図②	109
第 35 図	F-57 号住居跡①	48	第 94 図	F-17A 号住居跡①	110
第 36 図	F-57 号住居跡②	49	第 95 図	F-17A 号住居跡②、出土遺物実測図①	111
第 37 図	F-57 号住居出土遺物実測図	50	第 96 図	F-17A 号住居出土遺物実測図②	112
第 38 図	G-1 号住居跡	51	第 97 図	F-17B 号住居跡、出土遺物実測図	114
第 39 図	G-1 号住居出土遺物実測図	52	第 98 図	F-18 号住居跡	115
第 40 図	G-2B 号住居跡①	53	第 99 図	F-18 号住居跡、出土遺物実測図	116
第 41 図	G-2B 号住居跡②	54	第 100 図	F-19 号住居跡	117
第 42 図	G-2B 号住居出土遺物実測図	55	第 101 図	F-19 号住居出土遺物実測図	118
第 43 図	G-21 号住居跡、出土遺物実測図①	57	第 102 図	F-20 号住居跡①	119
第 44 図	G-21 号住居出土遺物実測図②	58	第 103 図	F-20 号住居跡②	120
第 45 図	G-29 号住居跡①	59	第 104 図	F-20 号住居掘り方	121
第 46 図	G-29 号住居跡②	60	第 105 図	F-20 号住居出土遺物実測図①	121
第 47 図	G-29 号住居出土遺物実測図①	61	第 106 図	F-20 号住居出土遺物実測図②	122
第 48 図	G-29 号住居出土遺物実測図②	62	第 107 図	F-21 号住居跡	124
第 49 図	G-39 号土坑、出土遺物実測図	63	第 108 図	F-21 号住居跡、出土遺物実測図①	125
第 50 図	F-1 号住居跡、出土遺物実測図	64	第 109 図	F-21 号住居出土遺物実測図②	126
第 51 図	F-2 号住居跡①	65	第 110 図	F-22 号住居跡①	128
第 52 図	F-2 号住居跡②	66	第 111 図	F-22 号住居跡②	129
第 53 図	F-2 号住居出土遺物実測図	67	第 112 図	F-22 号住居竈 No.2、出土遺物実測図①	130
第 54 図	F-3 号住居竈	68	第 113 図	F-22 号住居出土遺物実測図②	131
第 55 図	F-3 号住居跡①	69	第 114 図	F-23 号住居跡①	133
第 56 図	F-3 号住居跡②、出土遺物実測図①	70	第 115 図	F-23 号住居跡②、出土遺物実測図①	134
第 57 図	F-3 号住居出土遺物実測図②	71	第 116 図	F-23 号住居出土遺物実測図②	135
第 58 図	F-4 号住居跡①	72	第 117 図	F-24 号住居跡、出土遺物実測図	137
第 59 図	F-4 号住居跡②	73	第 118 図	F-25 号住居跡①	138

第119図	F-25号住居跡②	139
第120図	F-25号住居竈、出土遺物実測図①	140
第121図	F-25号住居出土遺物実測図②	141
第122図	F-27号住居跡	142
第123図	F-29号住居跡①	143
第124図	F-29号住居跡②	144
第125図	F-29号住居出土遺物実測図	145
第126図	F-30号住居跡①	145
第127図	F-30号住居跡②	146
第128図	F-30号住居跡③	147
第129図	F-30号住居掘り方	148
第130図	F-30号住居出土遺物実測図	149
第131図	F-31号住居跡	151
第132図	F-31号住居竈、出土遺物実測図	152
第133図	F-32号住居跡①	153
第134図	F-32号住居跡②	154
第135図	F-32号住居竈、掘り方	155
第136図	F-32号住居出土遺物実測図①	156
第137図	F-32号住居出土遺物実測図②	157
第138図	F-33号住居跡	159
第139図	F-33号住居出土遺物実測図	160
第140図	F-35号住居跡	161
第141図	F-35号住居出土遺物実測図	162
第142図	F-36号住居跡①	163
第143図	F-36号住居跡②、出土遺物実測図①	164
第144図	F-36号住居出土遺物実測図②	165
第145図	F-37号住居跡①	166
第146図	F-37号住居跡②	167
第147図	F-37号住居竈No.2、出土遺物実測図	168
第148図	F-38号住居跡①	169
第149図	F-38号住居跡②、出土遺物実測図①	170
第150図	F-38号住居出土遺物実測図②	171
第151図	F-40号住居跡	172
第152図	F-40号住居竈、出土遺物実測図	173
第153図	F-41号住居跡	174
第154図	F-41号住居竈、出土遺物実測図①	175
第155図	F-41号住居出土遺物実測図②	176
第156図	F-42号住居跡①	177
第157図	F-42号住居跡②	178
第158図	F-42号住居出土遺物実測図	179
第159図	F-45号住居跡	181
第160図	F-45号住居出土遺物実測図	182
第161図	F-46号住居跡	183
第162図	F-46号住居竈、出土遺物実測図	184
第163図	F-47号住居跡①	185
第164図	F-47号住居跡②、出土遺物実測図①	186
第165図	F-47号住居出土遺物実測図②	187
第166図	F-48号住居跡	187
第167図	F-48号住居竈、出土遺物実測図①	188
第168図	F-48号住居出土遺物実測図②	189
第169図	F-49号住居跡、出土遺物実測図	190
第170図	F-50号住居跡①	191
第171図	F-50号住居跡②	192
第172図	F-50号住居竈、出土遺物実測図①	193
第173図	F-50号住居出土遺物実測図②	194
第174図	F-51号住居跡①	195
第175図	F-51号住居跡②	196
第176図	F-51号住居出土遺物実測図	197
第177図	F-52号住居跡、出土遺物実測図	198
第178図	F-54号住居跡	199
第179図	F-54号住居出土遺物実測図	200
第180図	F-55号住居跡、出土遺物実測図	201

第181図	F-56号住居跡①	202
第182図	F-56号住居跡②	203
第183図	F-56号住居掘り方、出土遺物実測図①	204
第184図	F-56号住居出土遺物実測図	205
第185図	F-58号住居跡	207
第186図	F-58号住居出土遺物実測図	208
第187図	G-2A号住居出土遺物実測図	208
第188図	G-3号住居跡、出土遺物実測図	209
第189図	G-4号住居跡	210
第190図	G-4号住居竈、出土遺物実測図	211
第191図	G-5号住居跡	212
第192図	G-5号住居竈	213
第193図	G-5号住居出土遺物実測図	214
第194図	G-6号住居跡	216
第195図	G-6号住居出土遺物実測図	217
第196図	G-7号住居跡	218
第197図	G-7号住居出土遺物実測図	219
第198図	G-8号住居跡	220
第199図	G-8号住居出土遺物実測図	221
第200図	G-9号住居跡	222
第201図	G-9号住居出土遺物実測図	223
第202図	G-10号住居跡	224
第203図	G-10号住居竈	225
第204図	G-10号住居出土遺物実測図	226
第205図	G-11号住居跡①	227
第206図	G-11号住居跡②	228
第207図	G-11号住居竈、出土遺物実測図①	229
第208図	G-11号住居出土遺物実測図②	230
第209図	G-12号住居跡	232
第210図	G-12号住居出土遺物実測図	233
第211図	G-13号住居跡①	234
第212図	G-13号住居跡②	235
第213図	G-13号住居出土遺物実測図	236
第214図	G-14号住居跡	237
第215図	G-14号住居出土遺物実測図	238
第216図	G-15号住居跡①	239
第217図	G-15号住居跡②	240
第218図	G-15号住居竈①	241
第219図	G-15号住居竈②、掘り方	242
第220図	G-15号住居出土遺物実測図	243
第221図	G-16号住居跡	244
第222図	G-17号住居跡、出土遺物実測図	245
第223図	G-18号住居跡	247
第224図	G-18号住居出土遺物実測図	248
第225図	G-19号住居跡、出土遺物実測図	249
第226図	G-20号住居跡	250
第227図	G-20号住居竈、出土遺物実測図	251
第228図	G-22号住居跡	252
第229図	G-22号住居竈、出土遺物実測図	253
第230図	G-23号住居跡	254
第231図	G-23号住居竈、掘り方	255
第232図	G-23号住居出土遺物実測図	256
第233図	G-24号住居跡	257
第234図	G-24号住居出土遺物実測図①	258
第235図	G-24号住居出土遺物実測図②	259
第236図	G-25号住居跡、出土遺物実測図	261
第237図	G-26号住居跡①	262
第238図	G-26号住居跡②	263
第239図	G-26号住居竈、出土遺物実測図①	264
第240図	G-26号住居出土遺物実測図②	265
第241図	G-26号住居出土遺物実測図③	266
第242図	G-26号住居出土遺物実測図④	267

第243图	G-27号住居跡	270	第305图	G-56号住居跡②	334
第244图	G-27号住居竈、出土遺物実測図	271	第306图	G-56号住居出土遺物実測図①	335
第245图	G-28号住居跡	272	第307图	G-56号住居出土遺物実測図②	336
第246图	G-28号住居竈、出土遺物実測図	273	第308图	G-57号住居跡	337
第247图	G-30号住居竈	274	第309图	G-57号住居出土遺物実測図	338
第248图	G-30号住居跡、出土遺物実測図	275	第310图	G-58号住居跡	338
第249图	G-31号住居跡	276	第311图	G-58号住居竈	339
第250图	G-31号住居竈	277	第312图	G-59号住居跡	340
第251图	G-31号住居出土遺物実測図	278	第313图	G-59号住居竈、出土遺物実測図①	341
第252图	G-32号住居跡	279	第314图	G-59号住居出土遺物実測図②	342
第253图	G-32号住居出土遺物実測図	280	第315图	G-60号住居跡、出土遺物実測図	343
第254图	G-33号住居跡	281	第316图	G-61号住居跡①	344
第255图	G-33号住居出土遺物実測図	282	第317图	G-61号住居跡②、出土遺物実測図①	345
第256图	G-34号住居跡	283	第318图	G-61号住居出土遺物実測図②	346
第257图	G-34号住居竈	284	第319图	G-62号住居跡	348
第258图	G-34号住居出土遺物実測図	285	第320图	G-62号住居出土遺物実測図	349
第259图	G-35号住居跡	286	第321图	G-63号住居竈	350
第260图	G-35号住居竈、出土遺物実測図	287	第322图	G-63号住居跡	351
第261图	G-37号住居跡	288	第323图	G-63号住居出土遺物実測図	352
第262图	G-37号住居竈、出土遺物実測図	289	第324图	G-64号住居跡、出土遺物実測図	354
第263图	G-38号住居跡	290	第325图	G-65号住居跡	355
第264图	G-38号住居竈、出土遺物実測図①	291	第326图	G-65号住居竈	356
第265图	G-38号住居出土遺物実測図②	292	第327图	G-65号住居出土遺物実測図	357
第266图	G-39号住居跡	293	第328图	G-66号住居跡、出土遺物実測図	358
第267图	G-39号住居竈、掘り方	294	第329图	G-67号住居跡	359
第268图	G-39号住居出土遺物実測図	295	第330图	G-67号住居竈	360
第269图	G-41号住居竈	296	第331图	G-67号住居出土遺物実測図	361
第270图	G-41号住居跡	297	第332图	G-68号住居跡、出土遺物実測図	362
第271图	G-41号住居出土遺物実測図	298	第333图	G-69号住居跡、出土遺物実測図	363
第272图	G-42号住居跡	299	第334图	G-72号住居跡	364
第273图	G-42号住居竈、出土遺物実測図	300	第335图	G-73号住居跡、出土遺物実測図①	365
第274图	G-43号住居跡	301	第336图	G-73号住居出土遺物実測図②	366
第275图	G-43号住居竈、出土遺物実測図	302	第337图	G-74号住居跡①	366
第276图	G-44号住居跡、出土遺物実測図	303	第338图	G-74号住居跡②	367
第277图	G-46号住居跡	304	第339图	G-74号住居出土遺物実測図①	368
第278图	G-46号住居焼土、出土遺物実測図	305	第340图	G-74号住居出土遺物実測図②	369
第279图	G-47号住居跡	306	第341图	G-75号住居跡	371
第280图	G-47号住居竈、出土遺物実測図	307	第342图	G-75号住居竈、出土遺物実測図	372
第281图	G-48号住居跡	308	第343图	G-76号住居跡	373
第282图	G-48号住居炉、出土遺物実測図①	309	第344图	G-76号住居竈、出土遺物実測図①	374
第283图	G-48号住居出土遺物実測図②	310	第345图	G-76号住居出土遺物実測図②	375
第284图	G-48号住居出土遺物実測図③	311	第346图	G-77号住居跡	376
第285图	G-49号住居跡	312	第347图	G-77号住居竈、出土遺物実測図	377
第286图	G-49号住居竈、出土遺物実測図	313	第348图	G-78号住居跡	378
第287图	G-50号住居跡	314	第349图	G-78号住居竈、出土遺物実測図	379
第288图	G-50号住居竈No.1	315	第350图	G-79号住居跡	380
第289图	G-50号住居竈No.2	316	第351图	G-79号住居竈、出土遺物実測図	381
第290图	G-50号住居出土遺物実測図①	317	第352图	F-1号掘立柱建物跡、出土遺物実測図	382
第291图	G-50号住居出土遺物実測図②	318	第353图	G-1号掘立柱建物跡	383
第292图	G-51号住居跡	320	第354图	G-2号掘立柱建物跡	384
第293图	G-51号住居竈No.1、出土遺物実測図①	321	第355图	G-3号掘立柱建物跡	385
第294图	G-51号住居出土遺物実測図②	322	第356图	G-4号掘立柱建物跡	385
第295图	G-52号住居跡	323	第357图	F-3号土坑	386
第296图	G-52号住居出土遺物実測図	324	第358图	F-6号土坑、出土遺物実測図	386
第297图	G-53号住居跡	325	第359图	F-7号土坑、出土遺物実測図	387
第298图	G-53号住居出土遺物実測図①	326	第360图	F-12号土坑	387
第299图	G-53号住居出土遺物実測図②	327	第361图	G-14号土坑	388
第300图	G-53号住居出土遺物実測図③	328	第362图	G-17号土坑	388
第301图	G-54号住居跡	330	第363图	G-29号土坑	388
第302图	G-54号住居竈、出土遺物実測図	331	第364图	G-29号土坑出土遺物実測図	389
第303图	G-55号住居跡、出土遺物実測図	332	第365图	G-30号土坑	389
第304图	G-56号住居跡①	333	第366图	G-31号土坑、出土遺物実測図	390

第367図	G-40・41号土坑	391
第368図	G-43号土坑	392
第369図	G-44号土坑、出土遺物実測図	392
第370図	G-45号土坑	392
第371図	G-47号土坑、出土遺物実測図	393
第372図	G-54号土坑	394
第373図	ピット群出土遺物実測図	398
第374図	F区水田跡全景	折り込み
第375図	G-36号住居跡	401
第376図	G-45号住居跡	402
第377図	G-1・2号墓墳	403
第378図	F-1・2・8号土坑	404
第379図	G-1号土坑	405
第380図	G-2号土坑	405
第381図	G-3・4・5号土坑	406
第382図	G-10・11・13号土坑	407
第383図	G-15・18・19号土坑	408
第384図	G-20・21・22号土坑	409
第385図	G-24・25号土坑	410
第386図	G-27・28号土坑	410
第387図	G-32号土坑	411
第388図	G-33・34号土坑	411
第389図	G-35・36・37号土坑	412
第390図	G-38・42・46号土坑	413
第391図	G-23・48・49号土坑	414
第392図	G-50・51・52号土坑	415
第393図	G-53・55・56・57号土坑	416
第394図	G-1・2号溝	417
第395図	G-2号溝出土遺物実測図	418
第396図	G-3号溝	418
第397図	G-4・5・6号溝	419
第398図	G-7・8・9号溝	420
第399図	G-1号集石	421
第400図	F・G区遺構外出土遺物実測図①	421
第401図	F・G区遺構外出土遺物実測図②	422
第402図	F・G区遺構外出土遺物実測図③	423
第403図	F・G区遺構外出土遺物実測図④	424
第404図	H-9号住居炉	426
第405図	H-9号住居跡	427
第406図	H-9号住居出土遺物実測図	428
第407図	H-1号住居跡	429
第408図	H-1号住居竈、出土遺物実測図①	430
第409図	H-1号住居出土遺物実測図②	431
第410図	H-2号住居跡①	432
第411図	H-2号住居跡②	433
第412図	H-2号住居出土遺物実測図	434
第413図	H-3号住居跡	435
第414図	H-3号住居竈、出土遺物実測図①	436
第415図	H-3号住居出土遺物実測図②	437
第416図	H-4号住居跡	439
第417図	H-4号住居跡掘り方、出土遺物実測図	440
第418図	H-5号住居竈	441
第419図	H-5号住居跡①	442
第420図	H-5号住居跡②、出土遺物実測図	443
第421図	H-6号住居跡	444
第422図	H-6号住居跡竈、出土遺物実測図①	445
第423図	H-6号住居出土遺物実測図②	446
第424図	H-7号住居跡①	447
第425図	H-7号住居跡②	448
第426図	H-7号住居出土遺物実測図	449
第427図	H-8号住居跡	451
第428図	H-8号住居出土遺物実測図	452

第429図	H-10号住居跡	452
第430図	H-10号住居掘り方、出土遺物実測図	453
第431図	H-11号住居跡、出土遺物実測図	454
第432図	H-12号住居跡	455
第433図	H-12号住居竈、出土遺物実測図	456
第434図	H-13号住居跡	457
第435図	H-13号住居竈、出土遺物実測図	458
第436図	H-14号住居跡	459
第437図	H-14号住居出土遺物実測図	460
第438図	H-15号住居跡	461
第439図	H-15号住居竈、出土遺物実測図①	462
第440図	H-15号住居出土遺物実測図②	463
第441図	H-16号住居跡	464
第442図	H-16号住居竈、出土遺物実測図①	465
第443図	H-16号住居出土遺物実測図②	466
第444図	H-17号住居跡①	467
第445図	H-17号住居跡②、出土遺物実測図	468
第446図	H-4・5・6号土坑	469
第447図	H-1・2号溝	470
第448図	H区遺構外出土遺物実測図①	471
第449図	H区遺構外出土遺物実測図②	472
第450図	I-2号住居跡①	473
第451図	I-2号住居跡②	474
第452図	I-2号住居出土遺物実測図	475
第453図	I-1号住居跡①	476
第454図	I-1号住居跡②	477
第455図	I-1号住居出土遺物実測図	478
第456図	I-4号住居跡	479
第457図	I-4号住居出土遺物実測図①	480
第458図	I-4号住居出土遺物実測図②	481
第459図	I-3号住居跡①	482
第460図	I-3号住居跡②、出土遺物実測図①	483
第461図	I-3号住居出土遺物実測図②	484
第462図	I-3号住居出土遺物実測図③	485
第463図	I-塚下遺構配置図	488
第464図	I-塚	折り込み
第465図	I-塚下1・2・3号墓墳、出土遺物実測図	491
第466図	I-塚下4号墓墳	492
第467図	I-塚下1号集石	492
第468図	I-礎石建物跡①	493
第469図	I-礎石建物跡②	494
第470図	I-礎石建物出土遺物実測図①	495
第471図	I-礎石建物出土遺物実測図②	496
第472図	I-礎石建物出土遺物実測図③	497
第473図	I-礎石建物出土遺物実測図④	498
第474図	I-礎石建物出土遺物実測図⑤	499
第475図	I-1号墓墳、出土遺物実測図	500
第476図	I-2号墓墳	501
第477図	I-2号墓墳出土遺物実測図	502
第478図	I-3・6・7・8・9号墓墳	503
第479図	I-3号墓墳出土遺物実測図①	504
第480図	I-3号墓墳出土遺物実測図②	505
第481図	I-6号墓墳出土遺物実測図	506
第482図	I-7号墓墳出土遺物実測図①	506
第483図	I-7号墓墳出土遺物実測図②	507
第484図	I-8号墓墳出土遺物実測図	508
第485図	I-9号墓墳出土遺物実測図	508
第486図	I-4号墓墳	509
第487図	I-5号墓墳、出土遺物実測図①	509
第488図	I-5号墓墳出土遺物実測図②	510
第489図	I-10号墓墳、出土遺物実測図	511
第490図	I-11号墓墳、出土遺物実測図	512

第491図	I-12号墓墳、出土遺物実測図	513	第510図	土壌資料採取地点	543
第492図	I-13・14・15号墓墳	514	第511図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成	544
第493図	I-15号墓墳出土遺物実測図	515	第512図	試料中に残存する脂肪のステロール組成	545
第494図	I-16号墓墳、出土遺物実測図	516	第513図	試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図	546
第495図	I-17・18号墓墳、17号墓墳出土遺物実測図①	517	第514図	試料中に残存する脂肪の 脂肪酸組成による種特異性相関	547
第496図	I-17号墓墳出土遺物実測図②	518	第515図	F区水田部分試料採取地点	550
第497図	I-1号土坑	518	第516図	主な植物の推定生産量と変遷	551
第498図	I-2号土坑、出土遺物実測図	519	第517図	分析を行った鉄滓の外観と組織観察結果	559
第499図	I区遺構外出土遺物実測図①	520	第518図	No 3 鉄滓の外観と抽出した試料片の組織観察結果	560
第500図	I区遺構外出土遺物実測図②	521	第519図	No 2 鉄滓の外観と抽出した試料片の組織観察結果	561
第501図	I区遺構外出土遺物実測図③	522	第520図	No 6 鉄滓の外観と抽出した試料片の組織観察結果	562
第502図	I区遺構外出土遺物実測図④	523	第521図	推定される鋼の製造法	563
第503図	I区遺構外出土遺物実測図⑤	524	第522図	緑青が析出した炉壁反応部分を持つ 炉壁片の外観とそのスケッチ図	563
第504図	時期別住居主軸方位	529	第523図	炉壁反応部分から抽出した試料片の組織観察結果	564
第505図	F・G区の中世遺構と平賀城	530	第524図	炉壁反応部分から抽出した試料片の TG-DTA変化曲線	564
第506図	中沢平賀界戸遺跡時期別遺構分布図	531			
第507図	県内出土の織打具	534			
第508図	県内出土の脚付土器	535			
第509図	住居出土の砥石	537			

目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧	9・10	第 16 表	H区ピット一覧	470・471
第 2 表	F・G区住居一覧	12・15・16	第 17 表	古墳後期～奈良時代住居主軸一覧	528
第 3 表	F・G区土坑一覧	16・17	第 18 表	県内出土織打具一覧	535
第 4 表	F・G区掘立柱建物一覧	17	第 19 表	県内出土脚付土器一覧	536
第 5 表	F・G区墓墳一覧	17	第 20 表	住居出土砥石一覧	538
第 6 表	F・G区集石	17	第 21 表	土壌試料の残存脂肪抽出量	543
第 7 表	F・G区溝一覧	17	第 22 表	土壌試料に分布する コレステロールとシトステロールの割合	544
第 8 表	H区住居一覧	18	第 23 表	プラント・オパール分析結果	551
第 9 表	H区土坑一覧	18	第 24 表	分析試料一覧	565
第 10 表	H区溝一覧	18	第 25 表	鉄滓の分析結果	565
第 11 表	I区住居一覧	20	第 26 表	炉壁片の化学組成	565
第 12 表	I区土坑一覧	20	第 27 表	炉壁反応部分の化学組成	565
第 13 表	I区塚下遺構群一覧	20	第 28 表	銅粒の化学組成	565
第 14 表	I区墓墳一覧	20			
第 15 表	F・G区ピット一覧	394～397			

抄 録

1 遺跡の概要

本遺跡は、群馬県富岡市大字中沢字地内に所在する。発掘調査は平成元年11月1日から開始され、平成3年2月28日に終了した。

遺跡は富岡市の南西部、鑄川左岸の段丘上に中沢川によって形成された扇状地性の低い台地と、その北側の丘陵部からなる。発掘調査により縄文・弥生・古墳・奈良・平安各時代の住居跡を始めとし、中・近世の塚や礎石建物跡などが発見された。

2 遺構数量

種 別	時 代	数 量	備 考
住居跡	縄文時代	1	中期
	弥生時代	15	後期
	古墳～平安時代	139	古墳時代中期住居5軒含む
	中世	2	
掘立柱建物跡	古墳～平安時代	5	
礎石建物跡	中・近世	1	2×3間
塚	中・近世	1	
土坑	縄文時代～近世		近世の洋梨形土坑含む
溝		10	覆土中にAs-B軽石含むものあり。平賀城の関連遺構か。
埋甕	縄文時代	2	中期
墓墳	中・近世	24	中世6基、他は近世

3 まとめ

縄文時代 南接する南蛇井増光寺遺跡に比べ、縄文時代の遺構数は少ない。中期加曾利E式期の住居1軒と、埋甕2基が検出されたのみである。

弥生時代 後期の竪穴住居15軒と、中期の土坑1基が検出されている。

古墳～平安時代 古墳時代中期から平安時代までの住居139軒が検出されている。中心となるのは古墳時代後期と奈良時代の住居である。

中・近世 竪穴住居2軒と、塚・礎石建物・墓墳などが見ついている。礎石建物からは、銅の精製に関する炉の壁体破片が出土している。

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経緯と調査の経過

1 発掘調査に至る経緯

上信越自動車道は、首都圏と上信越地方を結ぶ高速自動車道として、日本道路公団東京第二建設局によって建設される。起点を東京練馬とし、新潟県上越市まで総延長280km(うち練馬から藤岡間は関越自動車道新潟線と併用)である。今回建設される藤岡インター～佐久間は約67kmで、群馬県藤岡市、吉井町、甘楽町、富岡市、妙義町、松井田町、下仁田町、長野県佐久市の各市町を通過する。

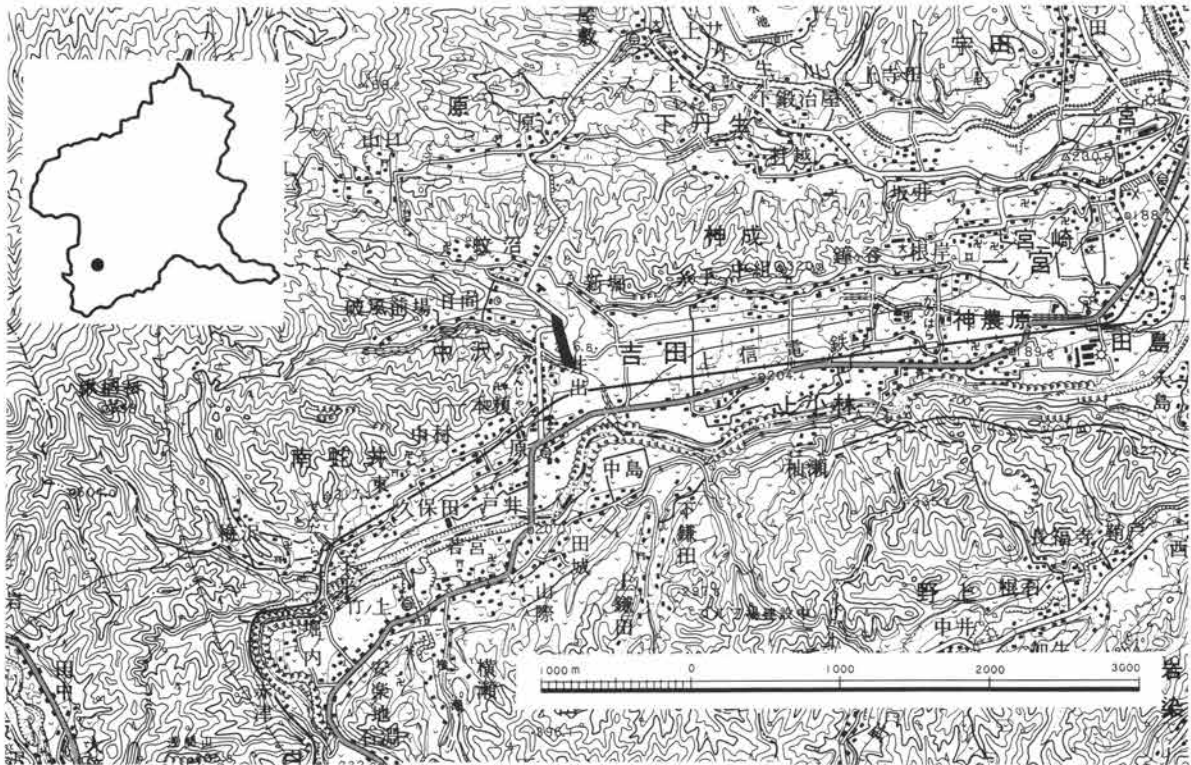
群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画は昭和47年に策定され、同54年に建設大臣より日本道路公団に施行命令が下った。同56年には、この間の路線が発表になっている。

上信越自動車道にかかる埋蔵文化財の取扱いおよび調査経過は、以下のとおりである。

昭和49年度 藤岡から下仁田間に存在する埋蔵文化財について、群馬県教育委員会（以下県教委）は、県企画部幹線交通課に対し、文化財保護法の遵守、国・県・市町村指定文化財を避けること、文化財に関係する事項は県教委文化財保護課と協議すること等の考え方を示した。

昭和55年度 県教委文化財保護課は、路線通過地内の埋蔵文化財包蔵地の調査を行った。その結果は、同年3月に藤岡～松井田間、同年11月松井田～下仁田間について、「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として群馬県企画部交通対策課より報告された。

昭和59年度 建設工事の具体化に伴い、路線内の埋蔵文化財についてより具体的な調査の依頼が道路公団より県教委にあり、県教委文化財保護課は包蔵地の詳細分布調査を行った。



第1図 中沢平賀界戸遺跡位置図

第1章 発掘調査の経過

昭和60年度 県教委は、分布調査の結果、包蔵地を濃い分布地・薄い分布地・試掘調査を必要とする地域に区分、発掘調査必要面積を約100万㎡と想定して、55遺跡を認定した(後の試掘により52遺跡に変更)。埋蔵文化財発掘調査にかかる基本方針を次のように策定した。

- ① 発掘調査終了年度を昭和66年度末(平成2年度末)とする。
- ② 群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下埋文事業団)を中核機関とし、対応できない部分に調査会方式を導入、関係市町村には進捗状況を考慮しながら協力を求める。
- ③ 埋文事業団の出張所(上越線調査事務所)を開設し、整理作業も併せ行う。
- ④ 機関別対応面積は次のとおりである。

埋文事業団 約76万㎡ 富岡市以東を受け持つ。面積は変動の可能性あり。

調査会 約22万㎡ 妙義町・下仁田町・松井田町。面積は変動の可能性あり。

なお、調査実施方法は次のとおりである。

日本道路公団東京第二建設局は群馬県教委に調査の依頼を行い、年度毎に委託契約を締結する。県教委はそれを受け、埋文事業団および各遺跡調査会等に再委託の形で委託契約を締結、調査を実施する。

昭和61年度 4月に埋文事業団上越線調査事務所を吉井町南陽台3-15-8に設置し、4班15人体制で発足する。以降、6班22人体制(昭62)、9班36人体制(昭63)、12班45人体制(平元・2)。発掘調査は平成2年度までに一部を残し終了。整理作業は昭和63年度より平行して実施していたが、平成3年度からはほとんど整理作業のみとなり、平成8年度終了予定である。

2 中沢平賀界戸遺跡の調査の経過

中沢平賀界戸遺跡は、鐮川左岸の下位段丘上に位置する。鐮川の支流である中沢川から、その北方約300m程に所在する通称「でんじ山」と呼ばれる丘陵までが該当する。遺跡名称は、遺跡地の中心部を占める小字名平賀界戸を用い、中沢平賀界戸遺跡とした。

中沢平賀界戸遺跡は、中沢川をはさんで南側に広がる南蛇井増光寺遺跡と共に、同一事業として調査が開かれた(事業名称：井出遺跡)。調査は、昭和62年度後半に鐮川橋梁部分にあたる南蛇井増光寺遺跡B区南半から着手、縄文時代前期～奈良・平安時代の竪穴住居跡を中心とする集落を検出した。この調査の結果、国道254号線をはさんだ北側に遺跡の広がりが予測された。また遺構量等の把握が必要となったため、昭和63年度後半に試掘調査を行い、国道北側では一部本調査を開始した。62・63年度の調査及び試掘調査の結果から、調査区全体にわたってかなりの重複を持って集落が展開することが予測されたため、平成元年度は井出I～IVの4班、平成2年度はI～IIIの3班集体で調査を実施することとなった。各調査班は、100mの大グリッドによって区切られた区や、既存の国道や線路の境ごとに調査区を分けて分担した。

中沢平賀界戸遺跡は、平成元年11月より本調査にはいる。調査はI班が担当した。当初は遺跡南端のF区より開始し、順次北側のG区へと広げていった。また、本調査と平行して、未だ試掘の行われていなかったG・H区間の谷地、およびI区丘陵上の試掘調査を行う。平成2年度もF・G区の調査は継続し、5月～9月には、H・I区の調査も平行して行った。調査は、平成3年2月末をもって終了した。

3 整理作業の経過

中沢平賀界戸遺跡の整理作業は、発掘調査同様、南蛇井増光寺遺跡と同一事業として進められた。南蛇井増光寺遺跡の整理作業は平成3年度から行われ、すでに『南蛇井増光寺遺跡I～IV』の4冊の報告書が刊行されている。

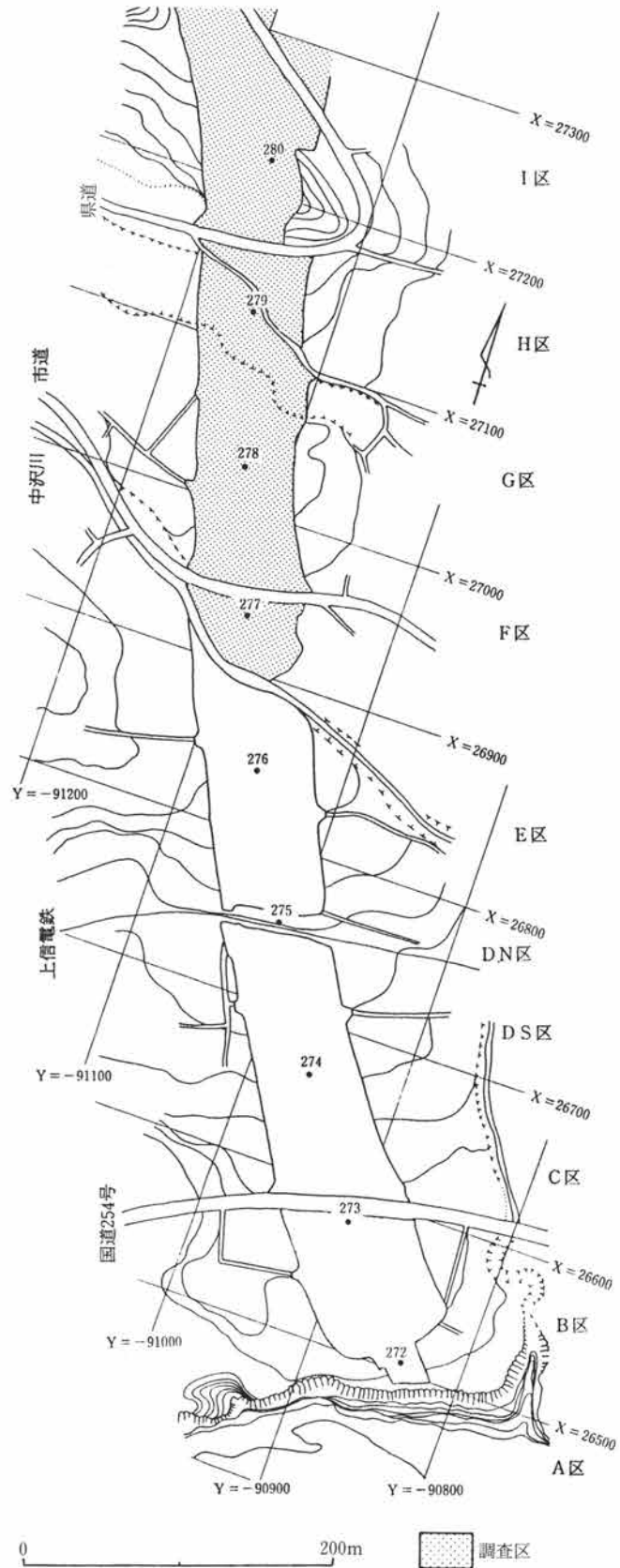
第2節 調査の方法

1 遺跡名の選定

遺跡名称は、発掘調査当初は事業名称の「井出遺跡」をそのまま使用していた。その後昭和63年に遺跡名が検討され、当事業団の担当する遺跡については、原則として大字小字の連記を遺跡名とする事となった。「井出遺跡」は、遺跡地を東西に流れる中沢川を境に、遺跡地の中心を占める大字・小字名を持って遺跡名とすることとした。すなわち、南側は大字名南蛇井・小字名増光寺を用いて「南蛇井増光寺遺跡」に、北側を大字名中沢・小字名平賀界戸を用いて「中沢平賀界戸遺跡」に変更した。

2 グリッド設定法

中沢平賀界戸遺跡と南蛇井増光寺遺跡は、南北に細長く並び、その総距離は約800mにおよぶ。建設用測量杭のSTANo272~280がほぼ両遺跡の調査範囲に該当する。調査区の区割りは、国家座標に乗せて軸線を設定、両遺跡を通してグリッドの呼称ができるようにした。調査原点は、南蛇井増光寺遺跡南西部、国家座標の $X=26.500$ 、 $Y=-90.900$ の地点とし、ここを基準に5m四方のグリッドを設定した。南北ラインはFa、Fb、Fc、……のように、アルファベットの太文字・小文字を併記し、100m毎に太文字が、5m毎に小文字が変わるものとした。東西ラインは、0、1、2とアラビア数字を使用し、5mで数字が変わるものとした。そして、Fa-65のように、南北・東西の順に併記し、グリッドの呼称とした。各グリッドの呼称は、南東隅のポイント名を持ってそのグリッドを表すものとした。大文字標記の100m毎の大グリッドを南からA区、B区、……、H区、I区として、発掘調査時の調査区名称とした。中沢平賀界戸遺跡は、



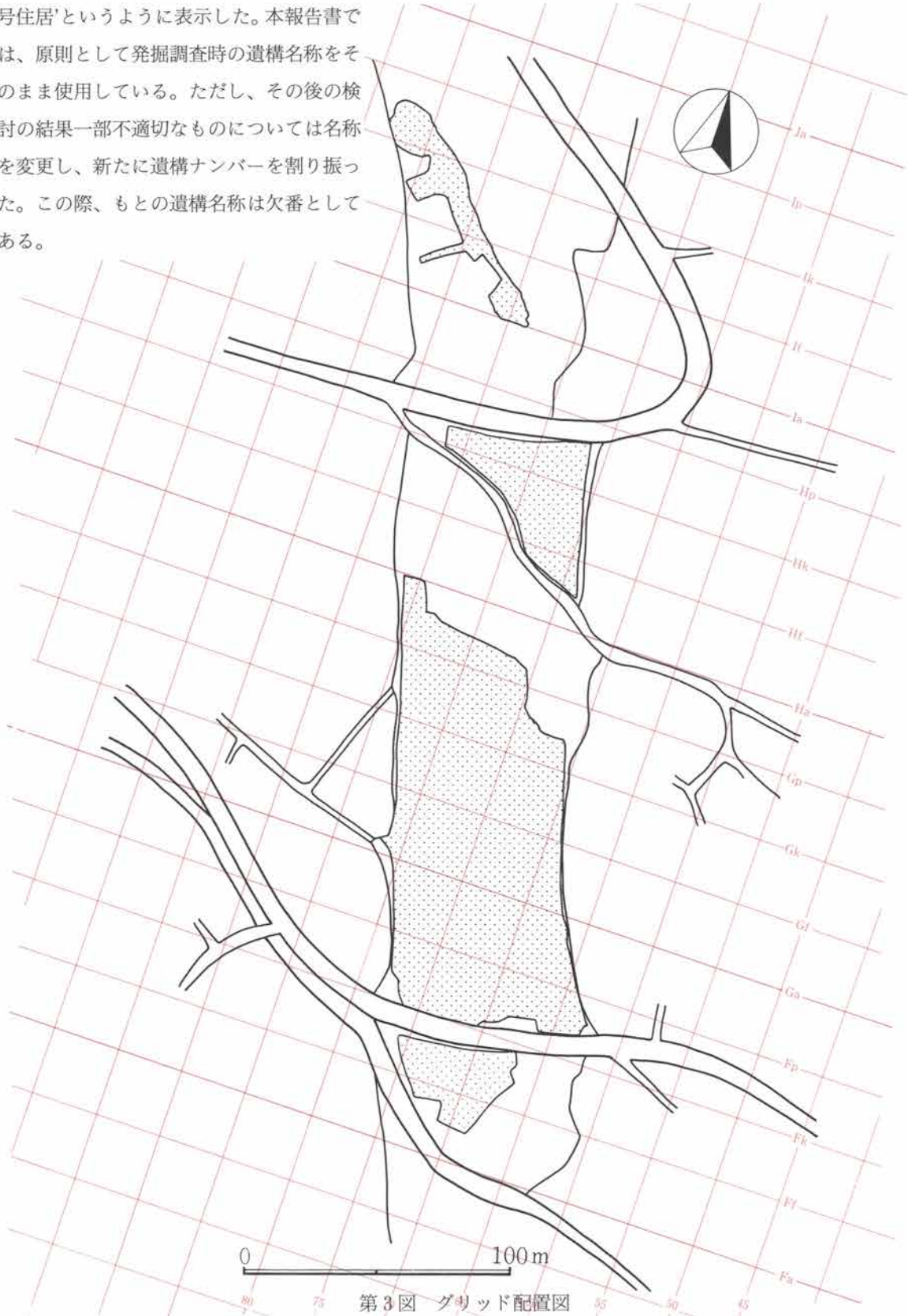
第2図 中沢平賀界戸遺跡調査区図

第1章 発掘調査の経過

このうちのF～I区にあたる。

3 遺構名

調査にあたっては、上記の区ごとに実施された。そのため、遺構番号も原則として区ごとに付し、'F区1号住居'というように表示した。本報告書では、原則として発掘調査時の遺構名称をそのまま使用している。ただし、その後の検討の結果一部不適切なものについては名称を変更し、新たに遺構ナンバーを割り振った。この際、もとの遺構名称は欠番としてある。

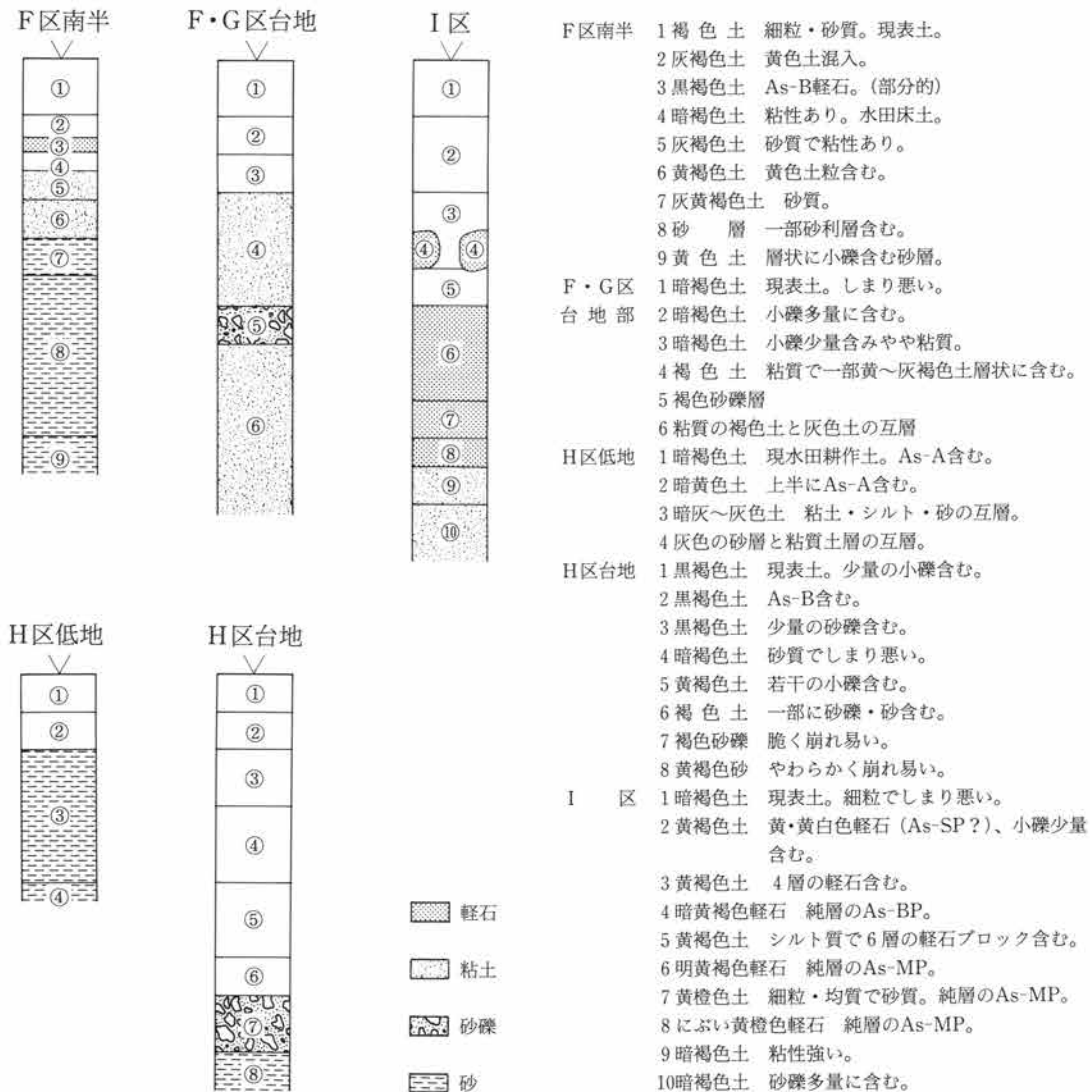


第3図 グリッド配置図

第3節 基本土層

中沢平賀界戸遺跡は、鑄川左岸の下位段丘上に位置している。総延長400mにおよぶ南北に長くのびた遺跡で、異なった微地形を含んでいる。地形は大きく低地部と台地部・丘陵部に分けられ、それぞれにおいて基本的な土層の堆積が異なっている。そこで、ここではF区南半の水田部分、F・G区の台地上、H区の低地、H区の集落部分、I区の丘陵上に分けて記述する。

F～H区までは、中沢川によって形成された扇状地上にあるため、下層は基本的に中沢川の河川氾濫層である。F区南半では、一部で現表土下約40cmにAs-B軽石の堆積が認められ、この直下から水田が検出されている。台地上では遺構の覆土にAs-Bの混入が認められ、H区でも上層に少量含まれていた。H区の低地では現表土中にAs-Aが混入していた。I区の丘陵上ではローム層が堆積しており、一部でAs-BP・MP層群の軽石層の一次堆積が認められた。H区でもローム層が見られたが、降下軽石などを含まず、再堆積のロームである可能性が高い。以下に各地点の層序を示す。



第4図 中沢平賀界戸遺跡基本土層図

第2章 周辺の環境

第1節 地理的環境

中沢平賀界戸遺跡が所在する富岡市は、群馬県南西部に位置する。西・南・北東の三方向に突出した形を呈し、東西約16km・南北約14km、面積は93.63km²である。

富岡市の地形は、大きく山地・丘陵・鑛川とその河岸段丘に分けられる。南部と西部を山地に囲まれ、このうち南部の山地は関東山地の北縁にあたる。丘陵地は市北部と、西部・南部の山地からつながる地域に広がっている。長野県との境に源を発する鑛川は、市の中央部を西から東へ向かって流れ、その両岸に河岸段丘が見られる。

鑛川流域は「甘楽の谷」と呼ばれ、遺跡の濃密に分布する地域として知られており、古くから交通の要地であったと考えられる。鑛川に沿って、下仁田町馬山から藤岡市上落合まで、上下二段の河岸段丘が発達している。段丘面は鑛川の南側で広く、北側では狭い。特に上位段丘においてこの傾向は強く、北側の上位段丘は貫前神社や宮崎城址のある面だけである。上位段丘の形成時期は、数万～十数万年前の洪積世末とされる。その後、上位段丘上には約2万年前に噴出した浅間一板鼻褐色軽石群(As-BP)などの火山噴出物を含む上部ロームが堆積する。甘楽町の白倉下原・天引向原遺跡付近の上位段丘では、As-BPの下位に2万2千年前頃に噴出した始良丹沢火山灰(AT)も1～2cm程の厚さで堆積しているのが確認されている。この頃には、鑛川は下位段丘面を流れていたと考えられ、一部の地域を除いて下位段丘面には上部ロームの堆積はみられない。下位段丘面には、古墳が現存していることから、古墳時代にはほぼ現在のような地形が完成していたと考えられる。現在、鑛川は下位段丘面よりも10mほど低い河床を流れている。

鑛川の下位段丘の南北方向の幅は、富岡市西部の南蛇井・神農原付近では600～700m程であるが、中央部の上高瀬・一ノ宮付近で急に広がり、3,000m程となる。標高は、西部の千平で標高230m、東部の星田では130mと、東に緩やかに傾斜している。この下位段丘面上には、国道254号や上信電鉄などの主要な交通路があり、甘楽・富岡地域の主な生活の舞台となっている。

中沢平賀界戸遺跡は、下仁田町との境に近い富岡市西部の中沢地内に所在する。この地域は、かつて甘楽郡吉田村の一部であったが、昭和30年に富岡市に編入された。遺跡は、鑛川左岸の下位段丘上に位置し、西側の山地から鑛川にそそぐ中沢川から、その北側の丘陵先端部までの範囲にあたる。遺跡の地形は、中沢川によって形成された小規模な扇状地と、東に伸びる細い馬背状の丘陵に分けられる。扇状地は、南を中沢川、北を低地によって区切られた舌状の微高地となっており、その上に古代の集落が展開していた。調査前は、宅地や畑地として利用されていた。丘陵は、西から東に向かって長く伸び、遺跡地が先端部となっている。扇状地との比高差は約25mである。狭小な丘陵で、先端部では下幅約80m、上幅は30mに満たない。丘陵の基盤は平滑花崗岩で、その上位にはAs-BPを含むローム層が堆積していた。中沢川以南の段丘上には、縄文～平安時代の大集落である南蛇井増光寺遺跡が広がっている。

第2節 歴史的環境

ここでは遺跡の所在する富岡市南西部を中心に、周辺の下仁田町を含めて時代別に概観したい。

旧石器時代 富岡市では、かつて旧石器時代に属すると思われる槍先形尖頭器が採集されたというが、残念ながら現在所在がわからなくなっており、詳細は不明である。発掘調査では、野上塩之入遺跡でローム層中よりスクレイパーが1点出土、また本遺跡の対岸に位置する下鎌田遺跡でも旧石器時代の石器群が検出されているが、未報告のため詳細は不明である。これらはいずれも上位段丘上に位置している。本遺跡北部の丘陵では上部ロームの堆積が認められており、丘陵地域にも遺跡が分布する可能性が高い。

縄文時代 縄文時代の遺跡は、引き続き鍋川の上位段丘面と丘陵地域に多く分布しているが、下位段丘面にも遺跡が形成されるようになってくる。

この地域では草創期の土器は見つかっていない。早期では、杣瀬遺跡で田戸下層式土器を伴う配石遺構と、田戸式・押型文土器を含む包含層が報告されている。この他には、上丹生の和田遺跡で採集された押型文系土器がある。前期になると、野上塩之入、千足、鞆戸原Ⅰ・Ⅱ、西平原、中高瀬観音山、中高瀬庚申山、内出Ⅰ遺跡など上位段丘および丘陵上の遺跡に加え、本宿郷土、小塚遺跡など下位段丘上の遺跡でも住居が発見されている。本遺跡の南方に広がる南蛇井増光寺遺跡では、黒浜式期の集落も確認されている。中期以降も遺跡の占地におけるこの傾向は変わらない。中期は小塚、七日市観音前、野上塩之入、下鎌田、南蛇井増光寺遺跡などで住居が調査されている。中でも、鍋川右岸の上位段丘上に位置する下鎌田遺跡は、当該期の大集落として注目されている。本遺跡でも、中期の住居址が1軒検出されている。後期になると遺構量は減少するが、南蛇井増光寺遺跡では引き続き集落が営まれ、敷石住居を含む住居跡が調査されている。

縄文時代を通観してみると、前・中期の遺跡が多く、後期がこれに続く。早期・晩期の遺構は少なく、杣瀬遺跡の早期の配石遺構以外は、表面採集などによって断片的な資料が得られているだけである。

弥生時代 弥生時代は、上位段丘・丘陵地域とともに、下位段丘にも遺跡がさらに増加する。多くの遺跡は後期に属するもので、前・中期の遺跡は少ない。

前期では、杣瀬遺跡で完形に近い3個体の土器がまとまって出土しており、再葬墓と考えられている。この土器に隣接して発見された礫床墓とされる遺構も同時期の所産としているが、遺物の出土はなく、遺構の性格・時期伴に検討を要する。中期は、七日市観音前・小塚・南蛇井増光寺遺跡で住居跡が見つかった。他、小塚遺跡では環濠と思われる溝も検出されている。杣瀬遺跡では方形周溝墓が発見されているが、形状などからみて中期とするには疑問が残る。本遺跡では、土坑1基が確認されている。後期にはいと遺構数は増加し、中高瀬観音山、南蛇井増光寺遺跡では住居数が100軒を越える大規模な集落が発見されている。この他、鞆戸原Ⅰ・Ⅱ、内出Ⅰ遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての住居跡や方形周溝墓が見つかった。

古墳時代 古墳時代になると、遺跡は主に下位段丘上に展開するようになるが、依然として上位段丘・丘陵上にも多くの遺跡がみられる。

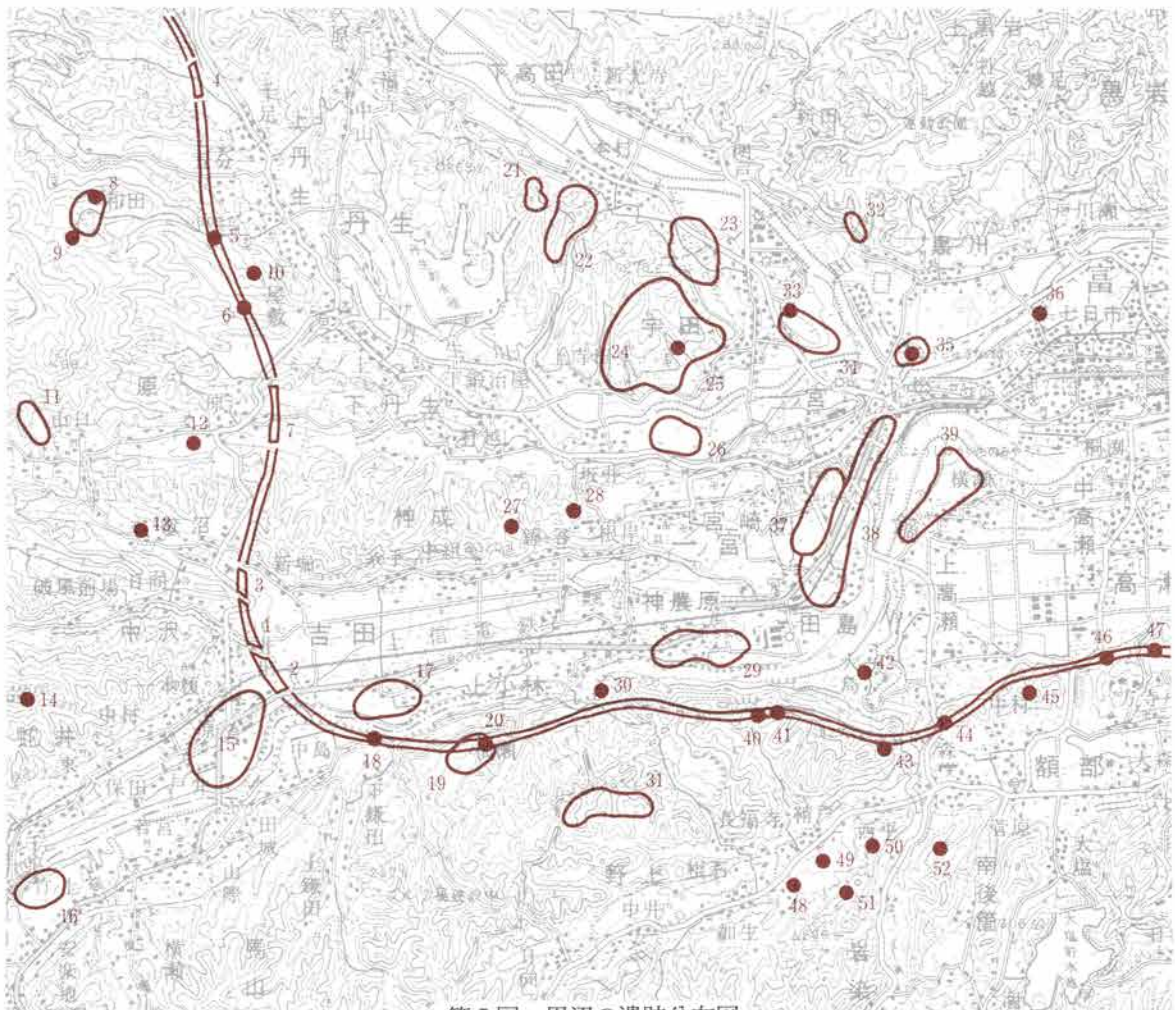
富岡市南部に位置する北山茶臼山古墳、北山茶臼山西古墳は前期古墳である。これらはいずれも上位段丘上の単独丘陵頂部にあり、山を削って墳丘を作り出している。出土土器や墳丘の形態から、西古墳が茶臼山古墳に先行する可能性が高いが、いずれもこの地域で最も古い古墳である。中期では、中高瀬観音山、前畑遺跡で住居跡の調査例が報告されている。本遺跡でも5軒の住居跡が発見されている。後期にはいと、遺跡数・遺構量ともに増大する。本宿郷土、南蛇井増光寺遺跡は、住居数が100軒を上回る大規模な集落である。

本遺跡でも、古墳後期の住居が66軒検出されている。また、各所に古墳群が形成されるのもこの時期である。これらの古墳群の多くは、鎭川兩岸の下位段丘上に位置している。古墳群の周辺には、同時期の集落遺跡が存在している例がみられる。一の宮古墳群と本宿郷土遺跡、南蛇井古墳群と南蛇井増光寺遺跡などで、当時の墓域と居住域のあり方を示すものであろうか。本宿郷土遺跡では、豪族の居館跡も発見されている。

奈良・平安時代 奈良時代以降の集落は、古墳時代後期に引き続いて営まれているところが多いが、規模は概して縮小する傾向にある。主に下位段丘面上に展開し、本宿郷土、南蛇井増光寺遺跡などで比較的大規模な集落が発見されている。本遺跡でも奈良時代住居55軒、平安時代住居10軒が調査されている。これらの集落にともなう生産域の発見例は少ない。本遺跡でAs-B軽石下から水田址が発見されているが、小河川の脇につくられた小規模なものである。

中・近世 中・近世の遺構は主に城館と墓墳である。富岡市の中心部を囲む丘陵地域には、多数の城館がつくられている。これまでに宮崎城や宇田城、高田城、高田西城、下鎌田城、塩之入城、大島上城などの調査が行われ、土塁や堀切、曲輪などが見ついている。杣瀬遺跡では礎石建物や掘立柱建物、鎮壇跡、石敷遺構を伴う城館が調査されている。

この他に、本宿郷土、七日市観音前、南蛇井増光寺遺跡などで中世の竪穴状遺構・掘立柱建物・墓墳・堀などが発見されている。本遺跡でも竪穴状遺構や溝、墓墳などがあり、中でも丘陵上で見つかった塚と礎石建物が注目される。本遺跡地は平賀城の比定地にあたり、これらの遺構が何らかの関連を持つ可能性がある。



第5図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺遺跡一覧

№	遺跡名	所在地	遺跡の概要	文献
1	中沢平賀界戸遺跡	富岡市 中沢	縄文～平安時代の集落を中心とする。住居157軒、多数の土坑の他、溝・墓墳・塚・礎石建物などが検出されている。平賀城の比定地にあたる。上信越自動車道建設に伴い調査。	本書所収
2	南蛇井増光寺遺跡	富岡市 南蛇井	鑓川左岸の下位段丘上に所在。縄文～平安時代の集落を中心とし、住居は785軒にのぼる。他に方形周溝墓、中世大溝、多数の土坑などを検出。上信越自動車道建設に伴い調査。	⑤・⑥
3	前畑遺跡	富岡市 蚊沼	鑓川左岸下位段丘上。中沢平賀界戸遺跡の北側に位置する。古墳時代中期～平安時代の住居址、土坑などが発見されている。上信越自動車道建設に伴い調査。	⑩
4	千足遺跡	富岡市 上丹生	丘陵先端部の緩斜面に立地。縄文～平安時代に亘る住居19軒、掘立柱建物11棟の他、土坑・井戸・溝・古墳等が見つかった。上信越自動車道建設に伴い調査。	⑩
5	五分一遺跡	富岡市 上丹生	丘陵の東側緩斜面に立地。遺構はなく、縄文から中・近世の遺物が少量見つかった。上信越自動車道建設に伴い調査。	⑩
6	丹生城西遺跡	富岡市 上丹生	富岡市北西部の丘陵地域を流れる小河川の氾濫原に立地。若干の溝・土坑とともに縄文時代を中心とする遺物が検出された。上信越自動車道建設に伴い調査。	⑩
7	内出Ⅰ遺跡	富岡市 原	富岡市北西部の丘陵地域に所在。縄文～平安時代の住居跡、方形周溝墓、古墳などが見つかった。上信越自動車道建設に伴い調査。	⑩
8	和田古墳群	富岡市 上丹生	大桁山東側の中腹に位置する。丘陵上に十数基の古墳が確認されている。終末期の古墳群とされているが一部埴輪を持つものもあり、6世紀末から形成され始めたと考えられる。	⑬
9	和田遺跡	富岡市 上丹生	大桁山東側の中腹に位置する。縄文時代前期住居4軒、古墳時代前期住居1軒、平安時代住居1軒の他、古墳時代後期の円墳が発見されている。	⑬
10	丹生城跡	富岡市 丹生	金乗寺の南の山に築かれた城。本丸を中心に「ひとで」形に派出した七つの尾根に築かれている。	②
11	山口古墳群	富岡市 山口	大桁山東側、和田山古墳群の南約1500mの丘陵地域に所在。現在5基が確認できる。	⑨
12	原の内出跡	富岡市 原	中世城館。丹生川支流の小河川北側の南斜面に所在。丹波屋敷とも呼ばれ、砦主は横尾丹波と伝えられる。	③
13	蚊沼の砦跡	富岡市 蚊沼	中世城館。丘陵から続く台地上、昌福寺東側に所在。東面・西南面に堀切見られる。	③
14	三笠山岩陰遺跡	富岡市 南蛇井	三笠山中腹の岩壁に開口した小規模な岩陰遺跡。弥生時代後期の土器の他、抜歯の痕跡が認められる焼けた人骨が出土している。	①
15	南蛇井古墳群	富岡市 南蛇井	鑓川左岸の下位段丘上。南蛇井増光寺遺跡の南西部にあたる。現在50基程が確認できる。6世紀後半～7世紀にかけてつくられたものと考えられる。	①・⑤
16	竹ノ上古墳群	下仁田町 馬山	鑓川右岸の川沿いの地域に所在。鑓川流域では最も西に位置する古墳群である。現在7基の古墳が確認できる。	⑨
17	上小林古墳群	富岡市 上小林	鑓川左岸下位段丘の縁辺部に所在。上毛古墳総覧では5基となっているが、現在は2基が存在。	⑨
18	下鎌田遺跡	下仁田町 馬山	鑓川右岸の上位段丘上に所在する縄文中期の大集落。200軒を越す住居の他多数の土坑・集石・埋壘を検出。他に弥生・平安時代住居、古墳、方形周溝墓、中世城郭等を発見。	
19	杉瀬古墳群	下仁田町 馬山	鑓川右岸の上位段丘上。数基の小円墳が分布している。	⑨・⑭
20	杉瀬遺跡	下仁田町 馬山	縄文時代住居・土坑・配石遺構、弥生時代土坑・再葬墓等、中世城郭等を調査。配石遺構からは早期田戸下層式土器、城郭からは鎮壇跡・多量の石塔用いた敷石遺構発見。	⑭
21	高田西城跡	妙義町 下高田	中世城郭。高田城の北西に位置する。高田城ののろし場。	②
22	高田城跡	妙義町 下高田	中世城郭。高田川右岸の丘陵上に位置する。高田憲頼の居城。発掘調査によって城郭の堀切・曲輪の他、古墳が1基発見されている。	②
23	山根遺跡	富岡市 宇田	高田川右岸の丘陵から続く傾斜地に立地。円筒埴輪・形象埴輪破片が採集されている。	①
24	恵下原遺跡	富岡市 宇田	丹生川左岸の丘陵東端部の舌状台地上。縄文～古墳時代の遺物散布地。特に滑石製模造品とその未製品・剣片類が多量に採取されている。	①
25	宇田城跡	富岡市 宇田	高田川と丹生川に挟まれた丘陵東端に立地する中世城郭。発掘調査によって堀切・曲輪・犬走りなどが検出されている。	②・③
26	一ノ宮押出遺跡	富岡市 一ノ宮	丹生川右岸に位置する。工業団地造成工事にもない調査。古墳時代住居15軒（前期7、中期7、後期5）の他、縄文・弥生時代の住居も発見されている。	⑮
27	神成城跡	富岡市 神成	鑓川左岸の上位段丘上、宮崎城の西方約1kmに位置する中世城郭。宮崎城の要害。	②
28	宮崎城跡	富岡市 宮崎	鑓川左岸の上位段丘上の中世城郭。発掘調査によって中・近世の掘立柱建物・溝・井戸などの他、縄文時代前期および古墳時代後期の住居が発見されている。	②
29	神農原古墳群	富岡市 神農原	鑓川左岸の下位段丘上に所在。胴塚を中心として段丘縁辺部に分布していたが、現在ではほとんどが失われている。	⑨
30	大山遺跡	富岡市 神農原	中世城館。鑓川右岸の岸壁上に位置する梯郭式の城。野宮氏の在城と伝えられる。	②

第3章 検出された遺構と遺物

第1節 中沢平賀界戸遺跡の概要

本遺跡は、便宜的に100mの大グリッドで、南からF～I区に区分している。F・G区は中沢川沿いの低地から台地部分、H区は丘陵下の平坦地、I区は最北部の丘陵にあたる。G区とH区の間には、細い谷地が横たわり集落は継続しない。一方、F区とG区では台地一帯に集落が展開し、区分することはできない。したがって、本報告書では、F・G区を一緒に取り扱う。以下、各区毎にその概要を示す。

1 F・G区

ここでは、台地上から、竪穴住居跡を中心に多数の遺構が検出された。住居跡は、弥生時代から中・近世にかけて、136軒が調査されている。内訳は、弥生時代12軒、古墳時代67軒、奈良時代45軒、平安時代8軒、竈を持つが時期の特定できないもの2軒、中・近世2軒である。住居跡は、台地上のほぼ全域で検出されたが、南半にやや密に分布するようである。

弥生時代の住居は台地の南半に分布し、北側にはみられない。いずれも後期樽式期の住居である。形状は長方形で炉が北側に作られているものがほとんどであるが、主軸方位にはばらつきがある。

古墳時代の住居はほとんどが後期鬼高式期の住居であるが、中期和泉式期の住居が5軒含まれている。後期の住居が台地のほぼ全域に広がるのに対し、中期の住居は1軒を除いて台地の北半に集中する。形状は正方形のものと長方形のものがある。竈はなく、住居の中央もしくは北よりに炉を持つ。後期の住居は、一辺の長さが4m内外のものが主流であるが、6～7m程の大型の住居も数件みられる。形状は、正方形のものが半数を越え、次いで横長の長方形のものが多く、縦長のものは少ない。大型の住居はほとんどが正方形である。竈は北側にあるものが一般的だが、東側や西側にあるものも少数認められる。また、全体の15%近い住居で、竈の作り替えを行っている。

奈良時代の住居もほぼ台地全域に広がるが、南西部にやや多く分布するようである。古墳時代後期の住居に比べ全体にやや小規模であるが、一辺が6～7m程の大型住居も南西部に2軒みられた。住居の形状は横長の長方形のものが7割を越えるが、大型のものは正方形である。竈は北側にあるものがほとんどであるが、東側にあるものも少数みられる。

平安時代にはいと住居件数は急激に減少し、台地の北半に散漫に分布している。形状・規模ともにばらつきが大きい、全体にやや小振りである。竈は、東側におかれるものが多くなるが、南東の隅にあるものが1軒ある。

この他に、中・近世に属すると思われる住居跡が2軒ある。これらは、非常に小型であり、竈や炉など火を使った施設も伴わない。

住居以外の遺構としては、縄文時代の埋甕2基、掘立柱建物跡5基、溝8条、墓墳2基、集石1基のほか、多数の土坑・ピットが検出されている。土坑には、弥生時代中期のものが1基含まれる。溝・土坑・ピットの中には、覆土に1108年噴出の軽石(As-B)を再堆積の状態を含むものが複数認められた。そのうちの1つであるG-2号溝からは、13世紀代の遺物が出土している。

F区南端の低地部では、試掘によって調査区西半にAs-Bの堆積が認められた。このため拡張して調査を行ったところ、軽石直下から水田址が発見された。

第3章 検出された遺構と遺物

また、当遺跡は中世古城である平賀城の比定地にあたる。調査では城の建造物にあたるような遺構は検出できなかったが、前記のAs-Bを含むG-1号溝が堀切と一致することから、これらの遺構が何らかの関連を持つ可能性が高い。

第2表 F・G区住居一覧

No	グリッド	形状	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)	深さ(m)	主軸方向	カマド	炉	時期	備考
F-1	Fm-76	長方形	2.84	3.41	(9.20)	0.17	N-3°-E	北	—	奈良	
F-2	Fo・Fp-77	長方形	8.28	7.25	(57.94)	0.29	N-13°-W	北	—	奈良	
F-3	Fm-77	正方形	7.66	7.28	(55.04)	0.14	N-46°-W	北	—	古墳後期	
F-4	Fn・Fo-75	正方形	7.20	7.10	51.39	0.47	N-1°-W	北	—	奈良	2軒重複か
F-5	Ek・F1-73	長方形	4.49	3.66	16.02	0.54	N-28°-W	北	—	古墳後期	
F-6	Fn-71・72	長方形	3.96	4.30	15.76	0.70	N-81°-E	東	—	古墳後期	北壁に旧竈
F-7	Fq-78・79	長方形	4.70	3.48	(15.55)	0.43	N-5°-E	北	—	奈良	
F-8	F1-70	長方形	4.75	4.28	19.48	0.64	N-7°-W	北	—	古墳後期	
F-9	Fm-70・71	長方形	4.56	3.89	17.24	0.38	N-11°-W	北	—	奈良	
F-10	Fp-69・70	正方形	3.48	3.34	11.23	0.33	N-3°-E	北	—	古墳後期	
F-11	Fn-72	長方形	3.91	2.90	10.36	0.32	N-3°-W	北	—	奈良	
F-12	Fn-64	正方形	3.92	4.14	15.37	0.27	N-60°-E	東	—	古墳後期	
F-13	Fo・Fp-66	長方形	3.65	3.25	10.02	0.23	N-86°-E	東	—	奈良	
F-14	Fp-72	正方形	6.28	6.30	39.63	0.49	N-30°-W	北	—	古墳後期	
F-15	Fr-67	長方形	3.23	3.51	10.96	0.37	N-87°-E	東	—	奈良	
F-16	Fm-68・69	長方形	3.58	3.23	9.79	0.23	N-7°-W	北	—	奈良	
F17A	Fr・Fs-68	長方形	4.47	3.95	15.76	0.31	N-5°-W	北	—	奈良	
F17B	Fs-68	不明	—	—	—	0.12	N-11°-W	北・東	—	奈良	竈2基
F-18	Fr・Fs-75	長方形	4.26	3.03	(12.09)	0.39	N-4°-W	北	—	奈良	
F-19	Fq-75・76	長方形	4.25	3.15	(12.99)	0.37	N-8°-E	北	—	奈良	
F-20	Fs-67	長方形	5.31	4.43	22.25	0.72	N-1°-E	北	—	古墳後期	
F-21	Fo・Fp-68	正方形	4.44	4.54	19.74	0.56	N-44°-W	北	—	古墳後期	
F-22	Fs-70	正方形	4.26	4.50	18.23	0.44	N-56°-E	北・東	—	古墳後期	竈2基
F-23	Fq・Fr-72	正方形	3.52	3.53	11.72	0.37	N-13°-W	北	—	古墳後期	東壁に旧竈
F-24	Fs-72	正方形	4.35	4.08	17.37	0.06	N-1°-E	北	—	古墳後期	
F-25	Fn・Fo-73	長方形	5.67	4.97	25.90	0.37	N-8°-W	北	—	古墳後期	焼失住居
F-26	Fr-78・79	長方形	6.82	4.07	(25.78)	0.48	N-19°-E	—	北	弥生後期	
F-27	Fq・Fr-79	不明	—	—	—	0.25	N-1°-E	北	—	不明	
F-28	Fp・Fq-74	長方形	5.25	(4.00)	—	0.22	N-21°-W	—	不明	弥生後期	
F-29	Fq-75	長方形	(5.06)	(3.52)	—	0.36	N-1°-W	北	—	奈良	
F-30	Fp-75	正方形	7.27	6.90	(48.24)	0.62	N-48°-W	北	—	古墳後期	焼失住居
F-31	Fq-67	正方形	5.00	5.11	(24.69)	0.57	N-10°-W	北	—	古墳後期	
F-32	Fp・Fq-77	正方形	5.41	5.35	26.96	0.55	N-4°-W	北	—	奈良	北壁に旧竈
F-33	Fn-67	長方形	3.96	3.29	12.44	0.34	N-11°-W	北	—	奈良	
F-34	Fr-68・69	長方形	5.55	4.37	22.59	0.47	N-32°-W	—	北	弥生後期	
F-35	Fp-65・66	長方形	4.54	3.22	(14.22)	0.21	N-1°-E	北	—	奈良	
F-36	Fo-66・67	正方形	6.20	6.18	37.15	0.58	N-2°-W	—	南	古墳中期	
F-37	Fn-68	正方形	4.44	4.59	19.29	0.42	N-103°-W	西	—	古墳後期	北壁に旧竈
F-38	Fm・Fn-69	正方形	5.23	5.22	24.60	0.68	N-75°-E	東	—	古墳後期	
F-39	Fn・Fo-69	長方形	6.23	4.89	(28.89)	0.54	N-14°-W	—	北	弥生後期	
F-40	Fn・Fo-71	長方形	4.35	3.03	12.54	0.40	N-12°-W	北	—	奈良	
F-41	Fn-72	長方形	3.82	3.03	11.05	0.41	N-4°-W	北	—	奈良	
F-42	Fm・Fn-74	正方形	6.84	7.18	46.84	0.50	N-5°-W	北?	—	古墳後期	
F-43	Fq-72・73	長方形	6.98	6.67	(42.37)	0.45	N-73°-W	—	北・西	弥生後期	
F-44	Fr-74・75	長方形	5.09	4.69	(23.14)	0.29	N-64°-W	—	—	弥生後期	
F-45	Fr-75	長方形	3.59	3.11	(10.80)	0.43	N-15°-W	北	—	奈良	
F-46	Fn・Fo-64	長方形	3.61	4.48	(14.86)	0.15	N-78°-E	東	—	奈良	
F-47	Fo-76	正方形	6.94	6.28	(42.00)	0.39	N-22°-W	北	—	古墳後期	
F-48	Fo-71・72	長方形	3.82	2.86	10.00	0.33	N-7°-W	北	—	奈良	
F-49	Fo-72	長方形	3.13	2.84	8.10	0.47	N-6°-E	北	—	奈良	



第6図 中沢平賀界戸遺跡F・G区全体図

第1節 中沢平賀界戸遺跡の概要

No	グリッド	形状	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)	深さ(m)	主軸方向	カマド	炉	時期	備考
F-50	Fr・Fs-67	長方形	5.68	4.47	24.48	0.45	N-10°-W	北	—	奈良	
F-51	Fq-66・67	長方形	6.00	5.28	(30.58)	0.53	N-45°-W	北?	—	古墳後期	
F-52	Fs-66・67	不明	5.89	(5.50)	—	0.48	N-1°-W	北?	—	古墳後期	焼失住居か
F-53	Fq-76・77	長方形	8.12	6.32	(48.26)	0.44	N-39°-W	—	不明	弥生後期	
F-54	Fn-72・73	正方形	3.52	3.18	(10.90)	0.37	N-1°-E	北	—	奈良	
F-55	Fo-73	長方形	3.30	2.58	(7.68)	0.28	N-48°-E	北?	—	不明	
F-56	Fq-75	正方形	4.74	4.69	20.77	0.62	N-17°-W	北	—	奈良	
F-57	Fs・Ft-76	長方形	6.35	4.60	28.62	0.27	N-21°-E	—	北・西	弥生後期	
F-58	Fs・Ft-75	長方形	5.81	4.38	23.70	0.13	N-S	北	—	奈良	
G-1	Gc-81	不明	7.61	(2.94)	—	0.49	N-4°-E	—	—	弥生後期	
G-2A	Ga-79	不明	—	—	—	—	不明	不明	—	古墳後期	
G-2B	Ga-79	長方形	10.33	7.06	(70.88)	0.93	N-33°-W	—	南西隅	弥生後期	
G-3	Ge-81	不明	2.90	(2.96)	—	0.09	N-97°-E	東	—	平安	
G-4	Gd-79・80	長方形	4.37	3.93	16.05	0.61	N-12°-W	北	—	古墳後期	
G-5	Gb・Gc-68	正方形	3.84	3.52	12.96	0.57	N-9°-E	北	—	古墳後期	焼失住居
G-6	Gc-71	長方形	3.83	3.09	11.45	0.24	N-5°-E	北	—	古墳後期	
G-7	Gd-71	正方形	3.40	2.97	9.32	0.32	N-12°-W	北	—	古墳後期	
G-8	Gd-69	正方形	2.45	2.53	(5.81)	0.42	N-3°-E	北	—	古墳後期	焼失住居
G-9	Gd-69	長方形	4.30	3.42	13.15	0.48	N-4°-E	北	—	古墳後期	
G-10	Gd-70	長方形	5.06	3.87	(18.08)	0.48	N-14°-E	北	—	古墳後期	
G-11	Ga-71・72	正方形	5.96	5.73	33.99	0.53	N-19°-W	北	—	古墳後期	
G-12	Gc・Gd-72	長方形	2.30	3.44	7.50	0.37	N-110°-E	東	—	古墳後期	
G-13	Ge-74・75	正方形	4.78	4.60	21.26	0.45	N-19°-W	北	—	古墳後期	
G-14	Gd-74・75	長方形	3.21	3.00	8.80	0.28	N-93°-E	東	—	平安	
G-15	Ga・Gb-74	正方形	6.11	6.46	38.91	0.43	N-88°-E	東	—	古墳後期	北壁に旧竈
G-16	Gb-75・76	長方形	2.38	2.63	5.81	0.16	N-3°-E	北	—	奈良?	
G-17	Ga-76	長方形	2.74	2.23	5.54	0.13	N-5°-E	北	—	奈良	
G-18	Ga-76	長方形	2.45	3.07	7.13	0.33	N-2°-E	北・東	—	奈良	竈2基
G-19	Ga-70	正方形	2.48	2.55	6.01	0.42	N-2°-W	北	—	古墳後期	
G-20	Ge-77・78	長方形	3.67	3.31	11.91	0.49	N-18°-W	北	—	古墳後期	
G-21	Gd-77・78	長方形	3.96	3.25	11.62	0.54	N-9°-E	—	北	弥生後期	
G-22	Ge-81	長方形	3.01	3.60	9.85	0.39	N-87°-E	東	—	古墳後期	
G-23	Gf-81・82	—	(2.12)	4.82	—	0.46	N-1°-E	北	—	古墳後期	東壁に旧竈
G-24	Gi-81・82	正方形	3.42	3.45	11.07	0.48	N-6°-E	北	—	奈良	
G-25	Gj-81	長方形	2.94	4.15	11.80	0.26	N-103°-E	東	—	平安	
G-26	Ch・Gi-82	—	3.81	(3.45)	—	0.41	N-77°-E	東	—	古墳後期	北壁に旧竈
G-27	Gj-82	正方形	4.94	5.39	26.28	0.50	N-3°-W	北	—	古墳後期	
G-28	Ga-68	長方形	3.09	2.48	(7.56)	0.56	N-2°-W	北	—	奈良	
G-29	Ga-68	長方形	6.20	4.18	26.10	0.57	N-10°-W	—	北・西	弥生後期	
G-30	Gd-72・73	長方形	3.35	2.99	9.82	0.55	N-5°-W	北	—	奈良	
G-31	Ge-73	長方形	4.40	3.76	(15.55)	0.52	N-S	北	—	古墳後期	
G-32	Gc・Gd-69	正方形	5.16	5.21	—	0.56	N-8°-E	北?	—	古墳後期	
G-33	Ge・Gf-72	長方形	3.31	2.22	6.85	0.35	N-3°-E	北	—	奈良	
G-34	Gg・Gh-72	正方形	4.95	4.75	22.66	0.67	N-7°-W	北	—	古墳後期	東壁に旧竈
G-35	Gf-74	正方形	3.76	3.60	(13.24)	0.43	N-20°-W	北	—	古墳後期?	
G-36	Gi-78	長方形	2.12	1.83	3.48	0.18	N-77°-E	—	—	中世	
G-37	Gh-76	正方形	3.70	3.59	12.60	0.46	N-4°-W	北	—	古墳後期	
G-38	Gi-72	長方形	4.04	2.86	10.96	0.40	N-1°-E	北	—	奈良	
G-39	Gf-69	正方形	4.71	4.49	18.58	0.43	N-1°-W	北	—	平安	北壁に旧竈
G-40	欠番										
G-41	Gg・Gh-70	長方形	5.08	3.72	17.87	0.49	N-1°-E	北	—	奈良	
G-42	Gg・Gh-74	正方形	3.22	2.92	9.10	0.58	N-1°-E	北	—	奈良	
G-43	Gi-73	長方形	2.82	2.12	5.62	0.35	N-94°-E	東	—	奈良	
G-44	Gj-73・74	長方形	3.94	3.62	(14.08)	0.15	N-18°-W	—	中央	古墳中期	
G-45	Gh-78	正方形	2.40	2.36	5.42	0.25	N-68°-W	—	—	中世	
G-46	Gm-78	長方形	2.32	2.73	5.81	0.06	N-102°-E	東	—	平安	
G-47	Gk-72・73	長方形	5.15	3.43	(17.44)	0.22	N-17°-E	北	—	奈良	
G-48	Gk-71・72	正方形	4.69	(4.55)	—	0.30	N-21°-E	—	北	古墳中期	
G-49	Gh-70・71	長方形	3.38	2.73	8.83	0.40	N-1°-W	北	—	古墳後期	
G-50	Gi-70	正方形	(5.55)	5.26	—	0.57	N-28°-W	北	—	古墳後期	北壁に旧竈
G-51	Gg-78・79	長方形	4.43	3.66	14.94	0.63	N-107°-E	南東	—	平安	東壁に竈

第3章 検出された遺構と遺物

No	グリッド	形状	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)	深さ(m)	主軸方向	カマド	炉	時期	備考
G-52	Gg-78・79	正方形	5.32	5.04	26.49	0.16	N-107°-E	東	—	平安	
G-53	Gf-78・79	長方形	5.22	4.43	—	0.72	N-5°-W	北?	—	古墳後期	
G-54	Gf-79	不明	(3.92)	4.60	—	0.56	N-5°-W	北	—	古墳後期	
G-55	Gg-78	不明	—	—	—	0.25	N-10°-E	—	中央?	古墳中期?	
G-56	Gg・Gh-79	正方形	5.31	4.80	23.93	0.57	N-14°-W	北	—	古墳後期	
G-57	Gk・Gl-75	長方形	3.13	3.96	(11.51)	0.26	N-106°-E	東	—	平安	
G-58	Gg・Gh-80	正方形	2.80	2.90	7.57	0.37	N-18°-E	北	—	古墳後期?	
G-59	Gg-76・77	正方形	6.51	6.72	(42.12)	0.58	N-17°-W	北	—	古墳後期	
G-60	Gk-81	正方形	2.01	1.90	3.69	0.19	N-2°-E	北	—	古墳後期?	
G-61	Gf・Gg-76	長方形	3.97	3.34	12.74	0.73	N-3°-E	北	—	奈良	
G-62	Gf-75・76	長方形	(5.28)	4.79	(22.91)	0.45	N-22°-W	北?	—	古墳後期	
G-63	Gf-74・75	正方形	5.06	4.81	24.43	0.56	N-2°-E	北	—	古墳後期	
G-64	Gg・Gh-74	長方形	5.24	4.35	(22.58)	0.16	N-23°-W	—	不明	古墳中期	
G-65	Gi-74・75	長方形	4.16	3.36	13.29	0.66	N-S	北	—	奈良	北壁に旧竈
G-66	Gh・Gi-74	正方形	3.11	(3.15)	(9.85)	0.38	N-19°-W	北?	—	古墳後期	
G-67	Gj・Gk-74	正方形	3.70	3.85	13.73	0.50	N-80°-E	東	—	古墳後期	北壁に旧竈
G-68	Go-82	長方形	2.50	3.28	7.69	0.22	N-99°-E	東	—	古墳後期	
G-69	Gh-69	不明	—	3.91	—	0.51	N-27°-W	不明	—	古墳後期	
G-70	欠番										
G-71	欠番										
G-72	Gm-76	長方形	2.83	2.31	(6.30)	0.30	N-1°-W	北?	—	古墳後期?	
G-73	Gl-76	長方形	3.28	2.66	(8.95)	0.41	N-S	北	—	古墳後期	
G-74	Gj・Gk-78	長方形	4.38	3.31	13.79	0.69	N-2°-E	北	—	奈良	
G-75	Gk-77・78	正方形	3.96	3.70	(14.07)	0.48	N-5°-W	北	—	古墳後期	
G-76	Gl-78・79	長方形	5.05	4.25	20.12	0.52	N-2°-E	北	—	奈良	
G-77	Gn・Gm-79	不明	4.84	(4.12)	—	0.23	N-3°-W	北	—	古墳後期	
G-78	Go-83	正方形	3.82	3.49	13.09	0.24	N-97°-E	東	—	古墳後期?	
G-79	Gl-74	長方形	4.21	2.98	11.67	0.22	N-1°-E	北	—	奈良	

第3表 F・G区土坑一覧

No	位置	形状	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	重複	時期	備考
F-1	Fk-72	円形	70	70	10		近世	洋梨形土坑
F-2	Fq-73	円形	58	55	9		近世	洋梨形土坑
F-3	Fr-71	円形	56	51	3		不明	
F-4・5	欠番							
F-6	Ft-76	不整形	75	65	29		不明	
F-7	Ft-77	楕円形	67	58	4		奈良	
F-8	Ft-78	円形	59	56	15		近世	洋梨形土坑
G-1	Gf-81	洋梨形	108	75	20	G-28住を切る	近世	洋梨形土坑
G-2	Gt-85	洋梨形	167	67	35		近世	洋梨形土坑
G-3	Gt-84	洋梨形	92	64	13	G-4土坑を切る	近世	洋梨形土坑
G-4	Gt-84・85	洋梨形	125	62	34	G-3土坑に切られる	近世	洋梨形土坑
G-5	Gk-82	円形	79	74	16		不明	
G-6~9	欠番							
G-10	Gm-82	不整形	187	128	17		不明	
G-11	Gm-83	円形	94	82	8		不明	
G-12	Gb-79・80	不整形	(550)	(158)	78	G-20住を切る	古墳後期?	
G-13	Gb-73	円形	64	62	12	G-15住を切る	近世	洋梨形土坑
G-14	Ga-77・78	不整形	(357)	(148)	9		奈良	住居の掘り方か?
G-15	Ga-77	長方形	196	97	41		不明	
G-16	欠番							
G-17	Ga-70・71	不明	209	(101)	62	G-19住に切られる	古墳後期?	
G-18	Gg・Gh-71	長楕円形	207	68	32	G-41住を切る	中世	覆土中にAs-B軽石含む
G-19	Gg-70・71	長方形	134	102	22	G-41住を切る	中世	覆土中にAs-B軽石含む
G-20	Gi-70	楕円形	76	62	36	G-50住を切る	近世	洋梨形土坑
G-21	Gi-70	洋梨形	108	64	30	G-22土坑を切る	近世	洋梨形土坑
G-22	Gi・Gj-70	洋梨形	142	—	26	G-21土坑に切られる	近世	洋梨形土坑
G-23	Gh-69	長方形	122	60	19	G-69住・49土坑を切る	中世	覆土中にAs-B軽石含む
G-24	Ge-71	長楕円形	175	83	21		不明	
G-25	Gk-80	長方形	190	96	18		中世	覆土中にAs-B軽石含む

第1節 中沢平賀界戸遺跡の概要

No	位置	形状	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	重複	時期	備考
G-26	欠番							
G-27	Gf-81	円形	82	80	13		不明	
G-28	Gf-79	円形	90	85	13	G-53・54住を切る	中世	覆土中にAs-B軽石を含む
G-29	Gm-77	不整形	(123)	85	20	G-46住を切る	平安	
G-30	Gk-75	長方形	161	93	15	G-57住に切られる	古墳後期	
G-31	Gf-77	長方形	116	68	78	52住より新、51住より古	平安	
G-32	Gg-76・77	楕円形	(65)	61	21	G-59住を切る	近世	洋梨形土坑
G-33	Go-74	不明	(82)	(19)	11	G-34土坑を切る	近世	洋梨形土坑
G-34	Go-74	楕円形	71	56	23	G-33土坑に切られる	近世	洋梨形土坑
G-35	Gk-77・78	長方形	154	80	79	G-75住・42土坑を切る	不明	
G-36	Gj-70	洋梨形	91	67	18		近世	洋梨形土坑
G-37	Gh-73	正方形	113	106	21	G-6溝に切られる	不明	
G-38	Gf-73・74	長方形	130	77	10		不明	
G-39	Gj-74	円形	115	103	27		弥生中期	
G-40	Gh-80	楕円形?	(74)	76	12	G-56住に切られる	古墳?	
G-41	Gh-80	不明	(109)	(78)	28	G-58住に切られる	古墳?	
G-42	Gk-77	楕円形	210	152	66	G-35土坑に切られる	不明	
G-43	Gg-76	不明	73	(36)	21	G-1溝に切られる	平安以前	
G-44	Gl-73	円形	79	75	18		平安	
G-45	Gj-72	円形	85	81	10		奈良	
G-46	Gh-74	長方形	178	63	34		中世	覆土中にAs-B軽石含む
G-47	Gl-80	長方形	182	114	18		平安	
G-48	Gh-69	不整形	66	24	23	G-41・69住を切る	中世	覆土中にAs-B軽石含む
G-49	Gh-69	長方形	97	55	18	G-23土坑に切られる	中世	覆土中にAs-B軽石含む
G-50	Gh-72・73	楕円形	125	102	50		不明	
G-51	Gg・Gh-73	不整形	137	102	25		不明	
G-52	Gd-76	不整形	(234)	(138)	73		不明	
G-53	Gi-70	不明	(51)	(25)	23	G-50住を切る	不明	
G-54	Gj-77	不明	107	(41)	16	G-74住に切られる	古墳後期?	
G-55	Gf-69・70	円形	156	197	18	G-39住を切る	中世	覆土中にAs-B軽石含む
G-56	Gm-77	円形	40	35	8		不明	
G-57	Gm-78	楕円形	57	49	22	G-46住を切る	不明	

第4表 F・G区掘立柱建物一覧

No	位置	形状	主軸方位	長辺(m)	短辺(m)	重複	時期	備考
F-1	Fs-70	正方形	不明	—	—	F-22号住居より新しい	奈良	土師器坏出土
G-1	Gd・Ge-80	長方形	N-7°-E	9.49	2.06	G-22号住居より新しい	不明	
G-2	Gg-81・82	長方形	N-19°-W	4.13	3.20		不明	
G-3	Gd-76	長方形	N-89°-E	2.42	2.05		不明	
G-4	Ga-67	不明	不明	—	—		不明	調査区外に広がる

第5表 F・G区墓壇一覧

No	位置	形状	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	重複	時期	備考
G-1	Gj-76	「凸」字状	122	71	20		中世	周壁が焼けて焼土化
G-2	Gl-79	長方形	131	83	37	G-76住を切る	中世	周壁が焼けて焼土化

第6表 F・G区集石

No	位置	形状	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	重複	時期	備考
G-1	Gd-75	不明	117	62	—	G-14住を切る	不明	

第7表 F・G区溝一覧

No	位置	長(m)	幅(m)	深(m)	時期	備考	No	位置	長(m)	幅(m)	深(m)	時期	備考
G-1	Gb-79・Gk-74	22.4	1.20	0.34	中世	As-B含む	G-6	Gh-73・74	6.85	0.92	0.54	中世	As-B含む
G-2	Gi・Gj-74	6.61	0.91	0.33	中世	As-B含む	G-7	Gi-77	7.20	0.85	0.76	中世	As-B含む
G-3	Gh・Gi-70	4.15	0.73	0.42	中世	As-B含む	G-8	Gg-75	(3.15)	0.88	0.45	中世	
G-4	Ge・Gf-70	4.85	0.73	0.40	中世	As-B含む	G-9	Gk・Gl-76	(2.72)	0.66	0.51	中世	
G-5	Ge-71・72	4.38	0.77	0.28	中世	As-B含む							

第3章 検出された遺構と遺物

2 H 区

ここでは、17軒の竪穴住居跡と、少量の溝・土坑・ピットが検出されている。住居は、弥生時代1軒、古墳時代後期4軒、奈良時代10軒、平安時代1軒、時期不明の住居が1軒ある。住居の傾向はF・G区と同様であるが、大型の正方形の住居は見られない。他の遺構については、時期を特定できなかった。

H区では、調査区のほぼ全面にローム層の堆積がみられたため、一部に旧石器時代遺物確認のための試掘を行ったが、遺物の出土はなかった。浅間一板鼻褐色軽石(As-YP)などの指標となる火山噴出物の堆積はなく、再堆積のローム層である可能性が高い。

H区南側のG区との境には、低地が東西に横たわっている。試掘のためのトレンチを掘削し、土層の状態を観察したが、水田などの遺構は認められなかったため、それ以上の調査は行わなかった。

第8表 H区住居一覧

No.	グリッド	形状	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)	深さ(m)	主軸方向	カマド	炉	時期	備考
H-1	Hm-76・77	正方形	4.26	3.89	16.15	0.30	N-9°-W	北	—	奈良	
H-2	Hk・Hl-77	長方形	3.78	3.14	11.11	0.34	N-1°-E	北	—	奈良	
H-3	Hh-78	長方形	4.68	3.54	16.06	0.43	N-6°-W	北	—	奈良	
H-4	Hi・Hj-79	正方形	3.81	3.59	12.96	0.30	N-89°-E	東	—	奈良	
H-5	Hk・Hl-80	長方形	3.78	2.82	9.99	0.49	N-7°-W	北	—	奈良	
H-6	Hl-80・81	長方形	4.52	3.03	12.20	0.12	N-5°-W	北	—	古墳後期	
H-7	Hj-81・82	長方形	5.70	3.54	19.44	0.22	N-10°-E	北・東	—	奈良	竈2基
H-8	Hj-82・83	不明	3.68	(2.73)	—	0.12	N-5°-E	北	—	奈良	
H-9	Hj-82・83	長方形	5.26	4.65	23.66	0.31	N-11°-E	—	北・西	弥生後期	炉2基
H-10	Hl-76	不明	3.37	—	—	0.33	N-87°-E	東?	—	奈良?	
H-11	Hk・Hl-77	長方形	5.90	3.81	(21.10)	0.35	N-18°-W	北	—	古墳後期	
H-12	Hi-75	不明	—	3.48	—	0.47	N-11°-W	北	—	古墳後期	2軒重複か
H-13	Hg-78・79	正方形	2.96	2.91	(8.55)	0.29	N-90°-E	東	—	奈良	
H-14	Hg-74・75	不明	3.96	(3.56)	—	0.15	N-90°-E	東?	—	不明	
H-15	He-75	正方形	4.81	4.57	(21.72)	0.42	N-1°-E	北	—	古墳後期	北壁に旧竈
H-16	Hh・Hi-79	正方形	3.12	3.28	3.36	0.24	N-130°-E	東	—	平安	
H-17	He-75	正方形	2.82	2.85	(8.00)	0.33	N-120°-E	東	—	奈良	

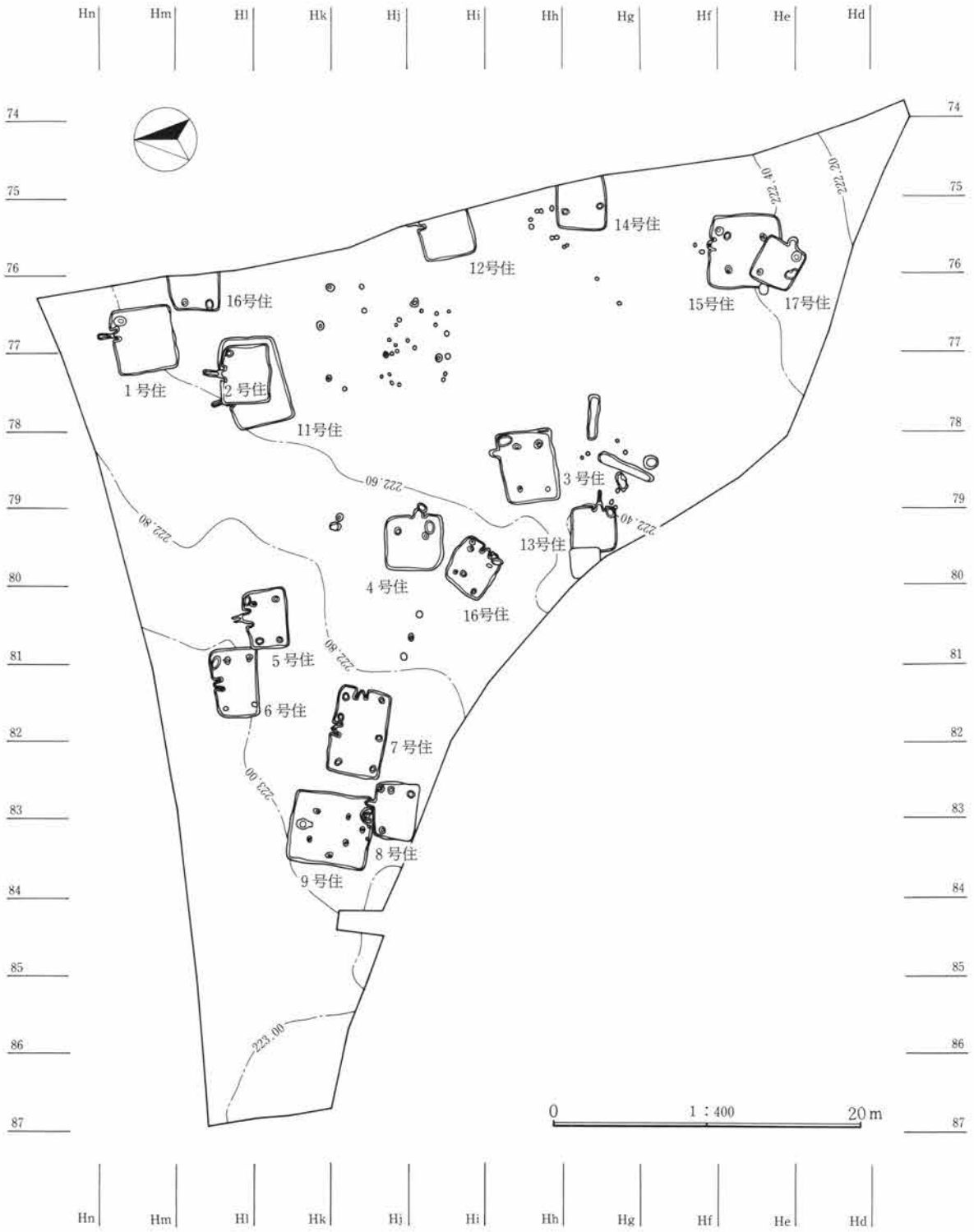
第9表 H区土坑一覧

No.	位置	形状	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	重複	時期	備考
H-4	Hh-79	楕円形	67	41	9	16住を切る	不明	洋梨形土坑の可能性あり
H-5	Hf-78	円形	105	97	11		不明	
H-6	Hg-78	不整形	126	63	48		不明	

第10表 H区溝一覧

No.	位置	長(m)	幅(m)	深(m)	時期	備考	No.	位置	長(m)	幅(m)	深(m)	時期	備考
H-1	Hf・Hg-78	3.84	0.72	0.25	不明		H-2	Hg-77・78	2.97	0.73	0.41	不明	

第1節 中沢平賀界戸遺跡の概要



第7図 中沢平賀界戸遺跡H区全体図

第3章 検出された遺構と遺物

3 I 区

I区は、細い馬背状の丘陵であるが、北側を近年の土取りによって大きく破壊されており、本来はもう少し幅が広がったものと思われる。遺構は、丘陵の上部と南側斜面の一部で検出された。

遺構は中・近世のものが中心で、特に注目すべきものとして塚と礎石建物があげられる。この2つの遺構は、ともに上面に1873年(天明三年)の浅間山の噴火にともなうAs-A軽石が堆積していた。塚は、盛土の下位にAs-Bが堆積していることも確認された。礎石建物跡からは、銅の製造にかかわったと思われる炉壁の破片が出土している。この他に、多数の墓墳も発見されている。

他の時代の遺構としては、縄文時代中期の住居1軒、弥生時代後期住居2軒、平安時代の住居1軒がある。このうち平安時代の住居からは、脚付きの小型の羽釜が出土した。

丘陵上には全体にロームが堆積していたため、旧石器時代遺物確認のための試掘調査を行った。ローム層中には浅間一板鼻褐色軽石群(As-BP)・As-YPなどの火山噴出物が認められたが、石器等遺物の出土はなかった。

第11表 I区住居一覧

No.	グリッド	形状	長辺(m)	短辺(m)	面積(m ²)	深さ(m)	主軸方向	カマド	炉	時期	備考
I-1	Ii-92・93	長方形	7.04	5.09	33.19	0.76	N-41°E	—	北・西	弥生後期	炉2基
I-2	Ii・Ij-91	円形	(8.82)	—	—	0.00	不明	—	中央	縄文中期	炉土器埋設
I-3	Ii-92・93	不明	—	—	—	0.00	N-71°E	東	—	平安	脚付羽釜
I-4	Il・Im-96	長方形	5.15	3.69	17.15	0.89	N-21°E	—	不明	弥生後期	

第12表 I区土坑一覧

No.	位置	形状	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	重複	時期	備考
I-1	Ie-88	円形	134	123	39		不明	
I-2	Il-95	楕円形?	—	—	—	塚盛土を切る	近世	染付徳利(19世紀)出土

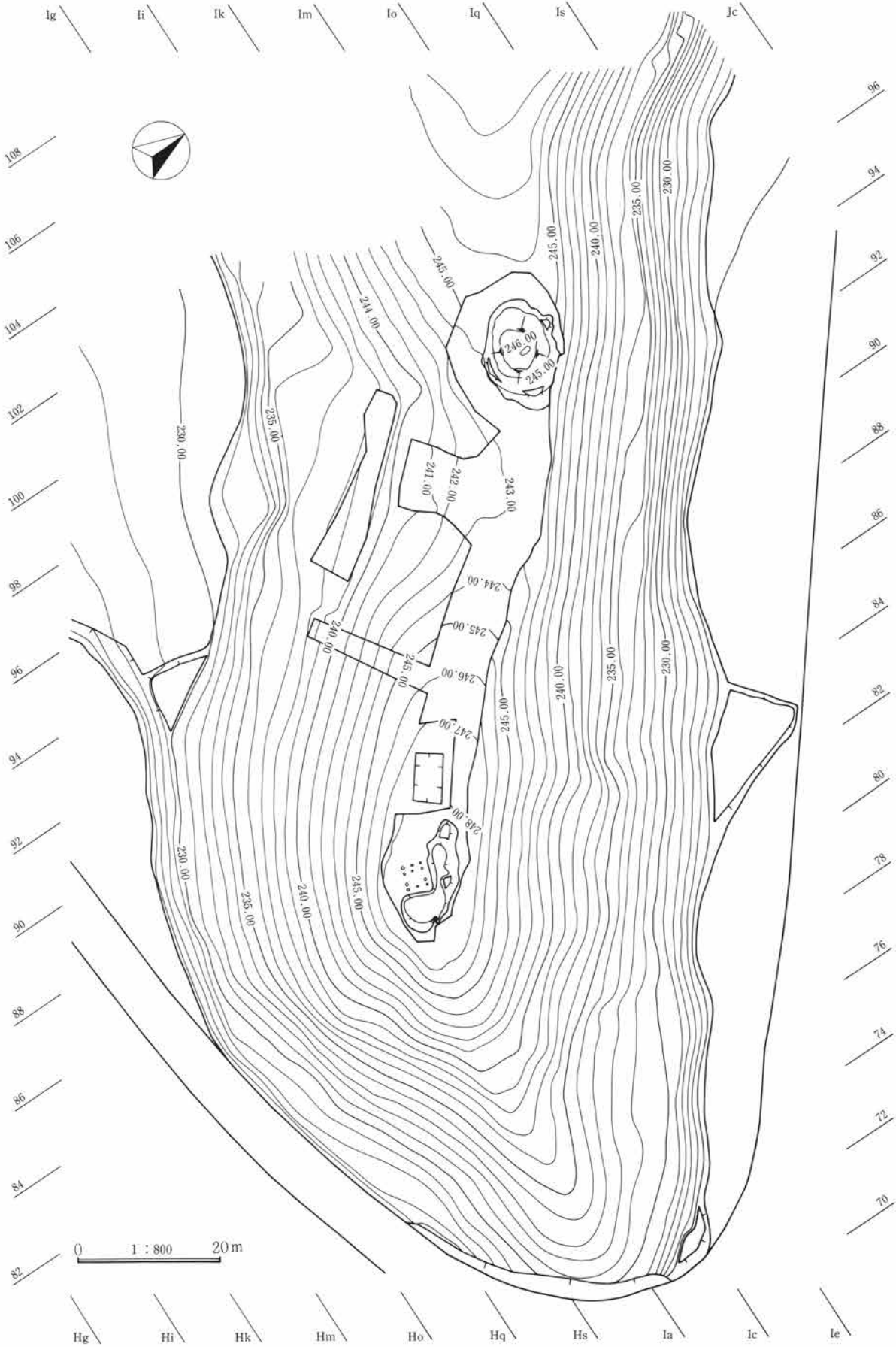
第13表 I区塚下遺構群一覧

No.	位置	形状	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	重複	時期	備考
1墓	Il-96	不明	—	—	—	塚に覆われる	中世	3個の円鏝周辺に骨片散乱
2墓	Im-96	不整形	105	81	8	塚に覆われる	中世	皇宗通賽出土
3墓	Im-96	円形	98	94	16	塚に覆われる	中世	皇宗通賽・熙寧元賽出土
4墓	Im-96	長方形	142	64	26	塚下3墓に切られる	中世	周壁が昭けて焼土化
集石	Il-94	不明	—	—	0	塚に覆われる	中世	

第14表 I区墓墳一覧

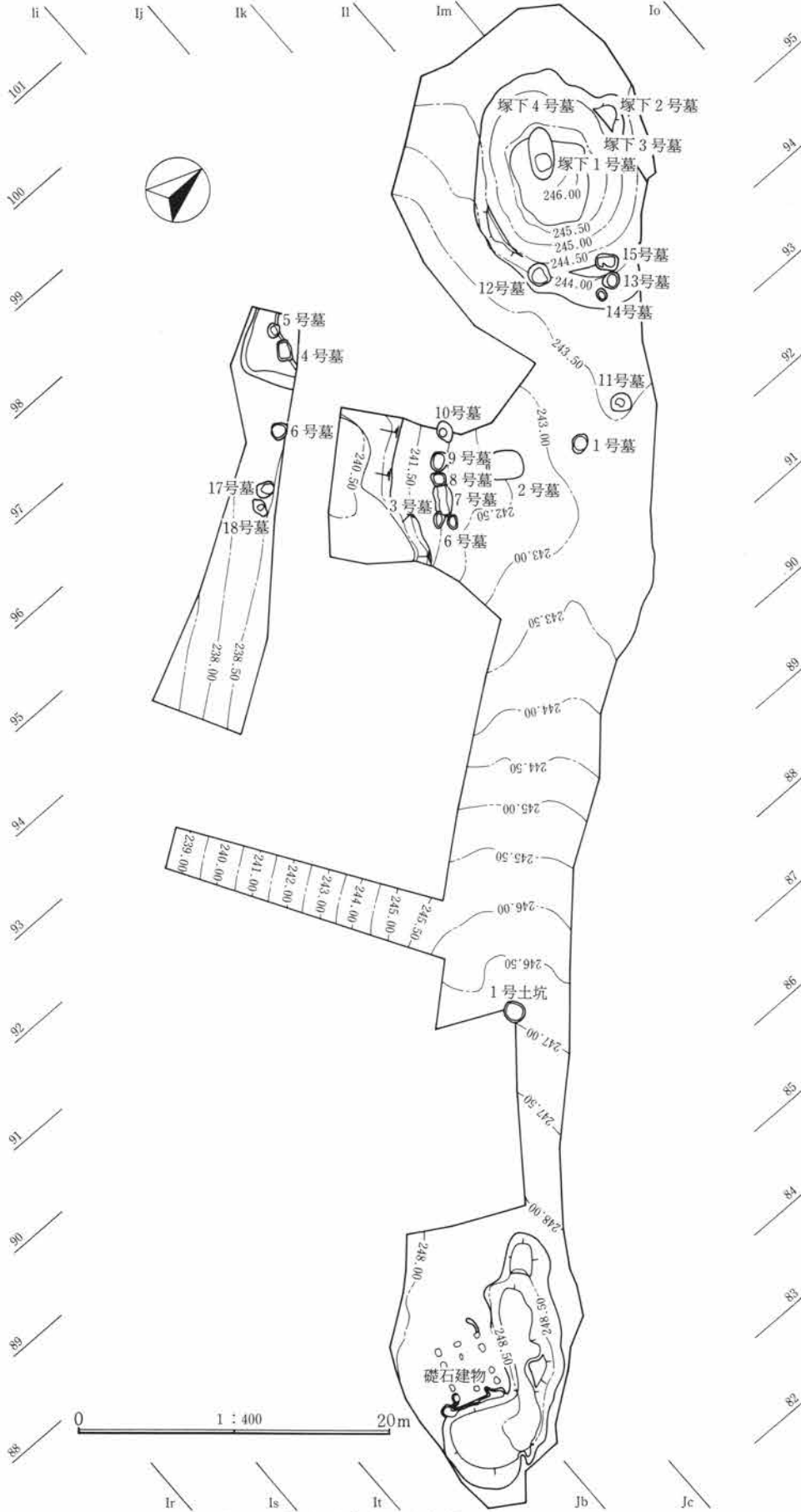
No.	位置	形状	長辺(cm)	短辺(cm)	深さ(cm)	重複	時期	備考
I-1	Ij-92・93	不整形	121	93	58	1住を切る	近世	陶器、火打ちがね、銅銭
I-2	Ii-93	楕円形?	(120)	84	16	1住を切る	近世	陶器、銅銭
I-3	Ih-93	楕円形	103	63	34	7墓を切る	近世	陶器、銅銭
I-4	Ih-96	長方形	(136)	93	39		近世	
I-5	Ih-96	楕円形	83	75	45		近世	銅銭
I-6	Ih-93	楕円形	89	63	45		近世	銅銭
I-7	Ih-93	長方形?	197	117	62	3・8墓に切られる	近世	陶器、火打ちがね、銅銭
I-8	Ih-93	正方形?	94	85	53	7墓を切る	近世	銅銭
I-9	Ii-94	長方形?	117	103	44		近世	陶磁器、銅銭
I-10	Ii-94	円形	127	101	59		近世	骨、銅銭
I-11	Ik-93	長方形	125	107	72		近世	上面に集石。陶器、銅銭
I-12	Ik-94	円形	156	139	60	塚盛土を切る	近世	火打ちがね
I-13	Il-94	楕円形	108	106	64	塚盛土を切る	近世	骨片
I-14	Il-94	長方形	78	64	28	塚盛土を切る	近世	
I-15	Il-94	長方形	138	101	51	塚盛土を切る	近世	銅銭
I-16	Ig-95	不整形	111	99	37		近世	陶器、花瓶
I-17	Ig-95	楕円形	118	86	80		近世	煙管、火打ちがね、銅銭、骨
I-18	If-95	不整形	118	82	59		近世	

第1節 中沢平賀界戸遺跡の概要



第8図 中沢平賀界戸遺跡 I 区全体図①

第1節 中沢平賀界戸遺跡の概要



第10図 中沢平賀界戸遺跡 I 区全体図③

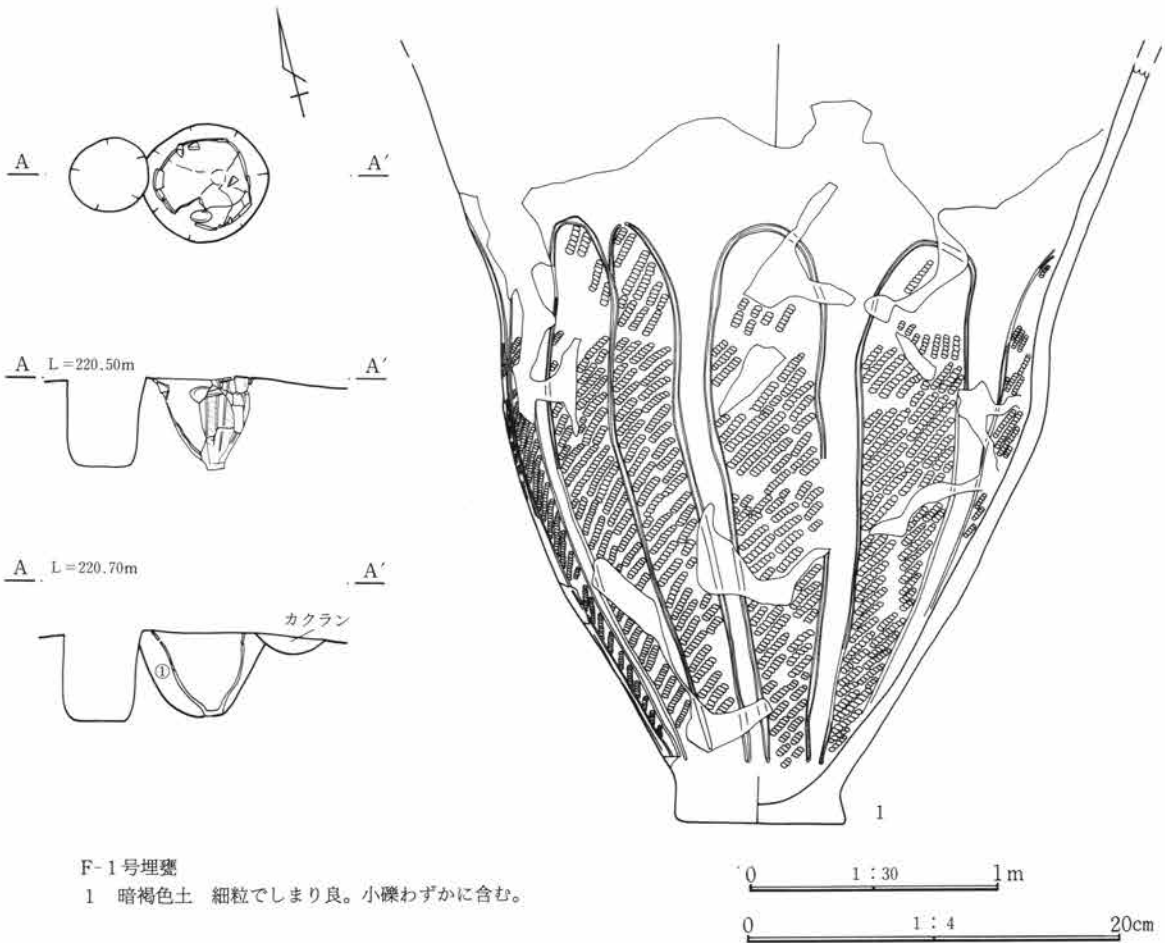
第2節 F・G区

1 縄文時代の遺構と遺物

埋 甕

F-1号埋甕 (PL 4・76)

Fo・Fp-69グリッドに所在。掘り込みの形状はほぼ円形で、長軸49cm・短軸46cm、深さは33cmである。内部には比較的大型の甕(1)が1個体、正位で埋められていた。土器は口縁部を欠いている。また土器の内部から、長径8cmほどの円礫が出土したが、土器の底部よりかなり高い位置からの出土である。



F-1号埋甕

1 暗褐色土 細粒でしまり良。小礫わずかに含む。

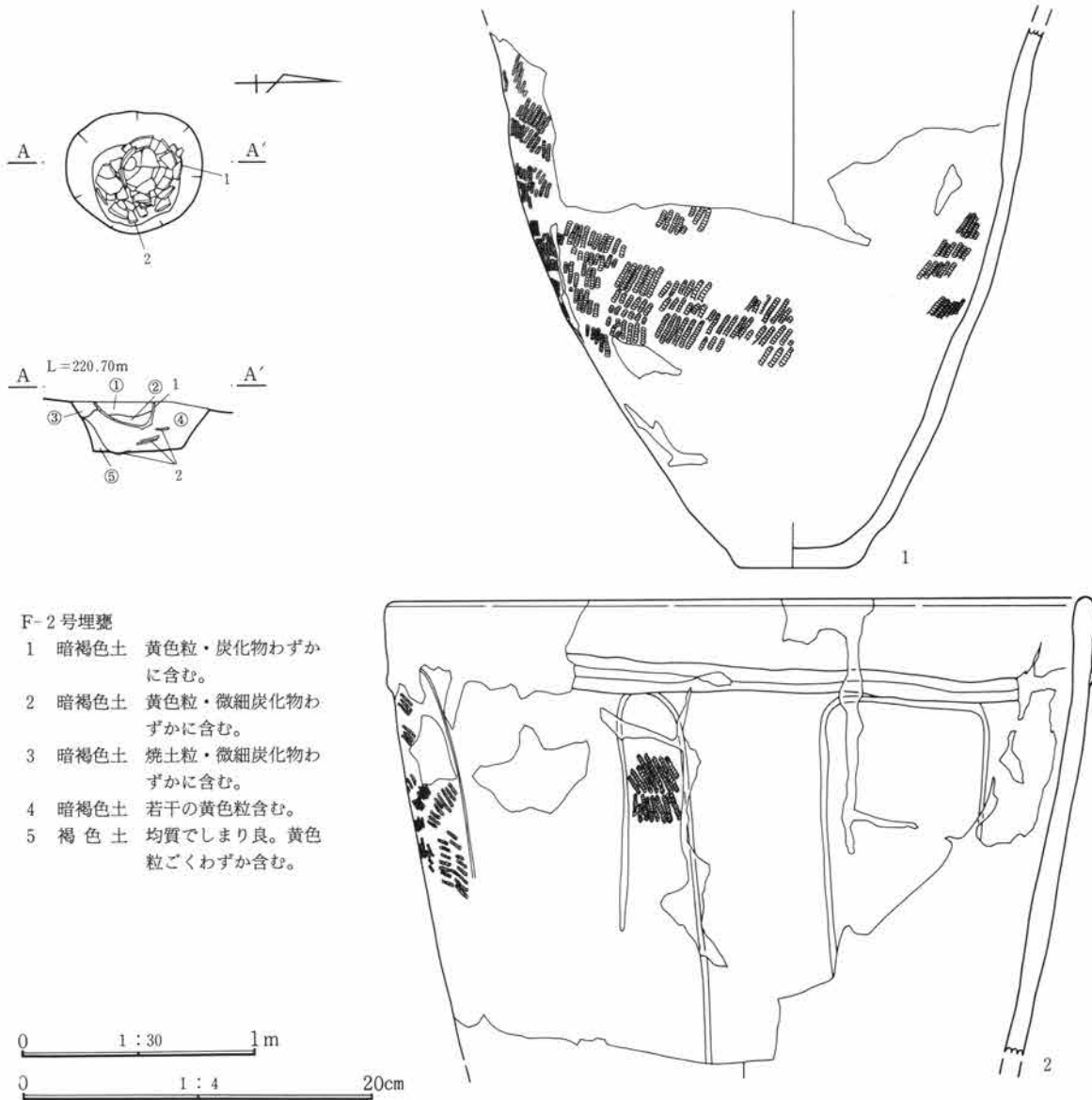
第11図 F-1号埋甕、出土遺物実測図

F-1号埋甕出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	深鉢形土器	埋甕 胴～底部	底 9.1	底部小さく端部やや張る。 胴部逆ハの字に開きながら 立ち上がり、胴上位でわず かな屈曲を持つ。口縁欠損	胴部上位～底部にかけ、13単位の逆U字文 (隣合う文様が接している部分もあり)を 沈線で描き、その中に単節RLの縄文を縦 位施文。	①砂粒含む ②良好 ③橙色

F-2号埋甕 (PL4・76)

Ft-67グリッドに所在。掘り込みの形状は楕円形で、長軸58cm・短軸51cm、深さ21cmである。内部からは2個体の土器が折り重なるようにして出土した(1・2)。1はほぼ正位の状態出土し、口縁部を欠く他はほぼ完形であった。これに対して2は、1の底部を取りまくようにして出土し、残存率も低い。1の根込めとして利用されたものであろうか。



F-2号埋甕

- 1 暗褐色土 黄色粒・炭化物わずかに含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒・微細炭化物わずかに含む。
- 3 暗褐色土 焼土粒・微細炭化物わずかに含む。
- 4 暗褐色土 若干の黄色粒含む。
- 5 褐色土 均質でしまり良。黄色粒ごくわずかに含む。



第12図 F-2号埋甕、出土遺物実測図

F-2号埋甕出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	深鉢形土器	埋甕 胴部下半 ～底部	底 7.2	底部～胴部にかけて緩やかな膨らみをもって開く。口縁部欠損。	単節RL縄文を全面に施文。	①砂粒目立つ ②良好 ③明褐色 ④器表面部分的剝落
2	深鉢形土器	埋甕 口縁～ 胴部上位	口(40.0)		口縁無文帯下に低い隆帯を巡らす。胴部に沈線により逆U字文を6ないし7単位で描き、その中にLRの単節縄文を縦位施文。	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色 ④器面の荒れ著しい

2 弥生時代の遺構と遺物

住居跡

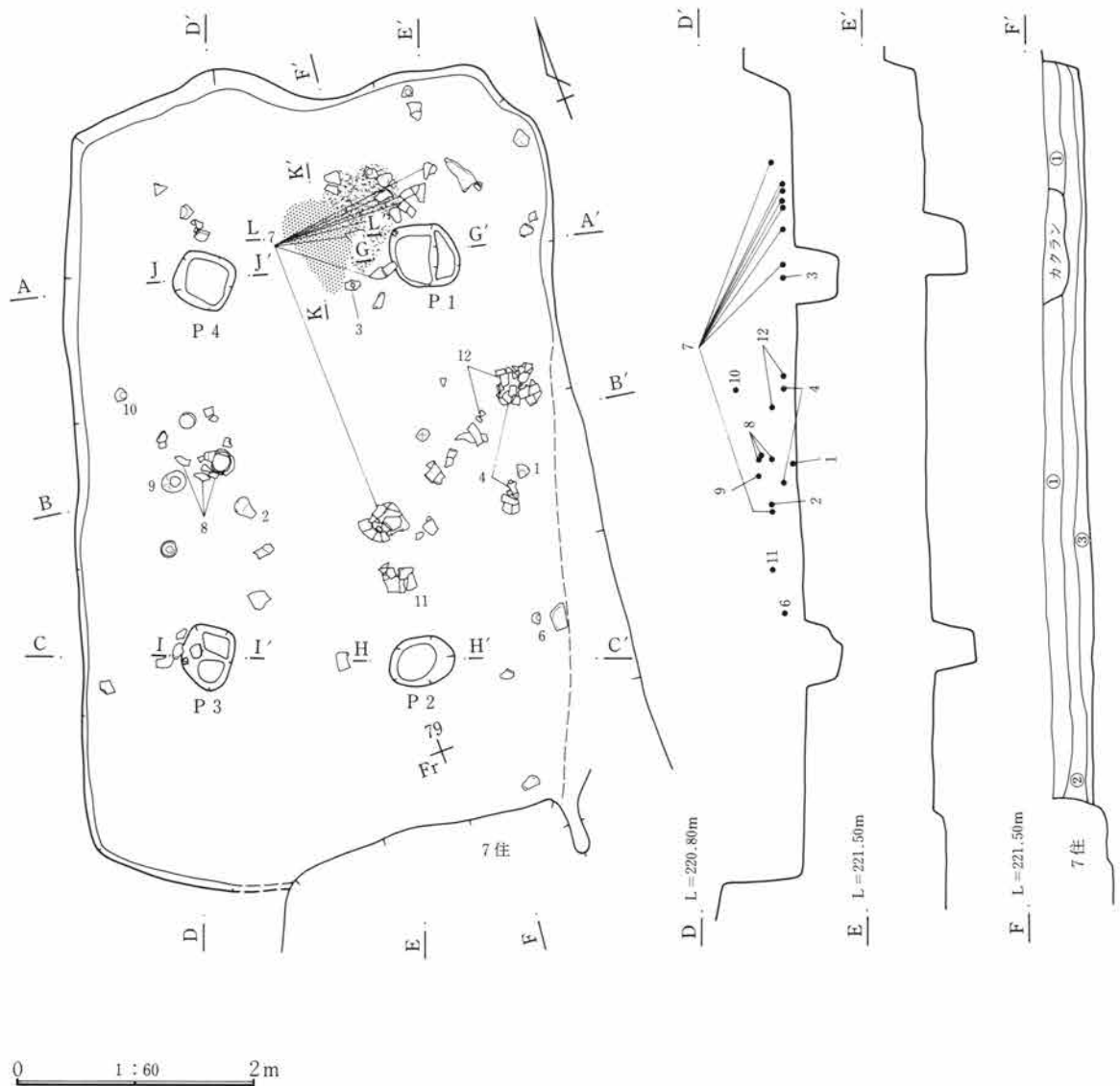
F-26号住居跡 (PL 4・77・78)

位置 Fr-78・79グリッド 主軸方位 N-19°-E 残存壁高 0.48m 重複 F-7・27住に切られる。

規模と形状 長辺6.82m・短辺4.07mの縦長の長方形。北壁がやや崩落し線形が乱れており、住居域を中央のくびれ部と考えると、長辺は約30cmほど短くなる。住居東壁は最近の耕作にともなう攪乱のため、南側1/3ほどが失われている。西壁・南壁残存部はほぼ直進し、線形の乱れは少ない。

床面 地山黄褐色土を掘り込んで床面形成。南側がやや低い。

炉 柱穴間を通る住居主軸上に位置する。北側の2基の柱穴の中央よりもやや北に位置する。床面とほぼ同じ高さに均質な焼土がみられ、明確な掘り込みを持たない。貯蔵穴 なし。周溝 なし。



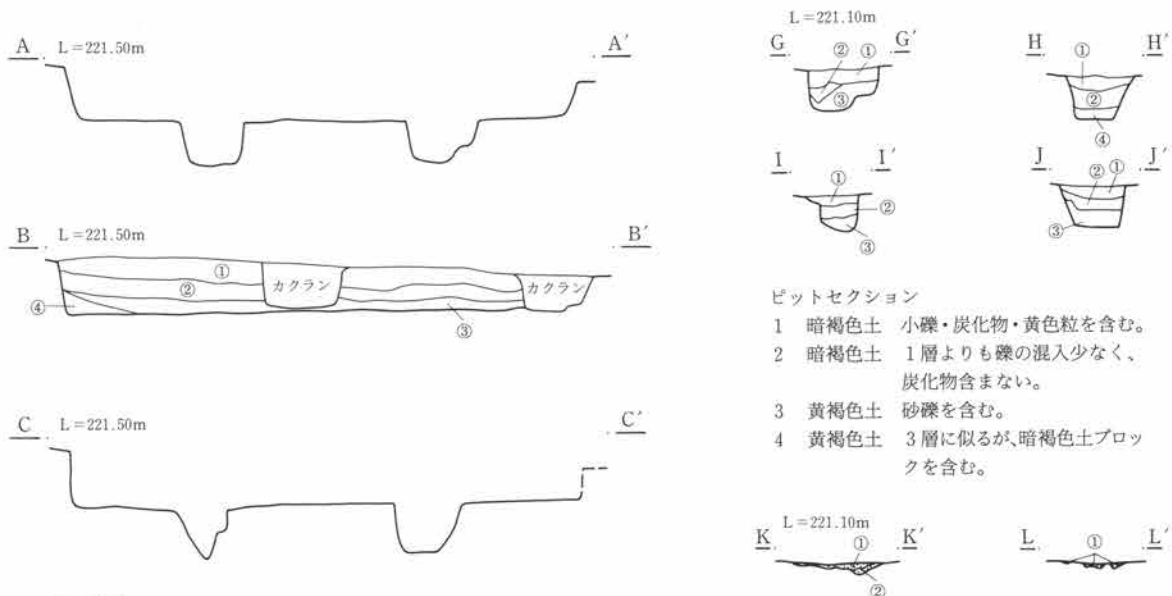
第13図 F-26号住居跡①

柱穴 4基のピット検出。主軸を挟んでほぼ左右対象に位置する。

出土遺物 遺物はさほど多くはないが、比較的大きな破片が床面直上から埋土中位で出土。器種は、高杯(1)、有孔土器(2・3)、小型壺(4・5)、台付甕(6)、壺(7・10)、甕(8・9・11・12)がある。

掘り方 なし。

調査所見 住居の時期は弥生時代後期である。



F-26号

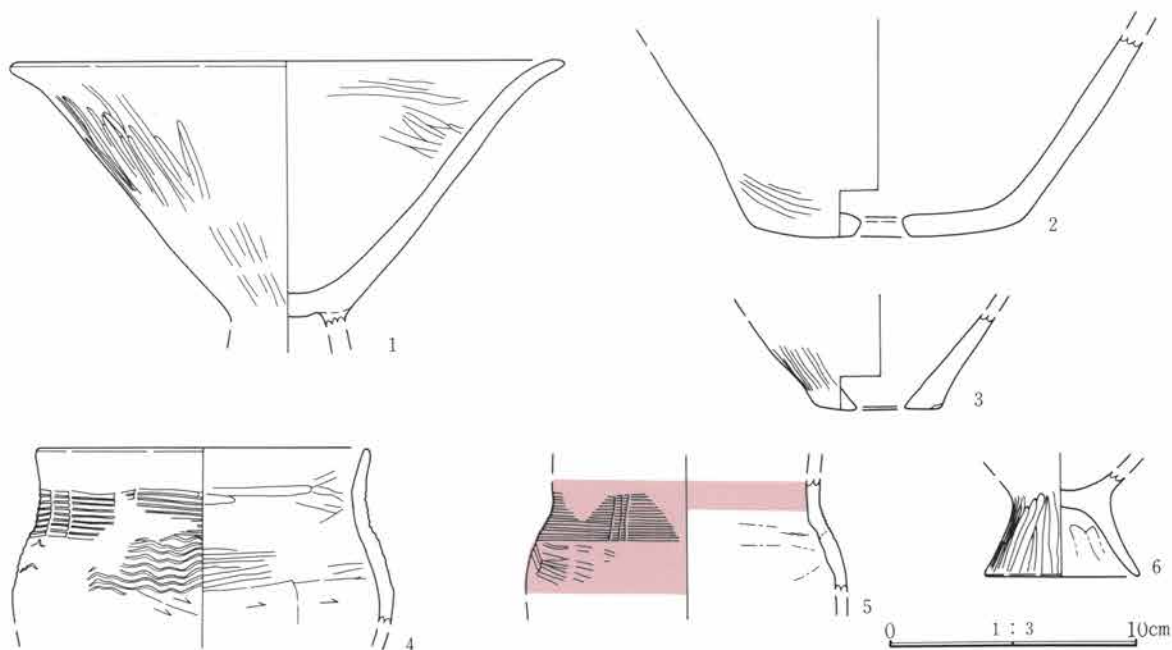
ベルトセクション

- 1 暗褐色土 多量の小礫、白・黄色粒、炭化物含む。しまり良。
- 2 暗褐色土 1層に比べ炭化物の混入多い。白・黄色粒、小礫含む。
- 3 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、炭化物わずかに含む。わずかに粘性持つ。
- 4 褐色土 白・黄色粒、小礫わずかに含む。

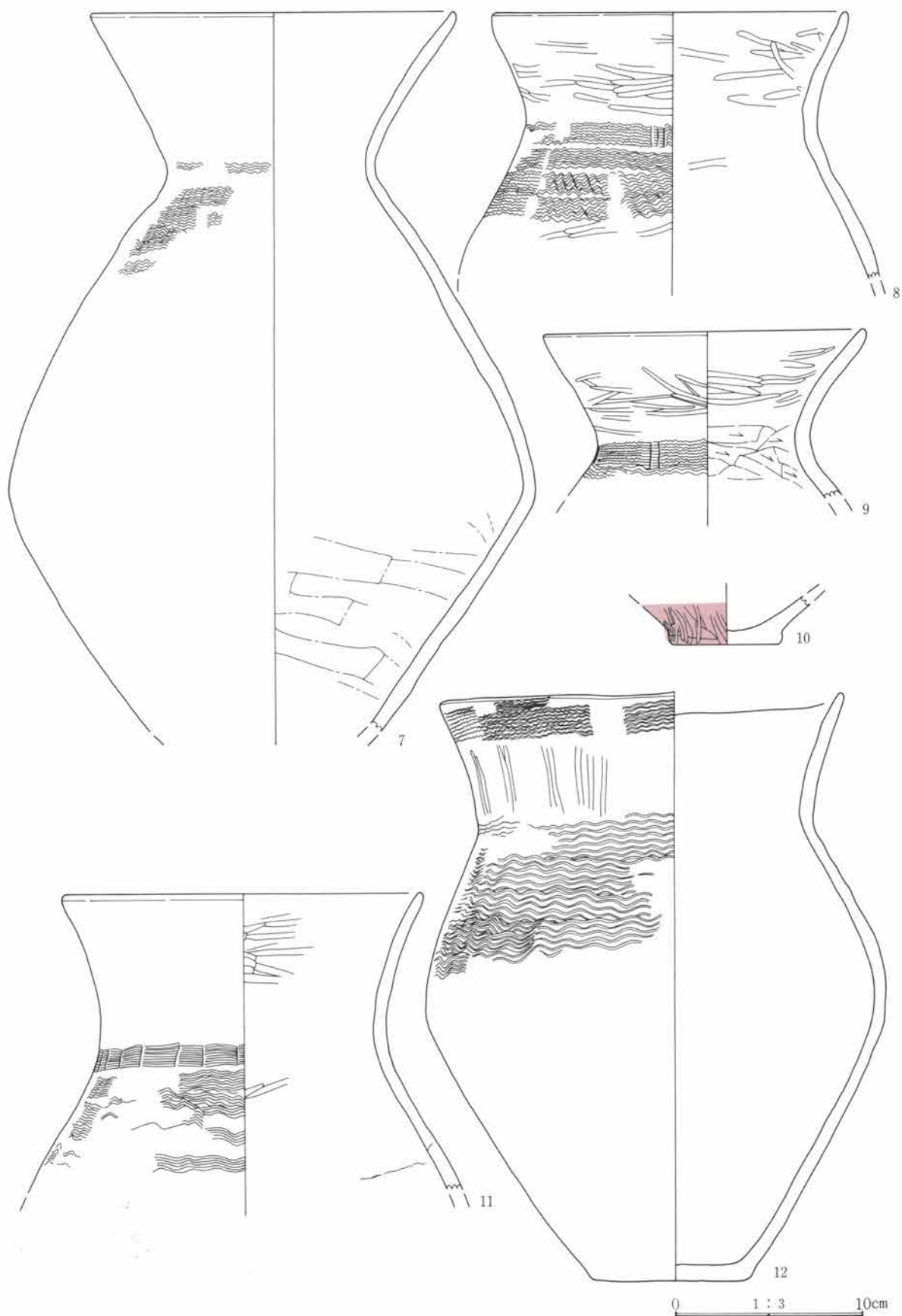
炉セクション

- 1 赤褐色土 しまりの良い焼土層。
- 2 赤褐色土 地山黄褐色土が熱により赤化した部分。

第14図 F-26号住居跡②



第15図 F-26号住居出土遺物実測図①



第16図 F-26号住居出土遺物実測図②

F-26号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	高坏	+6cm 坏部 $\frac{1}{4}$	口 22.0	口縁端部が外反。	外 ヘラ磨き。 内 横ナデ後ヘラ磨き。 内外面ともに器表面かなり摩滅。	①細砂含む ②良好 ③橙色
2	有孔土器	+12cm 胴下位～ 底部	底 10.5		内外面ともに器表面の摩滅激しい。外面ヘラ磨き、内面ナデか。	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色
3	有孔土器	床密着 胴下位～ 底部	底 5.1		内外面ともに器表面の摩滅激しい。外面ヘラ磨き、内面ナデか。	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色
4	小型壺	+3cm 口～胴部 上位 $\frac{1}{2}$	口(13.0)	頸部～口縁にかけてやや外反。	外 口縁部横ナデ。頸部は8本単位2連止めの簾状文だが一部不規則。胴部上位波状文以下ヘラ削り後ヘラ磨き。 内 口縁部ヘラ磨き、胴部ヘラ削り後ヘラ磨き。	①細砂含む ②良好 ③灰褐色
5	小型壺	覆土 口～頸部 $\frac{1}{3}$		頸部は緩やかに外反。	外 全体に赤色塗彩。頸部は8本単位3連止めの簾状文が二段にめぐる。胴部ヘラ磨き 内 口縁部赤色塗彩。胴部横ナデ。	①微砂粒含む ②良好 ③赤色
6	台付甕	床密着 台部 $\frac{3}{4}$	底 (6.0)		外 ヘラ磨き。 内 ナデ。	①微砂粒・角閃石粒子含む ②良好 ③にぶい橙色
7	壺	床密着 口～胴部	口 18.9	頸部～口縁にかけて「く」の字状に外反。胴中位に最大径。	外 口縁部はナデ、頸部～胴上位は波状文以下ヘラ削り後ヘラ磨き。 内 口縁部ナデ後ヘラ磨き、以下横ナデ。 内外面ともに器表面摩滅。	①細砂含む ②良好 ③明黄褐色
8	甕	+13cm 口～胴部 上位	口 18.3	頸部～口縁にかけて「く」の字状に外反。口縁端部は外反気味に直立。	外 口縁部ヘラ磨き。頸部は8本単位の波状文後3連止め。胴上位に波状文、以下ヘラ磨き。 内 口縁部ヘラ磨き、胴部ナデ後ヘラ磨き	①細砂含む ②良好 ③橙色
9	甕	+21cm 口縁部	口 16.7	頸部～口縁にかけて弓状に外反。	外 口縁端部横ナデ、口縁部ヘラ磨き。頸部は9本単位の波状文で、規則的に2連の止めが入る。胴上位波状文。 内 口縁部ヘラ磨き、胴部ヘラ削り。	①細砂含む ②良好 ③浅黄褐色
10	壺	+37cm 底部	底 5.6		外 ヘラ削り後ヘラ磨き。 内 横ナデ。 外面赤色塗彩。	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色
11	甕	+16cm 口～胴部 上位 $\frac{3}{4}$	口(18.6)	頸部～口縁にかけて弓状に外反。	外 頸部は9本単位の簾状文でほぼ規則的に止めが入る。胴上位波状文。 内 口縁・胴部ともヘラ磨き。内外面ともに器表面の摩滅激しい。	①細砂含む ②良好 ③橙色
12	甕	床密着 ほぼ完形	口 20.8 底 8.2 高 30.5	頸部～口縁にかけて「く」の字状に外反。最大径は胴部中位よりやや上にある。	外 口縁上位に波状文、以下はヘラ磨き。 頸部～胴上位に波状文。胴下半はヘラ磨き 内 ヘラ磨きか。	①細砂含む ②良好 ③橙色

F-28号住居跡 (PL 4・77)

位置 Fp・Fq-74グリッド 主軸方位 N-21°-W 残存壁高 0.22m 重複 F-29・30・56住に切られる。
規模と形状 重複する住居および近年の耕作にともなう攪乱によって、周壁のかなりの部分が失われている。
形状は南北方向が長い長方形で、長辺は推定で5.25m、短辺は同じく推定で4.00mである。

床面 地山の小礫混じりの褐色土を掘り込んで床面を形成。若干南側に向かって傾斜している。貼り床・硬質面などはみられない。

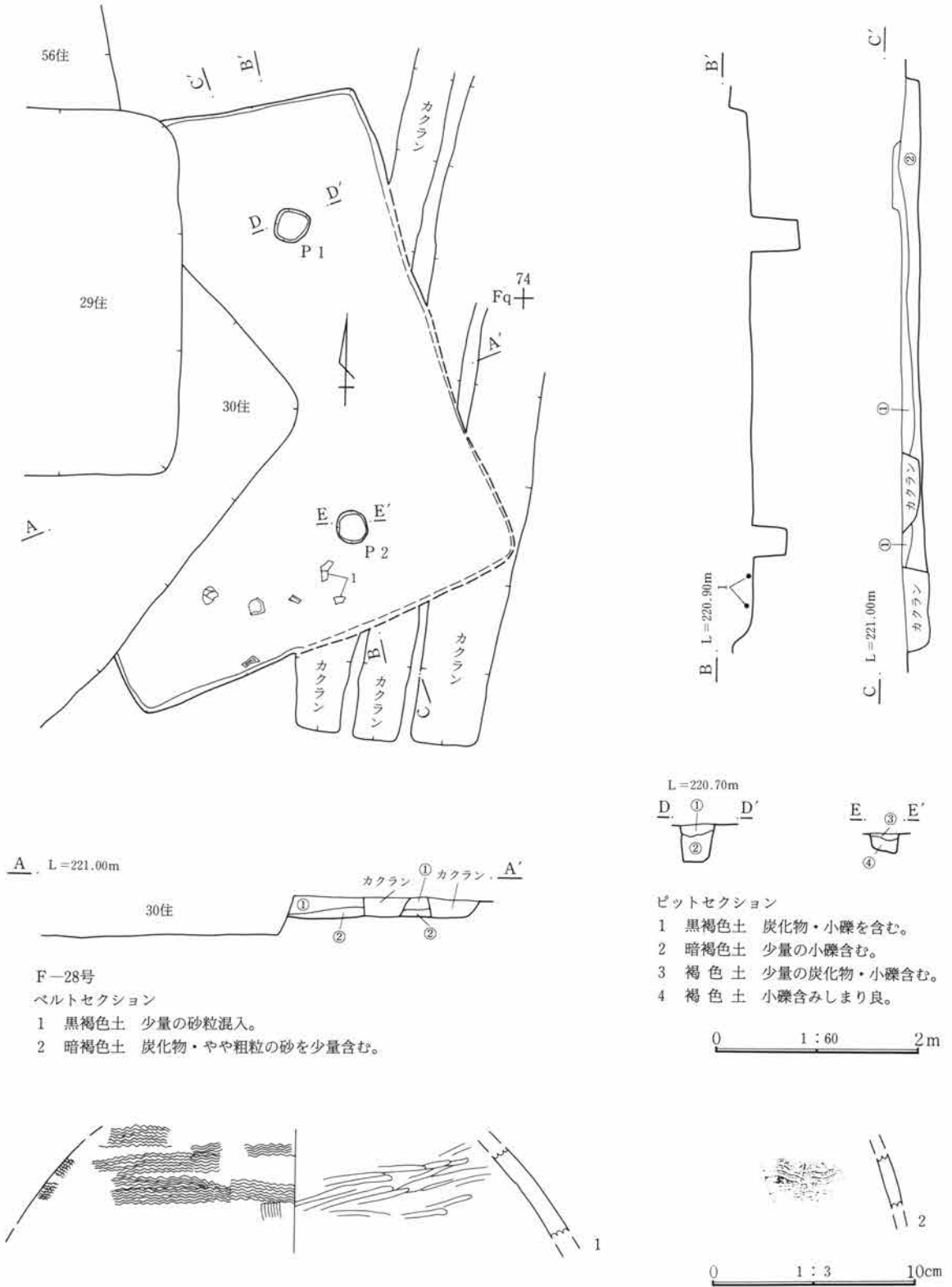
炉 なし。重複する住居によって破壊されたか。 貯蔵穴 なし。 周溝 なし。

第3章 検出された遺構と遺物

柱穴 2基の小ピットを検出。南側のP2はかなり西にずれる。

出土遺物 遺物は非常に少なく、住居の南端から甕(1・2)破片と礫が数点出土したのみ。掘り方 なし。

調査所見 住居の時期は弥生時代後期である。



第17図 F-28号住居跡、出土遺物実測図

F-28号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	甕	+3cm 胴上位			外面胴上位に波状文、以下ヘラ磨き。内面ヘラ磨き。	①砂粒含む ③明黄褐色	②良好
2	甕	覆土 胴上位破片			外面波状文、内面ヘラ磨き。	①微砂粒含む ③にぶい橙色	②良好

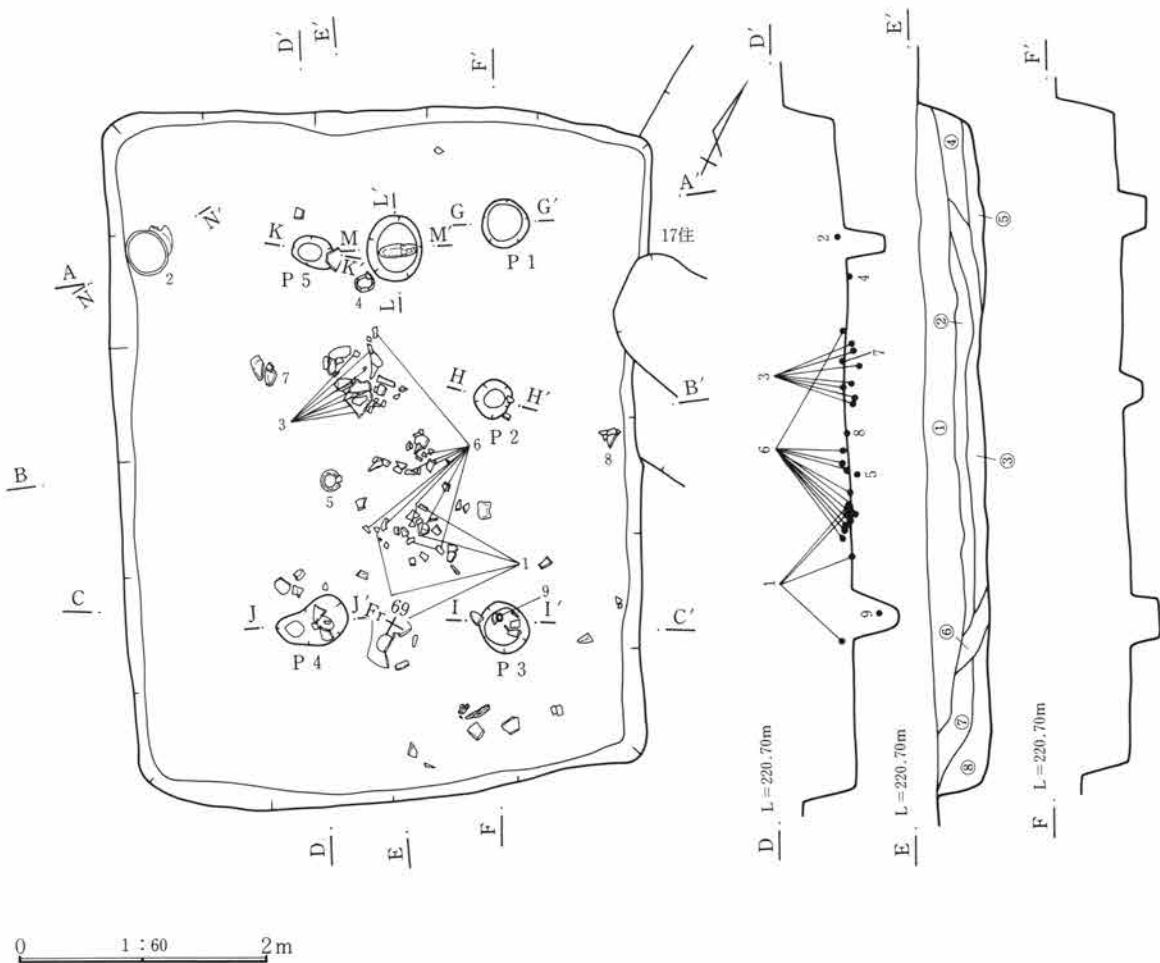
F-34号住居跡 (PL5・78・79)

位置 Fr-68・69グリッド 主軸方位 N-32°-W 残存壁高 0.47m 重複 F-17住に切られる。

規模と形状 長辺5.55m・短辺4.37mの、北西-南東方向が長い長方形。東側に比べ、西側の壁が若干長い。周壁はほぼ直進するが、やや外反する。

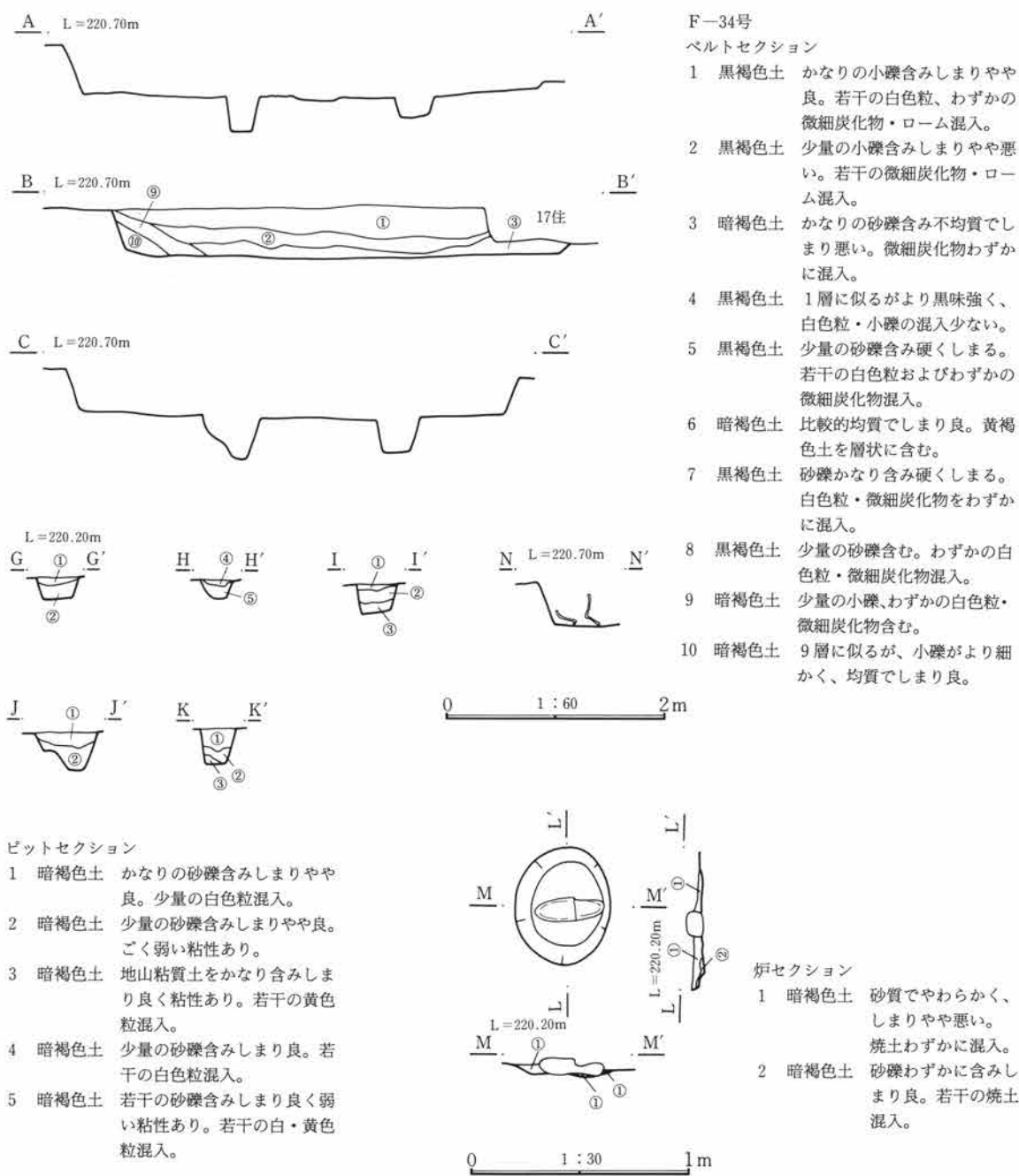
床面 地山黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な床面形成。貼り床や硬質部などはみられなかった。

炉 住居北側の柱穴間に所在。浅い掘り込みと、細長い円礫を利用した炉石を持つが、埋土中に若干の焼土が含まれていただけで、焼土面などはみられなかった。



第18図 F-34号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



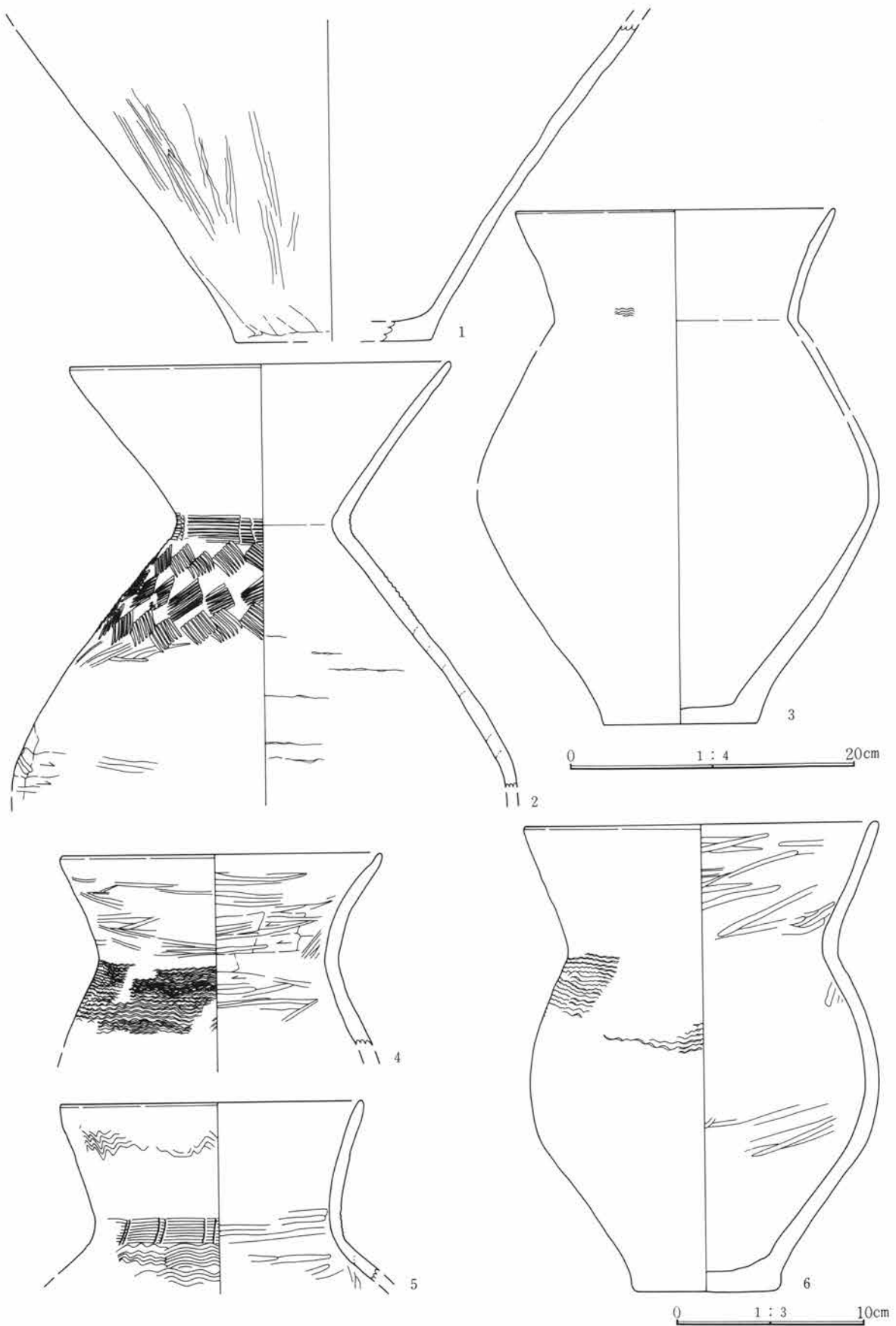
第19図 F-34号住居跡②

貯蔵穴 なし。 周溝 なし。

柱穴 5基の小ピット検出。四隅に近いほぼ対称となる位置に4基と、東側の2基の間、やや北よりに1基所在。この中央の1基は、他に比べやや掘り込みが浅いことから補助的なもので、支柱穴はP1・3～5である。

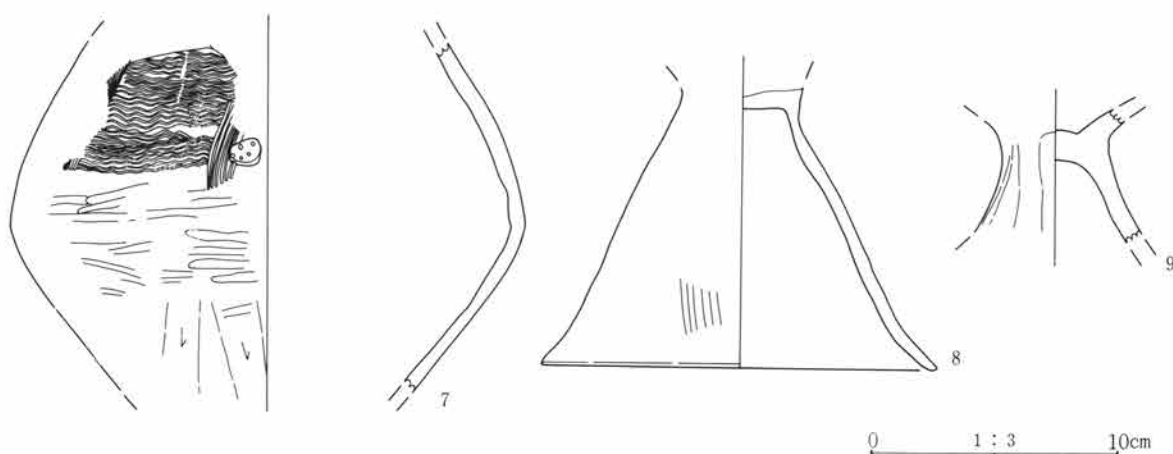
出土遺物 多くは床面近くから出土している。器種は、壺(2・7)、甕(1・3～6)、高坏(8)、台付甕(9)などがある。 掘り方 なし。

調査所見 弥生時代後期



第20図 F-34号住居出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第21図 F-34号住居出土遺物実測図②

F-34号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	甕	床密着 胴下半～ 底部	底(13.8)		外 ヘラ削り後ヘラ磨き。 内 横ナデ。	①均質な細砂含む ②良好 ③浅黄色
2	壺	床密着 口～胴部 上半	口(26.5)	頸部～口縁にかけて「く」 の字状に外反。	外 頸部に8本単位2連止め簾状文。胴上位 かなりくずれた横位の羽状文。以下ヘラ削 り後ヘラ磨き。 内 横ナデ。	①細砂・角閃石微粒 子含む ②良好 ③黄褐色
3	甕	床密着 口～底部 2/3	口(22.4) 底 10.8	頸部～口縁にかけて「く」 の字状に外反。最大径は胴 部中位。	内外面ともに器表面の摩滅激しく、整形技 法不明。外面頸部にわずかに波状文がみら れる。	①細砂・角閃石粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色
4	甕	床密着 口～胴部 上位	口16.6	頸部～口縁にかけて弓状に 外反。	外 口縁部ヘラ磨き、頸部～胴上位波状文 内 口縁・胴部ともにヘラ削り後ヘラ磨き	①細砂含む ②良好 ③明黄褐色
5	甕	床密着 口～胴部 上位	口(15.6)	頸部～口縁にかけて弓状に 外反。	外 口縁部横ナデ、上部に波状文。頸部に 8本単位2連止め簾状文。胴上位に波状文。 内 口縁・胴部ともにヘラ磨き。	①微砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②良好 ③橙色
6	甕	床密着 2/3	口(18.3) 底 7.3 高 24.2	頸部～口縁にかけて弓状に 外反。最大径は胴部中位に あり。	外 口縁部ヘラ削り後ナデか。頸部～胴上 位に波状文、以下ヘラ磨き。 内 口縁～胴部ヘラ磨き。内外面ともに器 表面かなり剥落。	①細砂含む ②良好 ③橙色 ④内面に弱い煤付着
7	(壺)	+10cm 胴部破片			外面胴上位に波状文。ほぼ等間隔の垂下文 が縦に区画。垂下紋の下端付近に上面に刺 突持つボタン状貼付文。以下ヘラ削り後ヘ ラ磨き。内面剥落激しく整形は不明。	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色
8	高坏	床密着 脚部	底15.6	脚端部がわずかに外に開く	外面ヘラ磨き、内面ナデか。器表面の摩滅 激しい。	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄褐色
9	台付甕	ピット3 内 台部			台部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	①微砂粒・角閃石微 粒子含む ②良好 ③にぶい黄褐色

F-39号住居跡 (PL 5・79・80)

位置 Fn・Fo-69グリッド 主軸方位 N-14°-W 残存壁高 0.54m 重複 F-37・38住に切られる。
規模と形状 長辺6.23m・4.89mの南北方向に長い長方形。住居主軸はやや西にふれる。周壁はほぼ直進するが、若干外反する。

床面 地山黄褐色砂礫質土を掘り込んで平坦な床面形成。

炉 住居北壁よりの中央部に所在。2基の柱穴を結ぶ線よりもやや外側に位置する。上幅47cm・長さ48cmの浅い掘り込みを持ち、細長い石英閃緑岩の角礫を炉石として使用している。

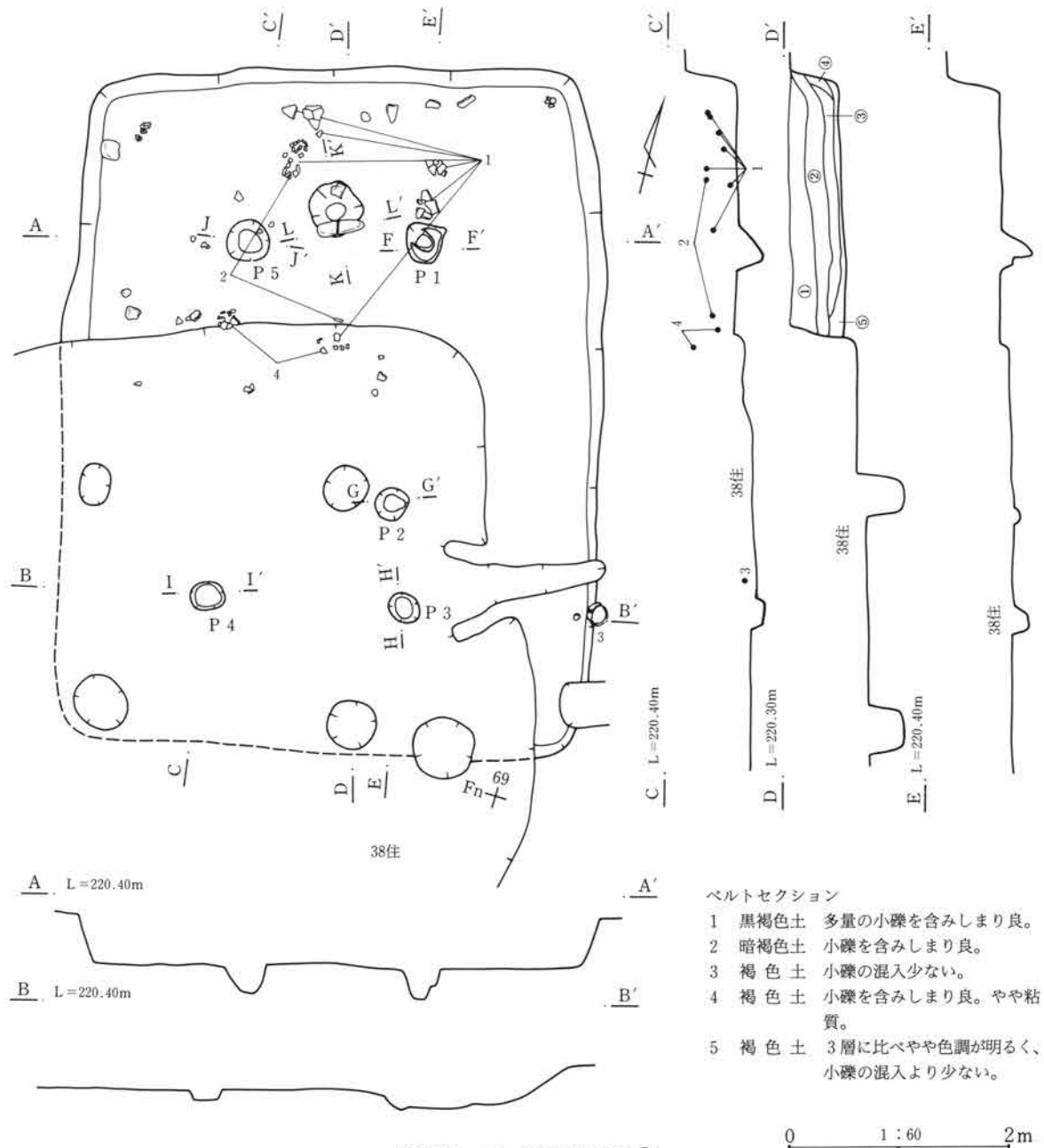
貯蔵穴 なし。 **周溝** なし。

柱穴 5基の小ピットを検出。うちP1・3～5まではほぼ対称となる位置にある。そのためこれらのピットが支柱穴となり、P4は補助的なものである。

出土遺物 住居の大半を重複する他の住居によって破壊されているため、遺物の量は多くない。器種は甕のみである(1～5)。また磨製石鏃の未製品と思われるものが出土している(6)。

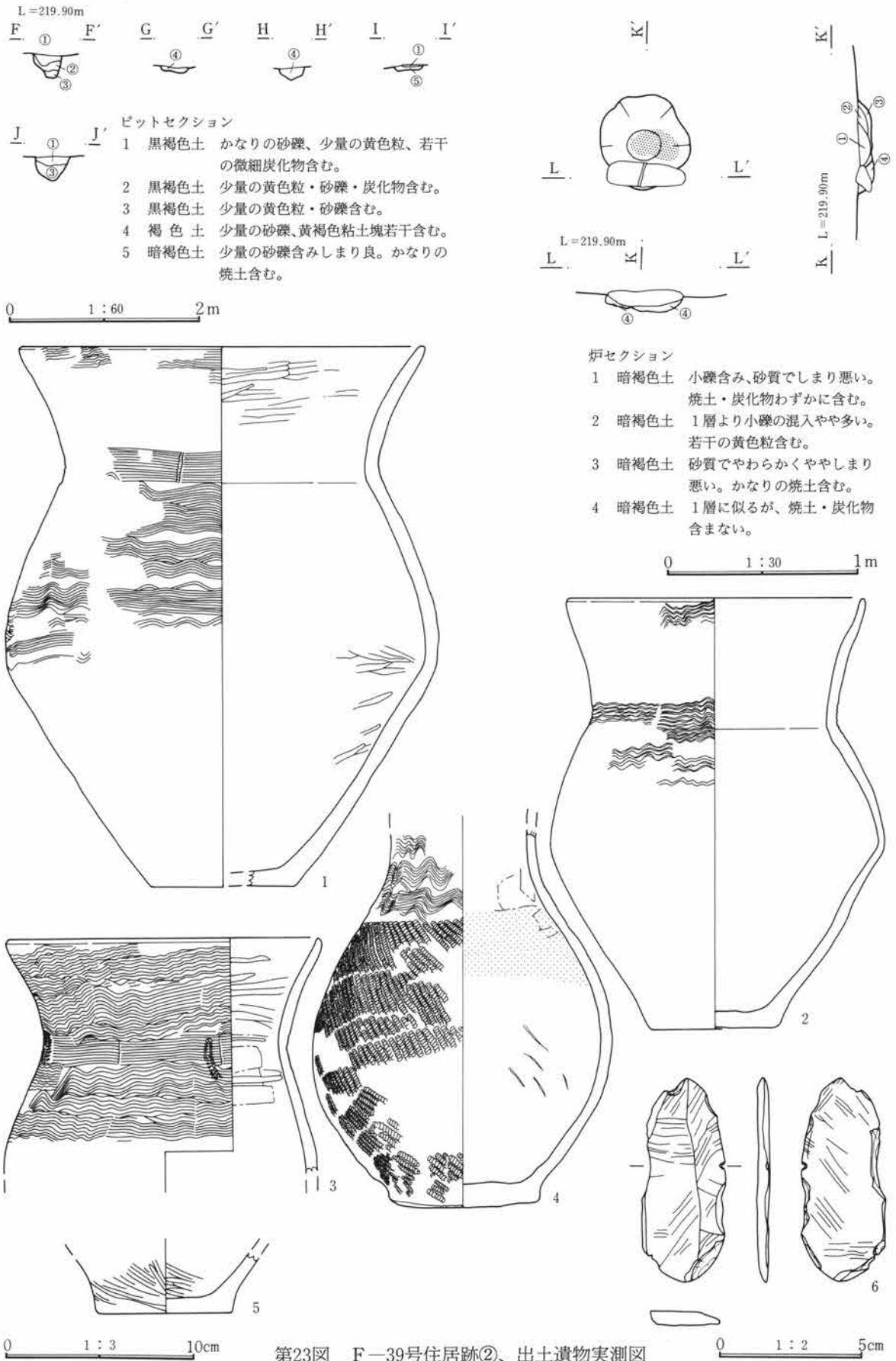
掘り方 なし。

調査所見 弥生時代後期



第22図 F-39号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



第23図 F-39号住居跡②、出土遺物実測図

F-39号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土	②焼成	
						③色調	④備考	
1	甕	床密着 口～底部	口(20.8) 底(7.5) 高27.8	頸部～口縁にかけて「く」 の字状に外反。	外面口縁上位波状文、頸部12本単位2連止の 簾状文、胴部上半波状文、以下ヘラ削り・ ナデ後ヘラ磨き。内面ナデ後ヘラ磨き。	①均質な微砂粒含む	②良好	
2	甕	+23cm 口～底部	口(15.3) 底(6.6) 高22.1	頸部～口縁にかけて緩やか に外反。	外 口縁上位および頸部～胴部上位に波状 文。以下ヘラ削り後ヘラ磨き。 内 器表面の剥落激しく調整不明。	①微砂粒含む	②良好	
3	甕	床密着 口～胴部 上半	口16.1	頸部～口縁にかけて「く」 の字状に外反。	外 口縁・胴上位波状文。頸部12本単位不 規則止め簾状文、次いで波状文、最後に櫛 歯状工具で簾状文上に2連の刺突施す。 内 横ナデ後ヘラ磨き。	①均質な微砂粒含む	②良好	
4	甕	+18cm 頸～底部 1/2	底7.8	頸部～口縁にかけて緩やか に外反。	外 頸部～胴上位横ナデ後波状文。以下R Lの斜縄文。 内 ヘラナデ後横ナデ。	①均質な細砂含む	②良好	
5	甕	38住覆土 底部	底(7.0)		胴部外面ヘラ磨き、内面ナデ後ヘラ磨き。	①微砂粒含む	②良 好	
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
6	磨製石製品	覆土 完形	7.0	2.9	0.45	13.2	珪質準片岩	両面を研磨。右側ほぼ中央に小さなえぐりあり 磨製石鏃の未製品か。

F-43号住居跡 (PL 5・6・80・81)

位置 Fq-72・73グリッド 主軸方位 N-73°-W 残存壁高 0.45m

重複 F-14・23住に切られる。

規模と形状 長辺6.98m・短辺6.67m。長辺方向がやや長い、平面形状はほぼ正方形。住居主軸は大きく西にふれる。西側の柱穴間に炉石を持つ炉が1基あり、北側の柱穴間にも焼土を伴った炉がある。

床面 地山砂礫層を掘り込んで平坦な床面を形成。

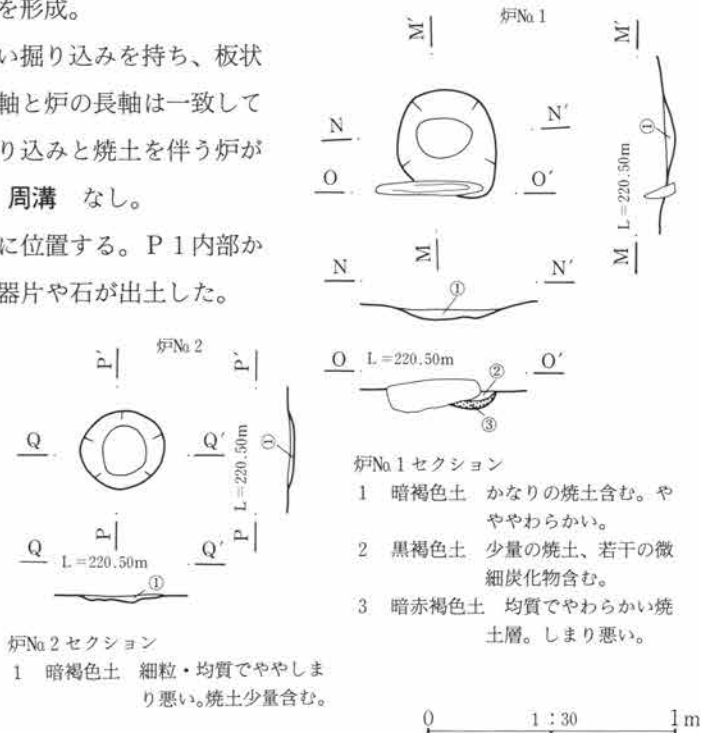
炉 西側の柱穴間に1基所在(炉No.1)。浅い掘り込みを持ち、板状の砂岩を炉石として使用している。住居主軸と炉の長軸は一致していない。また、北側の柱穴間にも、浅い掘り込みと焼土を伴う炉が検出された(炉No.2)。貯蔵穴 なし。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置する。P1内部からは、柱の根固めに使われたとみられる土器片や石が出土した。

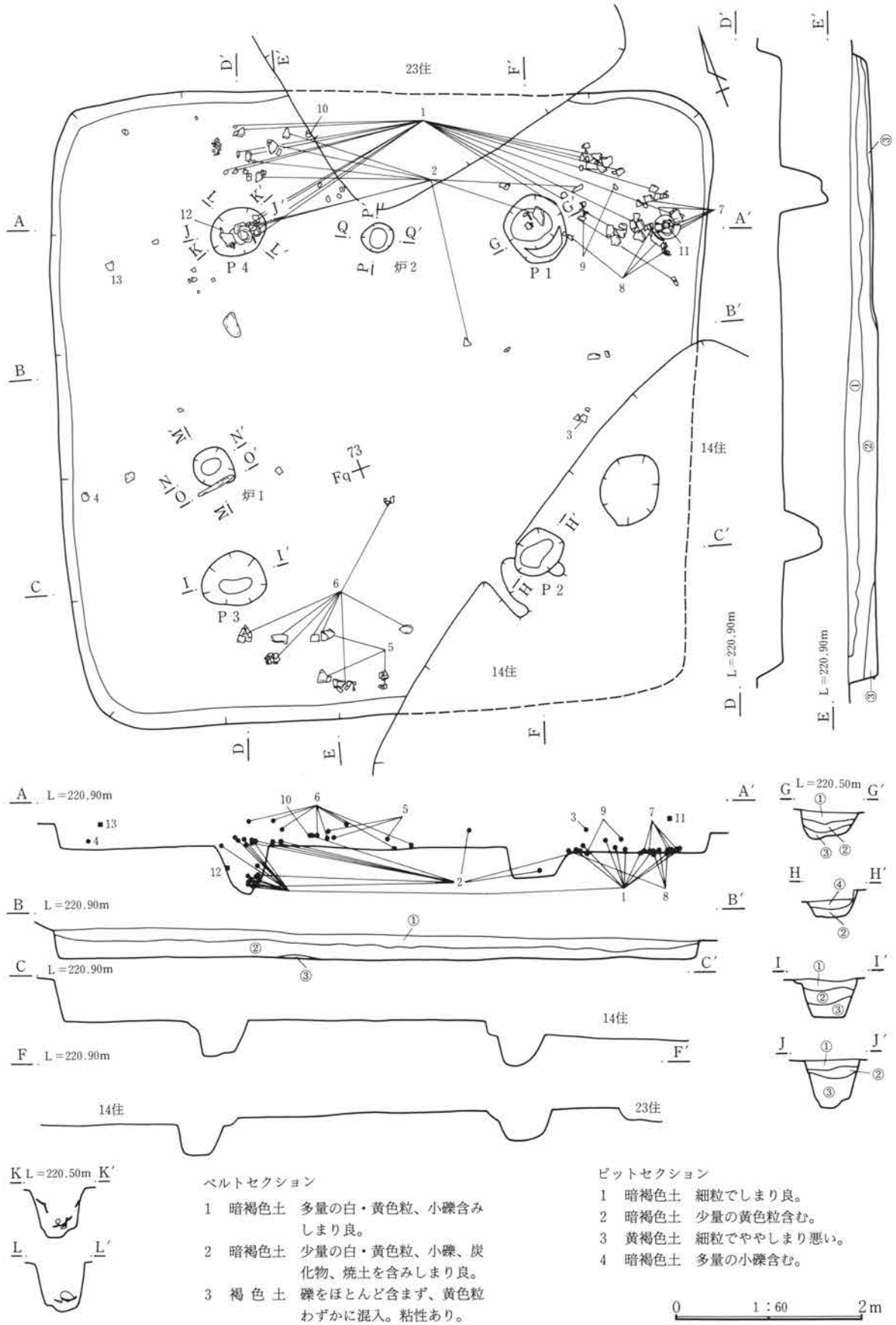
出土遺物 遺物は住居北東隅近くに、やや大型の破片が集中する。器種は、壺(1～3)、鉢(4)、台付甕(5)、甕(6～9)、蓋(10)がある。また石器は、凹石(11)、小型の磨製石斧(12)、打製石斧(13)が出土している。

掘り方 なし。

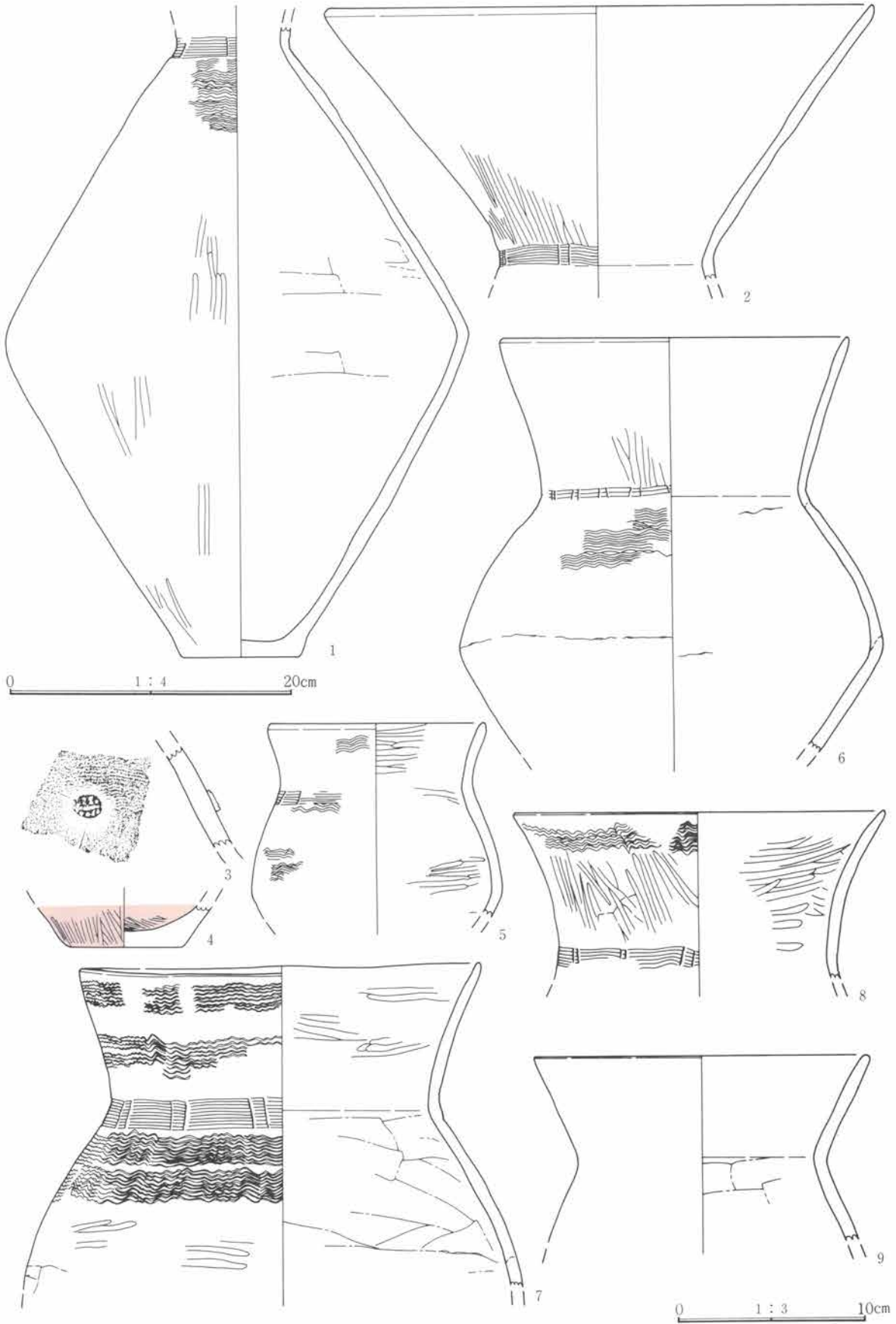
調査所見 弥生時代後期。



第24図 F-43号住居炉

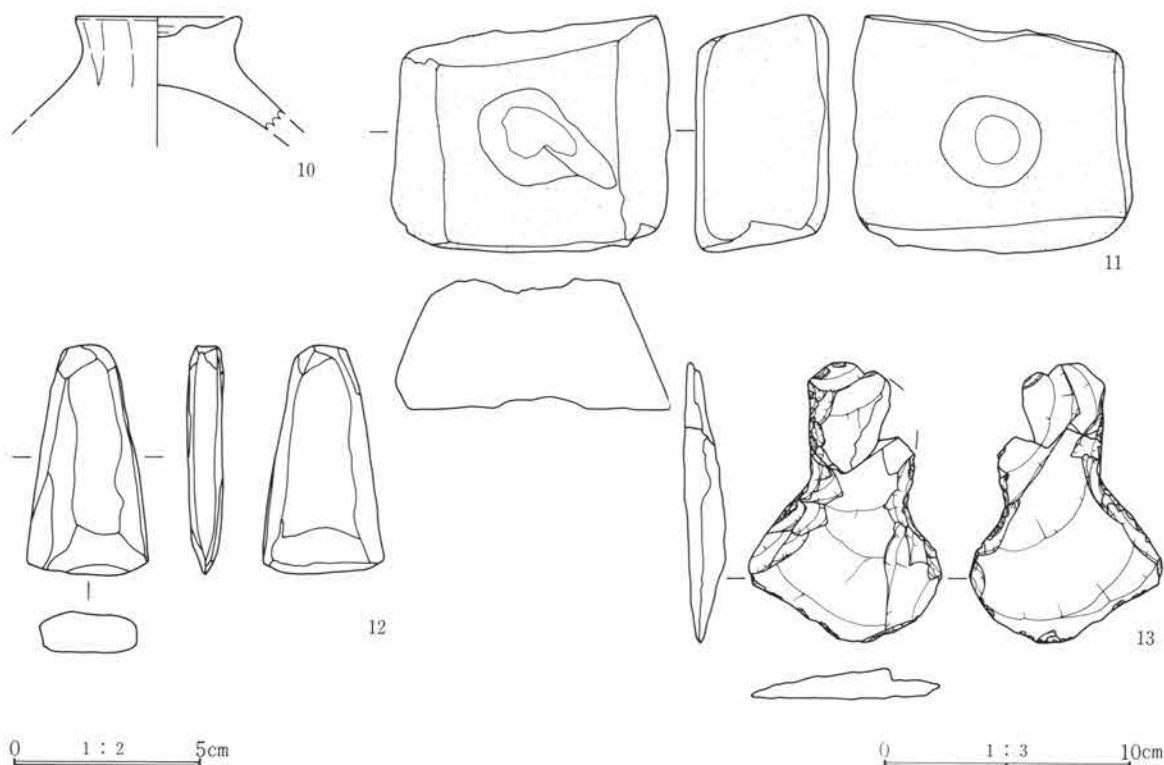


第25図 F-43号住居跡



第26図 F-43号住居出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第27図 F-43号住居出土遺物実測図②

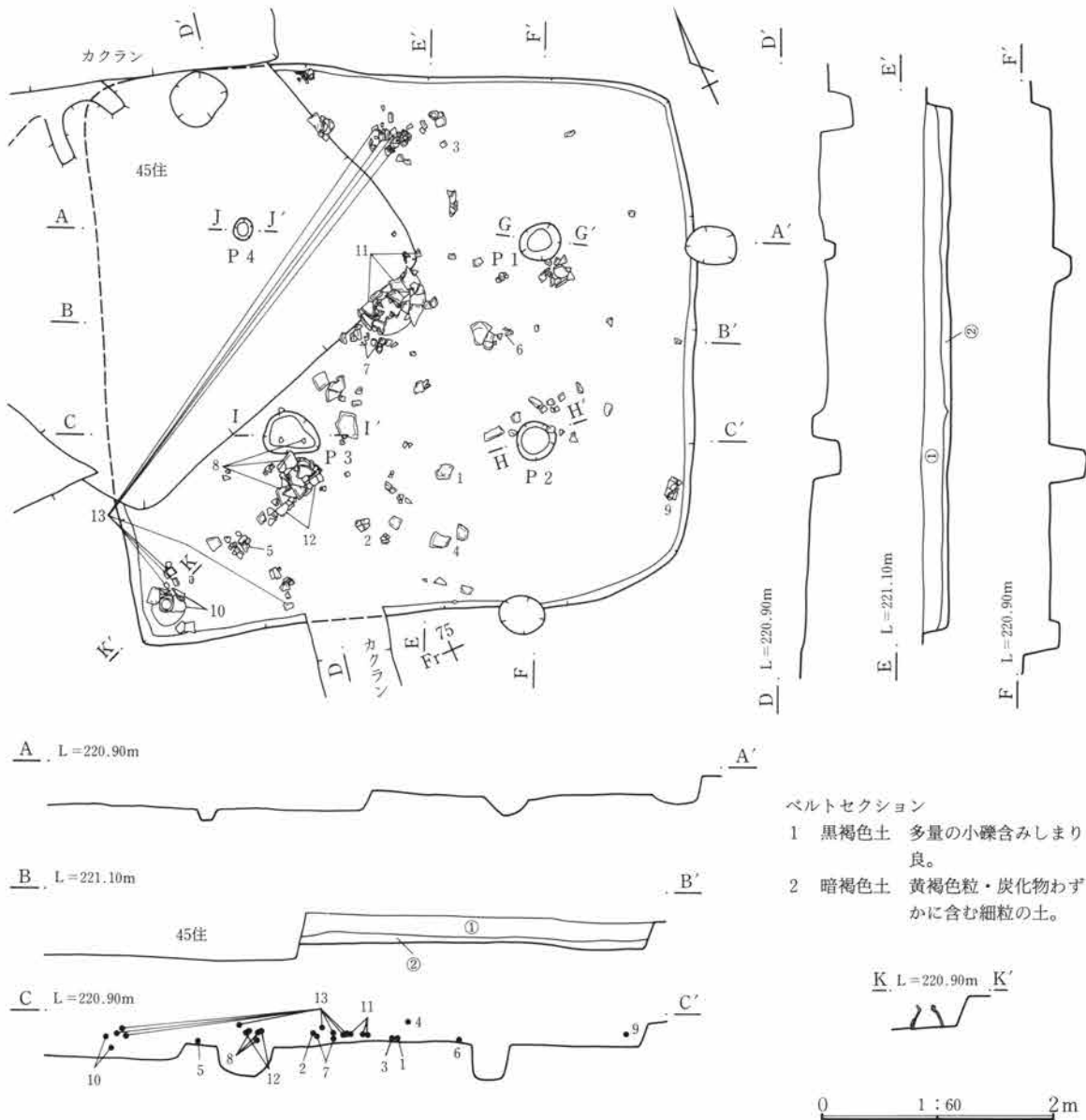
F-43号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	壺	床密着 頸～底部	底 8.1	胴部中位に最大径。	外 頸部に7本単位等間隔止めの簾状文。胴部上位に波状文、以下へら磨き。 内 横ナデ。	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色
2	(壺)	床密着 口縁～頸部	口 28.6		外 口縁部へら磨き、頸部7本単位2連止めの簾状文。 内 ナデ後へら磨き。	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色
3	壺	+19cm 胴部破片			外面上半に波状文、その下位に表面に12個の刺突持つボタン上貼付文。	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色
4	鉢	+5cm 底部	底 (6.0)		内外面へら磨き、赤色塗彩。	①微砂粒含む ②良好 ③赤色
5	台付甕	+8cm 口～胴部 上位 $\frac{2}{3}$	口(11.1)	頸部～口縁にかけて緩やかに外反。	外 口縁部上位に波状文、頸部にほぼ等間隔に止めのはいる簾状文(単位不明)。胴部上半に波状文。 内 ナデ後へら磨き。	①微砂粒・角閃石微粒子含む ②良好 ③褐灰色
6	甕	床密着 口～胴部 中位 $\frac{3}{4}$	口(18.3)	頸部～口縁にかけ「く」の字状に外反。胴部上半に最大径。	外 口縁部ナデ後へら磨き。頸部8本単位2連止めの簾状文。胴部上位に波状文。 内 横ナデ。	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色
7	甕	床密着 口～胴部 上半	口 20.8	頸部～口縁にかけ「く」の字状に外反。	外 口縁部二段の波状文。頸部9本単位2連止めの簾状文。胴部上位波状文、以下へら削り後へら磨き。 内 口縁部へら磨き、胴部横ナデ。	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色
8	甕	床密着 口縁部	口 19.2	口縁部は緩やかに外反。	外 口縁部に波状文、以下へら削り後へら磨き。頸部2連止め簾状文(単位不明)。 内 横ナデ後へら磨き。	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色
9	甕	床密着 口～胴部 上位 $\frac{2}{3}$	口(17.6)	頸部～口縁にかけ「く」の字状に外反。	外 器表面かなり摩滅し、調整不明。 内 横ナデ。	①細砂含む ②良好 ③灰褐色
10	蓋	+10cm つまみ部	つまみ径 4.3		外面刷毛目、内面ナデ後へら磨き。つまみ上面には指頭圧痕が見られる。	①微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
11	くぼみ石	+35cm 完形	9.4	11.1	5.3	721.2	凝灰質砂岩	砂岩の角礫の表裏に半径3.5cm程の凹み各1個あり。
12	磨製石斧	覆土 完形	6.05	3.25	0.95	35.4	凝灰岩?	小型の磨製石斧。刃部が広がるバチ形。全面を丁寧に研磨してある。
13	打製石斧	+16cm ほぼ完形	10.9	7.7	0.95	100.4	珪質頁岩	剥片素材。両側が内湾するバチ形で湾曲部以外はほとんど未調整。

F-44号住居跡 (PL 6・81~83)

位置 Fr-74・75グリッド 主軸方位 N-64°-W 残存壁高 0.29m 重複 F-18・45住に切られる。
 規模と形状 長辺5.09m・短辺4.69mと北西-南東方向が若干長いが、平面形状は正方形に近い。南東側に比べ、北西側がやや開いている。周壁はほぼ直進し、崩落などによる線形の乱れは少ない。
 床面 地山砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。



第28図 F-44号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物

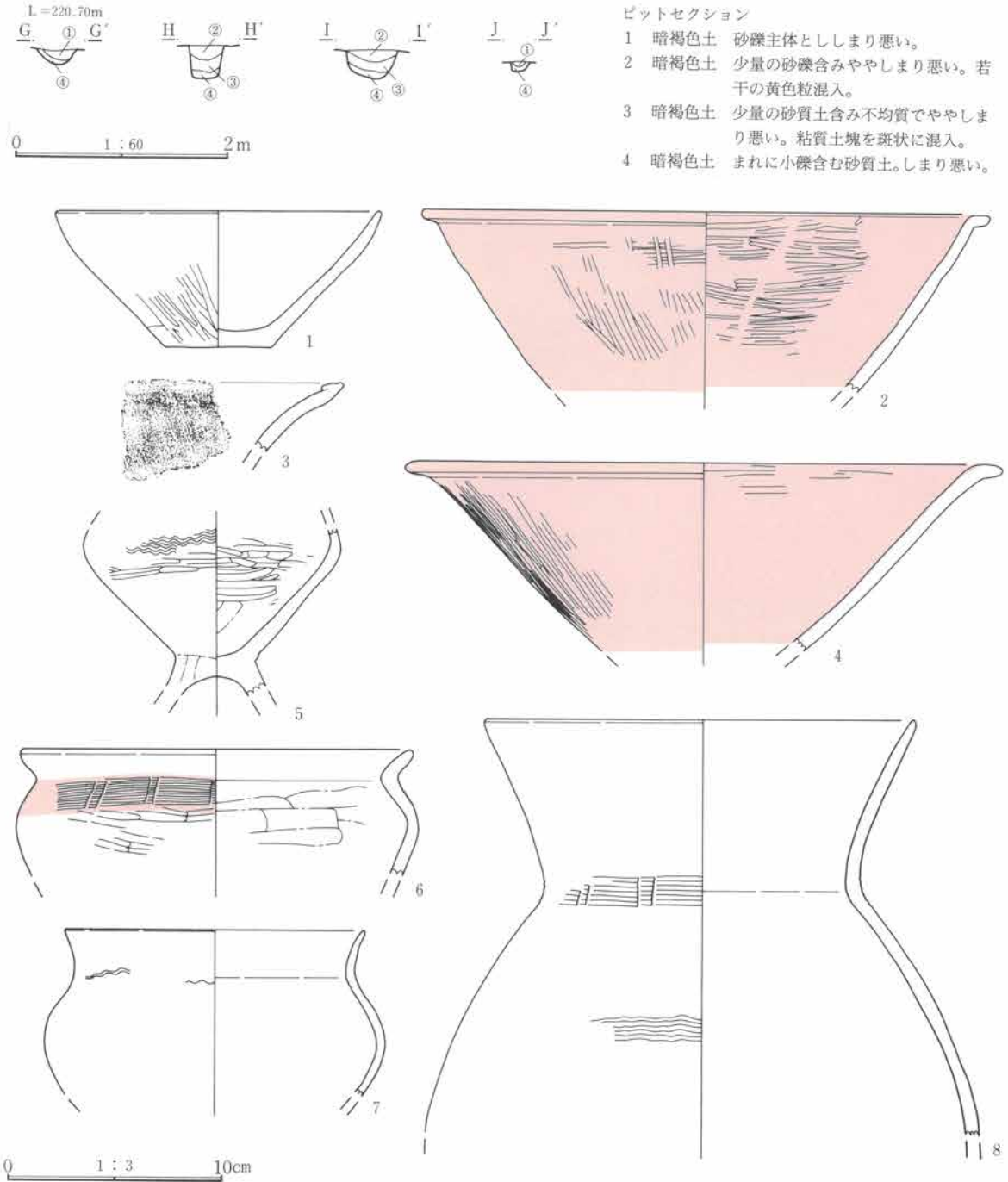
炉 なし。重複する他の住居によって破壊されたものと考えられる。貯蔵穴 なし。周溝 なし。

柱穴 支柱穴とみられる4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するが、P1だけはやや外側にずれる。

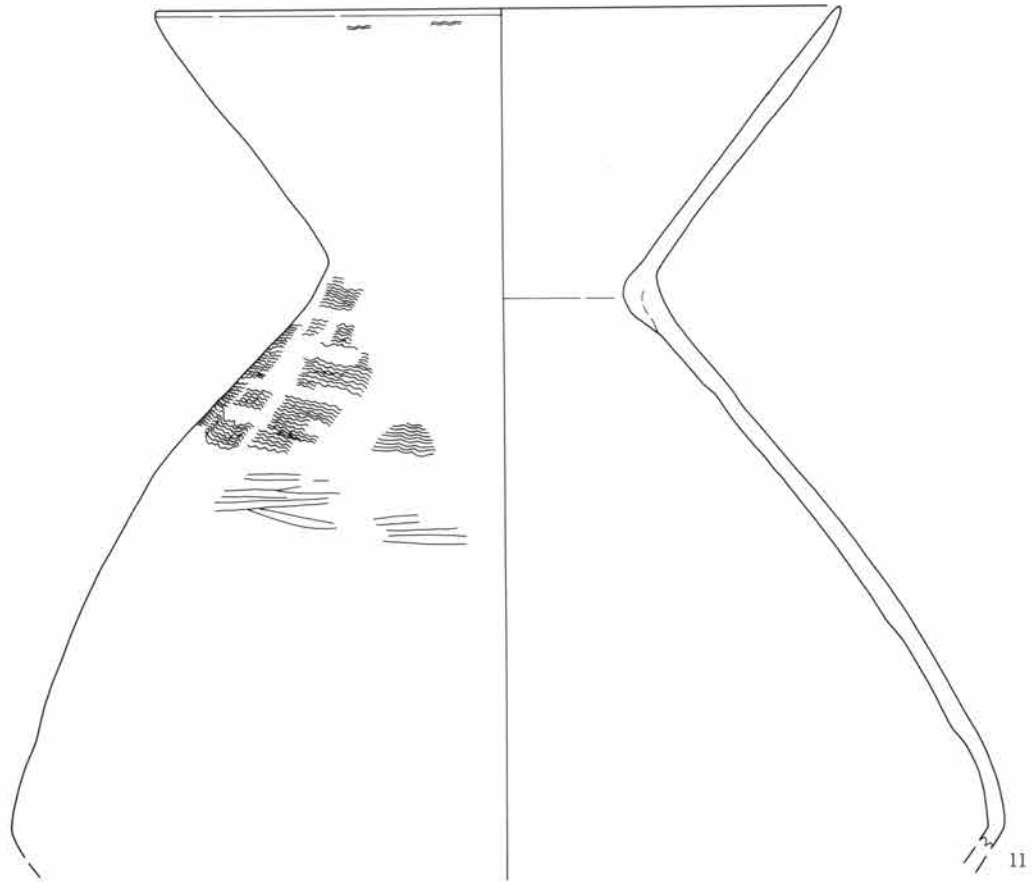
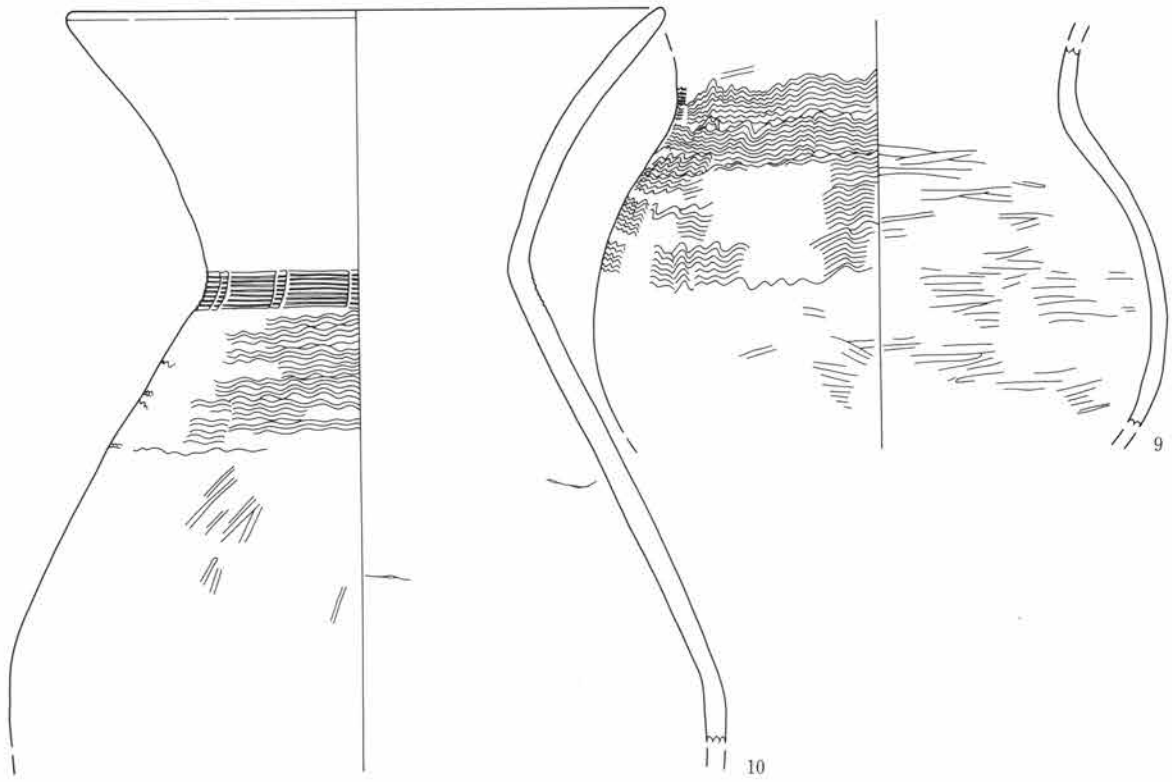
出土遺物 遺物量は比較的多い。大半は床面より若干高い位置で出土している。器種は、鉢(1)、高坏(2~4)、台付甕(5~7)、壺(10・11)、甕(8・9・12・13)などがあり、高坏・台付甕には、両面を赤色に塗られたものが含まれている。

掘り方 なし。

調査所見 弥生時代後期。

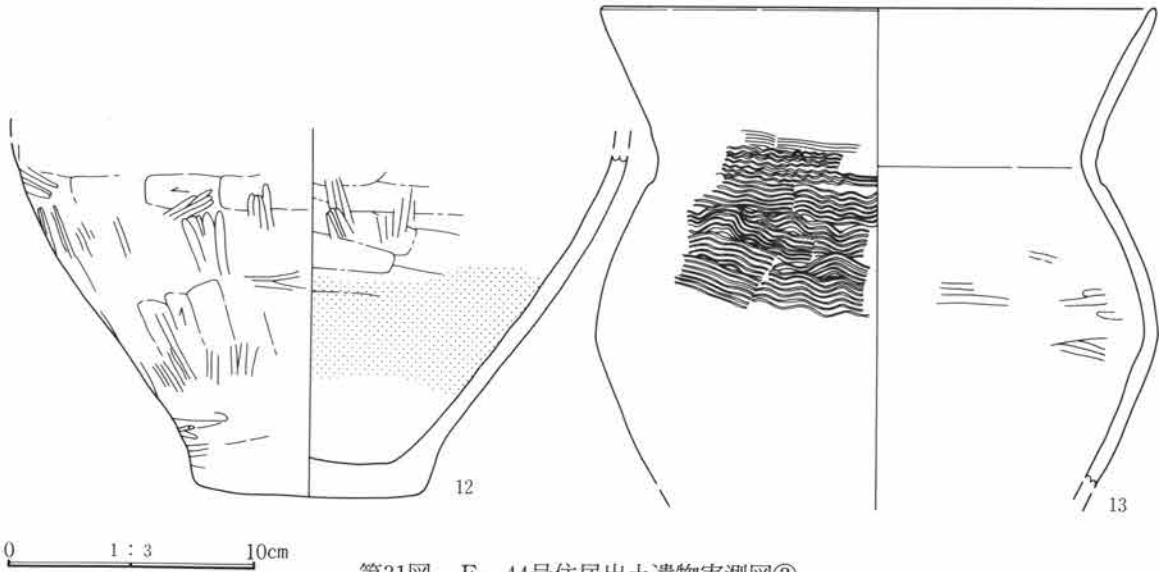


第29図 F-44号住居跡②、出土遺物実測図①



0 1 : 3 10cm

第30図 F-44号住居出土遺物実測図②



第31図 F-44号住居出土遺物実測図③

F-44号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	鉢	+5cm 1/5	口(14.6) 底 5.0 高 6.2	口縁わずかに直立。	外 口縁横ナデ、体部ヘラ削り後ヘラ磨き 内 横ナデ。	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色
2	高坏	+9cm 坏部1/6	口(26.0)	坏部は内湾気味に外傾し、 口縁で強く外側に屈曲。	内外面ともにヘラ磨き・赤色塗彩。	①均質な細砂含む ②良好 ③赤色
3	高坏	+5cm 口縁破片	口(17.6)	口縁は外反し、端部で内側 に短く折り返し。	外面口縁端部横位のハケ目、以下縦位のハ ケ目。内面口縁端部に浅く細い沈線。内外 面赤色塗彩。	①均質な細砂含む ②良好 ③赤褐色
4	高坏	+19cm 坏部1/4	口(26.0)	坏部は直線的に外傾し、口 縁で外反。	内外面ともにヘラ磨き・赤色塗彩。内面は 器表面の剝落激しい。	①均質な細砂含む ②良好 ③赤褐色
5	台付甕	+3cm 胴部下半 1/5			外 胴部上位に波状文、以下ヘラ磨き。台 部ヘラ削り。 内 胴部ナデ後ヘラ磨き、台部ナデ。	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色
6	台付甕	+3cm 口～胴部 上位1/5	口(17.8)	口縁は、頸部で「く」の字 状に屈曲して外反。	外 口縁部横ナデ、頸部10本単位2連止めの 簾状文。胴部ヘラ磨き。 内 横ナデ。	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色
7	台付甕	+3cm 口～胴部 上位1/5	口(13.7)	頸部～口縁にかけ弓状に外 反。	外面頸部～胴部上位に波状文。内外面とも に器表面の剝落激しく、調整不明。	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色
8	甕	+6cm 口～胴部 上位	口(19.8)	頸部～口縁にかけ「く」の 字状に外反。	外面頸部に6本単位2連止めの簾状文、胴部 上位に波状文。内外面ともに器表面の摩滅 激しい。	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色
9	甕	+6cm 頸～胴部 上半1/5			外 口縁部ヘラ磨き、頸部～胴部上位波状 文。胴部以下ヘラ磨き。 内 ナデ後ヘラ磨き。	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色
10	壺	床密着 口～胴部 上半	口(23.4)	頸部～口縁にかけ「く」の 字状に外反。	外 頸部8本単位2連止めの簾状文。胴部上 位波状文。以下ヘラ磨き。 内 接合痕あり。器表面の摩滅激しい。	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色
11	壺	+5cm 口～胴部 上半1/3	口(27.1)	頸部で「く」の字状に屈曲	外 口縁部上位および胴部上位に波状文、 他はヘラ磨き。 内 横ナデ。	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色
12	甕	+6cm 胴下半～ 底部1/5	底9.0		外 ヘラ削り後ヘラ磨き。 内 横ナデ後ヘラ磨き。	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色 ④内面 下部に帯状の煤付着
13	甕	+5cm 口～胴部 上半1/5	口(21.9)	頸部～口縁にかけ「く」の 字状に外反。	外 頸部にハケ目状文。胴部上位に波状文 以下ヘラ削り。波状文がハケ目状文切る。 内 口縁部横ナデ、胴部横ナデ後ヘラ磨き	①細砂含む ②良好 ③橙色

F-53号住居跡 (PL 6・83)

位置 Fq-76・77グリッド 主軸方位 N-39°-W 残存壁高 0.44m

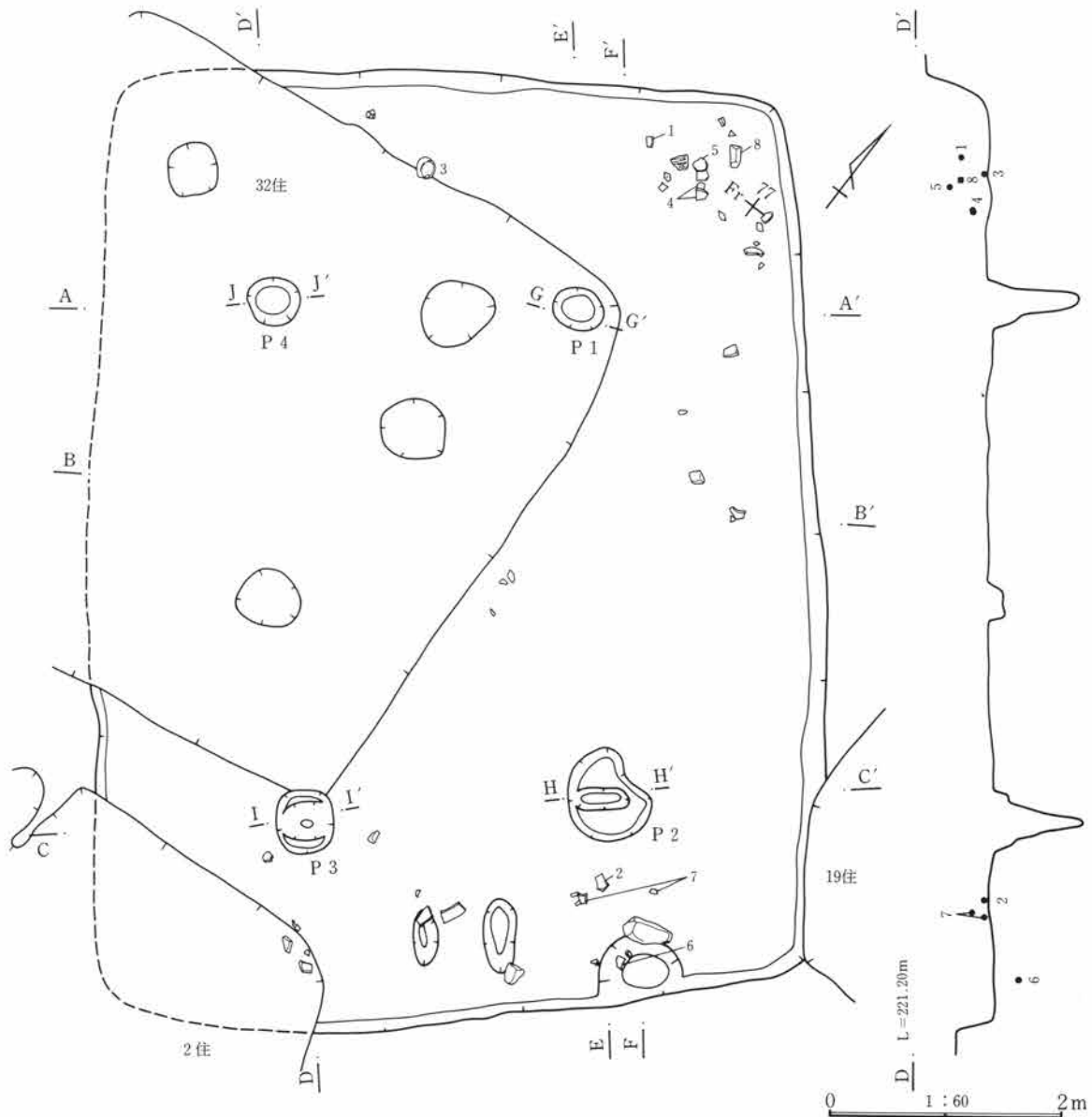
重複 F-2・19・32住に切られる。

規模と形状 長辺8.12m・短辺6.32mの長方形で、大型の住居である。主軸はかなり西にふれる。重複する住居によって南西側の壁は大部分が失われているが、残存する壁はほぼ直進し、線形の乱れは少ない。

床面 浅く不規則な掘り方に、砂礫を含んだ暗褐色土を埋めて床面を形成。貼り床や硬質部はみられない。

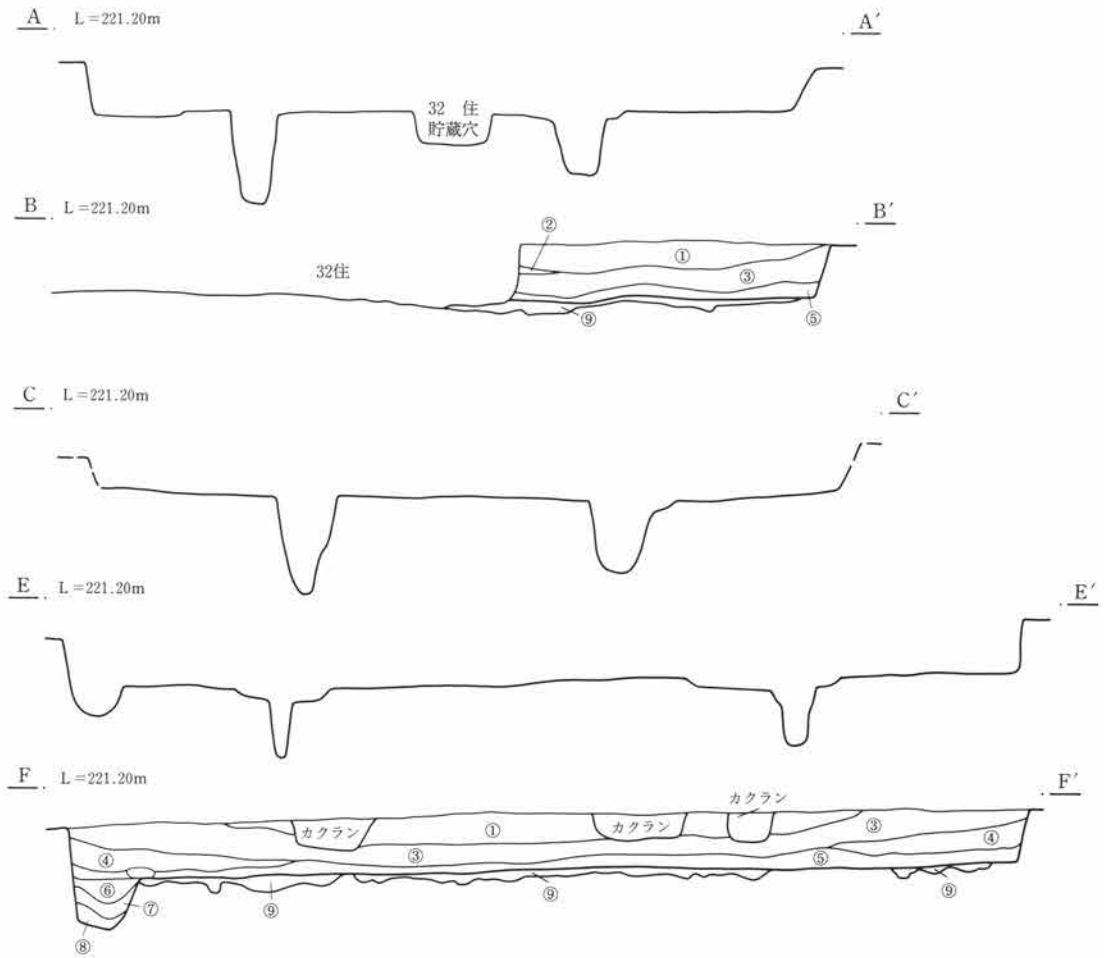
炉 なし。おそらく重複する他の住居によって破壊されたものと思われる。貯蔵穴 住居南東壁際の、中央よりも東よりに所在。周壁にはりつくような形で作られている。周溝 なし。

柱穴 支柱穴と思われる4基の小ピット検出。ほぼ対称となる位置に整然と並ぶ。南東側の2基は、その形状から、柱材として板材が使用されていたようである。また、南東壁の中央部付近に、縦長の小ピットが2基対になって検出された。入り口施設にともなうものであろう。



第32図 F-53号住居跡①

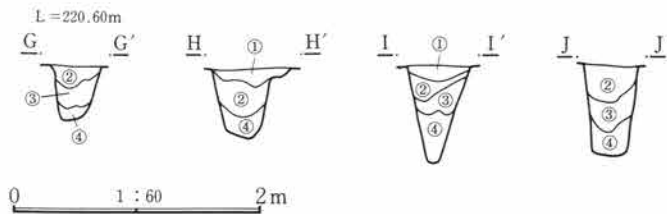
第3章 検出された遺構と遺物



ベルトセクション

- 1 黒褐色土 かなりの小礫含みしまりやや良。若干の白色粒・炭化物、少量の黄色粒混入。
- 2 黒褐色土 1層に比べ小礫の混入少なく黒味強い。若干の黄色粒含む。
- 3 黒褐色土 多量の小礫含み砂質でややしまり悪い。
- 4 黒褐色土 細粒の砂礫を少量含みややしまり良。若干の炭化物混入。

- 5 暗褐色土 砂質土・砂礫をかなり含みややしまり悪い。若干の黄色粒・炭化物混入。
- 6 黒褐色土 少量の小礫含みしまり悪い。若干の炭化物混入。貯蔵穴埋土。
- 7 暗褐色土 細粒の砂礫含みしまり悪い。若干の炭化物・黄色粒混入。貯蔵穴埋土。
- 8 暗褐色土 細粒の砂礫を含みしまり悪い。貯蔵穴埋土。
- 9 黒褐色土 多量の小礫含み、少量の白・黄色粒混入。



ピットセクション

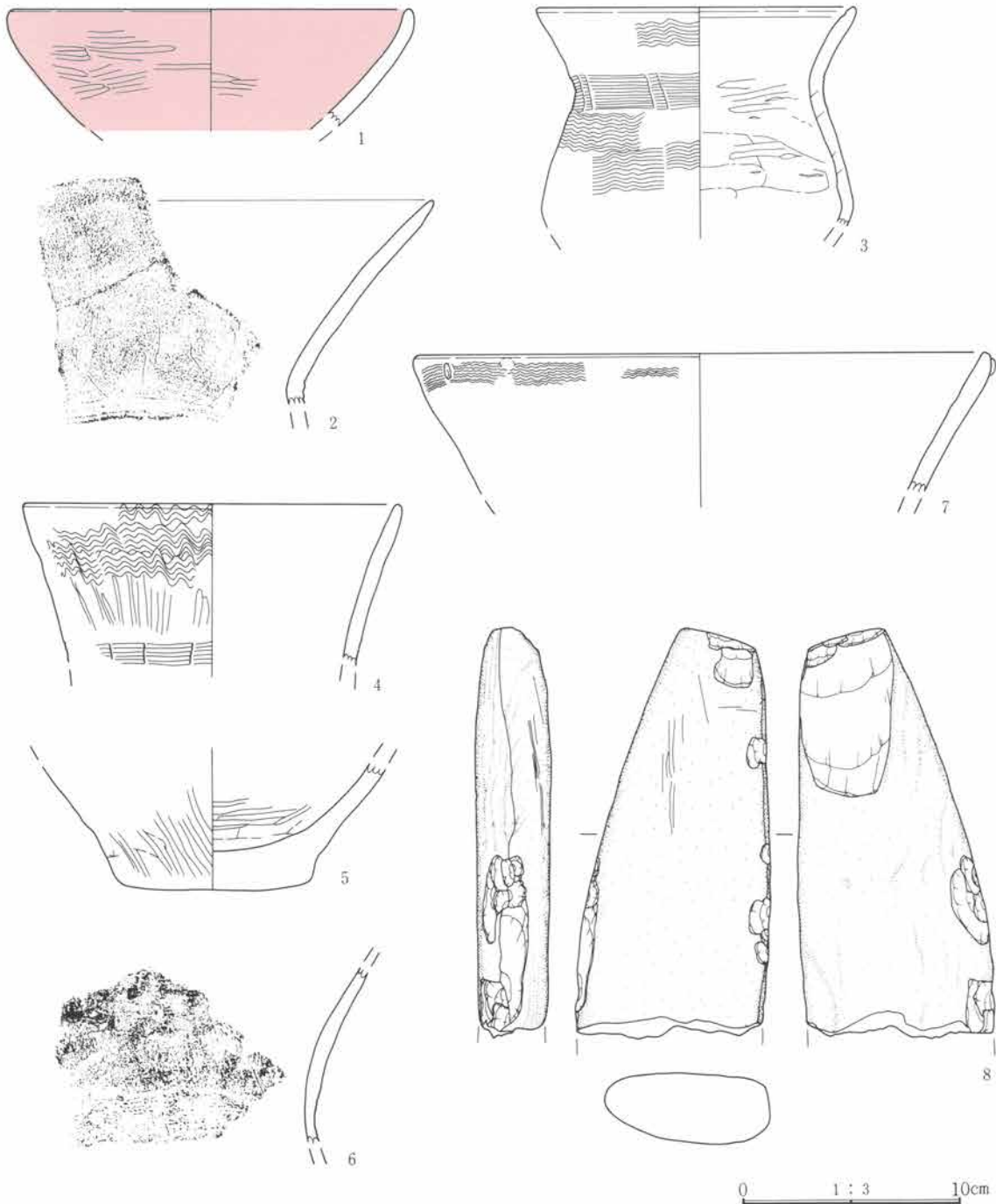
- 1 暗褐色土 かなりの砂礫含みしまりやや悪い。若干の炭化物・白色粒混入。
- 2 暗褐色土 若干の砂礫含みしまりやや良。少量の炭化物、若干の粘質土塊混入。
- 3 暗褐色土 2層に似るが、若干の黄褐色土塊含む。
- 4 褐色土 砂質でやわらかく比較的均質。ややしまり悪い。若干の炭化物含む。

第33図 F-53号住居跡②

出土遺物 遺物量は少なく、住居床面近くに散在する。器種は、内外面に赤色塗彩が施された高杯(1)の他に、壺(2)、台付甕(3)、甕(4~7)などがある。他に石鍬の破損品(8)が出土している。

掘り方 住居ほぼ全域で、浅く不規則な掘り方検出。

調査所見 弥生時代後期。



第34図 F-53号住居出土遺物実測図

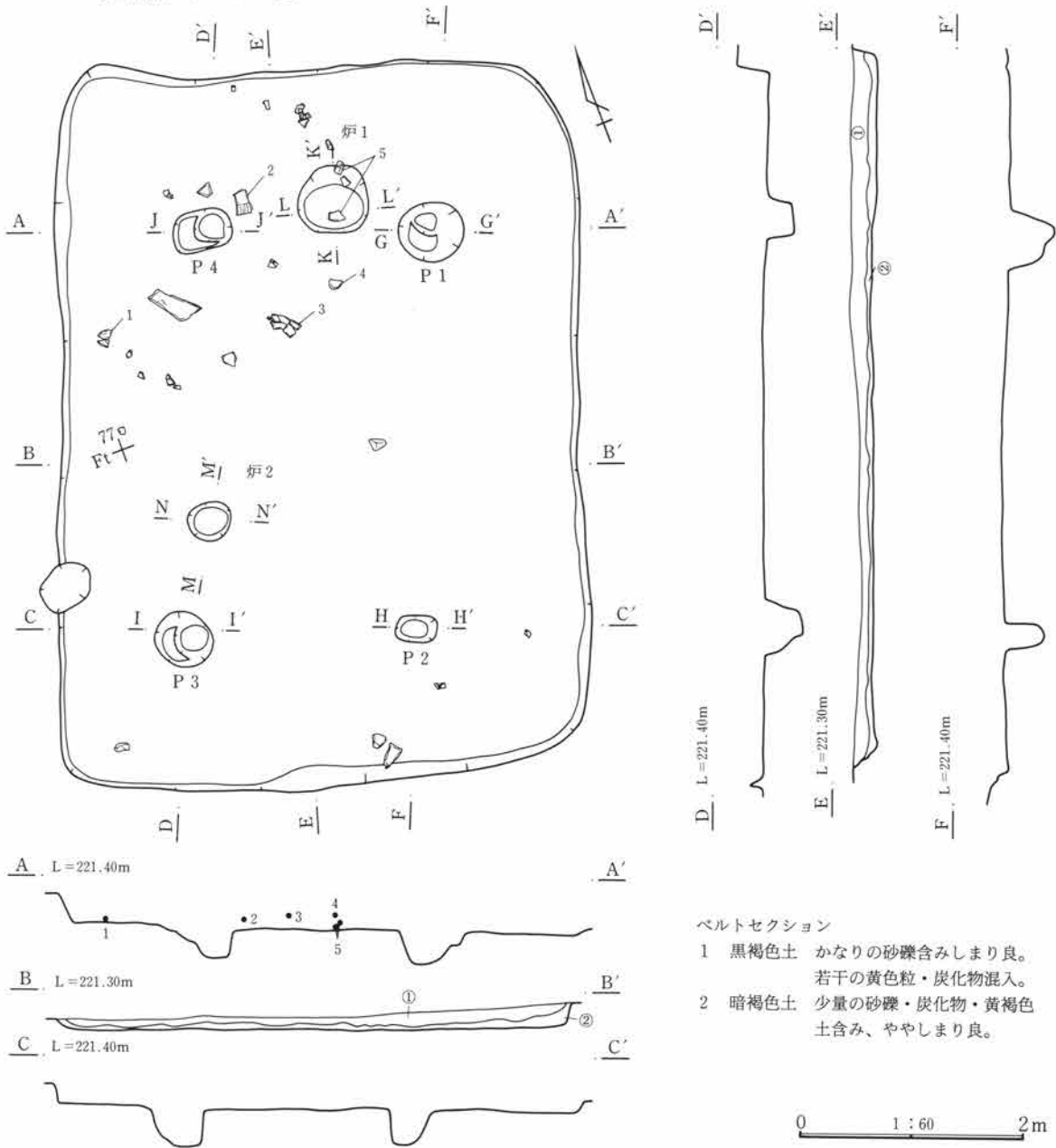
F-53号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	高坏	+12cm 坏部1/4	口(18.2)	口縁端部が内湾。	内外面ともにヘラ磨きで、全面赤色塗彩。器表面の剥落激しい。	①均質な細砂含む ②良好 ③明黄褐色
2	壺	+7cm 口縁破片			口縁外面横ナデ後ヘラ磨き。頸部2連止め簾状文。内面は器面の剥落激しく整形不明。	①細砂多量に含む ②良好 ③浅黄橙色
3	台付甕	床密着 口～胴部 上半	口(14.3)	頸部～口縁にかけて弓状に外反。	外 口縁上位に波状文。頸部11本単位2連止め簾状文。胴上位波状文、以下ヘラ磨き。 内 横ナデ後ヘラ磨き。口唇部に浅い沈線	①細砂含む ②良好 ③橙色 ④内面に煤付着
4	甕	+3cm 口縁1/4	口(16.8)		外 口縁部上半に波状文、下半はヘラ磨き 頸部は等間隔止めの簾状文で単位は不明。 内 横ナデ後ヘラ磨き。	①均質な細砂・角閃石微粒子含む ②良好 ③明黄褐色

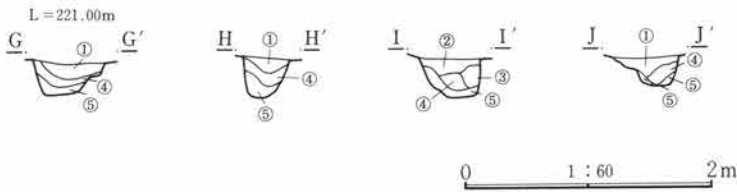
第3章 検出された遺構と遺物

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考		
5	甕	+23cm 底部	底 8.7		外面へラ削り後へラ磨き。内面横ナデ後へラ磨き。	①均質な細砂含む ②良好 ③暗赤褐色		
6	甕	貯蔵穴内 口へ頸部 1/5			外 口縁部へラ磨き、頸部に波状文。 内 ナデ後へラ磨き。	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③淡黄色		
7	甕	+10cm 口縁1/4	口(25.6)		口縁外面上位波状文。波状文上に不規則に 二対のボタン状貼付文。内面は器表面の摩 滅激しく整形不明。	①細砂含む ②良好 ③橙色		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
8	石鐮?	+23cm 2/3	(18.5)	8.8	3.1	(863.6)	緑色片岩	バチ状の円礫の側縁に一部調整加える。表面には 削痕あり。石鐮の破損品か?

F-57号住居跡 (PL 7・84)

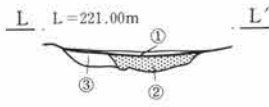
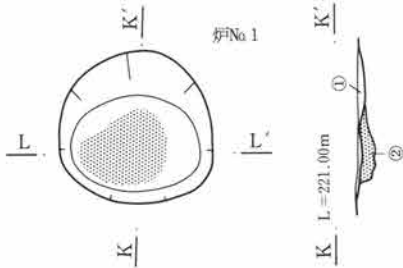


第35図 F-57号住居跡①



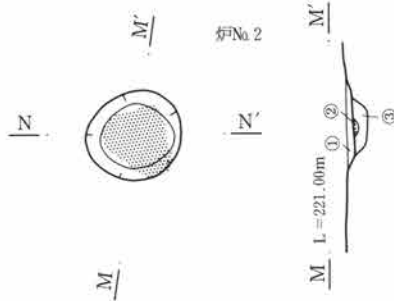
ピットセクション

- 1 黒色土 若干の砂礫含みしまりやや良。わずかの黄色粒・微細炭化物混入。
- 2 褐色土 少量の黄褐色粘土ブロック含み不均質。若干の白・黄色粒、砂礫混入。
- 3 暗褐色土 黄褐色粘土と砂質土をモザイク状に含み、不均質でややしまり悪い。
- 4 黒褐色土 地山砂質土ブロックを斑状に含みややしまり悪い。
- 5 暗褐色土 地山砂質土かなり含みしまりやや悪い。まれに小礫混入。



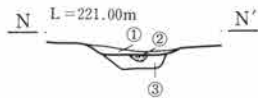
炉No.1セクション

- 1 暗褐色土 若干の黄色粒・焼土・炭化物・砂礫含みしまりやや良。
- 2 赤褐色土 非常に均質な焼土層。砂質でやわらかくやしまり悪い。
- 3 暗褐色土 地山砂礫をかなり含みしまりやや悪い。焼土わずかに含む。



炉No.2セクション

- 1 黒褐色土 砂質で均質、やわらかくしまり悪い。若干の炭化物、わずかの焼土混入。
- 2 赤褐色土 砂質でやしまり悪い焼土層。
- 3 褐色土 砂質でやわらかくしまり悪い。かなりの焼土とわずかの炭化物含む。



第36図 F-57号住居跡②

0 1:30 1m

位置 Fs・Ft-76グリッド 主軸方位 N-21°-E 残存壁高 0.27m 重複 なし

規模と形状 長辺6.35m・短辺4.60mの、南北方向に長い長方形。住居主軸はやや東側にふれる。上面をかなり削平されているために、一部を除いて周壁の残りは悪い。

床面 地山砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床・硬質部などはみられない。

炉 北側の柱穴間と西側の柱穴間に各1基所在。前者をNo.1、後者をNo.2とする。炉No.1は北側の柱穴間の中央よりもやや東側に位置する。浅い掘り込みと焼土を有する。燃烧部の幅61cm・長さ60cm。炉No.2は西側の柱穴間の中央よりも南よりに位置する。浅い掘り込みと焼土を有するが、No.1に比べると規模はやや小さい。燃烧部幅38cm・長さ36cm。

貯蔵穴 なし。周溝 なし。

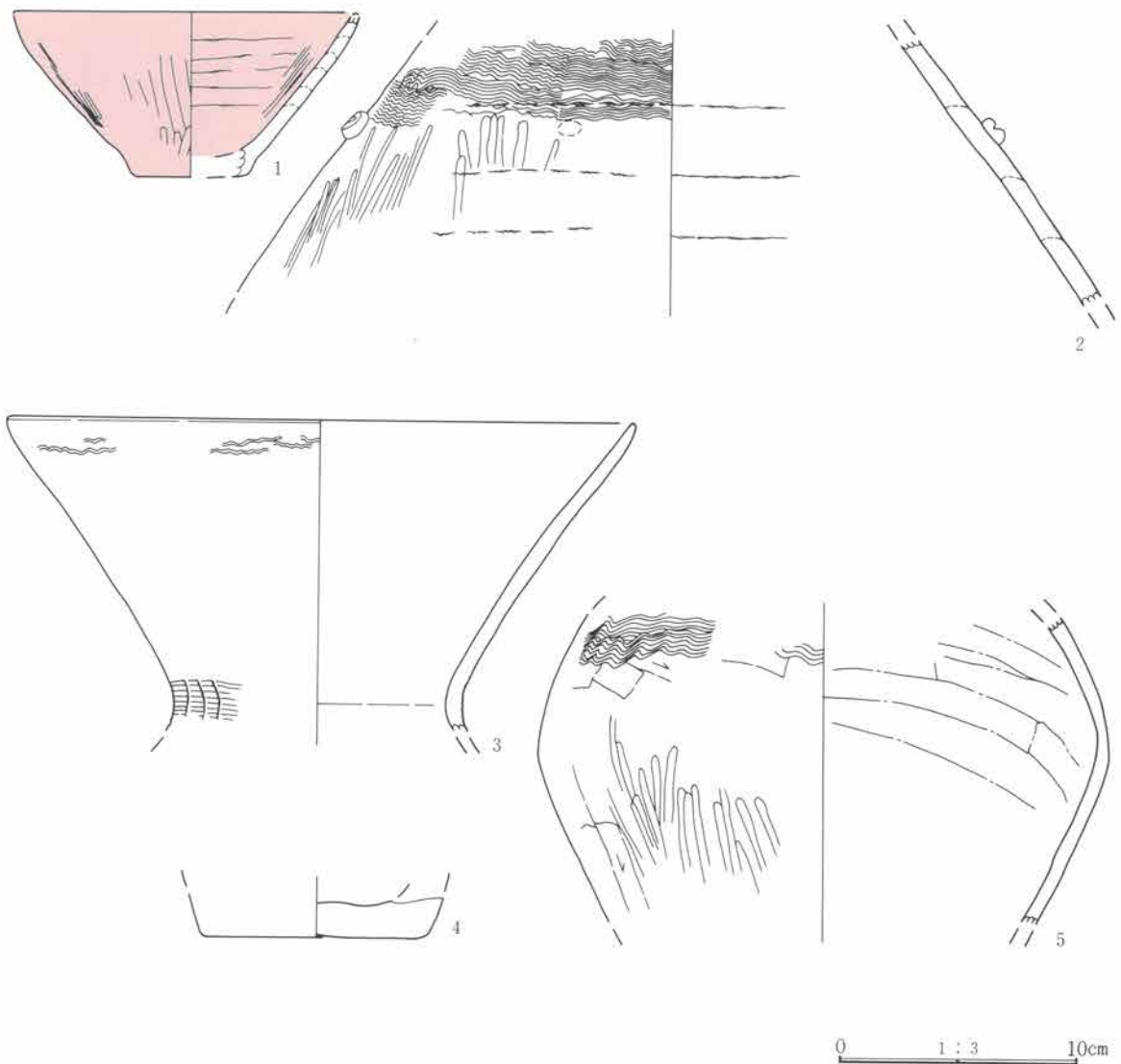
柱穴 4基の小ピット検出。四隅に近い所に、対称となる形で位置する。

出土遺物 遺物量は非常に少ない。住居の北半に多く分布する。器種は、内外面ともに赤色塗彩された鉢(1)のほか、壺(2・3)、甕(4・5)が出土している。

掘り方 なし。

調査所見 弥生時代後期。

第3章 検出された遺構と遺物



第37図 F-57号住居出土遺物実測図

F-57号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	鉢	+2cm 3/4	底 (4.8)		内外面ヘラ磨き、赤色塗彩。内面に接合痕	①微砂粒（ごくまれに小礫）含む ②やや軟質 ③赤色
2	壺	+8cm 胴上位破片			外 胴部上位に波状文、以下ナデ後ヘラ磨き。波状文下端にボタン状貼付文、表面に刺突古墳1個。接合痕有り。 内 器面の摩滅激しく調整不明。	①均質な細砂含む ②良好 ③橙色
3	壺	+12cm 口縁3/5	口 (25.8)	頸部～口縁部にかけて「く」の字状に外反。	外 口縁端部に波状文、頸部にほぼ均等に止めのはいる簾状文。器面の摩滅激しい。 内 器面の摩滅激しく調整技法不明。	①均質な細砂含む ②やや軟質 ③明褐色
4	甕	+13cm 底部	底 8.8		底部が、胴部との接合部で剥落。接合部を良く残す。外面ヘラ削り、内面ナデ。	①均質な微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色
5	壺	+4cm 胴部中位 1/4			外 ヘラ削り後、胴部上位に波状文、以下ヘラ磨き。 内 横ナデ。	①細砂含む ②良好 ③橙色

G-1号住居跡 (PL7・84)

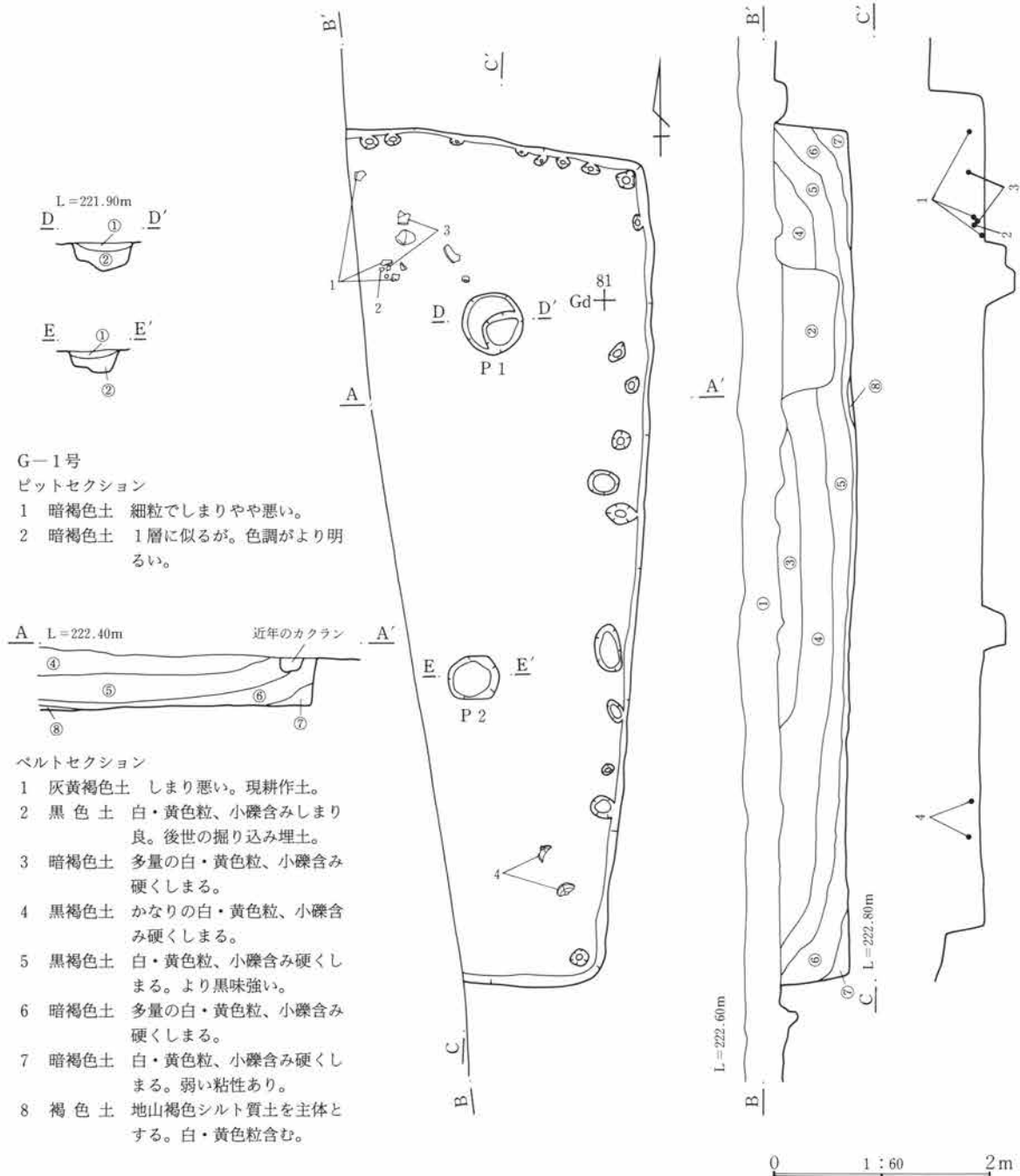
位置 Gc-81グリッド 主軸方位 N-4°-E 残存壁高 0.49m 重複 なし

規模と形状 住居の西半分が調査区域外にあたるため、全体の形状は不明。ただし、残存部分から、南北方向に長い長方形であると推測される。その場合長辺は7.61m、主軸はわずかに東へずれる。

床面 地山の褐色シルト質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

炉 検出できず。調査区域外に位置するものと考えられる。 貯蔵穴 なし。 周溝 なし。

柱穴 支柱穴と推定される比較的大きなピットの他に、壁際に径10~20cm・深さ2~10cmほどの小規模なピット



第38図 G-1号住居跡

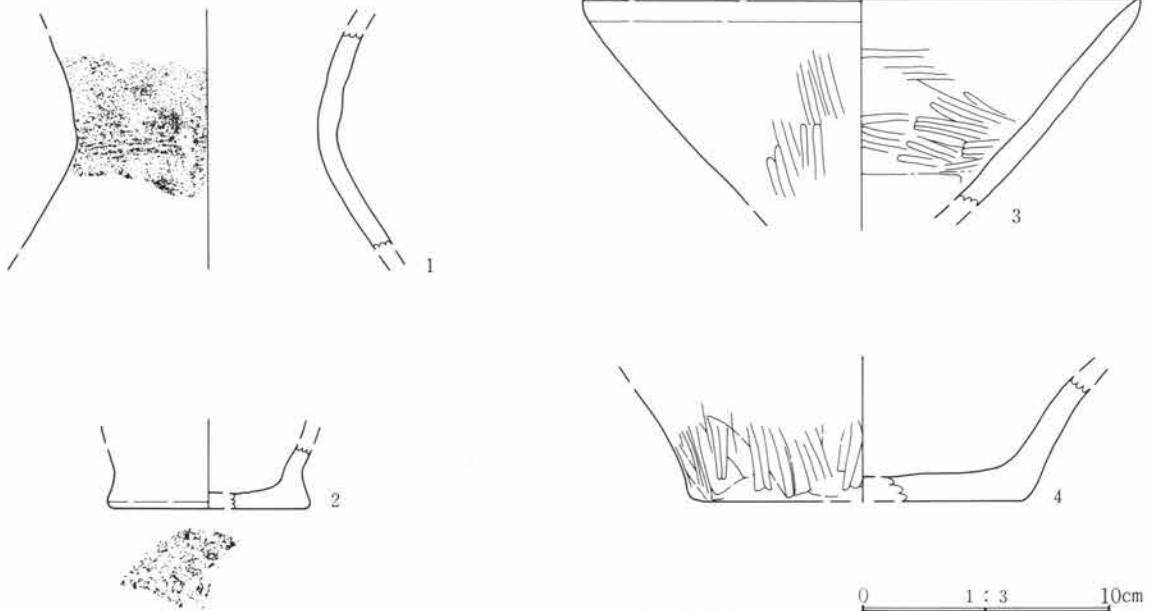
第3章 検出された遺構と遺物

トが多数並んでいる。

出土遺物 遺物量は少ない。いずれも床面よりも若干上のレベルで出土している。器種としては、甕(1・2・4)、壺(3)がある。

掘り方 なし。

調査所見 弥生時代後期の住居。



第39図 G-1号住居出土遺物実測図

G-1号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	甕	+7cm 頸部 $\frac{1}{3}$		頸部で弓状に外反。	外面頸部に波状文。内外面とも器表面の摩滅激しい。	①細砂含む ②良好 ③橙色
2	甕	+9cm 底部 $\frac{1}{4}$	底(7.8)		外面ヘラ削り、内面ナデ。底部に布目痕。	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色
3	壺	+6cm 口縁 $\frac{1}{4}$	口(22.0)	口縁端部がわずかに直立。	内外面ナデ後ヘラ磨き。	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③にぶい橙色
4	甕	+6cm 底部	底13.2		外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面器表面の剥落激しく調整不明。	①微砂粒(まれに小礫)含む ②良好 ③淡黄色

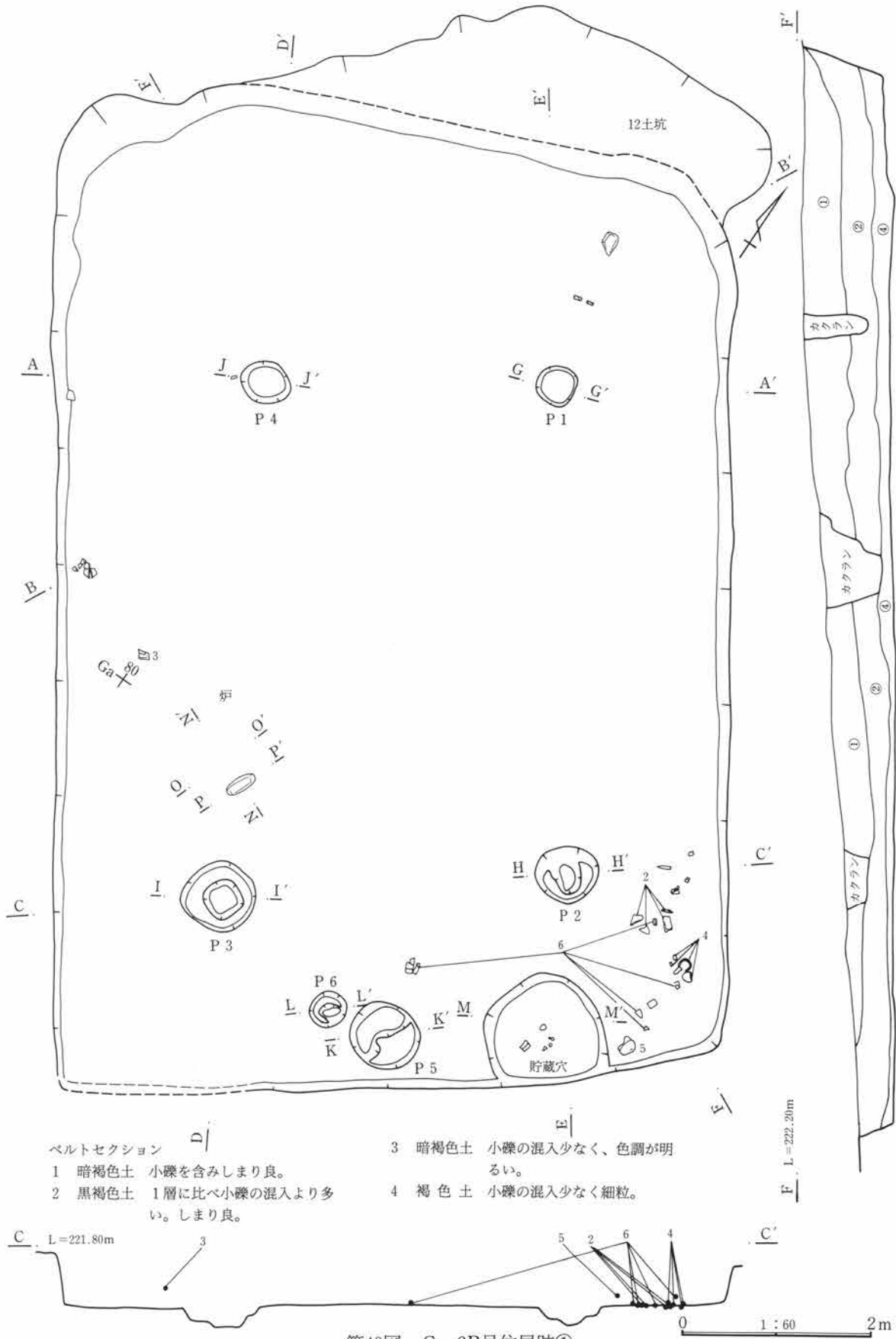
G-2 B号住居跡 (PL7・84・85)

位置 Ga-79グリッド **主軸方位** N-33°-W **残存壁高** 0.93m **重複** なし

規模と形状 形状は北西-南東方向に長い長方形。長辺10.33m・短辺7.06mとかなり大型の住居である。住居主軸は大きく西にふれる。住居北壁はかなり外反し、崩落などによって外側に張り出しているが、その他はほぼ直進し、線形の乱れは少ない。

床面 地山黄色シルト質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床や硬質部分などはみられない。

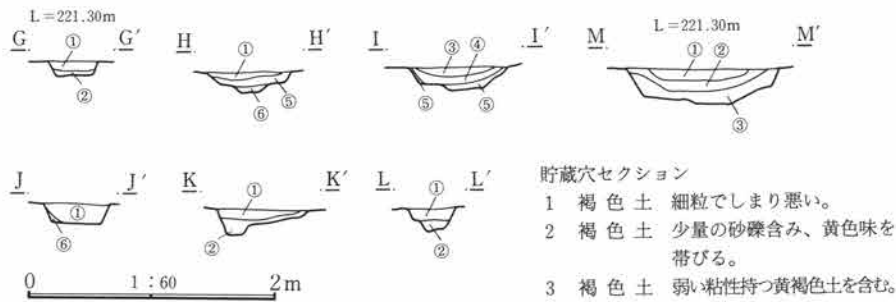
炉 住居南隅の柱穴付近に所在。細長い粗粒安山岩の円礫を炉石として使用している。上面に焼土混じりの土が分布するが、焼土面の発達は弱い。掘り込みはみられない。



第40図 G-2B号住居跡①

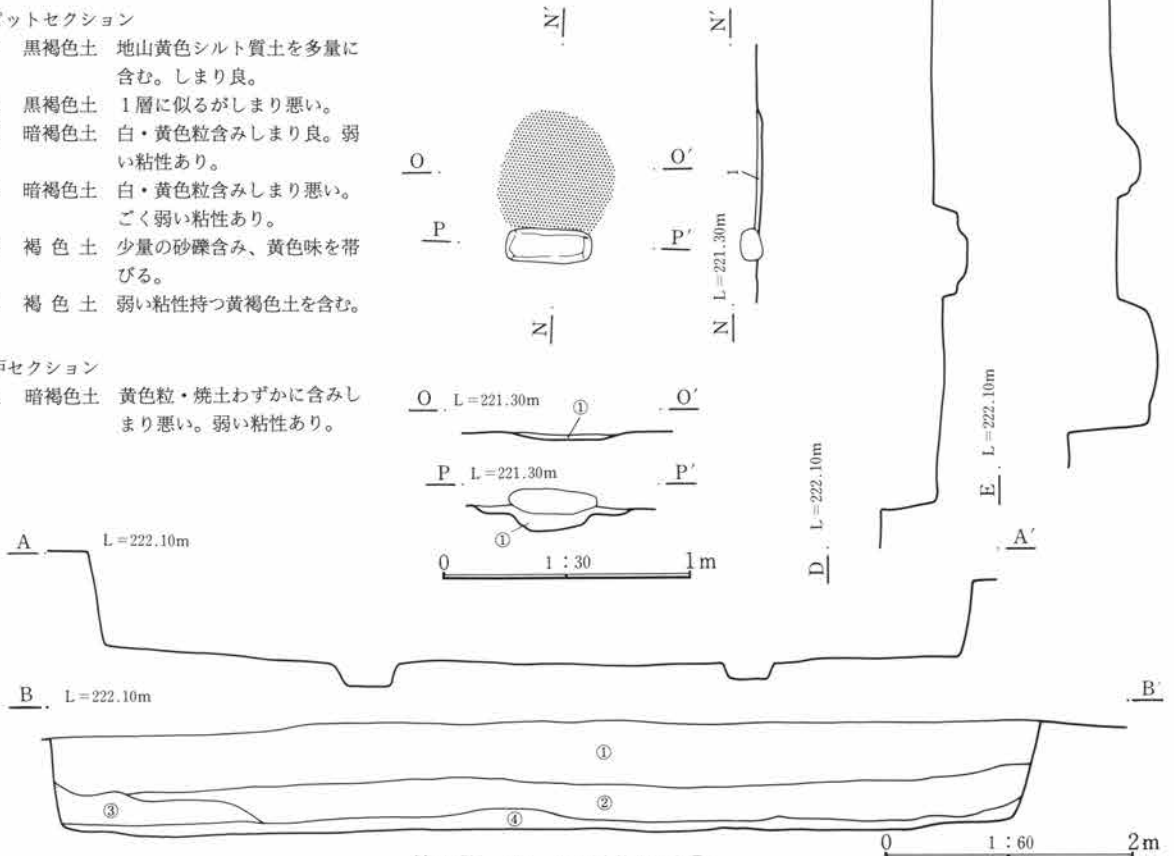
第3章 検出された遺構と遺物

貯蔵穴 住居南東壁際の、中央よりも東よりに所在。周溝 なし。
柱穴 大小14基のピットを確認。うち、位置関係からP 1～4を支柱穴とした。また、P 5・6は南東壁ほぼ中央部に位置し、形状・規模ともかなり異なるが、ともに入り口施設に関するものと推定される。
出土遺物 遺物量は少なく、住居の東隅に集中して分布する傾向がみられる。いずれも床面に近い位置から出土している。器種は、鉢(1)、壺(2・3)、甕(4・6・7)、台付甕(5)がある。他に覆土中より黒曜石製の石鏃(8)、スクレイパー(9)が出土。石鏃は縄文時代遺物の混入か。掘り方 なし。
調査所見 弥生時代後期。

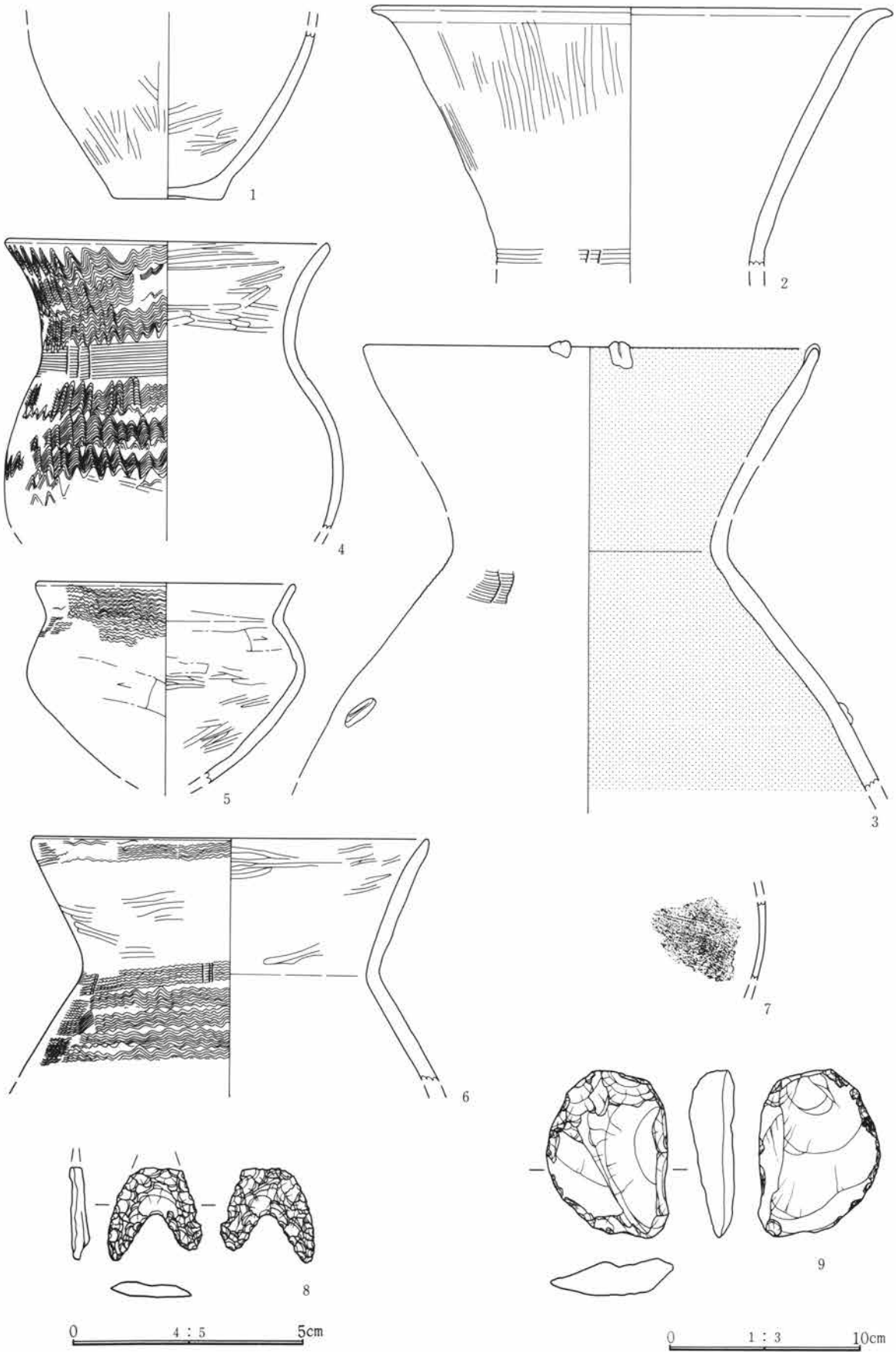


- ピットセクション
- 1 黒褐色土 地山黄色シルト質土を多量に含む。しまり良。
 - 2 黒褐色土 1層に似るがしまり悪い。
 - 3 暗褐色土 白・黄色粒含みしまり良。弱い粘性あり。
 - 4 暗褐色土 白・黄色粒含みしまり悪い。ごく弱い粘性あり。
 - 5 褐色土 少量の砂礫含み、黄色味を帯びる。
 - 6 褐色土 弱い粘性持つ黄褐色土を含む。

- 炉セクション
- 1 暗褐色土 黄色粒・焼土わずかに含みしまり悪い。弱い粘性あり。



第41図 G-2B号住居跡②



第42図 G-2B号住居出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

G-2B号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考				
						計測値 (cm・g)	石 材	特 徴		
				全 長	幅	厚 さ	重 量			
1	鉢	覆土 胴部下位	底 5.7		外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面横ナデ後ヘラ磨き。内外面ともに器表面かなり摩滅。			①微砂粒含む ②良好 ③淡黄橙色		
2	壺	床密着 口～頸部 1/2	口(26.8)	口縁端部が外側に屈曲。	外 口縁部ナデ後ヘラ磨き。頸部2連止めの簾状文(単位不明)。 内 ナデ。			①細砂・多量の角閃石微粒子含む ②良好 ③にぶい橙色		
3	壺	+10cm 口～胴部 上位1/3	口(23.2)	頸部～口縁にかけて「く」の字状に外反。	外 口縁部外面横ナデ、口縁端部に突起貼付(単位不明)。頸部7本単位2連止め簾状文二段に施文。胴部上位にボタン状貼付文。 内 横ナデ。			①砂粒含む ②良好 ③橙色		
4	甕	床密着 口～胴部 上半2/3	口 16.8	頸部～口縁にかけ弓状に外反。	外 口縁部および胴上半ナデ後波状文。頸部11本単位3連止めの簾状文。簾状文は波状文に先行。 内 ナデ後ヘラ磨き。			①微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色 ④胴部内面に煤状の炭化物付着		
5	台付甕	+7cm 台部欠損	口 13.1	胴上位に最大径。頸～口縁にかけ「く」の字状に外反。	外 口縁～胴部上位波状文、以下ヘラ削り 内 口縁部横ナデ、胴部横ナデ後ヘラ磨き			①細砂含む ②良好 ③赤褐色		
6	甕	床密着 口～胴部 上位2/3	口 20.2	頸部～口縁にかけ「く」の字状に外反。	外 口縁部上位に波状文、以下ナデ後ヘラ磨き。頸部に波状文後2もしくは3連止め。胴部上位波状文。 内 横ナデ後ヘラ磨き。			①細砂粒(まれに小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色		
7	甕	覆土 胴上位片			外面上位に0段多条のRL縄文、以下横ナデ。内面ナデ後ヘラ磨き。			①微砂粒含む ②良好 ③暗赤褐色		
8	石鏃	覆土 1/2				全長 (2.0)	幅 2.0	厚さ 0.3	重量 (0.9)	黒曜石 凹基無茎鏃。右脚が短い、破損により再調整したものと思われる。先端欠損。
9	スクレイパー	覆土 完形				全長 8.6	幅 6.3	厚さ 2.3	重量 125.0	硬質泥岩 縦長の剝片を素材とし、一側の両面に調整加え刃部形成。

G-21号住居跡 (PL 7・8・85・86)

位置 Gd-77・78グリッド 主軸方位 N-9°-E 残存壁高 0.54m 重複 G-1溝・20住に切られる。
規模と形状 南北方向に長い長方形。長辺3.96m・短辺3.25m。南東隅やや張り出し、形状歪んでいる。住居は、掘り込み深く周壁の残りはいいが、やや外反。主軸はやや東にふれる。

床面 地山黄褐色粘質シルトを掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

炉 住居の北側に所在。板状の砂岩を炉石として据え付けてある。炉石はほぼ東西方向に据え付けてあり、炉の軸は住居主軸に一致しない。炉石の北側に硬くしまった厚い焼土面が発達する。掘り込みはみられなかった。焼土部分の幅62cm・長さ45cm。焼土面に接して、上部を欠損した甕(3)が倒れ込んだようなかたちで出土しており、炉に掛けて使用していた可能性がある。

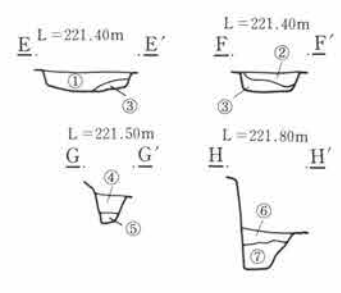
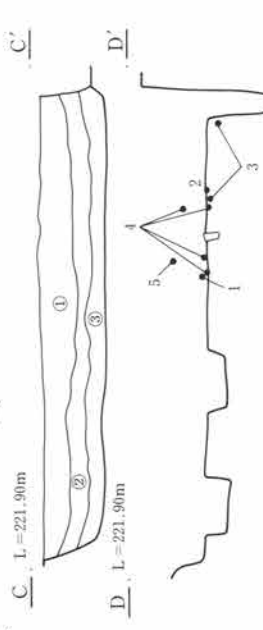
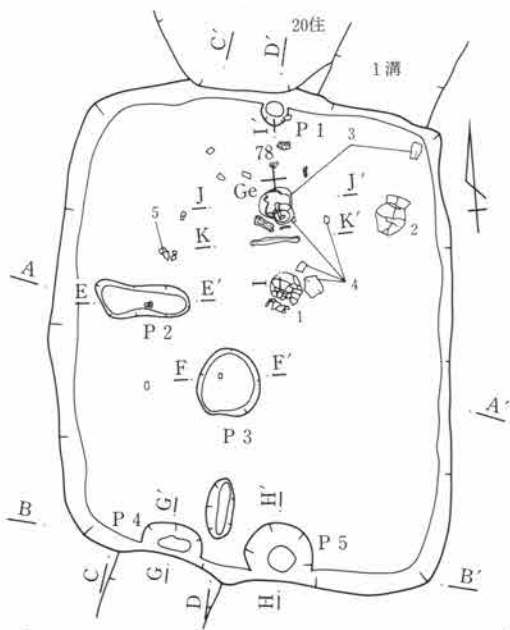
貯蔵穴 住居の西壁際のほぼ中央と住居中央よりもやや南で、比較的浅いピットを2基検出したが(ピット2・3)、いずれも貯蔵穴とは思われない。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピットを検出。うち北側の1基(ピット1)は壁柱穴と思われる。また南側の3基は、入り口施設に伴うものと推測される。主柱穴と思われるものはみられなかった。

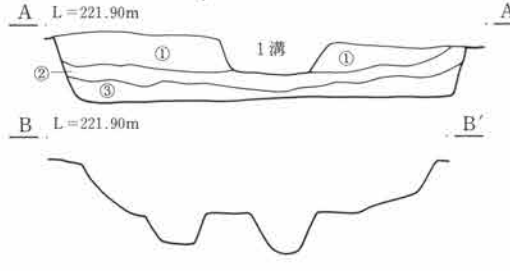
出土遺物 遺物量は少ないが、床面近くより、ほぼ完形にまで復元可能な土器が4個体出土した(1~4)。器種は全て甕である。この他に、覆土中位より、有段口縁の壺の口縁部破片(5)が出土しているが、住居よりも若干新しい時期のものである。掘り方 なし。

調査所見 弥生時代後期。

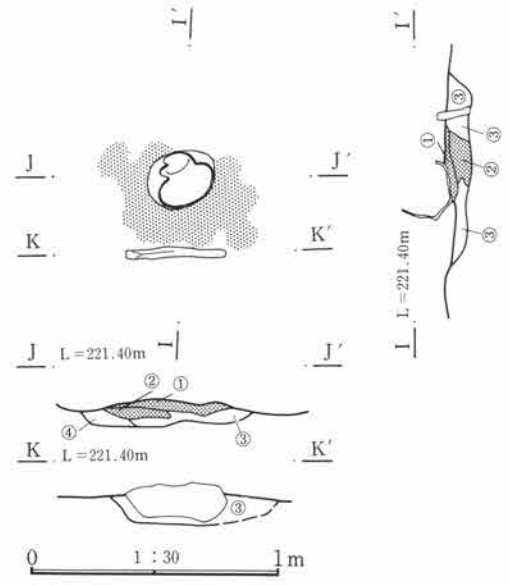
第2節 F・G区



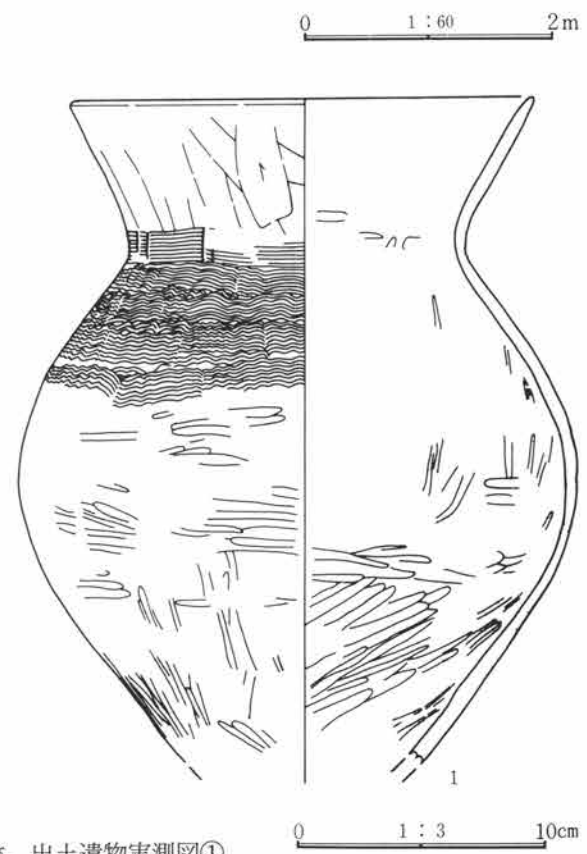
- ピットセクション
- 1 暗褐色土 細粒でしまり良。
 - 2 暗褐色土 細粒で、黄褐色土のブロックを含む。
 - 3 褐色土 黄褐色の砂質土を含む。
 - 4 暗褐色土 弱い粘性あり。
 - 5 黄褐色土 粘性持つ。
 - 6 暗褐色土 炭化物含み弱い粘性持つ。
 - 7 暗褐色土 黄褐色土のブロックを含む。



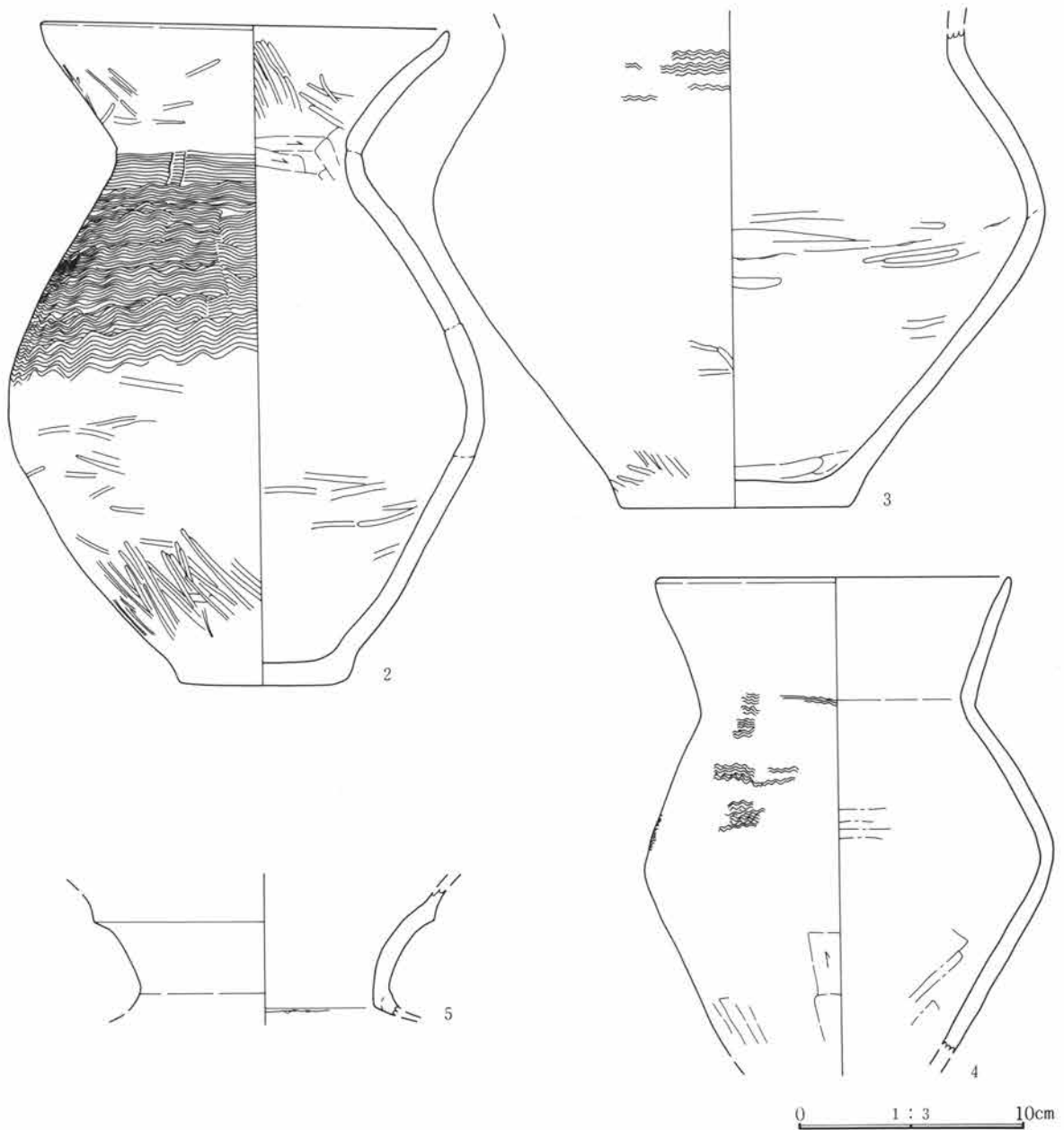
- ベルトセクション
- 1 黒褐色土 白・黄色粒、小礫、炭化物含みしまり良。
 - 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土粒、炭化物含み弱い粘性あり。
 - 3 暗褐色土 黄色粒・炭化物・焼土粒わずかに含み粘性持つ。



- 炉セクション
- 1 暗赤褐色土 均質な焼土層。良く焼けて、硬くレンガ状になっている。
 - 2 暗赤褐色土 若干の黄色粒含む焼土層。しまり悪く弱い粘性あり。
 - 3 暗黄褐色土 黄色粒・炭化物若干含む。
 - 4 暗黄褐色土 若干の砂礫・焼土粒・炭化物含みしまり悪い。



第43図 G-21号住居跡、出土遺物実測図①



第44図 G-21号住居出土遺物実測図②

G-21号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	甕	+4cm 底部欠損	口 18.2	頸部～口縁にかけ「く」の字状に外反。	外 口縁端部横ナデ、以下ヘラ削り。頸部8本単位2連止めの簾状文。胴上位波状文、以下ヘラ磨き。 内 口縁端部横ナデ、以下ナデ後ヘラ磨。	①細砂・角閃石微粒子含む ②良好 ③にぶい黄橙色
2	甕	床密着 完形	口 17.9 底 7.3 高 29.2	頸部～口縁にかけ「く」の字状に外反。	外 口縁端部横ナデ、以下横ナデ後ヘラ磨き。頸部10本単位2連止めの簾状文。胴上半波状文、以下ナデ後ヘラ磨き。 内 口縁横ナデ後ヘラ磨き。頸部ヘラ削り胴部ナデ後ヘラ磨き。	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色 ④外面胴部上位に帯状に煤状炭化物付着
3	甕	床密着 口縁欠損	底 10.0	胴部上位で大きく横に張り出す。	外 頸部～胴上位波状文。以下ヘラ磨き。 内 ナデ後ヘラ磨き。接合痕有り。	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
4	甕	床密着 口～胴部 上位	口 15.4	頸部～口縁にかけ「く」の 字状に外反。	外面頸部～胴部上位に波状文、胴部下位へ ラ磨き。内面ナデ。内外面ともに器表面の 摩滅激しい。	①細砂含む ②良好 ③橙色
5	壺	+26cm 口縁部破 片		有段口縁。頸部で強く屈曲 する。	口縁部内外面横ナデ。内面頸部に接合痕・ 指頭圧痕。	①微砂粒・赤褐色粒 子含む ②良好 ③にぶい橙色

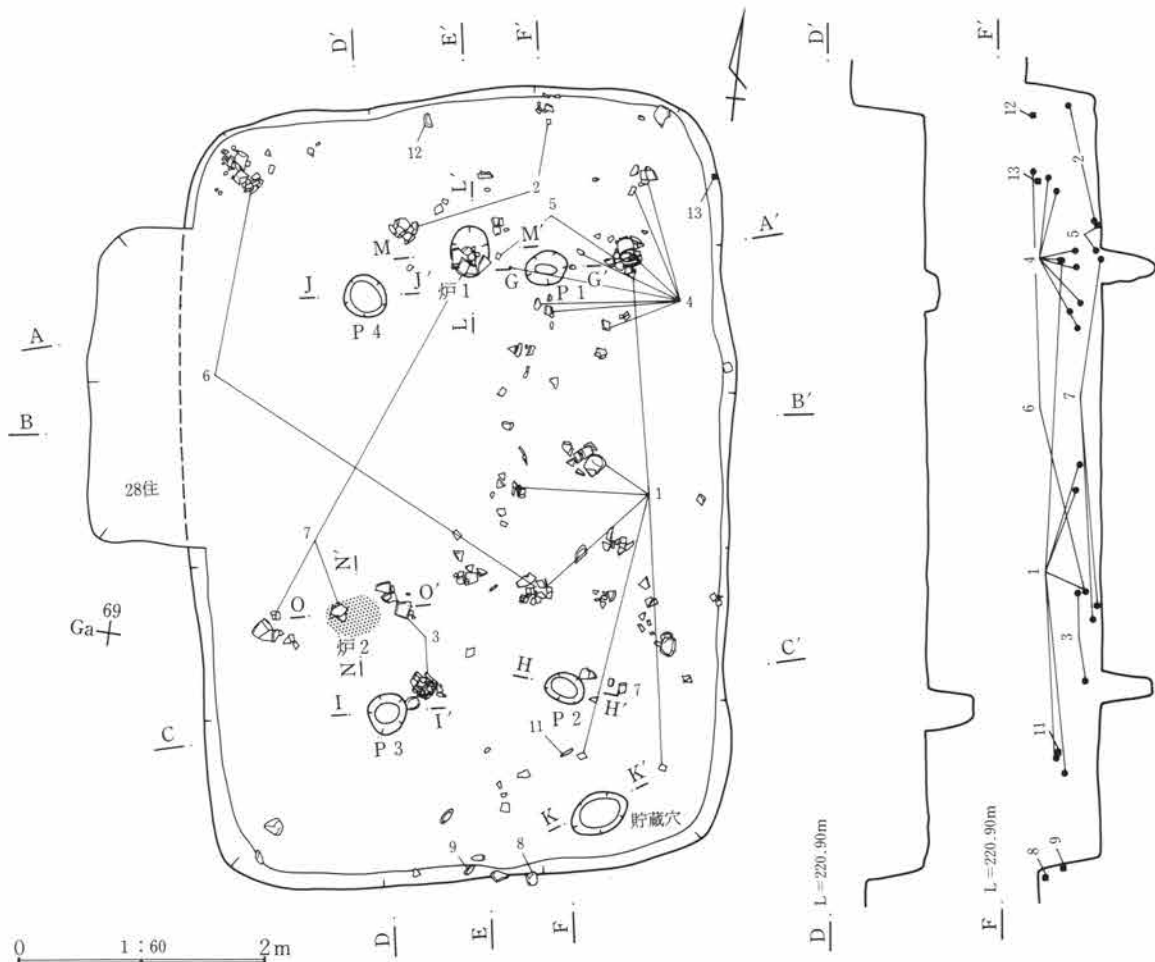
G-29号住居跡 (PL 8・86・87)

位置 Ga-68グリッド 主軸方位 N-10°-W 残存壁高 0.57m 重複 G-28住を切る。

規模と形状 形状は南北に長い長方形で、長辺6.20m・短辺4.18m。西壁の一部を重複する住居に破壊されるが、他は比較的残存状況が良好でほぼ直立・直進し、線形の乱れ少ない。住居主軸は、やや西にふれる。

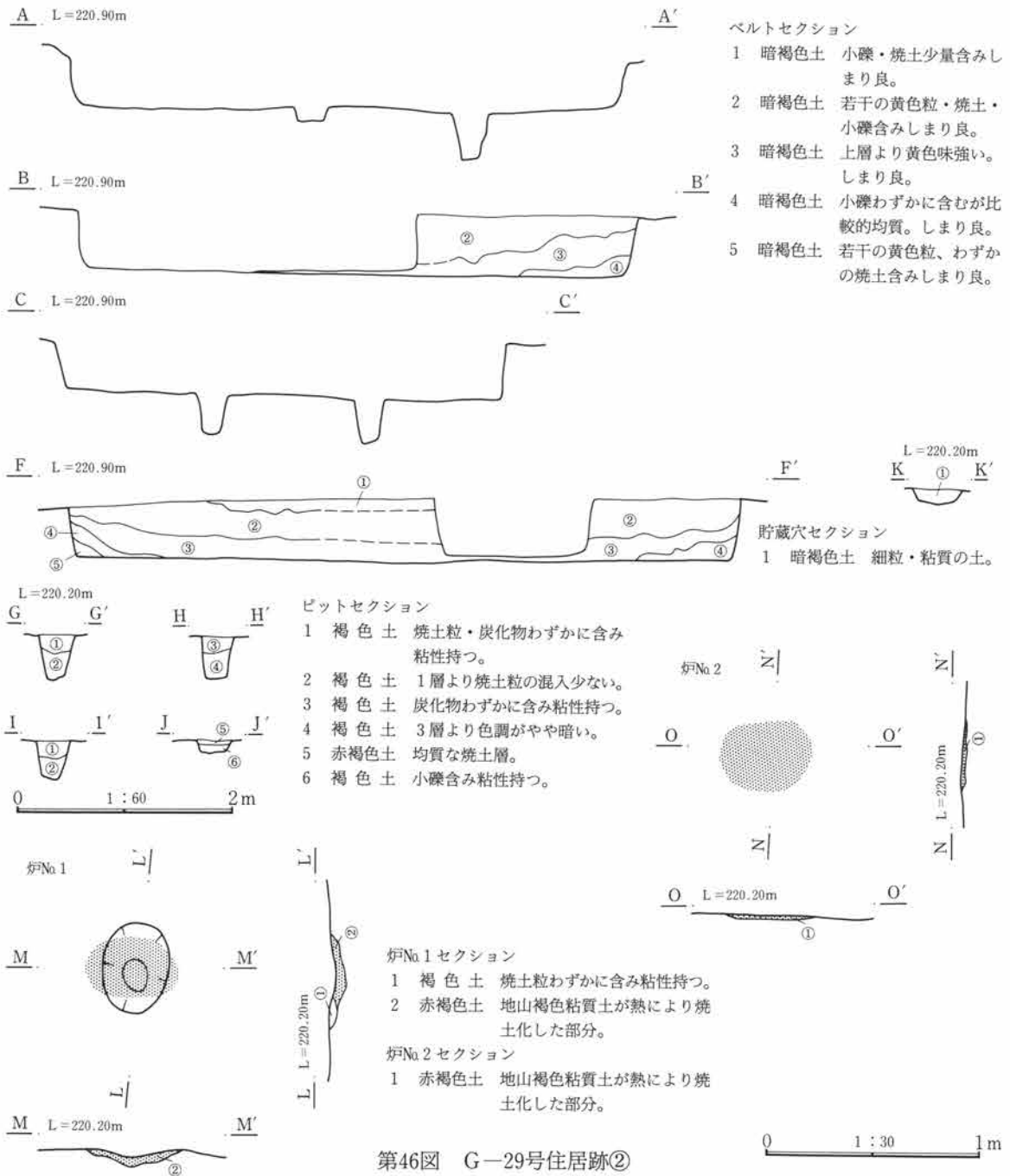
床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

炉 北側と西側の柱穴間に、それぞれ1基ずつ所在。北側の炉No.1は、2本の柱穴の中央よりもわずかに東側で、柱穴を結んだ線よりも外側に位置している。わずかにくぼんだ浅い皿状の掘り込みと、硬くしまった焼土面を持つ。掘り込み上面の幅は30cm、長さは41cmである。西側の炉No.2は、柱穴間の南より3分の1ほどの位置にある。掘り込みはなく、焼土面のみである。焼土の幅32cm・長さ42cmである。いずれの炉も、炉石はみられなかった。



第45図 G-29号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



第46図 G-29号住居跡②

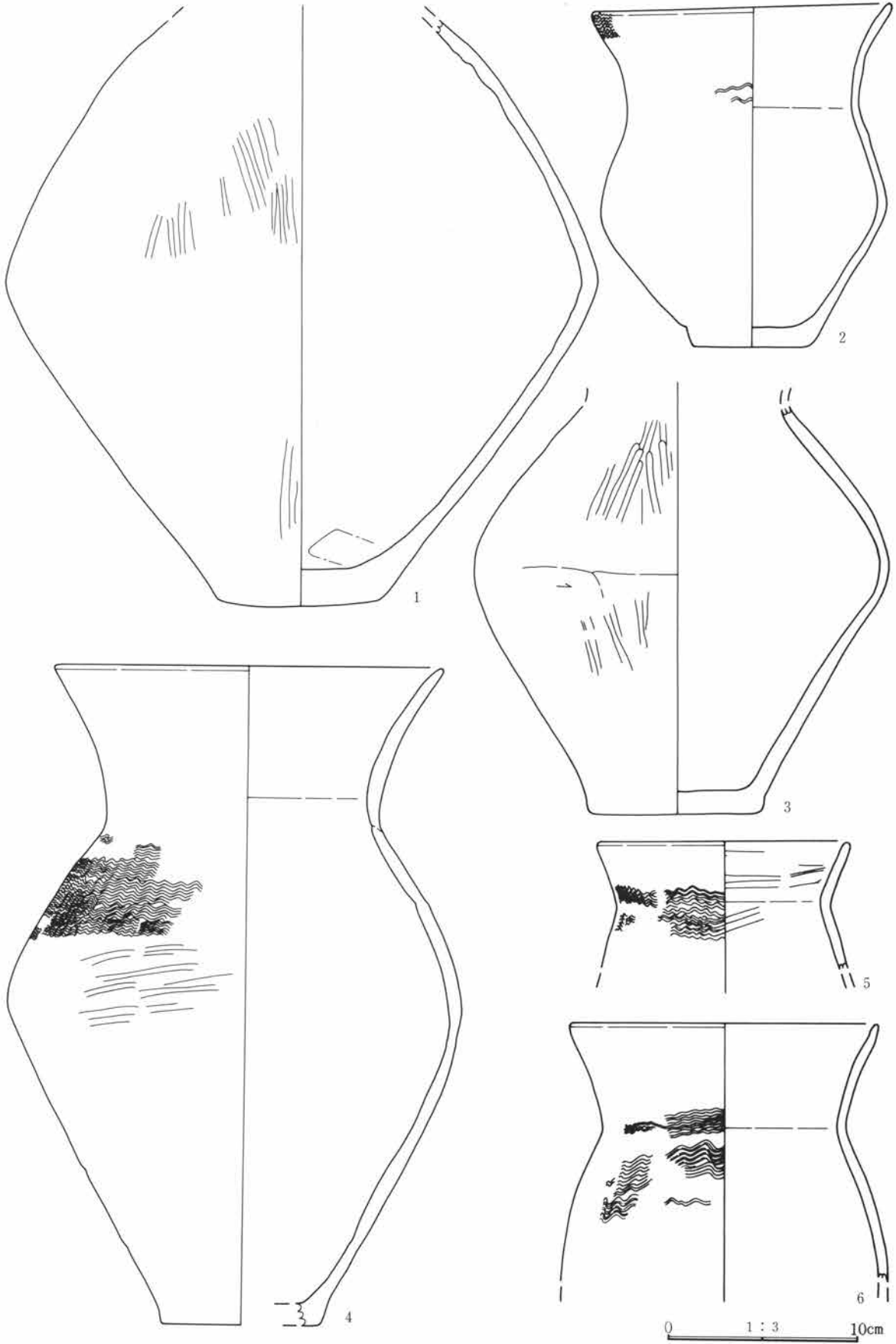
貯蔵穴 住居の南壁際の東よりの位置で、小ピット1基検出。貯蔵穴かとも思われるが、掘り込みは浅く、内部からの遺物の出土もなく明確ではない。 **周溝** なし。

柱穴 4基の小ピット検出。南北のほぼ対象となる位置にあるが、北西の1基は他に比べてかなり浅い。

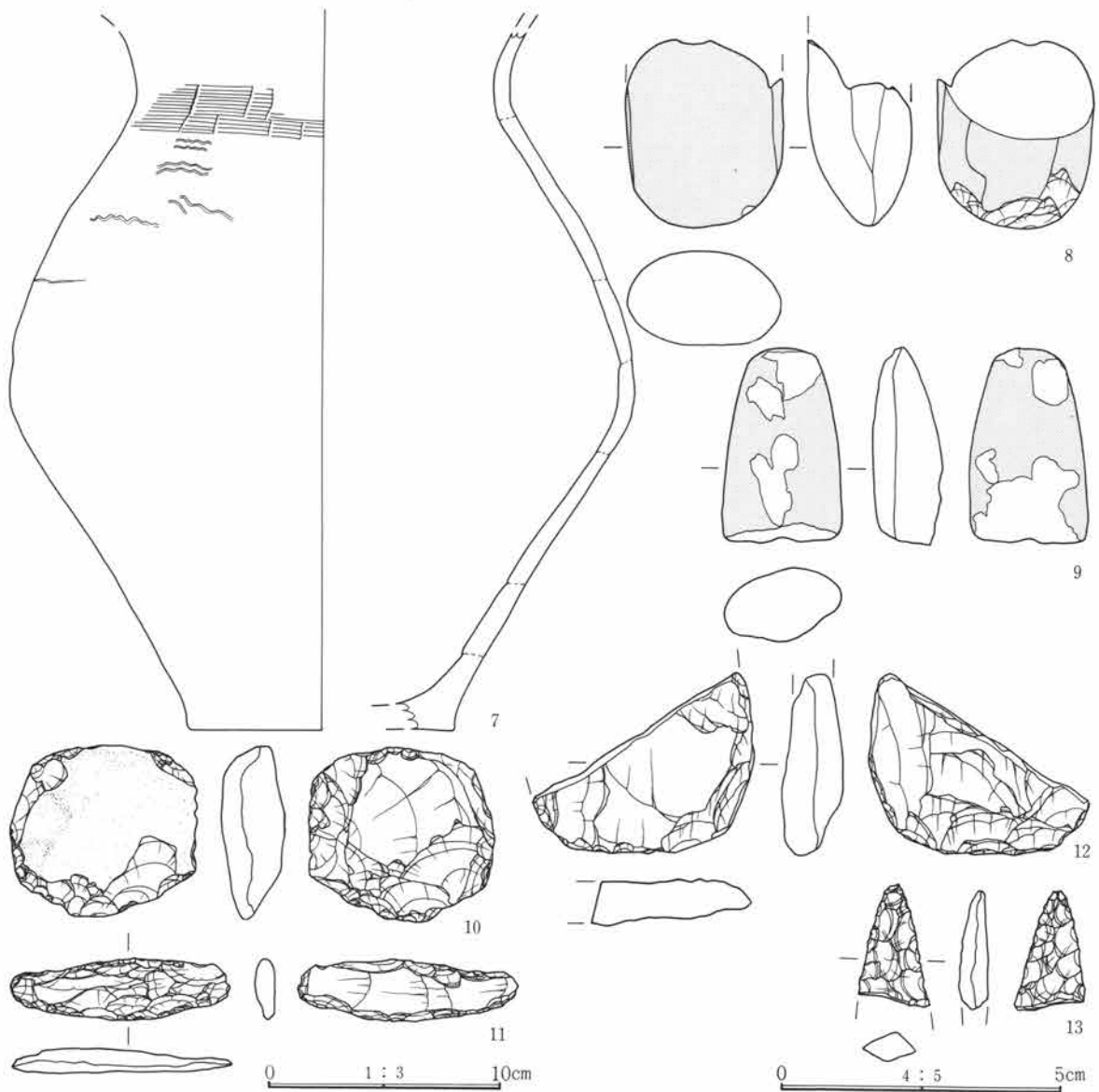
出土遺物 比較的多量の遺物が埋土中を中心に出土している。床面直上に位置するものもあるが、大半は床面からかなり浮いた状態で出土した。器種は、壺(1・3)、甕(2・4~7)がある。石器は、磨製石斧(8・9)、石核(10)、スクレイパー(11)、石鋏(12)、黒曜石製の石鋏(13)が出土している。

掘り方 なし。

調査所見 弥生時代後期。



第47図 G-29号住居出土遺物実測図①



第48図 G-29号住居出土遺物実測図②

G-29号住居出土遺物観察表

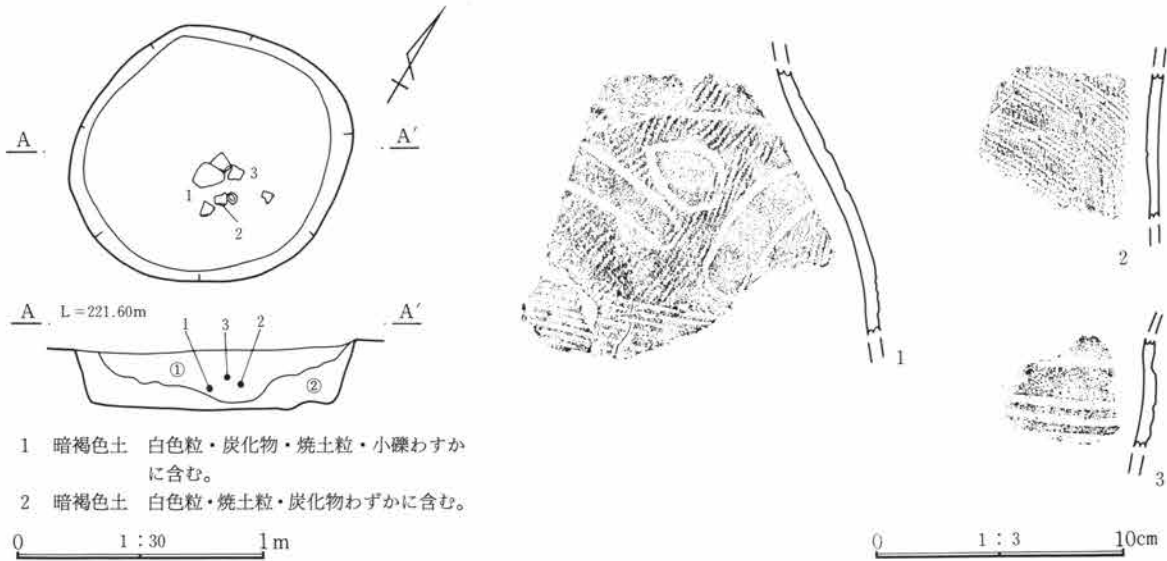
番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	壺	+16cm 胴～底部	底 8.6		外面ナデ後ヘラ磨き、内面ナデ。内面器表面かなり剥落。	①細砂含む ②良好 ③橙色
2	甕	+2cm 完形	口 15.2 底 6.0 高 17.6	頸部～口縁にかけ弓状に外反。	内外面ともに器表面の剥落激しい。外面口縁上位および頸部に波状文。内面ナデか。	①細砂含む ②良好 ③橙色
3	壺	+21cm 胴～底部	底 8.8		外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面器表面の剥落激しく調整不明。	①細砂・角閃石粒子 ②良好 ③明赤褐色
4	甕	+17cm 口縁～底部 1/3	口(10.3) 底(8.3) 高 33.9	頸部～口縁にかけ弓状に外反。	外 口縁部ナデ。頸部～胴部上位に波状文以下ヘラ磨き。 内 横ナデ。	①細砂含む ②良好 ③淡黄橙色
5	甕	+3cm 口～頸部	口(12.6)	頸部～口縁にかけ「く」の字状に外反。	外 口縁部横ナデ。頸部～胴部上位波状文 内 ヘラ磨き。	①細砂含む ②良好 ③赤褐色
6	甕	+16cm 口～胴上	口(15.6)	頸部～口縁にかけ「く」の字状に外反。	口縁部外面横ナデ、外面頸部～胴部上位に波状文。内外面ともに器表面の摩滅激しい	①均質な砂粒含む ②良好 ③明褐色

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴	
			全長	幅	厚さ	重量			
7	甕	床密着 胴部 $\frac{3}{5}$	底(11.4)	頸部～口縁にかけ外反。胴部中位に最大径。	外 頸部2段の簾状文。基本的に2連止め。上下の止めは一致しない。胴部上に波状文 内 横ナデ。器表面の摩滅激しい。	①細砂・小礫・角閃石微粒子 ②良好 ③にぶい橙色			
8	磨製石斧	+45cm $\frac{1}{3}$	(7.9)	6.7	4.5	(294.0)	変輝緑岩	厚手の磨製石斧。刃部は片刃状。先端裏面に使用による破損と見られる剥離痕あり。基部欠損	
9	磨製石斧	+30cm $\frac{1}{2}$	(8.2)	5.2	3.05	(218.5)	変はんれい岩	剥離と敲打によって形状整えた後研磨しているが、両面に一部敲打面残る。刃部欠損。	
10	石核	28住覆土 完形	7.2	8.0	2.3	184.9	硬質泥岩	厚手の剥片を素材とし、主に腹面側において求心的に小型の剥片剥離。	
11	スクレイパー	+31cm 完形	2.6	9.45	1.1	26.0	紅簾石片岩	縦長剥片を素材とし、両側・両面に調整加えるが、図の下部が刃部と思われる。	
12	石鏃	+49cm $\frac{1}{4}$	(7.6)	9.5	1.5	(134.1)	紅簾石片岩	石鏃の刃部破片。周辺の両面に調整加える。	
13	石鏃	+47cm $\frac{1}{2}$	(2.1)	1.3	0.5	(1.0)	黒曜石	両面調整の石鏃。やや厚手。基部欠損。縄文時代遺物の混入か。	

土坑

G-39号土坑 (PL 8・87)

Gj-74グリッドに位置する。形状は円形で、長辺115cm・短辺103cm・深さ27cm。内部より弥生時代中期の壺(1・2)、甕(3)の破片が出土した。本遺跡で弥生中期に位置づけられるものは、当土坑のみである。



第49図 G-39号土坑、出土遺物実測図

G-39号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	壺	+17cm 肩部破片			外面LR斜縄文(0段多条)地文とし、上位1条沈線、下位条痕で横位区画、間に円文と2本沈線による弧文並置。内面横ケズリ。	①砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色
2	(壺)	+26cm 頸部破片			外面全面に条痕施す。内面はナデ。	①砂粒含む ②良好 ③赤褐色
3	甕	+19cm 口縁破片		口縁横位沈線境に小さくくびれ外反。胴上位膨らむ。	外面口縁下に沈線1条。胴部上位に3条以上の平行沈線施す。内面ナデ。	①細砂・角閃石微粒子 ②良好 ③褐色

3 古墳～平安時代の遺構と遺物

住居跡

F-1号住居跡 (PL9)

位置 Fm-76グリッド 主軸方位 N-3°-E 残存壁高 0.17m

重複 F-3住を一部切って構築。南西隅は近年の攪乱によって失われている。

規模と形状 長辺2.84m・短辺3.41mの縦長の長方形を呈す。上部をかなり削平され壁の残りは悪いが、周壁はほぼ直進する。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致。

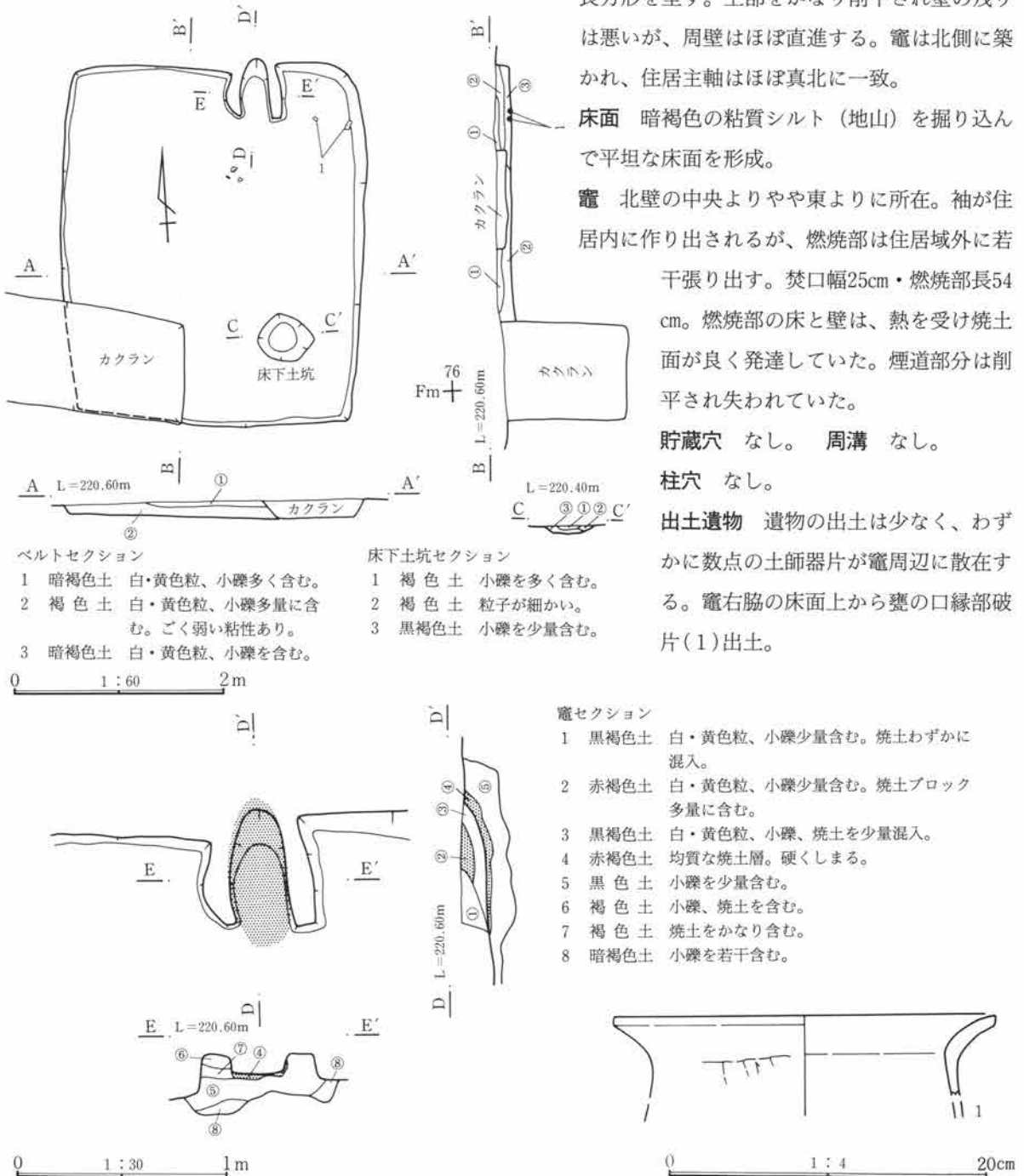
床面 暗褐色の粘質シルト(地山)を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 北壁の中央よりやや東よりに所在。袖が住居内に作り出されるが、燃烧部は住居域外に若干張り出す。焚口幅25cm・燃烧部長54cm。燃烧部の床と壁は、熱を受け焼土面が良く発達していた。煙道部分は削平され失われていた。

貯蔵穴 なし。周溝 なし。

柱穴 なし。

出土遺物 遺物の出土は少なく、わずかに数点の土師器片が竈周辺に散在する。竈右脇の床面上から甕の口縁部破片(1)出土。



第50図 F-1号住居跡、出土遺物実測図

掘り方 住居床下より浅い土坑1基検出。竈周辺に構築時の掘り込みが見られる。

調査所見 住居形状・出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。

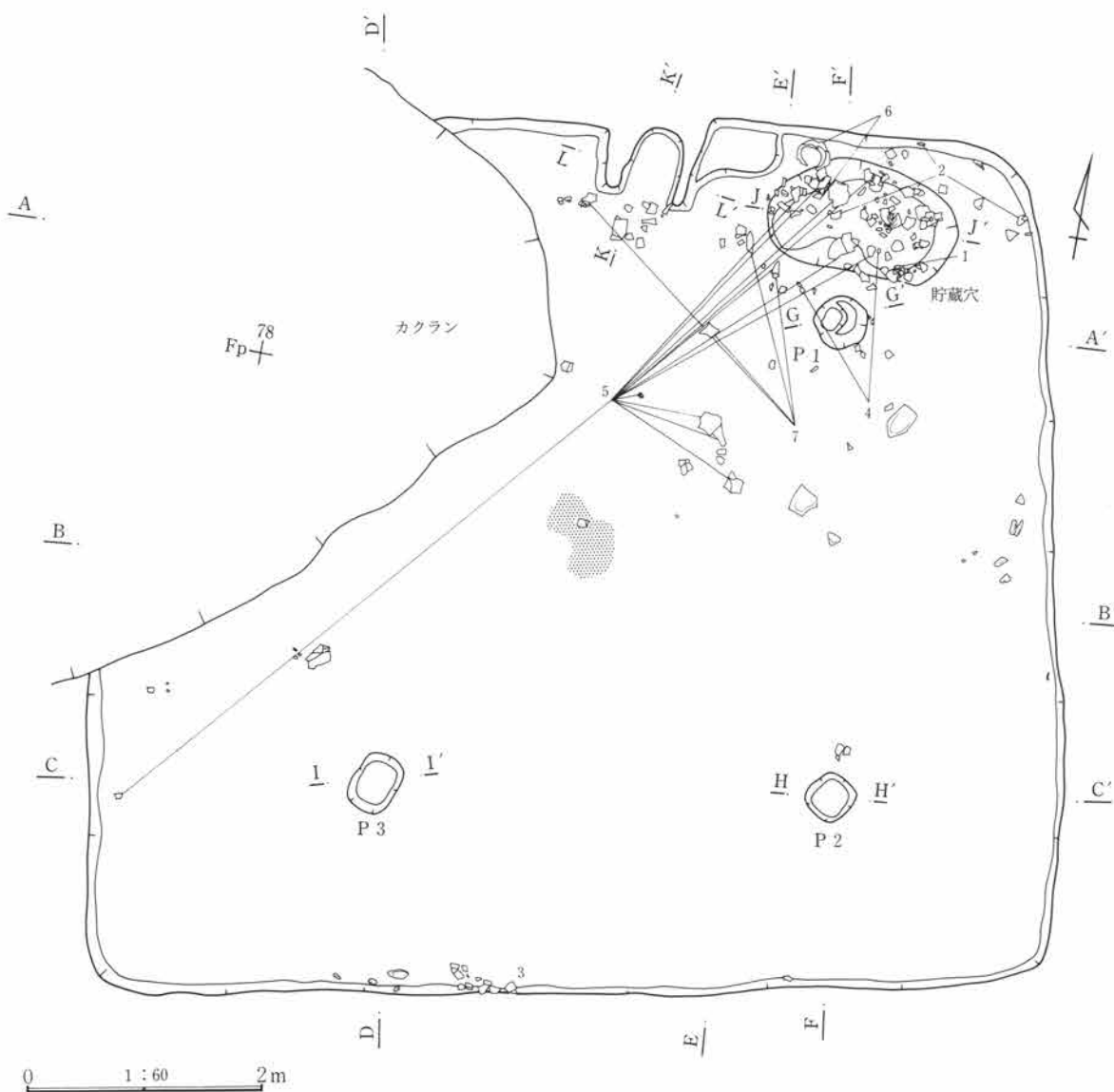
F-1号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 甕	床密着 口縁破片	口(24.0) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③橙色	長甕の口縁部破片。口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	

F-2号住居跡 (PL9・88)

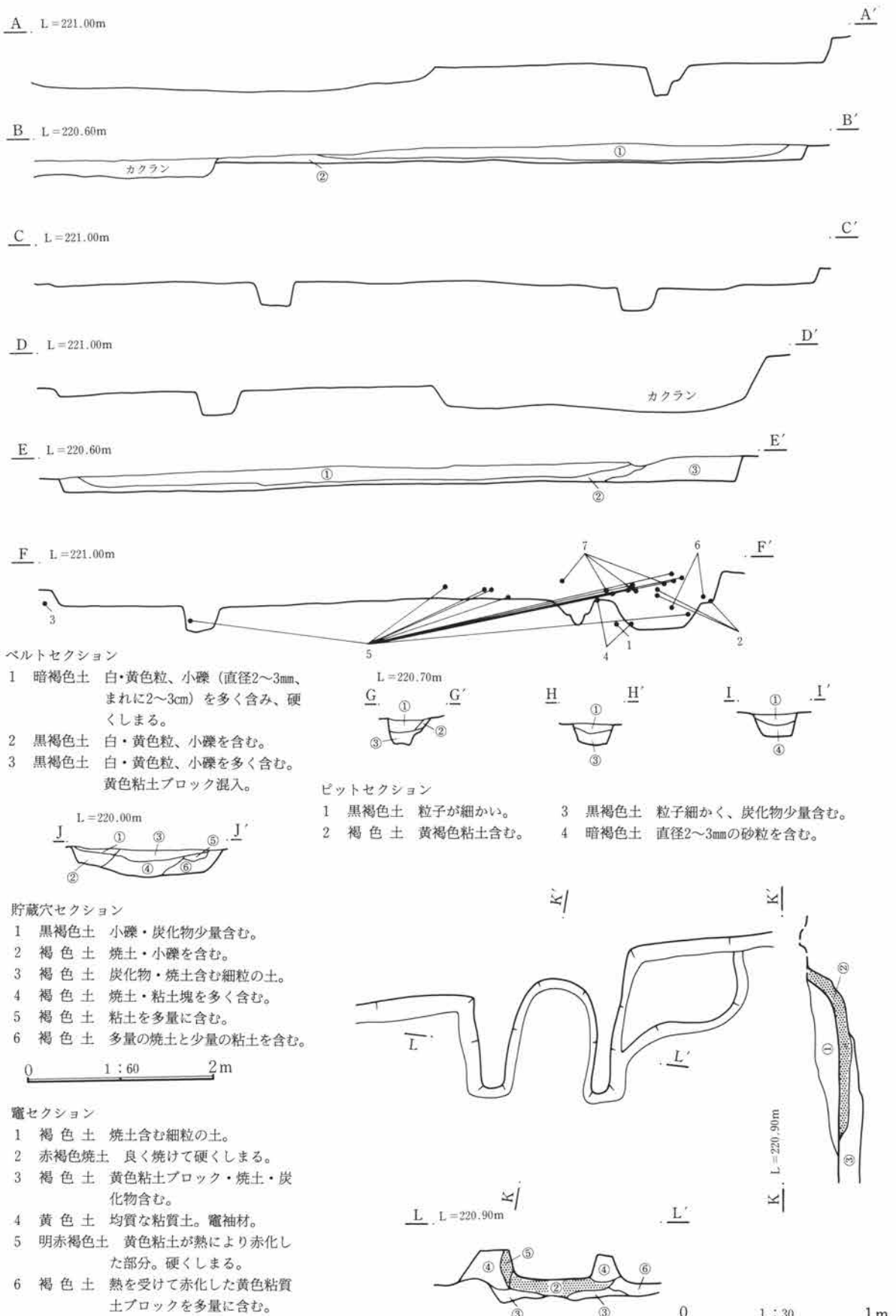
位置 Fo・Fp-77グリッド 主軸方位 N-13°-W 残存壁高 0.29m

重複 F-47・53号住を一部切って構築。北西隅は近年の攪乱によって失われている。



第51図 F-2号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



第52図 F-2号住居跡②

規模と形状 長辺8.28m・短辺7.25mのやや横長の長方形。

床面 地山の暗褐色粘質シルトを掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 北壁に所在。焚口幅43cm・燃烧部長64cm。煙道部分は削平されて残っていない。右袖脇に竈補修用と思われる黄色粘土が置かれている。

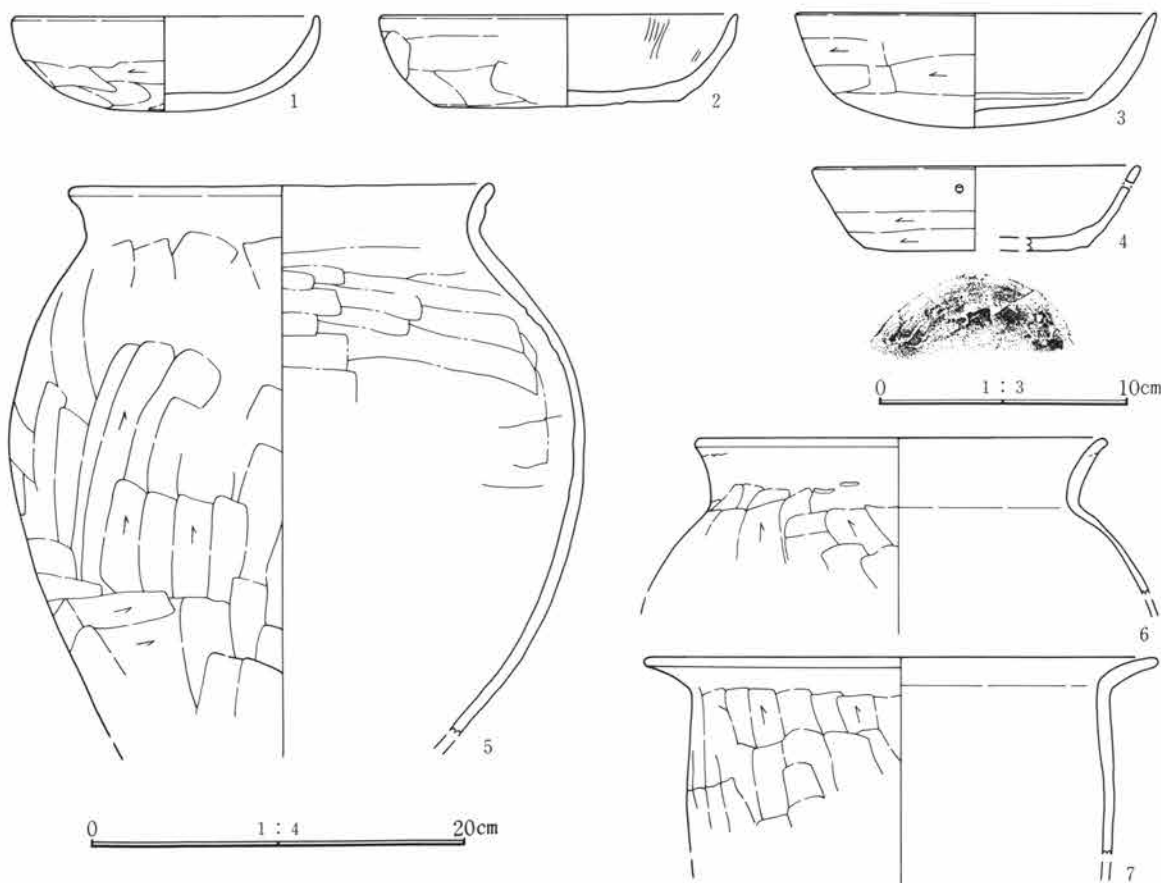
貯蔵穴 竈右脇の北東隅にあり。東西に長い楕円形で、内部及び上面から多量の遺物出土。一部壁面に黄色粘土・焼土が貼り付けられていた。埋土の状態から作り替えが行われたものと考えられる。

周溝 なし。**柱穴** 柱穴と考えられる規模・深さともに類似する小ピットを3基検出。いずれもほぼ対角線上に乗る。北西隅の柱穴は攪乱によって失われている。

出土遺物 遺物量は比較的多く、主に貯蔵穴内及び周辺から出土した。器種は、土師器坏(1~3)、須恵器坏(4)、土師器甕(5~7)がある。

掘り方 掘り方は床面とほぼ一致し、床下からは遺構の発見はない。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。他の奈良時代の住居に比べ、かなり大型である。



第53図 F-2号住居出土遺物実測図

F-2号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	貯蔵穴内 1/2	口 12.0 底 — 高 3.7	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面横位ヘラ削り。内面横ナデ。口縁部はわずかに内湾する。	
2	土師器 坏	床密着 1/2	口 14.2 底 9.8 高 3.6	①細砂粒・褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面横位ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
3	土師器 坏	貯蔵穴内 3/4	口(14.2) 底 — 高 4.5	①細砂粒含む ②普通 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面横位ヘラ削り。内面横ナデ。	
4	須恵器 坏	貯蔵穴内 1/4	口(12.7) 底 (8.8) 高 (2.3)	①緻密だがまれに小 礫含む ②良好 ③灰白色	ロクロ整形後体部外面上半横ナデ、底部および体部外面下半手持ちヘラ削り、内面横ナデ。体部の口縁下に径3mm程の小穴1個。焼成前の穿孔。	
5	土師器 甕	床密着 口~胴部 下位	口 22.3 底 — 高 —	①粗い砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁は短く外反。口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
6	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位	口 21.5 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に一部接合痕残る。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
7	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位1/4	口(27.4) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

F-3号住居跡 (PL 9・88・89)

位置 Fm-77グリッド 主軸方位 N-46°-W

残存壁高 0.14m 重複 F-1号住に一部切られる。

規模と形状 長辺7.66m・短辺7.28mのほぼ正方形。

住居の主軸がかなり西にふれている。

床面 暗褐色の粘質シルトを掘り込んで床を形成。

竈 住居の北西壁のやや北よりに所在。焚口幅48cm・燃焼部長65cm。煙道はかなり削平されているが、先端の煙出し部底部と若干の焼土面が残り、推定煙道部長は162cmとかなりの長さを持つ。

貯蔵穴 竈右脇の北隅にある。横長の楕円形状を呈す。形状及び埋土の状態から作り替えが行われたものと考えられる。

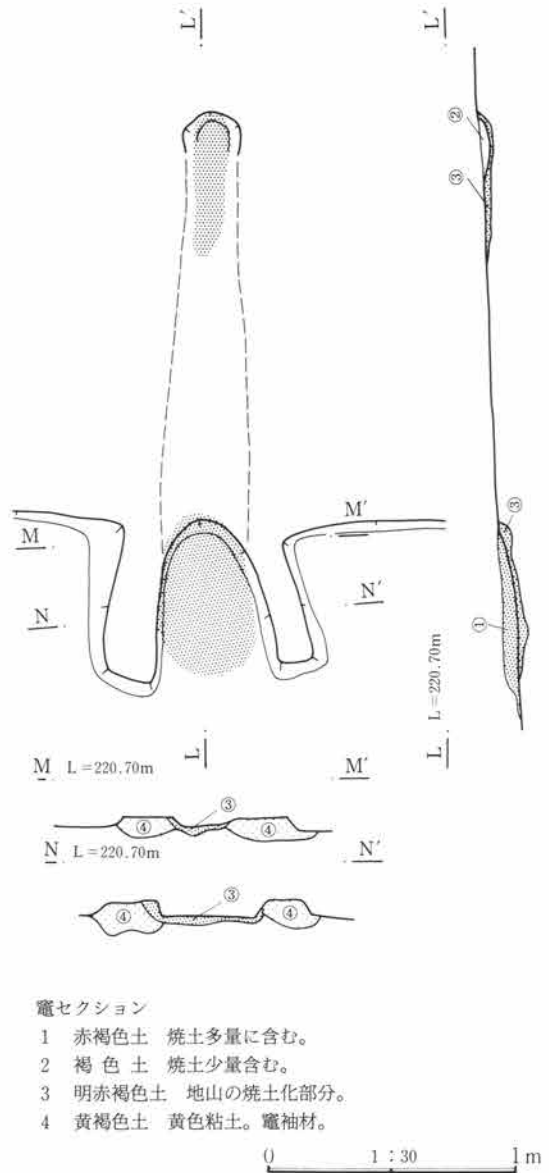
周溝 竈右脇から南西壁の半ばほどまでの、住居全周の約3分の2ほどで検出された。

柱穴 4基の小ピットがほぼ対角線上にあるが、大きさ・形状ともかなりばらつく。特にP1は非常に掘り込みが浅い。

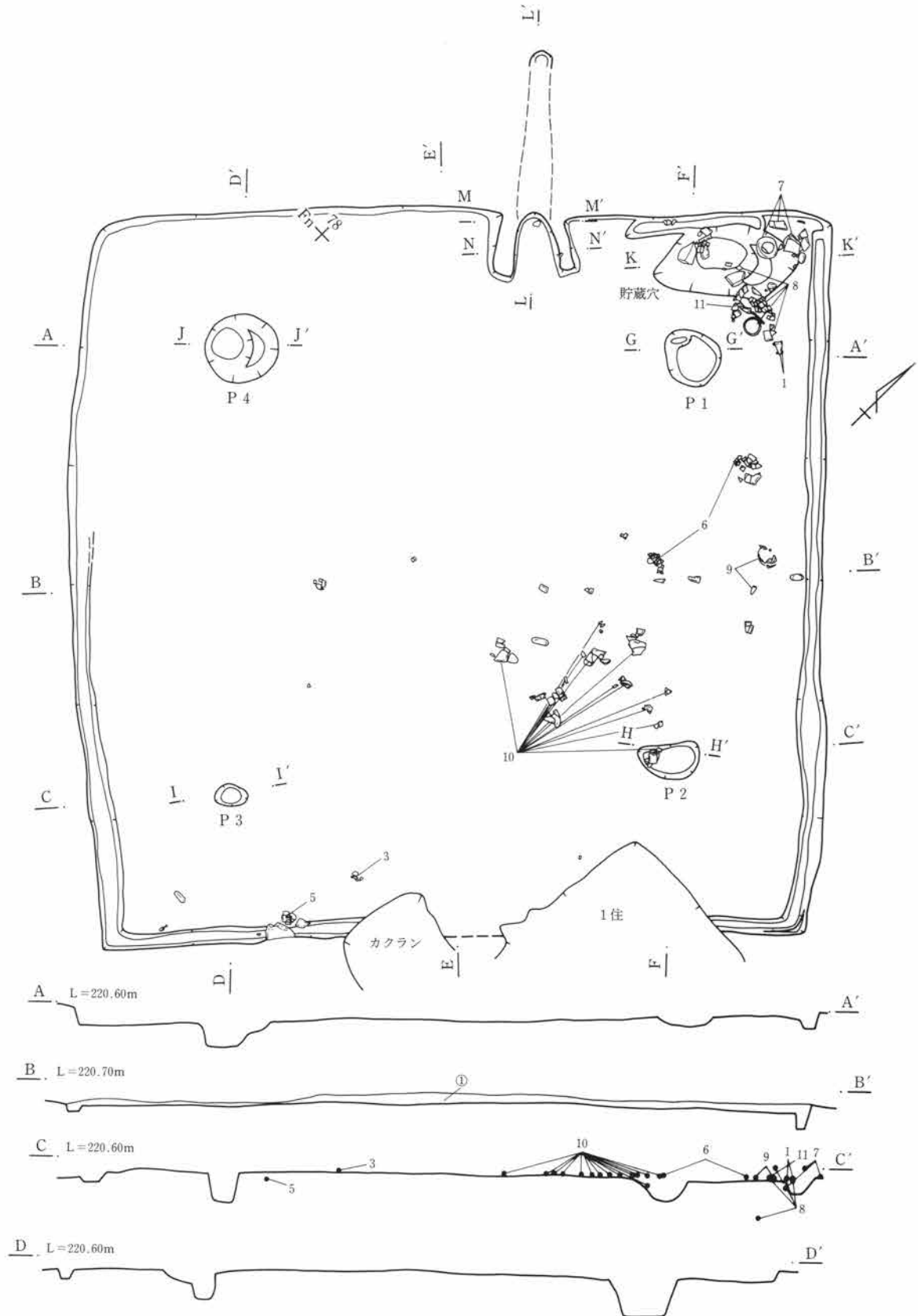
出土遺物 遺物量は少ない。住居の東よりに出土位置が片寄る傾向があるが、西側がより削平されていたためと考えられる。土師器坏(1~3)、高杯(4)、小型甕(5)、甕(6~11)などが出土している。

掘り方 掘り方は床面に一致。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と思われる。かなり大型の住居である。



第54図 F-3号住居竈



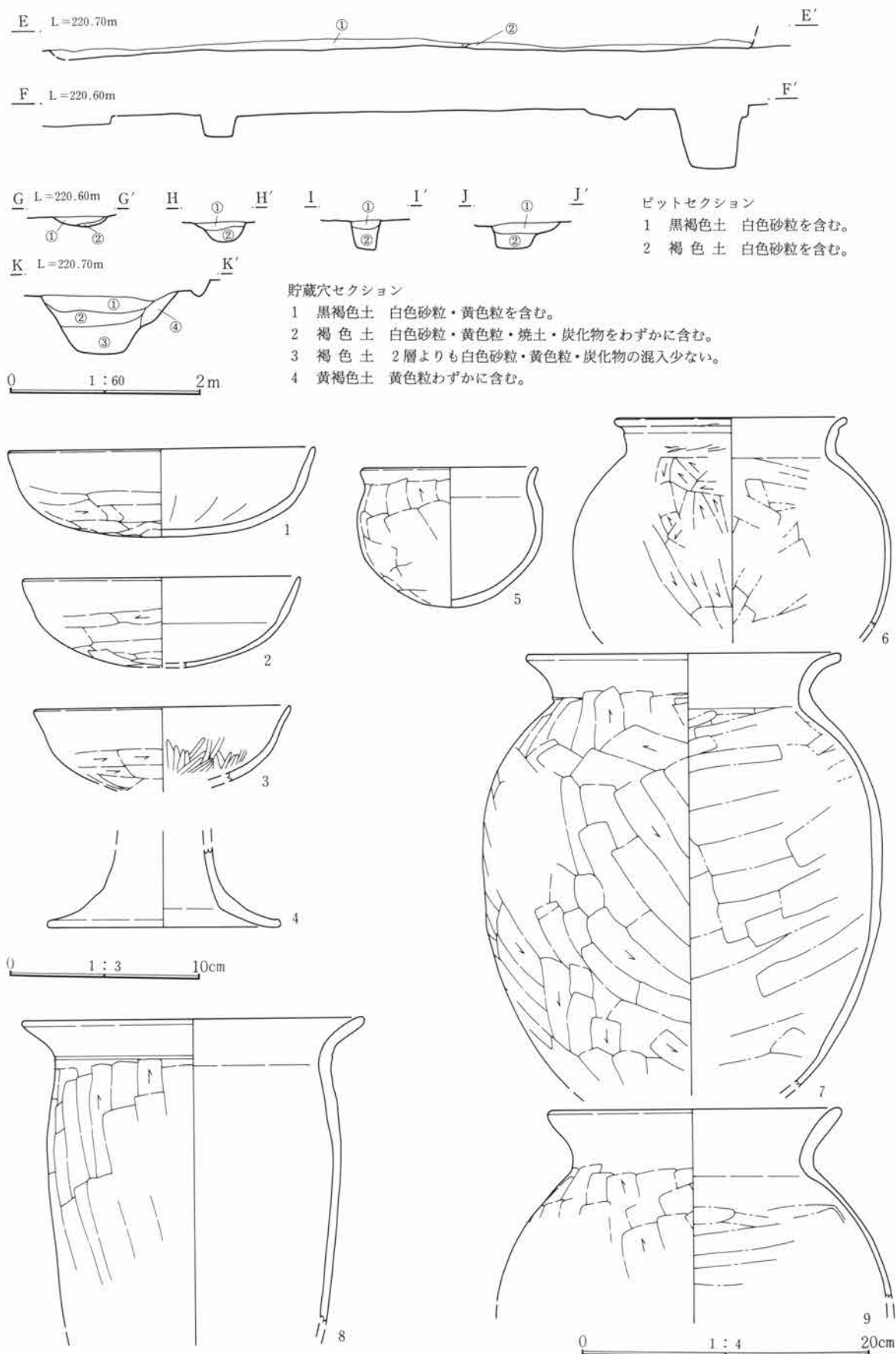
ベルトセクション

- 1 暗褐色土 小礫を含む。しまり良。
- 2 褐色土 小礫を若干含む。

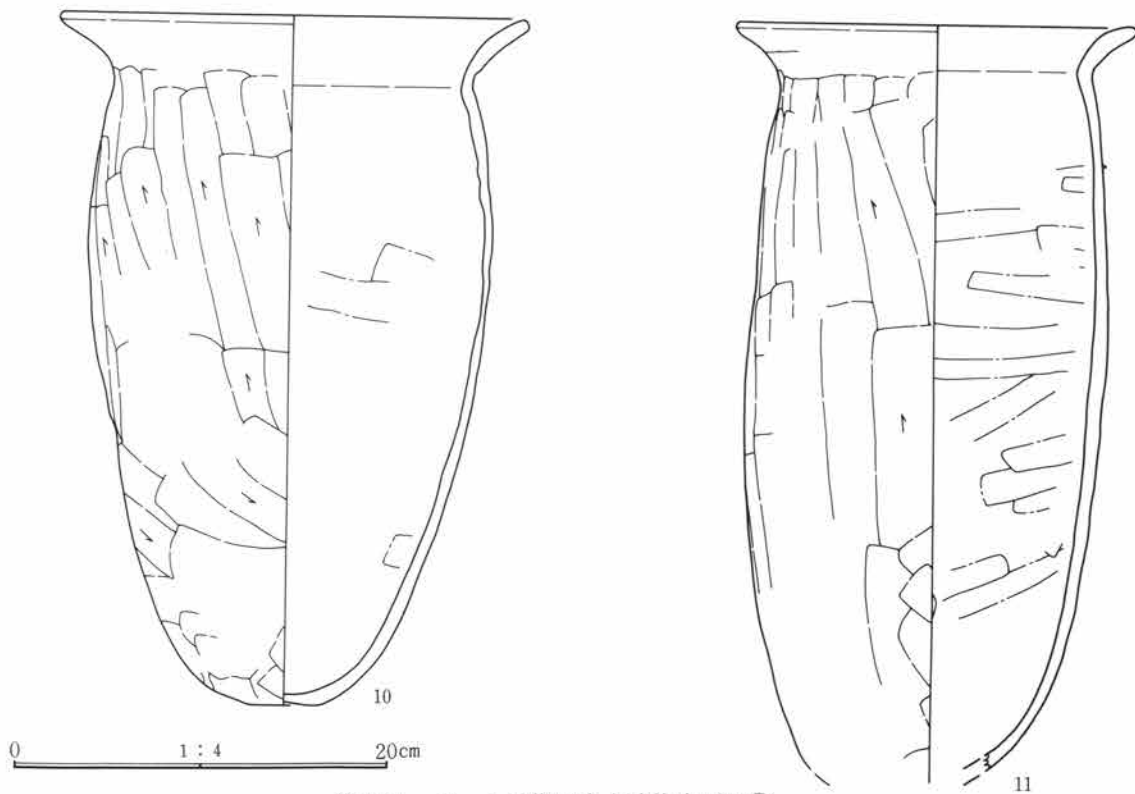
第55図 F-3号住居跡①

0 1:60 2m

第3章 検出された遺構と遺物



第56図 F-3号住居跡②、出土遺物実測図①



第57図 F-3号住居出土遺物実測図②

F-3号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/2	口(15.7) 底— 高 4.5	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面横ナデ後放射状暗文。底部内面には螺旋状の暗文。	
2	土師器 坏	覆土 1/4	口(14.2) 底— 高 4.5	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
3	土師器 坏	床密着 1/5	口(13.2) 底— 高—	①砂粒(まれに小礫)含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面横ナデ後ヘラ磨き。	
4	土師器 高坏	覆土 脚部	口— 底(12.2) 高—	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	高坏の脚部のみ残存。外面横ナデ。内面ヘラ削り後横ナデか。	
5	土師器 小型甕	床密着 口~胴部 1/5	口(12.2) 底— 高 9.6	①粗い砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデか。	
6	土師器 甕	床密着 口~胴部 下位1/5	口(16.0) 底— 高—	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。口縁部中段に横ナデ調整時の稜線見られる。	内面に煤付着
7	土師器 甕	床密着 口~胴部	口 21.8 底— 高—	①粗い砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ後ナデ。	
8	土師器 甕	床密着 口~胴部 上半	口 23.2 底— 高—	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。外面頸部には、口縁の横ナデ時の工具端の当たり部分が沈線状に残る。胴部外面のヘラ削りがこの沈線を切る。胴部内面ナデ	
9	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位	口 20.1 底— 高—	①砂粒(まれに岩片)含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ胴部の器肉はかなり薄い。	
10	土師器 甕	床密着 口~底部	口 24.6 底(3.6) 高 36.5	①粗砂粒(まれに岩片)含む ②普通 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラナデ、内面横ナデ。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
11	土師器 甕	床密着 口～胴部	口 21.0 底 — 高 —	①かなりの砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、一部外面に接合痕残る。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

F-4号住居跡 (PL10・89～91)

位置 Fn・Fo-75グリッド 主軸方位 N-1°-W 残存壁高 0.47m 重複 F-42・47号住を切る。

規模と形状 長辺7.20m・短辺7.10mのほぼ正方形。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、崩落等はほとんどない。

床面 浅い掘り方の上面に黄褐色シルトを含んだ土を薄く敷いて平坦な床面を形成。

竈 住居北壁のほぼ中央部に所在(竈No.1)。焚口幅62cm・燃烧部長69cm。煙道の先端部分は上部が若干削平されているが、燃烧部近くでは天井が残っている。煙道部長106cm。竈の燃烧部のほぼ中央から完形の坏が1点、右袖の脇から坏2点が出土している。また竈の右側には古い竈の煙道部分が残っており(竈No.2)、旧竈の廃絶・破壊の後に新しい竈を作っている。

貯蔵穴 住居北東部から2基検出。東側の貯蔵穴No.2の埋土中に多量の焼土・粘質土が含まれることから、旧竈の廃絶にともなって廃土で埋められ、新しい竈の構築に伴って貯蔵穴No.1が造られたものと考えられる。

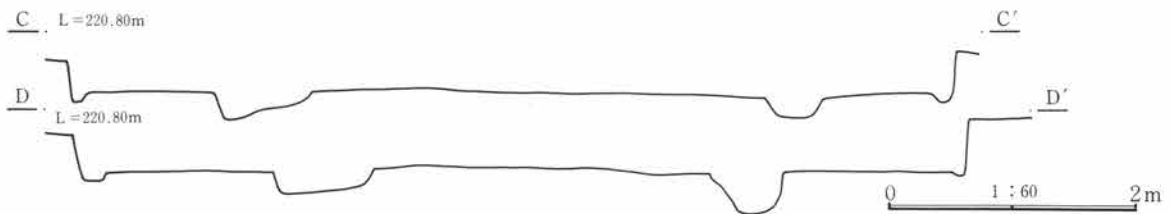
周溝 東壁の南側2/3・南壁・西壁・北壁の西隅で検出。

柱穴 4基の小ピットが検出された。ほぼ対角線上に位置するが南東隅の1基がやや東よりにずれる。

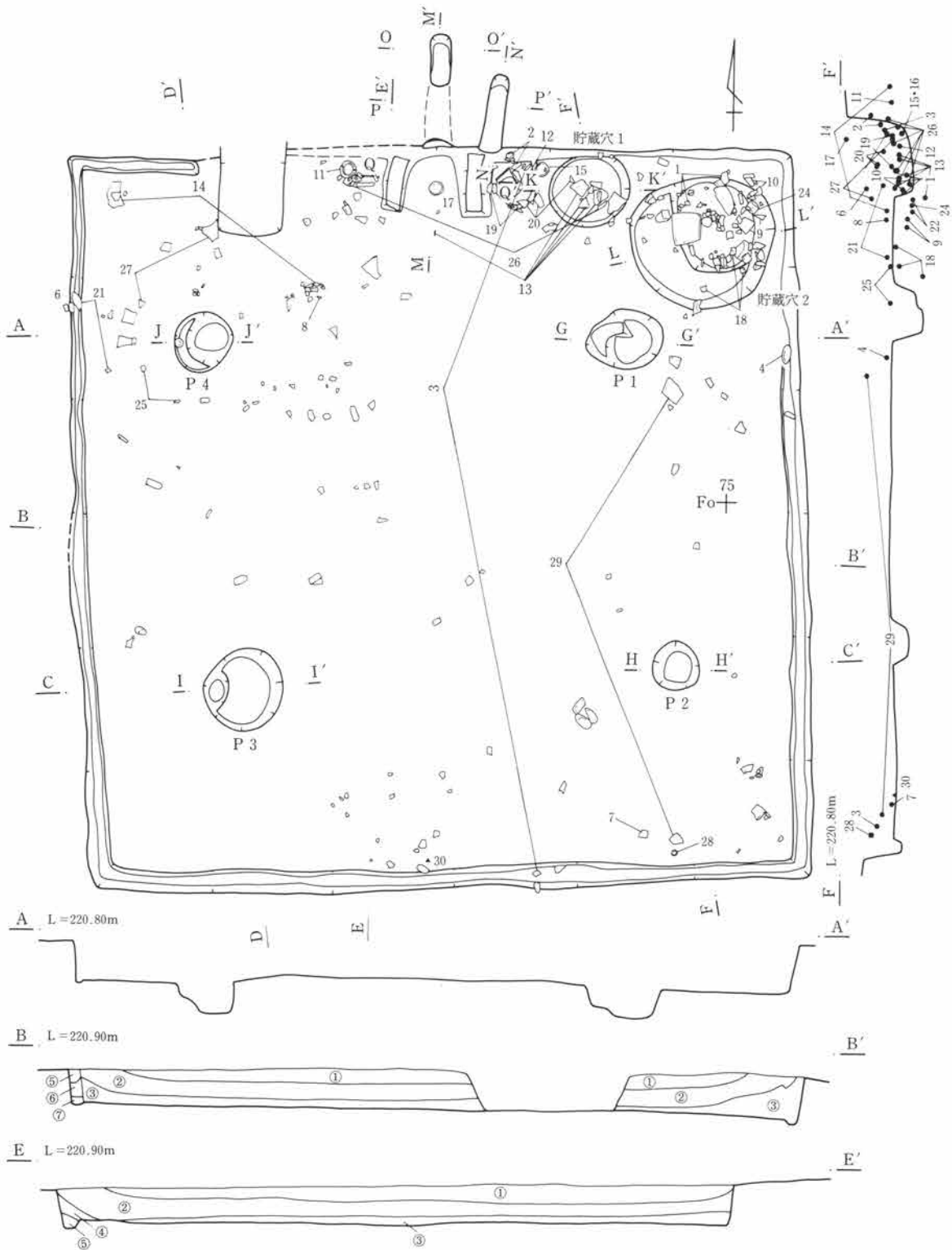
出土遺物 時期の異なる2群の土器が出土。二時期の土器は混在して出土しているが、より古い7世紀後半代の土器が住居全体に散在しているのに対し、新しい8世紀代の土器は住居北半に分布している。竈周辺には完形の坏や甕などがまとまる傾向あり。古い一群の土器には、土師器坏(1～5)、須恵器坏(6・7)・長頸壺(8)、土師器鉢(9)・小型甕(10・11)・甕(12～14)がある。また新しい一群の土器は、土師器坏(15～22)・小型台付甕(24)・小型甕(25)・甕(26)、須恵器坏(23)・甕(27)がある。この他に石製の紡錘車(28)と、置き竈の破片(29)が出土している。また、覆土中より鉄滓(30)が出土している。

掘り方 住居全面に深さ10cmほどの掘り方が造られる。遺物も住居北半で散在して出土。北東隅近くの床下から3基のピット検出。

調査所見 二時期の土器が出土していることから住居の重複が考えられるが、調査時には確認できなかった。また遺物の分布から見ても、住居北半に8世紀代の土器が集中する傾向は捉えられるが、両者を明確に分離することはできない。竈と貯蔵穴はそれぞれ2基ずつ確認されているが、古い竈の煙道および貯蔵穴内からも新しい時期の土器が出土していることから、いずれも8世紀代の住居に伴う作り替えと考えられる。ただし、7世紀後半代の土器も床面や壁に密着して出土していることから、全くの混入とは考えられない。したがって、両時期の住居がたまたま輪郭をほぼ同じくして、構築されたと推測される。一部ベルトセクションにもその痕跡らしい立ち上がりが見られる。



第58図 F-4号住居跡①



ベルトセクション

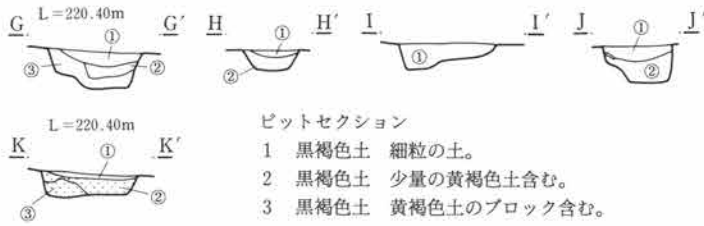
- 1 褐色土 白・黄色粒、小礫を多量に含む。
- 2 褐色土 白・黄色粒、小礫を少量含む。
- 3 暗褐色土 2層よりもやや色調明るく、ごく弱い粘性持つ。
- 4 暗褐色土 白・黄色粒をわずかに含み、弱い粘性持つ。
- 5 黄褐色土 白・黄色粒、小礫多量に含む。地山黄褐色シルト混入。

- 6 暗褐色土 白・黄色粒、小礫多量に含む。
- 7 褐色土 白・黄色粒を若干含む。ごく弱い粘性あり。

第59図 F-4号住居跡②

0 1:60 2m

第3章 検出された遺構と遺物

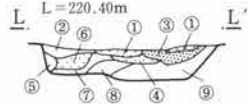


ピットセクション

- 1 黒褐色土 細粒の土。
- 2 黒褐色土 少量の黄褐色土含む。
- 3 黒褐色土 黄褐色土のブロック含む。

貯蔵穴No 1セクション

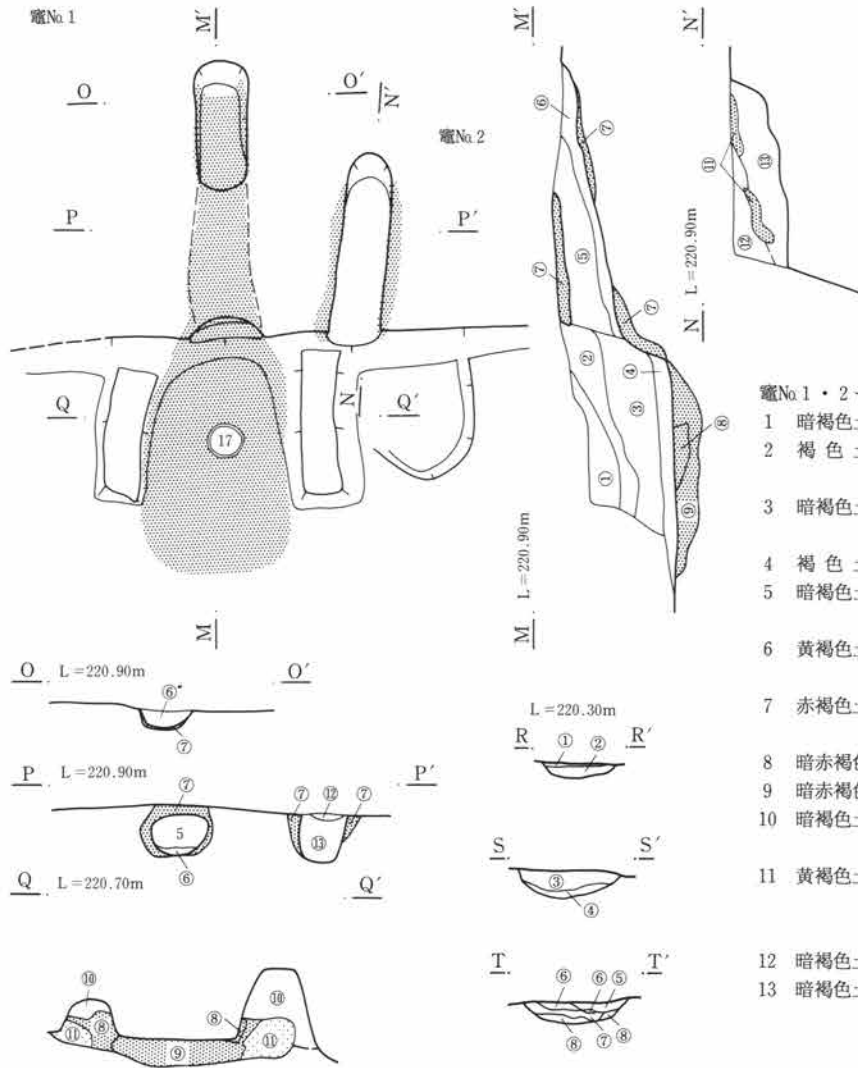
- 1 褐色土 細粒の土。
- 2 黄色土 黄色シルトからなり粘性持つ。
- 3 黄褐色土 黄色シルト主体とし砂礫含む。



貯蔵穴No 2セクション

- 1 淡黄色土 黄色シルトを主体とし若干の焼土含む。粘性強い。
- 2 暗褐色土 黄色粒、焼土粒わずかに含む。
- 3 暗赤褐色土 焼土ブロック、炭化物を多量に含む。
- 4 黄褐色土 炭化物、焼土粒をわずかに含む。
- 5 暗褐色土 黄色粒をわずかに含む。
- 6 黄褐色土 黄色シルトのブロックを多量に含む。
- 7 暗褐色土 少量の焼土及びわずかの炭化物、黄色土含む。
- 8 黄褐色土 黄色シルトブロック、焼土、炭化物含む。
- 9 褐色土 黄色粒、焼土粒をわずかに含む。

0 1:60 2m



竈No 1・2セクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、小礫を少量含む。
- 2 褐色土 白・黄色粒、小礫を多量に含む。
- 3 暗褐色土 地山黄褐色シルトを少量含む。竈崩落土か。
- 4 褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
- 5 暗褐色土 黄褐色シルト、焼土ブロック、炭化物を含む。
- 6 黄褐色土 多量の黄色シルト、焼土ブロック含む。
- 7 赤褐色土 地山土が熱によって焼土化した部分。
- 8 暗赤褐色土 非常に多量の焼土を含む。
- 9 暗赤褐色土 多量の焼土、炭化物を含む。
- 10 暗褐色土 小礫、焼土粒、黄色粒を少量含む。
- 11 黄褐色土 少量の焼土粒、炭化物及び多量の地山黄褐色シルト含み粘性強い。
- 12 暗褐色土 焼土、黄色粒をわずかに含む。
- 13 暗褐色土 12層よりも焼土の混入多い。

床下ピットセクション

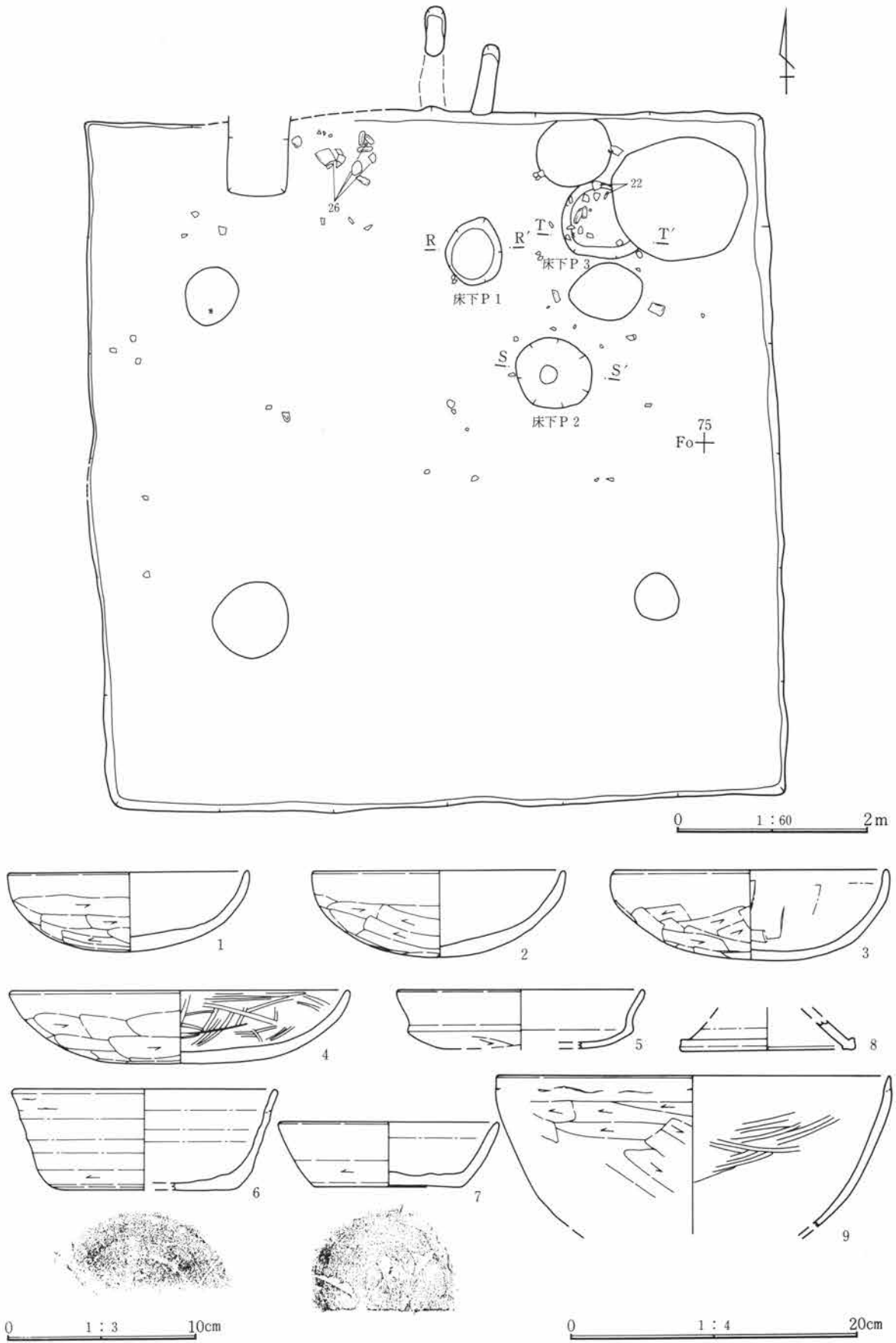
- 1 褐色土 黄色粒、焼土、暗褐色土のブロックを含む。
- 2 暗赤褐色土 焼土を多量に含む。黄色シルト、暗褐色土のブロックを少量混入。
- 3 褐色土 焼土、黄色シルトブロックを含む。

- 4 褐色土 3層よりも焼土、黄色シルトの混入少ない。
- 5 暗褐色土 若干の砂礫、焼土、炭化物含む。
- 6 黄灰色土 均質でしまり良。若干の焼土混入。
- 7 暗褐色土 少量の砂礫、焼土、炭化物含む。
- 8 褐色土 若干の焼土、炭化物含む。

0 1:30 1m

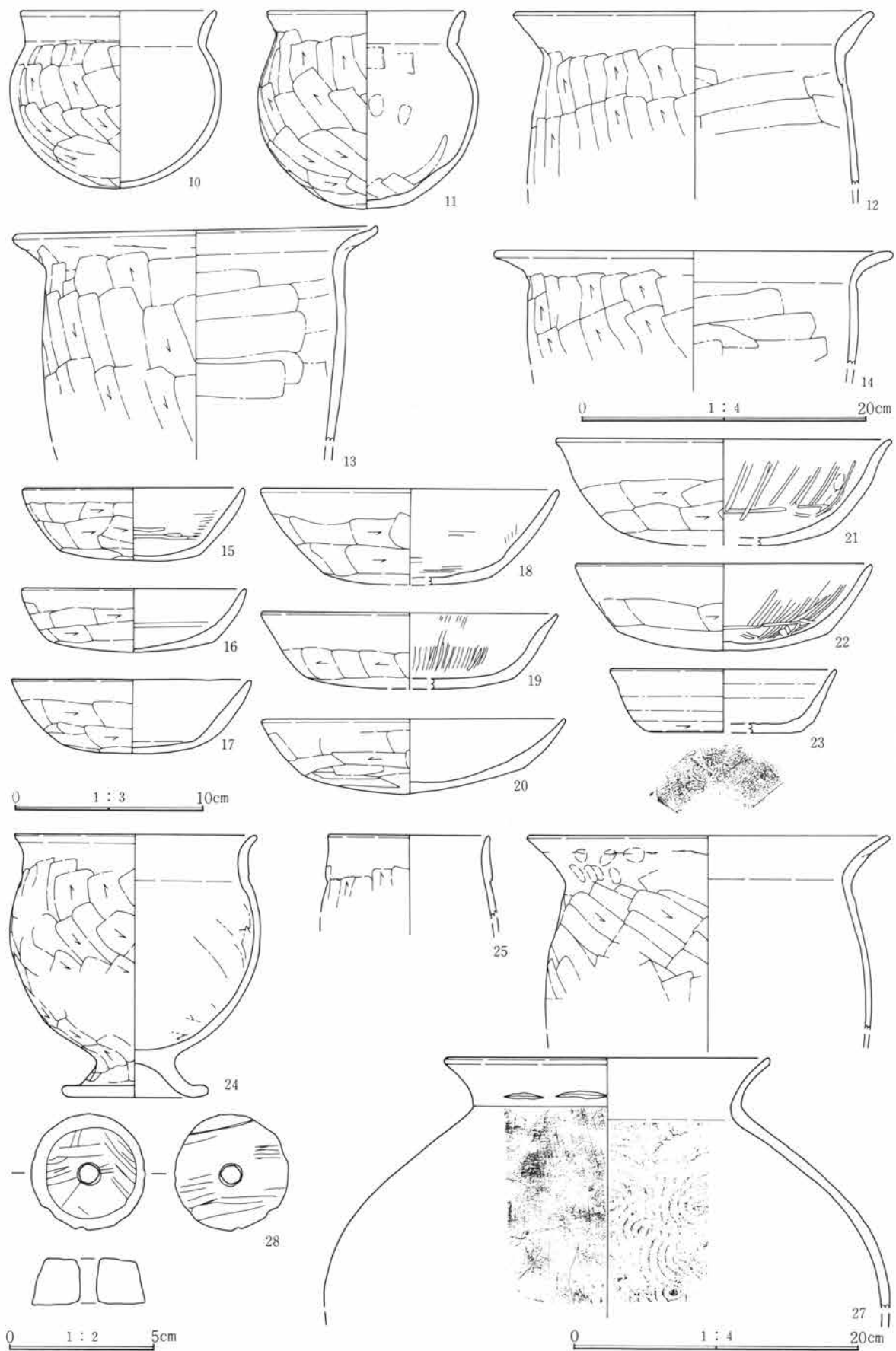
0 1:60 2m

第60図 F-4号住居跡③

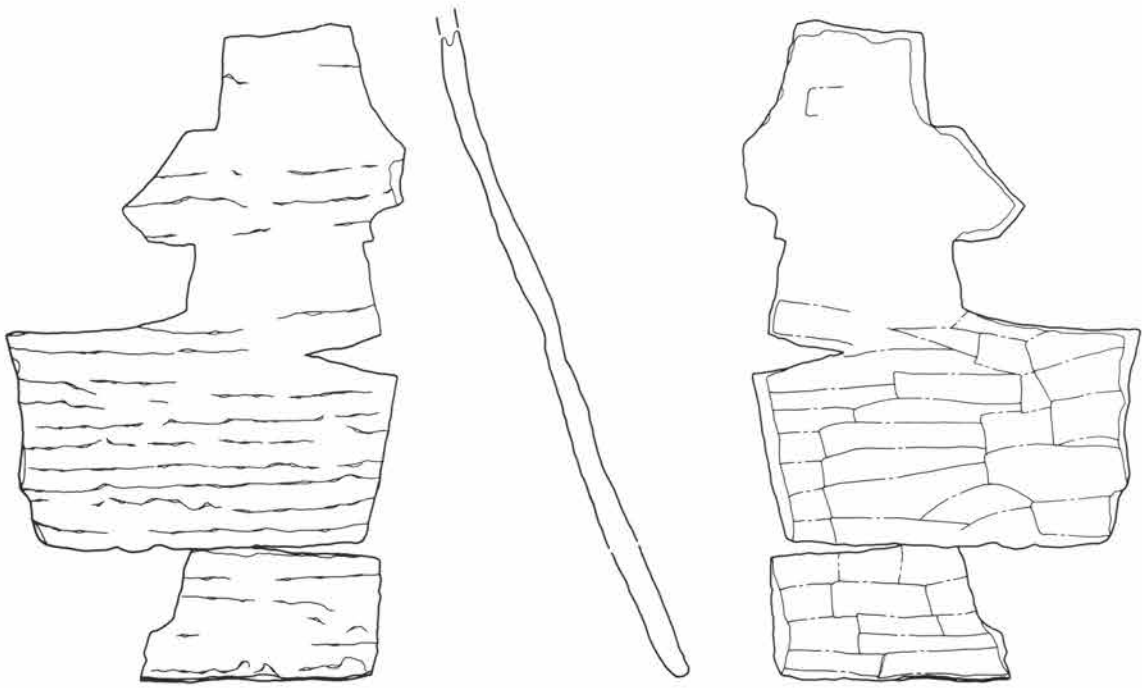


第61図 F-4号住居掘り方、出土遺物実測図①

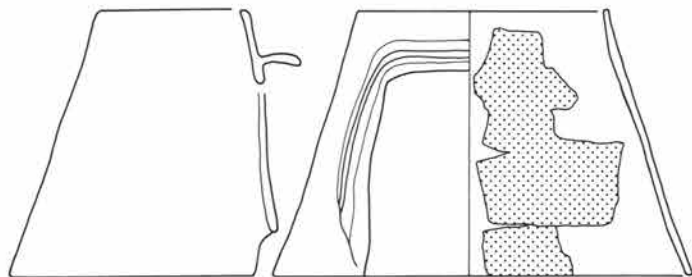
第3章 検出された遺構と遺物



第62図 F-4号住居出土遺物実測図②



29



置き竈 模式図

0 1:4 20cm

第63図 F-4号住居出土遺物実測図③

第3章 検出された遺構と遺物

F-4号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 12.6 底 — 高 4.0	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。器面がやや荒れているため明確ではないが、内面横ナデ後ヘラ磨きか。	
2	土師器 坏	+10cm 1/5	口 13.1 底 — 高 4.4	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
3	土師器 坏	+10cm 1/5	口 14.0 底 — 高 4.6	①細砂粒(まれに小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。内面にヘラ工具のあたり。	
4	土師器 坏	+10cm 口縁1/2欠	口 17.6 底 — 高 3.7	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、胴部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
5	土師器 坏	+13cm 口~体部 1/4	口(12.8) 底 — 高 —	①砂粒含む ②やや堅緻 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。口縁部と体部の境の稜線は明瞭。	
6	須恵器 坏	+20cm 1/3	口(13.6) 底(9.8) 高 5.2	①砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。体部外面下部回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。外面の口縁近くに接合痕。	
7	須恵器 坏	床密着 1/5	口(11.4) 底(8.2) 高 3.3	①緻密で細砂わずかに含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部および体部外面下部右回転の回転ヘラ削り。	
8	須恵器 長頸壺	床密着 脚部1/4	口 — 底(11.5) 高 —	①緻密で細砂わずかに含む ②堅緻 ③オリーブ灰色	長頸壺の脚部破片。ロクロ整形。	
9	土師器 鉢	貯蔵穴No 2内 口~体部	口(27.4) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③明褐色	口縁部外面横ナデ、接合痕あり。体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
10	土師器 小型甕	床密着 1/5	口 13.5 底 — 高 12.4	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ後ナデ。	
11	土師器 小型甕	床密着 口縁部一 部欠	口 13.7 底 — 高 13.6	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ後ナデ。胴部内面に指頭圧痕とヘラ工具のあたり見られる。	
12	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位	口 24.9 底 — 高 —	①粗砂粒含み赤褐色 粒子目立つ ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
13	土師器 甕	貯蔵穴No 1・2内 口~胴部	口 25.3 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。口縁部には接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
14	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位1/5	口(27.5) 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
15	土師器 坏	床密着 完形	口 11.5 底 7.5 高 3.7	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ後横ナデ、後ヘラ磨き。内面にヘラ状工具のあたり痕。	
16	土師器 坏	床密着 完形	口 11.6 底 — 高 3.3	①細砂粒含む ②やや軟質 ③明褐色	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデか。内面の屈曲部に沈線が一本めぐる。	
17	土師器 坏	カマド内 完形	口 12.5 底 7.0 高 3.8	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。器面がやや荒れているため明確ではないが、内面横ナデ後ヘラ磨きか。	
18	土師器 坏	床密着 1/5	口(15.5) 底(8.4) 高 4.9	①細砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
19	土師器 坏	床密着 2/5	口 15.5 底 10.8 高 3.9	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後、放射状のヘラ磨き。	

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
20	土師器 坏	+10cm 1/5	口 15.6 底 — 高 3.9	①細砂粒含む ②やや軟質 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ナデか。			
21	土師器 坏	床密着 2/3	口 17.5 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後、放射状の暗文施文。内面に指頭圧痕。			
22	土師器 坏	床下土坑 3内 1/4	口(15.6) 底(11.2) 高 4.5	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。			
23	須恵器 坏	覆土 1/4	口(11.7) 底(8.3) 高(3.3)	①緻密で細砂わずかに含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部および体部外面下部手持ちヘラ削り。			
24	土師器 小型台付甕	貯蔵穴No 2内 口～台部	口(16.8) 底(10.2) 高(18.2)	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。内面にヘラ状工具のあたり。台端部内外面横ナデ。台部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
25	土師器 小型甕	床密着 口～頸部 1/5	口(11.2) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③におい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。口縁部は直立し、端部がわずかに外反。			
26	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位	口 25.2 底 — 高 —	①細砂粒含む ②良好 ③におい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面には接合痕と指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。器肉比較的薄い。			
27	須恵器 甕	床密着 口～胴部 下位	口(22.5) 底 — 高 —	①砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。胴部外面平行叩目、内面青海波文。胴部外面叩後ナデ。口縁部に整形工具のあたり。			
29	土師器 置きカマド	+20cm	口 — 底 — 高 —	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	内外面横ナデ。内面の調整は比較的丁寧だが、外面は接合痕顕著に残る。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
28	紡錘車	+20cm 完形	4.0	4.0	1.6	33.2	流紋岩	器体全面を研磨しており、擦痕が見られる。ほぼ中央に直径8mmの円孔。
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
30	鉄滓	床密着	6.3	5.0	2.4	72.7	破片	表面は溶けてガラス状で、金属光沢持つ。

F—5号住居跡 (PL10・91・92)

位置 Fk・Fl—73グリッド 主軸方位 N—28°—W 残存壁高 0.54m 重複 なし

規模と形状 長辺4.49m・短辺3.66mの横長の長方形。住居の主軸がかなり西にふれている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、崩落などは見られなかった。

床面 床面は掘り方に一致し、床下からは遺構は検出されなかった。地山の黒褐色砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の中央よりやや東側に所在。焚口幅53cm・燃焼部長70cm。比較的残存状況は良好で、煙道も天井部分が崩落せずに残っている。煙道部長103cm。両袖の先端燃焼部側に板状の砂岩を立てて袖石としている。その上部には同じ砂岩の天井石がかけられていたが、途中で折れて燃焼部に落ち込んでいる。竈内部からは長甕が1点出土したが、竈廃絶後に廃棄されたものであろう。また燃焼部底面には板状の砂岩が置かれており、支脚として使用されていたものと考えられる。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。やや住居長辺方向が長い楕円形を呈する。

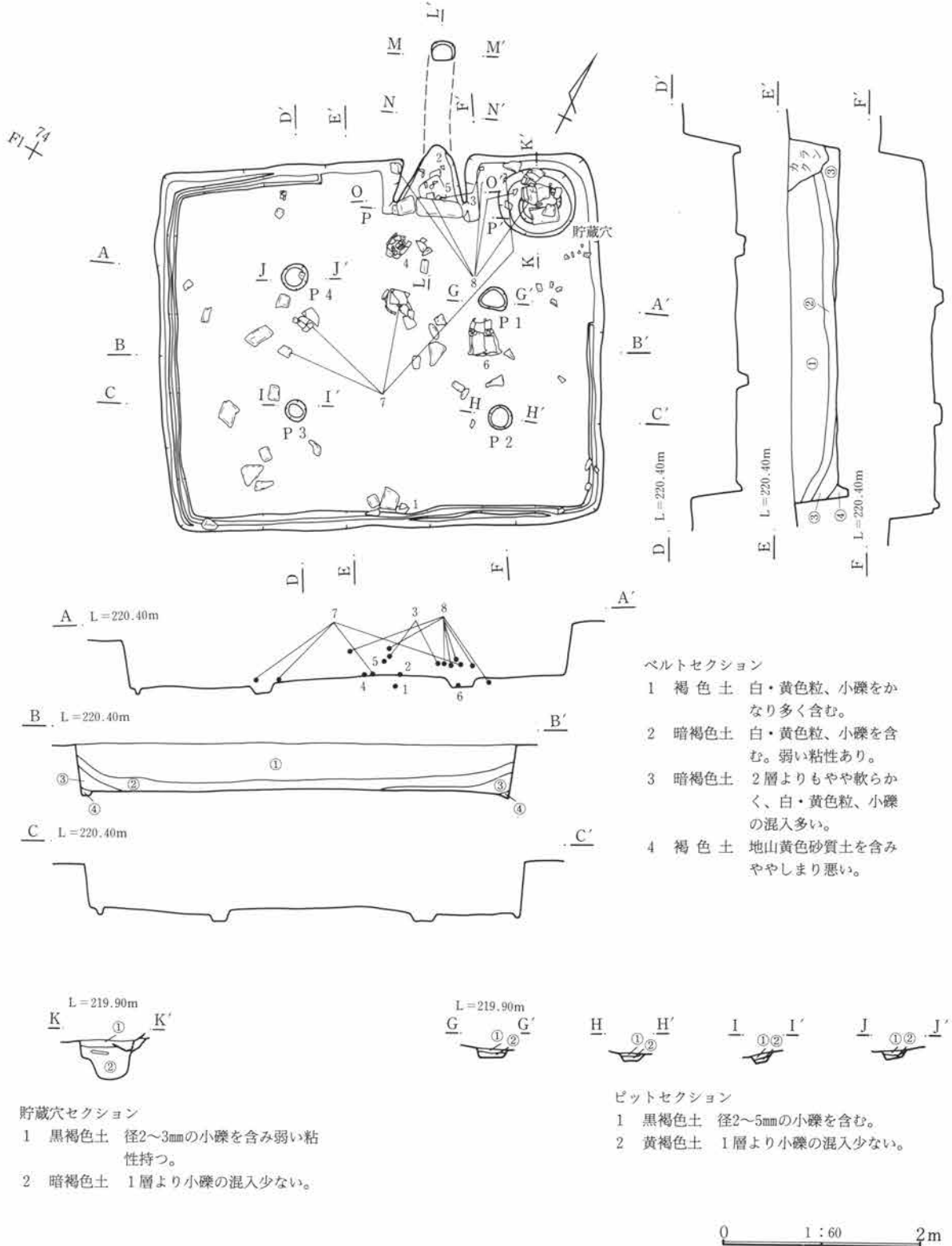
周溝 北壁の竈両脇及びそれに続く東壁北半を除いて住居周辺より検出。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するが北東隅の1基(P1)はやや南側にずれる。いずれのピットも掘り込みは非常に浅い。

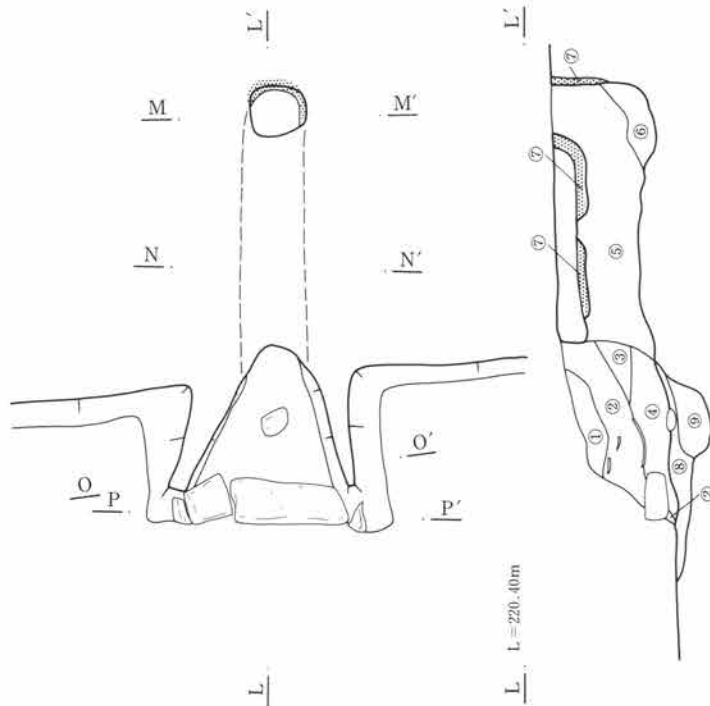
第3章 検出された遺構と遺物

出土遺物 遺物は住居内に散在。多くは床面から浮いた状態で出土した。土師器の他に板状の砂岩がかなり含まれている。器種は土師器坏(1~3)、小型甕(4)、甕(5~8)などが見られる。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。

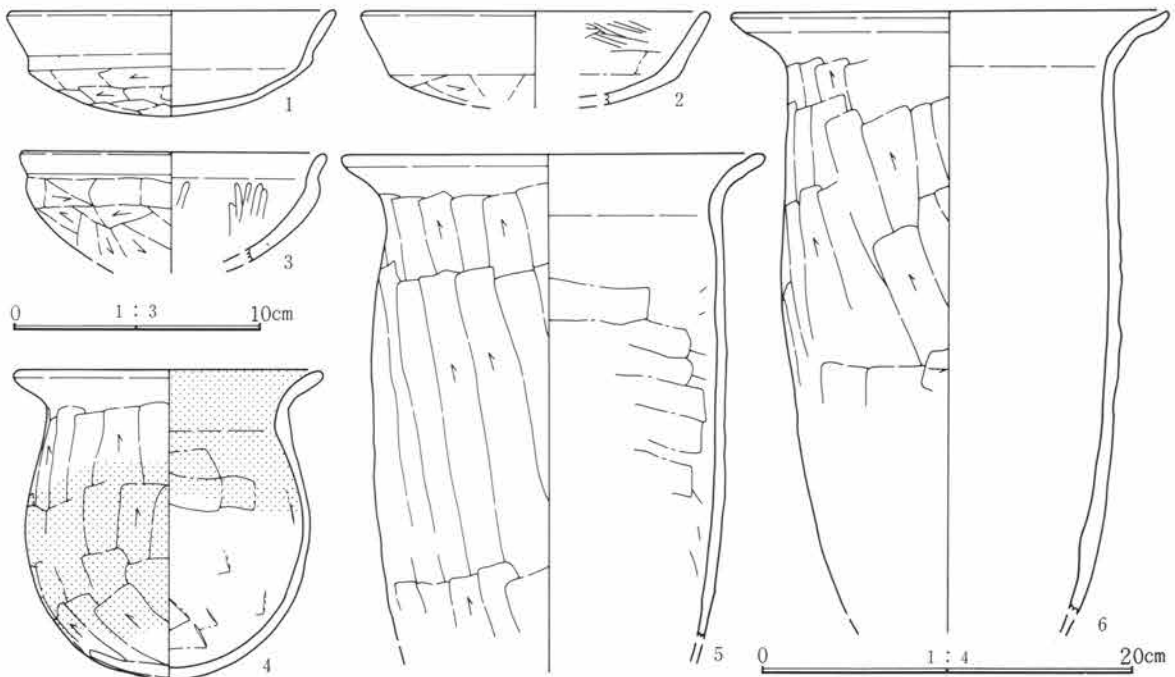
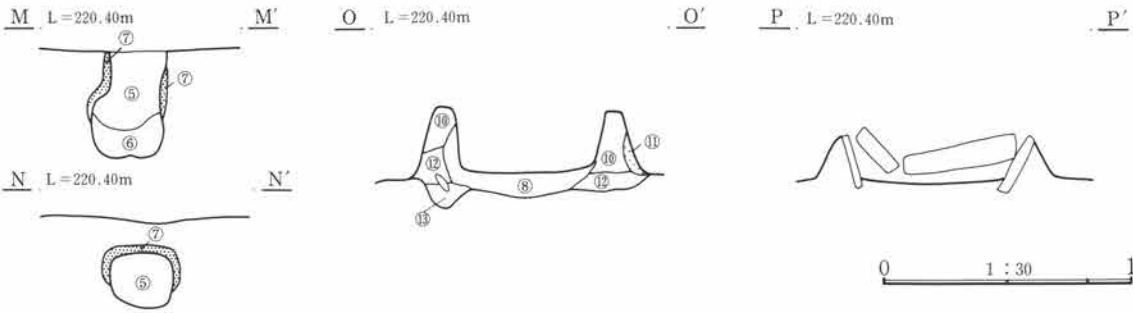


第64図 F-5号住居跡

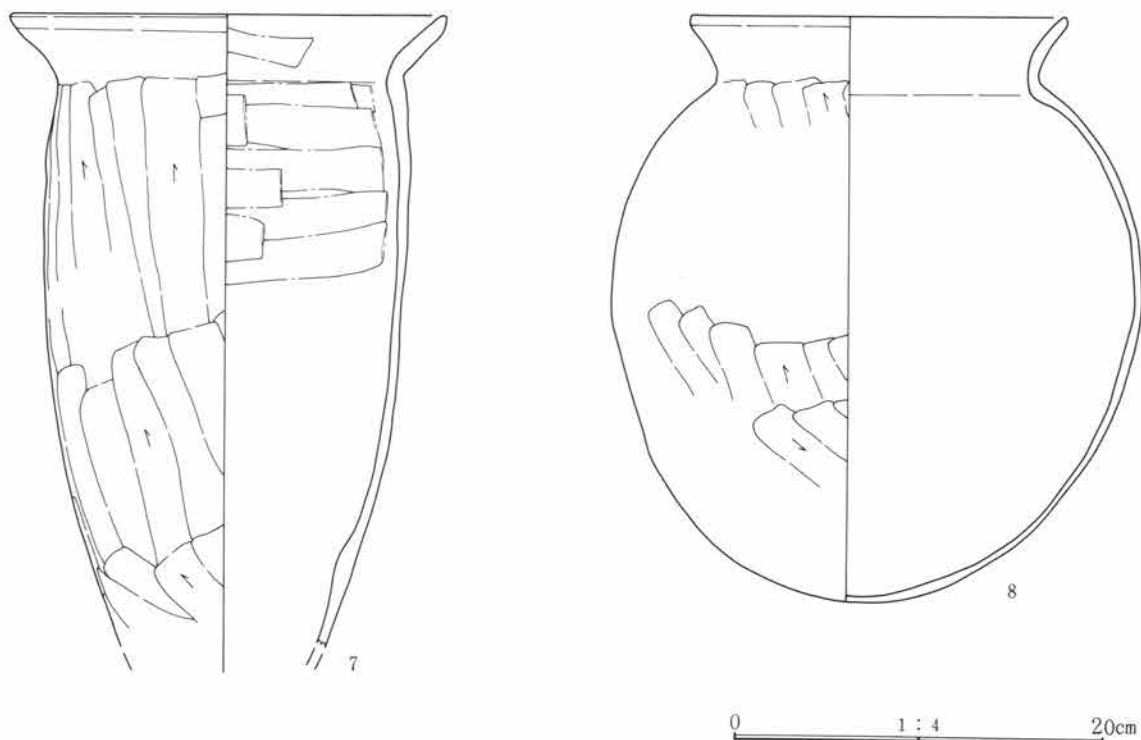


竈セクション

- 1 暗褐色土 径1~2mmの砂礫含み、良くしまった土。
- 2 暗褐色土 1層よりも砂礫の混入少ない。
- 3 暗褐色土 細粒で粘性を持つ。
- 4 暗褐色土 焼土炭化物を含み粘性持つ。
- 5 暗褐色土 若干の焼土・炭化物含みやや軟質。
- 6 暗褐色土 地山砂質土をかなり含む。炭化物若干混入。
- 7 暗褐色焼土 地山が熱を受けて赤化した部分。
- 8 暗褐色土 小礫・焼土・炭化物を少量含む。
- 9 暗褐色土 地山砂質土と粘質シルト主体。若干の焼土・黄色粒混入。
- 10 褐色土 少量の砂礫及び粘質土含み硬くしまる。
- 11 黄褐色土 均質でしまり良。細粒のローム質土。
- 12 褐色土 少量の砂礫含む。黄色粒・炭化物わずかに混入。
- 13 暗褐色土 少量の焼土・炭化物含む。



第65図 F-5号住居竈、出土遺物実測図①



第66図 F-5号住居出土遺物実測図②

F-5号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/4	口 12.6 底 — 高 4.1	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	カマド内 1/4	口(13.8) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
3	土師器 坏	床密着 1/4	口(11.8) 底 — 高 —	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁が短く外反し立ち上がり、体部比較的深い。口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後放射状のヘラ磨き。	
4	土師器 小型甕	床密着 1/2	口 16.1 底 — 高 16.3	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。口縁外面はやや肥厚する。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	内面上部と胴部外面に煤付着
5	土師器 甕	カマド内 口～胴部 中位1/2	口 22.3 底 — 高 —	①砂礫含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。口縁外面はやや肥厚気味。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
6	土師器 甕	床密着 口～胴部 下位	口 23.0 底 — 高 —	①多量の砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。口縁外面はやや肥厚する。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	内外面ともかなり器面が荒れている
7	土師器 甕	床密着 口～胴部 下位	口 23.0 底 — 高 —	①粗砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。口縁外面はやや肥厚する。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	
8	土師器 甕	貯蔵穴上 面 口～底部	口(19.6) 底 — 高 31.0	①砂礫含む ②良好 ③明褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。胴部の器肉かなり薄い。	

F-6号住居跡 (PL11・92・93)

位置 Fn-71・72グリッド 主軸方位 N-81°-E 残存壁高 0.70m 重複 なし

規模と形状 長辺3.96m・短辺4.30mのやや縦長の長方形であるが、若干ゆがんでいる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北壁の一部で崩落がみられ、形状が崩れている。

床面 地山黄色シルトを掘り込んだ上に、小礫混じりの暗褐色土を埋め込んで床面を形成。床面は硬くしまり、埋土との区別は明瞭であった。

竈 竈No.1は住居東壁の北よりに所在。焚口幅46cm・燃烧部長44cm。煙道はくりぬき式で天井部も崩落せずに残存。煙道部長95cm。燃烧部に対して煙道の軸がかなり北側にずれる。また竈No.2は、住居北壁のほぼ中央部分に煙道のみが残存している。煙道はやはりくりぬき式で長さは62cmである。住居の形状や貯蔵穴との位置関係から考えて、住居構築時には北側の竈No.2が使用されていたが、それが廃絶・破壊された後に竈No.1が造られたものと推定される。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。やや東西に長い円形。内部より甕の口縁を含む上部破片が2個体出土している。

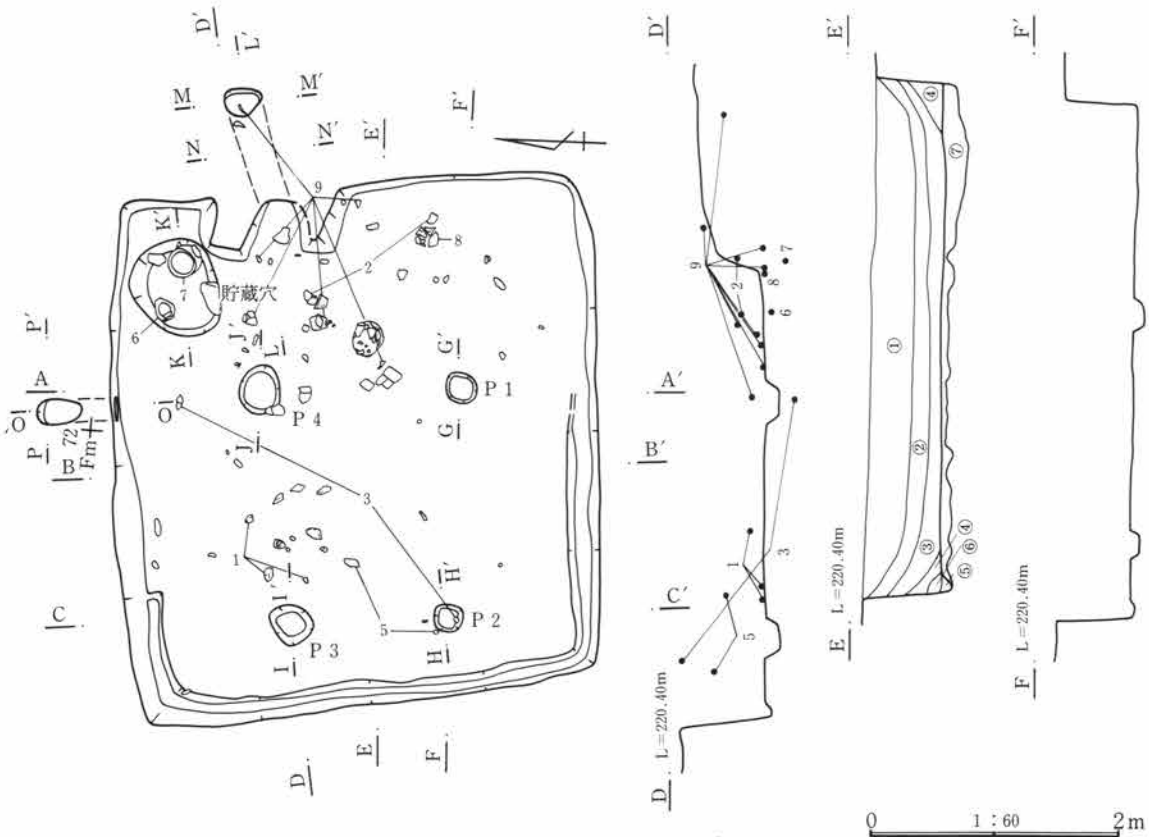
周溝 住居西壁とそれにつながる北壁・南壁の一部で検出。

柱穴 4基の小ピット検出。大きさ深さともに類似するが、掘り込みは浅い。東側2基はやや西にずれる。

出土遺物 遺物量はあまり多くない。住居全域に散在している。器種としては土師器坏(1~4)・皿(5)・甕(6~9)などがある。

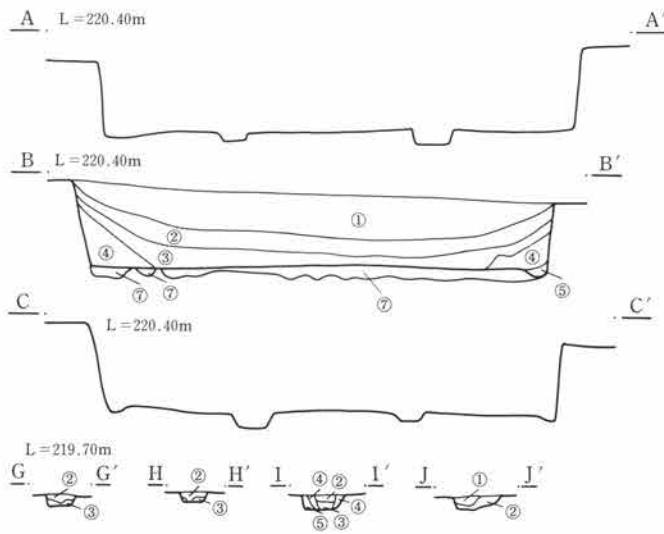
掘り方 床面下に深さ10~20cmほどの不規則な掘り方が見られる。遺構などは無かった。

調査所見 柱穴と考えられる小ピットの位置などからみて、竈No.1の構築時に住居域を東側にやや拡張した可能性が推定される。古墳時代後期。



第67図 F-6号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



ピットセクション

- 1 暗褐色土 多量の白・黄色粒、小礫含む。
- 2 暗褐色土 1層に似るが小礫の混入少ない。
- 3 褐色土 地山の黄色粘質シルトを主体とする。
- 4 暗褐色土 地山黄色シルトを主体とし、多量の白・黄色粒含む。
- 5 暗褐色土 白・黄色粒、地山黄色シルト、小礫多量に含む。

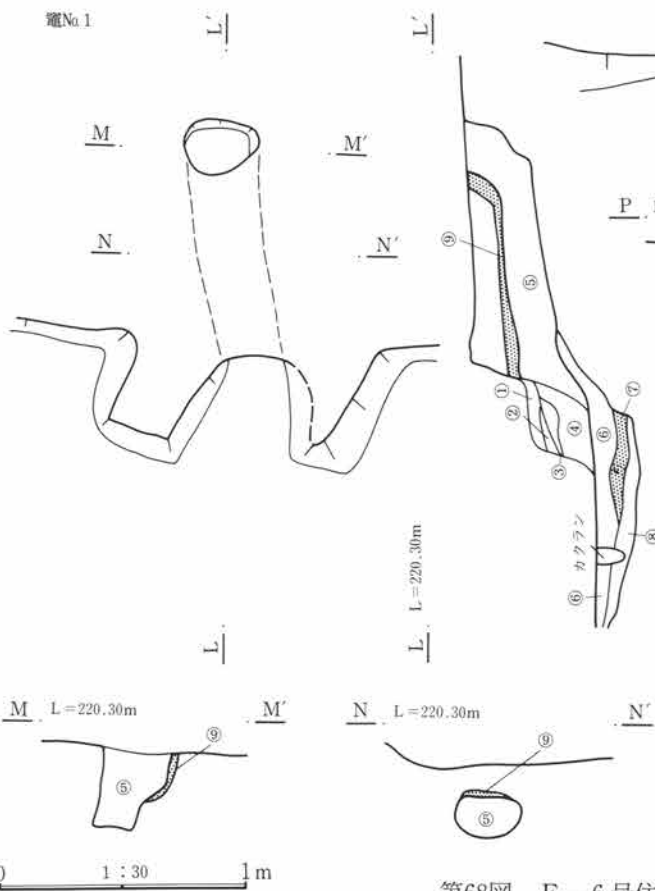
0 1:60 2m

ベルトセクション

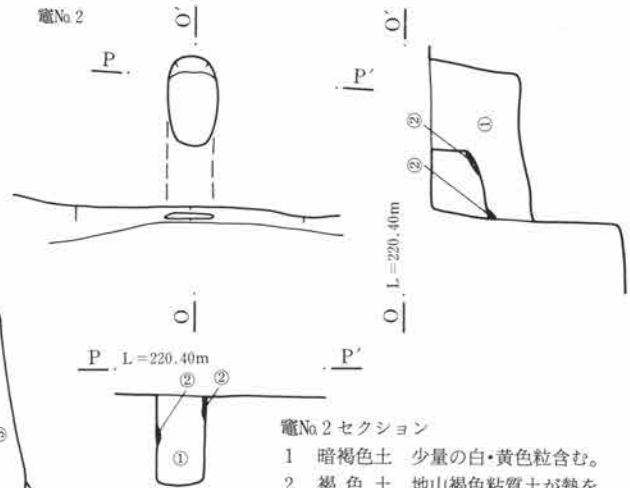
- 1 褐色土 多量の白・黄色粒、砂礫及び少量の径2~3cmの礫を含む。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫を多量に含む。弱い粘性あり。
- 3 暗褐色土 2層よりも小礫の混入少なくしまり悪い。
- 4 黒褐色土 白・黄色粒、炭化物を少量含む。粘性強い。
- 5 暗褐色土 地山砂質シルトを主体とし、炭化物を少量含む。
- 6 褐色土 白・黄色粒わずかに含む細粒のシルト。粘性強い。
- 7 暗褐色土 小礫を含みしまり良。

貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 多量の白・黄色粒、小礫含む。
- 2 暗褐色土 少量の白・黄色粒含む。
- 3 褐色土 黄色粘土を主体とする。
- 4 暗褐色土 多量の白・黄色粒、小礫、地山黄色シルトを含む。
- 5 暗褐色土 地山黄色シルトを主体とする。



竈No.2



竈No.2セクション

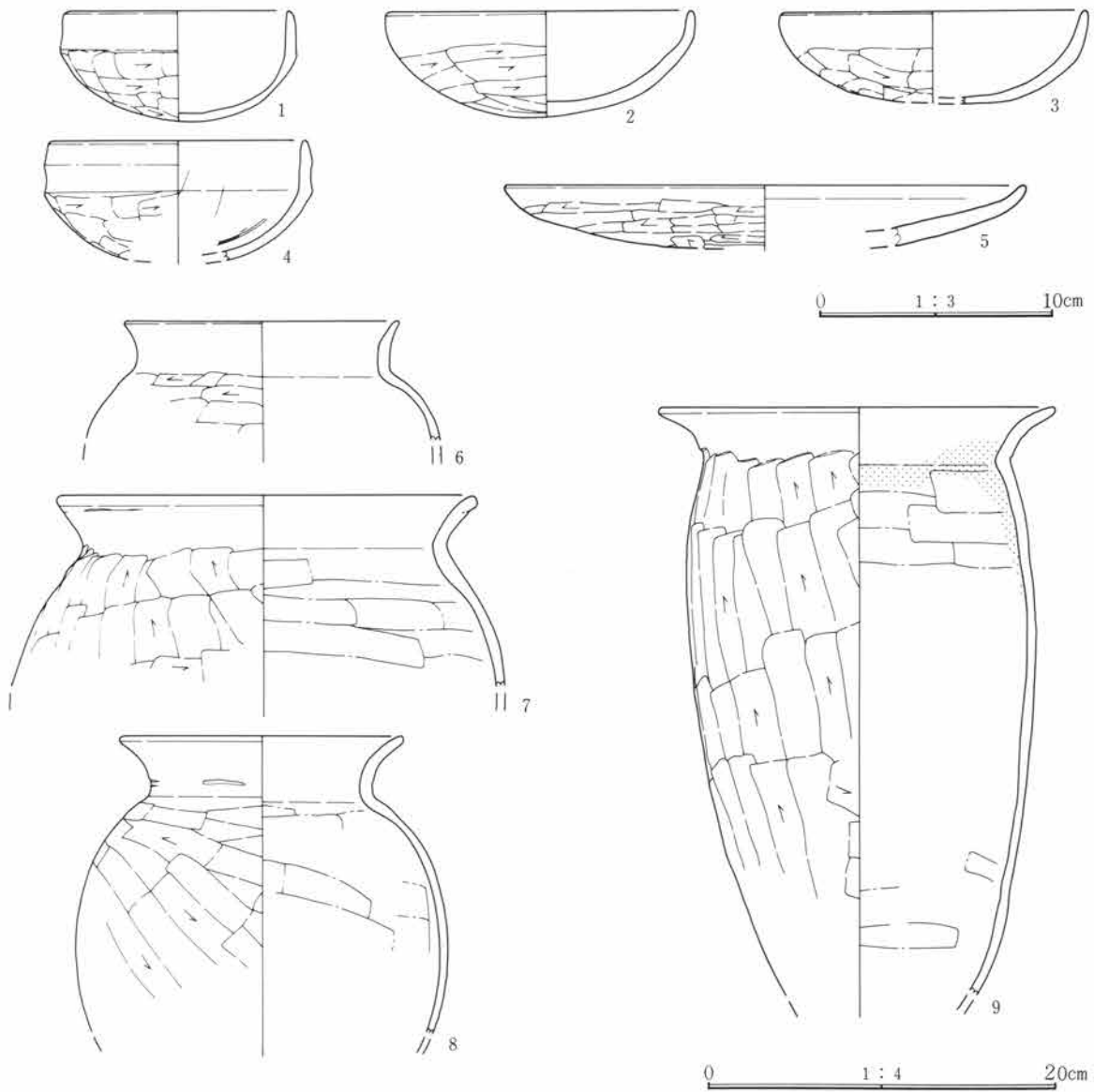
- 1 暗褐色土 少量の白・黄色粒含む。
- 2 褐色土 地山褐色粘質土が熱を受け赤化した部分。

竈No.1セクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒を含む。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒を少量含み、地山黄色シルトブロックを混入。
- 3 黒褐色土 白・黄色粒を少量含む。
- 4 黒褐色土 地山黄色シルトブロックを含む。
- 5 暗褐色土 炭化物・焼土ブロック・黄褐色粘土を含む。
- 6 褐色土 焼土ブロック多量に含む。炭化物・黄色粒わずかに混入。
- 7 赤褐色土 焼土ブロックを多量に含む。
- 8 暗褐色土 粘質の褐色土ブロック・黄色粒・小礫を含む。
- 9 暗赤褐色土 地山褐色粘質土が熱を受け焼土化した部分。

第68図 F-6号住居跡②

第2節 F・G区



第69図 F-6号住居出土遺物実測図

F-6号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 9.3 底 — 高 4.6	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
2	土師器 坏	+10cm 3/5	口 13.0 底 — 高 4.4	①細砂(まれに小礫) ・赤褐色粒子含む ②良好 ③淡黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
3	土師器 坏	床密着 1/5	口 12.9 底 — 高 3.9	①細砂(まれに小礫) 含む②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デか。	
4	土師器 坏	覆土 口~体部 1/3	口(10.8) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。口縁はやや内傾し、外面が 肥厚する。体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ 状工具で放射状の線刻。	
5	土師器 皿	+30cm 1/5	口(21.9) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ナデ 後ヘラ磨き。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
6	土師器 小型甕	貯蔵穴内 口縁部	口 15.2 底 — 高 —	①細砂少量含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデか。	
7	土師器 甕	貯蔵穴内 口～胴部 上位	口 23.2 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
8	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位 $\frac{1}{4}$	口(15.9) 底 — 高 —	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ、外面にヘラ状工具のあたり 胴部外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。器肉薄く軽い。	
9	土師器 甕	床密着 口～胴部 下位	口 22.3 底 — 高 —	①砂礫含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	内面に煤付着

F-7号住居跡 (PL11・93)

位置 F_q-78・79グリッド 主軸方位 N-5°-E 残存壁高 0.43m

重複 F-26・27号住居を切って構築。

規模と形状 長辺4.70m・短辺3.48mの横長の長方形。住居東側では耕作による攪乱で壁と床面の一部が破壊されている。また西壁は調査区外の多いため一部しか検出できなかった。

床面 地山の黄色シルト質土を掘り込んで平坦な床面を形成。床面は地山に一致。

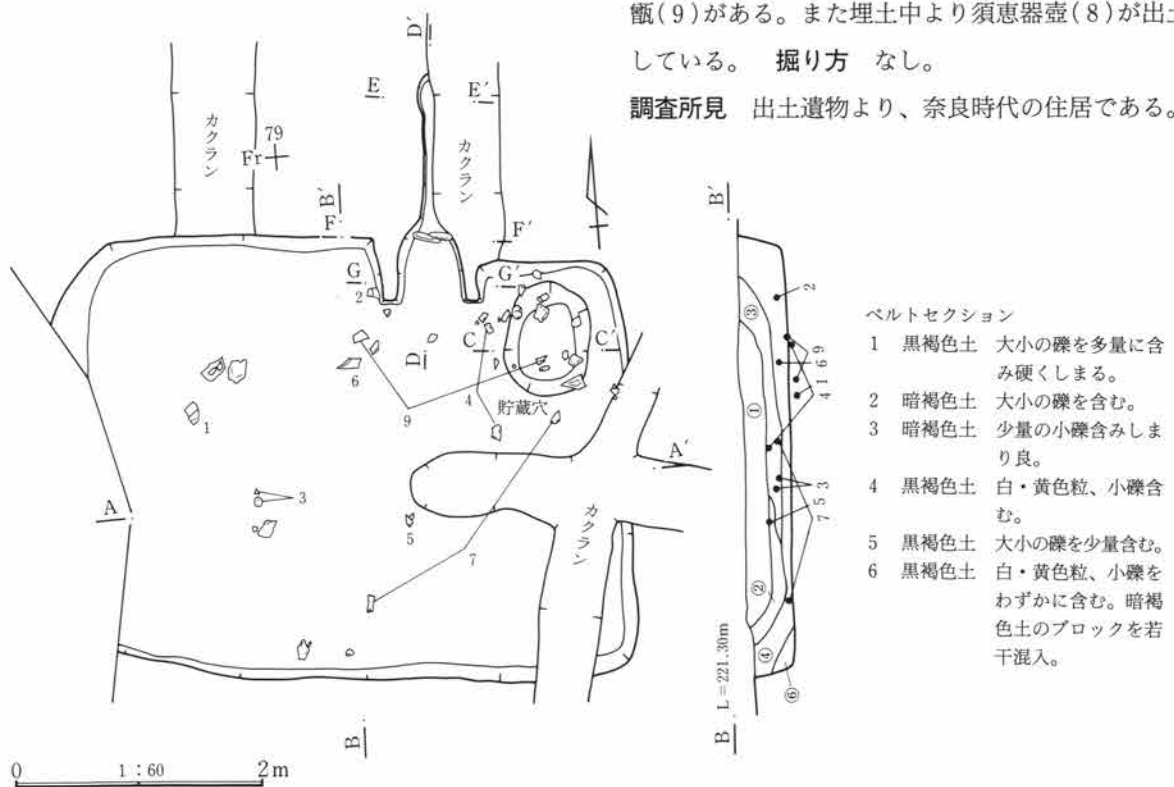
竈 住居北壁のやや東よりに所在。焚口幅52cm・燃焼部長58cm。燃焼部の奥壁に板状の砂岩を立ててある。

煙道は近年の耕作によって東半の上部が失われているが、一部では天井が残存している。煙道部長127cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居の短辺方向が長い楕円形。周溝 なし。柱穴 なし。

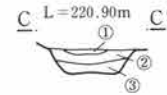
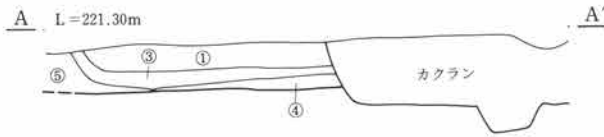
出土遺物 遺物の出土はあまり多くないが器種は比較的多く、土師器坏(1~4)・甕(5・6)・小型甕(7)・甗(9)がある。また埋土中より須恵器壺(8)が出土している。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居である。



第70図 F-7号住居跡①

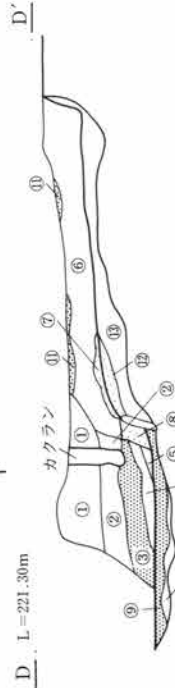
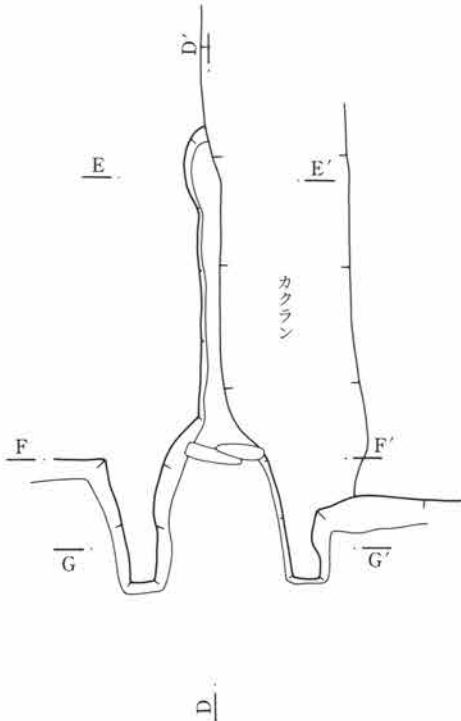
第2節 F・G区



貯蔵穴セクション

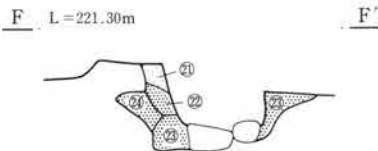
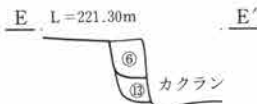
- 1 暗褐色土 焼土を多量に含む。
- 2 褐色土 少量の小礫含む。
- 3 褐色土 黄色粘土ブロック・砂質土を含む。

0 1:60 2m

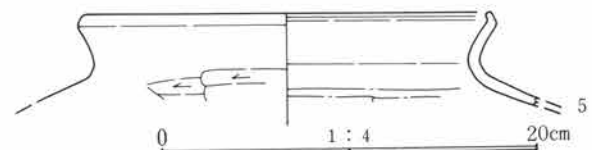
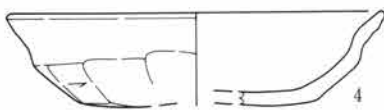


竈セクション

- 1 褐色土 白・黄色粒、小礫を多量に含む。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫を多量に含み、少量の焼土混入。
- 3 赤褐色土 白・黄色粒、小礫を少量含み多量の焼土混入。竈の崩落土。
- 4 暗褐色土 白・黄色粒、焼土わずかに含む。
- 5 赤褐色土 4層に似るが焼土の混入がより多い。
- 6 暗褐色土 白・黄色粒、小礫を含む。焼土ブロック疎らに混入。
- 7 黄褐色土 粘性のある黄色シルト。
- 8 黄褐色土 地山黄色シルト質土を主体とする。奥壁の構造土。
- 9 暗赤褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土を多量に含む。
- 10 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土を少量含む。
- 11 赤褐色土 地山土を主体とし全体に熱を受けて赤化。煙道天井部分。
- 12 黄褐色土 地山黄色シルトを主体とし、焼土、炭化物、小礫含む。
- 13 暗褐色土 白・黄色粒、焼土含む。
- 14 暗褐色土 白・黄色粒、小礫多量に含む。
- 15 黄褐色土 地山黄色シルトを多量に含む。
- 16 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土、炭化物を含む。
- 17 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土を少量含む。
- 18 赤黄褐色土 地山黄色シルトを主体とするが、白・黄色粒、焼土を含む。
- 19 暗黄褐色土 地山黄色シルトを主体とし、焼土を含む。
- 20 暗黄褐色土 地山黄色シルトを主体とし、白・黄色粒を含む。
- 21 黄褐色土 地山黄色シルトを多量に含み、少量の白・黄色粒、小礫混入。
- 22 赤褐色土 焼土を多量に含み、白・黄色粒、小礫少量混入。
- 23 暗赤褐色土 白・黄色粒、焼土、小礫含む。
- 24 暗赤褐色土 地山黄色シルト、焼土、白・黄色粒を多量に含む。



0 1:30 1m

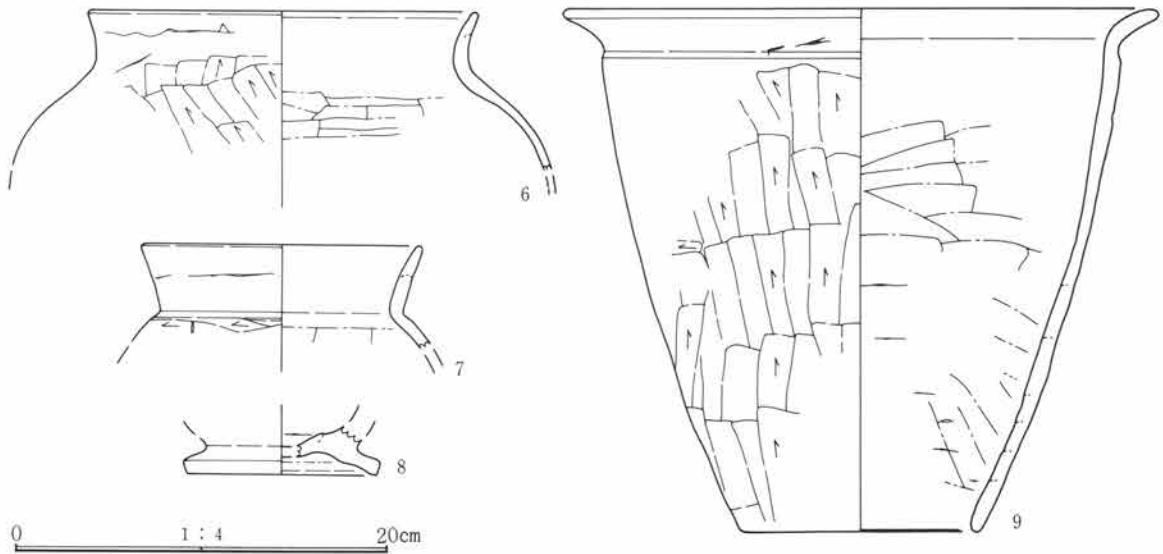


0 1:3 10cm

0 1:4 20cm

第71図 F-7号住居跡②、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第72図 F-7号住居出土遺物実測図②

F-7号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 口～体部 1/3	口(13.2) 底(9.5) 高—	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、指頭圧痕あり。体～底部外面 ヘラ削り。内面横ナデ、指頭圧痕あり。	
2	土師器 坏	+5cm 1/3	口(12.5) 底(8.0) 高4.3	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面 横ナデ後放射状ヘラ磨き。	
3	土師器 坏	+10cm 1/4	口(11.8) 底(6.2) 高3.5	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面 横ナデ後ヘラ磨き。内表面の剝落激しく、磨きは 一部で確認できたのみ。	
4	土師器 坏	床密着 2/3	口(14.8) 底(9.4) 高3.7	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部外面横ナデ。口縁外面がやや肥厚。体～底 部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
5	土師器 甕	+10cm 口縁1/5	口(21.5) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。口縁端部は内側に短く屈曲 する。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
6	土師器 甕	+10cm 口～胴部 上位1/5	口(19.8) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面へ ラ削り、内面横ナデ。	
7	土師器 小型甕	+5cm 口縁1/5	口(14.3) 底— 高—	①細砂含む ②還元焰焼成 良好 ③楊灰色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面へ ラ削り、内面横ナデ。	
8	須恵器 壺	覆土 台部1/3	口— 底(10.0) 高—	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰色	壺の台部破片。ロクロ整形。	
9	土師器 甕	床密着 口～胴部 1/4	口(31.5) 底(12.7) 高27.5	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面にヘラ状工具のあたり 胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。内面に接合痕。	

F-8号住居跡 (PL11・93)

位置 F1-70 グリッド 主軸方位 N-7°-W 残存壁高 0.64m 重複 なし

規模と形状 長辺4.75m・短辺4.28mのやや横長の長方形。壁はほぼ垂直に立ち上がり、残存状況は良好である。

床面 地山黄色シルトを掘り込んで平坦な床面を形成。

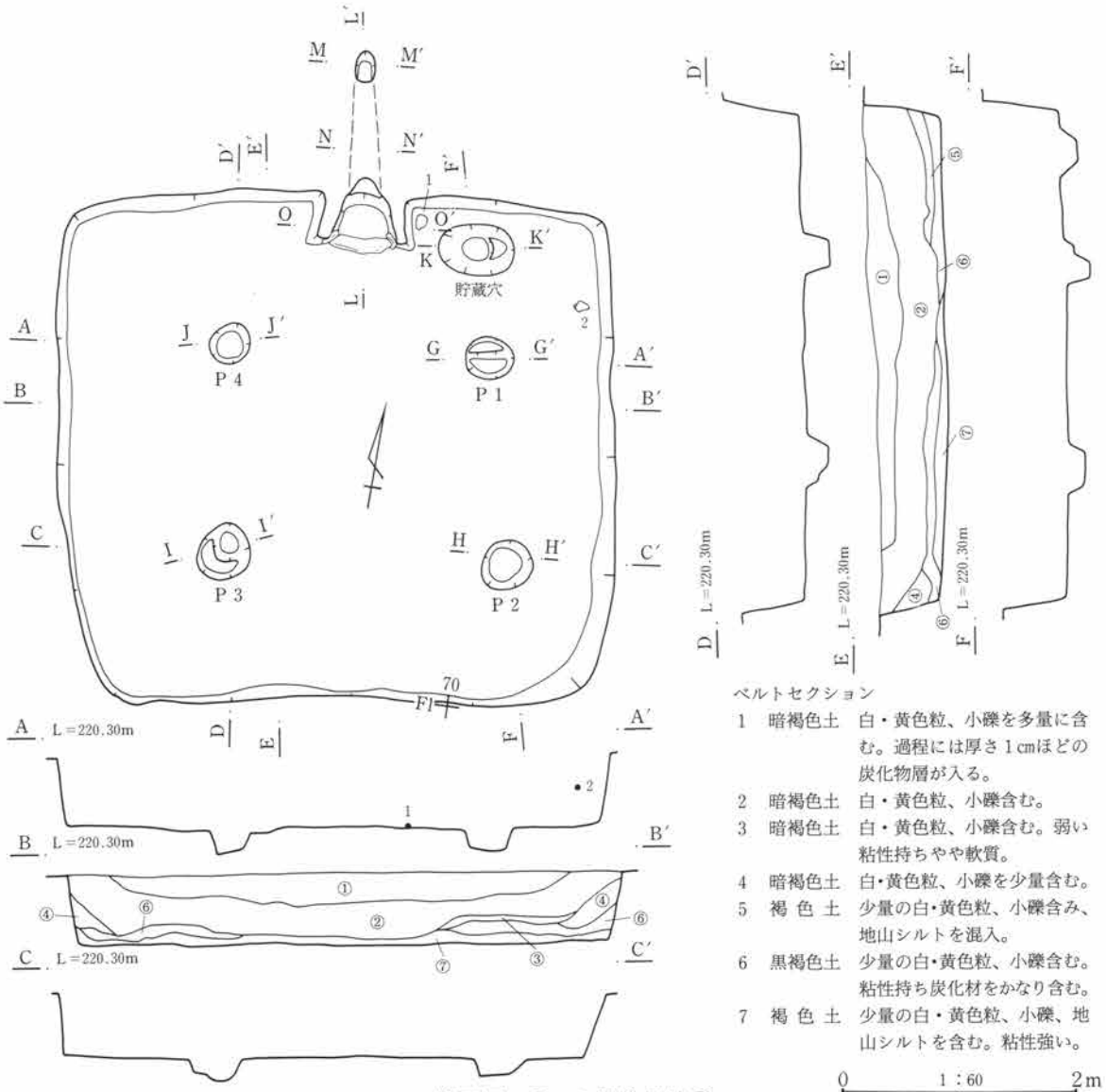
竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。焚口幅52cm・燃烧部長48cm。両袖の先端内側には板状砂岩の袖石が見られ、その上部にはやはり砂岩製の天井石がかけられていた。燃烧部埋土中の黄色粘土（3層）は、天井部分の構造材が崩落したものと考えられる。くりぬき式の煙道は残存状態が良好で、天井部分も崩落せずに残っている。煙道部長115cm。

貯蔵穴 竈右袖脇、住居北東隅近くより検出。形状は住居長辺方向が長い楕円形。

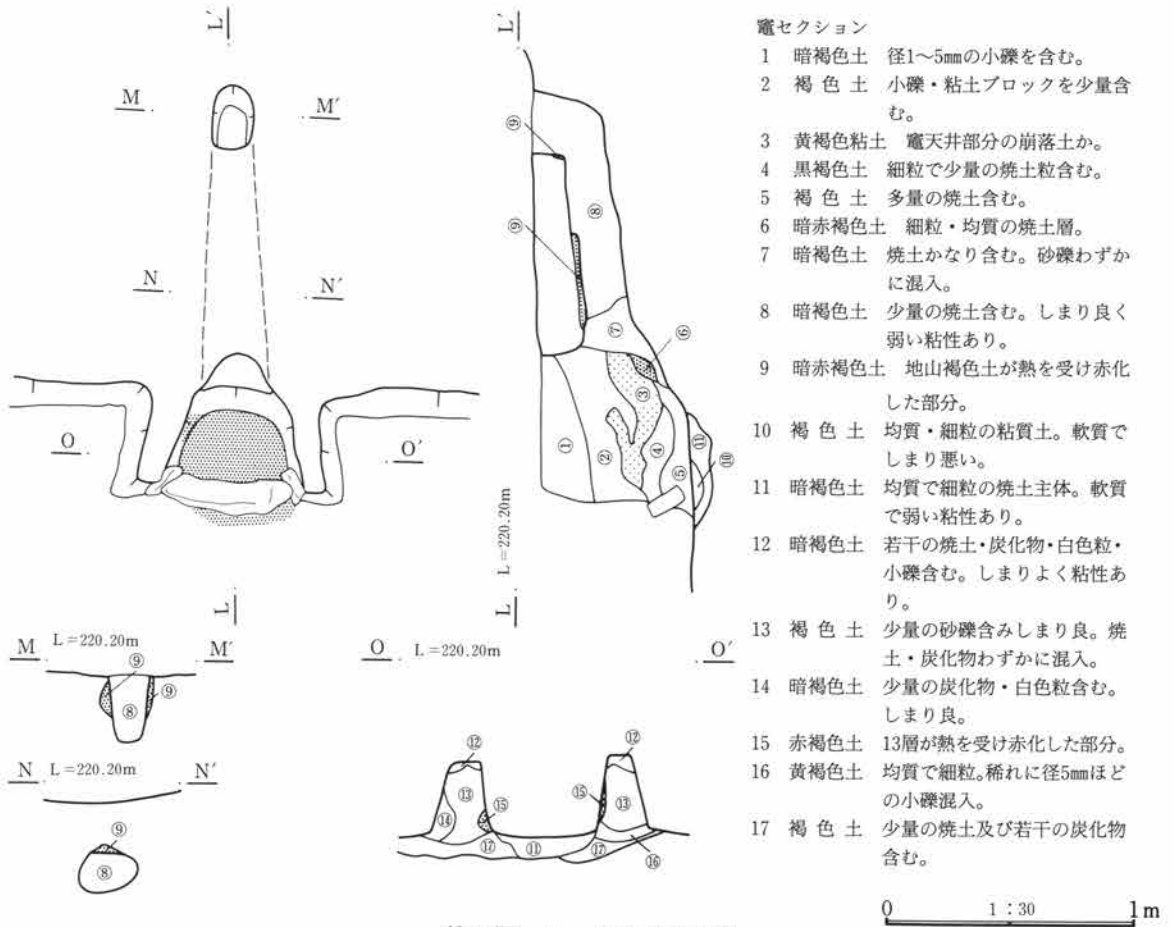
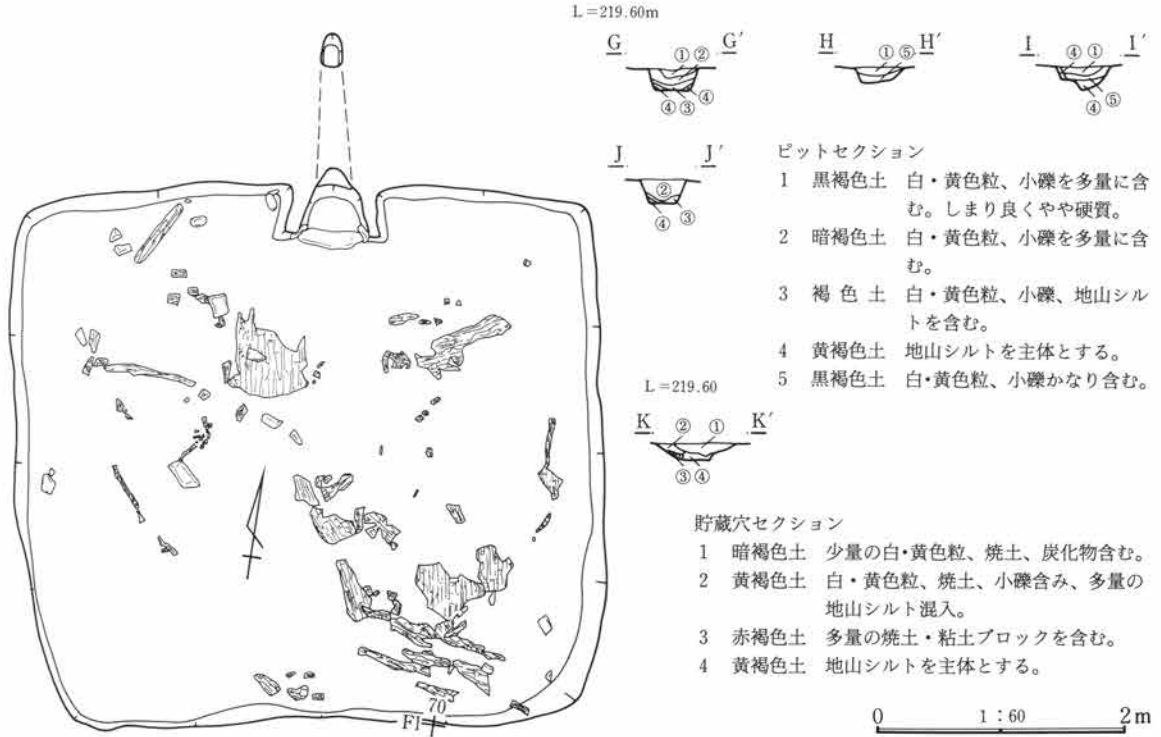
周溝 なし。 **柱穴** 4基の小ピットを検出。ほぼ対角線上に乗るが、西側の2基（ピット3・4）はやや東側にずれている。いずれのピットも掘り込みは浅い。

出土遺物 遺物の出土は非常に少ない。埋土上層の遺物を除けば、床面近くと貯蔵穴内から数点の土師器片と礫が出土したに過ぎない。器種も貧弱で、坏(1・2)と甕の破片が得られたのみである。 **掘り方** なし。

調査所見 床面直上から住居埋土6層中にかけて多量の炭化材が出土していることから、焼失住居と考えられる。ただし、遺物の出土が極端に少ないことから、住居廃棄後に焼失したものと推測される。出土遺物より、古墳時代後期の住居と推測される。



第73図 F-8号住居跡①



第74図 F-8号住居跡②



第75図 F-8号住居出土遺物実測図

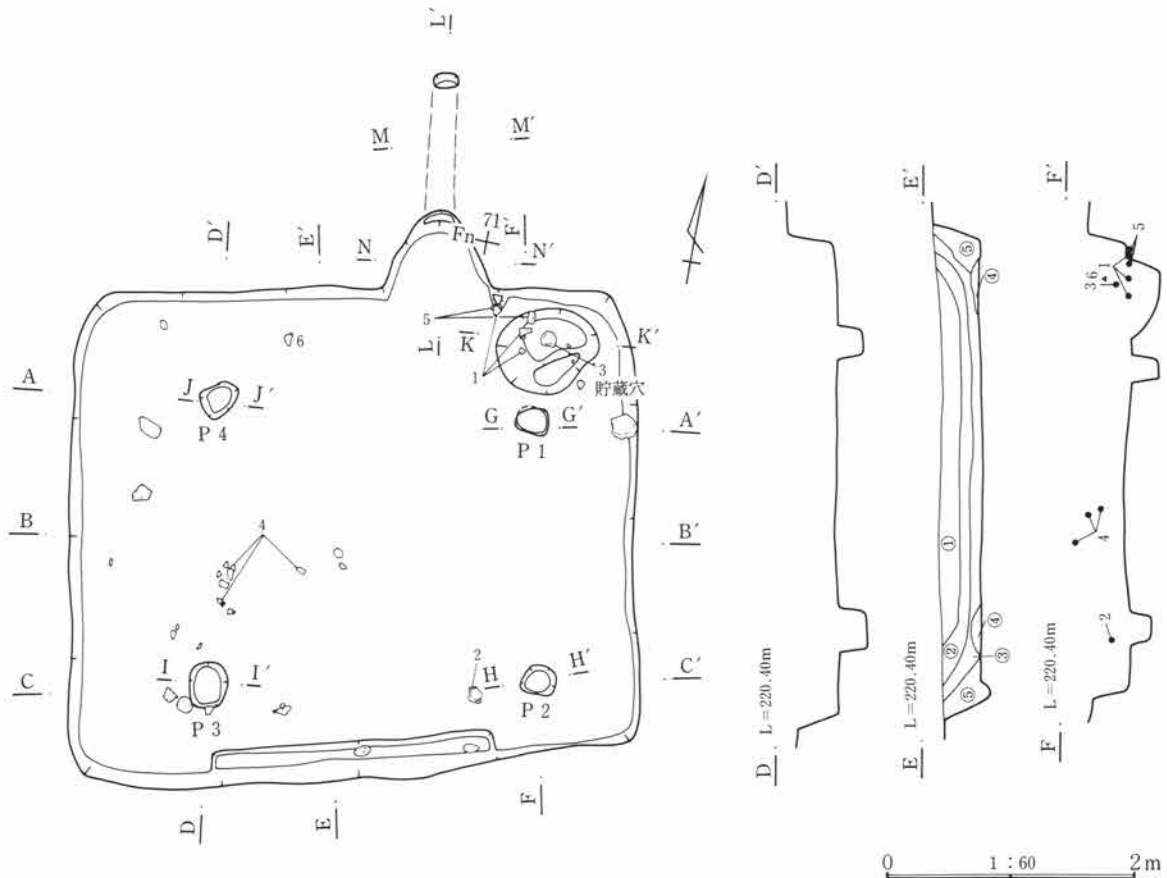
F-8号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/3	口(15.2) 底— 高 5.8	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	床密着 1/3	口(15.2) 底— 高—	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。	器表面かなり剝落

F-9号住居跡 (PL11・93)

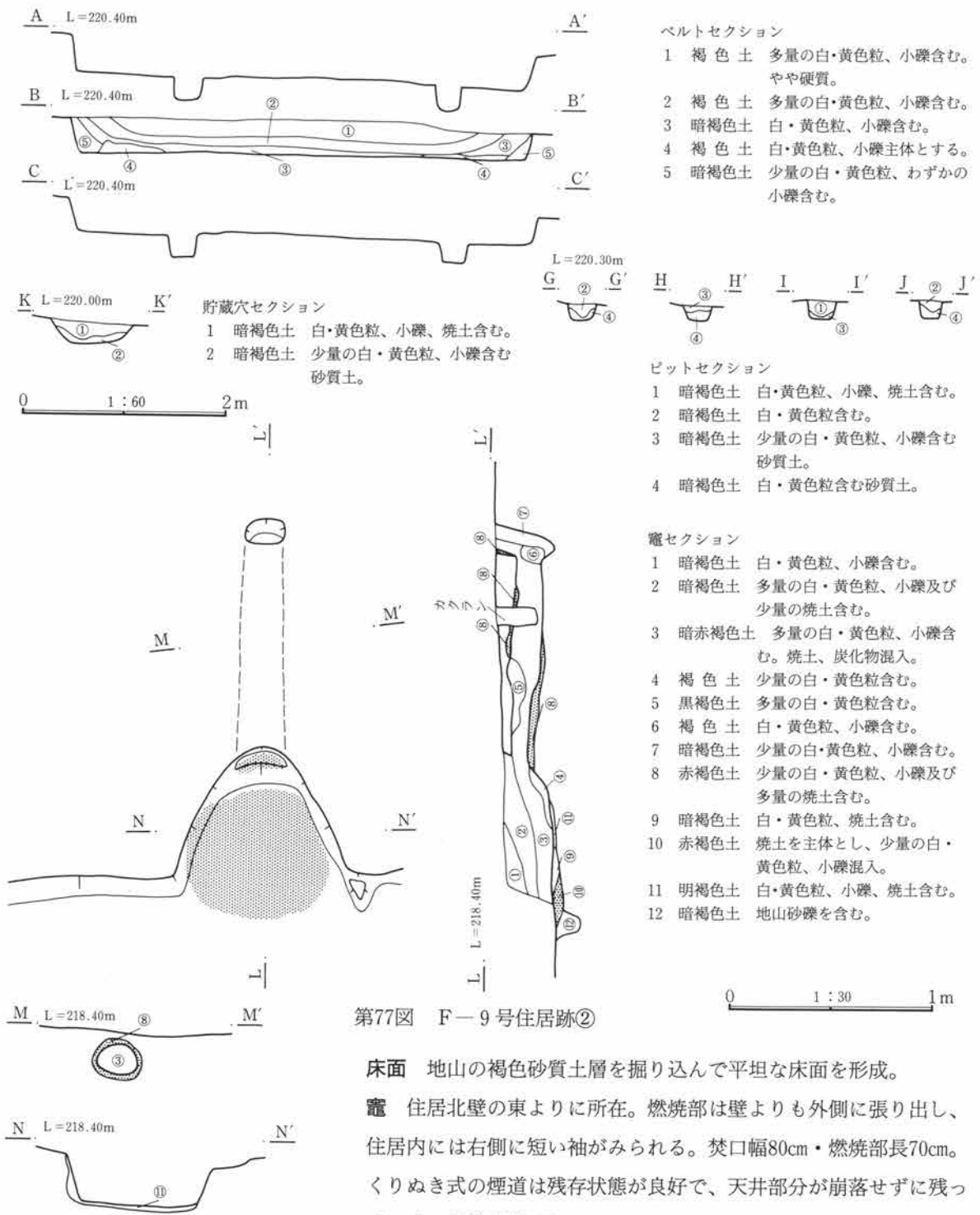
位置 Fm-70・71 主軸方位 N-11°-W 残存壁高 0.38m 重複 なし

規模と形状 長辺4.56m・短辺3.89mのやや横長の長方形。東壁に比べて若干西壁が長く歪んでいる。住居主軸はやや西側にずれる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、崩落などは特に見られない。



第76図 F-9号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



床面 地山の褐色砂質土層を掘り込んで平坦な床面を形成。

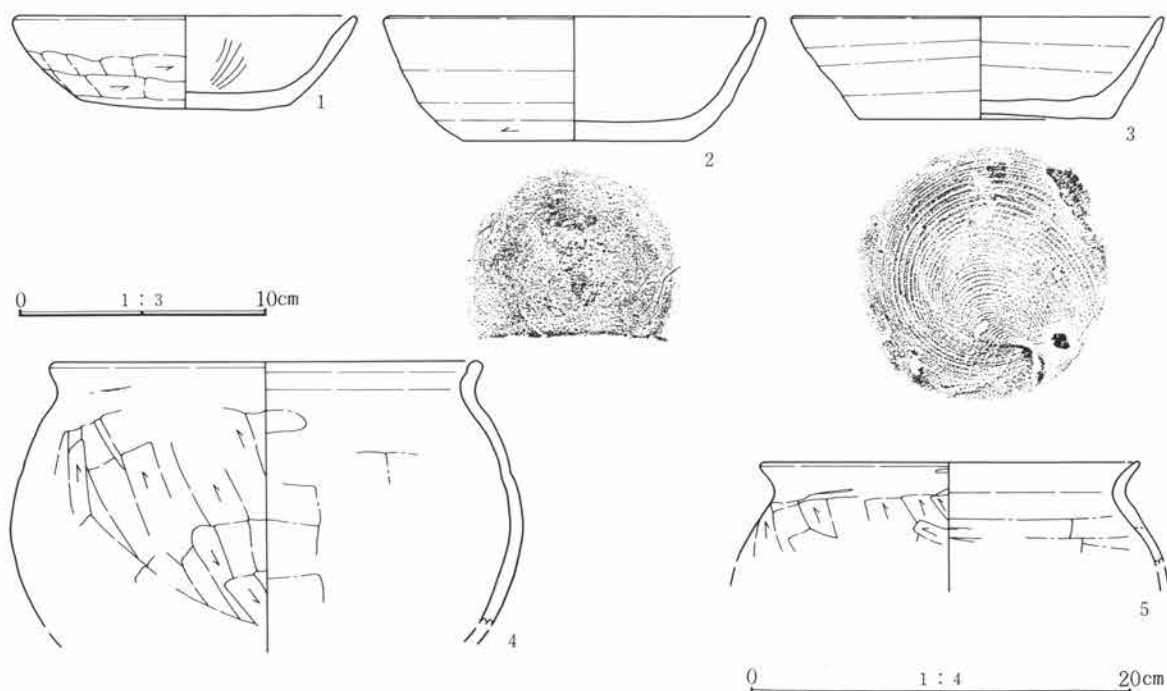
竈 住居北壁の東よりに所在。燃烧部は壁よりも外側に張り出し、住居内には右側に短い袖がみられる。焚口幅80cm・燃烧部長70cm。くりぬき式の煙道は残存状態が良好で、天井部分が崩落せずに残っている。煙道部長118cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居の長辺方向に長い楕円形。周溝 南壁の一部で検出。

柱穴 大きさ・深さともに類似した4基の小ピットを検出。ほぼ対角線上に位置するが、北東隅の1基(ピット1)は貯蔵穴との位置関係から南側にずれる。

出土遺物 遺物の出土は少なく、住居内に散在。器種も少なく、床面近くから土師器杯(1)・甕(4・5)、須恵器杯(2・3)が出土。また、覆土上位より鉄滓(6)が出土している。掘り方 なし。

調査所見 住居・竈形状および出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



第78図 F-9号住居出土遺物実測図

F-9号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 1/2	口(13.4) 底 8.5 高 3.7	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面丁寧なヘラ削り 内面横ナデ後ヘラ磨き。			
2	須恵器 坏	床密着 1/2	口(14.8) 底 8.6 高 4.9	①細砂含む ②良好 ③灰黄色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。 体部下回転ヘラ削り。			
3	須恵器 坏	床密着 1/2	口 14.3 底 10.0 高 4.0	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。			
4	土師器 甕	+30cm 口～胴部 上半1/2	口(22.3) 底 — 高 —	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。口唇部は内 面側に肥厚し、境目は沈線状になっている。胴部 外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
5	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/2	口(19.9) 底 — 高 —	①細砂少量含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ、外面にヘラ状工具のあたり 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。内面に接合痕。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
6	鉄滓	+18cm	9.9	6.8	3.1	204.6	破片	表面は一部ガラス状で金属光沢持つ。

F-10号住居跡 (PL12・93・94)

位置 Fp-69・70グリッド 主軸方位 N-3°-E 残存壁高 0.33m 重複 なし

規模と形状 長辺3.48m・短辺3.34mのほぼ正方形。壁はほぼ垂直に立ち上がり、崩落などは特にみられない。床面 地山黄褐色シルトを掘り込んで平坦な床面を形成。住居中央部付近に炭化物の分布がみられる。竈 住居北壁中央部より若干東よりに所在。焚口幅34cm・燃烧部長81cm。煙道部分は削平されて失われていた。両袖部分は住居内に張り出し、先端の燃烧部側に板状の砂岩を立てて袖石としている。袖石の上にはやはり板状の砂岩が天井石としてかけられていた。また左袖内には構造材として甕が正位の位置で置かれていた。燃烧部の中央には支脚石が埋められている。竈内からは甕が出土し、埋没状況より本来は支脚にかけられていたものと考えられる。

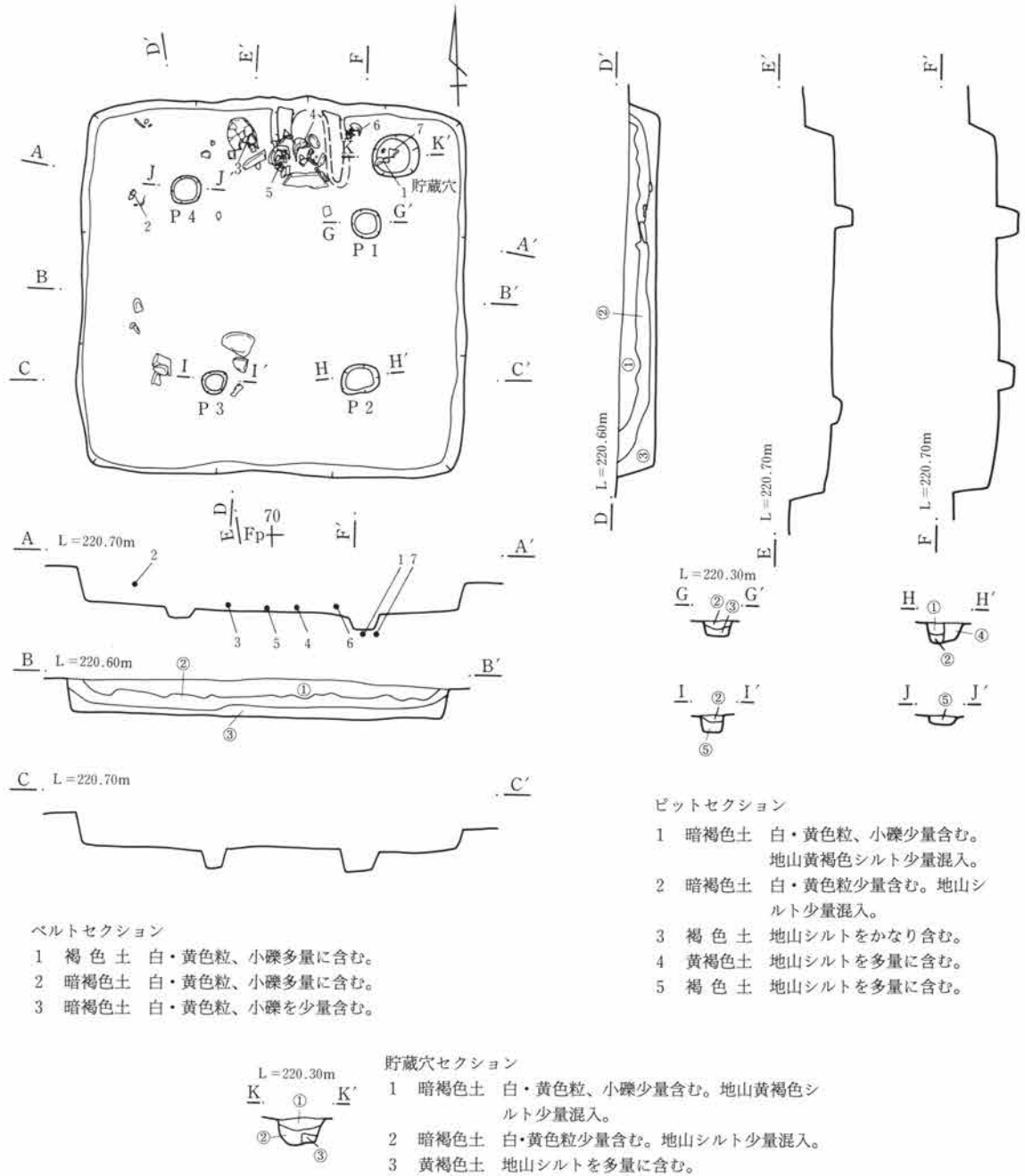
第3章 検出された遺構と遺物

貯蔵穴 住居北東隅より検出。内部より甗破片が出土。 **周溝** なし。

柱穴 大きさ・深さともに類似した4基の小ピットを検出。南西隅と北東隅の各1基がずれ、やや歪んだ位置関係を取る。いずれのピットも掘り込みは浅い。

出土遺物 遺物量は少ないが、竈周辺の床面上より完形に近い遺物が出土した。器種は土師器坏(1)・壺(2)・甗(3~6)の他に、貯蔵穴内より甗(7)が出土している。 **掘り方** なし。

調査所見 住居形状・出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



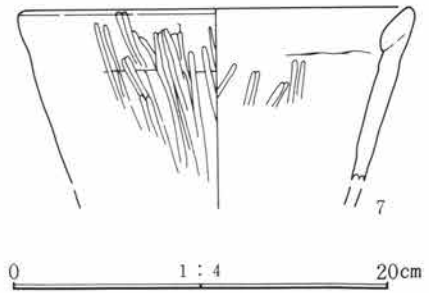
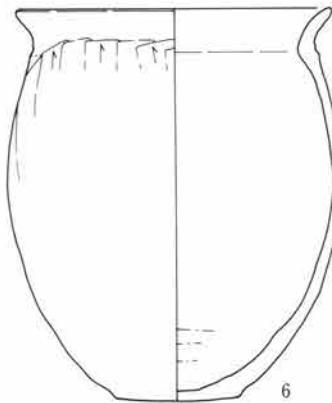
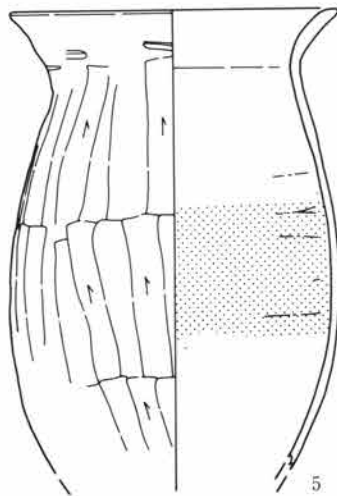
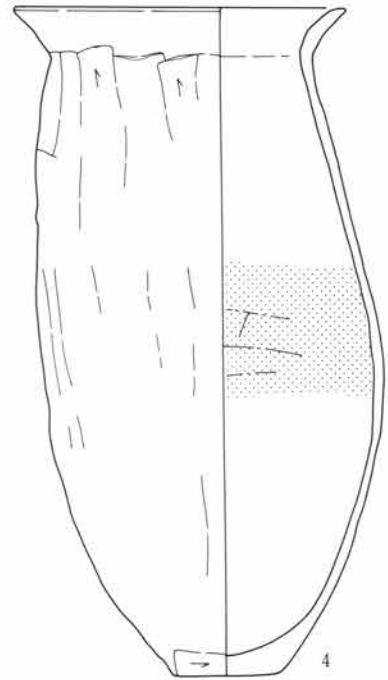
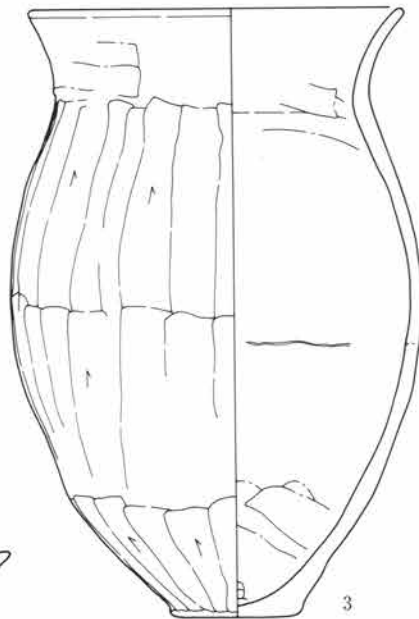
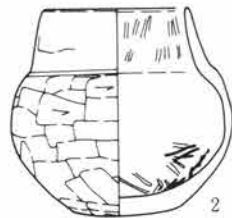
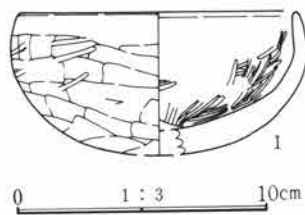
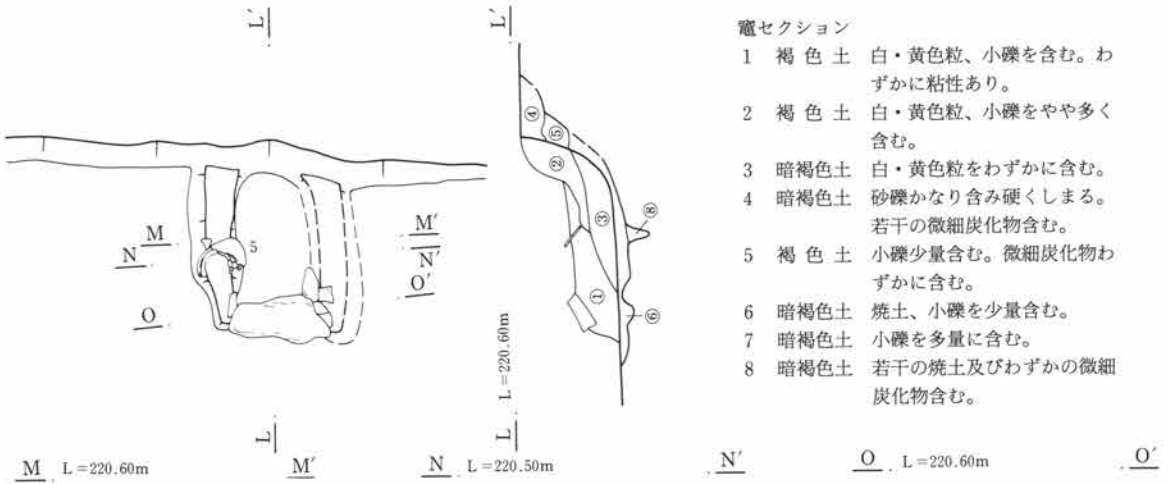
0 1:60 2m

第79図 F-10号住居跡

第2節 F・G区

竈セクション

- 1 褐色土 白・黄色粒、小礫を含む。わずかに粘性あり。
- 2 褐色土 白・黄色粒、小礫をやや多く含む。
- 3 暗褐色土 白・黄色粒をわずかに含む。
- 4 暗褐色土 砂礫かなり含み硬くしまる。若干の微細炭化物含む。
- 5 褐色土 小礫少量含む。微細炭化物わずかに含む。
- 6 暗褐色土 焼土、小礫を少量含む。
- 7 暗褐色土 小礫を多量に含む。
- 8 暗褐色土 若干の焼土及びわずかの微細炭化物含む。



第80図 F-10号住居竈、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

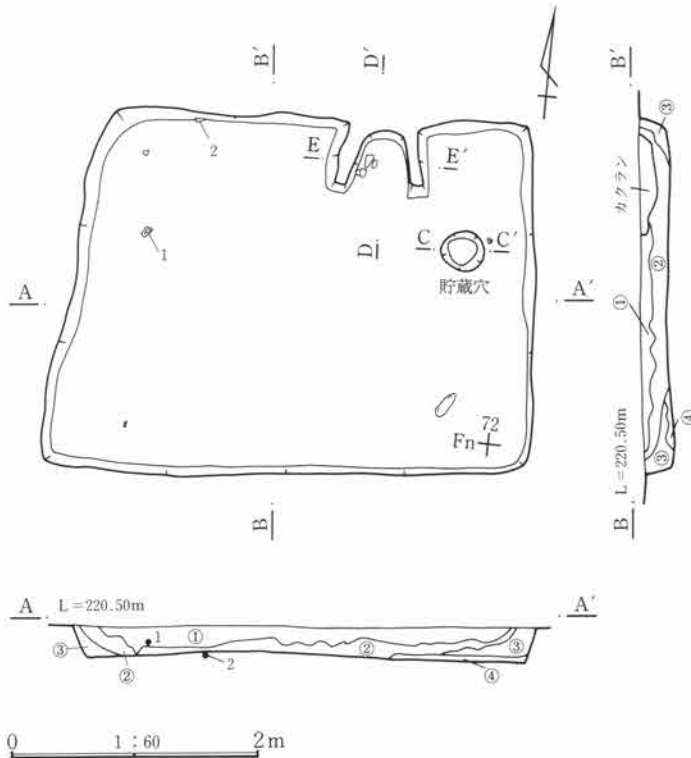
F-10号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	貯藏穴内 1/4	口(11.8) 底 — 高 —	①微砂粒少量含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り後一部へら磨き。内面横ナデ後へら磨き。	
2	土師器 壺	+20cm 1/5	口(7.8) 底 5.7 高 10.9	①細砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面へら削り後横ナデ、内面横ナデ後へら磨き。胴部外面へら削り、内面ナデ後へら磨き。	
3	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 19.8 底 6.6 高 32.0	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。内面に接合痕。全体に器肉厚い。	
4	土師器 甕	床密着 1/5	口 17.6 底 6.0 高 35.0	①砂粒含む均質な粘土が帯状にめぐる ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。器形かなり歪む。全体に器肉薄く軽量。	胴部内面中位に煤付着
5	土師器 甕	床密着 口へ胴部 1/5	口(17.4) 底 — 高 —	①砂粒含む均質な粘土が帯状にめぐる ②良好 ③浅黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。全体に器肉薄く軽量。	胴部内面中位に煤付着
6	土師器 小型甕	床密着 口へ底部	口(16.8) 底(6.5) 高 19.8	①粗砂粒含む ②やや軟質 ③淡黄色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	
7	土師器 甕	貯藏穴内 口へ胴部 上位	口(20.4) 底 — 高 —	①砂粒・わずかの赤褐色粒子含む ②良好 ③淡黄色	口縁部内外面横ナデ。口縁は内面に折り返してある。胴部外面へら削り後へら磨き、内面横ナデ後へら磨き。	

F-11号住居跡 (PL12・94)

位置 Fn-72グリッド 主軸方位 N-3°-W 残存壁高 0.32m 重複 F-41住を切って構築。

規模と形状 長辺3.91m・短辺2.90mの横長の長方形。西壁の南側がやや外側に広がって平面形状を歪めているが、本来は整った形をしていたものと思われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南西隅の歪みを除けば崩落なども見られず、残存状況は良好である。



床面 地山黄色粘質シルトを掘り込んで平坦な床面を形成。一部に白・黄色粒、小礫を含み、硬くしまった貼り床状の土がみられる。

竈 住居北壁の中央より東よりに所在。焚口幅50cm・燃烧部長53cm。住居内に袖が張り出す形状をとる。煙道部分は大部分が削平されて失われていたが、燃烧部の外側に一部焼けた底面が残っている。

ベルトセクション

- 1 褐色土 白・黄色粒、小礫多量に含む。径2~3cmの礫を混入。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫多量に含む。
- 3 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含む。弱い粘性あり。
- 4 褐色土 白・黄色粒、小礫、礫主体とししまり良。貼り床か。

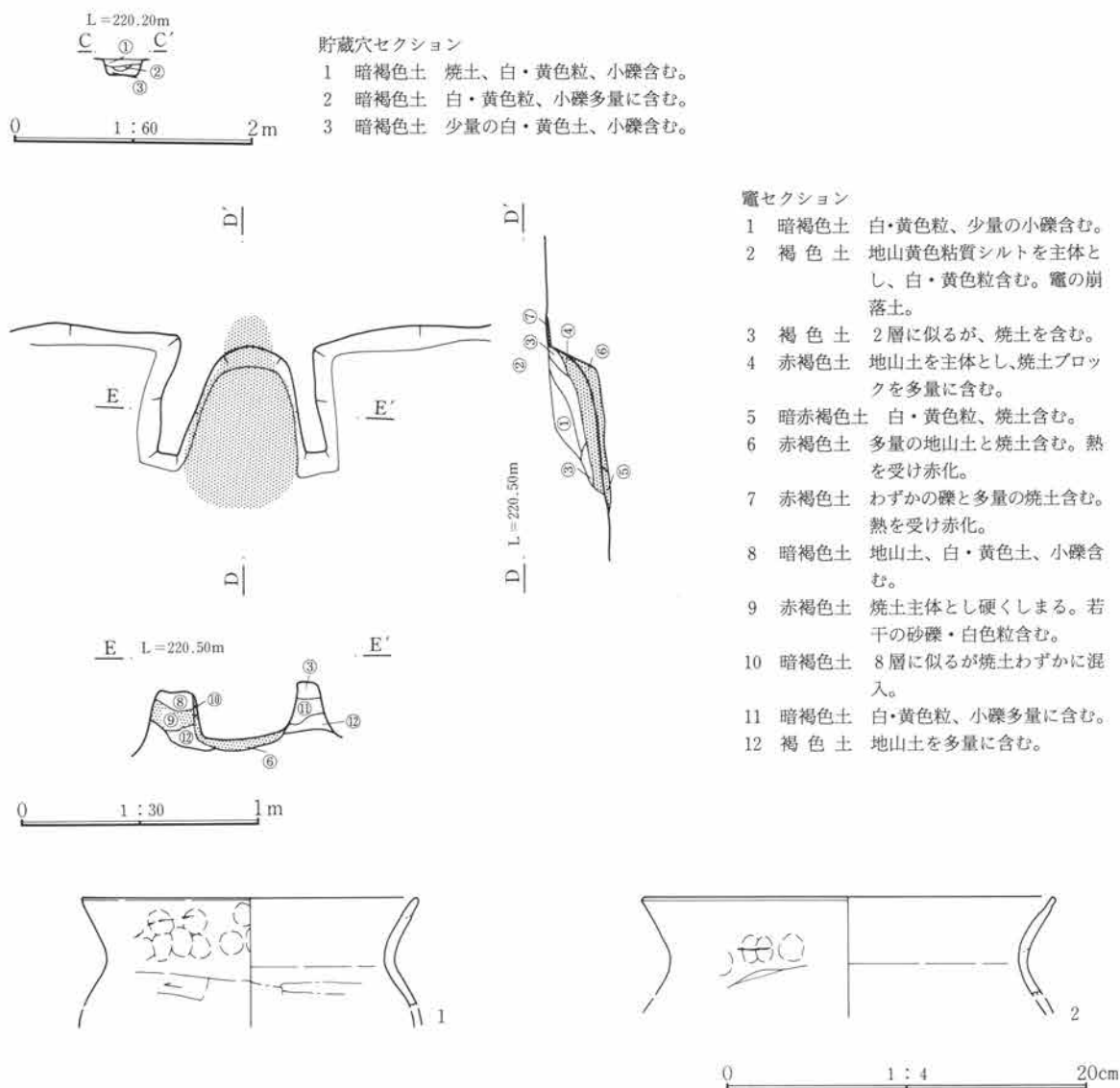
第81図 F-11号住居跡①

貯蔵穴 住居北東隅近くに小ピットを1基検出。規模が小さく位置的にもややずれるので、貯蔵穴と積極的に断定できない。 **周溝** なし。 **柱穴** なし。

出土遺物 遺物は非常に少ない。床面近くからは10点ほどの遺物が竈内を中心に出土したのみである。器種も貧弱で、甕(1・2)がみられるにすぎない。

掘り方 掘り方は床面にほぼ一致し、床下には遺構はみられなかった。

調査所見 出土遺物と住居の規模・形状から、奈良時代の所産である。



第82図 F-11号住居跡②、出土遺物実測図

F-11号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 甕	+15cm 口縁1/4	口(18.6) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
2	土師器 甕	+10cm 口縁破片	口(22.6) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

F-12号住居跡 (PL12・94~96)

位置 Fn-64グリッド 主軸方位 N-60°-E 残存壁高 0.27m

重複 F-46住に壁と覆土の一部を切られるが、46住の掘り込みが浅かったために床面は残存している。

規模と形状 長辺3.92m・短辺4.14mのほぼ正方形。住居の主軸は大きく東にふれる。南壁に比べやや北壁が長い。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

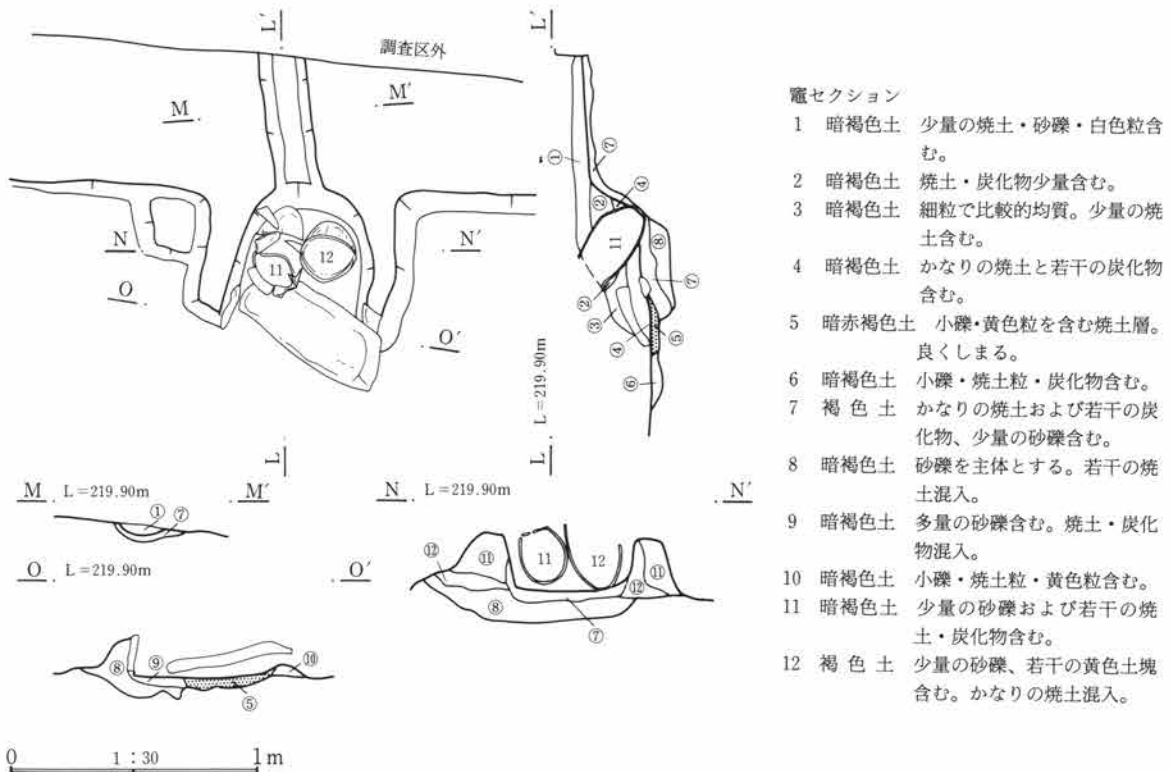
床面 地山を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居東壁のほぼ中央部に所在。焚口幅49cm・燃烧部長63cm。煙道部も残存するが、調査区外に延びるため全長は不明。両袖は住居内に張り出し、先端の燃烧部側には板状の砂岩を立てて袖石としている。また燃烧部内には、本来竈にかけられていた長甕が2个体(11・12)と、天井石として使用されていた板状の砂岩が崩落している。向かって左側の甕の下部の燃烧部ほぼ中央には砂岩が置かれており、支脚として利用されていたようである。

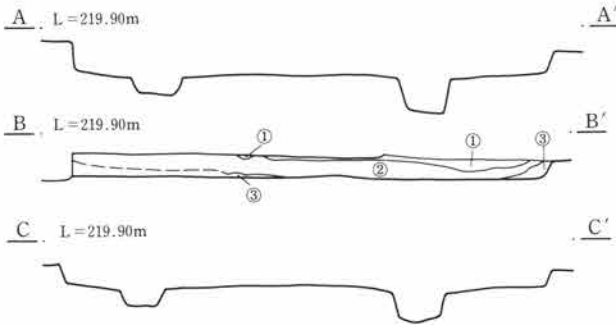
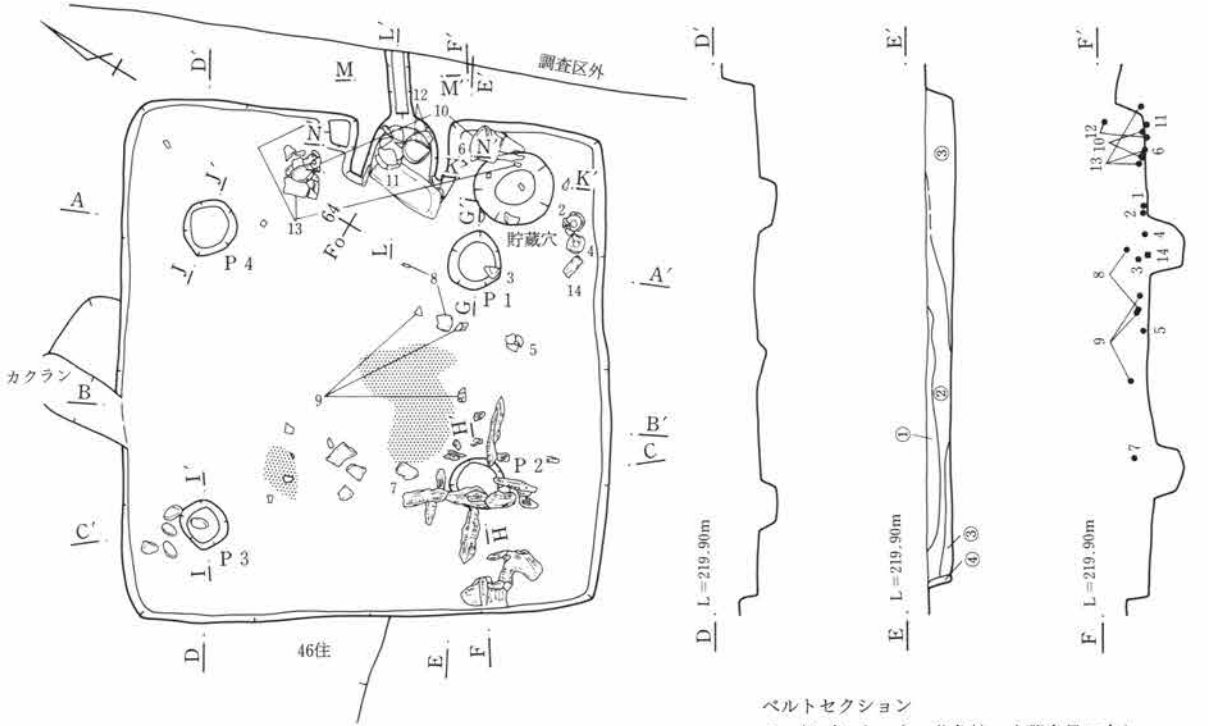
貯蔵穴 住居南東隅に所在。遺物はほとんど出土していない。周溝 なし。柱穴 大きき深さともに類似した4基の小ピットを検出。ほぼ対角線上に位置するが、南壁に比べ北壁がやや長いことに対応し、北側の柱穴間の距離のほうがやや広い。

出土遺物 住居東側の竈と貯蔵穴周辺に集中する。完形の遺物が多い。主な遺物としては、竈内と右袖脇から土師器長甕3个体(10~12)、左袖脇から甕1个体(13)、貯蔵穴脇の住居南側壁際より3个体の坏(1・2・4)が重なって出土している。この坏に隣接して砥石(14)も出土している。この他に竈前部に散在して小型甕(7・8)・甕(9)が出土している。掘り方 なし。

調査所見 住居床面直上から15cmほどの間に多量の炭化材と焼土が含まれることから、焼失住居と考えられる。住居の時期は、出土遺物から古墳時代後期である。

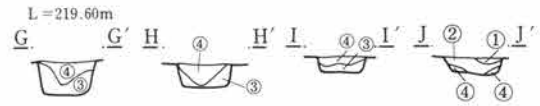


第83図 F-12号住居竈



ベルトセクション

- 1 褐色土 白・黄色粒、小礫多量に含む。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含み、焼土および炭化材混入。炭化材は下部に集中。
- 3 褐色土 白・黄色粒、小礫多量に含む。
- 4 暗褐色土 少量の白・黄色粒含み粘性持つ。

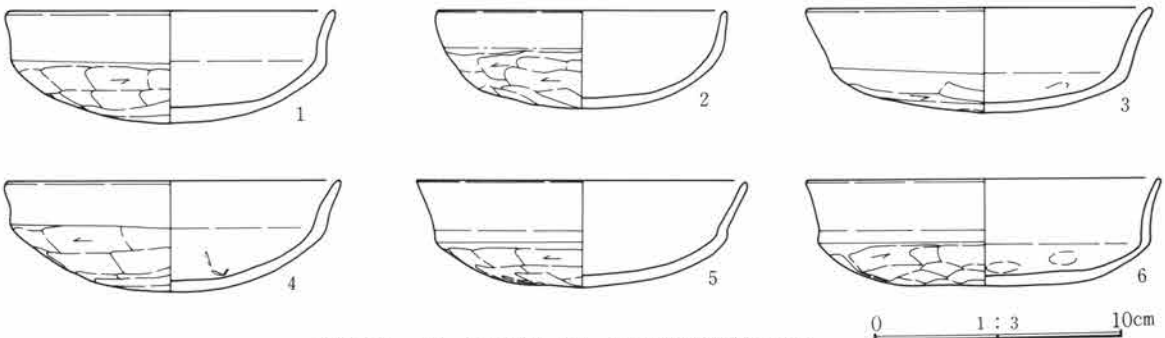
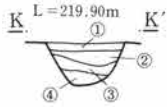


ピットセクション

- 1 暗褐色土 若干の砂礫・黄色粒含む。
- 2 暗褐色土 砂礫・焼土・微細炭化物わずかに含む。ごく弱い粘性あり。
- 3 暗褐色土 砂礫をかなり含む。若干の黄色土混入。
- 4 暗褐色土 褐色粘質土塊と砂礫がモザイク状をなす。不均質でややまし悪い。

0 1:60 2m

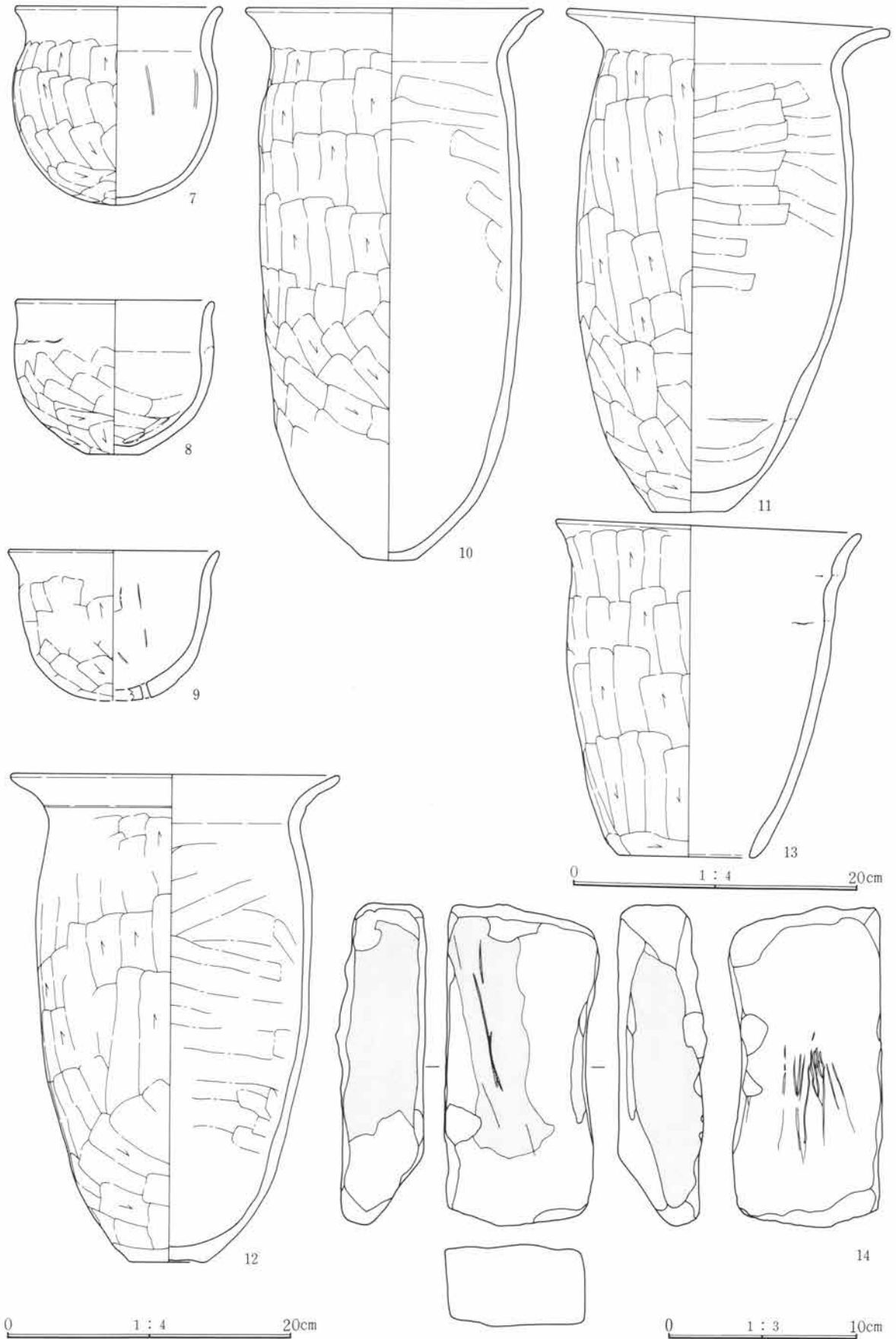
- 貯蔵穴セクション
- 1 黒褐色土 少量の砂礫・白色粒含む。焼土・微細炭化物わずかに混入。
 - 2 黒褐色土 砂礫わずかに含む。炭化物若干混入。
 - 3 黒褐色土 砂質土をかなり含みややまし悪い。
 - 4 黒褐色土 砂質土多量に含みしまり悪い。若干の黄色粒混入。



0 1:3 10cm

第84図 F-12号住居跡、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第85図 F-12号住居出土遺物実測図②

F-12号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 12.6 底 — 高 4.5	①細砂・褐色微粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。			
2	土師器 坏	床密着 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	口 11.5 底 — 高 3.9	①微砂粒・褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デか。	内面の摩耗激しい		
3	土師器 坏	+7cm 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	口 13.6 底 — 高 4.1	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ、指頭圧痕有り。	口縁部外面に漆状の 黒色付着物		
4	土師器 坏	床密着 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	口 13.1 底 — 高 4.4	①細砂含み器表面に 褐色微粒子目立つ ②良好③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラ ナデ後ナデ、ヘラ状工具のあたり有り。			
5	土師器 坏	床密着 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	口 13.1 底 — 高 4.2	①細砂含み器表面に 褐色粒子目立つ ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	胎土は粉っぽい		
6	土師器 坏	床密着 $\frac{1}{2}$	口 13.8 底 — 高 4.3	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ、指頭圧痕あり。	内面に漆状の黒色付 着物		
7	土師器 小型甕	+10cm $\frac{1}{2}$	口(14.4) 底 — 高 13.8	①砂礫含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナ デ後一部ヘラ磨き。	内表面かなり剥落		
8	土師器 小型甕	+5cm $\frac{1}{2}$	口(13.5) 底 3.5 高 10.7	①粗砂粒含む ②良好 ③淡黄色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘ ラ削り、内面ヘラナデ。			
9	土師器 甕	床密着 $\frac{1}{2}$	口 14.6 底 — 高 —	①砂粒少量含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘ ラナデ後ナデ。内面にヘラ状工具のあたり。かなり 小型の甕で、底部に焼成前に穿孔。			
10	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 20.5 底 3.3 高 38.0	①多量の砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	胴部内面中位に弱く 煤付着		
11	土師器 甕	カマド内 口縁一部 欠	口 21.5 底 5.0 高 34.3	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。内面に接合痕。底部に木葉痕。			
12	土師器 甕	カマド内 口～底部	口(22.7) 底 5.3 高 33.5	①砂礫かなり含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。口縁部と胴部の境に弱い稜 線。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。底部に木葉 痕。	胴部外面下半に一部 煤付着		
13	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 21.0 底 9.3 高 23.0	①砂礫含む ②やや軟質 ③にぶい黄褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面に 接合痕。内面は横ナデ後ヘラ磨きと思われるが、 器表面かなり剥落し、単位捉えられない。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
14	砥石	床密着 完形	16.6	8.0	4.1	941.4	砥沢石	表及び両側面に研磨面。裏面は顕著な研磨面な いが、刃ならし溝あり。

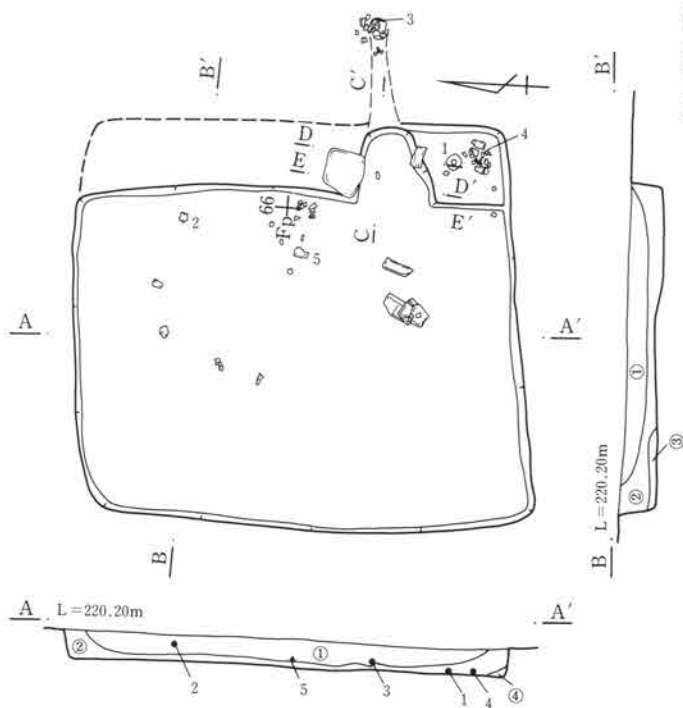
F-13号住居跡 (PL13・96)

位置 Fo・Fp-66グリッド 主軸方位 N-86°-E 残存壁高 0.23m 重複 F-35住を切って構築。

規模と形状 長辺3.65m・短辺3.25mのやや横長の長方形。調査時は内側の横長のプランを想定していたが、遺物の検討から、竈右側部分も13住に含まれるものと考えられる。よって、本来の住居東壁は図の点線部分まで広がっていたものと推測される。

床面 地山黄色シルトを掘り込んで形成。南東隅に向かってやや傾斜している。

竈 住居東壁の南よりに所在。焚口幅62cm・燃烧部長63cm。煙道はほとんど削平されているが、煙出し部の底部のみが残存し、さかさまに伏せられた完形の須恵器坏(3)と土師器甕破片が出土。煙道部の推定長は87cm。燃烧部右側には板状の砂岩が袖石として使われている。左側にも板状の砂岩があり、本来は袖石として



利用されていたものと考えられる。

貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物は少なく、住居内に散在。主なものは、先述の竈煙出し部の底部出土須恵器坏の他、竈右側出土土師器坏(1)、甕(4)などがある。

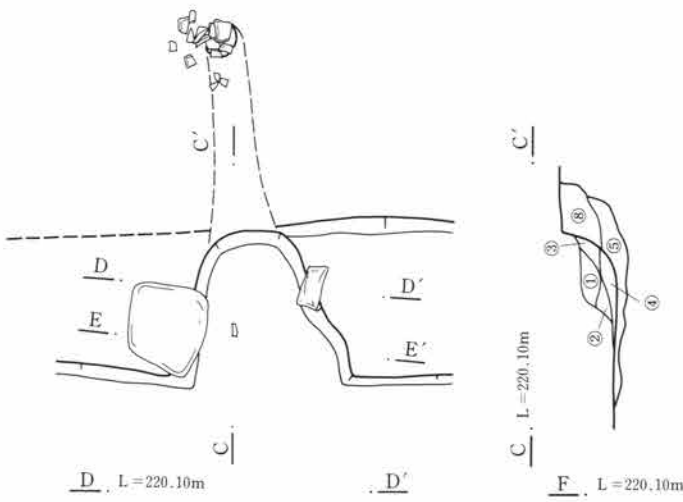
掘り方 なし。

調査所見 奈良時代の住居である。

ベルトセクション

- 1 褐色土 多量の白・黄色粒、小礫含む。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含む。
- 3 黄褐色土 地山シルトおよび小礫を主体とする。

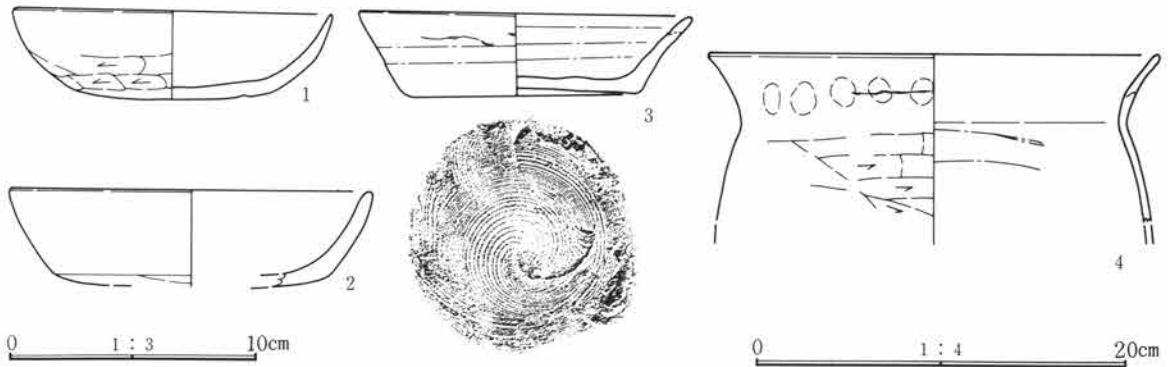
0 1:60 2m



竈セクション

- 1 褐色土 小礫を多量に含む。
- 2 褐色土 1層に比べ小礫の混入少ない。
- 3 褐色土 多量の焼土含む。小礫混入。
- 4 褐色土 炭化物・焼土含みやや細粒。
- 5 暗褐色土 焼土・炭化物をかなり含む。
- 6 暗褐色土 多量の焼土含む。黄色粒少量混入。
- 7 暗褐色土 白・黄色粒、小礫わずかに含む。
- 8 褐色土 少量の小礫、かなりの焼土含み、しまり良。

0 1:30 1m



第86図 F-13号住居跡、出土遺物実測図

F-13号住居出土遺物観察表

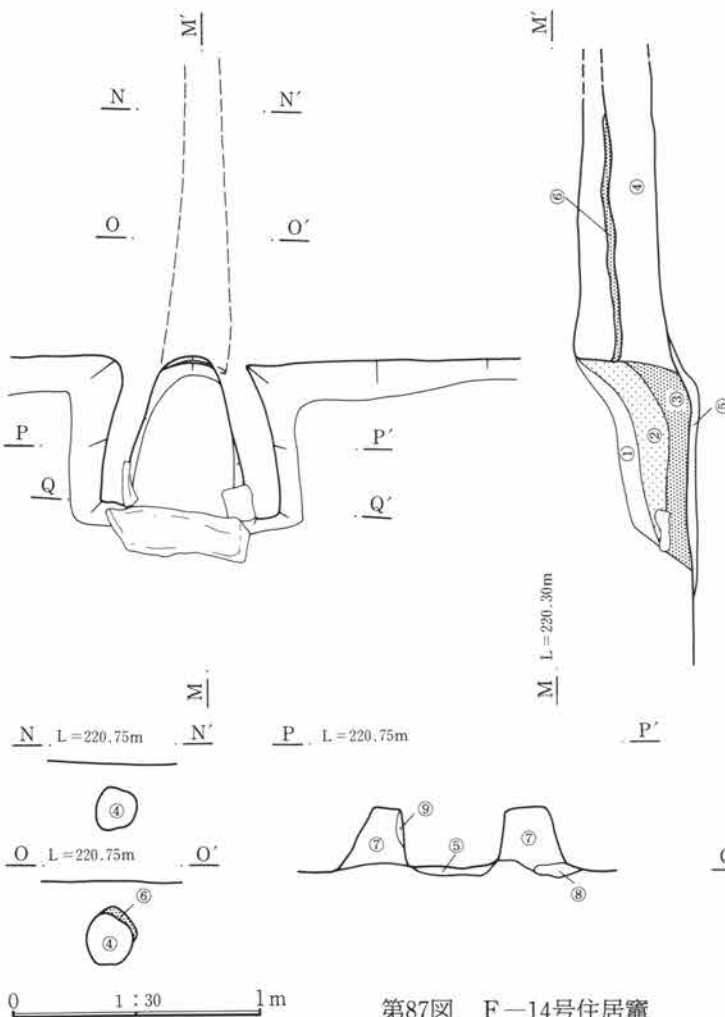
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 12.7 底 7.8 高 3.5	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。			
2	土師器 坏	+20cm 1/4	口(14.3) 底(11.0) 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅		
3	須恵器 坏	カマド煙 道内 完形	口 13.1 底 8.8 高 3.4	①微砂粒・黒色粒子 含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。外面に接合痕。底部右回転の回転糸 切り後、一部周辺を調整。			
4	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/5	口(23.8) 底 — 高 —	①均質な細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
5	鉄滓	+7cm	11.6	10.0	5.3	394.9	破片	表面ガラス状で金属光沢持ち、炭化物わずかに付着。

F-14号住居跡 (PL13・96)

位置 Fp-72グリッド 主軸方位 N-30°-W 残存壁高 0.49m

重複 F-43住を切り、48・49住に切られる。

規模と形状 長辺6.28m・短辺6.30mの正方形。壁はほぼ垂直に立ち上がる。住居主軸はかなり西にふれる。



床面 地山黄色シルトを掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の中央部に所在。焚口幅44cm・燃烧部長64cm。煙道の残存状況は良好で、天井が落ちずに残っているが、煙出し部を検出していないため全長は不明。くりぬき式の煙道で、煙道部の現存長110cm。竈は両

竈セクション

- 1 暗褐色土 多量の白・黄色粒、小礫含む。少量の地山黄色シルト混入。
- 2 黄褐色土 地山黄色シルトを多量に含む。竈天井の崩落土。
- 3 赤褐色土 多量の焼土含む。少量の白・黄色粒混入。
- 4 暗褐色土 小礫多量に含む。焼土粒わずかに混入。
- 5 褐色土 焼土粒、小礫わずかに含む。
- 6 暗赤褐色土 地山が熱により赤化した部分。
- 7 褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土含む粘質土。
- 8 暗褐色土 白・黄色粒、焼土粒を含む。
- 9 暗褐色土 7層が熱により赤化。

第87図 F-14号住居竈

第3章 検出された遺構と遺物

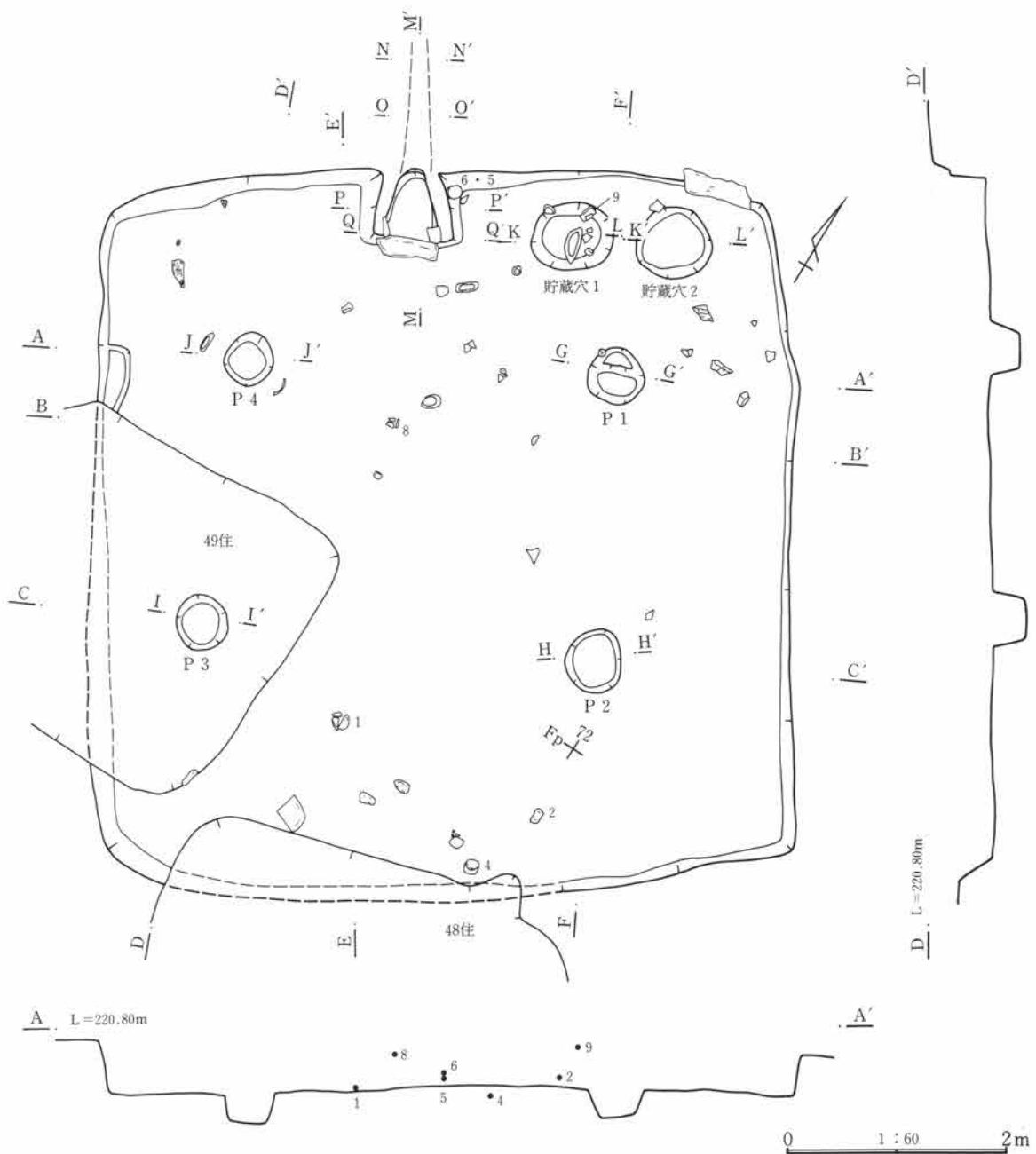
袖が住居内に張り出し、袖先端の燃焼部側には板状の砂岩を立てた袖石がみられる。燃焼部前部より、天井石として使われていた、厚手の板状の砂岩が出土している。

貯蔵穴 竈右脇の住居北東隅に2基所在。大きさ深さともに良く類似している。埋土の状況から、貯蔵穴No.2が古く、その後No.1が作られたものと考えられる。周溝なし。

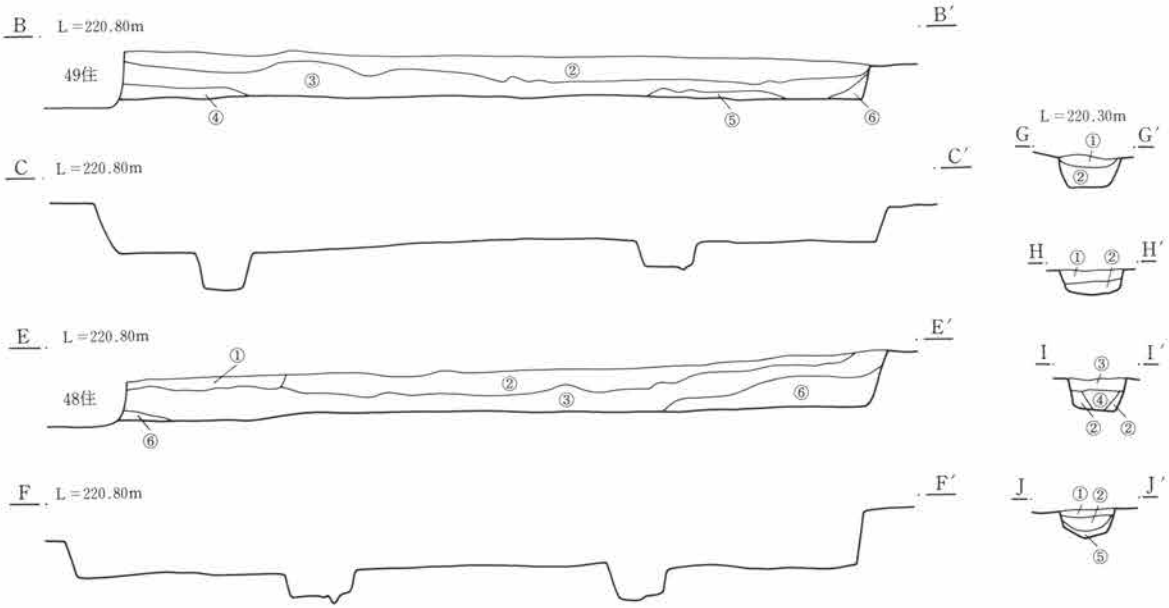
柱穴 大きさ深さともに類似した4基の小ピットを検出。ほぼ対角線上に位置するが、南西隅のピット3はやや位置が北側にずれる。

出土遺物 遺物はあまり多くなく、住居内に散在。竈右袖脇の壁際では、小型の甑(6)と高坏(5)が重なった状態で出土。他に、土師器坏(1~4)・大型の甑(7)・甕(8・9)などがある。掘り方なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



第88図 F-14号住居跡①



ベルトセクション

- 1 黒褐色土 多量の白・黄色粒、小礫、礫含む。やや硬質。
- 2 黒褐色土 多量の白・黄色粒、小礫含む。
- 3 黒褐色土 1層に比べ白・黄色粒、小礫の混入少ない。
- 4 暗褐色土 白・黄色粒、地山黄色シルトを少量含む。
- 5 褐色土 地山黄色シルトを主体とし、白・黄色粒、小礫含む。
- 6 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含む。

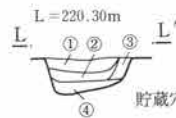
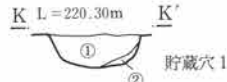
0 1:60 2m

ピットセクション

- 1 暗褐色土 小礫を含む。
- 2 暗褐色土 小礫・褐色土ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 粒子が細かい。
- 4 暗褐色土 黄褐色土ブロックを含む。
- 5 黄褐色土 細粒の砂礫。

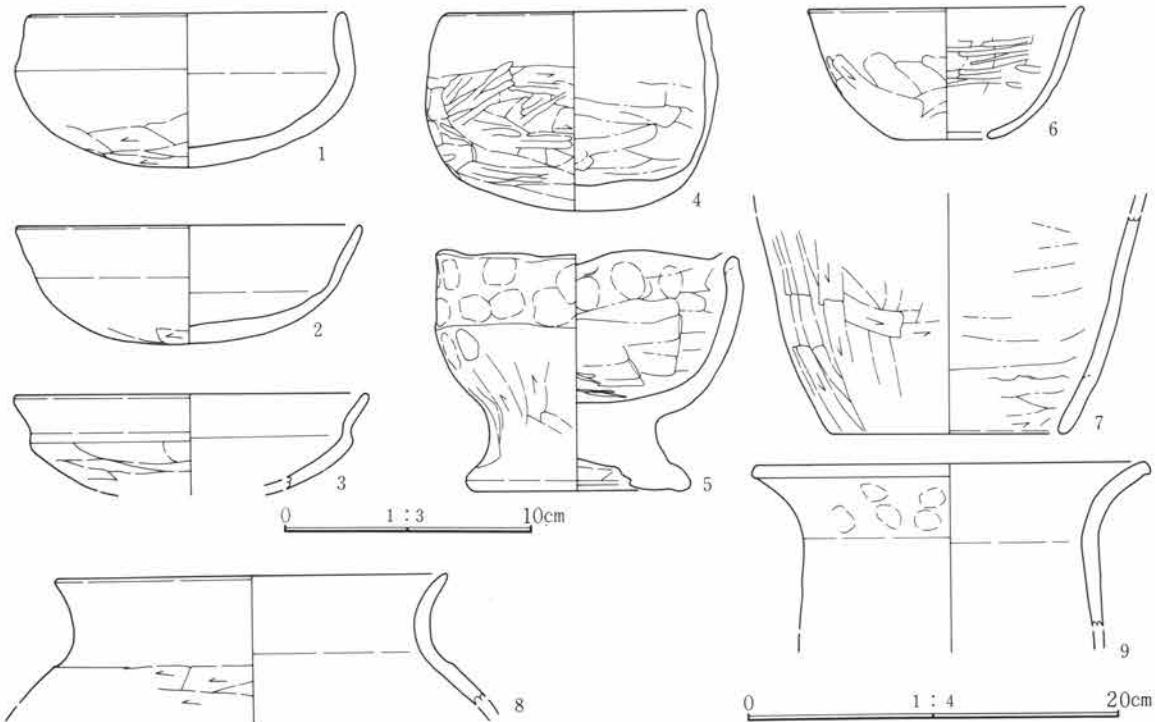
貯蔵穴No 2 セクション

- 1 暗褐色土 黄色粒・小礫・褐色土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒・小礫・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 多量の小礫を含む。
- 4 黒褐色土 少量の小礫・焼土粒・炭化物を含む。



貯蔵穴No 1 セクション

- 1 暗褐色土 小礫を含む。
- 2 黄褐色土 細粒の砂礫。



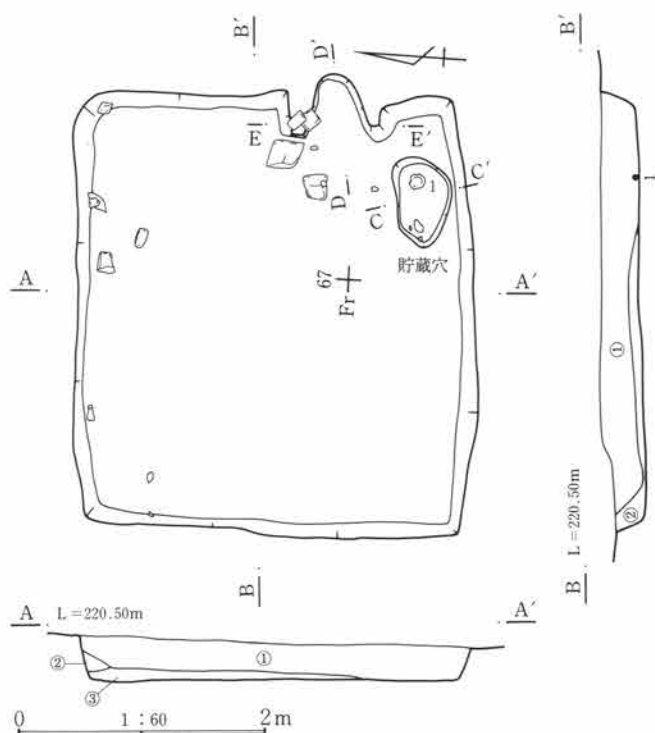
第89図 F-14号住居跡②、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

F-14号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 12.2 底 — 高 6.0	①砂粒含む ②良好 ③淡黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデか。全体に器肉厚い。	器表面の剥落激しい
2	土師器 坏	+12cm ⅓	口(13.3) 底 — 高 4.6	①砂粒・赤褐色粒子 含む ②やや軟質 ③明黄褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面ナデか。	器表面の摩滅激しい
3	土師器 坏	覆土 ⅓底部欠	口(13.8) 底 — 高 —	①微砂粒・赤褐色粒 子含む ②良好 ③淡黄褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。	
4	土師器 坏	床密着 完形	口 10.5 底 — 高 7.7	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り後へら磨き 内面横ナデ。	
5	土師器 高坏	+5cm 完形	口 11.7 底 8.7 高 9.3	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、ほぼ全周に指頭圧痕。体部 から脚部外面へら削り。体部内面へらナデ、へら 状工具端部のあたり。脚部内面へら削り。	
6	土師器 甔	+11cm ⅓	口 14.4 底(5.6) 高 6.9	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。口縁端部やや肥厚。胴部外 面へら削り、内面横ナデ後へら磨き。	
7	土師器 甔	覆土 胴下位~ 底部⅓	口 — 底(12.4) 高 —	①微砂粒・赤褐色微 粒子含む ②良好 ③明赤褐色	胴部外面へら削り、内面横ナデ。内面に接合痕。 内面下端はへら削り。	
8	土師器 甕	+20cm 口縁⅓	口(20.6) 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横 ナデ。	
9	土師器 甕	+40cm 口縁⅓	口(20.5) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面 へら削り、内面横ナデ。	

F-15号住居跡 (PL13・96)



位置 Fr-67グリッド 主軸方位 N-87°

—E 残存壁高 0.37m

重複 F-31・50・51住を切る。

規模と形状 長辺3.23m・短辺3.51mのやや縦長の長方形。竈は東側に作られる。

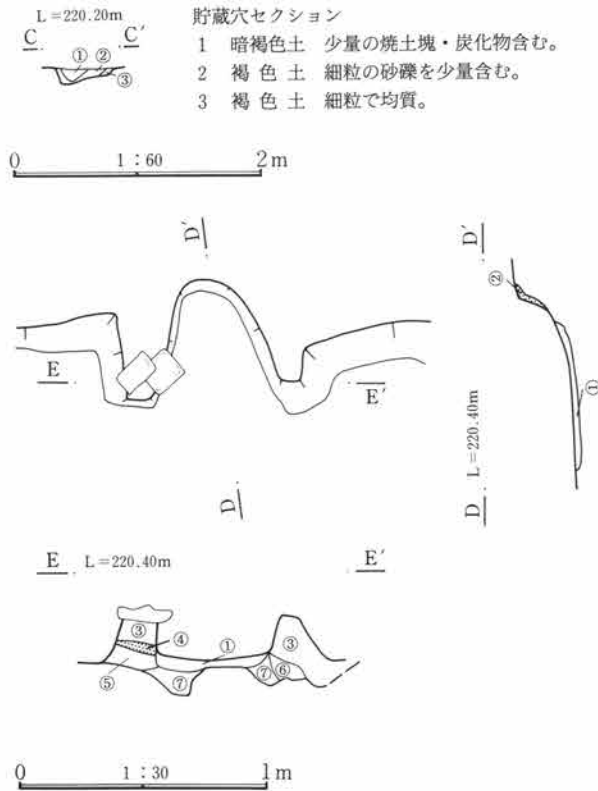
床面 地山砂質土掘り込んで平坦な床面形成。

竈 住居東壁の南よりに所在。住居内に短い袖が作られるが、燃烧部は住居域外にも一部張り出す。煙道は削平され残存していなかった。右袖上と竈前方に竈用材と見られる板状の砂岩が出土。一部は比熱の痕跡が見られた。

ベルトセクション

- 1 暗褐色土 小礫を含みしまり良。
- 2 褐色土 細粒でしまり良。小礫の混入少。
- 3 赤褐色土 小礫を含む粘質土。

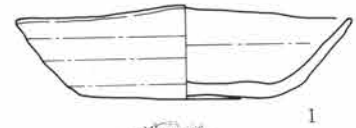
第90図 F-15号住居跡①



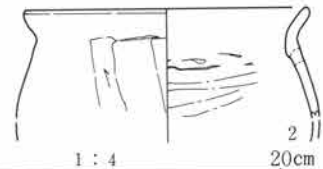
貯蔵穴 住居南東隅に所在。東西に長い楕円形を呈する。周溝なし。柱穴なし。

出土遺物 遺物は非常に少ない。土器片は10点ほどが、床面直上もしくは貯蔵穴内より出土したのみである。器種も少なく、貯蔵穴埋土上面より出土したほぼ完形の須恵器坏(1)と、土師器小型甕(2)があげられるだけである。掘り方なし。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



0 1:3 10cm



0 1:4 20cm

竈セクション

- 1 暗褐色土 細粒で均質。やわらかくしまり悪い。焼土かなり含む。
- 2 暗赤褐色土 焼土を主体としわずかな白色粒含む。しまり良。
- 3 暗褐色土 若干の焼土・微細炭化物・白色粒含む。しまり良。
- 4 赤褐色土 焼土主体とし若干の白色粒含む。
- 5 暗褐色土 少量の焼土・炭化物・白色粒含む。
- 6 褐色土 細粒の砂質土。微細炭化物わずかに含む。
- 7 暗褐色土 砂礫かなり含む。焼土・微細炭化物わずかに混入。

第91図 F-15号住居跡②、出土遺物実測図

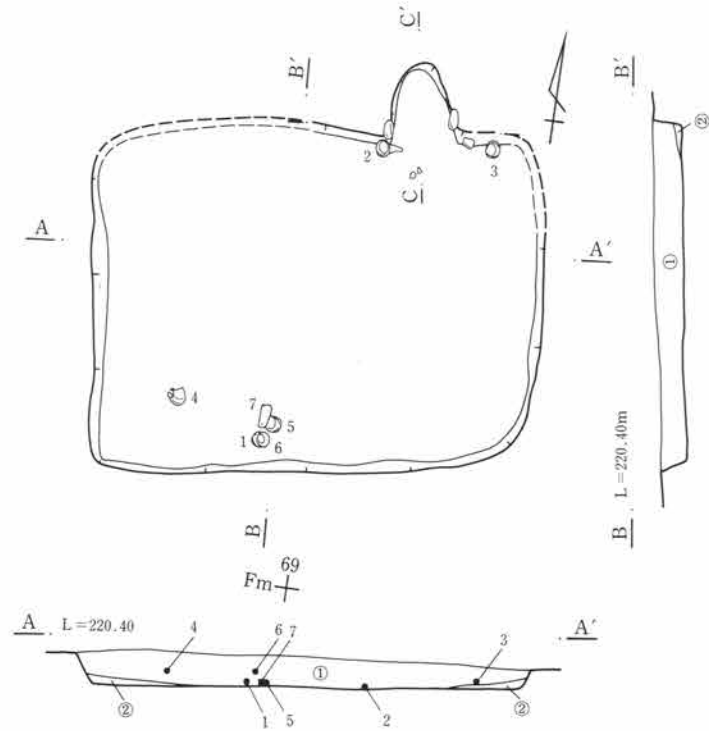
F-15号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	床密着 ほぼ完形	口 13.0 底 7.9 高 3.6	①細粒で均質微砂わずかに含む②堅緻③灰白色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後周辺部手持ちヘラ削り。	器形かなり歪む内外面に自然釉
2	土師器 小型甕	覆土 口~胴部 上位1/2	口(14.8) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。内面に接合痕。	

F-16号住居跡 (PL13・96・97)

位置 Fm-68・69グリッド **主軸方位** N-7°-W **残存壁高** 0.23m **重複** なし

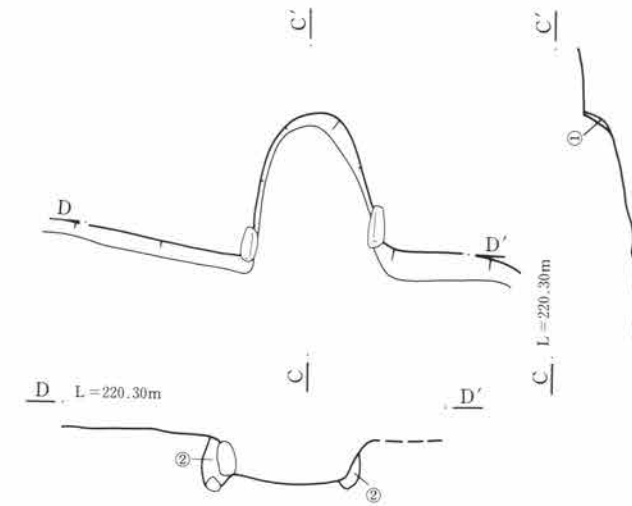
規模と形状 長辺3.58m・短辺3.23mの横長の長方形。調査時にはより北側に広いプランを想定していたが、ベルトセクションの所見や遺物の出土状態から修正してある。竈は北壁にあり、周壁はしっかりとした掘り込みである。



ベルトセクション

- 1 褐色土 小礫を含む。
- 2 黄褐色土 小礫の混入少ない。

0 1:60 2m



竈セクション

- 1 赤褐色土 地山砂礫質土が熱により赤化した部分。
- 2 黒褐色土 地山砂礫質土を多量に含む。

0 1:30 1m

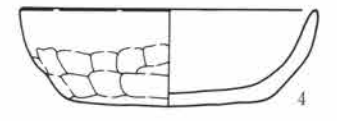
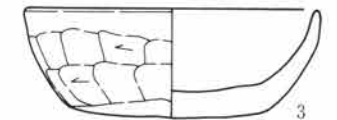
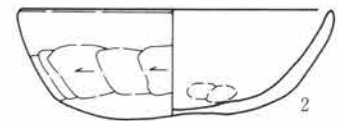
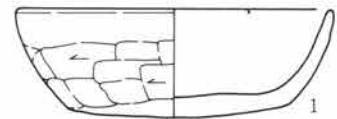
床面 砂礫質の地山を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の東よりに所在。焚口幅52cm・燃烧部長66cm。煙道は削平されており残存していない。住居内への袖の作り出しはみられず、燃烧部は住居の外側に張り出す。燃烧部先端の両壁には板状の砂岩が袖石として据え付けられている。
貯蔵穴 なし。 **周溝** なし。

柱穴 なし。

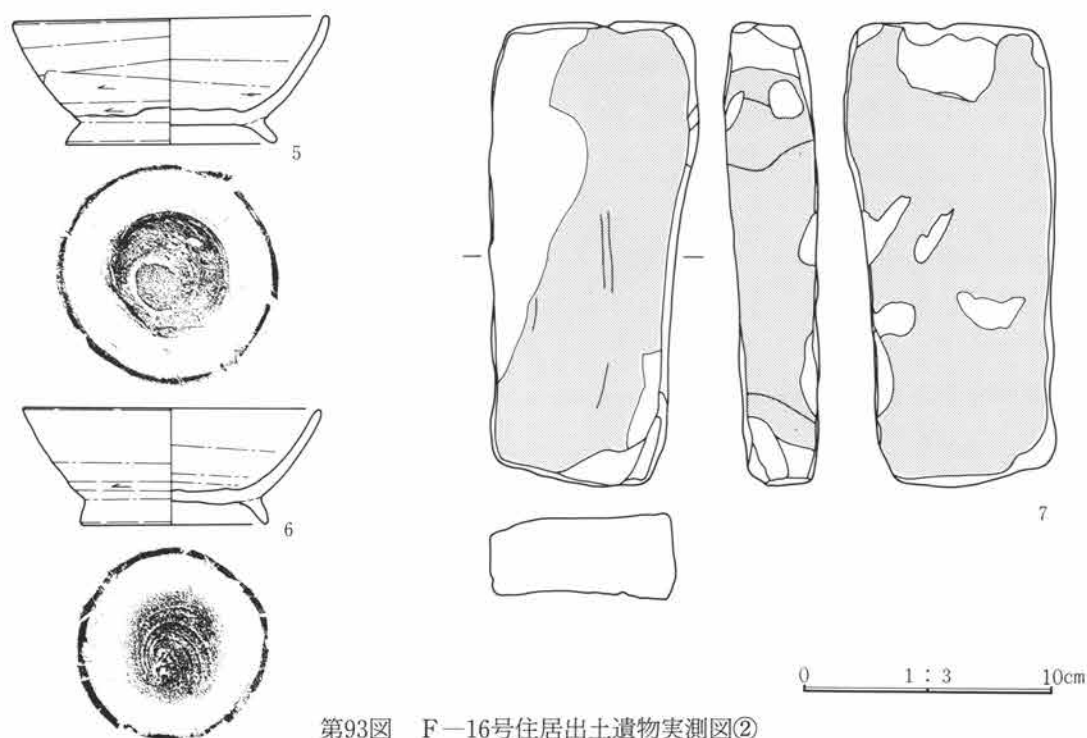
出土遺物 遺物は非常に少ないが、竈周辺と住居南西部の床面上より、完形に近い状態で土師器環4点(1~4)、須恵器壺2点(5・6)、砥石1点(7)が出土。
掘り方 なし。

調査所見 住居・竈形状、出土遺物より、奈良時代の住居とわかる。



0 1:3 10cm

第92図 F-16号住居跡、出土遺物実測図①



第93図 F-16号住居出土遺物実測図②

F-16号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	+2cm ほぼ完形	口 12.3 底 8.8 高 4.3	①微砂粒（ごくまれに小礫）含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデか。底部の器肉厚い。器表面の荒れ激しい			
2	土師器 坏	+2cm ほぼ完形	口 12.3 底 9.0 高 4.2	①細砂（まれに小礫）含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ、指頭圧痕あり。器表面の荒れ激しい。			
3	土師器 坏	+4cm ほぼ完形	口 11.6 底 7.8 高 4.3	①微砂粒・赤褐色粒子含む ②良好 ③におい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。底部の器肉厚い。			
4	土師器 坏	+6cm 一部欠	口 11.6 底 8.1 高 3.9	①微砂粒（ごくまれに小礫）含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。			
5	須恵器 塊	+2cm ほぼ完形	口 12.4 底 8.3 高 5.0	①微砂粒少量含む ②堅緻 ③灰黄色	ロクロ整形。貼り付け高台。体部外面下部回転ヘラ削り、高台の接合痕。底部回転ヘラ切り後回転ヘラ削り。			
6	須恵器 塊	+7cm ほぼ完形	口 11.6 底 7.2 高 4.5	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。貼り付け高台。体部外面下部回転ヘラ削り。底部右回転の回転糸切り。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全長	幅	厚さ	重量		
7	砥石	床密着 完形	18.3	8.3	2.9	837.4	砥沢石	表裏及び両側面に研磨面。主に表・右側面を使用している。

F-17A号住居跡 (PL14・97・98)

位置 Fr・Fs-68グリッド 主軸方位 N-5°-W 残存壁高 0.31m

重複 F-17B・34・50住を切る。

規模と形状 長辺4.47m・短辺3.95m。平面形状は、北壁に比べ南壁側がやや長い台形状を呈する。北西隅の周壁はやや崩落がみられ丸みをおびる。竈は北壁に築かれる。

第3章 検出された遺構と遺物

床面 地山砂礫質土掘り込み平坦な床面形成。南半部に一部掘り方が見られるが、貼り床などはない。

竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。焚口幅47cm・燃烧部長62cm。煙道は削平され残存していない。両袖が住居内に作り出され、先端の燃烧部側には板状の砂岩が袖石として据え付けられている。また天井石として利用されていたとみられる砂岩が、燃烧部内に落ち込んだ状態で検出された。燃烧部からはこの他に完形の須恵器坏(6)が1点出土した。

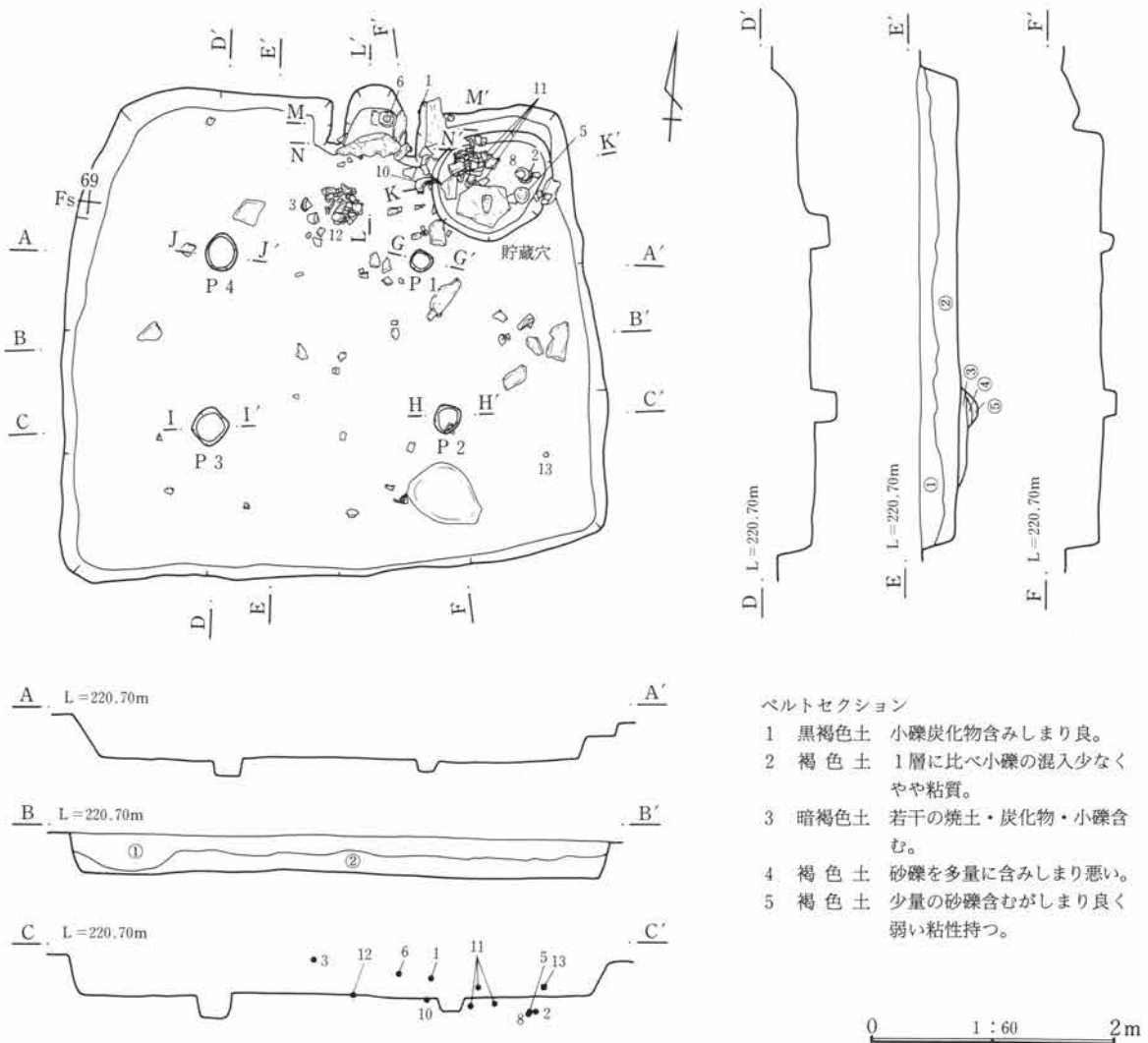
貯蔵穴 住居北東隅に所在。東西方向がやや長い楕円形。内部より須恵器坏(5・8)、土師器坏(2)・甕(11)が出土。周溝なし。

柱穴 大きさ・深さともに類似した4基の小ピットを検出。ほぼ対角線上に位置するが、かなり浅い。

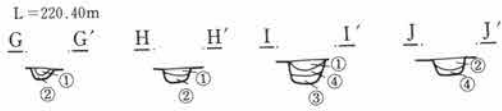
出土遺物 遺物はかなりあるものの、床面よりも若干高い位置から出土するものが多い。竈と貯蔵穴の周辺に集中する傾向がみられる。前述の竈および貯蔵穴内出土遺物の他に、土師器坏(1・3)・甕(10・12)などがある。また覆土中より須恵器盖(4)・埴(7)・小型短頸壺(9)が出土。この他に線刻のある紡錘車(13)が得られている。

掘り方 住居南壁に沿って浅い溝状の掘り方が見られる。

調査所見 出土遺物より奈良時代の住居とわかる。

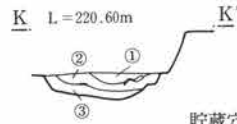
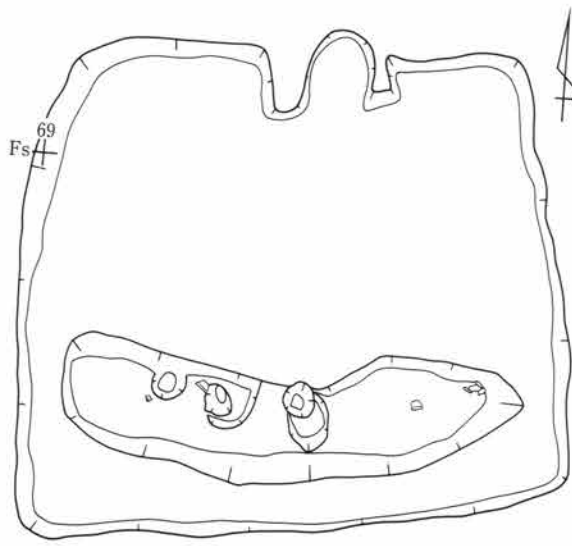
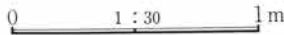
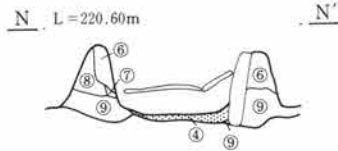
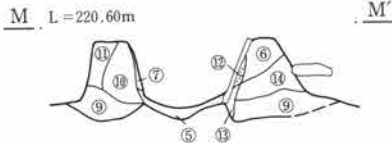
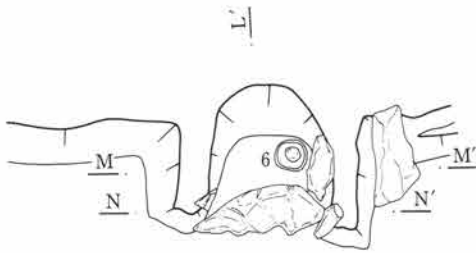


第94図 F-17A号住居跡①



ピットセクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、地山砂礫土含む。
- 2 暗褐色土 地山土を含む。
- 3 暗黄褐色土 白・黄色粒、地山土を多量に含む。
- 4 黄褐色土 地山土を多量に含む。

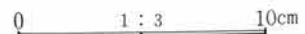
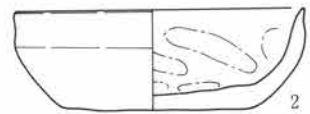
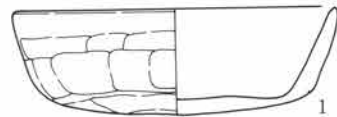
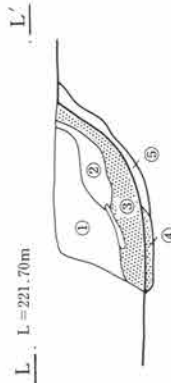


貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 焼土、白・黄色粒、小礫含む。
- 2 暗褐色土 少量の白・黄色粒、小礫含む。焼土混入。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化物含み白・黄色粒をわずかに混入。

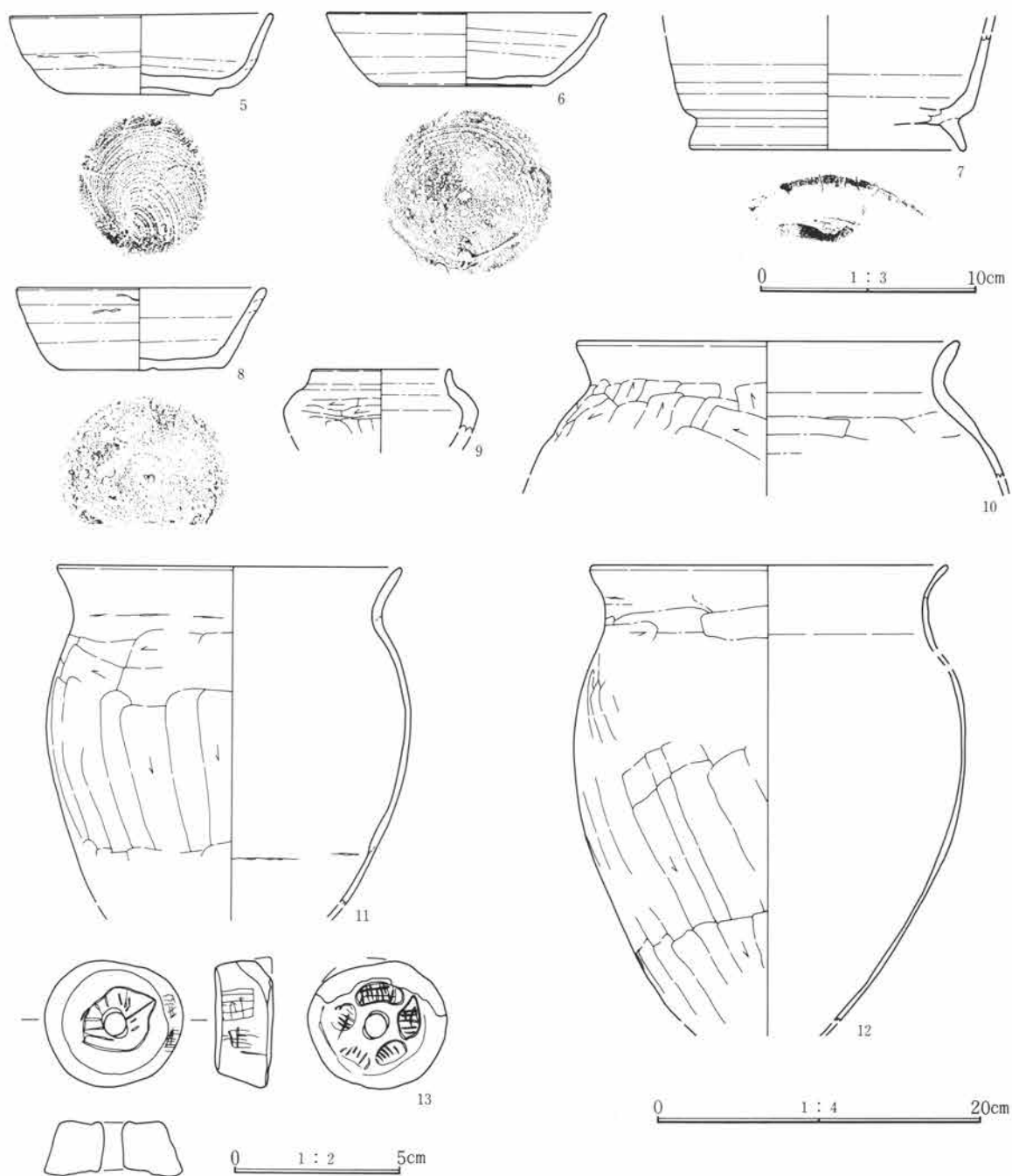
竈セクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、小礫多量に含む。炭化物混入。
- 2 暗赤褐色土 白・黄色粒を含み、全体に焼土混入。
- 3 赤褐色土 少量の白・黄色粒含む。多量の焼土混入。
- 4 暗赤褐色土 焼土を主体とし比較的均質。細粒の砂礫若干含む。
- 5 暗褐色土 焼土かなり含みやわらかくしまり悪い。
- 6 暗褐色土 白色粒・砂礫若干含み硬くしまる。焼土わずかに混入。
- 7 暗褐色土 若干の焼土含む。細粒で均質。
- 8 暗褐色土 少量の砂礫含む。
- 9 暗褐色土 少量の焼土・炭化物含む。
- 10 暗褐色土 若干の白色粒・砂礫含む。少量の焼土混入。
- 11 暗褐色土 若干の焼土・白色粒含む。粘性持ちしまり良。
- 12 赤褐色土 均質で良くしまった焼土層。
- 13 暗褐色土 細粒の砂礫を少量含みやわらかくしまり悪い。少量の焼土混入。
- 14 暗褐色土 若干の焼土・炭化物・白色粒含む。



第95図 F-17A号住居跡②、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第96図 F-17B号住居出土遺物実測図②

F-17A号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	掘り方内 1/2	口(12.7) 底 7.8 高 4.1	①微砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	貯蔵穴内 ほぼ完形	口 11.4 底 7.6 高 4.0	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ後、斜め方向の指ナデ。内面底部に指頭圧痕。	器面の摩滅激しい
3	土師器 坏	+28cm 1/2	口(14.4) 底(9.2) 高 3.9	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。	器面の摩滅激しい

番号	種器種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
4	須恵器 蓋	覆土 1/4	口(17.9) 摘— 高—	①微砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。天井部回転ヘラ削り。摘貼付。内外面に接合痕。			
5	須恵器 坏	貯蔵穴内 ほぼ完形	口 11.6 底 6.3 高 3.6	①細砂かなり含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。			
6	須恵器 坏	カマド内 ほぼ完形	口 12.4 底 7.5 高 3.3	①細粒で微砂わずかに含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。			
7	須恵器 埴	覆土 体～底部 1/5	口— 底(12.3) 高—	①細粒で微砂わずかに含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。貼り付け高台。底部回転糸切り。			
8	須恵器 坏	貯蔵穴内 1/2	口 11.2 底 7.6 高 3.7	①細粒で微砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。	外面に自然釉		
9	須恵器 短頸壺	覆土 口～胴部 上位1/5	口(8.2) 底— 高—	①微砂・黒色微粒子含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。胴部外面ヘラ削り。			
10	土師器 甕	+4cm 口～胴部 上位1/5	口(22.8) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
11	土師器 甕	貯蔵穴内 口～胴部 中位	口 20.7 底— 高—	①細砂多量に含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。			
12	土師器 甕	床密着 口～胴部 中位	口 21.6 底— 高—	①細砂多量に含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。全体に器肉薄い。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
13	紡錘車	+10cm 完形	3.85	4.2	1.5	42.9	滑石	表裏側面に線刻。表に1、裏に5個木葉様。側面に格子状の模様。

F-17B号住居跡 (PL14・98)

位置 Fs-68グリッド 主軸方位 N-11°-W 残存壁高 0.12m 重複 F-17A住に切られる。

規模と形状 住居のほとんどの範囲を17A住によって破壊されているため、全体の形状は不明。わずかに住居北東隅と、北側・東側の竈が残存するのみ。

床面 不明。

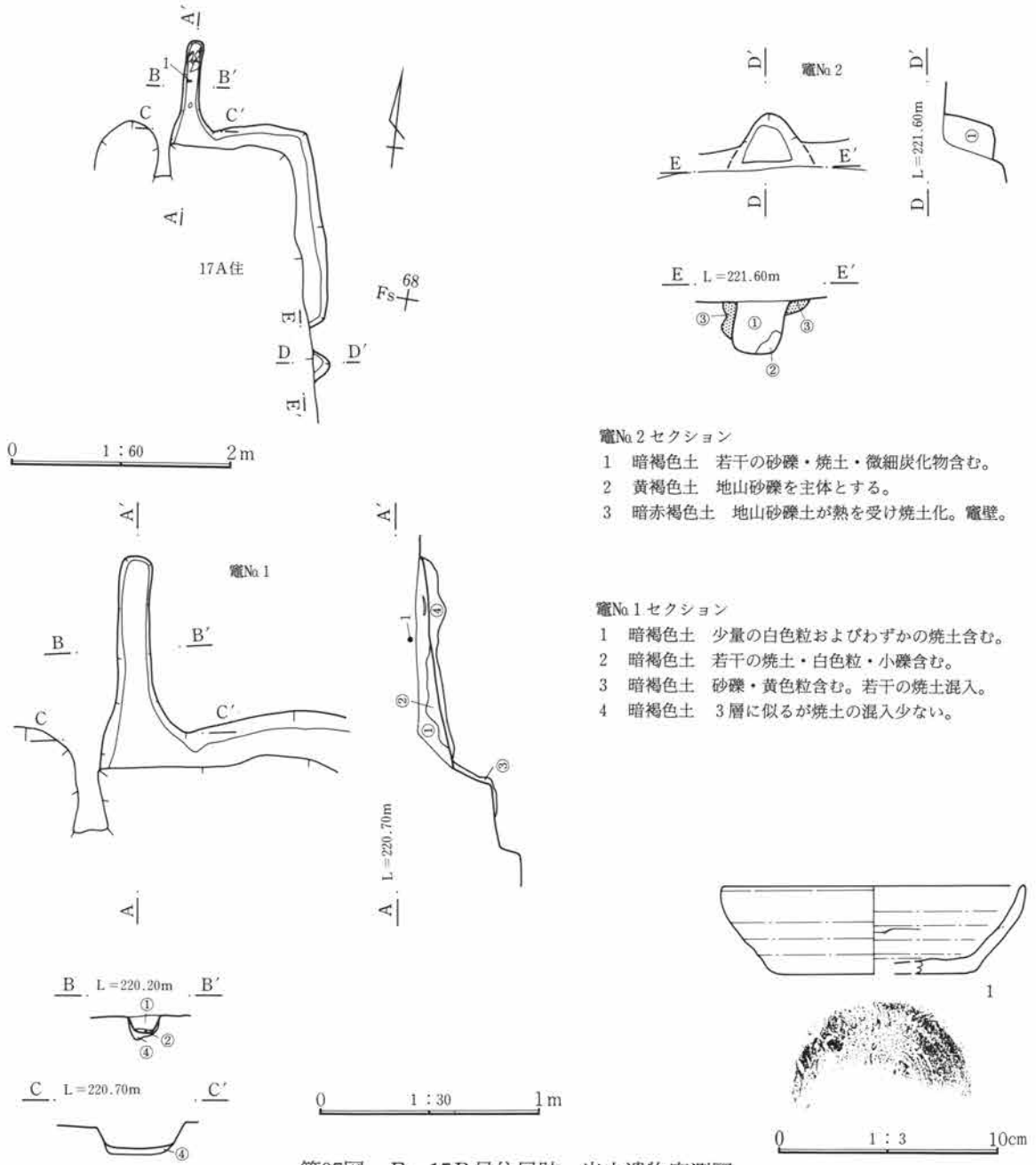
竈 北側の竈No.1は、17A住によって燃焼部を一部切られているが、現存で焚口幅41cm・燃焼部長24cm。煙道の下半も残っており、煙道長75cm。東側の竈No.2は竈奥壁のごく一部が残っているのみである。残存する燃焼部の幅は20cm・長さ13cm。

貯蔵穴 不明。 周溝 なし。 柱穴 不明。

出土遺物 住居域のほとんどを破壊されており、わずかに竈No.1の煙道内より出土した遺物があるだけである。煙道内からは、須恵器坏(1)、土師器甕の破片が出土。 掘り方 不明。

調査所見 竈No.1・2は、17B住の外形線との位置関係や底面の高さなどから、同一の住居のものとして扱った。ただし、竈No.2より土器等の出土がみられなかったため、遺物による検証はできなかった。住居時期は出土遺物より奈良時代と推定される。

第3章 検出された遺構と遺物



竈No2 セクション

- 1 暗褐色土 若干の砂礫・焼土・微細炭化物含む。
- 2 黄褐色土 地山砂礫を主体とする。
- 3 暗赤褐色土 地山砂礫土が熱を受け焼土化。竈壁。

竈No1 セクション

- 1 暗褐色土 少量の白色粒およびわずかの焼土含む。
- 2 暗褐色土 若干の焼土・白色粒・小礫含む。
- 3 暗褐色土 砂礫・黄色粒含む。若干の焼土混入。
- 4 暗褐色土 3層に似るが焼土の混入少ない。

第97図 F-17B号住居跡、出土遺物実測図

F-17B号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	17A住内 3/5	口(13.4) 底(8.0) 高 3.9	①細粒で微砂わずかに含む ②堅緻 ③灰黄色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り。	

F-18号住居跡 (PL14・98)

位置 Fr・Fs-75グリッド 主軸方位 N-4°-W 残存壁高 0.39m 重複 F-45住を切る。

規模と形状 長辺4.26m・短辺3.03mの横長の長方形。住居確認時にはより東側に広い範囲を想定していた

が、セクションの検討から住居域を修正した。したがって、長辺の長さは推定である。周壁はほぼ直進し、形状の乱れはあまり見られない。竈は北側に構築されている。

床面 地山黄色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

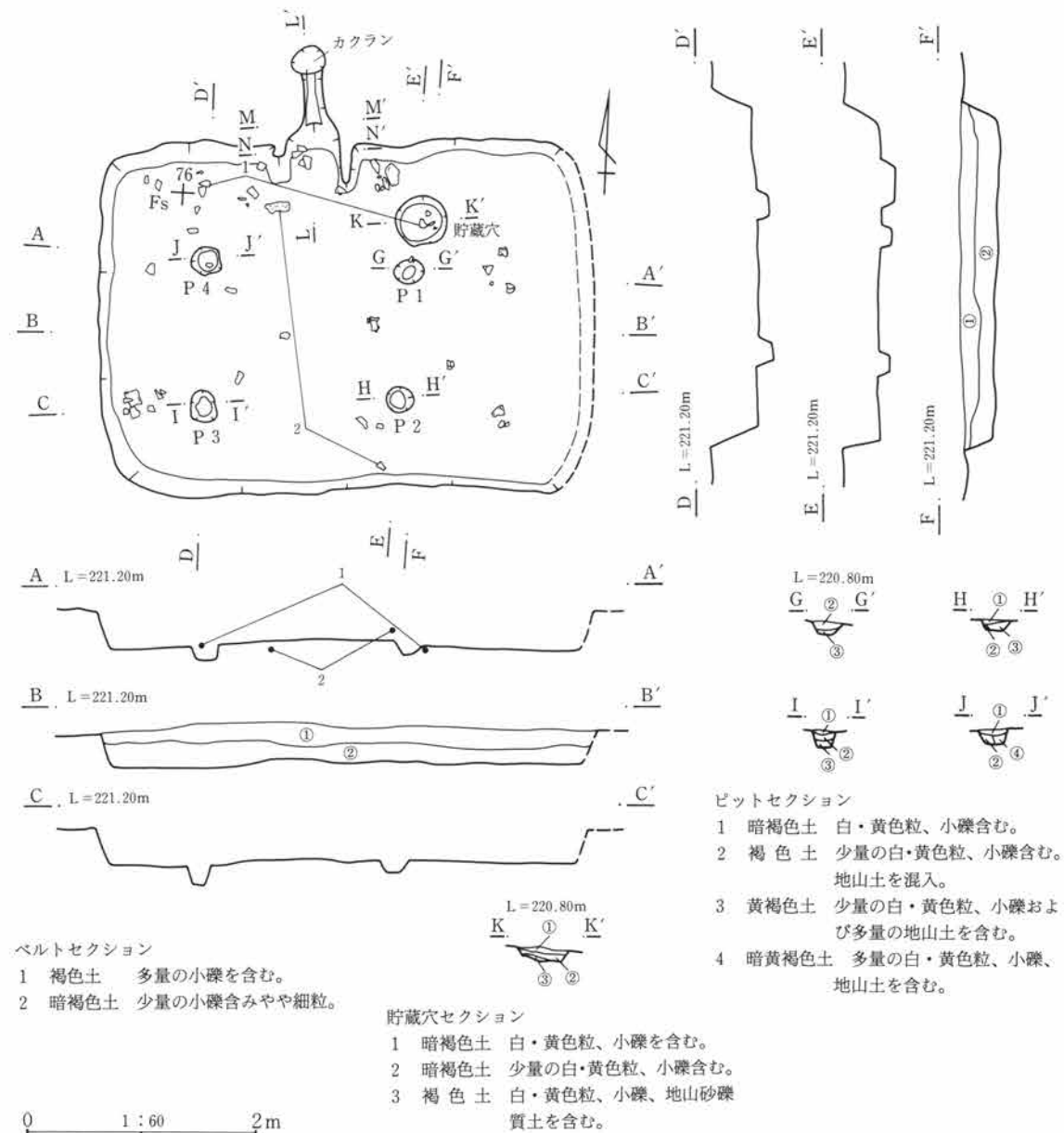
竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。住居内に短い袖が作られ、燃烧部はやや住居域外までのびる。焚口幅44cm・燃烧部長54cm。煙道も一部残存するが、煙出し部は後世の小ピットによって破壊されている。

貯蔵穴 住居北壁近く、竈南東側に所在。周溝なし。

柱穴 大きさ深さともに類似する4基の小ピットを検出。東側の2基はかなり西にずれている。

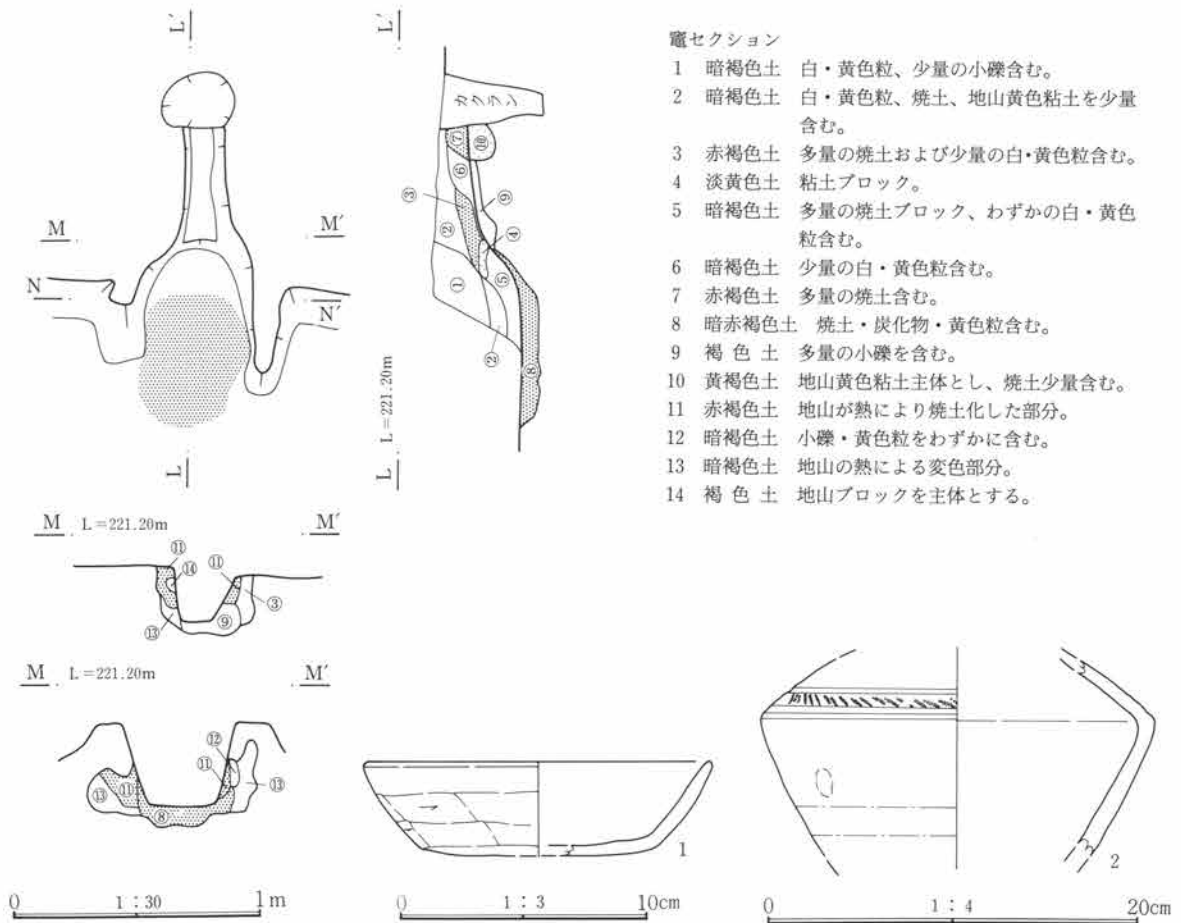
出土遺物 遺物は少なく、全体に小破片が散在して出土した。器種も少なく、床面上から土師器坏(1)と須恵器長頸壺(2)が出土した他は、甕の破片が見られたのみである。掘り方なし。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



第98図 F-18号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第99図 F-18号住居竈、出土遺物実測図

F-18号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/2	口(13.6) 底(9.3) 高 3.7	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	須恵器 長頸壺	床密着 肩～胴部	口— 底— 高—	①細粒で微砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。肩部に沈線二条、沈線間に櫛歯状工具による列点刺突文。	

F-19号住居跡 (PL14・98)

位置 Fq-75・76グリッド 主軸方位 N-8°-E 残存壁高 0.37m

重複 F-29住に切られ、30・53・56住を切る。

規模と形状 重複が激しいため、調査開始時には住居域をより東側に広く想定し掘り下げたが、ベルトセクションの検討から住居域を修正した。住居形状は長辺が推定で4.25m・短辺3.15mの横長の長方形。竈は北側に築かれる。他住居との重複が少なかった住居西半では、周壁はほぼ直進し、崩落などもあまり見られない。

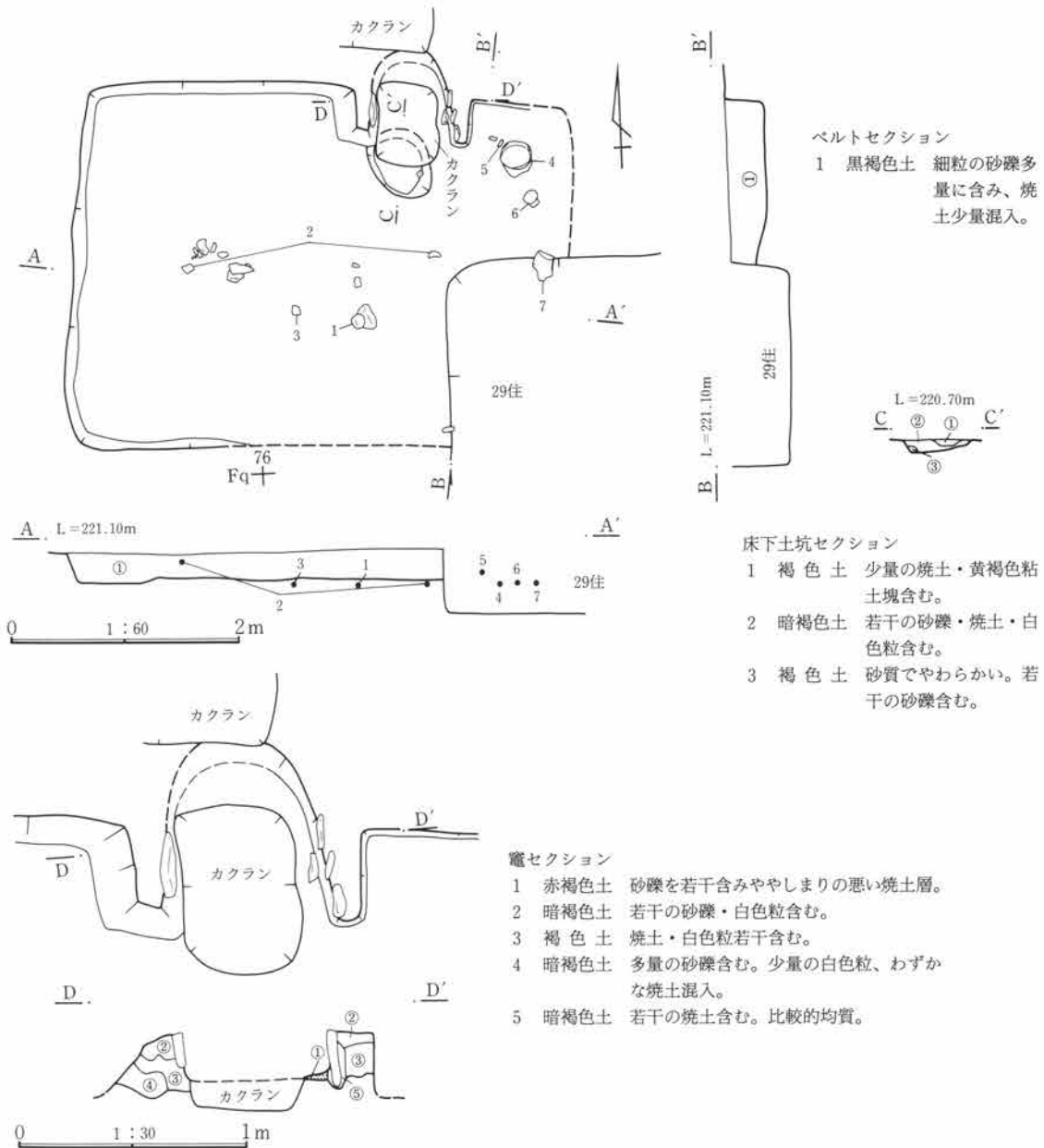
床面 地山、および他住居の覆土を掘り込んで床面を形成。やや起伏がありやわらかく、たたきしめたような痕跡はうかがえなかった。

竈 住居北壁の中央よりも東よりに所在。後世の攪乱によって燃烧部と奥壁の一部が破壊され、残存状態は悪い。竈の形態は、住居内に袖が作られ、燃烧部は一部住居外に張り出す。焚口幅66cm・燃烧部長は推定で83cm。煙道は削平されている。袖の先端部には、燃烧部側に板状の砂岩が袖石として据え付けられている。

貯蔵穴 なし。 **周溝** なし。 **柱穴** なし。

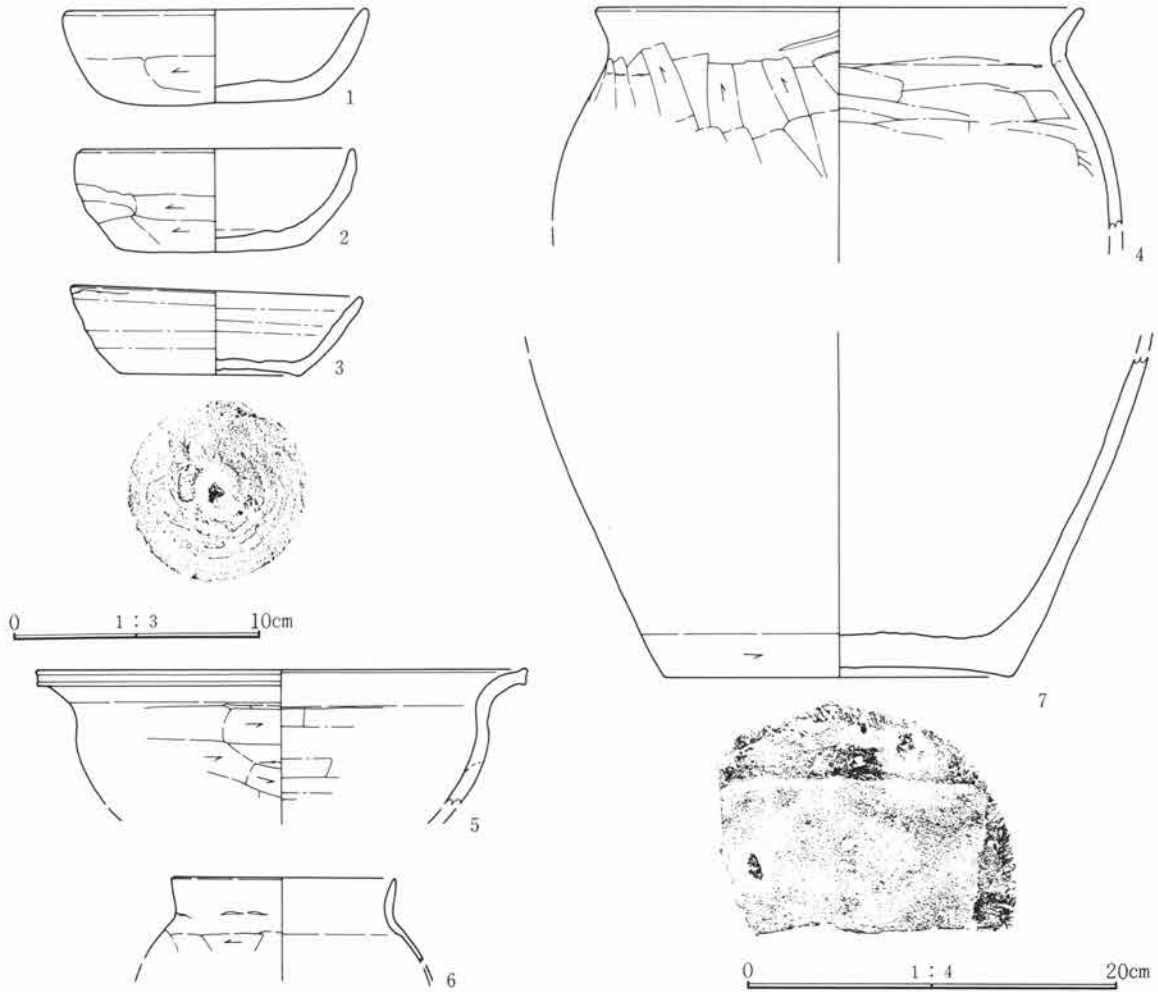
出土遺物 遺物は少ない。多くは床面よりも若干上位で出土した。主な器種は、土師器坏(1・2)、須恵器坏(3)、土師器甕(4)・鉢(5)・小型甕(6)、須恵器甕(7)などがある。 **掘り方** なし。

調査所見 出土遺物・住居形状より、奈良時代の住居と推定される。



第100図 F-19号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第101図 F-19号住居出土遺物実測図

F-19号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 11.9 底 8.8 高 3.7	①細砂（ごくまれに 小礫）含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へら削り。内面 横ナデ。	器面の摩滅激しい
2	土師器 坏	+9cm 1/2	口 10.8 底 7.5 高 4.1	①細砂（ごくまれに 小礫）含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へら削り。内面 横ナデ。	
3	須恵器 坏	+9cm 1/2	口(11.4) 底 7.0 高 3.5	①細粒で微砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。口縁下外面に接合痕。底部回転へら 切り後一部ナデ。	
4	土師器 甕	+8cm 口～胴部 上位	口 25.9 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ、内外面に接合痕。胴部外面 へら削り、内面横ナデ。	
5	土師器 鉢	床密着 口～胴部 上位	口(26.0) 底 — 高 —	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。口縁端部が肥厚し、外面に 沈線が一条めぐる。胴部外面へら削り、内面へら ナデ。胴部内外面に接合痕。	
6	土師器 小型甕	+11cm 口～頸部	口 12.0 底 — 高 —	①均質な細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面にへら状工具のあたり 胴部外面へら削り、内面丁寧なナデ。全体に器肉 薄い。	
7	須恵器 甕	+10cm 胴下位～ 底部1/4	口 — 底(18.6) 高 —	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。胴部外面平行叩目文、最下部は回転 へら削り。底部には方形の凹み。	

F-20号住居跡 (PL15・98・99)

位置 Fs-67グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.72m 重複 F-52住を切る。

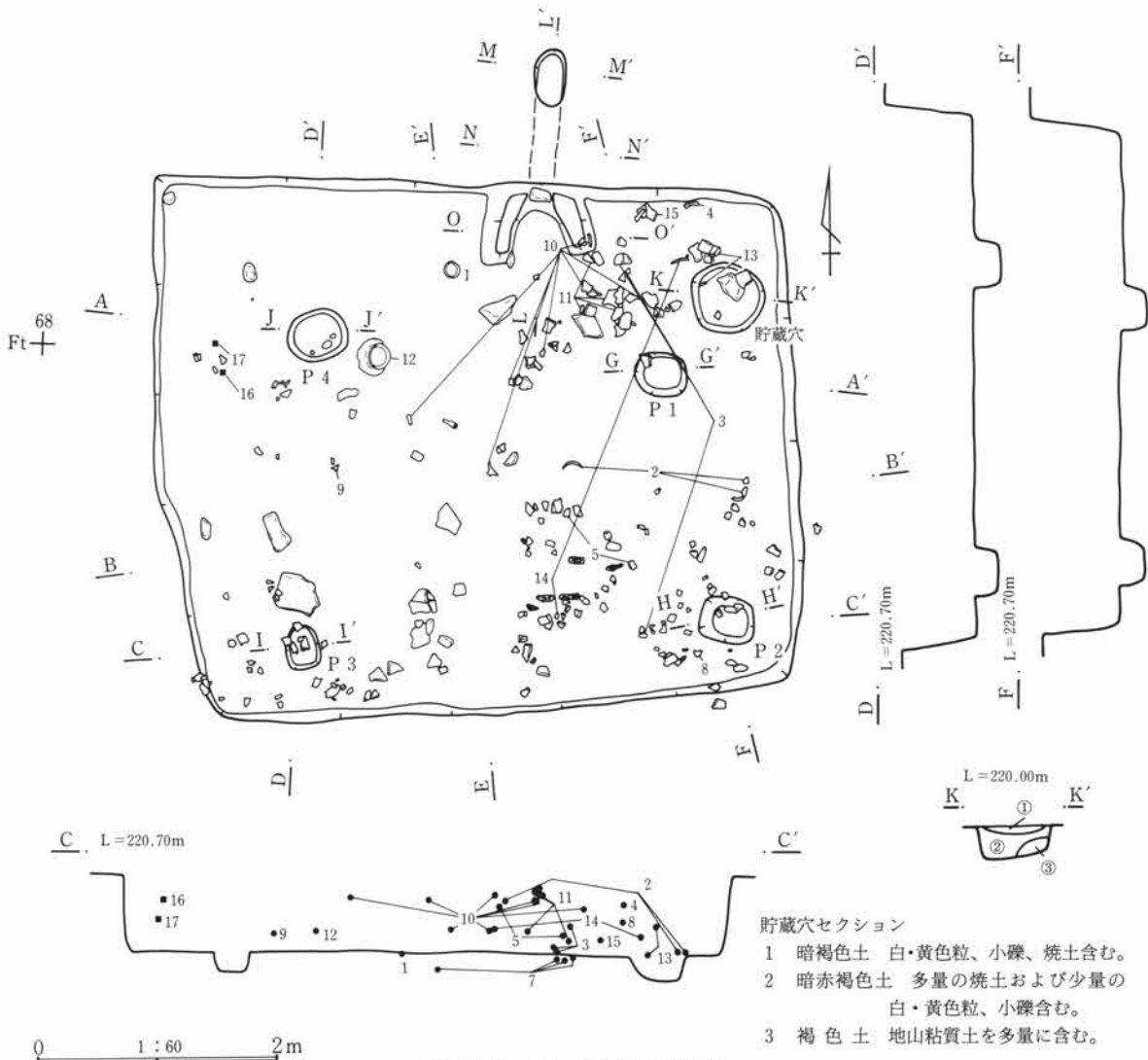
規模と形状 長辺5.31m・短辺4.43mの横長の長方形。東壁に比較して西壁がやや長く、歪んだ形状となる。周壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁の崩落などはみられない。壁高も最大で72cmと深く、残存状況は良好である。竈は北側に構築される。

床面 床面は、北東および南西隅を除いて、掘り方とほぼ一致する。地山の砂礫混じりの粘質シルトを掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床・叩きしめた痕跡などは、特にみられなかった。

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。住居内に両袖が作り付けられる形態をとる。焚口幅50cm・燃燒部長62cm。両袖の先端燃焼部側には、板状の砂岩が袖石として据えられていたが、右袖石は下端部が残存するのみである。くりぬき式の煙道は残存状況が良好で、天井も崩落せずに残っている。煙道部長108cm。煙道の煙出し部付近からは、土師器甕の破片が折り重なるようにして出土した。

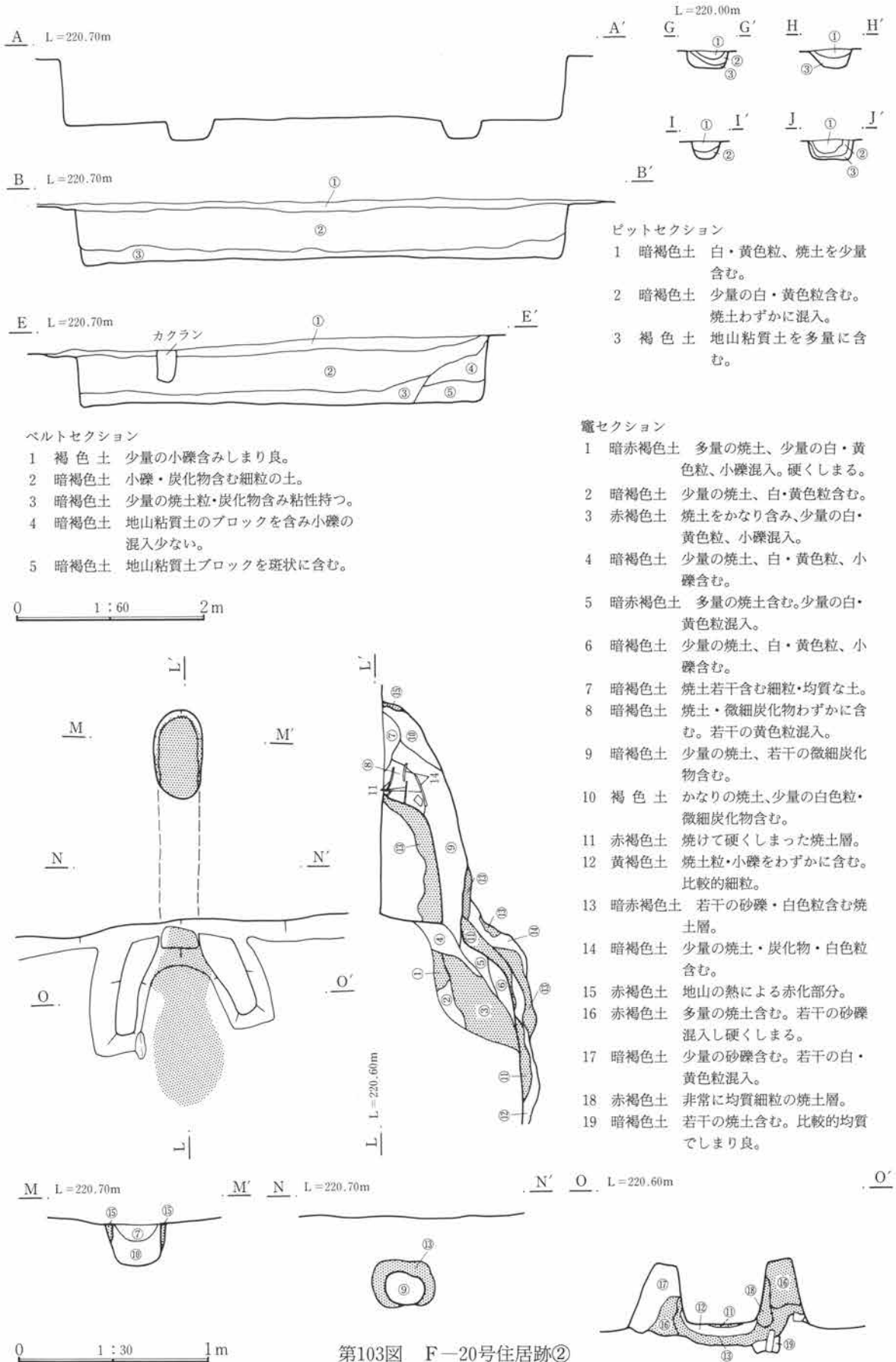
貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。 周溝 なし。

柱穴 柱穴と思われる4基の小ピットを検出。南側の2基は住居壁のかなり近くに位置するが、北側の2基はより内側にずれる。竈・貯蔵穴との位置関係から生じたものであろうか。



第102図 F-20号住居跡①

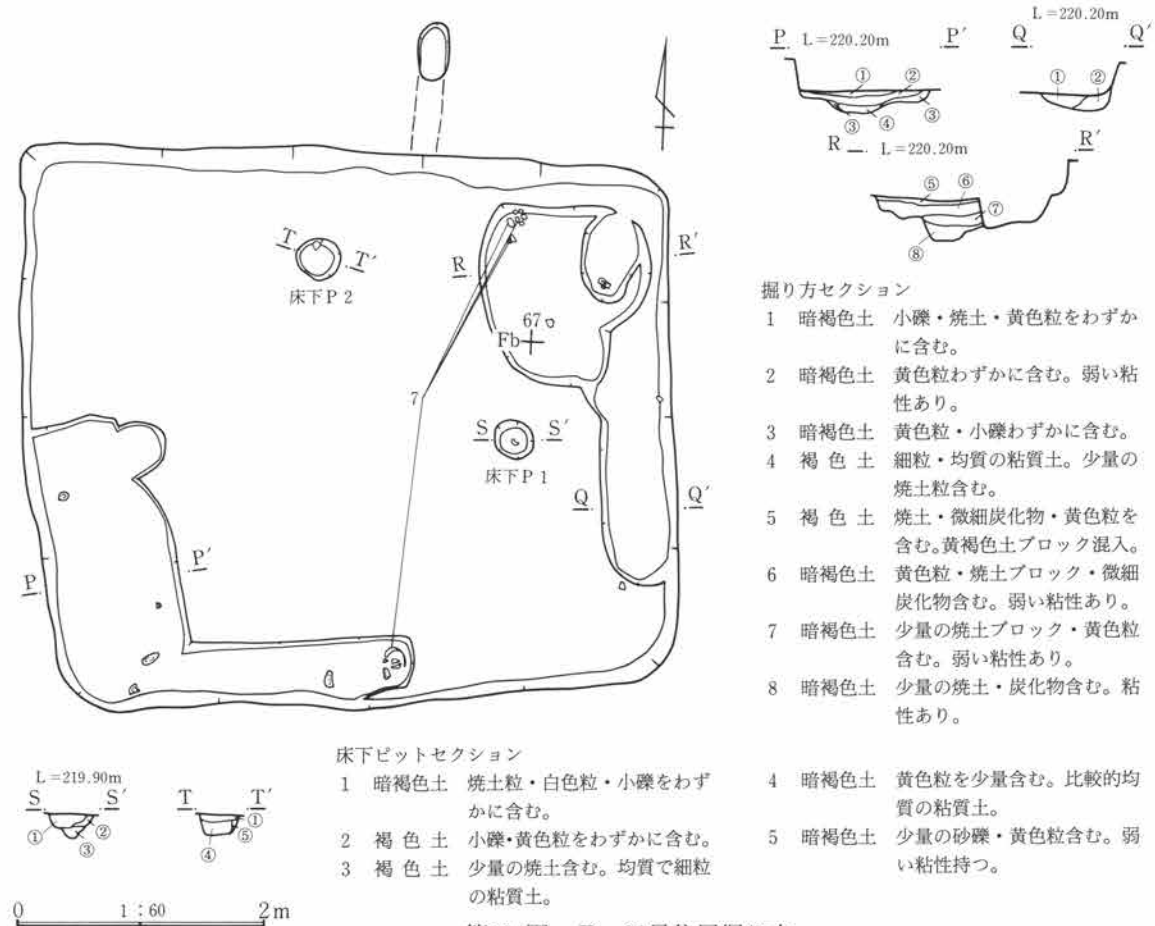
第3章 検出された遺構と遺物



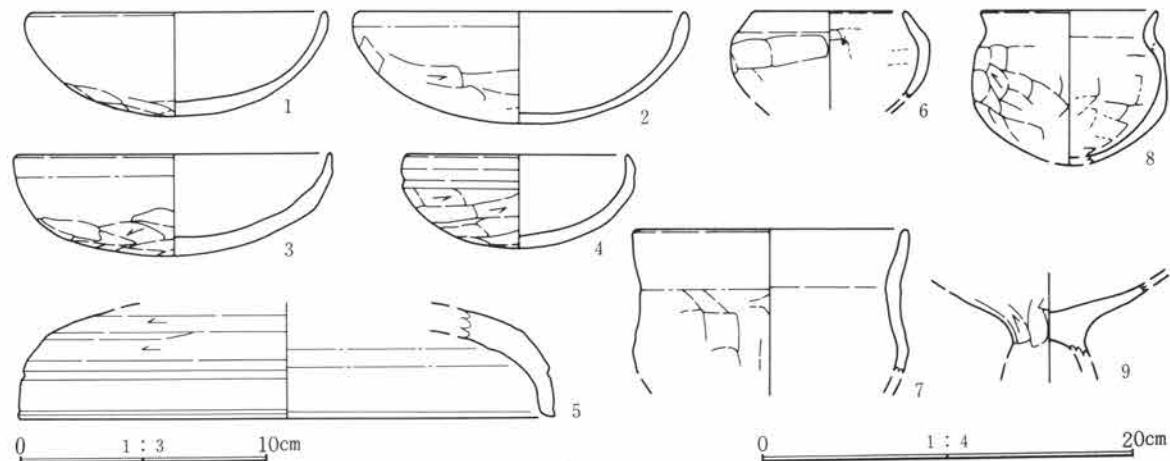
出土遺物 かなり多量の遺物が出土しているが、多くは床面上10~40cmほどの位置から出土している。器種も比較的多く、土師器杯(1~4)・小型無頸壺(6)・小型甕(7・8)・台付甕(9)・甕(10~14)・甗(15)、須恵器蓋(5)などがある。他に白玉(16)、有孔円盤(17)、覆土中より鎌の破片(18)が出土している。

掘り方 2基の床下ピットと、北東・南西隅の落ち込みを確認。落ち込みは、相方とも壁に沿って帯状に掘り込まれる。北東隅の掘り込みは、埋土中に多量の焼土みられる。

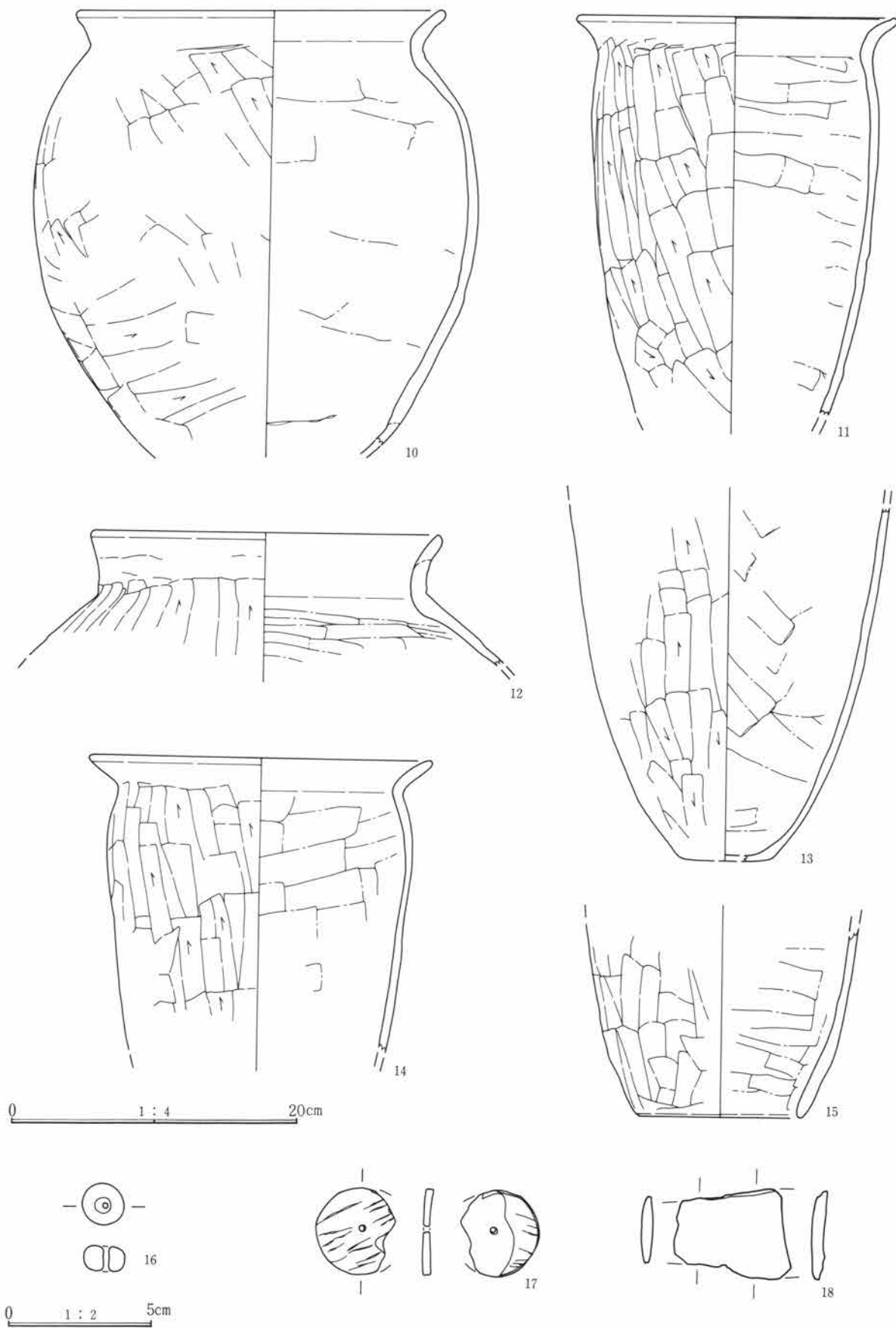
調査所見 出土遺物より、古墳時代後期末の住居と推定される。



第104図 F-20号住居掘り方



第105図 F-20号住居出土遺物実測図①



第106図 F-20号住居出土遺物実測図②

F-20号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	ピット4 内 完形	口 11.8 底 — 高 4.1	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器面の摩滅激しい。		
2	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 13.1 底 — 高 4.4	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器面かなり摩滅		
3	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 12.6 底 — 高 4.0	①細砂・わずかの赤 褐色粒子含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器面かなり摩滅		
4	土師器 坏	+7cm 口縁 $\frac{1}{2}$ 欠	口 8.6 底 — 高 3.7	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。口縁・体部境の稜は明瞭。内面横ナデ。			
5	須恵器 蓋	+13cm $\frac{1}{6}$	口(20.7) 摘 — 高 —	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。口縁下に一条の沈線めぐる。体部外面回転ヘラ削り。口唇部は外側に小さく肥厚する。			
6	土師器 小型無頸壺	覆土 口～胴部 $\frac{1}{3}$	口(7.8) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③暗赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
7	土師器 小型甕	掘り方内 口～胴部 上位 $\frac{1}{4}$	口(14.5) 底 — 高 —	①砂礫含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。			
8	土師器 小型甕	+28cm $\frac{3}{8}$	口(9.1) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。			
9	土師器 台付甕	+16cm 底部 $\frac{3}{8}$	口 — 底 — 高 —	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
10	土師器 甕	カマド煙 道内 口～胴部	口 25.5 底 — 高 —	①砂礫含む ②良好 ③明褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。内面の底部近くに接合痕。			
11	土師器 甕	カマド煙 道内 口～胴部	口 22.2 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
12	土師器 甕	+8cm 口縁部破 片	口 24.4 底 — 高 —	①砂礫含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
13	土師器 甕	貯蔵穴上 面 胴下 位～底部	口 — 底(6.5) 高 —	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。			
14	土師器 甕	+12cm 口～胴部 上半 $\frac{1}{2}$	口(23.9) 底 — 高 —	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
15	土師器 甕	+11cm 胴下位～ 底部 $\frac{1}{2}$	口 — 底(11.0) 高 —	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
16	白玉	+42cm 完形	1.5	1.5	0.9	2.85	蛇紋岩	全面を丁寧に研磨。中央に表裏から突孔した径1.5mmの円孔。
17	有孔円盤	+25cm $\frac{1}{2}$	3.0	(2.8)	0.5	(6.7)	滑石	全面を研磨し整形。裏面一部欠損。中央よりやや左側に径2.5mmの円孔。
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
18	鎌	覆土	(4.0)	(3.1)	(0.5)	(12.1)	$\frac{1}{6}$	鎌の破片。基部に近い部分と思われる。

F-21号住居跡 (PL15・100・101)

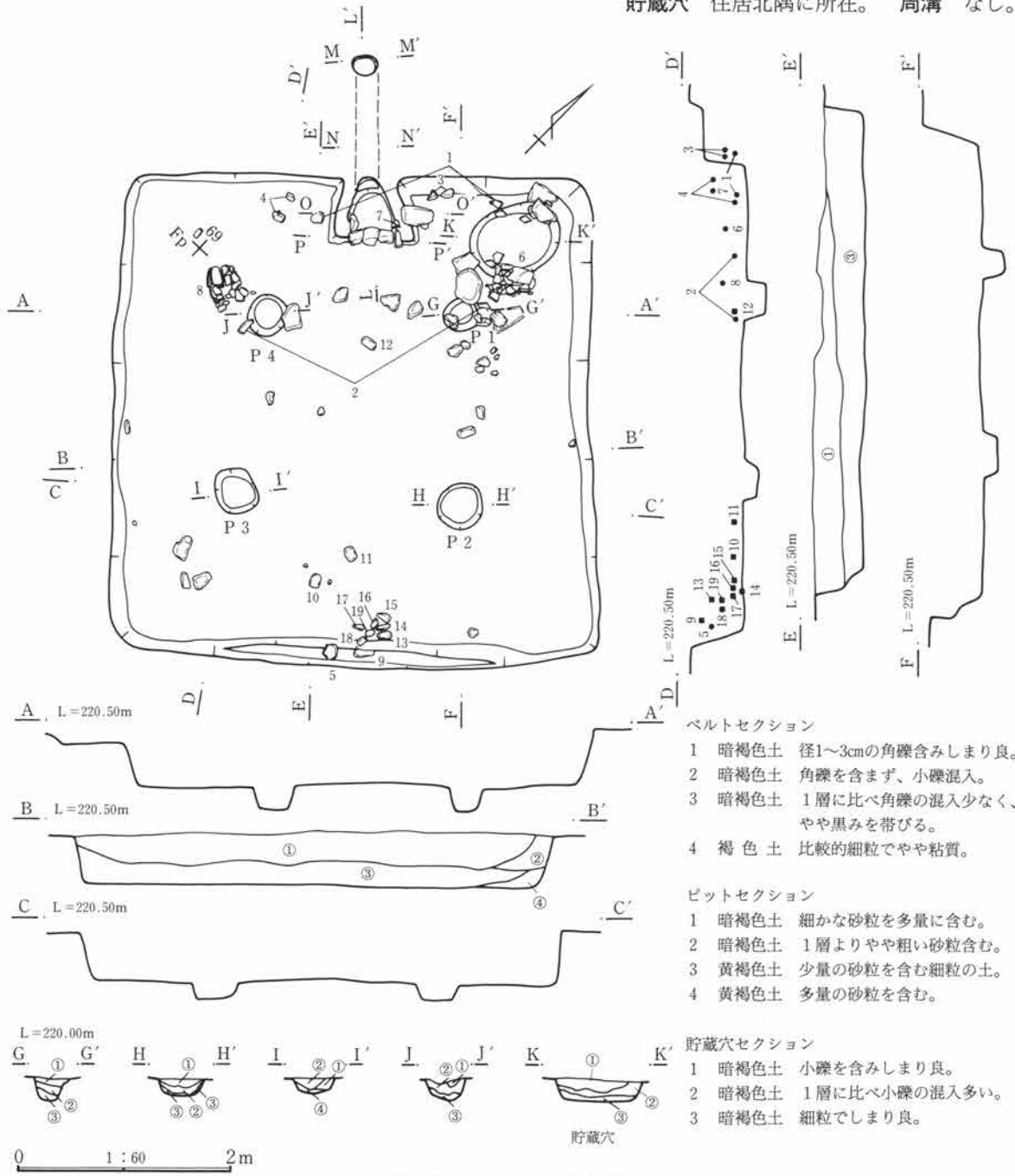
位置 Fo・Fp-68グリッド 主軸方位 N-44°-W 残存壁高 0.56m 重複 なし

規模と形状 長辺4.44m・短辺4.54mのほぼ正方形。住居主軸かなり西にふれる。周壁は南東壁が崩落し、やや外側に広がるが、そのほかはほぼ直進し残存状況は良好。竈は北西壁に築かれる。

床面 地山暗褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北西壁のほぼ中央に所在。袖が住居内に作り出される。焚口幅39cm・燃烧部長65cm。両袖先端燃烧部側に、袖石として板状の砂岩がすえられる。袖石上にも板状の砂岩が天井石としてかけられていたが、折れて燃烧部内に落ち込む。くりぬき式の煙道部も、天井が落ちないで残っている。煙道部長110cm。

貯蔵穴 住居北隅に所在。 周溝 なし。

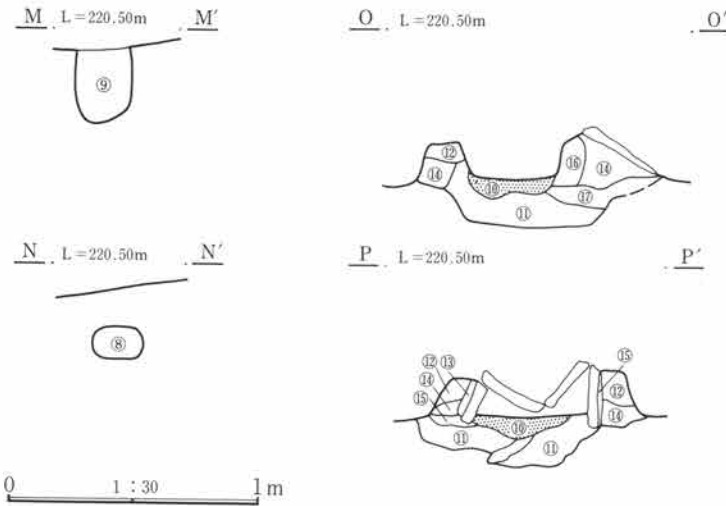
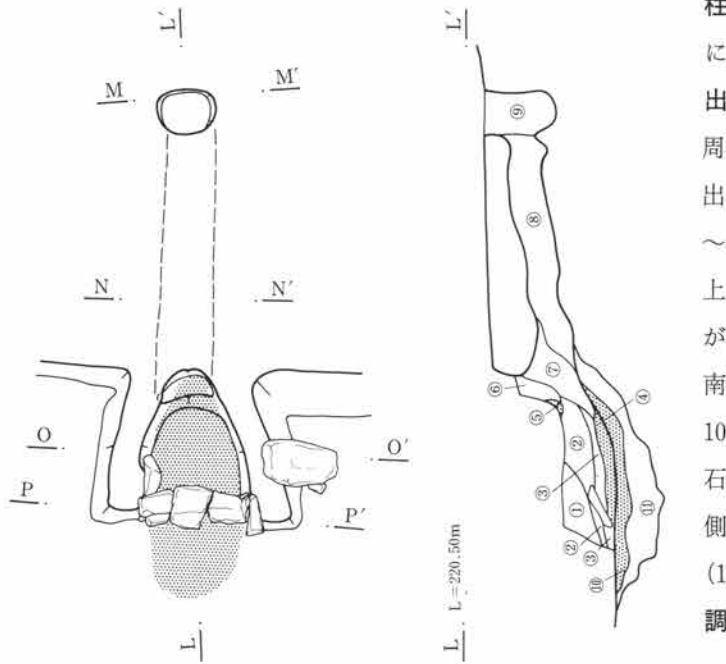


第107図 F-21号住居跡

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に乗るが、南側2基はやや北側にずれる。

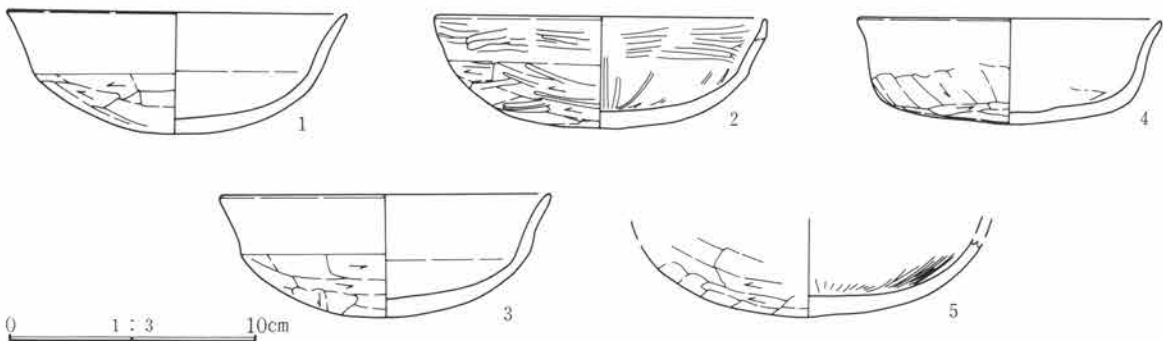
出土遺物 遺物量はあまり多くないが、竈周辺中心に床面近くから完形に近い遺物が出土。器種は、土師器坏(1~5)・甕(6~8)がある。また礫が多数出土し、半数以上が砂岩である。砂岩は比較的大きなものが多く、被熱しているものもあった。住居南壁際からは、砥石1点(9)、こもあみ石10点(10~19)がまとめて出土。こもあみ石には、表面に研磨面を持つもの(12)、両側に敲打によって浅いえぐりをいれたもの(16)が含まれる。 **掘り方** なし。

調査所見 古墳時代後期の住居である。

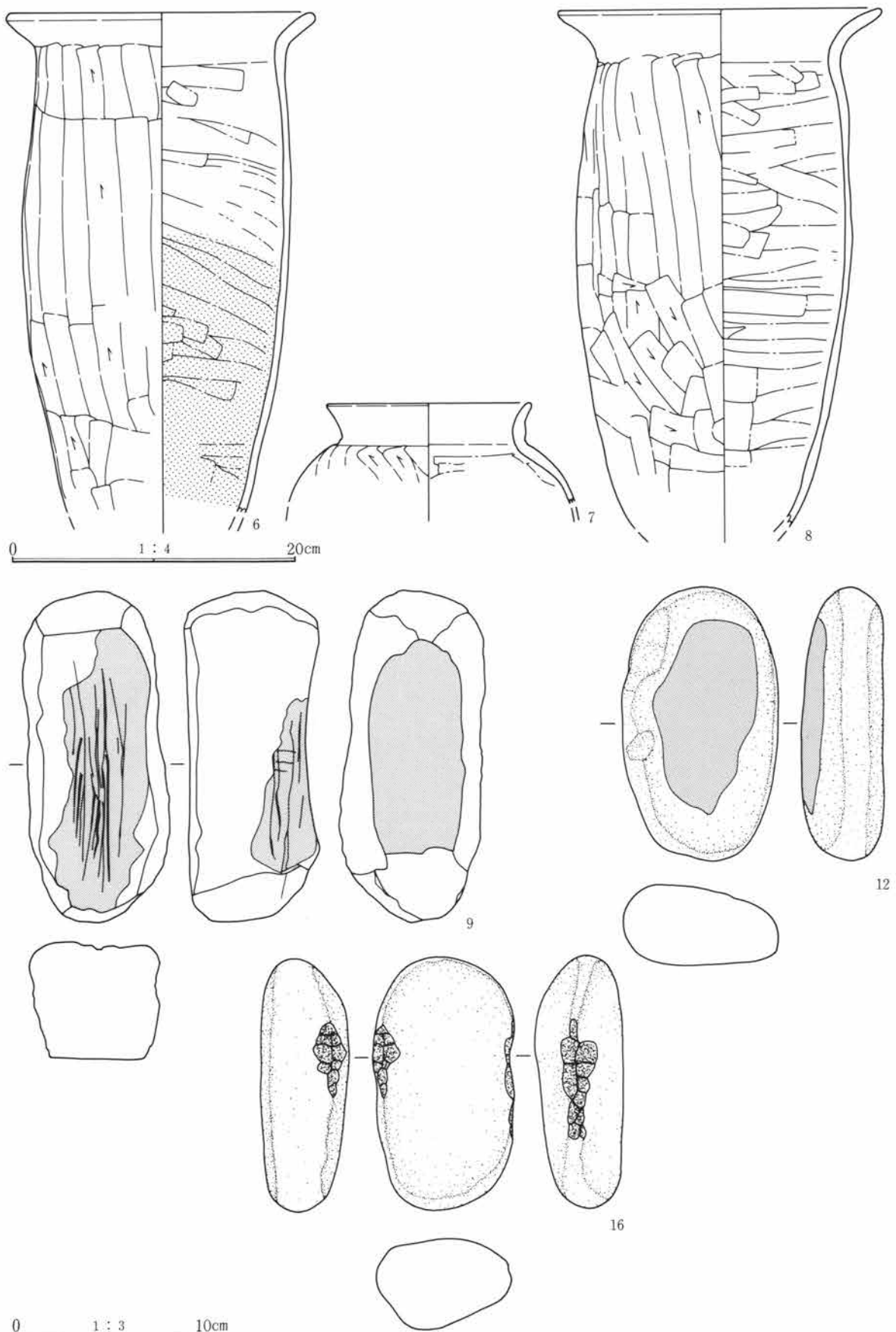


竈セクション

- 1 暗褐色土 多量の白・黄色粒、小礫含む。
- 2 暗褐色土 1層より小礫等の混入少ない。
- 3 黄褐色土 白・黄色粒、焼土含む。地山シルトをかなり混入。
- 4 暗赤褐色土 多量の焼土・地山土を含む。
- 5 暗赤褐色土 白・黄色粒、小礫含む。
- 6 暗褐色土 焼土を含む。
- 7 褐色土 砂礫かなり含み硬くしまる。炭化物少量、白色粒若干混入。
- 8 暗褐色土 少量の微細炭化物含む。焼土・小礫わずかに混入。
- 9 黒褐色土 若干の小礫・黄色粒、わずかの微細炭化物含む。
- 10 暗赤褐色土 多量の焼土含む。炭化物・黄色粒わずかに混入。
- 11 褐色土 多量の小礫含む。焼土・黄色粒わずかに混入。
- 12 暗褐色土 黄色粒・焼土粒・小礫わずかに含む。
- 13 暗褐色土 12層に似るが、小礫の混入より多い。
- 14 褐色土 黄色粒・小礫わずかに含む。
- 15 褐色土 黄色粒・小礫わずかに含む。若干の焼土混入。
- 16 暗褐色土 黄色粒・小礫・微細炭化物わずかに含む。かなりの焼土混入。
- 17 暗褐色土 焼土・微細炭化物わずかに含む。砂質で均質。



第108図 F-21号住居竈、出土遺物実測図①



第109図 F-21号住居出土遺物実測図②

F-21号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴	残存状態 備考	
				胎土	焼成			
1	土師器 坏	床密着 5/6	口(13.5) 底— 高4.8	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③明褐色		口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	器表面の摩滅激しい	
2	土師器 坏	床密着 3/4	口13.0 底— 高4.4	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り 後一部ヘラ磨き。内面横ナデ後ヘラ磨き、底部は 放射状。	内外面ともに黒色付 着物の痕跡	
3	土師器 坏	+5cm 3/4	口12.8 底— 高4.8	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。		
4	土師器 坏	+6cm 3/4	口(11.8) 底— 高4.2	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラ ナデ。		
5	土師器 坏	+13cm 口縁部欠 3/4	口— 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色		体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後放射状のヘラ磨 き。		
6	土師器 甕	貯蔵穴上 面 口～胴部	口21.4 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	内面胴中位以下にご く弱い煤付着	
7	土師器 甕	床密着 口～胴部	口22.3 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色		口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。		
8	土師器 甕	カマド袖 上 口～ 胴部上位	口14.3 底— 高—	①細砂・赤褐色微粒 子含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
9	砥石	+40cm 完形	17.2	7.5	5.8	1304.6	砥沢石	表・右側面に刃ならし溝。周囲に弱い研磨面。 表面の使用度高く、中央がすり減っている。
10	こもあみ石	+8cm 完形	12.9	8.9	3.5	517.7	砂岩	盤状の円礫。
11	こもあみ石	+7cm 完形	13.0	8.5	3.4	519.6	安山岩質凝灰岩	同上。
12	こもあみ石	+7cm 完形	14.1	8.2	4.3	769.4	変質安山岩	表面に磨面あり。
13	こもあみ石	+31cm 完形	15.5	7.0	3.5	537.3	変質安山岩	盤状の円礫。
14	こもあみ石	床密着 完形	15.5	7.0	5.0	605.6	流紋岩	同上。
15	こもあみ石	+6cm 完形	12.7	8.2	3.0	441.0	流紋岩	同上。
16	こもあみ石	+7cm 完形	13.0	7.4	4.6	626.3	変質安山岩	両側縁に一部敲打による浅いえぐりが入っている。
17	こもあみ石	+10cm 完形	15.1	4.7	4.4	544.9	閃緑岩	棒状の亜円礫。
18	こもあみ石	+19cm 完形	14.6	6.0	4.8	518.2	粗粒安山岩	同上。被熱している。
19	こもあみ石	+20cm 完形	12.5	5.5	4.3	483.0	粗粒安山岩	棒状の円礫。

F-22号住居跡 (PL15・16・101・102)

位置 Fs-70グリッド 主軸方位 N-56°-E 残存壁高 0.44m 重複 なし

規模と形状 長辺4.26m・短辺4.50mとやや短辺が長い。形状はほぼ正方形を呈する。床面と周壁の一部が最近の攪乱によって失われているが、そのほかは壁も直進し、崩落などはほとんどみられない。住居の主

第3章 検出された遺構と遺物

軸はかなり東にふれる。竈は北西壁と北東壁の両方に築かれている。

床面 地山の比較的細粒・均質な砂礫層を掘り込んで、平坦な床面を形成。

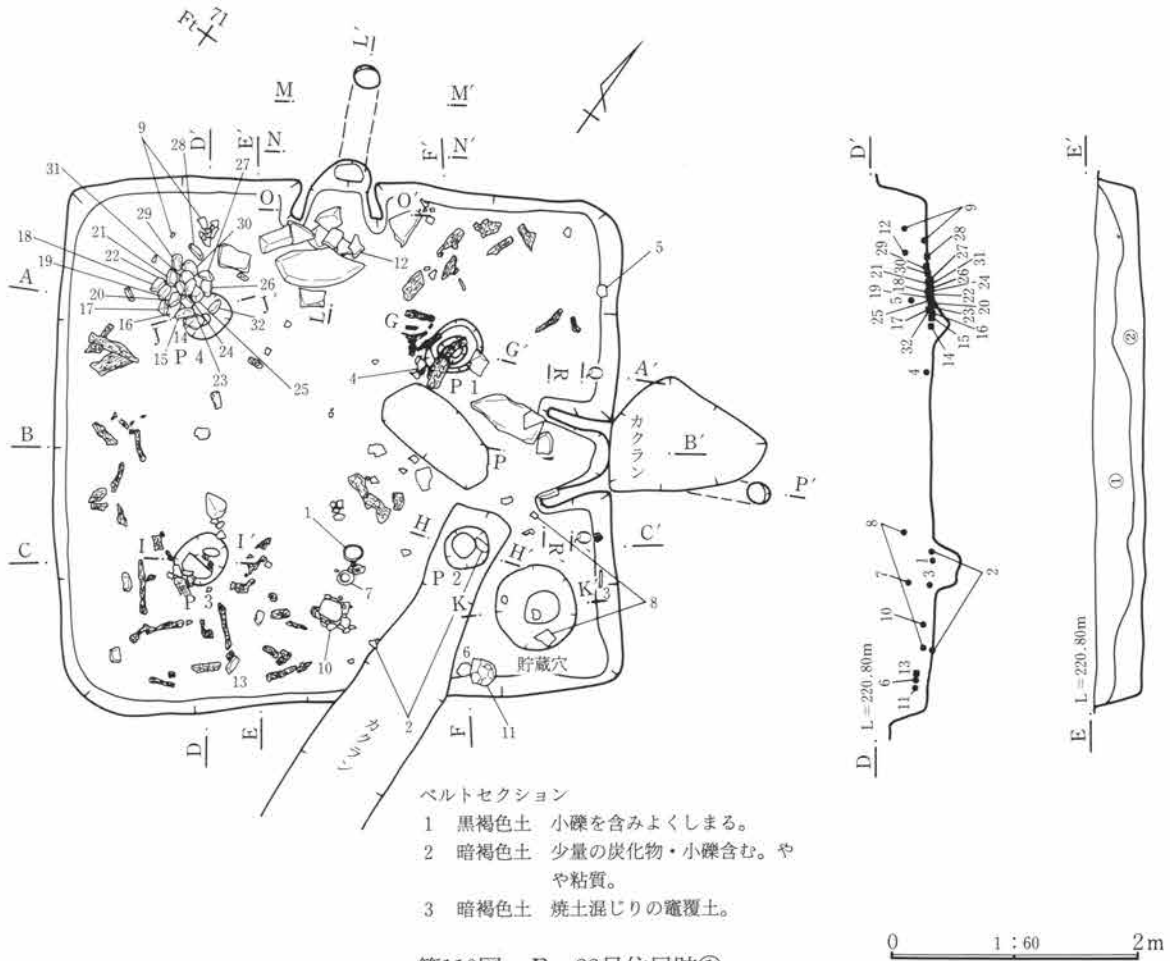
竈 北西壁と北東壁のほぼ中央に各1基ずつ所在。二つとも住居内に袖が作り付けられる形態である。北西壁の竈No.1は焚口幅55cm・燃烧部長40cm。燃烧部内および前部より、竈の構造材として使用されたと考えられる板状の砂岩が、大量に出土している。煙道も天井が崩落せずに残っており、長さは92cmを測る。北東壁の竈No.2は、焚口幅61cm・燃烧部長57cm。右袖の先端燃烧部側に、板状の砂岩が袖石として据え付けられている。また前部には、左袖石および天井石とみられる板状の砂岩が床面上に落ちている。煙道も煙出し部は残っているが、攪乱によって大きく破壊されている。煙道長は推定で130cmである。二つの竈の前後関係は、貯蔵穴との位置からみてNo.2が最初に築かれ、ついでNo.1がつくられたものと推測される。ただし、二つとも袖が破壊されておらず、同時に機能していた可能性も考えられる。

貯蔵穴 住居東隅に所在。 **周溝** なし。

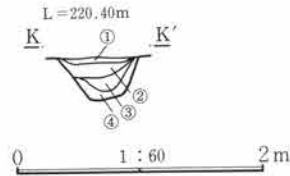
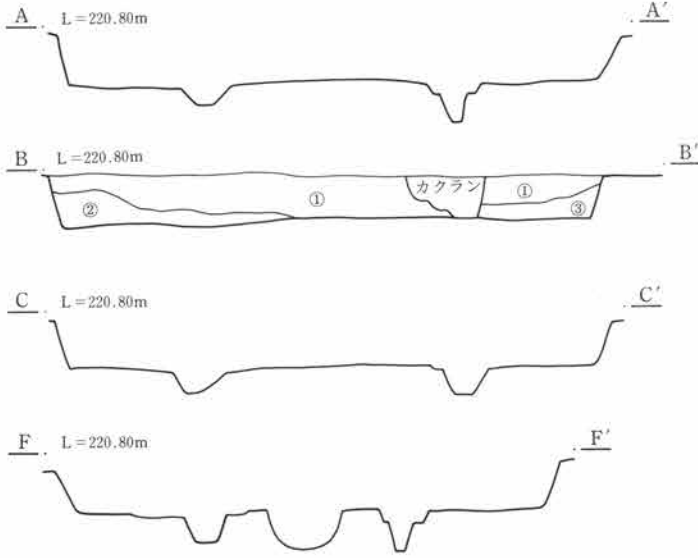
柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置する。大きさは類似するが、深さはP1が他よりも深い。

出土遺物 遺物は住居床面近くより散在して出土。器種は土師器坏(1~6)・短頸壺(7)・鉢(8)・小型甕(9~11)・甑(12)があり、比較的豊富である。P4西側の床面上より、こもあみ石とみられる細長い円礫が19点(14~32)まとまって出土している。この中には表面に研磨面と細かな擦痕が見られるもの(25)がある。他に砥石が1点(13)出土している。 **掘り方** なし。

調査所見 住居の床面直上よりかなりの量の炭化材出土。焼失住居とみられる。古墳時代後期。

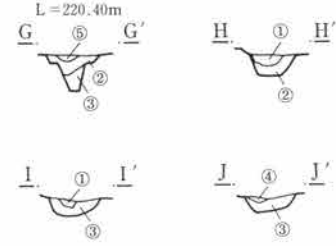


第2節 F・G区



貯蔵穴セクション

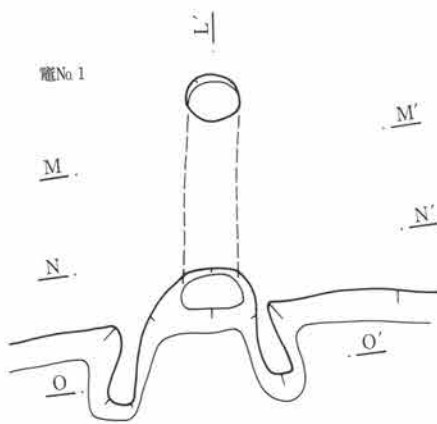
- 1 暗褐色土 黄色粒・炭化物わずかに含む。弱い粘性あり。
- 2 暗褐色土 黄色粒・焼土粒・炭化物含む。弱い粘性あり。



ピットセクション

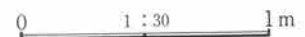
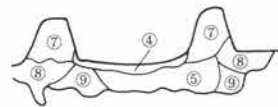
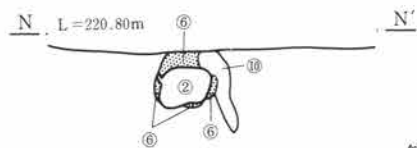
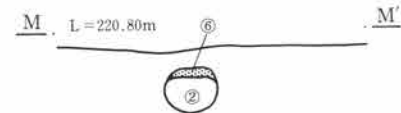
- 1 暗褐色土 黄色粒・焼土粒・小礫含む。
- 2 暗褐色土 1層に比べ礫がより大きい。黄色粒・焼土粒・炭化物含む。
- 3 褐色土 黄色粒・炭化物わずかに含む粘性を持つ。
- 4 褐色土 黄色粒・小礫をわずかに含む。弱い粘性あり。
- 5 暗褐色土 焼土・炭化物を多量に含む。弱い粘性あり。

- 3 暗褐色土 多量の炭化物含む弱い粘性あり。黄色粒・焼土粒わずかに混入。
- 4 褐色土 炭化物・黄色粒わずかに含む弱い粘性あり。



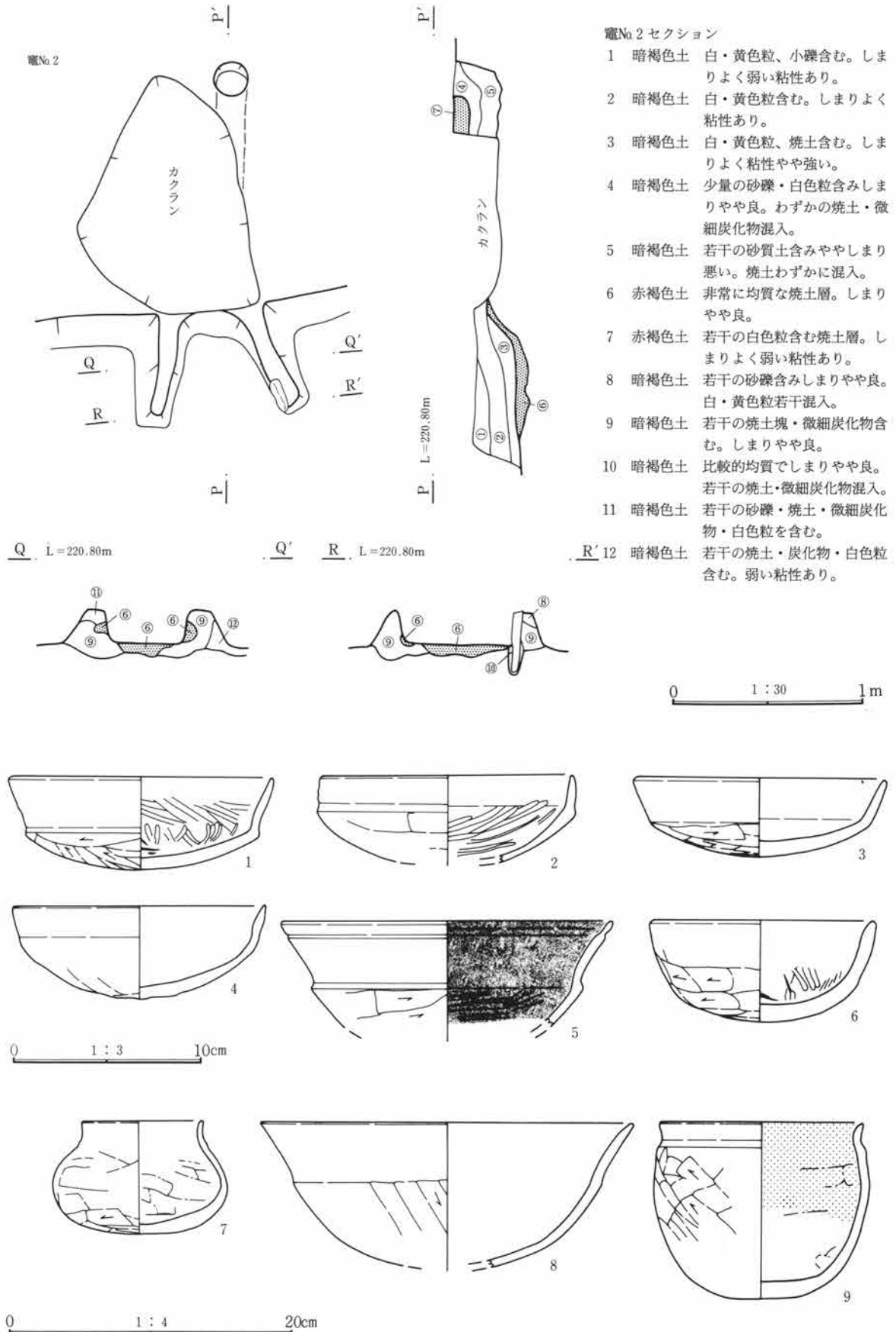
竈No.1セクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒含む。小礫わずかに混入。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土含む。
- 3 黒褐色土 白・黄色粒少量含む。粘性やや強い。
- 4 暗褐色土 かなりの炭化物を層状に含む。
- 5 暗褐色土 少量の焼土・炭化物・砂礫含みや不均質。
- 6 暗赤褐色土 若干の白色粒含む焼土層。しまり良。
- 7 暗褐色土 若干の砂礫・白色粒含みしまり良。焼土・炭化物わずかに混入。
- 8 暗褐色土 少量の砂礫含みや粘質。焼土粒・炭化物若干混入。
- 9 暗褐色土 砂礫かなり含み不均質でしまりやや悪い。若干の白・黄色粒、焼土混入。
- 10 暗褐色土 少量の白色粒含む弱い粘性あり。下半部に多量の焼土混入。

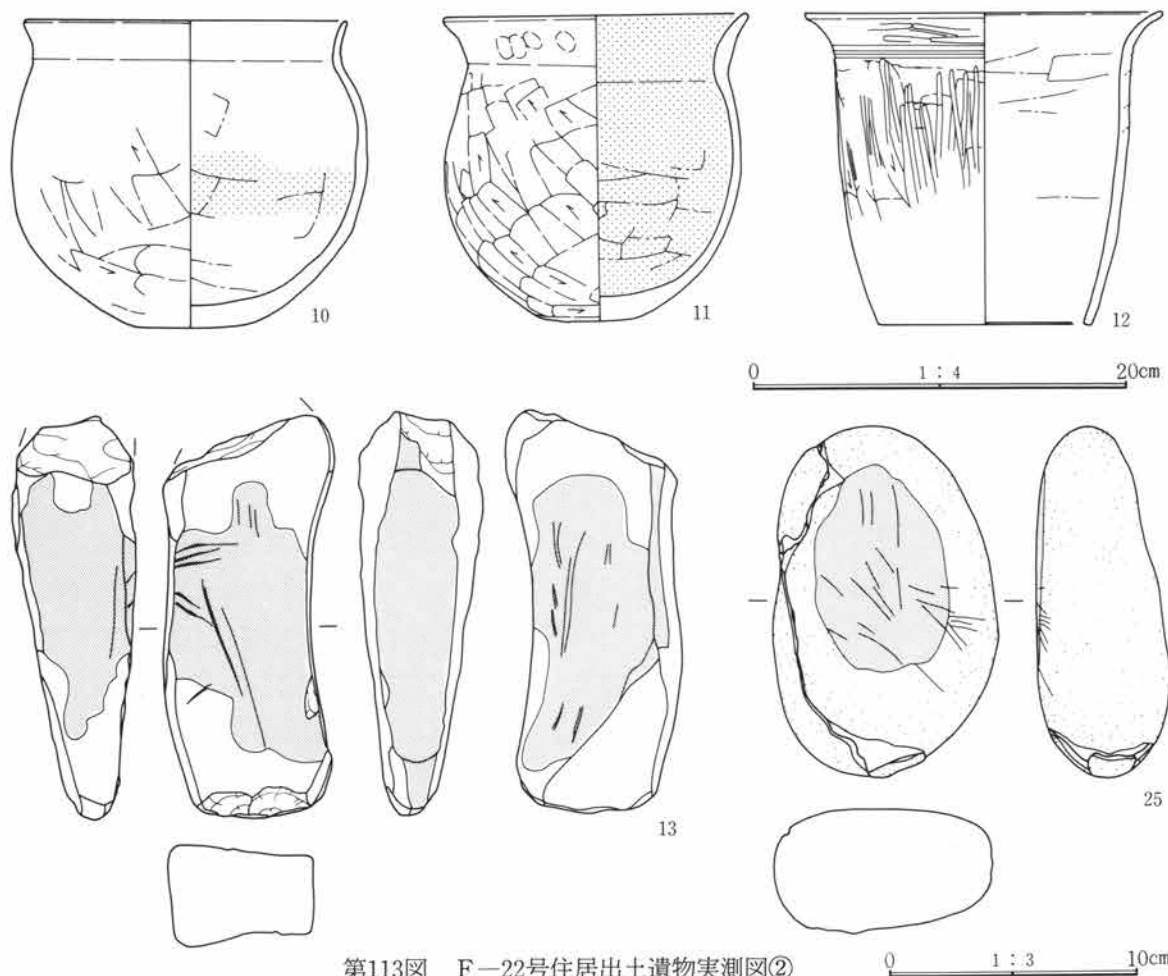


第111図 F-22号住居跡②

第3章 検出された遺構と遺物



第112図 F-22号住居竈No.2、出土遺物実測図①



第113図 F-22号住居出土遺物実測図②

F-22号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	質量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 13.6 底 — 高 4.8	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面へら ナデ後へら磨き。内面にへら状工具のあたり。	
2	土師器 坏	床密着 ⅓	口 13.1 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ後へら磨き。	
3	土師器 坏	+21cm ⅓	口(12.8) 底 — 高 4.1	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。	
4	土師器 坏	床密着 ⅓	口(13.2) 底 — 高 4.8	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デか。	器表面かなり摩滅
5	土師器 坏	+12cm ⅓	口(17.0) 底 — 高 —	①微砂粒・赤褐色粒 子含む ②良好 ③淡黄色	口縁部外面横ナデ、口縁下に一条の沈線めぐる。 体部外面へら削り。内面横ナデ後へら磨き。内面 口縁下に段。	内面黒色処理
6	土師器 坏	+9cm ⅓	口(11.6) 底 — 高 5.2	①砂粒含む ②良好 ③淡黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面へら ナデ後へら磨き。全体に器肉厚い。	
7	土師器 短頸壺	床密着 口縁部欠	口(8.3) 底 — 高 7.8	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③明褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面へ らナデ。	器表面かなり剥落
8	土師器 鉢	+8cm ⅓	口(25.7) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色微粒 子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
9	土師器 小型甕	床密着 1/2	口(13.8) 底 — 高 12.2	①多量の砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	内面上半に煤付着		
10	土師器 小型甕	+5cm 1/2	口(17.0) 底 6.7 高 16.5	①砂礫含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	胴部内面中位に帯状に煤付着		
11	土師器 小型甕	床密着 1/2	口 16.1 底 — 高 16.1	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	内面全面に強い煤付着		
12	土師器 甕	+10cm 1/2	口(18.9) 底(11.2) 高 16.5	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ後へラ磨き、内面横ナデ。口縁部下に浅い沈線二条めぐる。胴部外面へラ削り後へラ磨き、接合痕あり。内面へラナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
13	砥石	+10cm ほぼ完形	15.9	6.8	4.9	587.1	砥沢石	表裏・両側面に研磨面。表裏に刃ならし溝。右側面の使用度高く、中央がすり減る。
14	こもあみ石	床密着 完形	15.4	10.6	3.7	963.6	粗粒安山岩	盤状の円礫。
15	こもあみ石	床密着 完形	13.6	6.7	5.1	673.1	蛇紋岩	棒状の円礫。
16	こもあみ石	床密着 完形	15.5	7.4	6.1	846.2	粗粒安山岩	盤状の円礫。
17	こもあみ石	床密着 完形	11.8	7.8	4.7	841.1	蛇紋岩	同上。
18	こもあみ石	床密着 完形	12.7	8.8	4.0	518.2	流紋岩	同上。
19	こもあみ石	床密着 完形	12.8	9.0	5.0	717.6	砂岩	盤状の円礫。
20	こもあみ石	床密着 完形	12.4	9.4	5.4	791.6	粗粒安山岩	同上。
21	こもあみ石	床密着 完形	13.9	8.0	5.2	695.5	流紋岩	同上。
22	こもあみ石	床密着 完形	12.7	8.4	4.0	703.0	粗粒安山岩	同上。
23	こもあみ石	床密着 完形	11.2	6.3	4.0	331.9	粗粒安山岩	棒状の円礫。風化が激しく、表面が剥落している。
24	こもあみ石	床密着 完形	13.1	6.9	5.2	579.8	流紋岩	棒状の円礫。
25	こもあみ石	床密着 完形	13.7	9.0	5.3	850.3	変質安山岩	表面に磨面と細かな線状のキズ有り。
26	こもあみ石	床密着 完形	12.7	7.6	4.0	565.3	変質安山岩	盤状の円礫。
27	こもあみ石	床密着 完形	12.3	7.5	4.5	548.3	変質安山岩	同上。
28	こもあみ石	床密着 完形	13.0	6.0	5.8	597.1	変質安山岩	盤状の垂円礫。被熱している。
29	こもあみ石	床密着 完形	12.4	7.8	5.8	815.0	粗粒安山岩	盤状の円礫。
30	こもあみ石	床密着 完形	12.6	8.5	4.6	755.2	粗粒安山岩	同上。
31	こもあみ石	床密着 完形	12.5	9.7	5.7	846.9	粗粒安山岩	同上。
32	こもあみ石	床密着 完形	13.0	10.6	5.7	628.6	粗粒安山岩	棒状の円礫。

F-23号住居跡 (PL16・102・103)

位置 Fq・Fr-72グリッド 主軸方位 N-13°-W 残存壁高 0.37m 重複 F-43住を切る。

規模と形状 長辺3.52m・短辺3.53mの正方形。住居主軸はやや西にふれる。竈は北壁に築かれているが、東壁にも古い竈の煙道が残っている。壁は南西隅部分でやや崩落し外側へ広がっているが、他の部分ほぼ直進し線形の乱れは少ない。

床面 地山の砂礫混じり褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 北壁の中央よりも東側に所在。袖が住居内に作り付けられる形態を呈する。焚口幅44cm・燃燒部長50cm。煙道は削平され残存していない(竈No.1)。また、東壁の中央よりも南側より煙道部分のみが検出された(竈No.2)。燃燒部は残存せず、竈No.2を廃棄・破壊した後に竈No.1を構築したのであろう。竈No.2の煙道内からは、土師器甕2個体分(4・6)の破片が出土している。

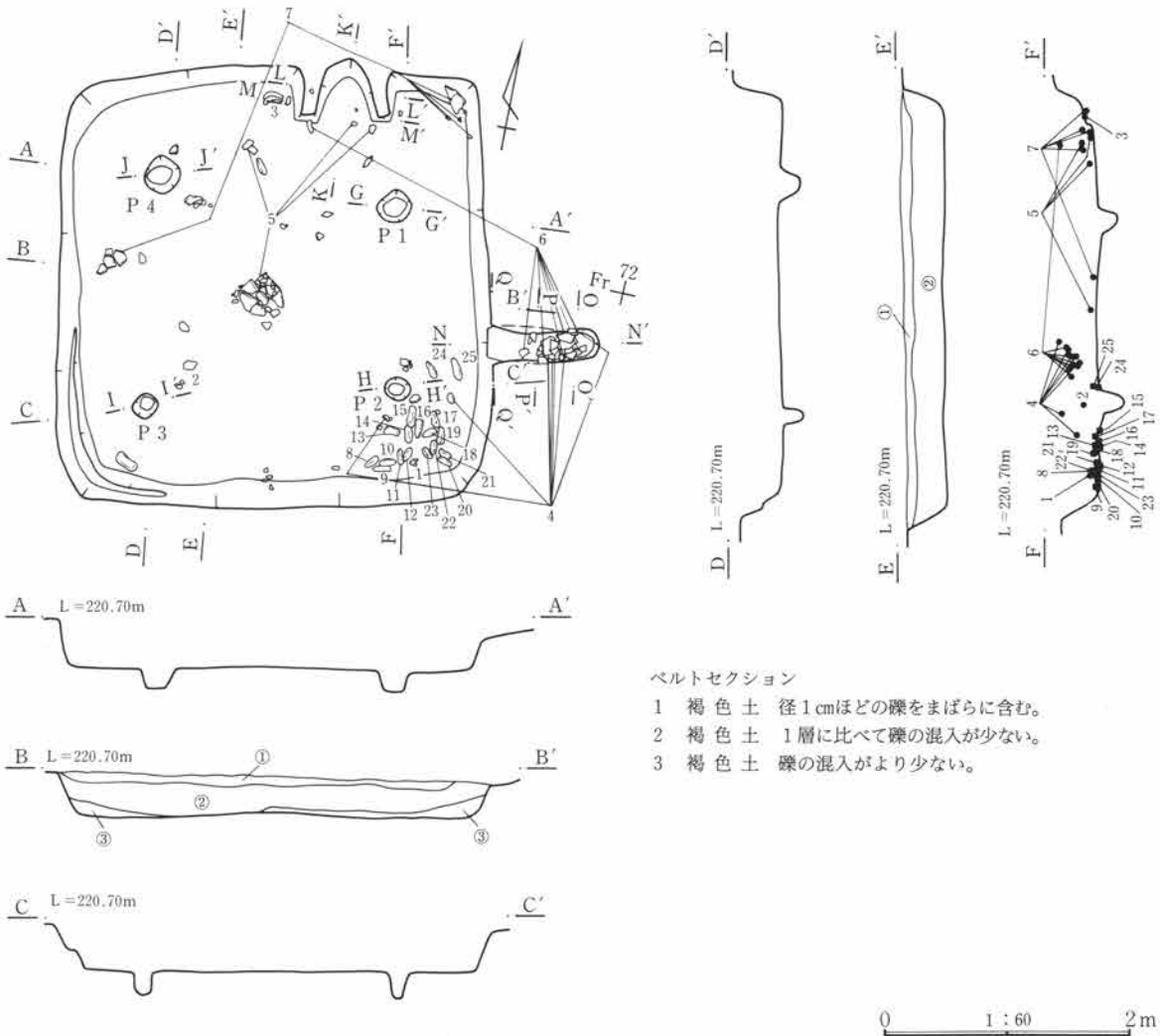
貯蔵穴 なし。 **周溝** なし。

柱穴 4基の小ピットを検出。ほぼ対角線上に位置するが、北東の1基はやや南側にずれる。

出土遺物 遺物はあまり多くなく、床面近くに散在している。住居中央からは土師器甕が1個体(5)つぶれた状態で出土している。他に須恵器蓋(1)、土師器短頸壺(2)・小型甕(3)・甌(7)がある。また南東隅では、こもあみ石とみられる18個の細長い円礫(8~25)が床面直上にまとまっていた。

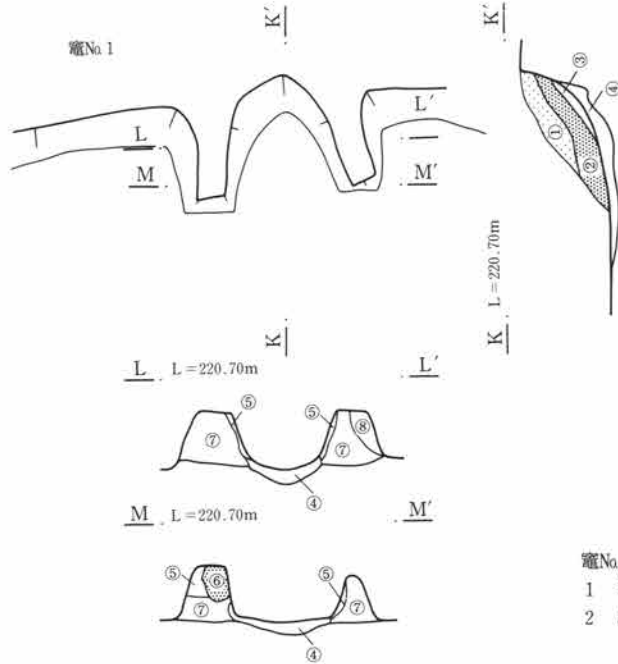
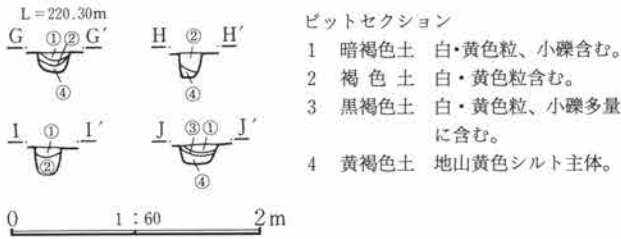
掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



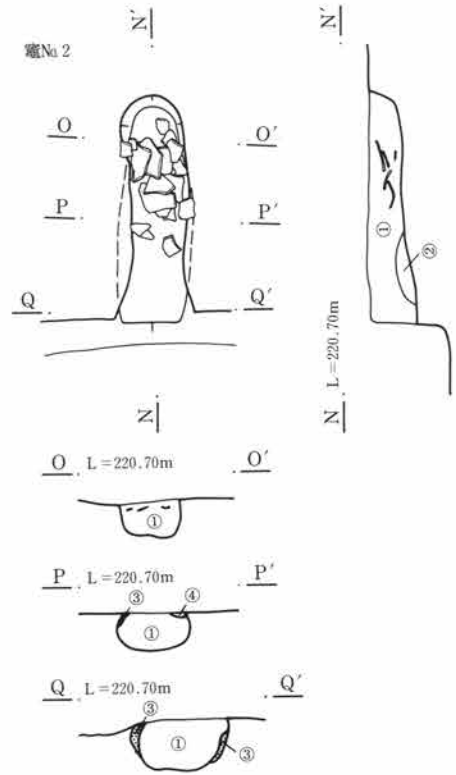
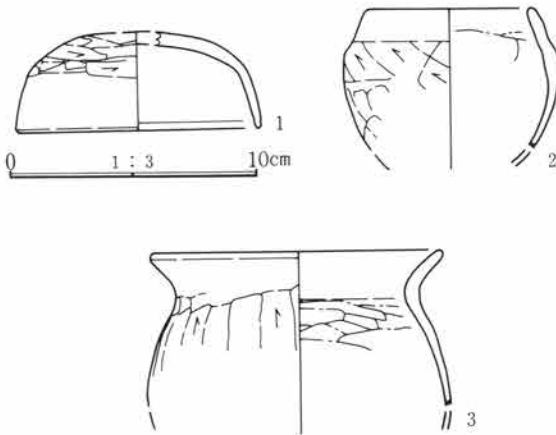
第114図 F-23号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



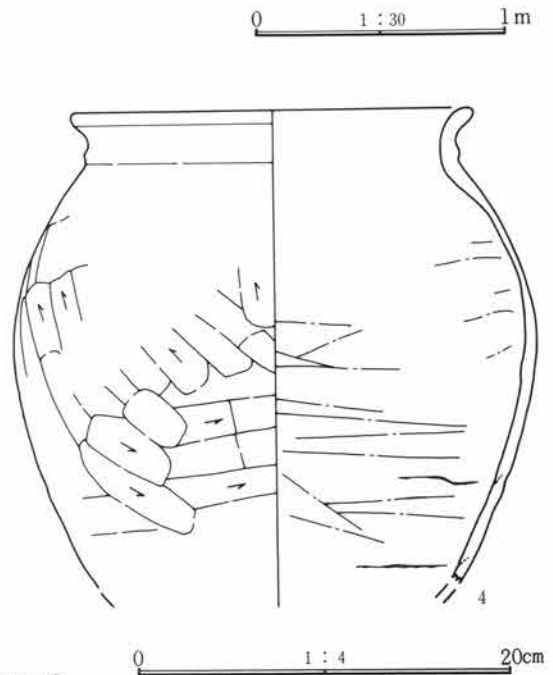
竈No 1 セクション

- 1 黄褐色土 地山黄色シルトを主体とし、白・黄色粒、小礫含む。竈天井部の崩落土。
- 2 暗赤褐色土 多量の焼土含む。白・黄色粒、小礫少量混入。
- 3 黒褐色土 白・黄色粒、小礫含む。
- 4 暗褐色土 多量の小礫含みしまり悪い。
- 5 褐色土 地山土を多く含む。小礫・焼土少量混入。
- 6 暗赤褐色土 5層のうち熱を受けて焼土化した部分。
- 7 褐色土 地山土を多く含む。多量の小礫混入。
- 8 暗褐色土 小礫・黄色粒をわずかに含む。

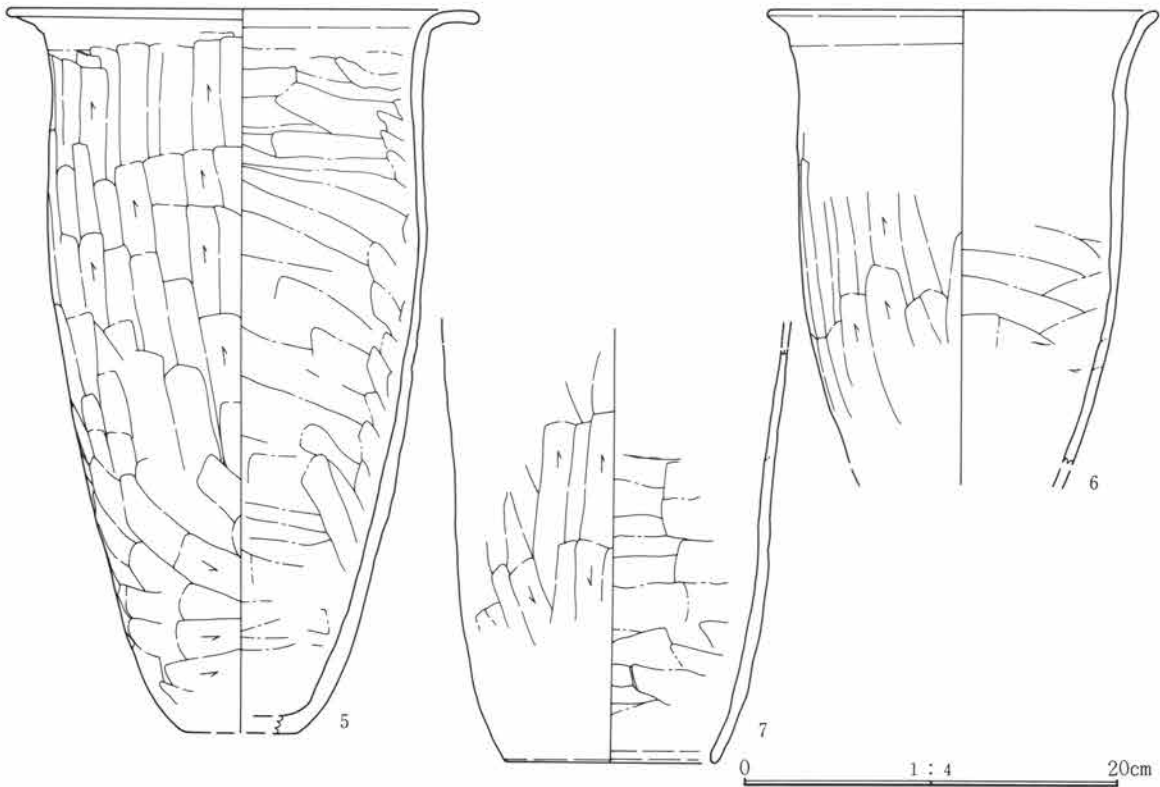


竈No 2 セクション

- 1 暗褐色土 若干の小礫・焼土・炭化物・黄褐色土塊含む。
- 2 暗褐色土 1層に似るが黄褐色土ほとんど含まず焼土も少。砂質土少量含みややしまり悪い。
- 3 暗赤褐色土 焼土主体とする。少量の砂礫含みしまりやや良。
- 4 暗赤褐色土 均質・細粒の焼土層。やわらかくしまり悪い。



第115図 F-23号住居跡②、出土遺物実測図①



第116図 F-23号住居出土遺物実測図②

F-23号住居出土遺物観察表

番号	種器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	須恵器 蓋	+6cm 1/3	口(9.4) 摘— 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。天井部外面手持ちヘラ削り。外面に自然釉。			
2	土師器 短頸壺	+12cm 口～体部 1/3	口(8.9) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
3	土師器 小型甕	+6cm 口～胴部 上位1/2	口(15.4) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
4	土師器 甕	カマドNo. 2煙道内 口～胴部	口(21.0) 底— 高—	①砂礫含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ、口縁端部はやや肥厚。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。内面下部に接合痕。			
5	土師器 甕	+4cm 1/3	口24.8 底— 高37.9	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
6	土師器 甕	カマドNo. 2煙道内 口～胴部	口20.0 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。口縁と胴部の境に稜線めぐる。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
7	土師器 甕	床密着 胴下半～ 底部1/3	口— 底(11.0) 高—	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。内面に接合痕			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
8	こもあみ石	床密着 完形	12.3	5.5	4.5	338.1	砂岩	盤状の円礫。
9	こもあみ石	+6cm 完形	15.0	5.9	4.4	492.8	粗粒安山岩	棒状の垂円礫。

第3章 検出された遺構と遺物

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
10	こもあみ石	床密着 完形	14.3	5.6	5.5	651.2	粗粒安山岩	棒状の円礫。
11	こもあみ石	床密着 完形	13.9	4.8	5.0	413.1	角閃石安山岩	同上。
12	こもあみ石	床密着 完形	13.5	7.3	4.3	714.3	粗粒安山岩	盤状の円礫。
13	こもあみ石	床密着 完形	13.5	7.4	3.6	538.0	粗粒安山岩	盤状の垂円礫。
14	こもあみ石	床密着 完形	13.4	7.7	6.5	897.0	ひん岩	盤状の円礫。
15	こもあみ石	床密着 完形	14.7	6.7	4.0	572.9	閃緑岩	同上。
16	こもあみ石	床密着 完形	15.4	5.7	4.5	500.3	粗粒安山岩	棒状の円礫。
17	こもあみ石	床密着 完形	14.2	5.5	3.9	345.3	砂岩	棒状の円礫。
18	こもあみ石	床密着 完形	12.3	6.1	4.1	438.0	変質安山岩	盤状の円礫。
19	こもあみ石	床密着 完形	13.5	5.9	4.7	506.3	粗粒安山岩	棒状の円礫。
20	こもあみ石	床密着 完形	13.9	5.8	3.5	470.8	雲母石英片岩	棒状の垂円礫。
21	こもあみ石	+6cm 完形	13.8	6.3	5.7	445.3	砂岩	同上。
22	こもあみ石	床密着 完形	14.7	7.0	4.2	599.3	緑色片岩	盤状の円礫。
23	こもあみ石	床密着 完形	10.5	5.0	4.2	356.3	凝灰石?	棒状の円礫。
24	こもあみ石	床密着 完形	14.5	6.6	4.4	642.7	石英閃緑岩	同上。
25	こもあみ石	床密着 完形	15.7	7.7	4.8	635.0	砂岩	盤状の円礫。

F-24号住居跡 (PL16・104)

位置 Fs-72グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.06m 重複 なし

規模と形状 長辺4.35m・短辺4.08mのわずかに長辺方向が長い正方形。上部はかなり削平され、壁は最大でわずか6cmを残すのみである。

床面 地山黄褐色シルト質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 北壁中央に所在したとみられるが、削平され破壊されている。わずかに燃焼部底面の焼土が残存していた。

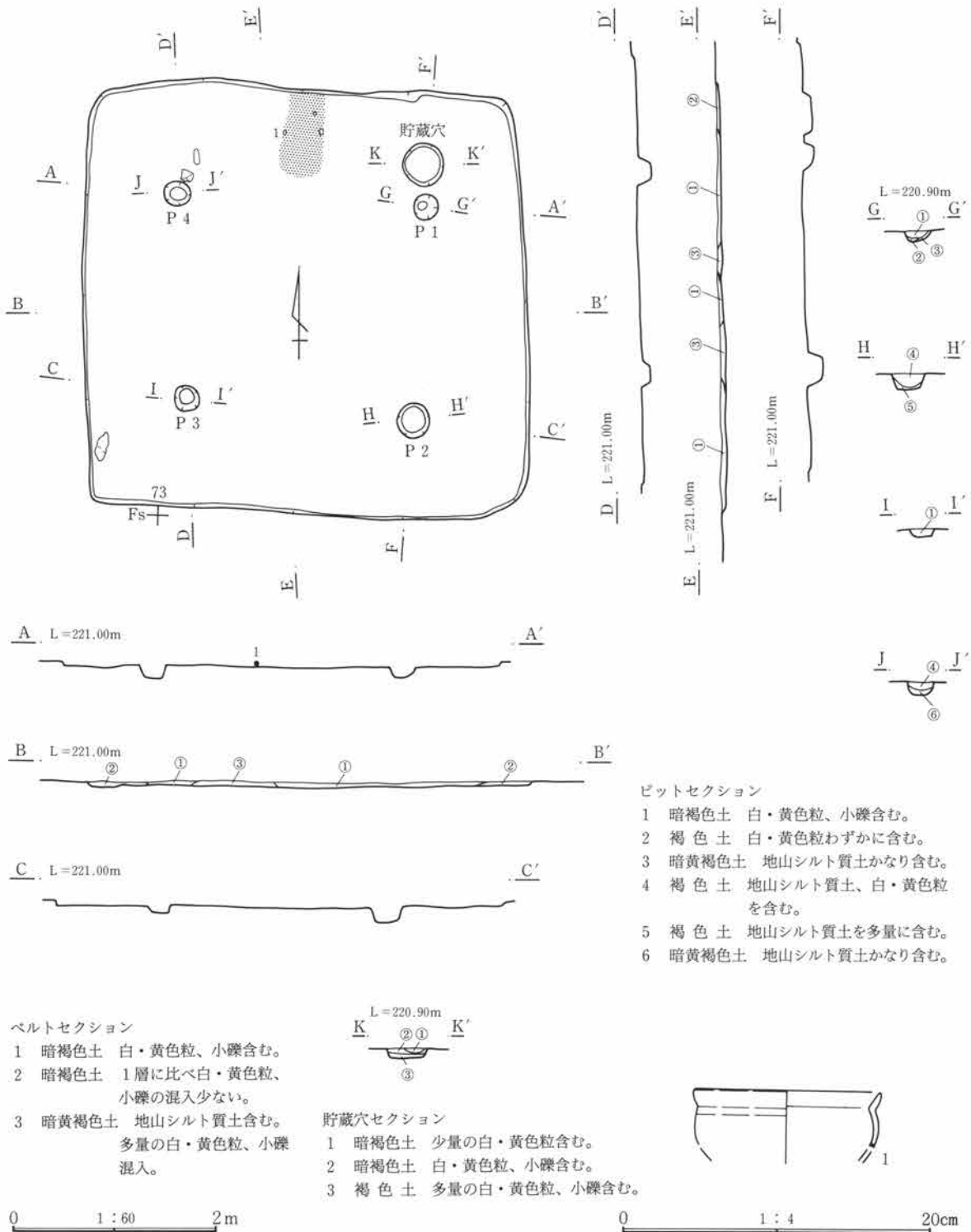
貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。形状はほぼ円形で、規模は小さい。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するが、非常に浅い。

出土遺物 遺物は非常に少なく、礫の他は、竈と思われる付近から、土師器鉢(1)の口縁部破片を含め、わずかに数片の土器が出土したのみである。

掘り方 なし。

調査所見 住居形状から古墳時代後期のものと思われる。



第117図 F-24号住居跡、出土遺物実測図

F-24号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土器 鉢	床密着 口縁破片	口(11.8) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。口縁は外側に短く屈曲。	

F-25号住居跡 (PL16・17・104)

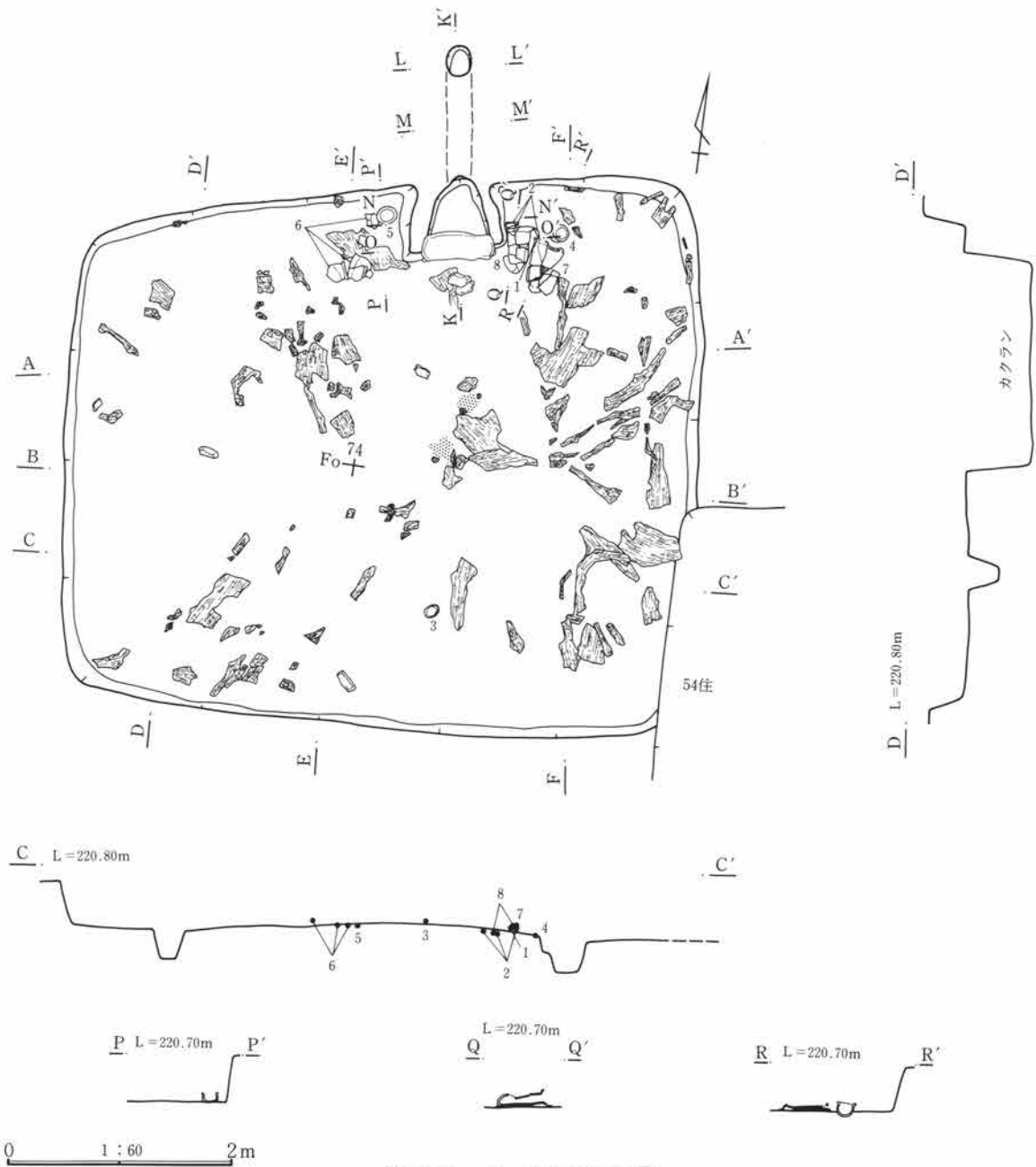
位置 Fn・Fo-73グリッド 主軸方位 N-8°-W 残存壁高 0.37m

重複 F-54住に切られ、F-42住を切る。

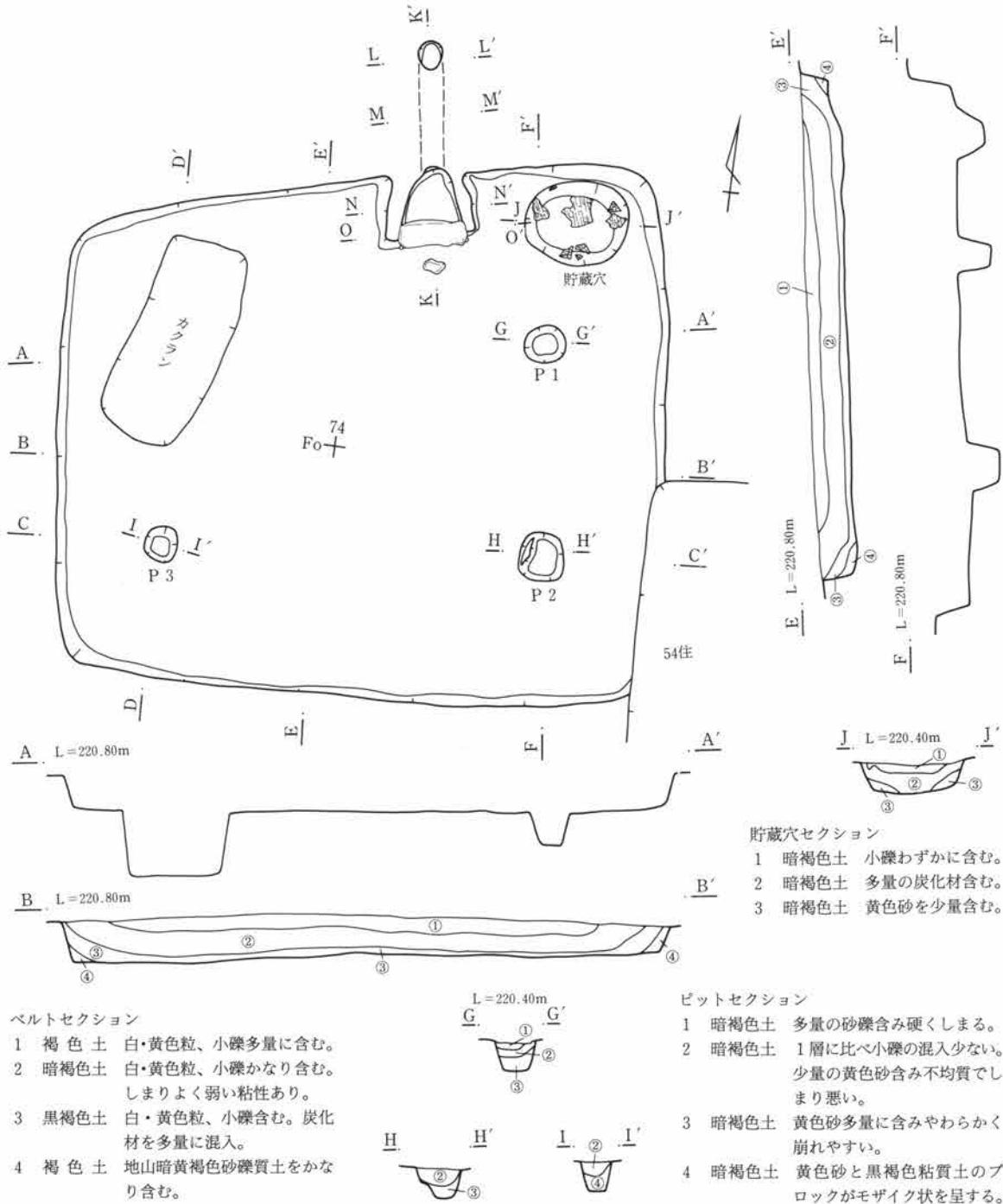
規模と形状 長辺5.67m・短辺4.97mのやや横長の長方形。西壁に比べて東壁が若干長く、形状が歪む。壁はほぼ直進し、周壁の崩落や線形の乱れは少ない。

床面 地山暗黄褐色砂礫質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の中央よりもやや東よりに所在。袖が住居内に作り付けられる形態をとる。焚口幅55cm・燃焼部長72cm。両袖の先端燃焼部側には、袖石として板状の砂岩が据え付けられている。また、袖石上にはやはり板状の砂岩が、天井石としてかけられたまま残っている。煙道も天井が落ちないで残存している。煙道部長116cm。断ち割りの状況から、くりぬき式の煙道と推定される。



第118図 F-25号住居跡①



第119図 F-25号住居跡②

貯蔵穴 住居北東隅に所在。埋土中に多量の炭化物が混入。 周溝 なし。

柱穴 3基の小ピットを検出。ほぼ対角線上に位置するが、北東隅の1基はやや南側にずれる。また北西隅の1基は、最近の攪乱によって失われている。

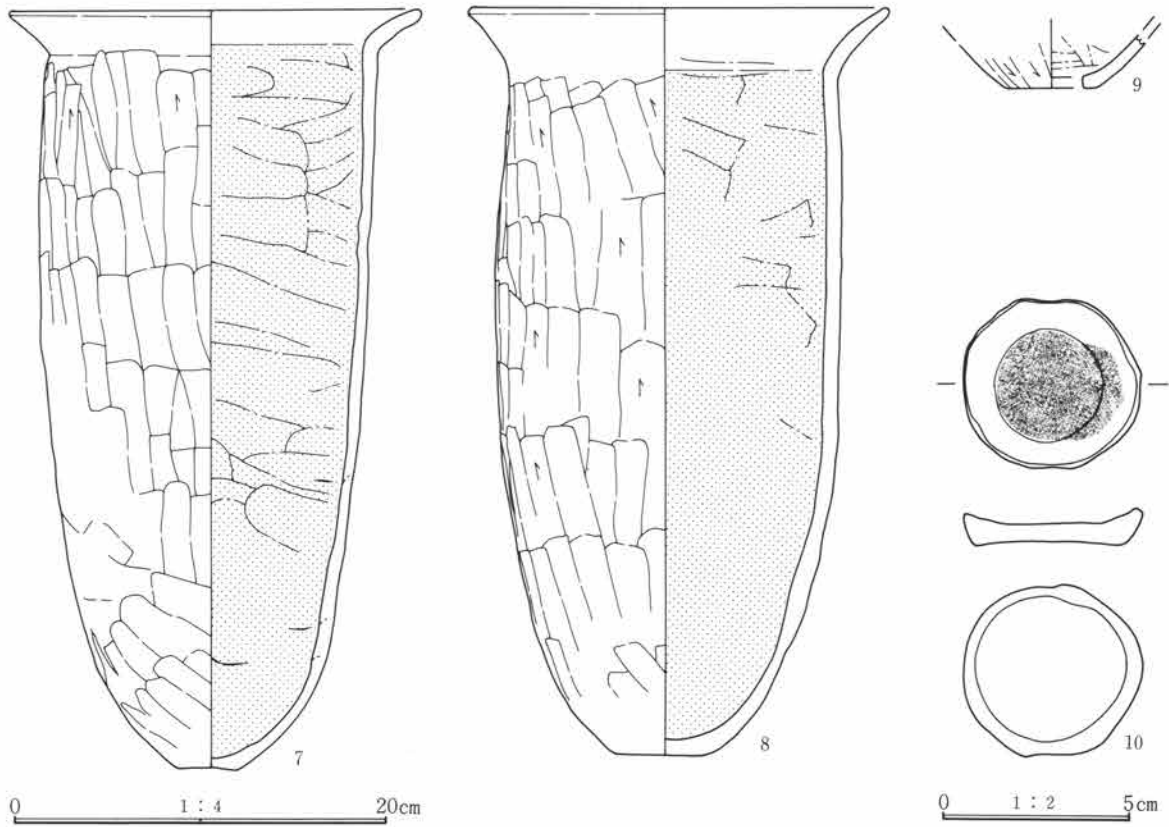
出土遺物 遺物量はあまり多くないが、竈付近を中心に、床面近くから完形に近い遺物が出土している。器種は土師器坏(1・2)・短頸壺(4)・小型甕(5・6)・甕(7・8)などである。他に覆土中より甑(9)と浅い皿状の土製品(10)が得られている。また、他の遺物よりも時期的に新しい土師器坏が1点(3)、床面より

第3章 検出された遺構と遺物

5 cmほど高い位置で出土している。これは、炭化材よりも上位に位置することから、住居が埋没する過程でまぎれこんだものと推測される。掘り方 なし。

調査所見 多量の炭化材が床面直上より出土している焼失住居である。古墳時代後期。





第121図 F-25号住居出土遺物実測図②

F-25号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+4cm 1/4	口(13.7) 底 — 高 5.1	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。	口縁外面と内面にわずかに漆付着
2	土師器 坏	床密着 2/5	口(13.0) 底 — 高 5.9	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面へらナデ後横ナデ。	
3	土師器 坏	+5cm ほぼ完形	口 12.2 底 — 高 4.0	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。口唇部は内面側に肥厚する。内面横ナデ。	他の遺物よりも新しい
4	土師器 短頸壺	床密着 完形	口 12.2 底 — 高 8.9	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ後へら磨き。胴部外面へら削り後へら磨き、内面横ナデ後へら磨き。	胴部内面にわずかに漆付着小型広口甕か
5	土師器 小型甕	床密着 完形	口 14.7 底 — 高 12.8	①粗砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	内面下半に黒色の付着物、胴部内外面に煤
6	土師器 小型甕	床密着 ほぼ完形	口 15.5 底 — 高 15.4	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面にへら状工具端部のあたり痕。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	胴部内面上半に帯状に煤付着
7	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 22.2 底 5.0 高 39.2	①砂礫含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	胴部内面に弱い煤付着
8	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 21.9 底 3.2 高 39.7	①砂礫含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。胴部内面に接合痕。	胴部内面に弱い煤付着、中位がやや強い
9	土師器 甕	覆土 底部1/5	口 — 底 (4.7) 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	胴部外面へら削り、内面ナデ。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
10	土師器 不明土製品	覆土 完形	口 4.5 底 4.0 高 1.0	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	手捏で、浅い皿状の器形に成形。	内面に黒・赤色の付 着物 顔料を溶いた ものか

F-27号住居跡 (PL17)

位置 Fq・Fr-79グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.25m 重複 F-7住に切られ、26住を切る。規模と形状 住居の大半を7号住によって破壊され、竈が残っているのみ。また、調査区外に住居域が延びるため、住居規模は不明。竈は北側に築かれる。

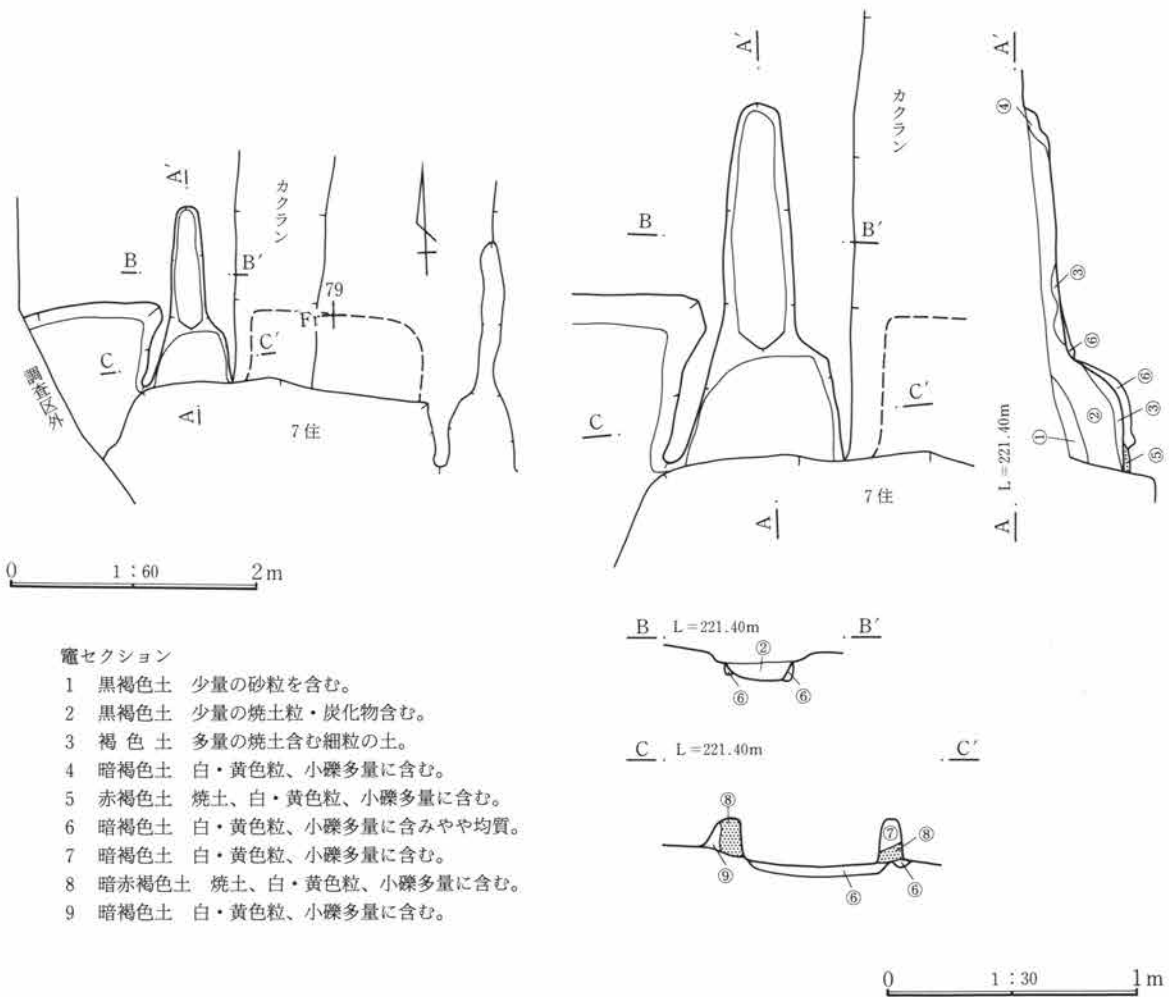
床面 ごく一部が残る。床面はほぼ平坦で地山を掘り込んで形成。

竈 住居北壁に所在。袖が住居内に作り出される形態を呈する。焚口幅59cm・燃燒部長42cm。右袖は一部最近の攪乱によって削られている。煙道も下半部が残存。煙道長96cm。

貯蔵穴 不明。周溝 なし。柱穴 不明(7号住によって破壊されているか)。

出土遺物 なし。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物なく、住居形状もわからないため、時期の確定は困難。



第122図 F-27号住居跡

F-29号住居跡 (PL17・105)

位置 Fq-75グリッド 主軸方位 N-1°-W 残存壁高 0.36m

重複 F-19・28・30・56住を切って構築。

規模と形状 重複が激しいため、北東隅を除いて、調査時には住居域を確定できなかった。ベルトセクションや出土遺物の検討から住居域を推定した。それによると住居規模は、推定で長辺5.06m・短辺3.52mの横長の長方形である。竈は北側に築かれる。

床面 主に他住居埋土を掘り込んで平坦な床面を形成。張り床や叩きしめたような痕跡はみられない。

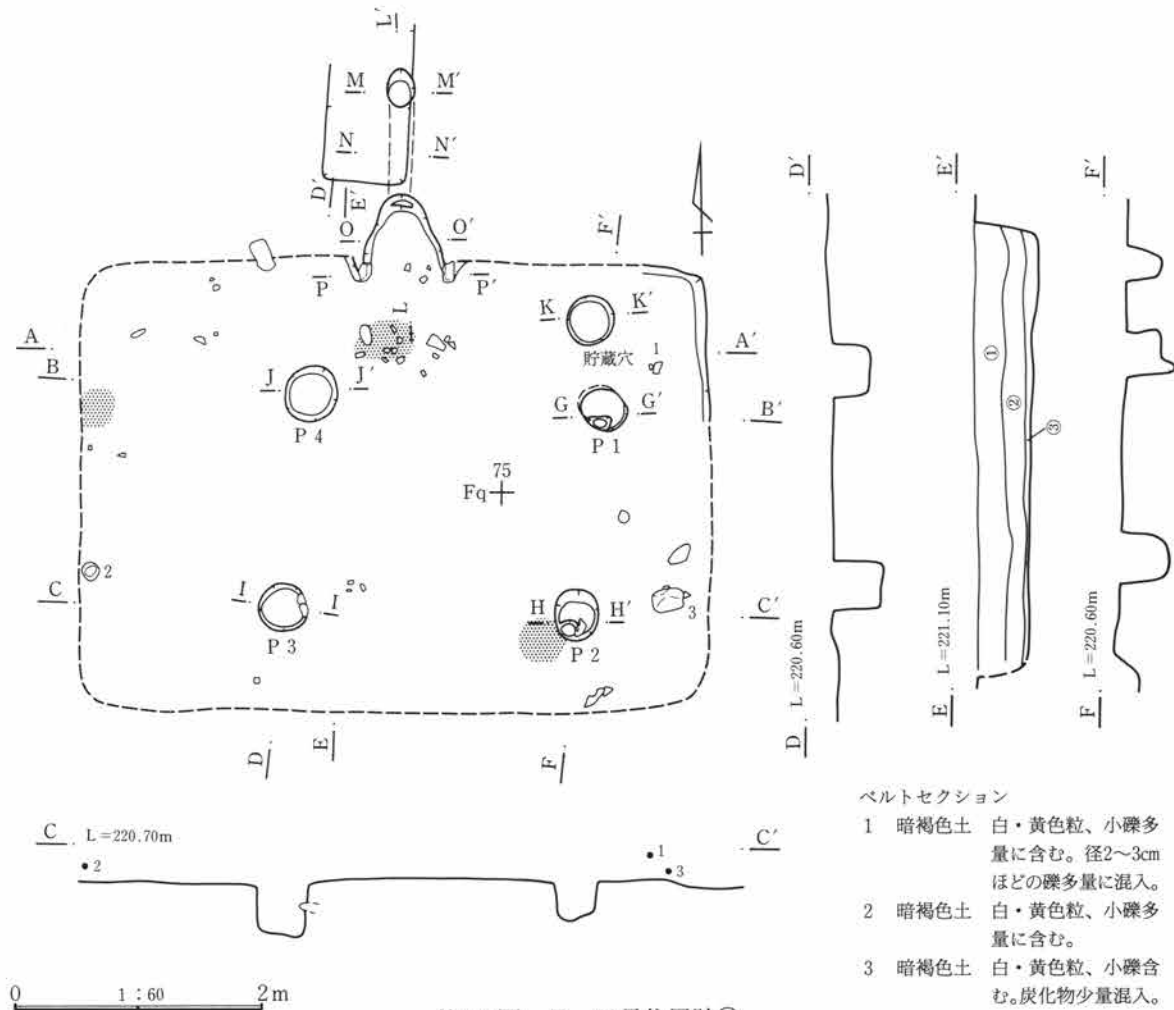
竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。住居内にわずかに袖がつき、先端の燃焼部側に板状の砂岩が袖石としておかれている。燃焼部は住居外に張り出す。焚口幅60cm・燃焼部長69cm。煙道は左半分が後世の攪乱によって破壊されているが、右半分は天井部分も残存している。煙道長99cm。煙道はくりぬき式である。

貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。規模は小さく、遺物の出土もない。周溝 なし。

柱穴 柱穴と思われる4基の小ピットを検出。推定した住居域からみると、西側の二本はかなり内側にずれる。

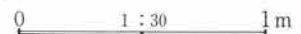
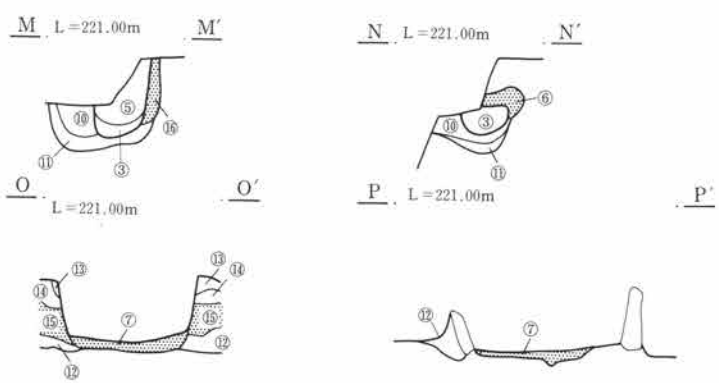
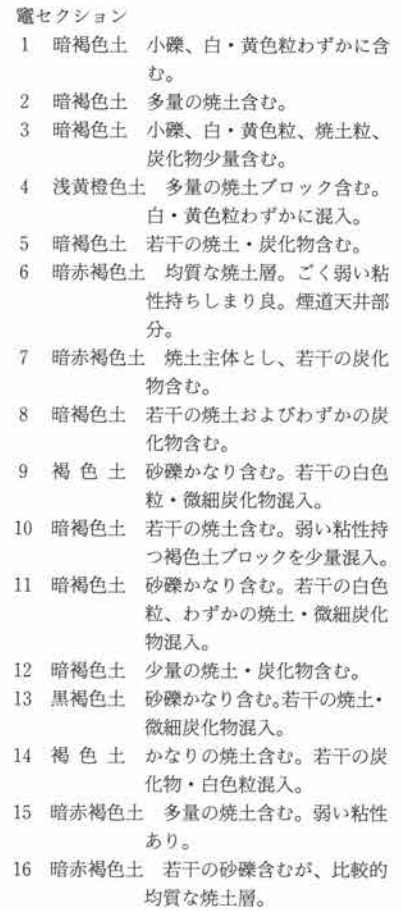
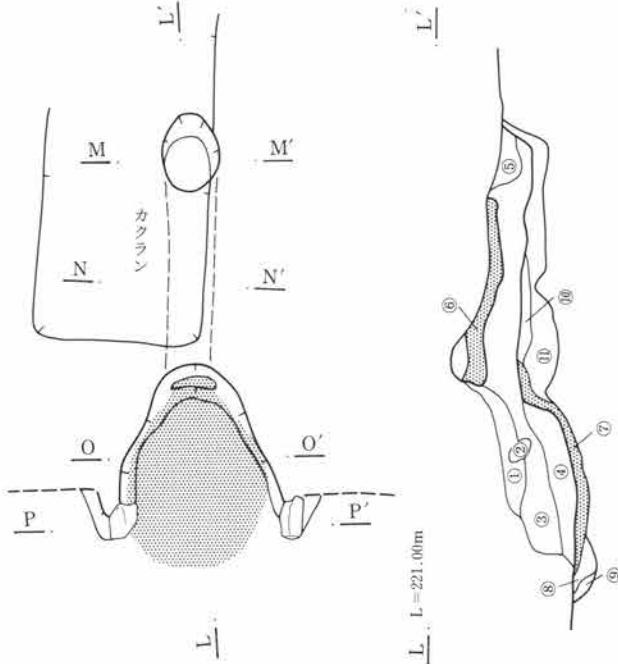
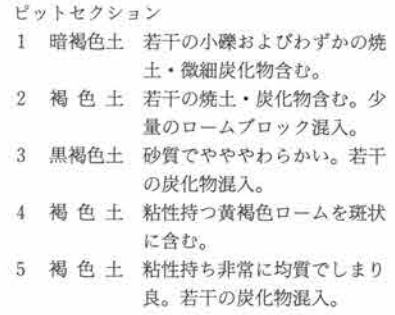
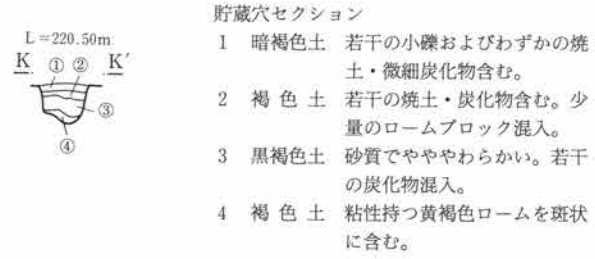
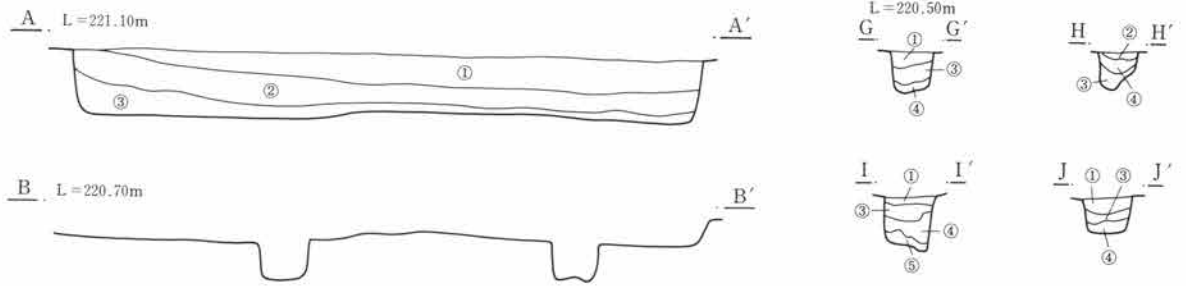
出土遺物 遺物は非常に少ない。小破片が竈前部を中心に散在する。器種も少なく、土師器坏(1・2)と甕(3)がみられたのみである。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。

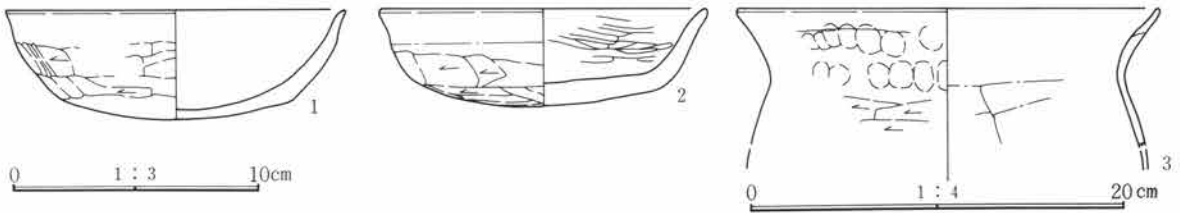


第123図 F-29号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



第124図 F-29号住居跡②



第125図 F-29号住居出土遺物実測図

F-29号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+21cm 1/4	口(13.3) 底(9.3) 高 4.3	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	+15cm 1/5	口 12.8 底 9.6 高 3.8	①細砂粒含む ②良好 ③浅黄色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
3	土師器 甕	+6cm 口縁破片	口(22.2) 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。全体に器肉薄い	

F-30号住居跡 (PL17・18・105)



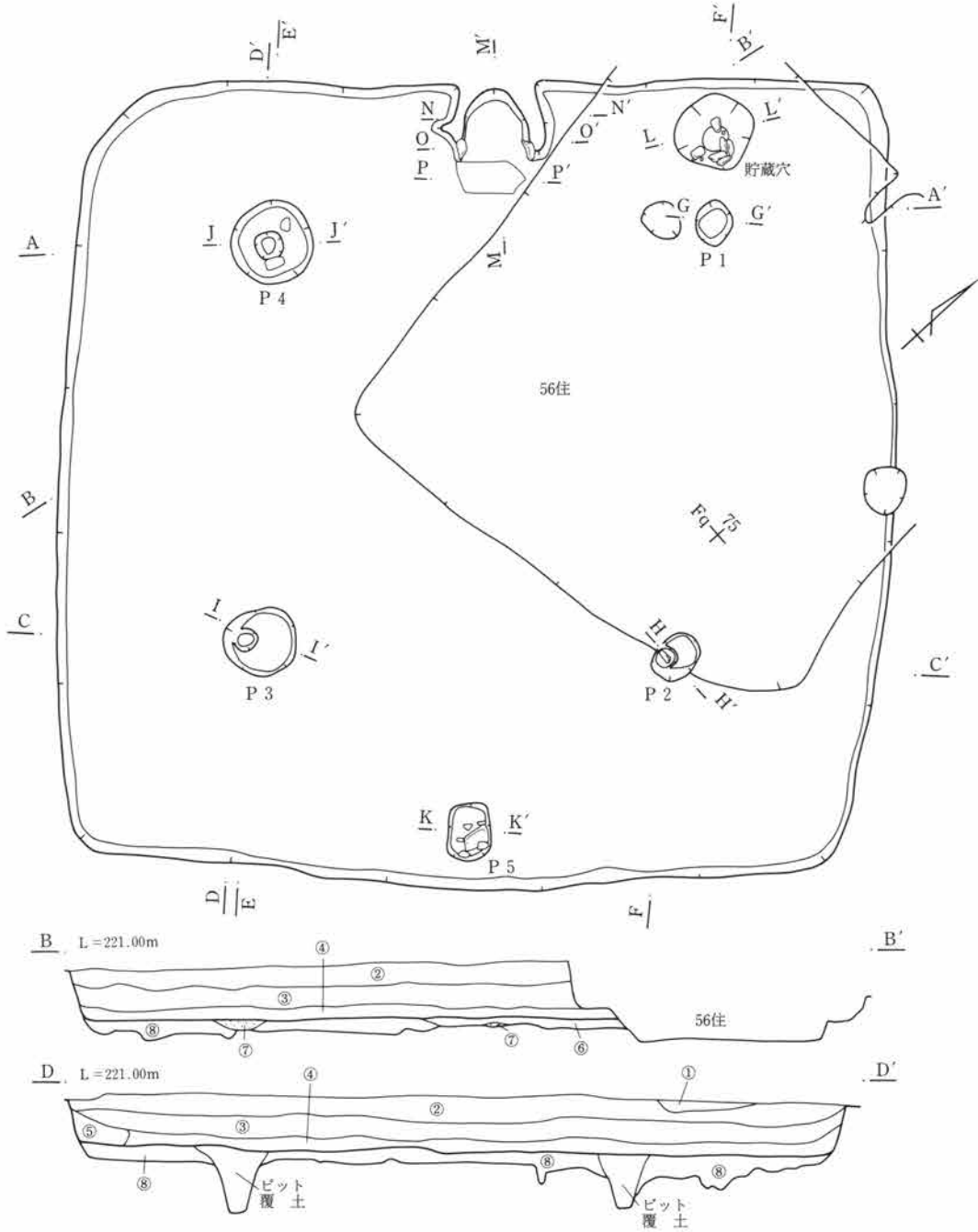
第126図 F-30号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物

位置 Fp-75グリッド 主軸方位 N-48°-W 残存壁高 0.62m

重複 F-19・28・29・30・56住に切られる。

規模と形状 長辺7.27m・短辺6.90m。やや長辺が長いが、ほぼ正方形を呈する。住居主軸はかなり西にふ

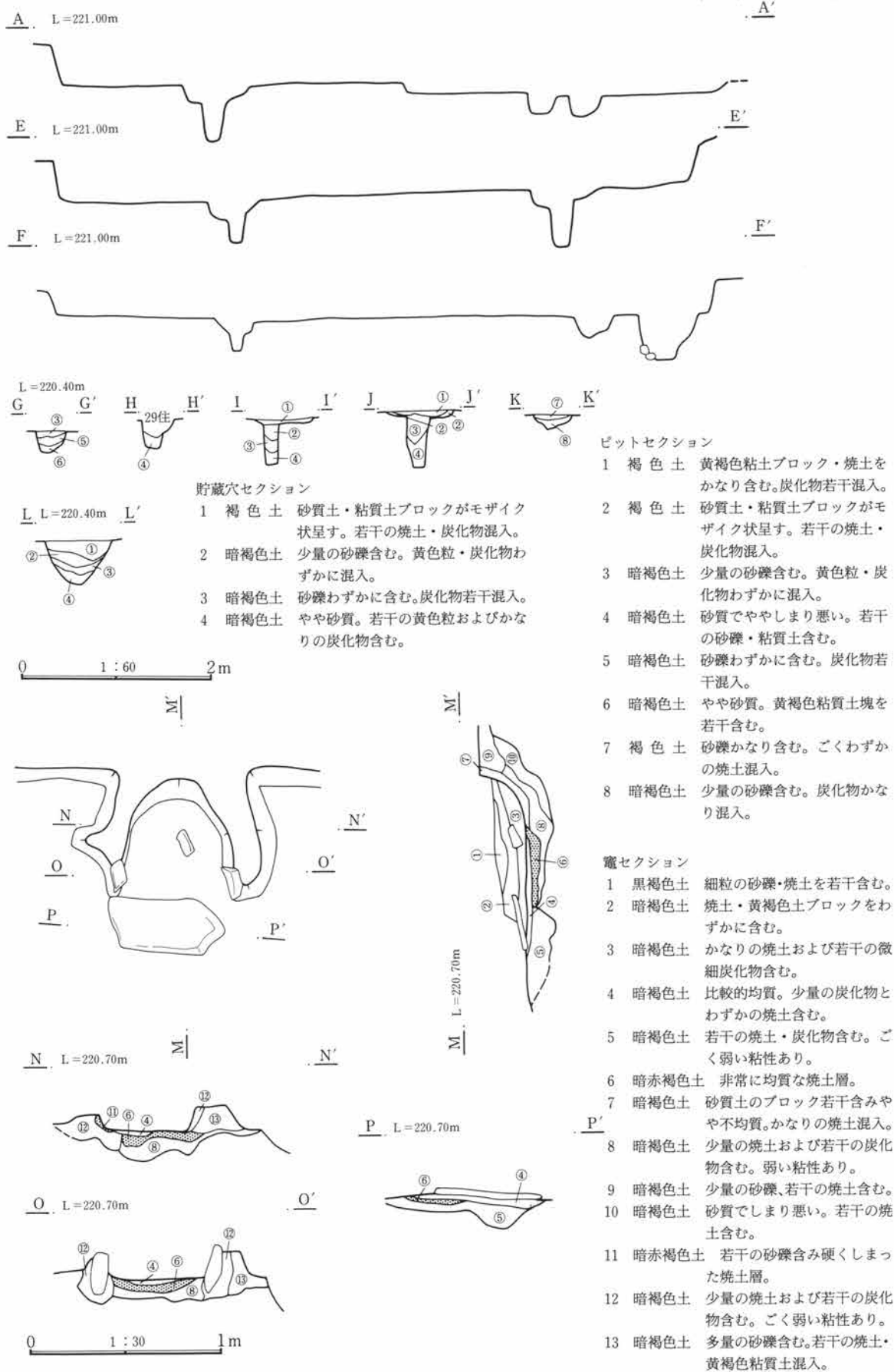


ベルトセクション

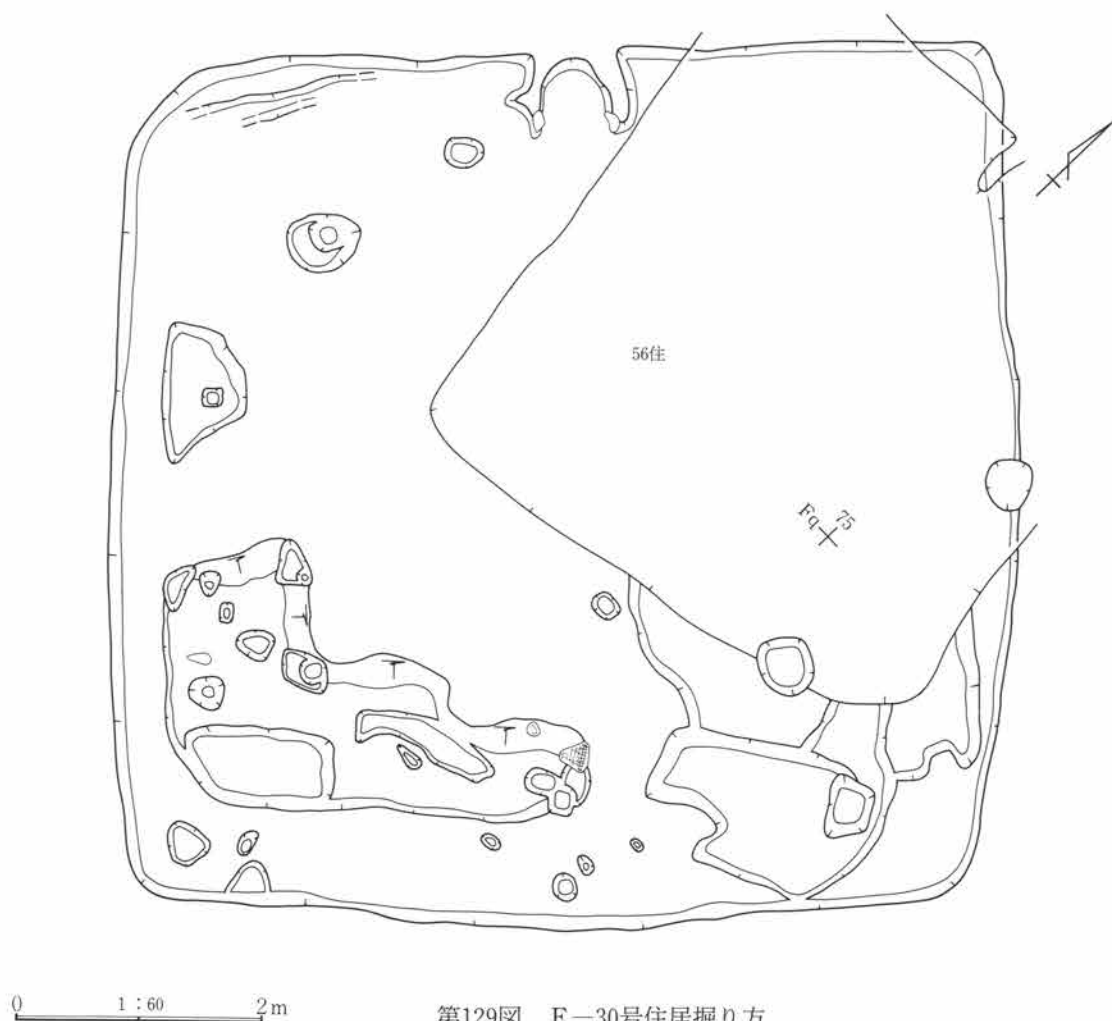
- | | |
|----------------------------------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 多量の小礫を含む。 | 5 暗褐色土 小礫、白・黄色粒、焼土粒、褐色土を含む。 |
| 2 暗褐色土 小礫、白・黄色粒、炭化物をわずかに含む。 | 6 暗褐色土 かなりの小礫含みしまりやや悪い。 |
| 3 暗褐色土 小礫、白・黄色粒、焼土粒、炭化物を含む。 | 7 黄褐色土 黄褐色粘質土を主体とする。 |
| 4 暗褐色土 3層に比べ炭化物・焼土の混入が多い。弱い粘性あり。 | 8 暗褐色土 若干の黄褐色粘質土を含む砂礫質土。 |

0 1:60 2m

第127図 F-30号住居跡②



第128図 F-30号住居跡③



第129図 F-30号住居掘り方

れる。住居北半は重複する他の住居に切られているため残存状況は悪いが、南半の周壁はほぼ直進し線形の乱れは少ない。住居南東壁際のほぼ中央に小ピットが1基あり、入り口施設にともなうものと考えられる。
床面 10～20cmほどの掘り方に、地山黄褐色粘質土を含む土を埋めて平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北西壁のほぼ中央部に所在。袖が住居内に作り付けられる形状を呈す。焚口幅55cm・燃焼部長61cm。両袖先端の燃焼部側には、袖石として板状の砂岩が据えられている。また燃焼部前には、天井石として使用されていた板状の砂岩が落ちている。煙道は重複する住居によって削平されている。

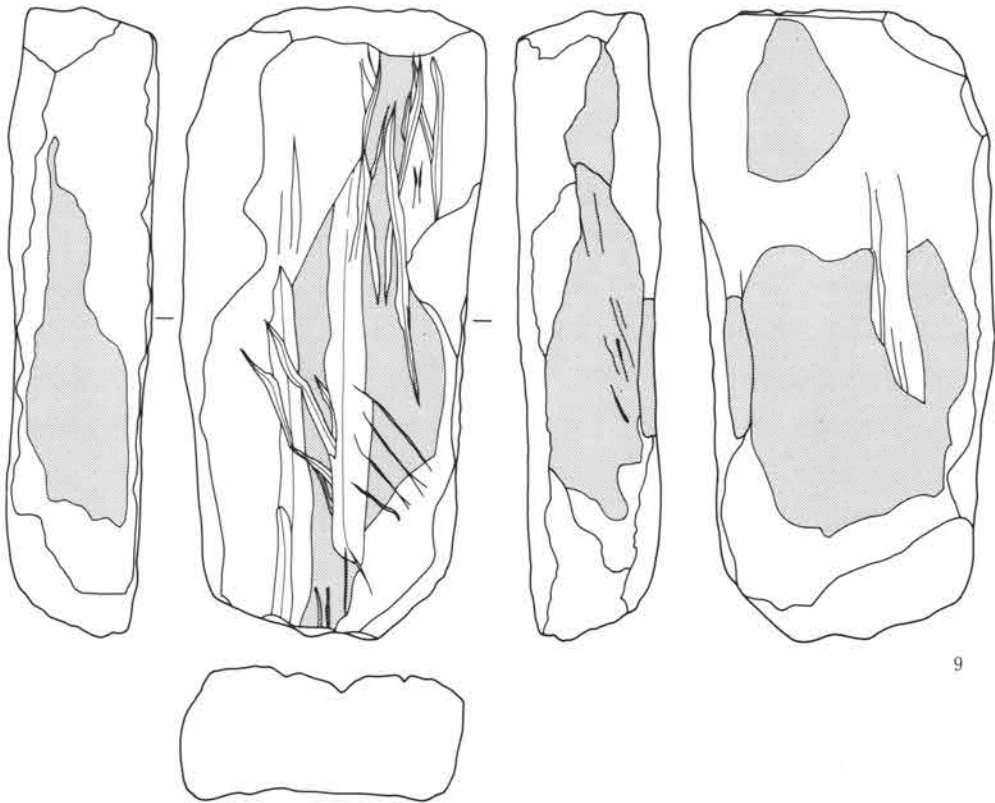
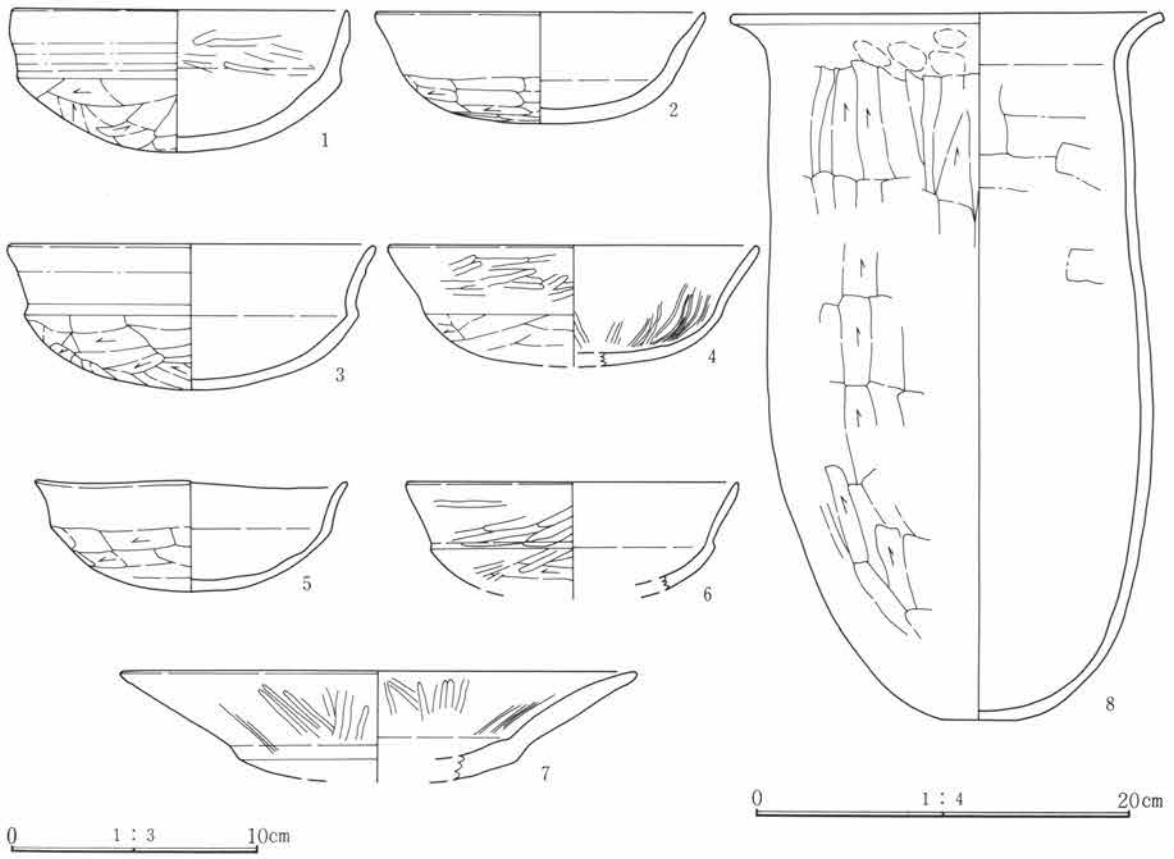
貯蔵穴 住居北隅に所在。 **周溝** なし。

柱穴 ほぼ住居の対角線上に乗る、4基の小ピットを検出。北隅の1基を除いて、掘り込みは深くかなりしっかりとしている。

出土遺物 かなり多くの遺物が住居内にまんべんなく分布する。器種は意外に少なく、土師器坏(1～4)・高坏(7)・甕(8)がえられたのみである。また重複する56号住居より、本住居に属する土師器坏(5・6)が出土している。この他に砂岩製で片面に刃ならし溝の顕著な大型の砥石(9)がある。

掘り方 住居南東壁際を中心に、不定形の浅い掘り方がみられる。

調査所見 住居の床面直上に多量の炭化材が分布する焼失住居である。古墳時代後期。



第130図 F-30号住居出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

F-30号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	+5cm ほぼ完形	口 13.3 底 — 高 5.6	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ後ヘラ磨き。			
2	土師器 坏	床密着 1/5	口(12.8) 底 — 高 4.3	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。			
3	土師器 坏	+4cm 1/2	口(14.4) 底 — 高 5.7	①微砂粒・赤褐色粒 子含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。			
4	土師器 坏	+4cm 1/4	口(14.4) 底 — 高 —	①微砂粒・赤褐色粒 子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き。体部外面ヘラ削り 内面横ナデ後放射状のヘラ磨き。			
5	土師器 坏	G-56住 覆土 ほぼ完形	口 12.1 底 — 高 4.4	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。器形かなり歪む。器内薄い。			
6	土師器 坏	G-56住 覆土 口 ~体部1/5	口(13.2) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り 後ヘラ磨き。内面横ナデ。			
7	土師器 高坏	+10cm 坏部1/5	口(20.4) 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	坏部内外面横ナデ後ヘラ磨き。			
8	土師器 甕	床密着 口~底部	口(22.7) 底 3.6 高(37.2)	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面 ヘラ削り、内面横ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
9	砥石	+14cm 完形	24.8	12.2	3.9	225.0	凝灰質砂岩	表裏・両側面に研磨面。表面は刃ならし溝が顕 著。

F-31号住居跡 (PL18・105・106)

位置 Fq-67グリッド 主軸方位 N-10°-W 残存壁高 0.57m

重複 F-15住よりも古く、51住よりは新しい。

規模と形状 平面形状はほぼ正方形であるが、長辺5.00m・短辺5.11mとわずかに主軸方向が長い。住居主軸はやや西にずれる。調査の段階で住居域の判定を誤り、東・西壁の大半を失ってしまったが、残存する北・南壁はほぼ直進し線形の乱れは少ない。竈は北側に築かれる。

床面 不規則な掘り方に地山砂礫混じり黄色シルトの混土を埋め床面形成。張り床や硬質部等は見られない。

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。住居内に袖が作り付けられるが、燃焼部は若干住居域外に張り出す。焚口幅38cm・燃焼部長50cm。煙道は重複する住居によって破壊されている。

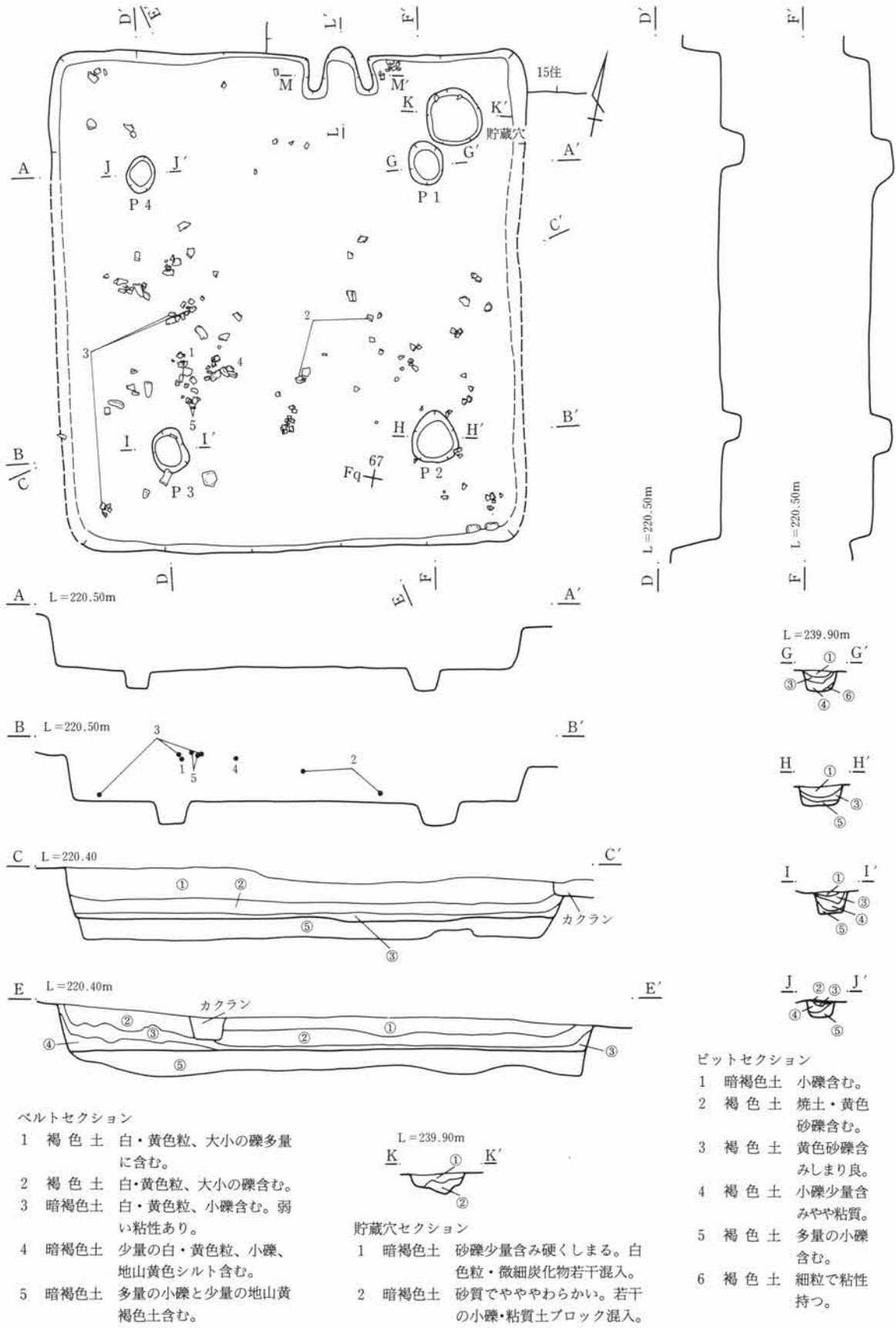
貯蔵穴 住居北東隅に所在。周溝 なし。

柱穴 大きさ深さともに類似した4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するが、北西隅のP4は若干西側にずれる。

出土遺物 遺物量はあまり多くなく、大半は小破片である。床面直上から上位50cmほどの間で住居内に散在して出土するが、南西部にややまとまっているようである。器種は、土師器坏(1・2)・甕(3・4)・甑(5)などがあるが、大半は覆土の上位よりの出土である。

掘り方 深さ20cmほどの不規則な掘り方が住居全域に確認された。

調査所見 遺物から古墳時代後期末の住居と推測される。



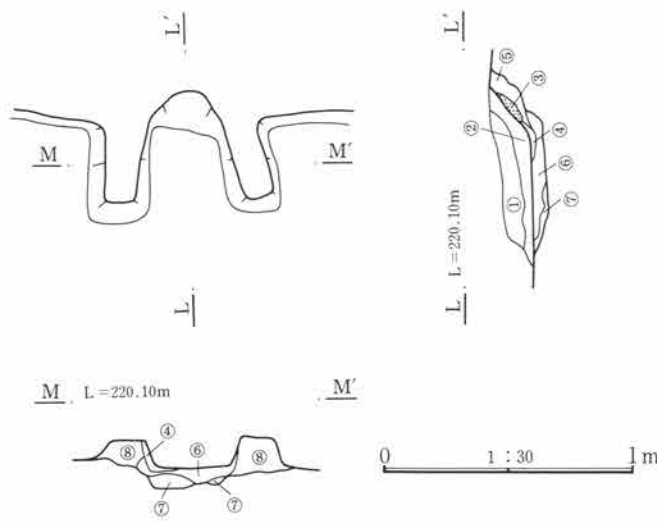
- ベルトセクション
- 1 褐色土 白・黄色粒、大小の礫多量に含む。
 - 2 褐色土 白・黄色粒、大小の礫含む。
 - 3 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含む。弱い粘性あり。
 - 4 暗褐色土 少量の白・黄色粒、小礫、地山黄色シルト含む。
 - 5 暗褐色土 多量の小礫と少量の地山黄色褐色土含む。

- 貯蔵穴セクション
- 1 暗褐色土 砂礫少量含む硬くしまる。白色粒・微細炭化物若干混入。
 - 2 暗褐色土 砂質でやややわらかい。若干の小礫・粘質土ブロック混入。

- ピットセクション
- 1 暗褐色土 小礫含む。
 - 2 褐色土 焼土・黄色砂礫含む。
 - 3 褐色土 黄色砂礫含みしまり良。
 - 4 褐色土 小礫少量含みやや粘質。
 - 5 褐色土 多量の小礫含む。
 - 6 褐色土 細粒で粘性持つ。

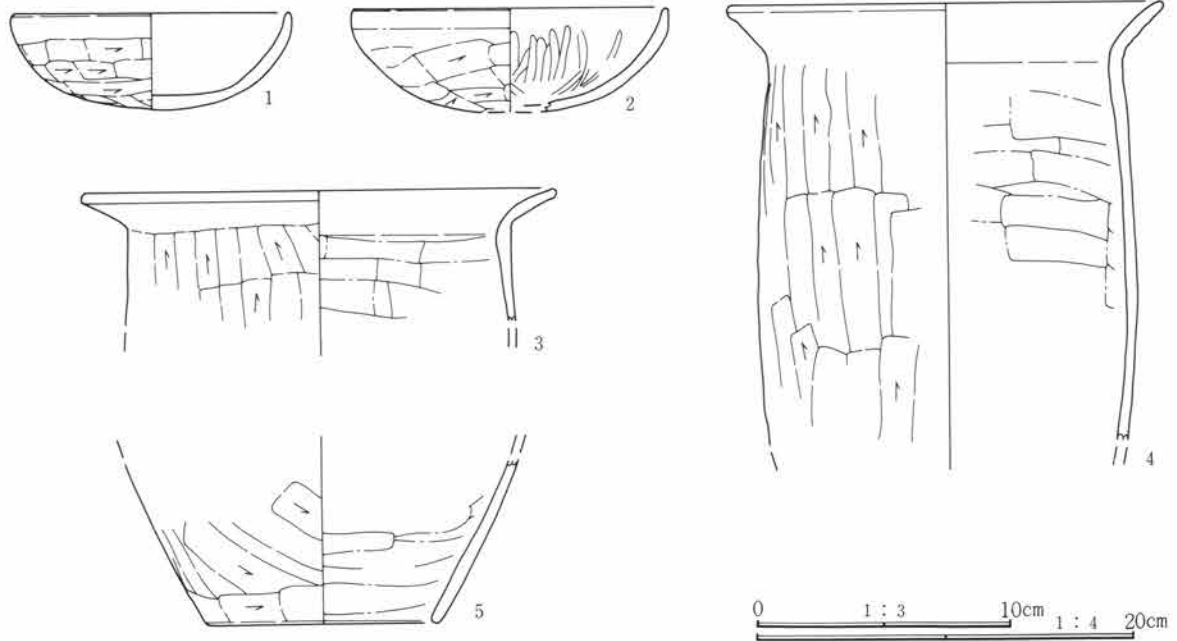
第131図 F-31号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



竈セクション

- 1 暗褐色土 小礫を含みしまり良。
- 2 暗褐色土 焼土ブロックを所々含む細粒の土。
- 3 暗赤褐色土 細粒・均質でしまりの良い焼土層。
- 4 暗褐色土 少量の焼土および若干の炭化物含む。比較的細粒・均質。
- 5 暗褐色土 砂礫主体としまり良。少量の白色粒混入。
- 6 暗褐色土 多量の焼土含む。比較的均質でやわらかくごく弱い粘性あり。
- 7 褐色土 少量の砂礫含みしまり良。かなりの焼土混入。
- 8 褐色土 少量の焼土・白色粒および若干の砂礫・微細炭化物含む。



第132図 F-31号住居竈、出土遺物実測図

F-31号住居出土遺物観察表

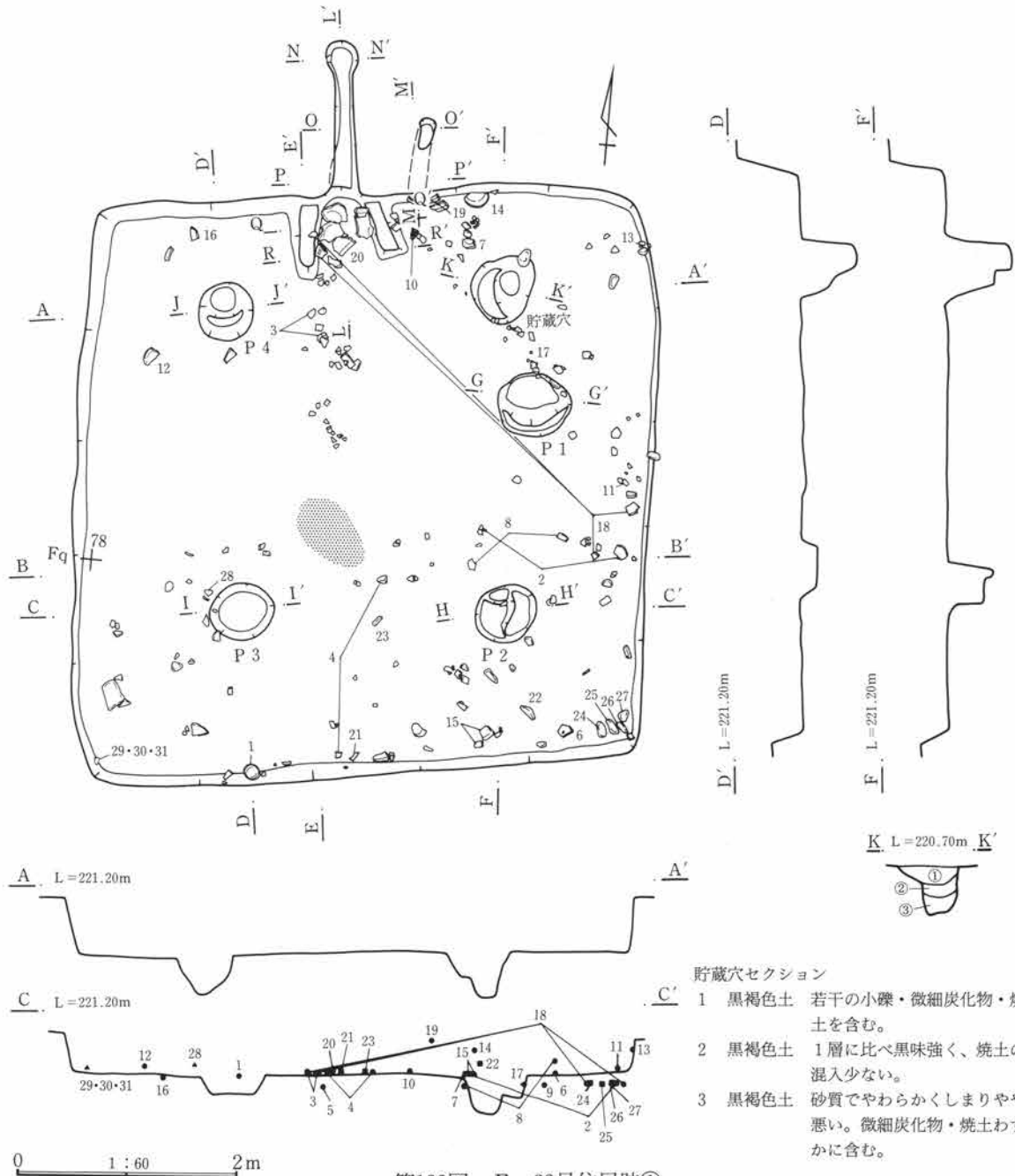
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+42cm 2/3	口 11.0 底 — 高 3.7	①細砂含む ②良好 ③橙色		口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	+6cm 1/4	口(12.6) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
3	土師器 甕	+6cm 口～胴部 上位1/5	口(25.0) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
4	土師器 甕	+43cm 口～胴部 上半1/3	口(23.0) 底 — 高 —	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	胴部内面にごく弱い 煤付着

番号	種類 種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
5	土師器 甕	+48cm 胴下位～ 底部 $\frac{1}{2}$	口— 底(12.2) 高—	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③明褐色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

F-32号住居跡 (PL18・19・106・107)

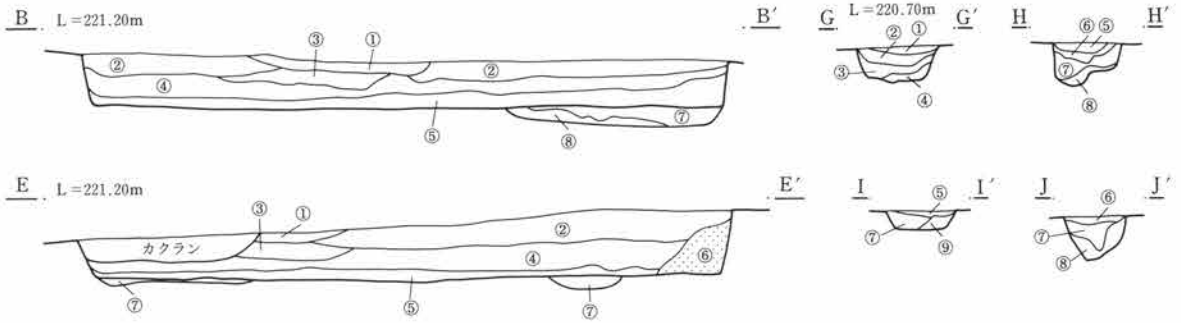
位置 Fp・Fq-77グリッド 主軸方位 N-4°-W 残存壁高 0.55m 重複 F-53住を切る。

規模と形状 長辺5.41m・短辺5.35m。平面形状は、北東-南西方向がわずかに長い正方形。住居主軸はわずかに西にふれる。周壁はほぼ直進するが、北東・南西隅近くはやや外側に広がり、コーナーが丸みを帯びる。竈は北側に築かれる。



第133図 F-32号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



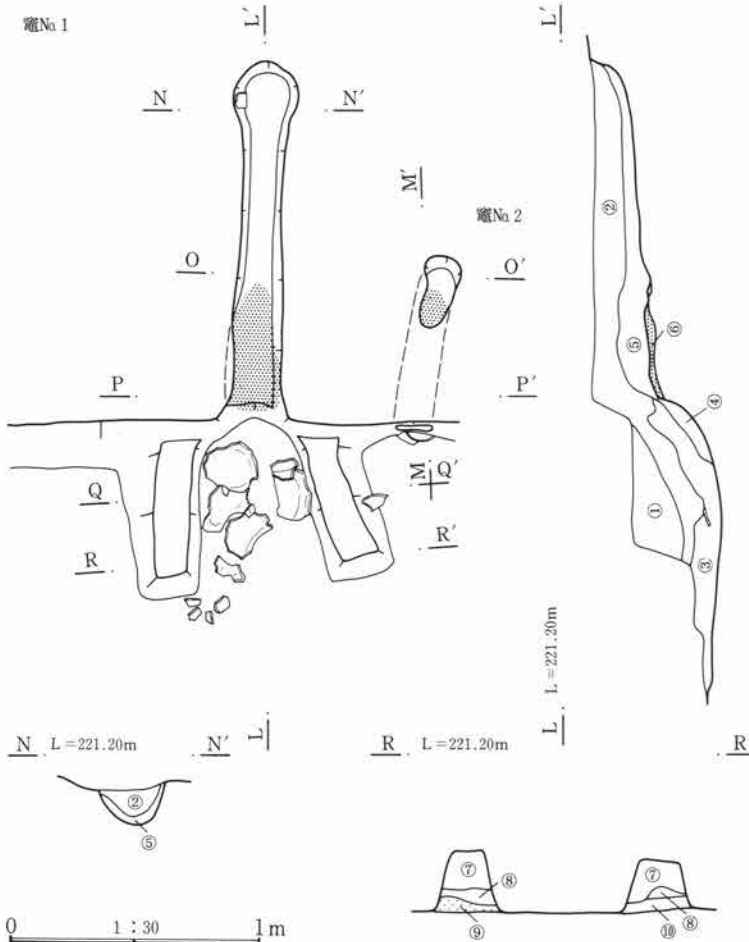
ベルトセクション

- 1 褐色土 小礫を含む。近年の耕作による攪乱か。
- 2 暗褐色土 小礫を含みしまり良。
- 3 暗褐色土 やや粗い小礫を含む。色調が若干黒み帯びる。
- 4 暗褐色土 2層に比べより細かな礫を含み量も少ない。
- 5 暗褐色土 黄褐色粘土ブロック・焼土ブロックを含む細粒の土。
- 6 黄褐色土 粘性を持つ。竈袖部分。
- 7 黒褐色土 砂質でややしまり悪い。少量の小礫、わずかの炭化物・焼土含む。
- 8 暗褐色土 少量の小礫含みしまりやや悪い。若干の黄褐色土・炭化物混入。

ピットセクション

- 1 暗褐色土 かなりの焼土・ローム塊を含む。若干の微細炭化物混入。
- 2 暗褐色土 礫ほとんど含まず、比較的均質でしまりやや良。
- 3 暗褐色土 2層に比べ黄色味強く、砂質でやわらかくしまり悪い。
- 4 黒褐色土 砂質でやわらかくしまり悪い。ローム塊を若干含む。
- 5 暗褐色土 若干の砂礫・炭化物・黄色土含む。
- 6 黄褐色土 ロームブロック主体とする。不均質だが硬くしまる。
- 7 暗褐色土 礫をほとんど含まず比較的均質。砂質でややわらかい。
- 8 暗褐色土 ローム塊を斑状に含み、不均質でしまり悪い。
- 9 暗褐色土 多量の砂礫含みしまり悪い。若干のローム混入。

0 1 : 60 2m

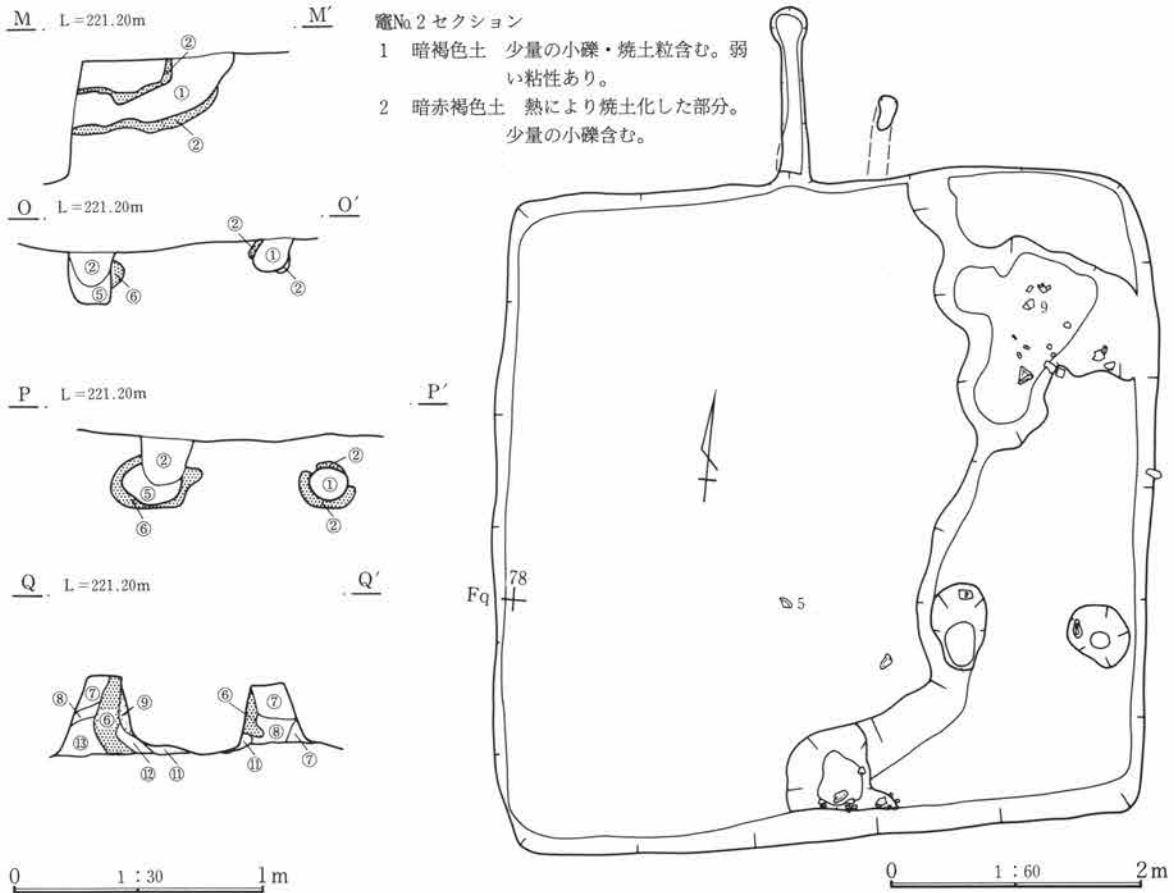


竈No.1セクション

- 1 黒褐色土 少量の小礫含みしまり良。若干の白色粒・炭化物混入。
- 2 黒褐色土 1層に比べ小礫の混入少ない。若干の黄褐色土ブロック・微細炭化物含む。
- 3 暗褐色土 黄色・灰色・灰白色・灰黄色土のブロックを雑多に含む。若干の焼土・炭化物混入。
- 4 黒褐色土 少量の焼土・若干の炭化物含む。比較的均質・細粒でやわらかい。
- 5 黒褐色土 地山砂質土含みしまりやや悪い。若干の焼土・微細炭化物混入。
- 6 暗赤褐色土 熱により焼土化した部分。少量の小礫含む。
- 7 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含みしまり良。
- 8 暗褐色土 白・黄色粒わずかに含む。7層より小礫の混入少ない。
- 9 黄褐色土 少量の焼土・小礫含む細粒の土。
- 10 暗褐色土 少量の白・黄色粒、焼土、黄褐色土含む。
- 11 暗褐色土 少量の焼土含む。粘性あり。
- 12 褐色土 細粒・均質の粘質土。少量の焼土含む。
- 13 褐色土 黄色粒・小礫ごくわずかに含む。

0 1 : 30 1m

第134図 F-32号住居跡②



第135図 F-32号住居竈、掘り方

床面 住居東側の一部を除いて、地山砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。掘り方のある部分でも、貼り床や硬質部分はみられなかった。

竈 住居北壁のほぼ中央に所在。袖は住居内に作り出される。焚口幅56cm・燃烧部長72cm。煙道は、天井が崩落しているものの残存しており、長さは135cmに達する。燃烧部内より、同一個体の土師器甕(20)の大形破片が出土(竈No 1)。またこの竈の東側には古い竈の煙道だけが残っている(竈No 2)。煙道はくりぬき式で、天井も一部崩落せずに残っている。長さは現存で69cm。竈No 2 廃絶後にNo 1 を構築している。

貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。周溝 なし。

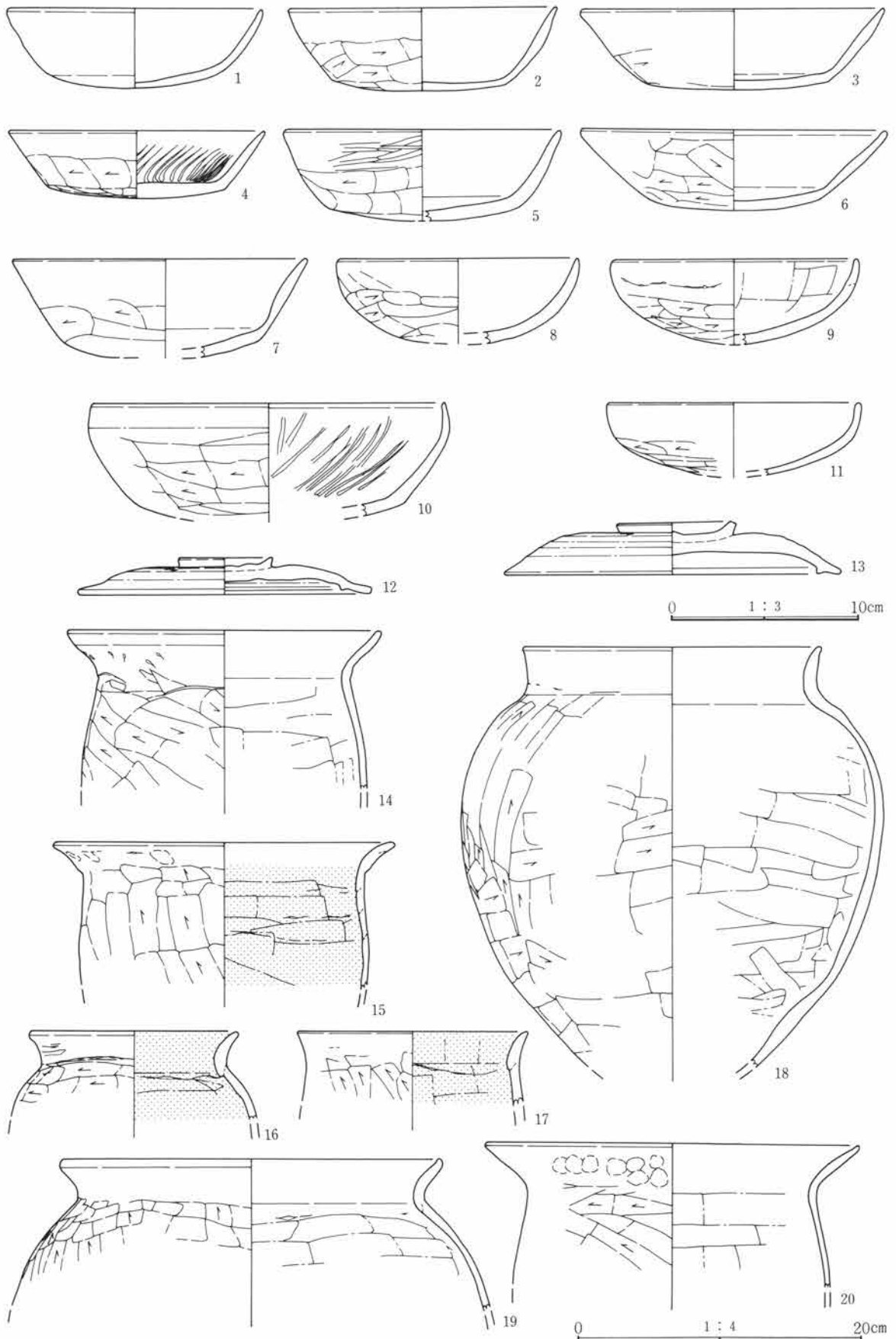
柱穴 4基の小ピット検出。大きさは同様の規模であるが、深さは北東隅近くのP 1が極端に浅い。また位置的にもかなり南側にずれ、柱穴とするには疑わしい。むしろ、貯蔵穴を柱穴と考えるほうがより妥当か。

出土遺物 遺物はさほど多くはないが、住居内に散在して出土。床面近くに位置するものが多い。器種は、多量の土師器坏(1~11)が中心で、他に小型甕(16・17)・甕(14・15、18~20)、須恵器蓋(12・13)などがある。また、小型の砥石(21)とこもあみ石(22・27)が住居南東隅付近から出土している。また、床面から若干高い位置から鉄滓(28~31)が出土している。

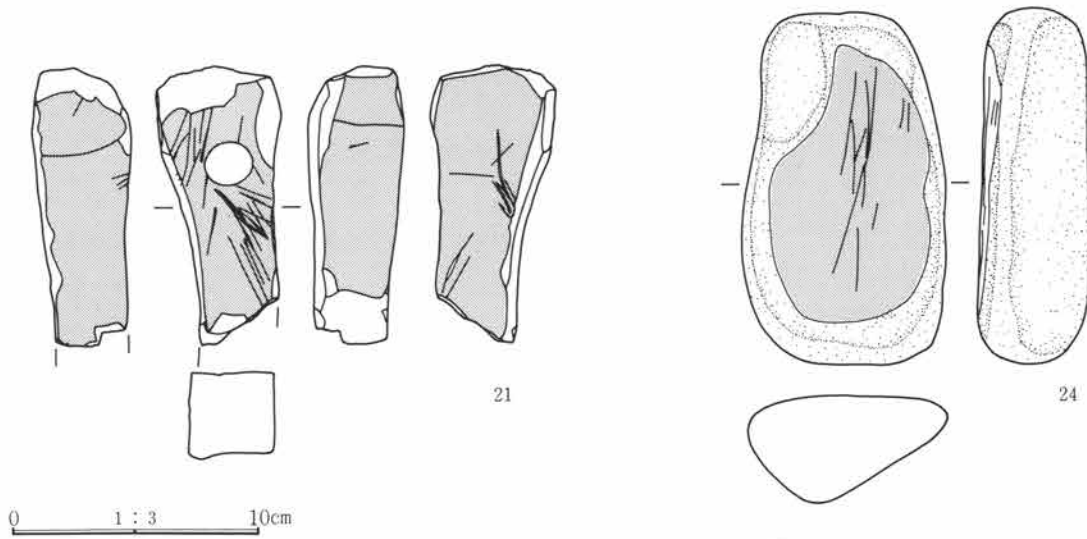
掘り方 住居東壁に沿って、浅い帯状の掘り方がみられる。また、南壁中央には小ピットが1基あり、何らかの入り口施設があったものと推測される。

調査所見 出土遺物より奈良時代の住居と推定できる。

第3章 検出された遺構と遺物



第136図 F-32号住居出土遺物実測図①



第137図 F-32号住居出土遺物実測図②

F-32号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 完形	口 13.1 底 8.7 高 4.1	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面の摩滅激しい
2	土師器 坏	床密着 3/3	口(13.8) 底 9.5 高4.3	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
3	土師器 坏	床密着 3/5	口 15.8 底 9.5 高 4.2	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
4	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 13.2 底 9.4 高 3.6	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後放射状ヘラ磨き。	
5	土師器 坏	掘り方内 1/3	口(14.1) 底(10.0) 高(4.7)	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
6	土師器 坏	床密着 1/4	口(15.8) 底(9.4) 高 4.2	①微砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、口唇部は内側にやや肥厚する 体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
7	土師器 坏	床密着 1/4	口(15.3) 底(10.5) 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
8	土師器 坏	床密着 1/3	口 12.5 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
9	土師器 坏	貯蔵穴内 1/6	口(12.5) 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、接合痕あり。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	
10	土師器 坏	床密着 1/4	口 18.4 底(14.0) 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後放射状ヘラ磨き。	
11	土師器 坏	床密着 1/5	口(12.8) 底 — 高 —	①微砂粒・赤褐色粒 子含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
12	須恵器 蓋	+14cm 3/3	口(15.1) 摘 4.8 高 1.9	①微砂粒・白色微粒 子含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。天井部回転ヘラ削り。つまみ貼付。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種器類種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
							13	須恵器 蓋
14	土師器 甕	+22cm 口～胴部 上位1/2	口(21.8) 底 — 高 —	①均質で微砂粒含む ②良好 ③黄橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。全体に器肉薄い。			
15	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/4	口(23.6) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。胴部内面に接合痕。	胴部内面に煤付着		
16	土師器 小型甕	床密着 口縁1/3	口(14.4) 底 — 高 —	①微砂粒(ごくまれに小礫)含む②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面にヘラ状工具端部のあたり。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。口縁と胴部の境に接合痕あり。	内面に煤付着		
17	土師器 小型甕	貯蔵穴内 口縁1/5	口(15.9) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ、内面ヘラ削り後横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。内面に接合痕。	内面に弱い煤付着		
18	土師器 甕	床密着 口～胴部 1/2	口(20.6) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面にヘラ状工具のあたり 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
19	土師器 甕	+27cm 口～胴部 上位1/4	口(26.3) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。内面に接合痕。			
20	土師器 甕	カマド内 口～胴部 上位1/6	口(25.8) 底 — 高 —	①均質で微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。全体に器肉薄い。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値(cm・g)				石材	特 徴
			全長	幅	厚さ	重量		
21	砥石	床密着 1/2	(11.0)	4.9	3.1	(247.1)	砥沢石	表裏・両側面に研磨面。表裏に刃ならし溝。使用度高く、両側がくびれている。
22	こもあみ石	+10cm 完形	15.9	5.3	3.0	395.0	閃緑岩	棒状の円礫。
23	こもあみ石	床密着 完形	13.8	5.5	4.8	497.3	流紋岩	同上。
24	こもあみ石	床密着 完形	13.8	8.0	4.5	703.5	流紋岩	表面に磨面。棒状のキズ有り。砥石として使用か？
25	こもあみ石	床密着 完形	15.0	6.0	4.4	516.3	ひん岩	棒状の垂円礫。
26	こもあみ石	床密着 完形	11.3	4.8	3.5	234.1	粗粒安山岩	棒状の円礫。
27	こもあみ石	床密着 完形	15.1	8.3	4.2	617.1	粗粒安山岩	盤状の垂円礫。
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
28	鉄滓	+11cm	7.8	5.0	4.3	302.0	破片	固結しているが、表面全面に土の粒子残す。
29	鉄滓	+4cm	9.0	5.2	5.1	149.0	破片	表面一部溶けてガラス状。
30	鉄滓	+4cm	5.5	5.4	5.0	69.0	破片	表面一部溶けてガラス状。
31	鉄滓	+4cm	5.0	4.7	4.2	48.0	破片	表面一部溶けてガラス状。

F-33号住居跡 (PL19・107)

位置 Fn-67グリッド 主軸方位 N-11°-W 残存壁高 0.34m 重複 F-36住を切る。

規模と形状 長辺3.96m・短辺3.29mの横長の長方形。周壁はわずかに外反し、四隅がやや丸みを帯びる。竈は北側に作られる。

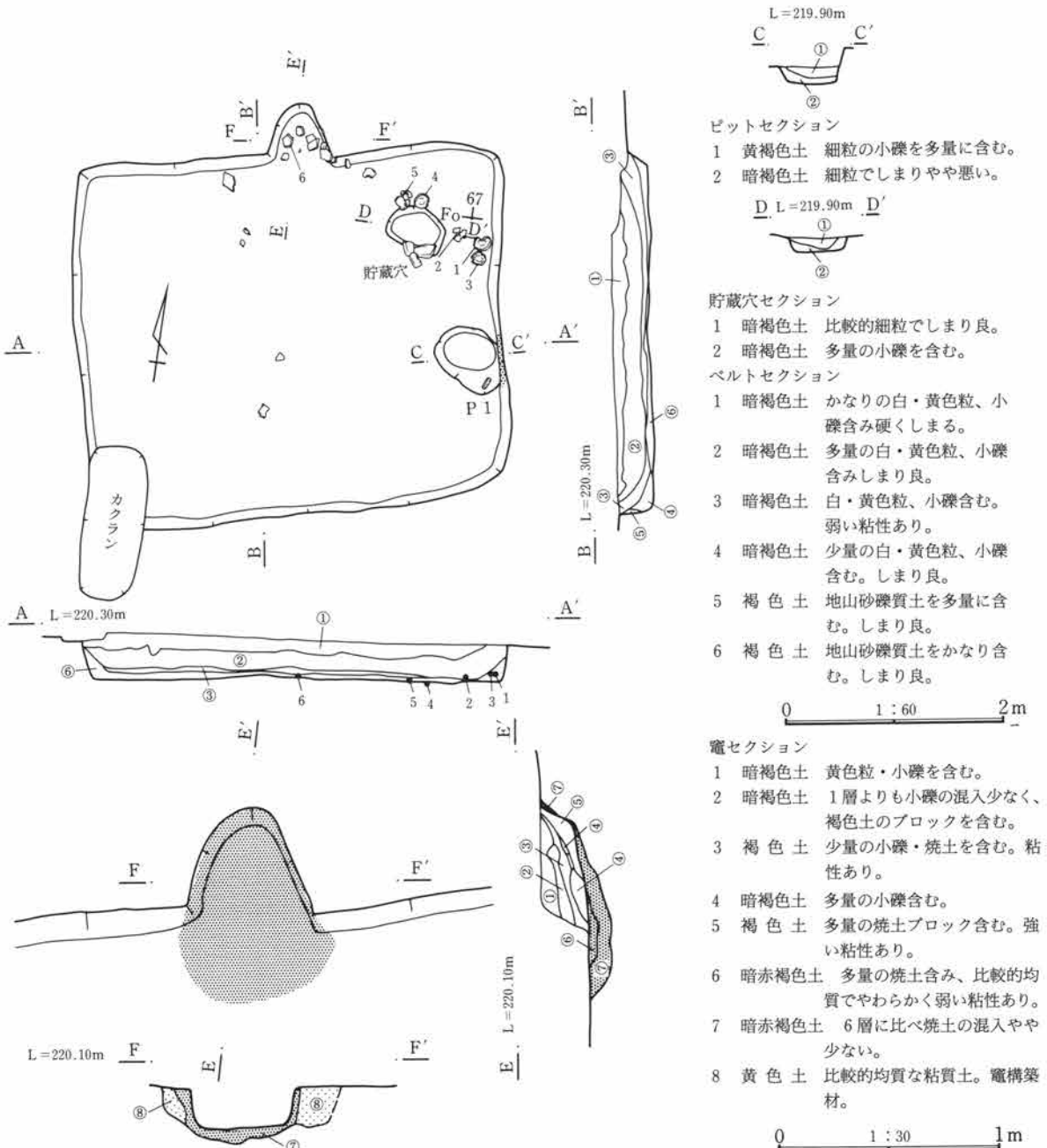
床面 地山暗褐色砂礫質土を掘り込んで平坦な床面形成。

竈 住居北壁の中央に所在。袖は作られず、燃焼部が住居外側に張り出す。焚口幅52cm・燃焼部長55cm。燃焼部の下面と両壁・奥壁は、良く焼けて焼土化している。煙道は削平されている。また住居東壁に一部焼土化した部分があり、別の竈の存在が予想されたが、調査の結果痕跡は見つからなかった。

貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。規模は小さく浅い。内部からの遺物の出土はなかったが、周辺からは完形に近い坏や石などが分布している。周溝 なし。柱穴 なし。

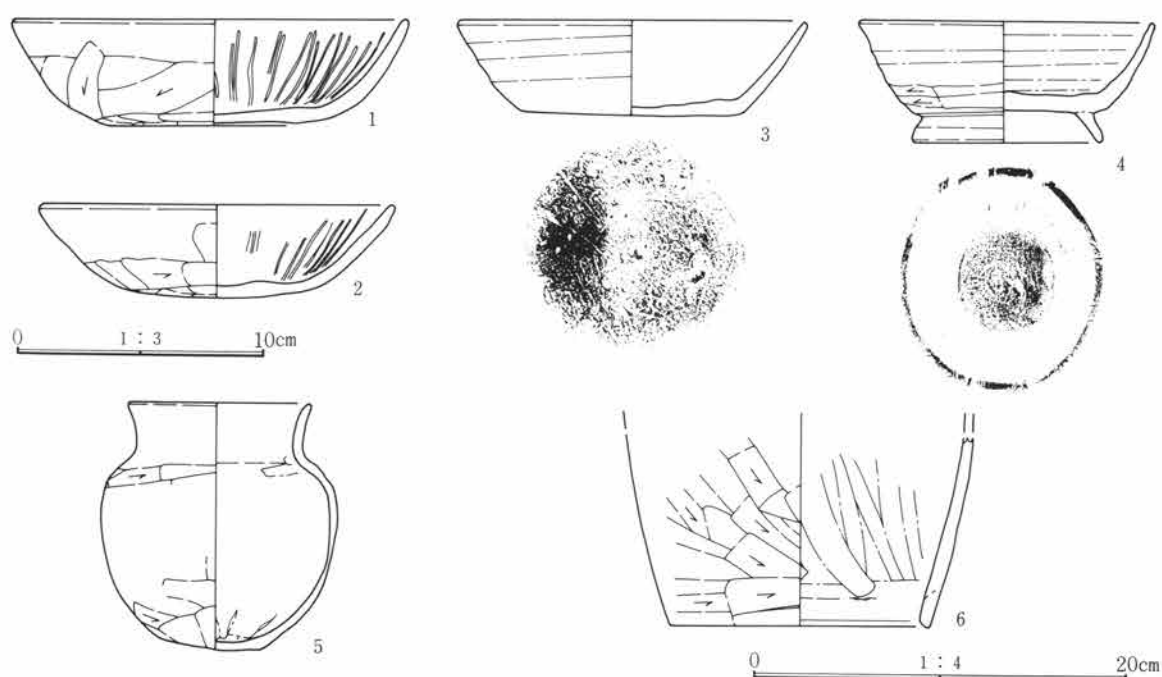
出土遺物 遺物は少ない。竈および貯蔵穴の周辺に集中する。いずれも床面近くからの出土である。器種は、土師器坏(1・2)・小型甕(5)・甑(6)、須恵器坏(3)・埴(4)などがあり、遺物量の少なさからみれば比較的豊富である。掘り方 なし。

調査所見 住居・竈形状、出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



第138図 F-33号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第139図 F-33号住居出土遺物実測図

F-33号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+6cm 5/6	口 15.6 底 9.0 高 4.1	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ後放射状へラ磨き。	
2	土師器 坏	+5cm 5/6	口 (13.9) 底 (7.4) 高 3.6	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ後放射状へラ磨き。	
3	須恵器 坏	+8cm 5/6	口 13.5 底 8.8 高 3.7	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転へラ切り。	
4	須恵器 壺	+2cm 5/6	口 11.6 底 7.4 高 4.8	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。体部下位回転へラ削り。底部回転へラ切り。貼付高台。	
5	土師器 小型甕	+2cm 口～底部	口 (9.7) 底 5.4 高 13.0	①微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面へラナデ。胴部の器肉薄い。	
6	土師器 甕	カマド内 胴下位～ 底部5/6	口 — 底 (13.8) 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面へラ削り、内面ナデ。内面に接合痕。	

F-35号住居跡 (PL19・107・108)

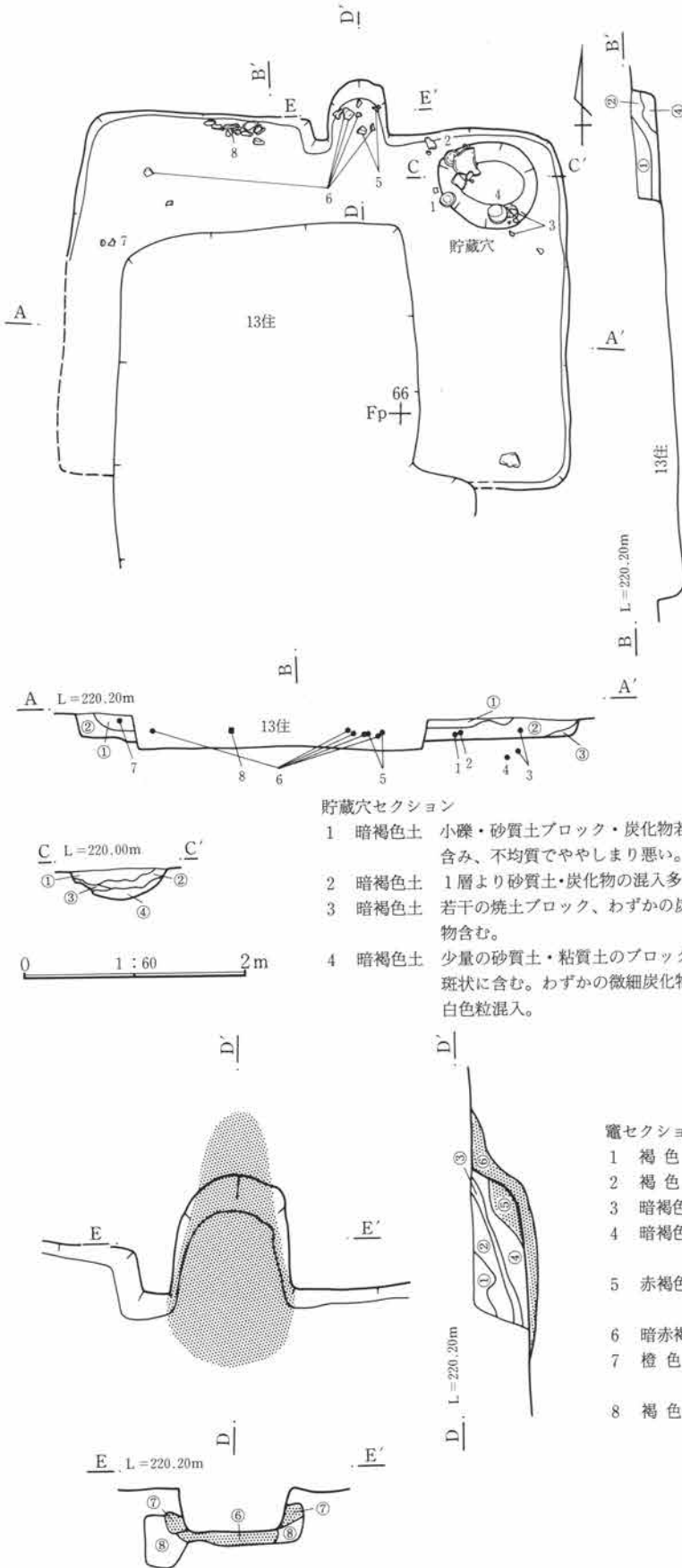
位置 Fp-65・66グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.21m

重複 F-13住に切られ、36住を切る。

規模と形状 長辺4.54m・短辺3.22mの横長の長方形。周壁はほぼ直進し、線形の乱れはみられない。住居主軸はほぼ磁北に一致。竈は北側に築かれる。

床面 地山礫混じりシルト質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。左側に一部短い袖が作られているが、燃烧部は住居外に張り出す。焚口幅51cm・燃烧部長59cm。煙道は削平されている。



貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 小礫・砂質土ブロック・炭化物若干含み、不均質でややしまり悪い。
- 2 暗褐色土 1層より砂質土・炭化物の混入多い。
- 3 暗褐色土 若干の焼土ブロック、わずかの炭化物含む。
- 4 暗褐色土 少量の砂質土・粘質土のブロックを斑状に含む。わずかの微細炭化物・白色粒混入。

ベルトセクション

- 1 暗褐色土 多量の白・黄色粒、小礫含みしまり良。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含む。しまり良。
- 3 褐色土 地山の砂礫混じりシルト質土を主体とする。壁崩落土か。
- 4 黄褐色土 白・黄色粒、小礫含みしまり良。多量の地山シルト質土混入。

竈セクション

- 1 褐色土 かなりの白・黄色粒、小礫含みしまり良。
- 2 褐色土 多量の白・黄色粒、小礫含みしまり良。
- 3 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含みしまり良。
- 4 暗褐色土 少量の白・黄色粒、小礫、焼土含みしまり良。
- 5 赤褐色土 焼土含みしまり良。粘性あり。わずかの白・黄色粒混入。
- 6 暗赤褐色土 少量の焼土・炭化物・小礫含む。
- 7 橙色土 熱を受け焼土化した部分。少量の小礫含み弱い粘性あり。
- 8 褐色土 少量の小礫含む。若干の焼土混入。

第140図 F-35号住居跡

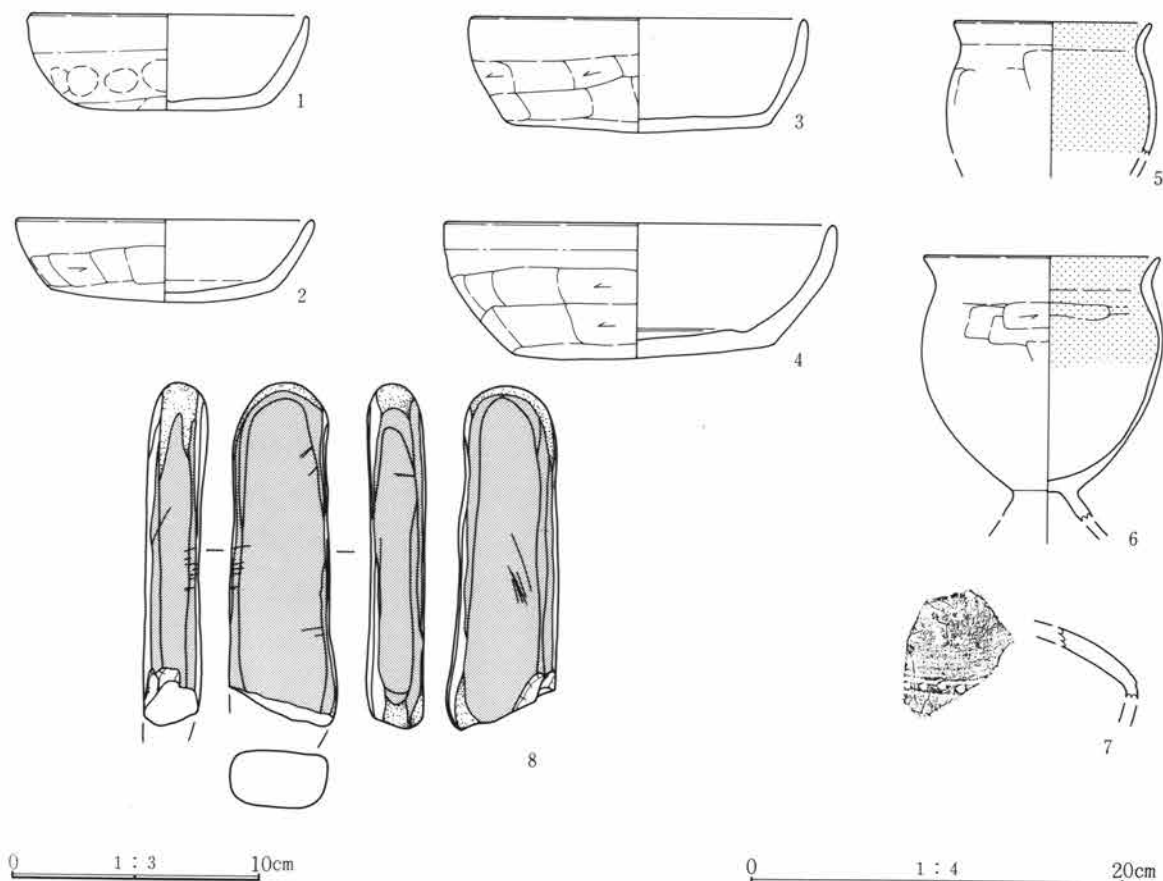
貯蔵穴 住居北東隅に所在。内部と周辺より、完形近くまで復元可能な土師器坏(1~4)が4点出土。周溝なし。柱穴なし。

出土遺物 出土遺物は少ない。住居の半分ほどを重複する他の住居によって切られているため、破壊されていない竈および貯蔵穴周辺に集中。器種は、先述の土師器坏の他に、土師器小型台付甕(5・6)、須恵器壺破片(7)などがある。また、竈西側の壁際から細長い円礫を素材とした砥石(8)が出土した。

掘り方 なし。

調査所見 住居・竈形状と出土遺物より、奈良時代の住居である。

第3章 検出された遺構と遺物



第141図 F-35号住居出土遺物実測図

F-35号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 完形	口 10.8 底 7.9 高 3.8	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ。体～底部外面へラ削り、指頭 圧痕あり。内面横ナデ。	器表面の摩滅激しい		
2	土師器 坏	貯蔵穴上 面 完形	口 11.6 底 7.8 高 3.3	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面 横ナデ。	器表面の摩滅激しい		
3	土師器 坏	貯蔵穴内 1/2	口(13.0) 底 9.5 高 4.5	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面 横ナデ。	器表面かなり摩滅		
4	土師器 坏	貯蔵穴内 一部欠	口 15.5 底 10.4 高 5.3	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面 横ナデ。内面底部に浅い沈線一条めぐる。			
5	土師器 小型台付甕	カマド内 口～胴部 上位1/2	口(10.2) 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横 ナデ。	内面に煤付着		
6	土師器 小型台付甕	カマド内 台部欠	口(12.4) 底 — 高 —	①微砂粒・角閃石微 粒子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横 ナデ。台部外面へラ削り、内面横ナデ。	内面胴部上位～口縁 にかけて煤付着		
7	須恵器 壺	+14cm 肩部破片	口 — 底 — 高 —	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。肩部に浅い沈線二条めぐり、間に列 点文。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全長	幅	厚さ	重量		
8	砥石	+10cm ほぼ完形	(13.5)	4.3	2.4	(199.9)	変質安山岩	素材は棒状の円礫。表裏・両側面に研磨面ある が、表・右側面の使用度高い。

F-36号住居跡 (PL20・108)

位置 Fo-66・67グリッド **主軸方位** N-2°-W **残存壁高** 0.58m **重複** F-33・35住に切られる。
規模と形状 長辺6.20m・短辺6.18mの正方形。住居主軸は磁北にはほぼ一致。周壁は大半が直進するが、東壁はやや内側に湾曲している。竈は無く、炉を持つ住居である。

床面 地山の褐色砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

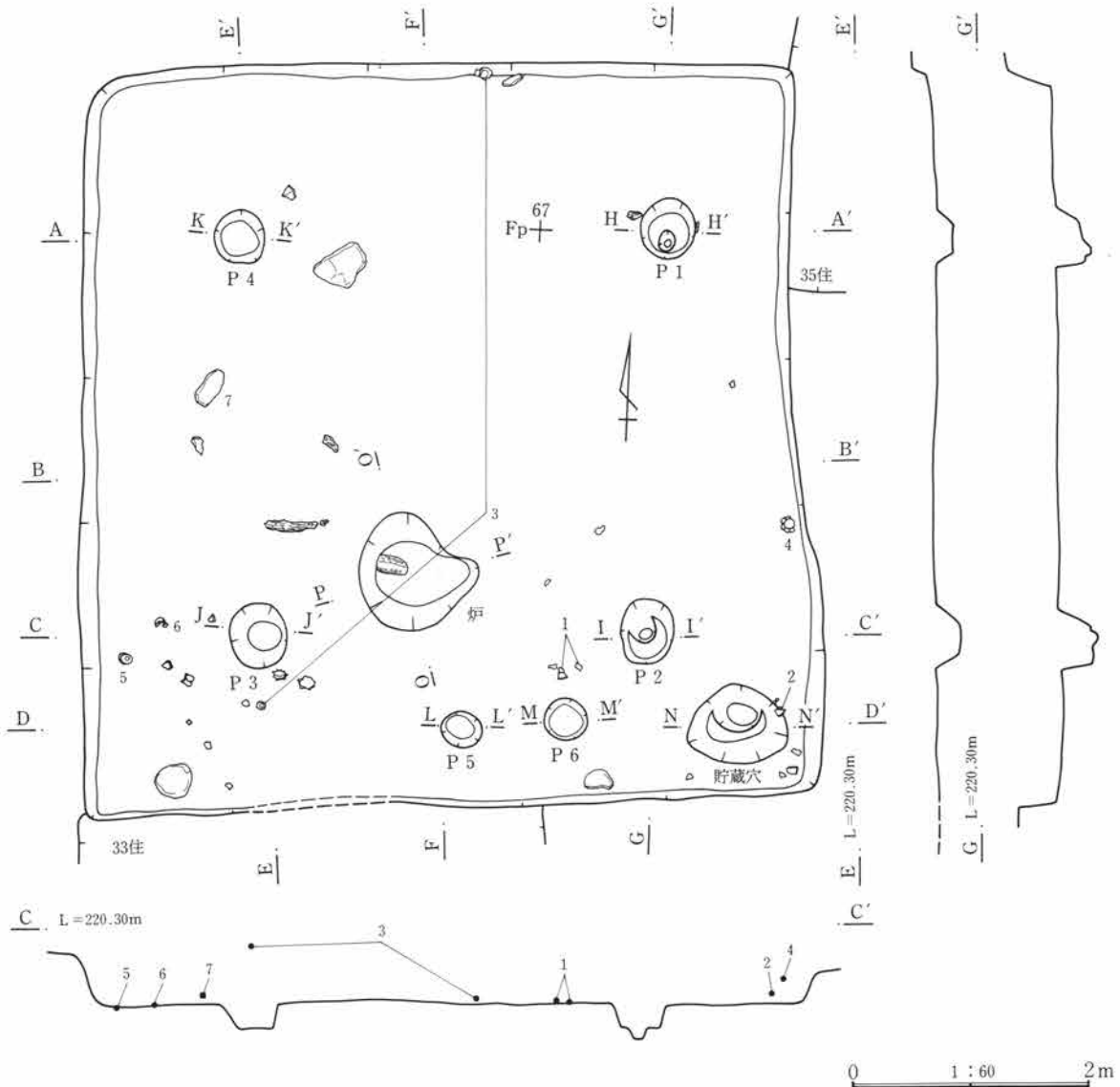
炉 住居南半で、埋め土中に多量の焼土・炭化物を含む浅い掘り込みを検出。炉と推測される。

貯蔵穴 住居南東隅に所在。 **周溝** なし。

柱穴 大きさ・深さともに類似した4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置し、支柱穴と考えられる。また、南壁際の中央よりもやや東側で、2基の小ピット検出。入り口施設にともなうものであろう。

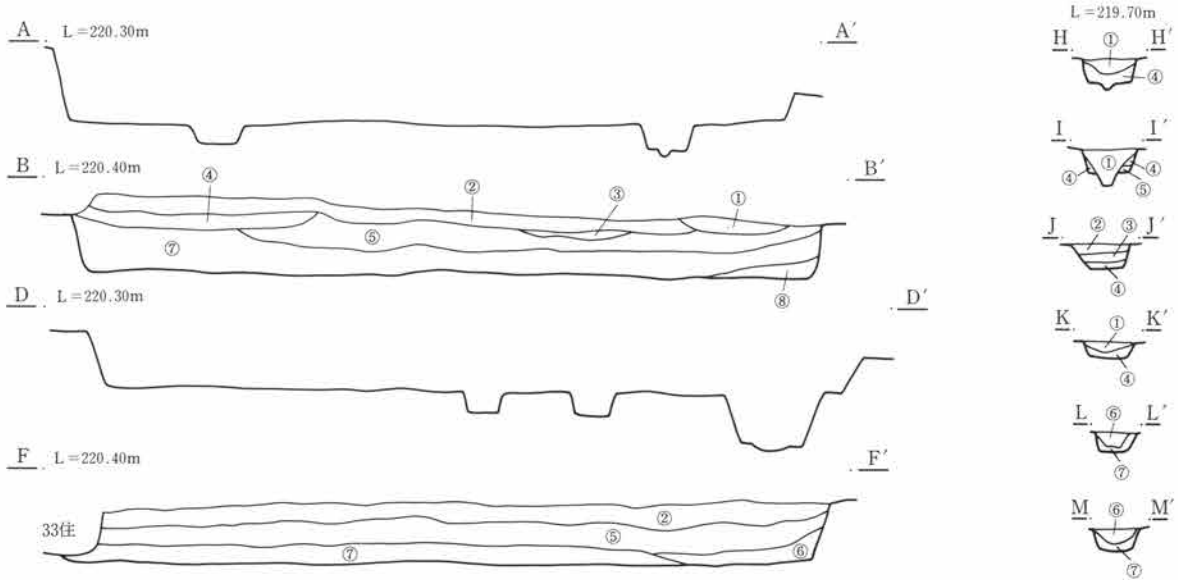
出土遺物 遺物量は非常に少ない。主に床面直上より出土している。器種は、土師器高坏(1~3)・埴(4~6)がある。他に円礫を素材とする大型の砥石(7)が出土している。 **掘り方** なし。

調査所見 住居形状と出土遺物より、古墳時代中期の住居と推定される。



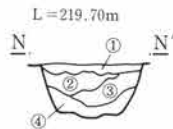
第142図 F-36号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



ベルトセクション

- 1 褐色土 小礫を含みしまり良。
- 2 暗褐色土 多量の小礫を含みしまり良。
- 3 暗褐色土 焼土粒を含みしまり良。
- 4 褐色土 小礫・褐色土ブロック含みしまり良。
- 5 暗褐色土 4層に似るが、色調暗い。
- 6 褐色土 少量の小礫含み、弱い粘性あり。
- 7 黒褐色土 多量の小礫含みしまり良。
- 8 褐色土 少量の小礫含み、弱い粘性あり。



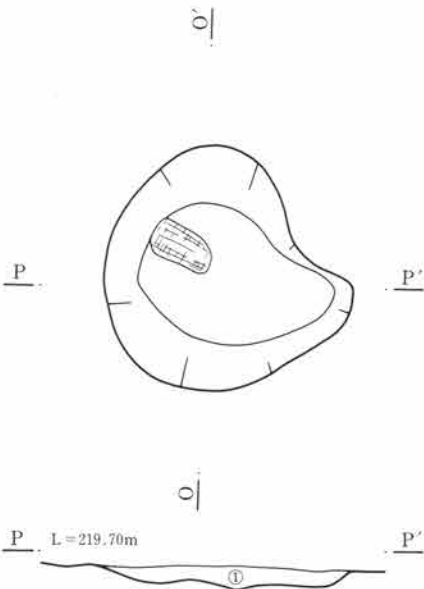
貯蔵穴セクション

- 1 黒色土 多量の小礫、少量の白・黄色粒、微細炭化物含む。
- 2 黒褐色土 若干の砂礫・微細炭化物含みしまり良。
- 3 黒褐色土 2層に比べ黄色味帯びる。砂質でややしまり悪い。
- 4 暗褐色土 基盤砂質土かなり含む。しまり悪くやわらかい。

ピットセクション

- 1 暗褐色土 小礫含みしまり良。
- 2 黒褐色土 小礫含み粘性持つ。
- 3 暗褐色土 小礫含み粘性持つ。
- 4 黄褐色土 砂質の土。
- 5 黄褐色土 粘性持つ。
- 6 黒色土 砂礫かなり含みやしまり悪い。白色粒若干混入。
- 7 黒褐色土 かなりの基盤砂質土含みしまり悪い。

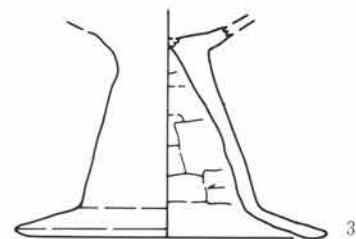
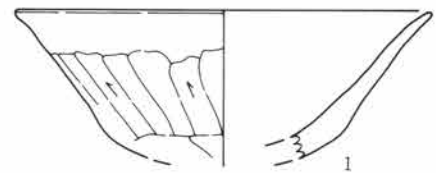
0 1:60 2m



戸セクション

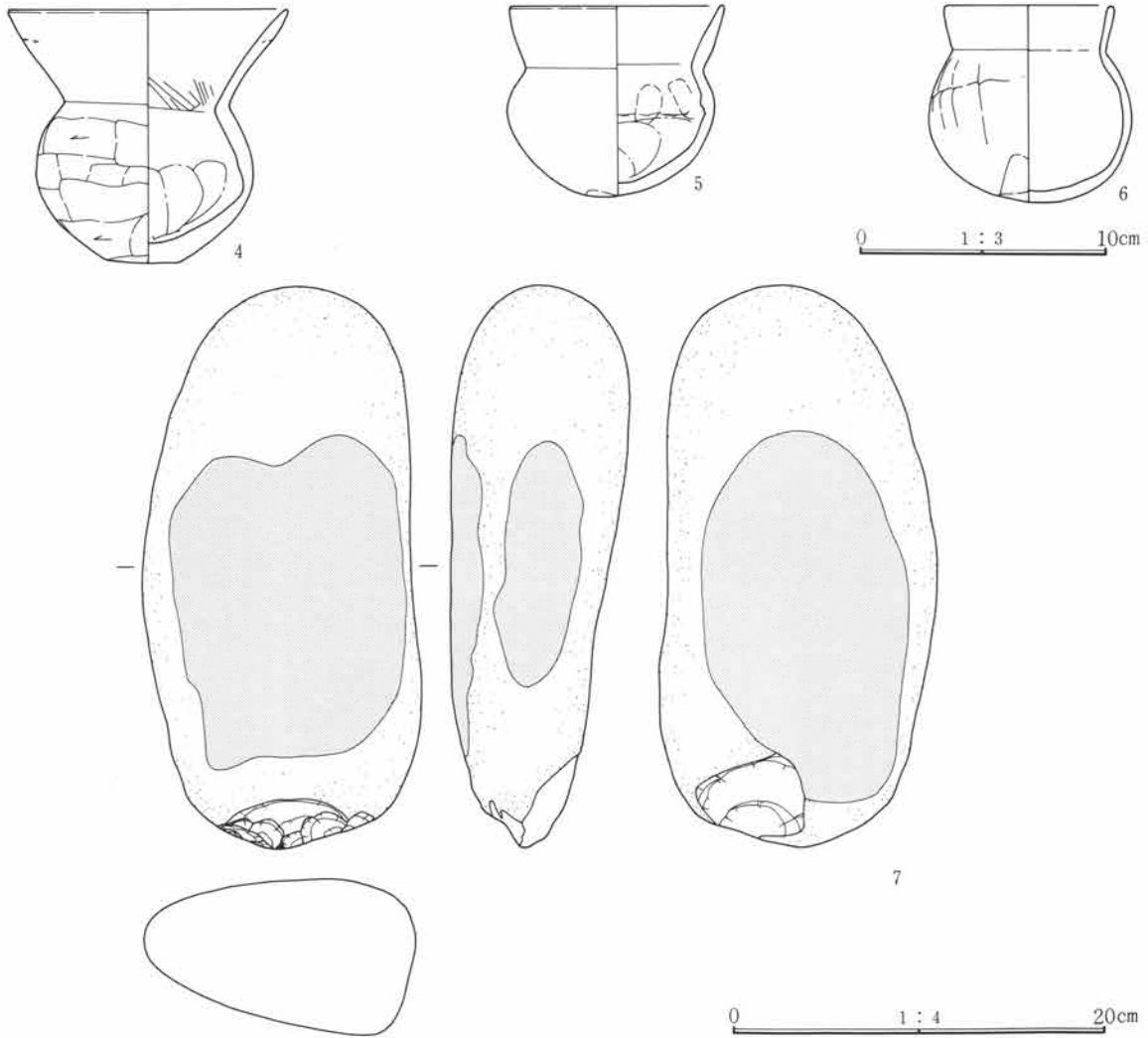
- 1 暗褐色土 多量の焼土粒・炭化物、少量の小礫含む。
- 2 暗褐色土 1層より焼土の混入多い。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第143図 F-36号住居跡②、出土遺物実測図①



第144図 F-36号住居出土遺物実測図②

F-36号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 高坏	+6cm 坏部 $\frac{1}{2}$	口(16.2) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③赤色	口縁部外面横ナデ、坏部外面へら削り、内面横ナデ。	
2	土師器 高坏	+9cm 坏部 $\frac{1}{5}$	口(16.6) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色	外面横ナデ、最下部はへら磨き。内面口縁端部横ナデ、以下へら削り後へら磨き。	
3	土師器 高坏	+2cm 脚部 $\frac{1}{5}$	口— 底(12.4) 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	脚部内外面へら削り。脚端部内外面横ナデ。脚端部は「く」の字状に屈曲。	
4	土師器 埴	床密着 完形	口 10.0 底 3.0 高 10.0	①細砂(ごくまれに小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、内面に刷毛目残る。胴部外面へら削り、内面ナデ。	
5	土師器 埴	床密着 完形	口 8.6 底— 高 7.5	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面ナデ。胴部内面上位に接合痕・指頭圧痕。	外面かなり摩滅
6	土師器 埴	床密着 $\frac{1}{3}$	口(6.6) 底— 高 7.8	①細砂含む ②やや堅緻 ③黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面ナデ。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
7	砥石	+5cm 完形	30.0	15.0	8.5	540.0	流紋岩	盤状の円礫を使用。表裏及び右側面に研磨面。下端をわずかに打ち欠いている。

F-37号住居跡 (PL20・108)

位置 Fn-68グリッド 主軸方位 N-103°-W 残存壁高 0.42m 重複 F-39住を切り、38住に切られる。

規模と形状 長辺4.44m・短辺4.59mのほぼ正方形。周壁はやや外反し、北西隅を除いて丸みを帯びる。竈ははじめ北側に築かれていたが、後に西側に移動。そのため住居主軸は西をさす。

床面 地山の細粒褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面形成。

竈 住居西壁の中央部に所在(竈No.1)。袖が住居内に作りつけられる。焚口幅53cm・燃烧部長73cm。煙道も一部残っているが、先端は重複する他の住居によって破壊されている。残存している長さは39cm。また北壁の中央には古い竈の煙道だけが残っていた(竈No.2)。煙道の長さは120cm。竈No.2の廃絶後にNo.1を構築している。貯蔵穴 住居北東隅に所在。短辺方向に長い楕円形。竈No.2にともなうものであろう。

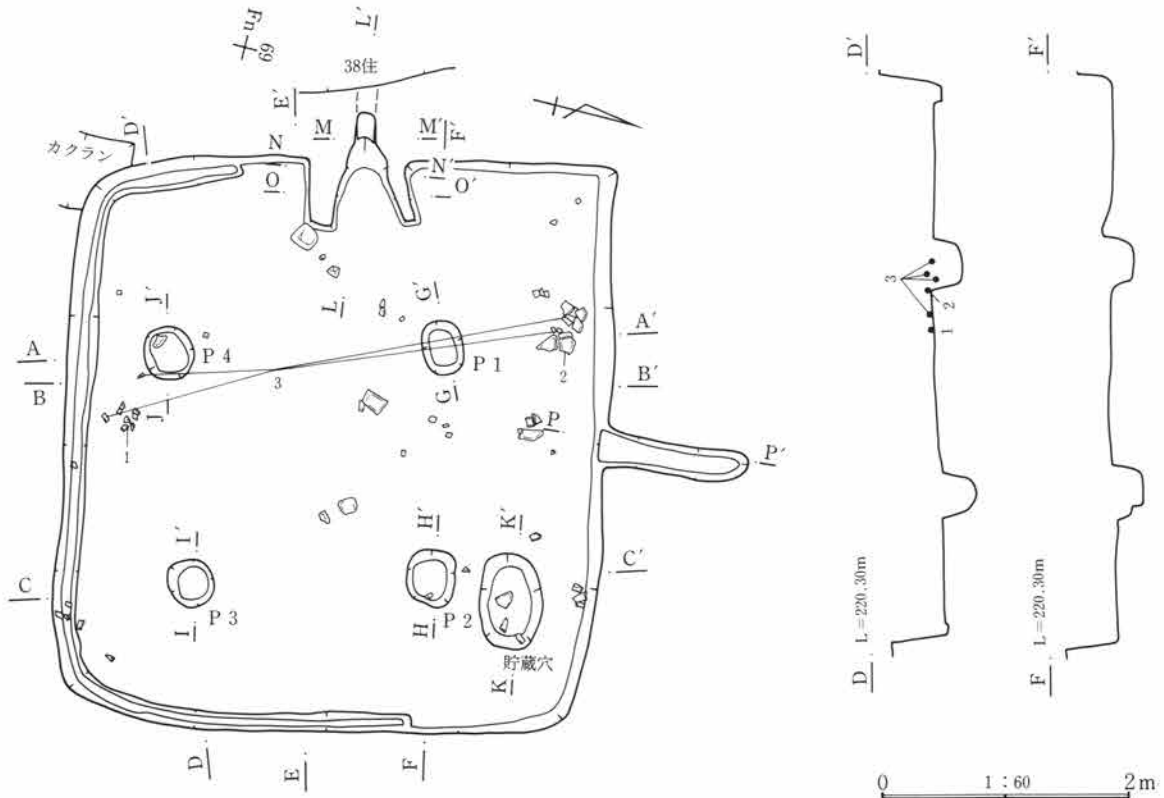
周溝 東壁の南側2/3から南壁を経て西壁の南側1/3までの範囲で検出。

柱穴 4基の小ピット検出。全体に南東方向にずれている。

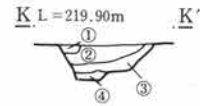
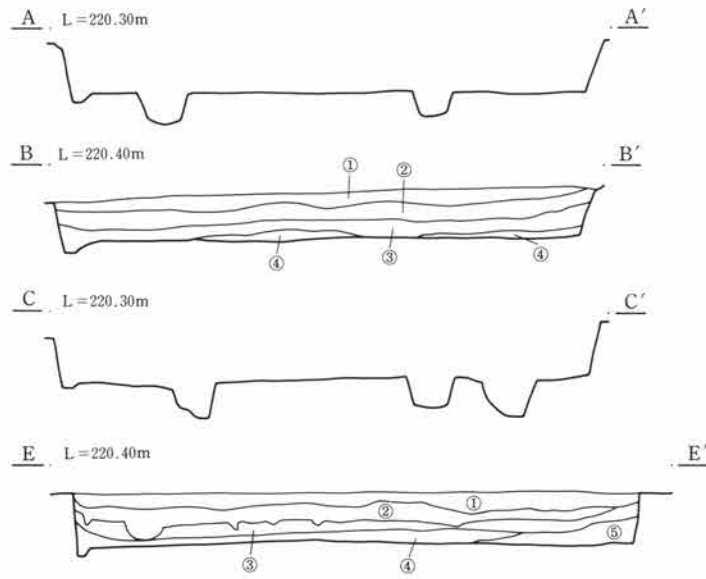
出土遺物 遺物量は少なく、住居内に散在。器種は土師器坏(1)・甕(2)・甑(3)などである。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定できる。



第145図 F-37号住居跡①



貯蔵穴セクション

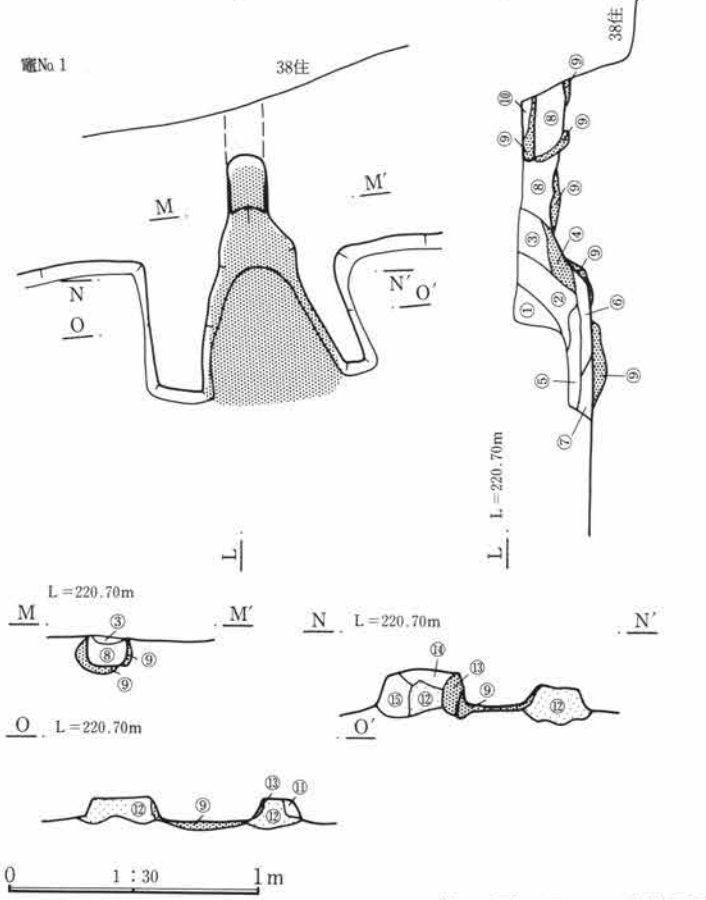
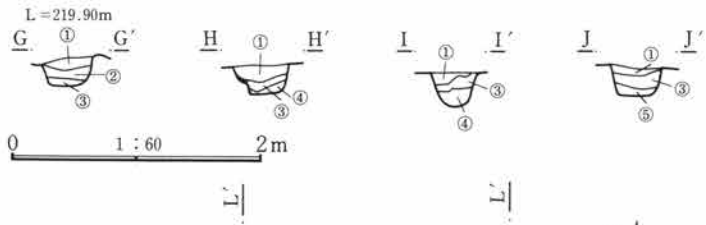
- 1 暗褐色土 多量の黄色粒・小礫含みしまり良。
- 2 褐色土 黄色粒・小礫含みしまり良。
- 3 暗褐色土 黄色粒・小礫含みしまり良。
- 4 暗褐色土 礫を含まず、黄色粒をわずかに含む。

ベルトセクション

- 1 暗褐色土 小礫を含みしまり良。
- 2 暗褐色土 1層よりも小礫の混入多い。
- 3 黒褐色土 少量の焼土・炭化物含む。
- 4 褐色土 小礫の混入少なく、細粒。
- 5 褐色土 若干の焼土・黄褐色ローム含む。

ピットセクション

- 1 褐色土 黄色粒・小礫含みしまり良。
- 2 褐色土 黄色粒・小礫・焼土粒わずかに含みしまり良。
- 3 暗褐色土 黄色粒・小礫含みしまり良。
- 4 暗褐色土 礫を含まず、黄色粒をわずかに含む。
- 5 褐色土 多量の小礫含む。

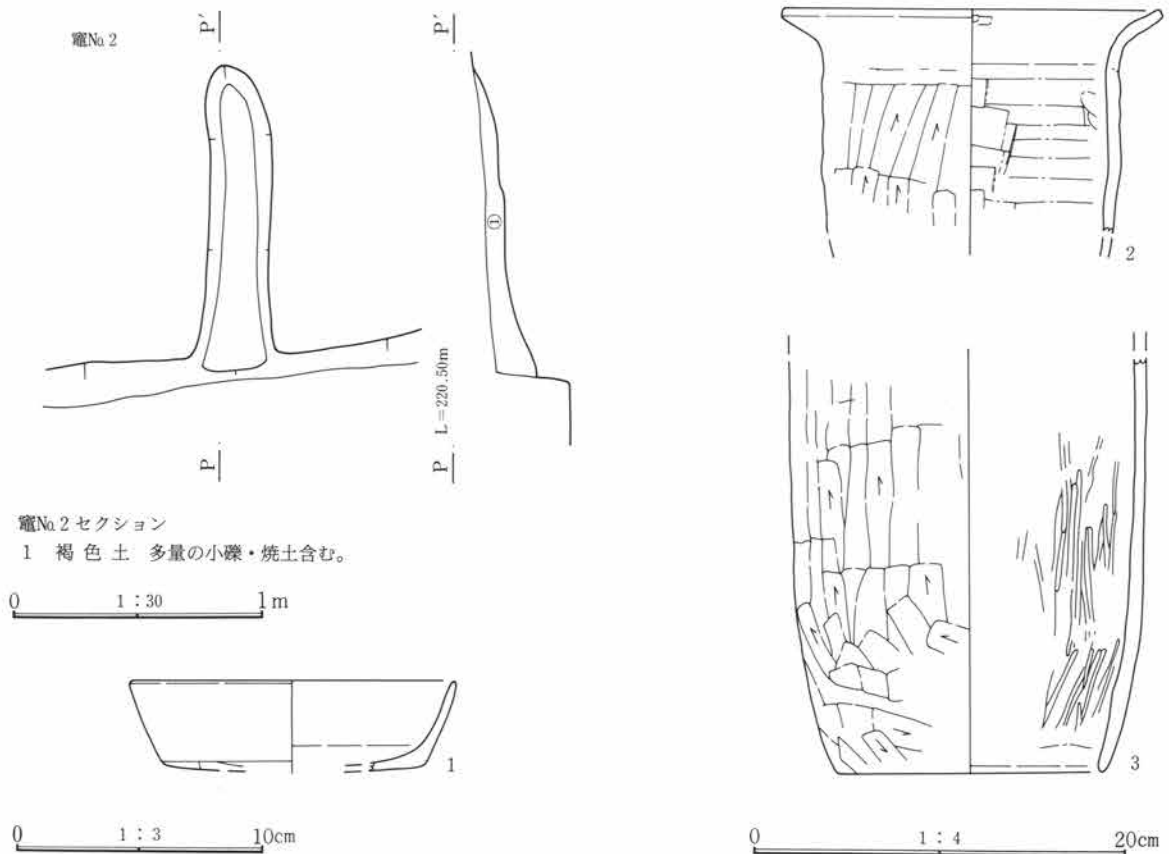


竈No.1セクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含みしまり良。
- 2 暗褐色土 1層よりも小礫の混入少なくしまり良。わずかの焼土混入。
- 3 暗褐色土 少量の白・黄色粒、小礫、焼土含みしまり良。
- 4 暗赤褐色土 焼土をかなり含み粘性持つ。
- 5 褐色土 少量の白・黄色粒、小礫、焼土粒、黄褐色土含む。
- 6 暗褐色土 少量の小礫・焼土粒含み粘性持つ。
- 7 褐色土 かなりの焼土、少量の小礫含みしまり良。
- 8 暗褐色土 少量の砂礫・焼土含みしまりやや悪い。若干の微細炭化物混入。
- 9 暗赤褐色土 砂質でややしまりの悪い焼土層。
- 10 暗褐色土 若干の砂礫含みしまり良。焼土わずかに混入。
- 11 暗褐色土 若干の砂礫・焼土・炭化物・黄褐色粘土を含みしまりやや良。ごく弱い粘性あり。
- 12 黄褐色土 若干の砂礫含みしまり良。かなりの焼土混入。
- 13 赤褐色土 熱により焼土化した部分。若干の砂礫含みしまり良。
- 14 褐色土 少量の砂礫・黄色粒含みしまりやや良。焼土わずかに混入。
- 15 暗褐色土 若干の砂礫含みしまり良。

第146図 F-37号住居跡②

第3章 検出された遺構と遺物



第147図 F-37号住居竈No.2、出土遺物実測図

F-37号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/2	口(12.8) 底— 高—	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
2	土師器 甕	+6cm 口～胴部 上位	口(19.9) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、内面一部ヘラ削り、外面に 接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	
3	土師器 甕	床密着 胴下半～ 底部1/4	口— 底(14.0) 高—	①砂礫含む ②良好 ③淡黄色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ後縦方向のヘラ磨 き。	

F-38号住居跡 (PL20・108・109)

位置 Fm・Fn-69グリッド 主軸方位 N-75°-E 残存壁高 0.68m 重複 F-37・39住を切る。

規模と形状 長辺5.23m・短辺5.22mの正方形。住居主軸は東側を指す。東壁の竈南側がかなり外反し外側に膨らみ、線形に乱れがみられる。竈は東側に築かれる。

床面 地山黄色シルト質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居東壁の中央よりやや北側に所在。袖が住居内に作りつけられる形態を呈す。焚口幅50cm・燃烧部長49cm。左袖の先端燃烧部側には、板状の砂岩が袖石として据え付けられている。くりぬき式の煙道も天井が崩落せずに残存している。煙道長102cm。

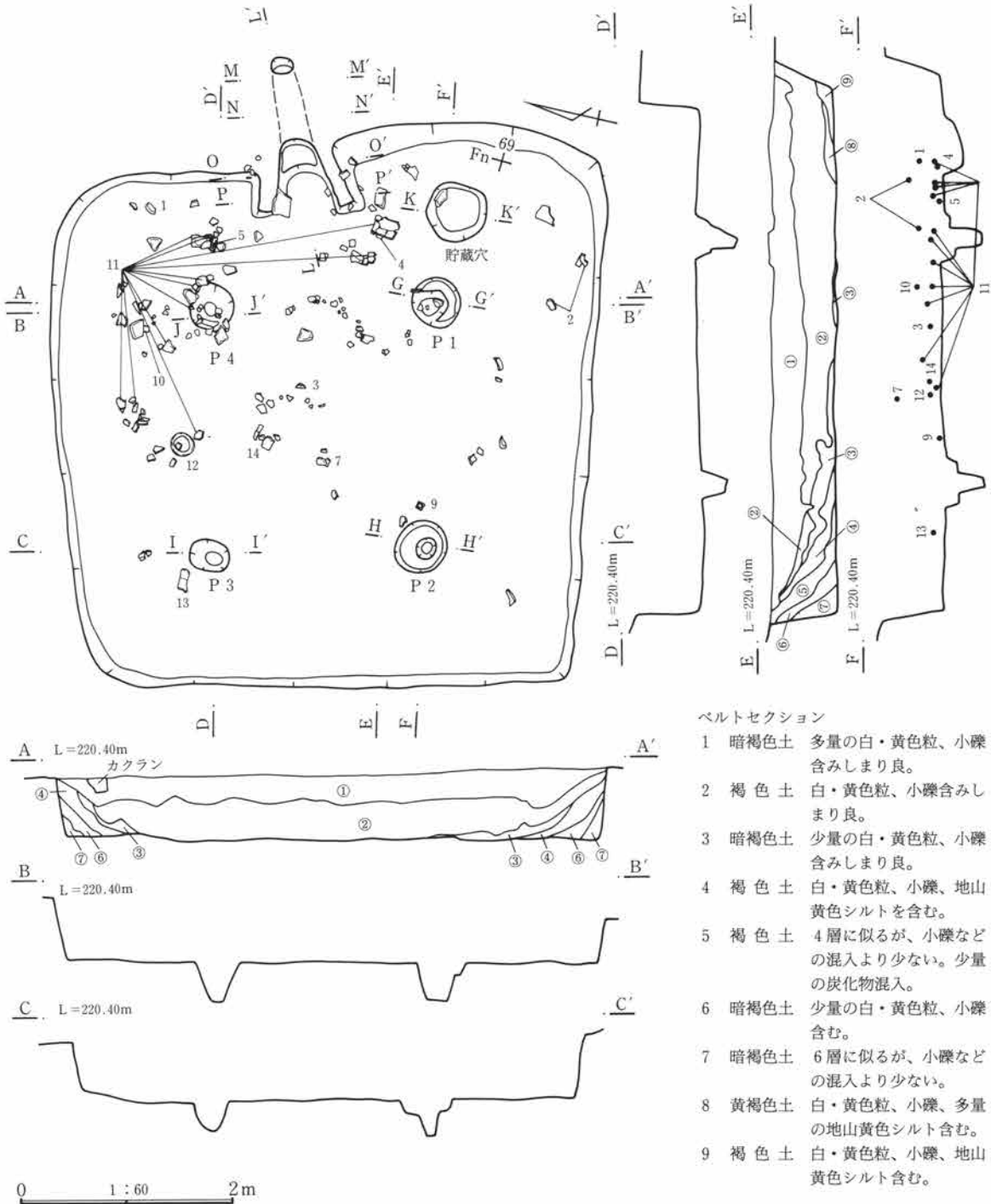
貯蔵穴 竈脇の、住居南東隅近くに所在。ほぼ円形。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置する。

出土遺物 遺物量はやや多い。住居の東半にやや集中する傾向がみられる。器種は、土師器杯(1~4)・皿(5・6)・高坏(8・9)・小型甕(10)・甕(11~14)、須恵器高坏(7)などがある。

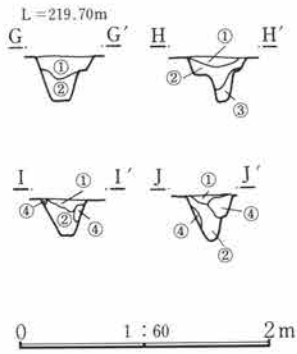
掘り方 なし。

調査所見 住居・竈形状と出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。

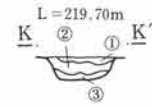


第148図 F-38号住居跡①

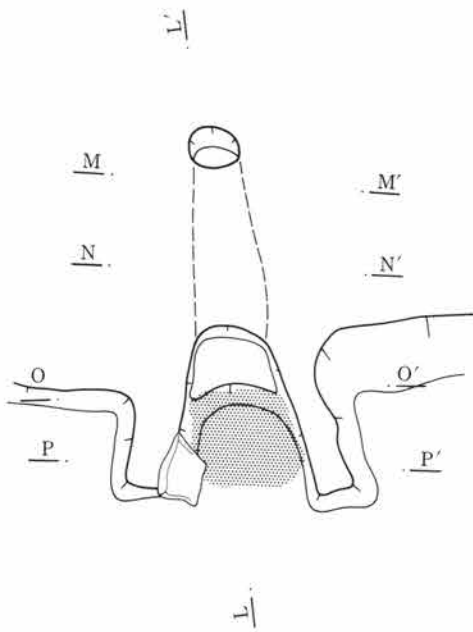
第3章 検出された遺構と遺物



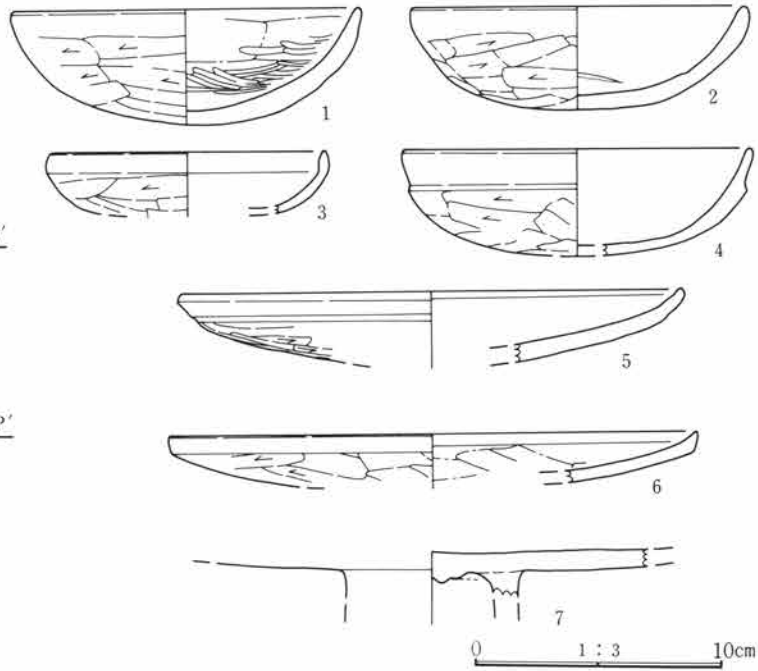
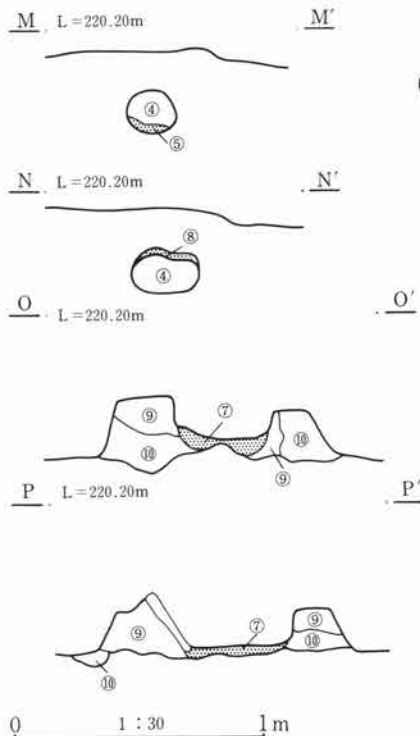
- ピットセクション
- 1 黒褐色土 少量の砂礫、わずかの微細炭化物含む。
 - 2 暗褐色土 粘質土塊を斑状に含む。若干の微細炭化物混入。
 - 3 暗褐色土 地山黄色シルトブロックを若干含む。弱い粘性あり。
 - 4 暗褐色土 比較的均質でしまり良く、弱い粘性持つ。微細炭化物わずかに含む。



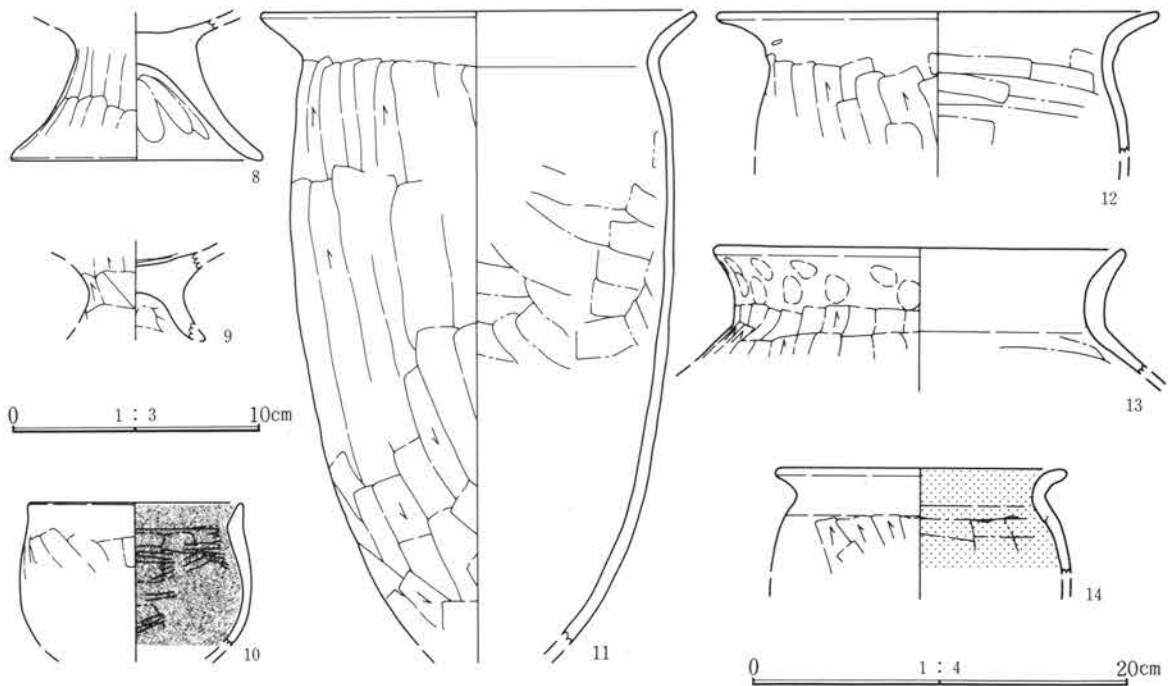
- 貯蔵穴セクション
- 1 黒褐色土 砂礫かなり含み硬くしまる。
 - 2 黒褐色土 少量の砂礫、わずかの微細炭化物含む。
 - 3 暗褐色土 地山黄色シルトブロック少量含み、しまり良く弱い粘性あり。



- 竈セクション
- 1 暗褐色土 少量の小礫、若干の焼土・微細炭化物含む。
 - 2 黒褐色土 少量の焼土・微細炭化物含み比較的均質。
 - 3 暗赤褐色土 かなりの焼土、少量の炭化物含む。比較的均質。
 - 4 暗褐色土 少量の砂礫・焼土含みややしまり悪い。
 - 5 暗赤褐色土 少量の砂礫含む焼土層。ややしまり悪い。
 - 6 黒褐色土 かなりの砂礫含みややしまり悪い。若干の焼土混入。
 - 7 暗赤褐色土 若干の砂礫含む焼土層。ややしまり悪い。
 - 8 暗赤褐色土 地山の砂礫混じり黒褐色土が熱を受けて焼土化した部分。
 - 9 暗褐色土 かなりの焼土、若干の砂礫・炭化物含みしまりやや良。
 - 10 暗褐色土 黄灰色粘質土ブロック・焼土・炭化物をわずかに含む。



第149図 F-38号住居跡②、出土遺物実測図①



第150図 F-38号住居出土遺物実測図②

F-38号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+17cm 3/5	口(13.8) 底— 高 4.5	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
2	土師器 坏	+23cm 3/5	口 13.2 底— 高 4.0	①細砂含む ②良好 ③明褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ後横ナデ。内面にヘラ状工具のあたり。	
3	土師器 坏	+7cm 1/5	口(10.9) 底— 高—	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。口縁端部は内湾する。	
4	土師器 坏	+4cm 1/4	口(13.8) 底— 高—	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
5	土師器 皿	床密着 1/5	口(20.0) 底— 高—	①微砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②良好 ③褐色	口縁部外面横ナデ、沈線一条めぐる。体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。口唇部は短く直立。	
6	土師器 皿	覆土 1/6	口(21.0) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ナデ口唇部は短く直立。	
7	須恵器 高坏	+39cm 底部1/3	口— 底— 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。皿部内面ナデ、底部ヘラ削り。脚部貼り付け。	
8	土師器 高坏	覆土 脚部1/3	口— 底(10.0) 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	脚端部内外面横ナデ。外面ヘラ削り、内面ナデ。	
9	土師器 高坏	+2cm 脚上部1/3	口— 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	坏部内面ヘラ磨き。脚部外面ヘラ削り、内面ナデ	
10	土師器 小型甕	+19cm 口~胴部 上位1/3	口(11.0) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ後ヘラ磨き。	内面黒色処理

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
11	土師器 甕	床密着 口～胴部	口 22.9 底 — 高 —	①砂粒(まれに小礫 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横 ナデ。	
12	土師器 甕	+8cm 口～胴部 上位	口 23.1 底 — 高 —	①砂粒・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横 ナデ。	
13	土師器 甕	+7cm 口～胴部 上位 $\frac{1}{4}$	口 21.4 底 — 高 —	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面 へラ削り、内面横ナデ。	
14	土師器 小型甕	+10cm 口縁破片	口(14.3) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面へ ラナデ、接合痕有り。	内面に弱い煤付着

F-40号住居跡 (PL20・21・109)

位置 Fn・Fo-71グリッド 主軸方位 N-12°-W 残存壁高 0.40m 重複 なし

規模と形状 長辺4.35m・短辺3.03mの横長の長方形。東壁に比べ、西壁がわずかに長い。周壁は直進し、崩落などによる線形の乱れはみられない。竈は北側に築かれる。

床面 地山砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

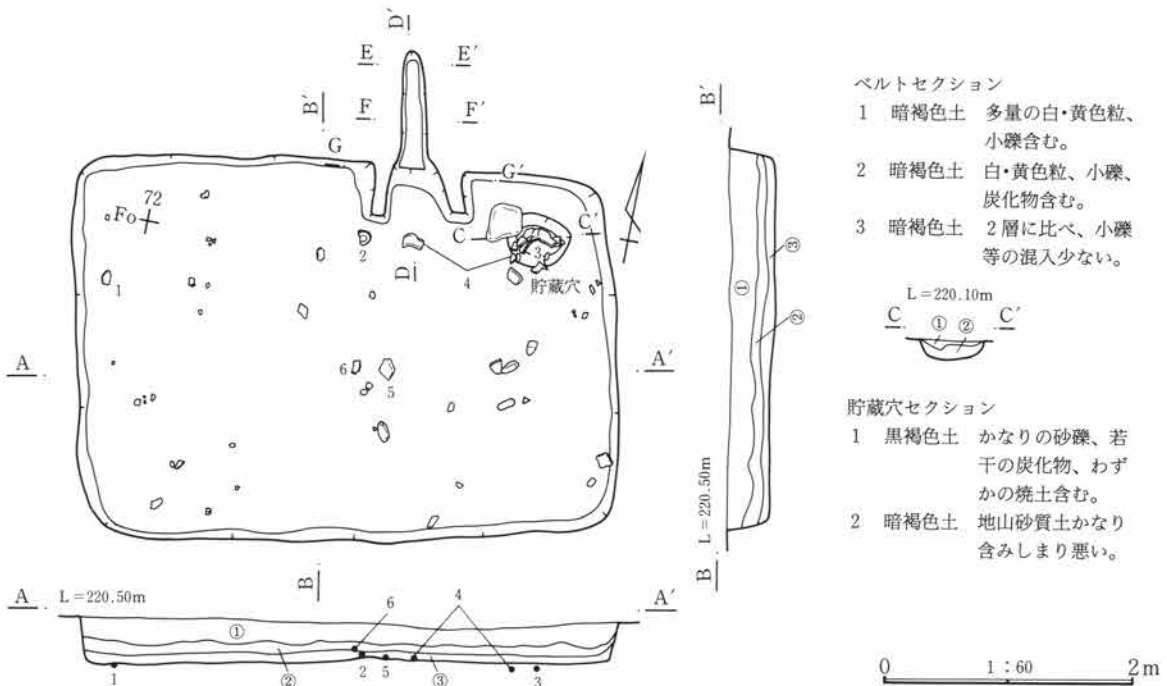
竈 住居北壁の中央よりも東よりに所在。袖が住居内に作り出される形状を呈する。焚口幅50cm・燃焼部長43cm。煙道は上半を削平されているが、下底部は残存する。煙道部長91cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。周溝 なし。柱穴 なし。

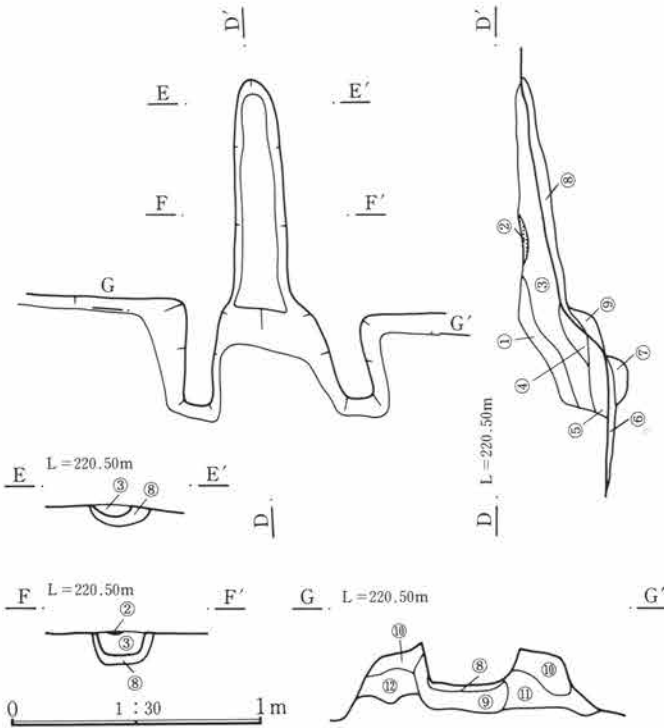
出土遺物 遺物量はあまり多くない。大半は床面から若干上の高さで出土している。器種は土師器坏(1)・甕(3・4)、須恵器坏(2)・甕(5・6)がある。

掘り方 なし。

調査所見 住居形状・出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。

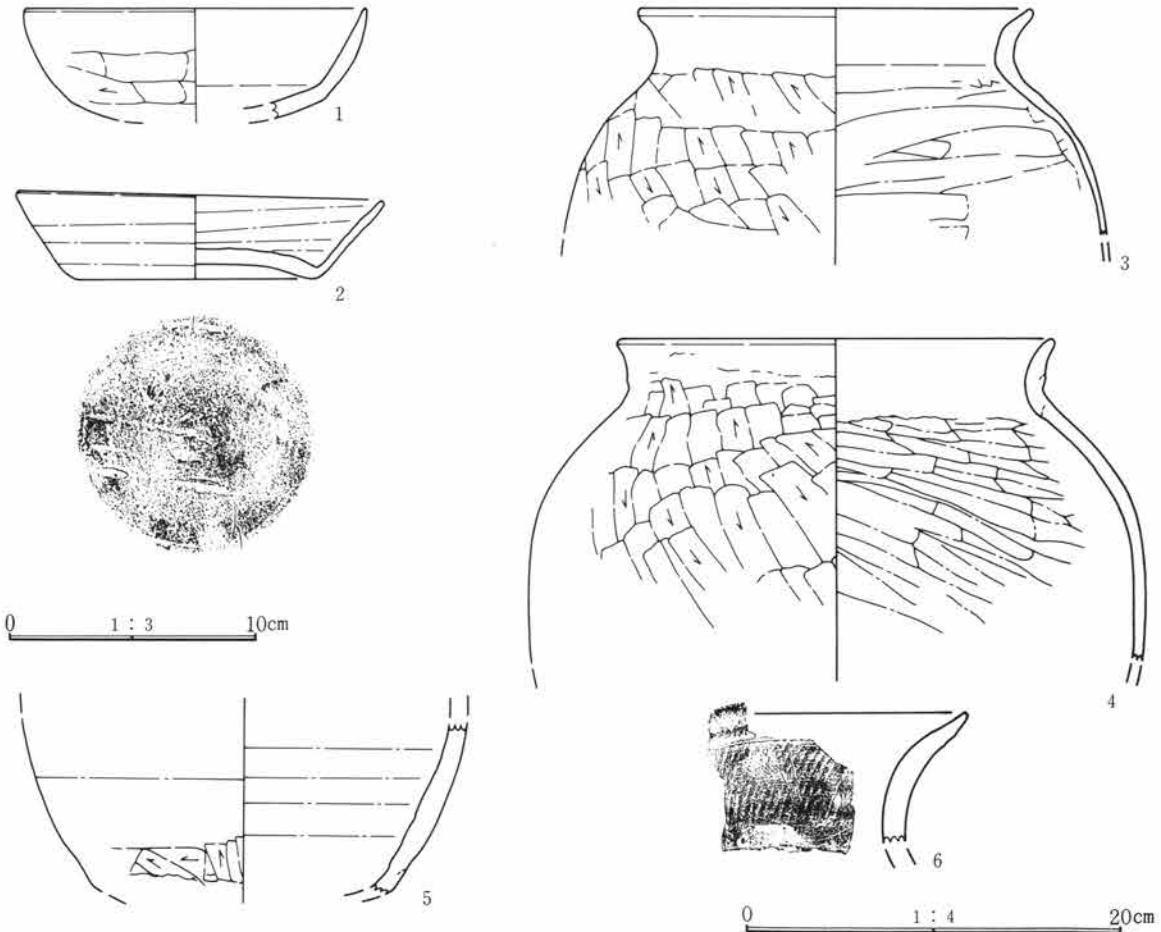


第151図 F-40号住居跡



竈セクション

- 1 褐色土 小礫・焼土をわずかに含みし
まり良。
- 2 赤褐色土 焼土層。煙道天井の崩落部分。
- 3 褐色土 小礫・黄褐色粘土ブロックを
含む。
- 4 褐色土 焼土・黄褐色粘土ブロックを
含み粘性持つ。
- 5 褐色土 焼土・黄褐色粘土ブロックを
含む細粒の土。
- 6 暗褐色土 多量の焼土・炭化物含む。細
粒で弱い粘性あり。
- 7 暗褐色土 少量の白色粒・焼土・炭化物
含みしまり良。
- 8 暗褐色土 多量の小礫含む。白・黄色粒、
焼土粒わずかに混入。
- 9 褐色土 多量の砂礫含み硬くしまる。
かなりの焼土混入。
- 10 暗褐色土 かなりの砂礫含み硬くしまる。
若干の焼土ブロック、少量の
炭化物混入。
- 11 暗褐色土 10層に比べ、砂礫・焼土の混
入少ない。褐色粘質土塊少量
含む。
- 12 褐色土 少量の焼土・炭化物・黄色土
粒混入。しまり良。



第152図 F-40号住居竈、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

F-40号住居出土遺物観察表

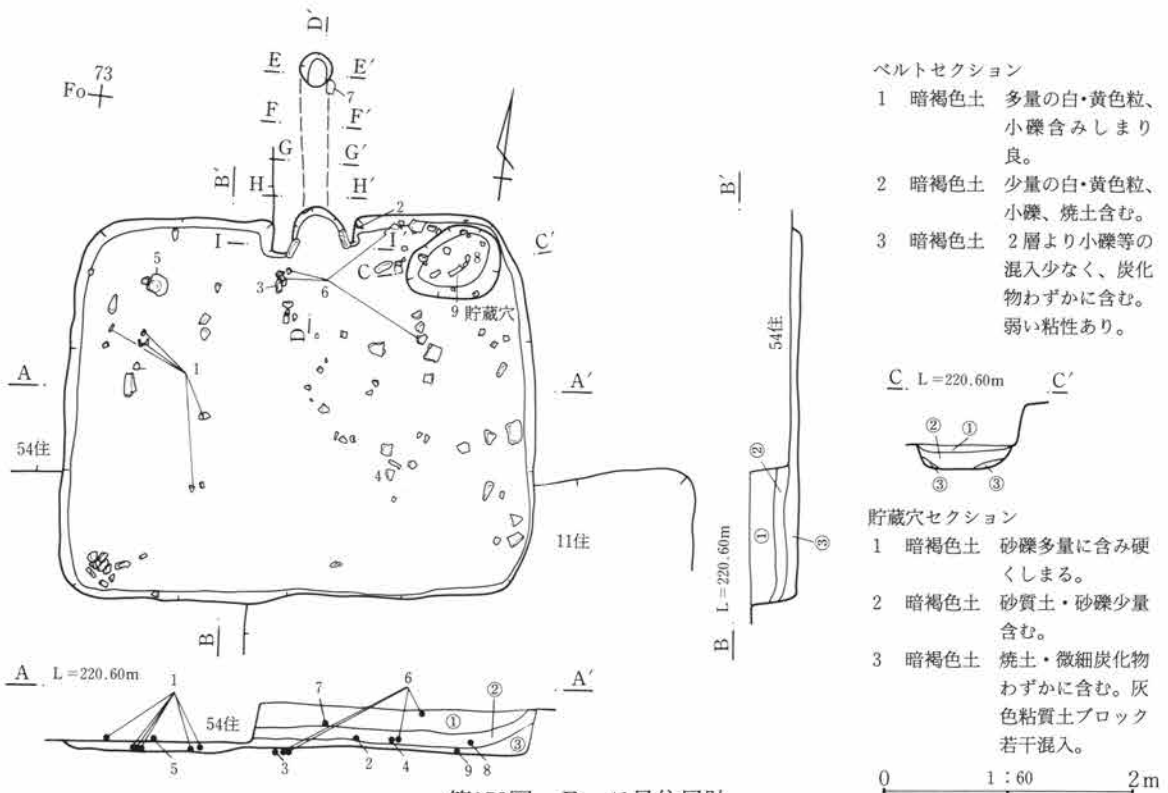
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/2	口(13.5) 底(10.2) 高—	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面 横ナデ。	
2	須恵器 坏	+13cm 2/3	口 14.5 底 9.1 高 3.5	①細砂含む ②堅緻 ③黄灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。	
3	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位1/2	口(20.7) 底— 高—	①砂粒・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	
4	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位1/4	口(23.2) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、接合痕有り。胴部外面ヘラ 削り、内面横ナデ。	
5	須恵器 甕	+5cm 胴下位破 片	口— 底— 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。外面胴部下位ヘラ削り、接合痕有り 貼り付け高台部が剥落している。	
6	須恵器 甕	+11cm 口縁破片	口— 底— 高—	①細砂含む ②堅緻 ③暗赤灰色	ロクロ整形。口縁部外面に刷毛目状の調整痕。	

F-41号住居跡 (PL21・109・110)

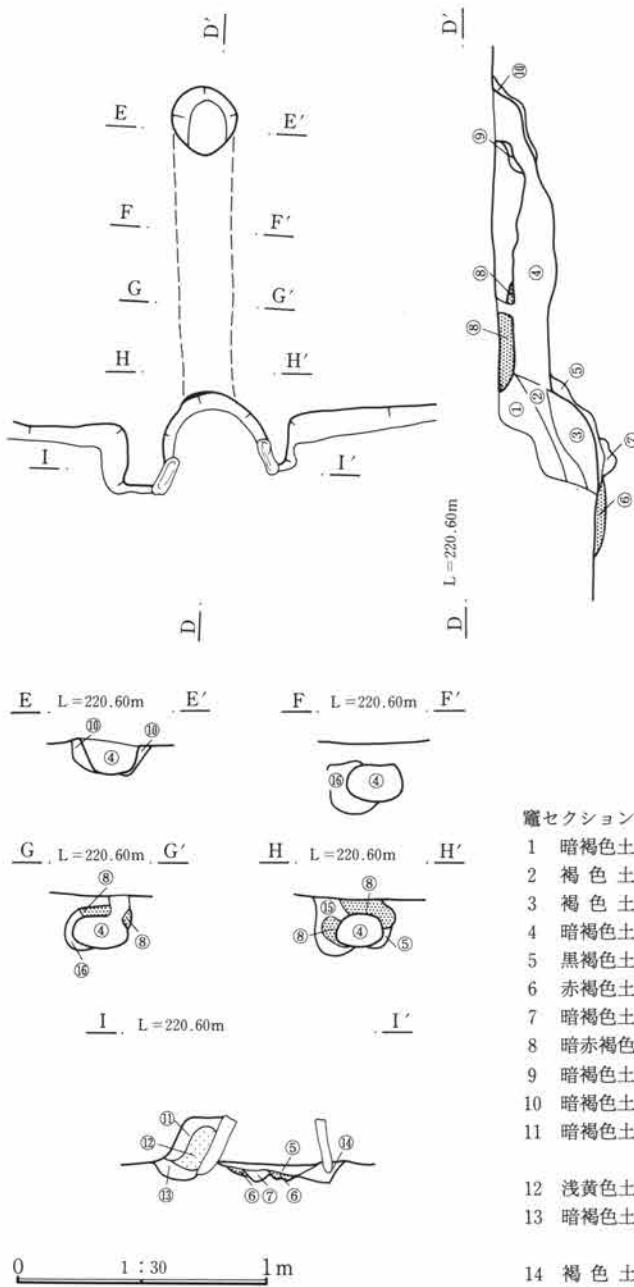
位置 Fn-72グリッド 主軸方位 N-4°-W 残存壁高 0.41m 重複 F-11・54住に切られる。

規模と形状 長辺3.82m・短辺3.03mの横長の長方形。北西および南東隅を他の住居によって切られているが、いずれも掘り込みが住居床面まで達していなかったため住居全域が確認できた。壁はほぼ直進し、線形の乱れはみられない。住居主軸はほぼ北方向に一致する。

床面 地山砂礫層を掘り込んで平坦な床面形成。



第153図 F-41号住居跡



竈 住居北壁のほぼ中央に所在。短い袖が住居内に作り付けられるが、燃烧部は住居域外に若干張り出す。焚口幅42cm・燃烧部長36cm。両袖の先端燃烧部側には、板状の砂岩が袖石として据えられている。煙道も天井が崩落せずに残存している。煙道部長122cm。くりぬき式の煙道である。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。

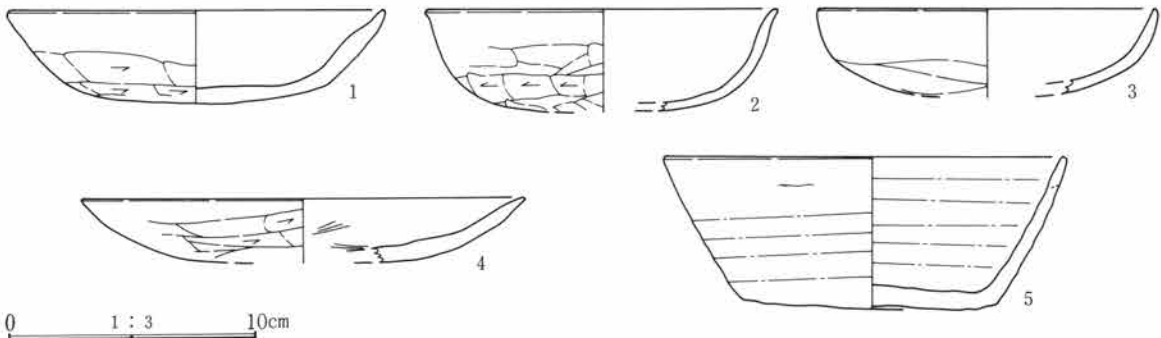
周溝 なし。 **柱穴** なし。

出土遺物 比較的多くの遺物が住居内に散在して出土。器種は、土師器坏(1~3)・皿(4)・小型甕(6)・甕(7)・小型台付甕(8・9)、須恵器坏(5)などがある。また、覆土中より鉄鏝が1点(10)出土。 **掘り方** なし。

調査所見 住居形状・出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。

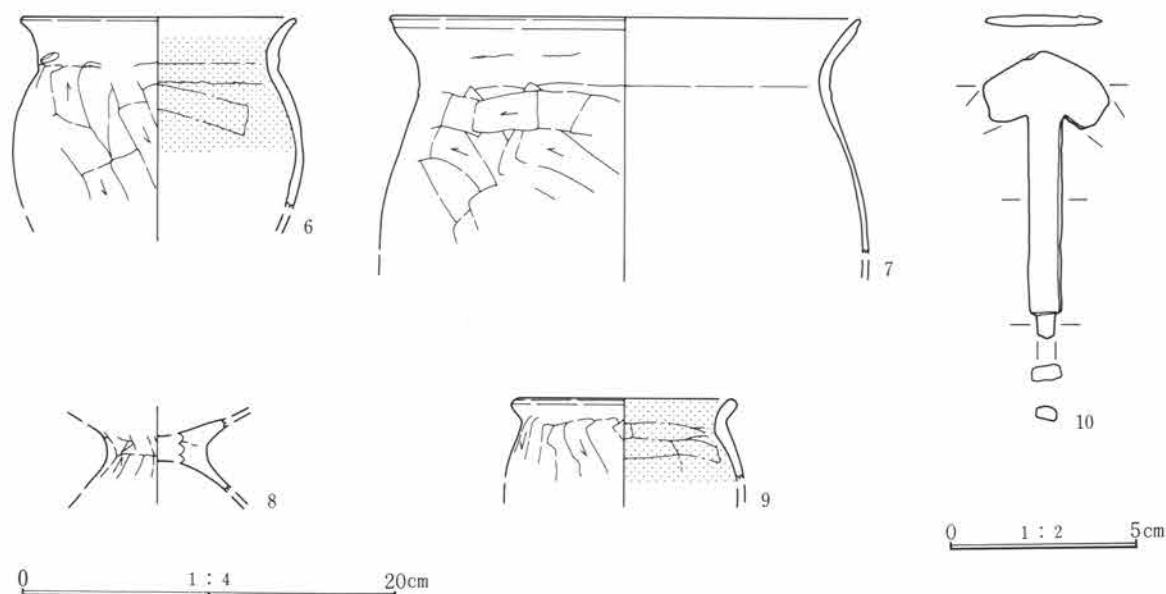
竈セクション

- 1 暗褐色土 黄色粒・小礫わずかに含む。
- 2 褐色土 1層に比べ黄色粒・小礫の混入少ない。しまり良。
- 3 褐色土 炭化物・黄色粒含み粘性持つ。
- 4 暗褐色土 砂礫かなり含む。若干の焼土および少量の炭化物混入。
- 5 黒褐色土 焼土・微細炭化物を若干含む。比較的均質でややわらかい。
- 6 赤褐色土 砂礫かなり含み硬くしまった焼土層。
- 7 暗褐色土 少量の焼土・炭化物含む。しまりやや良。
- 8 暗赤褐色土 焼土を主体とする。砂礫多量に混入。
- 9 暗褐色土 少量の焼土含む。細粒・均質でしまり悪い。
- 10 暗褐色土 多量の砂礫含みしまり良。焼土・炭化物混入。
- 11 暗褐色土 多量の砂礫含みややしまり悪い。若干の白色粒・微細炭化物混入。
- 12 浅黄色土 弱い粘性持ししまり良。若干の炭化物・ローム混入。
- 13 暗褐色土 少量の焼土含む。粘質土と砂質土のブロック状を呈する。
- 14 褐色土 少量の焼土・微細炭化物含む。
- 15 暗褐色土 多量の砂礫含みしまり良。若干の焼土・炭化物混入。
- 16 暗褐色土 少量の砂礫・焼土含む。



第154図 F-41号住居竈、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第155図 F-41号住居出土遺物実測図②

F-41号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 1/5	口 14.7 底 10.5 高 3.6	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。			
2	土師器 坏	+8cm 1/5	口(13.8) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。口縁端部がわずかに外反。			
3	土師器 坏	床密着 3/5	口(13.2) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。			
4	土師器 皿	+3cm 1/5	口(17.5) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ後へラ磨き。口縁端部わずかに外反。			
5	須恵器 坏	+2cm 1/5	口 15.7 底 9.9 高 6.0	①細砂・黒色微粒子 含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転へラ切り後一部ナデ。			
6	土師器 小型甕	床密着 口～胴部 上半	口(14.3) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。内面に接合痕。	内面胴部上位に煤付着		
7	土師器 甕	カマド煙 道内 口 ～胴上位	口(24.9) 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。全体に器肉薄い。			
8	土師器 小型台付甕	+8cm 台部1/5	口 — 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	台部外面へラ削り、内面ナデ。			
9	土師器 小型台付甕	貯蔵穴内 口～胴部 上位1/5	口(10.2) 底 — 高 —	①微砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②良 好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	内面に煤付着		
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
10	鉄鉄	覆土	(7.6)	(3.4)	0.4	(9.0)	一部欠損	先端は鈍角で端部薄い。基部は長くなかごがつく。左右のかえしとなかごの先端欠損。

F-42号住居跡 (PL21・110)

位置 Fm・Fn-74グリッド 主軸方位 N-5°-W 残存壁高 0.50m

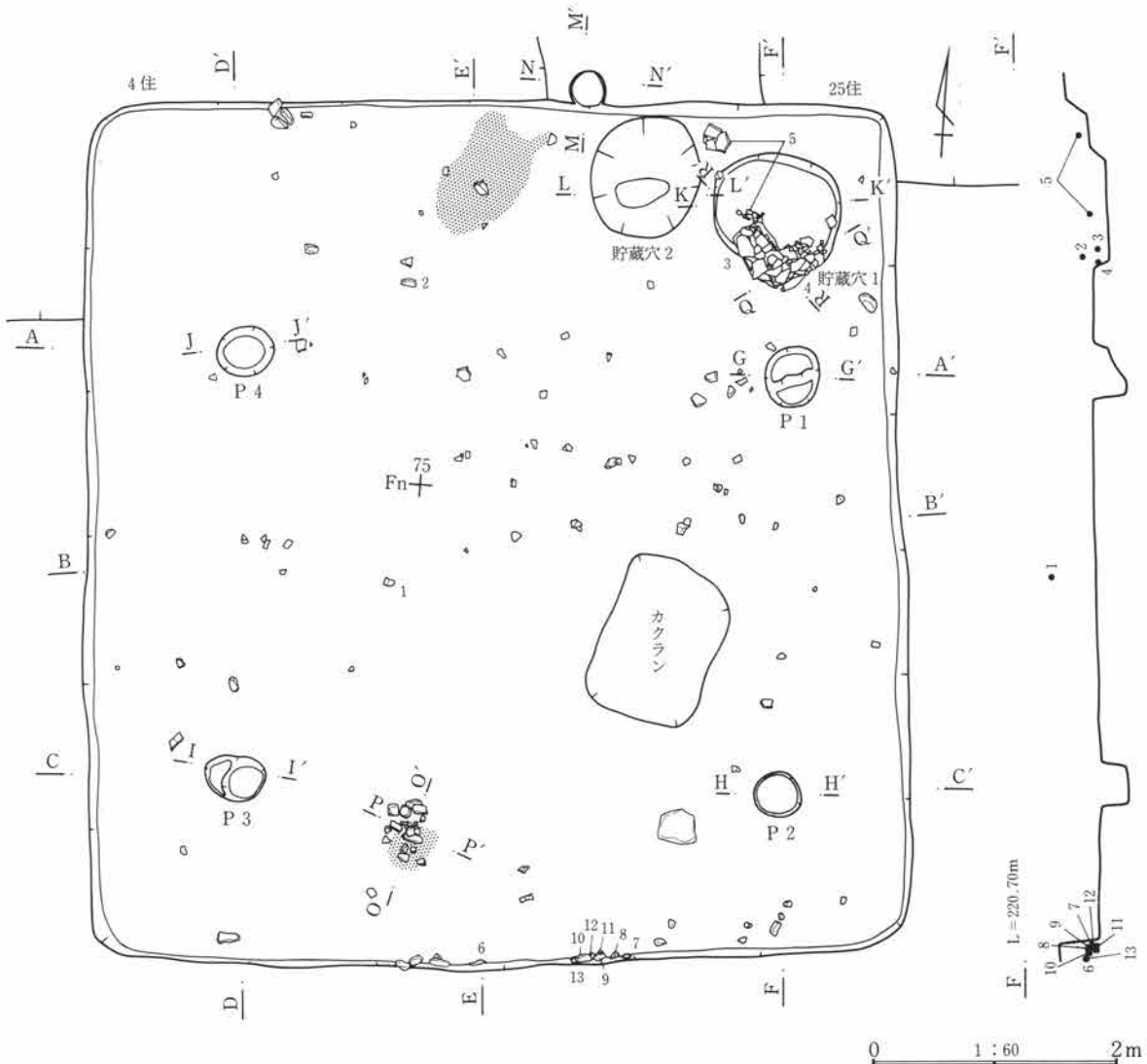
重複 F-4・25住に切られる。

規模と形状 長辺6.84m・短辺7.18mとやや縦方向に長いが、平面形状はほぼ正方形。住居主軸わずかに西にふれる。周壁は直進し線形の乱れ少ない。竈は北側に築かれていたが、重複する住居によって破壊される。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床・硬質部分などはみられない。南壁近くに床面が一部焼土化した部分が検出された。

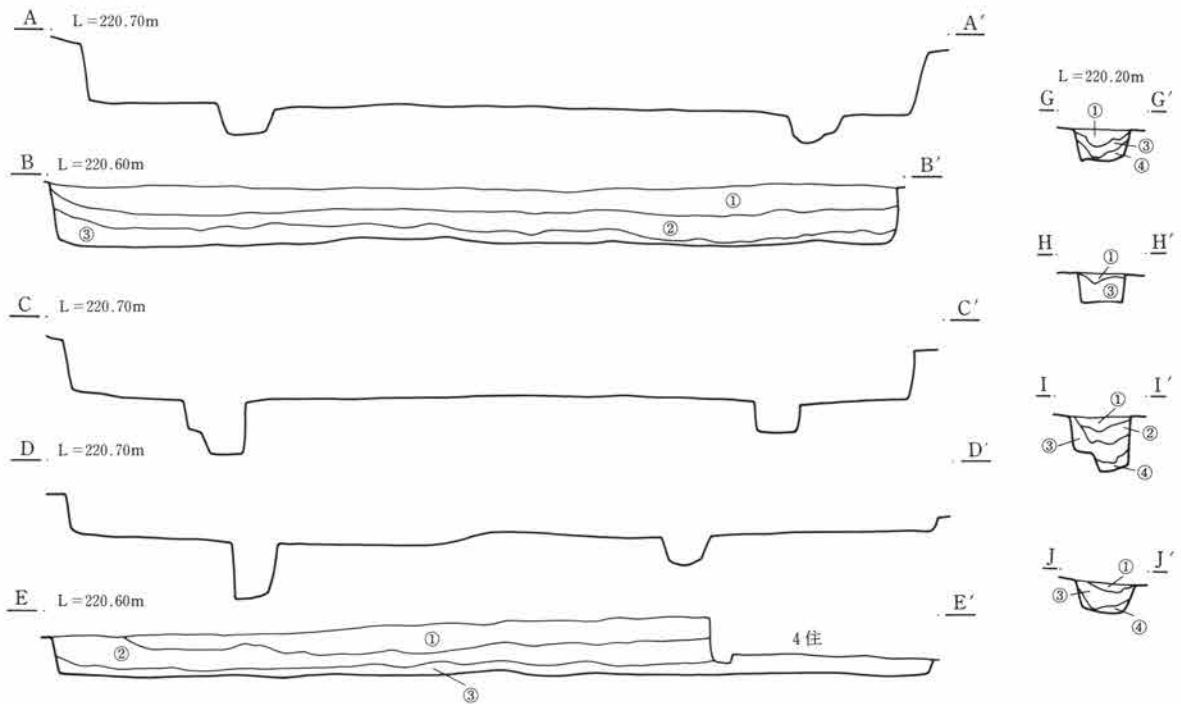
竈 住居北壁のほぼ中央部に築かれていたようだが、重複する住居によって破壊され、燃焼部底面の焼土が残存するのみである。また、その東側に煙道の煙出し部分だけが残っていたが、壁との位置関係から、この住居に伴う可能性は低い。煙出し部の幅23cm・現存長31cm。

貯蔵穴 住居北東隅に2基所在。位置・埋土の状況からは2基の前後関係は確定できないが、ほぼ完形の甕2点(3・4)が貯蔵穴No.1の埋土上面から出土していることから、No.1の廃絶後にNo.2が築かれたものと推測される。 周溝 なし。



第156図 F-42号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物

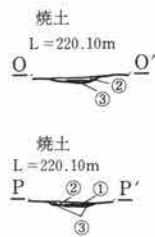


ベルトセクション

- 1 暗褐色土 多量の小礫含みしまり良。
- 2 褐色土 小礫・黄色土ブロックを含む。
- 3 暗褐色土 粘質の黒色土・黄色土ブロックを含む。やや細粒。

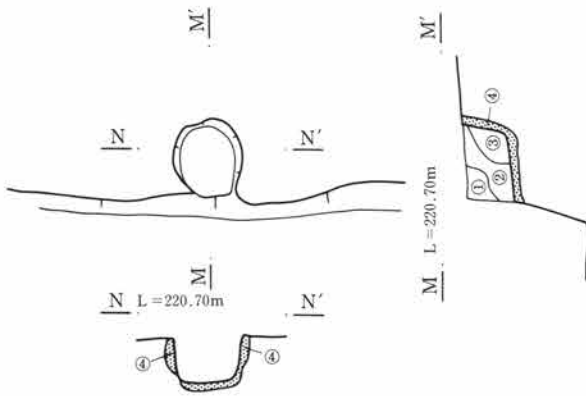
焼土セクション

- 1 赤褐色土 細粒・均質で硬くしまった焼土層。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物・砂礫若干含む。
- 3 黒色土 細粒・均質な灰層。



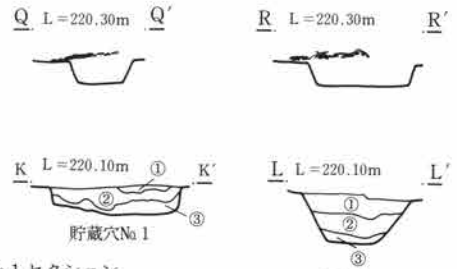
ピットセクション

- 1 黒褐色土 若干の砂礫・炭化物含みしまりやや良。ローム若干混入。
- 2 暗褐色土 若干の砂礫・炭化物・粘質土ブロック含む。しまりやや良。
- 3 黒褐色土 1層に比べ砂礫の混入少なくてやや黒み強い。
- 4 褐色土 基盤砂質土多量に含みやわらかくしまり悪い。微細炭化物わずかに混入。



竈セクション

- 1 黒褐色土 若干の微細炭化物、わずかの焼土含む。
- 2 黒褐色土 若干の焼土・微細炭化物含む。比較的均質でしまり良。
- 3 黒褐色土 若干の焼土・微細炭化物含む。細粒・均質でしまり良。
- 4 赤褐色土 地山褐色土の熱による赤化部分。



貯蔵穴No 1 セクション

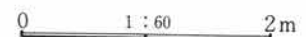
- 1 黒褐色土 微細炭化物・白色粒少量含む。しまり良。弱い粘性あり。
- 2 黒褐色土 砂礫かなり含み脆く崩れやすい。黄褐色ロームブロック若干混入。
- 3 暗褐色土 多量の砂礫含みやわらかくしまり悪い。

貯蔵穴No 2 セクション

- 1 黒褐色土 少量の白・黄色粒、微細炭化物、焼土粒、小礫含む。
- 2 褐色土 多量の砂礫および少量の粘質黄褐色ロームブロック含む。
- 3 暗褐色土 多量の砂礫含む。ロームブロックの混入2層よりも多い。



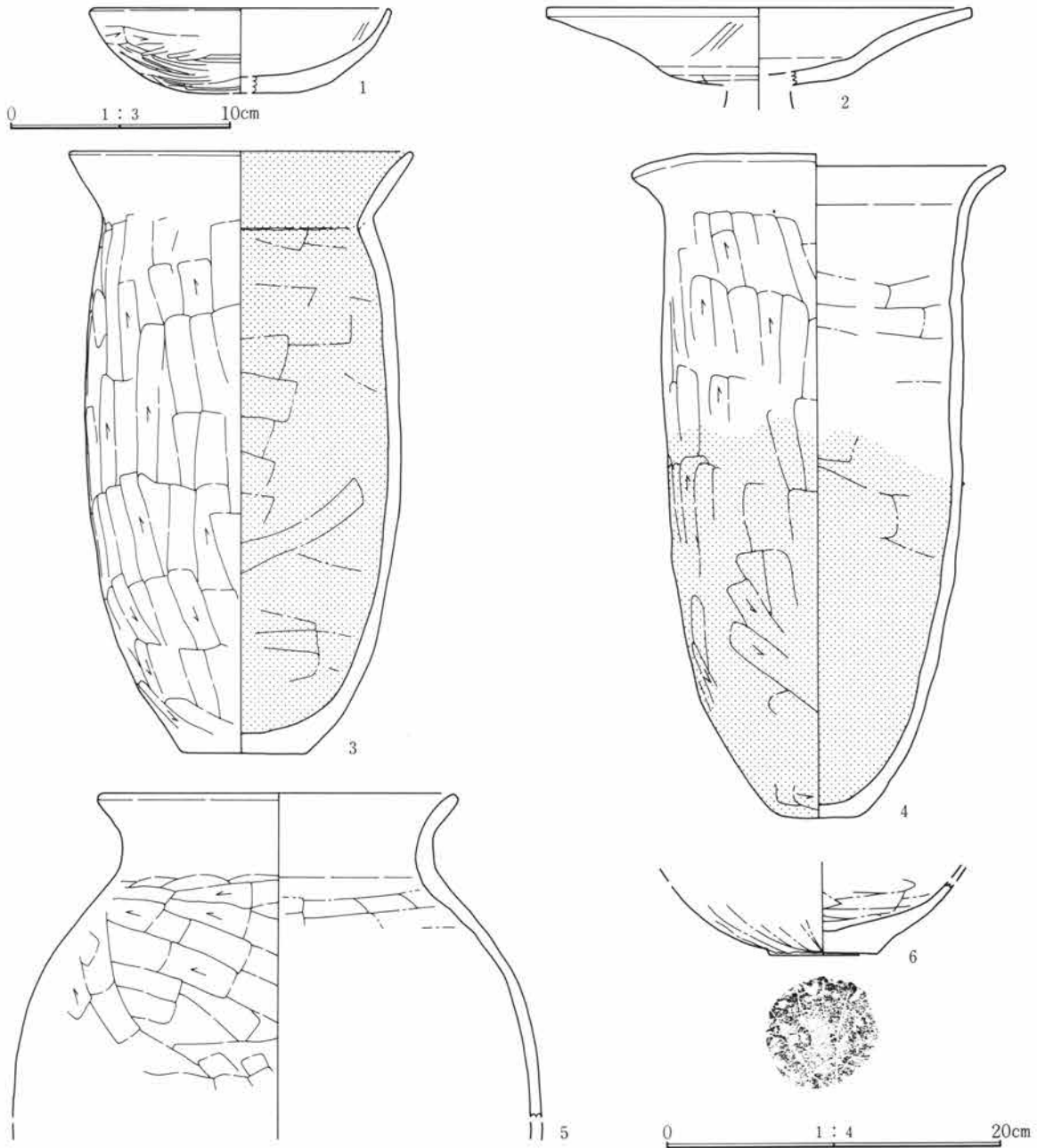
第157図 F-42号住居跡②



柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に乗るが、北側の2基はやや南側にずれる。

出土遺物 遺物量は少なく、先述の土師器甕2点の他は、小破片が住居内に散在するのみ。他の遺物は、土師器高杯(2)・甕(5・6)などがある。また、南壁際からこもあみ石とみられる円礫7点(7~13)が出土している。この他、埋土上位より、時期的により新しい土師器坏(1)が出土している。掘り方 なし。

調査所見 調査時は1軒としたが、竈煙出し部の状況や遺物に二時期認められることから、セクション・平面で確認できなかったが、2軒の住居が重複していたものと推測。新しい時期の遺物が床面上35cmと高い位置で出土していることから、42住内部にすっぽり入った形で新しい住居が築かれ、掘り込みも浅かったと考えられる。煙道煙出し部は、新しい住居に属するものであろう。古墳時代後期。



第158図 F-42号住居出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

F-42号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	+35cm 1/4	口(13.1) 底(6.6) 高 3.7	①微砂粒含む ②良好 ③におい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り後へラ磨き。内面横ナデ後へラ磨き。	住居にともなわない 可能性あり		
2	土師器 高坏	+6cm 坏部1/4	口(19.0) 底 — 高 —	①微砂粒・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色	口縁外面横ナデ後へラ磨き、体部へラ削り。内面横ナデ。			
3	土師器 甕	貯蔵穴内 完形	口 20.5 底 7.4 高 35.6	①砂礫含む ②良好 ③におい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。内面に接合痕。	胴部内面全面にごく 弱い煤付着		
4	土師器 甕	貯蔵穴内 ほぼ完形	口 22.0 底 5.0 高 39.3	①粗砂粒・少量の小礫含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	胴部内面下半にごく 弱い煤付着 外面下半被熱		
5	土師器 甕	+2cm 口～胴部 上半1/3	口(21.0) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③におい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。			
6	土師器 甕	+12cm 底部	口 — 底 6.4 高 —	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③浅黄橙色	胴部外面へラ削り後ナデ、内面ナデ。	底部に木葉痕		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
7	こもあみ石	+5cm 完形	12.5	7.3	5.2	647.7	粗粒安山岩	盤状の円礫。
8	こもあみ石	+10cm 完形	10.2	5.9	6.2	549.4	ひん岩	拳状の亜角礫。
9	こもあみ石	+5cm 完形	15.0	8.1	5.8	817.6	溶結凝灰岩	盤状の円礫。
10	こもあみ石	+10cm 完形	17.0	9.6	4.2	902.1	粗粒安山岩	同上
11	こもあみ石	+5cm 完形	12.6	8.6	4.9	629.0	流紋岩	同上
12	こもあみ石	+5cm 完形	15.7	6.6	6.6	757.1	デイサイト	棒状の円礫。
13	こもあみ石	+5cm 完形	13.5	7.8	4.8	670.0	変質安山岩	盤状の円礫。

F-45号住居跡 (PL21・111)

位置 Fr-75グリッド 主軸方位 N-15°-W 残存壁高 0.43m

重複 F-18住に切られ、44住を切る。

規模と形状 長辺3.59m・短辺3.11mのわずかに横が長い長方形。住居北壁は攪乱などによって破壊されているが、残っている壁はほぼ直進し、線形の乱れなどは少ない。竈は北側に築かれる。

床面 掘り込みの底面に良くしまった黄褐色土を薄く敷いて、張り床としている。

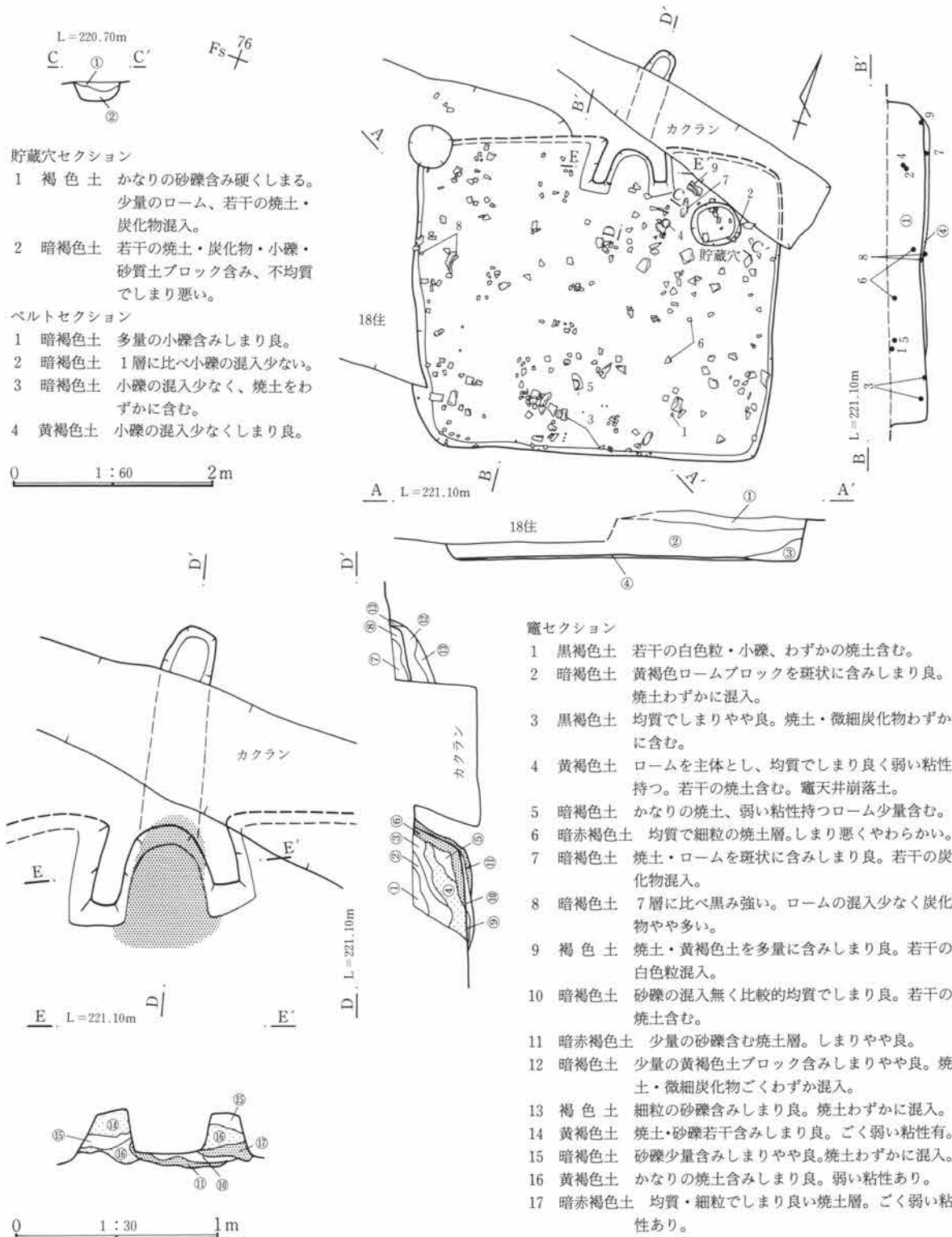
竈 住居北壁の中央よりも若干東よりに所在。袖が住居内に作り出される形状を呈する。焚口幅42cm・燃焼部長46cm。煙道は、大半が近年の耕作にともなう攪乱によって破壊され、煙出し部が残るのみである。煙道長は推定で97cm。

貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。 周溝 なし。 柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は比較的多いが、大半は小破片である。住居内に散在して出土。器種は、土師器杯(1~3)・甕(7~9)、須恵器蓋(4)・高台付坏(5)・坏(6)などがある。

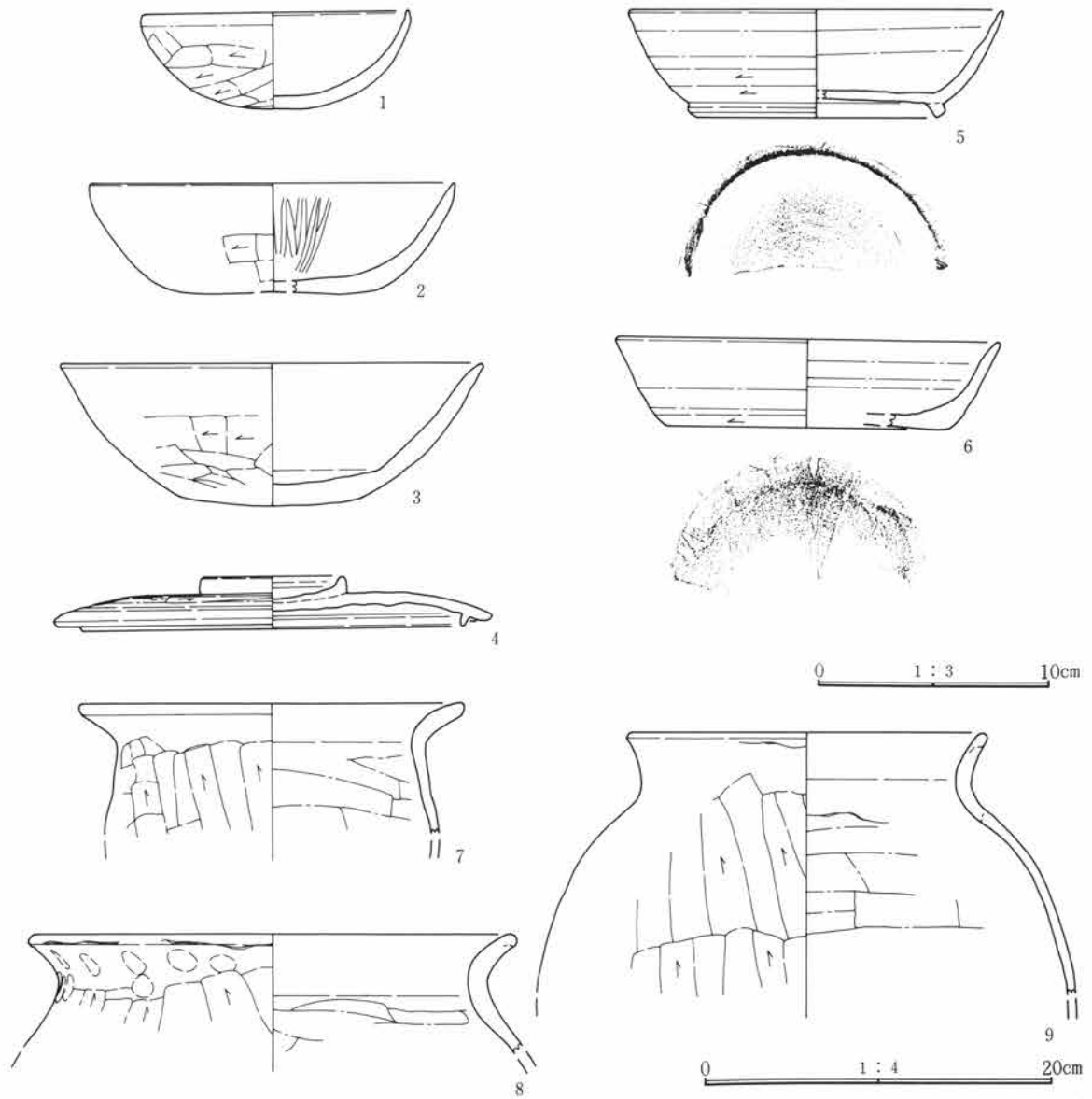
掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



第159図 F-45号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第160図 F-45号住居出土遺物実測図

F-45号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	18住覆土 ほぼ完形	口 11.4 底 — 高 4.0	①細砂・赤褐色微粒 子含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。口縁端部がわずかに内湾。	
2	土師器 坏	+19cm 1/5	口(15.5) 底(9.6) 高 4.7	①微砂粒・赤褐色微 粒子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面 ヘラナデ後ヘラ磨き。	
3	土師器 坏	+2cm 1/5	口(17.8) 底 — 高 6.0	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
4	須恵器 蓋	+23cm 2/5	口(18.2) 摘 6.1 高 2.2	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。天井部回転ヘラ削り。つまみ貼付。	
5	須恵器 高台付杯	+34cm 2/5	口(15.8) 底(10.1) 高 4.5	①微砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。体部下位回転ヘラ削り。底部回転ヘ ラ切り。貼り付け高台。	

番号	種器種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
6	須恵器 坏	18住覆土 1/5	口(16.1) 底(12.1) 高 3.7	①微砂粒・黒色粒子 含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。体部下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ切り後一部ナデ。	
7	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/5	口(21.1) 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
8	土師器 甕	床密着 口縁1/5	口(27.2) 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
9	土師器 甕	+4cm 口～胴部 上位1/5	口(19.7) 底 — 高 —	①砂粒・赤褐色粒子 含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、内面に接合痕。	

F-46号住居跡 (PL22・111)

位置 Fn・Fo-64グリッド 主軸方位 N-78°-E 残存壁高 0.15m 重複 F-12住を切る。

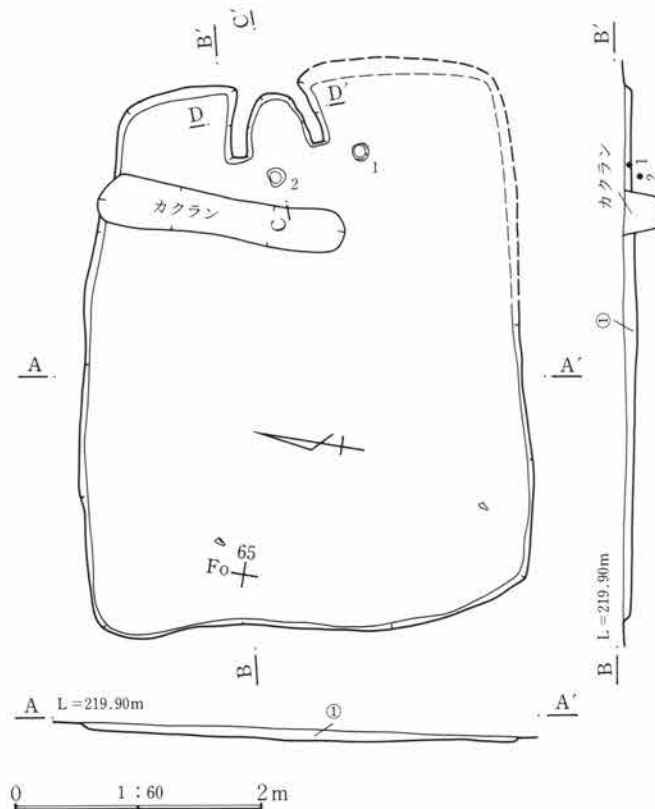
規模と形状 長辺3.61m・短辺4.48mの縦長の長方形。東壁に比べ西壁がやや長い。上部を削平され、周壁の残りは悪い。また、西壁が一部外側に張り出し、形状がかなり乱れている。竈は東側に築かれる。

床面 地山砂礫質土と他の住居の埋土を掘り込んで平坦な床面を形成。張り床などはみられない。

竈 住居東壁の中央部に所在。袖が住居内に作り出される形態をとる。焚口幅47cm・燃燒部長48cm。煙道は削平され残っていない。燃燒部前から須恵器坏(2)がふせた状態で出土した。

貯蔵穴 なし。ただし遺物の出土レベルから、住居南東隅に存在した可能性がある。

周溝 なし。柱穴 なし。



出土遺物 遺物量は非常に少なく、わずかに数点が出土したのみ。先述の須恵器坏の他は、完形に近い土師器坏(1)がある。

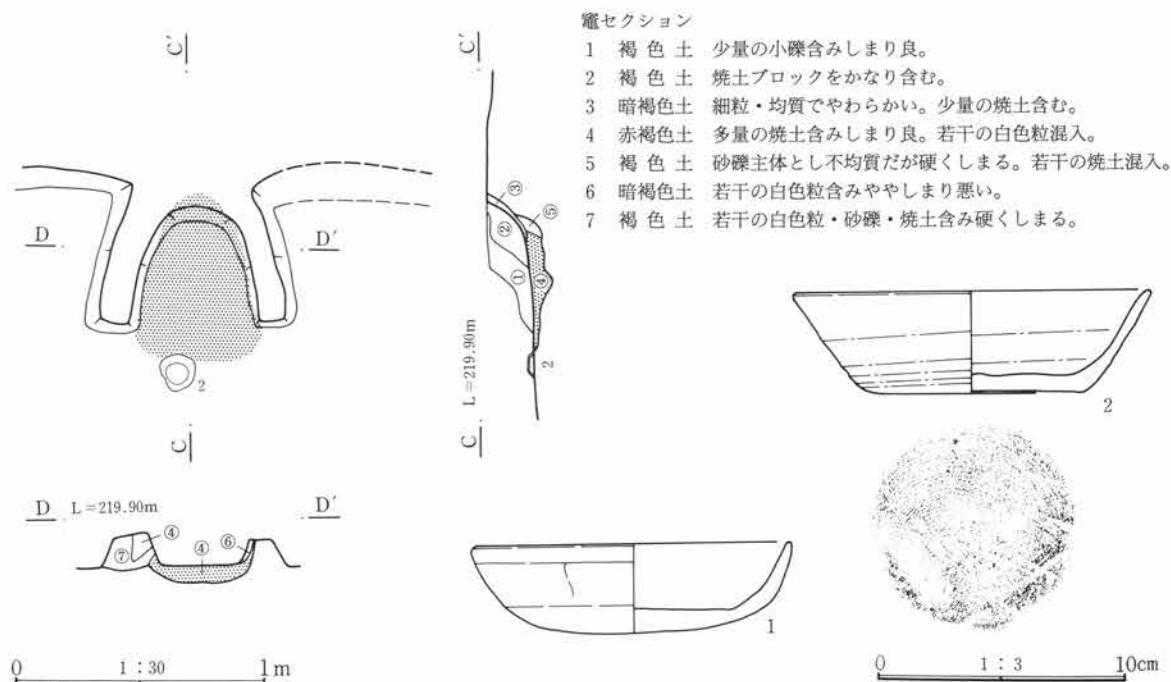
掘り方 なし。

調査所見 調査時に重複関係を誤認したため、住居南東隅付近を失ってしまった。このため貯蔵穴も破壊してしまったものと思われる。住居の時期は、出土遺物より奈良時代と推定される。

ベルトセクション

1 褐色土 多量の黄色粒・小礫含みし
り良。

第161図 F-46号住居跡



竈セクション

- 1 褐色土 少量の小礫含みしまり良。
- 2 褐色土 焼土ブロックをかなり含む。
- 3 暗褐色土 細粒・均質でやわらかい。少量の焼土含む。
- 4 赤褐色土 多量の焼土含みしまり良。若干の白色粒混入。
- 5 褐色土 砂礫主体とし不均質だが硬くしまる。若干の焼土混入。
- 6 暗褐色土 若干の白色粒含みややしまり悪い。
- 7 褐色土 若干の白色粒・砂礫・焼土含み硬くしまる。

第162図 F-46号住居竈、出土遺物実測図

F-46号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	掘り方内 完形	口 12.5 底 — 高 3.5	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナ デ。	
2	須恵器 坏	床密着 1/5	口(14.1) 底 8.4 高 3.9	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り後一部へラ 削り。	

F-47号住居跡 (PL22・111)

位置 Fo-76グリッド **主軸方位** N-22°-W **残存壁高** 0.39m **重複** F-2・4住に切られる。
規模と形状 長辺6.94m・短辺6.28mと若干長辺が長いが、平面形状はほぼ正方形。北西・南東隅を重複する他の住居によって大きく破壊されているが、残存している周壁はほぼ直進し、壁の崩落などはほとんど無い。住居主軸はかなり西にふれる。竈は北側に築かれる。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで床面を形成。貼り床や硬質面は認められなかった。

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。袖が住居内に作り出される形状を持つ。焚口幅50cm・燃烧部長37cm。煙道は底面が残存しており、長さは139cmである。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。長辺方向が長い楕円形で、かなりの深さを持つ。

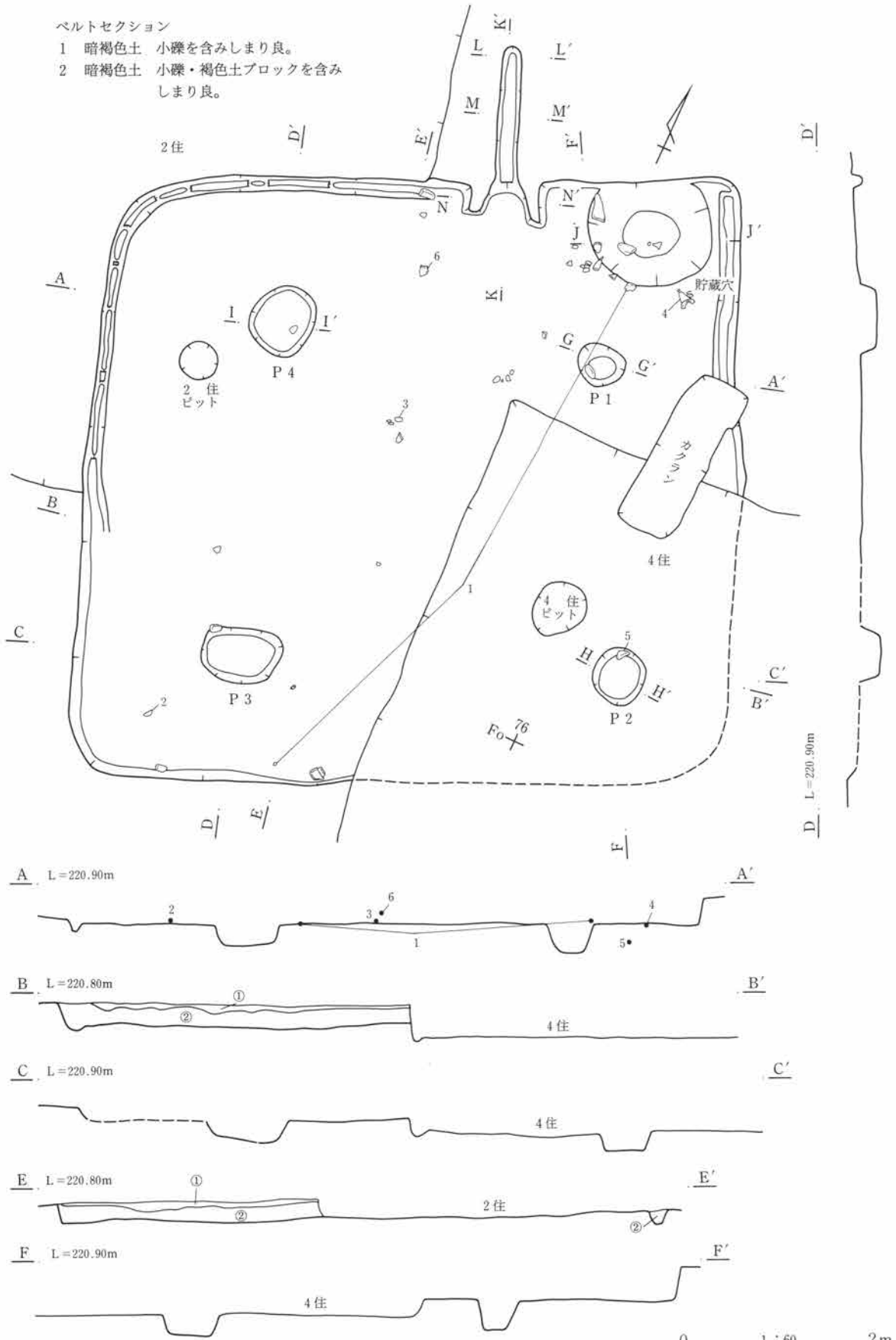
周溝 竈左脇から北西隅・西壁中央部までと、東壁の北側1/3ほどの範囲で検出。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置する。

出土遺物 住居のかなりの部分を他の住居によって破壊されているため、遺物の量は非常に少ない。貯蔵穴の周辺に若干集中するようである。器種は、土師器坏(1~3)・高坏(4)・甕(5)・甑(6)がある。

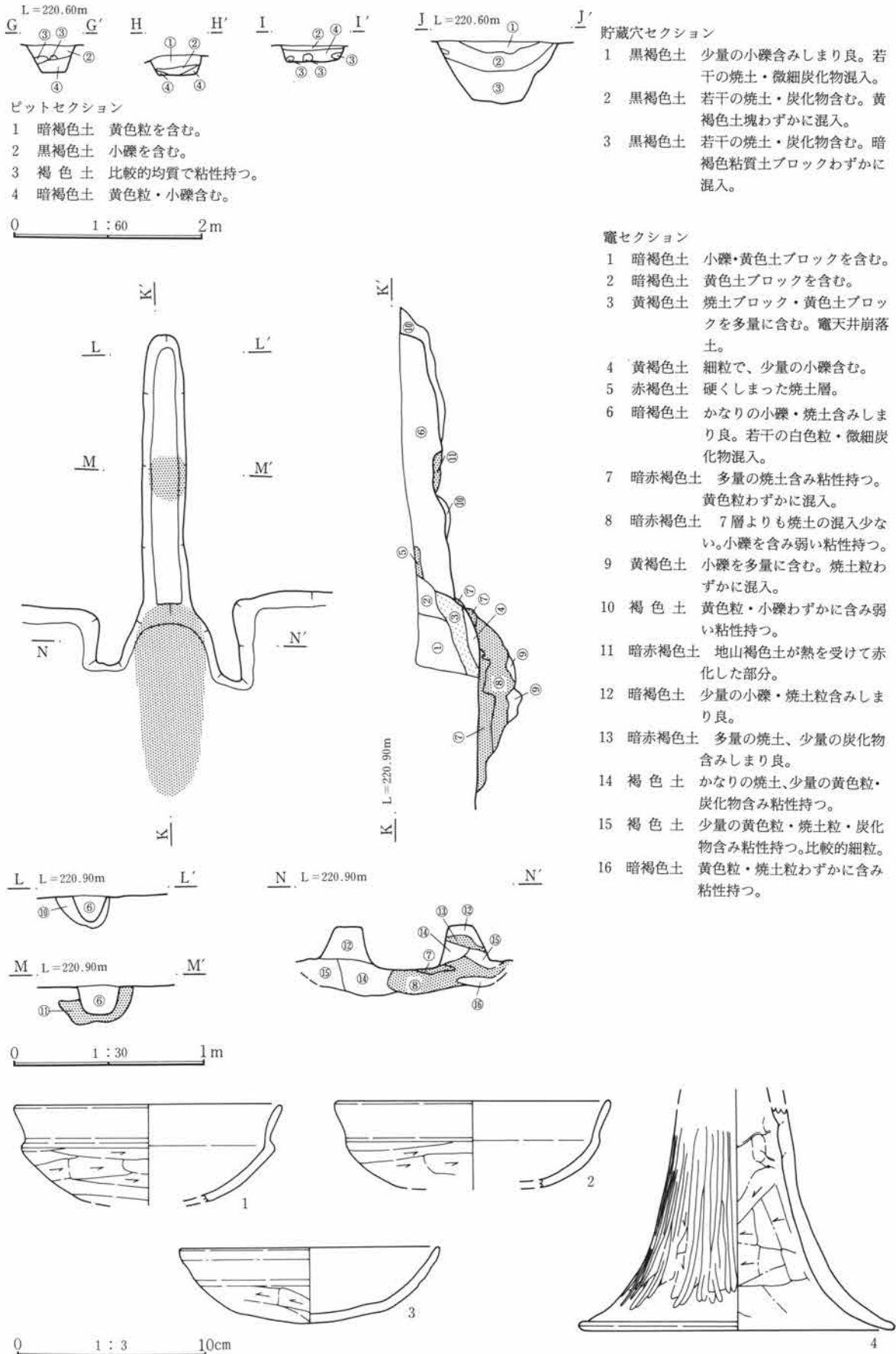
掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。

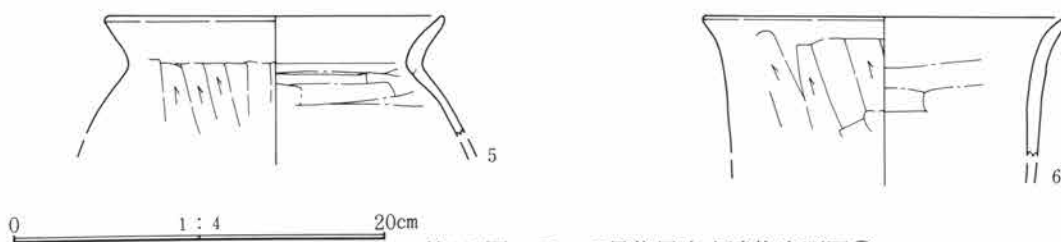


第163図 F-47号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



第164図 F-47号住居跡②、出土遺物実測図①

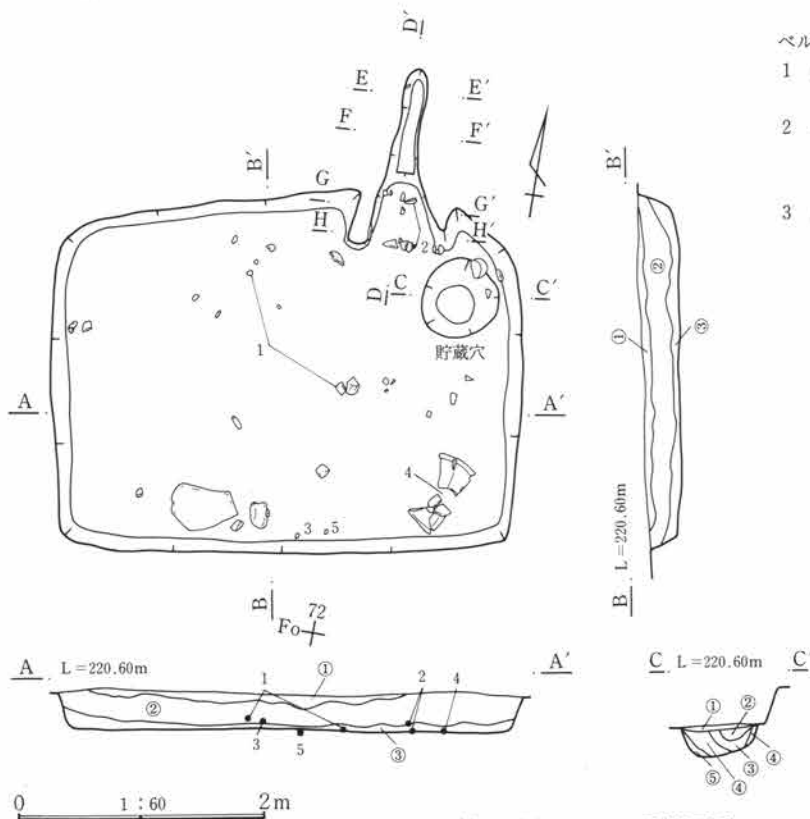


第165図 F-47号住居出土遺物実測図②

F-47号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 底部欠 1/4	口(13.6) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
2	土師器 坏	+3cm 底部欠 1/4	口(14.0) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
3	土師器 坏	+4cm 1/6	口(13.4) 底 — 高 3.9	①細砂(まれに小 礫)・赤褐色粒子含む ②良好③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。口縁下の 稜線にごく浅い沈線がめぐる。内面横ナデ。	
4	土師器 高坏	床密着 脚部	口 — 底 16.0 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	脚端部内外面横ナデ。脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨 き、内面ヘラ削り。上位に輪積痕・指頭圧痕残る。	
5	土師器 甕	ピット2 内口~ 胴上1/4	口(17.8) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。内面に接合痕。	
6	土師器 甕	+10cm 口~胴部 上位1/6	口(19.1) 底 — 高 —	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	

F-48号住居跡 (PL22・111・112)



ベルトセクション

- 1 黒褐色土 多量の砂礫含み硬くしまる。若干の白色粒混入。
- 2 黒褐色土 1層に比べ砂礫の混入やや少ない。若干の微細炭化物、わずかの焼土含む。
- 3 黒褐色土 砂礫の混入少ない。若干の微細炭化物・白色粒含む。

貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 かなりの焼土、若干の粗粒の砂礫・炭化物含み硬くしまる。
- 2 暗褐色土 かなりの砂礫含みしまり悪い。若干の焼土・炭化物混入。
- 3 褐色土 弱い粘性持つロームブロック主体。若干の小礫・炭化物混入。
- 4 暗褐色土 かなりの砂礫含みしまり悪い。若干の焼土・炭化物混入。
- 5 暗褐色土 かなりの砂礫含みしまり悪い。ローム塊を斑状に混入。

第166図 F-48号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

位置 Fo-71・72グリッド 主軸方位 N-7°-W 残存壁高 0.33m 重複 F-14住を切る。

規模と形状 長辺3.82m・短辺2.86mの横長の長方形。周壁やや外反し、北側竈付近が外側へ張り出す。

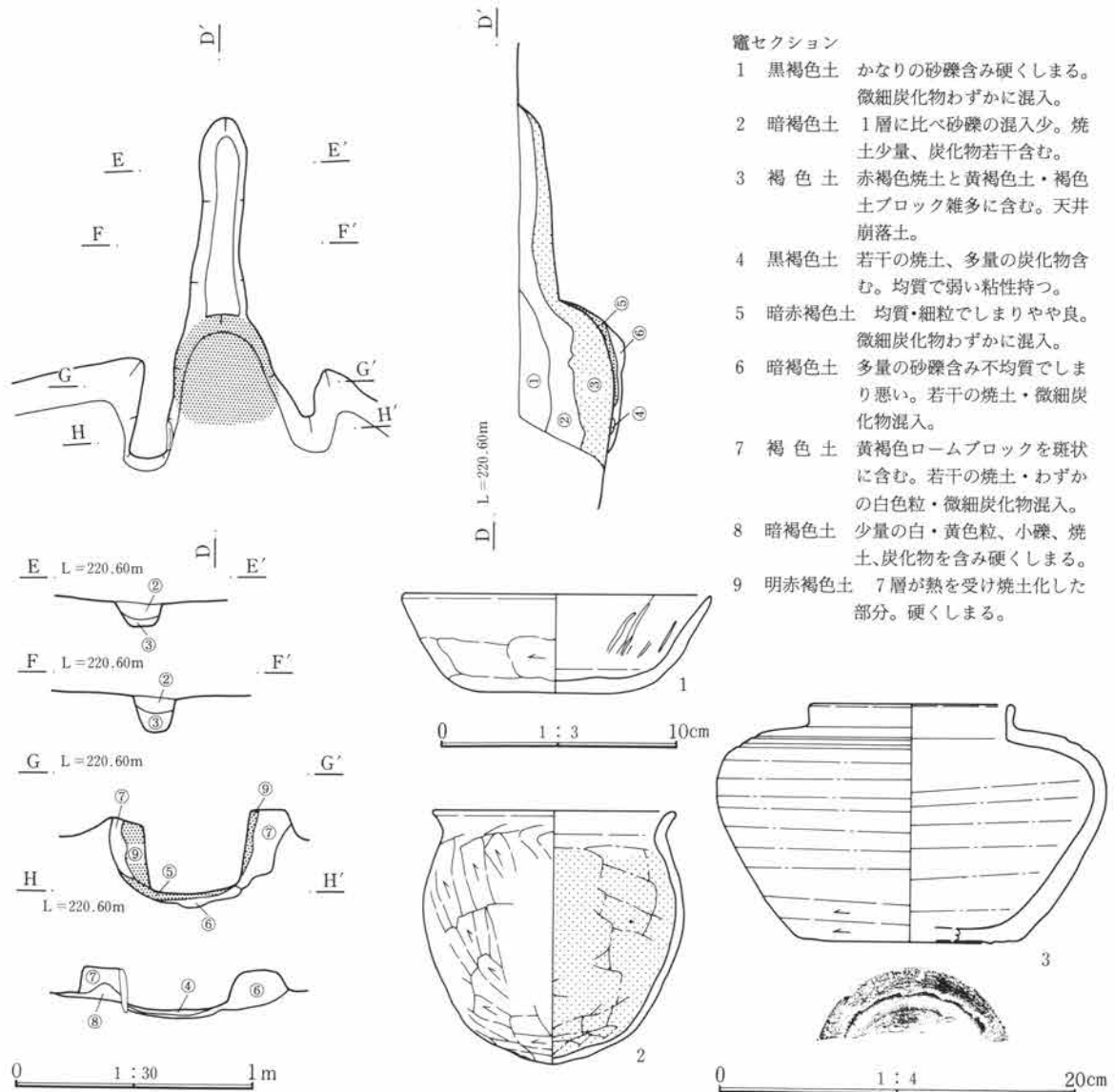
床面 地山暗褐色砂礫層を掘り込んで平坦な床面形成。

竈 住居北壁の東端に所在。袖が住居内に作り出されるが、燃烧部は若干外側に張り出す。焚口幅55cm・燃烧部長60cm。左袖先端の燃烧部側には、袖石として板状の砂岩が据え付けられている。煙道は下半部のみが残っており、長さは81cmである。

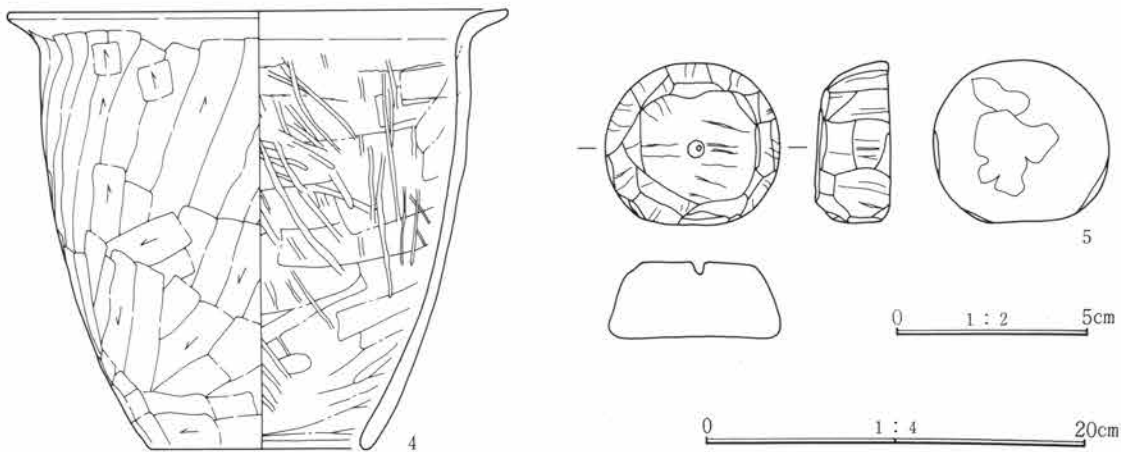
貯蔵穴 住居北東隅の、竈の右斜め前に所在。形状はほぼ円形である。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物は住居内に散在して出土し、特に集中する傾向はない。住居南東隅では、ほぼ完形にまで復元できる土師器甕(4)が床面直上で出土している。他は、土師器坏(1)・小型甕(2)、須恵器短頸壺(3)などがある。また、南壁際より石製の紡錘車(5)が1点出土している。掘り方 なし。

調査所見 住居形状・出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



第167図 F-48号住居竈、出土遺物実測図①



第168図 F-48号住居出土遺物実測図②

F-48号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 12.9 底 8.2 高 4.1	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面へラ削り。内面横ナデ後へラ磨き。			
2	土師器 小型甕	+5cm 1/4	口(13.4) 底 — 高 14.1	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	胴部内面に煤付着ナデ。		
3	須恵器 短頸壺	+10cm 2/3	口(11.2) 底(12.1) 高 13.2	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。肩部に二条の浅い沈線めぐる。胴部下位回転へラ削り。底部回転へラ切り。			
4	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 26.3 底 11.5 高 23.1	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ後へラ磨き。内面に接合痕。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
5	紡錘車	ほぼ床直 完形	4.2	4.6	2.0	53.7	砥沢石	紡錘車未製品。上面からの穴は途中で放棄。全面を面取りして研磨。仕上げには至らず。

F-49号住居跡 (PL23・112)

位置 Fo-72グリッド 主軸方位 N-6°-E 残存壁高 0.47m 重複 F-14・55住を切る。

規模と形状 調査時に14号住居との前後関係を誤認したため、住居北壁と東壁の大半を失っており、形状については推定である。それによると、長辺3.13m・短辺2.84mと、長辺方向がやや長い長方形になる。周壁はやや外反し、西壁もかなり外側に張り出すなど、線形の乱れがみられる。竈は北側に築かれる。

床面 地山黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。袖が住居内に作り出される形状を呈する。焚口幅40cm・燃烧部長33cm。右袖の先端燃烧部側には、袖石として板状の砂岩が据えられている。煙道は残っていない。

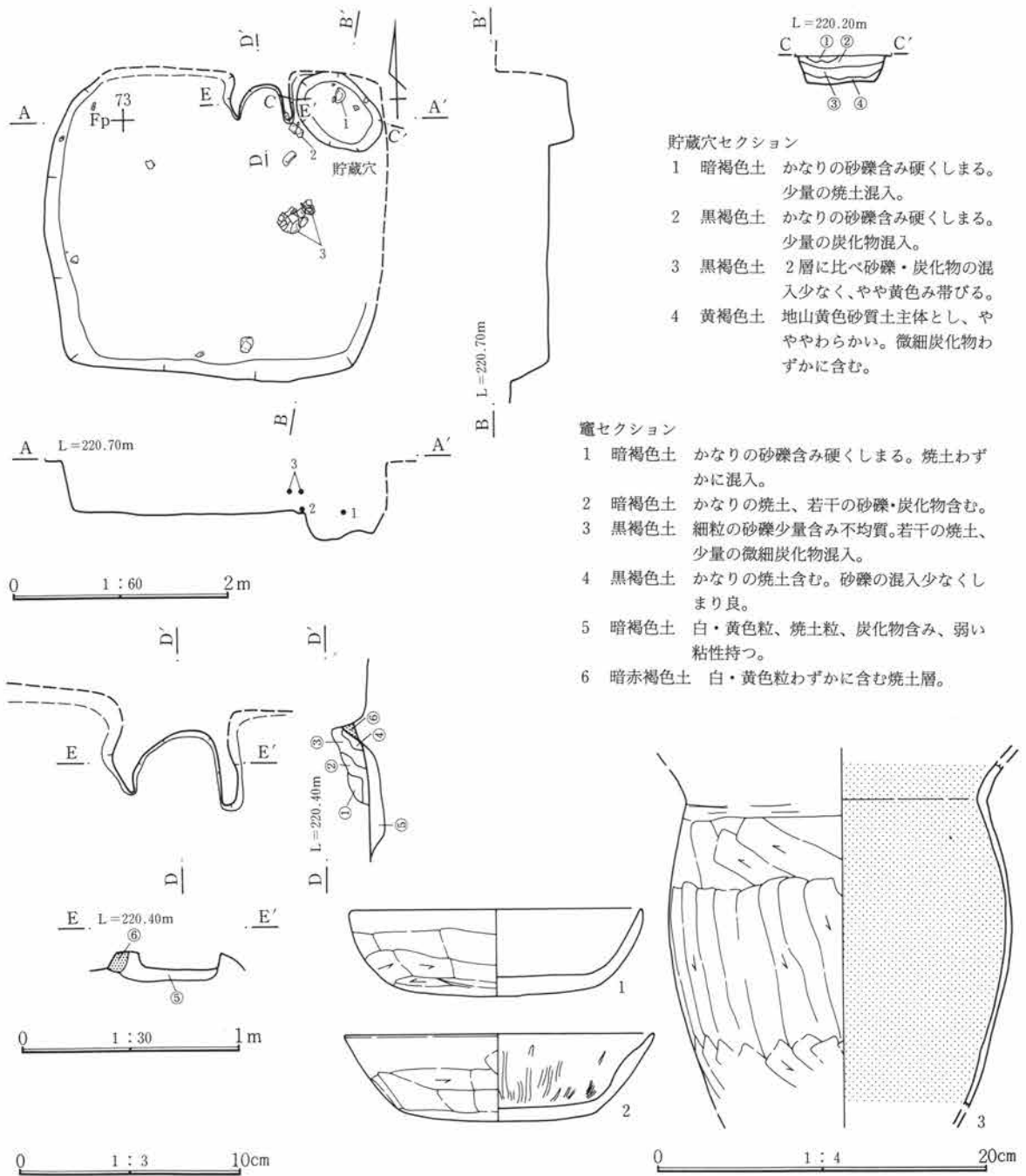
貯蔵穴 住居北東隅に所在。平面形状は楕円形である。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、主に貯蔵穴とその周辺から出土している。主な器種は、土師器坏(1・2)・甕(3)がある。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。

第3章 検出された遺構と遺物



第169図 F-49号住居跡、出土遺物実測図

F-49号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	貯蔵穴上 面	口(13.4) 底 9.3 高 3.9	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	床密着 1/3	口(14.1) 底 8.8 高 4.0	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後放射状ヘラ磨き。	
3	土師器 甕	+22cm	口 — 底 — 高 —	①均質な細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。外面にヘラ状工具端部のあたり。胴部外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。全体に器肉薄い。	内面全面に煤付着

F-50号住居跡 (PL23・112・113)

位置 Fr・Fs-67グリッド 主軸方位 N-10°-W 残存壁高 0.45m

重複 F-15・17住に切られ、51住を切る。

規模と形状 長辺5.68m・短辺4.47mの横長の長方形。南壁に比べ北壁が若干長い。周壁はほぼ直進し、崩落などによる線形の乱れはみられない。住居主軸はやや西側にふれる。竈は北側に築かれる。西側の2本の柱穴の間に、長辺方向に沿って間仕切用とみられる浅い溝が作られている。

床面 一部に床下の掘り込みがみられるが、大半は地山暗褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の中央よりも東側に所在。住居内に袖が作り付けられ、燃焼部はわずかに住居域外に張り出す。焚口幅50cm・燃焼部長49cm。煙道も天井が崩落せずに残存しており、煙道長は114cmに達する。くりぬき式の煙道と推測される。

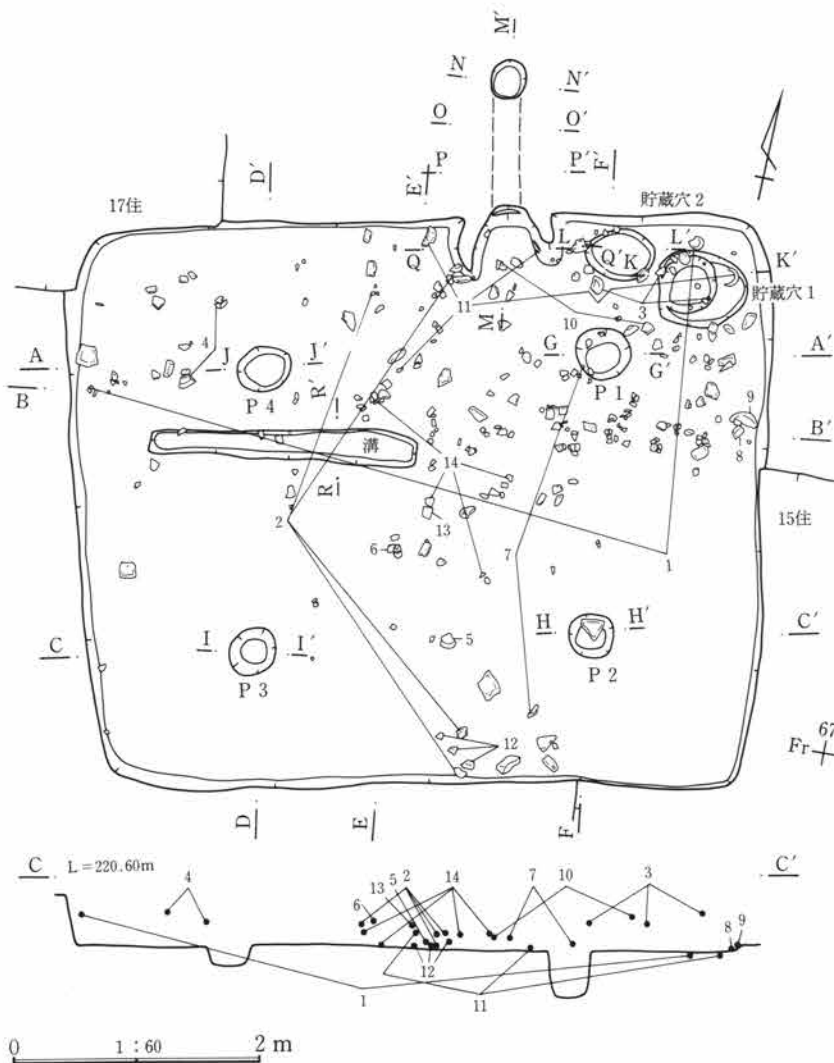
貯蔵穴 住居北東隅に2基所在。それぞれの前後関係は不明。 周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置する。

出土遺物 遺物量はやや多い。住居内よりまんべんなく出土しているが、竈周辺にややまとまる傾向がみられる。床面直上から埋土上位まで、かなりの幅を持って出土。器種は、土師器は坏が多く(1~7)、他に甕

(11・12)がある。また須恵器が比較的豊富で、坏(8)・蓋(9)・平瓶(10)・甕(13・14)などが出土している。

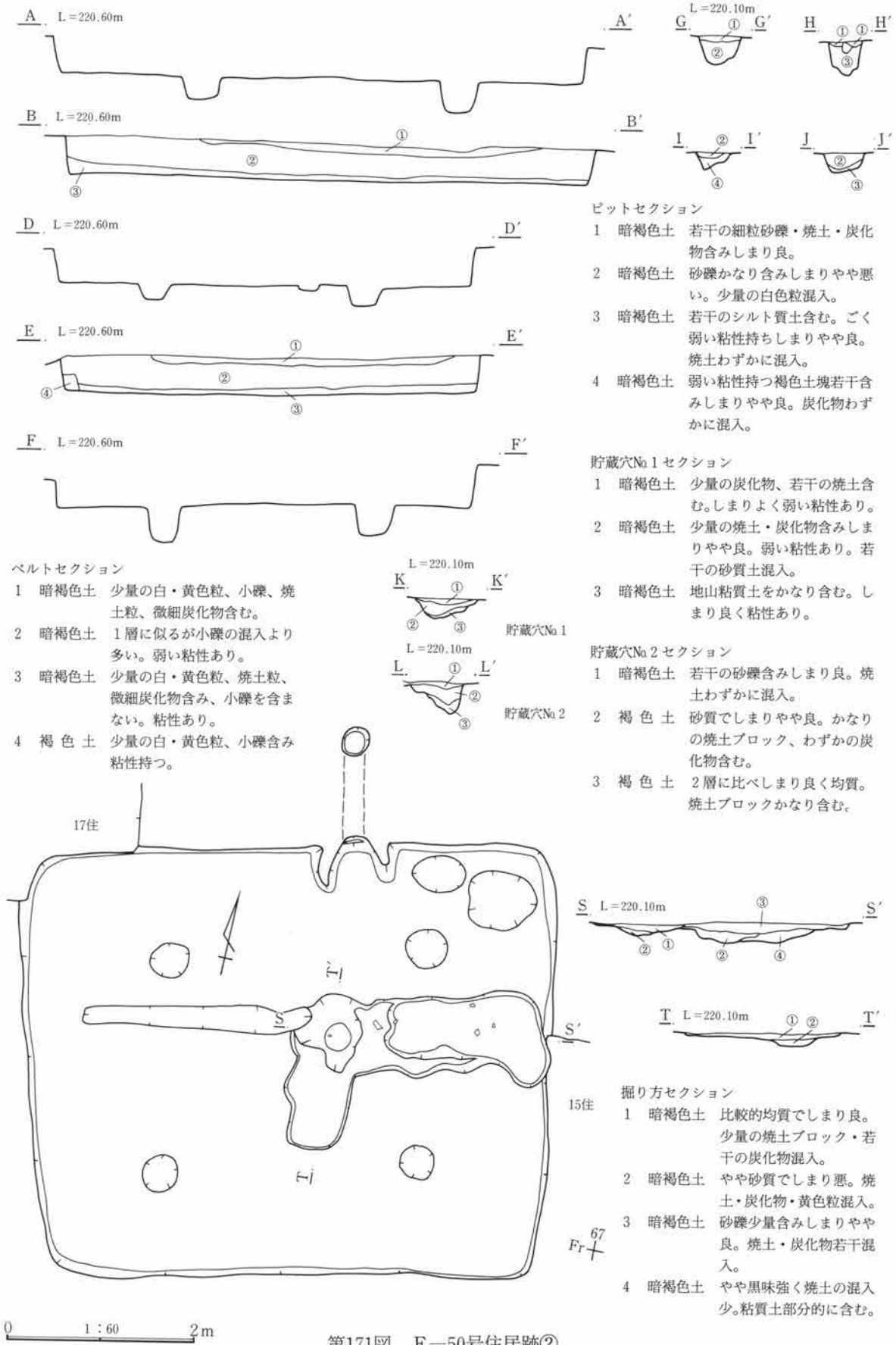
掘り方 間仕切溝の延長部に、一部掘り込みがみられる。東壁側から西側へほぼ直進し、間仕切溝の手前で南へ鉤の手に曲がる。あまり深くはないが、間仕切に関連する施設であろうか。
調査所見 奈良時代の住居。



間仕切溝セクション
 1 褐色土 少量の砂礫含みしまり良。若干の白色粒、わずかの焼土混入。
 2 暗褐色土 若干の白色粒・砂礫含みしまりやや良。

第170図 F-50号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



ベルトセクション

- 1 暗褐色土 少量の白・黄色粒、小礫、焼土粒、微細炭化物含む。
- 2 暗褐色土 1層に似るが小礫の混入より多い。弱い粘性あり。
- 3 暗褐色土 少量の白・黄色粒、焼土粒、微細炭化物含む、小礫を含まない。粘性あり。
- 4 褐色土 少量の白・黄色粒、小礫含む粘性持つ。

ピットセクション

- 1 暗褐色土 若干の細粒砂礫・焼土・炭化物含みしまり良。
- 2 暗褐色土 砂礫かなり含みしまりやや悪い。少量の白色粒混入。
- 3 暗褐色土 若干のシルト質土含む。ごく弱い粘性持ちしまりやや良。焼土わずかに混入。
- 4 暗褐色土 弱い粘性持つ褐色土塊若干含みしまりやや良。炭化物わずかに混入。

貯蔵穴No 1セクション

- 1 暗褐色土 少量の炭化物、若干の焼土含む。しまりよく弱い粘性あり。
- 2 暗褐色土 少量の焼土・炭化物含みしまりやや良。弱い粘性あり。若干の砂質土混入。
- 3 暗褐色土 地山粘質土をかなり含む。しまり良く粘性あり。

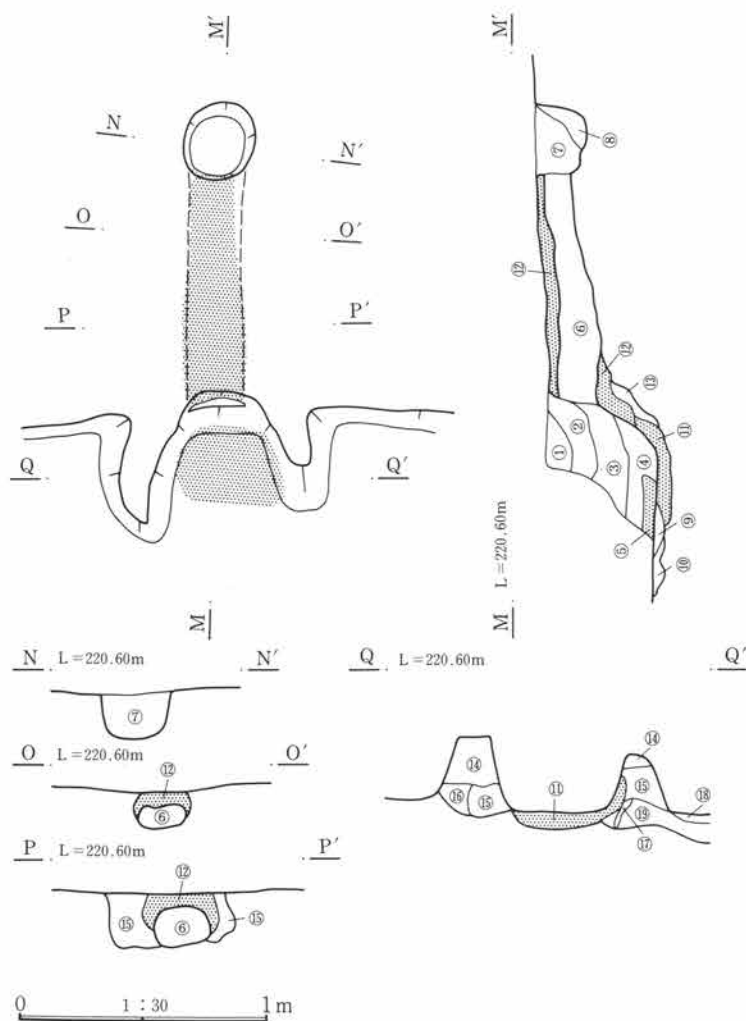
貯蔵穴No 2セクション

- 1 暗褐色土 若干の砂礫含みしまり良。焼土わずかに混入。
- 2 褐色土 砂質でしまりやや良。かなりの焼土ブロック、わずかの炭化物含む。
- 3 褐色土 2層に比べしまり良く均質。焼土ブロックかなり含む。

掘り方セクション

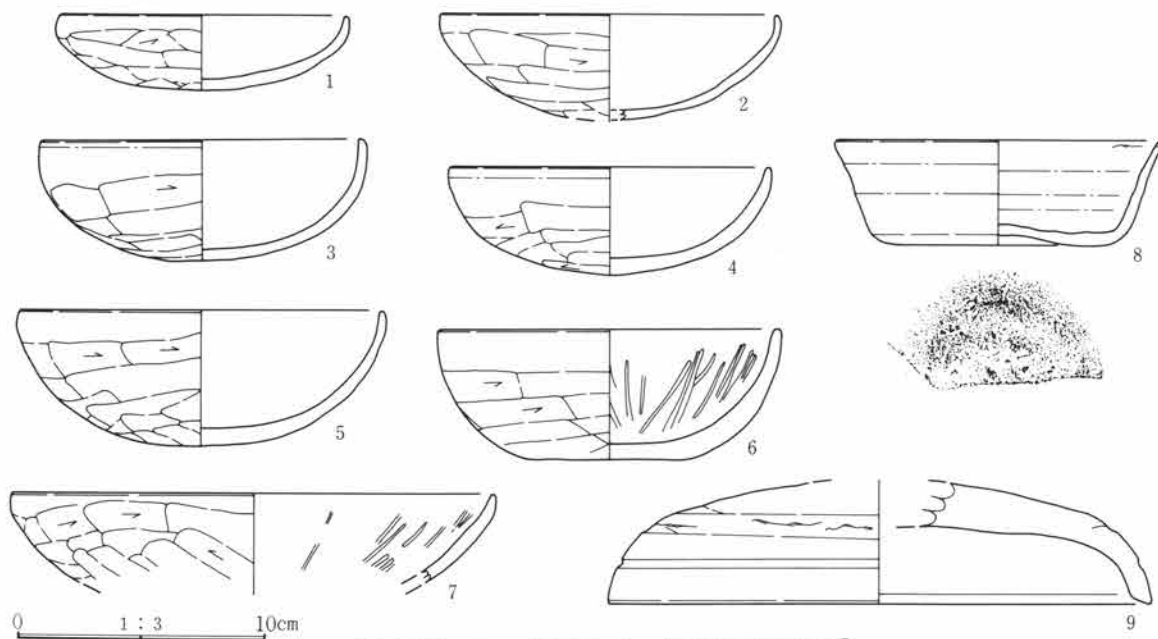
- 1 暗褐色土 比較的均質でしまり良。少量の焼土ブロック・若干の炭化物混入。
- 2 暗褐色土 やや砂質でしまり悪い。焼土・炭化物・黄色粒混入。
- 3 暗褐色土 砂礫少量含みしまりやや良。焼土・炭化物若干混入。
- 4 暗褐色土 やや黒味強く焼土の混入少。粘質土部分的に含む。

第171図 F-50号住居跡②



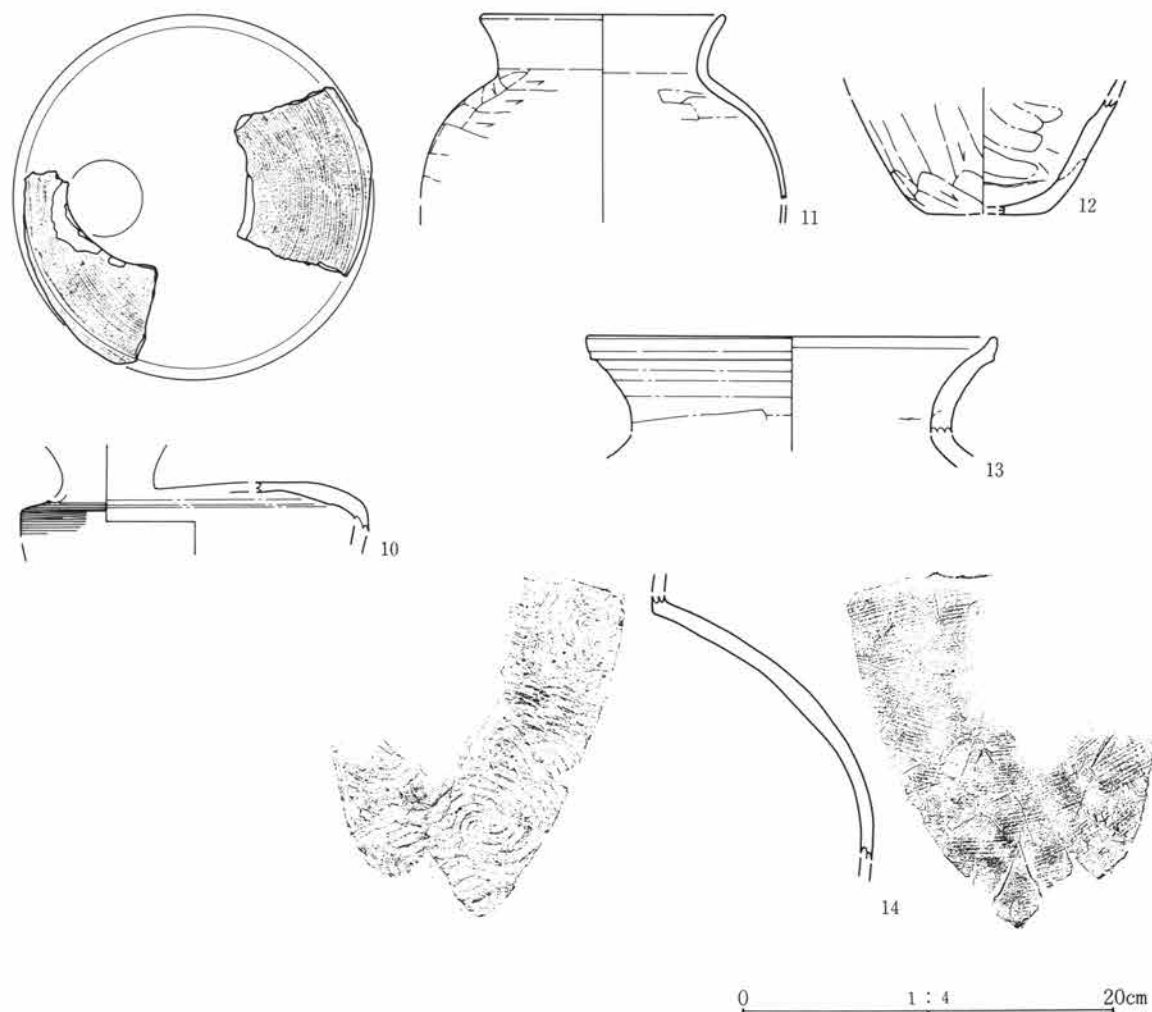
竈セクション

- 1 暗褐色土 少量の白色粒・小礫含みしまりやや良。焼土わずかに混入。
- 2 暗褐色土 少量の焼土および若干の小礫・炭化物含みしまりやや良。
- 3 暗褐色土 若干の黄色粒およびわずかの焼土含む。しまりやや良。
- 4 褐色土 若干の焼土含みしまりやや良。ごく弱い粘性あり。黄色粒わずかに混入。
- 5 暗赤褐色土 焼土主体とし若干の微細炭化物含む。ごく弱い粘性あり。
- 6 暗褐色土 かなりの焼土含みしまり良。白色粒少量、砂礫若干混入。
- 7 暗褐色土 少量の焼土ブロック、白・黄色粒含みしまり良。
- 8 暗褐色土 若干の白・黄色粒およびわずかの炭化物含む。しまり良。
- 9 暗褐色土 白・黄色粒、微細炭化物わずかに含む。
- 10 暗褐色土 少量の微細炭化物・小礫含む。
- 11 赤褐色土 焼土主体とし、砂質で均質。しまりやや悪い。
- 12 赤褐色土 均質な焼土層。非常に硬くしまる。
- 13 暗褐色土 かなりの焼土含みしまり良。炭化物わずかに混入。
- 14 暗褐色土 若干の砂礫含みしまり良。焼土わずかに含む。
- 15 褐色土 かなりの焼土含みしまり良。少量の白色粒混入。
- 16 褐色土 若干の白・黄色粒、砂礫、焼土粒含む。
- 17 褐色土 多量の焼土含む。比較的均質でしまり良。
- 18 暗褐色土 砂礫若干含みしまり良。焼土わずかに混入。
- 19 褐色土 砂礫・焼土・炭化物若干含みしまり良。少量の白色粒混入。



第172図 F-50号住居竈、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第173図 F-50号住居出土遺物実測図②

F-50号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 完形	口 11.3 底 — 高 2.9	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	+5cm ほぼ完形	口 13.4 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	
3	土師器 坏	+24cm 1/5	口 12.4 底 — 高 4.8	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	
4	土師器 坏	+19cm 2/5	口(12.6) 底 — 高 4.3	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	
5	土師器 坏	+8cm 1/4	口(14.2) 底 — 高 5.3	①微砂粒・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	
6	土師器 坏	+19cm 1/4	口(13.6) 底 — 高 5.1	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ後放射状へラ磨き。	
7	土師器 坏	+2cm 口～体部 2/5	口(19.1) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ後放射状へラ磨き。	

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
8	須恵器 坏	床密着 1/4	口(12.6) 底(9.0) 高 4.1	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。体部下端へら削り。底部回転へら切り。	
9	須恵器 蓋	床密着 1/3	口(21.6) 摘— 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。天井部回転へら削り。外面に接合痕 内面ナデ。器形の歪み激しい。	内面に摩耗面有り、 転用品か
10	須恵器 平瓶	+15cm 頸～肩部 1/3	口— 底— 高—	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。外面カキ目調整。	
11	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/3	口(12.6) 底— 高—	①均質な細砂含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横 ナデ。全体に器肉薄い。	器表面かなり剥落 ナデ。
12	土師器 甕	床密着 胴下位～ 底部	口— 底(6.5) 高—	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	胴部外面へら削り、内面横ナデ。底部と胴部の接 合痕明瞭に残る。	
13	須恵器 甕	+12cm 口縁破片	口(22.0) 底— 高—	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。頸部外面横ナデ。	
14	須恵器 甕	+12cm 頸～胴部 上半破片	口— 底— 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	胴部外面平行叩目、内面青海波文。	

F-51号住居跡 (PL23・113)

位置 Fq-66・67グリッド 主軸方位 N-45°-W 残存壁高 0.53m 重複 F-15・50・51住に切られる。
規模と形状 長辺6.00m・短辺5.28mのやや横長の長方形。西壁に比べ東壁が若干長い。重複する他の住居
に大半を破壊され、四隅がわずかに残るのみ。住居主軸はかなり西にずれる。竈は北西側に築かれていたよ
うであるが、重複する住居によって破壊され、わずかに焼土が残存しているのみである。

床面 地山の褐色砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

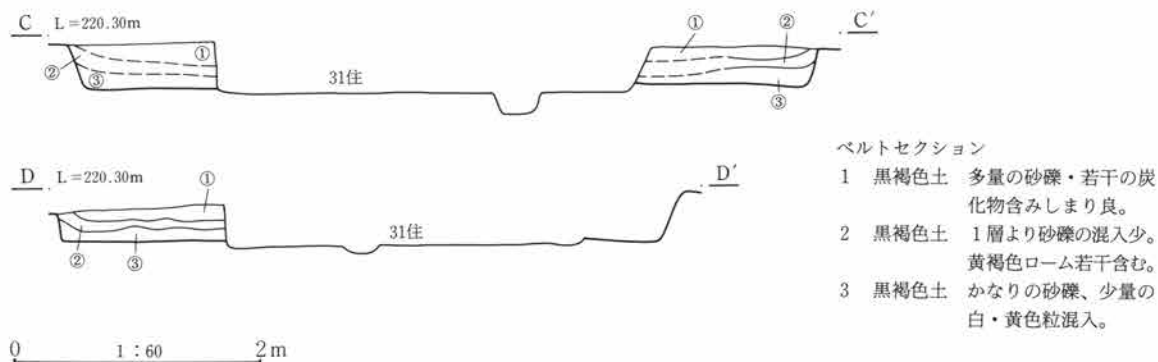
竈 住居北西壁の推定ライン付近に焼土が分布。破壊された竈底面の焼土が残存しているものと推測される。

貯蔵穴 住居北隅に所在。 周溝 なし。

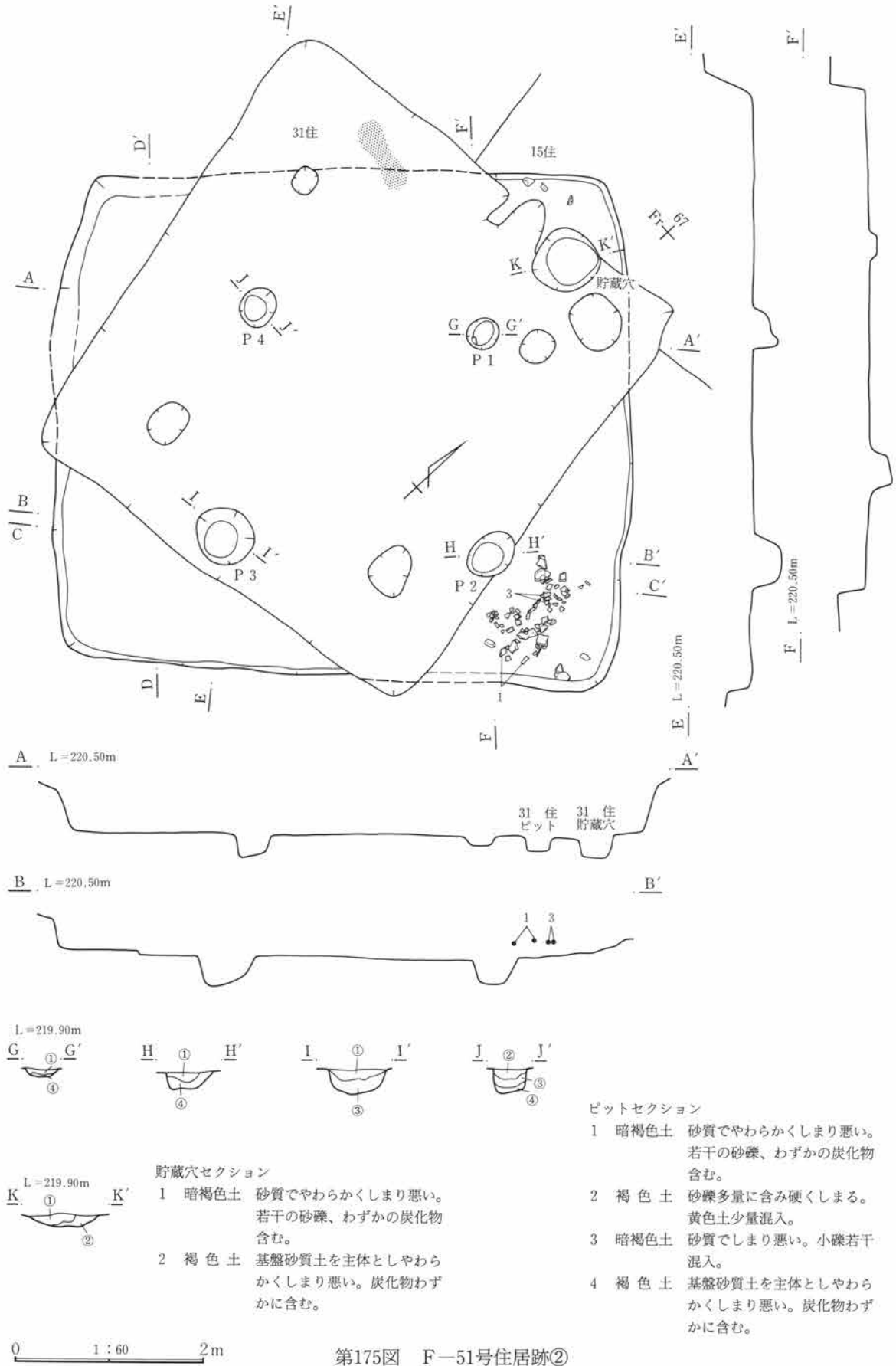
柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するが、P1は他に比べ極端に浅い。

出土遺物 遺物は住居東隅に集中している。ほとんどが小破片で、完形近くまで復元可能なものはない。出
土レベルは床面付近から埋土上位にまでおよぶ。器種も少なく、土師器坏(1・2)・甕(3・4)が出土した
のみである。 掘り方 なし。

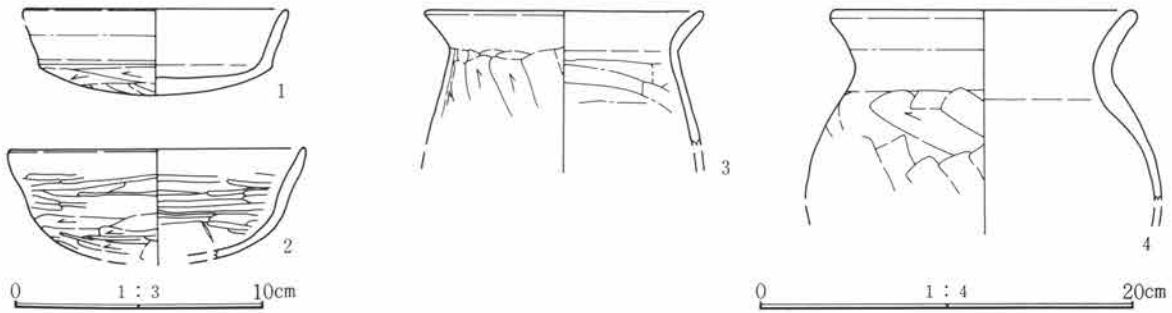
調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



第174図 F-51号住居跡①



第175図 F-51号住居跡②



第176図 F-51号住居出土遺物実測図

F-51号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+7cm 1/4	口(9.6) 底— 高 3.5	①均質な細砂含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	31住覆土 1/4	口(11.8) 底— 高—	①微砂粒(ごくまれに小礫)含む②良好 ③におい橙色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面ヘラナデ後ヘラ磨き。	
3	土師器 甕	+13cm 口～胴部 上位1/2	口(14.6) 底— 高—	①砂礫含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
4	土師器 甕	31住覆土 口～胴部 上位1/2	口(15.8) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③浅黄色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

F-52号住居跡 (PL15・113)

位置 Fs-66・67グリッド 主軸方位 N-1°-W 残存壁高 0.48m 重複 F-20住に切られる。

規模と形状 長辺5.89m・短辺は推定で5.50mである。重複する住居によって大半を破壊され、北東隅も一部調査区域外にあるため、正確な形状は不明である。残存する南壁と東壁ではやや壁が外反し、一部蛇行するように線形が若干乱れている部分がある。竈は北側に築かれていたものと考えられるが、破壊されたため残っていない。

床面 地山砂礫混じり暗褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 北壁に所在したものと思われるが、重複する住居によって破壊され残っていない。

貯蔵穴 重複する20号住居の北東隅で、时期的に本住居に伴うとみられる土師器坏がかなり深い位置から出土。このことから、このあたりに貯蔵穴があったものと推測される。ただし、掘り込みなどは確認できなかった。住居の北東隅にあたる。

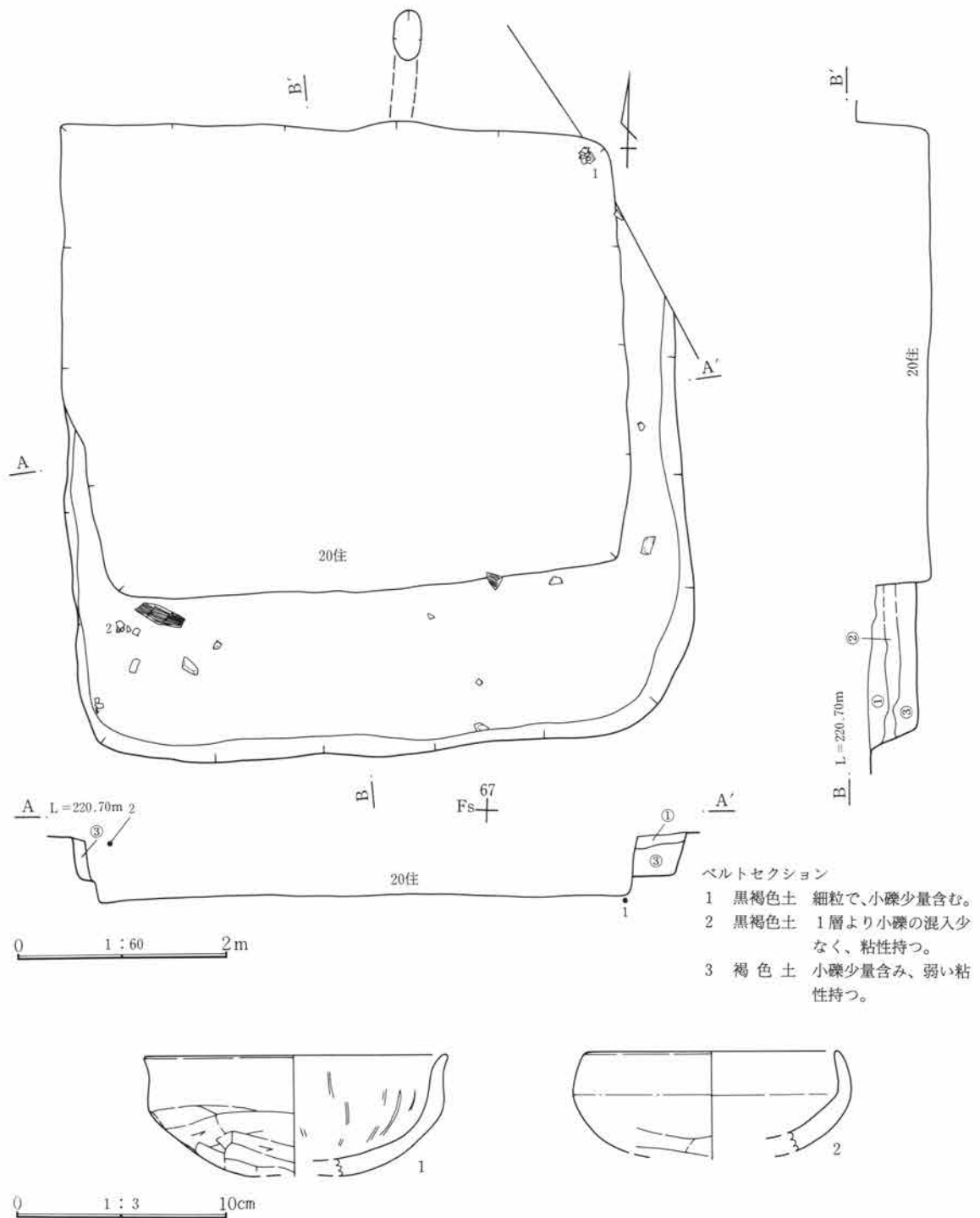
周溝 なし。 柱穴 なし。

出土遺物 住居の大半を破壊されているため、遺物量は少ない。器種も、土師器坏(1・2)の他は、甕などの破片が若干出土したのみである。

掘り方 なし。

調査所見 床面上から少量の炭化材が出土しており、焼失住居と考えられる。住居の時期は出土遺物から、古墳時代後期と推定される。

第3章 検出された遺構と遺物



第177図 F-52号住居跡、出土遺物実測図

F-52号住居出土遺物観察表

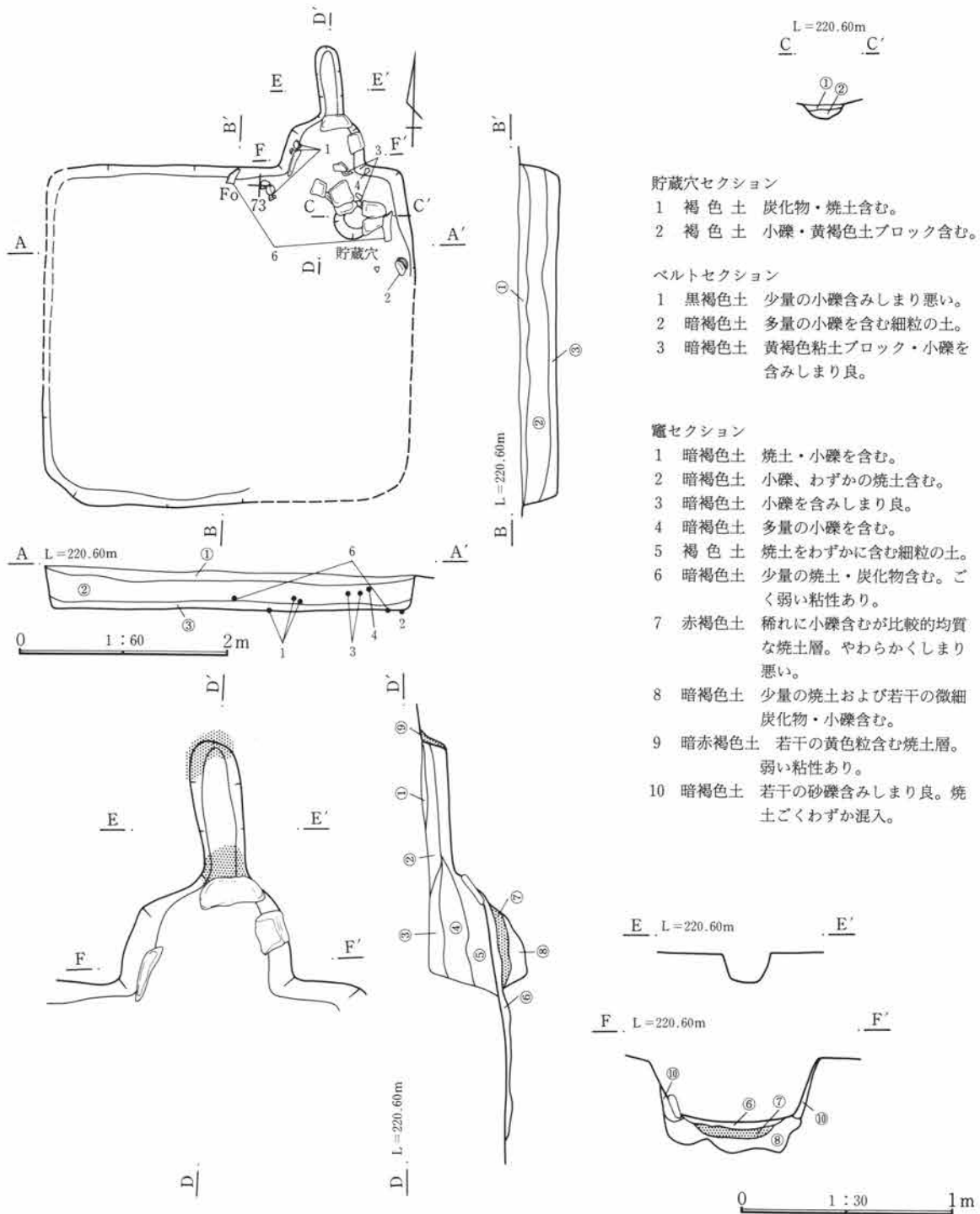
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	貯蔵穴内 1/2	口 14.2 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③浅黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ後放射状へら磨き。	
2	土師器 坏	+38cm 口~体部 破片	口 (11.6) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。	

F-54号住居跡 (PL23・113)

位置 Fn-72・73グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.37m 重複 F-25・41住を切る。

規模と形状 調査時に重複する住居との前後関係を誤認したため、西壁の一部と南東隅付近の形状は推定である。それによると長辺3.52m・短辺3.18mとやや長辺が長いが、平面形状は正方形に近い。壁は残存する部分ではほぼ直進し、崩落や線形の乱れは少ない。竈は北側に築かれる。

床面 地山の黄褐色砂質土を掘り込んで床面を形成。



第178図 F-54号住居跡

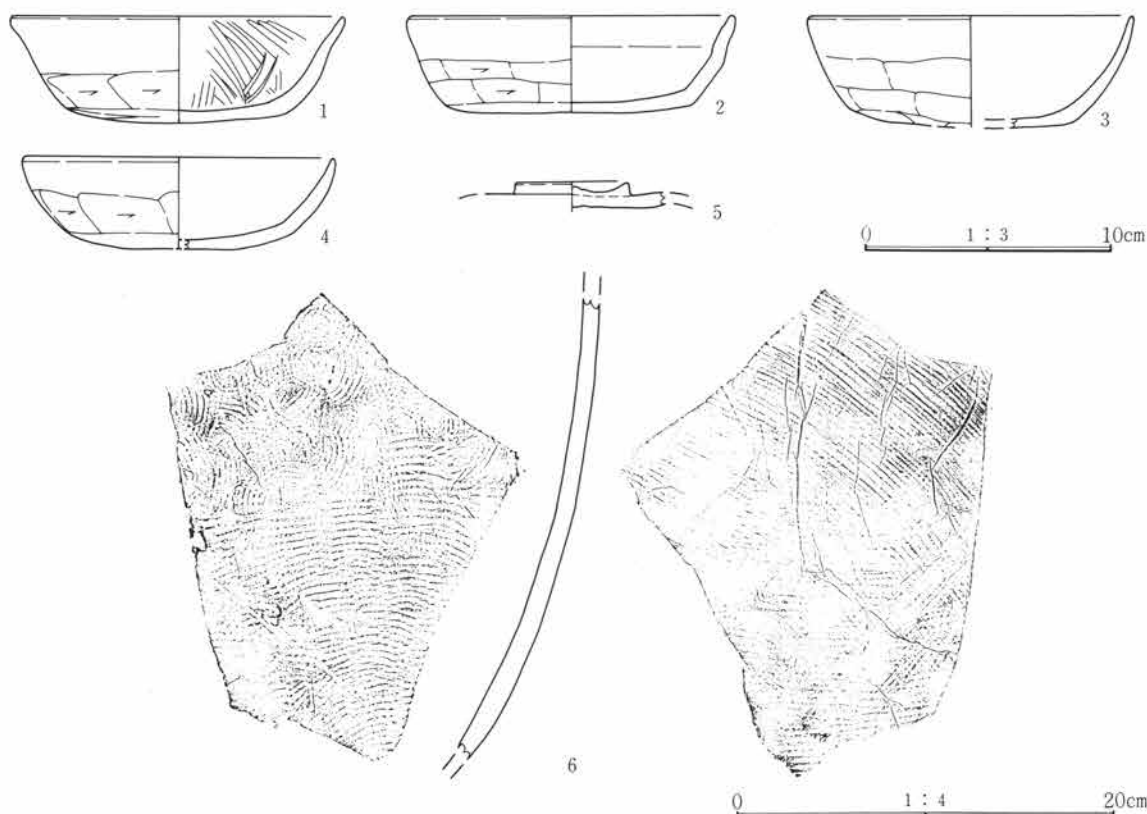
第3章 検出された遺構と遺物

竈 住居北壁の東側隅近くに所在。袖は作られず、燃烧部が住居域外に張り出す形態をとる。焚口幅65cm・燃烧部長57cm。竈奥壁と燃烧部の内壁の一部に、板状の砂岩が立てられている。竈前部には、同じように使われていたと推測される砂岩が散乱している。煙道は、上部は削平されているが、下半部は残存している。煙道部長62cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状はほぼ円形で、規模は小さい。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物は非常に少なく、竈周辺に散在する。器種は土師器坏(1~4)と須恵器甕の胴部破片(6)が出土。また覆土中より須恵器蓋のつまみ部分(5)がえられている。掘り方 なし。

調査所見 住居・竈形状と出土遺物より、奈良時代の住居と推測される。



第179図 F-54号住居出土遺物実測図

F-54号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 完形	口 12.8 底 8.7 高 4.2	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面へラ削り。内面 横ナデ後へラ磨き。	
2	土師器 坏	床密着 完形	口 12.8 底 9.7 高 3.8	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面へラ削り。内面 横ナデ。	
3	土師器 坏	床密着 ⅔	口 12.9 底 (8.8) 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面へラ削り。内面 横ナデ。	
4	土師器 坏	+7cm ⅔	口 (12.3) 底 (8.9) 高 3.6	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面へラ削り。内面 横ナデ。	
5	須恵器 蓋	覆土 つまみ部	口 — 摘 4.4 高 —	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。つまみ貼付。	

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
6	須恵器 甕	床密着 胴部破片	口 — 底 — 高 —	①微砂粒・黒色粒子 含む ②堅緻 ③灰色	外面平行タタキ目。内面上部は同心円状、下部は青海波状のあて目。	内面にスリ面有 転用品か

F—55号住居跡 (PL24・113)

位置 Fo—73グリッド 主軸方位 N—48°—E 残存壁高 0.28m 重複 F—49住に切られる。

規模と形状 長辺3.30m・短辺2.58mの横長の長方形。周壁は一部で若干外反し、特に北隅で大きい。住居北東壁の突出部分を竈としたが、焼土などはみられず、確実に竈であるかどうかは不明である。主軸はかなり東にふれ、他の住居に比べるとかなり特異な方向を指している。

床面 地山を掘り込んで平坦な床面形成。

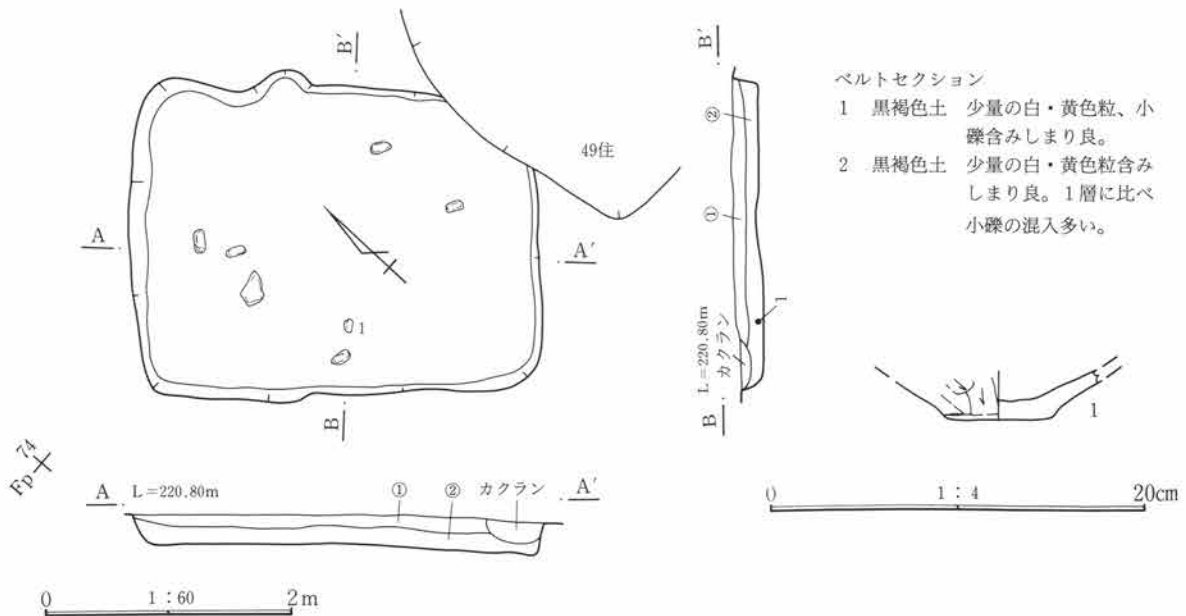
竈 住居北東壁の中央より北側に所在。住居の確認時に平面形状から竈と考えたが、焼土などはみられず竈とする確証は得られていない。焚口幅33cm・燃焼部長18cmと他に比べてかなり小さく、この点からも竈とするには疑問が残る。

貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物は非常に少なく、土器片は土師器甕の底部破片(1)が1点出土したのみである。この他には、床面直上から自然礫が6点出土している。

掘り方 なし。

調査所見 時期不明。住居ではない可能性も考えられる。



第180図 F—55号住居跡、出土遺物実測図

F—55号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 甕	+6cm 底部	口 — 底 6.0 高 —	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい赤褐色	外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。内面にヘラ状工具のあたり。	

F-56号住居跡 (PL24・113・114)

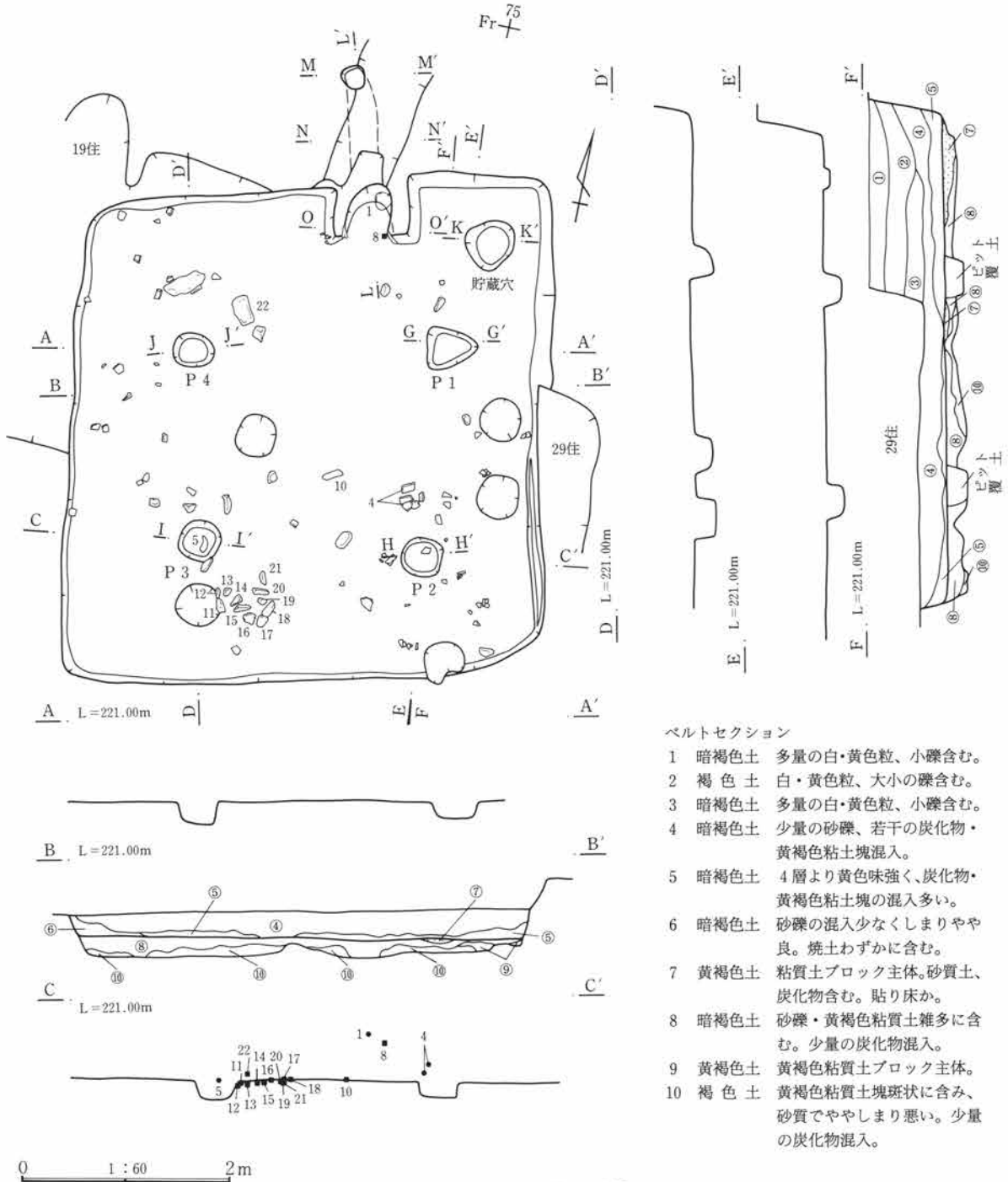
位置 Fq-75グリッド 主軸方位 N-17°-W 残存壁高 0.62m

重複 F-28・30住を切り、19・29住に切られる。

規模と形状 住居形状はほぼ正方形だが、やや菱形にゆがむ。長辺4.74m・短辺4.69m。重複する住居によってかなり削られているため周壁の残りは悪いが、ほぼ直進し線形の乱れは少ない。竈は北側に築かれる。

床面 不定形な掘り方に地山黄褐色粘質土の混土を埋め床面形成。一部粘質土主体とする貼り床もみられる。

竈 住居北壁の中央よりもやや東よりに所在。袖を住居内に作り付けた形態を呈する。焚口幅41cm・燃烧部



第181図 F-56号住居跡①

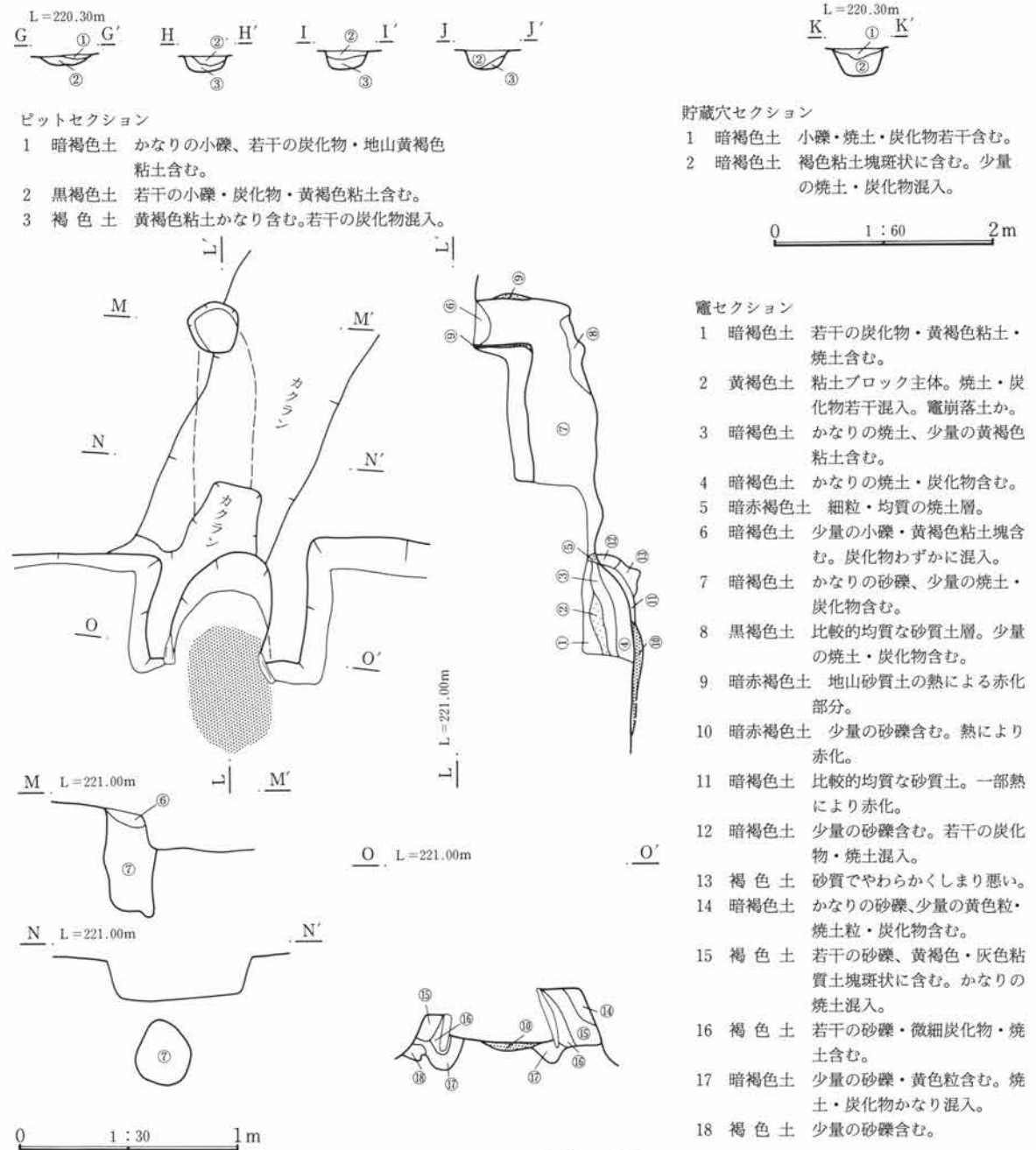
長58cm。両袖先端部の燃焼部側には、板状の砂岩を立てて袖石としてある。煙道の燃焼部側1/3は攪乱によって破壊されているが、煙出し部分を含む先端側は天井も崩落せずに残存。煙道部長113cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。周溝なし。柱穴 同規模の小ピット4基検出。ほぼ対角線上に位置する。

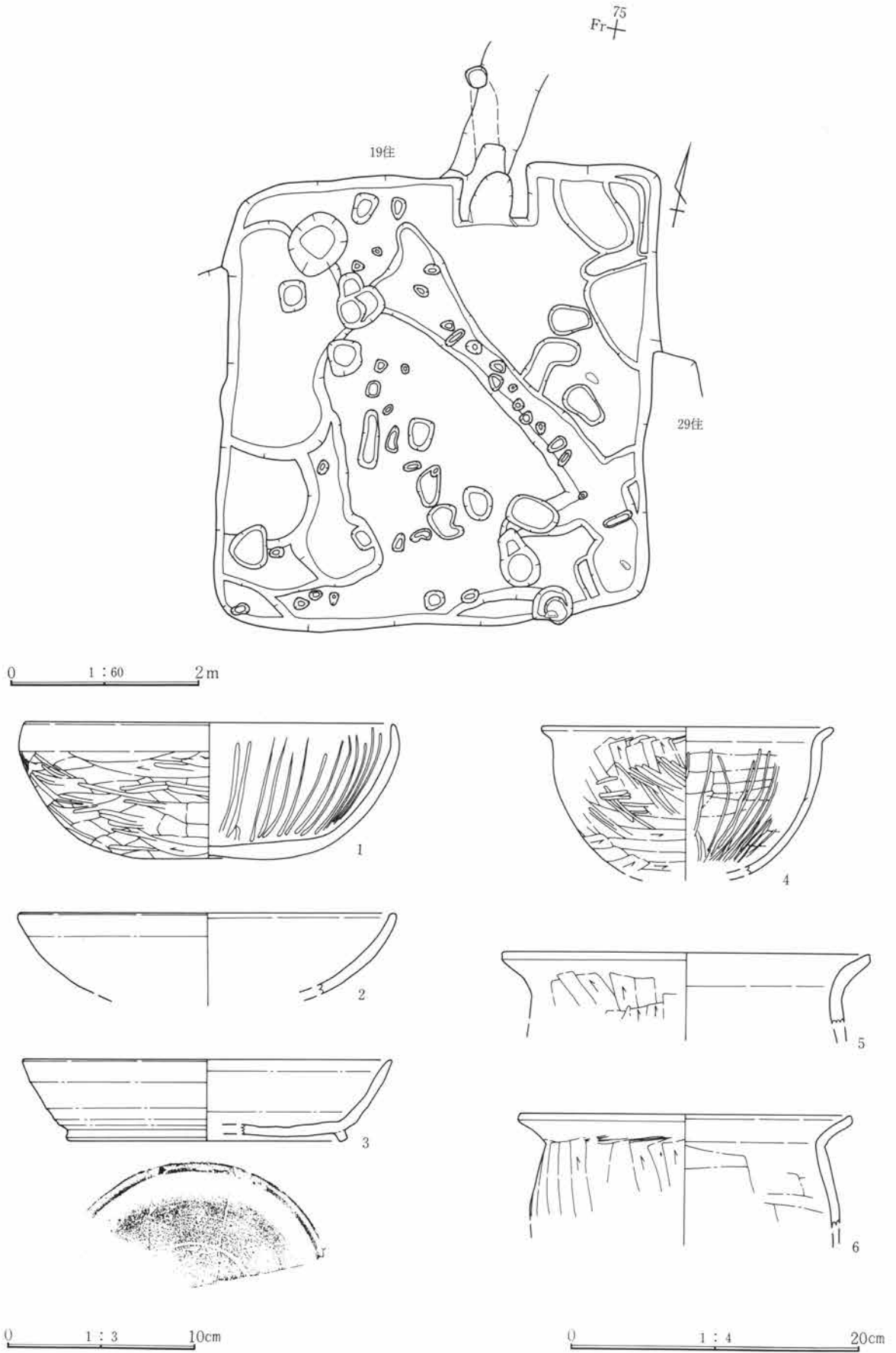
出土遺物 住居上部を他の住居に切られ、遺物量は非常に少なく、土師器坏(1)と鉢(4)・甕(5)の破片がみられたのみ。ただし、重複する住居の覆土中から、时期的に当住居に属すると考えられる遺物も出土。土師器坏(2)や甕(6)、須恵器高台付坏(3)・甕(7)などがある。この他、P3付近床面上からこもあみ石が12点(10~21)、P4付近から板状の礫素材の大型の砥石(22)、覆土上位から白玉が2点(8・9)出土。

掘り方 床面下5~15cmほどの深さの不規則な掘り方がみられる。

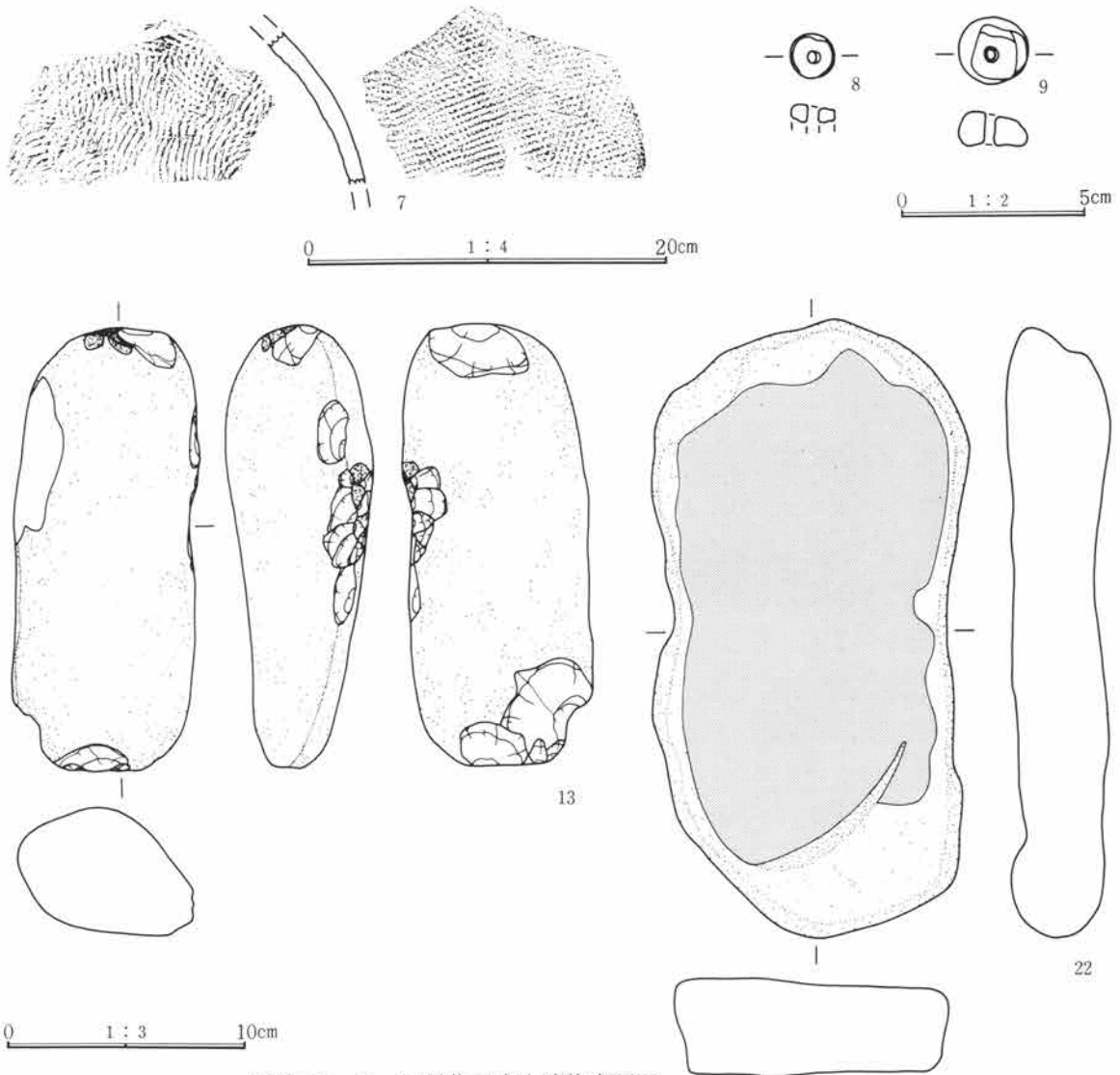
調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推測される。



第182図 F-56号住居跡②



第183図 F-56号住居掘り方、出土遺物実測図①



第184図 F-56号住居出土遺物実測図

F-56号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+42cm 2/3	口(19.2) 底— 高 7.0	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面横ナデ後放射状ヘラ磨き。	
2	土師器 坏	29住覆土 口~体部 上半1/2	口(18.6) 底— 高—	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。口縁端部わずかに内面側に肥厚。	
3	須恵器 高台付坏	29住覆土 口~底部 1/3	口(19.2) 底(14.4) 高 4.2	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り。貼り付け高台。	
4	土師器 鉢	+8cm 1/4	口(19.7) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ後放射状ヘラ磨き。	
5	土師器 甕	床密着 口縁破片	口(25.6) 底— 高—	①砂粒・赤褐色粒子 含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。外面口縁端部に明瞭な稜線。	
6	土師器 甕	29住覆土 口~胴部 上位1/2	口(23.1) 底— 高—	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。外面口縁端部に明瞭な稜線。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴	残存状態 備考	
				口	底			高
7	須恵器 甕	29住覆土 胴部破片	口 — 底 — 高 —	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰黄色		外面格子目状の叩き目、内面青海波文。		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
8	白玉	+36cm 1/2	1.2	1.2	(0.5)	(1.1)	滑石	裏側が大きく剥落している。側面に擦痕。孔の直径0.3cm。
9	白玉	覆土 完形	1.8	1.9	1.1	5.37	滑石	比較的大型で形状はかなり不揃い。側面に擦痕。孔の直径0.3cm。
10	こもあみ石	床密着 完形	19.0	6.6	5.4	958.8	変質安山岩	棒状の円礫。
11	こもあみ石	床密着 完形	19.3	8.5	4.8	999.0	粗粒安山岩	盤状の円礫。
12	こもあみ石	床密着 完形	16.3	8.1	5.8	950.3	変質安山岩	同上。
13	こもあみ石	床密着 完形	18.0	7.9	6.2	1194.2	変質安山岩	同上。上下両端に敲打痕有り。右側縁には一部調整加える。
14	こもあみ石	床密着 完形	16.3	8.1	3.5	587.7	溶結凝灰岩	盤状の円礫。両側の中央部に一部敲打の痕跡あり。
15	こもあみ石	床密着 完形	15.0	6.8	6.3	653.9	粗粒安山岩	盤状の亜角礫。
16	こもあみ石	床密着 完形	15.0	8.8	4.0	727.2	粗粒安山岩	盤状の円礫。
17	こもあみ石	床密着 完形	17.9	9.4	5.7	1156.0	粗粒安山岩	同上。被熱している。
18	こもあみ石	床密着 完形	15.6	7.4	2.5	366.9	粗粒安山岩	盤状の亜角礫。
19	こもあみ石	床密着 完形	18.9	7.6	5.0	1024.4	粗粒安山岩	棒状の円礫。上下両端に敲打の痕跡有り。敲石の転用品か？
20	こもあみ石	床密着 完形	16.1	7.0	6.4	1212.9	粗粒安山岩	棒状の円礫。被熱している。
21	こもあみ石	床密着 完形	15.4	8.3	6.7	891.3	粗粒安山岩	棒状の亜角礫。被熱している。
22	砥石	+7cm 完形	25.2	13.1	4.4	214.5	変質安山岩	盤状の亜円礫を素材とし、表面ほぼ全面に研磨痕。表面の凹凸によって強さに差。

F-58号住居跡 (PL24・115)

位置 Fs・Ft-75グリッド 主軸方位 N-S 残存壁高 0.13m 重複 なし

規模と形状 長辺5.81m・短辺4.38mの横長の長方形。東壁に比べ西壁がやや長い。上面をかなり削平されているため、周壁の残りは非常に悪い。竈は北側に築かれる。

床面 地山砂礫層を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。袖が住居内に作り出される形状を呈する。焚口幅53cm・燃烧部長60cm。煙道は削平されて残っていない。

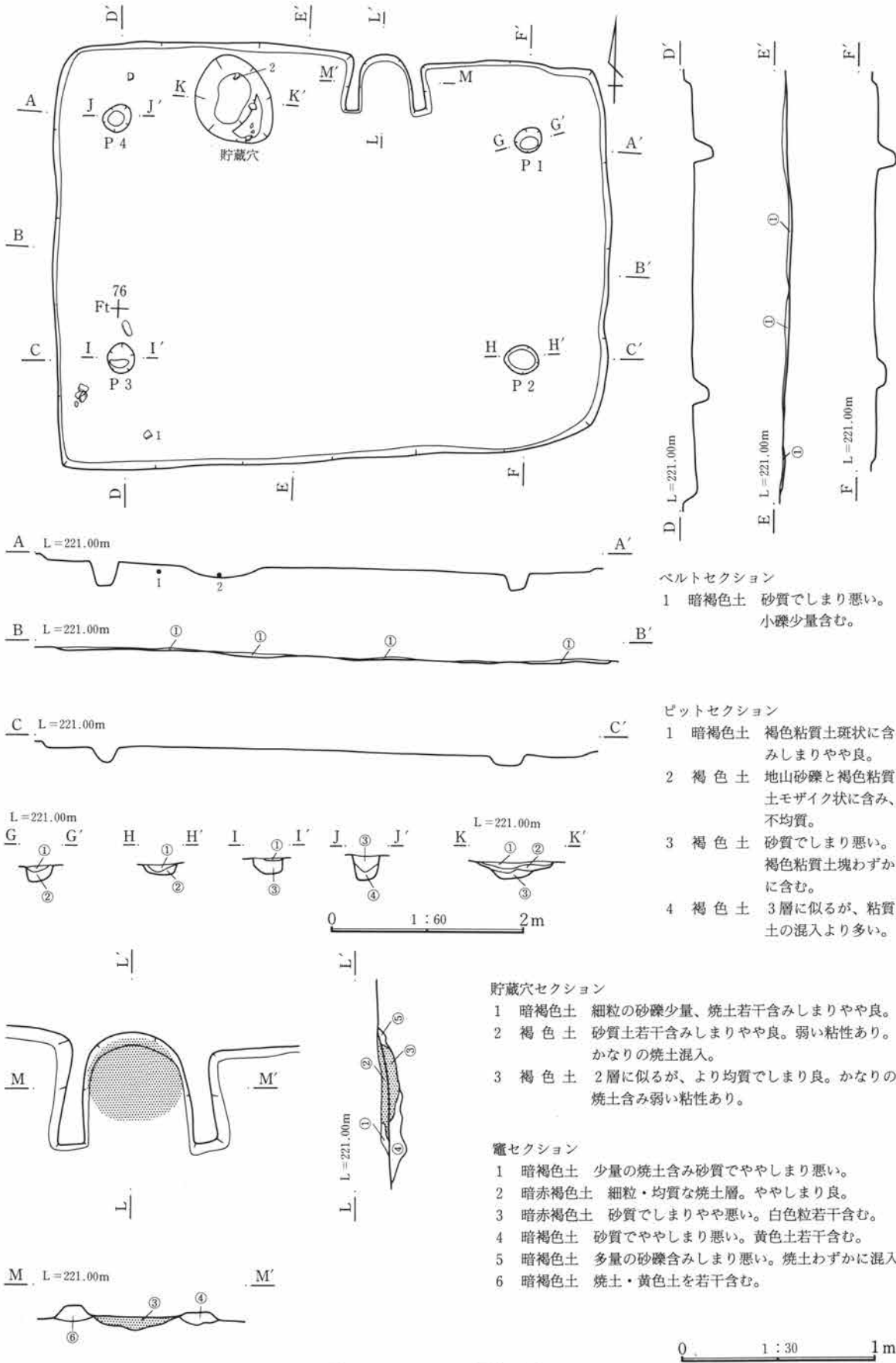
貯蔵穴 竈左側の北壁沿いに所在。主軸に対して斜めの楕円形を呈する。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上にあるが、比較的隅近くに位置する。

出土遺物 遺物は非常に少なく、貯蔵穴内と西壁近くから数点出土しただけである。器種も少なく、土師器坏(1・2)と甕の破片があるのみ。

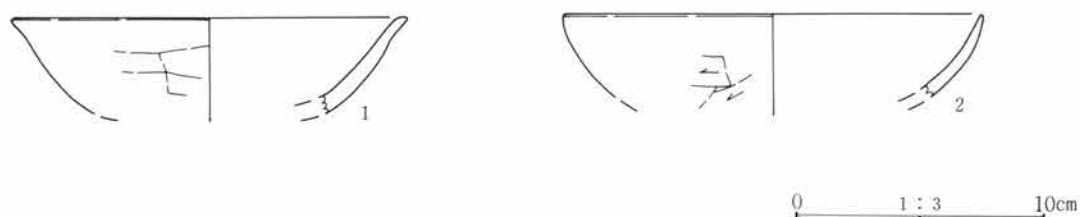
掘り方 なし。

調査所見 住居形状と出土遺物より、奈良時代の住居と推測される。



第185図 F-58号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第186図 F-58号住居出土遺物実測図

F-58号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/3	口(15.8) 底— 高—	①微砂粒(まれに小 礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。	器表面かなり摩滅
2	土師器 坏	貯蔵穴内 口～体部 破片	口(16.8) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デか。	器表面かなり摩滅

古墳～平安時代

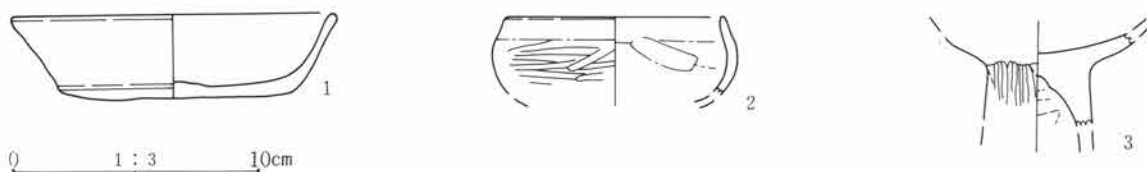
G-2 A号住居跡 (PL115)

位置 Ga-79グリッド 主軸方位 不明 重複 F-2 B住を切る。

規模と形状 2 B住の調査中に埋土中より多量の土師器が出土し、竈の痕跡かと思われる焼土も分布していた。このため、二つの住居が重複しているものと考え2 A住として取り上げた。ただし、調査時には平面・セクションともに、住居範囲等を確認できるような痕跡はみられなかった。床面、竈、貯蔵穴、周溝、柱穴、掘り方はいずれも不明。

出土遺物 2 A住居の覆土上位よりかなりの量の土師器が出土。多くは破片であったが、坏(1・2)・高坏(3)がある。

調査所見 住居の痕跡が平面・セクションともに確認できなかったこと、遺物が2 A住の覆土上位に集中して出土することなどから、本住居は2 A住の埋土を切って構築されたものの、掘り込みが浅く、明確な住居域を確定できなかったものと推測される。住居の時期は、出土遺物から古墳時代後期と推定される。



第187図 G-2 A号住居出土遺物実測図

G-2A号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	覆土 1/3	口(13.0) 底— 高 3.3	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。口縁部に比して体部が非常に浅く偏平。	
2	土師器 坏	覆土 口縁1/3	口(8.4) 底— 高—	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り後へら磨き 内面横ナデ。口縁部は内傾する。	

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
3	土師器 高坏	覆土 脚部上半 1/2	口— 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラ削り。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
4	鉄滓	覆土	8.6	6.6	4.0	224.0	破片	表面溶けてガラス状で粗砂粒付着。

G-3号住居跡 (PL24・115)

位置 Ge-81グリッド 主軸方位 N-97°-E 残存壁高 0.09m 重複 G-22住を切る。

規模と形状 一部調査区外にあたるため全体の形状は不明確だが、残存部分から、東西方向が長い長方形と推定される。長辺2.90m・短辺は現状で2.96m。東壁に比べ西壁がかなり短い。上部をかなり削平され、壁の残存状況は悪い。竈は東側にあったものと思われるが、削平され焼土を残すのみである。

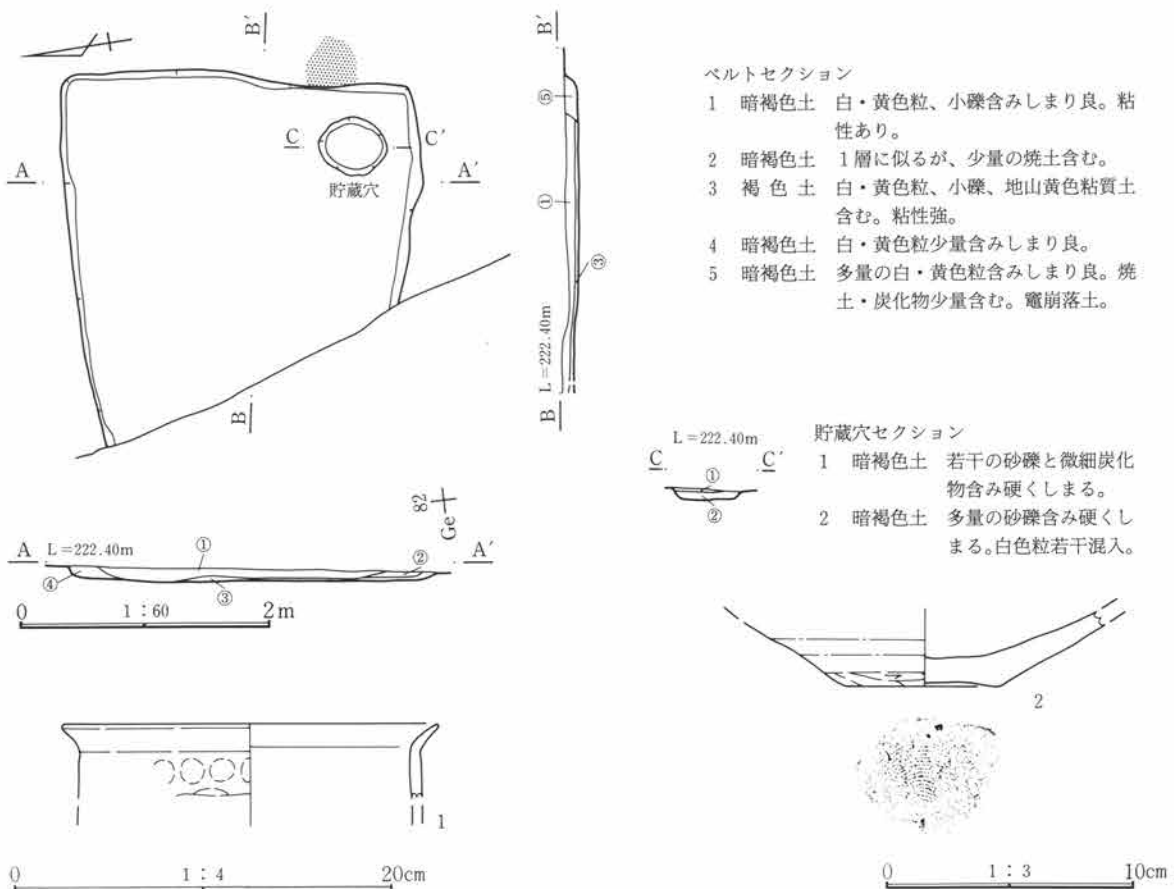
床面 地山黄色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居東壁の南よりの外側に焼土が分布。竈の残存部分と思われる。上部が削平された際に破壊されたものと推測される。

貯蔵穴 住居南東隅に所在。住居の長辺方向が長い楕円形で、かなり浅い。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物は非常に少ない。覆土中より土師器甕(1)、須恵器の皿(2)を含む土器片が数片得られたのみである。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物と住居形状・主軸方位より、平安時代の住居である可能性が高い。



第188図 G-3号住居跡、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

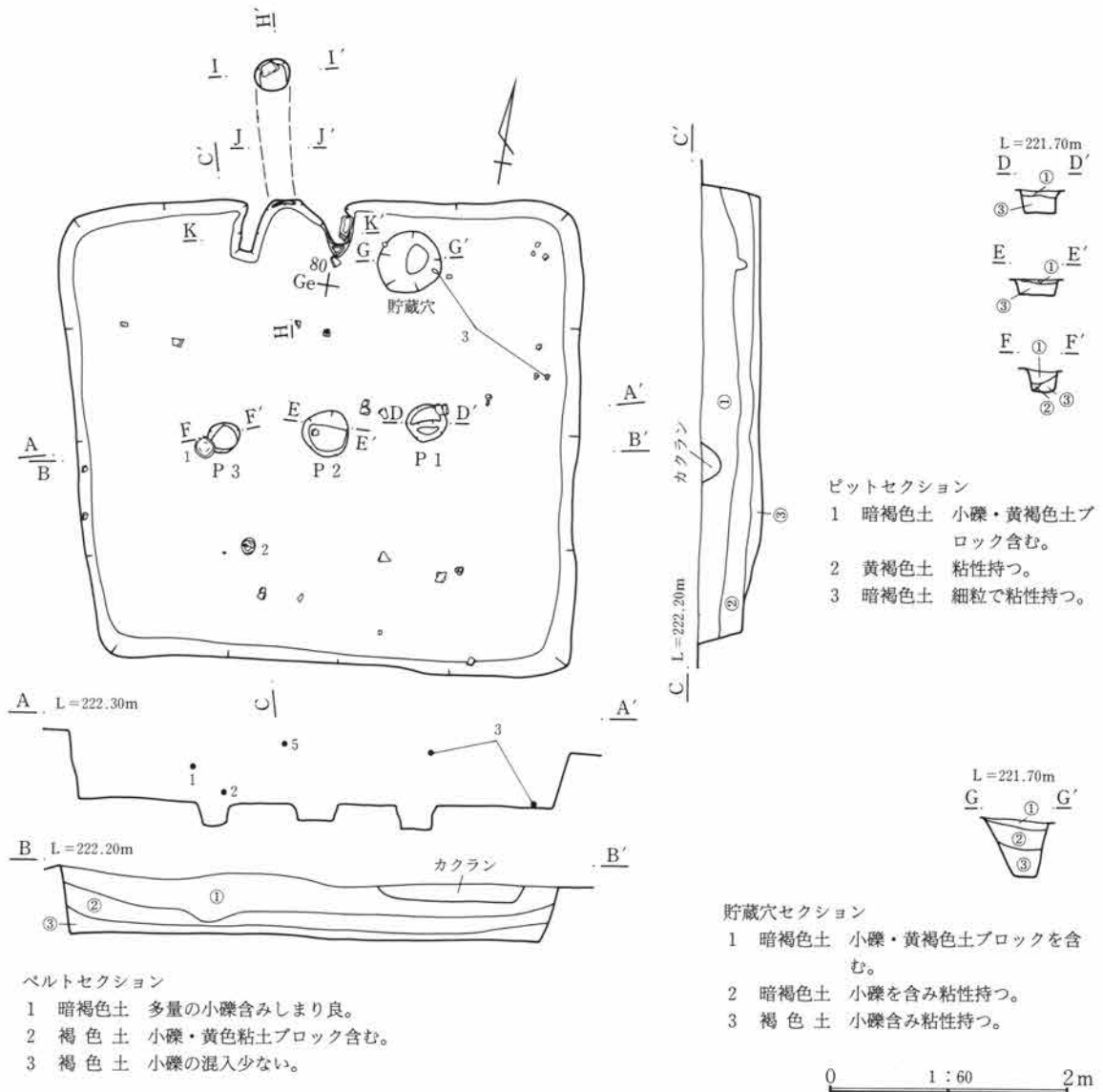
G-3号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 甕	覆土 口縁部破片	口(19.8) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、指頭圧痕有り。内面横ナデ。「コ」の字状の口縁。	
2	須恵器 皿	覆土 体～底部	口— 底(6.2) 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰黄色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り、切り離し後体部下位手持ちへら削り。	

G-4号住居跡 (PL24・115)

位置 Gd-79・80グリッド 主軸方位 N-12°-W 残存壁高 0.61m 重複 なし

規模と形状 形状は、長辺4.37m・短辺3.93mと、わずかに横長の長方形。若干ゆがんでおり、平行四辺形気味となっている。周壁はやや外反するが、線形の乱れは少ない。竈は北側に築かれる。



第189図 G-4号住居跡

床面 地山の黄褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

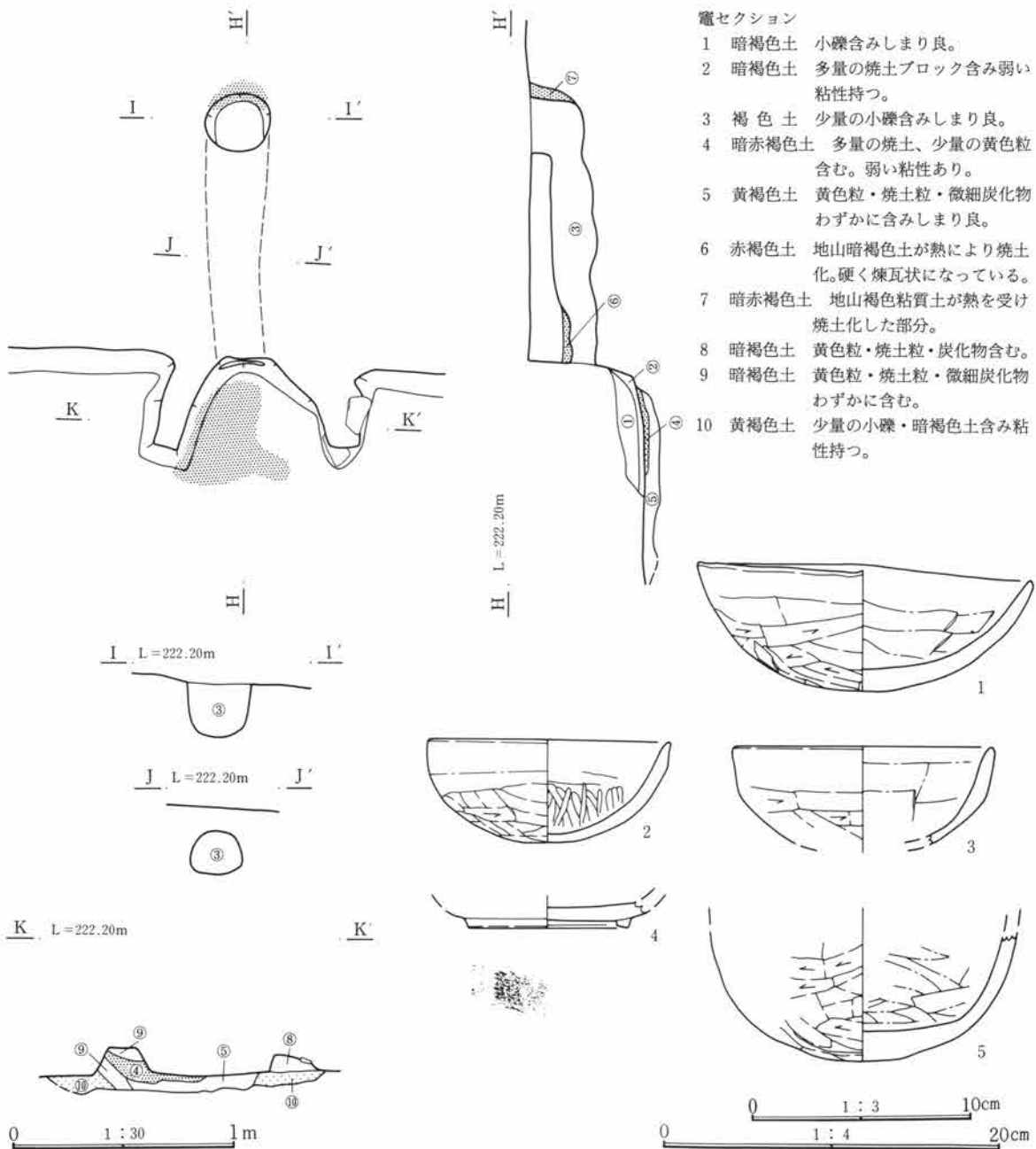
竈 住居北壁ほぼ中央に所在。袖が住居内に作り出され、焚口幅67cm・燃烧部長52cm。右袖先端燃烧部側に、板状の砂岩が袖石として据えられている。くりぬき式の煙道は、天井部分も残存。煙道部長118cm。

貯蔵穴 住居北壁際、竈の右側に所在。形状はほぼ円形で、上が広がった漏斗状を呈する。周溝 なし。

柱穴 3基の小ピット検出。住居のほぼ中央部分に、東西に3基対称に並んでいる。大きさ・深さともに類似するが、柱穴とするにはやや浅いか。

出土遺物 遺物量は少なく、住居内に散在する。器種は、土師器坏(1~3)・甕(5)、須恵器高台付坏(4)がある。掘り方 なし。

調査所見 古墳時代後期



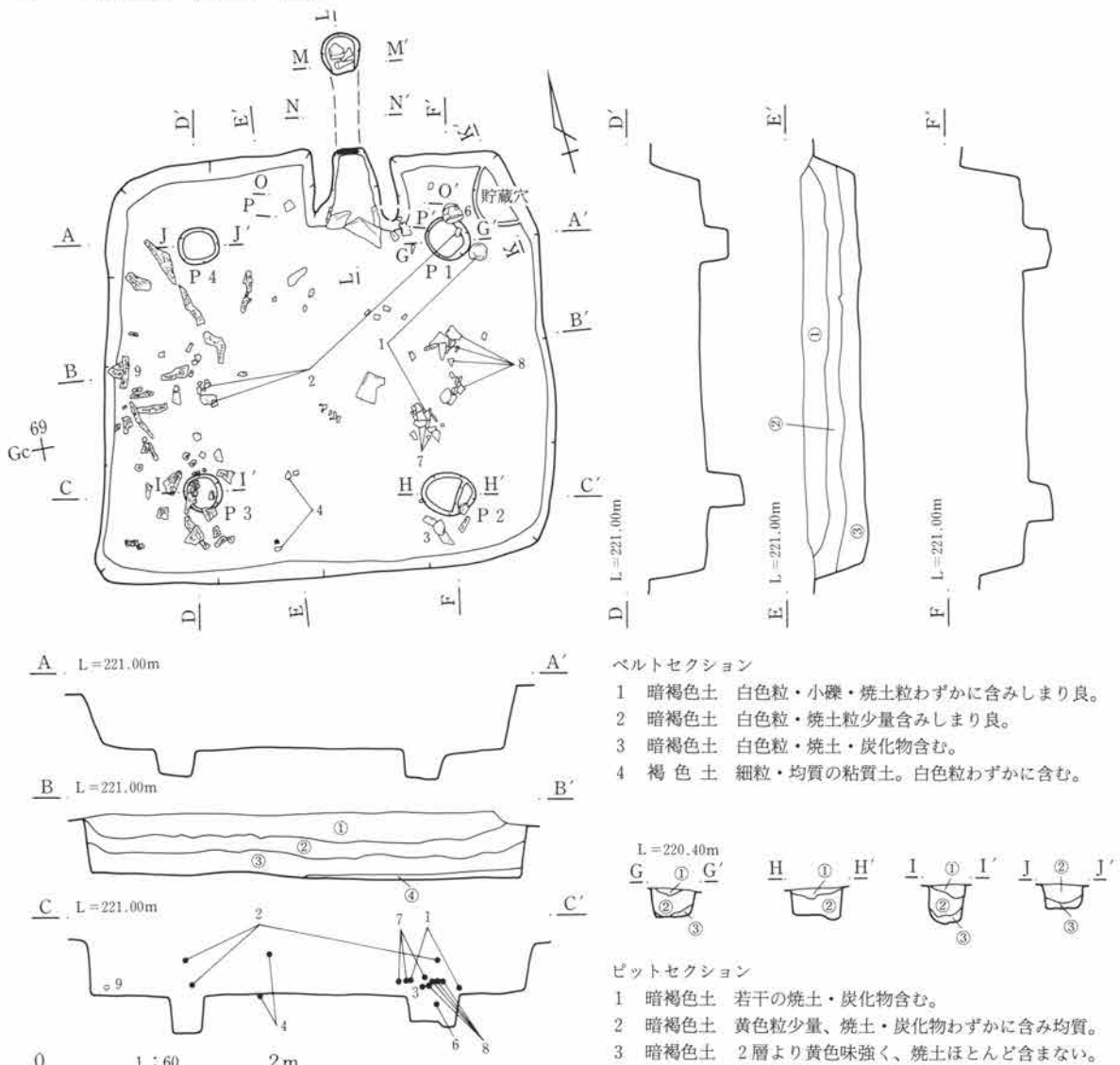
第190図 G-4号住居竈、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

G-4号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+32cm ほぼ完形	口 14.9 底 — 高 5.6	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③淡黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。器形かなり歪む。	
2	土師器 坏	+12cm 5/6	口 10.6 底 — 高 4.6	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③淡黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
3	土師器 坏	+3cm 口へ体部 1/4	口(11.4) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③淡黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	
4	須恵器 高台付坏	覆土 底部破片	口 — 底 (7.0) 高 —	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り。貼り付け高台。	
5	土師器 甕	カマド煙 道内 底部1/3	口 — 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③灰白色	外面ヘラ削り、内面ナデ。	

G-5号住居跡 (PL25・115)



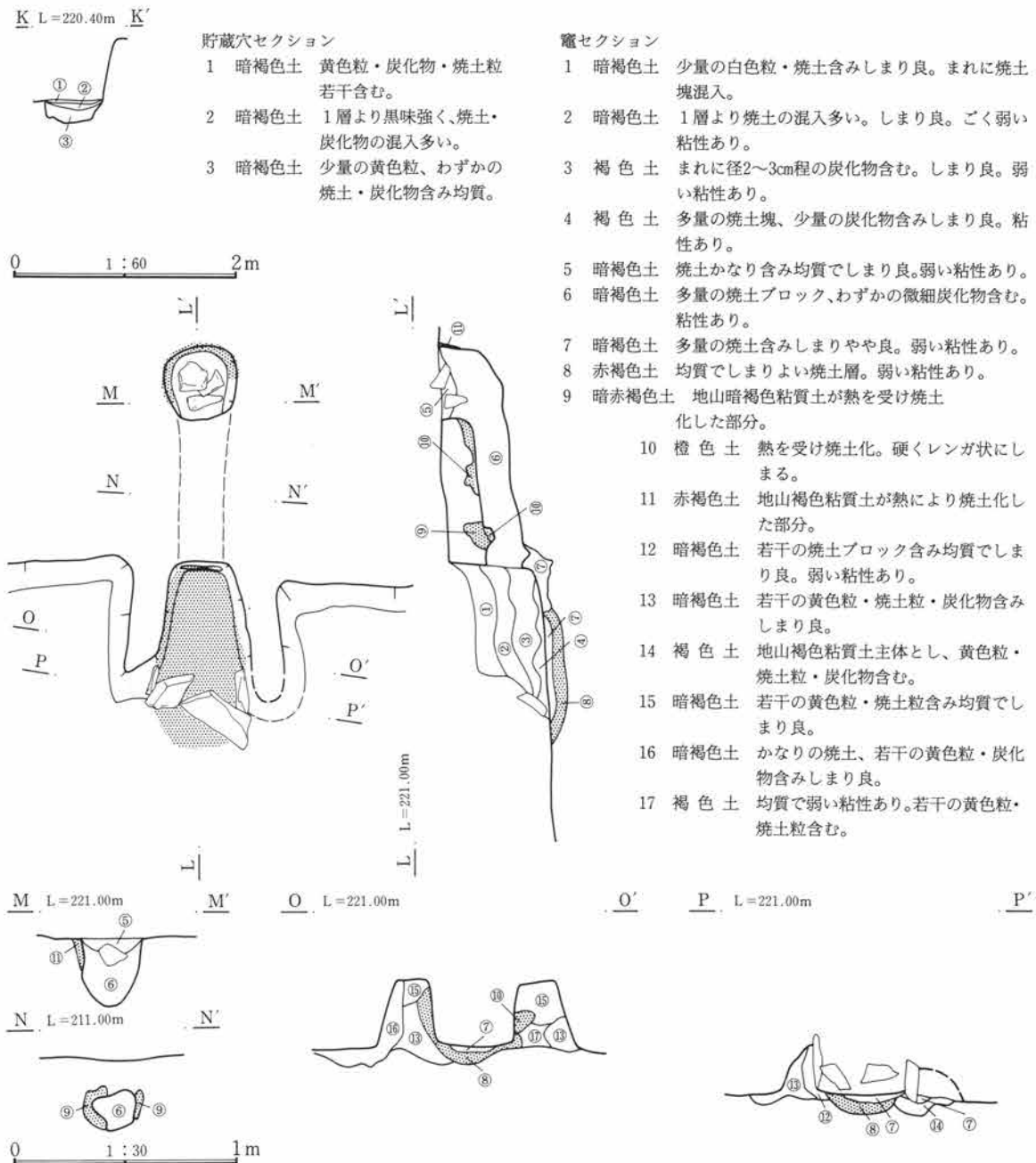
第191図 G-5号住居跡

位置 Gb・Gc-68グリッド 主軸方位 N-9°-E 残存壁高 0.57m 重複 なし

規模と形状 平面形状はほぼ正方形であるが、長辺3.84m・短辺3.52mと若干長辺方向が長い。南西隅がやや突出している。周壁は一部外反しているが、南西隅を除いて形状のゆがみは少ない。竈は北側に築かれる。

床面 地山暗褐色粘質土層を掘り込んで平坦な床面を形成。床面は地山に一致。

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅38cm・燃燒部長62cm。両袖の先端燃燒部側には、板状の砂岩が袖石として据えられている。燃燒部先端には、天井石として使用されていた厚みのある板状の砂岩が、二つに折れた状態で落ちている。煙道の残存状況は良好で、天井



第192図 G-5号住居竈

第3章 検出された遺構と遺物

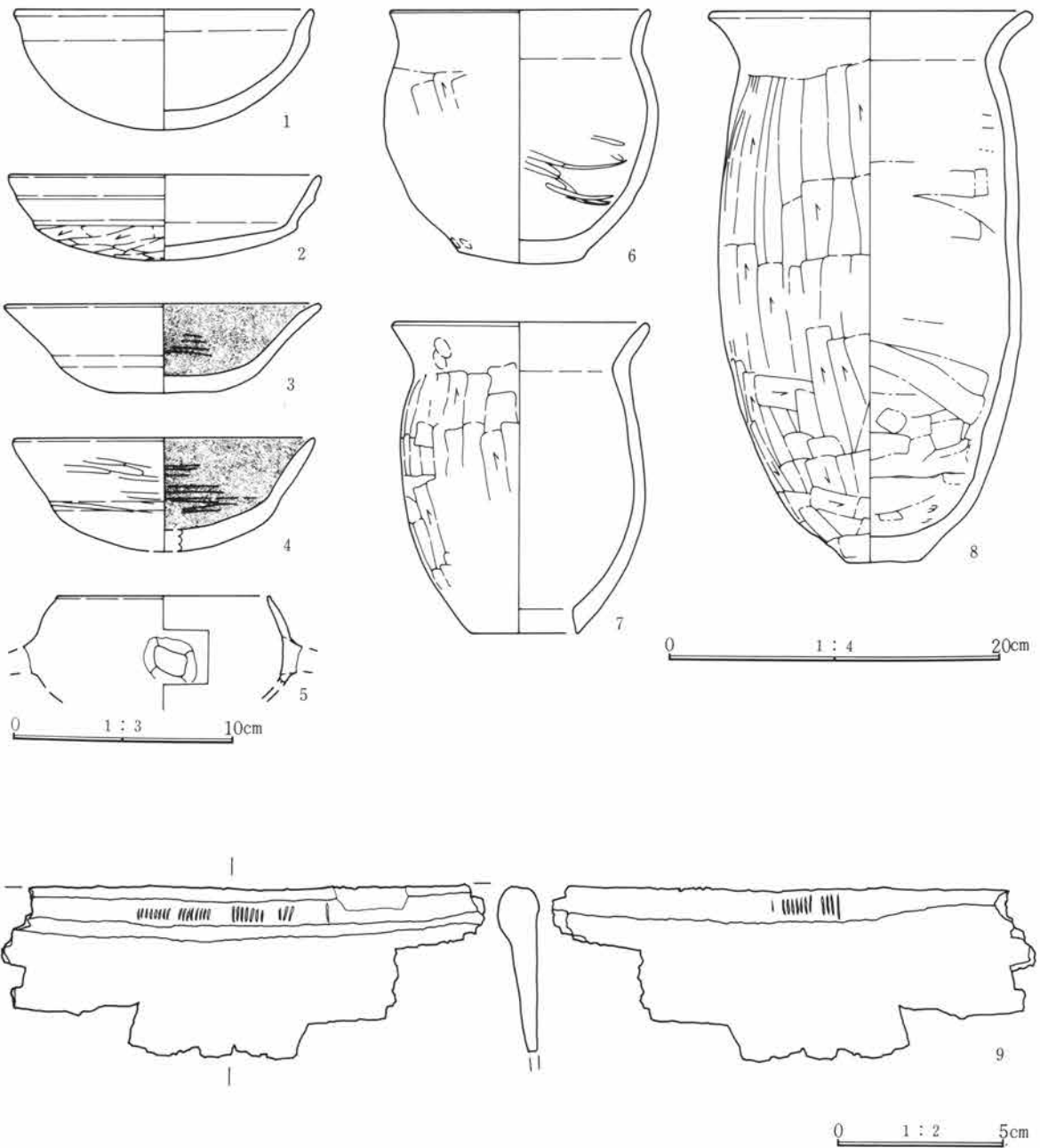
部分も崩落せずに残っている。煙道長96cm。煙道の立ち上がり部分には、砂岩の角礫が3個入っていた。ただし煙道埋土の上部にあり、竈に直接伴う可能性は低い。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。壁に張り付くような形で、半月形を呈する。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置する。

出土遺物 遺物量はあまり多くないが、床面近くから出土したものは完形近くまで復元可能なものが目立つ。器種としては、土師器坏(1~4)・小型甕(6)・甑(7)・甕(8)がある。この他に覆土中より突起の付いた小型の土師器(5)が出土。また、床面直上より炭化材がかなり見つかっており、それに混ざって炭化した木製の緯打具(9)が出土している。この他に、覆土中より鉄滓(10)が出土。掘り方 なし。

調査所見 多量の炭化材が出土していることから、焼失住居と考えられる。古墳時代後期。



第193図 G-5号住居出土遺物実測図

G-5号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)			①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
			口	底	高			
1	土師器 坏	+4cm 口縁部欠	口 13.2	底 —	高 5.3	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。器表面かなり剥落。	
2	土師器 坏	+9cm 2/3	口 14.0	底 —	高 4.8	①均質な細砂含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	内面・口縁部外面に漆状の付着物の痕跡
3	土師器 坏	+6cm 1/3	口(14.2)	底 —	高 3.9	①均質な細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ後へラ磨き。	内面黒色処理
4	土師器 坏	床密着 1/4	口(13.5)	底 —	高 —	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ後へラ磨き、体部外面へラ削り後ナデ。内面ナデ後へラ磨き。	内面黒色処理
5	土師器 不明	覆土 口～体部 1/3	口(9.4)	底 —	高 —	①砂粒わずかに含む ②良好 ③橙色	口縁は内湾し、端部でわずかに直立。胴部中位につまみ状の突起、先端欠損、単位不明。口縁外面横ナデ、胴部外面へラ削り後ナデ、内面横ナデ。	住居に伴わない可能性有り
6	土師器 小型甕	床密着 ほぼ完形	口 15.4	底 7.4	高 15.0	①粗砂粒含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、下部に指頭圧痕。胴部内面横ナデ後へラ磨き。	
7	土師器 甕	+11cm 口～底部 2/3	口 15.1	底(6.2)	高 18.4	①粗砂粒含む ②良好 ③淡橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	
8	土師器 甕	+7cm 2/3	口 19.4	底 4.4	高 32.6	①粗砂粒・赤褐色粒 子含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。内面下位に底部との接合痕。	
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	残存状況	特徴	
9	木器 緯打具	+6cm	14.5	5.1	1.2	1/2	焼けて炭化。片側は厚く丸みを帯び他方は薄い。厚い側の両面に糸の痕跡残る。樹種はカバノキ属類似種。	
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
10	鉄滓	覆土	4.6	4.6	2.3	6.0	破片	表面は溶けてガラス状。内部は発泡している。

G-6号住居跡 (PL25・116)

位置 Gc-71グリッド 主軸方位 N-5°-E 残存壁高 0.24m 重複 なし

規模と形状 長辺3.83m・短辺3.09mの横長の長方形。周壁はほぼ直進し、線形の乱れは少ない。主軸はわずかに東にふれる。竈は北に築かれる。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の中央よりも若干東側に所在。袖が住居内に作り出される。焚口幅38cm・燃燒部長47cm。煙道は下半部のみ残存。煙道長47cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状はほぼ円形。周溝 なし。

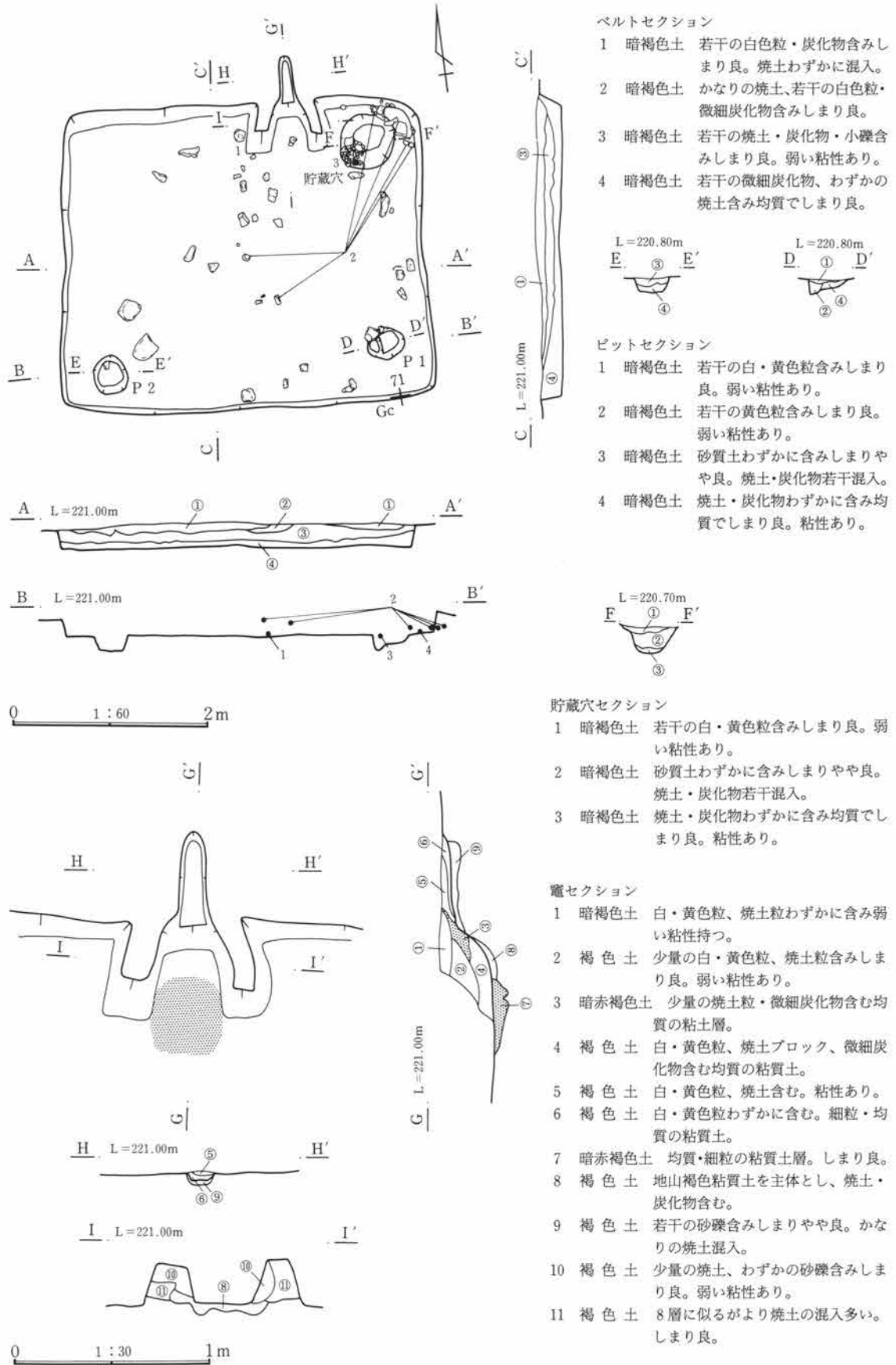
柱穴 住居の南東・南西隅付近より2基の小ピット検出。いずれもかなり浅く、他の柱穴も発見されなかった。

出土遺物 出土遺物は少ない。土器片は竈と貯蔵穴周辺にややまとまる傾向がみられ、竈左わきの床面上から須恵器蓋(1)、貯蔵穴内より土師器小型甕(3)などが出土している。この他に土師器甕(4)と床面よりやや上位から小型甕(2)が出土。また、比較的多数の自然礫が住居内に散在している。

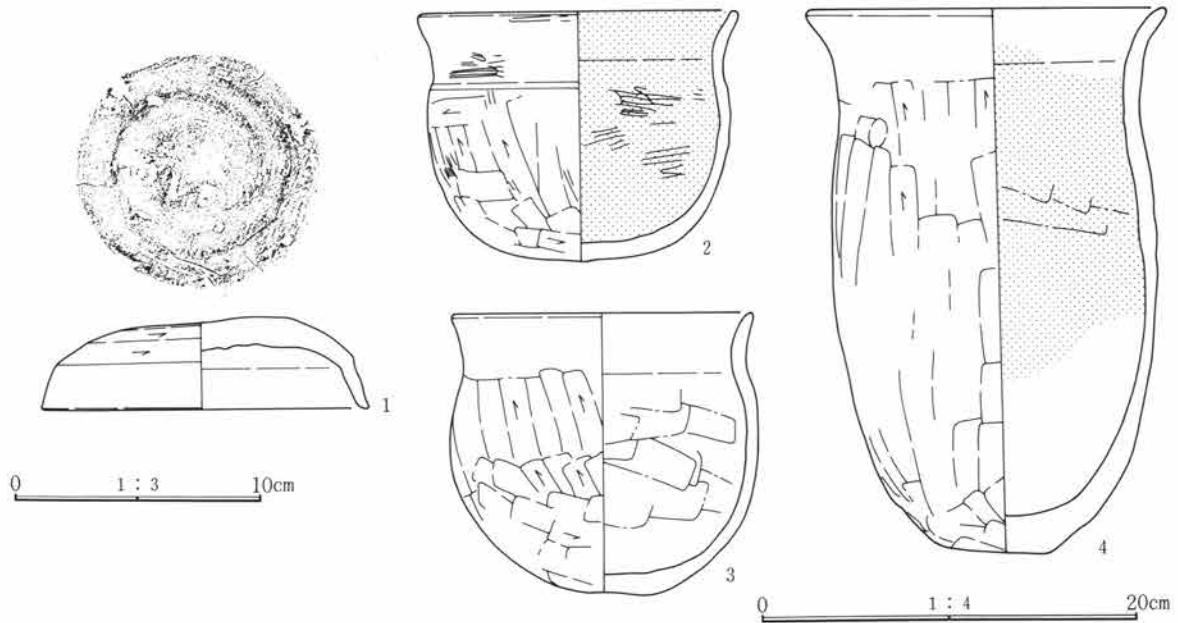
掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。

第3章 検出された遺構と遺物



第194図 G-6号住居跡



第195図 G-6号住居出土遺物実測図

G-6号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	床密着 1/5	口(13.0) — 高 3.6	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。天井部右回転の回転ヘラ削り。	
2	土師器 小型甕	+6cm 1/5	口(17.0) — 底 — 高 13.1	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き、内面横ナデ。 外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面横ナデ後ヘラ磨き	胴部内面に煤付着
3	土師器 小型甕	床密着 1/5	口 16.1 底 — 高 14.9	①砂粒(まれに小礫) 含む ②やや軟質 ③浅黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘ ラナデ。	
4	土師器 甕	床密着 口縁部一 部欠	口(19.0) 底 6.0 高 28.9	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。全体に器肉厚い。	胴部内面上半に弱い 煤付着

G-7号住居跡 (PL26・116)

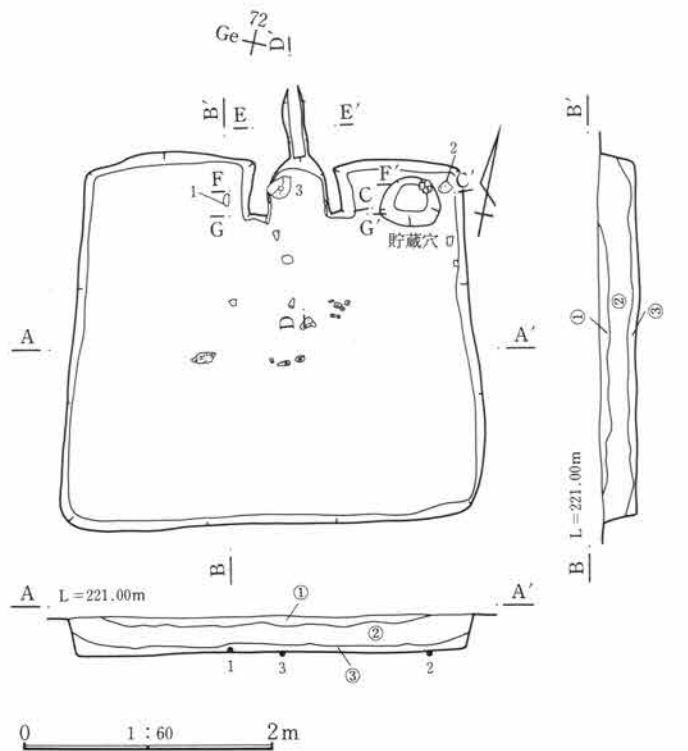
位置 Gd-71グリッド 主軸方位 N-12°-W 残存壁高 0.32m 重複 なし

規模と形状 平面形状はほぼ正方形であるが、長辺3.40m・短辺2.97mとわずかに横長である。周壁はほぼ直進し、崩落などによる線形の乱れも見られない。ただし、北壁に比べやや南壁が長く、若干形状が歪む。

床面 地山暗褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。床面は地山に一致。

竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。袖が住居内に作り出される。焚口幅48cm・燃烧部長49cm。両袖先端部の燃烧部側には、板状の砂岩が袖石として据えられている。また、燃烧部奥の左側に、土師器甕の底部(3)が伏せて置かれており、支脚として利用されていたものと思われる。煙道は上部と先端部が削平されており、燃烧部側の底部が一部残るのみである。煙道の現存長は65cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居長辺方向がやや長い楕円形。



周溝 なし。 柱穴 なし。

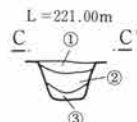
出土遺物 遺物量は非常に少なく、竈周辺にわずかに散在する。先述の土師器甕の他には、土師器坏(1)・台付甕(2)がある。いずれも床面直上から出土である。

掘り方 なし。

調査所見 古墳時代後期。

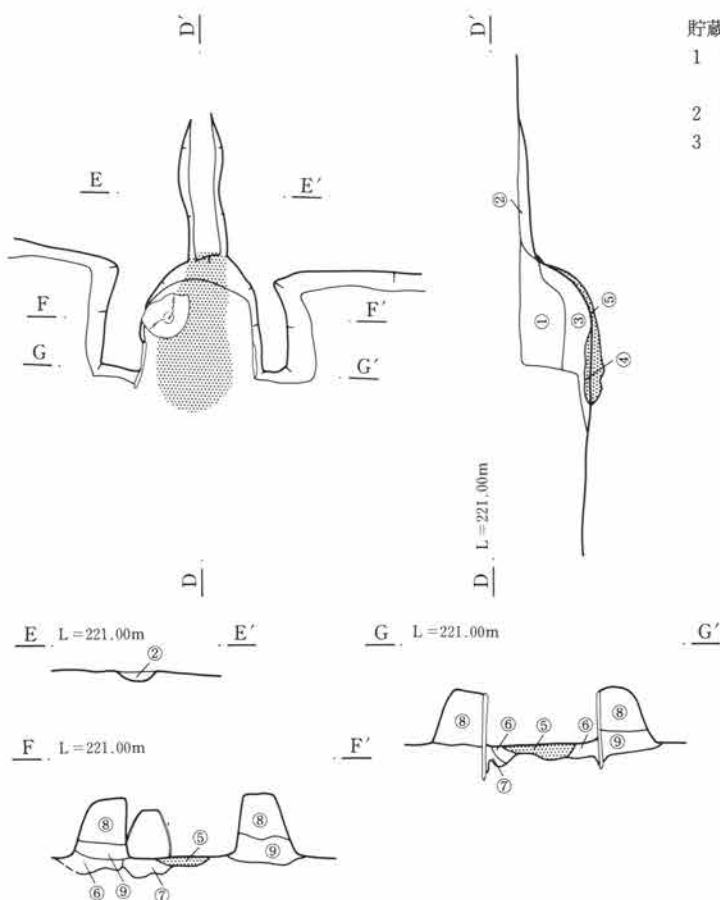
ベルトセクション

- 1 暗褐色土 若干の白色粒・微細炭化物含みしまりやや良。
- 2 暗褐色土 1層に比べ混入物の割合多い。焼土わずかに含む。
- 3 褐色土 若干の白・黄色粒、焼土、炭化物含みしまり良。



貯蔵穴セクション

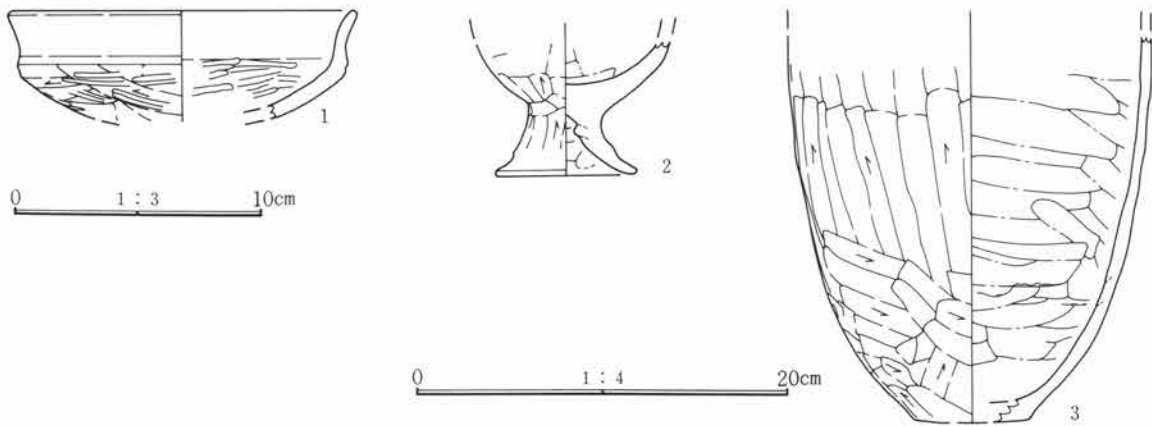
- 1 暗褐色土 白・黄色粒、微細炭化物、焼土粒わずかに含みしまり良。
- 2 暗褐色土 1層に似るがしまり悪く、弱い粘性持つ。
- 3 褐色土 均質・細粒の粘質土。



竈セクション

- 1 暗褐色土 白色粒・焼土粒・微細炭化物ごくわずかに含みしまり良。
- 2 暗褐色土 白色粒・焼土粒・小礫ごくわずかに含みしまり良。
- 3 暗褐色土 白色粒・焼土粒・炭化物少量含む。
- 4 橙色土 粘性を持つ焼土層。竈封土の崩落部分。
- 5 暗赤褐色土 少量の黄色粒含む焼土層。粘性あり。
- 6 褐色土 細粒の砂礫・黄色粒を少量含む。粘性あり。
- 7 褐色土 6層に似るが、焼土粒を少量含む。
- 8 暗褐色土 白・黄色粒、砂礫を少量含みしまり良。
- 9 褐色土 白・黄色粒、細粒の砂礫、焼土粒を少量含みしまり良。

第196図 G-7号住居跡



第197図 G-7号住居出土遺物実測図

G-7号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 口～体部 ⅓	口(14.0) 底— 高—	①微砂粒・赤褐色粒 子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面横ナデ後ヘラ磨き。	
2	土師器 台付甕	床密着 底～台部	口— 底(7.5) 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。台部裾内外面横ナデ、他外面ヘラ削り、内面ナデ。	
3	土師器 甕	カマド内 胴下半～ 底部⅓	口— 底(6.0) 高—	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り。内面横ナデ、接合痕有り。	

G-8号住居跡 (PL26・116)

位置 Gd-69グリッド 主軸方位 N-3°-E 残存壁高 0.42m 重複 9住に切られ、32住を切る。

規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、長辺2.45m・短辺2.53mと若干短辺が長い。周壁はほぼ直進し、線形の乱れはない。竈は北側に築かれる。他と比較してかなり小さな住居である。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで床面を形成。南西隅方向がやや高い。床面上に焼土・炭化物が散在。

竈 住居北壁の中央よりわずかに東側に所在。住居内に袖が作り付けられる形状をとるが、燃烧部は半分近くが住居域外に張り出す。焚口幅41cm・燃烧部長64cm。両袖の先端部には、長さ50cm・幅15cm程の棒状の円礫を中央で二分割したものが、袖石として据え付けられていた。煙道は上半部が削平されている。煙道部長65cm。

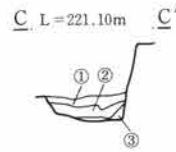
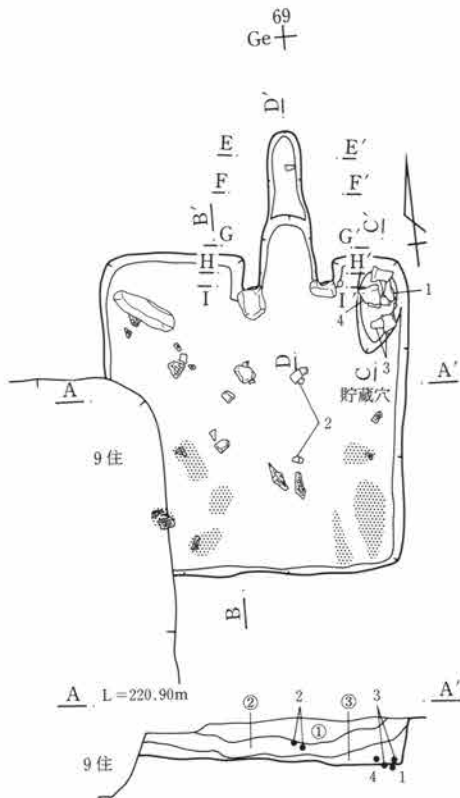
貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は楕円形で、長軸が住居の短辺方向に一致する。内部より中型の甕が出土している。

周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は少ないが、大半は貯蔵穴内や床面直上から出土している。器種は、土師器高坏(1)・小型甕(2・3)・甕(4)がある。

掘り方 なし。

調査所見 住居内の床面近くに炭化材が散在しており、焼失住居と考えられる。ただし遺物が少ないことから、住居廃棄後の焼失と推測される。古墳時代後期。

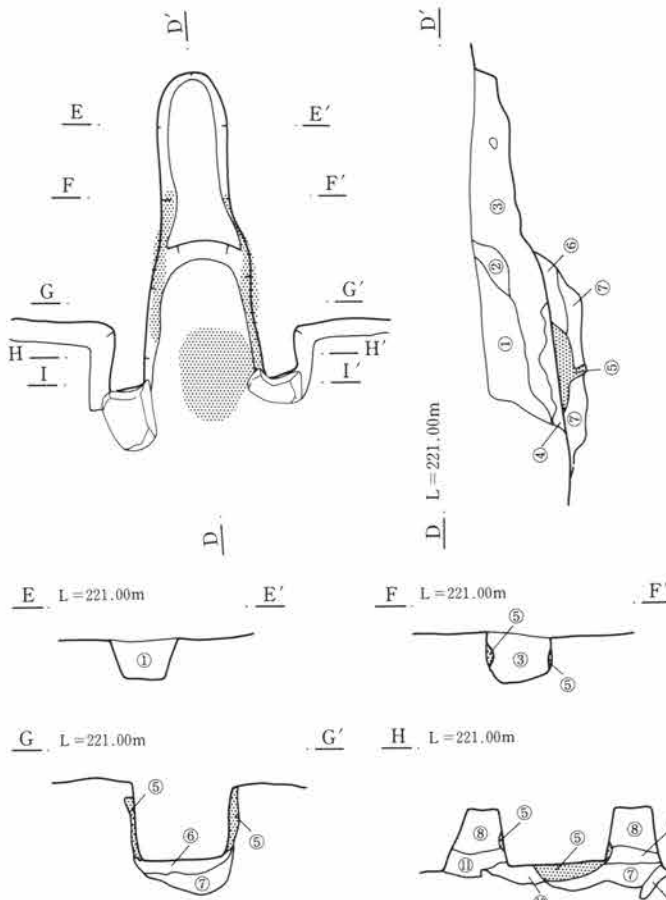


貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 均質でしまり良。かなりの焼土・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 少量の砂質土含みしまりやや良。かなりの焼土・炭化物混入。
- 3 褐色土 均質で粘性あり。焼土・炭化物わずかに含む。

ベルトセクション

- 1 暗褐色土 若干の白色粒・砂礫・焼土・炭化物含みしまり良。
- 2 暗褐色土 比較的均質でしまり良。焼土・炭化物わずかに含む。
- 3 褐色土 かなりの焼土・炭化物含みしまり良。弱い粘性あり。

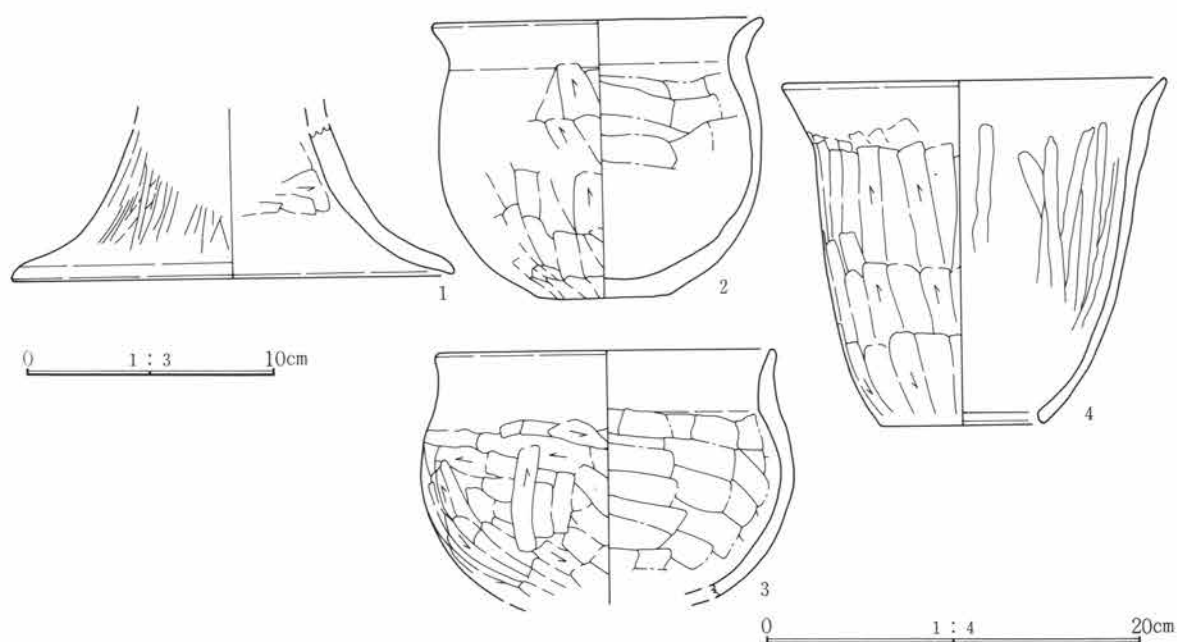


竈セクション

- 1 暗褐色土 かなりの焼土、少量の黄色粒・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 均質で粘性あり。かなりの焼土含む。しまり良。
- 3 暗褐色土 かなりの焼土、少量の炭化物含む。
- 4 褐色土 多量の焼土ブロック含みしまり良。炭化物わずかに混入。
- 5 暗赤褐色土 均質でしまり良い焼土層。粘性あり。
- 6 褐色土 多量の焼土含みしまり良。弱い粘性あり。
- 7 褐色土 白色粒・焼土粒わずかに含む。しまり良く粘性あり。
- 8 暗褐色土 少量の黄色粒・焼土・炭化物含みしまり良。
- 9 暗褐色土 若干の白色粒・焼土・炭化物含みしまり良。粘性あり。
- 10 暗褐色土 黄色粒・焼土粒わずかに含みしまり良。弱い粘性あり。
- 11 褐色土 かなりの焼土塊含みしまりやや良。若干の炭化物混入。
- 12 暗褐色土 少量の焼土・炭化物含みしまりやや良。



第198図 G-8号住居跡



第199図 G-8号住居出土遺物実測図

G-8号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 高環	貯蔵穴内 脚部下半	口 — 底 (17.4) 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	脚部裾内外面横ナデ。他外面ヘラ削り後ヘラ磨き 内面ヘラ削り。	
2	土師器 小型甕	+14cm 口～底部 2/3	口 (17.4) 底 (7.0) 高 14.7	①細砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	底部外面に被熱の痕 跡。
3	土師器 小型甕	貯蔵穴内 口～胴部 2/3	口 (17.8) 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	口縁外面に一部煤状 の炭化物付着
4	土師器 甕	貯蔵穴内 ほぼ完形	口 20.3 底 8.5 高 18.2	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ後ヘラ磨き。	

G-9号住居跡 (PL27・116・117)

位置 Gd-69グリッド 主軸方位 N-4°-E 残存壁高 0.48m 重複 G-8・32住を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形。長辺4.30m・短辺3.42m。周壁はほぼ直進するが、西壁に比べ東壁がやや長い。竈は北側に築かれる。

床面 床面はほぼ平坦。北側のごく一部で地山褐色粘質土が床面となっているが、他は下位のG-32号住の埋土となっている。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。両袖が住居内に作り出される。焚口幅53cm・燃焼部長63cm。右袖の先端燃焼部側には、袖石として板状の砂岩が据え付けられている。煙道はくりぬき式で、天井部分も崩落せずに残存している。煙道長91cm。

貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。形状は住居の長辺方向がやや長い楕円形で、二段の掘り込みを持つ。

周溝 なし。 柱穴 なし。

第3章 検出された遺構と遺物

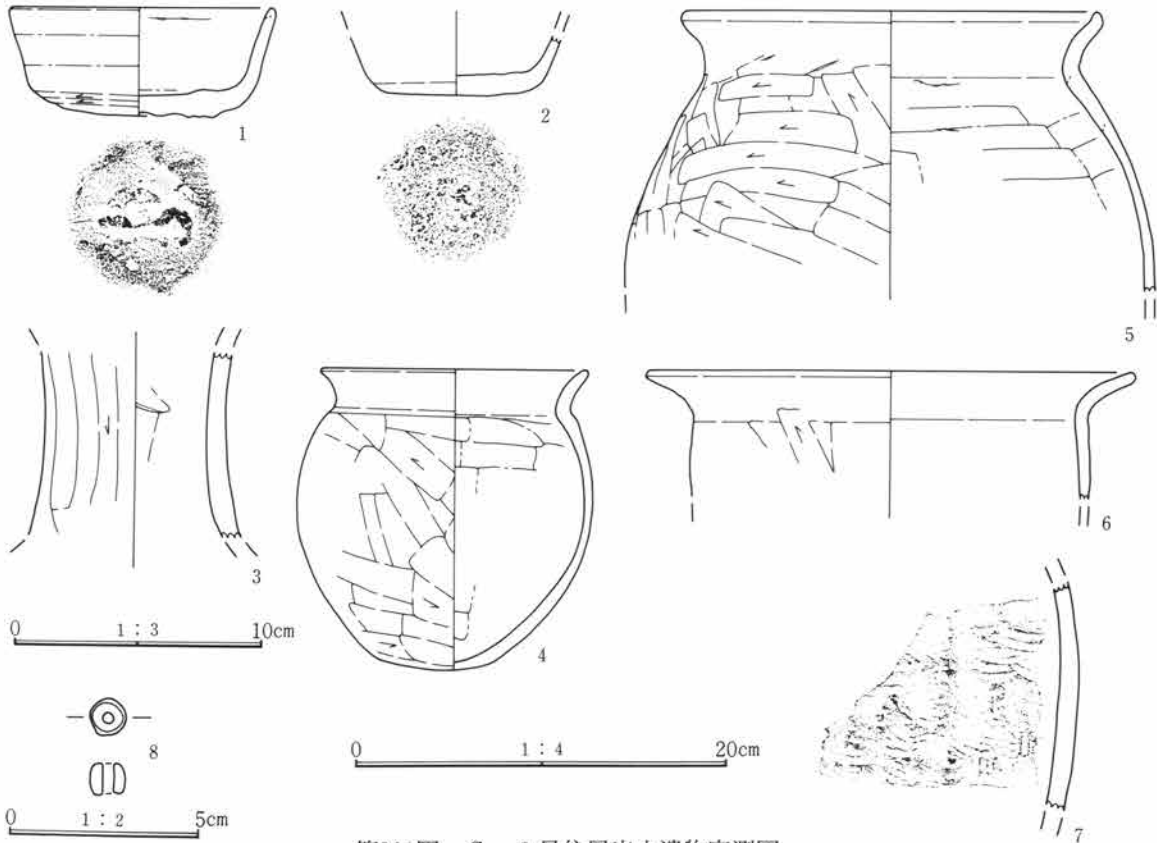


第200図 G-9号住居跡

出土遺物 遺物はあまり多くなく、貯蔵穴および竈周辺より出土している。器種は、須恵器坏(1・2)・甕(7)、土師器高坏(3)・小型甕(4)・甕(5・6)がある。また滑石製の白玉(8)も出土。この他に比較的多量の礫が出土しているが、その多くは竈の袖石や天井石に多用される板状、もしくは角礫状の砂岩である。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



第201図 G-9号住居出土遺物実測図

G-9号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	+15cm 2/5	口(10.3) 底 6.0 高 4.3	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。体部下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面に接合痕。	
2	須恵器 坏	+32cm 体部下位 ～底部	口 — 底 5.9 高 —	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ削り。	
3	土師器 高坏	+13cm 脚部上半 1/4	口 — 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	内外面ヘラ削り。	
4	土師器 小型甕	貯蔵穴内 2/3	口(14.2) 底 6.5 高 15.9	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
5	土師器 甕	床密着 口～胴部 上半	口 21.8 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
6	土師器 甕	カマド内 口縁1/3	口(26.0) 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

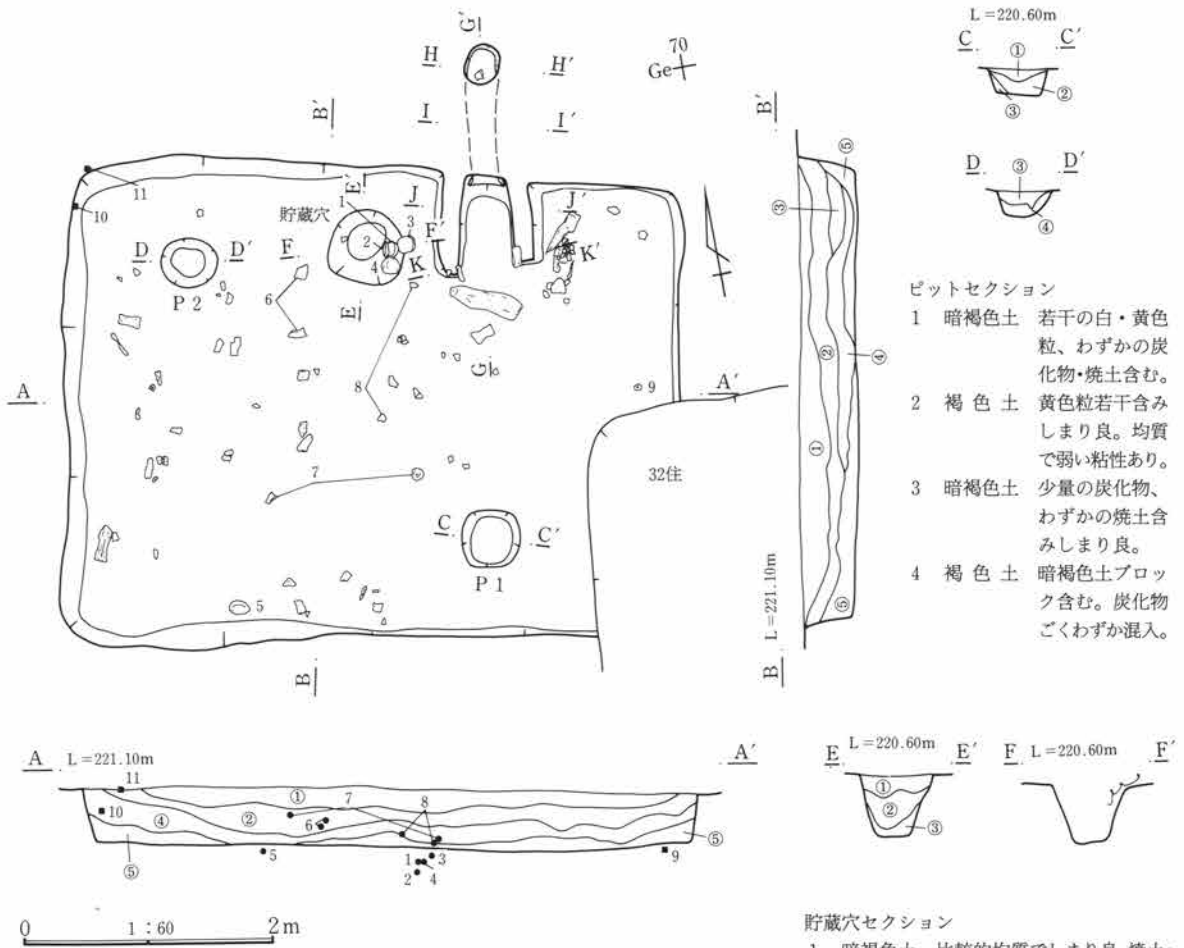
第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
7	須恵器 甕	+23cm 胴部破片	口— 底— 高—	①細砂含む ②堅緻 ③灰黄色	叩き後外面ナデ。外面に平行叩き目、内面青海波文。	内面に研磨面あり転用品か		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
8	白玉	掘り方内 完形	全長	幅	厚さ	重量		

G-10号住居跡 (PL27・28・117)

位置 Gd-70グリッド 主軸方位 N-14°-E 残存壁高 0.48m 重複 32住に切られる。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺5.06m・短辺3.87m。住居西半の壁はやや外反しているが、線形の乱れは少ない。竈は北側に築かれる。



第202図 G-10号住居跡

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

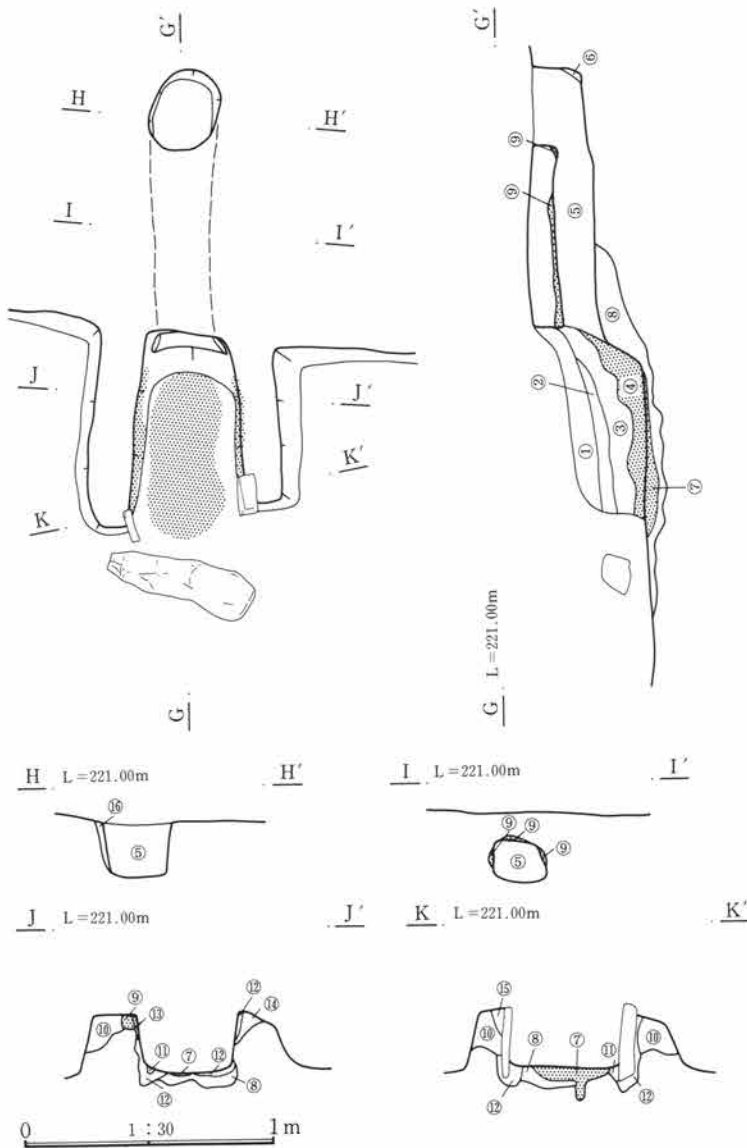
竈 住居北壁の中央よりもやや東よりに所在。住居内に袖が作り付けられる。焚口幅42cm・燃烧部長66cm。両袖の先端燃烧部側には、袖石として板状の砂岩が据えられている。また燃烧部の前部には、天井石として利用されていたと思われる角礫状の砂岩が、床面よりも浮いた状態で出土している。煙道はくりぬき式で、天井部分も崩落せずに残存している。煙道長110cm。

貯蔵穴 住居北壁沿いのほぼ中央部、竈の左側に所在。形状はほぼ円形。埋め土上部より完形に近い土師器坏が4点(1~4)、折り重なるようにして出土。竈脇におかれていたものが流れ込んだのであろうか。

周溝 なし。 **柱穴** 2基の小ピットを検出したが、位置的にみて柱穴とは考えられない。

出土遺物 遺物量はあまり多くなく、住居内に散在する。器種は、先述の土師器坏のほか、土師器坏(5)・高坏(6・7)・小型甕(8)がある。また、床面上より紡錘車が1点(9)、また北西隅の覆土上位より白玉が2点(10・11)出土している。 **掘り方** なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居とわかる。

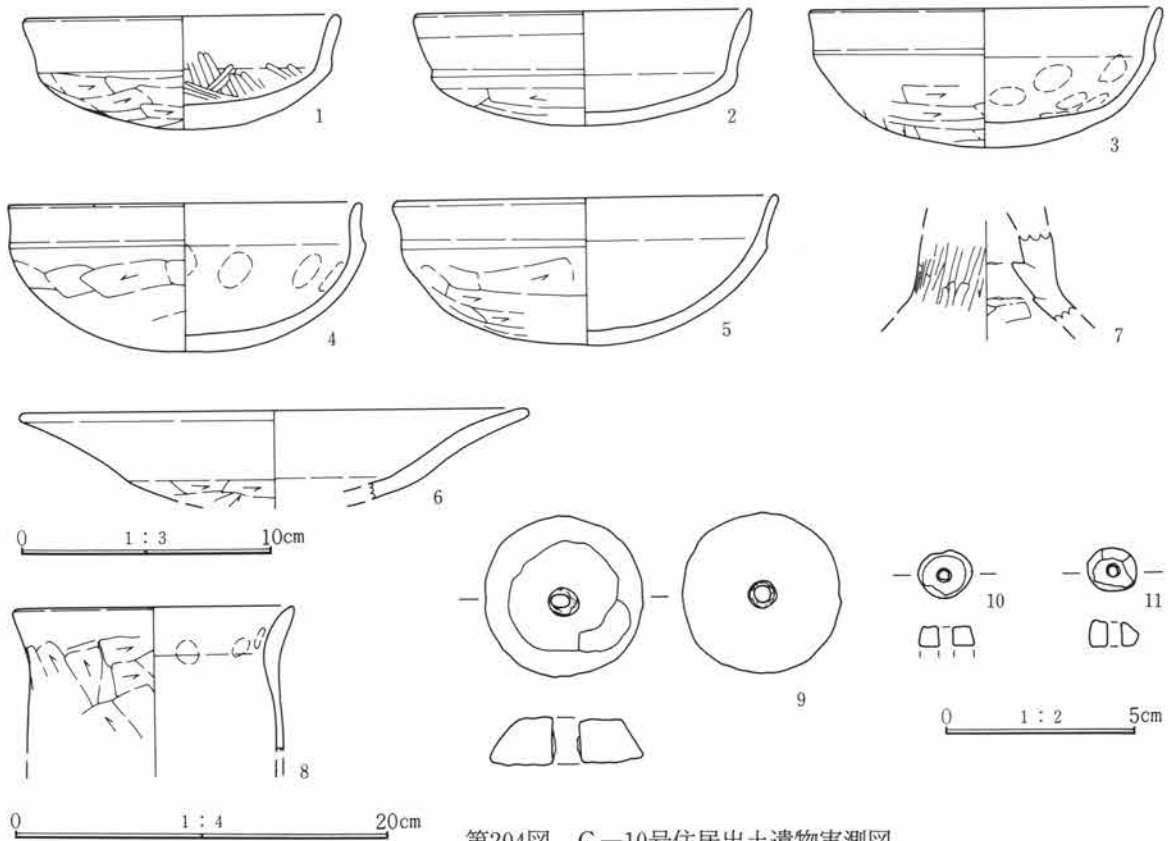


竈セクション

- 1 褐色土 若干の白色粒・焼土含みしまり良。弱い粘性あり。
- 2 褐色土 少量の焼土、若干の炭化物含みしまり良。
- 3 褐色土 かなりの焼土含みしまりやや良。少量の炭化物混入。
- 4 暗赤褐色土 焼土主体とししまりやや良。少量の炭化物混入。
- 5 暗褐色土 かなりの焼土、若干の白色粒、わずかの炭化物含む。
- 6 暗褐色土 地山褐色粘質土を主体とし、若干の焼土含む。
- 7 赤褐色土 均質でしまり良い焼土層。一部暗褐色土ブロック混入。
- 8 暗褐色土 細粒・均質で弱い粘性あり。かなりの焼土含む。
- 9 暗赤褐色土 地山土が熱により焼土化した部分。しまり良。
- 10 暗褐色土 若干の焼土・炭化物含みしまり良。ごく弱い粘性あり。
- 11 暗褐色土 少量の焼土粒・微細炭化物含みしまり良。
- 12 暗褐色土 黄色粒・焼土わずかに含みしまり良。ごく弱い粘性あり。
- 13 暗赤褐色土 均質な焼土層。しまり良くごく弱い粘性あり。
- 14 暗褐色土 細粒・均質でしまりやや良。焼土粒わずかに含む。
- 15 暗褐色土 均質でしまりやや良。やや砂質。焼土わずかに含む。
- 16 暗褐色土 地山土を主体とし焼土わずかに含む。しまり良。

第203図 G-10号住居竈

第3章 検出された遺構と遺物



第204図 G-10号住居出土遺物実測図

G-10号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	貯蔵穴上位 完形	口 12.2 底 — 高 4.5	①微砂粒・赤褐色粒子含む ②良好 ③灰黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ後へら磨き。	内面全面および口縁外面に漆状の付着物		
2	土師器 坏	貯蔵穴上位 完形	口 13.2 底 — 高 4.5	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。			
3	土師器 坏	床密着 完形	口 13.6 底 — 高 5.5	①細砂・赤褐色微粒子含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ、底部に指頭圧痕。口縁部に比して体部深い。			
4	土師器 坏	貯蔵穴上位 ほぼ完形	口 13.9 底 — 高 5.8	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ、中位にほぼ等間隔に指頭圧痕。口縁部に比して体部深い。			
5	土師器 坏	床密着 3/5	口 15.6 底 — 高 5.8	①細砂・赤褐色微粒子含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。口縁部に比して体部深い。			
6	土師器 高坏	+19cm 坏部1/2	口(20.0) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色	坏部外面下位へら削り、他横ナデ。内面横ナデ。			
7	土師器 高坏	+8cm 脚部上半	口 — 底 — 高 —	①砂粒・赤褐色粒子含む ②良好 ③にぶい黄橙色	外面へら削り後へら磨き、内面横ナデ。内面上部は接合痕が残る。			
8	土師器 小型甕	+9cm 口縁1/3	口(14.7) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ、内面に指頭圧痕。胴部外面へら削り、内面横ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
9	紡錘車	床密着 完形	4.2	4.2	1.25	31.8	蛇紋岩	比較的偏平な形状。表面かなり摩滅し、研磨痕などは見えない。軸孔中に木質部が残存。

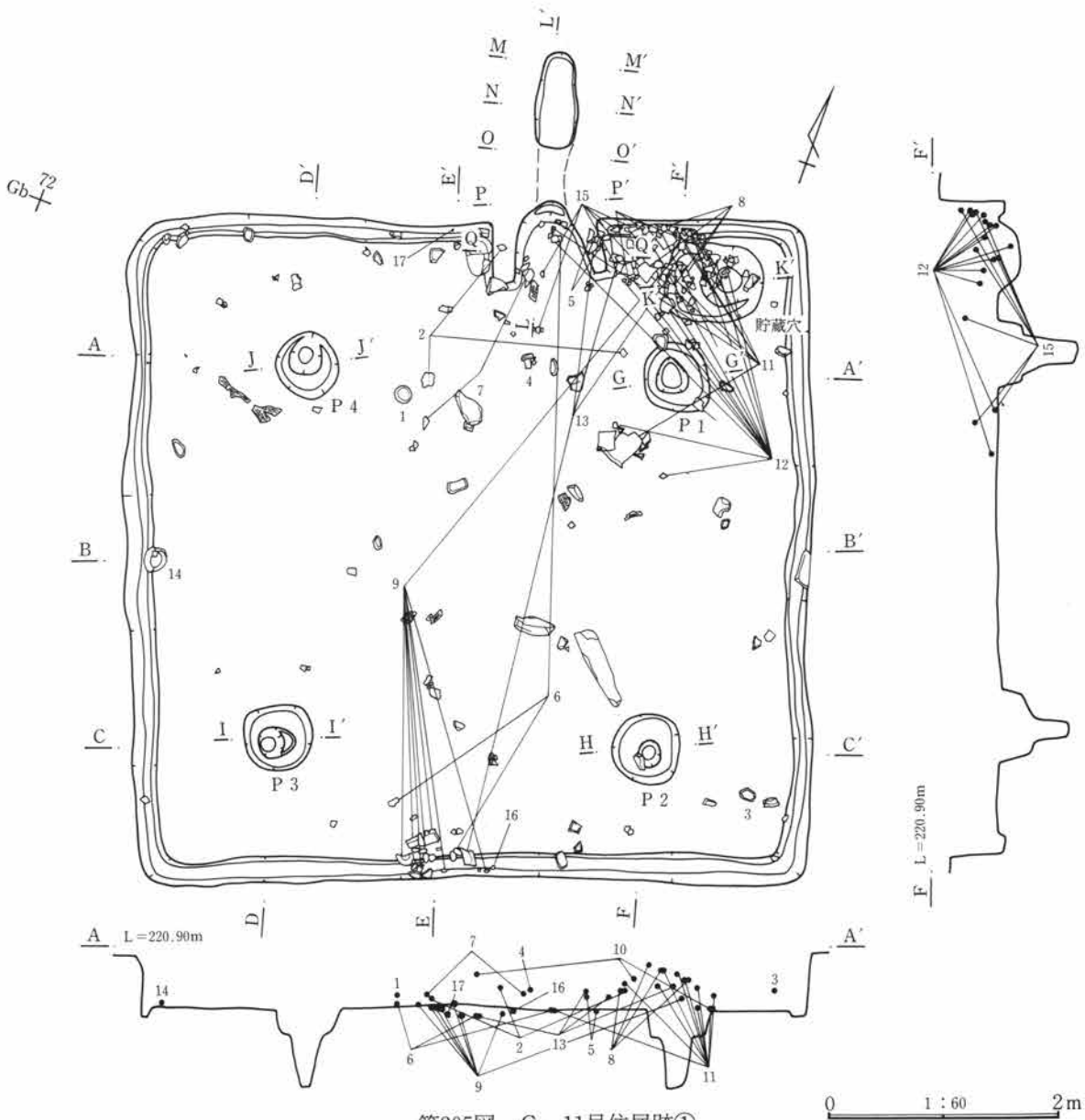
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
10	白玉	+27cm 1/2	(1.2)	1.4	(0.55)	(1.4)	滑石	下半部が欠損。
11	白玉	+43cm 完形	1.15	1.3	0.7	1.7	滑石	作りはやや粗く、未研磨の部分残る。

G-11号住居跡 (PL28・117・118)

位置 Ga-71・72グリッド 主軸方位 N-19°-W 残存壁高 0.53m 重複 なし

規模と形状 形状はほぼ正方形で、長辺5.96m・短辺5.73m。周壁は直進し、壁の崩落や線形の乱れは少ない。主軸はかなり西にふれる。竈は北側に築かれる。

床面 深さ10~15cm程の掘り方に、粘質土と砂質土の混土を埋め込んで平坦な床面形成。特に貼り床などは見られないが、表面は若干硬化。



第205図 G-11号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。住居内に袖が作り出される。焚口幅66cm・燃烧部長63cm。煙道は、煙出し部分は削平されているが、燃烧部に近い部分は天井も崩落せずに残存している。煙道長135cm。

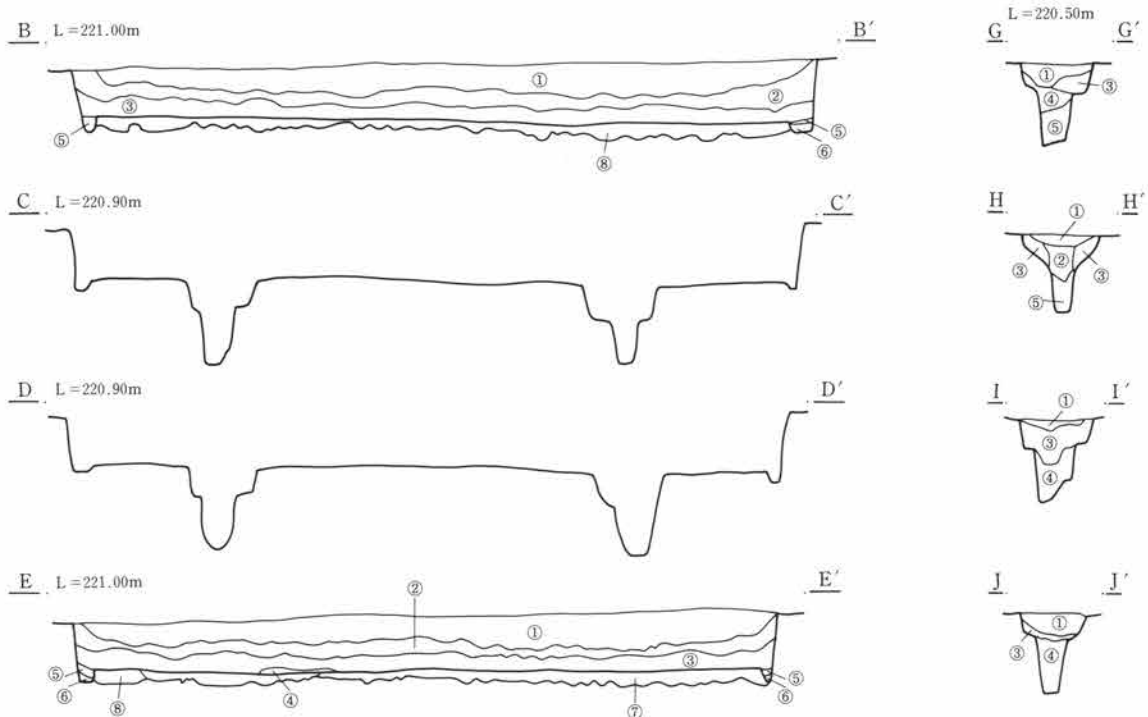
貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居長辺方向に長い楕円形で、二段の掘り込みを持つ。

周溝 住居全周で確認された。**柱穴** 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置しており、支柱穴と考えられる。いずれも深さ・形状ともに類似し、二段の掘り込みを持つ。

出土遺物 遺物量はかなり多く、特に竈周辺に多く分布している。器種は、土師器坏(1~6)・小型甕(7~9)・甕(10~14)・甑(15)がある。そのほかに、滑石製の白玉が2点(16・17)出土している。

掘り方 住居全域に不規則な掘り方がみられる。

調査所見 古墳時代後期。



ベルトセクション

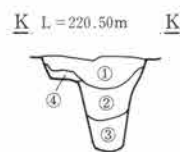
- 1 暗褐色土 少量の黄色粒・砂礫含みしまり良。若干の炭化物混入。
- 2 黒褐色土 少量の黄色粒・砂礫・焼土含みしまり良。若干の微細炭化物混入。
- 3 暗褐色土 若干の微細炭化物、わずかの焼土含みしまり良。
- 4 褐色土 砂礫ほとんど含まず均質でしまり良。粘性あり。
- 5 暗褐色土 若干の焼土含みしまり良。ごく弱い粘性あり。周溝埋土。
- 6 暗褐色土 5層に比べ黒味強い。周溝埋土。
- 7 暗褐色土 砂質土に粘質土と砂礫ブロックが斑状に混入。掘り方埋土。
- 8 暗褐色土 7層に似るが、砂礫ブロック少ない。掘り方埋土。

ピットセクション

- 1 暗褐色土 若干の白色粒含みしまり良。焼土・炭化物・黄褐色土わずかに混入。
- 2 暗褐色土 炭化物わずかに含みしまり良。より黒味強い。
- 3 暗褐色土 1層より白色粒の混入少ない。弱い粘性あり。
- 4 暗褐色土 均質でしまり良。弱い粘性あり。微細炭化物わずかに含む。
- 5 暗褐色土 均質で粘性強い。炭化物若干含む。

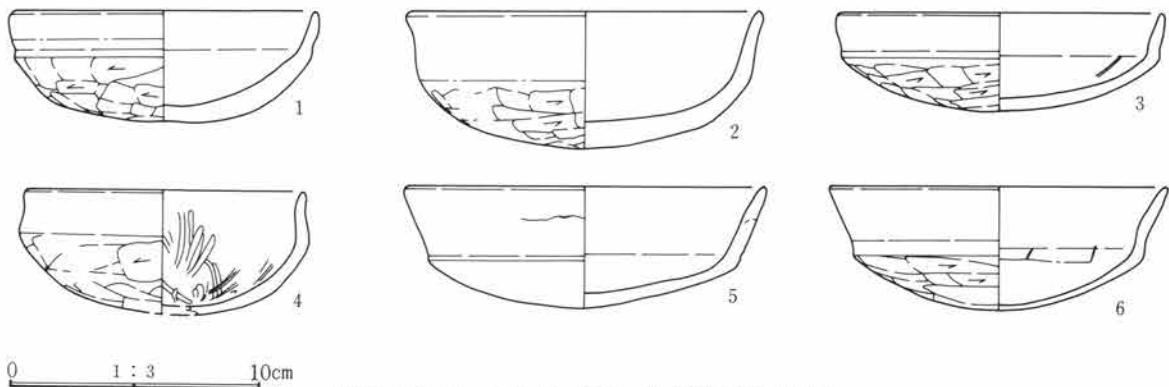
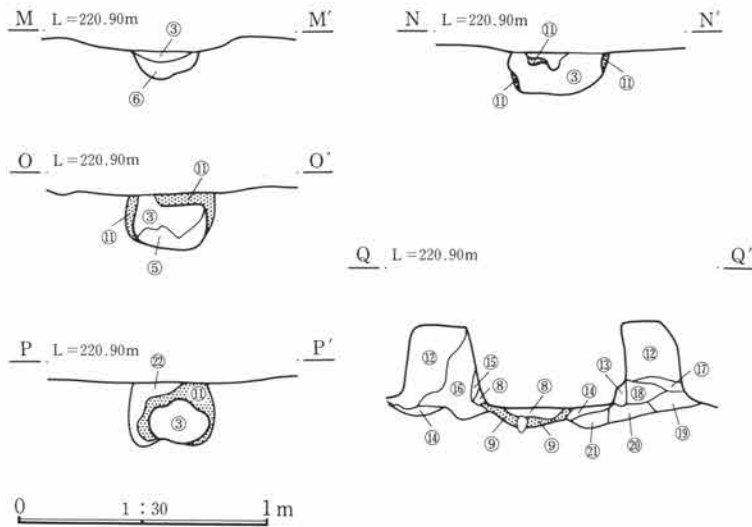
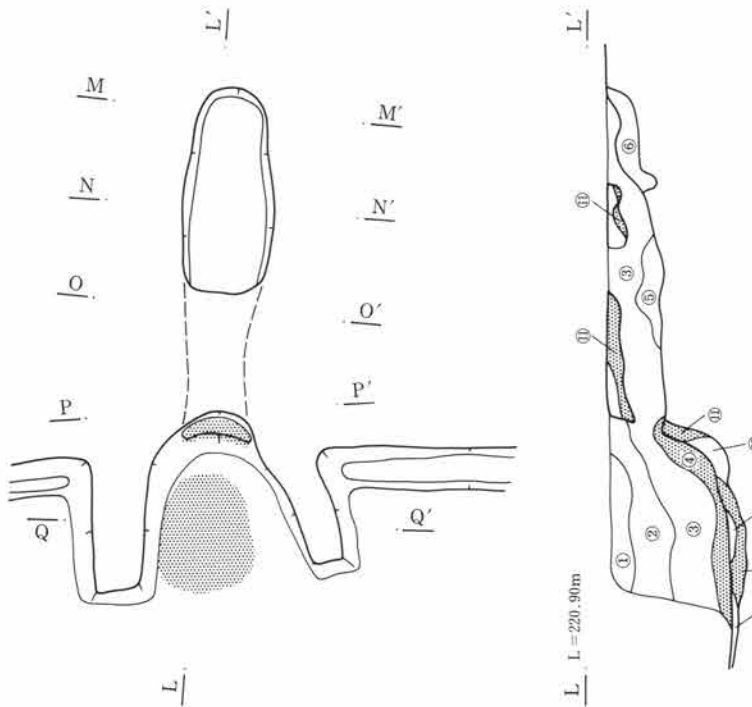
貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 小礫わずかに含みしまり良。若干の焼土・炭化物混入。
- 2 暗褐色土 均質でしまり良。若干の黄色土・焼土・炭化物含む。
- 3 褐色土 若干の焼土、わずかの炭化物含みしまり良。
- 4 褐色土 若干の黄色粒、わずかの焼土含みしまり良。



0 1:60 2m

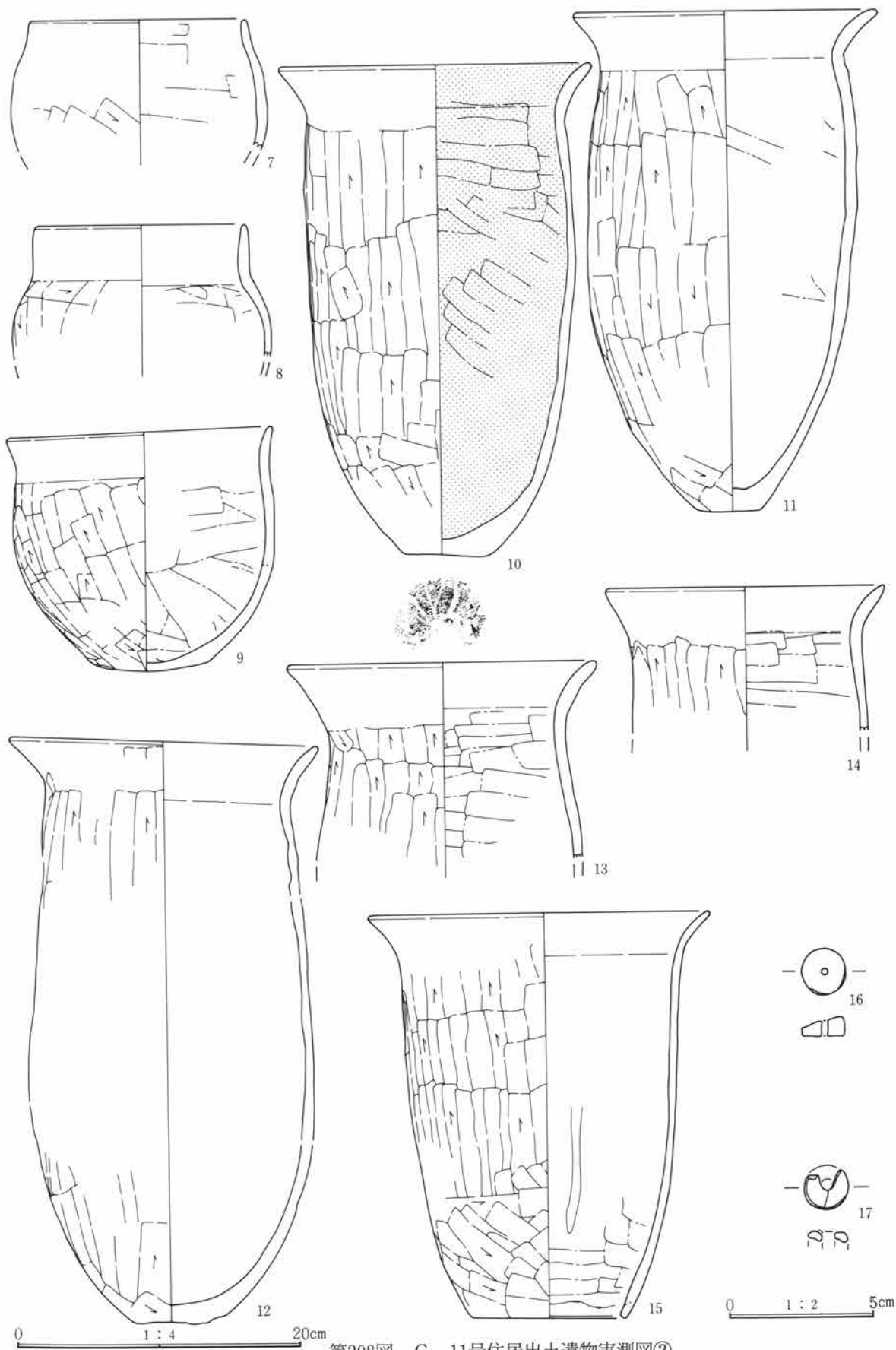
第206図 G-11号住居跡②



竈セクション

- 1 暗褐色土 若干の焼土・炭化物含みしまり良。比較的均質。
- 2 暗褐色土 少量の黄色粒・焼土・炭化物含みしまり良。
- 3 暗褐色土 かなりの焼土含みしまり良。弱い粘性あり。
- 4 暗赤褐色土 かなりの焼土含みしまり良。若干の炭化物混入。
- 5 暗褐色土 多量の焼土、若干の黄色粒・炭化物含みしまり良。
- 6 暗褐色土 地山砂質土ブロックを含みしまり良。若干の焼土混入。
- 7 暗褐色土 かなりの焼土ブロック含みしまり良。均質で弱い粘性あり。
- 8 暗褐色土 比較的均質でしまりやや良。若干の焼土塊含む。
- 9 赤褐色土 非常に均質な焼土層。しまり良くごく弱い粘性あり。
- 10 暗褐色土 少量の焼土、わずかの白色粒含みしまり良。
- 11 暗赤褐色土 地山が熱により焼土化した部分。しまり良。
- 12 暗褐色土 比較的均質でしまりやや良。少量の砂、わずかの焼土含む。
- 13 暗褐色土 黄褐色粘質土・白色粒わずかに含みしまり良。
- 14 暗褐色土 少量の白色粒・黄色土・焼土含む。しまり良く均質。
- 15 暗褐色土 かなりの焼土、わずかの炭化物含みしまり良。
- 16 暗褐色土 少量の白・黄色粒、焼土、炭化物含みしまり良。
- 17 暗褐色土 かなりの炭化物含みしまり良。ごく弱い粘性あり。
- 18 暗褐色土 白色粒・焼土・炭化物を若干含みしまり良。
- 19 暗褐色土 かなりの焼土含みしまりやや悪い。炭化物わずかに混入。
- 20 暗褐色土 若干の白色粒、わずかの焼土含みしまり良。
- 21 暗褐色土 少量の焼土、若干の白・黄色粒含みしまりやや良。
- 22 褐色土 地山砂質土を主体とし、かなりの焼土含む。

第207図 G-11号住居竈、出土遺物実測図①



第208図 G-11号住居出土遺物実測図②

G-11号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)		①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考	
			口	底 高				
1	土師器 坏	+11cm ほぼ完形	口 12.2 底 — 高 4.4		①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。		
2	土師器 坏	+12cm $\frac{2}{3}$	口(14.2) 底 — 高 5.4		①粗砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。		
3	土師器 坏	+16cm $\frac{2}{5}$	口(12.8) 底 — 高 3.8		①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。		
4	土師器 坏	+19cm $\frac{3}{5}$	口(11.0) 底 — 高 —		①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。		
5	土師器 坏	床密着 $\frac{1}{5}$	口 14.3 底 — 高 4.8		①均質な細砂含む ②良好 ③淡橙色	口縁部外面横ナデ、接合痕あり。体部外面ヘラ削り後ナデ、内面横ナデ。		
6	土師器 坏	床密着 $\frac{2}{3}$	口(13.4) 底 — 高 4.8		①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。		
7	土師器 小型甕	+16cm 口～胴部 中位 $\frac{1}{2}$	口(15.4) 底 — 高 —		①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
8	土師器 小型甕	+5cm 口～胴部 上位 $\frac{1}{2}$	口 14.9 底 — 高 —		①粗砂粒・少量の小 礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
9	土師器 小型甕	床密着 $\frac{5}{6}$	口 18.7 底 8.1 高 17.0		①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
10	土師器 甕	床密着 口～底部	口 22.0 底 6.0 高 34.0		①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	胴部内面に弱い煤付着	
11	土師器 甕	床密着 $\frac{1}{5}$	口 21.4 底 (4.6) 高 34.6		①粗砂粒・少量の小 礫含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。		
12	土師器 甕	床密着 $\frac{2}{3}$	口 21.8 底 5.0 高 40.5		①多量の砂礫含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
13	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位	口 21.6 底 — 高 —		①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
14	土師器 甕	+3cm 口～胴部 上位	口 19.4 底 — 高 —		①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
15	土師器 甕	床密着 $\frac{5}{6}$	口 24.0 底 11.0 高 28.0		①細砂含む ②良好 ③明黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ後一部ヘラ削り。		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
16	白玉	床密着 一部欠	1.1	1.5	0.7	2.6	滑石	側面は丁寧に研磨されているが、表裏ともに未研磨。
17	白玉	床密着 $\frac{1}{3}$	1.4	1.4	(0.6)	(1.5)	滑石	側面は丁寧に研磨されている。下半部を欠損。

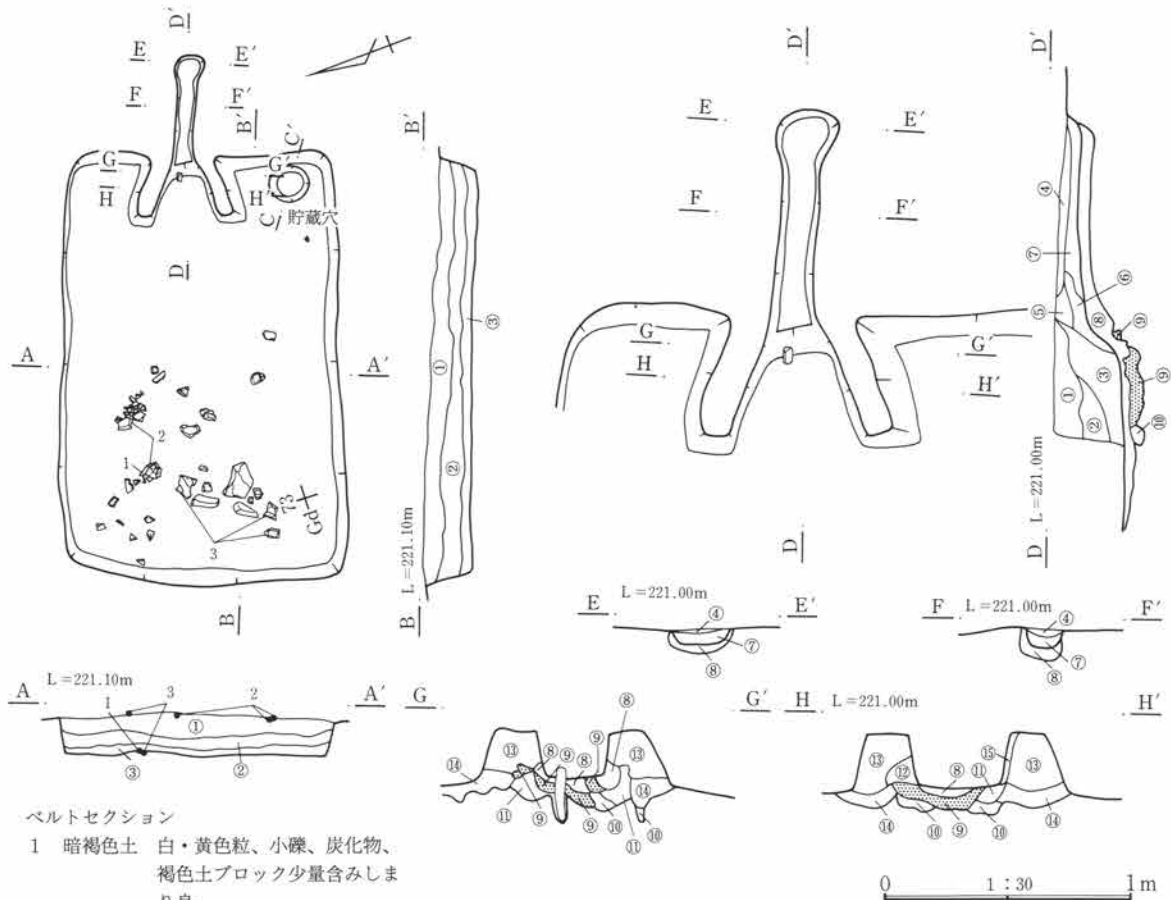
G-12号住居跡 (PL28・119)

位置 Gc・Gd-72グリッド 主軸方位 N-110°-E 残存壁高 0.37m 重複 なし

規模と形状 形状は縦長の長方形で、長辺2.30m・短辺3.44m。かなり小型の住居である。周壁はほぼ直立・直進し、線形の乱れはほとんどない。住居主軸はほぼ東を向く。竈は東側に構築。

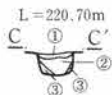
床面 地山褐色粘質土を掘り込んで床面を形成。貼り床・硬質部などはみられない。

竈 住居東壁のほぼ中央部に所在。住居内に両袖が作り出される形状をとる。焚口幅53cm・燃燒部長49.5cm。燃燒部の奥壁近くに、長さ22cm程の棒状の砂岩を支脚として埋め込んである。煙道は、上部を削平され、下底部が残存するのみである。煙道長85cm。



ベルトセクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、炭化物、褐色土ブロック少量含みしまり良。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、微細炭化物、焼土粒少量含みしまり良。
- 3 暗褐色土 1・2層に比べ小礫の混入少ない。粘性あり。



貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 少量の黄色粒・砂礫含みしまり良。
- 2 暗褐色土 黄色粒・砂礫・黄褐色土ブロック含みしまり良。
- 3 褐色土 黄色粒を少量含む。均質の粘質土。

竈セクション

- 1 暗褐色土 黄色粒・小礫若干含み弱い粘性持つ。
- 2 褐色土 黄色粒・小礫の混入1層より多く、少量の焼土粒・炭化物含む。
- 3 暗褐色土 わずかの小礫、少量の黄色粒・焼土粒・微細炭化物含む。
- 4 暗褐色土 黄色粒・小礫わずかに含み弱い粘性持つ。
- 5 暗褐色土 黄色粒・小礫・焼土粒・炭化物わずかに含み弱い粘性持つ。
- 6 暗褐色土 少量の焼土粒・炭化物、わずかの小礫含み粘性持つ。
- 7 暗褐色土 小礫・黄褐色土ブロック・焼土粒わずかに含み弱い粘性持つ。
- 8 暗褐色土 少量の焼土粒・黄色粒・細粒の砂礫含む。
- 9 暗赤褐色土 均質な焼土層。
- 10 褐色土 8層に比べ混入物少なくしまり良。
- 11 暗褐色土 黄色粒・焼土・微細炭化物わずかに含み弱い粘性持つ。
- 12 褐色土 黄色粒・焼土・砂礫若干含みしまり良。
- 13 暗褐色土 白・黄色粒、砂礫含みしまり良。
- 14 暗褐色土 13層に似るが、少量の炭化物含む。しまり良。
- 15 暗褐色土 黄色粒・焼土粒わずかに含む。

0 1:60 2m

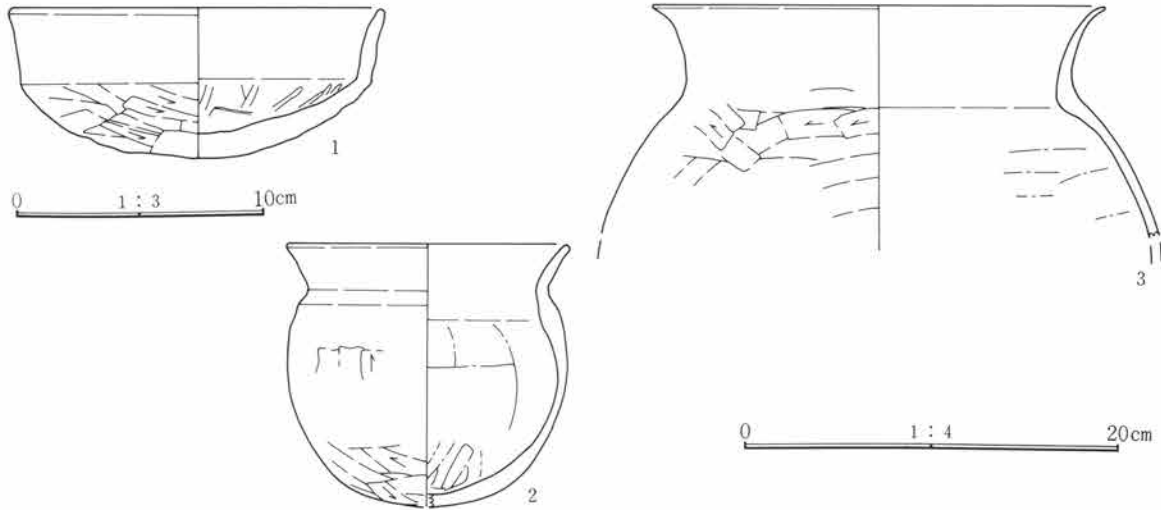
第209図 G-12号住居跡

貯蔵穴 住居南東隅に所在。形状は住居長辺方向がやや長い楕円形。深さは20cmに満たないほどで、小規模なものである。**周溝** なし。**柱穴** なし。

出土遺物 遺物量は少なく、住居の西半にまとまっている。床面上より土師器坏(1)・小型甕(2)が出土している。この他に、覆土上位より土師器甕(3)が得られている。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



第210図 G-12号住居出土遺物実測図

G-12号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+4cm 3/5	口(14.9) 底— 高 5.9	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面へラナデ後へラ磨き。	
2	土師器 小型甕	+4cm 口~底部 3/5	口(14.8) 底— 高 13.8	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面ナデ。	
3	土師器 甕	+34cm 口~胴部 上位1/5	口(23.8) 底— 高—	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	

G-13号住居跡 (PL28・119)

位置 Ge-74・75グリッド **主軸方位** N-19°-W **残存壁高** 0.45m **重複** G-14住に切られる。

規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、北西隅がやや西側に張り出す。長辺4.78m・短辺4.60m。周壁はほぼ直立・直進し、線形の乱れは小さい。住居主軸はやや西にふれる。竈は北側に築かれる。

床面 住居のほぼ全域に広がる浅く不規則な掘り方に、砂質土を含む暗褐色土を埋めて床面を形成。貼り床・硬質部などはみられない。

竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。住居内に両袖が作り出される。焚口幅60cm・燃焼部長68cm。くりぬき式の煙道は、天井部分も残存。煙道上部の地山は、熱により焼土化している。煙道長101cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状はほぼ正円形で、南よりの部分がより深く掘り込まれている。**周溝** なし。

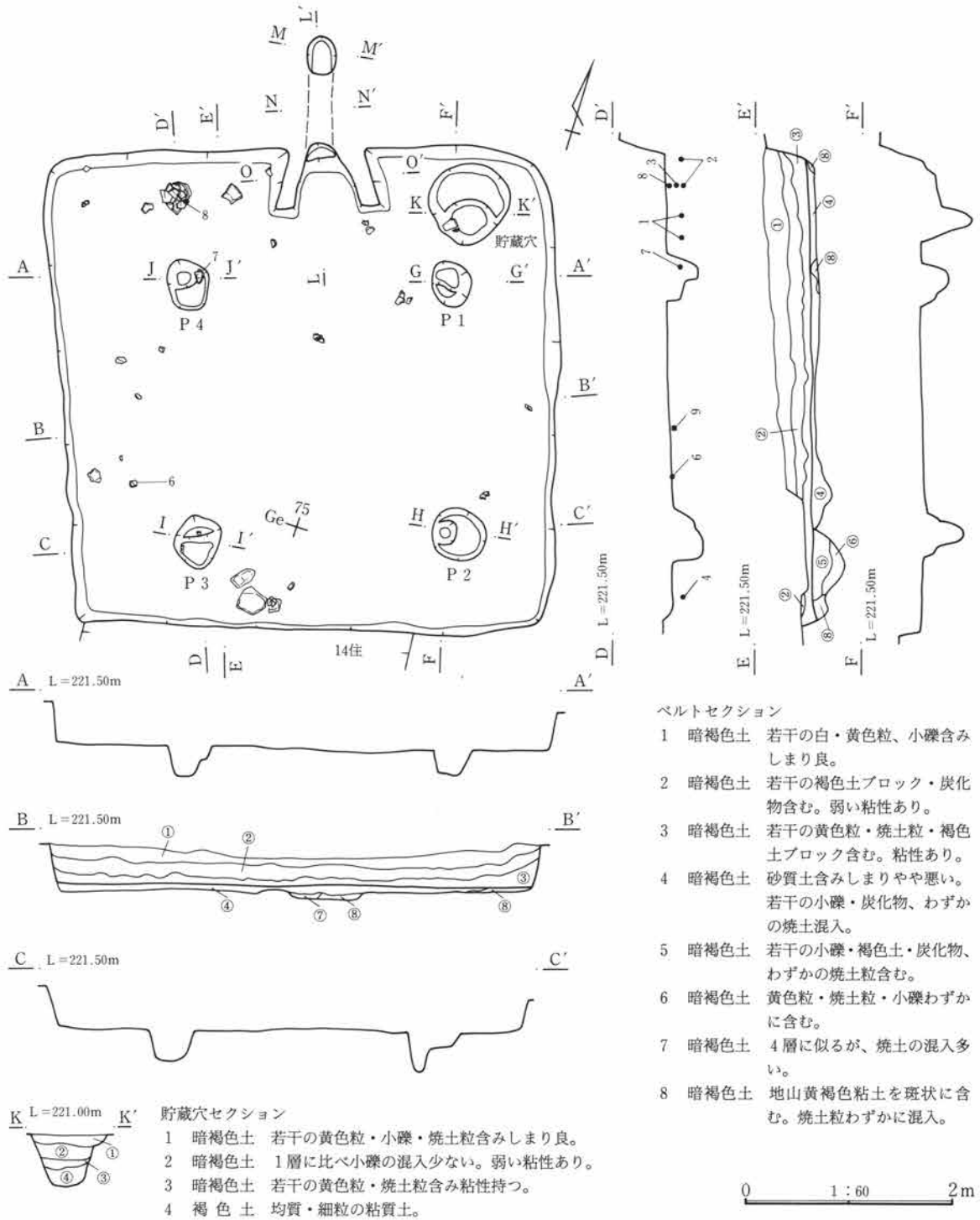
第3章 検出された遺構と遺物

柱穴 柱穴と思われる4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置している。

出土遺物 遺物量は少なく、住居内に散在。床面上や掘り方から出土したものが多い。土師器環(1~4)・鉢(7)・小型甕(8)のほか、床面直上より手捏土器(6)が出土している。手捏土器は、覆土中からも1点(5)出土。また、掘り方より白玉も1点(9)得られている。

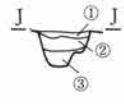
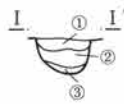
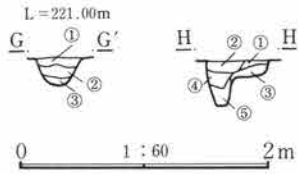
掘り方 住居全域に浅い掘り方が形成され、その他にいくつかの小ピットが掘り込まれている。

調査所見 古墳時代後期。



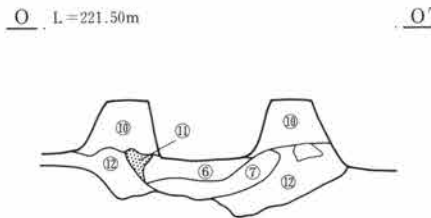
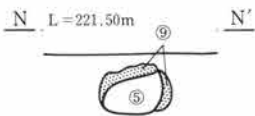
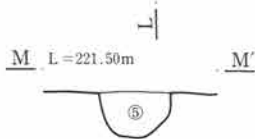
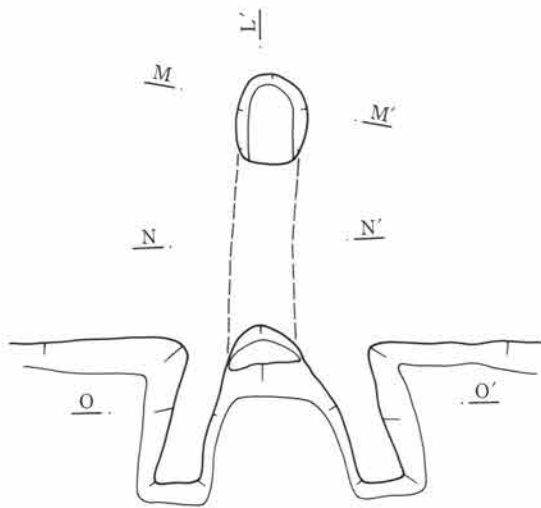
第211図 G-13号住居跡①

第2節 F・G区

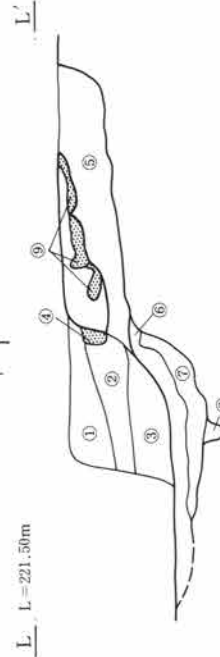


ピットセクション

- 1 暗褐色土 若干の黄色粒・小礫含みしまり良。
- 2 暗褐色土 褐色土少量含み弱い粘性持つ。黄色粒わずかに混入。
- 3 褐色土 均質・細粒で粘性持つ。炭化物若干含む。
- 4 褐色土 若干の黄色粒含む。均質で弱い粘性持つ。
- 5 褐色土 4層に似るが、より粘性強い。

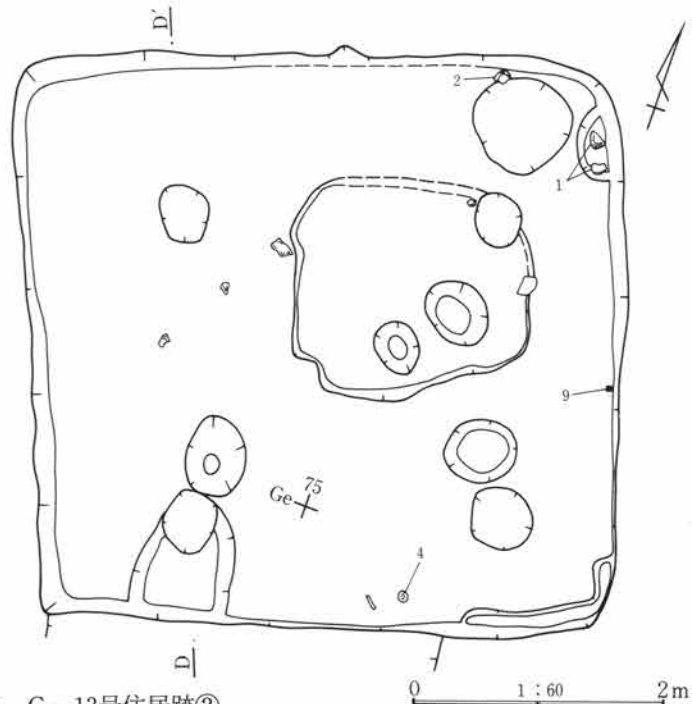


0 1:30 1m



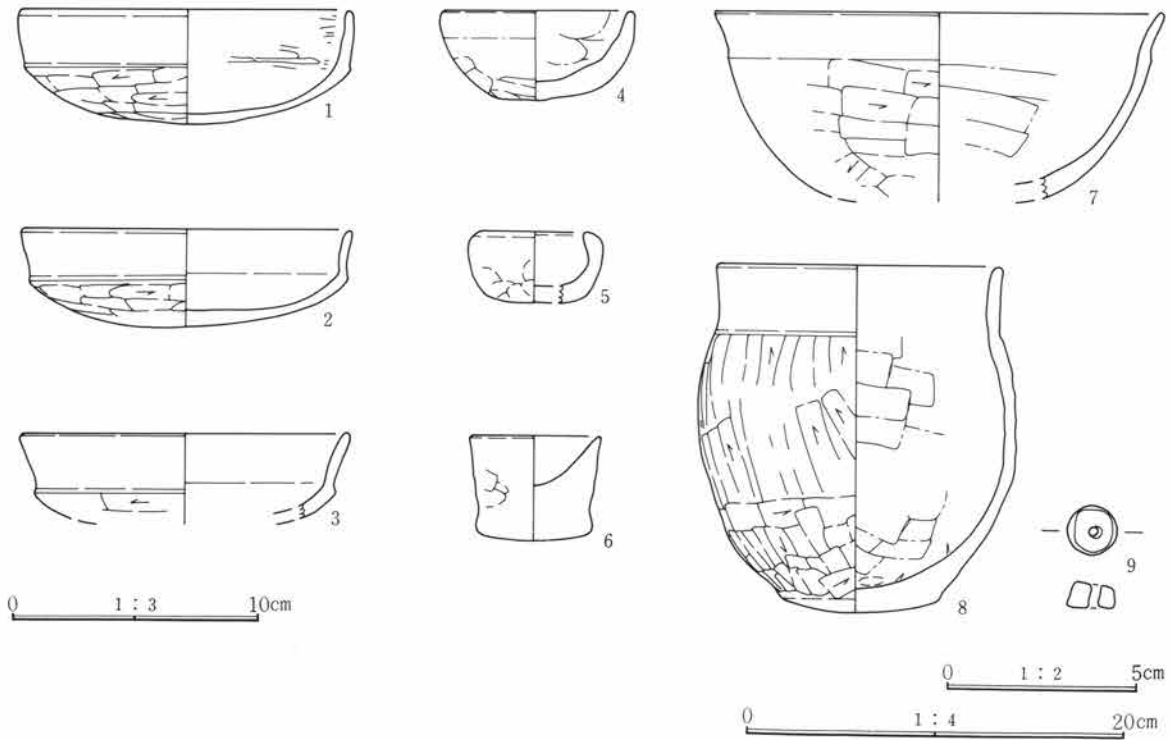
竈セクション

- 1 暗褐色土 若干の小礫、わずかの黄色粒・焼土・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 若干の黄褐色粘土、わずかの焼土含む。
- 3 暗褐色土 若干の黄色粒・焼土・炭化物含む。弱い粘性あり。
- 4 暗赤褐色土 均質でしまりの良い焼土層。弱い粘性あり。
- 5 暗褐色土 少量の焼土、若干の白色粒・小礫含む。粘性あり。
- 6 褐色土 小礫・焼土・炭化物含み、比較的細粒。粘性あり。
- 7 褐色土 多量の焼土含む。粘性あり。
- 8 黄褐色土 わずかの小礫・焼土含む。
- 9 赤褐色土 地山褐色粘質土の熱による赤化部分。
- 10 褐色土 小礫・白色粒含む。細粒でしまり良。
- 11 暗赤褐色土 焼土を主体とする。
- 12 暗褐色土 炭化物・焼土・粘質土ブロックを含む細粒の土。



第212図 G-13号住居跡②

第3章 検出された遺構と遺物



第213図 G-13号住居出土遺物実測図

G-13号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	掘り方内 ほぼ完形	口 13.0 底 — 高 4.5	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ後ヘラ磨き。			
2	土師器 坏	床密着(8 の下位) 1/3	口(13.0) 底 — 高 3.8	①細砂含む ②良好 ③灰白色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。			
3	土師器 坏	床密着(8 の下位) 口縁1/3	口(13.0) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。			
4	土師器 小型坏	掘り方内 口縁一部 欠	口 7.7 底 — 高 3.5	①細砂含む ②良好 ③灰黄褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面指ナ デ。整形は非常に雑。			
5	土師器 手捏土器	覆土 1/4	口(4.6) 底 — 高 2.8	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁端部が内湾する。外面に指で成形した痕跡残 る。			
6	土師器 手捏土器	床密着 口～底部 1/3	口(5.2) 底(4.2) 高 4.1	①少量の微砂粒含む ②良好 ③橙色	底部非常に厚く、口縁は薄い。指で成形した後、 内外面ともにナデで仕上げている。			
7	土師器 鉢	床密着 1/3	口(23.8) 底 — 高 —	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③灰白色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。			
8	土師器 小型甕	床密着 完形	口 15.2 底 8.3 高 18.3	①多量の粗砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘ ラナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
9	白玉	掘り方内 完形	1.3	1.4	0.8	1.86	滑石	側面は研磨されているが、表裏ともに未研磨。

G-14号住居跡 (PL29・119)

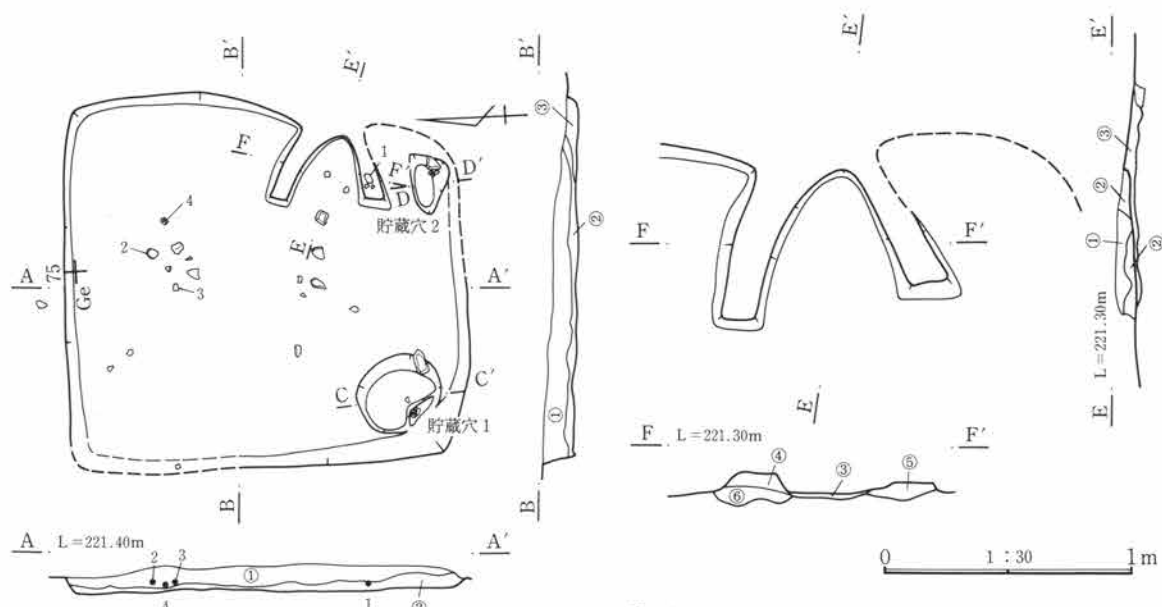
位置 Gd-74・75グリッド 主軸方位 N-93°-E 残存壁高 0.28m 重複 G-13住を切る。

規模と形状 上部をかなり削平されているため、平面形状はかなり歪んでいる。特に南東隅の残りが悪く、南壁が短い台形状となっている。長辺3.21m・短辺は現状で3.00m。主軸はほぼ真東を指す。竈は東側に築かれる。

床面 床面はほぼ平坦。住居南側では、地山黄褐色粘質シルトに一致。北側ではG-13住埋土を床面とするが、貼り床や硬質部などはみられなかった。

竈 住居東壁の中央よりも南側に所在。上部を削平され残存状況は悪いが、両袖が住居内に作り出される形状を呈する。焚口幅58cm・燃烧部長57cm。焼土面の発達はあまりみられず、埋土内に少量の焼土が混入する程度。煙道は削平され失われている。

貯蔵穴 住居南西隅と南東隅に各1基所在。南西隅のもの(貯蔵穴No1)は、平面形状はほぼ円形。しっかりした掘り込みを持つ。南東隅のもの(貯蔵穴No2)は、住居の短軸方向に長い不整形で、No.1に比べかなり小さい。周溝 なし。柱穴 なし。

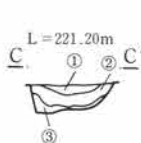


ベルトセクション

- 1 暗褐色土 若干の白・黄色粒、小礫、わずかの炭化物含みしまり良。
- 2 暗褐色土 小礫・炭化物・焼土わずかに含む。ごく弱い粘性あり。
- 3 暗褐色土 若干の砂礫・炭化物含みしまりやや悪い。

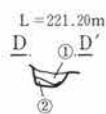
竈セクション

- 1 暗褐色土 砂礫・微細炭化物わずかに含みしまり良。
- 2 暗褐色土 1層より砂礫の混入少なくやや黒味強い。焼土若干含む。
- 3 褐色土 比較的均質の砂質土。しまりやや悪い。焼土わずかに混入。
- 4 暗褐色土 わずかの白・黄色粒、若干の小礫含みしまり良。
- 5 暗褐色土 微細炭化物少量含みしまりやや良。弱い粘性あり。
- 6 褐色土 砂礫若干含みしまりやや良。焼土粒わずかに混入。



貯蔵穴No.1セクション

- 1 暗褐色土 少量の砂礫含みしまりやや良。黄色粒・炭化物わずかに混入。
- 2 暗褐色土 少量の砂質土ブロック含みしまりやや悪い。
- 3 暗褐色土 かなりの砂質土含みしまり悪い。炭化物わずかに混入。



貯蔵穴No.2セクション

- 1 暗褐色土 砂礫若干含みしまりやや悪い。炭化物・焼土わずかに混入。
- 2 暗褐色土 やや砂質でしまり悪い。焼土・炭化物ごくわずか含む。

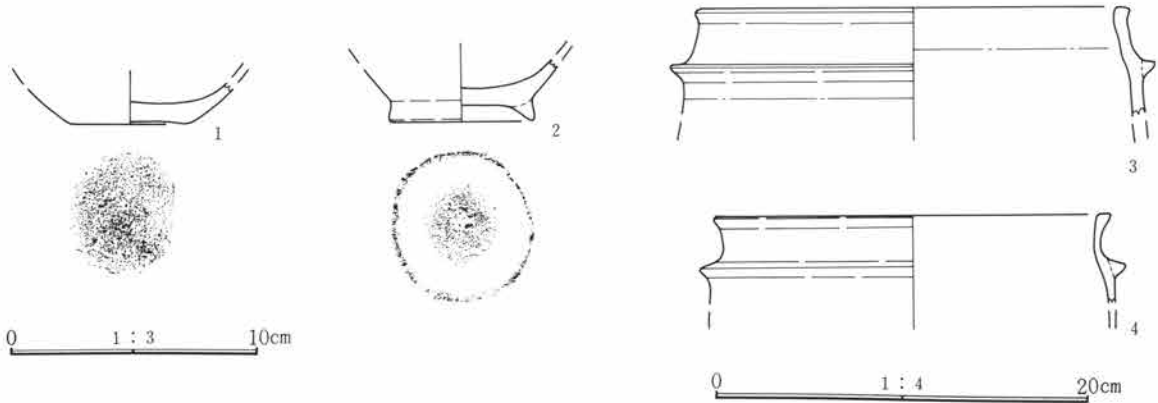


第214図 G-14号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

出土遺物 遺物量は非常に少なく、竈および貯蔵穴内を中心に小破片が散在するのみ。器種は、須恵器坏(1)・塊(2)・羽釜(3・4)があるが、いずれも破片である。 **掘り方** なし。

調査所見 当住居廃棄後に住居域内を掘り込んで1号集石が作られ、床面・西壁の一部が破壊されている。平安時代の住居である。



第215図 G-14号住居出土遺物実測図

G-14号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	カマド右 袖上 底部	口 — 底 4.6 高 —	①細砂含む ②良好 ③淡黄橙色	ロクロ整形。底部回転糸切り。器表面の摩滅激しい。	
2	須恵器 塊	+7cm 底部	口 — 底 5.6 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。底部切り離し後高台貼付。	
3	須恵器 羽釜	+7cm 口~胸部 上位破片	口(23.0) 底 — 高 —	①砂粒(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③黒褐色	ロクロ整形。口縁部は内傾するが、端部でわずかに外反。鏝は断面三角形で丁寧に貼付。	
4	須恵器 羽釜	+3cm 口縁破片	口(21.0) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③淡黄橙色	ロクロ整形。口縁部は外反。鏝は断面三角形。	

G-15号住居跡 (PL29・119)

位置 Ga・Gb-74グリッド **主軸方位** N-88°-E **残存壁高** 0.43m **重複** なし

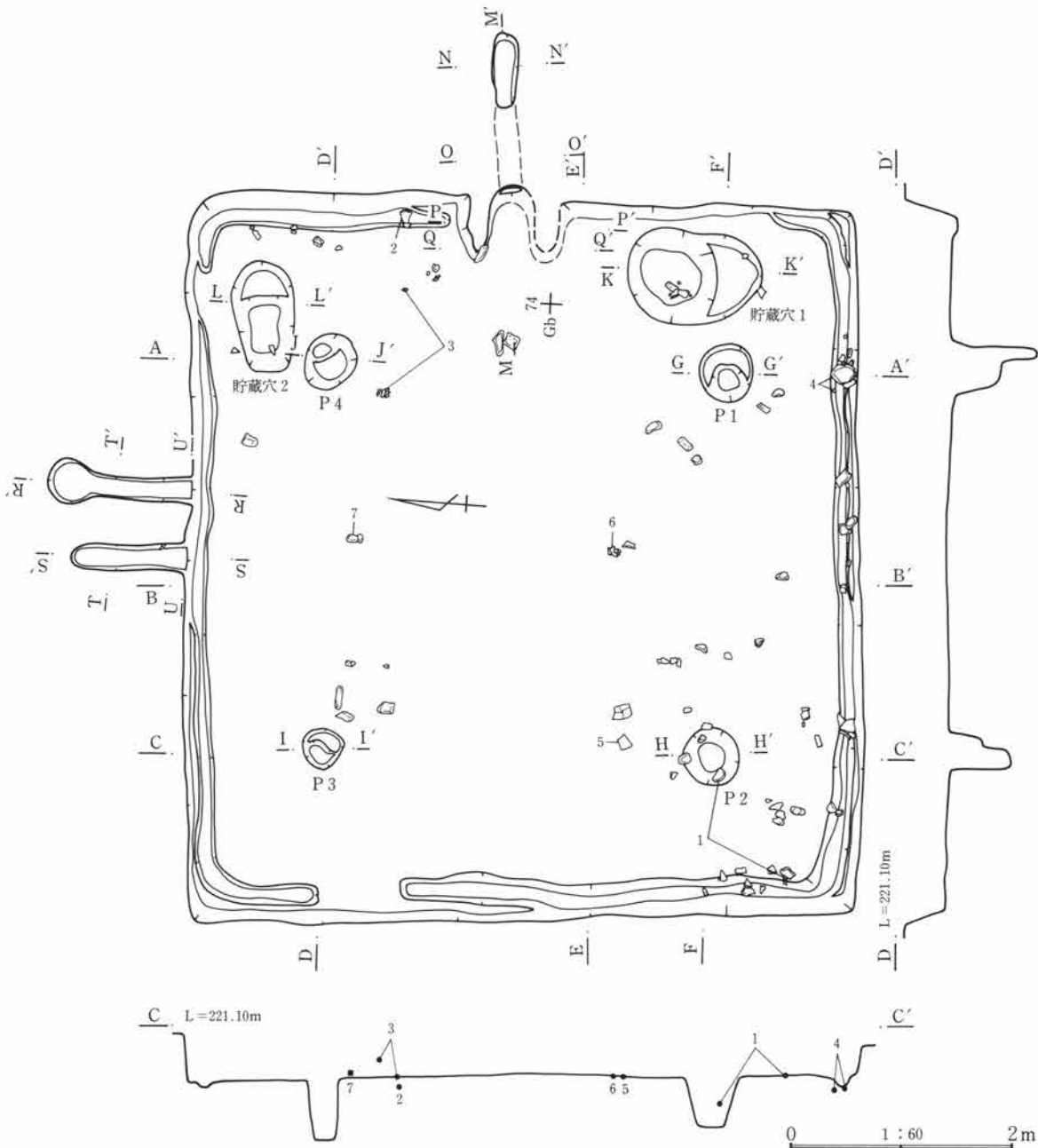
規模と形状 平面形状はほぼ正方形であるが、長辺6.11m・短辺6.46mと若干短辺側が長い。周壁はやや外反するが、壁の大きな崩落などはみられず、線形の乱れはほとんどない。竈は最初北側に築かれた後、東側に新たに作りなおしている。

床面 住居の中央部は地山黄褐色砂質土を掘り込んで直接床面としているが、周囲は壁に沿って掘られた掘り方に地山土のブロックを含んだ土を埋めて床面を形成している。貼り床は見られないが、表面は若干硬化している。

竈 東壁のほぼ中央部に所在(竈No.1)。両袖が住居内に作り出される。床面上部分の調査時には右袖の形状を明確に捉えられなかったが、断ち割りを行った結果、床下より右袖石の下端部が出土したため、形状を復元することができた。焚口幅は推定で47cm、燃焼部長は66cmである。左袖先端部の燃焼部側にも、袖石が据

えられている。どちらの袖石も、素材は板状の砂岩である。煙道は、一部天井部分も残存している。煙道長135cm。また、北壁の中央部には、煙道のみが2基残存している。1基は中央よりもやや東側に（竈No.2）、もう1基はほぼ中央部に（竈No.3）、40cm程の間隔をおいて作られている。煙道長は竈No.2が128cm、No.3が104cmである。北側の2基の竈は、前方の床面に焼土の分布はみられたものの、燃焼部は完全に取り払われ、撤去後に壁に沿って周溝が掘られている。竈No.1は、この北側の竈の廃絶後に構築されたものであろう。竈No.2と3は、近接していることから同時存在ではないが、両者の前後関係については不明である。

貯蔵穴 住居の南東隅付近（貯蔵穴No.1）と、北東隅（貯蔵穴No.2）に各1基所在。おそらく北側の竈の構築時に北東隅の貯蔵穴No.2が作られ、竈が東側に移されたのにもなって、貯蔵穴No.1が作られたものと推定される。



第216図 G-15号住居跡①

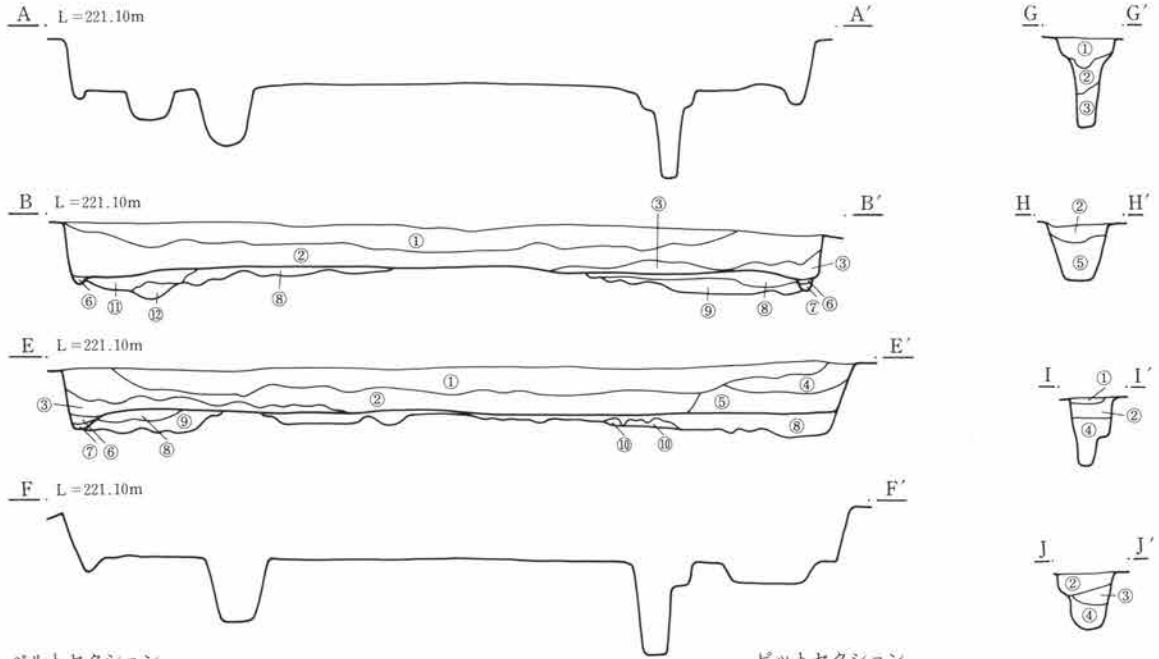
第3章 検出された遺構と遺物

周溝 東側の竈付近を除いてほぼ全周で検出。 **柱穴** 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置している。

出土遺物 遺物量は少なく、住居内に散在する。比較的床面近くから出土したものが多。器種は、土師器
 坏(1・2)・高坏(3)・鉢(4)・甕(5・6)がある。この他に床面直上から砥石が1点(7)出土している。

掘り方 周壁に沿って、幅80~100cm・深さ10cm程の掘り込みがめぐっている。掘り込みの内側、4本の柱穴
 を結んだ四角形の部分は、床面にほぼ一致している。

調査所見 出土遺物および住居形状から、古墳時代後期の住居とわかる。

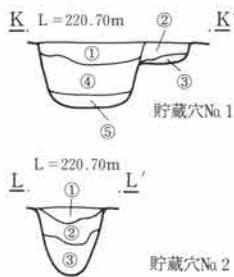


ベルトセクション

- 1 暗褐色土 少量の白・黄色粒、小礫、焼土粒含みしまり良。
- 2 暗褐色土 少量の黄色粒、わずかの小礫・焼土ブロック・炭化物含む。
- 3 暗褐色土 白・黄色粒、小礫わずか含む。比較的均質で粘性持つ。
- 4 褐色土 白・黄色粒、焼土粒、炭化物わずかに含みしまり良。
- 5 暗褐色土 小礫・焼土わずかに含みしまり良。褐色粘質土塊混入。
- 6 暗褐色土 少量の黄褐色土塊、わずかの焼土・炭化物含む。周溝埋土。
- 7 暗褐色土 6層に比べ黒味強く黄褐色土含まない。周溝埋土。
- 8 暗褐色土 少量の黄褐色土ブロック含む。砂質でややしまり良。
- 9 暗褐色土 少量の黄褐色土ブロック含む、やや黒味強い。
- 10 褐色土 地山黄褐色砂質土と粘質土の互層。しまり良。
- 11 褐色土 少量の小礫・焼土・炭化物含みしまり良。
- 12 褐色土 少量の焼土・炭化物含む。やや黄色味強い。

ピットセクション

- 1 暗褐色土 黄色粒わずかに含みしまり良。
- 2 暗褐色土 黄色粒・小礫・焼土粒わずかに含みしまり良。
- 3 褐色土 黄色粒・炭化物ごくわずかに含む均質な粘質土。
- 4 褐色土 3層よりも混入物の割合の少ない非常に均質な粘質土。
- 5 暗褐色土 黄色粒・焼土粒・小礫わずかに含む。弱い粘性あり。



貯蔵穴No 1 セクション

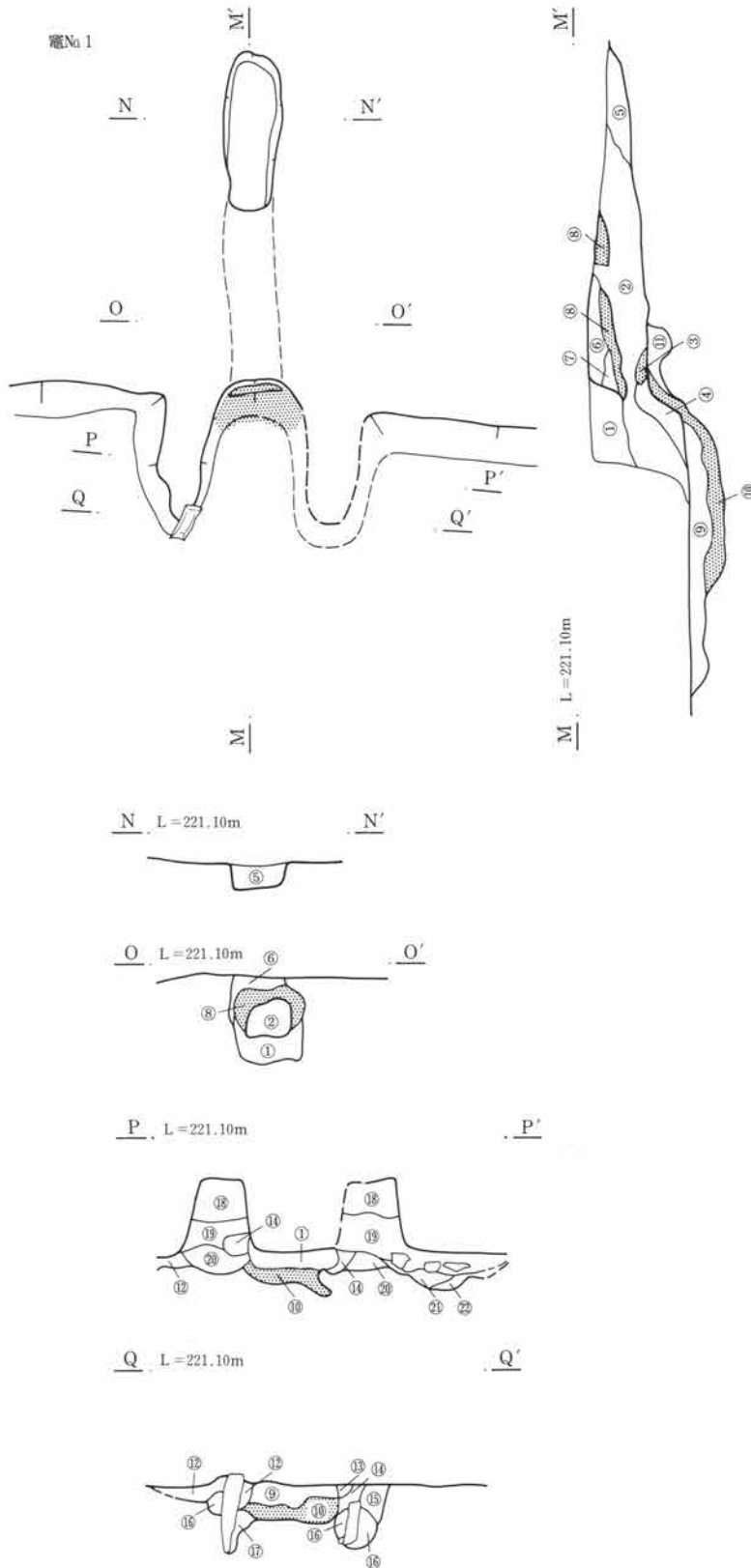
- 1 暗褐色土 黄色粒・小礫・焼土粒わずかに含みしまり良。
- 2 暗褐色土 黄色粒・小礫わずかに含みしまり良。
- 3 褐色土 黄色粒わずかに含みしまり良。
- 4 暗褐色土 黄色粒・褐色土ブロック・小礫少量含みしまり良。
- 5 褐色土 黄色粒・焼土粒わずかに含む均質な粘質土。

貯蔵穴No 2 セクション

- 1 暗褐色土 少量の黄色粒・小礫・焼土粒・炭化物含みしまり良。
- 2 褐色土 黄色粒・小礫・褐色土ブロックわずかに含みしまり良。
- 3 褐色土 黄色粒をわずかに含む均質な粘質土層。



第217図 G-15号住居跡②

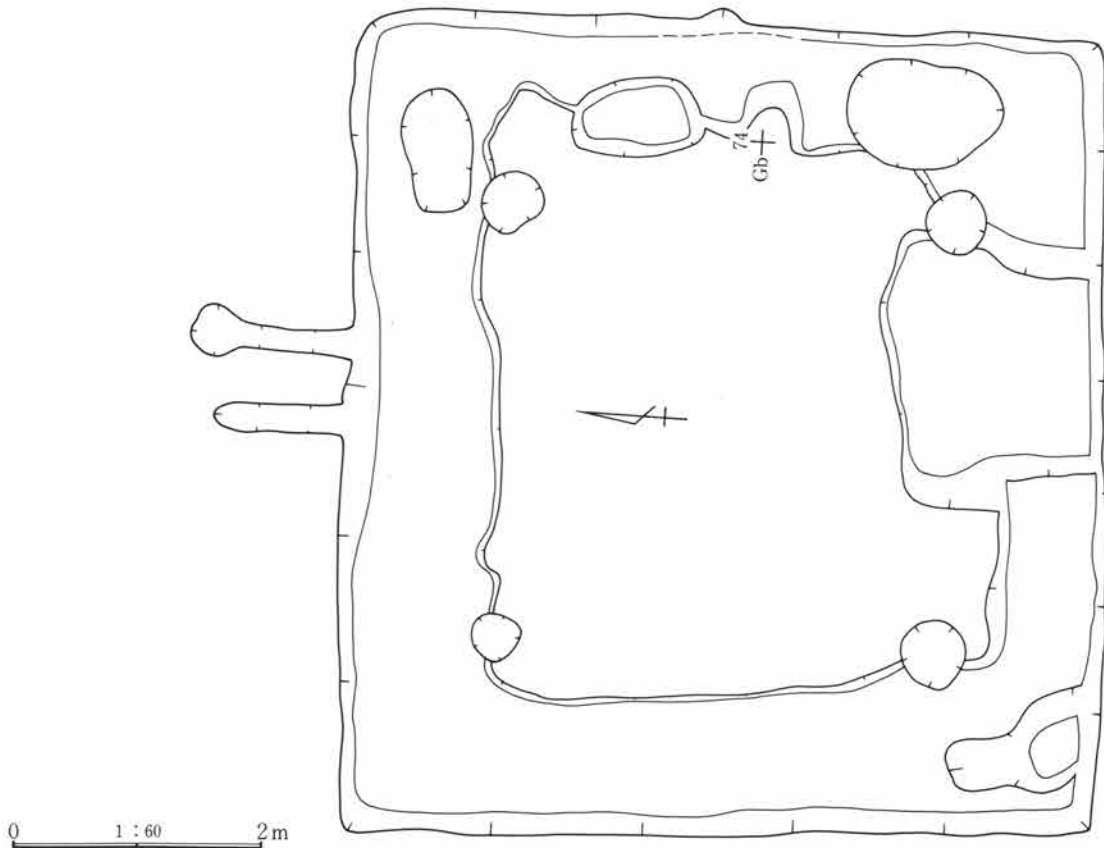
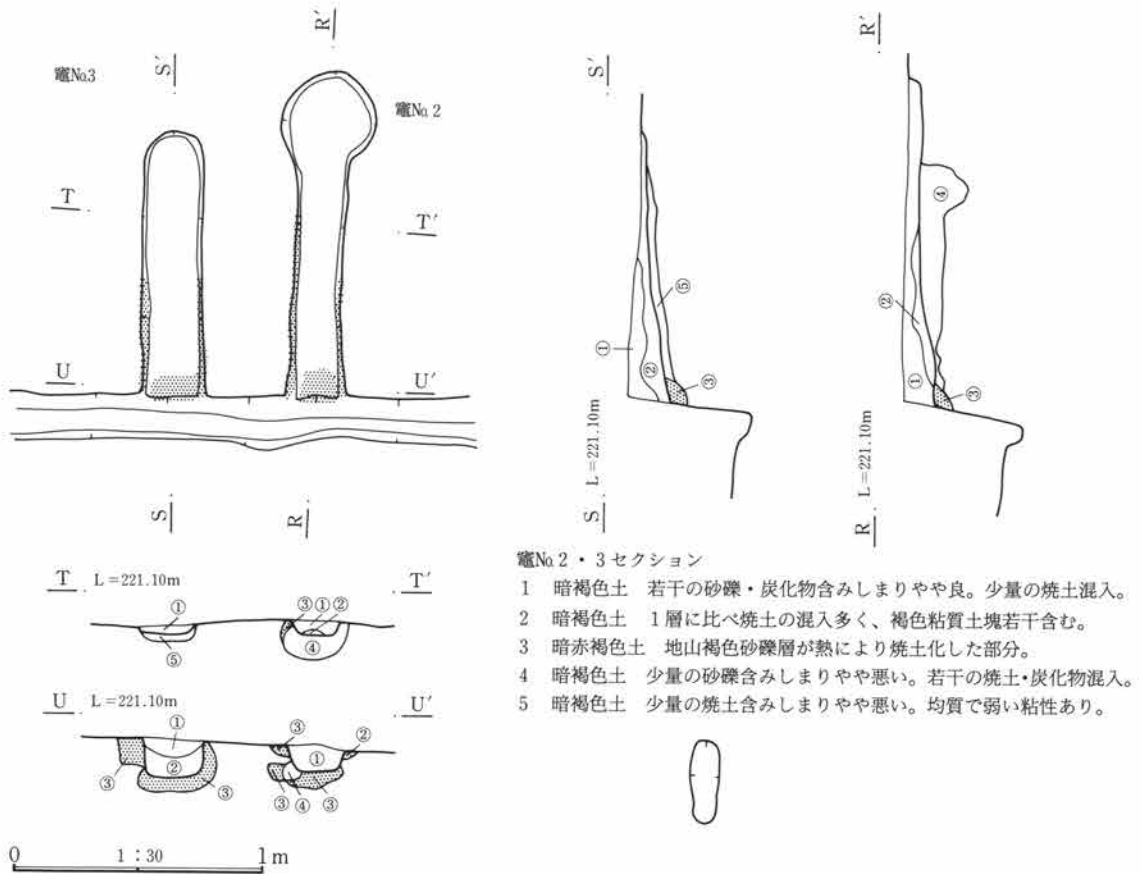


竈No.1セクション

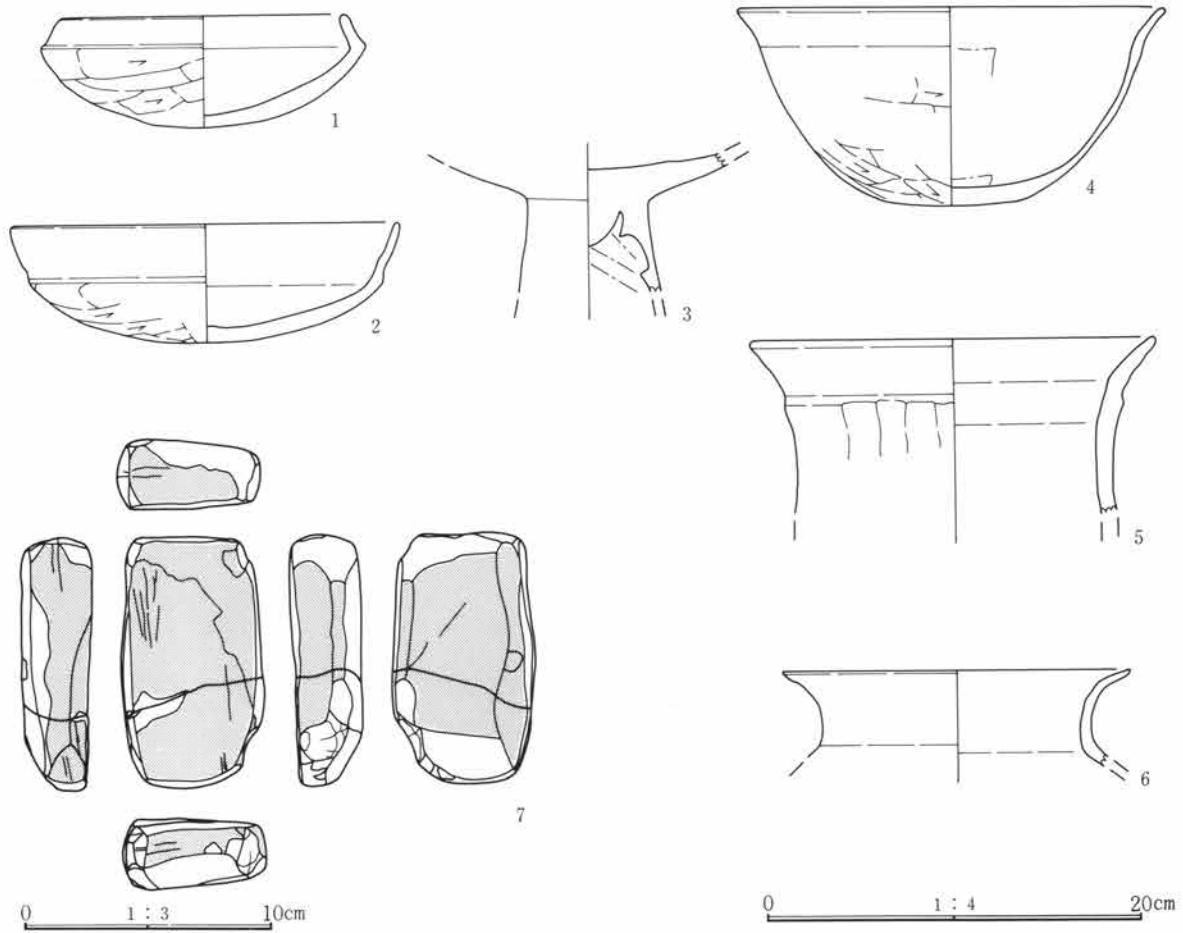
- 1 黒褐色土 若干の白色粒・焼土・炭化物含みしまりやや良。
- 2 黒褐色土 かなりの焼土、若干の白色粒・炭化物含みしまり良。
- 3 明赤褐色土 均質な焼土層。硬く煉瓦状にする。
- 4 暗褐色土 黄色粒・焼土少量含みしまりやや悪い。若干砂質。
- 5 暗褐色土 少量の焼土、若干の白色粒含みしまり良。
- 6 暗褐色土 かなりの焼土含みしまり良。弱い粘性あり。
- 7 黒褐色土 若干の白色粒、わずかの焼土含みしまり良。
- 8 赤褐色土 均質な焼土層。煙道の天井部分。下部に明赤褐色の硬質な焼土が層状にみられる。
- 9 暗褐色土 焼土・炭化物かなり含む。
- 10 暗赤褐色土 白色粒少量含む焼土層。
- 11 褐色土 少量の砂礫・焼土含む。やや黒味強い。
- 12 褐色土 黄色粒・焼土粒わずかに含む。粘性あり。
- 13 暗褐色土 若干の黄色粒・焼土粒・炭化物わずかに含みしまり良。
- 14 暗褐色土 かなりの焼土、若干の黄色粒・炭化物含みしまり良。
- 15 黒褐色土 白色粒・炭化物・焼土粒わずかに含みしまり良。
- 16 褐色土 少量の黄色粒・焼土含む。粘性強い。
- 17 褐色土 黄色粒・焼土粒わずかに含む。均質な粘質土。
- 18 暗褐色土 白色粒・細粒砂礫・焼土粒わずかに含みしまり良。
- 19 暗褐色土 少量の焼土・黄色土、若干の炭化物含みしまり良。
- 20 褐色土 細粒の砂礫若干含みしまり良。焼土・炭化物わずかに混入。
- 21 暗褐色土 かなりの焼土ブロック、炭化物少量含みしまり良。
- 22 黄褐色土 少量の焼土含みしまり良。ごく弱い粘性持つ。

0 1 : 30 1m

第218図 G-15号住居竈①



第219図 G-15号住居竈②、掘り方



第220図 G-15号住居出土遺物実測図

G-15号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	P 2内 1/5	口(11.2) 底— 高 4.4	①微砂粒含む ②良好 ③淡黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。			
2	土師器 坏	周溝内 1/5	口(15.4) 底— 高 4.6	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。			
3	土師器 高坏	+4cm 底～脚部 上半	口— 底— 高—	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	外面へら削り。坏部内面ナデ、脚部内面指ナデ。脚内部に、接合のための坏部下底の突起明瞭に残る。			
4	土師器 鉢	床密着 2/5	口(22.2) 底 7.0 高 10.4	①細砂・赤褐色微粒 子含む ②良好 ③橙色	口縁部は外反。口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。			
5	土師器 甕	+4cm 口～頸部	口(21.3) 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。			
6	土師器 甕	床密着 口縁1/5	口(18.2) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
7	砥石	+4cm 完形	9.9	5.7	2.8	235.8	砥沢石	全面を使用。表裏面に擦痕多くみられるが、全体に消耗度は低い。

G-16号住居跡 (PL30)

位置 Gb-75・76グリッド 主軸方位 N-3°-E 残存壁高 0.16m 重複 なし

規模と形状 長辺2.38m・短辺2.63mとわずかに短辺方向が長い長方形。南西隅のコーナーがやや張り出して形状が歪んでいる。かなり小型の住居である。住居主軸はほぼ北を指す。上部を削平されているうえ、地山の黄褐色砂質土を壁面とするため、残りは悪く崩れやすい。竈は北側に築かれる。

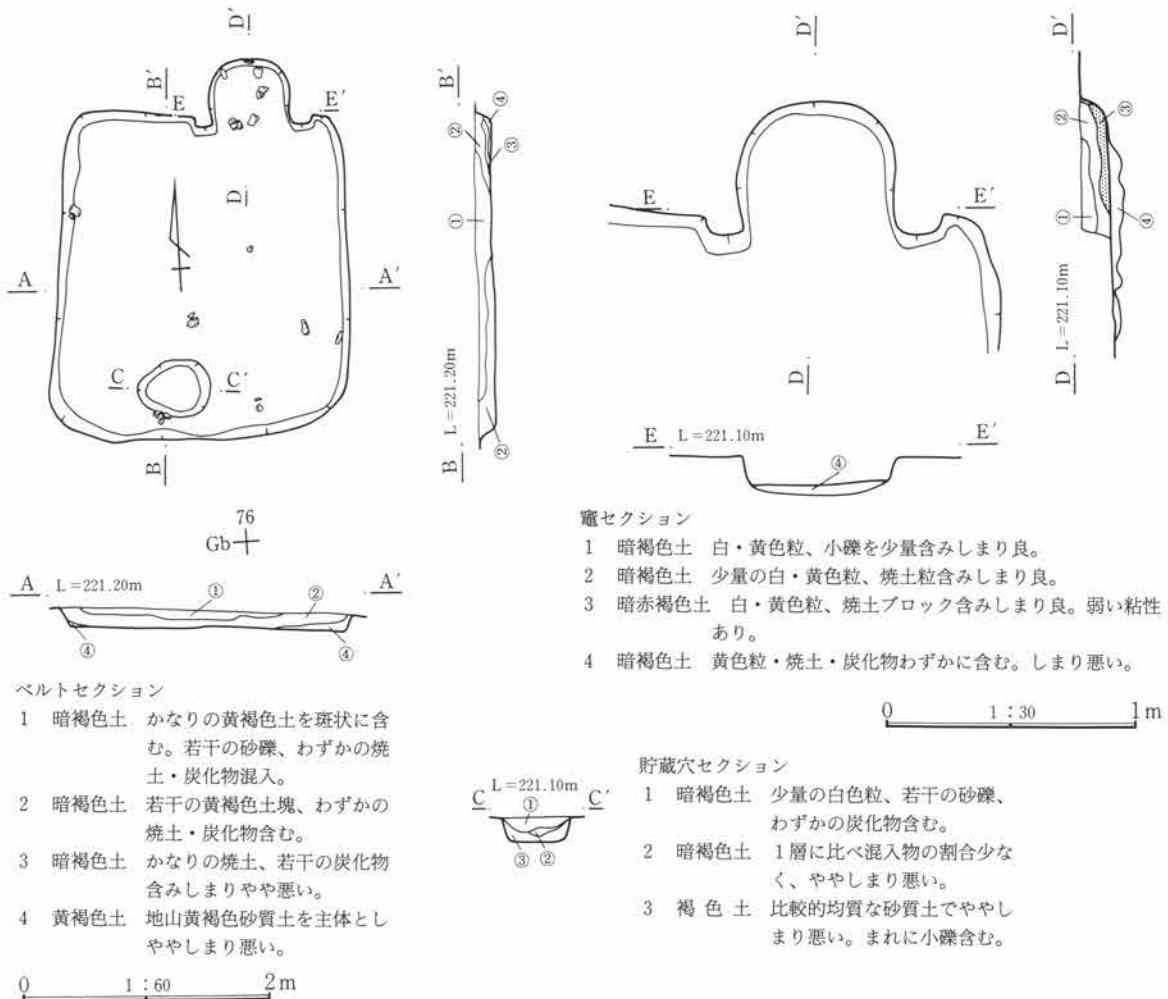
床面 地山黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な床面形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の中央よりも東側に所在。住居内にわずかに袖が作られるが、燃烧部は大きく住居外に張り出す。焚口幅49cm・燃烧部長57cm。焼土の発達が悪く、燃烧部の床・壁ともに焼土化した部分はみられない。煙道は削平されて残っていない。

貯蔵穴 住居南壁際の、中央よりもやや西よりに所在。形状は住居の長辺方向が長い楕円形であるが、やや歪んでいる。内部からの遺物の出土はなかった。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、土師器の小破片が竈内を中心に散在する程度で、器形が復元できるような資料はなかった。掘り方 なし。

調査所見 住居の時期認定に関しては、出土遺物が少ないため困難であった。しかし、竈内より薄手の甕の胴部破片が出土していることや、住居および竈の形態からみて、奈良時代の住居と推測される。



G-17号住居跡 (PL30・119)

位置 Ga-76グリッド 主軸方位 N-5°-E 残存壁高 0.13m 重複 G-18住を切る。

規模と形状 長辺2.74m・短辺2.23mの横長の長方形。東壁に比べ西壁がやや長い。かなり小型の住居である。上部を削平されており、壁の残りは悪い。住居主軸はほぼ北を指す。

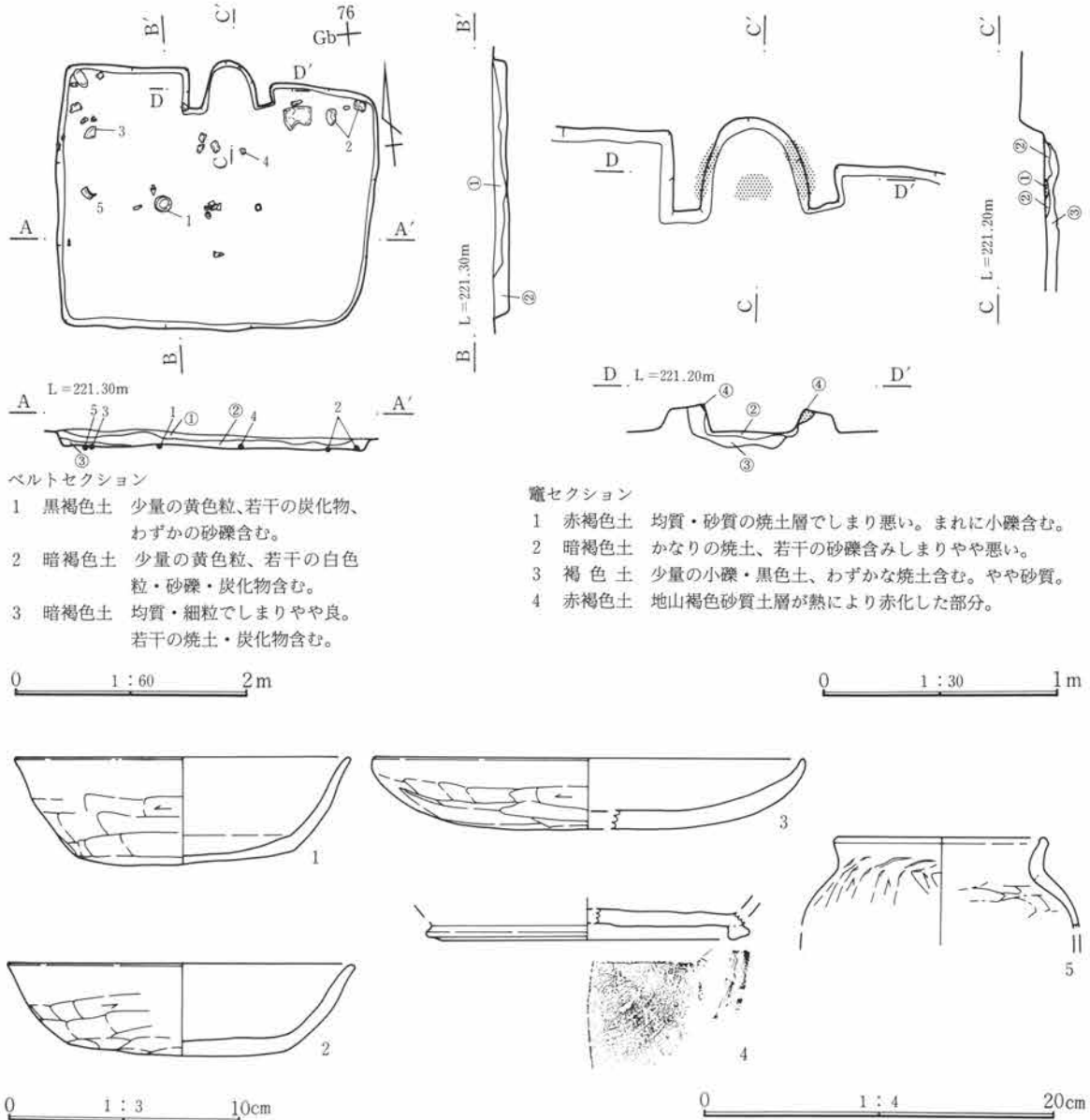
床面 床面はほぼ平坦。南西隅で下位の18住埋土を床面とするが、他は地山褐色砂質土に一致。

竈 住居北壁のほぼ中央に所在。住居内に袖が作り出されるが、燃烧部はわずかに住居外にも張り出す。焚口幅41cm・燃烧部長40cm。焼土は燃烧部床と両壁にわずかにみられる。煙道は削平されている。

貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は少なく、住居内に散在。器種は、土師器坏(1・2)・皿(3)・小型甕(5)、須恵器高台付坏(4)がある。掘り方 なし。

調査所見 奈良時代。



第222図 G-17号住居跡、出土遺物実測図

第3章 検出された遺跡と遺物

G-17号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 14.1 底 9.1 高 4.6	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	+5cm 5%	口 14.6 底 9.3 高 3.9	①砂粒（ごくまれに 小礫）含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
3	土師器 皿	床密着 1/4	口(18.1) 底 — 高 3.0	①細砂・少量の小礫 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
4	須恵器 高台付坏	床密着 底部1/4	口 — 底(13.6) 高 —	①細砂含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り。貼り付け高台。	
5	土師器 小型甕	床密着 口～胴部 上位1/4	口(12.2) 底 — 高 —	①細砂（ごくまれに 小礫）含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

G-18号住居跡 (PL30・120)

位置 Ga-76グリッド 主軸方位 N-2°-E 残存壁高 0.33m 重複 G-17住に切られる。

規模と形状 長辺2.45m・短辺3.07mの縦長の長方形。南東コーナーはかなり丸みを帯びているが、他の周壁はほぼ直進し、線形の乱れは少ない。かなり小型の住居である。住居主軸はほぼ北を指す。竈が北・東の2ヶ所にあったが、近接する同時期の住居にならない、北竈を基準として主軸等を決定した。

床面 地山褐色砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居の北壁と東壁に各1基づつ所在。北側の竈No.1は、北壁のほぼ中央に位置している。袖が住居内に作り出されるが、右袖は重複する住居によって壊されている。焚口幅は推定で49cm、燃焼部長64cm。竈材として利用されていたと思われる板状の砂岩が、燃焼部内より若干床面から浮いた状態で出土している。煙道は削平されて残っていない。東側の竈No.2は、東壁の中央よりもやや南側に位置している。住居内に短い袖が作られているが、重複する住居によって左袖が大きく失われている。焚口幅59cm・燃焼部長48cm。燃焼部はかなり住居域外に張り出す。こちらも燃焼部内より竈材に利用されていたと思われる砂岩が出土している。煙道は削平され残っていない。竈は両方とも破壊されておらず、両者の前後関係は不明である。同時に使用されていたとも考えられるが、その場合、住居規模が非常に小さいことから、何らかの特殊な機能を持った住居であった可能性がある。

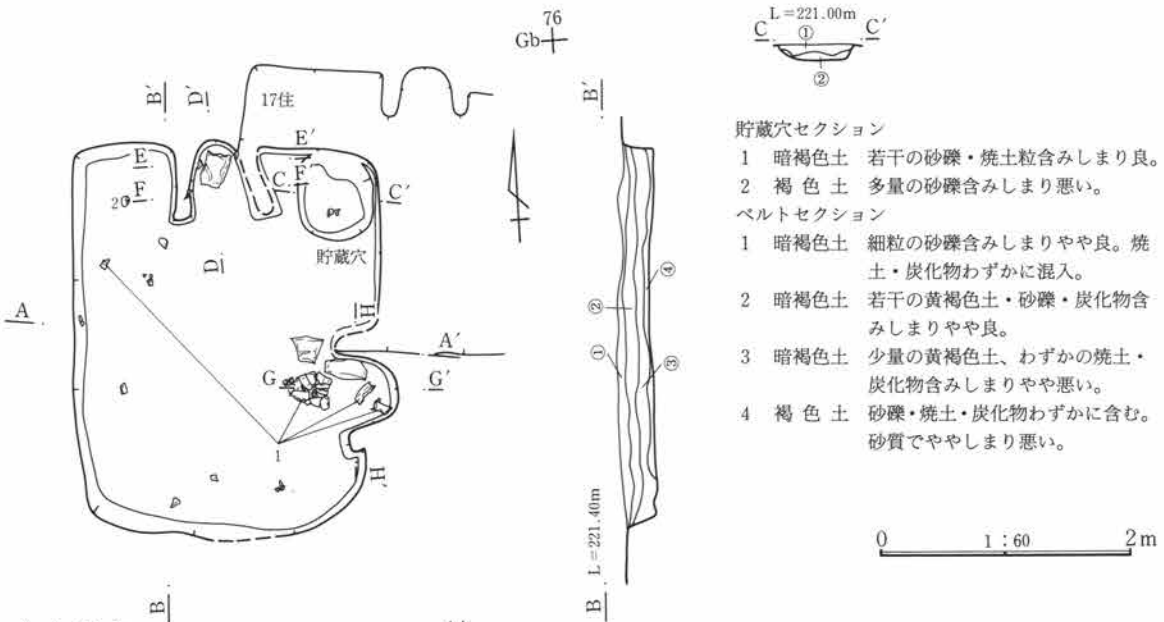
貯蔵穴 住居北東隅に所在。調査時の形状は不整形であるが、かなり崩れてはいるものの、隅丸の長方形であった可能性が高い。

周溝 なし。 柱穴 なし。

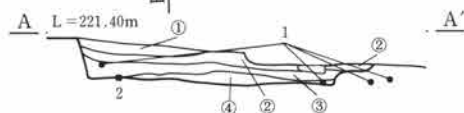
出土遺物 遺物量は非常に少ない。竈No.2の内部および前部に、土師器甕のやや大きな破片(1)がまとまっているほかは、小破片が散在するのみである。他に、住居北西隅付近の床面上より石製の紡錘車(2)が出土している。

掘り方 なし。

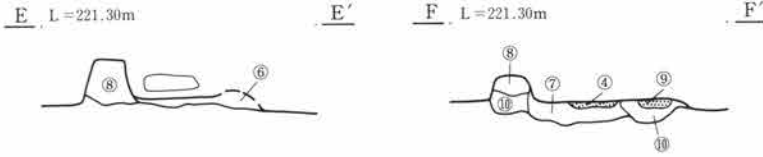
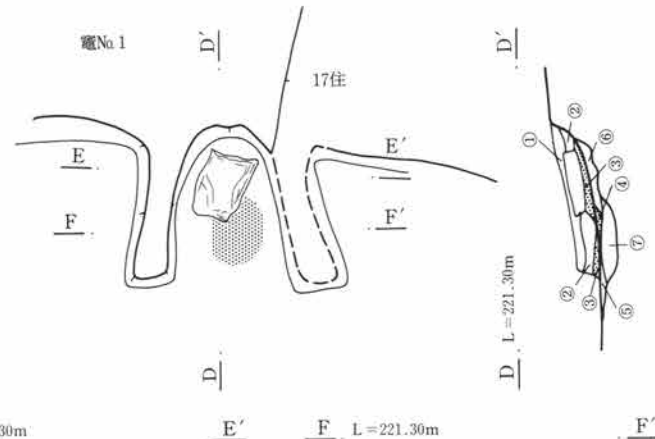
調査所見 住居規模・形状より奈良時代の住居と思われる。



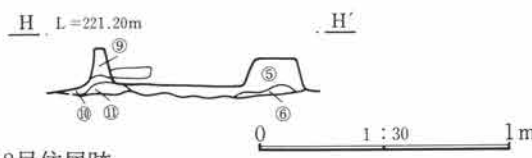
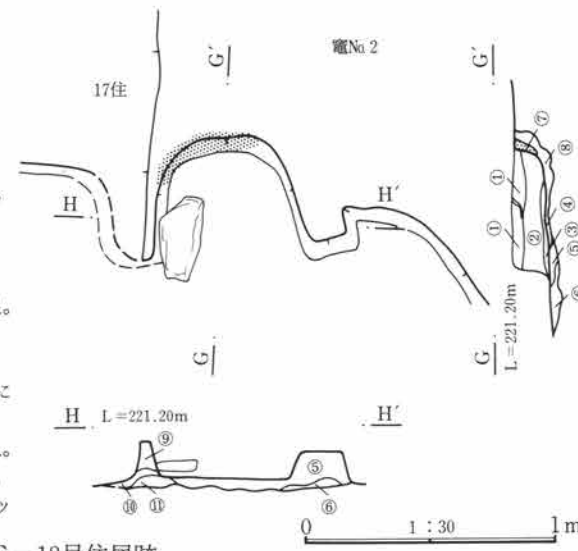
- 貯蔵穴セクション
- 1 暗褐色土 若干の砂礫・焼土粒含みしまり良。
 - 2 褐色土 多量の砂礫含みしまり悪い。
- ベルトセクション
- 1 暗褐色土 細粒の砂礫含みしまりやや良。焼土・炭化物わずかに混入。
 - 2 暗褐色土 若干の黄褐色土・砂礫・炭化物含みしまりやや良。
 - 3 暗褐色土 少量の黄褐色土、わずかの焼土・炭化物含みしまりやや悪い。
 - 4 褐色土 砂礫・焼土・炭化物わずかに含む。砂質でややしまり悪い。



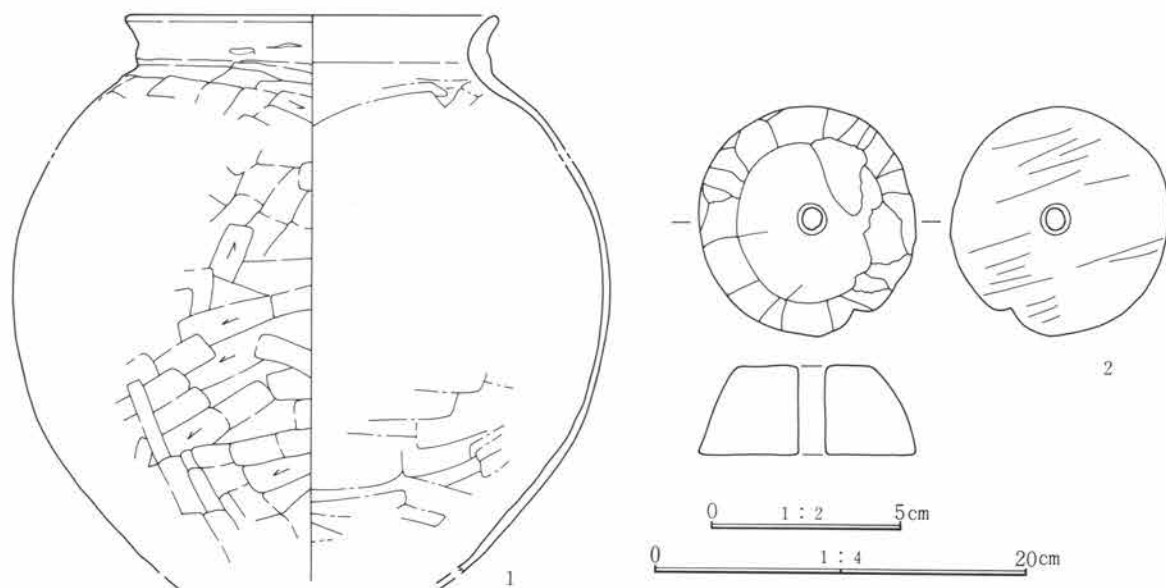
- 竈No 1 セクション
- 1 暗褐色土 少量の砂礫・焼土粒・炭化物含みしまり良。
 - 2 暗褐色土 1層に似るが、炭化物の混入より多い。
 - 3 暗赤褐色土 多量の焼土・砂礫含む。
 - 4 暗赤褐色土 均質・細粒の焼土層。若干の白色粒含みしまりやや良。
 - 5 褐色土 均質・細粒で、焼土粒わずかに含む。
 - 6 暗褐色土 若干の黄色土・小礫、わずかの焼土含みしまりやや良。
 - 7 暗褐色土 若干の白色粒・小礫・焼土含みしまりやや良。
 - 8 暗褐色土 少量の焼土、若干の小礫含みしまりやや良。
 - 9 暗赤褐色土 均質・細粒の焼土層。小礫わずかに含みしまりやや良。
 - 10 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土わずかに含む。均質でしまり良。



- 竈No 2 セクション
- 1 暗褐色土 少量の黄色粒・焼土粒・砂礫・炭化物含みしまり良。
 - 2 暗褐色土 1層に似るが、黄色粒の混入より多い。
 - 3 褐色土 多量の焼土含む砂質土。
 - 4 暗褐色土 かなりの焼土ブロック、わずかの白色粒含む。
 - 5 暗褐色土 焼土・炭化物・小礫わずか含む。砂質でやしまり良。
 - 6 褐色土 細粒・均質の砂質土。炭化物わずかに含む。
 - 7 暗赤褐色土 若干の砂礫含む焼土層。しまりやや良。
 - 8 暗褐色土 細粒の砂礫含みしまりやや良。焼土・炭化物わずかに混入。
 - 9 暗褐色土 少量の小礫含みしまりやや良。焼土・炭化物若干混入。
 - 10 褐色土 少量の小礫含みしまりやや良。焼土粒わずかに混入。
 - 11 暗褐色土 若干の焼土・炭化物含みしまりやや良。一部砂のブロック混入。



第223図 G-18号住居跡



第224図 G-18号住居出土遺物実測図

G-18号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 甕	床密着 口～胴部	口 19.9 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
2	紡錘車	+5cm 完形	6.0	5.8	2.3	100.8	砥沢石	やや大型の紡錘車。全面を丁寧に研磨。表面一 部破損。

G-19号住居跡 (PL31・120)

位置 Ga-70グリッド 主軸方位 N-2°-W 残存壁高 0.42m 重複 G-17土に切られる。

規模と形状 形状はほぼ正方形で、長辺2.48m・短辺2.55mである。かなり小型の住居である。周壁はほぼ直進し、線形の乱れは少ない。竈は北側に築かれる。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の中央よりも東側に所在。調査時には袖部分をより短く捉えていたが、左袖先端部で袖石が出土したことにより、形状を復元・修正した。袖石の石材は、板状の砂岩である。焚口幅は推定で40cm、燃焼部長49cm。燃焼部の中央には、支脚として細長い角礫状の砂岩が据えられている。煙道の残存状況は良好で、天井部分も崩落せずに残っている。煙道長73cm。

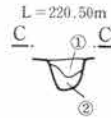
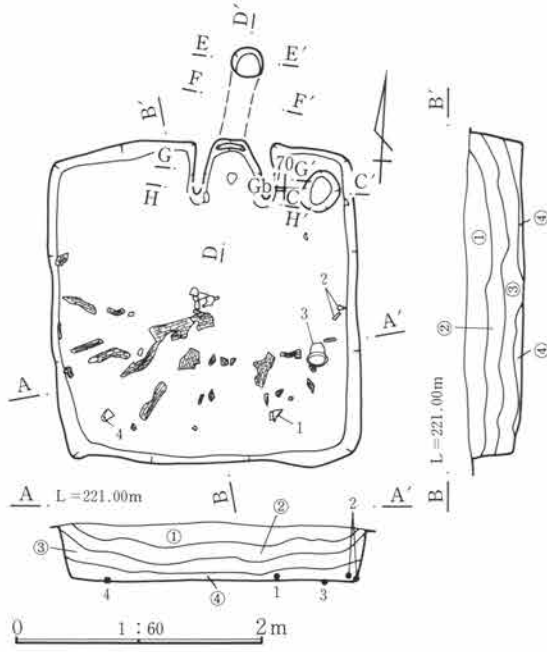
貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居の短辺方向にやや長い楕円形で、非常に小規模である。

周溝 なし。 柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、ほとんどは小破片であるが、東壁付近の床面上より、完形の甕(3)が出土。ほかに土師器坏(1・2)、砥石(4)がある。いずれも床面直上に位置していた。掘り方 なし。

調査所見 床面直上より炭化材が出土していることから、焼失住居と考えられる。ただし、遺物量が非常に少なく、炭化材も住居の南半に分布が片寄ることから、住居廃棄後に焼失したものと推定される。古墳時代後期。

第2節 F・G区



貯蔵穴セクション

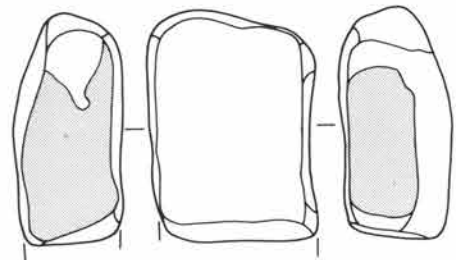
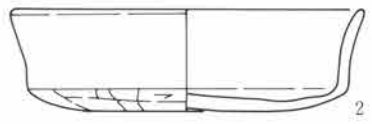
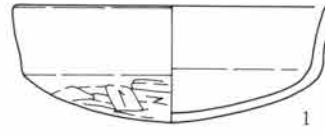
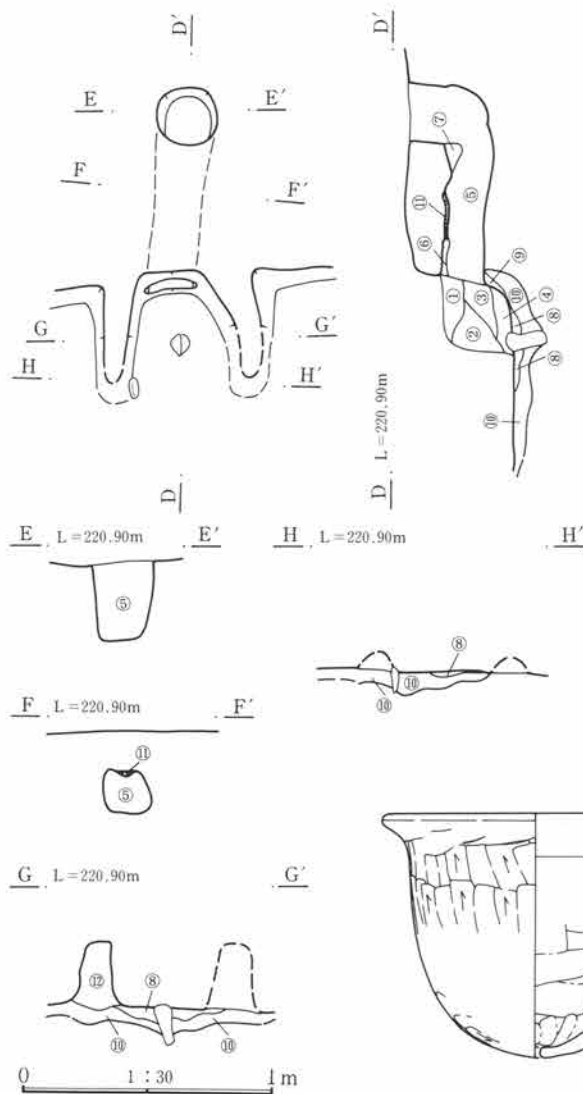
- 1 暗褐色土 若干の砂礫・炭化物・黄色土含みしまりやや良。
- 2 暗褐色土 均質でしまり良。弱い粘性あり。焼土・炭化物わずか含む。

ベルトセクション

- 1 暗褐色土 少量の白色粒・小礫、わずかの炭化物含みしまり良。
- 2 暗褐色土 褐色粘質土塊・炭化物わずかに含みしまり良。
- 3 暗褐色土 炭化物・砂質土若干含みや不均質。弱い粘性あり。
- 4 褐色土 少量の炭化物、若干の焼土含みしまり良。粘性あり。

竈セクション

- 1 暗褐色土 均質でしまりやや良。焼土・炭化物わずかに含む。
- 2 暗褐色土 白色粒・焼土・炭化物わずかに含みしまり良。
- 3 暗褐色土 若干の炭化物、わずかの焼土含みしまりやや良。
- 4 暗褐色土 焼土・炭化物かなり含みしまりやや良。弱い粘性あり。
- 5 暗褐色土 少量の黄色粒・小礫・炭化物含み弱い粘性あり。
- 6 褐色土 地山褐色砂質土を主体とし、わずかの焼土混入。
- 7 暗褐色土 少量の焼土含みしまりやや良。ごく弱い粘性あり。
- 8 暗褐色土 均質でしまり良。弱い粘性あり。かなりの焼土含む。
- 9 暗褐色土 少量の焼土、若干の黄色土含みしまり良。
- 10 暗褐色土 若干の砂質土、わずかの焼土含み比較的均質でしまり良。
- 11 暗赤褐色土 地山褐色砂質土が熱により焼土化した部分。
- 12 暗褐色土 若干の焼土・炭化物・黄色土雑多に含む。しまり良。



0 1:3 10cm

0 1:4 20cm

第225図 G-19号住居跡、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

G-19号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	+3cm 1/5	口(12.6) 底— 高 4.5	①細砂含む ②良好 ③黒褐色	口縁部外面横ナデ。体部外面へラ削り、内面横ナデ。	内外面吸炭		
2	土師器 坏	床密着 1/5	口(13.9) 底— 高 4.0	①細砂含む ②良好 ③黒褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。口縁に比して体部が非常に浅い。	内外面吸炭		
3	土師器 甕	床密着 完形	口 16.2 底— 高 12.8	①多量の粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面へラナデ。内面底部は指によるナデ。	孔径1.7cm		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全長	幅	厚さ	重量		
4	砥石	床密着 1/2	(14.1)	6.6	4.4	(385.8)	砥沢石	両側に研磨面。

G-20号住居跡 (PL31・120)

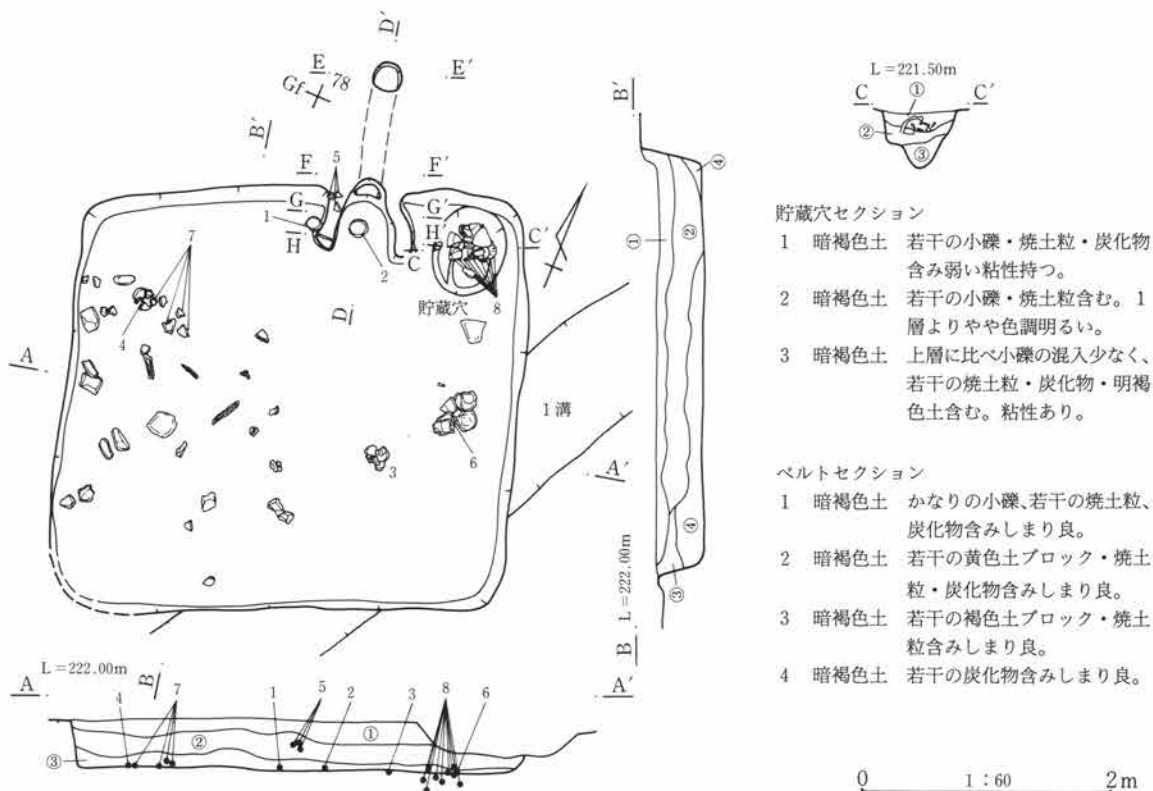
位置 Ge-77・78グリッド 主軸方位 N-18°-W 残存壁高 0.49m

重複 G-1号溝に切られ、G-21住をわずかに切る。

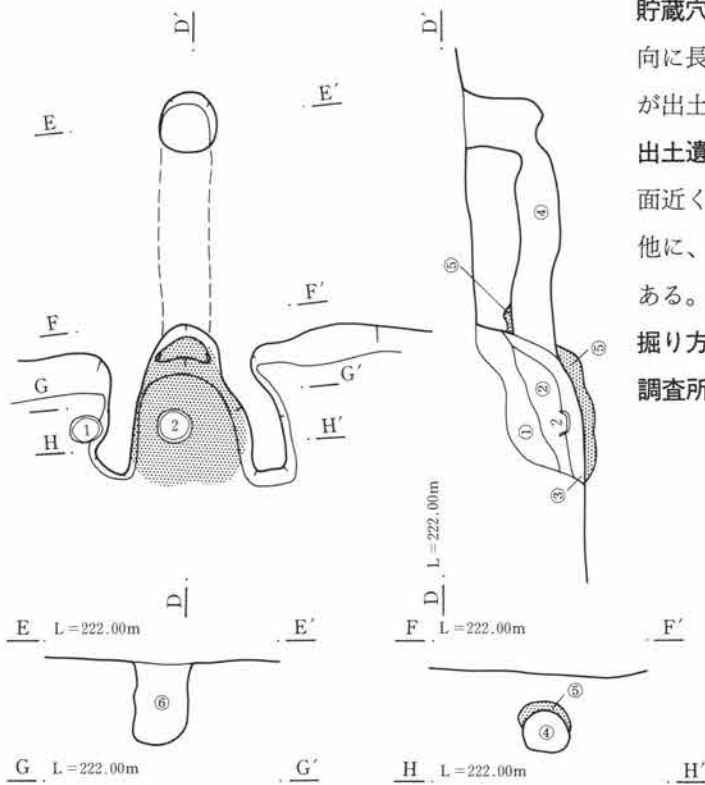
規模と形状 長辺3.67m・短辺3.31mのわずかに横長の長方形。南西隅がやや外側に張り出している。周壁はほぼ直立・直進し、線形の乱れは少ない。主軸はかなり西にふれる。竈は北側に築かれる。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の中央よりも東側に所在。住居内に袖が作り出される形状をとる。焚口幅48cm・燃烧部長61cm。竈の残存状況は良好で、天井部分も崩落せずに残っている。煙道長92cm。燃烧部内と左袖脇より、完形の土師器坏(1・2)が出土している。



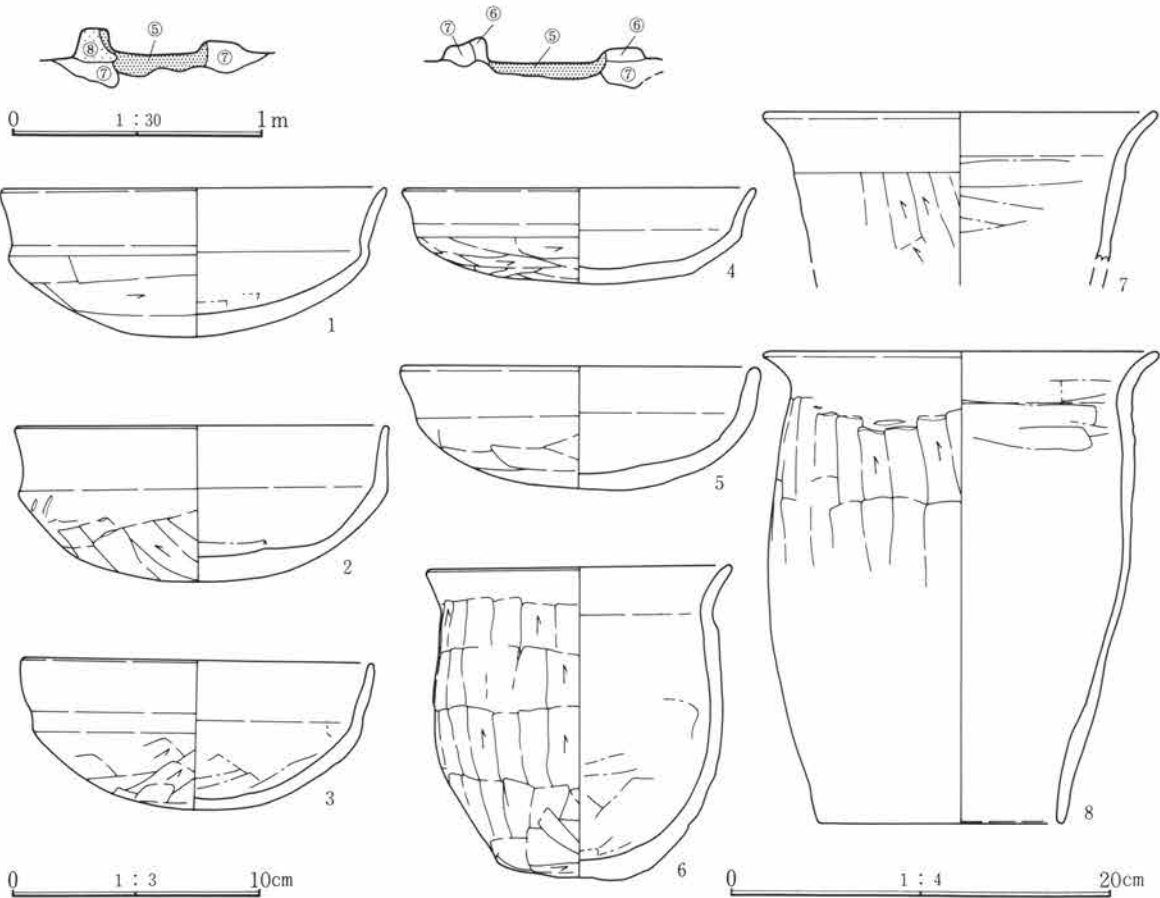
第226図 G-20号住居跡



貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居の短辺方向に長い楕円形。埋土中～上位より大型の甕(8)が出土している。周溝なし。柱穴なし。
出土遺物 遺物量はあまり多くないが、多くは床面近くより出土している。先述の土師器坏・甕の他に、土師器坏(3～5)・小型甕(6)・甕(7)がある。
掘り方 なし。
調査所見 古墳時代後期。

竈セクション

- 1 暗褐色土 小礫・白色粒・褐色土ブロック若干含みしまり良。
- 2 暗褐色土 小礫・焼土・褐色土ブロック若干含む。粘性あり。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化物若干含み粘性持つ。
- 4 暗褐色土 焼土・炭化物若干含む。やや粗粒。
- 5 暗褐色土 小礫・焼土ブロック若干含み弱い粘性持つ。
- 6 暗褐色土 小礫・焼土粒若干含みしまり良。
- 7 褐色土 小礫・焼土粒若干含む。
- 8 黄褐色土 細粒で粘性持つ。竈袖材。



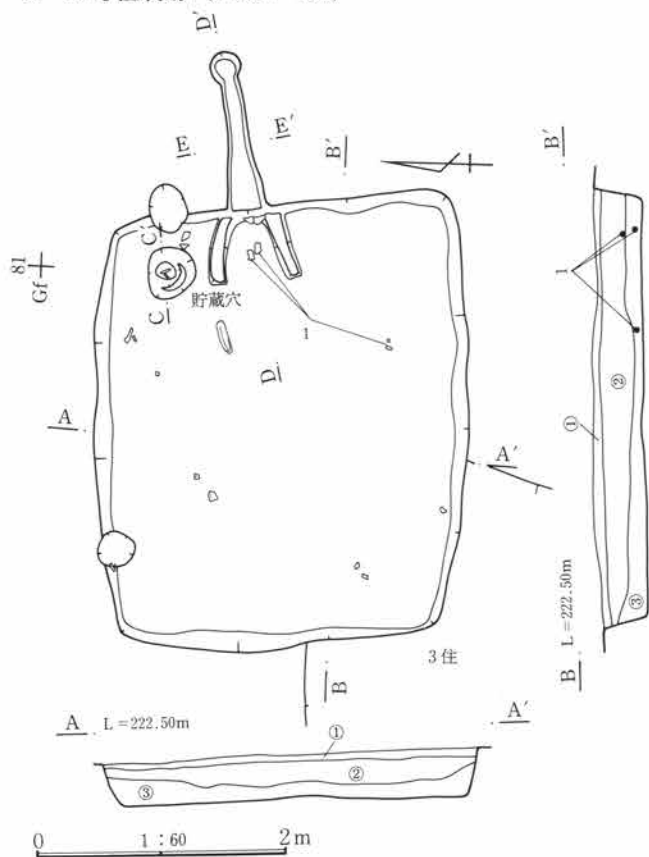
第227図 G-20号住居竈、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

G-20号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 口縁一部 欠	口 14.9 底 — 高 5.9	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラ ナデ後横ナデ。	
2	土師器 坏	カマド内 口縁一部 欠	口 14.6 底 — 高 6.1	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラ ナデ後横ナデ。	
3	土師器 坏	+3cm ほぼ完形	口 13.9 底 — 高 3.8	①細砂・赤褐色微粒 子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
4	土師器 坏	床密着 $\frac{2}{3}$	口(13.9) 底 — 高 5.9	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
5	土師器 坏	カマド左 袖上 $\frac{3}{4}$	口 14.3 底 — 高 5.8	①多量の細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。器表面かなり摩滅。	
6	土師器 小型壺	床密着 $\frac{2}{3}$	口 16.2 底 6.8 高 16.6	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	
7	土師器 甕	床密着 口縁 $\frac{1}{2}$	口(20.8) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色微粒 子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り。内面丁 寧な横ナデ。	
8	土師器 甕	貯蔵穴内 口~底部 $\frac{2}{3}$	口 21.0 底(14.4) 高 24.8	①砂粒・少量の小礫 含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	

G-22号住居跡 (PL32・120)



位置 Ge-81グリッド

主軸方位 N-87°-E

残存壁高 0.39m 重複 G-3住に切られる。

規模と形状 長辺3.01m・短辺3.60mと東西方向に長い縦長の長方形。周壁はほぼ直進するが、南東隅がやや突出している。竈は東側に築かれる。

床面 地山の砂礫混じり褐色土を掘り込んで、平坦な床面を形成。

竈 住居東壁の中央よりもやや北側に所在。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口

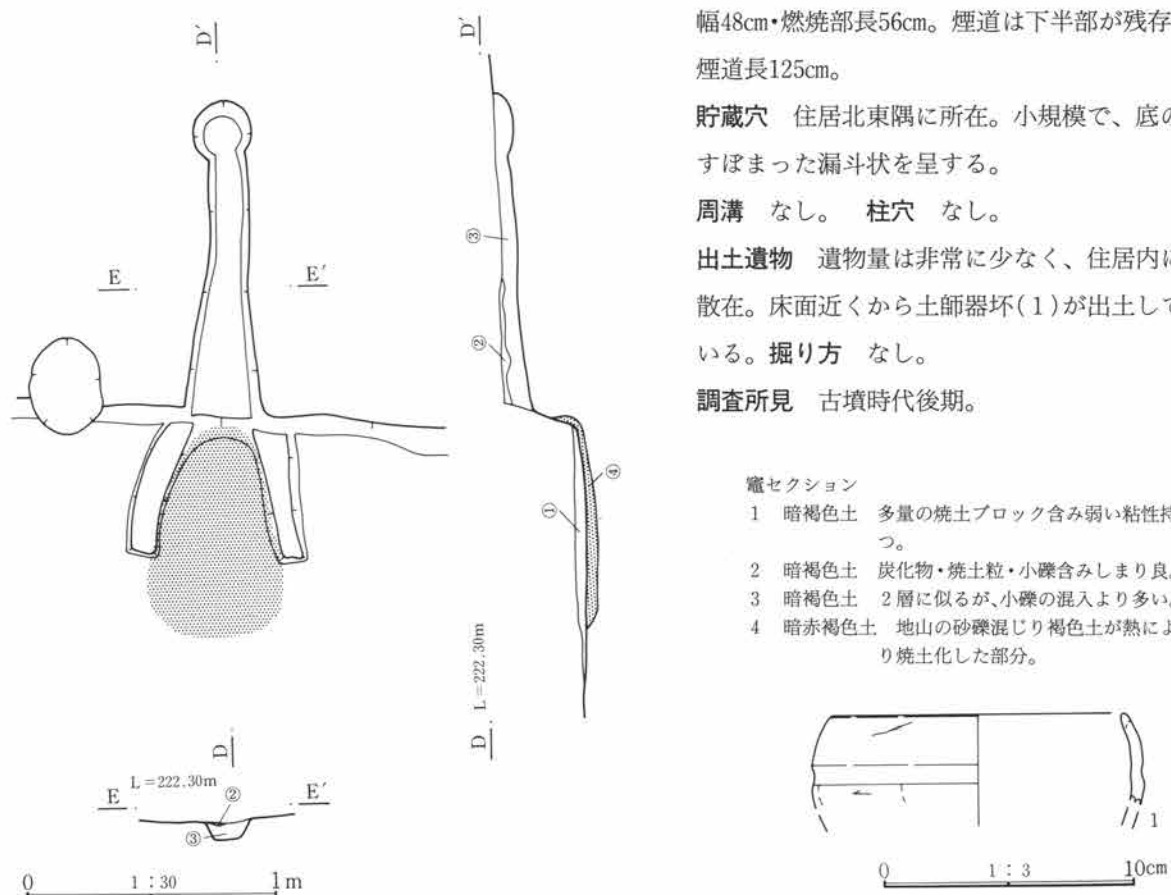
ベルトセクション

- 1 黒褐色土 細粒で少量の小礫含む。
- 2 暗褐色土 細粒で小礫含み弱い粘性持つ。
- 3 褐色土 黄色粒・炭化物含み、細粒で弱い粘性持つ。

貯蔵穴セクション

- 1 褐色土 細粒で粘性持つ。バミス混入。
- 2 褐色土 バミス・焼土粒をわずかに含む。粘性あり。
- 3 褐色土 小礫わずかに含む。粘性あり。

第228図 G-22号住居跡



第229図 G-22号住居竈、出土遺物実測図

G-22号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	カマド内 口縁部	口(11.3) 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、接合痕有り。下位にくびれ。 体部外面へう削り。内面横ナデ。	

G-23号住居跡 (PL32・120・121)

位置 Gf-81・82グリッド **主軸方位** N-1°-E **残存壁高** 0.46m **重複** なし

規模と形状 住居の半分以上が調査区外にあり、全体の形状および規模は不明。現状で長辺2.12m・短辺4.82mである。調査できた部分の周壁については直立・直進し、線形の乱れはみられない。住居主軸はほぼ真北に一致する。竈は北側に築かれるが、東壁に古い竈の煙道部が残存している。

床面 住居のほぼ全域に掘られた掘り方内に、焼土・小礫を含む細粒の褐色土を埋めて床面を形成。貼り床はみられないが、表面は若干硬化している。

竈 住居北壁に所在(竈No.1)。袖は作られず、燃烧部が住居域外に張り出す形状を呈する。燃烧部の半分近くが調査区外にあるため、正確な規模は不明。現状の燃烧部長は41cm。燃烧部内には直径10cm程の小ピットがあり、支脚の痕跡かと思われる。くりぬき式の煙道は、天井部分も残存していた。煙道長84cm。天井部の上面は、熱による赤化・硬化が著しい。また、住居東壁の中央よりもやや南よりに、竈の煙道部分のみが所在(竈No.2)。北側の竈No.1に先立って使用されていた古い竈であろう。煙道部長136cm。

第3章 検出された遺構と遺物

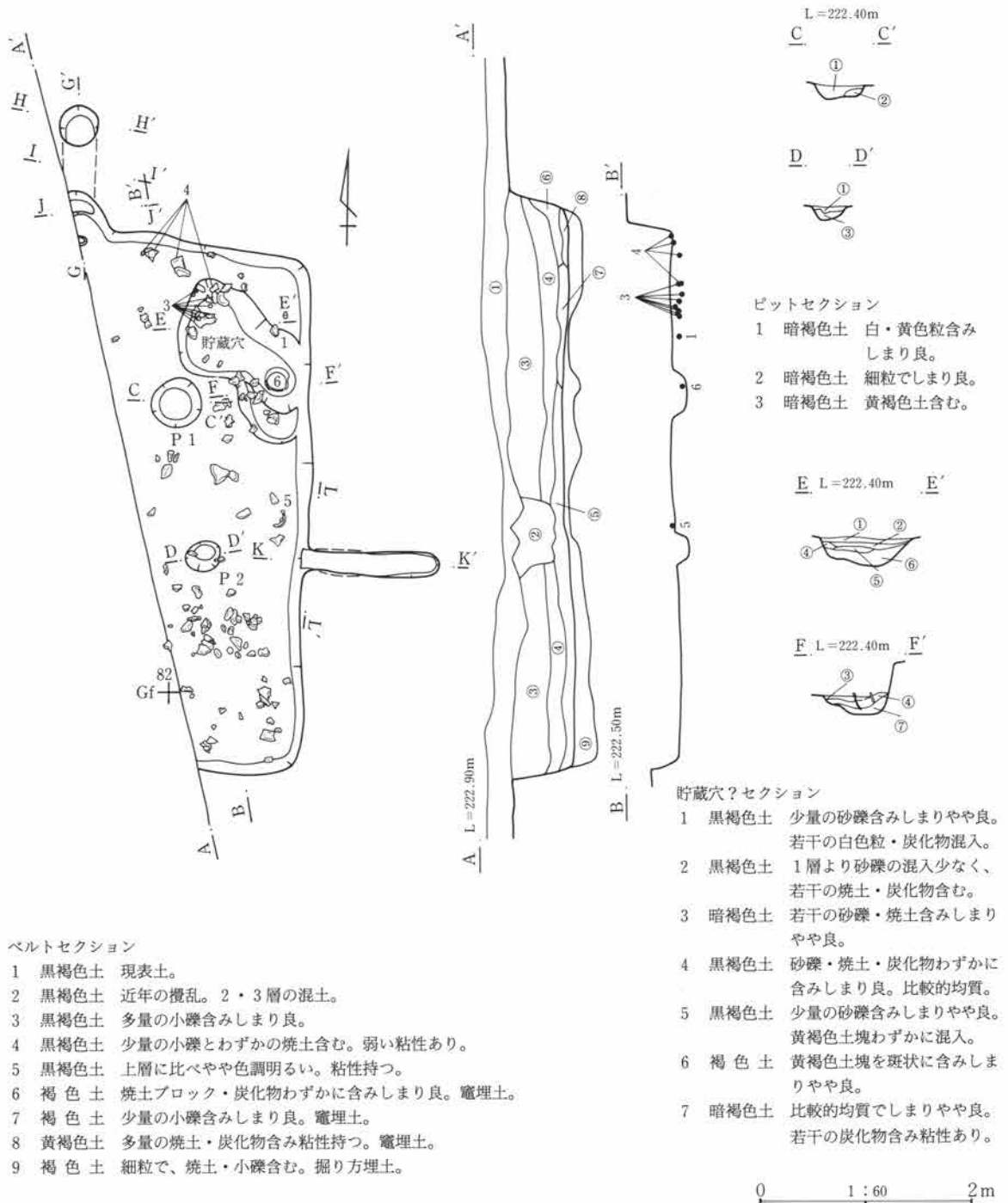
貯蔵穴 住居の北東隅近くより、中央がくびれた不整形の土坑を検出。貯蔵穴の可能性はある。埋土上位より多量の遺物が出土している。周溝 なし。

柱穴 2基の小ピットを検出したが、位置的にみて柱穴とは考えがたい。

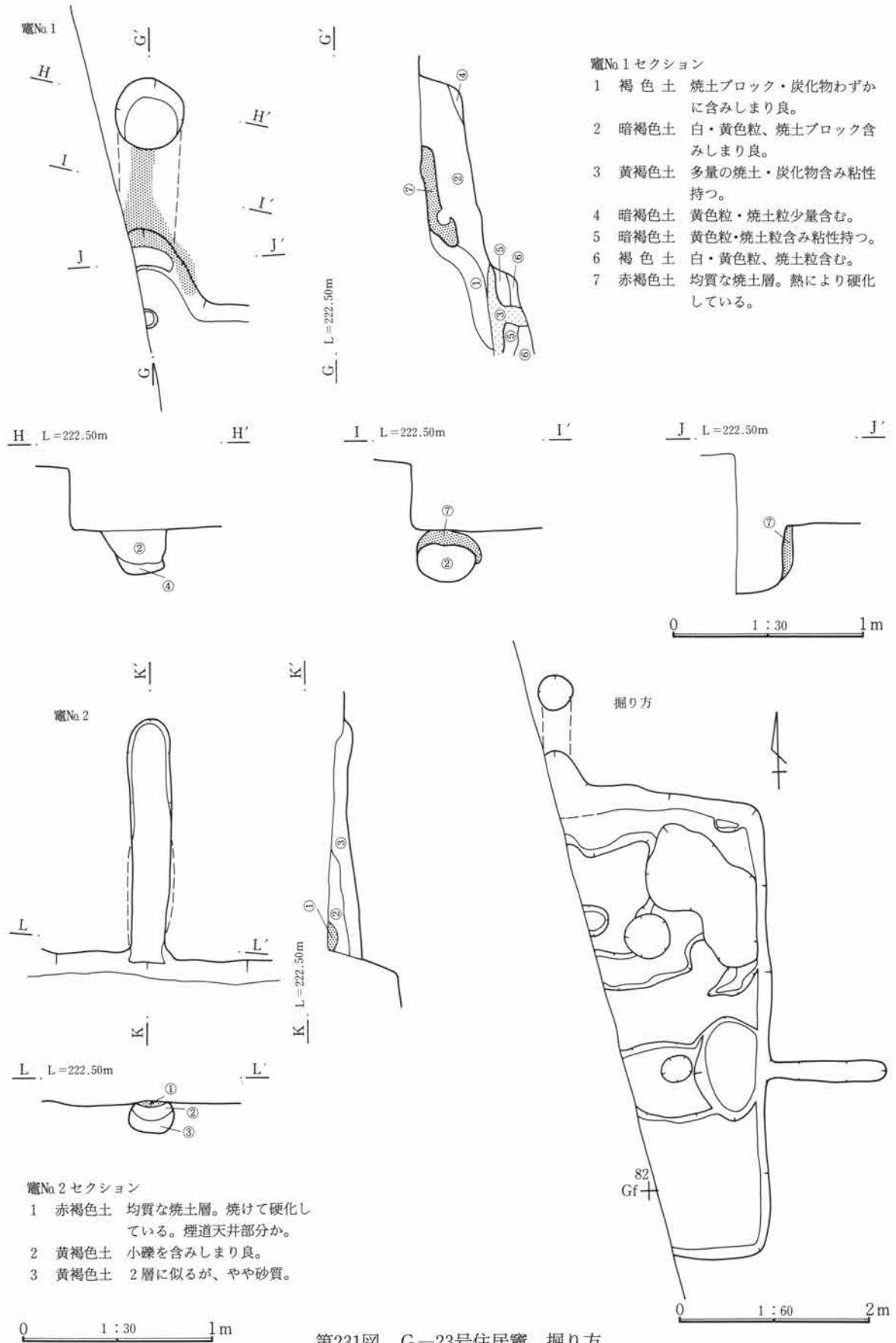
出土遺物 比較的多量の遺物が住居全域から出土。多くは床面に近い高さに位置している。器種は、土師器 坏(1)・皿(2)・小型甕(3)・鉢(4)・甕(5・6)がある。

掘り方 住居の北側3分の2ほどの部分に不規則な掘り方が形成されている。

調査所見 古墳時代後期。

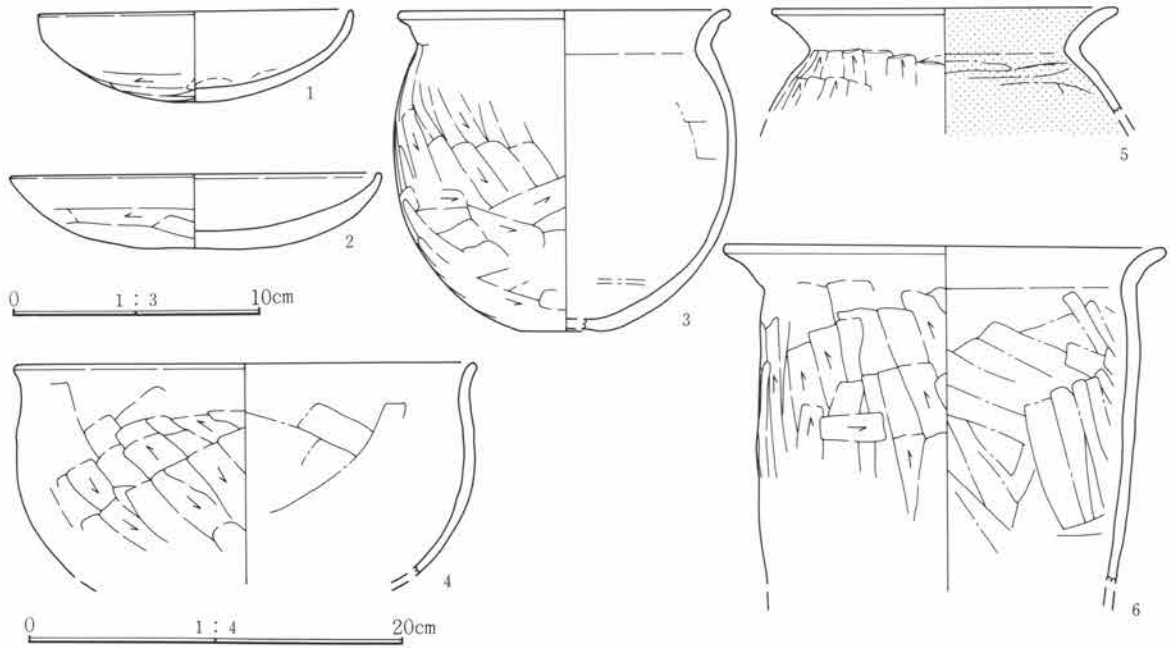


第230図 G-23号住居跡



第231図 G-23号住居竈、掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



第232図 G-23号住居出土遺物実測図

G-23号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 1/4	口(12.4) 底 — 高 3.5	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。内面底部に指頭圧痕。			
2	土師器 皿	覆土 1/2	口 14.8 底 — 高 2.8	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。口縁端部はわずかに内側に肥厚。			
3	土師器 小型甕	貯蔵穴内 1/3	口(17.6) 底(4.6) 高 16.9	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
4	土師器 鉢	床密着 口～胴部 上位1/2	口(24.3) 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。口縁端部は外反。			
5	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/2	口(18.4) 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。内面に接合痕。	胴部内面に煤状炭化物付着		
6	土師器 甕	床密着 口～胴部 上半	口 23.3 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
7	鉄滓	覆土	1.7	1.4	1.0	2.0	破片	表面ガラス状で金属光沢あり。
8	鉄滓	覆土	3.2	2.3	1.8	10.0	破片	表面ガラス状で金属光沢あり。内部は発泡。
9	鉄滓	覆土	2.6	2.4	2.3	19.0	破片	表面金属光沢あり。内部は発泡。
10	鉄滓	覆土	4.1	2.9	2.4	44.0	破片	表面金属光沢あり。内部は発泡。

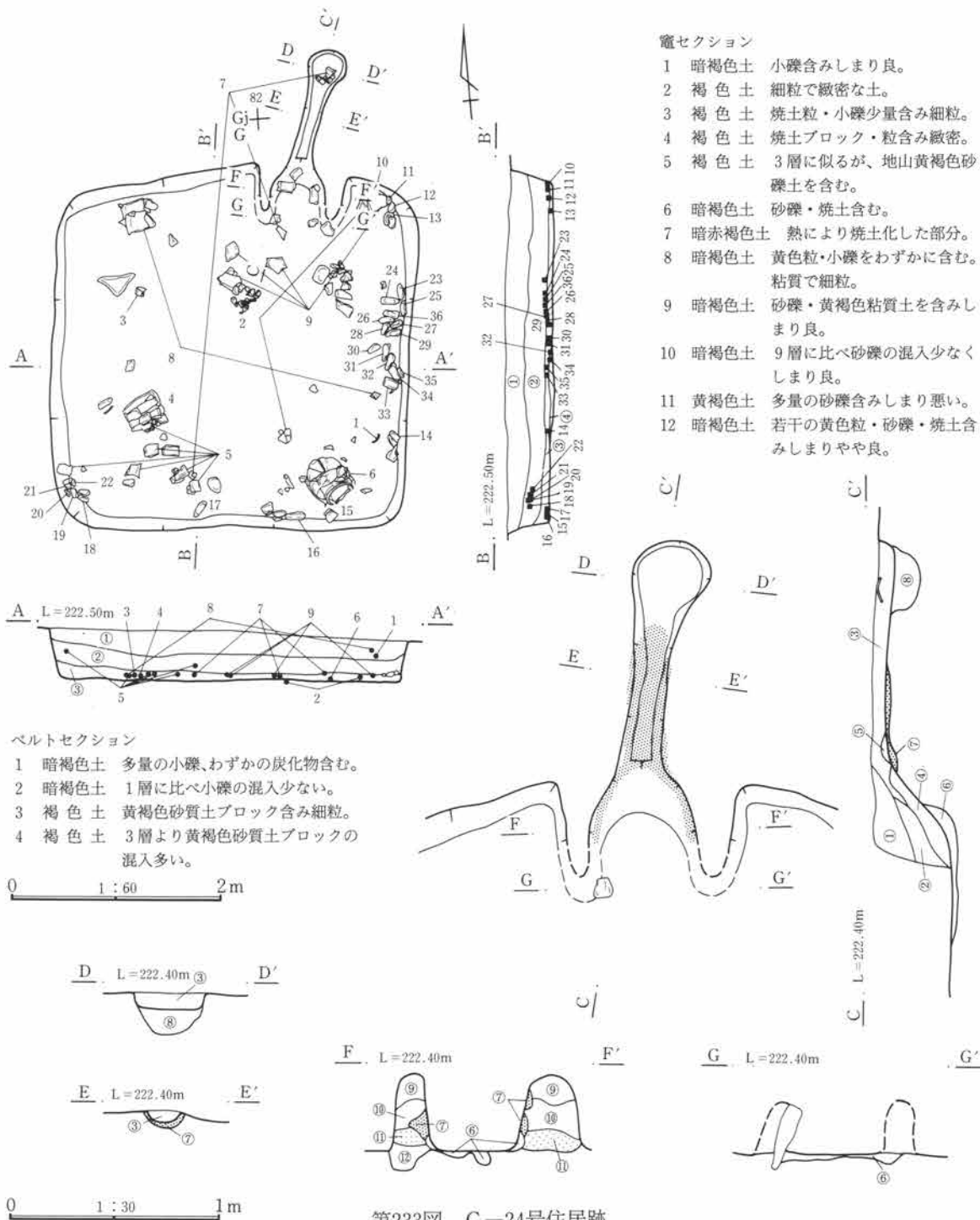
G-24号住居跡 (PL32・33・121・122)

位置 Gi-81・82グリッド 主軸方位 N-6°-E 残存壁高 0.48m 重複 G-26住をわずかに切る。
規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、竈付近がやや北側に張り出す。長辺3.42m・短辺3.45m。周壁は竈付近を除いてほぼ直進し、線形の乱れはみられない。住居主軸はやや東を指す。竈は北側に築かれる。
床面 地山黄褐色砂質土を掘り込んで床面を形成。貼り床・硬質面などは特にみられなかった。

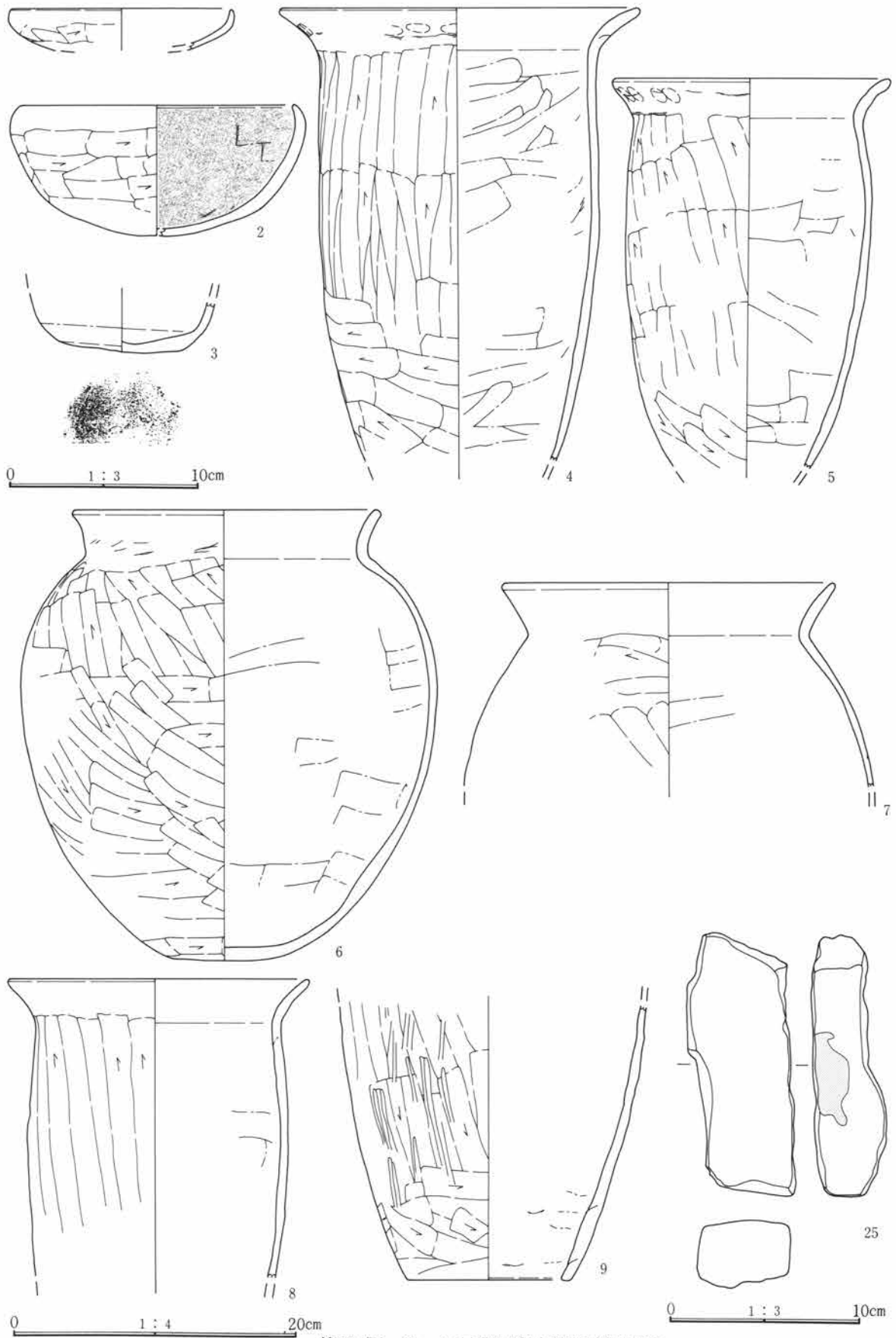
竈 住居北壁の東よりに所在。当初袖の長さを短く想定したが、左袖の袖石と思われる角礫状の砂岩が出土したため、修正・復元した。燃烧部の幅・長さは推定で42cm・65cm。煙道上部は削平され、下底部のみが残存。煙道長104cm。燃烧部主軸に対し、煙道が東側に傾く。貯蔵穴なし。周溝なし。柱穴なし。

出土遺物 遺物量はさほど多くはないが、床面付近から完形近くまで復元可能な土器が数个体出土している。器種は、土師器坏(1・2)・甕(4~8)・甑(9)、須恵器坏(3)がある。また、住居の東~南壁際で、こもあみ石と思われる円礫が数個から十数個まとまって出土している(10~36)。掘り方なし。

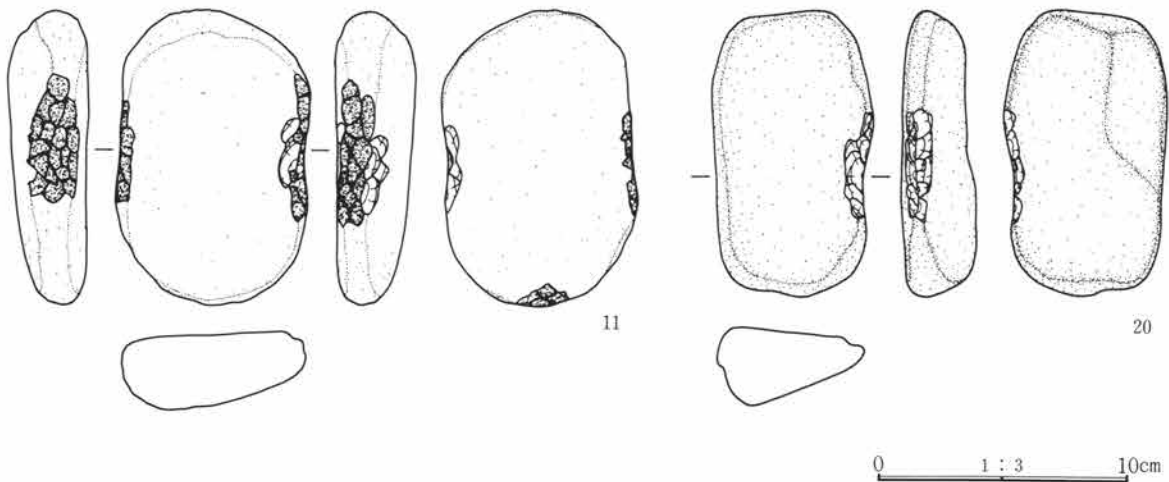
調査所見 出土遺物より、奈良時代初頭の住居と推定される。



第3章 検出された遺構と遺物



第234図 G-24号住居出土遺物実測図①



第235図 G-24号住居出土遺物実測図②

G-24号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	+25cm 口～体部 中位1/4	口(11.5) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。			
2	土師器 坏	床密着 1/2	口(14.3) 底— 高 6.8	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面へらナデ。口縁端部は内湾する。	内面黒色		
3	須恵器 坏	+6cm 体部～底 部1/2	口— 底 6.5 高—	①少量の細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転へら切り後ナデ。			
4	土師器 甕	床密着 口～胴部 下位	口 25.0 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕・接合痕。胴部外面へら削り、内面横ナデ。			
5	土師器 甕	+7cm 口～胴部 下位	口 19.5 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕・接合痕。胴部外面へら削り、内面横ナデ。			
6	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 21.7 底 7.5 高 31.2	①粗砂粒・少量の小 礫含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。			
7	土師器 甕	煙道内 口～胴部 上位	口(23.3) 底— 高—	①均質な細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。			
8	土師器 甕	床密着 口～胴部 中位	口(20.7) 底— 高—	①粗砂粒(まれに径 1cm程の小礫)含む ②良好③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。			
9	土師器 甕	+4cm 胴～底部	口— 底 11.2 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③明褐色	胴部外面へら削り後へら磨き、内面横ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
10	こもあみ石	+4cm 完形	16.3	6.4	4.5	630.1	粗粒安山岩	棒状の円礫。
11	こもあみ石	+4cm 完形	11.6	7.8	3.1	385.5	流紋岩	盤状の円礫。両側のほぼ中央に刻離痕・敲打痕あり。
12	こもあみ石	+4cm 完形	13.0	8.2	3.9	573.8	粗粒安山岩	盤状の円礫。
13	こもあみ石	床密着 完形	10.5	5.0	4.0	351.4	粗粒安山岩	棒状の円礫。
14	こもあみ石	床密着 完形	13.3	7.1	3.5	358.0	角閃石安山岩	盤状の垂円礫。

第3章 検出された遺跡と遺物

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
15	こもあみ石	床密着 完形	11.0	7.6	3.5	457.3	石英閃緑岩	盤状の円礫。
16	こもあみ石	床密着 完形	15.8	7.3	3.6	525.5	粗粒安山岩	棒状の円礫。
17	こもあみ石	床密着 完形	13.6	6.4	5.0	685.3	緑色片岩	同上。
18	こもあみ石	+18cm 完形	10.2	6.2	4.9	394.2	粗粒安山岩	同上。
19	こもあみ石	+20cm 完形	12.3	6.7	4.4	584.7	角閃石安山岩	盤状の円礫。
20	こもあみ石	+20cm 完形	11.2	6.4	3.1	319.3	閃緑岩	盤状の円礫。一側円のほぼ中央に、調整によってえぐりいれる。
21	こもあみ石	+18cm 完形	14.3	6.3	6.8	778.4	変質安山岩	棒状の円礫。
22	こもあみ石	+16cm 完形	12.3	6.1	3.7	368.4	粗粒安山岩	同上。
23	こもあみ石	+5cm 完形	14.4	7.4	4.7	650.7	粗粒安山岩	同上。
24	こもあみ石	+5cm 完形	13.5	5.5	5.4	562.2	流紋岩	同上。
25	こもあみ石	+5cm 完形	13.6	5.8	4.0	338.4	砂岩	一部に磨面あり。砥石の転用品か。
26	こもあみ石	+5cm 完形	15.0	6.0	5.4	573.3	変質安山岩	棒状の円礫。
27	こもあみ石	+5cm 完形	13.0	5.7	5.2	506.1	粗粒安山岩	棒状の垂円礫。
28	こもあみ石	+5cm 完形	14.0	6.7	4.5	446.3	変質安山岩	盤状の円礫。
29	こもあみ石	+5cm 完形	14.0	7.3	3.3	446.6	粗粒安山岩	同上。
30	こもあみ石	床密着 完形	12.8	5.4	5.3	446.6	雲母石英片岩	棒状の垂角礫。
31	こもあみ石	床密着 完形	16.2	6.3	4.1	393.6	牛伏砂岩	同上。
32	こもあみ石	床密着 完形	14.4	6.5	4.5	543.9	ひん岩	同上。
33	こもあみ石	+5cm 完形	13.7	7.8	3.4	539.6	変質安山岩	盤状の円礫。
34	こもあみ石	床密着 完形	14.5	8.0	3.0	564.9	変質安山岩	同上。
35	こもあみ石	+5cm ほぼ完形	9.5	6.1	4.3	392.1	変輝緑岩	棒状の円礫。一部欠損。
36	こもあみ石	+5cm 完形	14.3	5.5	5.4	535.3	細粒安山岩	棒状の垂円礫。

G-25号住居跡 (PL33・122)

位置 Gj-81グリッド 主軸方位 N-103°-E 残存壁高 0.26m 重複 G-27住を切る。

規模と形状 長辺2.94m・短辺4.15mの縦長の長方形。周壁の残りは悪く、一部ゆるく蛇行している。住居主軸は真東よりもやや南にふれる。竈は東側に築かれる。

床面 地山黄褐色砂礫質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床・硬質部などはみられない。

竈 住居東壁のほぼ中央部に所在。燃焼部が住居外側に張り出す形状をとる。燃焼部左壁が住居壁につながる部分は、近年の攪乱によって破壊されている。焚口幅は推定で62cm・燃焼部長66cm。焚口部分の右壁には、板状の砂岩が壁に張り付くようなかたちで据えられている。本来左側の内壁にも据えられていたと思われる

が、破壊されて失われている。燃烧部床面には、焼土の発達が見られる。煙道は削平され残っていない。

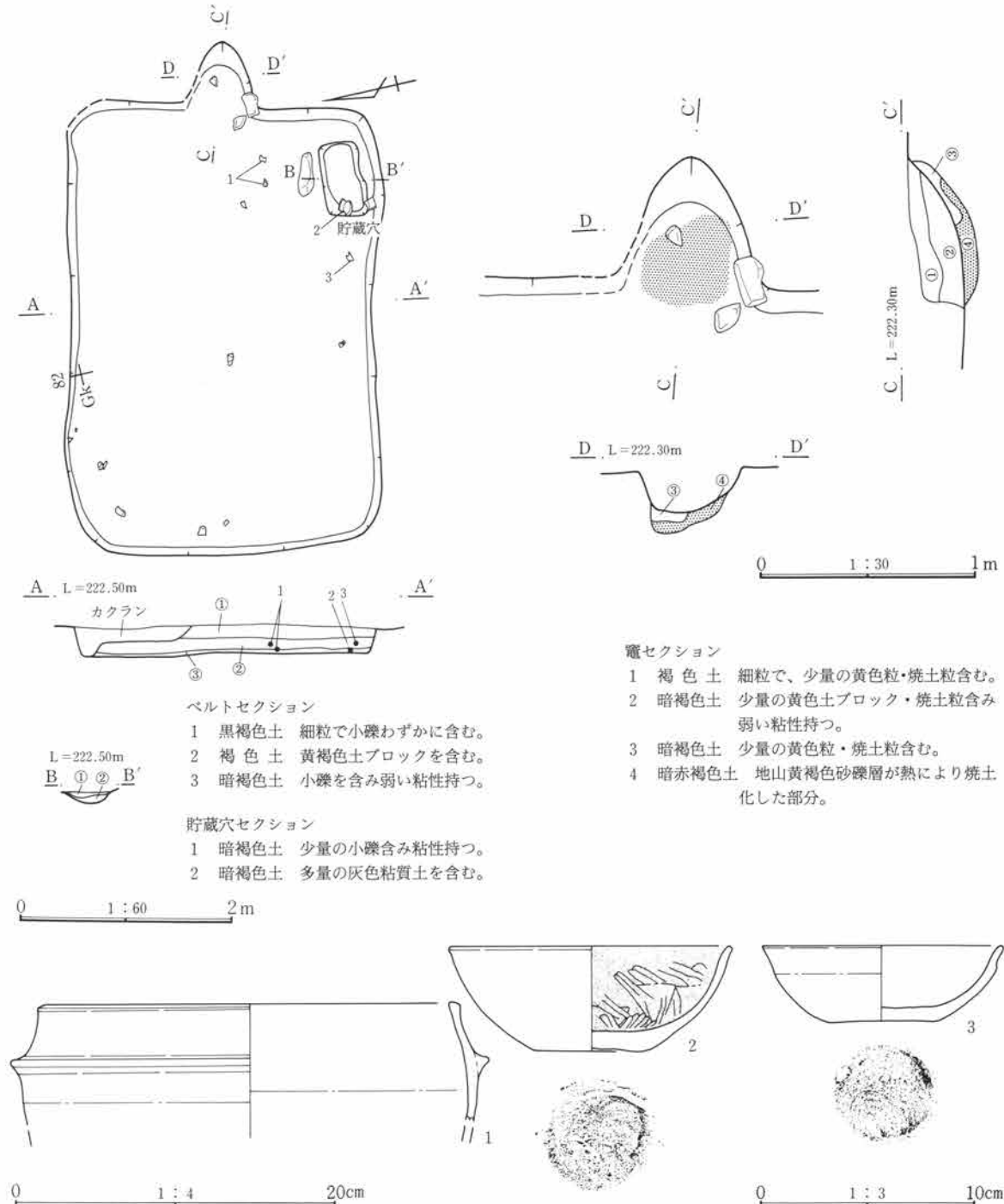
貯蔵穴 住居南東隅に所在。住居の短辺方向に長い隅丸の長方形で、掘り込みはあまり深くない。内部よりほぼ完形に近い須恵器坏(2)が出土している。

周溝 なし。 **柱穴** なし。

出土遺物 遺物量は少なく住居内に散在している。貯蔵穴内の須恵器坏を除いては、ほとんど小破片である。

他には、須恵器坏(3)・羽釜破片(1)が出土している。 **掘り方** なし。

調査所見 住居・竈形状および出土遺物より、平安時代のものと位置付けられる。



第236図 G-25号住居跡、出土遺物実測図

G-25号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 羽釜	床密着 口縁部破片	口(26.0) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色	ロクロ整形。口縁部は内傾し、鏝は断面三角形を呈する。	
2	須恵器 坏	貯蔵穴内 口縁一部欠	口 13.1 底 5.2 高 4.8	①均質な細砂含む ②良好 ③明黄褐色	ロクロ整形。内面ナデ後へら磨き。底部右回転の回転糸切り。	内面黒色処理
3	須恵器 坏	+10cm %	口 11.1 底 4.8 高 3.5	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい黄褐色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。	

G-26号住居跡 (PL33・34・122~126)

位置 Gh・Gi-82グリッド 主軸方位 N-77°-E 残存壁高 0.41m 重複 G-24住にわずかに切られる。

規模と形状 住居の西壁が調査区外に位置するため、正確な規模・形状は不明。おそらく正形状を呈するものと思われる。長辺3.81m・短辺は現状で3.45m。周壁はほぼ直立・直進し、線形の乱れはほとんどない。住居主軸は東にふれる。竈は東側に築かれるが、北側にも古い竈の煙道部分が残存している。

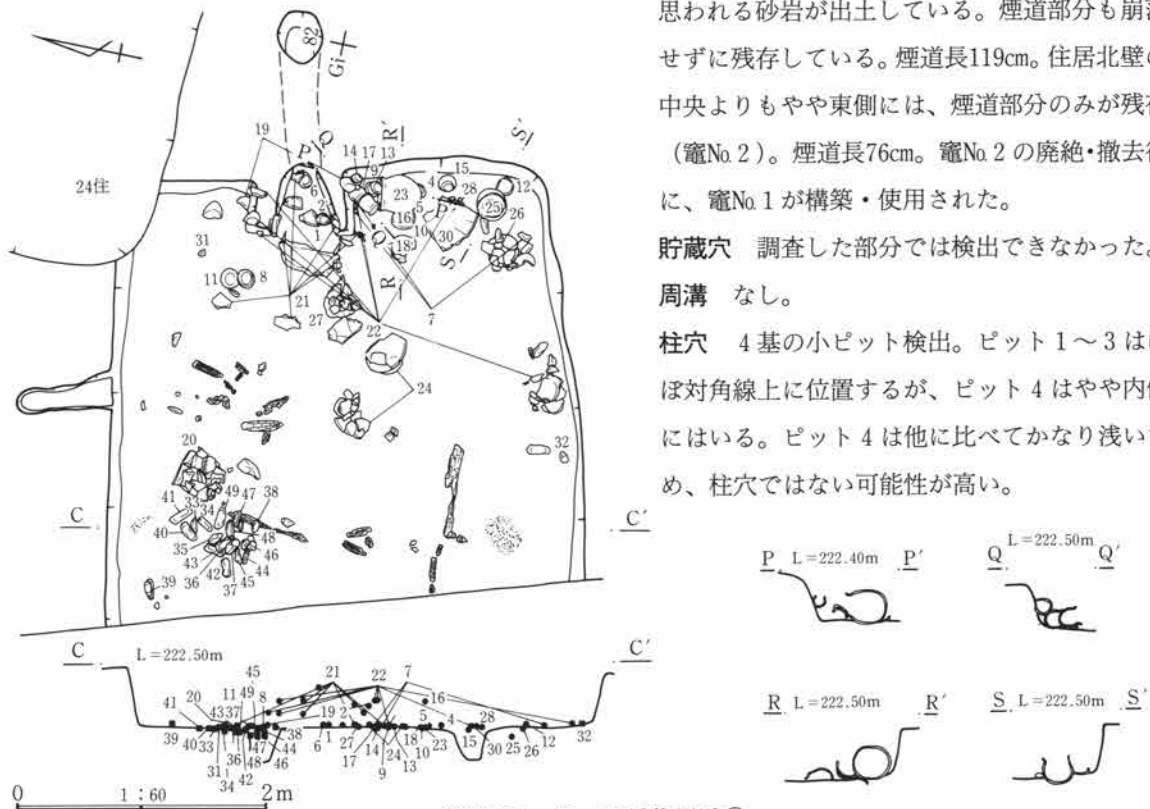
床面 住居の東半部を中心に不規則な掘り方が掘られ、地山黄褐色砂質土を含む土が埋められている。その上位に、黄褐色砂質土・小礫・暗褐色土を含んだ細粒の土を固めた、厚さ2~3cmほどの貼り床が見られる。

竈 住居東壁の中央よりもわずかに北側に所在(竈No.1)。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅46cm・燃焼部長57cm。両袖先端部の燃焼部側には、それぞれ板状の砂岩を据えて袖石としている。燃焼部の前部には、天井石として使用していたと思われる板状の砂岩が置かれている。また燃焼部内からは、支脚と

と思われる砂岩が出土している。煙道部分も崩落せずに残存している。煙道長119cm。住居北壁の中央よりもやや東側には、煙道部分のみが残存(竈No.2)。煙道長76cm。竈No.2の廃絶・撤去後に、竈No.1が構築・使用された。

貯蔵穴 調査した部分では検出できなかった。
周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ピット1~3はほぼ対角線上に位置するが、ピット4はやや内側にはいる。ピット4は他に比べてかなり浅いため、柱穴ではない可能性が高い。

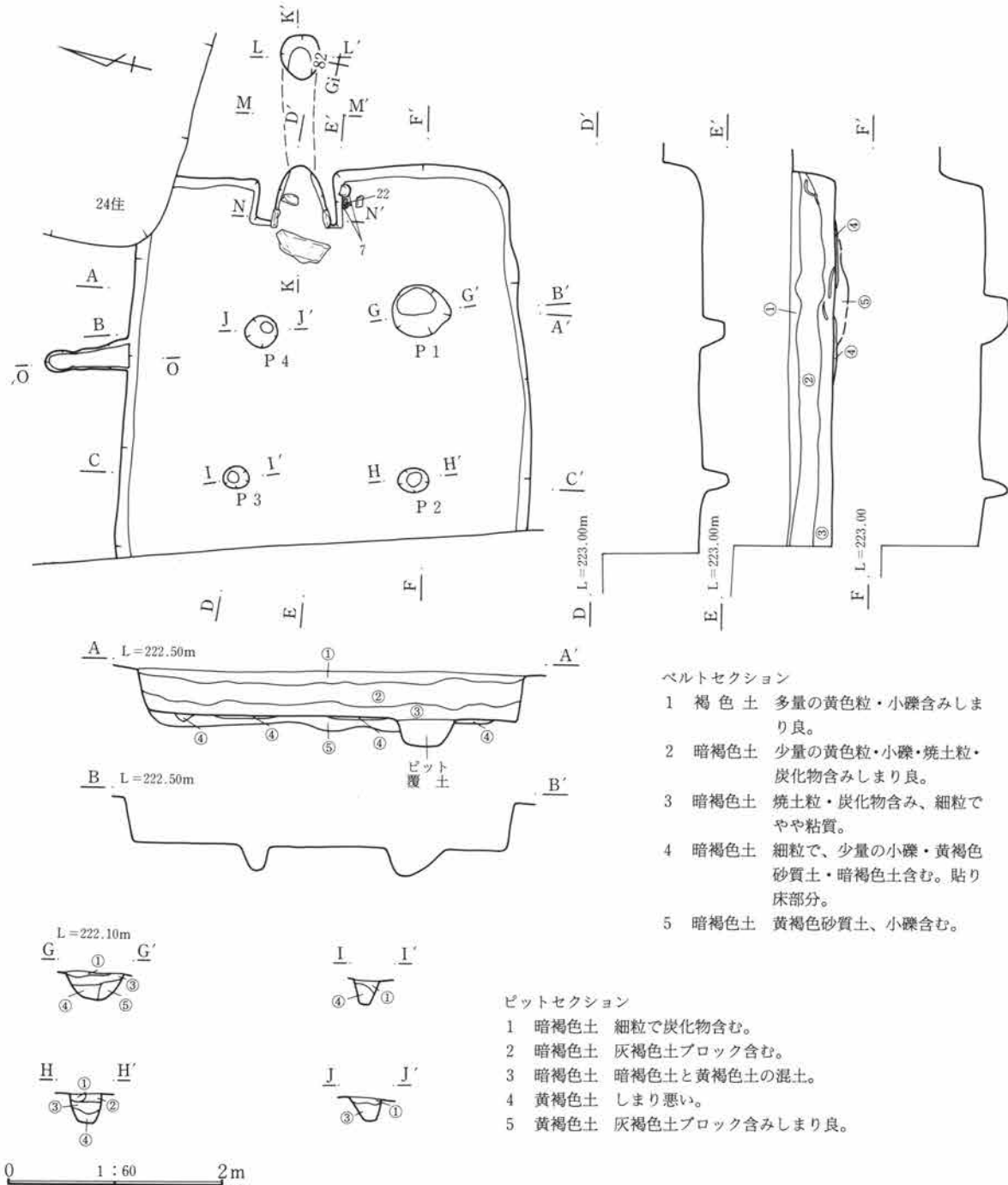


第237図 G-26号住居跡①

出土遺物 遺物量はかなり多く、竈付近に集中する。多くは完形に近い状態で床面に密着して出土している。床面近くからは炭化材も出土しており、焼失住居である。概期の土器のセット関係を良好に表しているものと推測される。器種は、土師器坏(1~13)・短頸壺(14・15)・鉢(16)・小型甕(17~19)・甕(20~27)・台付甕(28)・甑(29・30)がある。この他に、砥石(31)、滑石原石(32)、住居北西隅のP3付近より、こもあみ石とみられる円礫が19点(33~49)出土している。いずれも床面直上に位置している。

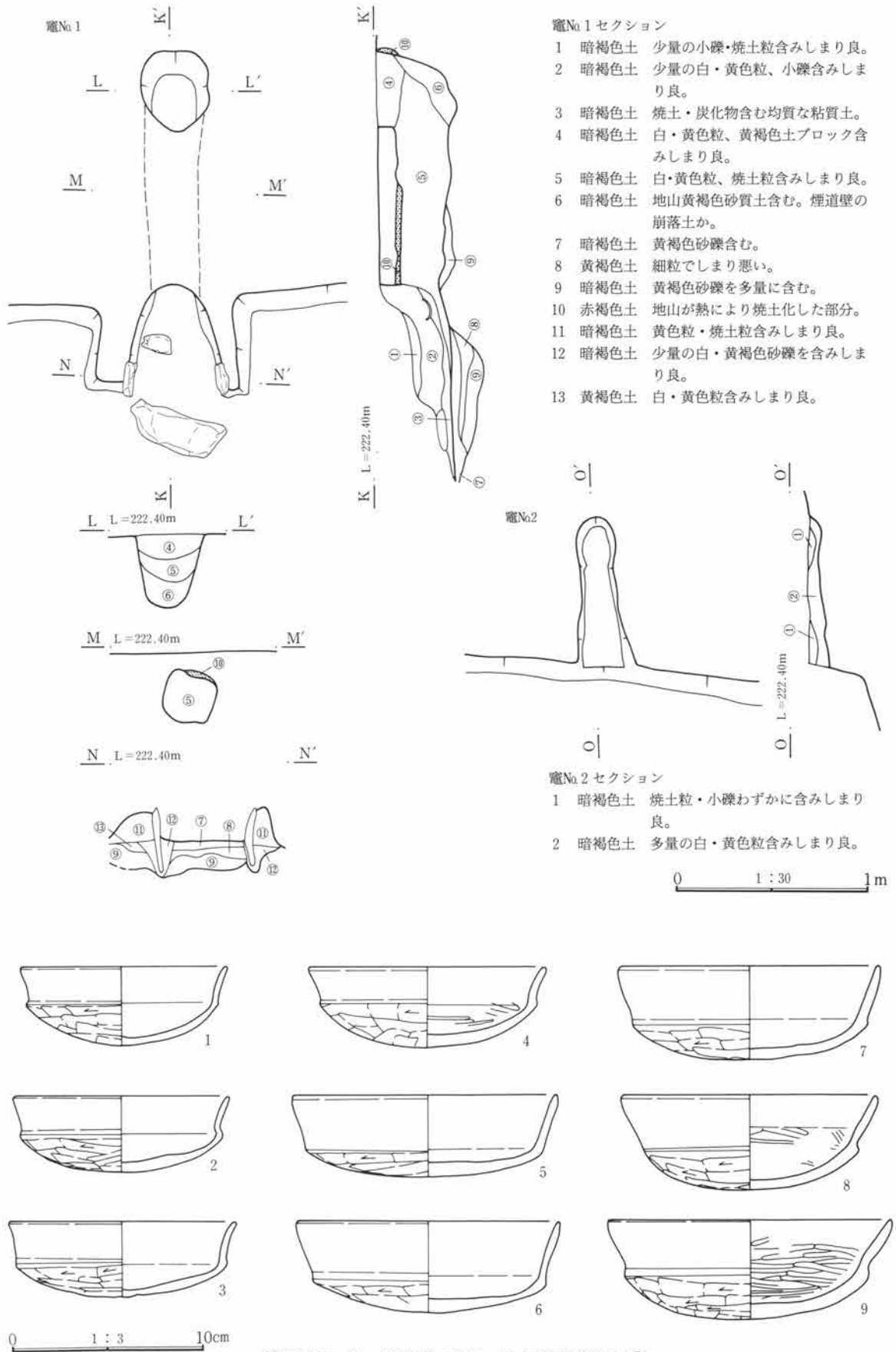
掘り方 住居東半に不規則な掘り方がみられる。

調査所見 焼失住居であり、古墳時代後期の土師器のセットを示す、良好な資料である。

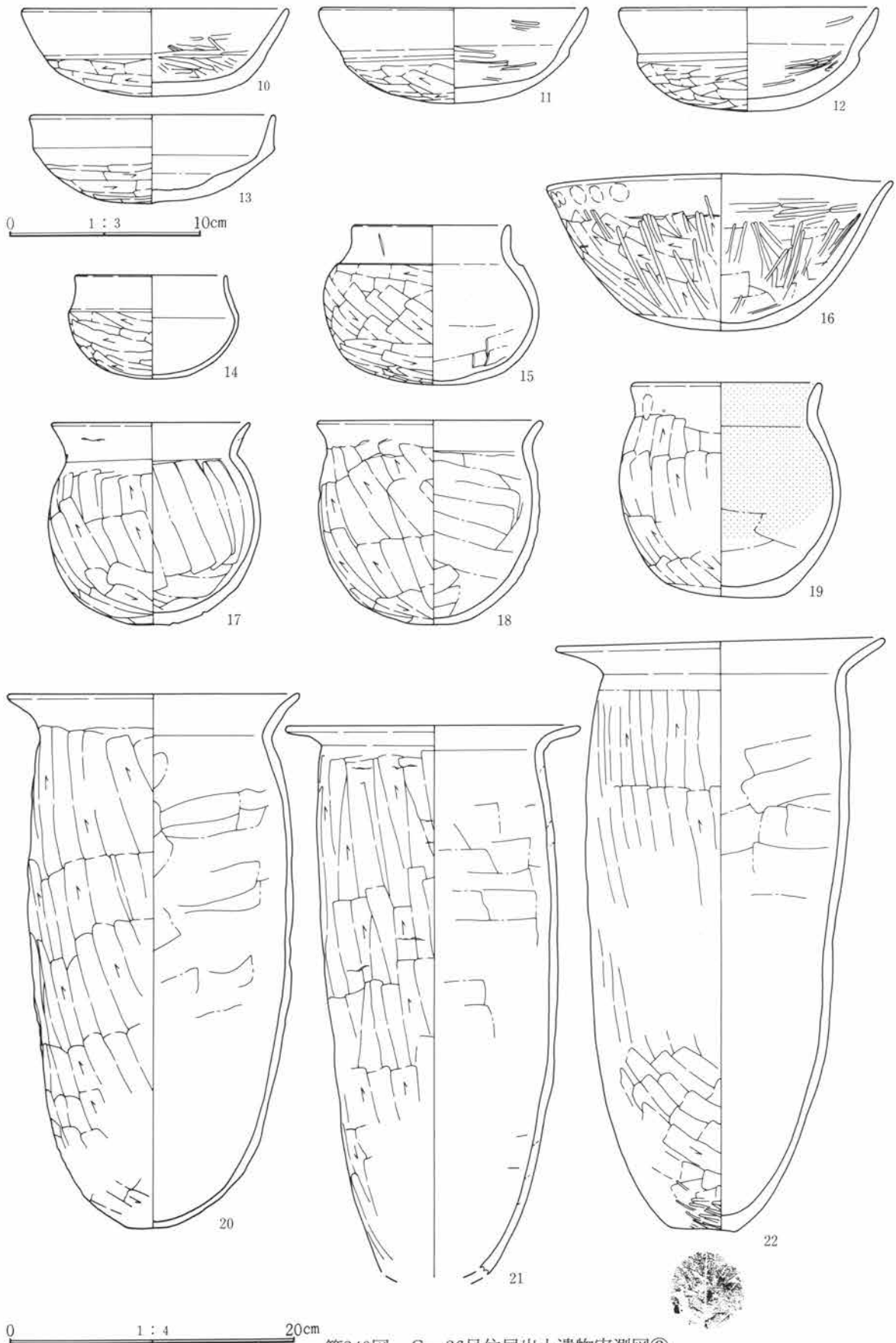


第238図 G-26号住居跡②

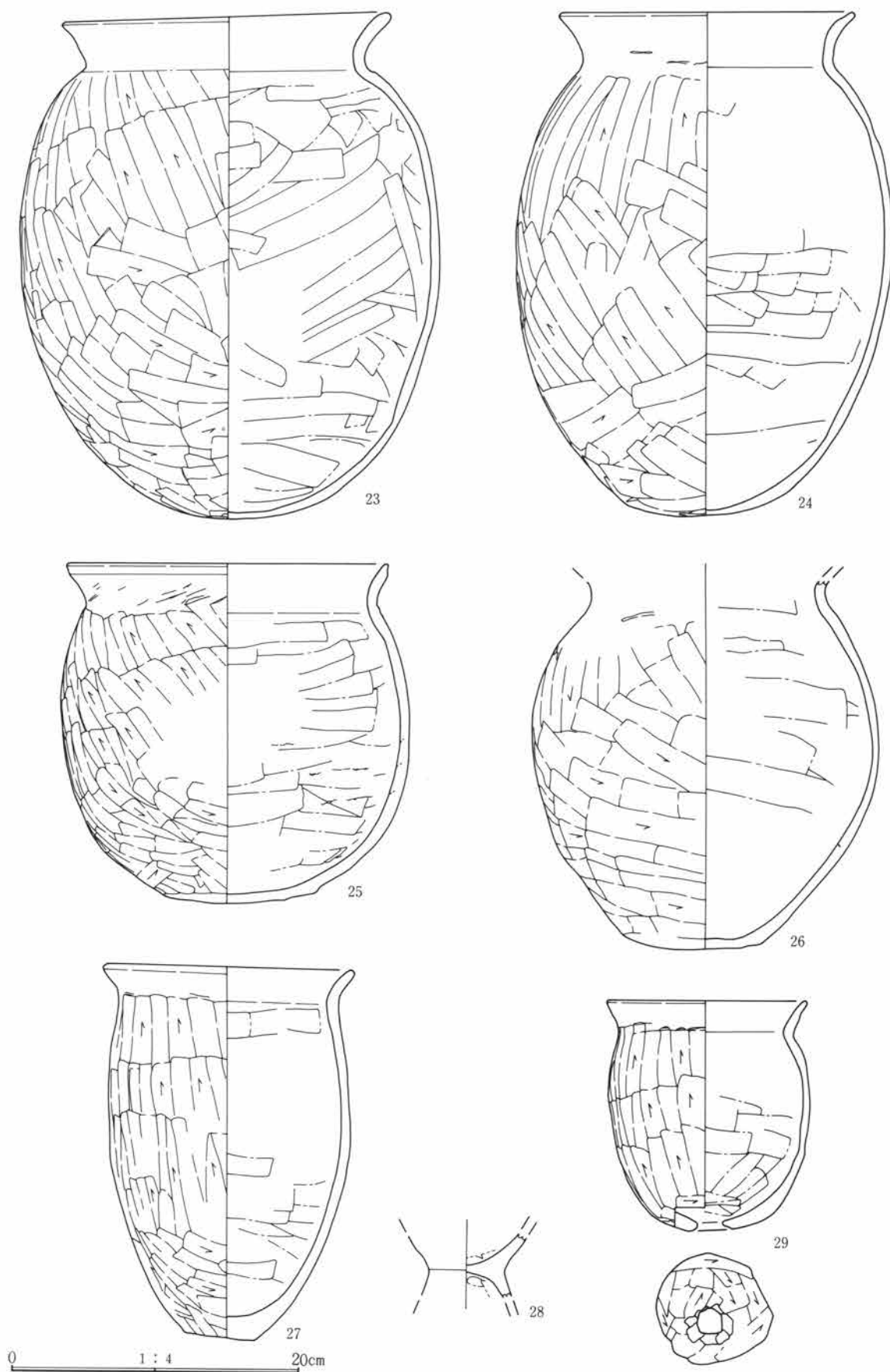
第3章 検出された遺構と遺物



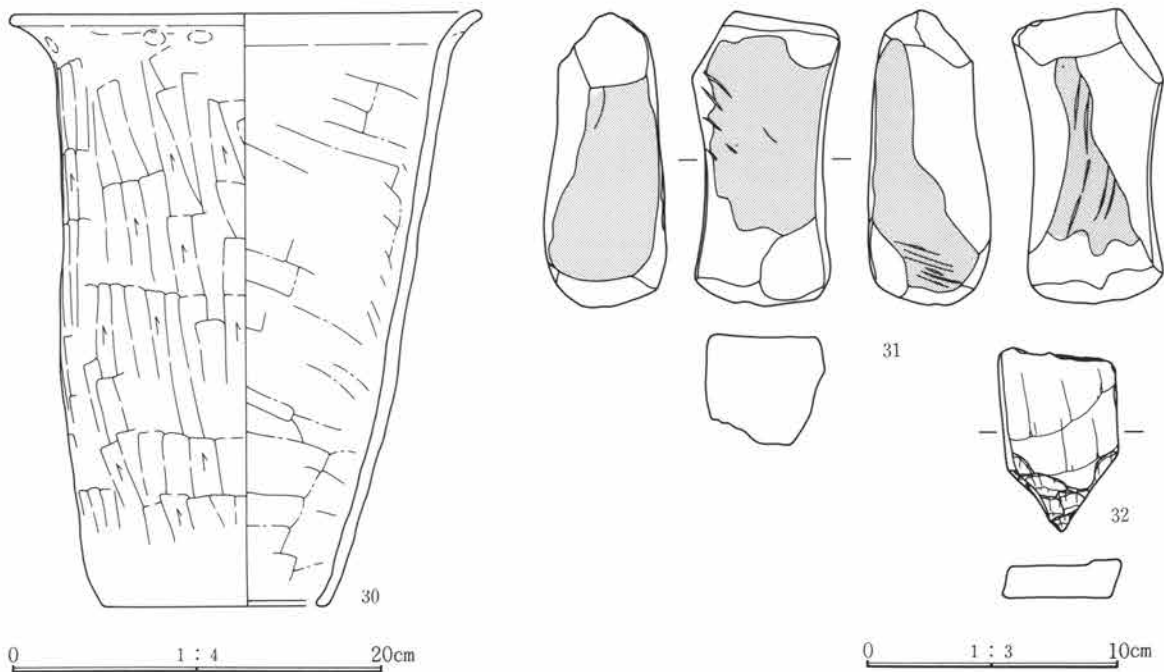
第239図 G-26号住居竈、出土遺物実測図①



第240図 G-26号住居出土遺物実測図②



第241図 G-26号住居出土遺物実測図③



第242図 G-26号住居出土遺物実測図④

G-26号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	カマド内 完形	口 10.4 底 — 高 4.0	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	胎土やや粉状
2	土師器 坏	カマド内 完形	口 11.1 底 — 高 3.9	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ、底部に指頭圧痕。	胎土やや粉状
3	土師器 坏	床密着 完形	口 11.8 底 — 高 3.9	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	胎土粉状
4	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 12.1 底 — 高 4.1	①微砂粒（ごくまれに小礫）含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
5	土師器 坏	床密着 (16の下 位)完形	口 13.7 底 — 高 4.3	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
6	土師器 坏	カマド内 完形	口 13.5 底 — 高 4.6	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
7	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 13.3 底 — 高 4.7	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
8	土師器 坏	+3cm ほぼ完形	口 12.8 底 — 高 4.8	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
9	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 14.5 底 — 高 5.1	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
10	土師器 坏	床密着 (16の下 位)完形	口 13.5 底 — 高 4.5	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
11	土師器 坏	床密着 完形	口 13.8 底 — 高 4.9	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	器 種	出土状況 残存状況	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴	残存状 態考	
				全 長	幅			厚 さ
12	土師器 坏	床密着 1/5	口 13.2 底 — 高 5.4	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。		
13	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 12.6 底 — 高 4.5	①細砂含む ②良好 ③淡黄色		口縁部・体部上位外面横ナデ、以下ヘラ削り。内面横ナデ。	回転台様のものを使用して整形	
14	土師器 短頸壺	床密着 完形	口 10.6 底 — 高 7.1	①微砂粒含む ②良好 ③橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。器内薄い。	胎土粉状	
15	土師器 短頸壺	床密着 完形	口 10.5 底 — 高 11.1	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。		
16	土師器 鉢	床密着 ほぼ完形	口 23.6 底 11.0 高 10.9	①細砂（ごくまれに小礫）含む ②良好 ③明赤褐色		口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面横ナデ後ヘラ磨き。底部ヘラ削り。		
17	土師器 小型甕	床密着 完形	口 13.8 底 — 高 14.0	①多量の砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。		
18	土師器 小型甕	床密着 5/6	口 15.2 底 — 高 14.1	①粗砂粒含む ②良好 ③明赤褐色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	内面全面に煤付着	
19	土師器 小型甕	床密着 2/3	口(12.8) 底 8.4 高 14.9	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	胴部内面上半に弱い煤付着	
20	土師器 甕	+5cm ほぼ完形	口 20.0 底 3.0 高 35.8	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部内面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
21	土師器 甕	床密着 口～底部	口 20.0 底 — 高 —	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。口縁部は強く外側に屈曲。		
22	土師器 甕	床密着 1/5	口 22.6 底 4.6 高 40.3	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、下位に一部磨き、内面横ナデ。	底部木葉痕	
23	土師器 甕	床密着 完形	口 22.2 底 — 高 33.8	①細砂・少量の小礫含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。		
24	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 20.3 底 — 高 33.9	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
25	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 21.8 底 10.4 高 22.9	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部内外面横ナデ、外面にヘラ状工具のあたり。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕あり。		
26	土師器 甕	床密着 口縁部欠	口 — 底 9.5 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色		胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
27	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 17.2 底 4.7 高 25.4	①粗砂（まれに小礫）含む ②良好 ③にぶい黄褐色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。比較的小型の長甕。		
28	土師器 台付甕	床密着 底～台部	口 — 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色		胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。台部外面ヘラ削り後ナデ、内面ナデ。		
29	土師器 甕	床密着 完形	口 13.2 底 8.0 高 15.5	①粗砂粒・少量の小礫含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面丁寧なナデ。焼成後底部穿孔。孔径1.7cm。		
30	土師器 甕	床密着 ほぼ完形	口 25.3 底 11.8 高 31.2	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色		口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。		
番号	器 種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
31	砥石	床密着 完形	11.6	5.8	4.9	419.9	砥沢石	表裏・両側に研磨面。両側の使用度高い。各面に刃ならし溝見られる。

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
32	滑石原石	床密着 完形	7.2	4.7	1.5	76.2	滑石	板状の原石。周辺を打ち欠いてある。
33	こもあみ石	床密着 完形	16.0	8.9	4.8	1019.1	ひん岩	盤状の円礫。
34	こもあみ石	床密着 完形	16.4	7.3	6.6	1277.5	粗粒安山岩	棒状の円礫。
35	こもあみ石	床密着 完形	17.4	8.2	6.0	991.6	流紋岩	同上。
36	こもあみ石	床密着 完形	16.3	8.5	8.5	1237.4	変質安山岩	棒状の垂円礫。
37	こもあみ石	床密着 完形	15.0	7.5	5.2	811.3	粗粒安山岩	棒状の円礫。
38	こもあみ石	床密着 完形	16.9	8.0	5.0	951.9	粗粒安山岩	同上。
39	こもあみ石	床密着 完形	18.0	6.0	5.5	1041.3	粗粒安山岩	同上。
40	こもあみ石	床密着 完形	16.6	7.1	4.1	658.4	変質安山岩	同上。
41	こもあみ石	床密着 完形	18.9	7.1	4.9	823.0	変質安山岩	同上。
42	こもあみ石	床密着 完形	15.3	7.0	5.1	795.3	粗粒安山岩	盤状の円礫。
43	こもあみ石	床密着 完形	18.2	8.4	4.3	796.0	変質安山岩	棒状の円礫。
44	こもあみ石	床密着 完形	13.5	7.2	6.6	847.2	粗粒安山岩	同上。
45	こもあみ石	床密着 完形	14.8	5.9	4.9	636.9	粗粒安山岩	棒状の垂円礫。
46	こもあみ石	床密着 完形	17.1	8.3	6.3	1092.4	砂岩	盤状の円礫。
47	こもあみ石	床密着 完形	18.5	7.0	7.0	1101.8	変質安山岩	棒状の円礫。
48	こもあみ石	床密着 完形	15.8	7.9	5.5	1108.2	流紋岩	同上。被熱している。
49	こもあみ石	床密着 完形	16.2	9.7	4.5	1020.8	閃緑岩	盤状の円礫。

G-27号住居跡 (PL34・126)

位置 Gj-82グリッド 主軸方位 N-3°-W 残存壁高 0.50m 重複 G-25住に切られる。

規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、長辺4.94m・短辺5.39mと若干縦に長い。北東および南西隅がそれぞれやや突出し、わずかに菱形に歪んでいる。周壁はほぼ直進するが、やや外反する。住居主軸はほぼ北を指す。竈は北側に築かれる。

床面 床面はほぼ平坦。地山黄褐色シルト質土を踏み固めて貼り床としている。厚さ2～10cm。

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。住居内に袖が作り出される形状をとる。焚口幅54cm・燃焼部長50cm。左袖先端燃焼部側に、袖石として板状の砂岩が据えられている。かなり深く埋められており、頭部がわずかに床面上に出ているのみである。右袖の上部は、重複する他の住居によって破壊されている。煙道は上部が削平され、また中央部を近年の耕作による溝が走っており、立ち上がりの底部が残っているだけである。煙道長は現存で51cmである。燃焼部奥壁近くの壁を中心に焼土面が発達している。竈の西側には、天井石として利用していたと思われる板状の砂岩が、床面直上に置かれたような状態で出土した。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。上面はほぼ正円形で、底部にいくにつれて漏斗状にすぼまる。掘り込みはかな

第3章 検出された遺構と遺物

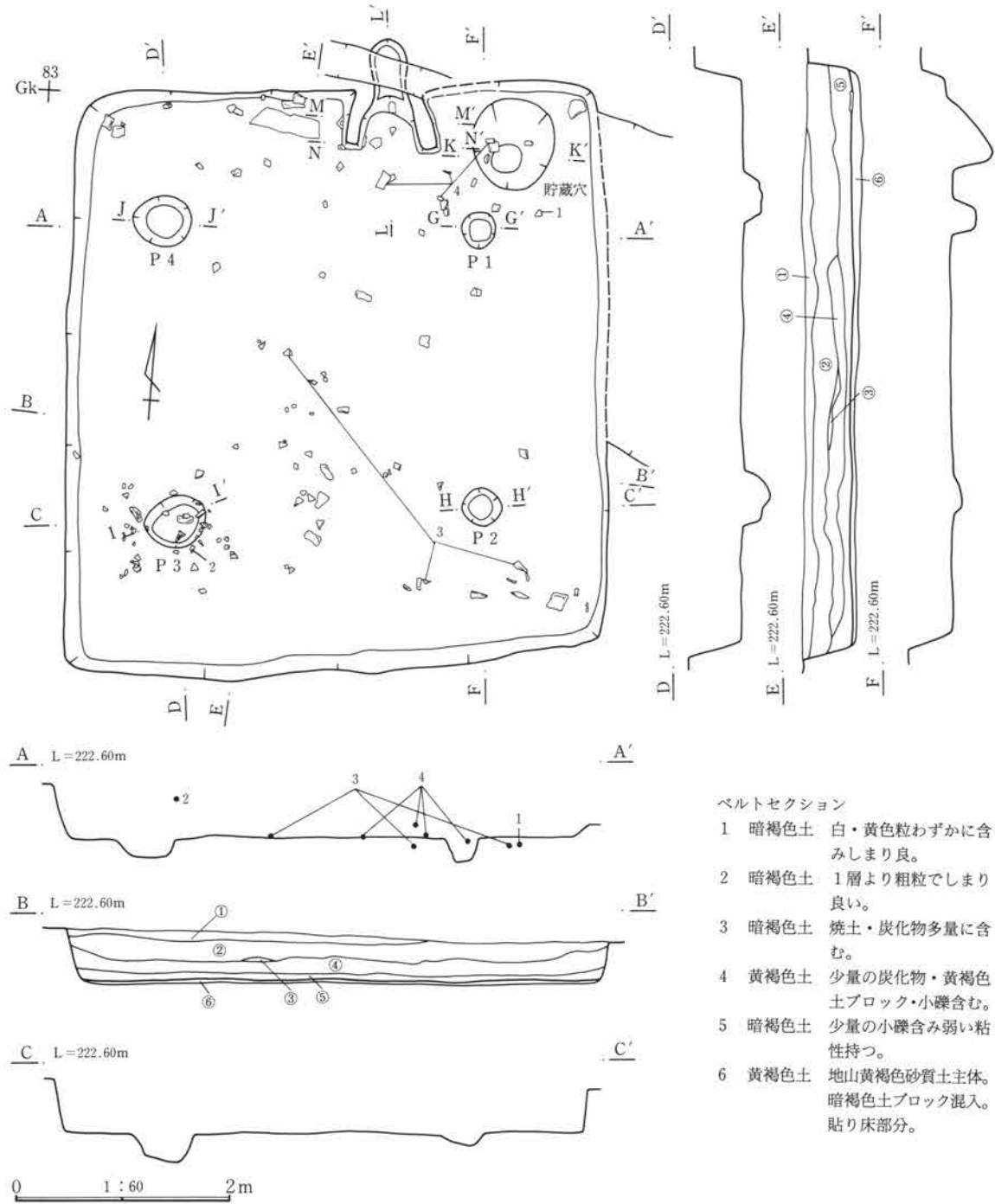
り深くしっかりしている。周溝 なし。

柱穴 柱穴と思われる4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置している。

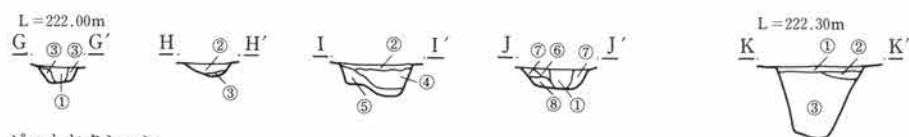
出土遺物 遺物量はあまり多くなく、住居全体に散在。重複していない南西部分では、やや小型の破片が床面からかなり浮いた状態で出土。竈付近と住居南東隅では、比較的大型の破片がほぼ床面直上に位置している。器種は、土師器坏(1・2)・甕(3)・甗(4)がある。また、埋土中より土製紡錘車(5)が出土している。

掘り方 住居全体に浅い掘り方見られる。

調査所見 古墳時代後期。



第243図 G-27号住居跡



ピットセクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、焼土粒含む。
- 2 暗褐色土 黄褐色砂礫を含む。
- 3 黄褐色土 黄色粒含みしまり良。
- 4 暗褐色土 やや砂質で色調が明るい。
- 5 黄褐色土 小礫を含む。
- 6 暗褐色土 1層に似るが、黄色砂混入。
- 7 黄褐色土 黄色砂を含みしまり良。
- 8 暗褐色土 多量の黄色砂含む。

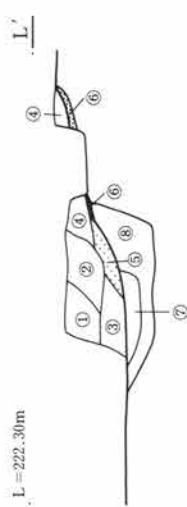
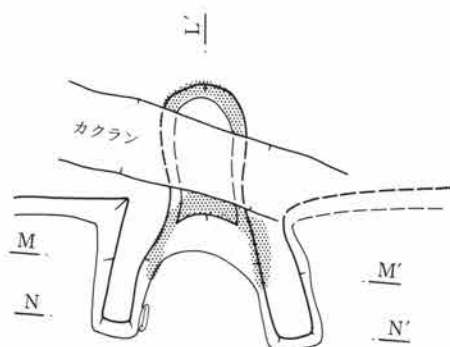
0 1:60 2m

貯蔵穴セクション

- 1 褐色土 細粒で白色粒・焼土粒わずかに含む。
- 2 褐色土 黄褐色粘質土ブロック多量に含む。
- 3 暗褐色土 黄色粒・焼土粒含みしまり良。

竈セクション

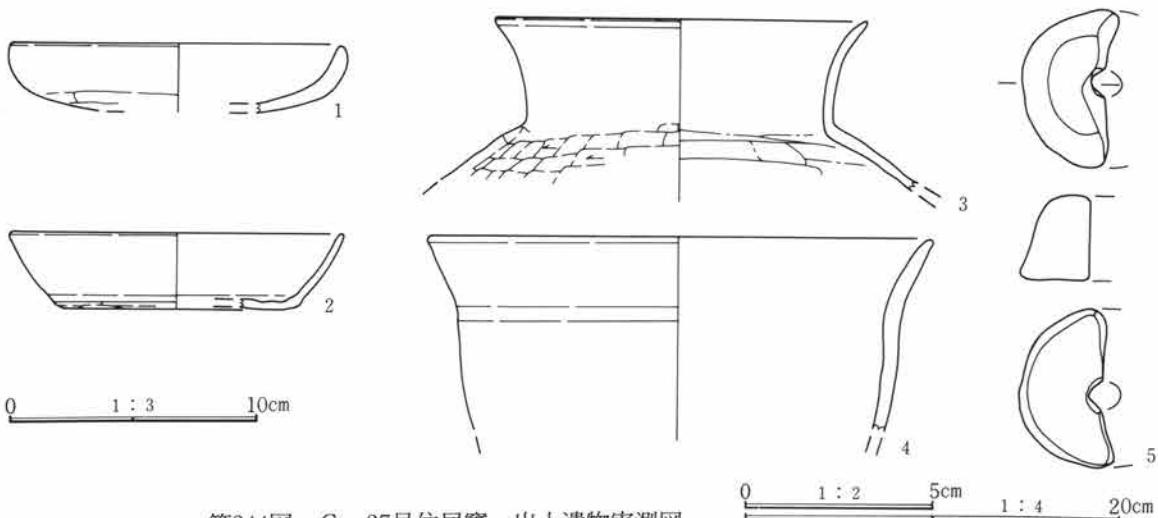
- 1 褐色土 白・黄色粒、黄褐色土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土 白色粒・炭化物を含む。
- 3 暗褐色土 細粒で白色粒・焼土粒含む。
- 4 暗褐色土 白色粒・黄褐色土ブロックをわずかに含みしまり良。
- 5 黄褐色土 細粒で白色粒・焼土粒含む。
- 6 赤褐色土 熱を受け焼土化。硬くしまる。
- 7 暗褐色土 多量の白色粒、少量の焼土含む。
- 8 暗褐色土 多量の白色粒・焼土含む。
- 9 暗褐色土 黄色粒わずかに含む。
- 10 黄褐色土 小礫を含みしまり良。
- 11 暗褐色土 地山黄褐色シルト質土を含む。袖石の掘り込み。
- 12 暗褐色土 白・黄色粒含む。
- 13 暗褐色土 焼土・白色粒含む。
- 14 暗赤褐色土 10層が熱により赤化。



M L=222.30m M' N L=222.30m N'



0 1:30 1m



第244図 G-27号住居竈、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

G-27号住居出土遺物観察表

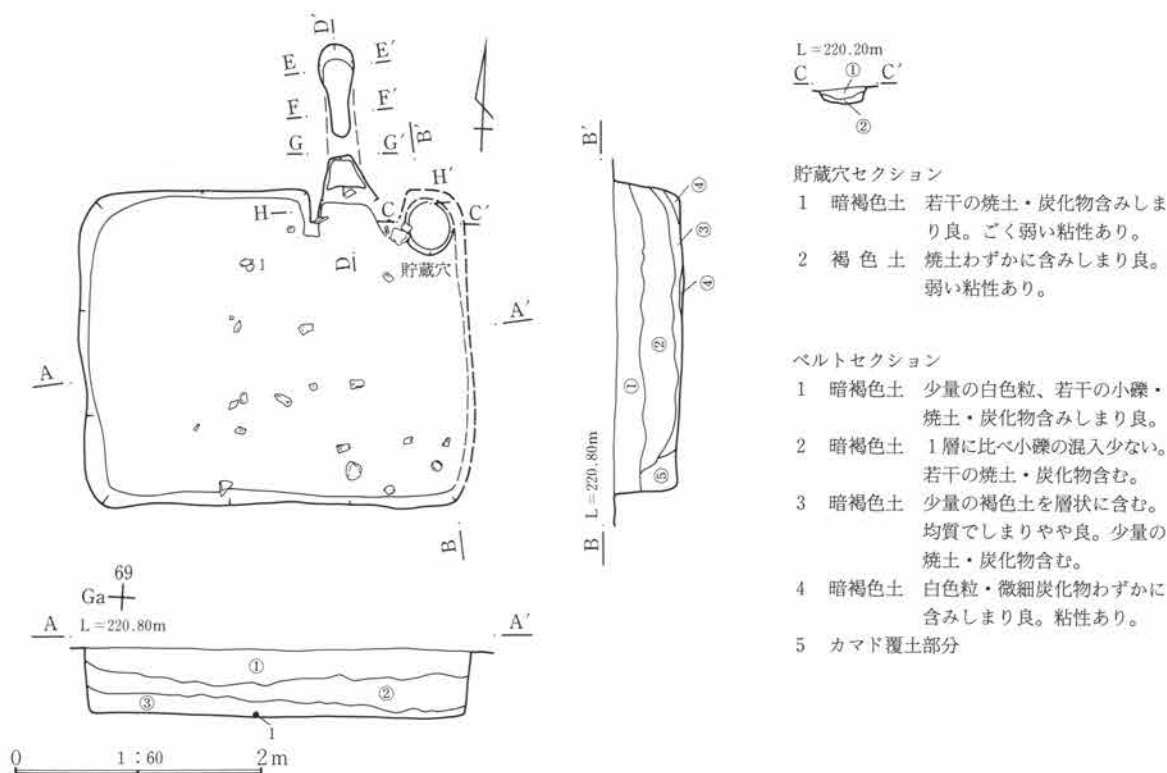
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	掘り方内 1/2	口(13.0) 底— 高—	①微砂粒・赤褐色微 粒子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。			
2	土師器 坏	+33cm 1/2	口(13.3) 底(9.7) 高3.0	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面へら削り。内面 横ナデ。口縁に比して体部非常に浅い。			
3	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位	口(19.5) 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横 ナデ。			
4	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位1/2	口(26.6) 底— 高—	①均質な砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面丁 寧な横ナデ。	器形と整形の状態か ら甕と判断		
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
5	土製紡錘車	覆土	4.2	—	2.3	18.0	1/2	断面台形状。表面は全面ナデ。

G-28号住居跡 (PL34・128)

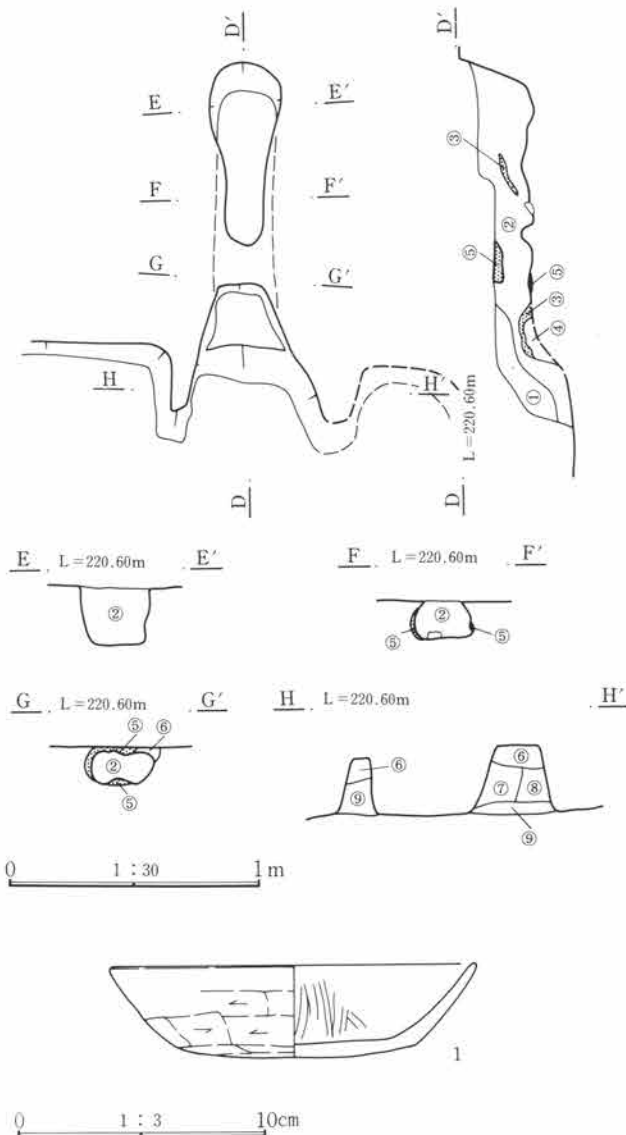
位置 Ga-68グリッド 主軸方位 N-2°-W 残存壁高 0.56m 重複 G-29住を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形。重複する住居の中にほぼ収まるようなかたちで構築されていたため、住居域の確定と周壁の検出はかなり困難で、東壁はセクションでの確認となった。長辺は推定で3.09m・短辺2.48mでやや小型である。周壁はほぼ直進する。竈は北側に築かれる。

床面 床面はほぼ平坦。西側は地山褐色砂礫土に一致する他は、下位の29住埋土である。貼り床などはみられない。



第245図 G-28号住居跡



竈 住居北壁の中央よりも東側に所在。両袖が住居内に作りだされる形状をとる。焚口幅54cm・燃烧部長39cm。煙道は一部天井部分も残存している。煙道長112cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状はやや住居短辺方向に長い楕円形で、掘り込みは浅い。

周溝 なし。 **柱穴** なし。

出土遺物 遺物量は少なく、住居内に散在している。大半は床面に近い位置より出土している。器種は、土師器坏(1)がある。 **掘り方** なし。

調査所見 住居形状・出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。

竈セクション

- 1 黒褐色土 若干の焼土・炭化物含みしまり良。
- 2 暗褐色土 かなりの焼土含みしまりやや良。少量の炭化物混入。
- 3 暗赤褐色土 均質な焼土層。しまり良く粘性あり。
- 4 褐色土 焼土若干含みしまり良。粘性あり。
- 5 暗赤褐色土 地山褐色土が熱により焼土化した部分。硬くしまる。
- 6 暗褐色土 黄色粒・焼土粒わずかに含みしまり良。
- 7 暗褐色土 少量の黄色粒・焼土粒・砂礫含む。
- 8 暗褐色土 少量の黄色粒・砂礫含む。
- 9 褐色土 黄色粒・砂礫・焼土粒わずか含む。

第246図 G-28号住居竈、出土遺物実測図

G-28号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+4cm 1/3	口(14.3) 底(9.5) 高 3.6	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	

G-30号住居跡 (PL35・127)

位置 Gd-72・73グリッド **主軸方位** N-5°-W **残存壁高** 0.55m **重複** G-31住を切る。

規模と形状 平面形はやや横長の長方形である。長辺3.35m・短辺2.99mと比較的小型の住居である。周壁はほぼ直進し、線形の乱れはみられない。竈は北側に築かれる。住居主軸はわずかに西にふれる。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで床面を形成。貼り床などはない。床面上には、焼土粒・炭化物が広く分布していた。

第3章 検出された遺構と遺物

竈 住居北壁のほぼ中央に所在。住居内に短い袖が作られるが、燃焼部は住居域外にも張り出す。焚口幅46cm・燃焼部長41cm。燃焼部床は、焼土が発達している。煙道はくりぬき式で、残存状況は比較的良好であるが、一部上部からの土圧でつぶれている。煙道長108cm。

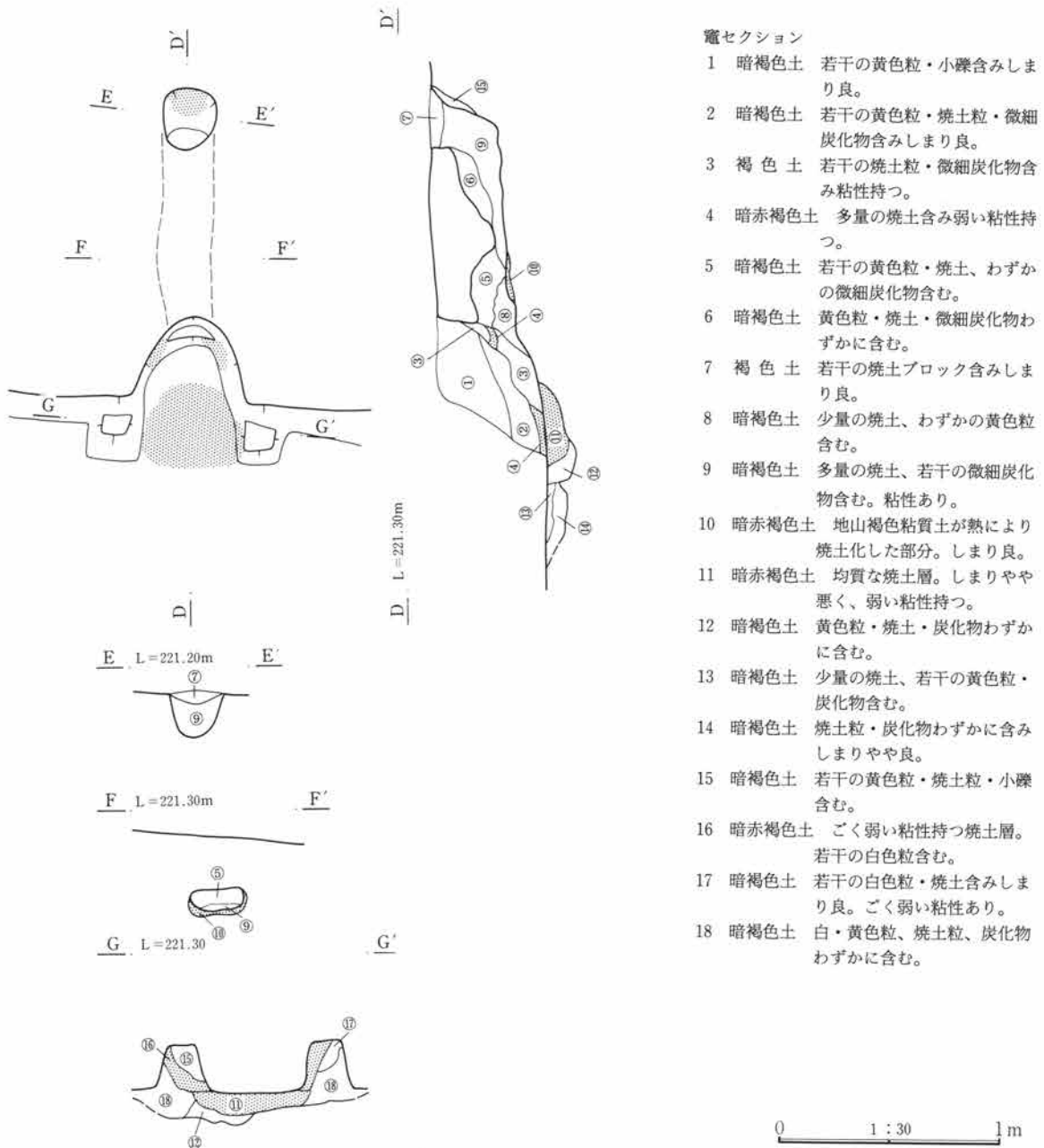
貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居の短辺方向がわずかに長い楕円形。

周溝 なし。 **柱穴** なし。

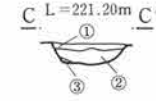
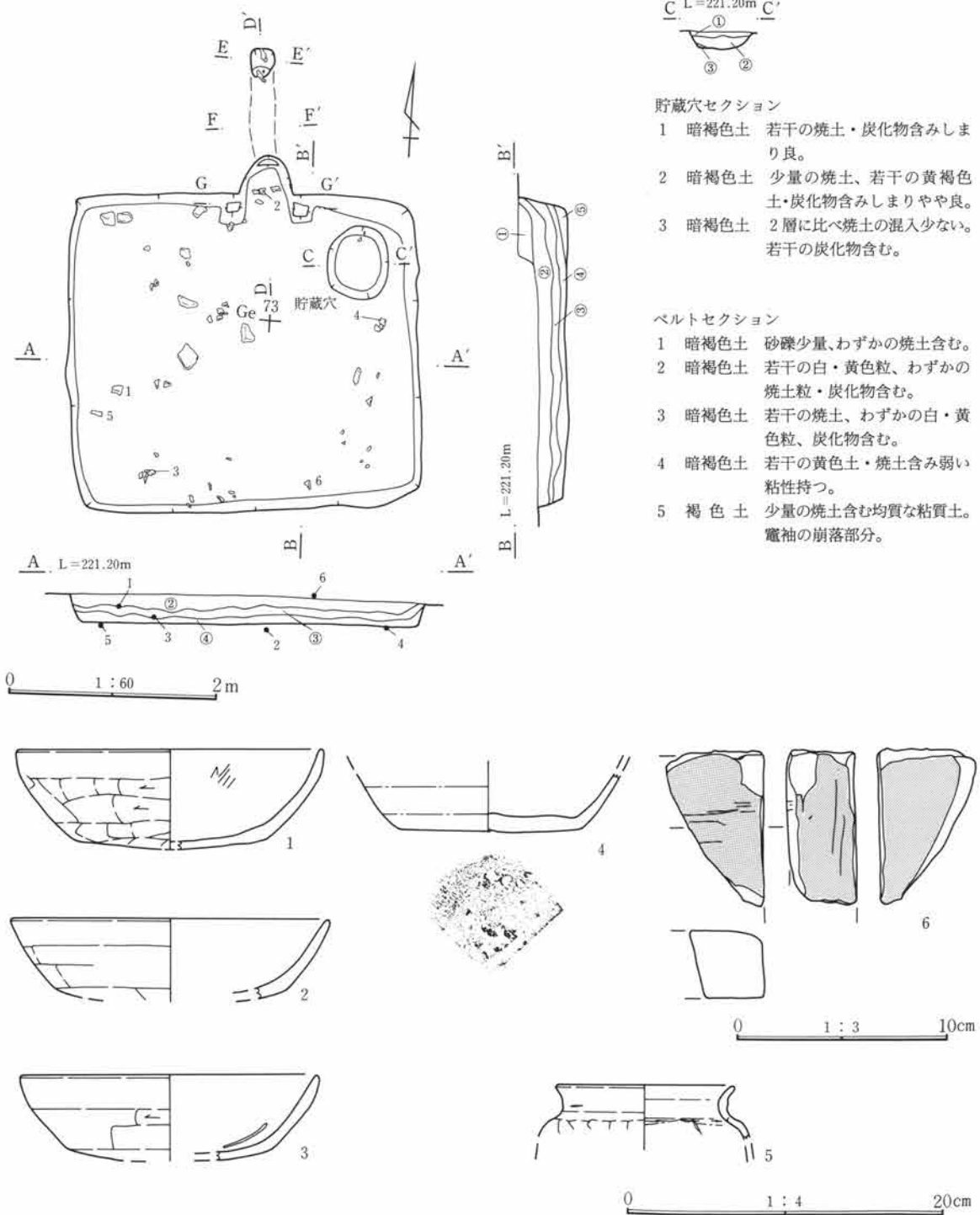
出土遺物 遺物量は少なく、住居内に散在。大半は土師器の小破片である。器種には、土師器坏(1~3)・小型台付甕(5)、須恵器坏(4)がある。また、覆土中位より砥石の破片(6)が出土している。

掘り方 なし。

調査所見 住居および竈形態、出土遺物などから奈良時代の住居と推定される。



第247図 G-30号住居竈



貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 若干の焼土・炭化物含みしまり良。
- 2 暗褐色土 少量の焼土、若干の黄褐色土・炭化物含みしまりやや良。
- 3 暗褐色土 2層に比べ焼土の混入少ない。若干の炭化物含む。

ベルトセクション

- 1 暗褐色土 砂礫少量、わずかの焼土含む。
- 2 暗褐色土 若干の白・黄色粒、わずかの焼土粒・炭化物含む。
- 3 暗褐色土 若干の焼土、わずかの白・黄色粒、炭化物含む。
- 4 暗褐色土 若干の黄色土・焼土含み弱い粘性持つ。
- 5 褐色土 少量の焼土含む均質な粘質土。電袖の崩落部分。

第248図 G-30号住居跡、出土遺物実測図

G-30号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+20cm 1/4	口(14.6) 底(8.9) 高 4.6	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。内面器表面の剥落激しい。	
2	土師器 坏	カマド内 1/4	口(15.0) 底(10.8) 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。器表面かなり摩滅。	

第3章 検出された遺構と遺物

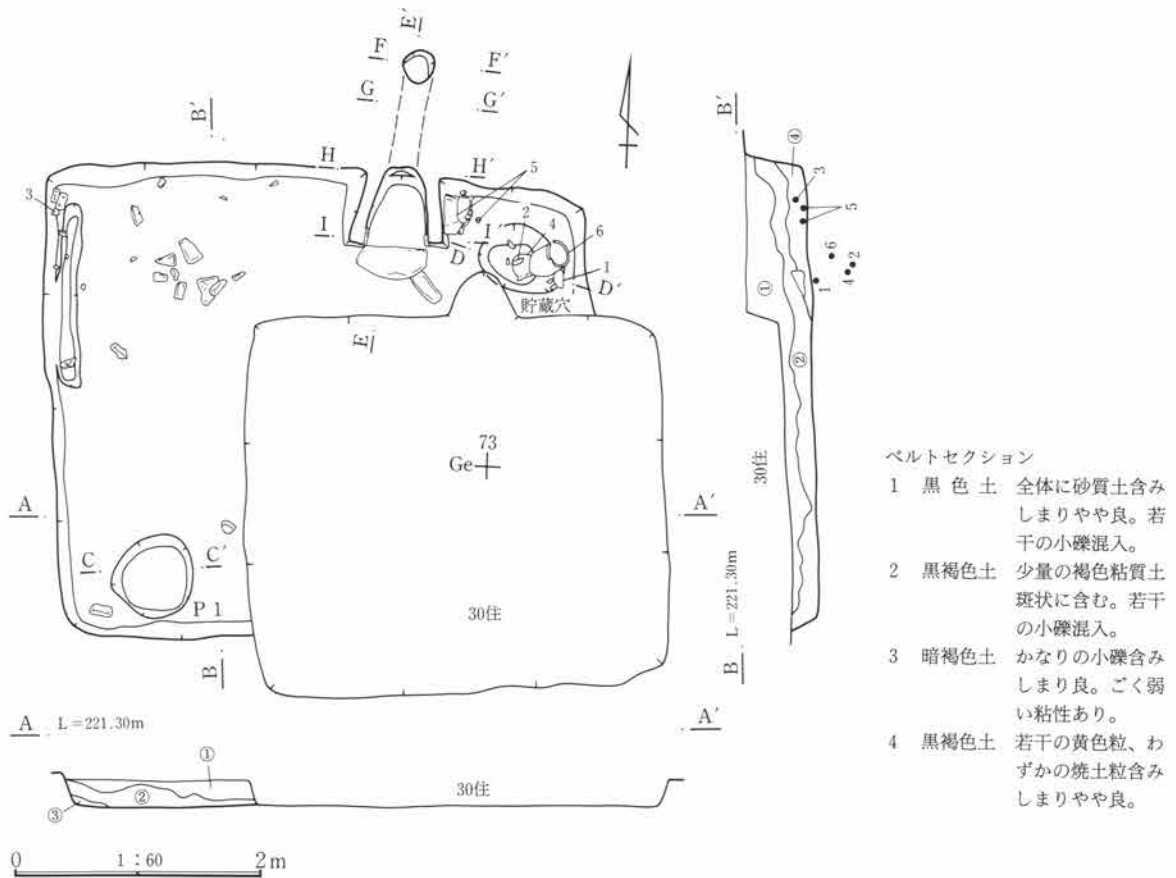
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
3	土師器 坏	+10cm 1/3	口(13.8) 底(9.6) 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ後横ナデ。			
4	須恵器 坏	床密着 体～底部 1/4	口— 底(8.4) 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。			
5	土師器 小型台付甕	床密着 口縁1/3	口(11.1) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③暗赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。内面頸部に接合痕。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
6	砥石	+26cm 破片	(7.3)	(4.6)	3.1	(128.6)	砥沢石	表裏・側面に研磨面。表は研磨度弱いが、刃ならし溝多い。

G-31号住居跡 (PL35・127)

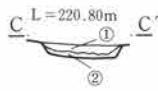
位置 Ge-73グリッド 主軸方位 N-S 残存壁高 0.52m 重複 G-30住に切られる。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺4.40m・短辺3.76mである。重複する住居によって、東壁と南壁の半分以上を失っているが、残った周壁はほぼ直進し、線形の乱れはみられない。竈は北側に築かれ、住居主軸は真北を指す。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面形成。貼り床などはみられないが、一部硬くしまった部分あり。

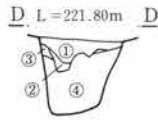


第249図 G-31号住居跡



ピットセクション

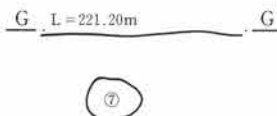
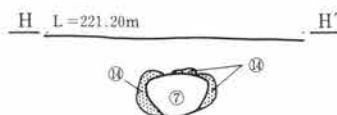
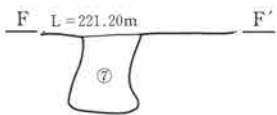
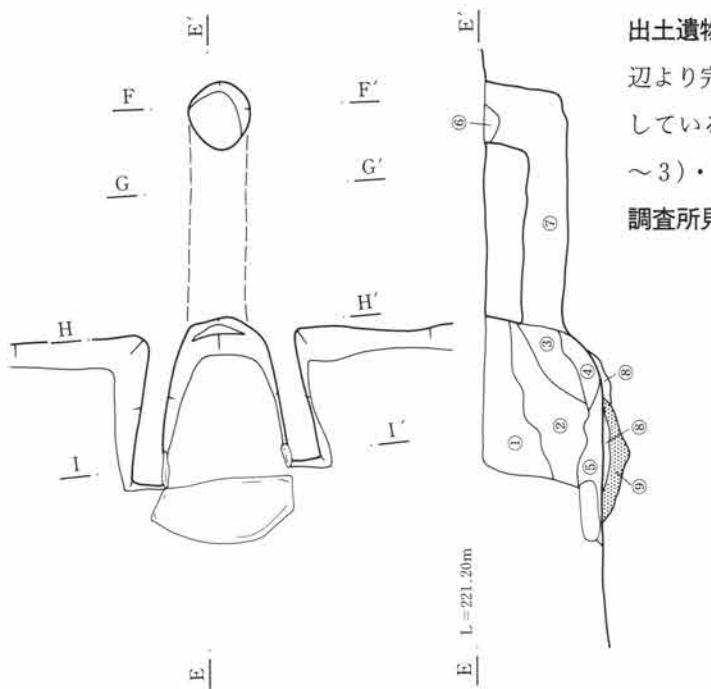
- 1 暗褐色土 黄色粒・焼土粒少量含みし
まり良。
- 2 暗褐色土 1層より色調が明るい。



貯蔵穴セクション

- 1 黒褐色土 黄色粒・焼土・炭化物若干
含みしまりやや良。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物若干含みし
まりやや悪い。粘性あり。
- 3 暗褐色土 地山褐色粘質土かなり含み
しまりやや良。粘性あり。
- 4 暗褐色土 少量の焼土・炭化物、若干
の褐色粘質土を斑状に含む。

0 1:60 2m



0 1:30 1m

竈 住居北壁の中央よりも東側に所在。両袖が住居内に作られる。焚口幅49cm・燃烧部長56cm。袖先端の燃烧部側には、板状の砂岩が袖石として据えられている。また、燃烧部の前部には、天井石として使用されていたと思われる板状の砂岩が、床面上に置かれている。くりぬき式の煙道は、天井部分も崩落せずに残存している。煙道長99cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。上面の形状は、住居の長辺方向に長い楕円形。かなり深い掘り込みを持ち、内部より完形の小型甕(4)および甕(6)が出土している。周溝なし。柱穴なし。

出土遺物 遺物量は少ないが、貯蔵穴および竈周辺より完形近くまで復元可能な遺物が数個体出土している。先述の小型甕・甕の他、土師器坏(1~3)・甌(5)がある。掘り方なし。

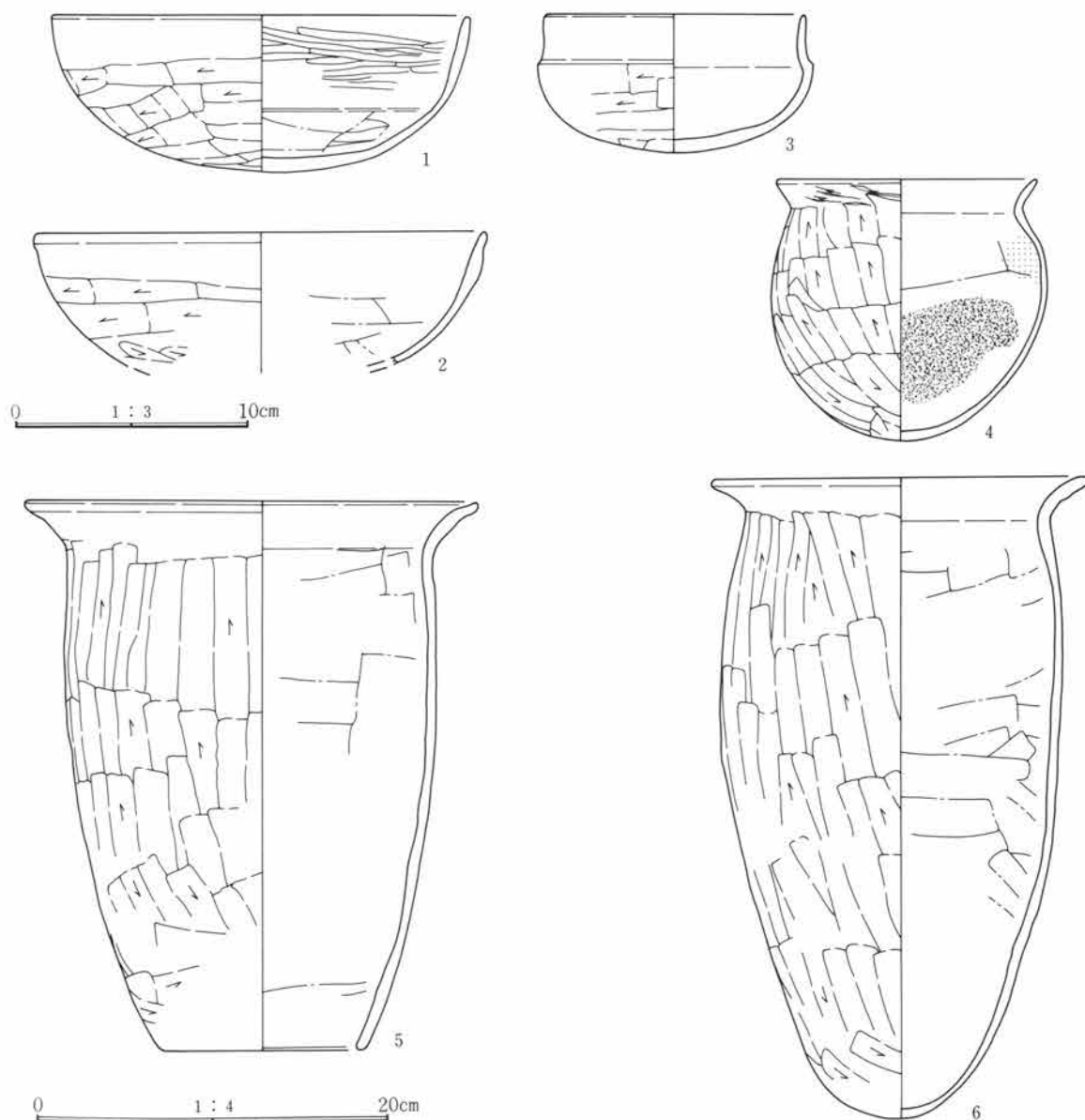
調査所見 古墳時代後期。

竈セクション

- 1 黒色土 若干の白色粒、わずかの黄褐色粘土・焼土粒・小礫含む。
- 2 黒褐色土 少量の砂質土、わずかの焼土含みしまりやや悪い。
- 3 黒褐色土 2層に比べ黒味強く、かなりの砂質土含む。
- 4 暗褐色土 少量の褐色粘質土含みしまりやや良。粘性あり。
- 5 暗褐色土 かなりの焼土含みしまりやや悪い。弱い粘性あり。
- 6 黒褐色土 黄色粒・焼土粒・小礫わずかに含む。
- 7 暗褐色土 若干の白色粒・小礫含みしまり良。
- 8 暗褐色土 多量の焼土・炭化物含みしまり悪く、弱い粘性持つ。
- 9 暗赤褐色土 焼土主体とし、少量の炭化物含む。弱い粘性あり。
- 10 暗褐色土 若干の白色粒・小礫・焼土粒含む。
- 11 褐色土 若干の焼土粒・微細炭化物含む。
- 12 褐色土 若干の白色粒・小礫・焼土粒含みしまり良。
- 13 暗褐色土 若干の焼土粒含み粘性持つ。
- 14 暗赤褐色土 若干の小礫含む焼土層。

第250図 G-31号住居竈

第3章 検出された遺構と遺物



第251図 G-31号住居出土遺物実測図

G-31号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 3/5	口 17.7 底 — 高 6.6	①均質な細砂（ごく まれに小礫）含む ②良好 ③灰褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面口縁 部横ナデ後ヘラ磨き、底部ヘラナデ。内面口縁下 にごく浅い沈線一条めぐる。	内面・口縁外面に 漆状の付着物わずか に残る
2	土師器 坏	貯蔵穴内 口～体部 1/3	口(19.2) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラ ナデ。	内面に漆状付着物わ ずかに残る
3	土師器 坏	+4cm 1/8	口(10.8) 底 — 高 5.8	①微砂粒・赤褐色微 粒子含む ②良好 ③にぶい 橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	内面・口縁外面に 漆状付着物わずかに 残る
4	土師器 小型甕	貯蔵穴内 完形	口 14.8 底 — 高 14.7	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい 橙色	口縁部内外面横ナデ、外面にヘラ状工具のあたり 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	胴部内面に一部炭化 物・煤付着

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
5	土師器 甌	床密着 2/3	口 25.5 底 11.3 高 30.7	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面丁寧な横ナデ。	
6	土師器 甕	貯蔵穴内 1/5	口 21.5 底 - 高 35.9	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

G-32号住居跡 (PL35・128)

位置 Gc・Gd-69グリッド 主軸方位 N-8°-E 残存壁高 0.56m 重複 9住に切られ、10住を切る。

規模と形状 形状はほぼ正方形に近いが、西壁に比べ東壁が長く、かなり歪んでいる。長辺5.16m・短辺5.21m。竈は北側に築かれていたものと推測されるが、重複する住居によって破壊され残っていない。

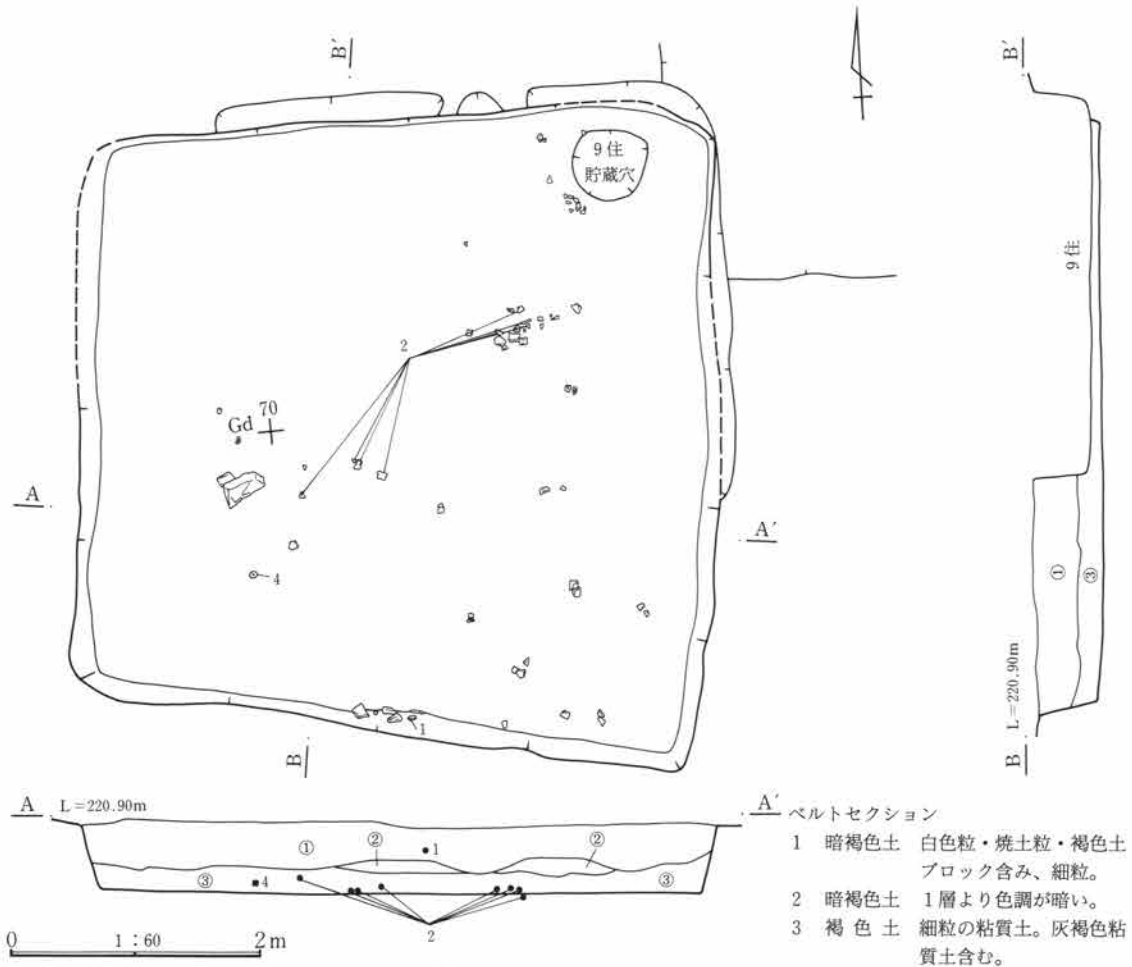
床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 なし。貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 住居の半分近くを他の住居によって破壊されているため、遺物量は少ない。大半は小破片で、住居内に散在する。器種は、土師器坏(1)・甌(2・3)がある。この他に石製の紡錘車(4)が出土している。

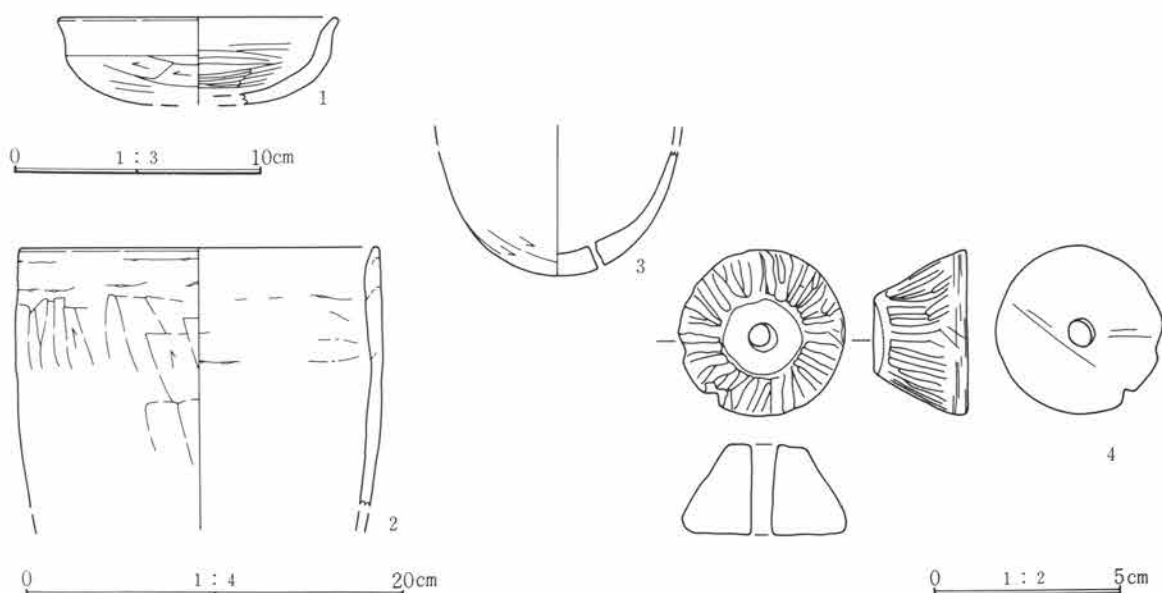
掘り方 なし。

調査所見 古墳時代後期。



第252図 G-32号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第253図 G-32号住居出土遺物実測図

G-32号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴	残存状態 備考	
				全長	幅			厚さ
1	土師器 坏	+33cm 口~体部 破片	口(11.0) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③淡黄色		口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ後へら磨き。		
2	土師器 甕	床密着 口~胴部 上半½	口(18.8) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③淡黄色		口縁部内外面横ナデ、接合痕有り。胴部外面へら削り、内面横ナデ。		
3	土師器 甕	+6cm 底部破片	口— 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③淡黄色		外面へら削り、内面ナデ。	No.2と同一個体の可能性有り	
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
4	紡錘車	+6cm 完形	全長	幅	厚さ	重量		

G-33号住居跡 (PL35・128)

位置 Ge・Gf-72グリッド 主軸方位N-3°-E 残存壁高 0.35m 重複 なし

規模と形状 形状は横長の長方形。長辺3.31m・短辺2.22mとかなり小型の住居である。南壁に比べ北壁がわずかに長い。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

床面 地山褐色粘質土層を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

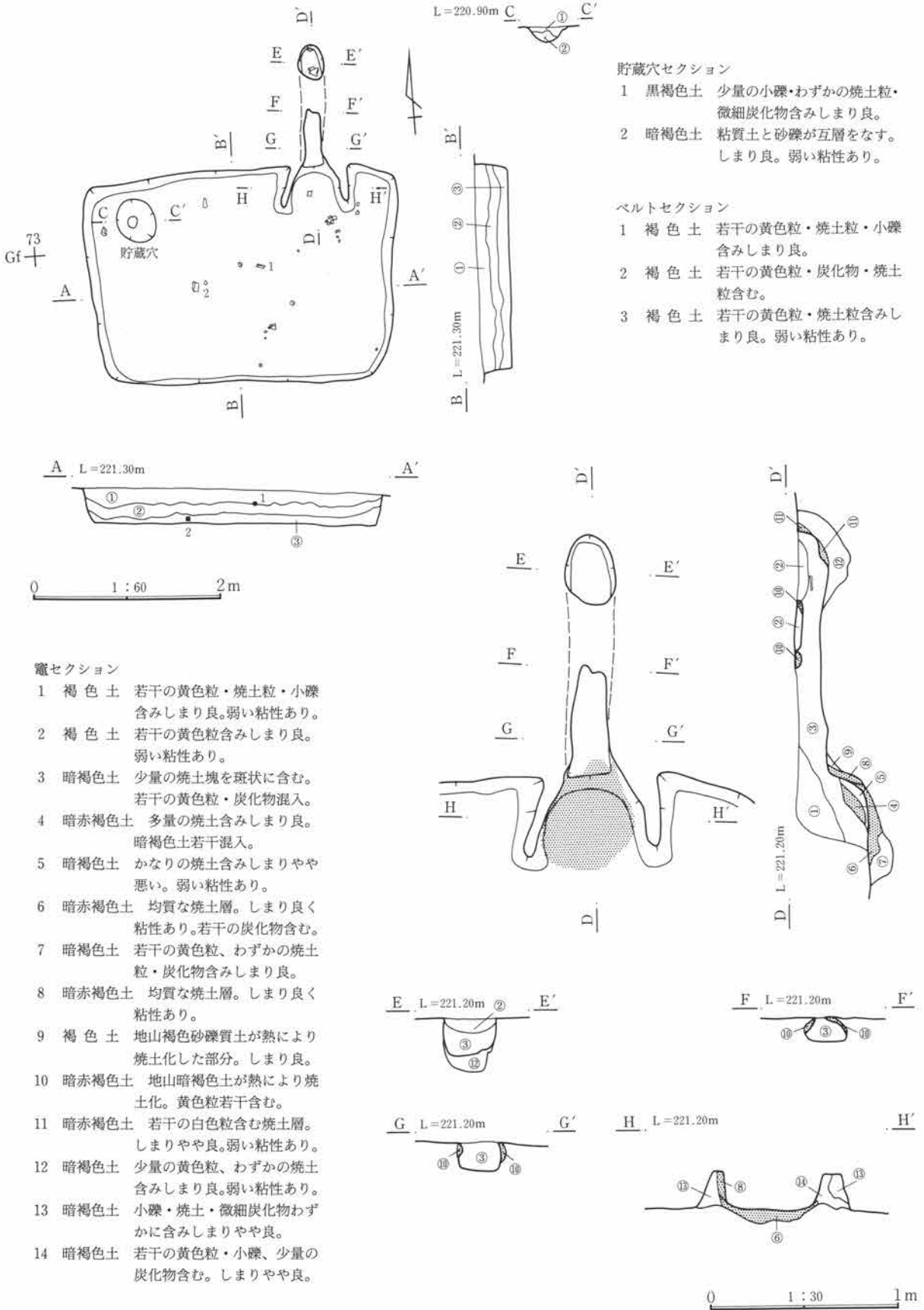
竈 住居北壁の東よりに所在。両袖が住居内に作り出される形状を呈する。焚口幅54cm・燃焼部長49cm。燃焼部の底面は、焼土が良く発達している。煙道は、一部天井部分も残っている。煙道長124cm。

貯蔵穴 住居北西隅近くに所在。上面形状は楕円形で掘り込みは浅く、内部から遺物の出土はなかった。

周溝 なし。 柱穴 なし。

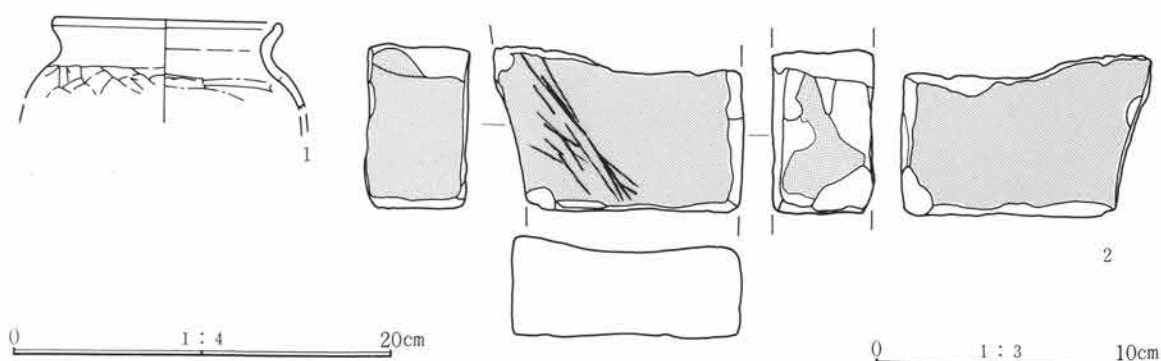
出土遺物 遺物量は非常に少なく、小破片が住居内に散在するのみ。覆土中位より土師器小型甕(1)、砥石(2)が出土している。 掘り方 なし。

調査所見 住居の形状・規模、および出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



第254図 G-33号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第255図 G-33号住居出土遺物実測図

G-33号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 小型甕	+19cm 口~頸部 1/3	口(11.9) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。口縁端部は短く内側に屈曲 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。内面に接合痕。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
2	砥石	+3cm 1/4	(6.4)	10.0	3.2	(360.9)	砥沢石	表裏・両側に研磨面。表・左側面の使用度高。 表面に刃ならし溝。

G-34号住居跡 (PL36・128)

位置 Gg・Gh-72グリッド 主軸方位 N-7°-W 残存壁高 0.67m 重複 なし

規模と形状 形状はほぼ正方形で、長辺4.95m・短辺4.75mとわずかに長辺が長い。周壁はわずかに外反するがほぼ直進し、線形の乱れはみられない。住居主軸はやや西にふれる。竈は北側に築かれているが、東壁にも古い竈の煙道部分が残っている。

床面 地山灰褐色粘質土を掘り込んで、平坦な床面を形成。貼り床などは見られない。

竈 住居北壁の、中央よりもわずかに東側に所在(竈No.1)。両袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅53cm・燃烧部長59cm。両袖の先端燃烧部側には、袖石として板状の砂岩が据えられていた。また、燃烧部内部からは、天井石として竈にかけられていたと思われる板状の砂岩が、ほぼ中央で折れた状態で出土した。また、燃烧部内からは、同様に竈にかけられていたと思われる甕(8)と、それを支えていた角礫状の砂岩製の支脚も出土している。燃烧部底面および壁は、焼土面が良く発達している。煙道はくりぬき式で、天井部分も崩落せずに残っている。煙道長127cm。また、この北側の竈構築以前に使用されていたと思われる古い竈の煙道が、住居東壁の中央よりもやや南よりに残っている(竈No.2)。燃烧部はすべて撤去され、撤去後に周溝が掘り込まれている。燃烧部の床面には、多量の焼土と炭化物が分布している。煙道はくりぬき式で、天井部分も残っている。煙道長97cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居長辺方向が長い瓢箪形で、東側がより深く掘り込まれている。上面より、土師器坏(3)が出土している。

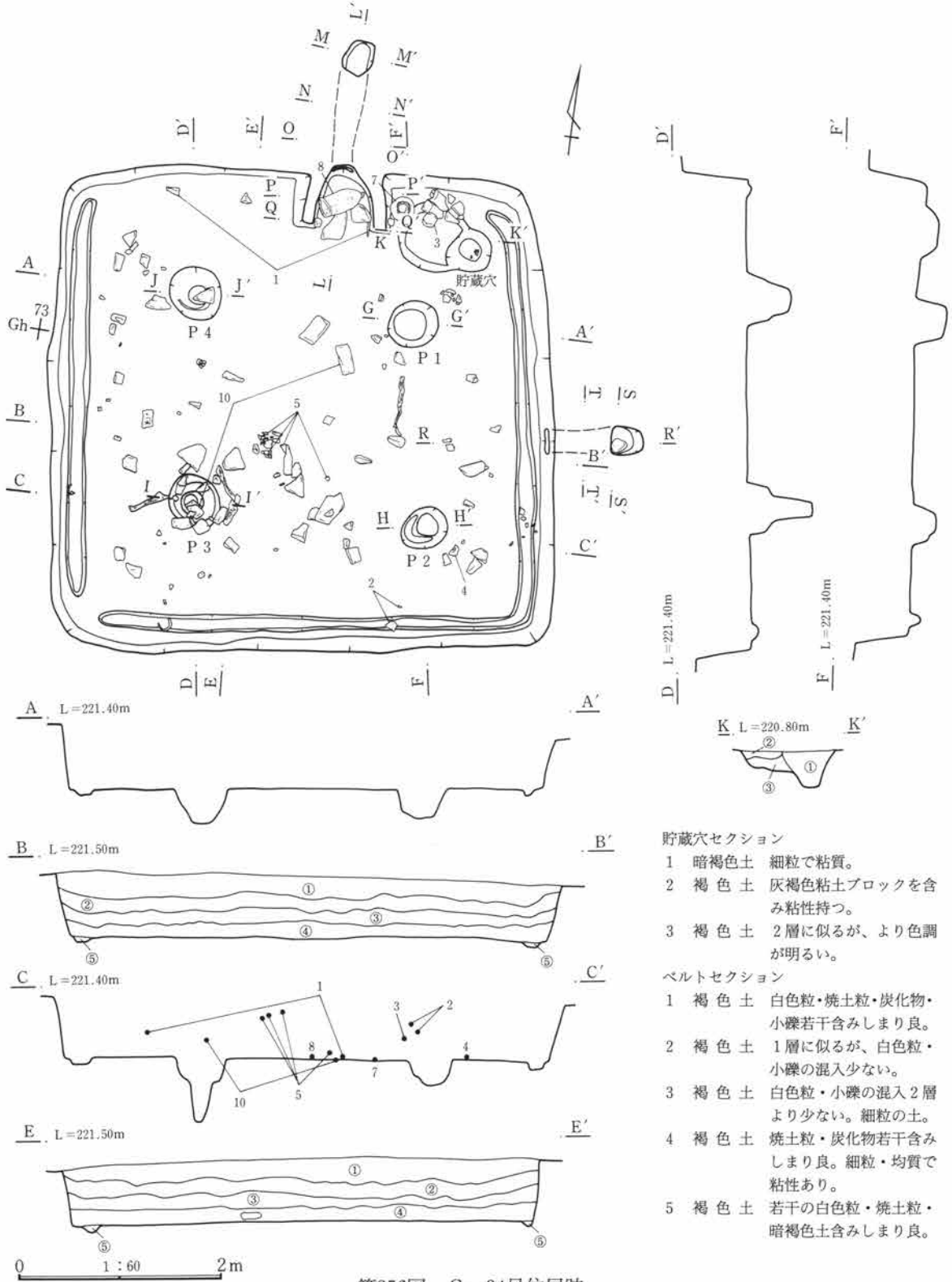
周溝 住居のほぼ全周で確認。上幅は10~20cm、深さ5~10cmほどである。

柱穴 大きさ・深さともに似かよった4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置する。

出土遺物 遺物量は比較的多い。土器に比べ石の量が多いが、大半は竈材として使用されることの多い板状

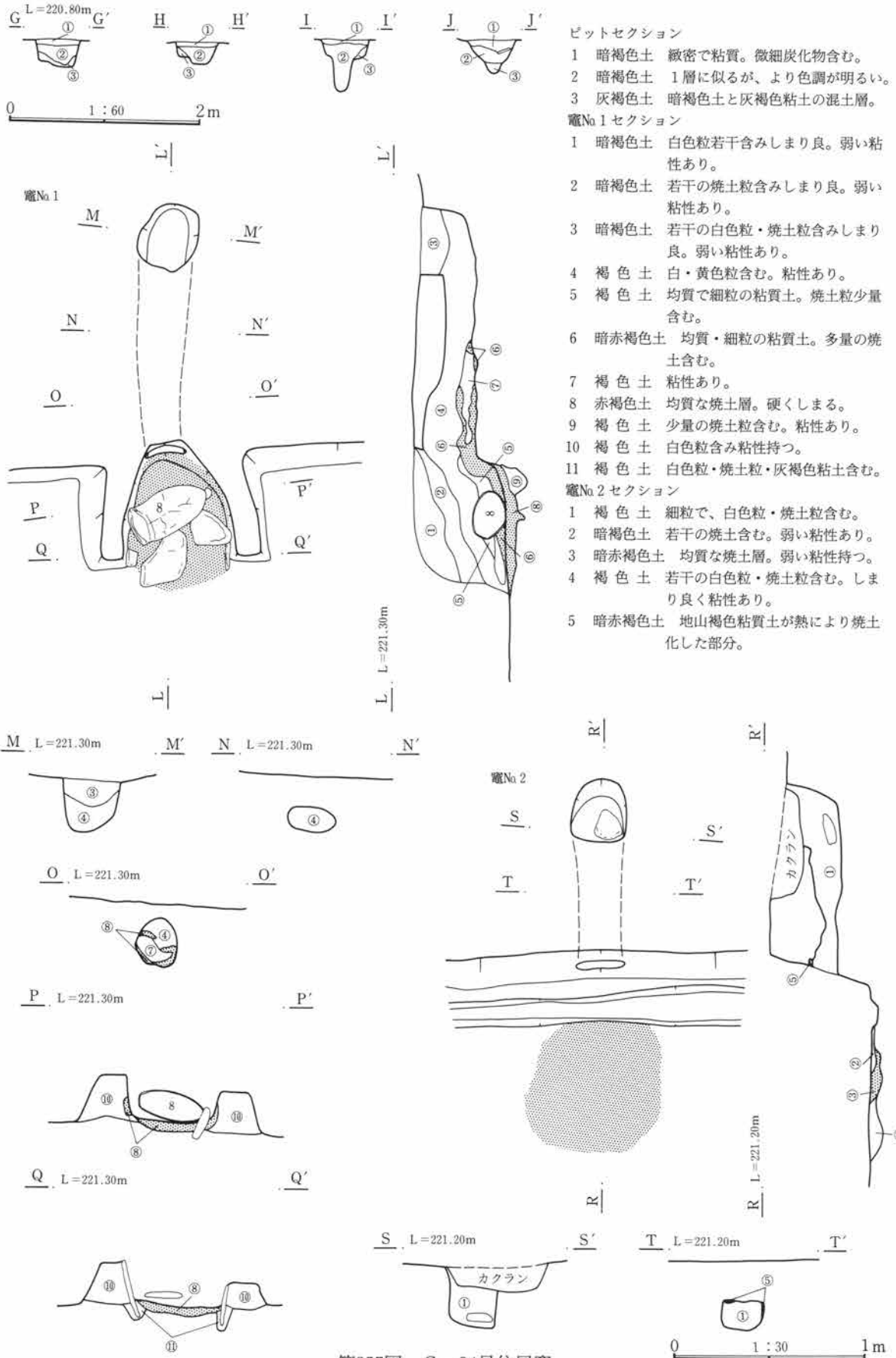
もしくは角礫状の砂岩で、床面近くより出土している。土器の大半は小破片であるが、竈と貯蔵穴の周辺より完形近くまで復元可能な坏(3)や甕(7・8)などが出土している。この他にも、土師器坏(1・2)・高坏(4)・甕(5)・小型甕(6)、砥石(9・10)などがある。掘り方 なし。

調査所見 古墳時代後期。



第256図 G-34号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



ピットセクション

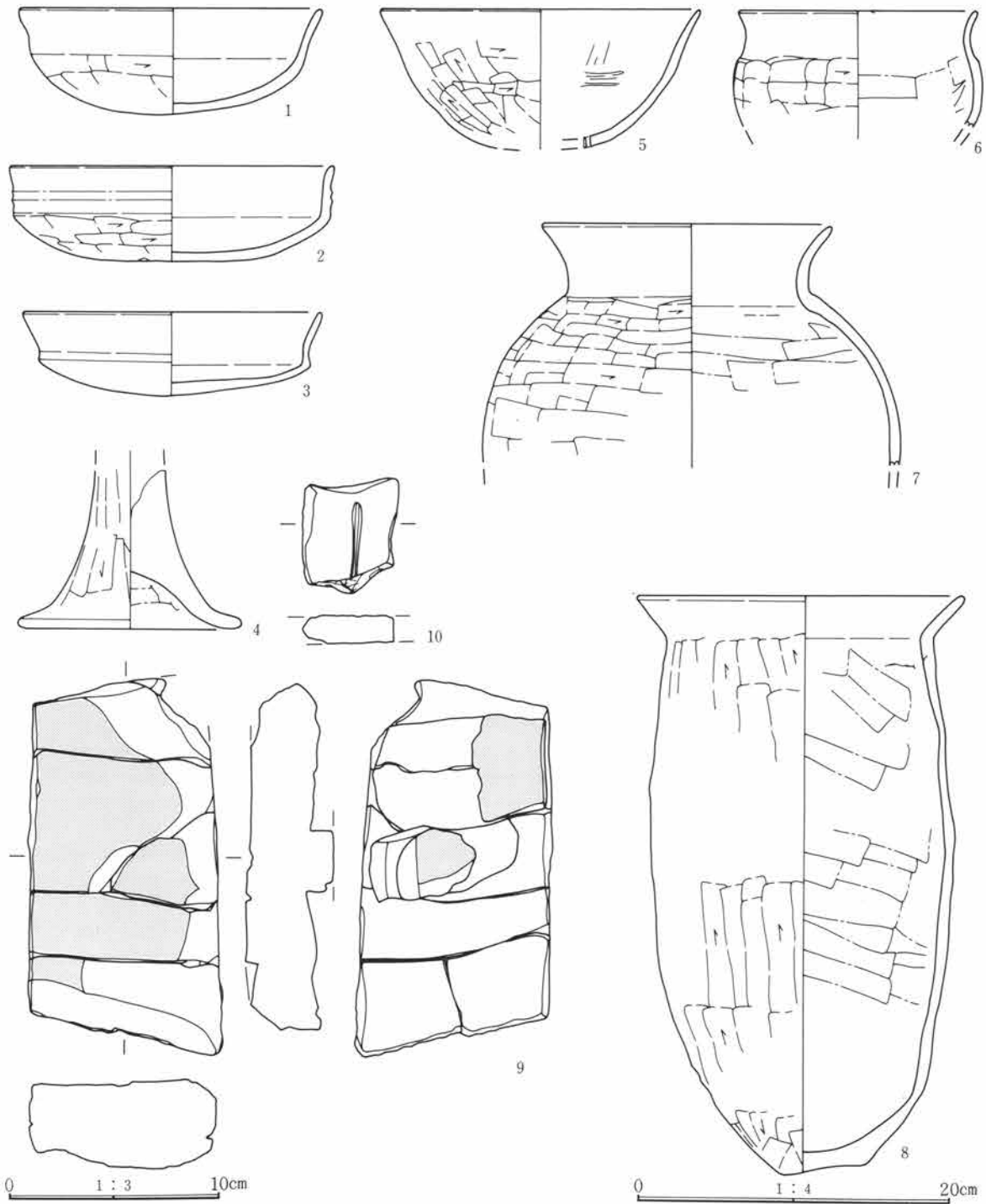
- 1 暗褐色土 緻密で粘質。微細炭化物含む。
- 2 暗褐色土 1層に似るが、より色調が明るい。
- 3 灰褐色土 暗褐色土と灰褐色粘土の混土層。

竈No 1セクション

- 1 暗褐色土 白色粒若干含みしまり良。弱い粘性あり。
- 2 暗褐色土 若干の焼土粒含みしまり良。弱い粘性あり。
- 3 暗褐色土 若干の白色粒・焼土粒含みしまり良。弱い粘性あり。
- 4 褐色土 白・黄色粒含む。粘性あり。
- 5 褐色土 均質で細粒の粘質土。焼土粒少量含む。
- 6 暗赤褐色土 均質・細粒の粘質土。多量の焼土含む。
- 7 褐色土 粘性あり。
- 8 赤褐色土 均質な焼土層。硬くしまる。
- 9 褐色土 少量の焼土粒含む。粘性あり。
- 10 褐色土 白色粒含み粘性持つ。
- 11 褐色土 白色粒・焼土粒・灰褐色粘土含む。

竈No 2セクション

- 1 褐色土 細粒で、白色粒・焼土粒含む。
- 2 暗褐色土 若干の焼土含む。弱い粘性あり。
- 3 暗赤褐色土 均質な焼土層。弱い粘性持つ。
- 4 褐色土 若干の白色粒・焼土粒含む。しまり良く粘性あり。
- 5 暗赤褐色土 地山褐色粘質土が熱により焼土化した部分。



第258図 G-34号住居出土遺物実測図

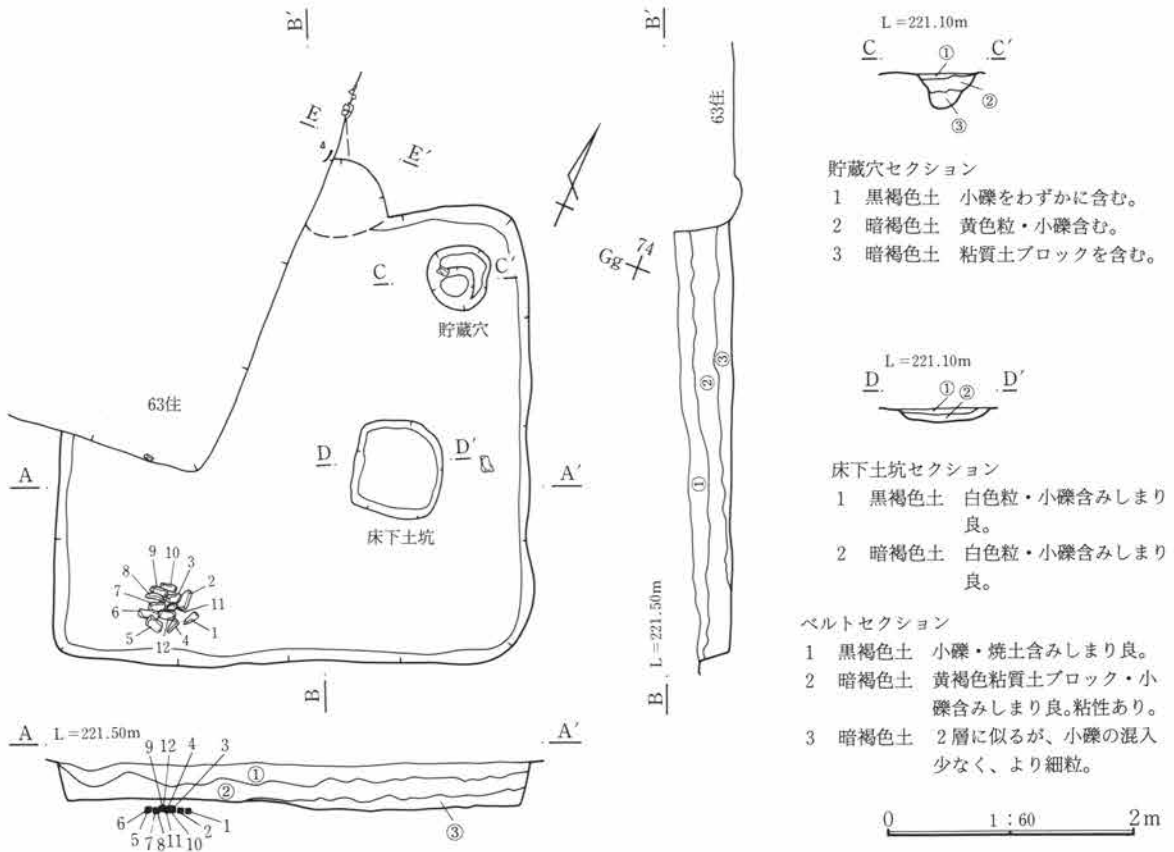
G-34号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 3/4	口 13.9 底 — 高 5.0	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	+24cm 3/5	口(15.4) 底 — 高 4.4	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
3	土師器 坏	貯蔵穴上 面 ほぼ完形	口 14.1 底 — 高 4.9	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデか。器表面の摩滅激しい。			
4	土師器 高坏	床密着 脚部	口 — 底(10.5) 高 —	①砂粒含む ②良好 ③黒褐色	脚部裾内外面横ナデ、外面ヘラ削り、内面横ナデ			
5	土師器 甌	+4cm 口~底部 3/5	口(20.2) 底 — 高 —	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ後ヘラ磨き。底部に径3mm程の小穴複数穿たれていたようであるが、欠損している。			
6	土師器 小型甕	P 3内 口~胴部 上位1/2	口(14.6) 底 — 高 —	①少量の細砂含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
7	土師器 甕	床密着 口~胴部 上半	口(18.1) 底 — 高 —	①均質な細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
8	土師器 甕	カマド内 ほぼ完形	口 20.8 底 6.0 高 36.2	①多量の砂礫含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全長	幅	厚さ	重量		
9	砥石	床密着 一部欠	17.65	9.4	3.8	707.6	泥岩	表裏に弱い研磨面あり。破損が激しく、特に裏面はほとんど剥落。
10	砥石	覆土 1/2	(5.4)	4.5	1.3	(42.2)	牛伏砂岩	板状の砂岩の表面に浅い溝一条。周囲を欠損。

G-35号住居跡 (PL36・129)



第259図 G-35号住居跡

位置 Gf-74グリッド 主軸方位 N-20°-W 残存壁高 0.43m 重複 G-63住に切られる。

規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、長辺3.76m・短辺3.60mとわずかに長辺が長い。北西隅を重複する住居によって破壊されているが、他の周壁はほぼ直立・直進し、線形の乱れは少ない。竈は北側に築かれていたが、新しい土坑によって破壊されている。住居主軸はかなり西にふれる。

床面 地山暗褐色粘質土を掘り込んで床面を形成。西半に比べ、東半がやや低い。貼り床などはみられない。

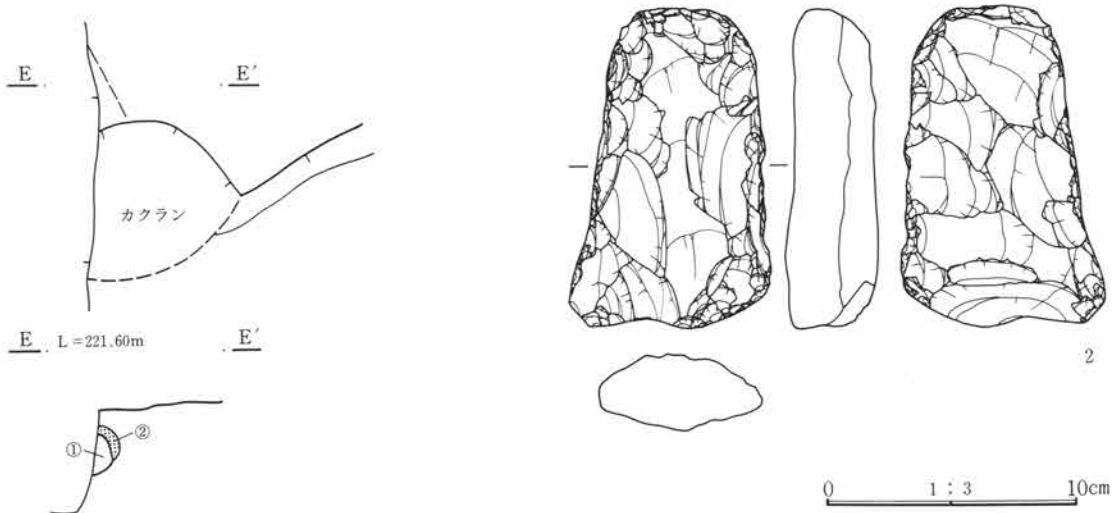
竈 住居北壁の中央よりもやや東よりにあったものと思われるが、新しい土坑によって破壊され、煙道のごく一部が残るのみである。煙道はくりぬき式である。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は不整円形。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は非常に少ない。土器は、覆土内出土を含めても、小破片が少数あったのみである。石器は、住居南西隅付近より、こもあみ石と見られる細長い円礫が12点(1~12)、床面直上より出土している。

掘り方 なし。

調査所見 時期を決定できるような遺物はほとんど見られないが、住居の形態・竈の位置・主軸方位などから、古墳時代後期に含まれるものと推測される。



竈セクション

- 1 暗褐色土 白色粒・焼土粒若干含みしまり良。
- 2 暗赤褐色土 地山褐色砂礫質土が熱により焼土化した部分。

0 1:30 1m

第260図 G-35号住居竈、出土遺物実測図

G-35号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
1	こもあみ石	床密着 完形	14.6	5.7	5.4	641.4	粗粒安山岩	棒状の円礫。
2	こもあみ石	床密着 完形	12.6	7.4	3.0	380.2	硬質泥岩	石鎌の欠損品を転用したもの。
3	こもあみ石	床密着 完形	13.0	7.7	4.5	653.3	粗粒安山岩	盤状の円礫。
4	こもあみ石	床密着 完形	12.2	7.6	4.7	592.1	粗粒安山岩	同上。

第3章 検出された遺構と遺物

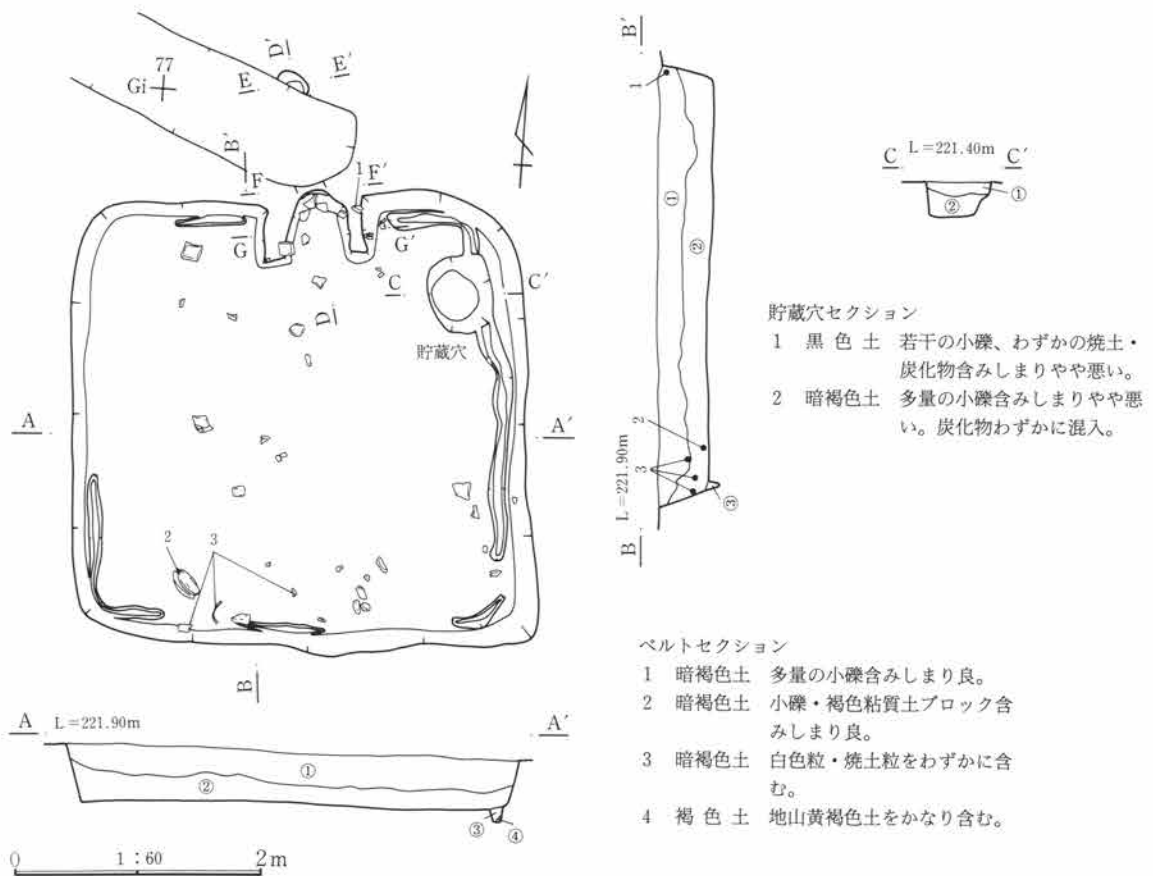
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
5	こもあみ石	床密着 完形	13.6	8.4	4.5	620.7	粗粒安山岩	同上。
6	こもあみ石	床密着 完形	14.5	8.0	4.7	495.4	砂岩	同上。
7	こもあみ石	床密着 完形	14.8	6.8	6.7	755.3	粗粒安山岩	同上。
8	こもあみ石	床密着 完形	16.0	6.3	4.8	729.1	蛇紋岩	棒状の亜円礫。
9	こもあみ石	床密着 完形	15.3	6.8	4.8	713.0	粗粒安山岩	棒状の円礫。
10	こもあみ石	床密着 完形	13.7	6.3	5.4	650.4	流紋岩	同上。
11	こもあみ石	床密着 完形	12.4	7.7	5.0	622.8	粗粒安山岩	盤状の円礫。
12	こもあみ石	床密着 完形	14.2	6.9	5.1	700.0	変質安山岩	棒状の円礫。

G-37号住居跡 (PL36・129)

位置 Gh-76グリッド 主軸方位 N-4°-W 残存壁高 0.46m 重複 なし

規模と形状 形状はほぼ正方形で、長辺3.70m・短辺3.59m。北東隅はかなり丸みを帯び、東壁から南壁の中央にかけて、壁がやや外反する。竈は北側に築かれ、住居主軸はわずかに西にふれる。

床面 地山黄褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。



第261図 G-37号住居跡

竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅47cm・燃烧部長56cm。煙道は、7号溝によって大きく破壊されているが、燃烧部との結合部と、立ち上がりの一部はかろうじて残っている。残存部の観察から、煙道はくりぬき式で、長さは109cmであることがわかる。

貯蔵穴 住居北東隅付近に所在。形状は住居短辺方向に長い楕円形。

周溝 住居東壁～南壁・西壁南側・北壁の一部で、壁に沿って浅い周溝が断片的にみられる。 **柱穴** なし。

出土遺物 遺物量はあまり多くない。竈付近をのぞいては、床面よりもやや高い位置から出土している。器種は、須恵器坏(1)、土師器甕(2)・甔(3)、がある。 **掘り方** なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期末頃と推測される。



G-37号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	カマド右 袖上 1/3	口(13.6) 底(9.4) 高 4.8	①微砂粒・黒色粒子 含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後、体部下位から 底部手持ちヘラ削り。	
2	土師器 甕	+9cm 口～頸部	口 22.8 底 — 高 —	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘ ラナデ。	
3	土師器 甕	+11cm 胴下半～ 底部1/3	口 — 底(12.8) 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ後ヘラ磨き。	

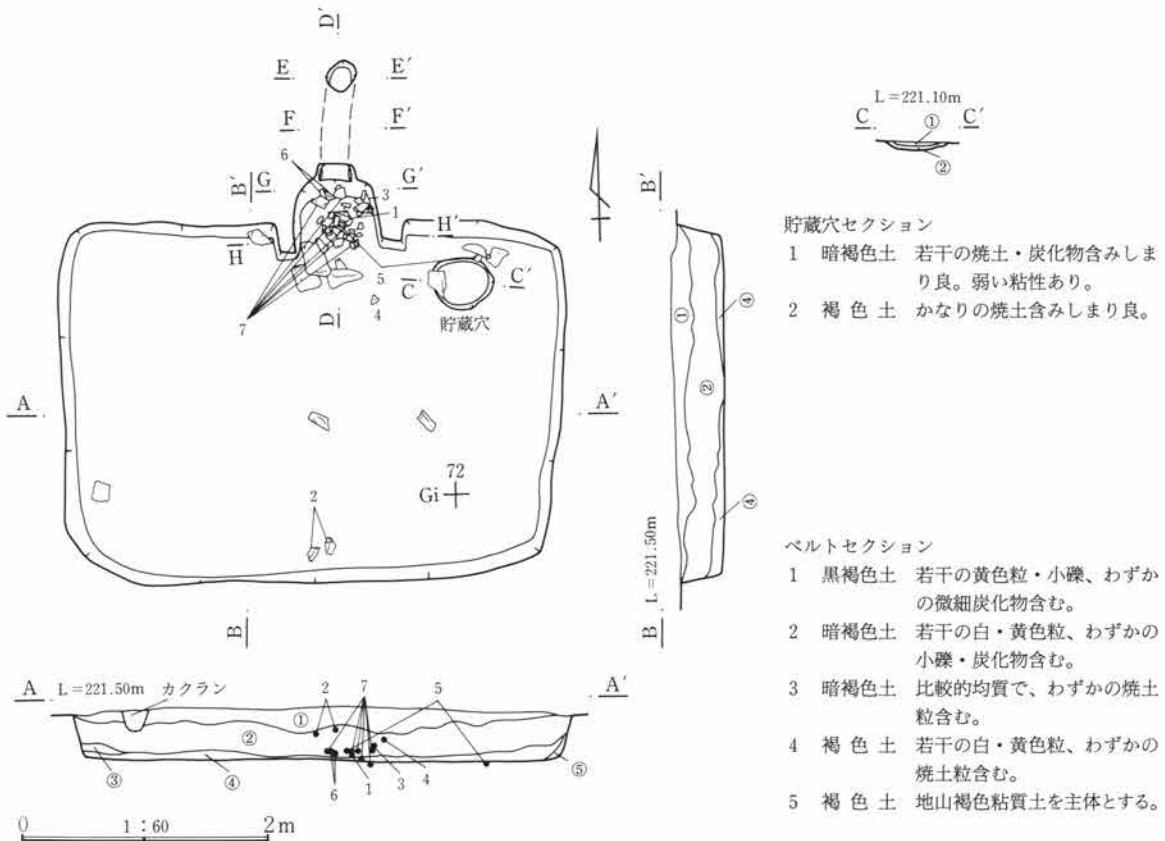
G-38号住居跡 (PL37・129・130)

位置 Gi-72グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.40m 重複 なし

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺4.04m・短辺2.86m。南壁に比べ、北壁がわずかに長い。周壁はほぼ直進するが、南西隅がかなり丸みを帯びている。竈は北側に築かれ、住居主軸は真北にほぼ一致する。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。住居内に短い袖が作られるが、燃烧部は大きく住居域外に張り出す。焚口幅66cm・燃烧部長59cm。燃烧部床面から壁にかけては、焼土面が良く発達している。また燃烧部前部には、竈材として用いられていたと思われる、板状、角礫状の砂岩がまとまって出土している。煙道はくりぬき式で、一部天井部分も残っている。煙道長93cm。

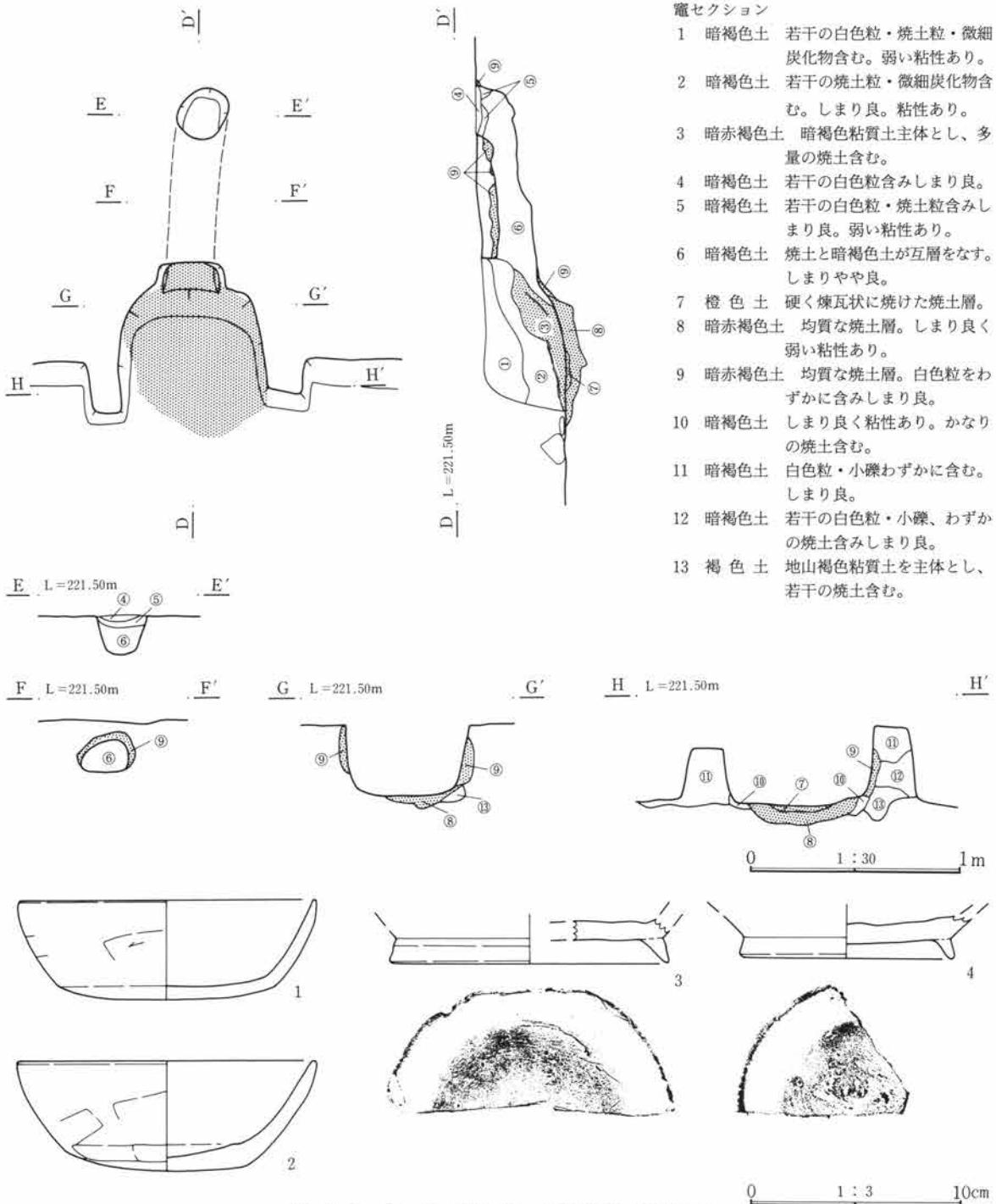


第263図 G-38号住居跡

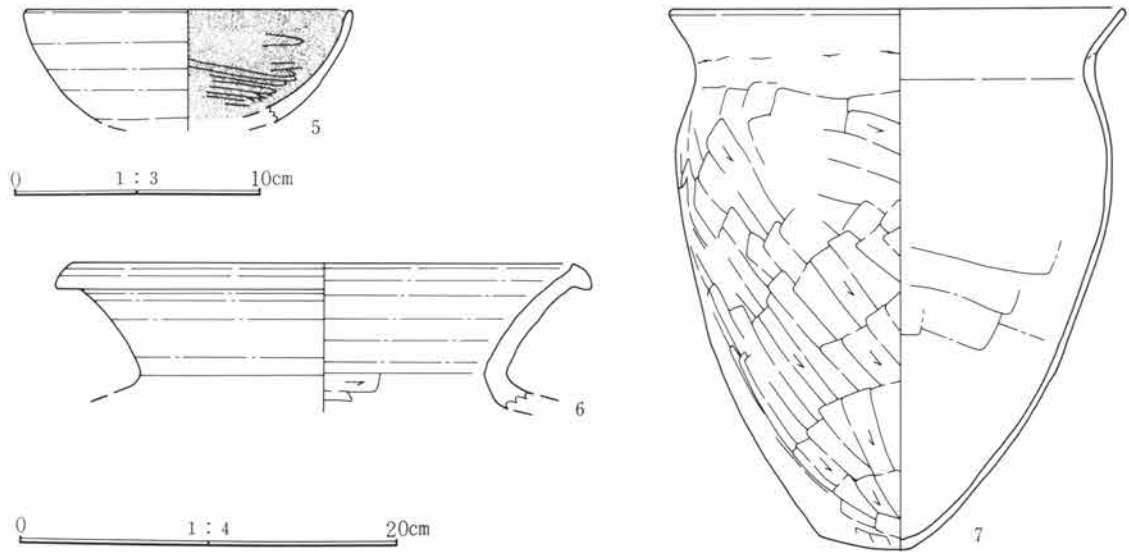
貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。形状は住居長辺方向に長い楕円形。掘り込みは非常に浅く、内部からの遺物の出土もなかった。周溝なし。柱穴なし。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、竈内をのぞいてはわずかに数片のみである。カマド燃烧部内から土師器坏(1)・甕(7)、須恵器高台付坏(3)・埴(5)・甕(6)が出土している。他に土師器坏(2)、須恵器埴(4)がある。多くは部分的な破片である。掘り方なし。

調査所見 出土遺物および住居・竈の形態から、奈良時代の住居と思われる。



第3章 検出された遺構と遺物



第265図 G-38号住居出土遺物実測図②

G-38号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	カマド内 3/5	口(13.8) 底 10.1 高 4.6	①少量の細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデか。器表面の摩滅激しい。	
2	土師器 坏	+24cm 3/5	口(14.0) 底 8.5 高 5.1	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
3	須恵器 高台付坏	カマド内 底部1/4	口— 底(13.0) 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り。貼り付け高台。	底部外面に研磨面
4	須恵器 塊	+17cm 底部1/4	口— 底(10.0) 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。貼り付け高台。	
5	須恵器 塊	床密着 1/5	口(13.0) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	ロクロ整形。体部下位外面手持ちヘラ削り。内面ヘラ磨き。	内面黒色処理
6	須恵器 甕	カマド内 口～頸部 1/4	口(26.5) 底— 高—	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。口縁端部折り。頸部内面ヘラ削り。	
7	土師器 甕	カマド内 3/5	口 24.4 底 5.0 高 28.5	①均質な微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。全体に器肉薄い。	

G-39号住居跡 (PL37・130)

位置 Gf-69グリッド 主軸方位 N-1°-W 残存壁高 0.43m 重複 なし

規模と形状 形状は正形状であるがかなりくずれており、周壁は歪み、四隅も丸まっている。長辺4.71m・短辺4.49m。西壁に比べ、東壁がやや長い。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

床面 本住居は拡張されている。拡張前の床面は、部分的に掘り込まれている掘り方に、褐色土を埋めて形成されている。拡張後は、拡張前の床面に、焼土を含んだ褐色土を敷いて床面としている。

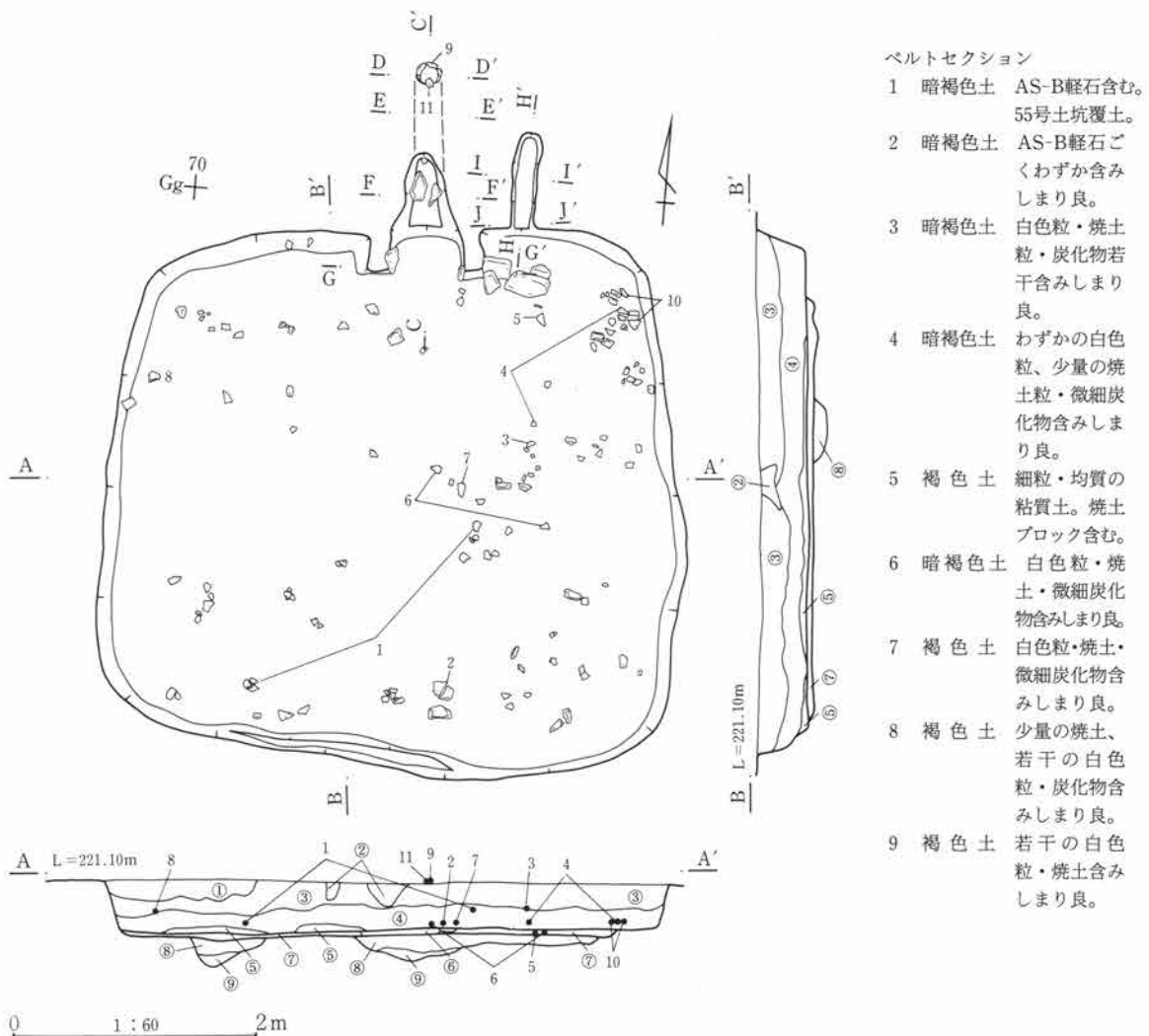
竈 住居北壁のほぼ中央部に所在 (No.1)。住居内に比較的短い袖が作られる。焚口幅53cm・燃焼部長37cm。

煙道はくりぬき式で、一部天井部分も残っている。煙道長133cm。煙道の立ち上がり部分には、土師器甕(9)がはめ込まれている。両袖の先端燃焼部側には、板状の砂岩が袖石として据え付けられている。燃焼部から煙道手前3分の1ほどにかけては、焼土の発達が見られる。右袖の脇より、竈材として利用されていたと思われる板状の砂岩が4個出土した。またこの竈の東側には、古い竈の煙道部のみが残存している(竈No.2)。煙道の長さは77cmである。竈No.2の廃絶・撤去後に竈No.1が作られたもので、竈No.2は、拡張以前の住居に伴う竈であったものと推測される。

貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

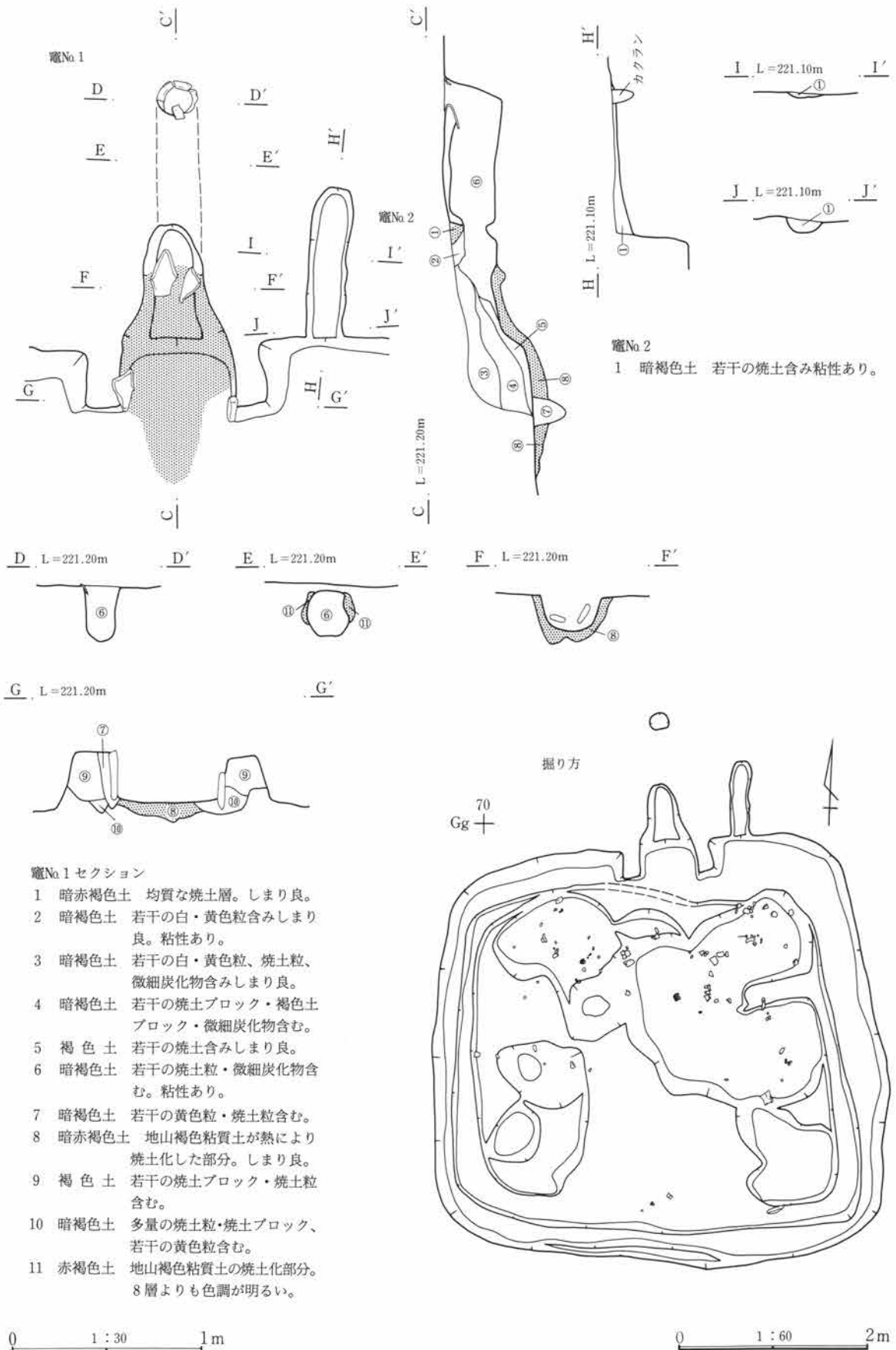
出土遺物 遺物量はかなり多いが、大半は小破片である。多くは床面近くから覆土中位ほどの間に位置する。遺物全体に占める須恵器の量が比較的多い。器種は、土師器坏(1)・甕(9~11)、須恵器坏(2~5)・埴(6)・蓋(8)があり、この他に灰釉陶器の埴の台部破片(7)が出土している。また、覆土中より鉄滓(12・13)が出土。掘り方 拡張以前の住居域内に、不規則な掘り方が作られている。

調査所見 調査時には2軒の住居としたが、出土遺物に時期差は認められず、住居形状もほぼ相似形であることから、拡張が行われたものと判断。住居の時期は、出土遺物より平安時代のものとわかる。

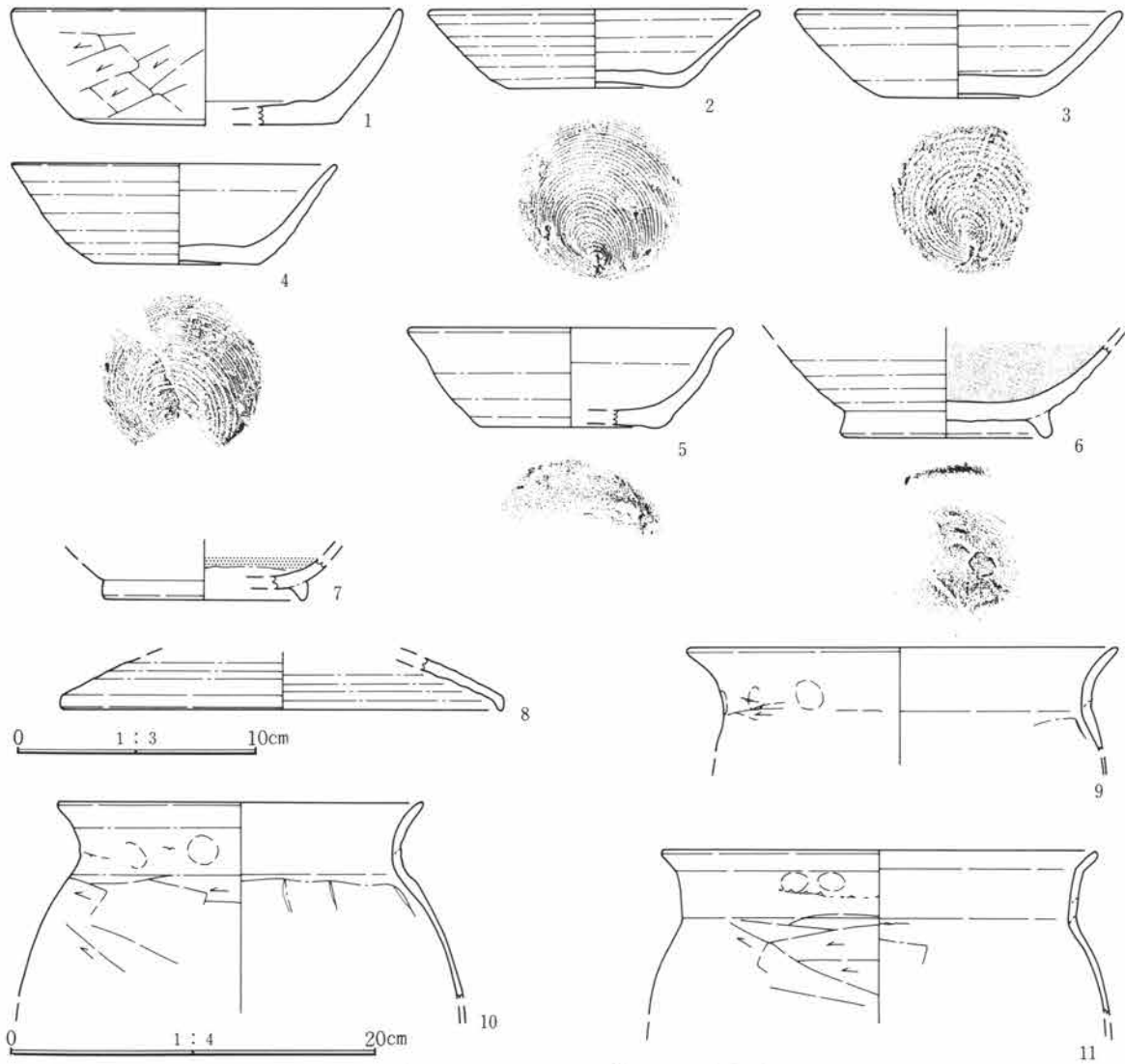


第266図 G-39号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第267図 G-39号住居竈、掘り方



第268図 G-39号住居出土遺物実測図

G-39号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+4cm 1/4	口(16.1) 底(10.8) 高 4.7	①細砂含む ②良好 ③明褐色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	須恵器 坏	+5cm 1/5	口 13.6 底 7.0 高 3.2	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。	
3	須恵器 坏	住居南側 2/5	口(13.4) 底 6.0 高 3.5	①細砂(まれに小礫) 含む ②堅緻 ③灰黄色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。	
4	須恵器 坏	+7cm 2/5	口(13.3) 底 6.6 高 4.1	①細砂・黒色微粒子 含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。	
5	須恵器 坏	床密着 1/4	口(13.3) 底(7.5) 高 4.0	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転糸切り。器表面かなり摩滅	
6	須恵器 塊	床密着 体～台部 1/2	口 — 底(8.4) 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。貼り付け高台。	

第3章 検出された遺構と遺物

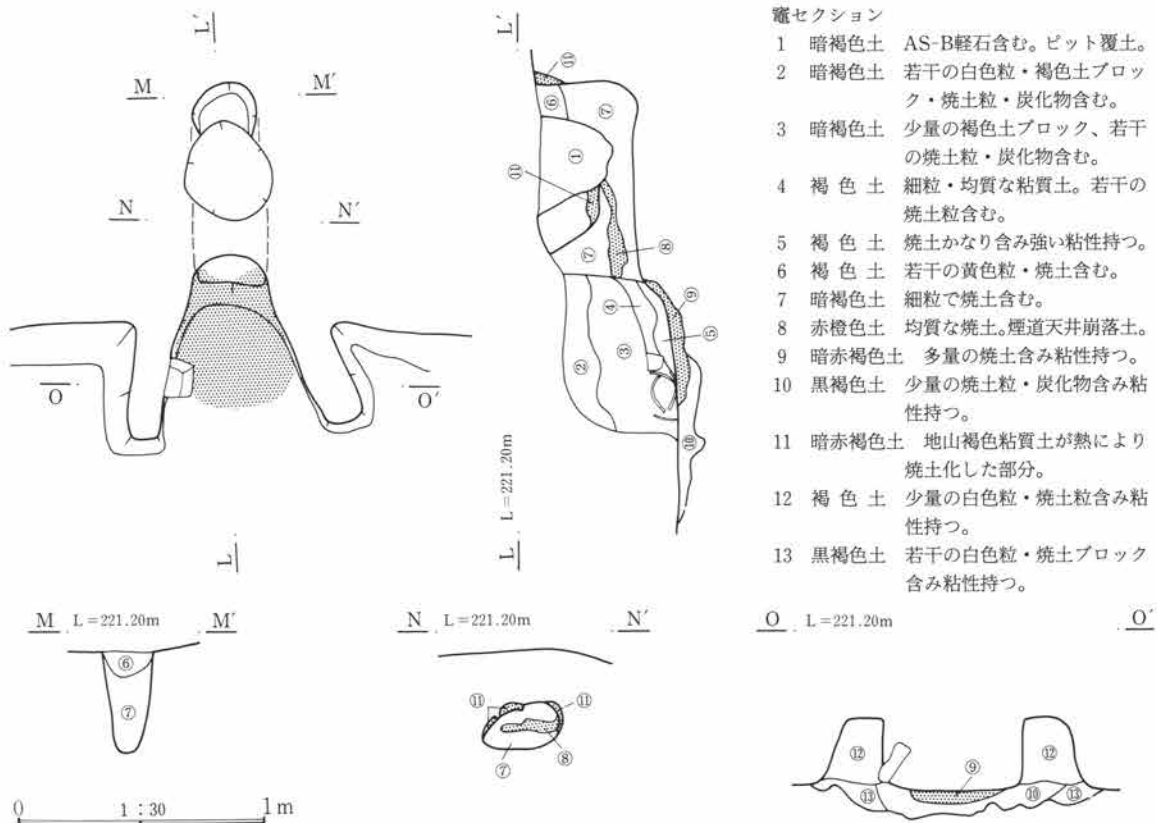
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴	残存状態 備考	
				長	幅			
7	灰釉陶器 壺	床密着 台部1/3	口— 底(8.1) 高—	①均質で、わずかに 微砂粒・黒色微粒子 含む ②堅緻 ③灰色		ロクロ整形。貼り付け高台。		
8	須恵器 蓋	掘り方内 口縁1/3	口(18.2) 摘— 高—	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰色		ロクロ整形。つまみ・天井部欠損。		
9	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/3	口(20.1) 底— 高—	①均質な微砂粒含む ②良好 ③橙色		口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕・接合痕。 胴部外面へら削り、内面へらナデ。全体に器肉薄 い。		
10	土師器 甕	カマド煙 道内 口縁1/3	口23.6 底— 高—	①均質な微砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色		口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕・接合痕。 胴部外面へら削り、内面へらナデ。		
11	土師器 甕	煙道内 口～胴部 上位破片	口(23.7) 底— 高—	①均質な細砂含む ②良好 ③橙色		口縁は「こ」の字状。口縁部内外面横ナデ、外面 に指頭圧痕・接合痕。胴部外面へら削り、内面横 ナデ。全体に器肉薄い。		
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
12	鉄滓	覆土	5.0	4.8	4.6	38.0	破片	表面一部溶けてガラス状。
13	鉄滓	覆土	4.9	4.7	2.8	64.0	破片	表面溶けてガラス状。

G-41号住居跡 (PL37・130・131)

位置 Gg・Gh-70グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.49m

重複 G-69住を切り、G-18土坑に切られる。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺5.08m・短辺3.72m。周壁はかなり外反し、わずかに蛇行する。

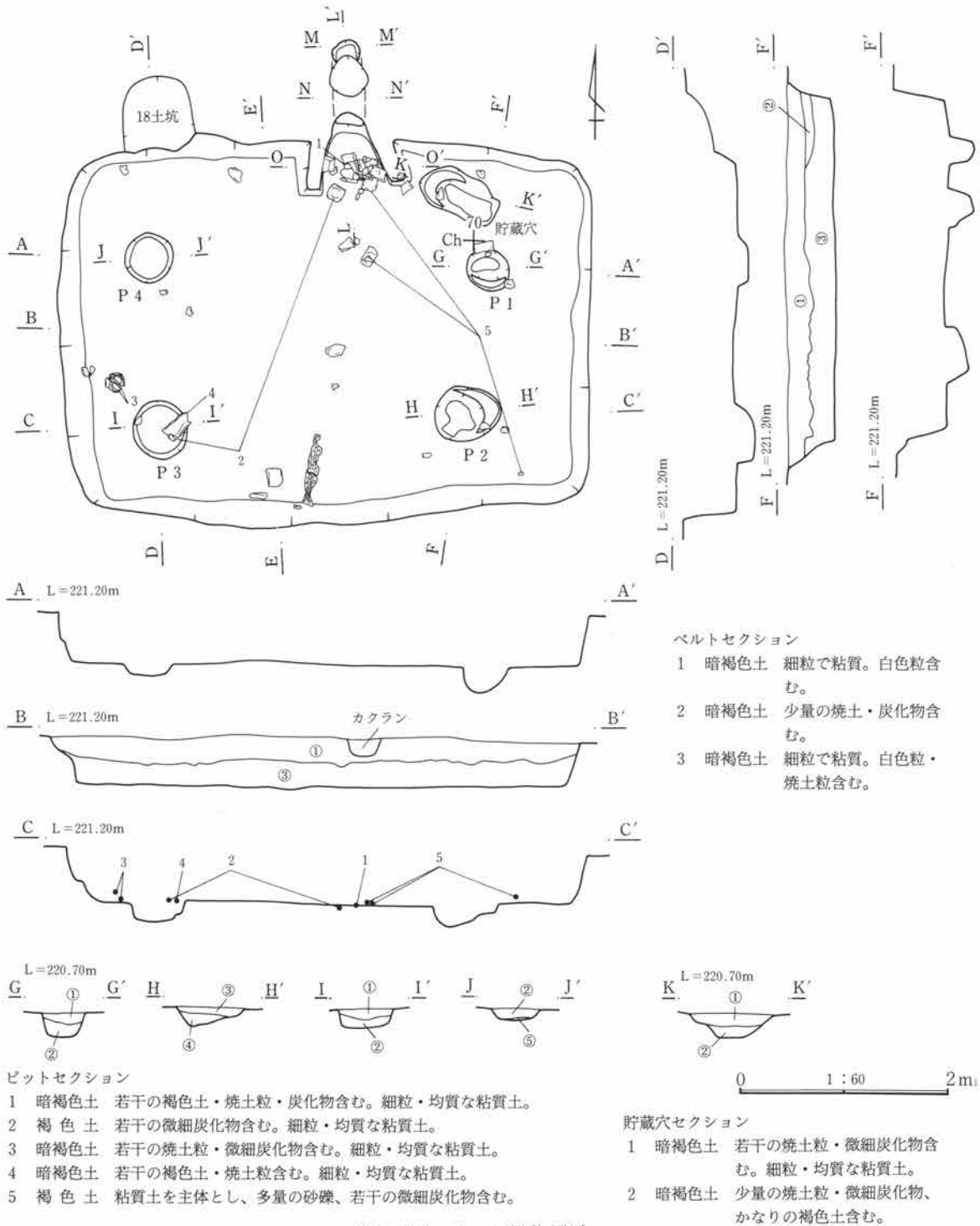


第269図 G-41号住居竈

竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

床面 地山黄褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁のほぼ中央に所在。住居内に袖が作り出される。焚口幅64cm・燃烧部長50cm。燃烧部内からは、袖石・支脚として利用されていたと思われる砂岩と、比較的大型の土師器坏(1・2)と甗(5)が出土した。燃烧部から奥壁にかけては、床面および壁が熱を受け焼土化している。煙道は、後世のピットによって一部破壊されているが、部分的には天井も崩落せずに残っている。煙道長88cm。



第270図 G-41号住居跡

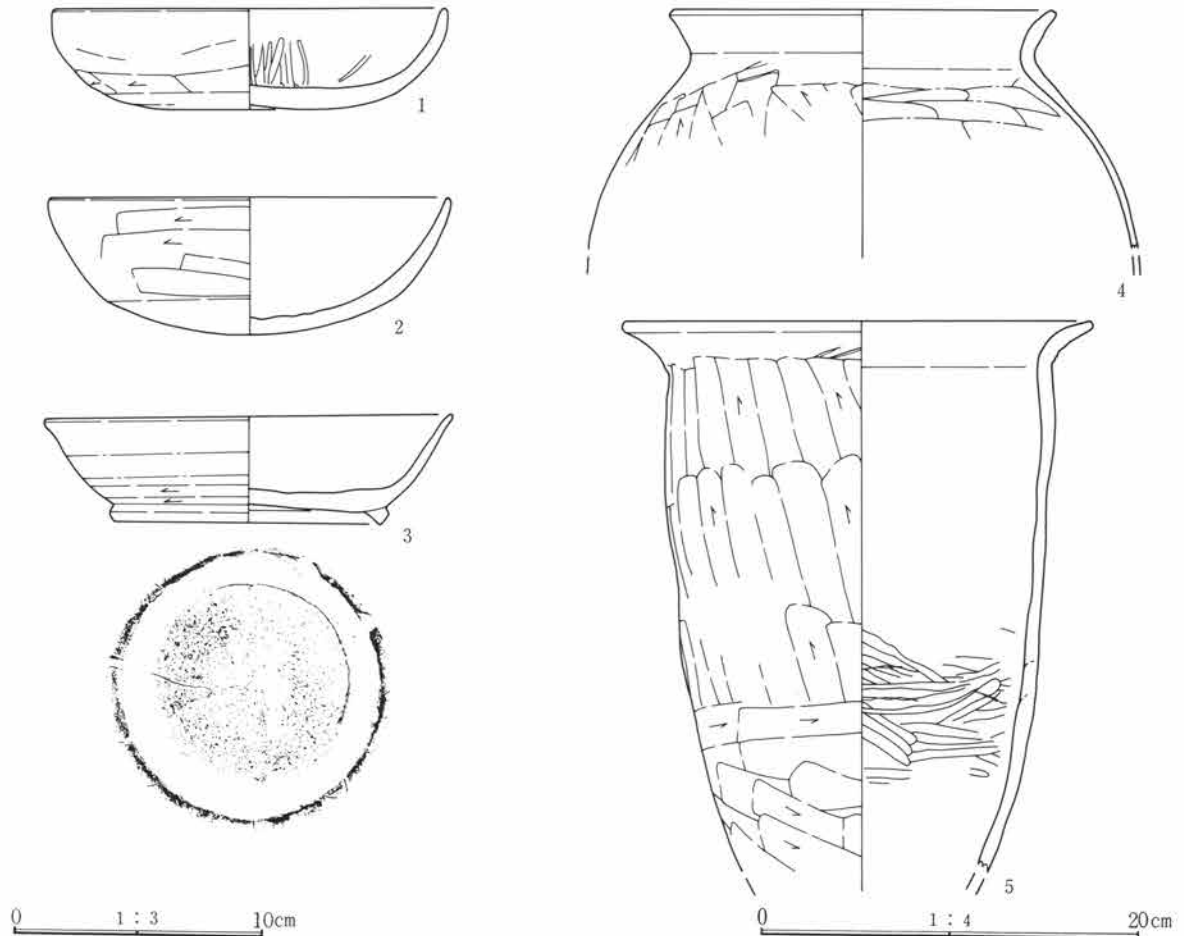
第3章 検出された遺構と遺物

貯蔵穴 住居北壁際、竈の右側に所在。上面の形状は住居の長辺方向が長い楕円形に近いが、掘り込みはかなり不規則である。 **周溝** なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するが、いずれもかなり浅い。

出土遺物 遺物量は少ないが、大半は床面の直上より出土している。特に竈内からの遺物の出土が多い。先述の竈内出土の土師器坏・甕の他に、須恵器高台付坏(3)、土師器甕(4)がある。いずれも床面直上からの出土である。 **掘り方** なし。

調査所見 出土遺物より奈良時代の住居とわかる。



第271図 G-41号住居出土遺物実測図

G-41号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	カマド内 3/4	口(15.8) 底(11.9) 高 4.0	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面 横ナデ後放射状ヘラ磨き。	
2	土師器 坏	カマド内 2/5	口(16.0) 底 — 高 5.3	①少量の細砂(ごく まれに小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デか。器表面かなり摩滅。	
3	須恵器 高台付坏	床密着 口縁1/4欠	口 16.2 底 10.5 高 4.3	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。体部下位回転ヘラ削り。底部回転ヘ ラ切り。貼り付け高台。	
4	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/5	口(20.4) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
5	土師器 甔	カマド内 口～胴部	口 25.1 底 — 高 —	①砂粒（ごくまれに 小礫）含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。内面下半は横ナデ後ヘラ磨き。	

G-42号住居跡 (PL38・131)

位置 Gg・Gh-74グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.58m 重複 G-64住を切る。

規模と形状 長辺3.22m・短辺2.92mと、わずかに横長の長方形。周壁は若干外反し、一部小さく蛇行している。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

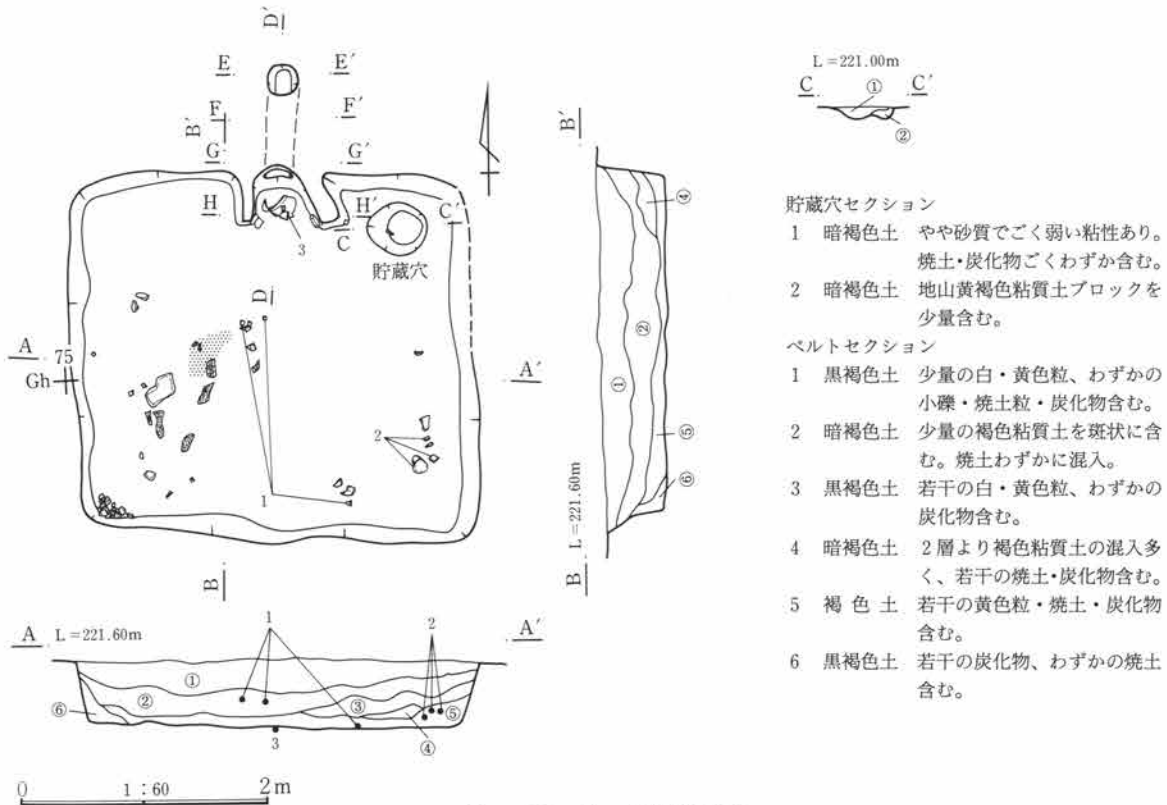
竈 住居北壁の中央部に所在。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅49cm・燃烧部長39cm。両袖の先端燃烧部側には、板状の砂岩が袖石として据え付けられている。燃烧部床面には、焼土の発達が見られる。煙道はくりぬき式で、天井部分も崩落せずに残存している。煙道長87cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。上面形状は住居長辺方向がわずかに長い楕円形。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は少ない。竈内より比較的大きな甔(3)破片が出土した他は、住居内に小破片が散在するのみである。この他には、須恵器坏(1)、土師器小型甔(2)がある。また住居南西隅の床面上より、長径が10cmに満たない小円礫が20個ほどまとまって出土したが、大きさ・形状ともに不揃いで、用途は不明。

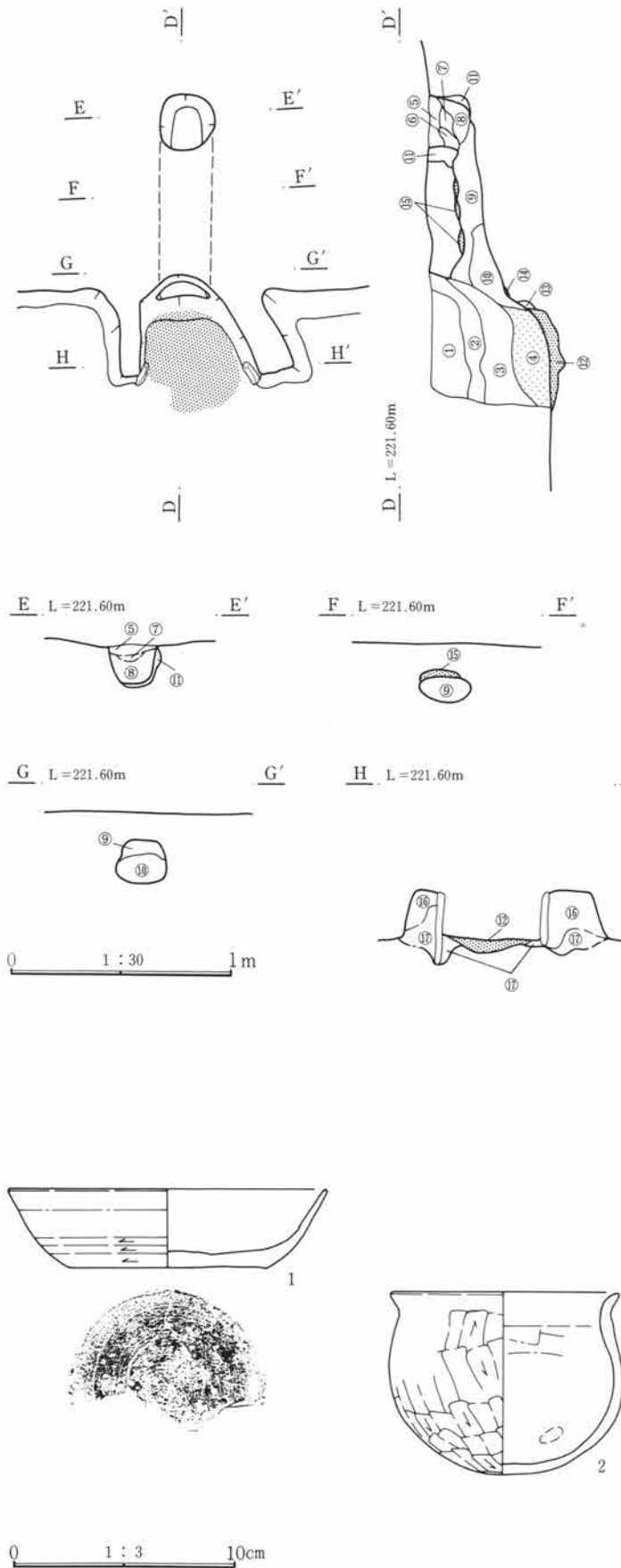
掘り方 なし。

調査所見 床面上から炭化材が出土し、一部焼土面もみられることから、焼失住居と思われる。住居の時期は出土遺物より奈良時代と推定される。



第272図 G-42号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



竈セクション

- 1 暗褐色土 若干の白・黄色粒、焼土粒、褐色土ブロック含む。
- 2 暗褐色土 若干の焼土粒・微細炭化物含む。粘性あり。
- 3 褐色土 若干の暗褐色土ブロック・焼土含む。
- 4 褐色土 多量の焼土含む細粒の粘質土。
- 5 暗褐色土 若干の白・黄色粒含みしまり良。
- 6 褐色土 若干の白・黄色粒含みしまり良。粘性あり。
- 7 暗褐色土 細粒・均質でしまり良い粘質土。
- 8 褐色土 若干の小礫含み粘性持つ。
- 9 暗褐色土 少量の焼土、わずかの白・黄色粒、炭化物含む。
- 10 暗褐色土 かなりの焼土、わずかの黄色粒・炭化物含む。
- 11 暗褐色土 地山褐色土を主体とし、若干の白色粒、わずかの焼土含む。
- 12 暗赤褐色土 均質な焼土層。しまり良く弱い粘性あり。
- 13 暗褐色土 少量の焼土・炭化物含む。
- 14 暗褐色土 かなりの焼土含みしまりやや良。
- 15 暗赤褐色土 均質な焼土層。わずかの白色粒含む。
- 16 暗褐色土 若干の白色粒・焼土・小礫含む。
- 17 褐色土 地山褐色粘質土主体とし、わずかの焼土含む。

第273図 G-42号住居竈、出土遺物実測図

G-42号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	床密着 2/5	口(14.2) 底(8.6) 高 3.6	①細砂(まれに小礫) 含む ②堅緻 ③黄灰色	ロクロ整形。体部外面下位回転ヘラ削り。底部回転ヘラ削り。内面ナデ。	
2	土師器 小型甕	+6cm 2/5	口(13.4) 底 — 高 10.8	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、底部に指頭圧痕。	
3	土師器 甕	カマド内 口~胴部 上半1/3	口(24.2) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

G-43号住居跡 (PL38・131)

位置 Gi-73グリッド 主軸方位 N-94°-E 残存壁高 0.35m 重複 G-44住を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺2.82m、短辺2.12mとかなり小さい。周壁はほぼ直進するが、一部壁面上部が崩落し、壁が外反している部分もある。竈は東側に築かれ、住居主軸は東西方向にほぼ一致。

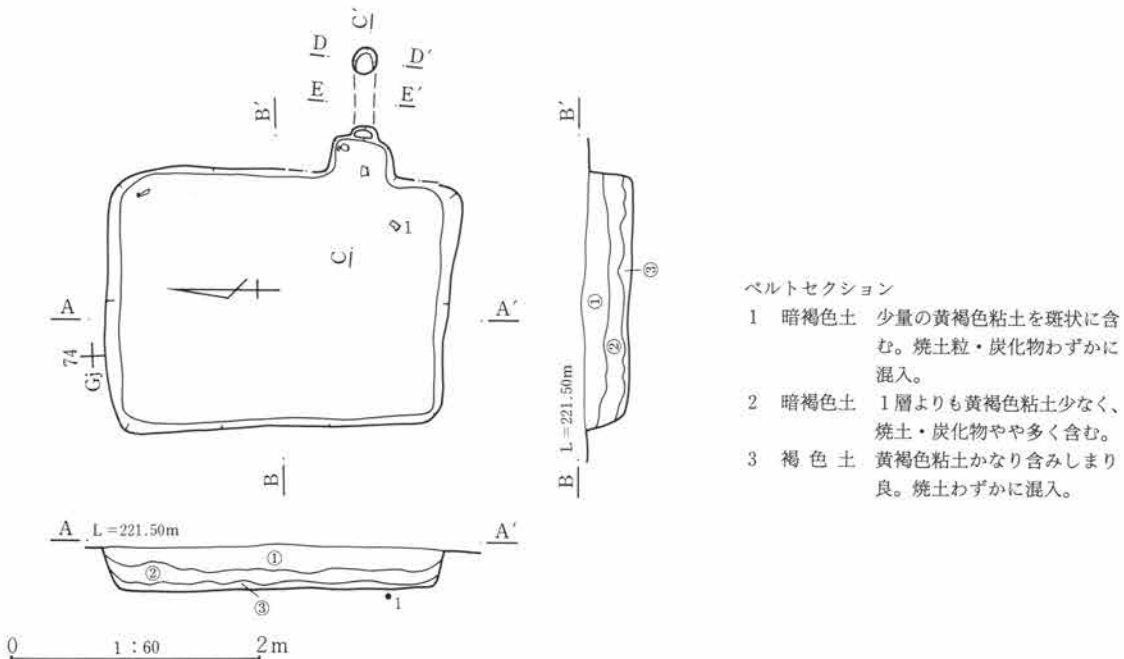
床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の東よりに所在。燃烧部は壁を掘り込むようにして作られ、住居域外に張り出す。袖は持たない。焚口幅45cm・燃烧部長35cm。燃烧部は方形に掘り込まれ、壁面もほぼ直立するように作られている。床面・壁面ともに良く焼けて、焼土面が発達している。煙道は天井部分もかろうじて残っており、煙道長は69cmである。

貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

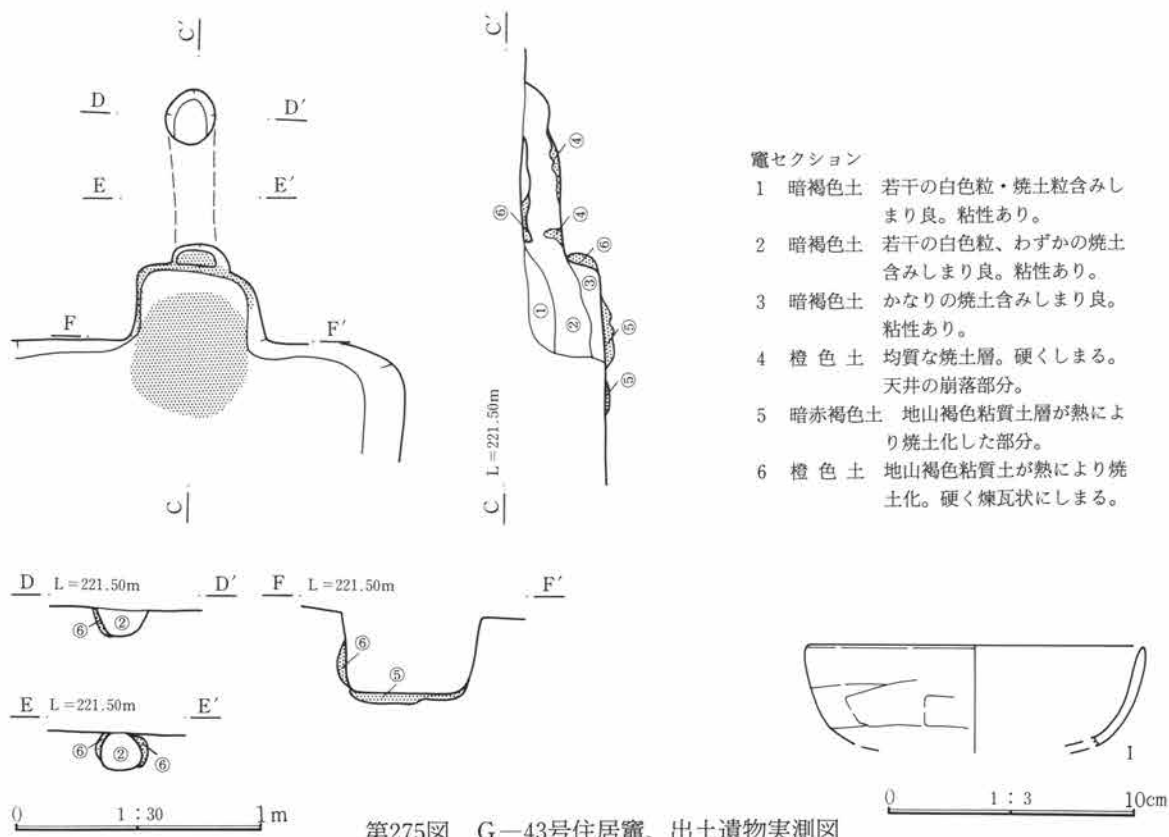
出土遺物 遺物量は非常に少なく、床面上に小破片が数片点在するのみ。形状が復元できた遺物は、わずかに土師器坏(1)が1点出土しただけである。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物と住居形状より、奈良時代の住居と推定される。



第274図 G-43号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



G-43号住居出土遺物観察表

番号	種 類 器 種	出土状況 残存状況	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備 考
1	土師器 坏	床密着 口～体部 1/2	口(13.2) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。器表面かなり摩滅。	

G-44号住居跡 (PL38・131)

位置 Gj-73・74グリッド 主軸方位 N-18°-W 残存壁高 0.15m 重複 G-43住に切られる。
規模と形状 形状はわずかに縦が長い長方形で、長辺が3.94m・短辺3.62mである。掘り込みが浅いため壁
の上部は削平されているが、ほぼ直進し線形の乱れはみられない。住居中央部に焼土と炭化物の分布がみら
れる。住居主軸はかなり西にふれる。

床面 地山褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

炉 住居の中央よりもやや東側に、幅51cm・長さ96cmにわたって焼土と炭化物が分布。炉石や明確な掘り込
みを持たず、焼土面もあまり発達していないが、炉である可能性がある。

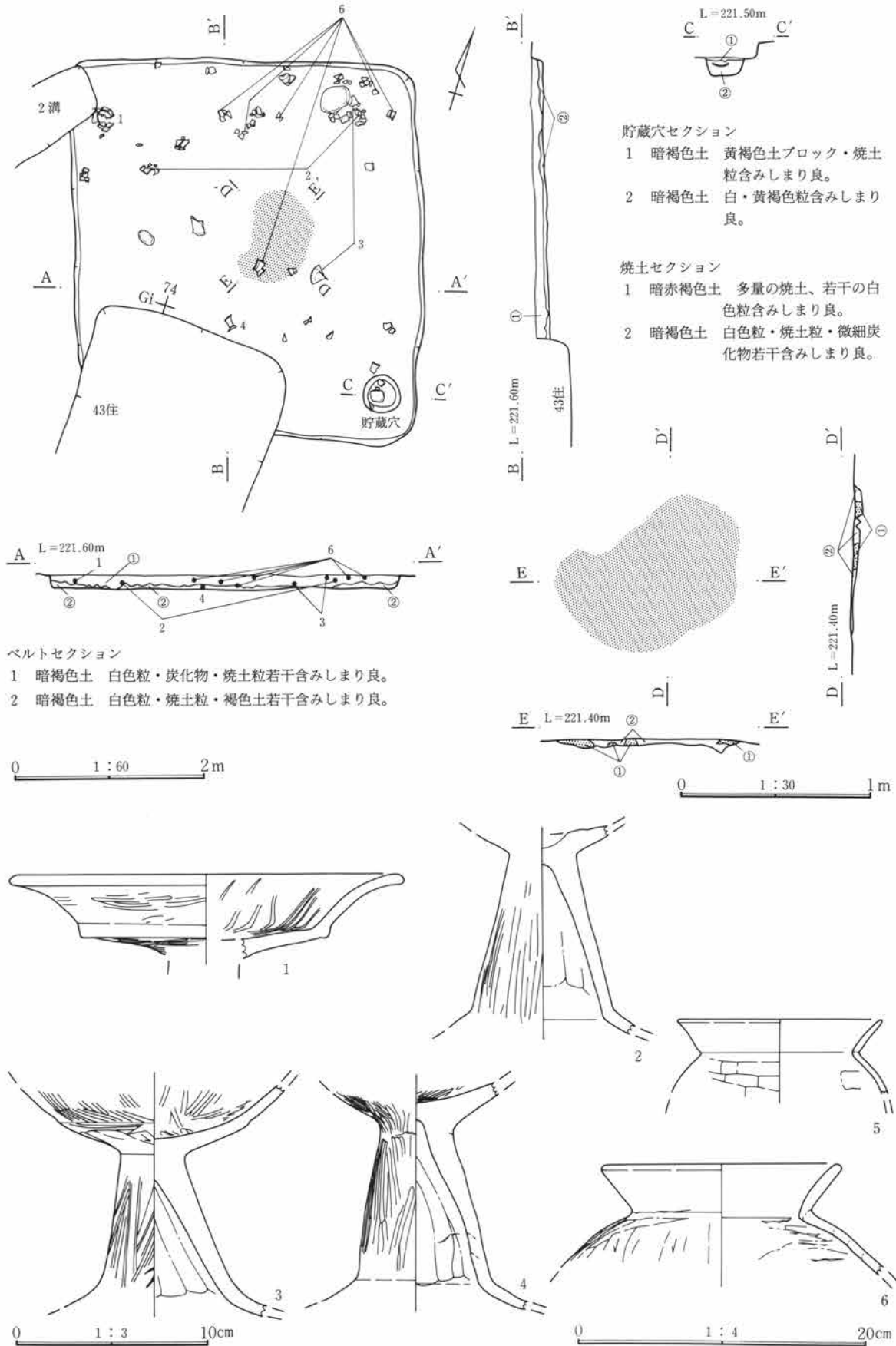
貯蔵穴 住居の南東隅に所在。形状は円形で、かなり小さいものである。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は特に多くないが、比較的大きな破片が床面近くから出土している。器種は、土師器高坏
(1～4)・小型甕(5)・甕(6)がある。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より古墳時代中期和泉式期のものと思われる。

第2節 F・G区



第276図 G-44号住居跡、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

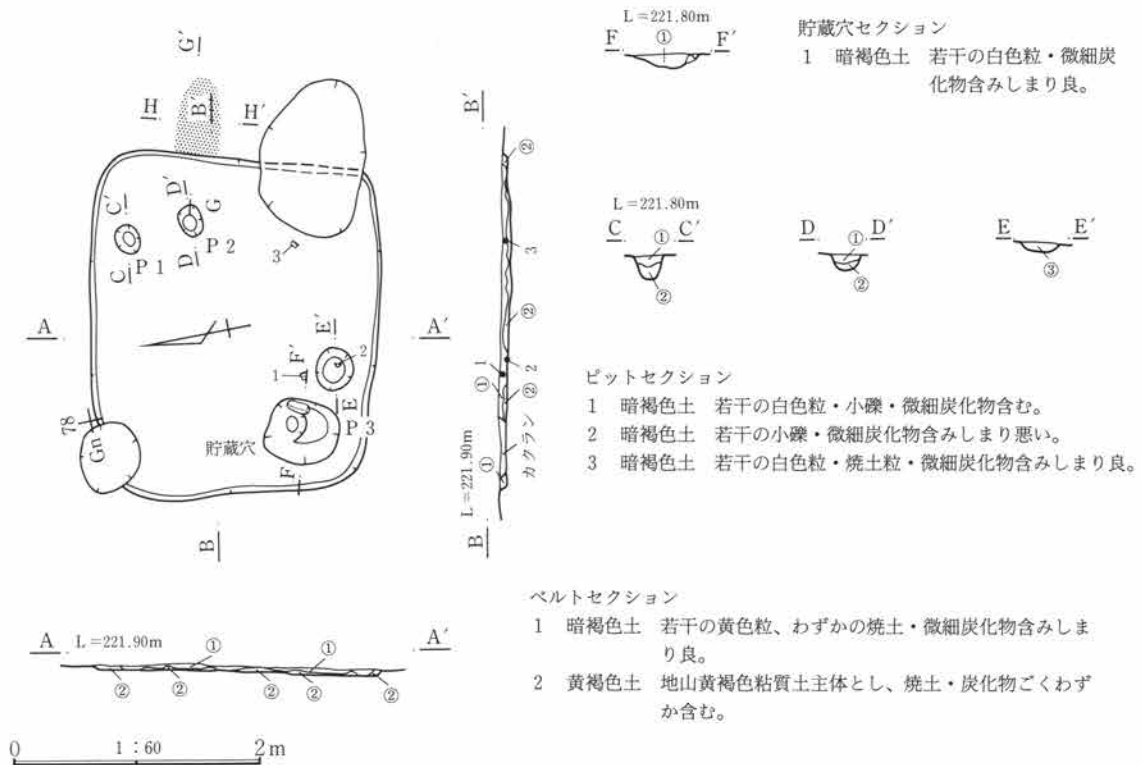
G-44号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 高坏	+4cm 坏部 $\frac{1}{5}$	口 22.2 底 — 高 —	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	坏部外面横ナデ後へら磨き。内面横ナデ後放射状へら磨き。	
2	土師器 高坏	床密着 坏底部～ 脚部	口 — 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	脚部外面へら削り後へら磨き、内面放射状のナデ脚裾端部内外面横ナデ。	
3	土師器 高坏	+4cm 坏部下半 ～脚部	口 — 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	坏部口縁外面横ナデ後へら磨き、底部外面へら削り・横ナデ後へら磨き。坏部内面横ナデ後へら磨き。脚部外面へら磨き、内面ナデ、裾端部横ナデ	
4	土師器 高坏	+4cm 坏底部～ 脚部	口 — 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③黄橙色	坏部内外面横ナデ後へら磨き。脚部外面ナデ後へら磨き、内面放射状のナデ。脚裾端部内外面横ナデ。	
5	土師器 小型甕	覆土 口縁 $\frac{1}{6}$	口(14.0) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	
6	土師器 甕	+3cm 口～胴部 上位 $\frac{1}{3}$	口(16.5) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ、接合痕あり。	

G-46号住居跡 (PL38・131)

位置 Gm-78グリッド 主軸方位 N-102°-E 残存壁高 0.06m 重複 G-29土坑を切る。

規模と形状 形状は縦長の長方形で、長辺2.32m・短辺2.73mと小規模な住居である。南壁に比べ、やや北壁が長い。上部をかなり削平され、壁はわずかしか残っていない。竈は東側に築かれていたようだが、こちらも削平されており、燃烧部底面の焼土が残っているのみである。住居主軸は真東よりもかなり南にふれる。



第277図 G-46号住居跡

床面 地山黄褐色粘質土を掘り込んで床面を形成。住居の北東隅に向かって若干傾斜している。

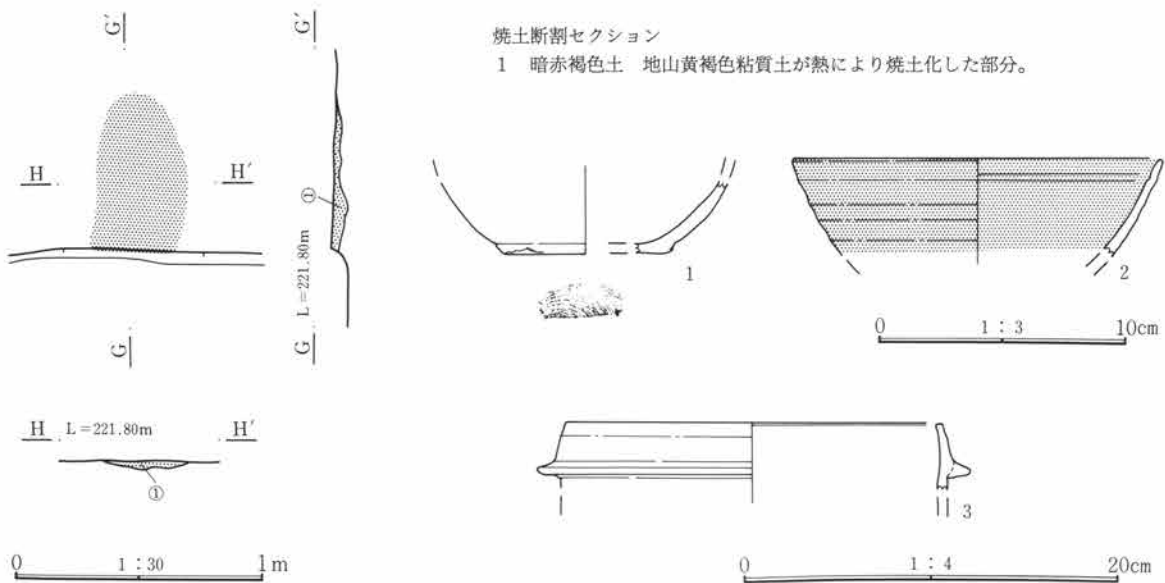
竈 住居東壁の中央よりもやや北側にあったものと思われるが、削平されており、わずかに燃焼部床面の焼土が残っていただけである。焼土の分布状況から、竈の形状は、燃焼部が住居の外側に張り出すタイプのものと推測される。

貯蔵穴 住居の南西隅に所在。上面の形状はほぼ円形で、掘り込みは浅い。 **周溝** なし。

柱穴 3基の小ピットを検出したが、住居内の位置関係から、柱穴とは考えられない。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、埋土出土のものに加えても、少数の破片が出土したのみである。主な遺物は、須恵器坏(1)・羽釜(3)、灰釉陶器碗(2)があるが、いずれも小破片である。 **掘り方** なし。

調査所見 平安時代。



第278図 G-46号住居焼土、出土遺物実測図

G-46号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	床密着 体部～底 部 $\frac{1}{4}$	口— 底(6.4) 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形。底部回転糸切り。	
2	灰釉陶器 碗	P 7内 口～体部 $\frac{1}{6}$	口(14.2) 底— 高—	①均質で緻密 ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。内面口縁下に浅い沈線一条めぐる。 内外面施釉。	
3	須恵器 羽釜	+3cm 口縁破片	口(20.0) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。鈔貼付。	

G-47号住居跡 (P L39・131)

位置 Gk-72・73グリッド 主軸方位 N-17°-E 残存壁高 0.22m 重複 G-48住を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺5.15m・短辺3.43m。西壁と南壁の一部を、近年の攪乱によって破壊されている。また、上部もかなり削平されており、壁は最大でも20cm強を残すのみ。竈は北側に築かれ、住居主軸はかなり東にふれる。

床面 住居のほぼ全域に、多量の小礫を含む黄褐色土を貼って床面としている。床面は硬くしまり、検出は比較的容易であった。

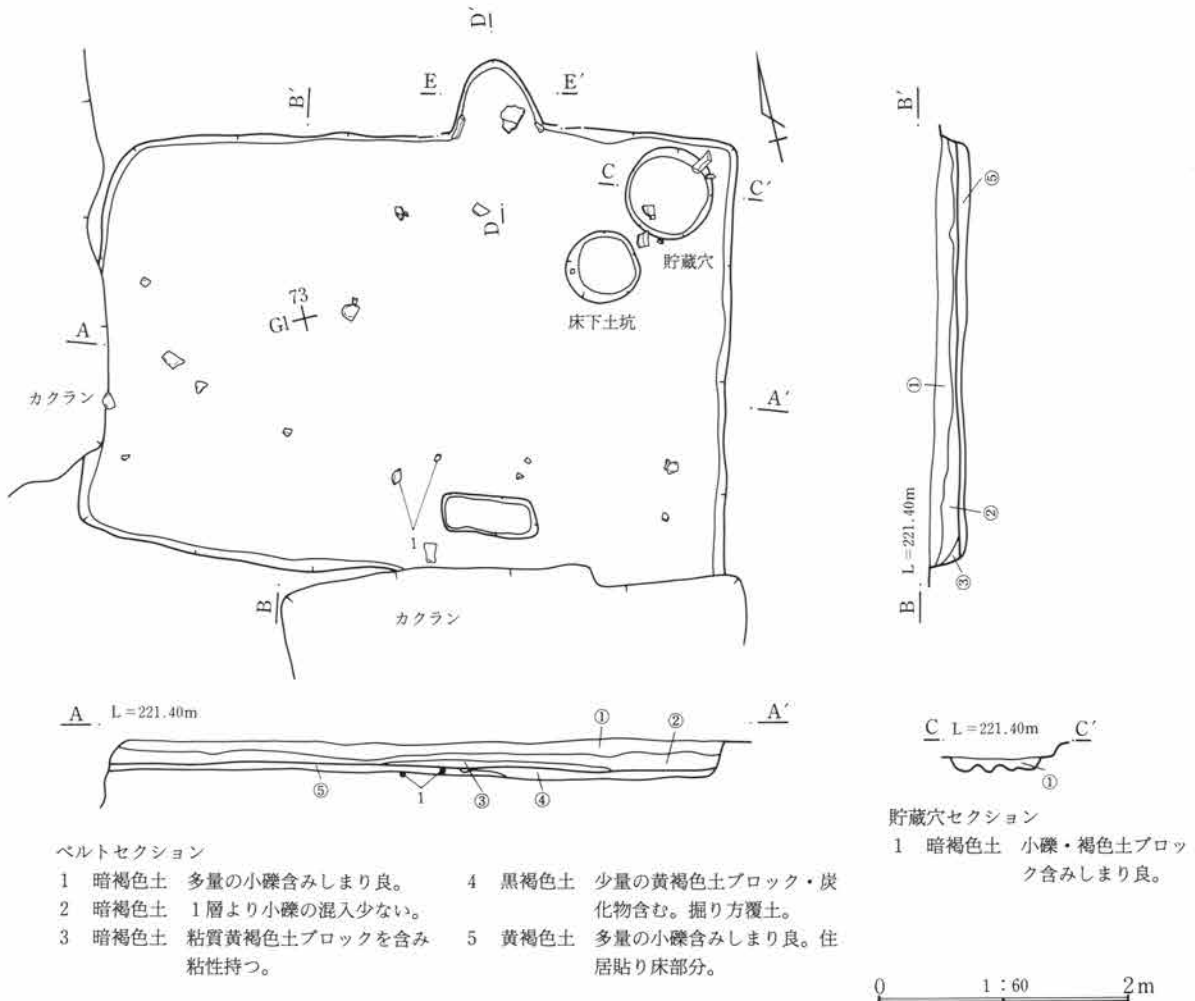
竈 住居北壁の中央よりも東よりに所在。袖を持たず、地山を掘り込んで作られた燃烧部が、住居域外に張り出す形状をとる。焚口幅69cm・燃烧部長58cm。燃烧部入り口の両脇には、板状の砂岩が据えられている。燃烧部床には、焼土面がみられる。煙道は削平され残っていない。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は円形で、底面はかなり起伏を持つ。周溝 なし。柱穴 なし。

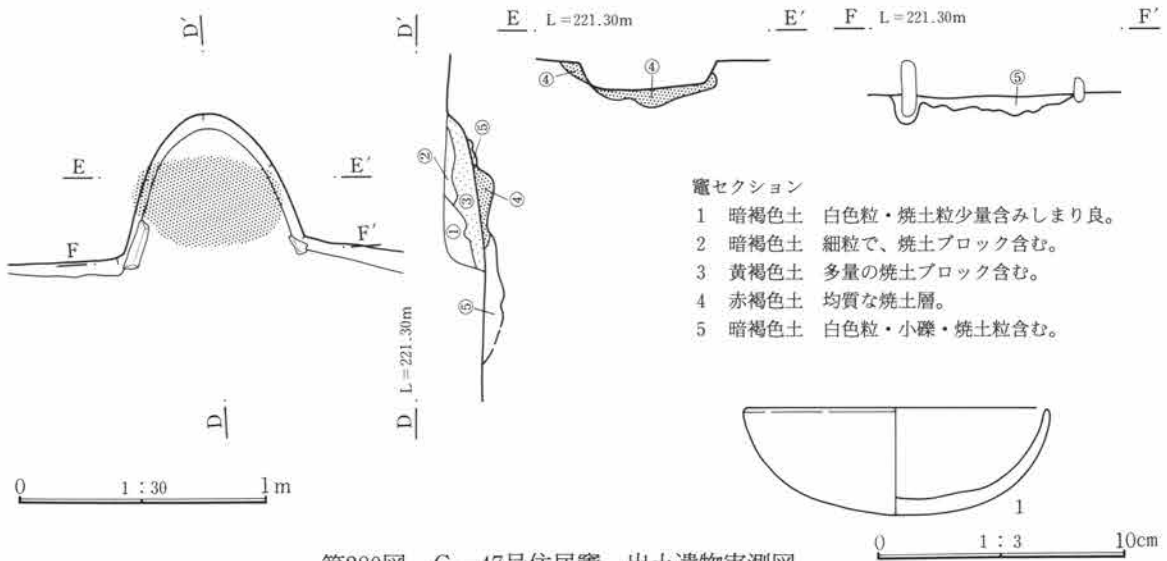
出土遺物 遺物は非常に少なく、住居内に散在。器形を復元できたのは、わずかに土師器坏(1)だけである。

掘り方 住居全域に2~10cm程の深さの掘り方がみられる。掘り方の底面はほぼ平坦である。また、住居東半で2基の床下土坑を検出した。

調査所見 住居および竈の形状から、奈良時代の住居と推定される。



第279図 G-47号住居跡



第280図 G-47号住居竈、出土遺物実測図

G-47号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 3/4	口 12.0 底 — 高 4.1	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。	内外面ともに器表面 の摩滅激しい

G-48号住居跡 (PL39・40・131・132)

位置 Gk-71・72グリッド 主軸方位 N-21°-E 残存壁高 0.30m 重複 G-47住を切る。

規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、炉が北側の柱穴間にあるため、南北方向を長辺とする。長辺は4.69m、短辺は、西壁が重複する住居と近年の攪乱によって破壊されているため確実な数値は不明だが、現状で4.55mである。周壁は一部崩落がみられるが、線形の乱れは小さい。住居主軸はかなり東にふれる。

床面 地山黄褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

炉 住居北側の柱穴間に所在。浅い掘り込みと、棒状の円礫の炉石を持つ。掘り込みは、幅73cm・長さ100cm・深さ6cm。炉の周囲には、広範囲にわたって地山黄褐色土が熱によって赤化した焼土が分布している。

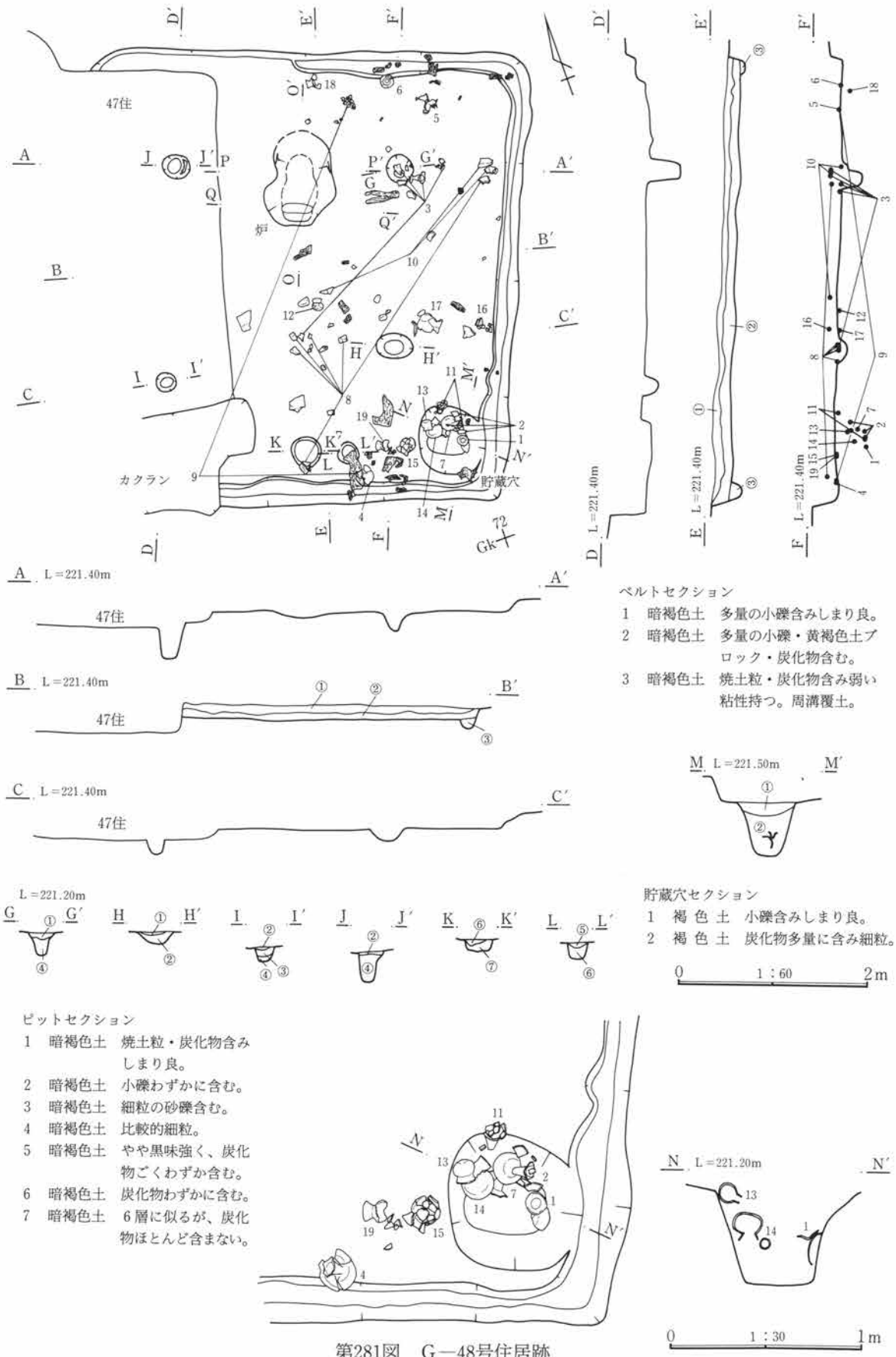
貯蔵穴 住居南東隅に所在。形状は円形で、底面に向かってすぼまるような形状を呈する。また、内部よりほぼ完形の埴2点(13・14)と、高坏が4個体(1・2・7・11)出土している。

周溝 現存している部分では、北壁の西半をのぞいて検出。比較的幅広で、掘り込みは浅い。

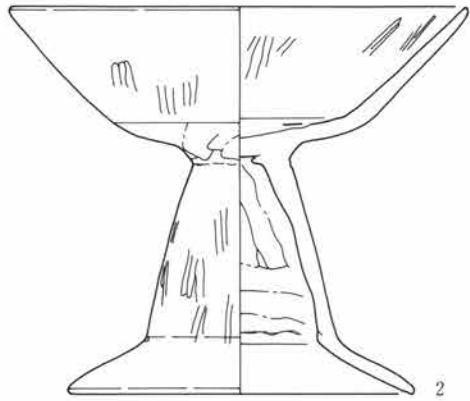
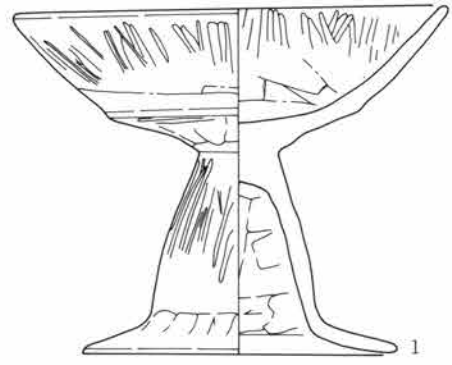
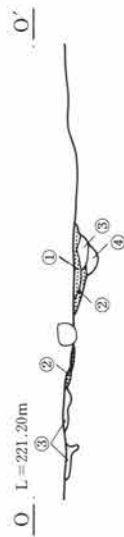
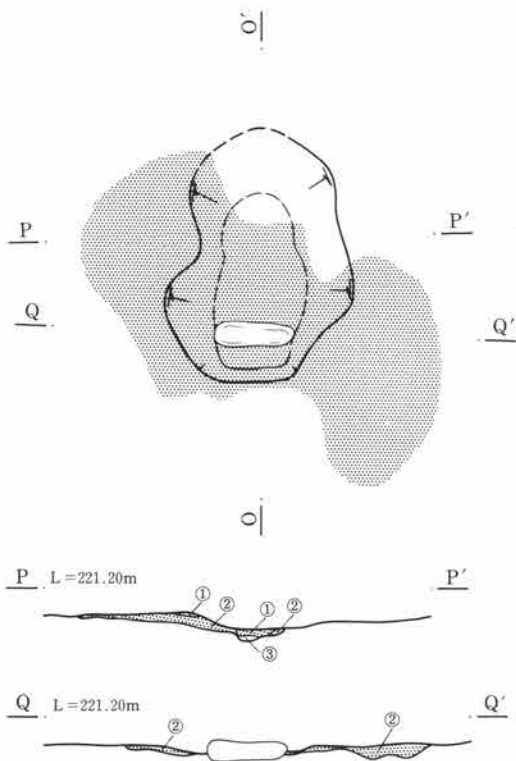
柱穴 6基の小ピット検出。うちピット1~4が柱穴である。4基の柱穴は、ほぼ住居の対角線上に位置しているが、ピット2はやや北側にずれている。また、南壁際のほぼ中央と思われる位置には、2基の小ピットがあり(ピット5・6)、入り口施設に伴うものと推定される。

出土遺物 遺物量は比較的多く、完形近くまで復元可能なものが多い。特に貯蔵穴とその周辺にまともなものが多くある。先述の貯蔵穴内出土遺物の他、土師器高坏(3~6・8~10)・埴(12・15)・甕(16・17)・台付甕(18・19)があり、特に高坏の数量が卓越。この他に、覆土中より滑石製の模造品(20)が出土。掘り方 なし。

調査所見 古墳時代中期(和泉式期)の住居。床面近くよりかなりの炭化材が出土していることから、焼失住居と考えられる。



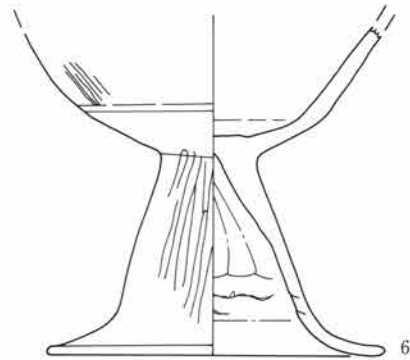
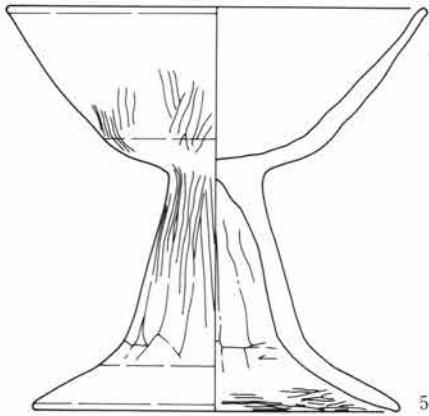
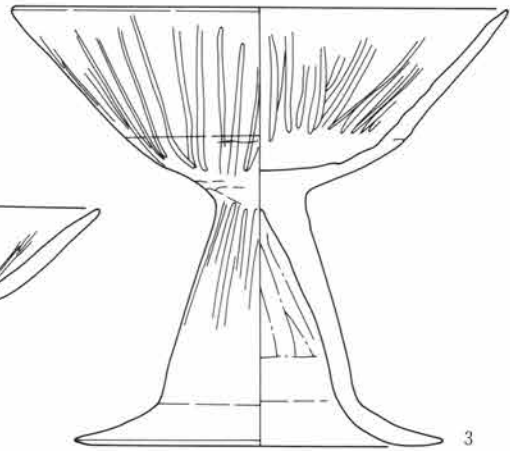
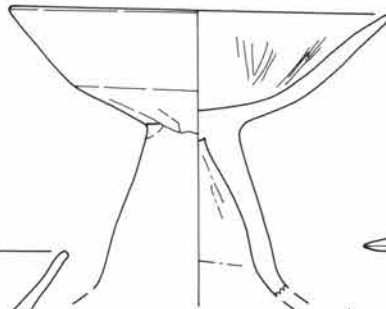
第281図 G-48号住居跡



炉セクション

- 1 橙色土 均質な焼土層。非常に硬くしまる。
- 2 暗赤褐色土 地山黄褐色土が熱により焼土化した部分。し
まり良。
- 3 暗褐色土 若干の黄色粒・小礫・炭化物含みしまり良。
- 4 黄褐色土 黄色粒・焼土粒・炭化物若干含む。

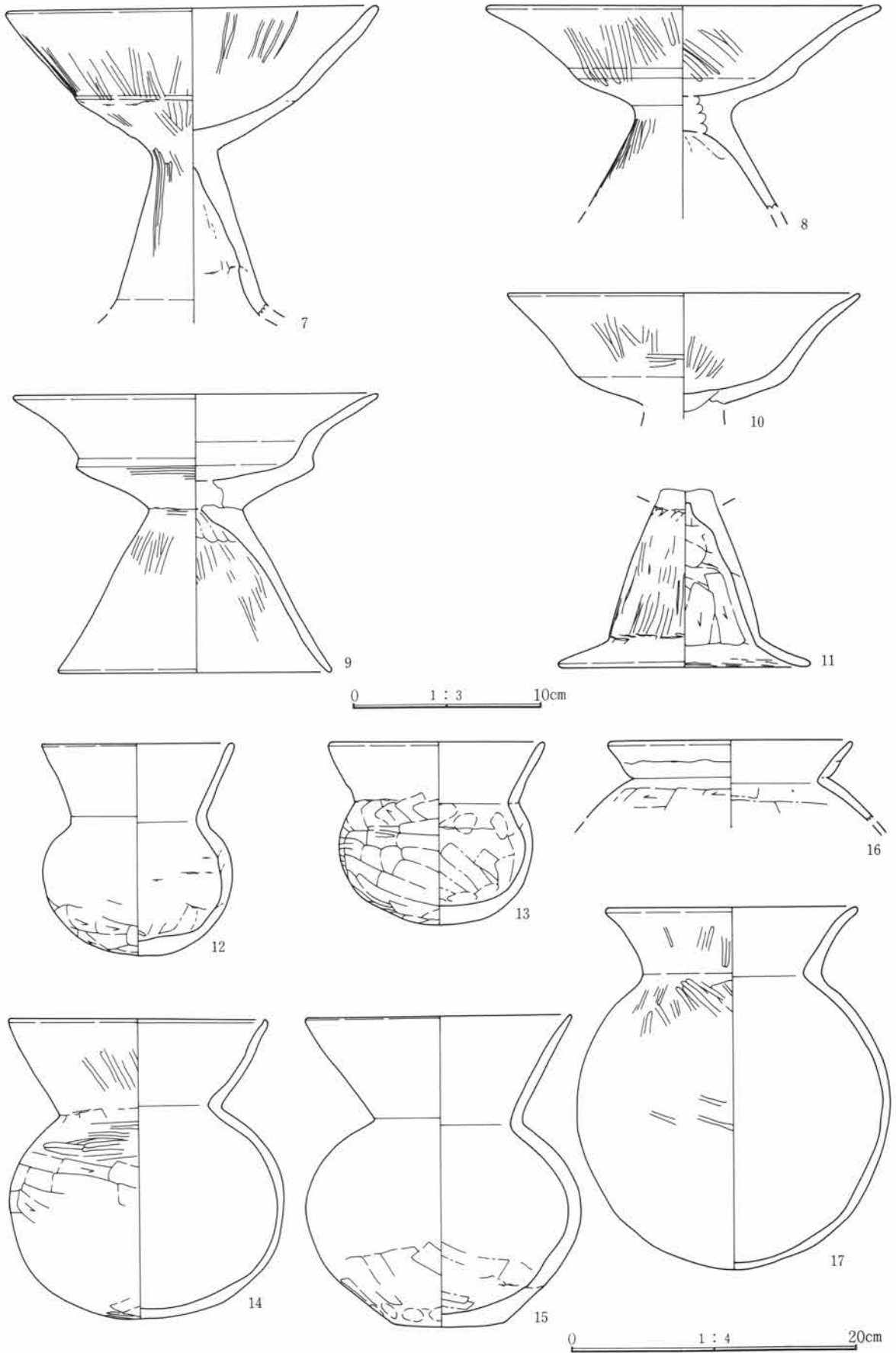
0 1:30 1m



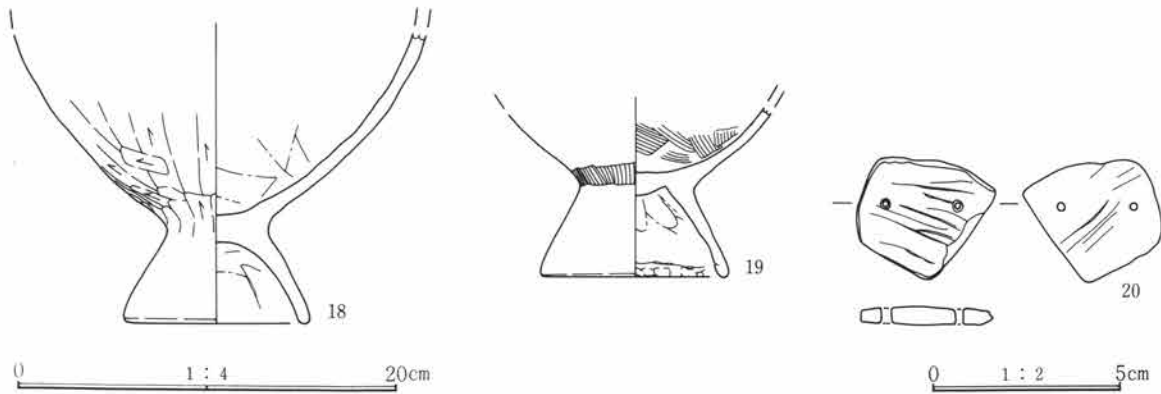
0 1:3 10cm

第282図 G-48号住居炉、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第283図 G-48号住居出土遺物実測図②



第284図 G-48号住居出土遺物実測図③

G-48号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 高坏	貯蔵穴内 完形	口 17.1 底 12.3 高 13.5	①砂粒含む ②良好 ③橙色	坏部口縁外面・内面横ナデ後ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き、内面ヘラ削り。裾部外面ヘラ削り後横ナデ、内面横ナデ	
2	土師器 高坏	貯蔵穴内 口～脚部	口 18.0 底 13.4 高 15.2	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	坏部口縁外面横ナデ後ヘラ磨き、体部外面ヘラナデ。坏部内面横ナデ後ヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ。裾部内外面横ナデ。	
3	土師器 高坏	床密着 裾一部欠	口 19.7 底(14.6) 高 17.2	①細砂含む ②良好 ③褐灰色	坏部内外面横ナデ後放射状のヘラ磨き。脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面上半放射状のナデ、下位横ナデ。脚部裾内外面横ナデ。	脚部外面に漆状の付着物残る
4	土師器 高坏	床密着 裾部欠	口 15.1 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③橙色	坏部口縁外面横ナデ、体部ヘラ削り。坏部内面横ナデ後ヘラ磨き。脚部外面ヘラ削り後ナデ、内面上半放射状のナデ、下位横ナデ。	
5	土師器 高坏	床密着 坏～脚部	口(16.6) 底 14.5 高 15.9	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	坏部外面横ナデ後ヘラ磨き、内面横ナデ。脚部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ナデ、下位ヘラ削り脚部裾外面横ナデ、内面横ナデ後ヘラ磨き。	
6	土師器 高坏	床密着 坏下半 ～底部	口 — 底 13.4 高 —	①砂粒含む ②良好 ③赤橙色	坏部外面横ナデ後ヘラ磨き、内面横ナデ。脚部外面ヘラ削り、内面ナデ、接合痕あり。脚部裾内外面横ナデ。	
7	土師器 高坏	貯蔵穴内 裾部欠	口 19.4 底 — 高 —	①砂粒・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	坏部内外面横ナデ後放射状のヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き、内面上半放射状のナデ、下位横ナデ。	
8	土師器 高坏	床密着 坏～脚部 上半	口(20.6) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁端部は外反。坏部内外面横ナデ後ヘラ磨き。脚部外面ヘラ磨き、内面ナデ。	
9	土師器 高坏	床密着 坏部～脚 部	口(18.8) 底(14.0) 高 14.3	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色	坏部外面横ナデ後一部ヘラ磨き、内面横ナデ。脚部外面ナデ後ヘラ磨き、内面上位放射状指ナデ、以下ナデ後ヘラ磨き。	
10	土師器 高坏	+3cm 坏部1/2	口 18.1 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り後ナデ。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
11	土師器 高坏	貯蔵穴内 脚部	口 — 底 12.6 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ヘラ削り。裾部外面ヘラ削り後横ナデ、内面横ナデ後ヘラ磨き。	坏部との接合部で分離している
12	土師器 埴	床密着 ほぼ完形	口 10.0 底 — 高 10.9	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ、接合痕あり。	
13	土師器 埴	貯蔵穴内 ほぼ完形	口 11.0 底 — 高 9.4	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後一部ヘラ磨き。胴部内面ナデ、底部と上位に指頭圧痕。	外面に漆状の付着物残る
14	土師器 埴	貯蔵穴内 完形	口 13.5 底 — 高 15.4	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き、内面横ナデ。胴部外面ヘラ削り後ヘラ磨き、内面ナデ。全体に丁寧な作り。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴	残存状態 備考	
				全長	幅			厚さ
15	土師器 埴	床密着 ほぼ完形	口 13.7 底 5.7 高 16.0	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、下位に指頭圧痕。胴部内面横ナデ、下位に接合痕。		
16	土師器 甕	+5cm 口～胴部 上位	口 16.7 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②やや軟質 ③橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。		
17	土師器 甕	+3cm 口～胴部 1/3	口(19.4) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色		口縁部外面横ナデ後へラ磨き、内面横ナデ。胴部外面へラ削り後へラ磨き、内面ナデ。		
18	土師器 台付甕	床密着 胴部下位 ～上部	口 — 底 9.8 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③浅黄橙色		胴部外面へラ削り、内面へラナデ。台部外面へラ削り後ナデ、内面へラナデ。		
19	土師器 台付甕	床密着 胴部下位 ～上部	口 — 底 10.0 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③明赤褐色		胴部内外面ハケ目後ナデ。台部外面ハケ目後ナデ外面ハケ目はナデに消され、わずかに胴・台部境に残る。台部内面ナデ、端部わずかに折り返し。		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
20	滑石製模造品	覆土 完形	3.7	3.2	0.4	8.6	滑石	両面・側面を研磨。直径2.5mm程の小孔2個あり。

G-49号住居跡 (P L 40・133)

位置 Gh・Gi-70・71グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.40m 重複 G-50住に切られる。

規模と形状 形状は横長の長方形。南壁の東半がやや張り出し、形状が歪んでいる。長辺3.38m・短辺2.73m。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

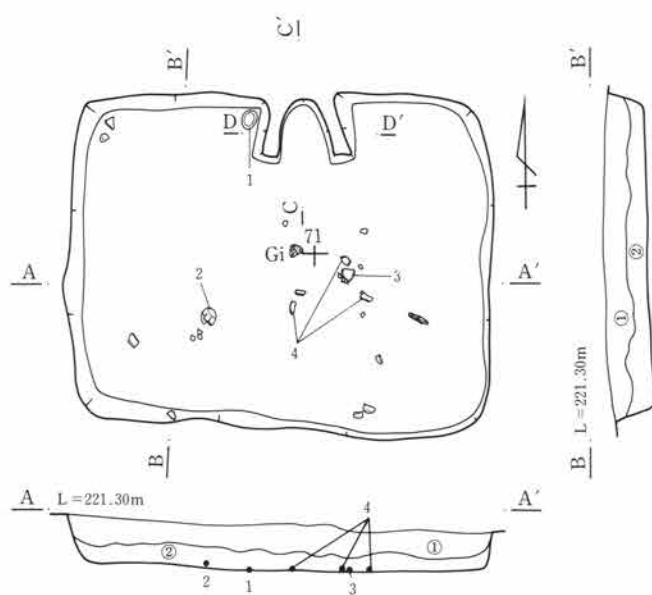
竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅41cm・燃烧部長51cm。煙道は削平されている。床・壁面ともに焼土の発達は見られない。

貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は少ないが、大半は床面近くより出土している。器種は土師器坏(1~3)・小型甕(4)がある。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より古墳時代後期の住居と推定される。

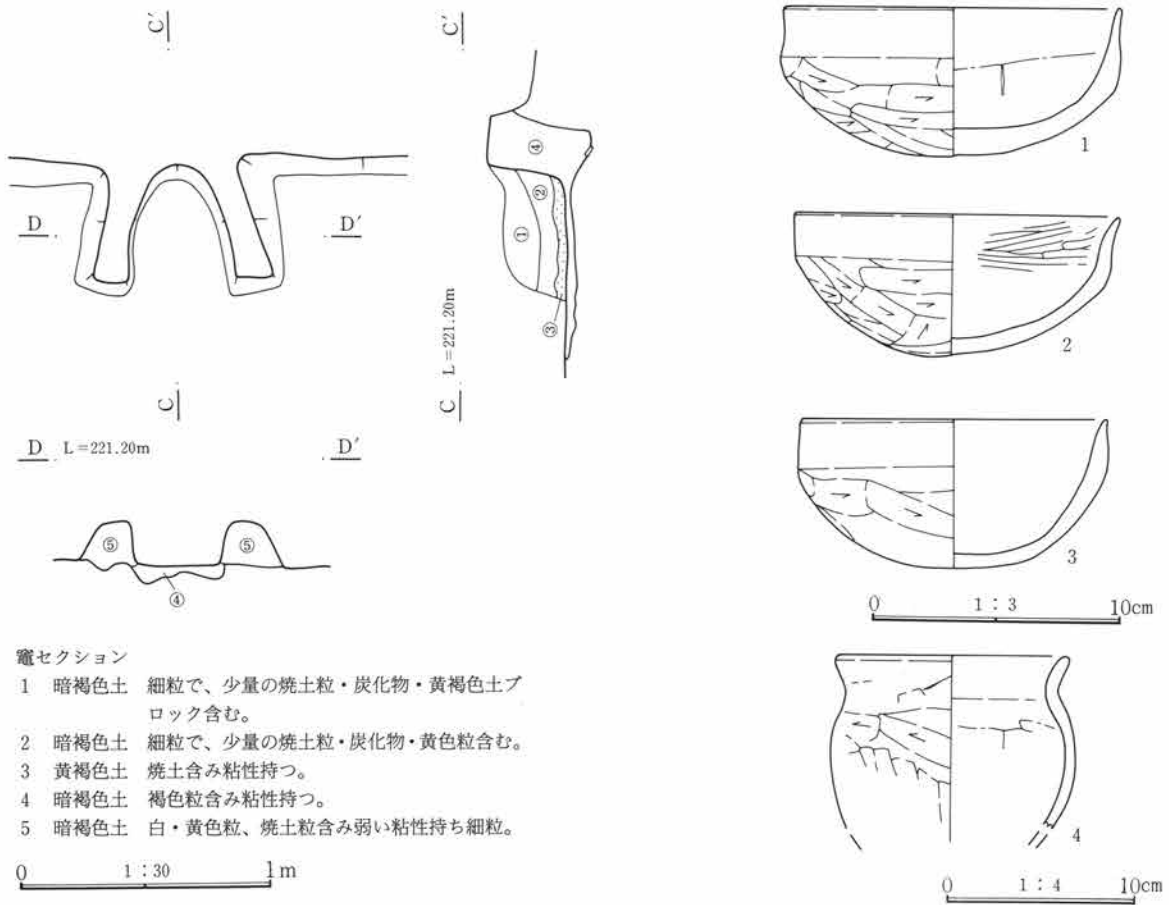


ベルトセクション

- 1 暗褐色土 若干の白色粒・焼土粒・微細炭化物含みしまり良。
- 2 暗褐色土 少量の焼土粒・炭化物、わずかの白色粒含みしまり良。

0 1:60 2m

第285図 G-49号住居跡



第286図 G-49号住居竈、出土遺物実測図

G-49号住居出土遺物観察表

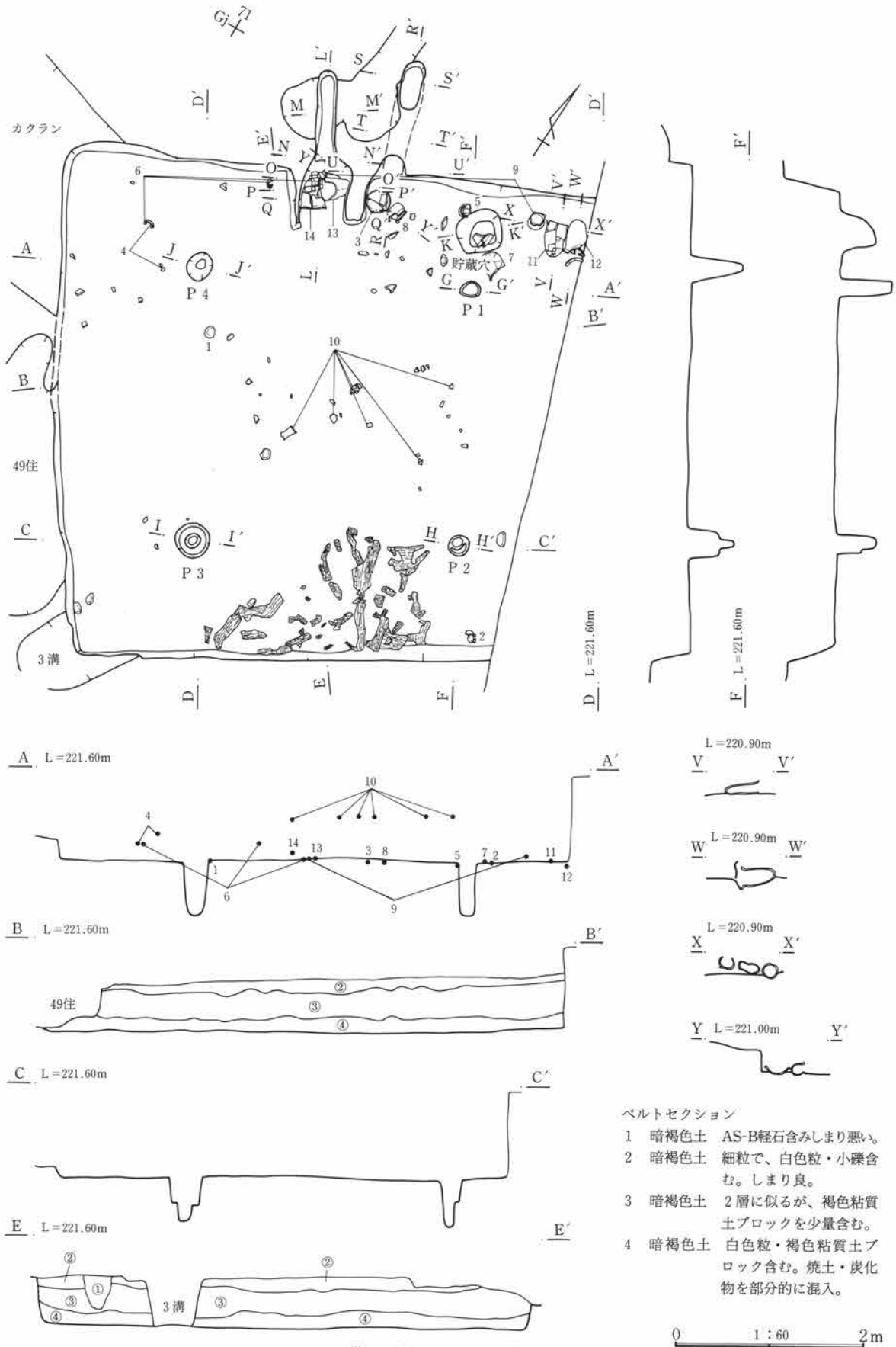
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 13.2 底 — 高 5.8	①多量の砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラ ナデ。	
2	土師器 坏	+4cm ほぼ完形	口 12.7 底 — 高 5.5	①多量の砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ後ヘラ磨き。	
3	土師器 坏	床密着 1/5	口 12.0 底 — 高 5.9	①多量の砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
4	土師器 小型甕	+5cm 口～胴部 上半	口 12.4 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ。	

G-50号住居跡 (PL40・41・133~135)

位置 Gi-70グリッド 主軸方位 N-28°-W 残存壁高 0.57m 重複 G-49住を切る。

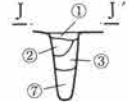
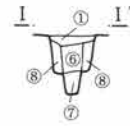
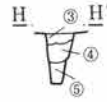
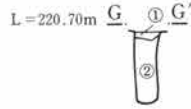
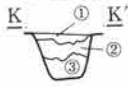
規模と形状 住居の一部が調査区外にあるため、正確な形状は不明であるが、正方形に近い形になるものと思われる。長辺は現状で5.55m、短辺5.26mである。西壁の一部を近年の攪乱によって破壊されているが、他の周壁はほぼ直進し、崩落などによる線形の乱れはほとんどない。竈は北側に築かれ、住居主軸はかなり西にふれる。

第3章 検出された遺構と遺物



第287図 G-50号住居跡

L=220.70m



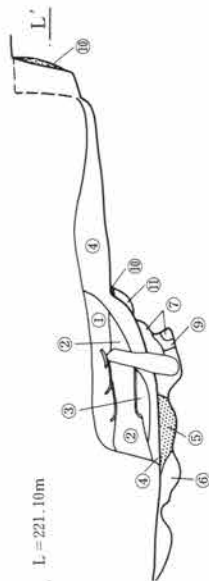
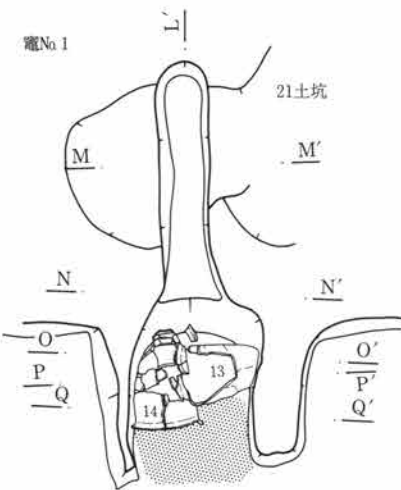
貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 若干の黄色粒・微細炭化物含みしまり良。
- 2 暗褐色土 若干の黄色粒・焼土粒・小礫含みしまり良。
- 3 暗褐色土 若干の黄色粒・焼土粒、わずかの小礫含む。

ピットセクション

- 1 暗褐色土 黄色粒・焼土粒・小礫若干含みしまり良。
- 2 暗褐色土 黄色粒・焼土粒・微細炭化物若干含み弱い粘性持つ。
- 3 暗褐色土 少量の小礫、若干の黄色粒・焼土粒含みしまり良。
- 4 褐色土 かなりの小礫、若干の焼土粒含む。
- 5 褐色土 かなりの小礫、若干の焼土粒・炭化物含み弱い粘性持つ。
- 6 暗褐色土 黄色粒・焼土粒・褐色土若干含む。粘性あり。
- 7 褐色土 焼土粒・炭化物・暗褐色土若干含み、やや強い粘性持つ。
- 8 褐色土 暗褐色土・焼土粒若干含む。粘性あり。

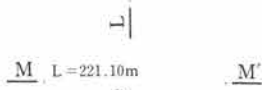
0 1:60 2m



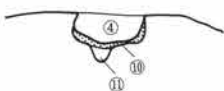
L=221.10m

竈No 1 セクション

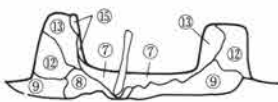
- 1 暗褐色土 若干の白色粒・焼土粒含みしまり良。
- 2 暗褐色土 1層より白色粒・焼土粒の混入少なく弱い粘性持つ。
- 3 褐色土 細粒・粘質で、多量の焼土含む。
- 4 暗褐色土 若干の白色粒、わずかの焼土・炭化物含む。弱い粘性あり。
- 5 赤褐色土 均質な焼土層。しまりやや良。ごく弱い粘性あり。
- 6 暗褐色土 白色粒・焼土粒わずかに含む。ごく弱い粘性あり。
- 7 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物含む。弱い粘性あり。
- 8 暗褐色土 若干の黄色粒・焼土粒含む。粘性あり。
- 9 暗褐色土 若干の白・黄色粒、小礫、焼土粒、炭化物含みしまり良。
- 10 赤褐色土 均質で良くしまった焼土層。白色粒若干含む。
- 11 暗褐色土 若干の白色粒・焼土粒含みしまり良。弱い粘性あり。
- 12 暗褐色土 若干の焼土含みしまりやや良。
- 13 暗褐色土 少量の焼土、若干の微細炭化物含む。
- 14 暗褐色土 若干の焼土・微細炭化物含み弱い粘性持つ。
- 15 暗褐色土 少量の焼土、若干の白色粒含みしまり良。



N, L=221.10m N'



O, L=221.10m O'



P, L=221.10m P'



Q, L=221.10m Q'



0 1:30 1m

第288図 G-50号住居竈No. 1

第3章 検出された遺構と遺物

床面 地山黄褐色砂質土層を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

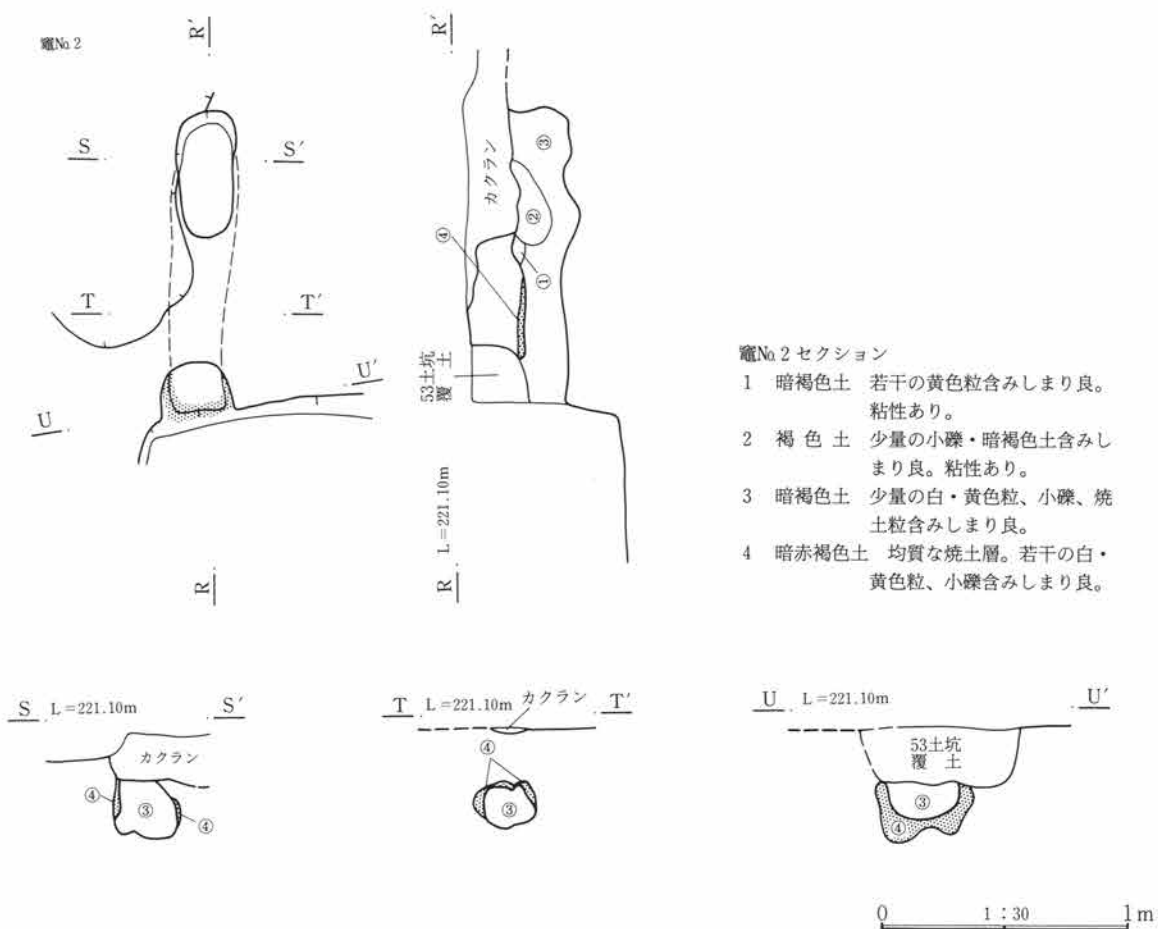
竈 住居北壁のほぼ中央に所在（竈No.1）。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅47cm・燃烧部長66cm。燃烧部内からは、竈にかけられていたと思われる土師器甕が2個体並んで出土（13・14）。また、中央よりも奥壁よりに、薄い角礫状の砂岩が支脚として埋め込まれていた。煙道は、上部を重複する土坑によって破壊され、底部が残るのみであった。煙道長93cm。またこの竈の東側には、古い竈の煙道部が残存していた（竈No.2）。煙道長118cm。立ち上がりの上部を近年の攪乱によって破壊されているが、天井も一部残存しており、くりぬき式の煙道であることがわかる。竈No.2の廃絶・撤去後に竈No.1が構築されている。

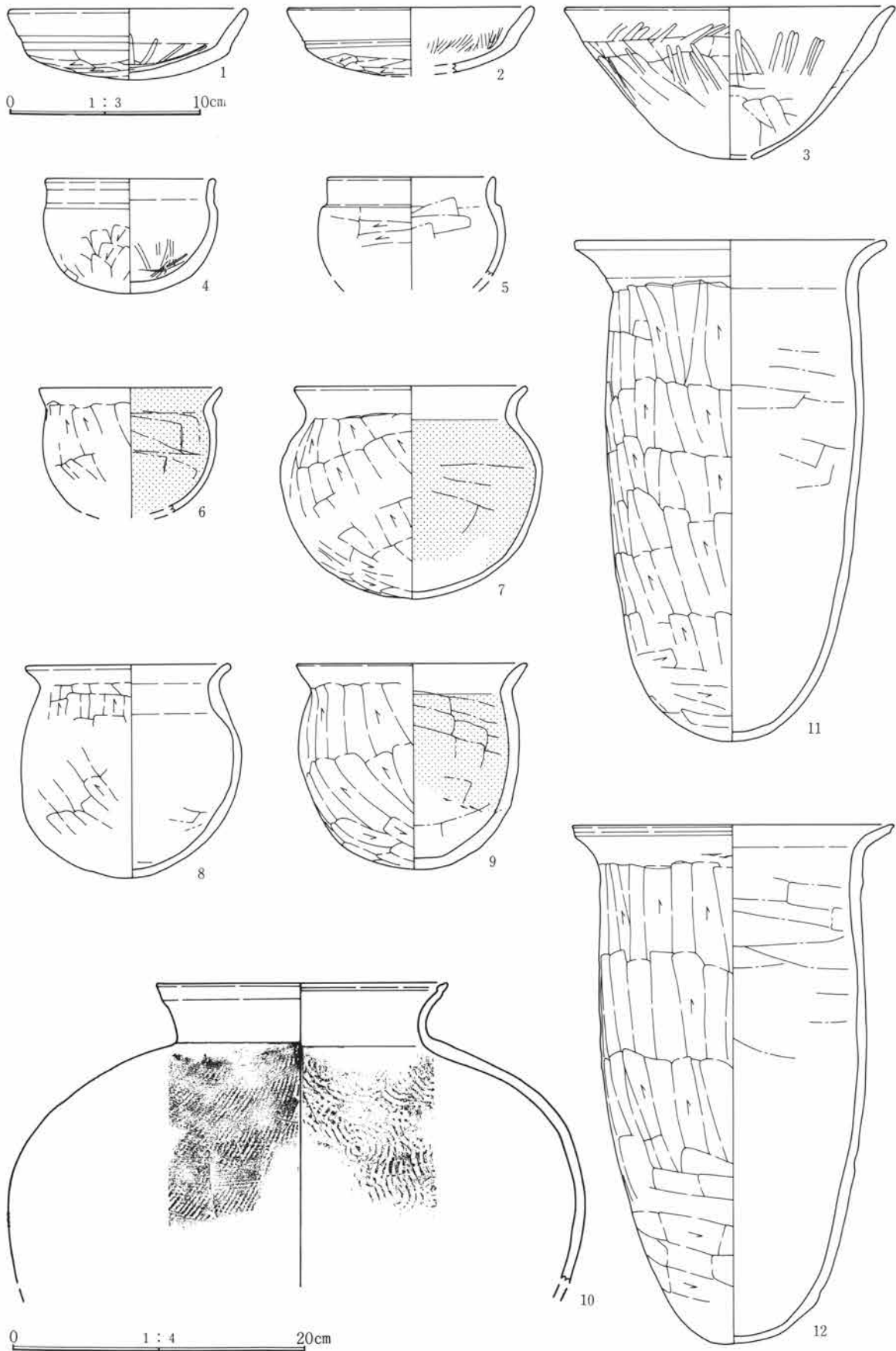
貯蔵穴 住居北壁際の東よりに所在。形状は、かなり崩れてはいるが、隅丸の正方形であったものと思われる。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。いずれもほぼ対角線上に位置している。上幅はあまり大きくないが、深くしっかりした掘り込みを持つ。

出土遺物 遺物量はさほど多くないが、竈・貯蔵穴周辺を中心に、完形近くまで復元可能な遺物が数個体出土している。主な器種は、先述の甕の他に、土師器坏（1・2）・甕（3）・短頸壺（4・5）・小型甕（6～9）・甕（11・12）がある。これらの大半は床面近くから出土している。また、埋土上位から、須恵器甕が1個体出土している（10）。掘り方 なし。

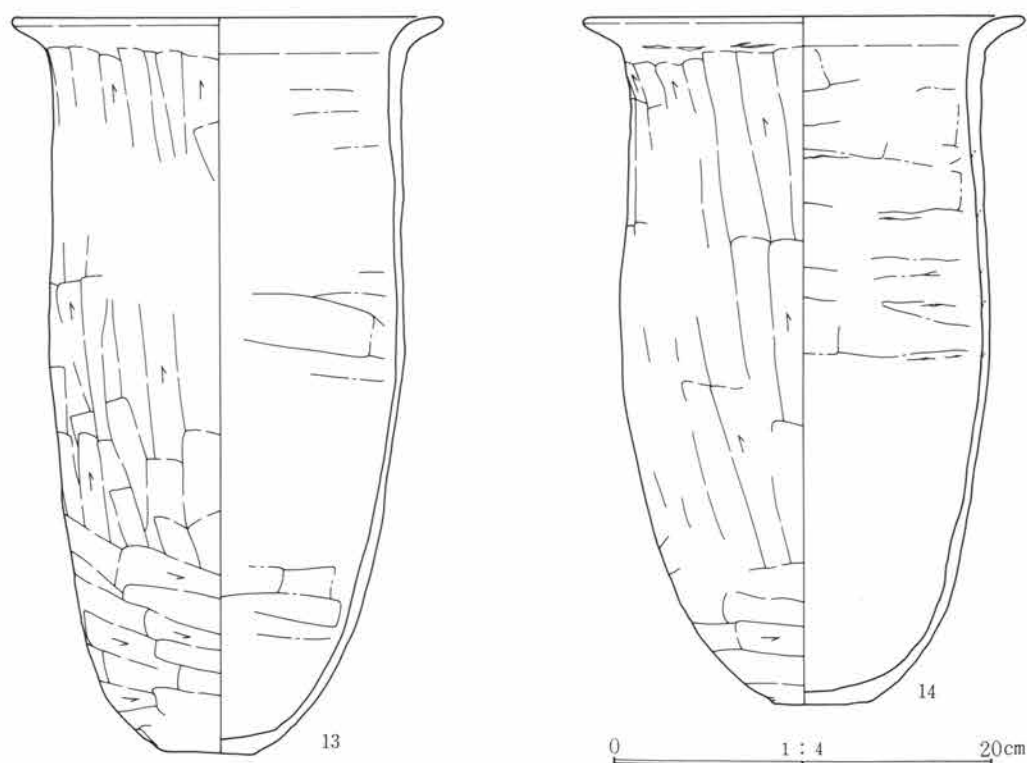
調査所見 住居の南壁近くの床面上から炭化材がかなり出土しており、住居埋土の下部にも焼土や炭化物がかなり含まれていることから、焼失住居と考えられる。古墳時代後期。





第290图 G—50号住居出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第291図 G-50号住居出土遺物実測図②

G-50号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 完形	口 12.3 底 — 高 3.7	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ後放射状のへら磨き。	底部内面に漆状の付着物残る
2	土師器 坏	床密着 3/4	口 12.6 底 — 高 —	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ後へら磨き。	口縁部外面に漆状付着物ごくわずか残る。
3	土師器 甗	床密着 ほぼ完形	口 22.7 底 2.5 高 10.3	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ後へら磨き、内面横ナデ。胴部外面へら削り後へら磨き、内面横ナデ後へら磨き	
4	土師器 短頸壺	+17cm 3/5	口(11.5) 底 — 高 7.8	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面へらナデ後へら磨き。	
5	土師器 短頸壺	床密着 口～胴部 上半3/5	口(11.6) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	
6	土師器 小型甗	+9cm 口～胴部 3/4	口 12.4 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面へらナデ。	内面に煤付着
7	土師器 小型甗	床密着 3/5	口 16.1 底 — 高 14.5	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	胴部内面中～上位に煤付着
8	土師器 小型甗	床密着 3/4	口 14.0 底 — 高 14.5	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	
9	土師器 小型甗	+5cm 3/5	口(15.5) 底 — 高 14.0	①砂礫含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	胴部内面中～上位に煤付着
10	須恵器 甗	+44cm 口～胴部 上半1/2	口(19.8) 底 — 高 —	①細砂(ごくまれに小礫)・黒色粒子含む ②堅緻③灰オリーブ	ロクロ整形。口縁部内面側に折り。胴部外面平行叩き目、内面青海波文。	胴部外面に自然釉

番号	種器類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
11	土師器 甕	床密着 胴部一部 欠	口 21.2 底 — 高 34.0	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	
12	土師器 甕	床密着 胴部上半 一部欠	口 22.0 底 — 高 35.2	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	
13	土師器 甕	カマド内 ほぼ完形	口 23.0 底 5.0 高 38.7	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	
14	土師器 甕	カマド内 1/5	口 23.3 底 5.3 高 36.1	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ、接合痕あり。	

G-51号住居跡 (P L41・135)

位置 Gf・Gg-78・79グリッド 主軸方位 N-107°-E 残存壁高 0.63m

重複 G-52・53・55住、G-31土坑を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺が4.43m、短辺3.66mである。周壁はかなり外反し、壁上部の崩落なども見られる。竈は住居の南東コーナーに築かれているが、東壁に古い竈の跡が残っており、住居の主軸などはこの古い竈を基準とし計測した。住居主軸は若干南にふれる。

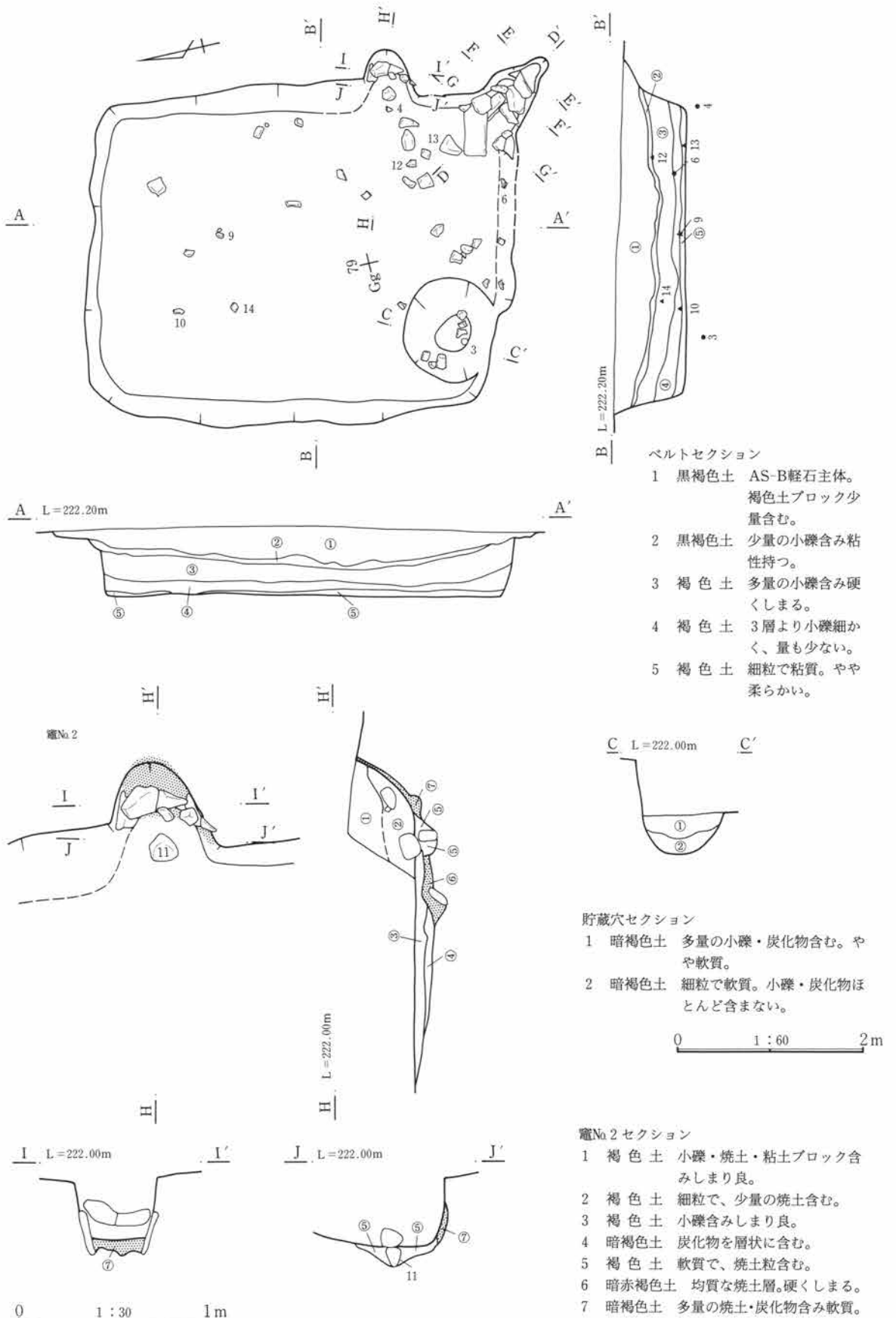
床面 地山黄褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居南東隅に所在(竈No.1)。燃烧部は住居コーナーを掘り込んで作られ、住居域外に大きく斜めに張り出す。焚口幅47cm・燃烧部長62cm。燃烧部入口の両壁に、板状の砂岩が袖石として据えられている。燃烧部内からは、この他に数点の石が折り重なるように出土。石の大半は板状もしくは角礫状の砂岩で、竈の構造材と考えられる。煙道は上部を削平されているが、燃烧部から緩やかに立ち上がる様子が観察される。煙道長は現状で35cm。また、東壁中央よりも南側に、竈No.1より古い竈がある(竈No.2)。壁を掘り込んで作られた燃烧部が住居域外に張り出す形状をとる。焚口幅は推定で50cm・燃烧部長56cm。燃烧部中央付近の両壁には、袖石として板状の砂岩が据えられている。この袖石の上部には、やはり板状の砂岩が天井石として据えられている。また、燃烧部手前には砂岩の角礫が置かれており、支脚として利用されていたものと思われる。この下部には、砂岩を支えるように鉄滓(11)が埋められていた。煙道は削平されている。

貯蔵穴 住居南西隅に所在。形状は円形で、漏斗状に底面がすぼまっている。周溝 なし。柱穴 なし。

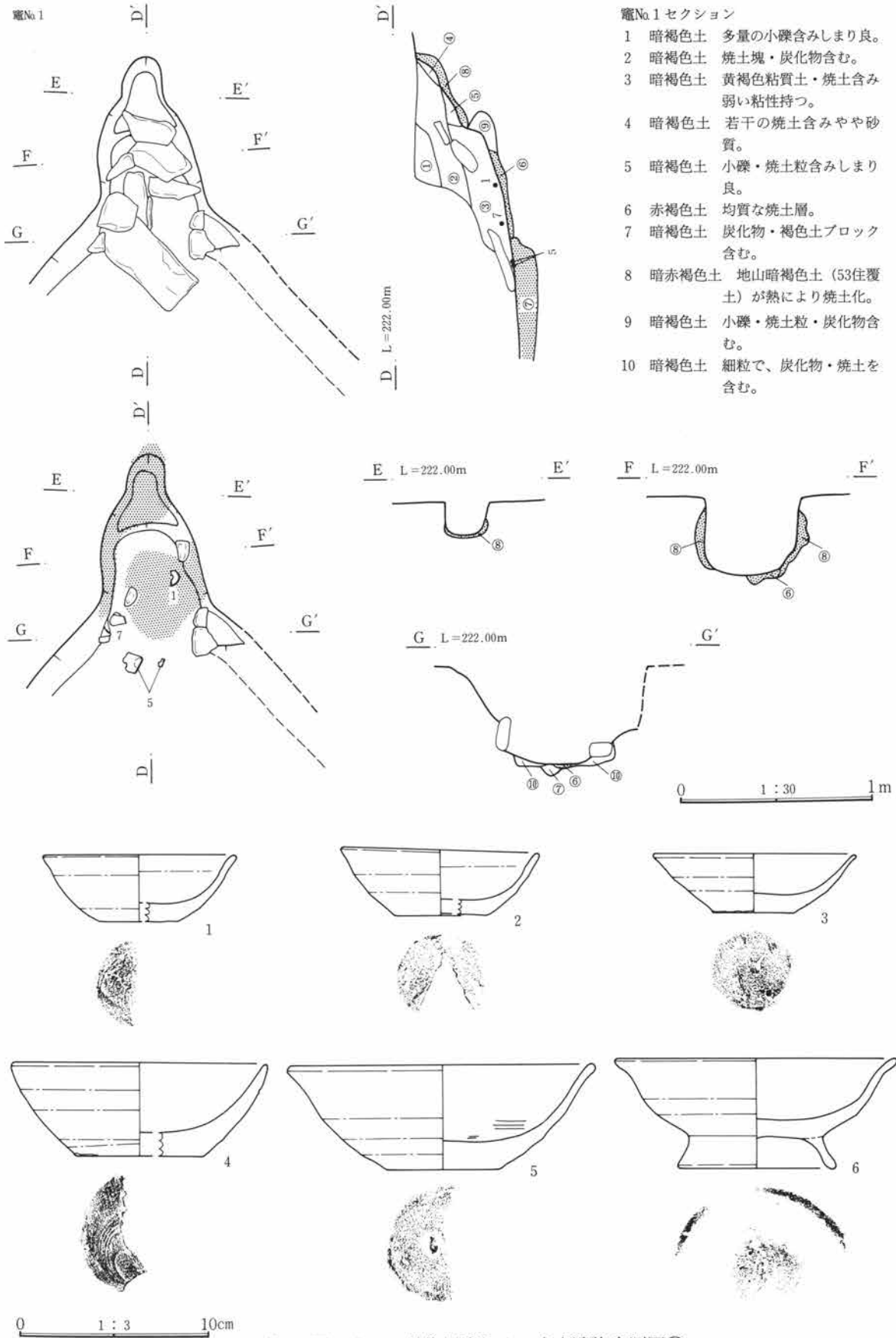
出土遺物 遺物量はあまり多くないが、大半は床面に近い位置から出土。土器に比べて礫が多く、そのうち約半数が砂岩である。主な器種は、須恵器坏(1~5)・埴(6・7)があり、覆土中から灰釉陶器埴(8)も出土している。この他に、羽口破片(9)と数点の鉄滓(10~17)が得られている。ただし、これらは床面より若干浮いた位置からの出土であり、竈No.2の構造材として利用されているものもあることから、本来当住居に属する遺物とは考えがたい。住居床面にも炉を設置したような痕跡がなかったこと、重複するG-52号住居からも同じ様な鉄滓が出土していることから、これらは52住からの混入と思われる。掘り方 なし。

調査所見 重複する52号住居の中にすっぽりと収まり、形もほぼ相似形で主軸方位も一致することから、52号住居との関連が想定される。住居の建て替えを行ったものであろうか。ただし、31号土坑は52号住居より新しく、51号住居よりは古いことから、両者の間には若干の時間差があったことがわかる。住居の時期は、覆土上位にAs-B軽石を一次堆積に近い状態で含むことと出土遺物より平安時代と推定される。



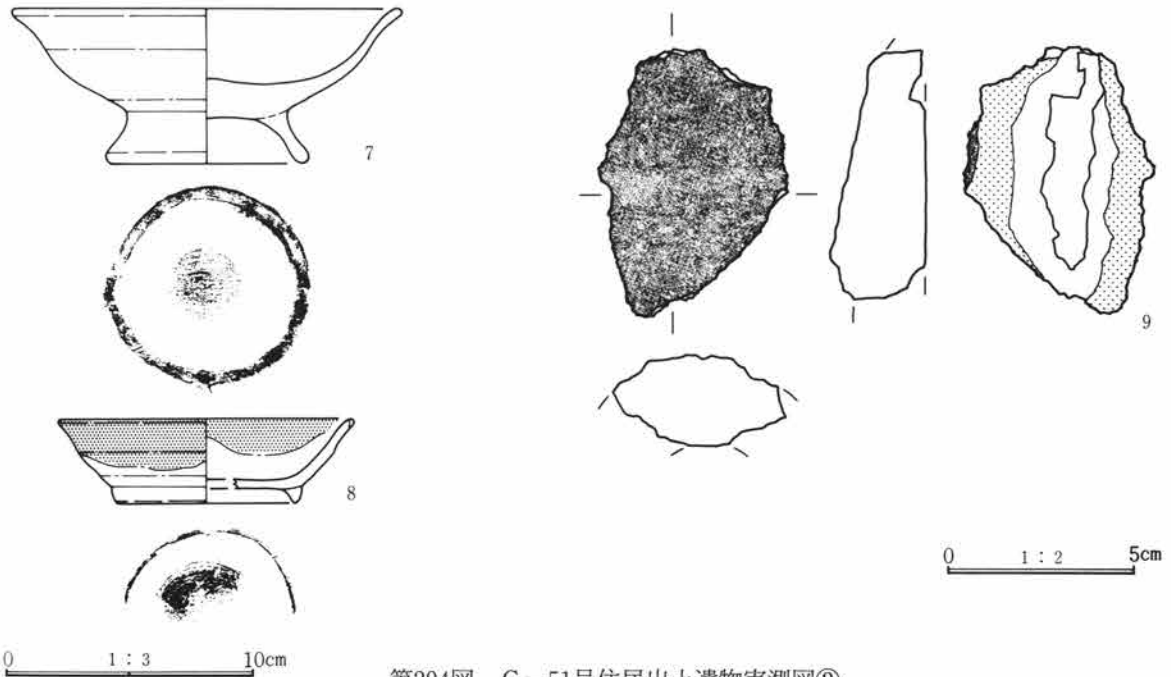
第292図 G-51号住居跡

第2節 F・G区



第293図 G-51号住居竈No.1、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第294図 G-51号住居出土遺物実測図②

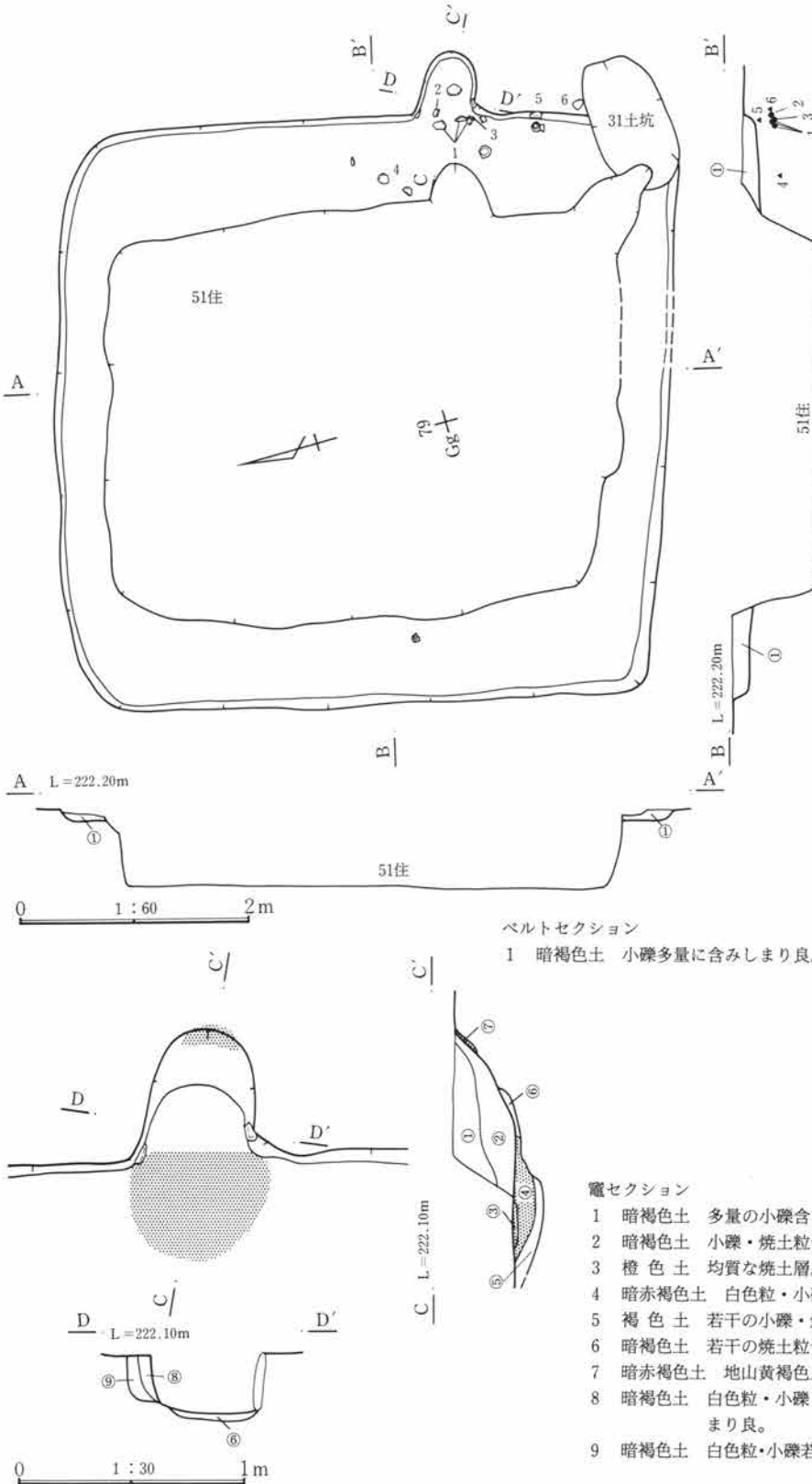
G-51号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	須恵器 坏	カマド内 3/5	口 9.7 底 (4.8) 高 3.4	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁部はわずかに外反。底部回転糸切り後ナデ。			
2	須恵器 坏	覆土 3/5	口 10.1 底 (4.6) 高 3.5	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。底部回転糸切り後ナデ。	内外面のほぼ同じ位置に煤状の炭化物付着		
3	須恵器 坏	貯蔵穴内 1/5	口 (10.5) 底 4.2 高 3.0	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁端部わずかに外反。底部右回転の回転糸切り後ナデ。			
4	須恵器 坏	床密着 1/5	口 (13.0) 底 (6.6) 高 4.7	①微砂粒含む ②良好 ③浅黄橙色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。			
5	須恵器 坏	カマド内 1/5	口 (16.0) 底 5.8 高 5.4	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。内面ヘラ磨き。			
6	須恵器 塊	+18cm 1/5	口 (14.6) 底 (8.0) 高 5.6	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形。口縁端部は外反する。底部切り離した後高台貼付。			
7	須恵器 塊	カマド内 1/5	口 (15.5) 底 (8.0) 高 6.1	①微砂粒(ごくまれに小礫)含む②良好 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形。底部切り離した後高台貼付。			
8	灰釉陶器 塊	覆土 1/5	口 (11.6) 底 (6.8) 高 3.3	①均質で微砂粒わずかに含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。口縁端部わずかに外反。底部回転ヘラ削り調整後高台貼付。施釉は潰け掛け。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
9	羽口	+7cm	—	—	—	55.4	破片	表面溶けて黒色ガラス状で、空隙持つ
10	鉄滓	+7cm	9.2	6.7	4.7	421.0	破片	内部は均質で金属光沢あり。表面粗砂粒付着。
11	鉄滓	竈支脚下	10.0	6.7	5.6	435.0	破片	内部に空隙持ち金属光沢あり。表面に粗砂粒付着。
12	鉄滓	+42cm	11.0	6.8	6.1	488.0	破片	内部に空隙持ち金属光沢あり。表面に粗砂粒付着。
13	鉄滓	+8cm	7.0	5.8	5.7	340.0	破片	内部は均質で金属光沢あり。一部表面に粗砂粒付着。
14	鉄滓	+27cm	6.7	5.7	4.8	210.0	破片	表面一部溶けてガラス状。粗砂粒・炭化物付着。
15	鉄滓	覆土	4.5	3.1	0.9	63.0	破片	表面褐色。内部に空隙持ち金属光沢あり。
16	鉄滓	覆土	7.2	3.0	2.9	55.0	破片	表面一部溶けてガラス状。粗砂粒付着。
17	鉄滓	覆土	5.2	2.6	1.7	23.0	破片	表面溶けてガラス状。内部は発泡し金属光沢あり。

G-52号住居跡 (PL41・136)

位置 Gf・Gg-78・79グリッド 主軸方位 N-107°-E 残存壁高 0.16m

重複 G-51住・31土坑に切られ、53~56住を切る。



規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、長辺5.32m・短辺5.04mとわずかに長辺方向が長い。掘り込みが浅く、上部をかなり削平されているため、壁の残りは悪い。周壁はほぼ直進するが、住居隅はやや丸みを帯びている。竈は東側に築かれており、住居主軸はかなり南にふれる。

床面 内側に掘り込まれた51号住居によって床面の大半が失われている。重複する住居の埋土を床面とし、貼り床なども見られないため床面の判別はかなり困難であった。

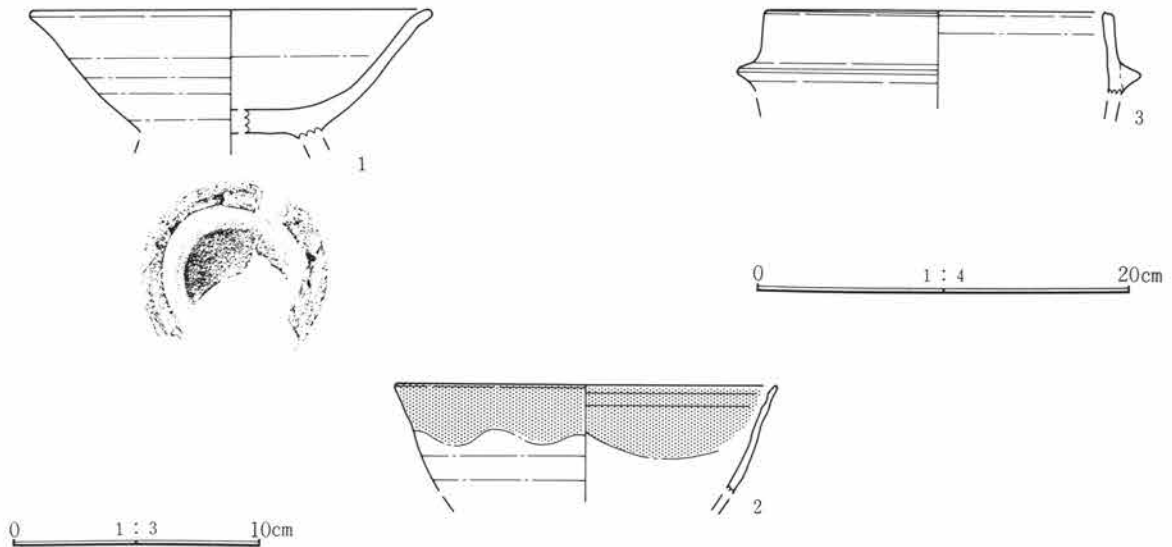
竈 住居東壁中央よりやや南側に所在。燃焼部は壁を掘り込んで、住居域外に大きく張り

第295図 G-52号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

出す。焚口幅50cm・燃烧部長56cm。燃烧部入口部分の右壁に、板状の砂岩が袖石として据えられている。煙道は削平されている。貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 検出できず。51号住居に破壊されているか。出土遺物 住居の大半を破壊されているため、遺物は非常に少ない。竈周辺を中心に十数点が出土。主な器種は須恵器壺(1)・羽釜(3)、灰釉陶器壺(2)がある。この他に、床面上から鉄滓が3点出土している(4～6)。掘り方 なし。

調査所見 鉄滓の出土から、当住居内で関連する作業が行われていたと想定されるが、重複する51号住居に破壊されて詳細は不明。住居の時期は、遺物から平安時代とわかる。



第296図 G-52号住居出土遺物実測図

G-52号住居出土遺物観察表

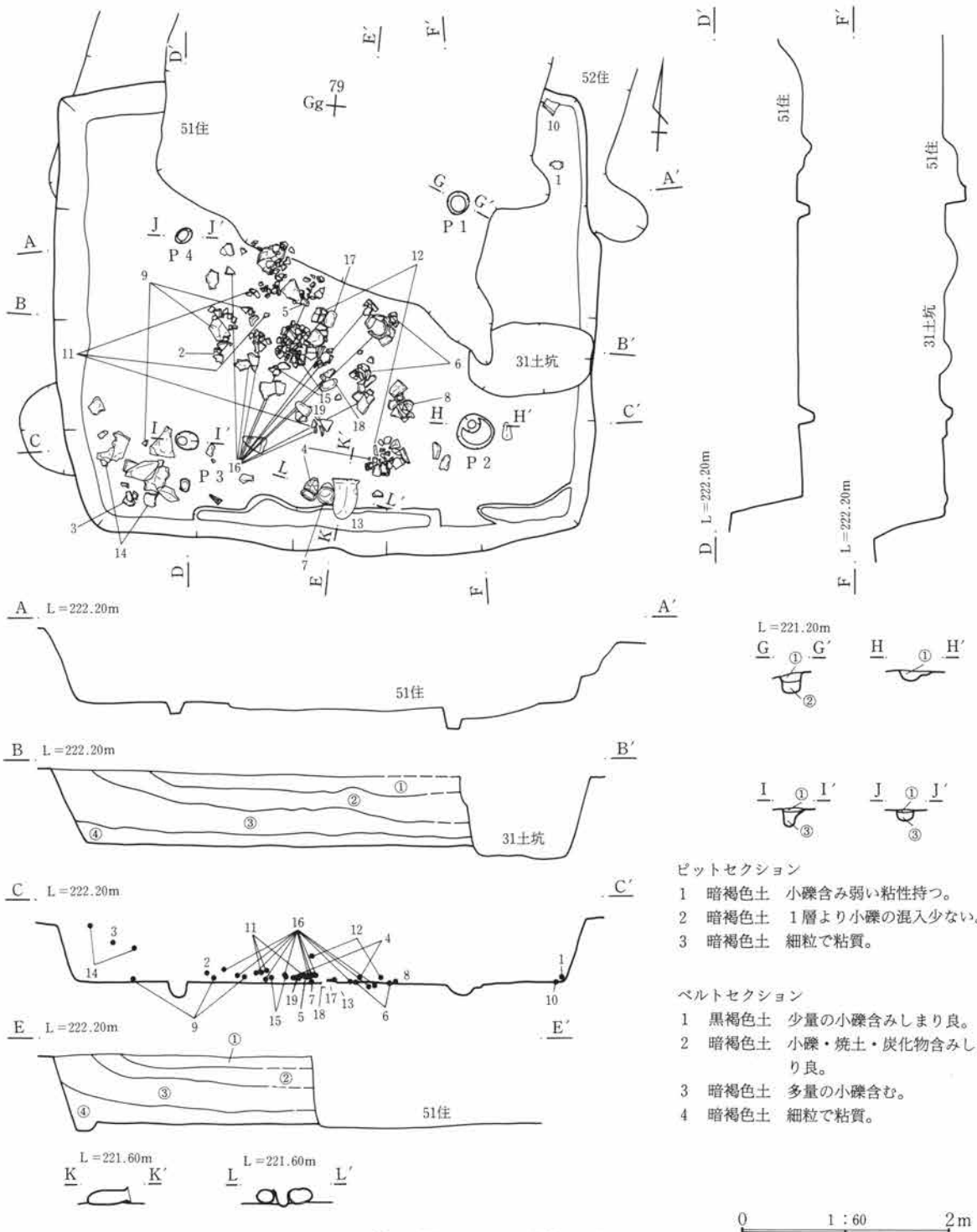
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	残存状態 備考
				①均質な細砂含む	②良好	③橙色		
1	須恵器 壺	床密着 口～体部 1/2	口(16.0) 底— 高—	①均質な細砂含む	②良好	③橙色	ロクロ整形。口縁端部は外反。底部切り離し後ナデ、高台貼付。高台部欠損。	
2	灰釉陶器 壺	床密着 口～体部 1/2	口(15.0) 底— 高—	①微砂粒含む	②堅緻	③灰白色	ロクロ整形。内面口縁部に浅い沈線一条。施釉は潰け掛け。	
3	須恵器 羽釜	床密着 口縁部破片	口(18.6) 底— 高—	①細砂含む	②良好	③明赤褐色	ロクロ整形。口縁部内外面横ナデ。鑄は断面三角形。	
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
4	鉄滓	床密着	6.7	6.5	1.4	189.0	破片	表面ガラス状で、炭化物・粗砂粒付着。
5	鉄滓	+15cm	8.0	5.0	3.0	265.0	底部破片	表面一部ガラス状で金属光沢あり。粗砂粒付着。
6	鉄滓	+7cm	7.4	5.7	4.6	214.0	破片	内部に空隙持ち金属光沢あり。表面に砂礫付着。

G-53号住居跡 (PL41・42・136・137)

位置 Gf-78・79グリッド 主軸方位 N-5°-W 残存壁高 0.72m

重複 G-51・52住に切られ、54住を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺5.22m・短辺4.43m。住居北側を重複する住居によって破壊されている。住居の掘り込みは深いが、周壁は上部が崩落し、かなり外反している。竈は北側にあったものと思われるが、破壊されて残っていない。住居主軸はやや西にふれる。



第297図 G-53号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

床面 地山黄褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁にあったものと思われるが、重複する住居によって破壊されている。 **貯蔵穴** 検出できず。

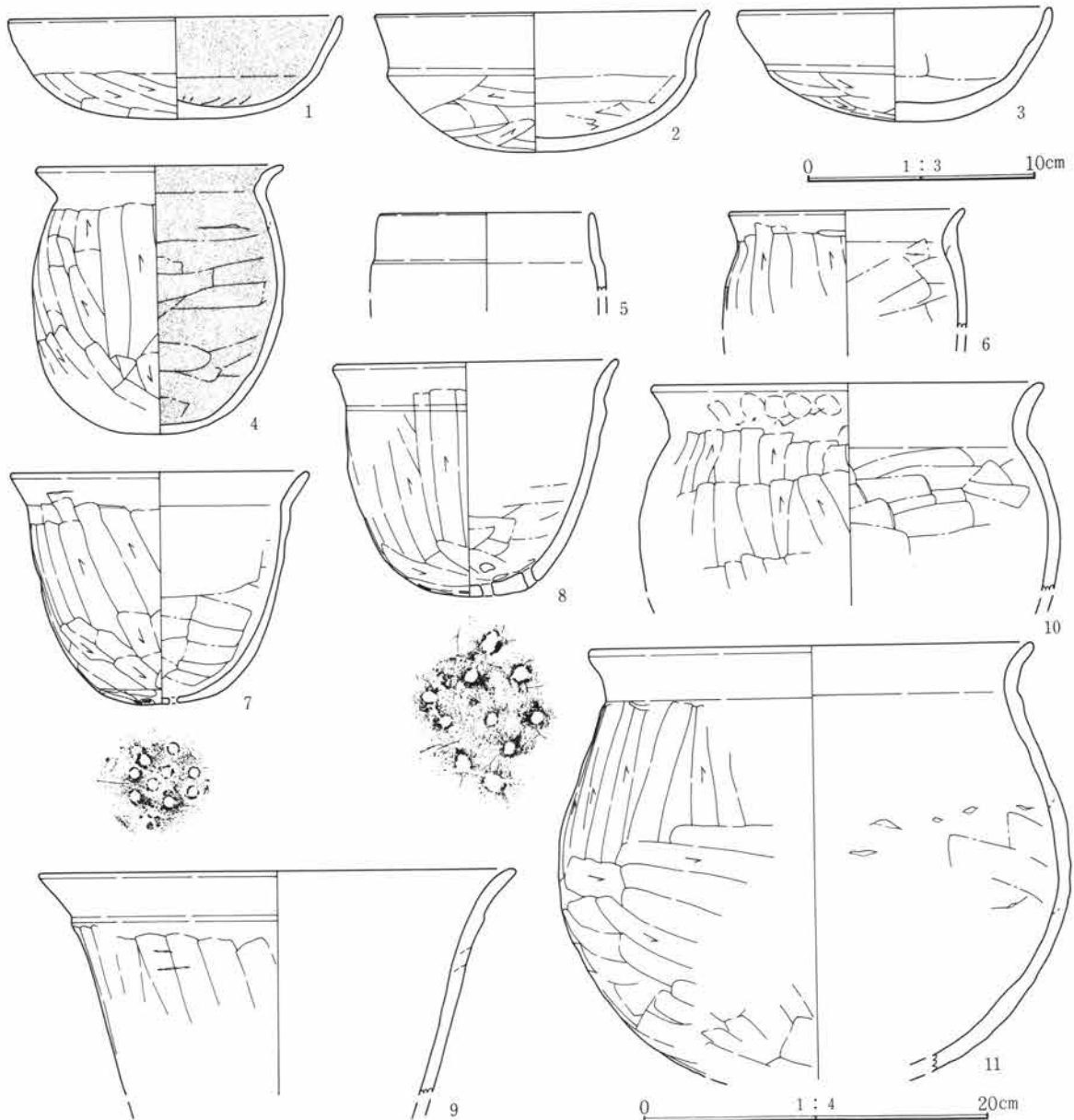
周溝 南壁際の大半に、浅くやや幅広の周溝がみられる。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置しているが、いずれのピットも掘り込みは浅い。

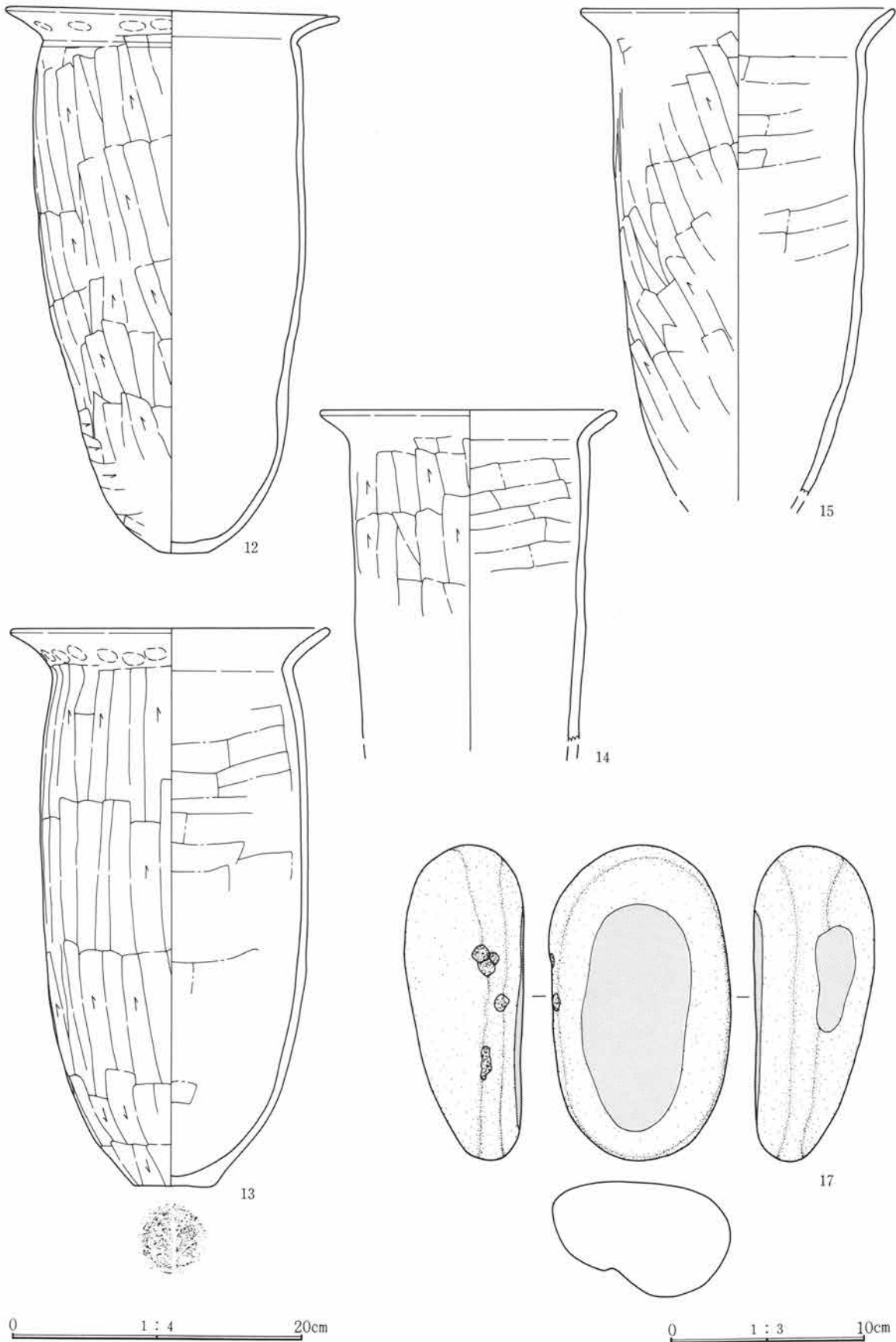
出土遺物 遺物は住居中央付近にまとまっているが、他の部分の大半が破壊されているため、偶発的な分布の可能性もある。遺物はほとんどが床面から上10cm程の範囲から出土しており、完形近くまで復元可能なものが多い。特に、住居南壁際からは、ほぼ完形の甕(13)・甗(7)・小型甕(4)が床面上に並んで出土している。他に、土師器坏(1~3)・小型甕(5・6)・甗(8・9)・甕(10~12, 14・15)、須恵器甕(16)がある。また、住居中央付近より土器破片に混じってこもあみ石とみられる円礫が3点出土している(17~19)。

掘り方 なし。

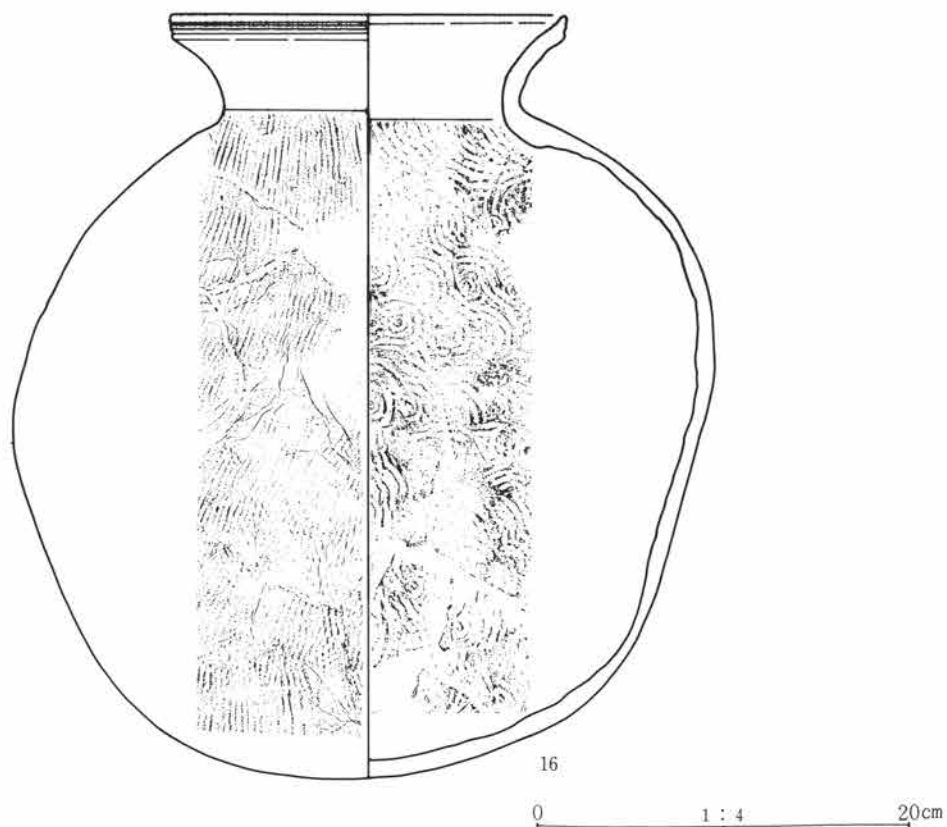
調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



第298図 G-53号住居出土遺物実測図①



第299図 G-53号住居出土遺物実測図②



第300図 G-53号住居出土遺物実測図③

G-53号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+5cm 1/4	口(14.0) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面へらナデ。	内面黒色
2	土師器 坏	+7cm 3/8	口14.4 底— 高6.0	①微砂粒・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面へらナデ。	
3	土師器 坏	+37cm 3/4	口13.2 底— 高4.8	①細砂(ごくまれに小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。	
4	土師器 小型甕	+4cm ほぼ完形	口14.3 底— 高15.4	①細砂・赤褐色粒子含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ、接合痕あり。	内面黒色
5	土師器 小型甕	+4cm 口縁1/2	口12.0 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	
6	土師器 小型甕	床密着 口~胴部 上位3/8	口13.5 底— 高—	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ、接合痕あり。	
7	土師器 甕	床密着 完形	口17.0 底6.8 高13.2	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。底部に径5mm程の小孔9個、焼成前の穿孔である。	
8	土師器 甕	床密着 3/8	口(16.4) 底— 高13.4	①微砂粒・赤褐色粒子含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横ナデ。底部に径6mm程の小孔10個、焼成前の穿孔である。	
9	土師器 甕	+4cm 口~胴部 上位3/8	口(27.2) 底— 高—	①砂粒(まれに小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、接合痕あり。胴部内面横ナデ。	

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
10	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位 $\frac{1}{4}$	口(22.2) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。 胴部外面へら削り、内面横ナデ。			
11	土師器 甕	+5cm 口～胴部 $\frac{2}{3}$	口(25.8) 底— 高—	①多量の砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横 ナデ、接合痕あり。			
12	土師器 甕	+5cm $\frac{1}{2}$	口22.4 底3.4 高37.0	①砂礫含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面 へら削り、内面横ナデ。			
13	土師器 甕	床密着 完形	口21.4 底5.2 高37.9	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面 へら削り、内面横ナデ。	底部に木葉痕		
14	土師器 甕	+32cm 口～胴部 上半 $\frac{2}{3}$	口(20.2) 底— 高—	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横 ナデ。			
15	土師器 甕	+5cm 口～胴部 $\frac{1}{2}$	口21.0 底— 高—	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横 ナデ。			
16	須恵器 甕	床密着 $\frac{1}{2}$	口21.0 底— 高40.0	①砂粒(まれに小礫) 含む ②堅緻 ③黄灰色	ロクロ整形。外面口縁部上位に浅い沈線二条めぐ る。胴部外面平行叩き目、内面青海波文。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特 徴
			全長	幅	厚さ	重量		
17	こもあみ石	+5cm 完形	15.9	9.3	6.1	1149.4	粗粒安山岩	盤状の円礫。表面と右側に磨面。左側には一部 敲打痕見られる。
18	こもあみ石	+4cm 完形	15.7	7.5	4.3	769.0	粗粒安山岩	盤状の円礫。
19	こもあみ石	+7cm 完形	14.6	9.3	5.6	1007.3	安山岩質凝灰岩	同上。

G-54号住居跡 (PL42・138)

位置 Gf-79グリッド 主軸方位 N-5°-W 残存壁高 0.56m 重複 G-51～53住に切られる。

規模と形状 住居の東壁を重複する住居によって破壊されているため、正確な形状および規模は不明。長辺は現状で3.92m・短辺は4.60mである。周壁はやや外反するが、形状の乱れはみられない。竈は北側に築かれ、住居主軸はわずかに西にふれる。

床面 地山暗褐色砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

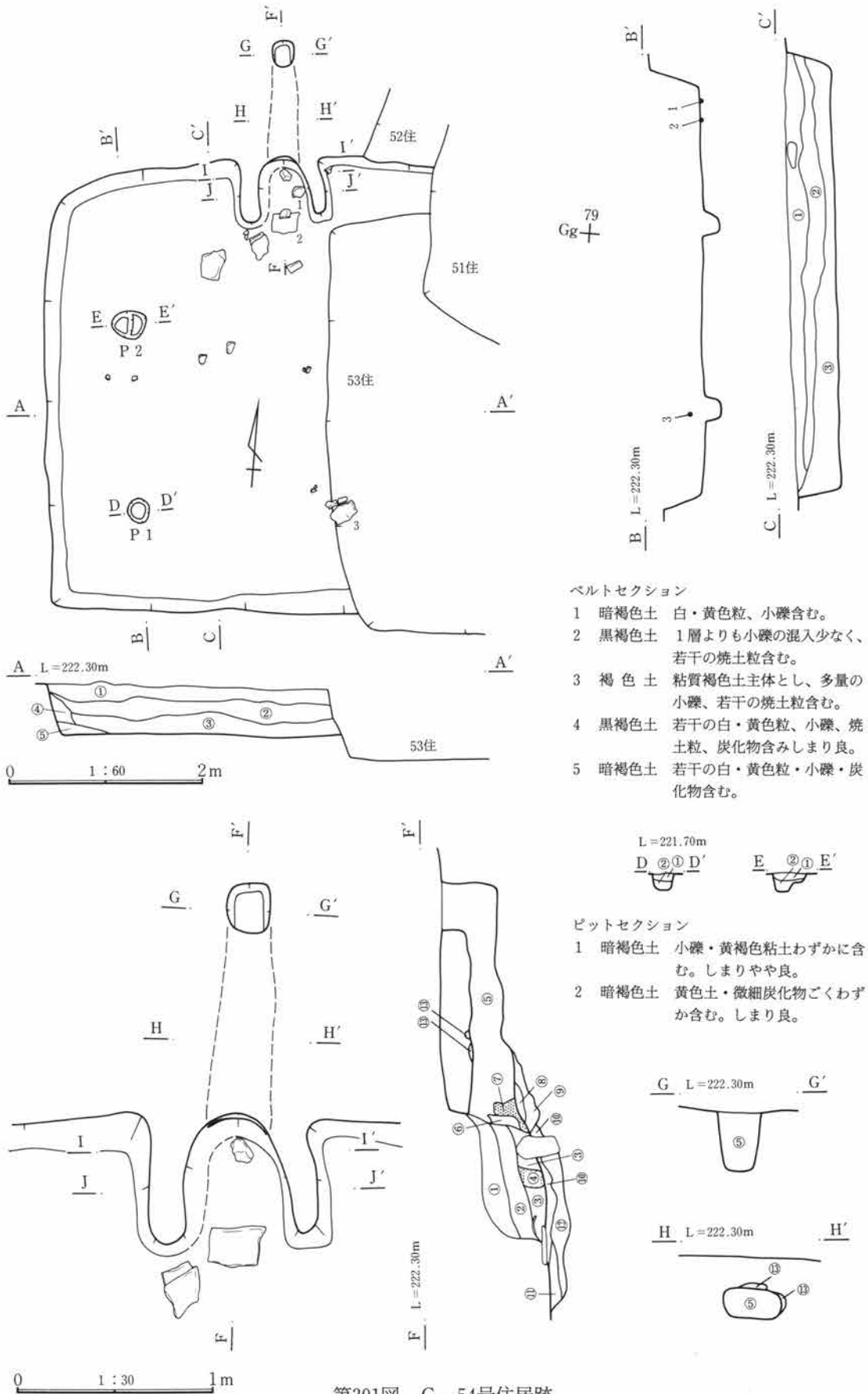
竈 住居北壁に所在。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅51cm・燃烧部長64cm。調査時に左袖を若干掘りすぎってしまったため、焚口幅の値は推定である。燃烧部の奥壁際には、支脚として砂岩の角礫が埋め込まれている。また、燃烧部前には、天井石として利用されていた板状の砂岩が、二つに割れた状態で出土している。煙道はくりぬき式で、天井部分も崩落せずに残っている。煙道長118cm。竈の残存状況は良好で、埋土内にはかなりの焼土が含まれているが、燃烧部・煙道ともに焼土面の発達は弱い。

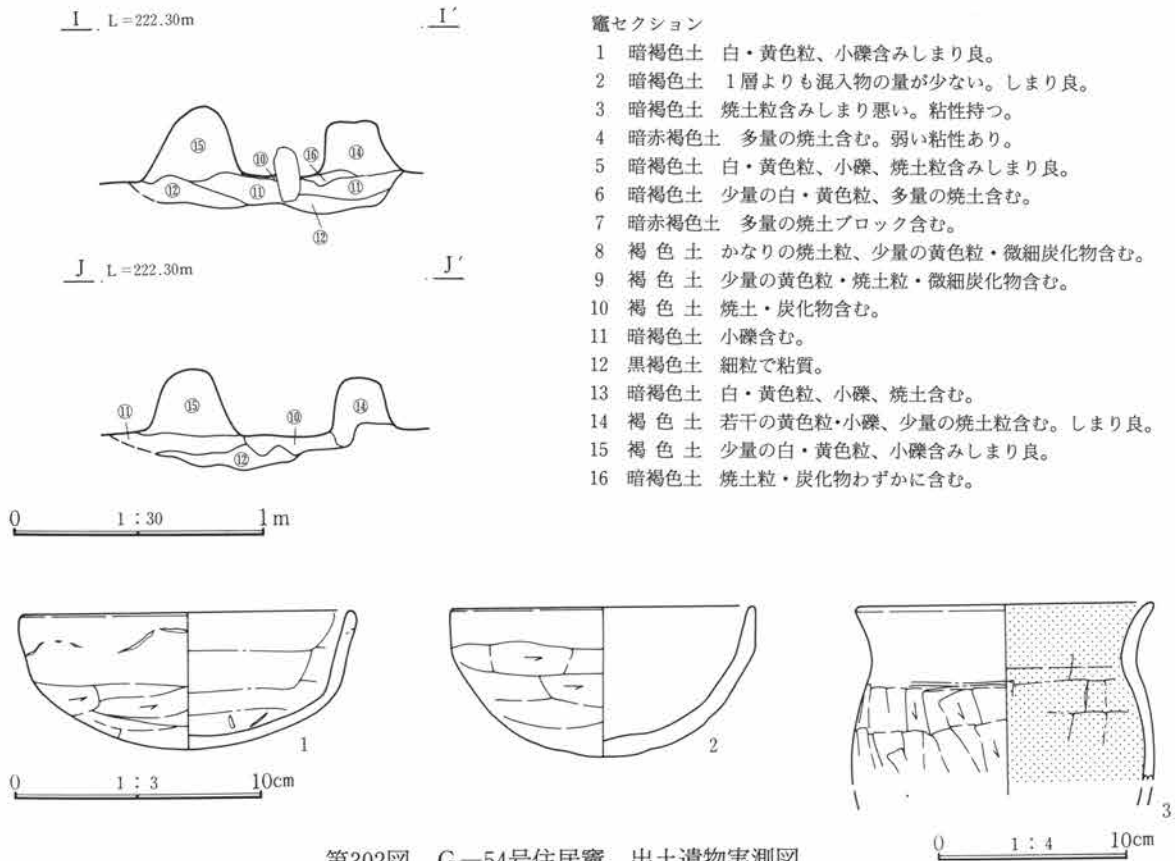
貯蔵穴 検出できず。重複する住居によって破壊されたか。周溝 なし。

柱穴 柱穴と思われる2基の小ピット検出。他の柱穴は、重複する住居によって破壊されている模様。

出土遺物 遺物量は非常に少ない。十数片の土器と礫が住居内に散在するのみ。主な器種は、土師器坏(1・2)・小型甕(3)がある。礫は大半が板状もしくは角礫状の砂岩である。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居とわかる。





第302図 G-54号住居竈、出土遺物実測図

G-54号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	カマド内 1/2	口 13.1 底 — 高 5.3	①砂粒含む ②良好 ③浅黄色	口縁部外面横ナデ、接合痕あり。体部外面へラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	カマド内 1/3	口(11.7) 底 — 高 5.9	①砂粒含む ②良好 ③淡橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	
3	土師器 小型甕	+20cm 口~胴部 上位	口 15.8 底 — 高 —	①細砂・角閃石微粒 子含む ②良好 ③暗赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面へラナデ。	胴部内面に弱い煤付着

G-55号住居跡 (PL42・138)

位置 Gg-78グリッド **主軸方位** N-10°-E **残存壁高** 0.25m **重複** G-51・52・56住に切られる。
規模と形状 東壁と北壁の一部をのぞいて、重複する住居によって破壊されているため、正確な形状は不明。かろうじて残っていた南東隅と、炉と思われる焼土の分布位置より、形状はほぼ正方形であろうと推測される。主軸方位は、現状でより長く残っている東壁を基準とした。周壁はほぼ直進するが、北東隅はかなり丸みを帯びている。住居主軸はかなり東にふれる。

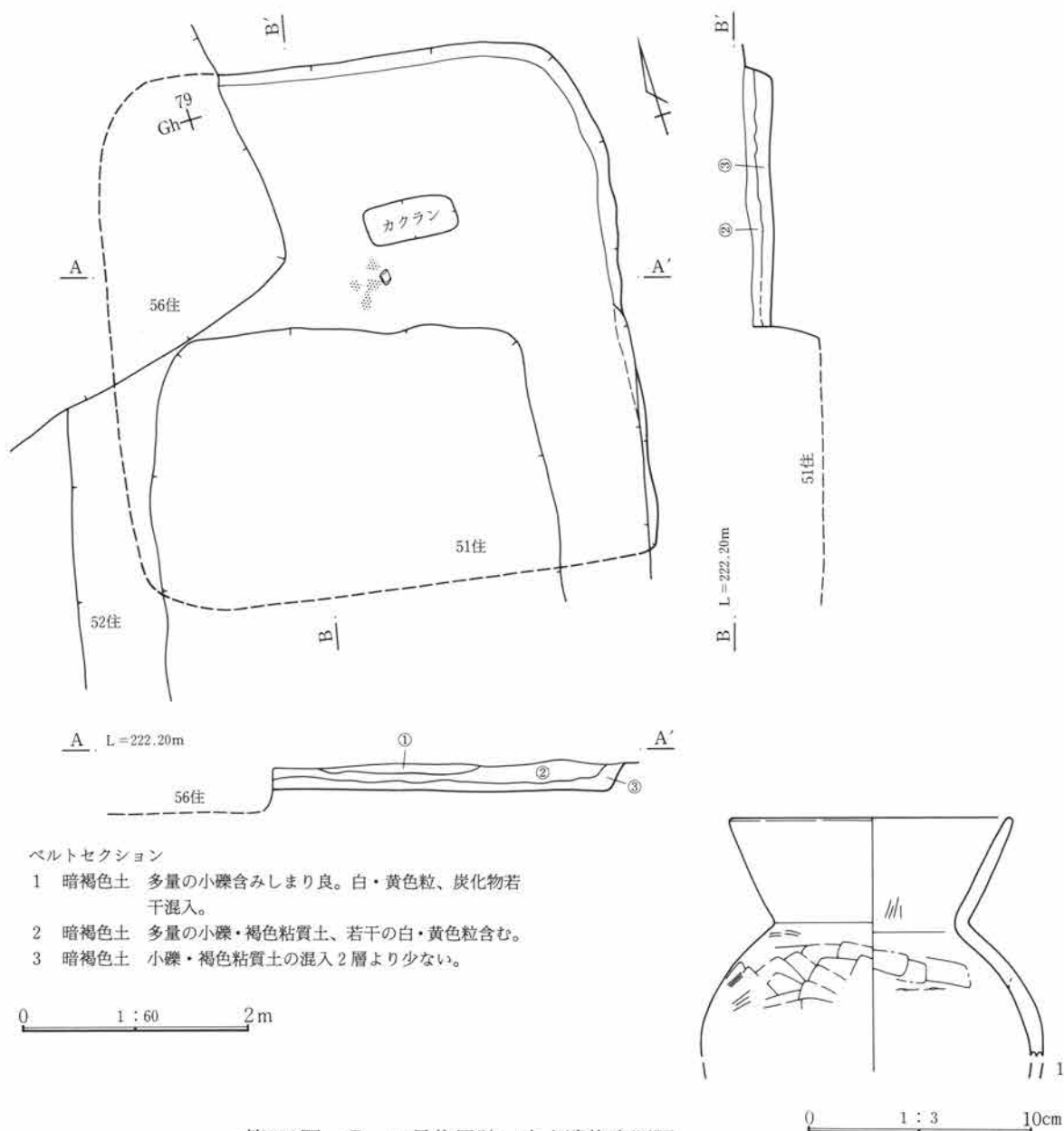
床面 地山黄褐色砂礫質土を掘り込んで床面を形成。貼り床などはみられない。

炉 住居のほぼ中央の床面上に焼土の分布がみられた。おそらく炉に伴うものと思われるが、焼土面や掘り込み・炉石などは検出できなかった。 **貯蔵穴** なし。 **周溝** なし。 **柱穴** なし。

第3章 検出された遺構と遺物

出土遺物 遺物は極めて少なく、覆土中からの出土もなかった。重複するG-56号住居の覆土中より出土した土師器埴(1)が、唯一当住居に属する遺物と思われる。 **掘り方** なし。

調査所見 住居の大半が破壊され形状を確実に特定することはできないが、竈の所在する頻度の高い住居北壁・東壁に竈の痕跡が見られないこと、床面に炉と思われる焼土の分布がみられることなどから、炉を伴う住居と判断した。住居の時期は、重複する住居より出土した遺物から古墳時代中期と推定される。



第303図 G-55号住居跡、出土遺物実測図

G-55号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 埴	56住覆土 口~胴部 上半¼	口(12.4) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ後へラ磨き。胴部外面へラ削り後へラ磨き、内面横ナデ、接合痕あり。	

G-56号住居跡 (PL42・138)

位置 Gg・Gh-79グリッド 主軸方位 N-14°-W 残存壁高 0.57m

重複 G-52住に切られ、55住を切る。

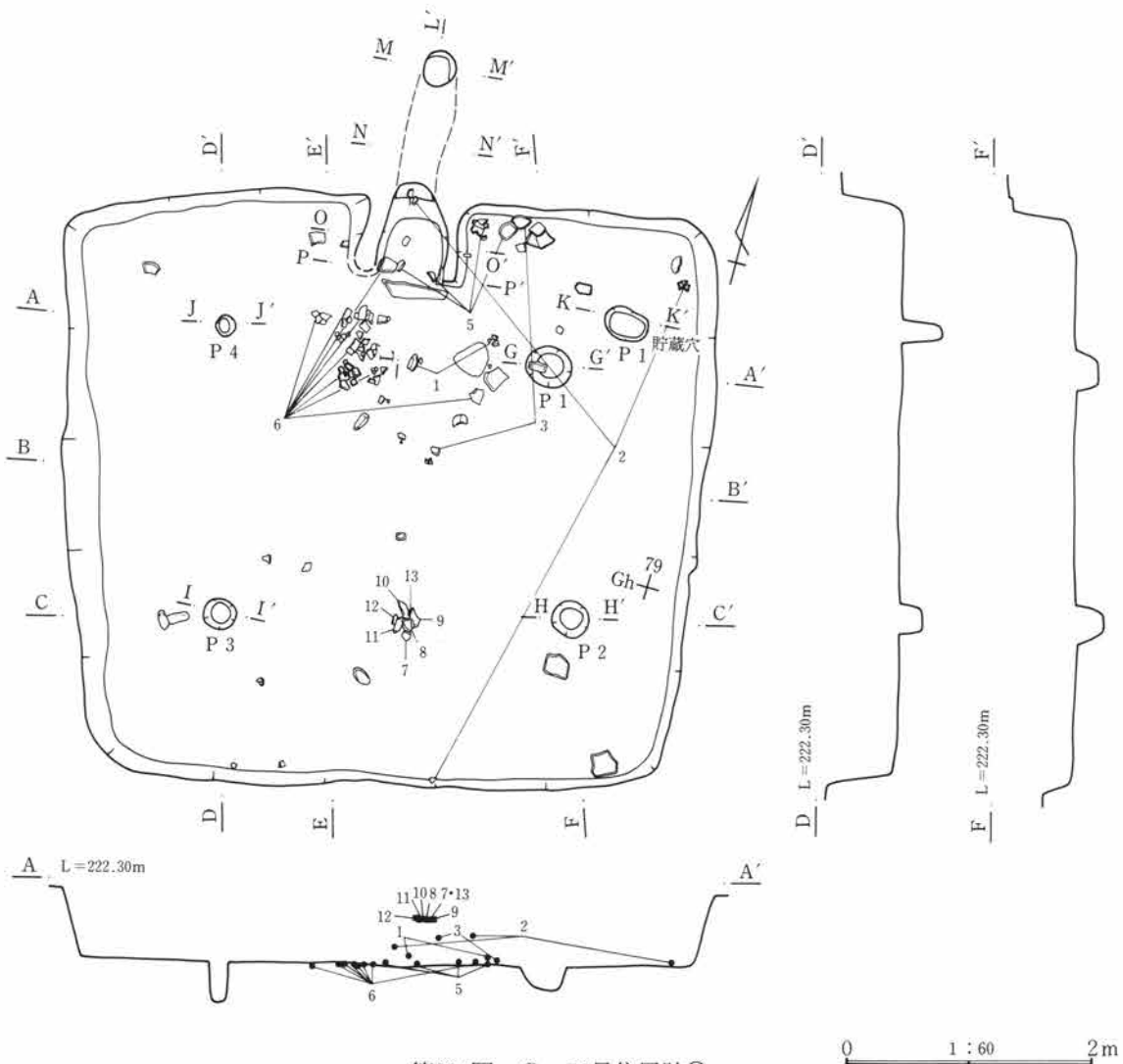
規模と形状 形状は、北壁に比べ南壁がわずかに短く、台形状を呈する。長辺5.31m・短辺4.80m。周壁はほぼ直進するが、西壁ではやや外反している。竈は北側に築かれ、住居主軸はかなり西にふれる。

床面 地山褐色砂礫質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の中央部に所在。袖が住居内に作り出される。焚口幅49cm・燃烧部長64cm。両袖先端部の燃烧部側には、袖石として板状の砂岩が据えられている。また、燃烧部の前には、天井石として利用されていた板状の砂岩が置かれていた。燃烧部中央よりもやや左寄りの位置には、角礫状の砂岩が、支脚として埋め込まれていた。くりぬき式の煙道は、天井部分も崩落せずに残存している。煙道長120cm。

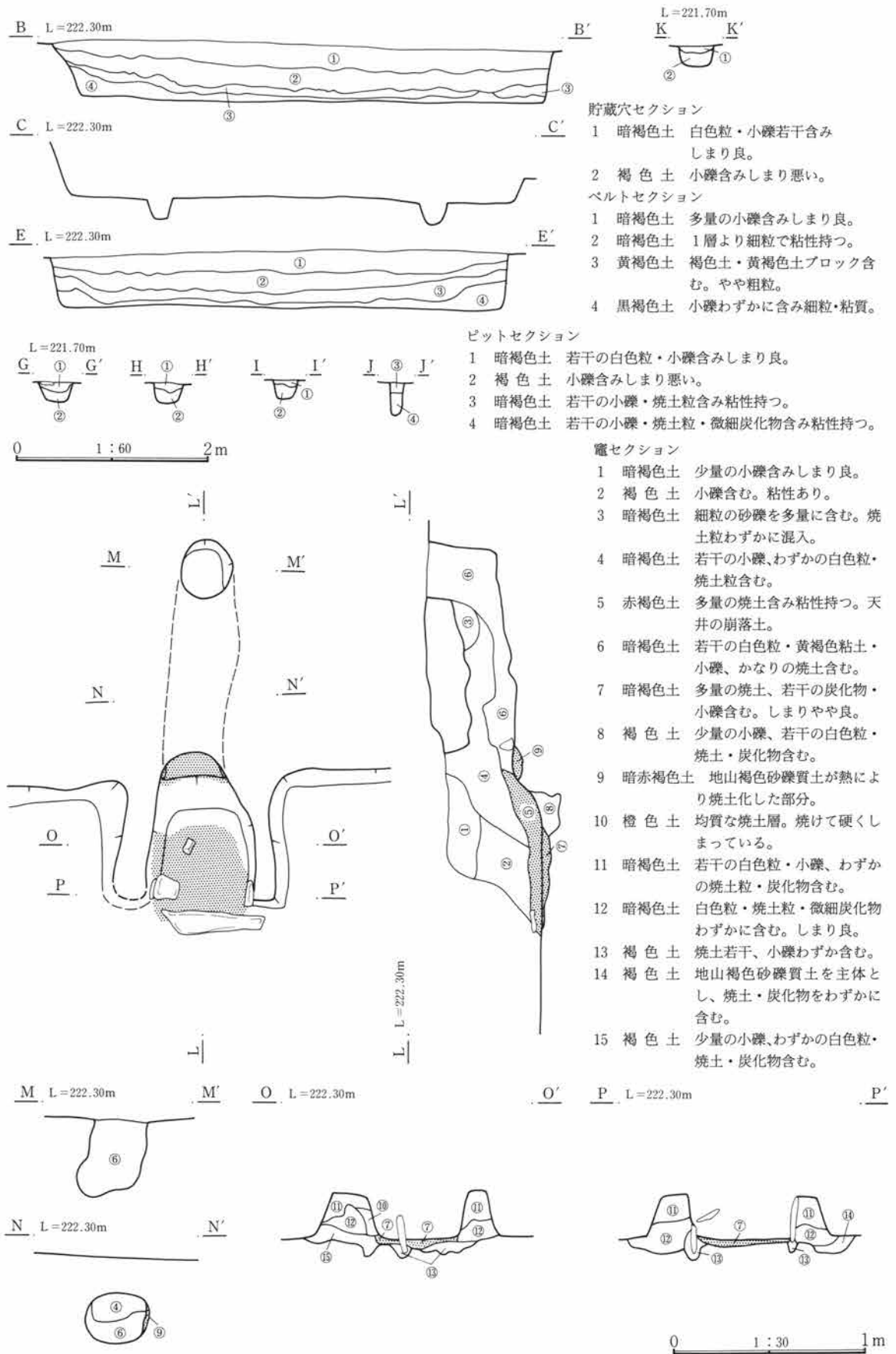
貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。非常に小さく、中から遺物の出土もなかったが、位置的にみて貯蔵穴であると判断した。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するが、北東隅近くのピット1は、やや中央方向にずれている。



第304図 G-56号住居跡①

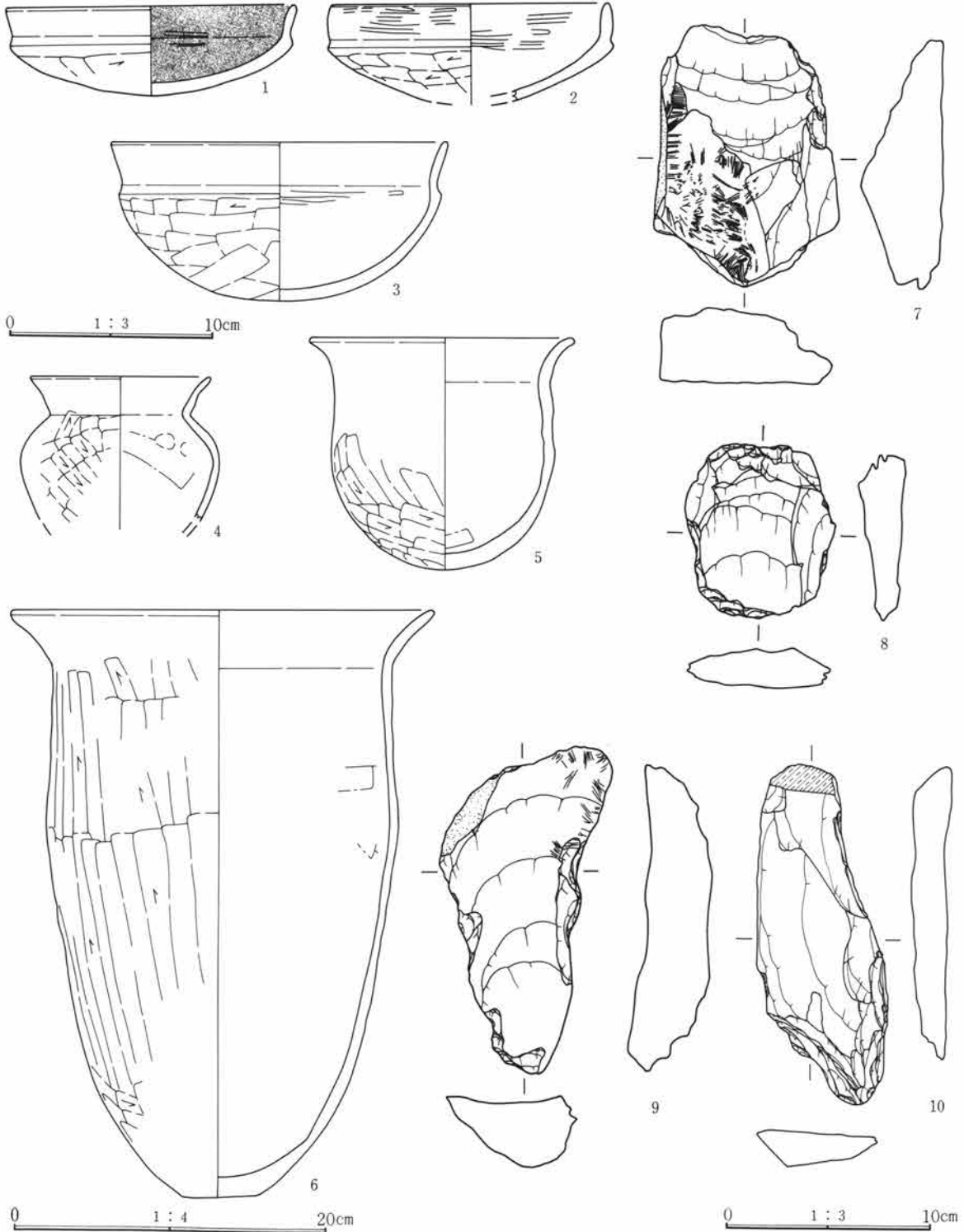
第3章 検出された遺構と遺物



第305図 G-56号住居跡②

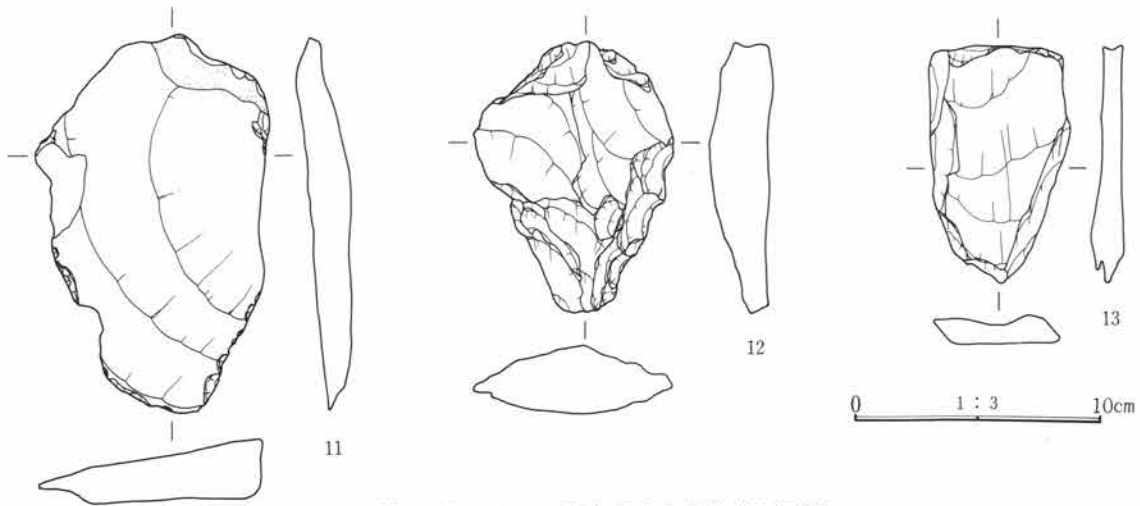
出土遺物 遺物量はあまり多くないが、竈周辺の床面上より出土しているものが多い。主な器種は、土師器
 坏(1~3)・小型甕(4・5)・長甕(6)がある。また住居の覆土上位より、滑石の原石7点(7~13)がま
 まって出土している。おそらく当住居の覆土を掘り込んで作られたピット内に、埋納されていたものと思わ
 れる。したがって、これらの原石は当住居よりも新しい時期の遺物となる。 **掘り方** なし。

調査所見 住居・竈形状および出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



第306図 G-56号住居出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第307図 G-56号住居出土遺物実測図②

G-56号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	+6cm 1/3	口(13.8) 底— 高 4.2	①砂粒(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③灰白色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ後へら磨き。	内面黒色処理器表面 の摩滅激しい		
2	土師器 坏	床密着 1/3	口(13.5) 底— 高—	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③灰黄褐色	口縁部外面横ナデ後へら磨き、体部外面へら削り 内面横ナデ後へら磨き。	内面および口縁部外 面に黒色漆状の付着 物		
3	土師器 坏	床密着 3/5	口(16.2) 底— 高 7.5	①細砂含む ②良好 ③淡黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ後へら磨き。かなり大型で体部が深い。			
4	土師器 小型甕	覆土 口~胴部 上半1/3	口(11.5) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面ナ デ、指頭圧痕あり。			
5	土師器 小型甕	床密着 口~底部 2/3	口(17.0) 底— 高 14.8	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面へ らナデ。			
6	土師器 甕	床密着 2/3	口(27.4) 底(5.0) 高 37.3	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横 ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全長	幅	厚さ	重量		
7	滑石原石	+34cm 完形	12.5	8.8	3.3	482.1	滑石	厚手の板状の原石。周辺を打ち欠いてある他、 のみ状の工具痕が無数にみられる。
8	滑石原石	+34cm 完形	8.2	7.3	2.3	183.9	滑石	板状の原石。周辺を打ち欠いてある。
9	滑石原石	+32cm 完形	15.5	8.4	4.0	422.8	滑石	不定形の原石。のみ状工具痕一部にみられる。
10	滑石原石	+34cm 完形	16.2	6.2	1.8	205.2	滑石	板状の原石。主に先端と右側を打ち欠いてある
11	滑石原石	+34cm 完形	14.8	9.2	2.5	361.6	滑石	板状の原石。周辺を一部打ち欠いている。
12	滑石原石	+36cm 完形	10.6	8.0	2.7	238.9	滑石	板状の原石。周辺を打ち欠いている。
13	滑石原石	+33cm 完形	9.3	5.0	1.3	93.1	滑石	板状の原石。周辺を打ち欠いてある。

G-57号住居跡 (PL43・138)

位置 Gk・Gl-75グリッド 主軸方位 N-106°-E 残存壁高 0.26m 重複 G-79住を切る。

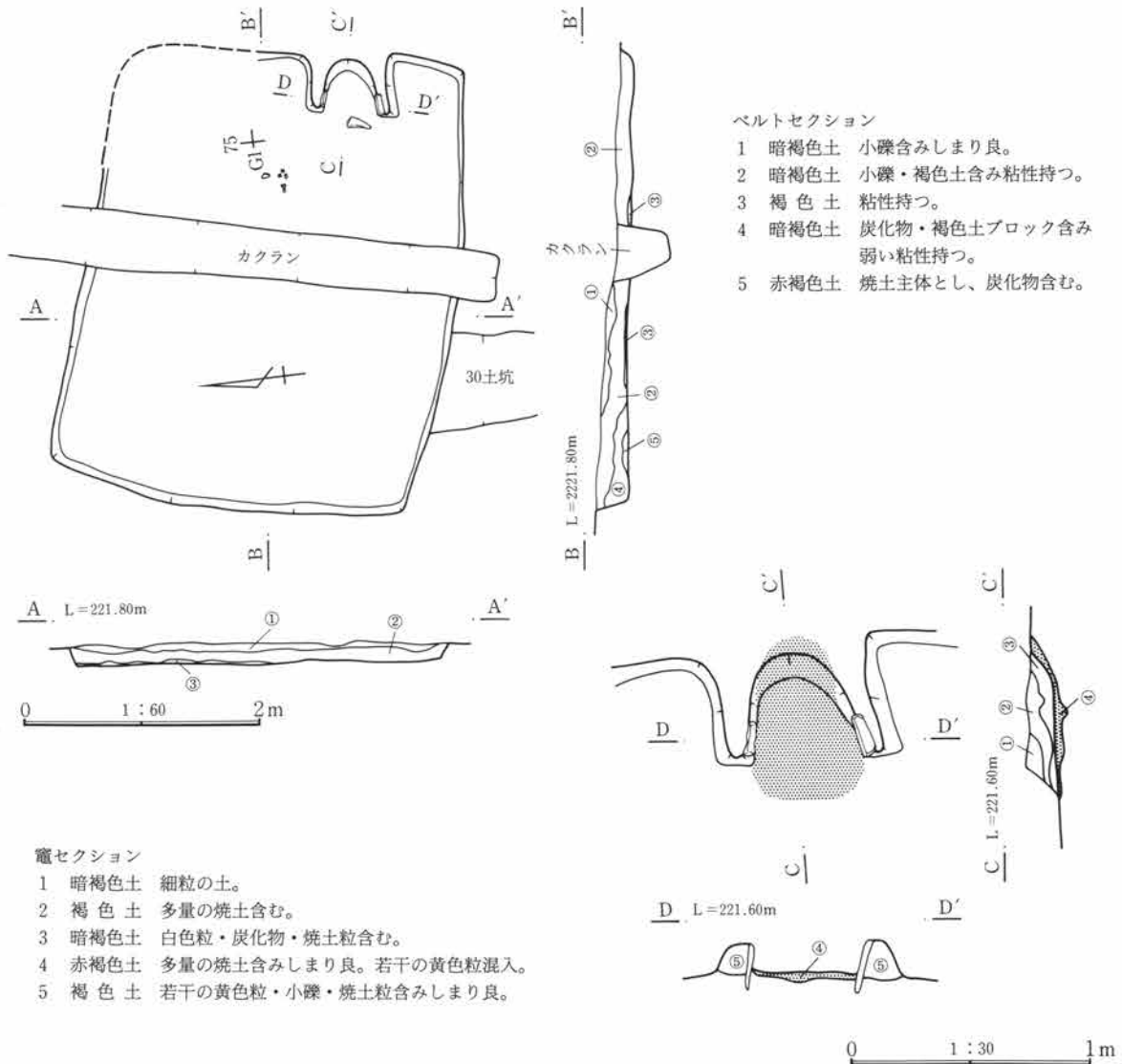
規模と形状 形状は縦長の長方形で、長辺3.13m・短辺3.96mである。調査時にG-79住との前後関係を誤認したため、北東隅を失ってしまった。上部をかなり削平され壁の残りは悪いが、周壁はほぼ直進し、線形の乱れは少ない。竈は東側に築かれ、住居主軸はやや南にふれる。

床面 床面は地山褐色粘質土に一致。住居の北東隅に向かってやや傾斜している。貼り床などはみられない。

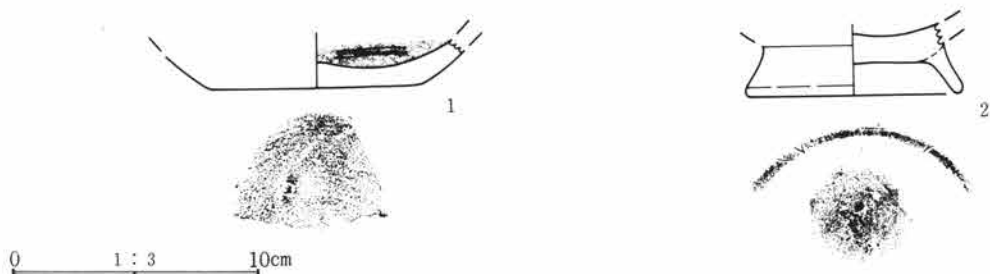
竈 住居東壁の中央よりも南側に所在。袖が住居内に作り出されている。焚口幅45cm・燃烧部長44cm。両袖の先端燃烧部側に、薄い板状の砂岩を立てて袖石としている。燃烧部の床面と奥壁には、発達した焼土面がみられる。煙道は削平されて残っていない。貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は非常に少ない。覆土中出土のものを含めても、わずかに数十点である。図化可能なものは、わずかに須恵器坏(1)・埴(2)だけで、いずれも小破片である。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より平安時代の住居と推測される。



第308図 G-57号住居跡



第309図 G-57号住居出土遺物実測図

G-57号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	覆土 体下位～ 底部 $\frac{1}{4}$	口— 底(8.4) 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。底部回転糸切り。内面ヘラ磨き。	内面黒色処理
2	須恵器 塊	覆土 底部 $\frac{1}{2}$	口— 底(8.4) 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。底部切り離し後高台貼付。	底部外面に墨状の付 着物わずかに残る

G-58号住居跡 (PL43)

位置 Gg・Gh-80グリッド 主軸方位 N-18°-E 残存壁高 0.37m 重複 G-41土を切る。

規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、長辺2.80m・短辺2.90mとやや短辺が長い。周壁はほぼ直立するが、住居の四隅はかなり丸味を帯びている。竈は北側に築かれ、住居主軸はかなり東にふれる。

床面 地山黄褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

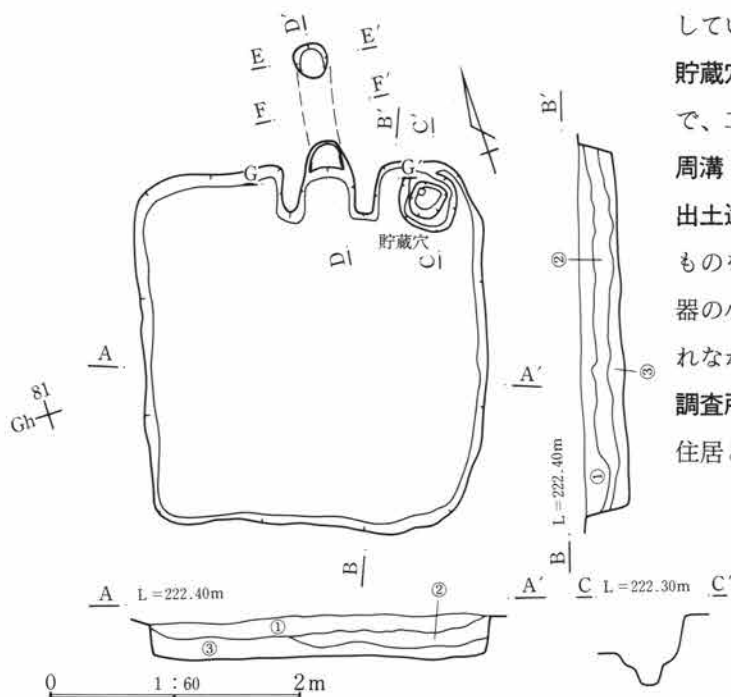
竈 住居北壁の中央よりもわずかに東側に所在。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅39cm・燃燒部長66cm。燃燒部床面から奥壁にかけて、焼土面が良く発達している。くりぬき式の煙道は天井部分も残存している。煙道長71cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は隅丸の方形で、二段の掘り込みを持つ。

周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、覆土出土のものを含めても数十点にすぎない。大半は土師器の小破片で、復元・図化の可能な遺物はみられなかった。掘り方 なし。

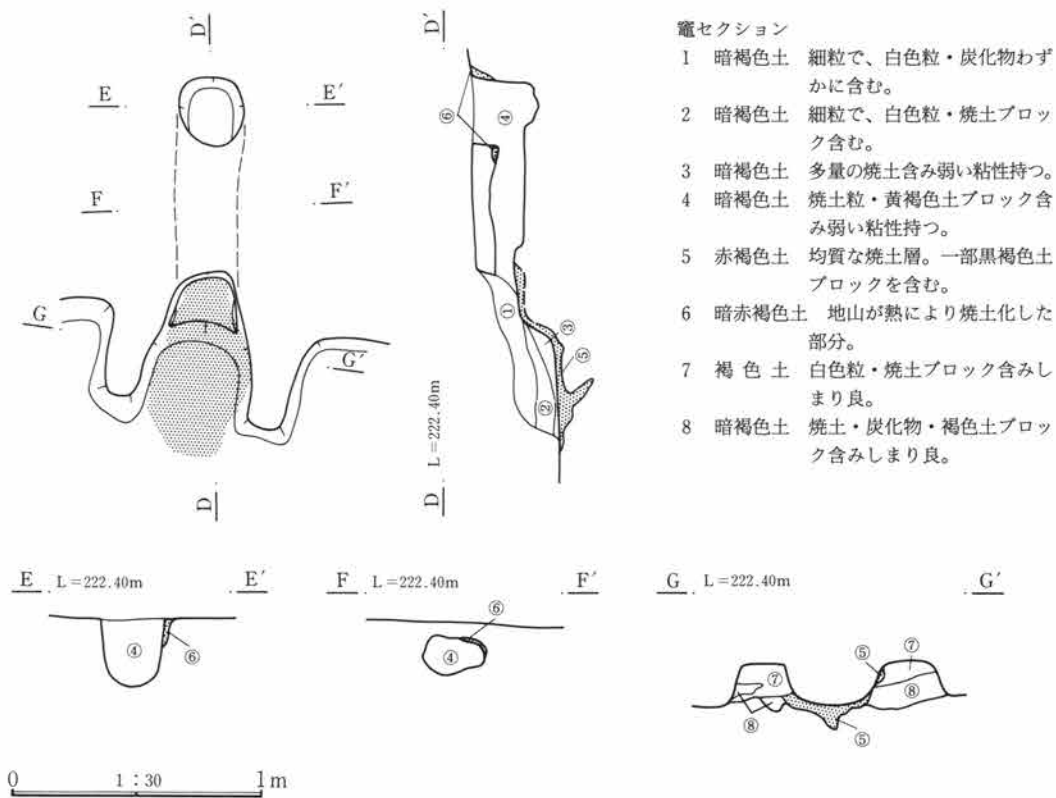
調査所見 住居・竈の形状より古墳時代後期の住居と推測される。



ベルトセクション

- 1 暗褐色土 緻密で白色粒・小礫含む。
- 2 暗褐色土 緻密で白色粒含み弱い粘性持つ。
- 3 暗褐色土 2層より色調明るく、粘性強い。

第310図 G-58号住居跡



第311図 G-58号住居竈

G-59号住居跡 (PL43・139)

位置 Gf・Gg-76・77グリッド 主軸方位 N-17°-W 残存壁高 0.58m **重複** G-61・62住に切られる。
規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、長辺6.51m・短辺6.72mと、わずかに短辺方向が長い。周壁はほぼ直進し、線形の乱れは少ない。竈は北側に築かれ、住居主軸はかなり西にふれる。

床面 床面は地山暗褐色土に一致。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の中央よりも東側に所在。袖が住居内に作り出される。焚口幅54cm・燃烧部長54cm。右袖の先端燃烧部側に板状の砂岩の袖石がみられる。燃烧部の床面には焼土面が発達している。くりぬき式の煙道は天井部も残存している。煙道長132cm。

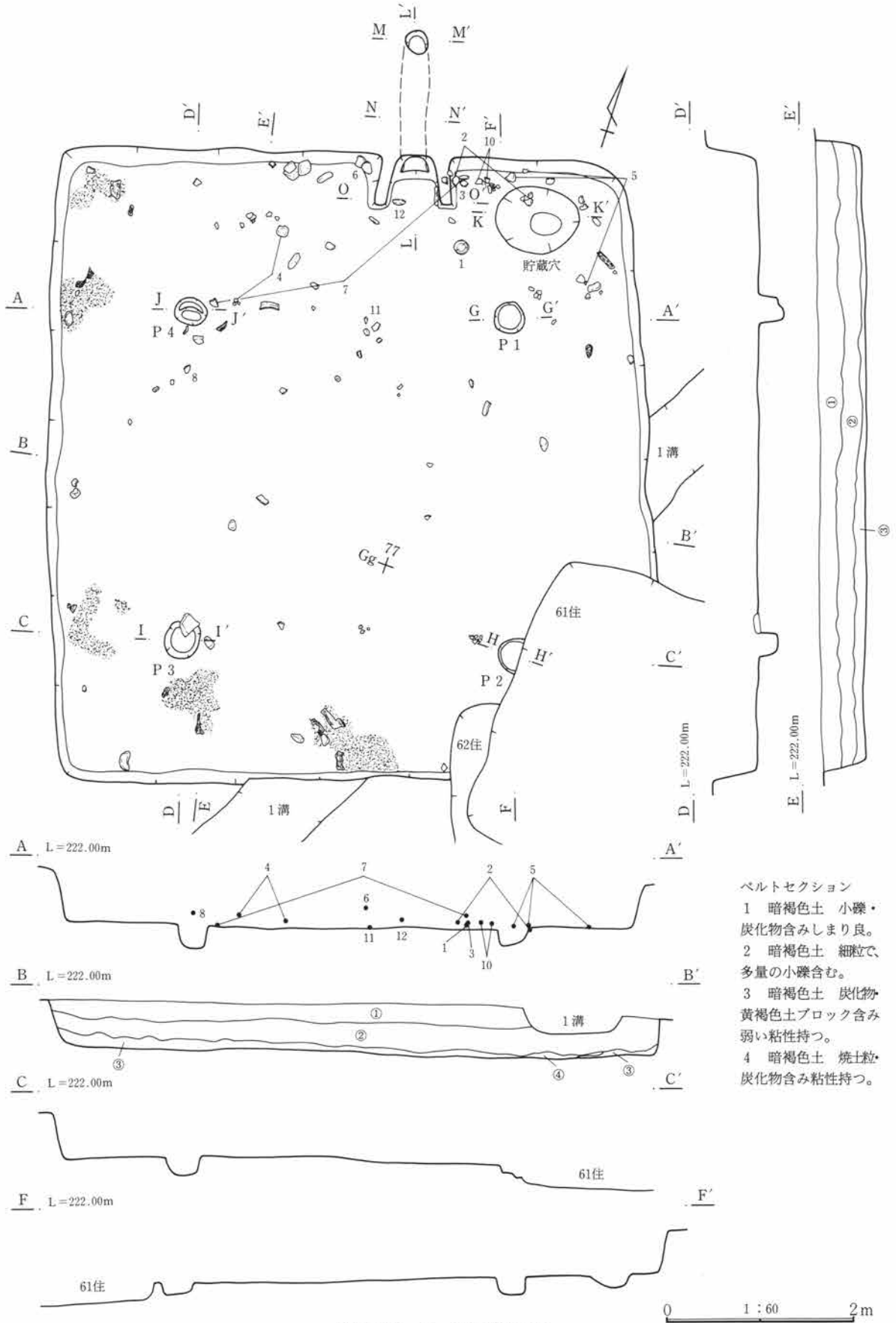
貯蔵穴 住居の北東隅に所在。形状は住居の長辺方向に長い楕円形。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。形状・深さともに類似しており、ほぼ対角線上に位置する。

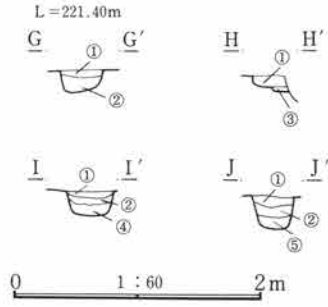
出土遺物 遺物は住居内に散在しているが、竈・貯蔵穴付近を中心とした住居北半にやや集中するようである。いずれも床面直上から上25cm程の間に分布している。主な器種は、土師器坏(1~6)・高坏(7)・甕(10~12)がある。また、床面より若干高い位置から須恵器坏(8)が、覆土中より須恵器蓋(9)が出土しているが、他の遺物に比べやや新しく、住居廃絶後の混入と推定される。

掘り方 なし。

調査所見 住居床面にかかなりの炭化材・炭化物が分布しており、焼失住居と思われる。住居の時期は出土遺物より古墳時代後期と推定される。

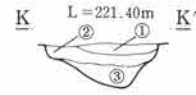


第312図 G-59号住居跡



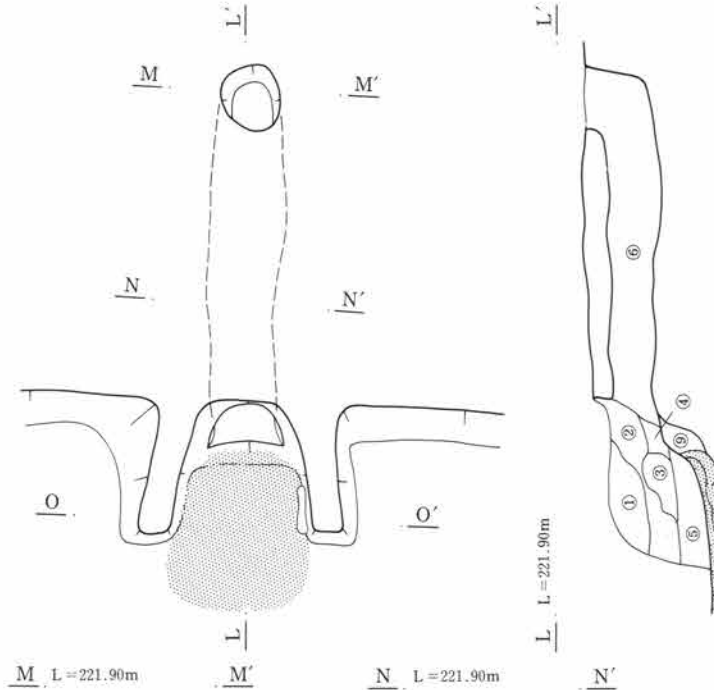
ピットセクション

- 1 暗褐色土 小礫・炭化物若干含む。
- 2 褐色土 小礫若干含む。
- 3 褐色土 黄色粒・暗褐色土若干含みしまり良。
- 4 褐色土 2層に似るが、より粗粒の小礫含む。
- 5 褐色土 若干の小礫、少量の炭化物含む。



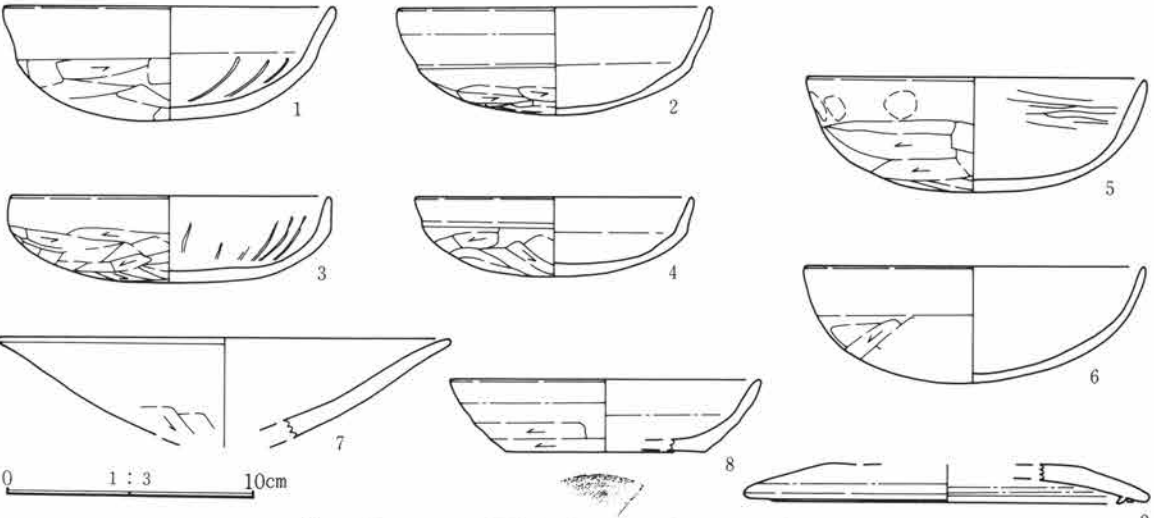
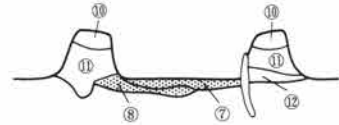
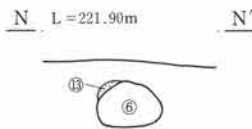
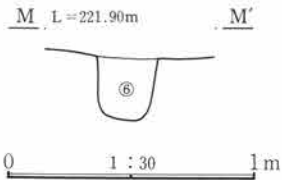
貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 黄色粒・小礫・微細炭化物含み粘性持つ。
- 2 黒褐色土 多量の炭化物、若干の黄色粒・小礫・焼土粒含み粘性持つ。
- 3 褐色土 砂礫質で、若干の焼土粒・微細炭化物含む。



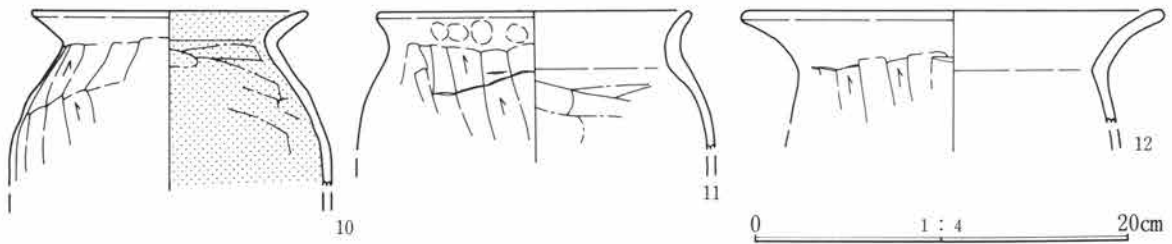
竈セクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土粒若干含みしまり良。
- 2 褐色土 若干の白・黄色粒、焼土粒、わずかの小礫含む。
- 3 暗褐色土 黄色粒・微細炭化物若干含む。
- 4 褐色土 若干の黄色粒・小礫含む。
- 5 褐色土 焼土・炭化物・小礫含み弱い粘性持つ。
- 6 暗褐色土 若干の黄色粒・小礫・焼土粒・焼土ブロック含む。
- 7 暗褐色土 多量の焼土、黄色粒若干含む。
- 8 暗赤褐色土 多量の焼土含む。
- 9 暗褐色土 黄色粒・小礫・焼土粒・炭化物若干含む。
- 10 黒褐色土 黄色粒・小礫若干含む。
- 11 暗褐色土 若干の黄色粒・小礫・焼土粒含む。
- 12 暗褐色土 焼土粒・焼土ブロック含む。
- 13 暗赤褐色土 地山黄褐色砂礫層が熱により焼土化した部分。



第313図 G-59号住居竈、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第314図 G-59号住居出土遺物実測図②

G-59号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 口縁一部 欠	口 13.1 底 — 高 4.5	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ後放射状暗文施文。	
2	土師器 坏	床密着 1/2	口(12.2) 底 — 高 4.3	①砂粒(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。	
3	土師器 坏	床密着 3/4	口 12.4 底 — 高 3.5	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ後放射状暗文施文。	口縁内外面に黒色漆 状の付着物わずかに 残る
4	土師器 坏	床密着 3/5	口 10.8 底 — 高 3.1	①微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。	
5	土師器 坏	床密着 3/4	口 13.1 底 — 高 4.5	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、指頭圧痕あり。体部外面へら 削り。内面横ナデ後へら磨き。	
6	土師器 坏	+14cm 3/4	口 13.4 底 — 高 4.6	①砂粒(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナ デ。	器表面の摩滅激しい
7	土師器 高坏	床密着 坏部3/5	口(17.9) 底 — 高 —	①砂粒・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。坏部内面 横ナデ。	
8	須恵器 坏	+11cm 1/2	口(11.9) 底(8.0) 高 2.9	①細砂・黒色粒子含 む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。体部外面下半回転へら削り。底部回 転へら切り。	
9	須恵器 蓋	覆土 天井~口 縁1/2	口(16.0) 摘 — 高 —	①微砂粒・黒色粒子 含む ②堅緻 ③黄灰色	ロクロ整形。天井部回転へら削り。内面にかえし 貼付。つまみ欠損。	
10	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位1/4	口(14.4) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③暗赤色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横 ナデ。	胴部内面に煤付着
11	土師器 甕	床密着 口~胴部 上位1/4	口(16.8) 底 — 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面 へら削り、内面横ナデ。	
12	土師器 甕	カマド内 口~胴部 上位1/2	口(22.0) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へら削り、内面横 ナデ。	

G-60号住居跡 (PL44・139)

位置 Gk-81グリッド 主軸方位 N-2°-E 残存壁高 0.19m 重複 なし

規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、長辺2.01m・短辺1.90mと、わずかに長辺が長い。非常に小規模な住居である。周壁の乱れは少ないが、若干四隅が丸味を帯びている。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

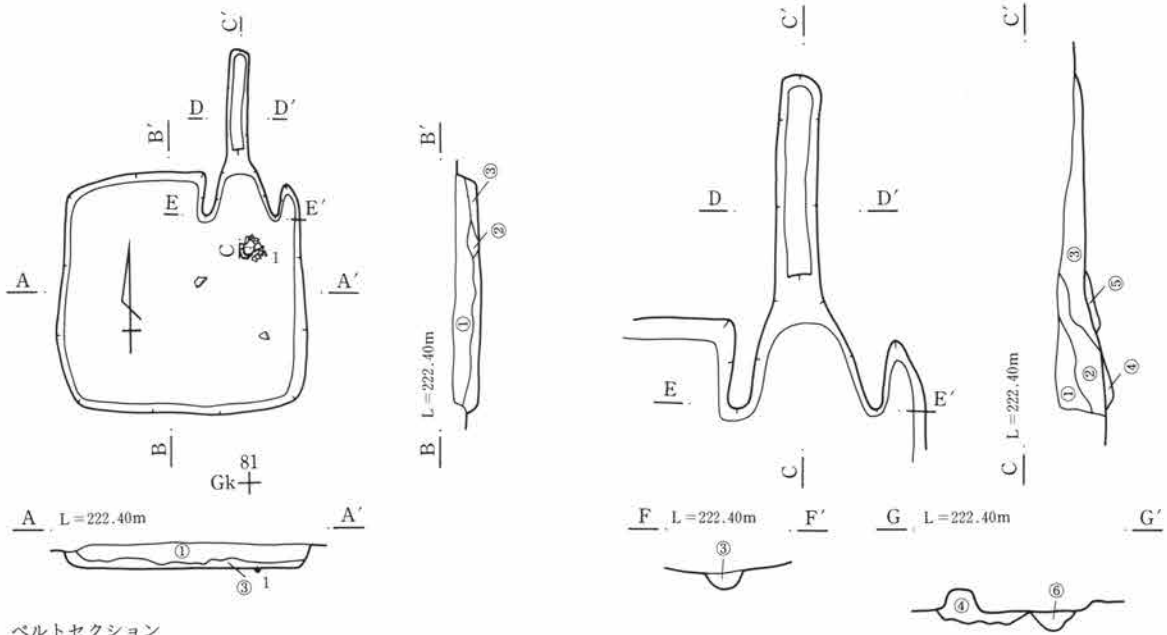
床面 床面は地山褐色砂礫質土に一致。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の東端に所在。袖が住居内に作り出される。焚口幅43cm・燃焼部長56cm。煙道は上部を削平され下底部が残るのみである。煙道長78cm。

貯蔵穴 なし。**周溝** なし。**柱穴** なし。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、床面直上に数片が散らばるのみ。主な遺物は、竈前から出土した土師器の甕の胴~底部にかけての破片(1)があるだけである。**掘り方** なし。

調査所見 出土遺物が少なく時期の確定は困難だが、住居および竈形状から古墳時代後期の可能性が高い。



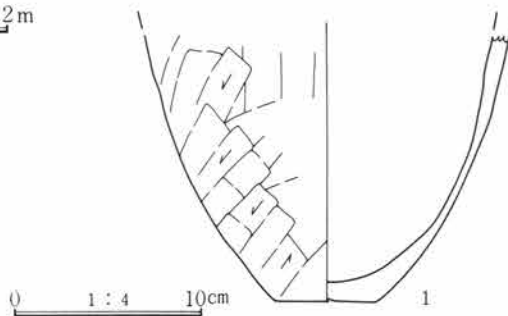
ベルトセクション

- 1 黒色土 少量の小礫、若干の黄色粒・焼土・炭化物含む。
- 2 黒色土 1層より焼土の混入多い。
- 3 黒褐色土 黄灰色砂質土ブロック若干含ましまりやや悪い。

竈セクション

- 1 黒褐色土 小礫・炭化物若干、焼土わずか含む。
- 2 黒褐色土 焼土若干、小礫・炭化物わずか含む。
- 3 暗褐色土 比較的均質で弱い粘性持つ。まれに小礫混入。
- 4 暗褐色土 小礫若干、焼土・炭化物わずか含む。
- 5 暗褐色土 均質・細粒。白色粒・炭化物わずか含みしまり良。
- 6 暗褐色土 黄色土・小礫わずか含む。

0 1:60 2m



0 1:30 1m

第315図 G-60号住居跡、出土遺物実測図

G-60号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 甕	床密着 胴下部~ 底部1/2	口 — 底 5.5 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③灰褐色	胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	

G-61号住居跡 (PL44・139・140)

位置 Gf・Gg-76グリッド 主軸方位 N-3°-E 残存壁高 0.73m 重複 G-59・62住に切られる。

規模と形状 形状は横長の長方形であるが、西壁に比べ東壁が若干長い。長辺3.97m・短辺3.34m。掘り込みは深く壁の残りは良好であるが、やや外反している。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

床面 床面は地山褐色土にほぼ一致する。貼り床などはみられない。

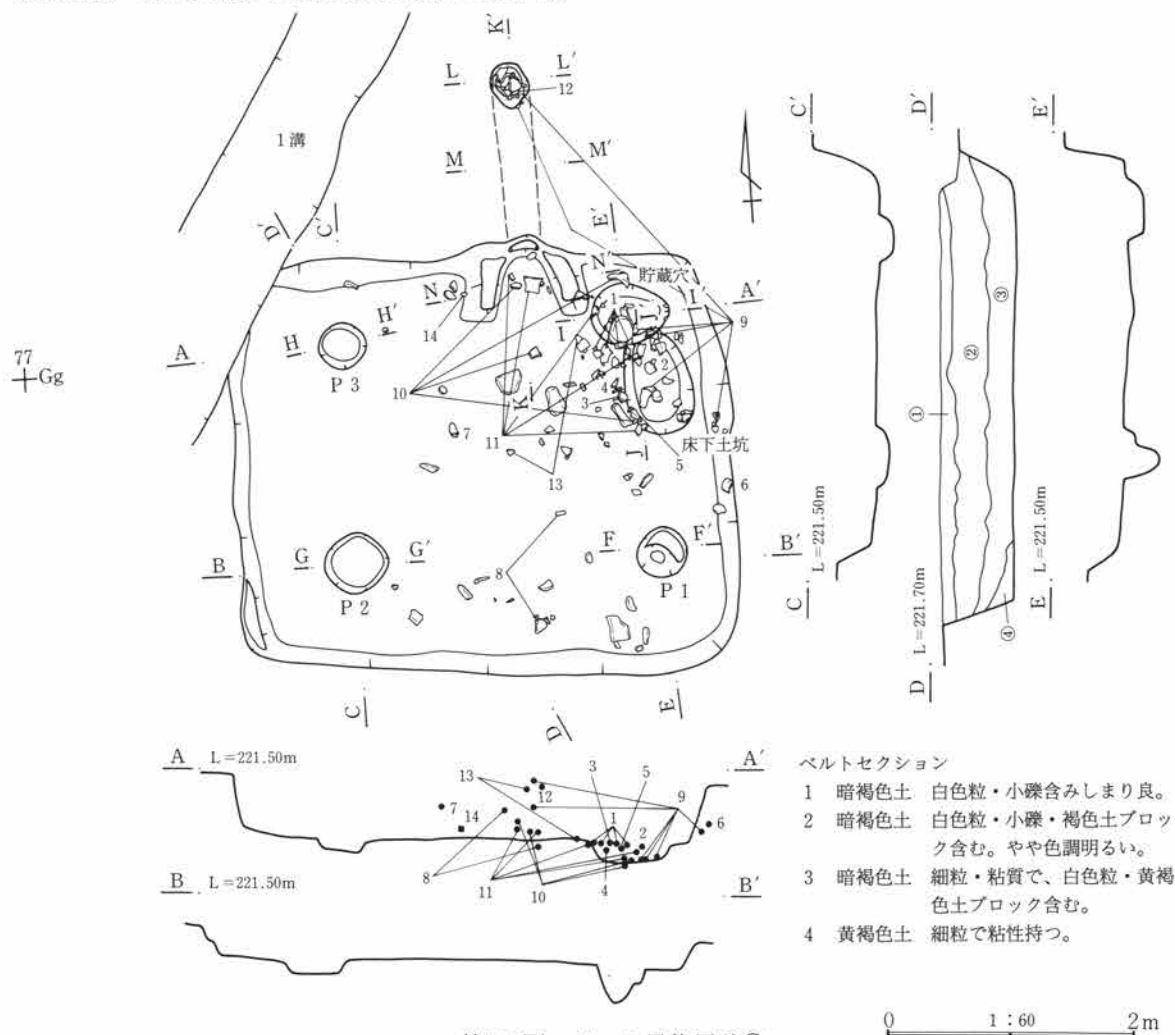
竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。袖が住居内に作り出される形状を呈する。焚口幅54cm・燃烧部長66cm。燃烧部床面と煙道入り口の上には、発達した焼土面がみられる。くりぬき式の煙道は天井部も残存しており、煙道長は135cmである。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居の長辺方向に長い楕円形。周溝 なし。

柱穴 3基の小ピット検出。いずれもほぼ対角線上に位置するが、北東隅付近には見つからなかった。ピット1はしっかりとした掘り込みがみられたが、他の2基はかなり浅く、柱穴とするには疑問が残る。

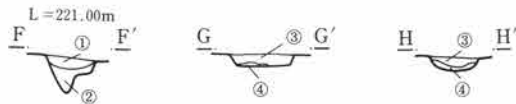
出土遺物 遺物は竈と貯蔵穴周辺を中心に分布。大半は床面直上より出土している。主な器種は、土師器坏(1~5)・甕(9~11)・甑(12・13)、須恵器坏(6・7)・蓋(8)がある。土師器は床面上や掘り方、竈の煙道内などから出土しているのに対し、須恵器の坏は覆土中位に位置していた。また竈左袖脇より石製の紡錘車(14)が得られている。掘り方 住居の東壁際より床下土坑を1基検出。

調査所見 出土遺物より奈良時代の住居とわかる。



第316図 G-61号住居跡①

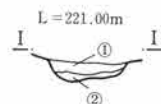
第2節 F・G区



ピットセクション

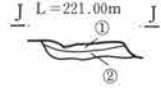
- 1 暗褐色土 白色粒含みしまり良。
- 2 暗褐色土 1層に似るが、黄色土ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 白色粒・黄色土ブロック含みしまり良。
- 4 黄褐色土 細粒・粘質。細粒の黄色粒含む。

0 1:60 2m



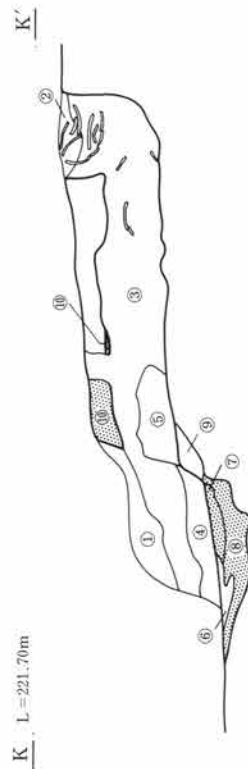
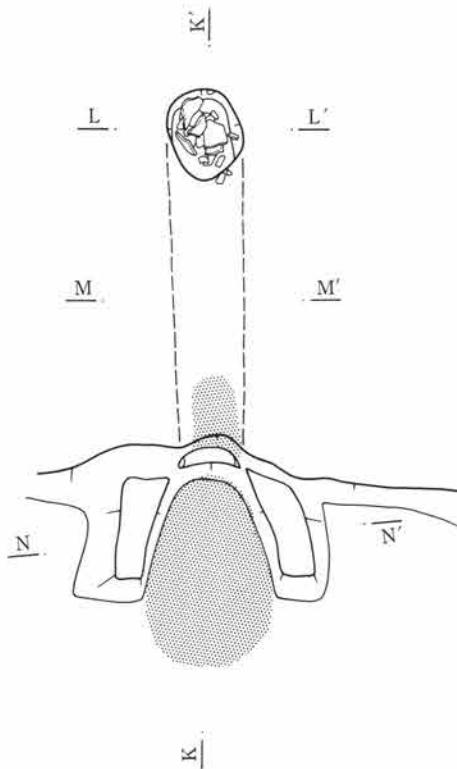
貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 黄色粒・炭化物含みしまり良。
- 2 黄褐色土 細粒の砂礫を少量含む。



床下土坑

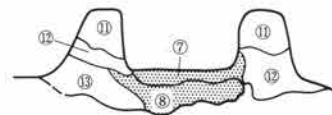
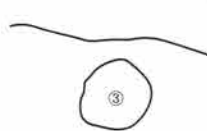
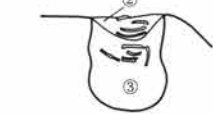
- 1 暗褐色土 焼土ブロック含み粘性持つ。
- 2 暗褐色土 細粒で粘性持つ。



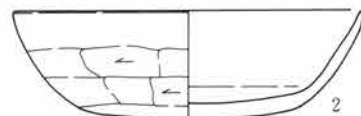
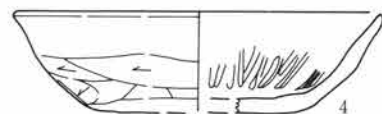
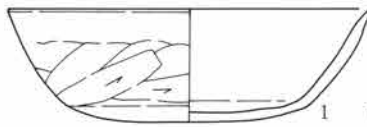
竈セクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、小礫、焼土粒若干含みしまり良。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、焼土粒若干含みしまり良。
- 3 褐色土 白・黄色粒、焼土若干含み弱い粘性持つ。
- 4 褐色土 多量の焼土、若干の微細炭化物含み粘性持つ。
- 5 褐色土 かなりの焼土含む。まれに焼土ブロック混入。
- 6 褐色土 白色粒・焼土粒若干含みしまり良。
- 7 暗赤褐色土 多量の焼土、若干の白色粒・暗褐色土含みしまり良。
- 8 暗赤褐色土 7層より焼土の混入やや少なく、橙色焼土ブロック含む。
- 9 褐色土 白色粒・焼土粒・微細炭化物含みしまり良。
- 10 暗赤褐色土 地山が熱により焼土化した部分。硬くしまる。
- 11 褐色土 白色粒・小礫・焼土粒・微細炭化物若干含みしまり良。
- 12 褐色土 白色粒・小礫・焼土を若干含みしまり良。
- 13 褐色土 白色粒・小礫・焼土粒・炭化物含みしまり良。

L L=221.70m L' M L=221.70m M' N L=221.70m N'



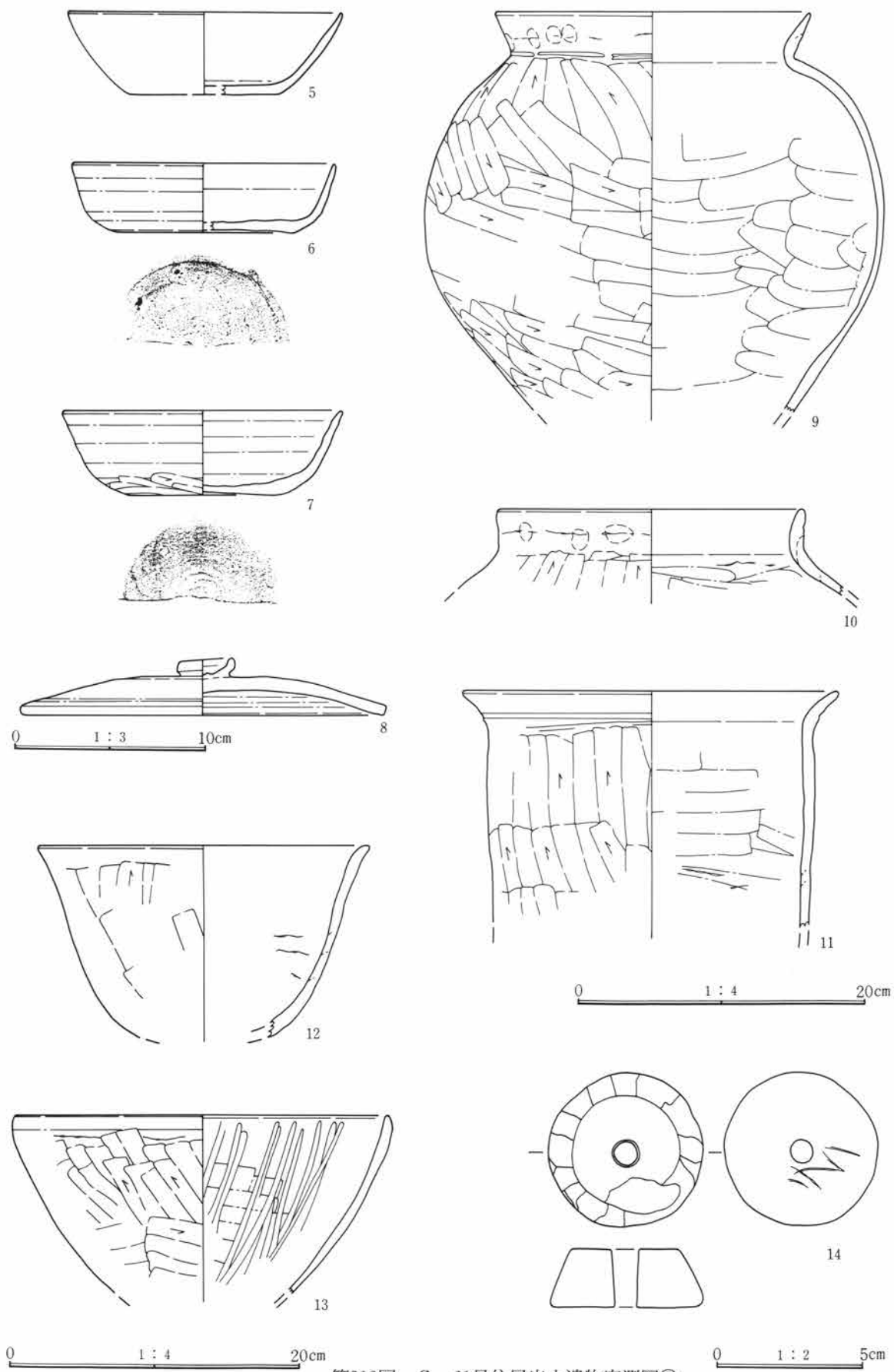
0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第317図 G-61号住居跡②、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第318図 G-61号住居出土遺物実測図②

G-61号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 14.4 底 9.6 高 4.4	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。			
2	土師器 坏	床密着 $\frac{2}{3}$	口 13.8 底 6.6 高 4.2	①細砂（ごくまれに 小礫）含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。			
3	土師器 坏	床密着 $\frac{2}{3}$	口 15.4 底 8.1 高 4.0	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ後放射状ヘラ磨き。			
4	土師器 坏	床密着 $\frac{1}{3}$	口(14.4) 底(8.8) 高 4.0	①細砂（ごくまれに 小礫）含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後放射状ヘラ磨き。			
5	土師器 坏	床密着 $\frac{1}{3}$	口(14.0) 底(7.8) 高 4.2	①細砂（ごくまれに 小礫）含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅		
6	須恵器 坏	+18cm $\frac{1}{4}$	口(13.5) 底(9.2) 高 3.6	①細砂・黒色微粒子 含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。			
7	須恵器 坏	+27cm $\frac{1}{2}$	口(14.2) 底(7.6) 高 4.3	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後、底部・胴部下 位手持ちヘラ削り。			
8	須恵器 蓋	床密着 $\frac{1}{3}$	口(18.8) 摘 2.9 高 2.9	①微砂粒・黒色粒子 含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。天井部回転ヘラ削り。つまみ貼付。			
9	土師器 甕	カマド煙 道内 底部欠	口 21.8 底 — 高 —	①細砂（ごくまれに 小礫）含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
10	土師器 甕	床密着 口縁 $\frac{2}{3}$	口 21.0 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
11	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位 $\frac{1}{3}$	口(26.0) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に沈線一条めぐる。胴 部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
12	土師器 甕	煙道内 口～胴部 上半 $\frac{1}{3}$	口(22.7) 底 — 高 —	①砂粒・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横 ナデ、接合痕あり。	器表面かなり剥落		
13	土師器 甕	床密着 口～胴部 $\frac{1}{3}$	口(25.6) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、胴部外面ヘラ削り。内面横ナ デ後ヘラ磨き。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
14	紡錘車	床密着 一部欠	5.2	5.3	2.0	68.1	砥沢石	全面を丁寧研磨。表面一部欠損。

G-62号住居跡 (PL44・140)

位置 Gf-75・76グリッド 主軸方位 N-22°-W 残存壁高 0.45m 重複 G-61住に切られる。

規模と形状 一部重複する住居によって破壊されているため正確な形状は不明であるが、北側に竈があったものと推定される。したがって、形状はわずかに縦長の長方形であろう。現状で、長辺5.28m・短辺4.79mである。周壁は一部小さく蛇行し、南西隅では壁の崩落がみられる。住居主軸はかなり西にふれる。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 なし。おそらく北側に所在したが、重複する住居によって破壊されたものと推測される。

貯蔵穴 検出できず。重複する住居に破壊されたものと思われる。周溝 なし。

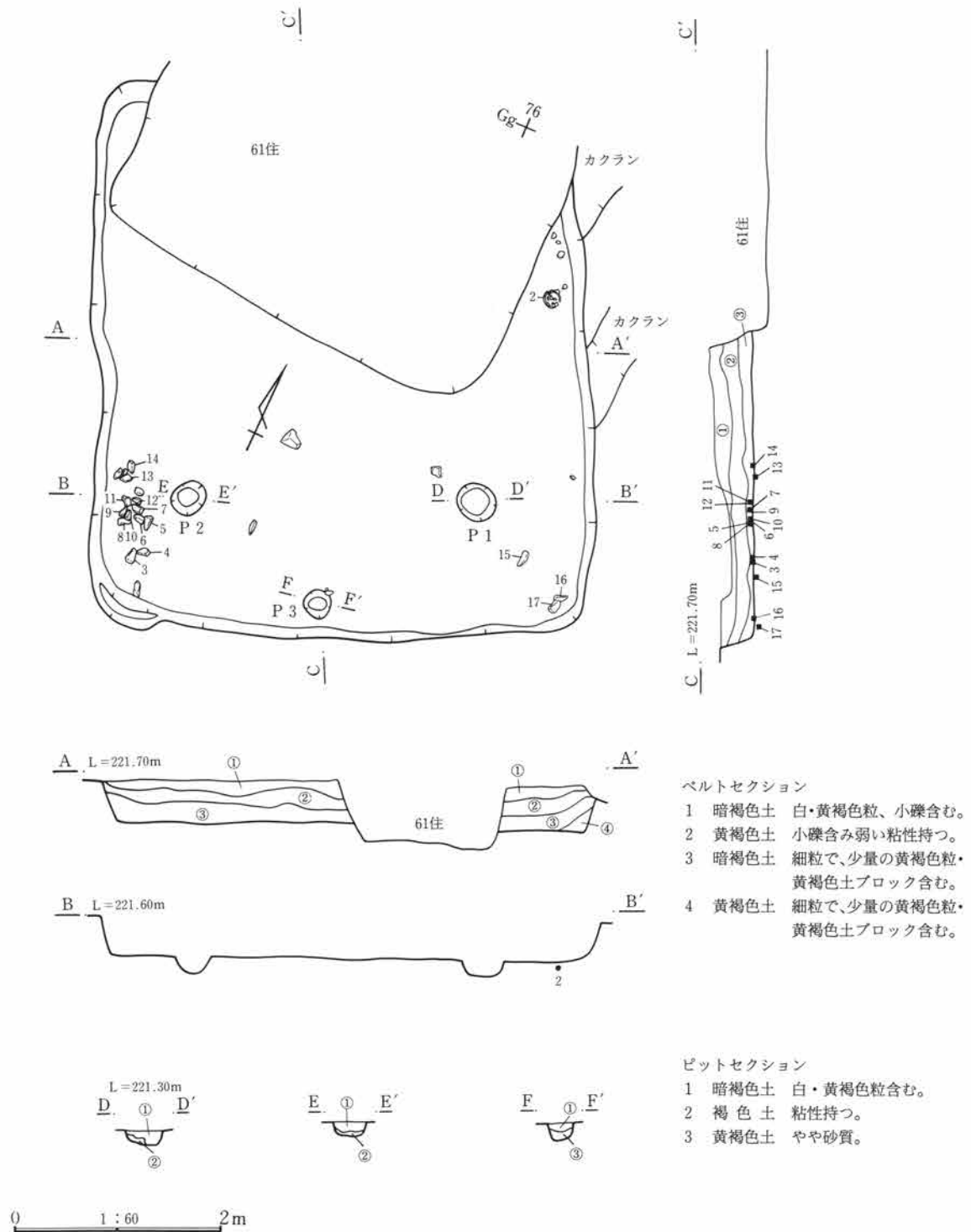
柱穴 住居の南側より2基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するものと思われる。北側の2基は破壊さ

第3章 検出された遺構と遺物

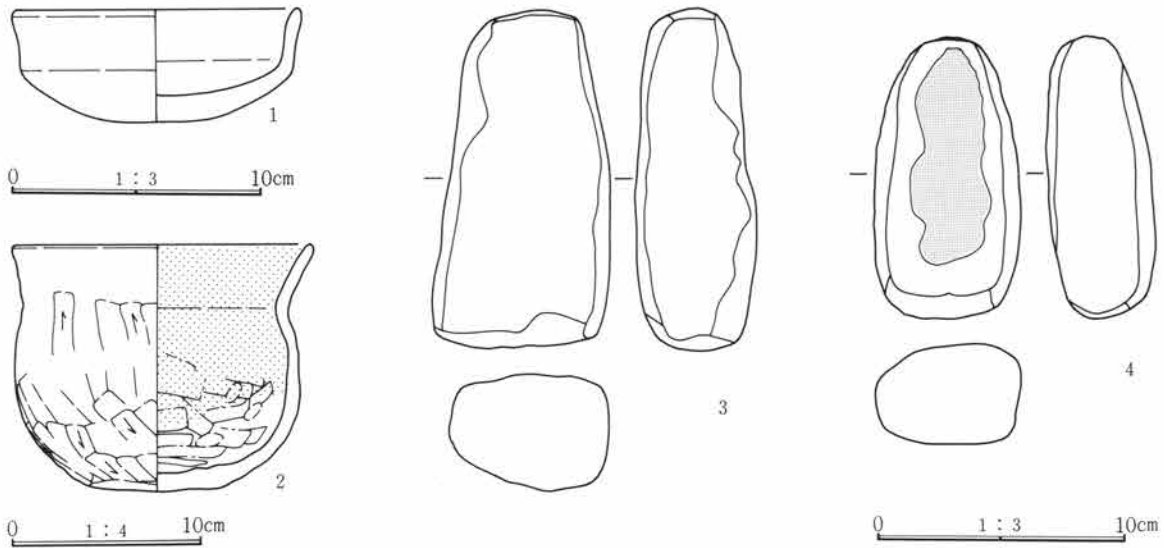
れ失われている。また、南壁際のほぼ中央にも1基あり、入り口施設にともなうものと思われる。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、住居内に散在している。東壁際より、土師器小型甕(2)が半ば床面に埋まるような形で出土している。このほかには、重複する住居の埋土内より、当住居に属すると思われる土師器器坏(1)が得られている。また、南西隅の床面上からは、砥石2点(3・4)・こもあみ石13点(5~17)がまとまって出土している。 **掘り方** なし。

調査所見 住居形状や主軸の向きなどから、古墳時代後期の住居と推定される。



第319図 G-62号住居跡



第320図 G-62号住居出土遺物実測図

G-62号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	計測値 (cm・g)				石材	特徴	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
				全長	幅	厚さ	重量				
1	土師器 坏	覆土 1/3	口(11.5) 底 — 高 4.4						①胎土 ②焼成 ③色調	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。器表面かなり摩滅。	
2	土師器 小型甕	床密着 3/5	口 15.7 底 7.3 高 13.0						①胎土 ②焼成 ③色調	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、指頭圧痕あり。	内面胴部中位以上に弱い煤付着
3	砥石	床密着 完形	13.3	7.1	4.7	592.5	砥沢石	未使用の砥石。全面を敲打によって整形。			
4	砥石	床密着 完形	11.1	5.8	3.85	362.1	砥沢石	表面に研磨面見られるが、そのほかは未使用。			
5	こもあみ石	床密着 完形	13.0	5.2	4.8	403.5	砂岩	棒状の亜角礫。			
6	こもあみ石	床密着 完形	11.9	7.7	4.3	531.0	粗粒安山岩	盤状の亜角礫。			
7	こもあみ石	床密着 完形	11.6	6.7	4.6	490.6	花崗岩	棒状の角礫。			
8	こもあみ石	床密着 完形	13.9	7.9	2.5	292.9	粗粒安山岩	盤状の亜角礫。			
9	こもあみ石	床密着 ほぼ完形	11.3	6.8	3.9	398.4	粗粒安山岩	棒状の亜角礫。一部欠損。			
10	こもあみ石	床密着 完形	11.5	7.0	4.5	319.1	チャート	盤状の角礫。			
11	こもあみ石	床密着 完形	11.5	6.9	5.0	394.8	ひん岩様岩石	盤状の亜角礫。			
12	こもあみ石	床密着 ほぼ完形	10.5	6.0	5.0	406.6	変質安山岩	棒状の円礫。一部欠損。			
13	こもあみ石	床密着 完形	13.3	7.7	3.2	350.5	砂岩	盤状の亜円礫。			
14	こもあみ石	床密着 完形	11.5	7.0	4.2	410.2	圧砕岩(原因不明)	同上。			
15	こもあみ石	床密着 完形	15.2	6.0	4.9	585.8	流紋岩	棒状の円礫。			
16	こもあみ石	床密着 完形	14.0	5.8	5.3	598.3	変質安山岩	棒状の亜角礫。			

第3章 検出された遺構と遺物

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
17	こもあみ石	床密着 完形	14.0	8.9	4.6	663.7	砂岩	盤状の亜角礫。

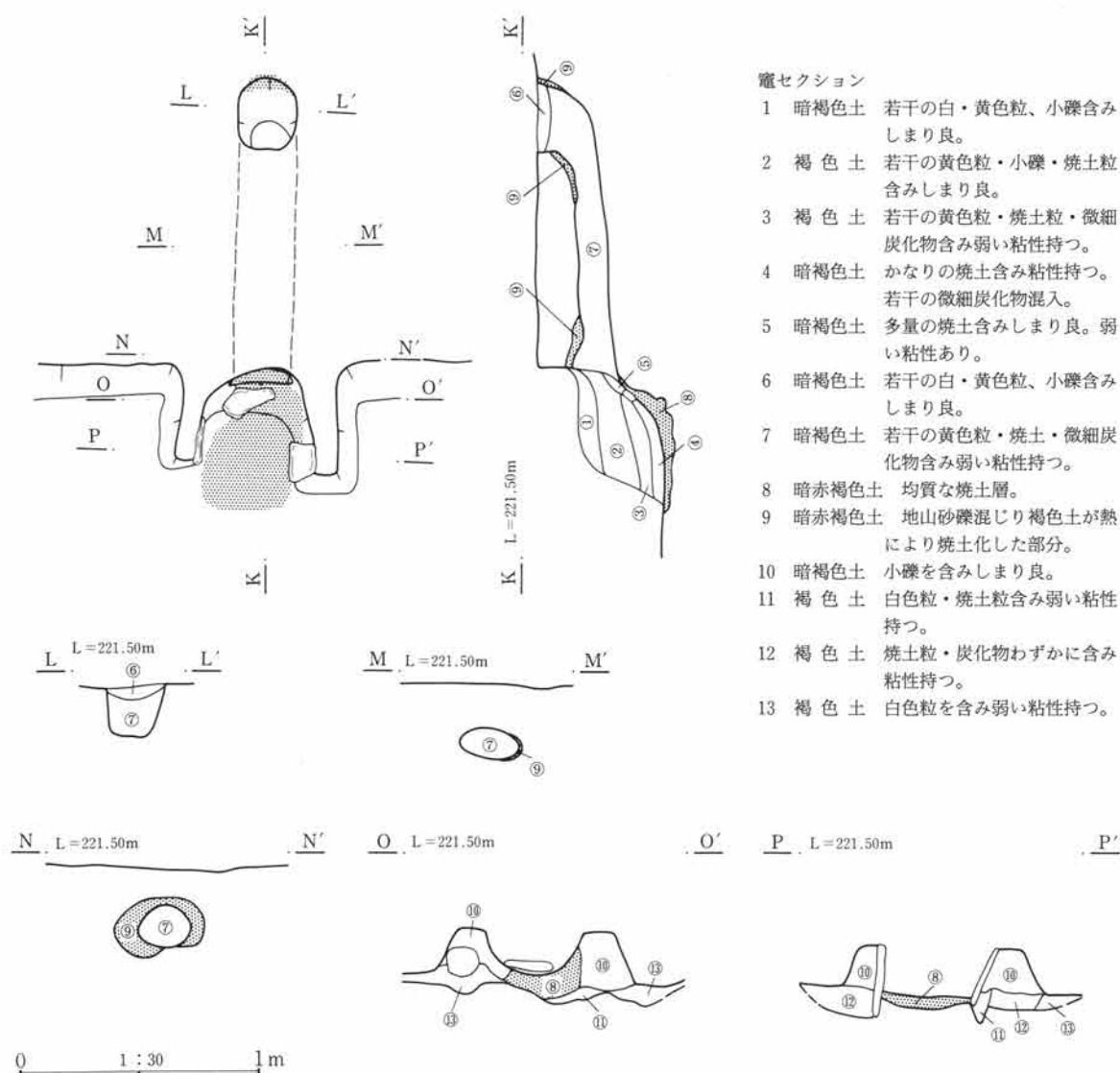
G-63号住居跡 (PL45・140・141)

位置 Gf-74・75、Gg-74・75グリッド 主軸方位 N-2°-E 残存壁高 0.56m

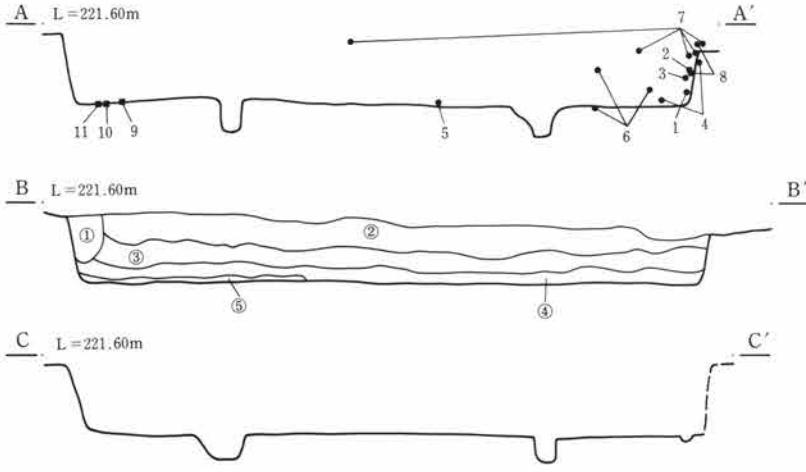
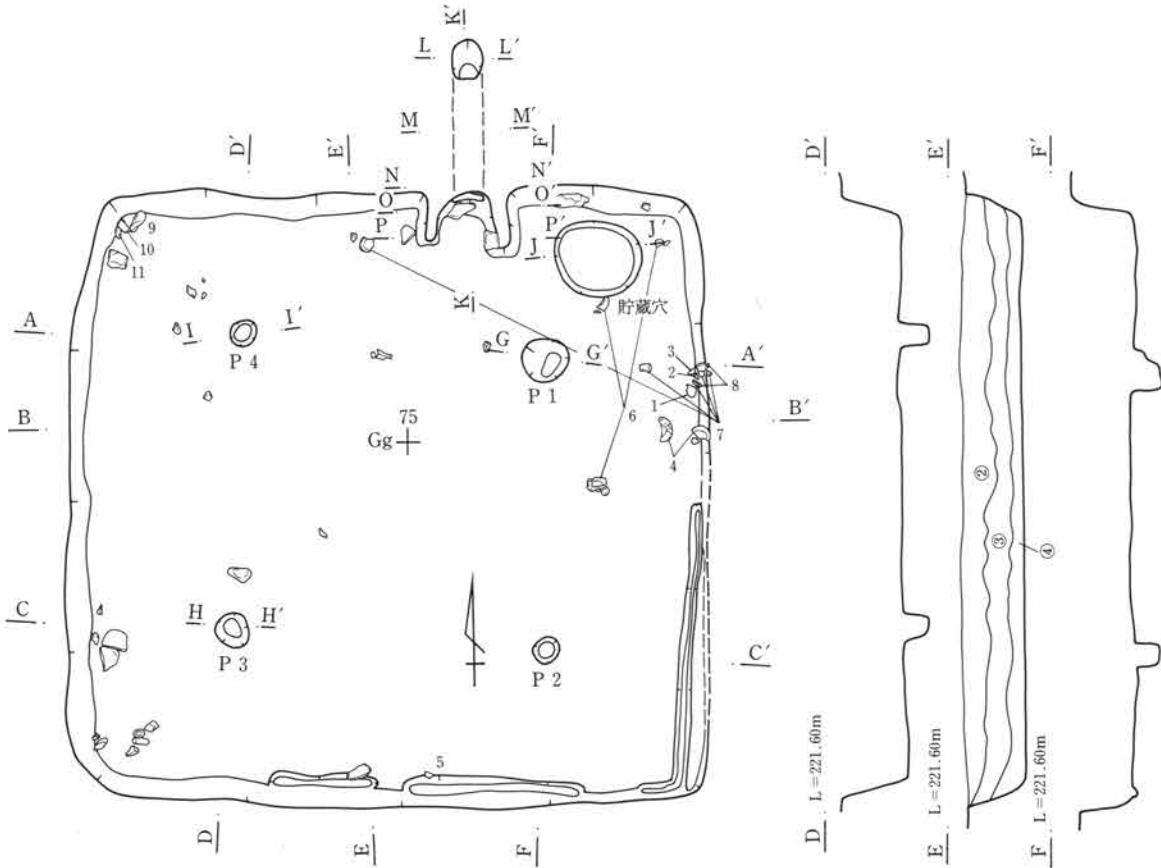
重複 G-35・64住を切る。

規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、長辺5.06m・短辺4.81mと、わずかに長辺が長い。調査時に重複する35住との前後関係を誤認したため、一部南東隅付近の壁を欠く。その他の周壁はやや外反するが、線形の乱れは少ない。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

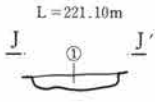


第321図 G-63号住居竈



ベルトセクション

- 1 暗褐色土 若干の白色粒・小礫・焼土粒含む。
- 2 暗褐色土 若干の白・黄色粒、小礫、焼土粒、微細炭化物含む。
- 3 暗褐色土 かなりの褐色土ブロック含む。焼土粒・炭化物若干混入。
- 4 暗褐色土 3層に似るが、褐色土ブロックの混入少ない。
- 5 褐色土 比較的均質で弱い粘性持つ。

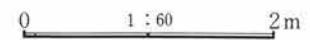


ピットセクション

- 1 暗褐色土 細粒で緻密。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒含む。
- 3 暗褐色土 細粒で粘性持つ。

貯蔵穴セクション

- 1 褐色土 焼土粒・小礫含みしまり良。



第322図 G-63号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。袖が住居内に作り出される形状を呈する。焚口幅39cm・燃燒部長37cm。両袖の先端燃燒部側に、板状の砂岩が袖石として据え付けられている。燃燒部内からも、奥壁に張り付くようなかたちで角礫状の砂岩が出土している。左袖内からも、袖材の一部として利用されていた砂岩が見つかっている。燃燒部の床面は、熱を受けて焼土化している。煙道はくりぬき式で、天井部分も崩落せずに残っていた。煙道長124cm。

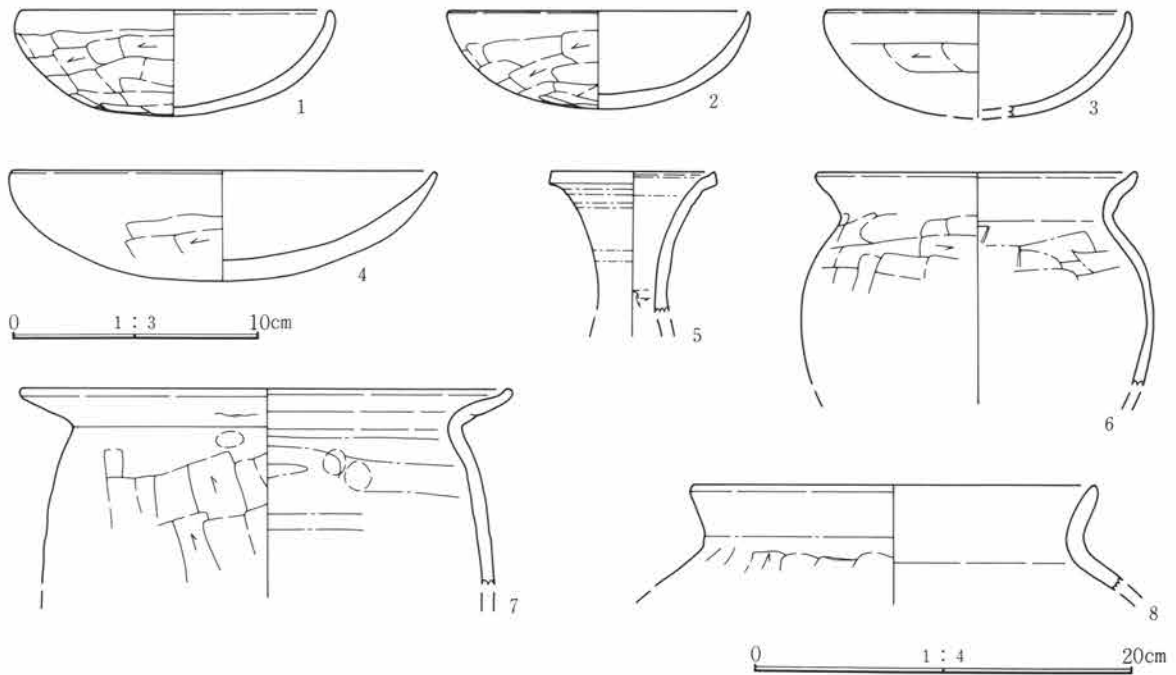
貯蔵穴 住居北東隅に所在。上面形状は、住居の長辺方向が長い楕円形。掘り込みは浅く、内部からの遺物の出土もなかった。

周溝 南壁と東壁際の一部で検出。上幅は10～15cm、深さ5cmほどである。

柱穴 4基の小ピット検出。いずれもかなり小規模であるが、ほぼ対角線上に位置している。

出土遺物 遺物量はかなり少ない。東壁際に若干まとまっている他は、住居内に小破片が散在するのみである。東壁際の遺物は、壁に貼り付くような形で出土している。主な器種は、土師器坏(1～4)・甕(6～8)、須恵器壺(5)がある。他に、住居北西隅の床面上より、こもあみ石と思われる円礫が3点(9～11)出土している。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



第323図 G-63号住居出土遺物実測図

G-63号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+11cm 1/3	口 12.4 底 — 高 4.1	①多量の細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。	
2	土師器 坏	+29cm 1/3	口(12.0) 底 — 高 3.8	①細砂(まれに小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へら削り。内面横ナデ。	

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
3	土師器 坏	+23cm 1/3	口(12.2) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。器表面かなり摩滅。			
4	土師器 坏	+4cm ほぼ完形	口16.7 底— 高4.3	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。器表面の摩滅激しい。			
5	須恵器 壺	+4cm 口～頸部	口8.7 底— 高—	①少量の微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。内面下位一部へラ削り。			
6	土師器 甕	床密着 口～胴部 上半	口(16.8) 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面へラナデ。			
7	土師器 甕	+40cm 口～胴部 上位	口(26.0) 底— 高—	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③明褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕・接合痕。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。			
8	土師器 甕	+27cm 口縁1/3	口(21.7) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
9	こもあみ石	床密着 完形	15.3	7.0	6.5	887.6	粗粒安山岩	棒状の亜角礫。
10	こもあみ石	床密着 完形	14.2	5.4	4.6	538.5	粗粒安山岩	棒状の円礫。
11	こもあみ石	床密着 完形	15.4	7.8	5.1	855.2	粗粒安山岩	盤状の円礫。

G-64号住居跡 (PL45・141)

位置 Gg・Gh-74グリッド **主軸方位** N-23°-W **残存壁高** 0.16m **重複** G-42・63住に切られる。
規模と形状 形状は南北方向に長い長方形。長辺5.24m・短辺4.35m。重複する住居によって、南西隅と北西部の大半を破壊されている。住居の掘り込みは浅く、残存壁高は他の時期の住居に比べかなり浅い。残存する周壁はほぼ直立・直進し、線形の乱れは少ない。住居主軸はかなり西にふれる。

床面 地山褐色砂礫質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

炉 検出できず。重複する住居によって大きく破壊されている住居北半部にあったものと思われる。

貯蔵穴 住居南東隅に小ピットがあるが、大きさ・深さともに小規模で内部からの遺物の出土もなく、貯蔵穴とするには疑問が残る。 **周溝** なし。

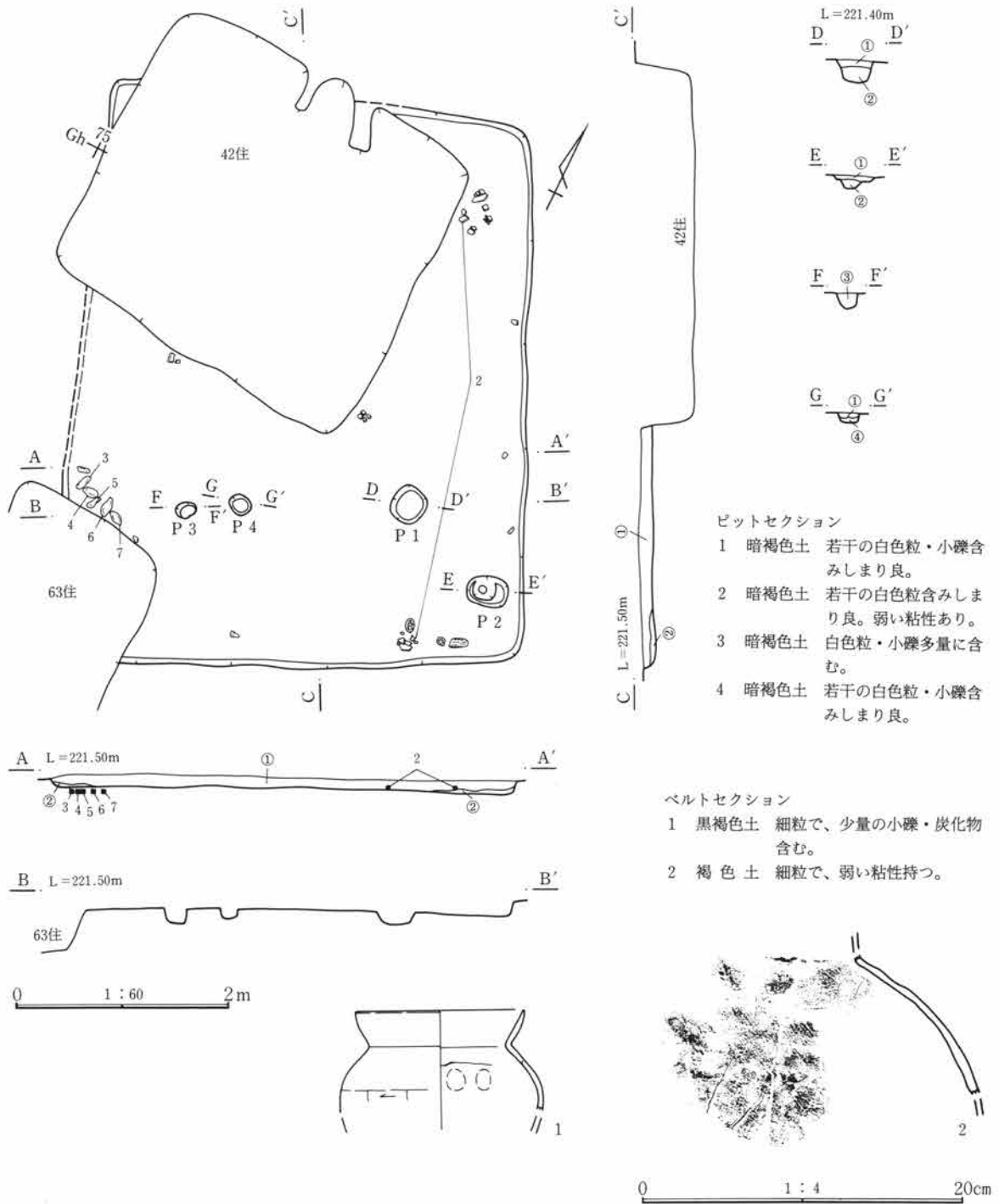
柱穴 3基の小ピットを検出。うち、大きさ・深さが類似し、位置関係がほぼ対称となっているピット1・2が柱穴と思われる。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、小破片が住居内に散在するのみ。主な遺物は、外面に刷毛目調整を持つ台付甕の胴部破片(2)と、重複する42号住の埋土から出土した小型壺の破片(1)があげられる。この他に、南西隅付近の床面直上より、こもあみ石と思われる棒状の円礫が5点(3～7)出土した。

掘り方 なし。

調査所見 住居の形状・出土遺物より、古墳時代中期の住居と思われる。

第3章 検出された遺構と遺物



第324図 G-64号住居跡、出土遺物実測図

G-64号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 壺	42住覆土 口~胴部 上位1/4	口(10.6) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り後横ナデ 内面横ナデ、指頭圧痕・接合痕あり。	
2	土師器 甕	床密着 頸~胴部 上半破片	口— 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③褐色	頸部外面横ハケ、胴部外面斜方向のハケ目。内面 ナデ。	

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
3	こもあみ石	床密着 完形	17.1	8.1	3.4	720.9	粗粒安山岩	盤状の円礫。
4	こもあみ石	床密着 完形	16.3	7.8	4.0	683.7	硬質泥岩	同上。
5	こもあみ石	床密着 完形	15.1	6.6	4.6	609.3	粗粒安山岩	棒状の円礫。
6	こもあみ石	床密着 完形	15.9	7.5	4.3	731.6	粗粒安山岩	盤状の円礫。
7	こもあみ石	床密着 完形	17.5	8.1	4.7	709.6	流紋岩	同上。

G-65号住居跡 (P L 45・141・142)

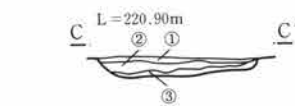
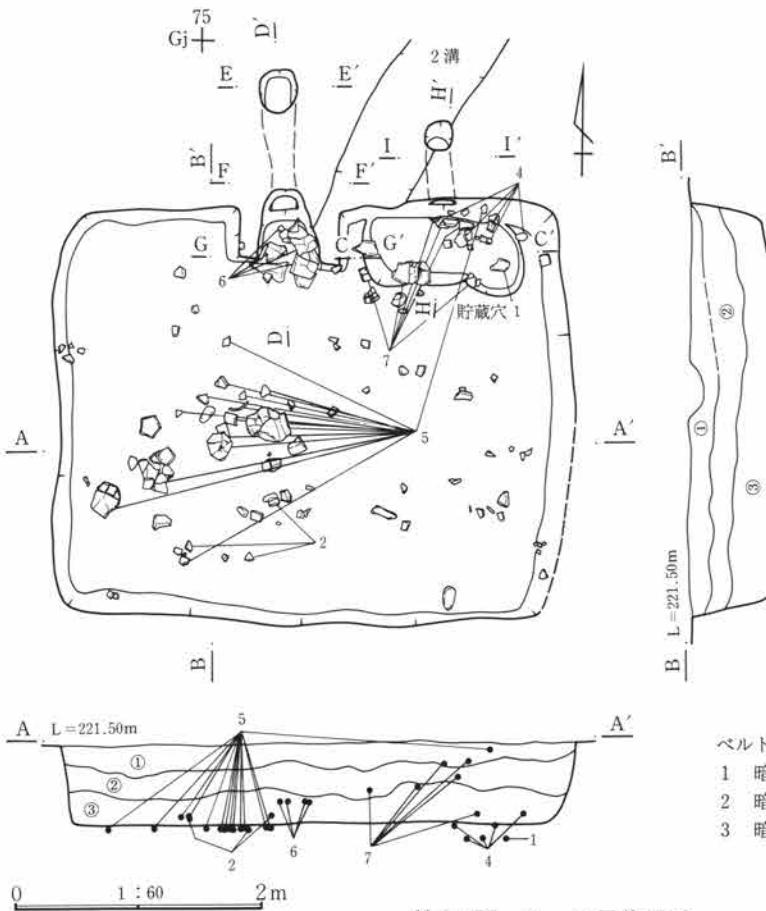
位置 Gi-74・75グリッド 主軸方位 N-S 残存壁高 0.66m 重複 G-66住を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺4.16m・短辺3.36mである。壁はわずかに外反するが、線形の乱れは小さい。竈は北側に築かれ、住居主軸は真北に一致する。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の中央よりもわずかに西側に所在(竈No.1)。袖が住居内に作り出される。焚口幅40cm・燃烧部長56cm。両袖先端の燃烧部側には、袖石として板状の砂岩が据えられている。また燃烧部の前からは、天井石として使われていた板状の砂岩が出土している。おそらく両袖の袖石上にかけられていたと思われる。煙道はくりぬき式で、天井部分も残存している。煙道長95cm。またこの竈の東側には、古い竈の煙道部が残

っている(竈No.2)。煙道長67cm。竈No.2の前に貯蔵穴が所在することから、No.2の廃絶後に竈No.1が築かれ、それにとまって貯蔵穴が作られたものと推定される。



- 貯蔵穴セクション
- 1 暗褐色土 細粒・均質で焼土ブロック・炭化物含む。粘性あり。
 - 2 褐色土 細粒・均質で多量の焼土含む粘性持つ。若干の炭化物混入。
 - 3 褐色土 若干の焼土含む均質な粘質土。

- ベルトセクション
- 1 暗褐色土 細粒で、少量の白色粒・小礫含む。
 - 2 暗褐色土 粘質褐色土ブロック含む粘性持つ。
 - 3 暗褐色土 2層より粘質褐色土の混入多い。

第325図 G-65号住居跡

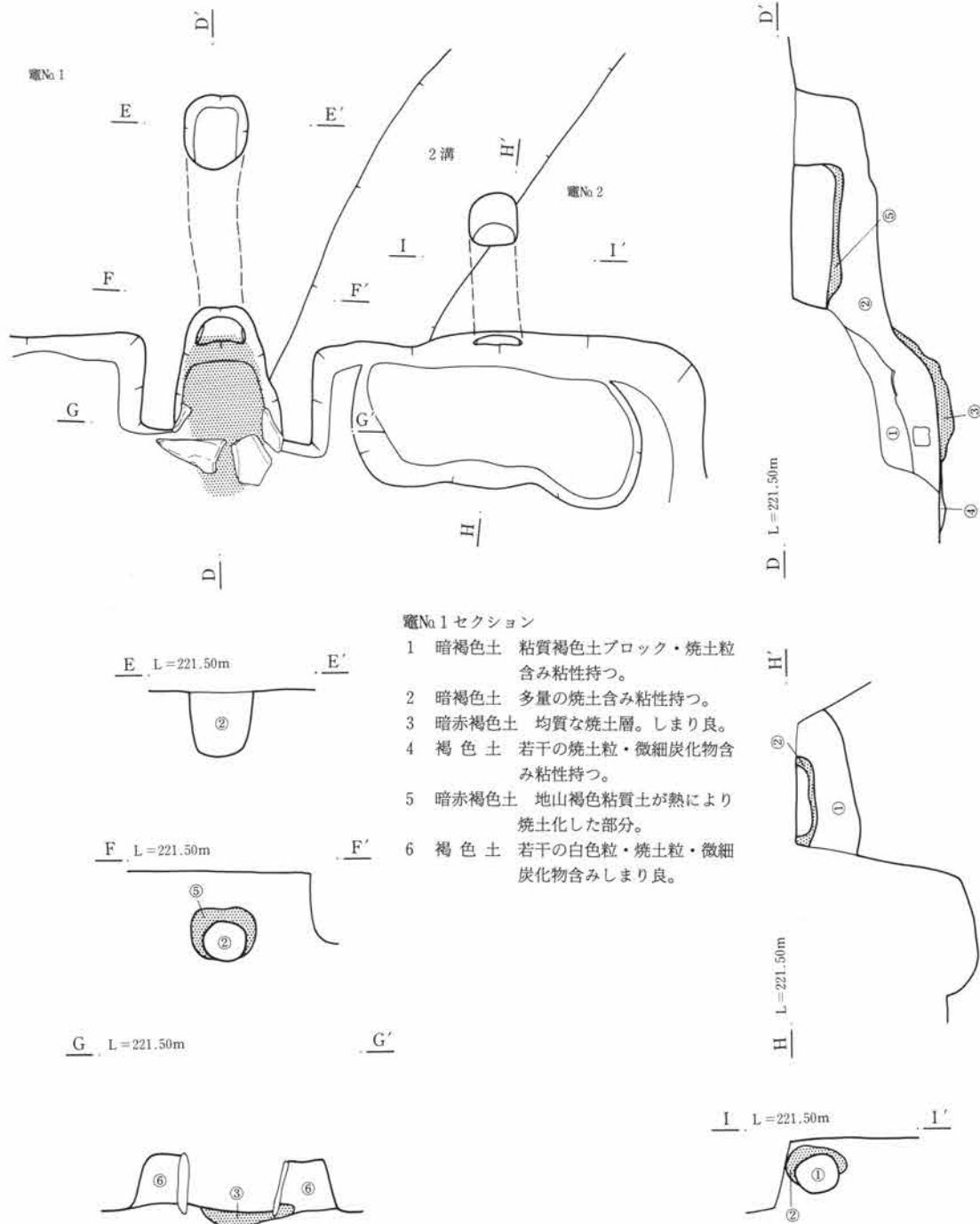
第3章 検出された遺構と遺物

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居の長辺方向に長い不正円形。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 比較的大型の破片が、竈・貯蔵穴周辺および住居西側の床面直上より出土している。主な器種は、土師器坏(1・2)・小型甕(4)・甕(5・6)、須恵器高台付坏(3)がある。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より奈良時代の住居と推定される。



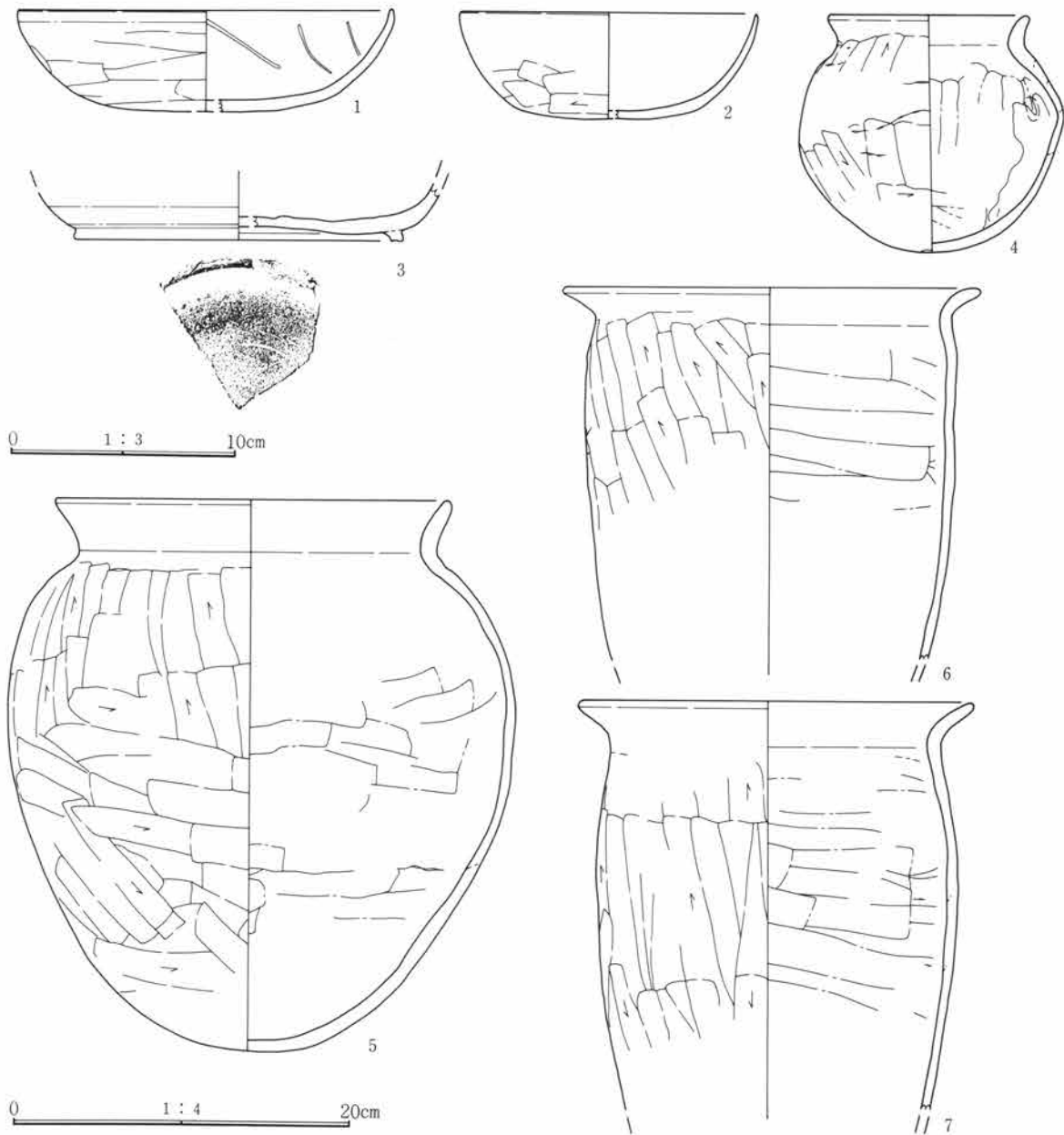
竈No. 1 セクション

- 1 暗褐色土 粘質褐色土ブロック・焼土粒
含み粘性持つ。
- 2 暗褐色土 多量の焼土含み粘性持つ。
- 3 暗赤褐色土 均質な焼土層。しまり良。
- 4 褐色土 若干の焼土粒・微細炭化物含
み粘性持つ。
- 5 暗赤褐色土 地山褐色粘質土が熱により
焼土化した部分。
- 6 褐色土 若干の白色粒・焼土粒・微細
炭化物含みしまり良。

竈No. 2 セクション

- 1 暗褐色土 若干の白色粒・焼土粒・黄褐色土ブロック含む。
- 2 暗赤褐色土 地山褐色粘質土が熱により焼土化した部分。

第326図 G-65号住居竈



第327図 G-65号住居出土遺物実測図

G-65号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	貯蔵穴内 2/5	口(16.2) 底— 高 4.4	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ後斜め方向の暗文施文。	器表面かなり摩滅
2	土師器 坏	床密着 1/4	口(12.8) 底— 高 4.5	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	
3	須恵器 高台付坏	66住覆土 体下半～ 底部1/2	口— 底(14.2) 高—	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ、高台貼付	
4	土師器 小型甕	貯蔵穴内 2/3	口 11.4 底— 高 13.7	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、接合痕 あり。胴部内面縦方向のナデ一部に胎土を後から 貼付した痕跡あり。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
5	土師器 甕	床密着 5%	口 22.6 底 — 高 32.0	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕あり。	
6	土師器 甕	カマド内 口～胴部 上半	口 24.3 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
7	土師器 甕	+11cm 口～胴部 上半	口(22.7) 底 — 高 —	①砂礫含む ②良好 ③赤褐色	口縁部内面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕有り。	

G-66号住居跡 (PL45・142)

位置 Gh・Gi-74グリッド 主軸方位 N-19°-W 残存壁高 0.38m 重複 G-65住に切られる。

規模と形状 住居北半の大半を失っているため正確な形状は不明だが、ほぼ正方形を呈するものと思われる。長辺3.11m、短辺は現状で3.15m。竈は北側に築かれていたものと思われるが、重複する住居によって破壊されている。住居主軸はかなり西にふれる。

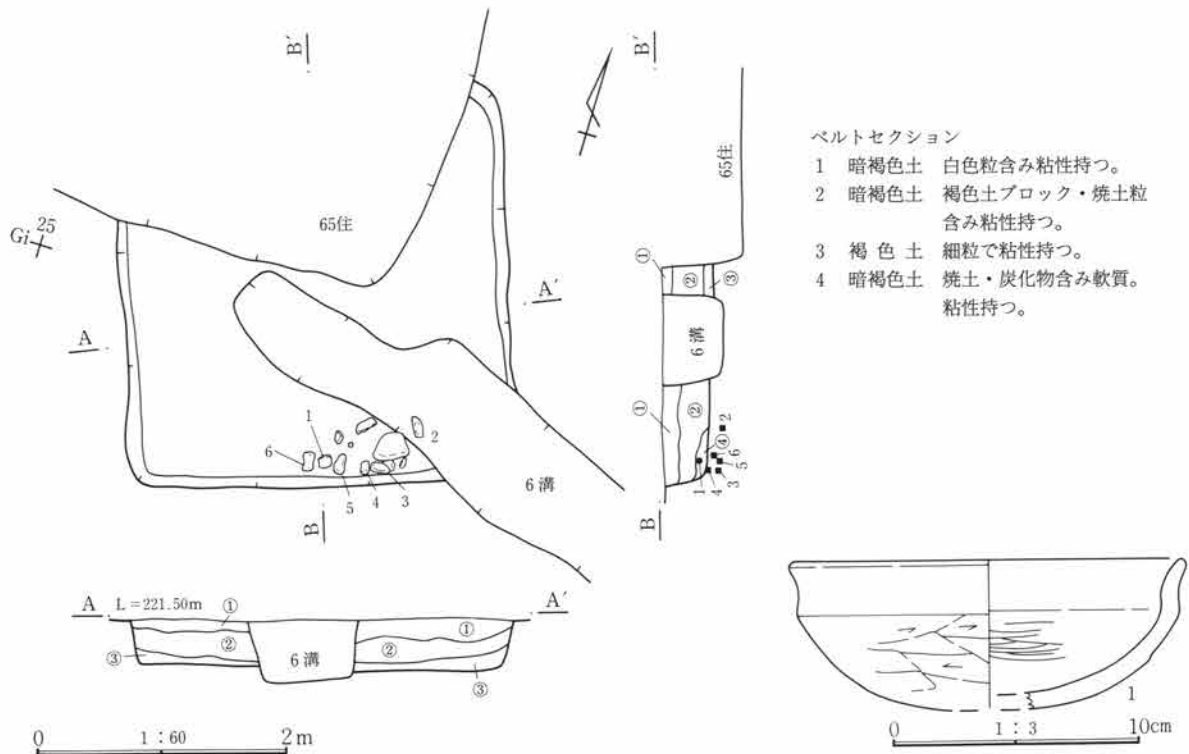
床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁にあったものと思われるが、破壊され失われている。

貯蔵穴 検出できず。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 住居のかなりの部分を破壊されているため、遺物は非常に少なく、南壁際より土器と礫がわずかに出土したのみ。この中には、こもあみ石と思われる円礫が5点(2～6)含まれている。土器は、覆土出土のものを含めても、図化できたものは土師器甕が1点あるだけである(1)。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より古墳時代後期の住居と推定できる。



第328図 G-66号住居跡、出土遺物実測図

G-66号住居出土遺物観察表

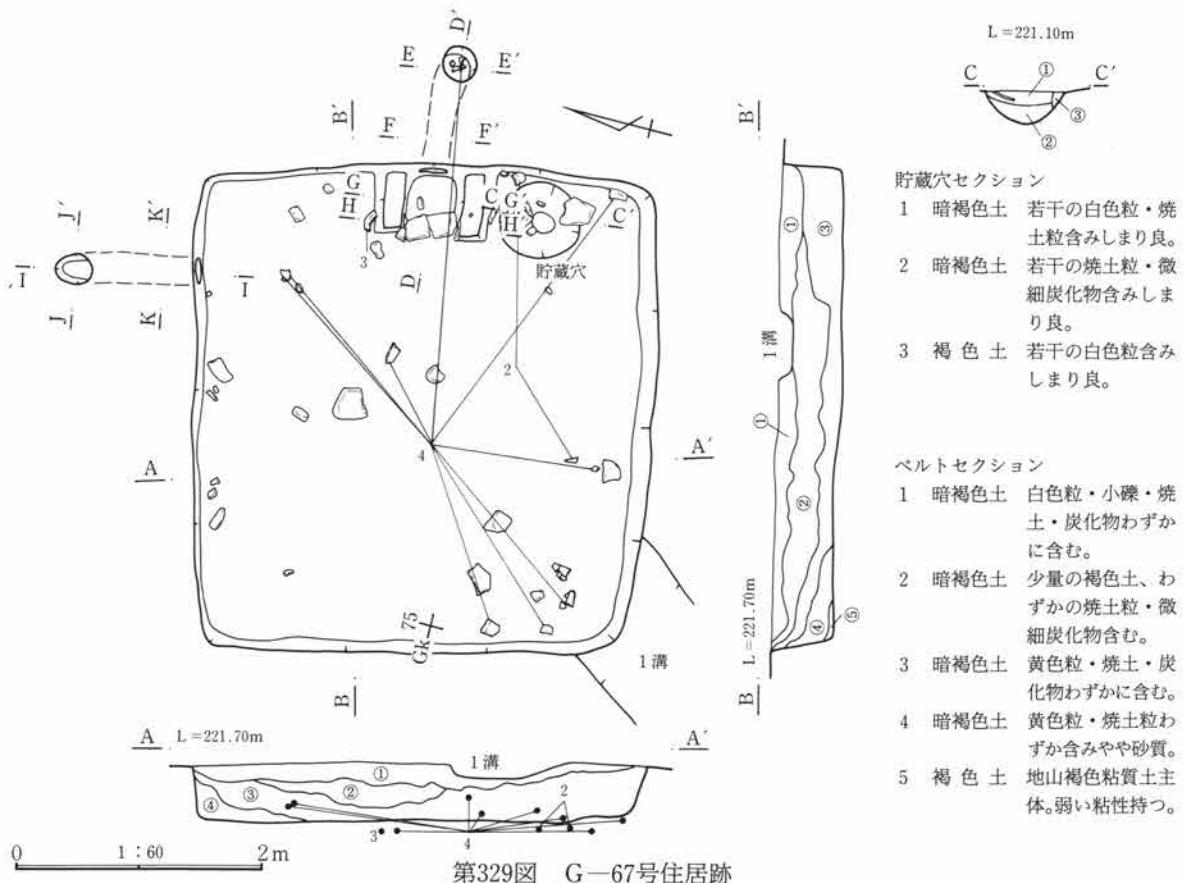
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
							計測値 (cm・g)	
番号	器種	出土状況 残存状況	全長	幅	厚さ	重量	石材	特徴
1	土師器 坏	+14cm 1/3	口(15.2) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ後ヘラ磨き。			
2	こもあみ石	床密着 完形	14.6	7.7	4.5	789.0	変玄武岩	盤状の円礫。
3	こもあみ石	床密着 完形	15.0	7.3	5.0	849.8	砂岩	同上。
4	こもあみ石	+4cm 1/2	(11.6)	8.6	4.7	(661.8)	デイサイト	同上。両端を欠損。被熱している。
5	こもあみ石	床密着 完形	15.2	8.4	5.1	1034.4	粗粒安山岩	盤状の円礫。
6	こもあみ石	+3cm 完形	12.9	8.9	4.8	923.4	粗粒安山岩	同上。

G-67号住居跡 (PL46・142)

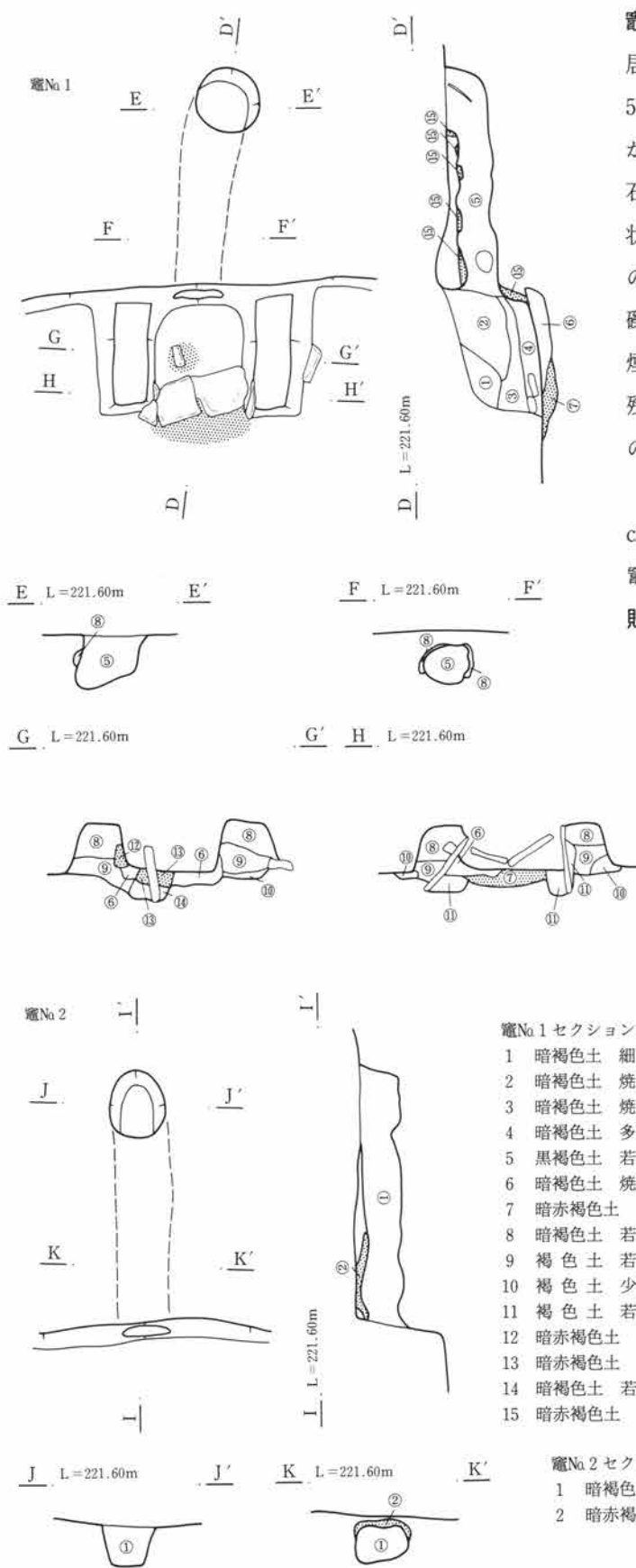
位置 Gj・Gk-74グリッド 主軸方位 N-80°-E 残存壁高 0.50m 重複 なし

規模と形状 形状はほぼ正方形で、長辺3.70m・短辺3.85m。西壁に比べわずかに東壁が長い。周壁はほぼ直立・直進し、線形の乱れは少ない。竈は東側に築かれ、住居主軸は真東よりやや北にふれる。北壁には古い竈の煙道が残存している。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで床面を形成。東半部がやや低い。貼り床などはみられない。



第3章 検出された遺構と遺物



竈 住居東壁のほぼ中央に所在(竈No. 1)。住居内に袖が作られる。焚口幅42cm・燃烧部長52cm。両袖先端の燃烧部側には、板状の砂岩が袖石として据えられている。また両側の袖石の間には、天井石としてかけられていた板状の砂岩が、折れて落ち込んでいる。燃烧部の中央よりもやや左側には、長さ25cm程の角礫状の砂岩が支脚として埋め込まれている。煙道はくりぬき式で、天井部分も崩落せずに残っている。煙道長100cm。また、北東隅近くの北壁には、古い竈の煙道部分が残っている(竈No. 2)。くりぬき式の煙道で、長さは115cmである。この古い竈No. 2の廃絶・撤去後に竈No. 1が構築されている。

貯蔵穴 住居南東隅付近、竈No. 1のすぐ右側に所在。形状はほぼ正円形。

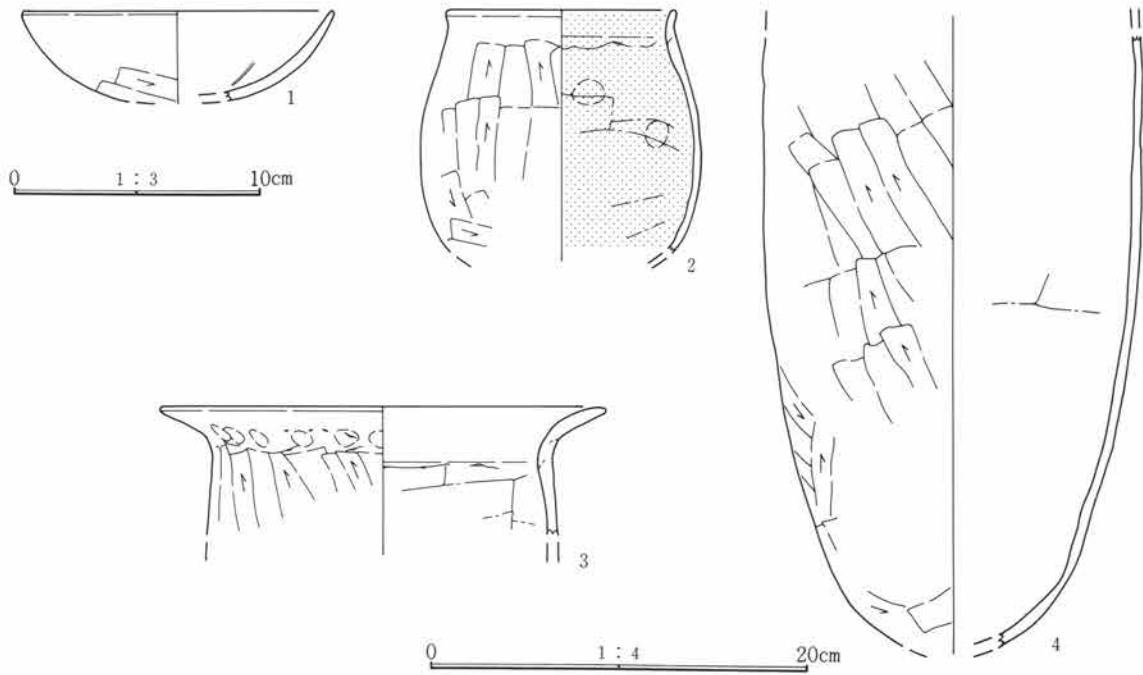
周溝 なし。 **柱穴** なし。

出土遺物 遺物量は少なく住居内に散在。主な器種は、土師器坏(1)・小型甕(2)・甕(3・4)がある。

掘り方 なし。

調査所見 遺物より、古墳時代後期の住居と推定できる。

第330図 G-67号住居竈



第331図 G-67号住居出土遺物実測図

G-67号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	覆土 口～体部 1/5	口(12.3) 底— 高—	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 小型甕	床密着 口～胴部 下位1/5	口(12.1) 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕・指頭圧痕あり。	胴部内面に煤付着
3	土師器 甕	床密着 口縁部破 片	口(22.8) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
4	土師器 甕	床密着 胴～底部 1/3	口— 底— 高—	①多量の砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

G-68号住居跡 (PL46・142)

位置 Go-82グリッド 主軸方位 N-99°-E 残存壁高 0.22m 重複 なし

規模と形状 形状は縦長の長方形であるが、やや歪んで平行四辺形状になっている。長辺2.50m・短辺3.28mとかなり小型である。上面をかなり削平されているため、壁の残りは悪い。竈は東側に築かれる。

床面 地山砂礫混じり黄褐色シルトを掘り込んで床面を形成。貼り床などはみられない。

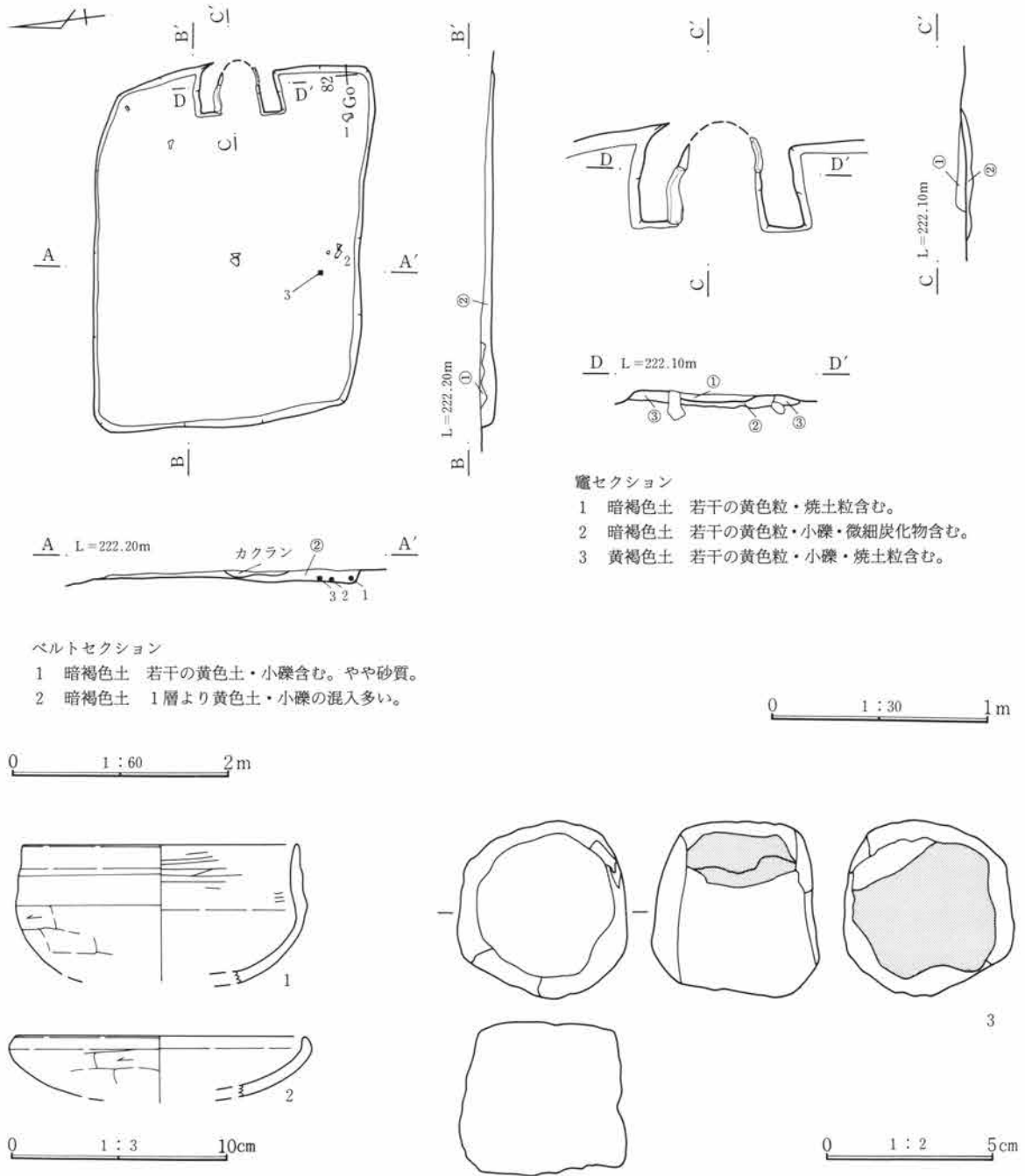
竈 住居東壁のほぼ中央に所在。袖が住居内に作られる。上部をかなり削平されており、奥壁部分も失われている。焚口幅37cm、燃焼部長は現状で48cm。左袖先端と右袖の奥壁近くの燃焼部側に、板状の砂岩が据えられている。煙道は残っていない。貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 住居の上部を大きく失っているためもあって、遺物量は非常に少ない。器種は土師器坏(1・2)があるのみであるが、住居南側の床面上から石製品が1点(3)出土している。

第3章 検出された遺構と遺物

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



第332図 G-68号住居跡、出土遺物実測図

G-68号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/3	口(12.5) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ後ヘラ磨き。	

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
2	土師器 坏	床密着 口～体部 破片	口(13.0) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
3	不明石製品	床密着 完形	全長	幅	厚さ	重量	砥沢石	原石を立方体状に形作ったもの。表面・側面に 弱い研磨面見られる。小型の砥石か。

G-69号住居跡 (PL46・142)

位置 Gh-69グリッド **主軸方位** N-27°-W (推定) **残存壁高** 0.51m **重複** G-41住に切られる。
規模と形状 住居の大半が調査区外にあるため、正確な形状・規模ともに不明。住居主軸は竈が北側にあつたものとして計測し、それによるとかなり西にふれている。長辺は不明、短辺は計測可能な部分では3.91mである。西壁の一部を重複する住居によって破壊されているが、その他の周壁はほぼ直立・直進し、線形の乱れはみられない。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 検出できず。調査区外にあるものと思われる。

貯蔵穴 検出できず。 **周溝** なし。

柱穴 小ピット1基検出。位置から柱穴と思われるが、他は調査区外に位置し検出できなかった。

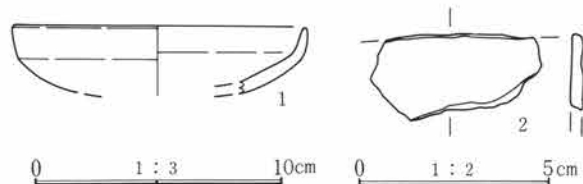
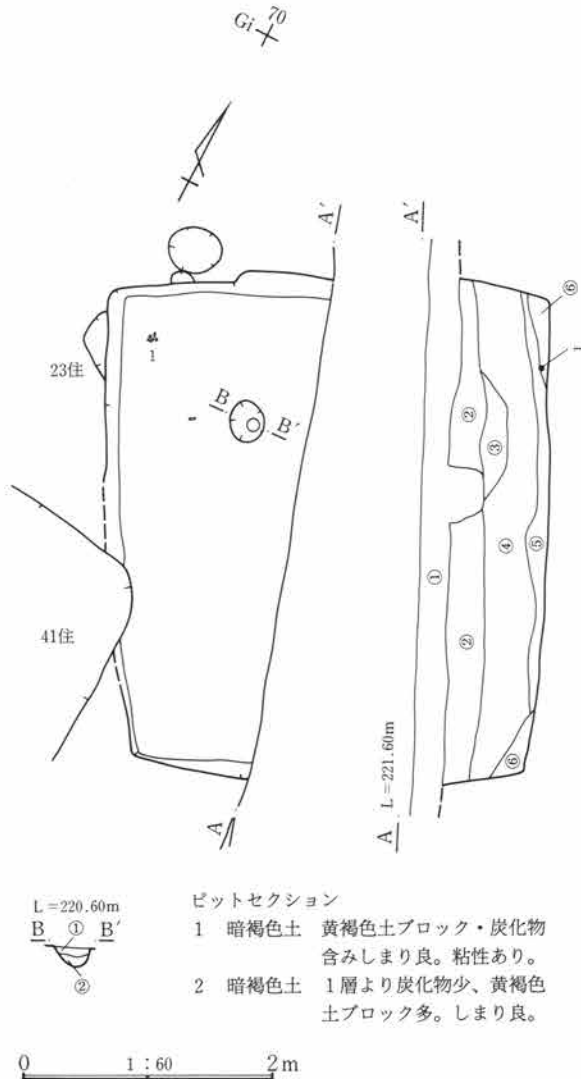
出土遺物 遺物量は非常に少なく、わずかに小破片が数片あっただけである。図化可能な遺物は、土師器坏が1点(1)あるのみで、他に覆土中より刀子の破片(2)が出土している。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より古墳時代後期の住居と思われる。

ベルトセクション

- 1 暗褐色土 現耕作土。
- 2 暗褐色土 白・黄色粒、小礫含みしまり良。弱い粘性あり。
- 3 褐色土 若干の白・黄色粒含みしまり良。粘性あり。
- 4 暗褐色土 若干の白・黄色粒、焼土粒、炭化物含みしまり良。
- 5 褐色土 若干の白・黄色粒、微細炭化物含みしまり良。
- 6 暗褐色土 若干の黄色粒・黄褐色土ブロック・炭化物含む。粘性あり。



第333図 G-69号住居跡、出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

G-69号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 1/2	口(11.6) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅		
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
2	不明鉄製品	+23cm	(4.5)	(2.2)	(0.4)	(7.2)	1/2	大部分欠損し形状不明。

G-72号住居跡 (PL46)

位置 Gm-76グリッド 主軸方位 N-1°-W 残存壁高 0.30m 重複 G-73住に切られる。

規模と形状 形状はやや横長の長方形で、南側に比べ北側がわずかに開く。北壁は重複する住居によって失われている。長辺2.83m、短辺は現状で2.31m。住居の南側では、近年の耕作に伴う溝によって床面が一部破壊されている。竈は北側にあったものと推測され、住居主軸は真北にほぼ一致する。

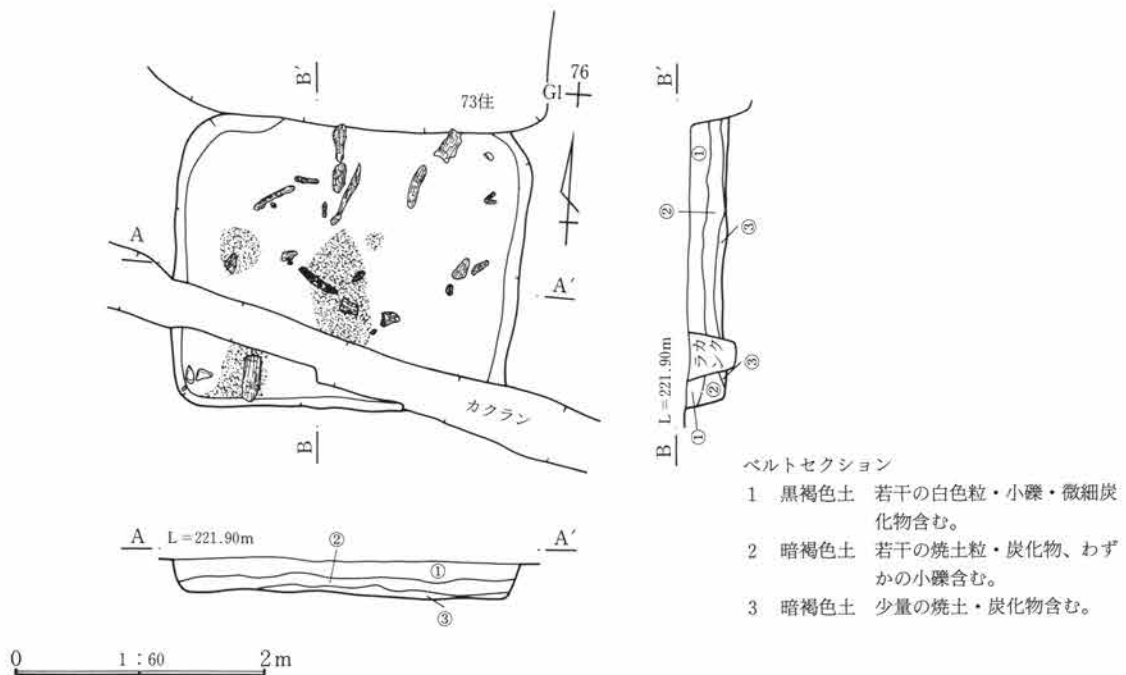
床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。一部床面上に炭化物の分布がみられた。

竈 検出できず。重複する住居によって破壊された北壁にあったものと推測される。

貯蔵穴 なし。 周溝 なし。 柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、埋土中出土のものとおわせても、わずかの土師器があるのみである。他に、床面に近い位置からかなりの炭化材が出土しており焼失住居と考えられるが、遺物が少ないことから、住居廃絶後の焼失であろう。 掘り方 なし。

調査所見 遺物が少ない上、竈の構造も不明であることから、住居の時期認定は困難である。しかし、住居の規模と形状、重複するG-73号住居の時期からみて、古墳時代後期の住居であるものと推測される。



第334図 G-72号住居跡

G-73号住居跡 (PL47・142)

位置 GI-76グリッド 主軸方位 N-S 残存壁高 0.41m 重複 G-72住を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺3.28m・短辺2.66mとかなり小型である。住居の北西隅と北壁の西半および竈の一部を、近年の耕作に伴う溝によって破壊されている。周壁は、東側と北壁の東半で、かなりの崩落がみられ、大きく外反している。竈は北側に築かれ、住居主軸は真北に一致する。

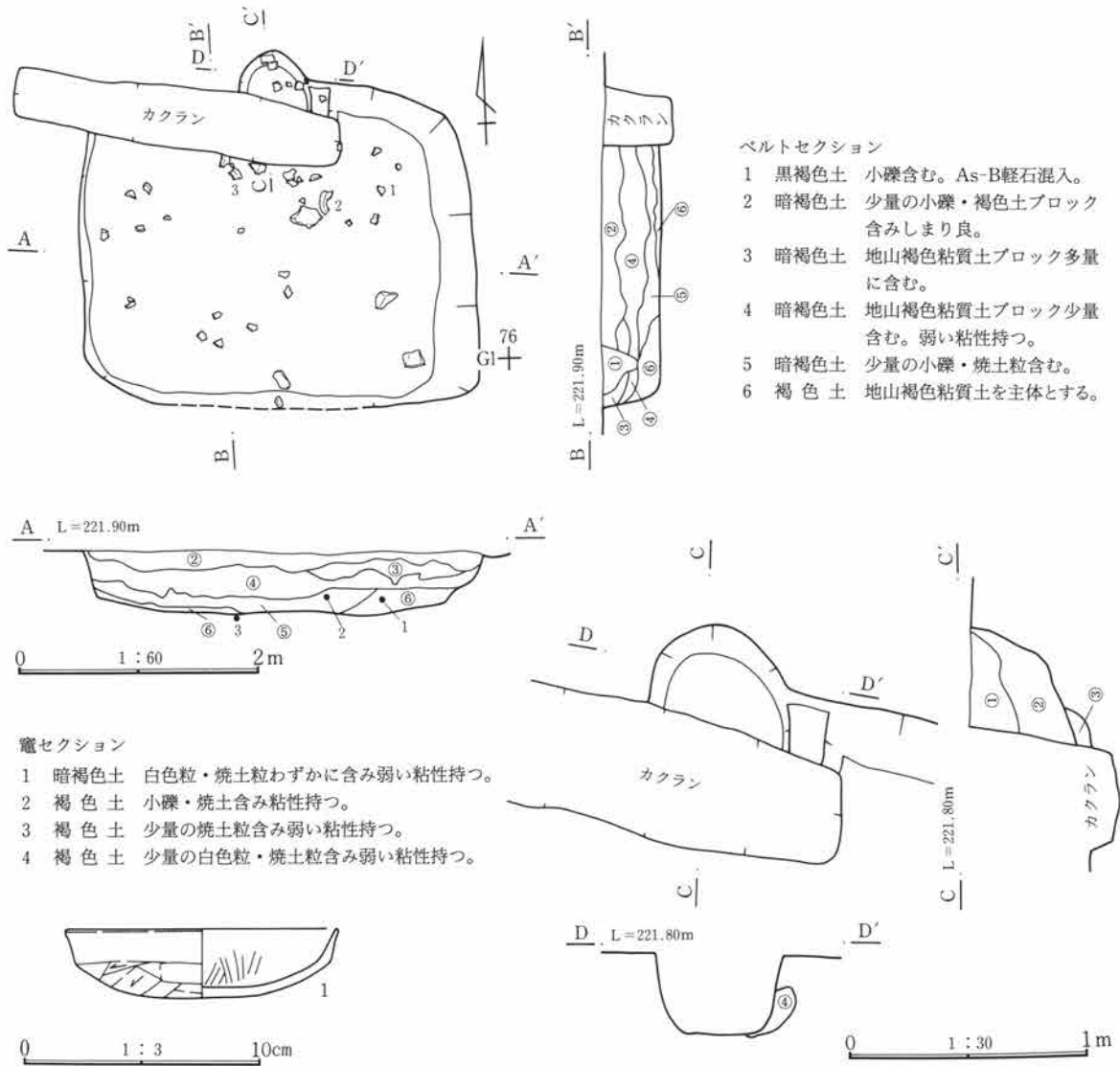
床面 床面は地山褐色粘質土に一致。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁中央部に所在。短い袖が住居内に作られるが、燃烧部は住居外に張り出す。左袖は近年の攪乱によって失われている。燃烧部の大きさは、現状で幅48cm・長さ48cmである。煙道は削平され残っていない。

貯蔵穴 なし。周溝 なし。柱穴 なし。

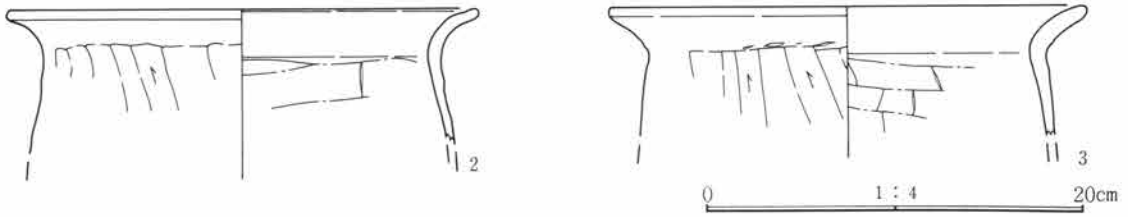
出土遺物 遺物量は少ないが、竈周辺の床面に近い位置に、比較的大きな破片が集中。遺物は、土師器坏(1)・甕(2・3)があるが、坏は当住居よりもやや古い時期の遺物が混入した可能性が高い。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物から、古墳時代後期の住居と推測される。



第335図 G-73号住居跡、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第336図 G-73号住居出土遺物実測図②

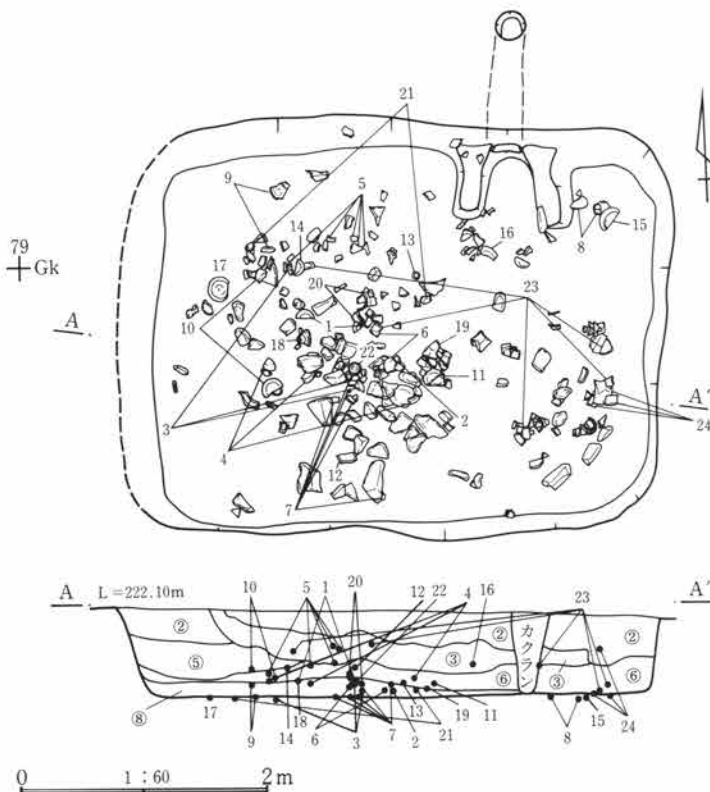
G-73号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+14cm 1/3	口(11.2) 底— 高 2.9	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ後放射状へラ磨き。	
2	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/3	口(24.8) 底— 高—	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③明褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	
3	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位1/3	口(25.5) 底— 高—	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面へラナデ。	

G-74号住居跡 (PL47・143・144)

位置 Gj・Gk-78グリッド 主軸方位 N-2°-E 残存壁高 0.69m 重複 G-75住を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺4.38m・短辺3.31m。周壁はほぼ直進するものの北壁と西壁で外反が著しく、若干形状が乱れている。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。



第337図 G-74号住居跡①

床面 地山黄褐色シルトを掘り込んでほぼ平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の東よりに所在。袖が住居内に作り出される。焚口幅48cm・燃烧部長53cm。右袖先端内側に板状の砂岩が袖石として据えられる。燃烧部底面には広く焼土が分布。煙道はくりぬき式で、天井部分も残存。煙道長111cm。

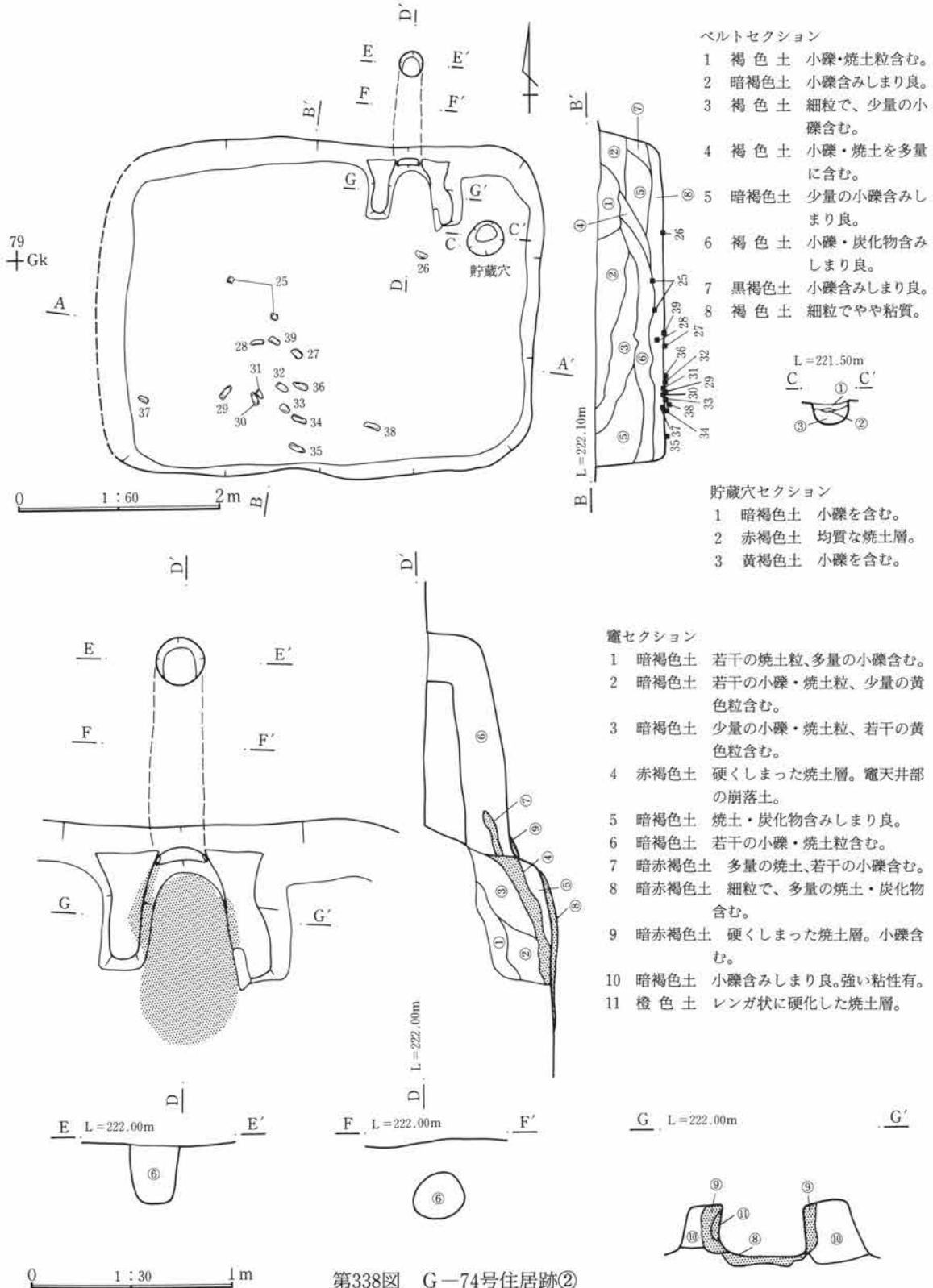
貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。形状はほぼ円形で、かなり小型。

周溝 なし。柱穴 なし。

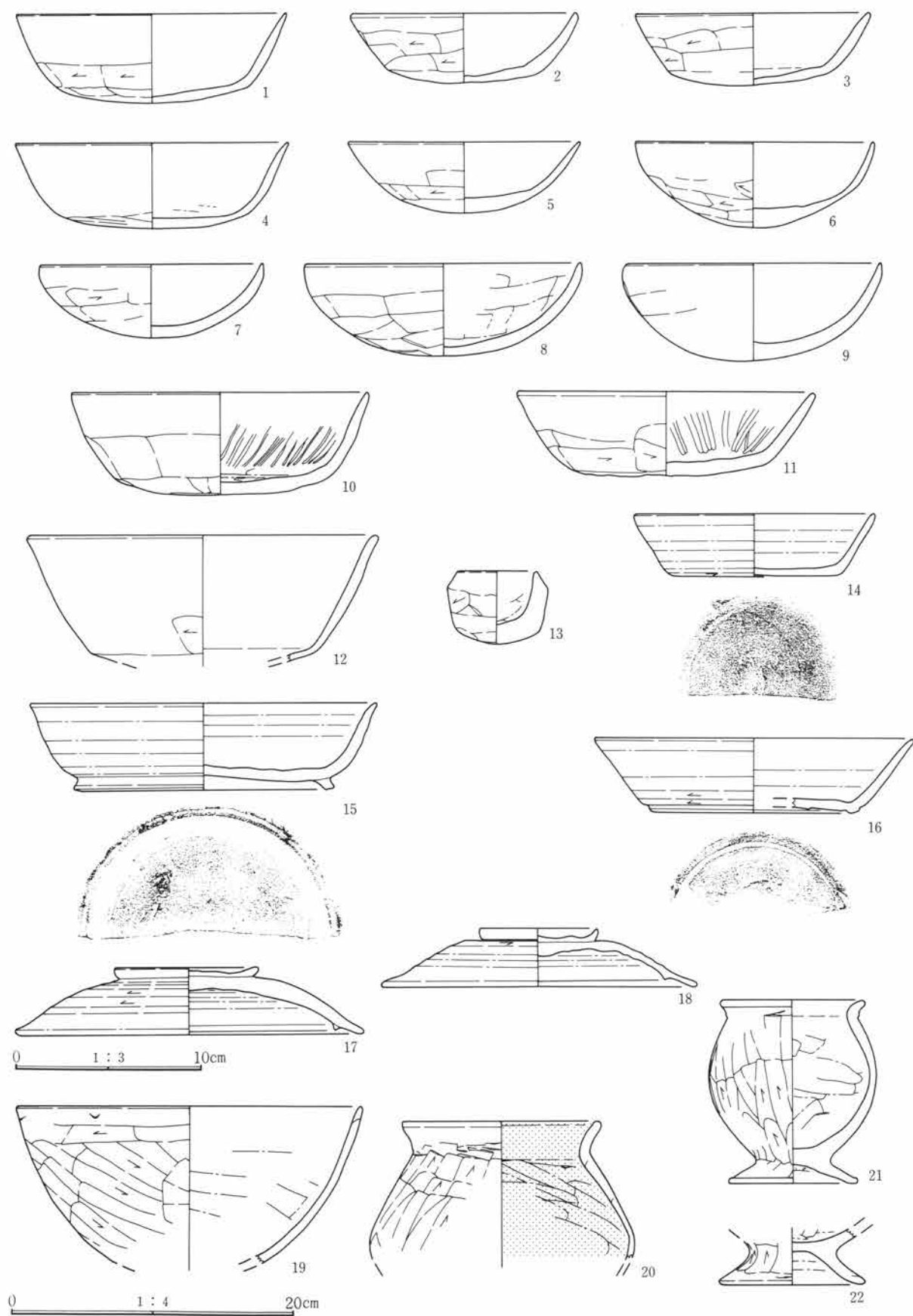
出土遺物 遺物量はかなり多く、特に石が多い。遺物の大半は床面直上～40cm程の間から出土。器種は、土師器坏(1～12)・鉢(19)・小型台付甕(21・22)・甕(23・24)、手捏土器(13)、須恵器坏(14)・高台付杯(15)・

16)・蓋(17・18)がある。他に砥石(25)、磨石(26)、こもあみ石(27~39)が出土。掘り方なし。

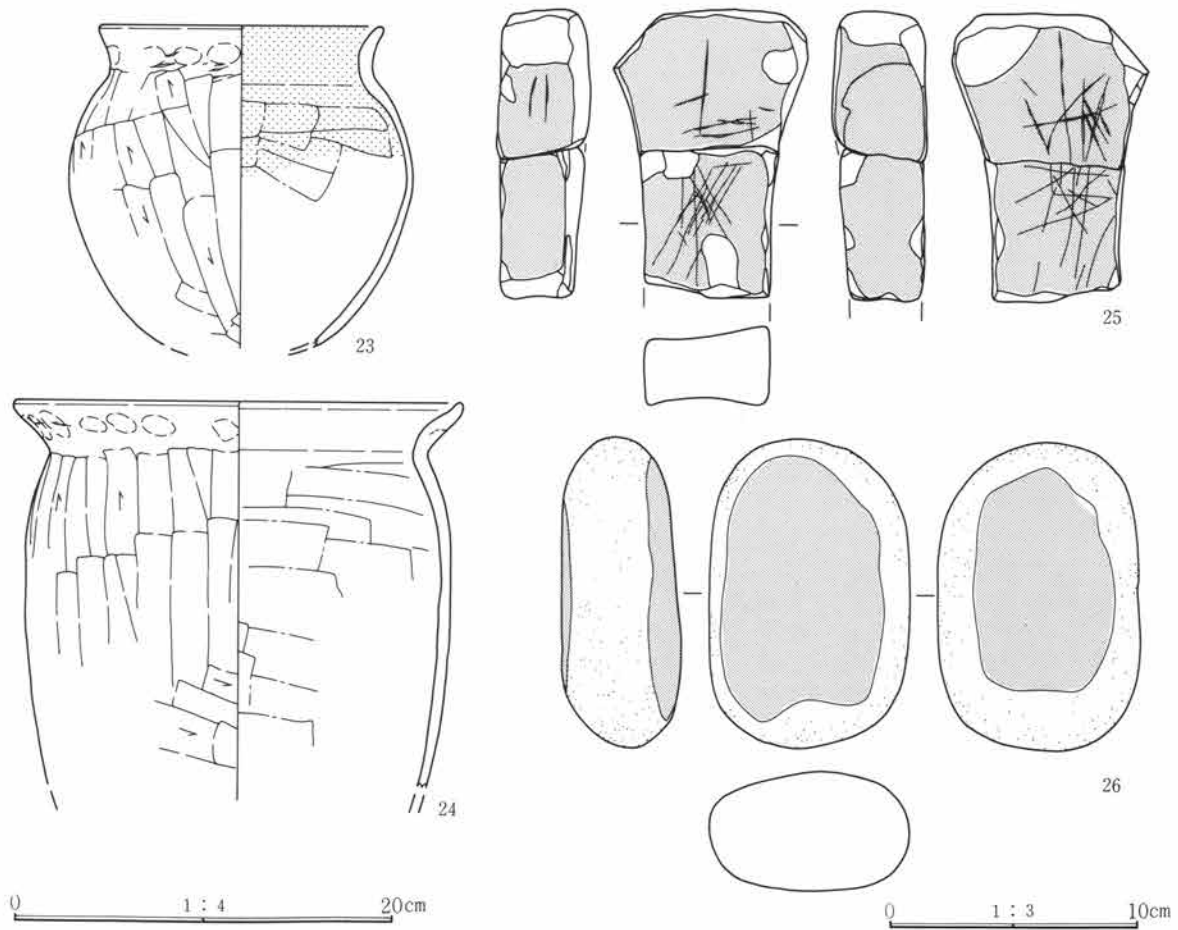
調査所見 出土した土器にやや年代幅が認められるが、出土位置・レベルからは分離できない。重複するG-75号住居からの混入とも考えられるが、重複部が少なく、75住の遺物量に比べ混入遺物の量が多すぎるため、その可能性は薄い。以上から現状では共伴と捉える。住居の時期は奈良時代と推定できる。



第3章 検出された遺構と遺物



第339図 G-74号住居出土遺物実測図①



第340図 G-74号住居出土遺物実測図②

G-74号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+10cm ほぼ完形	口 14.2 底 10.0 高 4.6	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
2	土師器 坏	床密着 5%	口 11.9 底 8.1 高 3.6	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
3	土師器 坏	床密着 5%	口 12.4 底 9.0 高 3.7	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
4	土師器 坏	+10cm 5%	口 14.2 底 9.6 高 4.5	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
5	土師器 坏	+12cm 5%	口 12.2 底 6.6 高 3.7	①微砂粒（ごくまれ に小礫）含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
6	土師器 坏	+10cm ほぼ完形	口 12.4 底 — 高 4.5	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
7	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 11.6 底 — 高 3.8	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
8	土師器 坏	床密着 2/3	口 14.6 底 — 高 4.8	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴	残存状態 備考	
				胎土	焼成			
9	土師器 坏	床密着 1/5	口(13.6) 底 — 高 5.1	①細砂含む ②良好 ③橙色		口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅	
10	土師器 坏	+15cm ほぼ完形	口 15.4 底 11.4 高 5.3	①均質な細砂含む ②良好 ③橙色		口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ後放射状へラ磨き。		
11	土師器 坏	+10cm 1/3	口(15.5) 底 11.2 高 4.3	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③赤褐色		口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ後へラ磨き。		
12	土師器 坏	+25cm 口～体部 1/4	口(18.4) 底(11.7) 高 —	①砂粒含む ②良好 ③橙色		口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅	
13	土師器 手捏土器	+10cm 1/5	口 5.3 底 4.3 高 3.8	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐色		口縁部は内傾する。口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面ナデ。		
14	須恵器 坏	+25cm 1/2	口(12.6) 底(8.6) 高 3.2	①微砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②堅緻 ③黄灰色		ロクロ整形。底部回転へラ切り後ナデ。		
15	須恵器 高台付坏	床密着 1/2	口(18.0) 底(13.5) 高 4.5	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰白色		ロクロ整形。口縁部わずかに外反。底部回転へラ切り後ナデ、高台貼付。		
16	須恵器 高台付坏	+25cm 1/3	口(16.5) 底(11.0) 高 3.8	①均質な細砂含む ②堅緻 ③灰色		ロクロ整形。体部下位回転へラ削り。底部回転へラ切り後高台削り出し。		
17	須恵器 蓋	床密着 1/5	口 18.3 摘 7.6 高 3.5	①微砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②堅緻 ③灰色		ロクロ整形。天井部左回転の回転へラ削り。つまみ・かえし貼付。		
18	須恵器 蓋	+15cm 1/2	口(16.3) 摘 6.0 高 3.0	①微砂粒含む ②やや堅緻 ③灰色		ロクロ整形。天井部右回転の回転へラ削り。つまみ貼付。		
19	土師器 鉢	+10cm 口～体部 1/3	口(24.3) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色		口縁部外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。		
20	土師器 甕	+10cm 口～胴部 上位1/3	口 14.0 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色		口縁部内外面横ナデ、外面にへラ状工具のあたり胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	内面に煤状炭化物付着	
21	土師器 小型台付甕	床密着 1/5	口(9.6) 底(8.8) 高 12.8	①細砂含む ②良好 ③灰褐色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。台部外面横ナデ、内面へラナデ後横ナデ。		
22	土師器 小型台付甕	+10cm 台部	口 — 底 10.1 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい赤褐色		胴部内面ナデ。台部外面へラ削り、裾部横ナデ。台部内面横ナデ。		
23	土師器 甕	+5cm 口～胴部 1/3	口(15.2) 底 — 高 —	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③にぶい赤褐色		口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	内面胴部上位～口縁に煤状炭化物付着	
24	土師器 甕	床密着 口～胴部 上半1/3	口(23.4) 底 — 高 —	①砂粒・赤褐色粒子 含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
25	砥石	+10cm 1/2	(11.4)	7.7	3.7	(382.7)	砥沢石	表裏・両側に研磨面。いずれも使用度高く、表面が反っている。表裏に刃ならし溝あり。
26	磨石	床密着 完形	12.1	7.5	4.8	718.2	砥沢石	表裏に弱い研磨面あり。
27	こもあみ石	床密着 完形	14.1	5.8	4.6	534.5	閃緑岩	棒状の円礫。
28	こもあみ石	+10cm 完形	9.8	4.3	3.3	164.4	砂岩	棒状の亜円礫。
29	こもあみ石	床密着 完形	11.9	5.2	3.2	324.2	粗粒安山岩	棒状の円礫。

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
30	こもあみ石	床密着 完形	11.3	6.2	3.7	297.4	粗粒安山岩	同上。
31	こもあみ石	+5cm 完形	9.9	3.8	4.0	170.3	変質安山岩	棒状の円礫。
32	こもあみ石	床密着 完形	10.4	5.2	2.8	247.8	砂岩	棒状の垂円礫。
33	こもあみ石	床密着 完形	10.7	6.0	2.6	225.2	粗粒安山岩	盤状の円礫。
34	こもあみ石	床密着 完形	13.8	4.3	2.8	237.7	砂岩	棒状の垂円礫。
35	こもあみ石	床密着 完形	14.6	5.8	5.5	625.5	変質安山岩	同上。
36	こもあみ石	床密着 1/2	(11.5)	5.5	3.7	(258.9)	硬質泥岩	棒状の円礫。一部欠損。
37	こもあみ石	床密着 完形	10.7	4.7	3.1	204.8	砂岩	棒状の円礫。
38	こもあみ石	床密着 完形	13.4	3.7	3.3	303.3	砂岩	棒状の垂円礫。
39	こもあみ石	床密着 完形	9.6	5.4	4.3	399.3	緑色片岩	棒状の円礫。

G-75号住居跡 (PL47・144)

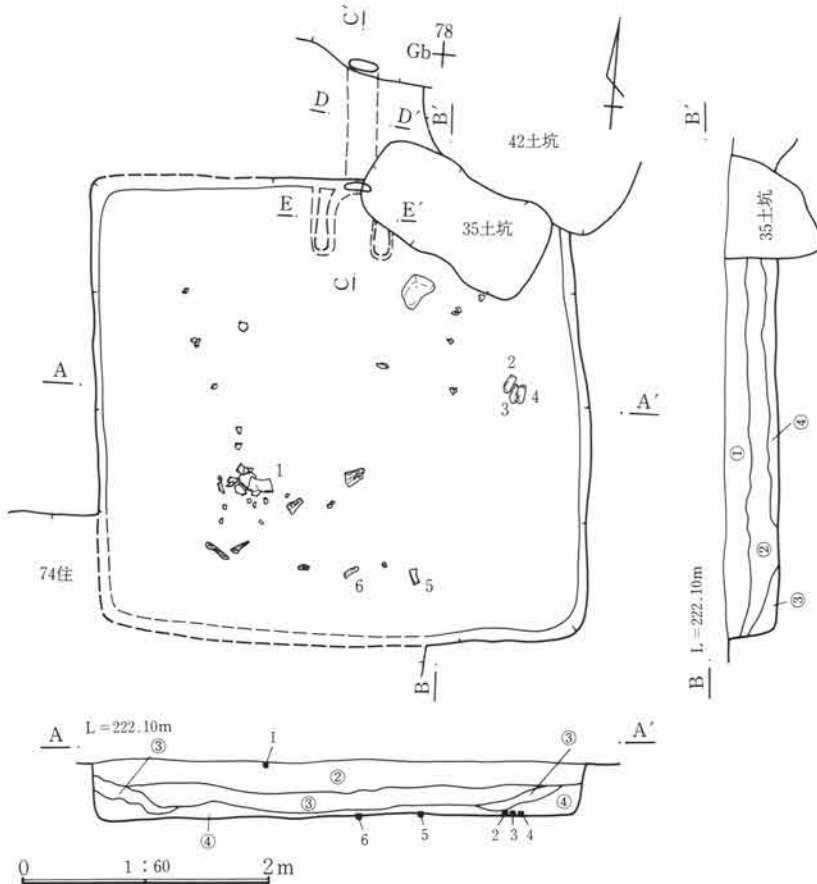
位置 Gk-77・78グリッド 主軸方位 N-5°-W 残存壁高 0.48m 重複 G-74住に切られる。

規模と形状 住居の北東隅と南西隅を重複する他の遺構によって破壊されている。形状はほぼ正方形に近いものと思われるが、長辺3.96m、短辺は推定で3.70mとわずかに長辺が長い。周壁はほぼ直立・直進する。

竈は北側に築かれ、住居主軸はやや西にふれる。

床面 地山砂礫混じり褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。袖が住居内に作り出される形状をとるが、調査時に竈の位置を誤認し袖の上部をほとんど削平してしまったために、竈図では推定線でいれてある。焚口幅・燃烧部長は



ベルトセクション

- 1 暗褐色土 粗い砂粒を多量に含む。しまり良。
- 2 褐色土 1層に似るがより色調が明るい。
- 3 黒褐色土 細粒で粘性持つ。
- 4 褐色土 小礫・褐色粘質土ブロック含しまり良。

第341図 G-75号住居跡

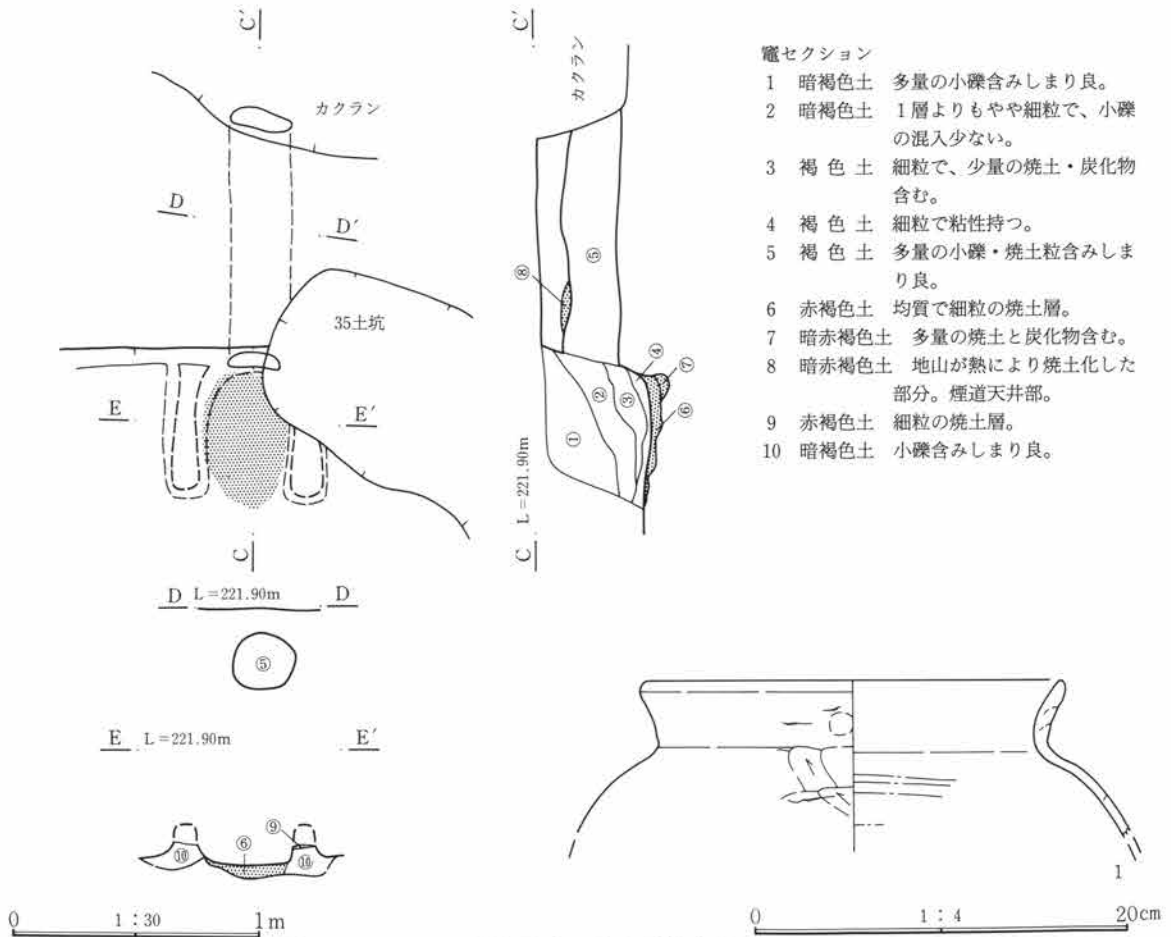
第3章 検出された遺構と遺物

いずれも推定で32cm・52cmである。煙道はくりぬき式で、天井部分も残存しているが、近年の耕作にともなう溝によって立ち上がり部分が失われている。煙道長は現状で102cm。

貯蔵穴 なし。35号土坑によって破壊された可能性あり。 周溝 なし。 柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は非常に少ない。図化できた遺物は土師器甕(1)が1点だけであるが、覆土上位からの出土である。他に床面上からこもあみ石が5点(2~6)出土している。 掘り方 なし。

調査所見 住居・竈の形状と出土遺物から、古墳時代後期の住居と推定される。



- 竈セクション
- 1 暗褐色土 多量の小礫含みしまり良。
 - 2 暗褐色土 1層よりもやや細粒で、小礫の混入少ない。
 - 3 褐色土 細粒で、少量の焼土・炭化物含む。
 - 4 褐色土 細粒で粘性持つ。
 - 5 褐色土 多量の小礫・焼土粒含みしまり良。
 - 6 赤褐色土 均質で細粒の焼土層。
 - 7 暗赤褐色土 多量の焼土と炭化物含む。
 - 8 暗赤褐色土 地山が熱により焼土化した部分。煙道天井部。
 - 9 赤褐色土 細粒の焼土層。
 - 10 暗褐色土 小礫含みしまり良。

第342図 G-75号住居竈、出土遺物実測図

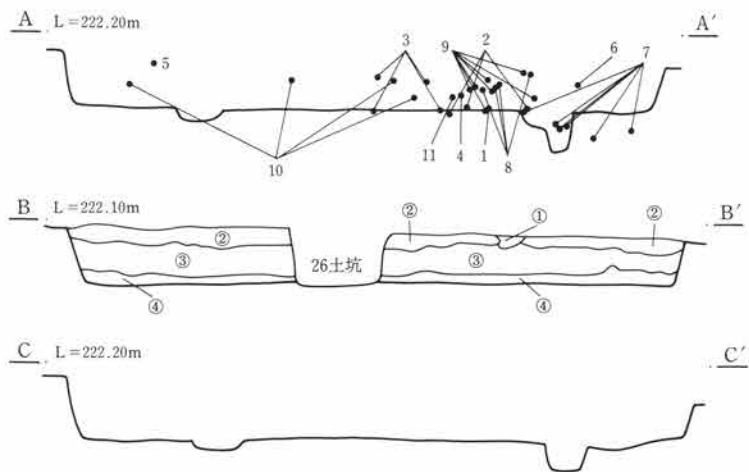
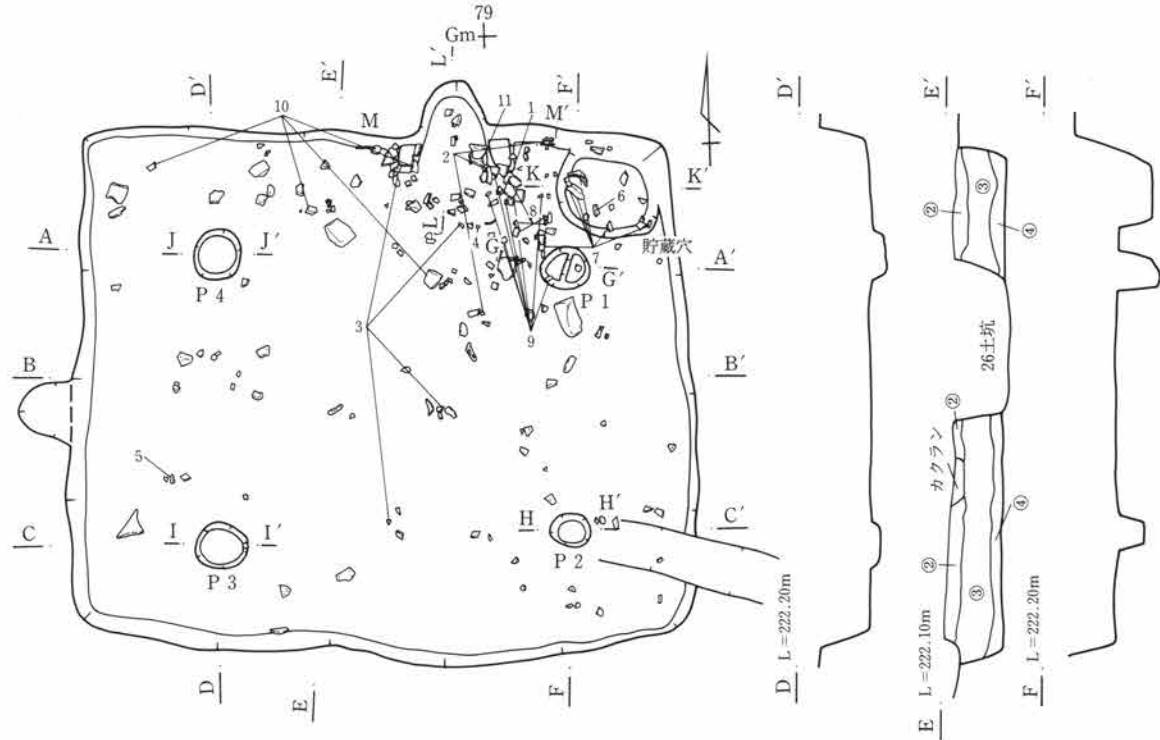
G-75号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	計測値 (cm・g)				成・整形技法の特徴	残存状態 備考
				①胎土 ③色調	②焼成	全長	幅		
1	土師器 甕	+45cm 口~胴部 上位破片	口(22.5) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。 胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。				
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴	
			全長	幅	厚さ	重量			
2	こもあみ石	床密着 完形	15.3	7.7	5.3	912.7	粗粒安山岩	盤状の円礫。	
3	こもあみ石	床密着 完形	14.9	7.0	5.0	678.2	変質安山岩	棒状の円礫。	
4	こもあみ石	床密着 完形	14.0	7.6	4.8	661.7	粗粒安山岩	盤状の円礫。	
5	こもあみ石	床密着 完形	13.0	6.8	3.5	534.2	変質安山岩	同上。	
6	こもあみ石	床密着 完形	13.9	6.2	5.3	614.0	粗粒安山岩	棒状の円礫。	

G-76号住居跡 (PL48・144・145)

位置 G1-78・79グリッド 主軸方位 N-2°-E 残存壁高 0.52m 重複 G-77住を切る。

規模と形状 形状はわずかに横長の長方形で、長辺5.05m・短辺4.25m。周壁は一部緩く蛇行し、形状が乱れている。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

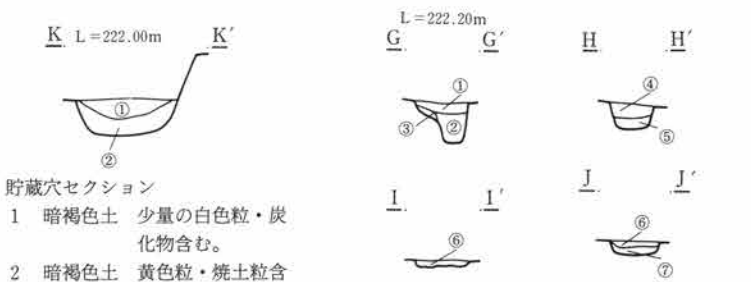


ベルトセクション

- 1 褐色土 白・黄色粒含む。
- 2 褐色土 多量の小礫含みしまり良。
- 3 褐色土 2層に比べ小礫が細かく量も少ない。
- 4 褐色土 若干の小礫・焼土粒・微細炭化物含む。粘性あり。

ピットセクション

- 1 暗褐色土 少量の小礫含みしまり良。
- 2 暗褐色土 焼土粒・白色粘土ブロック含む。
- 3 暗褐色土 地山粘質褐色土含みしまり良。
- 4 赤褐色土 小礫含みしまり良。
- 5 赤褐色土 4層に比べ小礫の混入少ない。
- 6 暗褐色土 細粒の白色粒含みしまり良。
- 7 暗褐色土 細粒の白色粒、黄褐色粒を含む。



貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 少量の白色粒・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒・焼土粒含みしまり良。

0 1 : 60 2m

第343図 G-76号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

床面 地山の黄褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

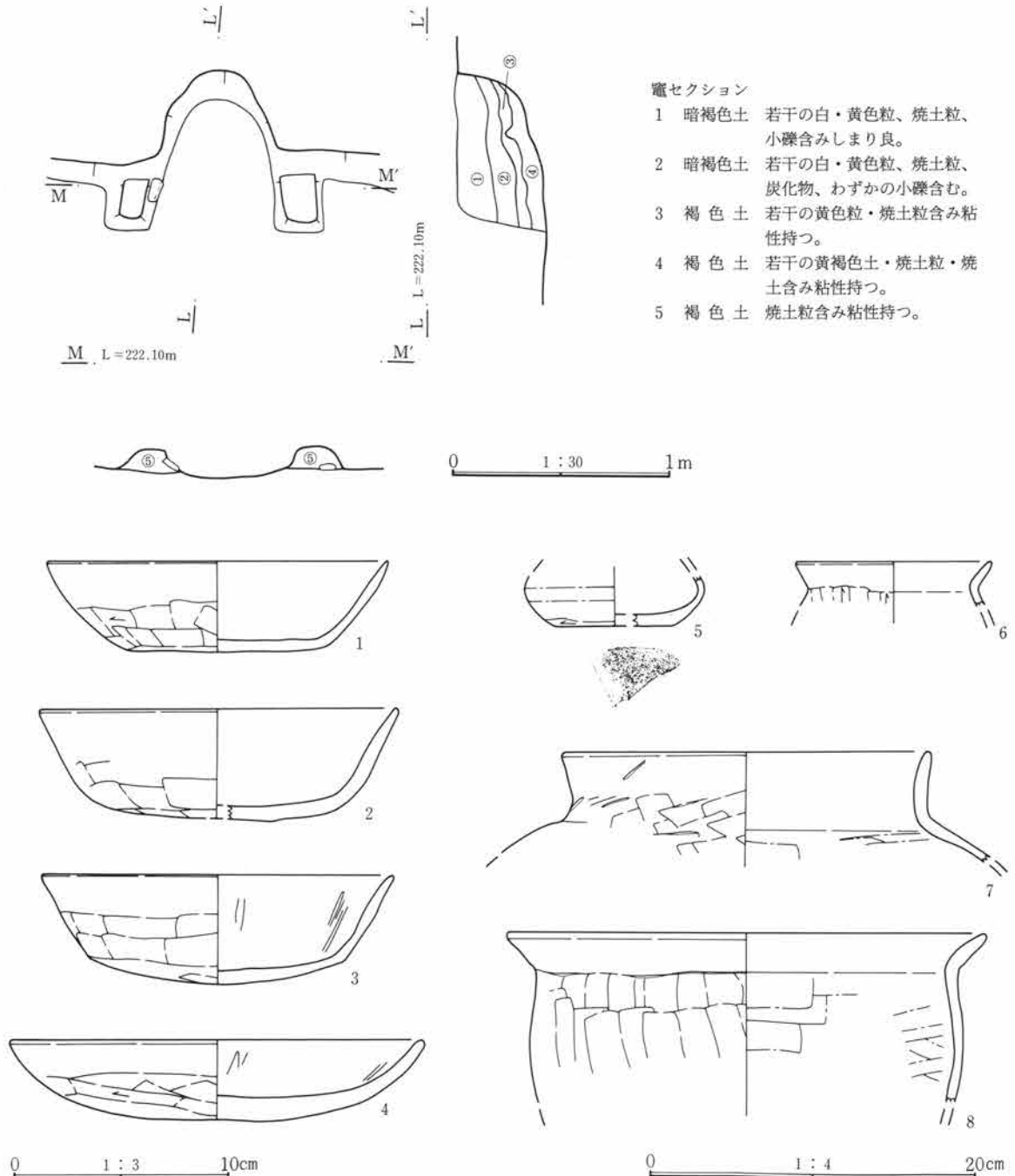
竈 住居北壁の中央よりもやや東側に所在。住居内に短い袖が作られるが、燃焼部は壁を掘り込んで住居域外に張り出すように作られている。焚口幅58cm・燃焼部長72cm。煙道は削平されている。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は住居の長辺方向に長い楕円形である。周溝 なし。

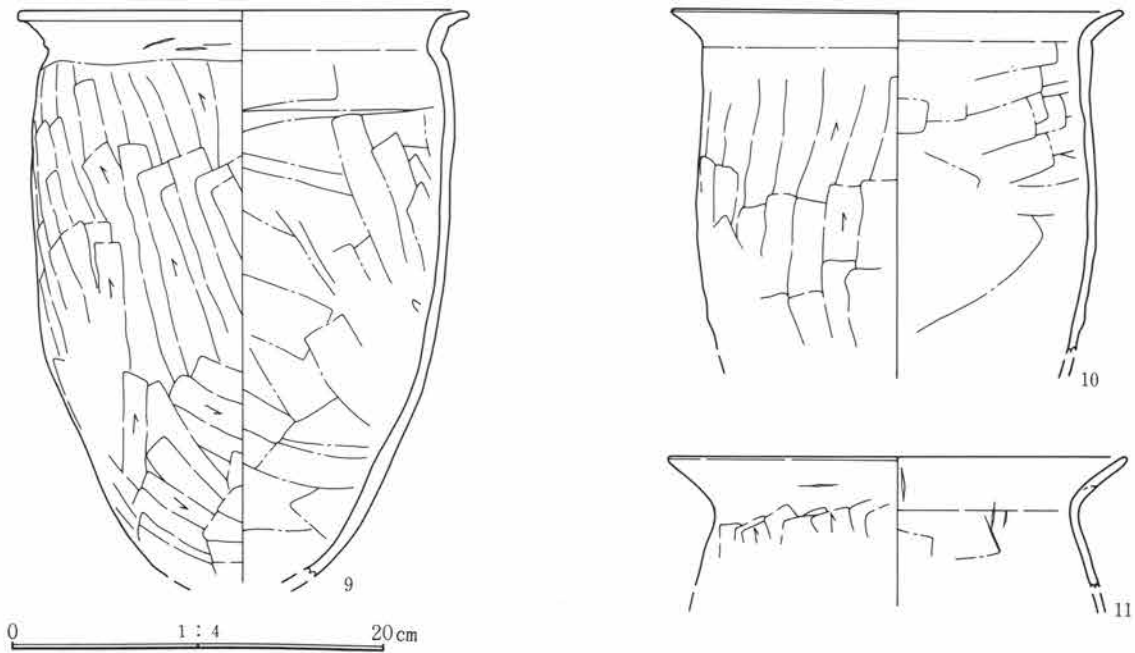
柱穴 4基の小ピット検出。いずれもほぼ対角線上に位置するが、ピット3は他に比べて極端に浅く、柱穴とは異なるようである。

出土遺物 遺物は比較的多く、竈周辺にややまとまっている。主な器種は、土師器環(1~3)・皿(4)・小型甕(6)・甕(7~11)、須恵器短頸壺(5)がある。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物と竈形状より、奈良時代の住居と推定される。



第344図 G-76号住居竈、出土遺物実測図①



第345図 G-76号住居出土遺物実測図②

G-76号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+4cm 2/3	口 15.6 底 9.0 高 4.1	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面の摩滅激しい
2	土師器 坏	カマド内 1/2	口(16.3) 底(9.6) 高 5.1	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
3	土師器 坏	床密着 1/3	口(16.0) 底(11.7) 高 4.9	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後放射状ヘラ磨き。	
4	土師器 皿	+15cm 2/3	口(19.0) 底 — 高 3.6	①砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
5	須恵器 短頸壺	+37cm 胴～底部 1/4	口 — 底(7.1) 高 —	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。胴部下位および底部手持ちヘラ削り	
6	土師器 小型甕	+20cm 口縁1/4	口(11.9) 底 — 高 —	①微砂粒(ごくまれに小礫)含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
7	土師器 甕	貯蔵穴内 口縁部	口 22.5 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
8	土師器 甕	+20cm 口～胴部 上位1/4	口(29.3) 底 — 高 —	①砂粒(ごくまれに小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
9	土師器 甕	床密着 口～胴部 2/3	口 23.6 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ、外面にヘラ状工具のあたり 胴部外面ヘラ削り。内面ナデ。	
10	土師器 甕	+12cm 口～胴部 上半1/4	口(23.9) 底 — 高 —	①粗砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
11	土師器 甕	カマド内 口縁1/3	口(24.1) 底 — 高 —	①均質な細砂含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部外面横ナデ、接合痕あり。胴部外面ヘラ削り。口縁および胴部内面ヘラナデ後横ナデ。	

G-77号住居跡 (PL48・145)

位置 Gn・Gm-79グリッド 主軸方位 N-3°-W 残存壁高 0.23m 重複 G-76住に切られる。

規模と形状 重複する住居によって南側を大きく破壊されているため、正確な形状は不明。おそらくわずかに長辺が長い長方形であろう。長辺4.84m、短辺はかろうじて残っている西壁部分で4.12m。残存する壁はほぼ直立するが、西壁でやや外側に張り出している。竈は北側に築かれ、住居主軸はほぼ真北に一致する。

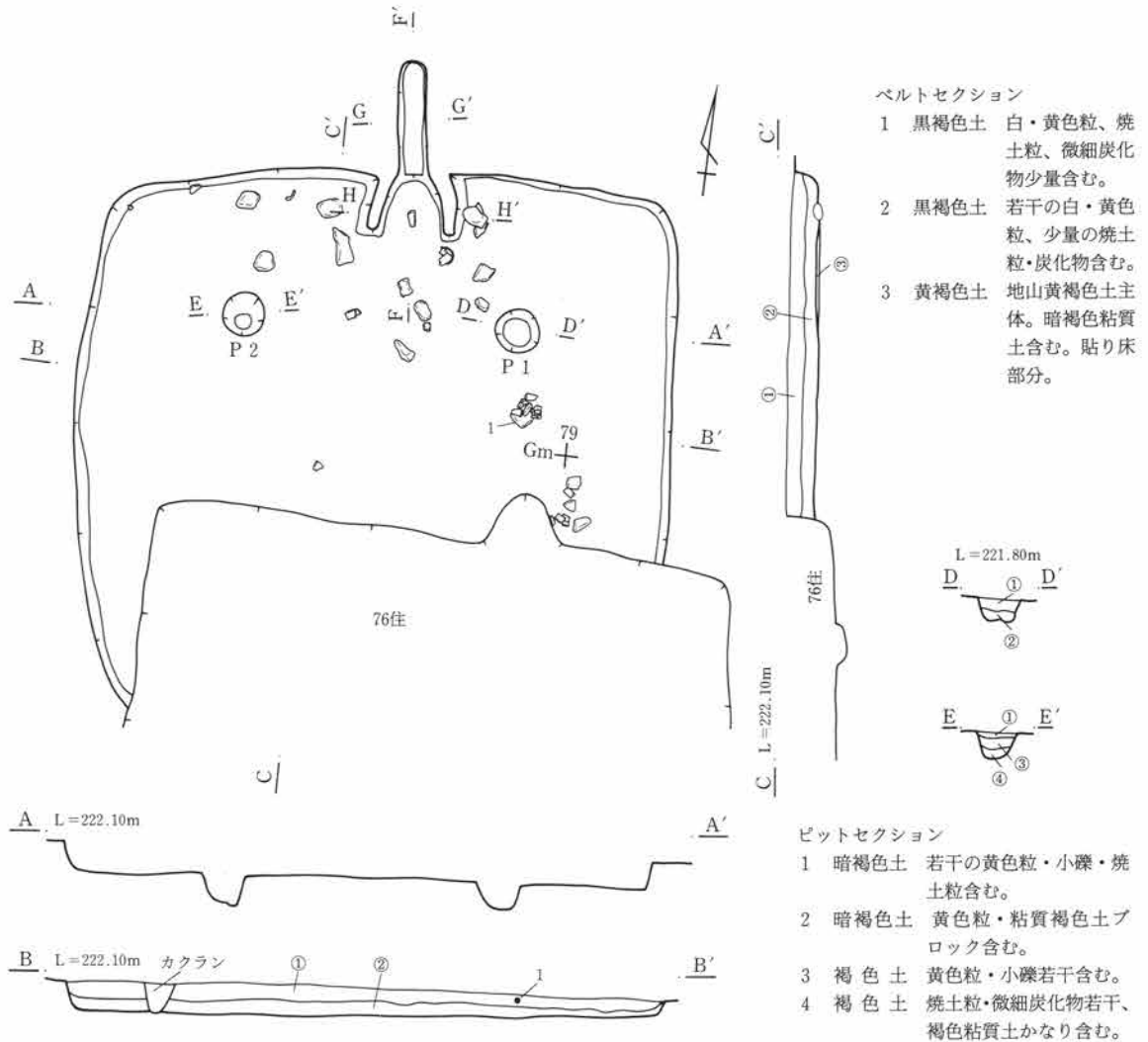
床面 一部で基盤の黄褐色土を主体とした貼り床がみられる。他の大部分の床面は地山に一致する。

竈 住居北壁中央部に所在。住居内に袖が作り付けられる。焚口幅50cm・燃烧部長51cm。燃烧部ほぼ中央に、支脚として板状の砂岩が埋め込まれている。燃烧部北半から煙道先端部にかけて焼土面が発達。煙道は上部が削平されているが、ほぼ先端まで確認できた。煙道長90cm。貯蔵穴 なし。周溝 なし。

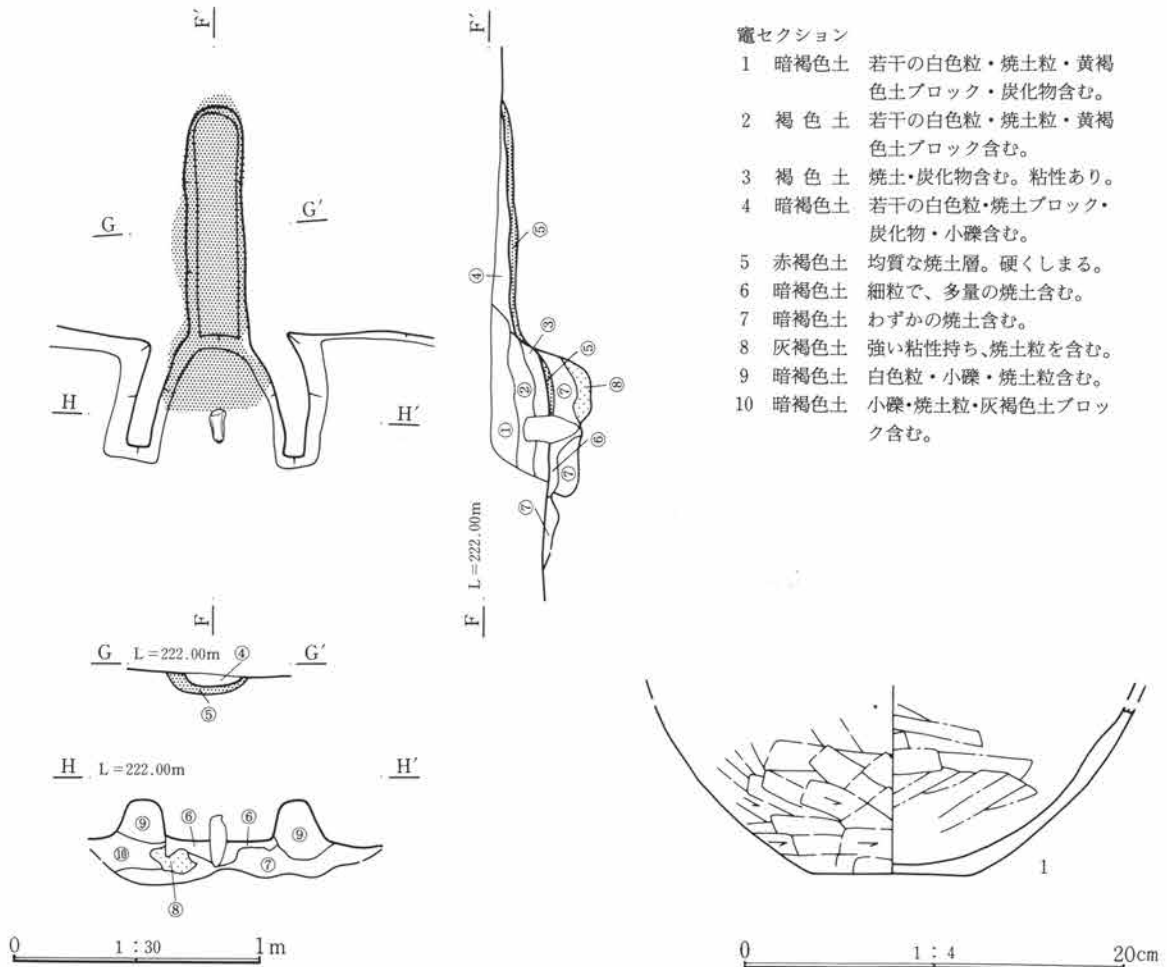
柱穴 住居北側のほぼ対称となる位置より、大きさ・深さともに類似した2基のピット検出。4本柱になるものと思われるが、南側の2本は重複する住居によって破壊され、残存していなかった。

出土遺物 遺物量は少なく、住居内に散在。竈材として利用されたとと思われる板状の砂岩が、竈周辺の床面上より出土。図化できた土器は、覆土上位から出土した土師器甕(1)があるのみ。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物が少なく時期の特定は困難だが、住居・竈の形状より古墳時代後期のものと推測される。



第346図 G-77号住居跡



第347図 G-77号住居竈、出土遺物実測図

G-77号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 甕	+10cm 胴下位～ 底部1/4	口— 底(8.6) 高—	①粗砂粒・赤褐色粒子含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。底部ヘラ削り。	内面に漆付着転用品か

G-78号住居跡 (PL48・145)

位置 Go-83グリッド 主軸方位 N-97-E 残存壁高 0.24m 重複 なし

規模と形状 形状はほぼ正方形であるが、長辺3.82m・短辺3.49mとわずかに長辺が長い。周壁は一部で小さく蛇行するが、線形の乱れは小さい。竈は東側に築かれ、住居主軸は真東からわずかに南にふれる。

床面 地山黄褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。一部に浅い不規則な掘り方があり、地山土を含んだ土を埋めて床面としているが、特に貼り床などはみられなかった。

竈 住居東壁の中央部に所在。住居内に袖が作られる。焚口幅48cm・燃燒部長48cm。両袖の先端燃燒部側には、袖石として板状の砂岩が据えられている。また袖石の間には、天井石として利用されていた板状の砂岩が落ち込んでいる。煙道は削平され残っていない。

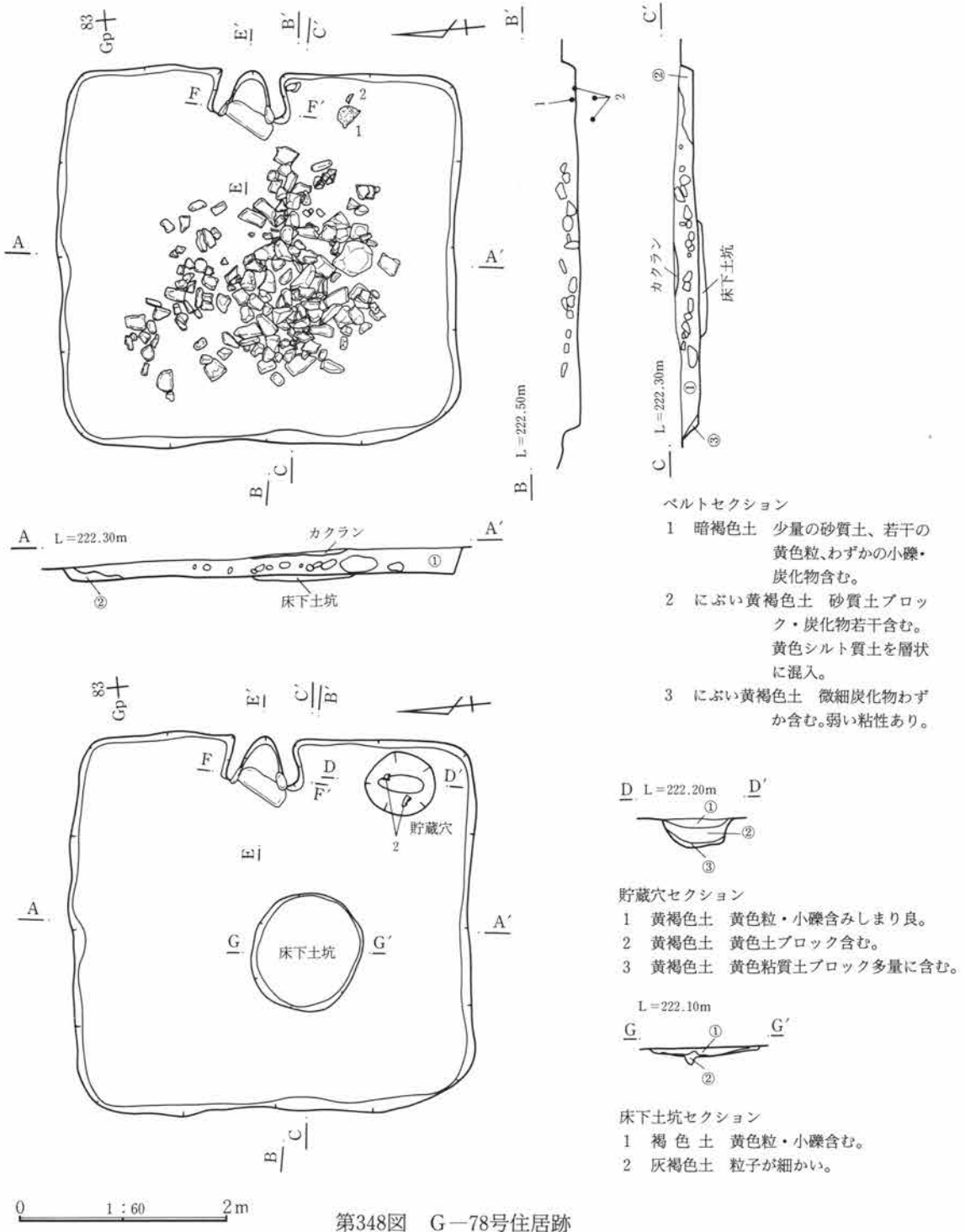
貯蔵穴 住居南東隅近くに所在。形状は住居の長辺方向に長い楕円形。周溝 なし。柱穴 なし。

第3章 検出された遺構と遺物

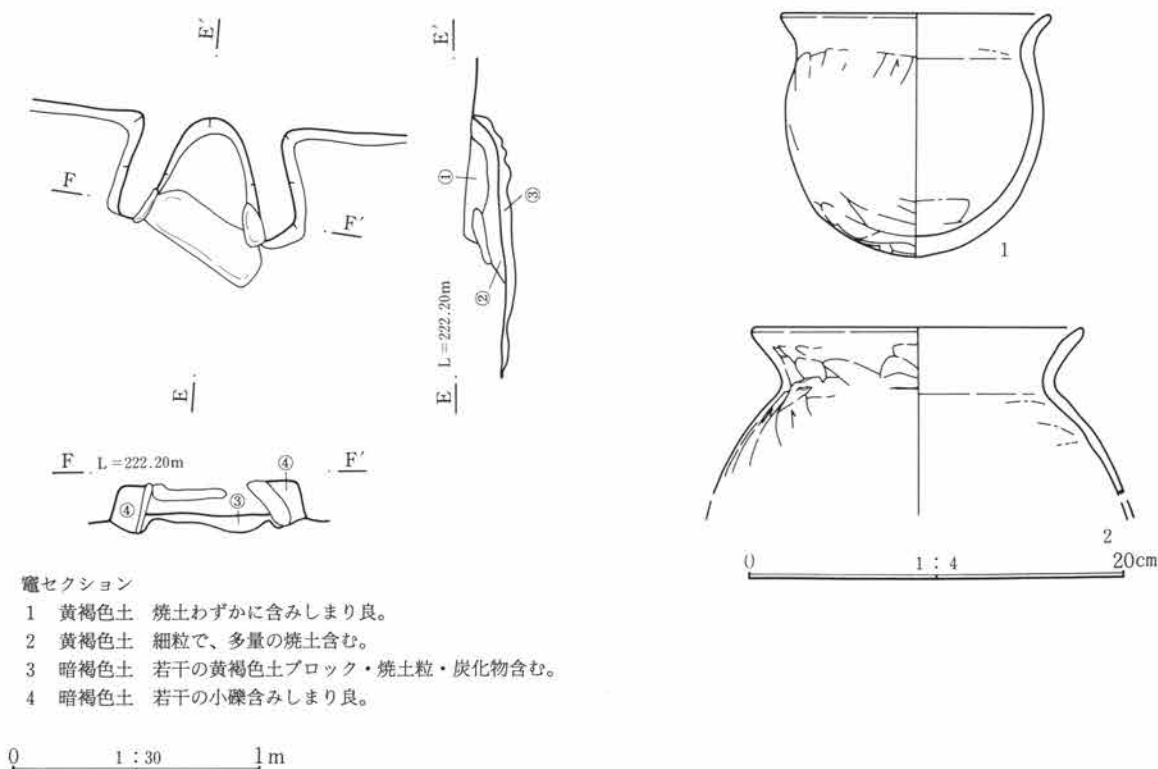
出土遺物 住居の中央から多量の石が出土している。ほとんどの石が床面直上から20cm程の範囲から出土しており、住居の廃絶後間もなく一括して廃棄されたものと思われる。石のうち2割ほどは、竈材として多用される砂岩である。土器は、覆土中出土のものを合わせても、石の量に比べて非常に少ない。主な器種は、土師器小型甕(1)・甕(2)がある。

掘り方 一部に浅く不規則な掘り方がみられる。他に住居のほぼ中央部に浅い床下土坑が掘られている。

調査所見 出土遺物より古墳時代後期の住居と推定される。



第348図 G-78号住居跡



竈セグション

- 1 黄褐色土 焼土わずかに含みしまり良。
- 2 黄褐色土 細粒で、多量の焼土含む。
- 3 暗褐色土 若干の黄褐色土ブロック・焼土粒・炭化物含む。
- 4 暗褐色土 若干の小礫含みしまり良。

第349図 G-78号住居竈、出土遺物実測図

G-78号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 小型甕	床密着 1/2	口(13.9) 底— 高12.8	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	内面黒色処理
2	土師器 甕	貯蔵穴内 口~胴部 上位1/2	口(17.6) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	

G-79号住居跡 (PL49・145)

位置 G1-74グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.22m 重複 G-57住を切る。

規模と形状 形状は横長の長方形で、長辺4.21m・短辺2.98m。西壁に比べ東壁がやや短く、隅も丸味を帯びている。住居の上部はかなり削平されており、特に北壁側が著しい。竈は北側に築かれ、住居主軸は真北にほぼ一致する。

床面 床面は地山褐色粘質土に一致。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の中央部に所在。上部をかなり削平されているため、残存状況はかなり悪い。袖が住居内に作り出される形状で、焚口幅48cm・燃焼部長47cmである。焼土面はみられず、燃焼部の埋土中に焼土層があったのみ。煙道は削平されている。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。形状は楕円形。周溝 なし。

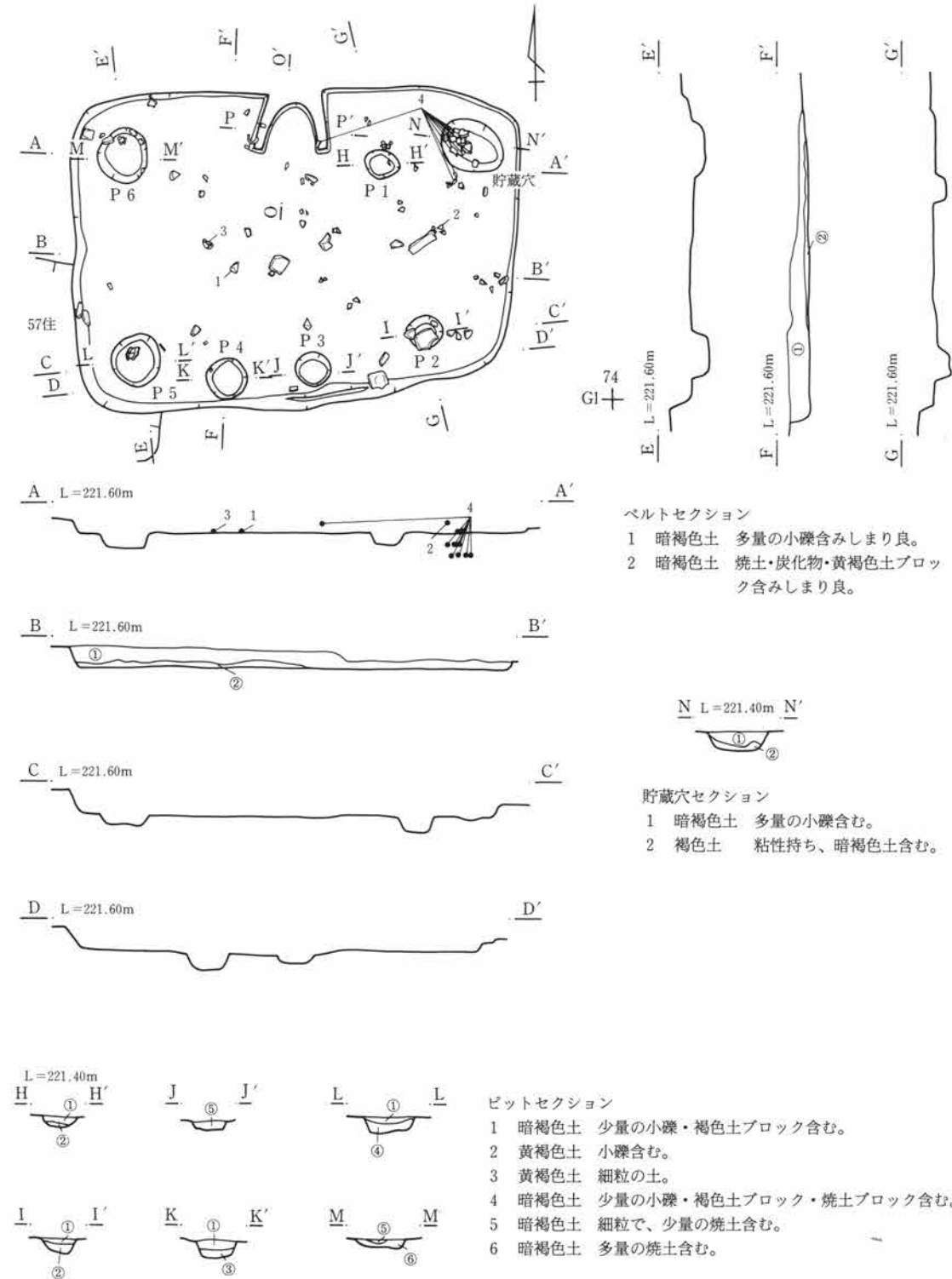
柱穴 6基の小ピット検出。竈と貯蔵穴の間に位置するピット1をのぞいて、壁際近くに位置している。いずれもかなり浅い。壁柱穴か。

第3章 検出された遺構と遺物

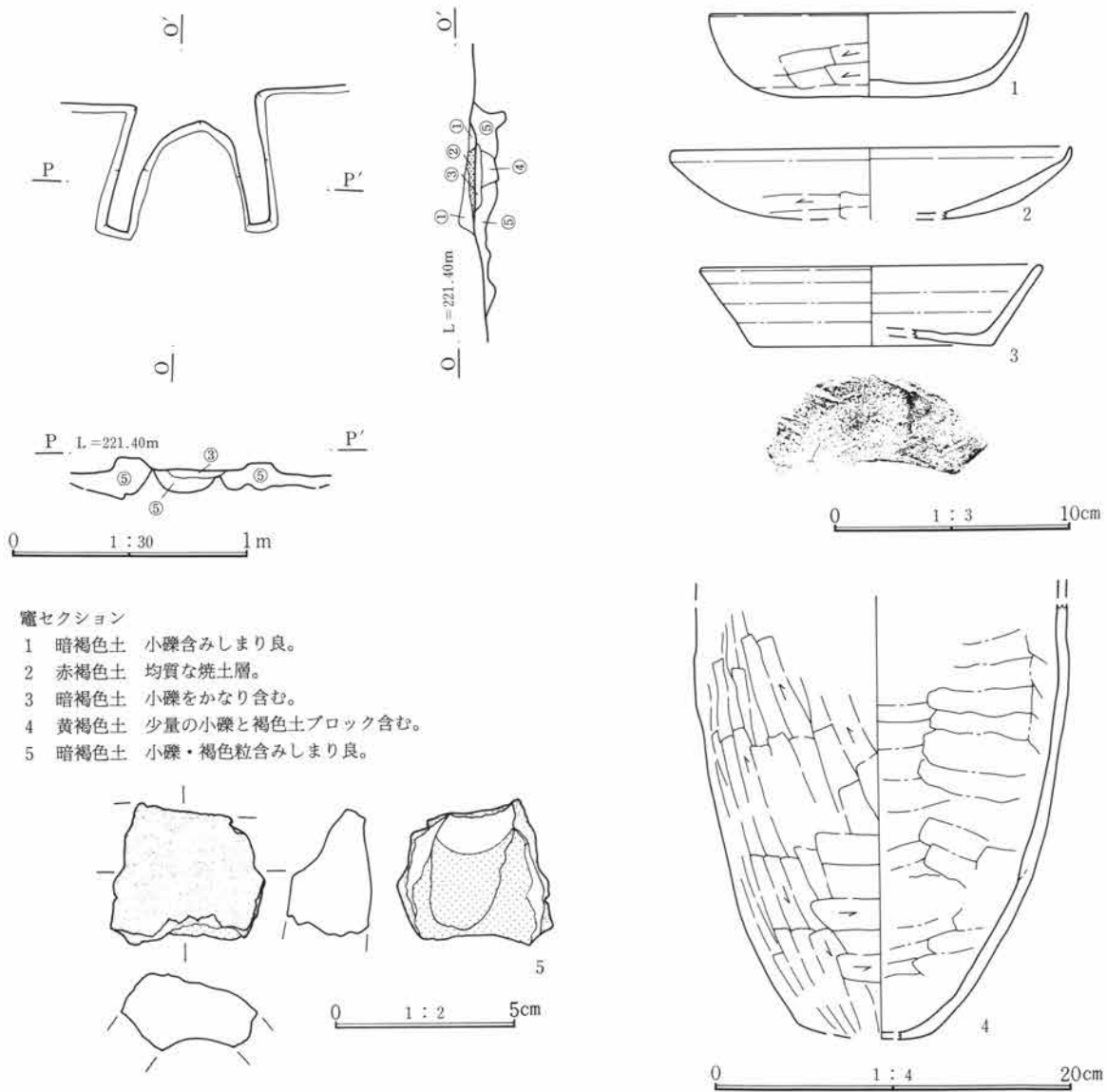
出土遺物 遺物量はあまり多くないが、大半は床面近くより出土している。主な器種は、土師器杯(1)・皿(2)・甕(4)、須恵器杯(3)がある。また、覆土中よりふいごの羽口破片(5)が出土している。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より奈良時代の住居と推定される。

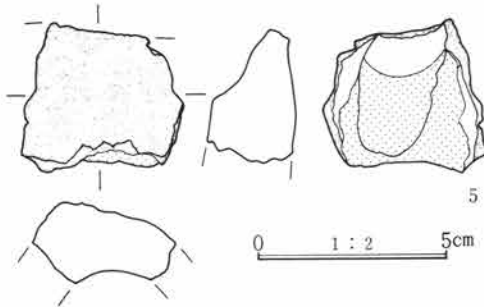


第350図 G-79号住居跡



竈セクション

- 1 暗褐色土 小礫含みしまり良。
- 2 赤褐色土 均質な焼土層。
- 3 暗褐色土 小礫をかなり含む。
- 4 黄褐色土 少量の小礫と褐色土ブロック含む。
- 5 暗褐色土 小礫・褐色粒含みしまり良。



第351図 G-79号住居竈、出土遺物実測図

G-79号住居出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床密着 1/5	口(13.0) 底 — 高 3.5	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。			
2	土師器 皿	+5cm 1/6	口(16.5) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。口縁端部は短く直立。			
3	須恵器 坏	+4cm 1/3	口(14.2) 底(10.0) 高 3.3	①微砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。			
4	土師器 甕	貯蔵穴内 胴下半~ 底部	口 — 底(7.3) 高 —	①細砂(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
5	羽口	覆土	—	—	—	29.3	破片	先端部破片。表面溶けて黒色のガラス状。

掘立柱建物跡

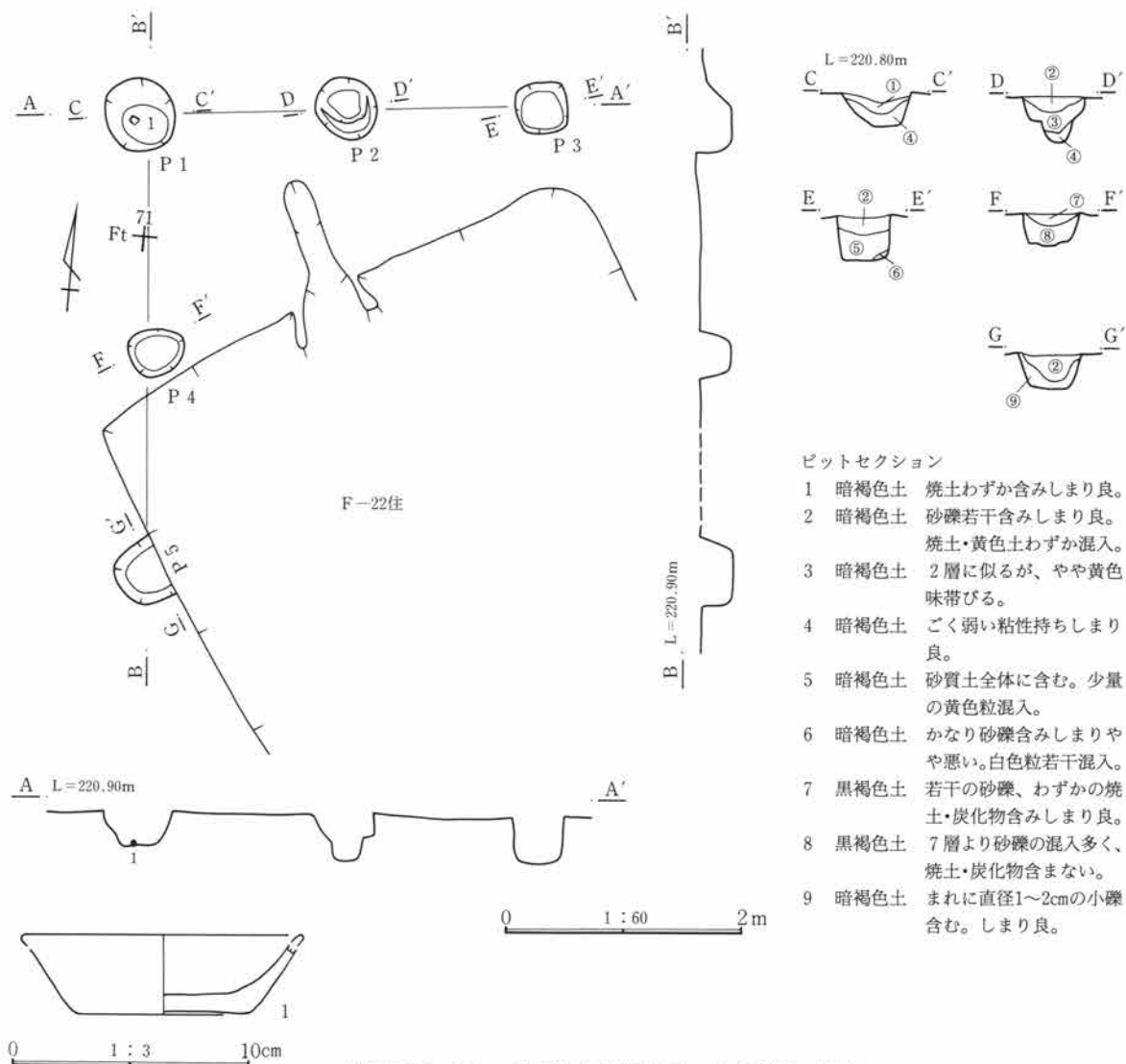
F-1号掘立柱建物跡 (PL49・145)

位置 Fs・Ft-70・71グリッド 重複 調査時にはF-22住の調査が先行したが、出土遺物の検討から1号掘立の方が新しいことがわかった。一部の柱穴が22住と重なっていたため、確認が困難であった。

規模と形状 8本の柱穴からなる2間×2間の掘立柱建物跡と考えられるが、柱穴のうち南東側の3本は検出できなかった。

柱穴 柱穴の形状は円形である。大きさ・深さともに大きなばらつきはない。

出土遺物 P1内より土師器坏(1)が出土している。



第352図 F-1号掘立柱建物跡、出土遺物実測図

F-1号掘立柱建物出土遺物観察表

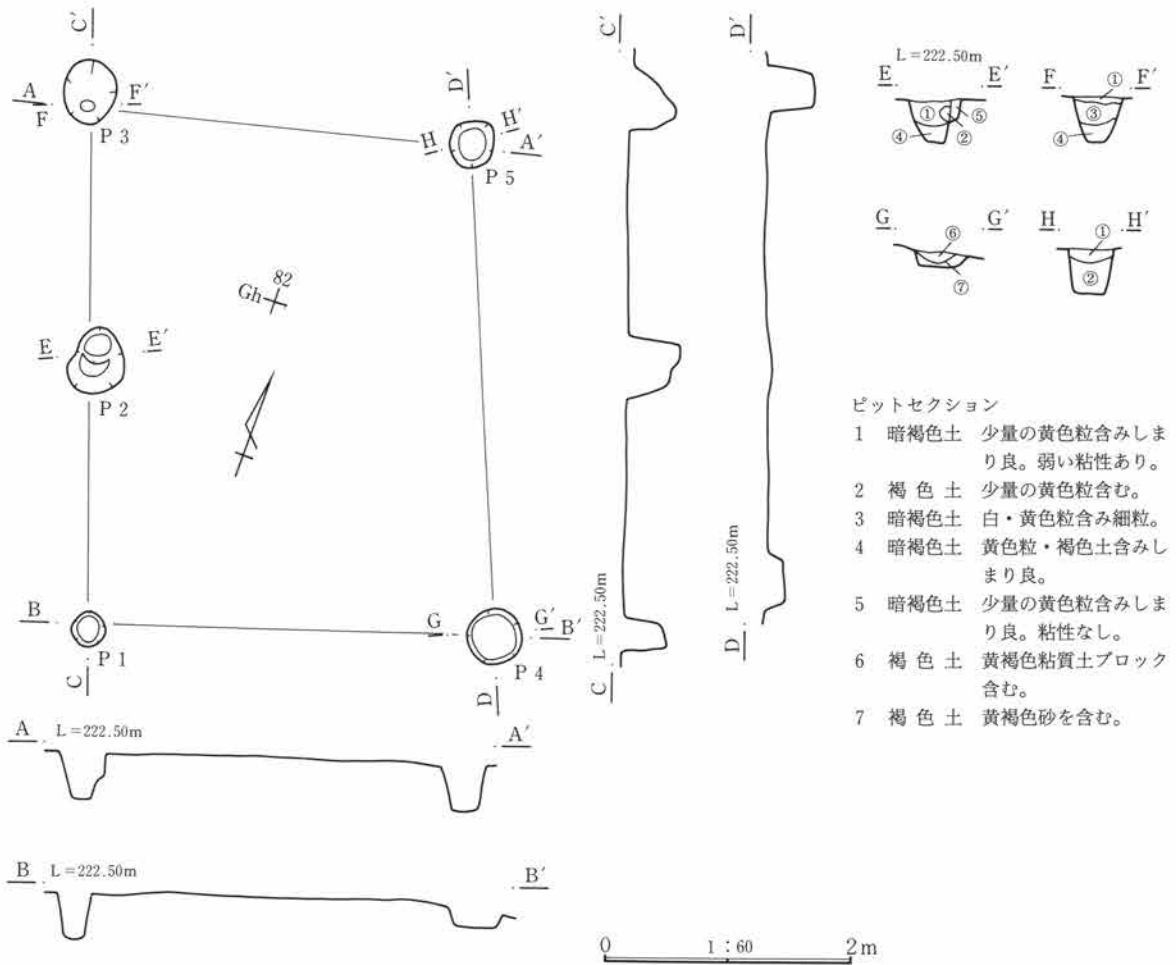
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	ピット1 内 口唇 部欠1/3	口 — 底 (7.0) 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	体部外面および底部ヘラ削り。内面横ナデ。底部と体部境は明瞭。	

G-2号掘立柱建物跡 (PL49)

位置 Gg-81・82グリッド 重複 なし 主軸方位 N-19°-W

規模と形状 5本の柱穴からなる1間×2間の掘立柱建物跡。南北方向に長く、主軸はかなり西にふれる。大きさは南北4.13m・東西3.20m。東列では中央のピットが見られず、北側の柱穴も若干南にずれて形状が歪んでいる。柱間は、梁行3.1mと3.2mでほぼ等しいが、西側の桁行は1.9m、2.2mとかなりの開きがある。
柱穴 柱穴の形状は円形か楕円形。大きさに際だった違いはみられないが、深さはP4が他に比べてかなり浅い。先述の柱間の状況と考えあわせると、掘立柱建物と断定するには疑問が残る。

出土遺物 遺物は出土していない。



第354図 G-2号掘立柱建物跡

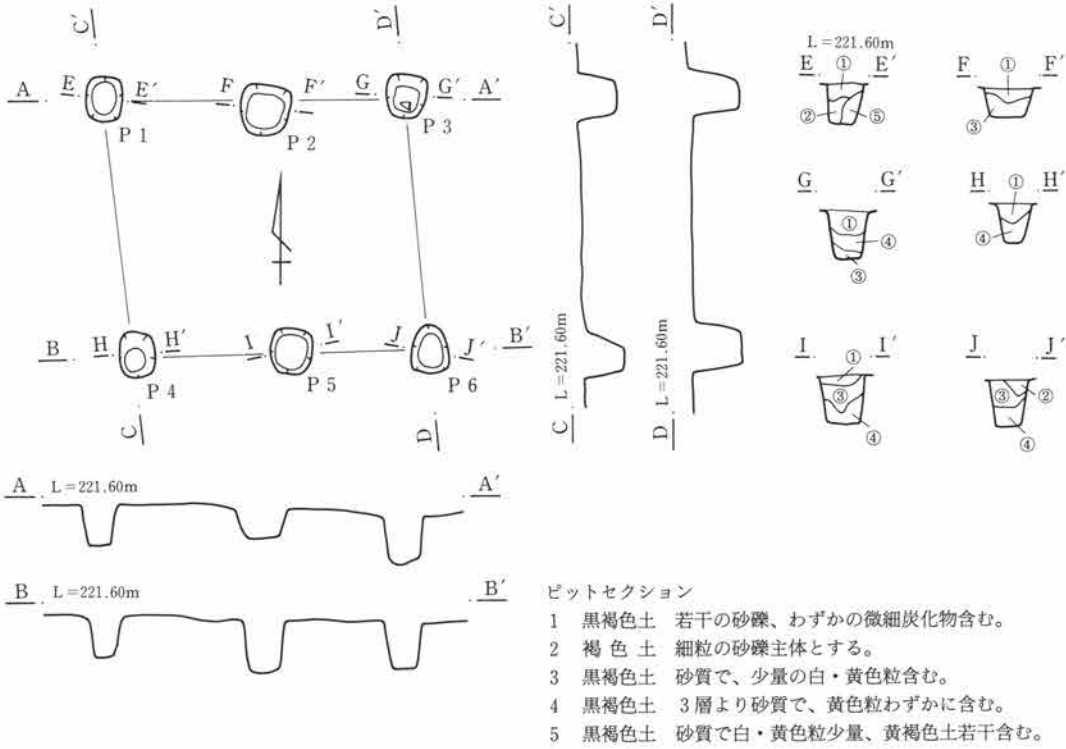
G-3号掘立柱建物跡 (PL50)

位置 Gd-76グリッド 重複 なし 主軸方位 N-89°-E

規模と形状 6本の柱穴からなる1間×2間の掘立柱建物跡。東西方向に長く、主軸はほぼ東西に一致する。北側の柱列に対して、南側の柱列がやや東にずれており、平行四辺形状を呈する。大きさは、東西2.42m・南北2.05m。柱間は、梁行は2m前後でほぼ等しい。桁行は西側がやや長く1.2~3m、東側が1.1m程である。
柱穴 柱穴の形状は円形。大きさはほぼ一様であるが、深さはP2が他に比べてやや浅い。

出土遺物 遺物は出土していない。

77
Ge+



- ピットセクション
- 1 黒褐色土 若干の砂礫、わずかの微細炭化物含む。
 - 2 褐色土 細粒の砂礫主体とする。
 - 3 黒褐色土 砂質で、少量の白・黄色粒含む。
 - 4 黒褐色土 3層より砂質で、黄色粒わずかに含む。
 - 5 黒褐色土 砂質で白・黄色粒少量、黄褐色土若干含む。

第355図 G-3号掘立柱建物跡

G-4号掘立柱建物跡 (PL50)

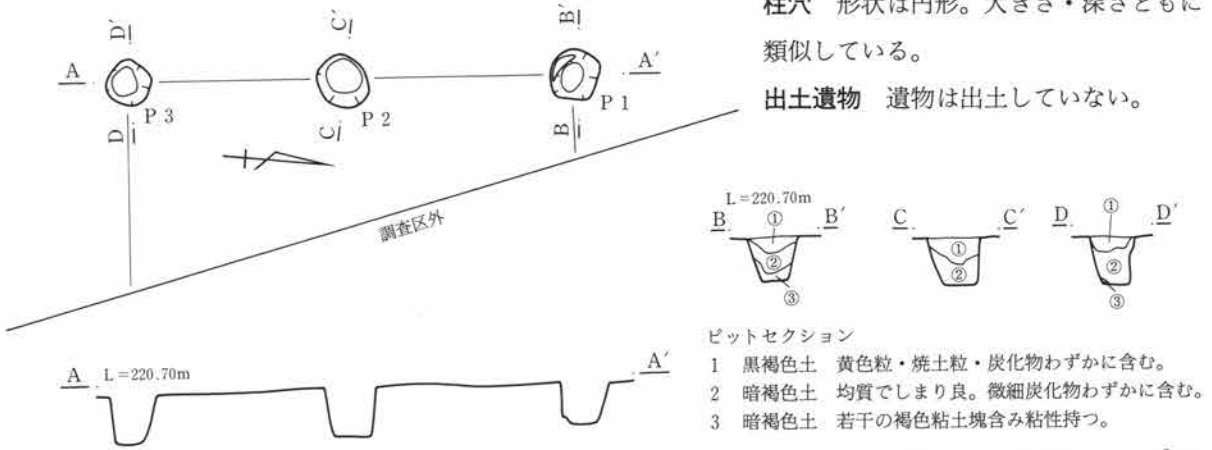
位置 Ga-67グリッド 重複 なし 主軸方位 不明

規模と形状 南北に連なる3本の柱穴からなる。東側の調査区外にのびるものと思われ、規模・形状ともに不明である。柱間はともに1.8mでほぼ等しい。遺構の大半が調査区外にあると思われるため確実ではないが、

ピットの形状と位置関係、および埋土の状況から掘立柱建物と判断した。

柱穴 形状は円形。大きさ・深さともに類似している。

出土遺物 遺物は出土していない。



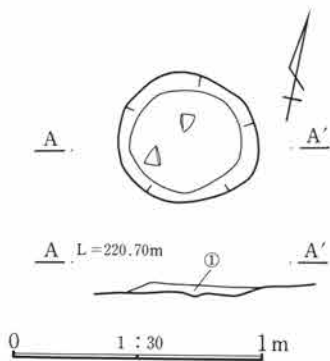
- ピットセクション
- 1 黒褐色土 黄色粒・焼土粒・炭化物わずかに含む。
 - 2 暗褐色土 均質でしまり良。微細炭化物わずかに含む。
 - 3 暗褐色土 若干の褐色粘土塊含み粘性持つ。

第356図 G-4号掘立柱建物跡

第3章 検出された遺構と遺物

土 坑

F-3号土坑 (PL50)



Fr-71グリッドに所在。形状はほぼ円形であるが、長軸56cm・短軸51cmとわずかに東西方向が長い。深さ3cm。内部より土師器破片が数片出土した。

- 1 黒褐色土 砂礫・黄色粒わずかに含みし
まりやや悪い。

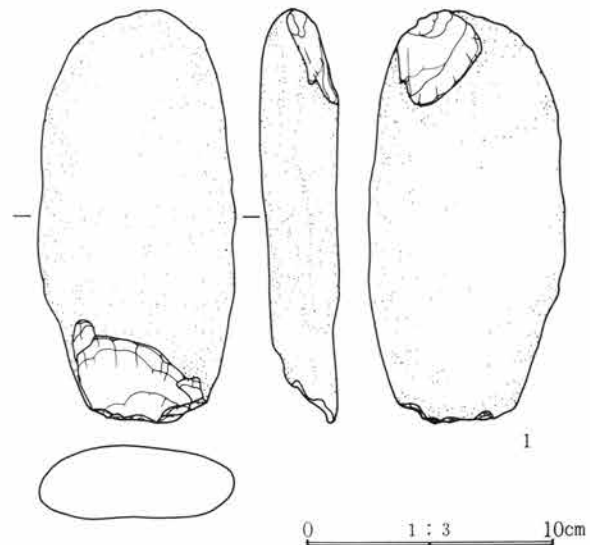
第357図 F-3号土坑

F-6号土坑 (PL50・145)

Ft-76グリッドに所在。形状は不正楕円形で、長軸75cm・短軸65cm・深さは29cmである。覆土中位より敲石が1点(1)出土。



- 1 暗褐色土 少量の白色粒・炭化物・砂礫含む。
2 暗褐色土 少量の白色粒・黄褐色土ブロック・砂礫含む。
3 暗褐色土 1層に似るが、炭化物含まない。
4 褐色土 少量の白・橙色粒、細粒の砂礫含む。



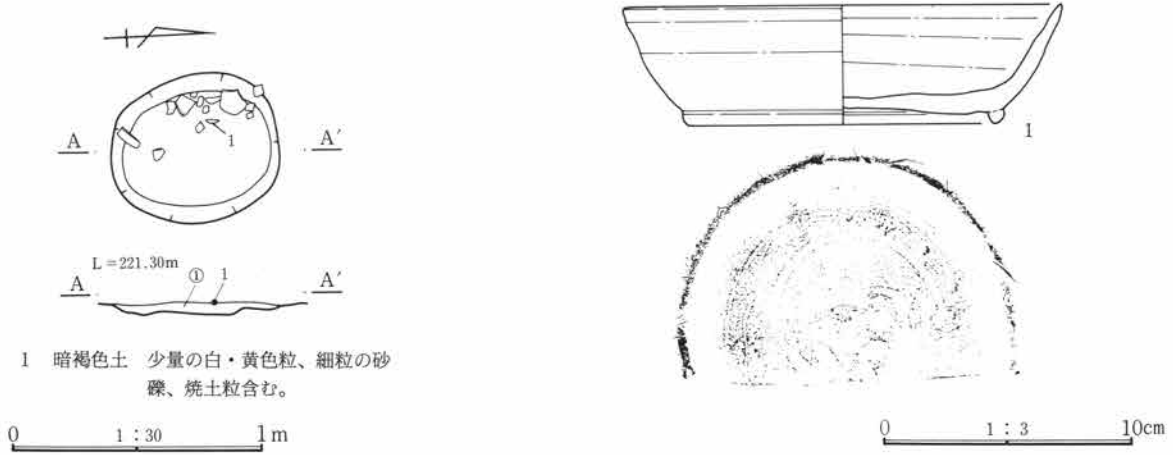
第358図 F-6号土坑、出土遺物実測図

F-6号土坑出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
1	敲石	+24cm 完形	16.3	7.9	3.0	635.7	緑色片岩	薄手の円礫の両端に使用による破損と思われる剥離痕あり。

F-7号土坑 (PL50・145)

Ft-77グリッドに所在。形状は楕円形で、長軸67cm・短軸58cm・深さ4cm。内部より土師器・須恵器破片が出土。中に須恵器高台付坏(1)が含まれていた。出土遺物より、奈良時代の所産であろう。



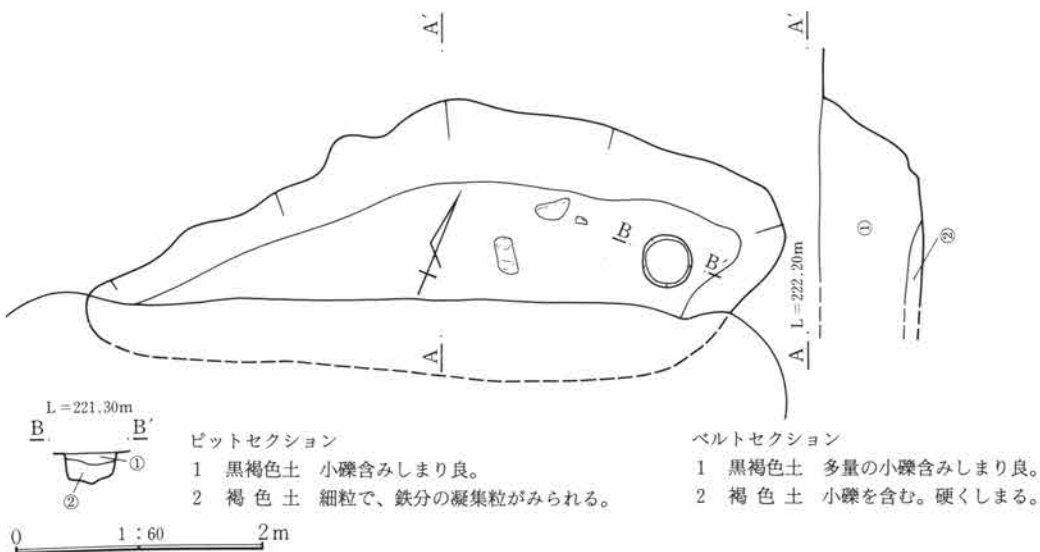
第359図 F-7号土坑、出土遺物実測図

F-7号土坑出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 高台付坏	+3cm 2/3	口(17.2) 底(12.1) 高 4.7	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り。貼り付け高台。	

G-12号土坑 (PL50)

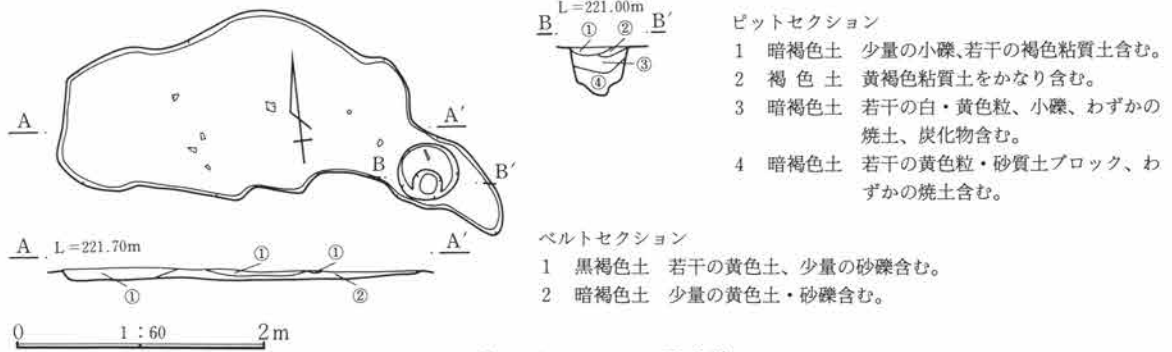
Gb-79・80グリッドに所在。G-2住よりも新しいが、調査時に重複関係を誤認し2住の調査を先行したために、南側のプランが確認できなかった。形状は不定形で、内部からピットが1基検出された。大きさは、現状で長辺550cm・短辺158cm・深さ78cmである。遺物は、覆土中を含めて若干の土師器・須恵器が出土した。遺物の多くは、古墳時代後期に属するものである。



第360図 F-12号土坑

G-14号土坑

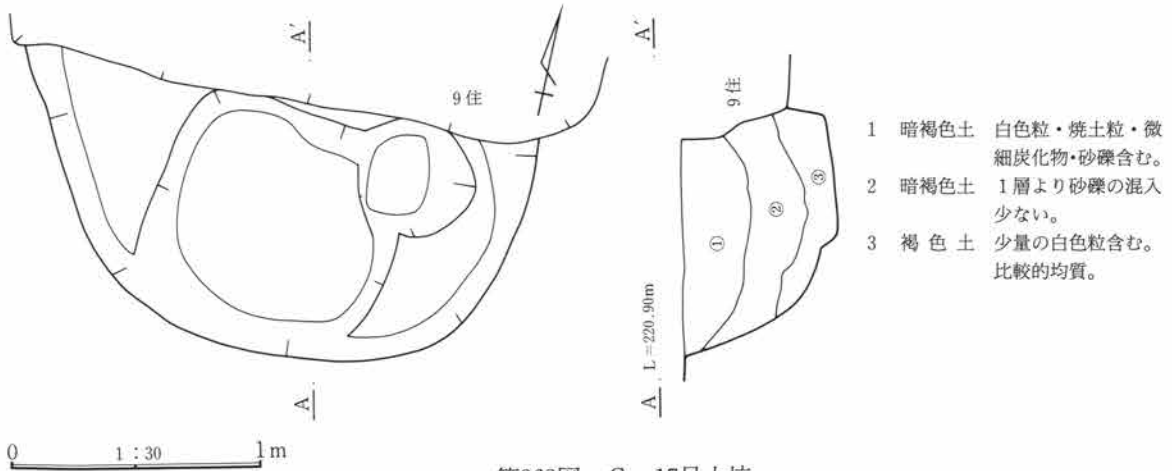
Ga-77・78グリッドに位置する。形状は不定形で、ピット1基を伴う。大きさは、長辺357cm・短辺148cm・深さ9cmである。土坑として取り扱ったが、上部が削平された住居の掘り方部分である可能性がある。内部より土師器の小破片が散在して出土。遺物の年代より、奈良時代のもものと推測される。



第361図 G-14号土坑

G-17号土坑 (PL50)

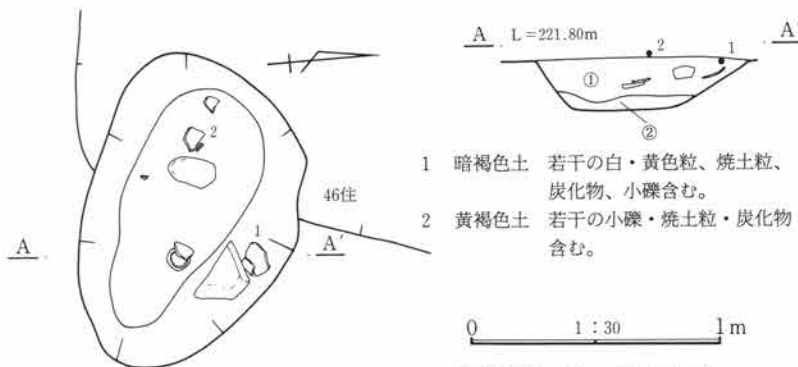
Ga-70・71グリッドに位置する。G-19住に切られ、北壁を失っている。現状での形状は楕円形で、長辺209cm・短辺101cm・深さ62cmである。遺物の出土はなく時期を確定できないが、古墳時代後期の住居に切られているため、それ以前に構築されたものである。



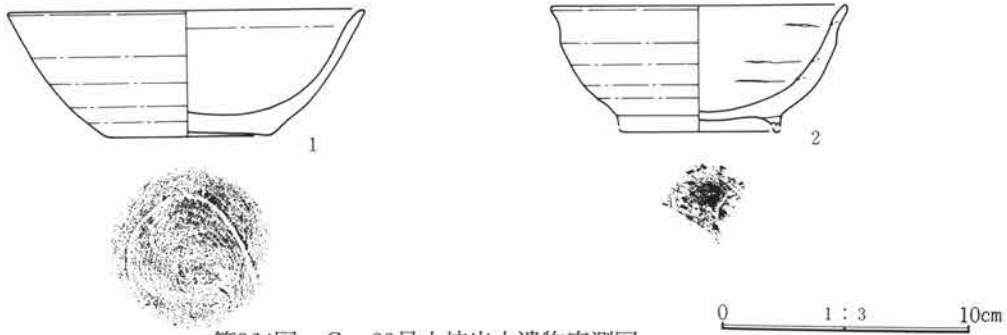
第362図 G-17号土坑

G-29号土坑 (PL50・145)

Gm-77グリッドに位置する。形状は楕円形で、長辺123cm・短辺85cm・深さ20cm。G-46住を切る。内部より須恵器環(1)・埵(2)が出土している。平安時代の所産である。



第363図 G-29号土坑



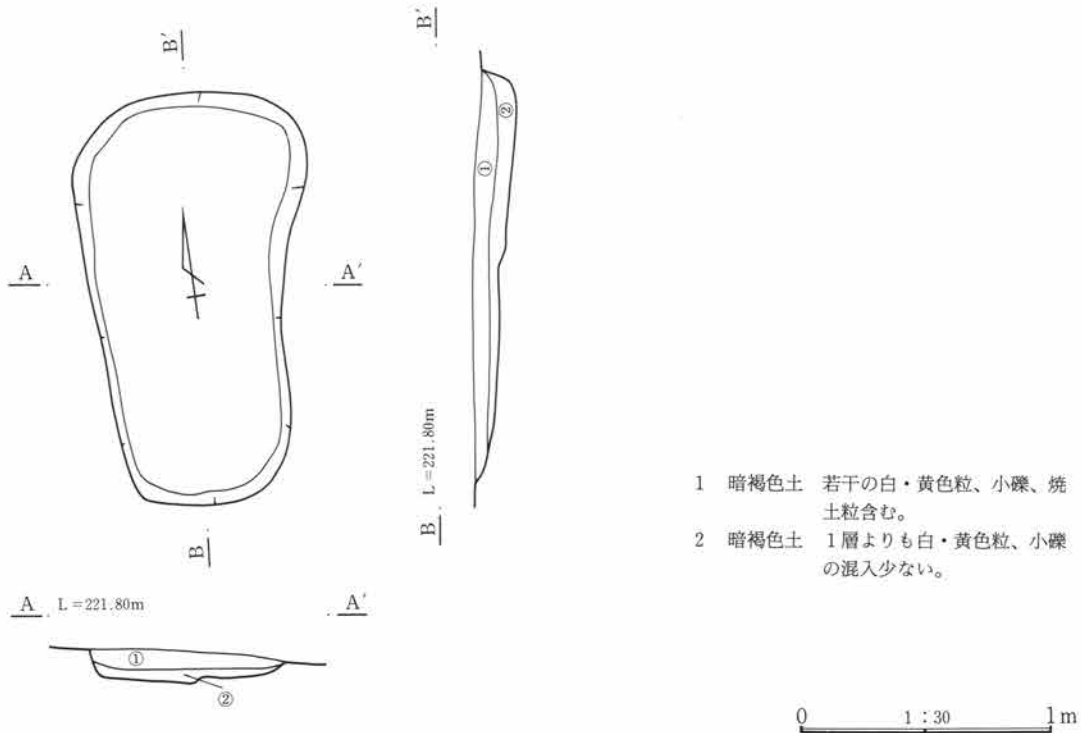
第364図 G-29号土坑出土遺物実測図

G-29号土坑出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	+10cm 1/3	口(14.0) 底 6.4 高 4.9	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁端部わずかに外反。底部右回転の回転糸切り。	
2	須恵器 塊	+16cm 1/4	口(11.4) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色	ロクロ整形。内面に接合痕。底部回転糸切り後高台貼付。	

G-30号土坑 (PL51)

Gk-75グリッドに位置する。形状は隅丸の長方形に近いが、北側がやや広がっている。長辺161cm・短辺93cm・深さ15cm。遺物の出土はなく時期の確定は困難であるが、重複関係をもつG-57住(古墳時代後期)よりも新しいため、それ以降のものとなる。

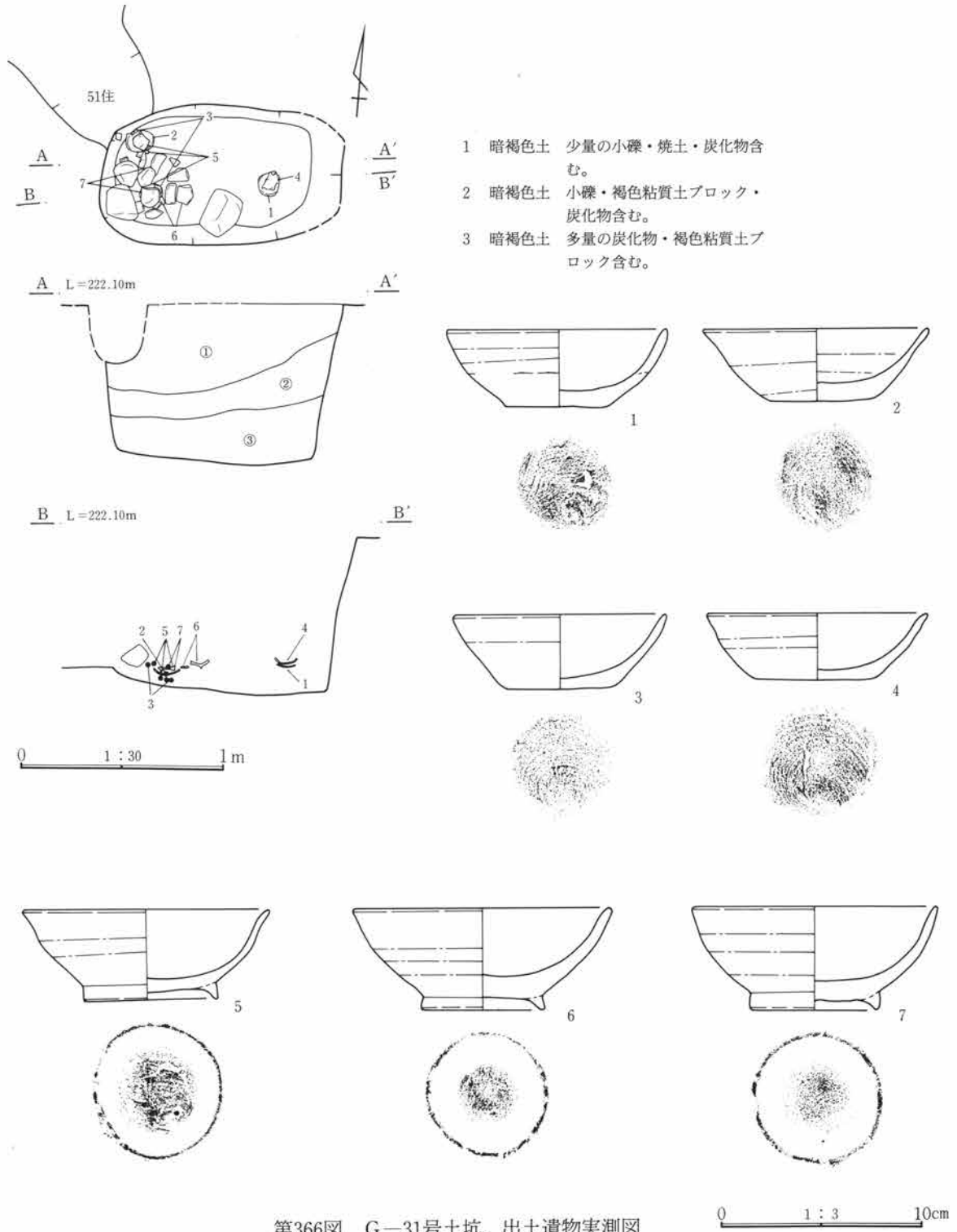


第365図 G-30号土坑

第3章 検出された遺構と遺物

G-31号土坑 (PL51・145・146)

Gf-77グリッドに所在。G-51・53住と重複関係を持ち、53住より新しく、51住よりは古い。53住の調査中に確認したため、上部は一部失われていた。形状は隅丸の長方形で、長辺116cm・短辺68cm・深さ78cmである。内部からは、ほぼ完形に近い須恵器坏(1~4)・埴(5~7)のほか、焼けた礫などが出土している。遺物より、平安時代のもものと推測される。



第366図 G-31号土坑、出土遺物実測図

G-31号土坑出土遺物観察表

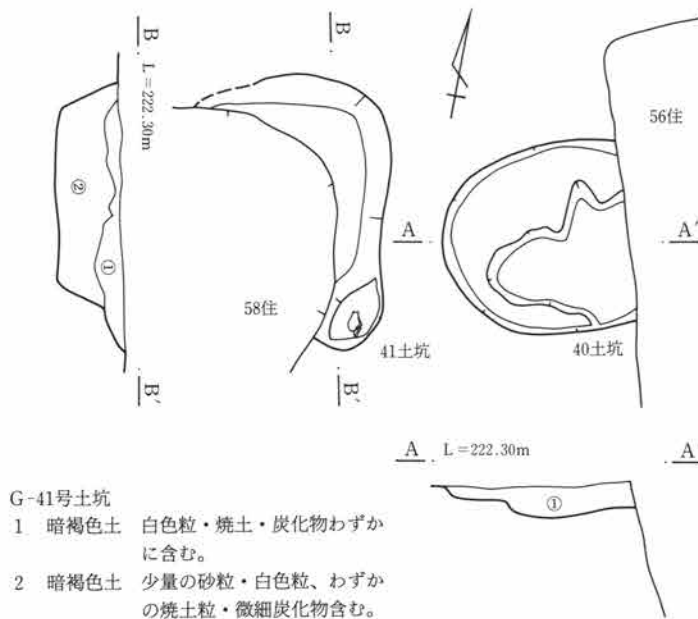
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	+15cm ほぼ完形	口 10.8 底 5.1 高 3.7	①均質な細砂含む ②良好 ③浅黄橙色	ロクロ整形。外面に接合痕。底部右回転の回転糸切り。	
2	須恵器 坏	+5cm ほぼ完形	口 11.0 底 5.6 高 3.5	①微砂粒・角閃石微 粒子含む ②良好 ③淡橙色	ロクロ整形。口縁端部わずかに外反。底部右回転の回転糸切り。	
3	須恵器 坏	+3cm 2/3	口 10.4 底 5.2 高 3.6	①微砂粒・角閃石微 粒子含む ②良好 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形。底部右回転の回転糸切り。	
4	須恵器 坏	+12cm 2/3	口 10.7 底 5.9 高 3.2	①微砂粒含む ②良好 ③淡黄色	ロクロ整形。口縁端部わずかに外反。底部右回転の回転糸切り。	
5	須恵器 塊	+6cm 2/3	口 12.0 底 6.5 高 4.5	①微砂粒・角閃石微 粒子含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁端部わずかに外反。底部回転糸切り後高台貼付。	
6	須恵器 塊	+6cm 3/5	口(12.5) 底 6.0 高 4.9	①微砂粒・角閃石微 粒子含む ②良好 ③浅黄橙色	ロクロ整形。底部回転糸切り後高台貼付。	
7	須恵器 塊	+4cm 1/3	口(11.6) 底 6.3 高 5.0	①微砂粒・角閃石微 粒子含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。底部回転糸切り後高台貼付。	

G-40号土坑 (PL51)

Gh-80グリッドに位置する。東半をG-56住によって切られているため正確な形状は不明であるが、おそらく楕円形を呈するものと思われる。大きさは現状で長辺74cm・短辺76cm・深さ12cm。遺物の出土はなく時期を確定できないが、重複する56住が古墳時代後期のものであることから、それ以前の所産であることがわかる。

G-41号土坑 (PL51)

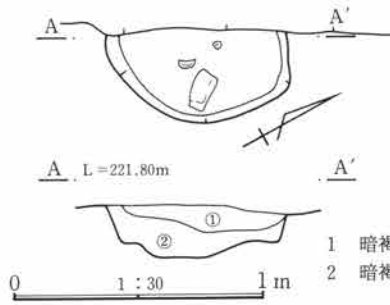
Gh-80グリッドに所在。G-40号土坑の西隣に位置する。西半をG-58住によって切られているため形状は不明。大きさは、現状で長辺109cm・短辺78cm・深さ28cm。内部より土師器が出土したがいずれも小破片で、時期の確定はできなかった。重複するG-58号住居が古墳時代後期のものであることから、それ以前のものであることがわかる。



第367図 G-40・41号土坑

第3章 検出された遺構と遺物

G-43号土坑 (PL51)



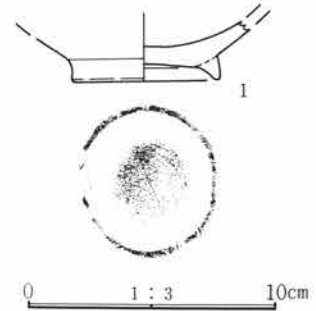
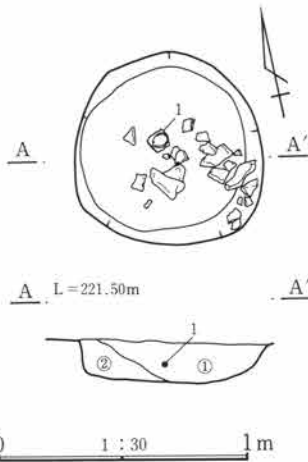
Gg-76グリッドに所在。形状はほぼ円形と思われるが、G-1溝によって大半を破壊される。現状での大きさは、長辺73cm・短辺36cm・深さ21cm。内部より礫が3点出土したが、他に時期を特定できる遺物はない。中世初頭のG-1溝に切られることから、それ以前のものであろう。

- 1 暗褐色土 若干の小礫、ごくわずかの微細炭化物含む。やや砂質。
- 2 暗褐色土 少量の小礫、わずかの微細炭化物含む。ごく弱い粘性あり。

第368図 G-43号土坑

G-44号土坑 (PL51・146)

Gl-73グリッドに所在。形状はほぼ円形で、長辺79cm・短辺75cm・深さ18cm。内部より須恵器碗(1)を含む土師器・須恵器破片と、数点の礫が出土した。遺物より、平安時代のもものと推定される。



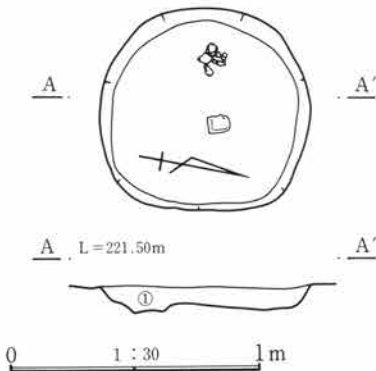
- 1 暗褐色土 若干の白色粒・小礫、わずかの焼土・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 少量の白色粒含む。

第369図 G-44号土坑、出土遺物実測図

G-44号土坑出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 碗	+7cm 底部	口— 底 5.7 高—	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。底部回転糸切り後高台貼付。	

G-45号土坑 (PL51)



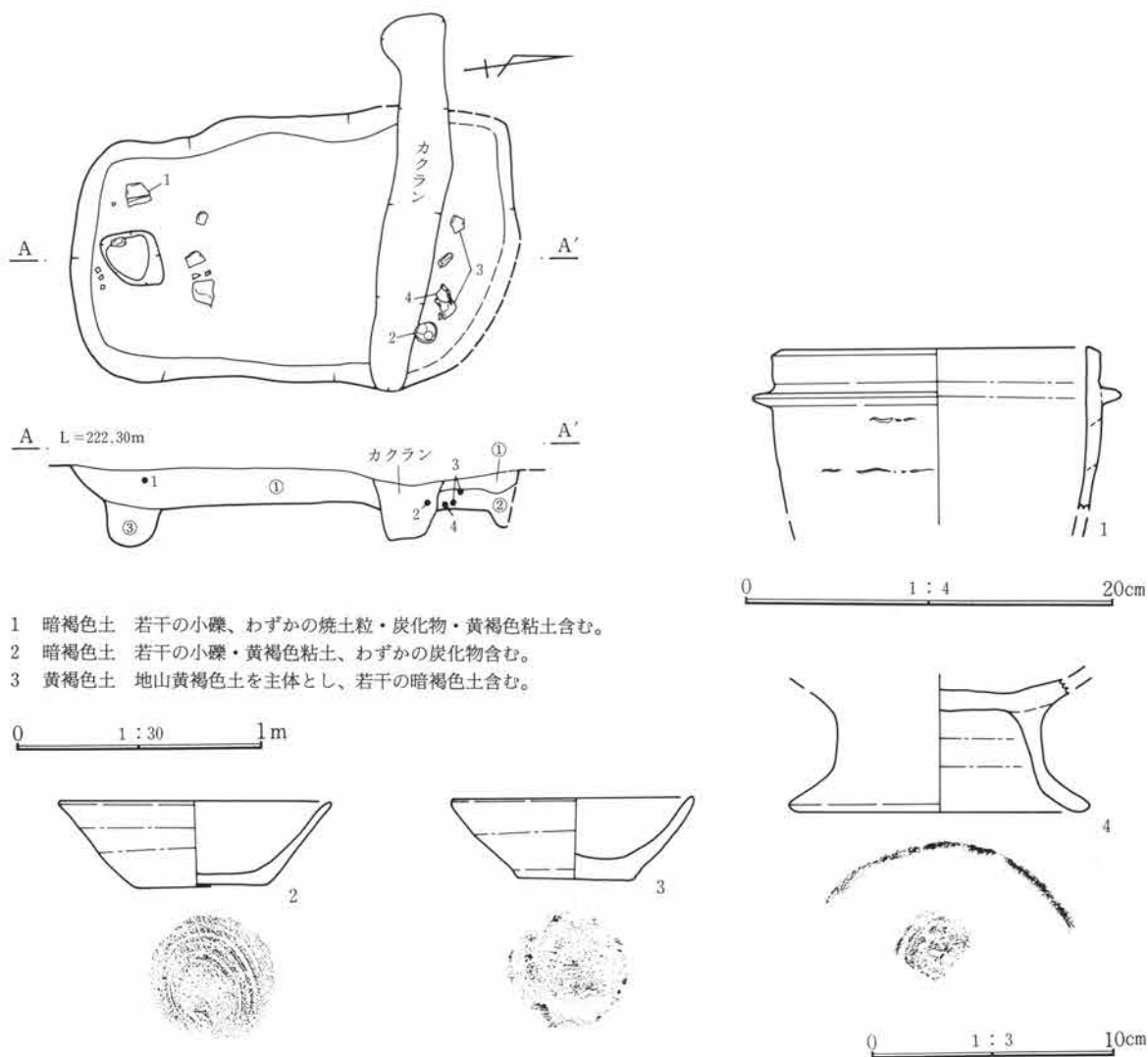
Gj-72グリッドに位置する。形状はほぼ円形で、長辺85cm・短辺81cm・深さ10cmである。内部より少量の土師器破片と礫が1点出土した。遺物より、奈良時代のもものと推測される。

- 1 暗褐色土 白色粒・焼土粒・炭化物わずかに含む。

第370図 G-45号土坑

G-47号土坑 (PL51・146)

GI-80グリッドに位置する。形状は隅丸の長方形で、長辺182cm・短辺114cm・深さ18cmである。底面南端の中央部には、小さなピットが穿たれている。内部からは羽釜(1)・須恵器坏(2・3)・足高高台付の埴(4)などが出土した。遺物より、平安時代のものと推測される。



- 1 暗褐色土 若干の小礫、わずかの焼土粒・炭化物・黄褐色粘土含む。
- 2 暗褐色土 若干の小礫・黄褐色粘土、わずかの炭化物含む。
- 3 黄褐色土 地山黄褐色土を主体とし、若干の暗褐色土含む。

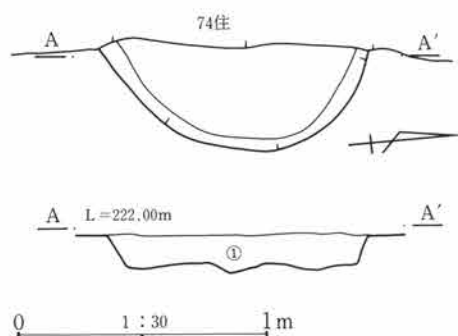
第371図 G-47号土坑、出土遺物実測図

G-47号土坑出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 羽釜	床密着 口~胴部 上位破片	口(16.5) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③灰黄色	ロクロ整形。口縁部はほぼ直立。鑊の断面形状は三角形。胴部外面に接合痕。	
2	須恵器 坏	+10cm ほぼ完形	口 11.0 底 5.3 高 3.6	①細砂含む ②良好 ③淡黄色	ロクロ整形。口縁部外反。底部右回転の回転糸切り。	口縁内面に油煙状の付着物
3	須恵器 坏	+2cm 3/5	口 9.7 底 4.6 高 3.4	①砂粒含む ②良好 ③橙色	ロクロ整形。右回転の回転糸切り。	器表面かなり摩滅
4	須恵器 埴	+2cm 底~高台 部1/3	口 — 底(12.1) 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。底部切り離し後高台貼付。	足高高台

G-54号土坑 (PL51)

Gj-77グリッドに位置する。G-74号住居に切られ、西半が失われている。現状での大きさは、長辺107cm・



短辺41cm・深さ16cmである。覆土中より古墳時代後期の土師器小破片が出土し、またより新しいG-74号住居が8世紀に位置づけられることから、古墳時代後期のものと推測される。

1 暗褐色土 小礫含みしまり悪い。

第372図 G-54号土坑

ピット群 (PL52・53・146)

F・G区では多量の小ピットが検出された。ピットは合計396基になるが、住居覆土を掘り込んで作られたため、調査時に検出できなかったものも相当数にのぼると思われる。形状は円～楕円形で、大きさの平均は長軸38.7cm・短軸34.7cm・深さ25.6cm。ピットは、ある程度分布域がまとまっており、大半はF区～G区南端にかけた区域に所在する。ピットの中には、見かけ上直線的に並ぶものもあり、柵列状の施設が想定できた。ただし、それらも深さはまちまちであり、確実に柵列と認定できるものはなかった。

ピットが作られた時期であるが、確定するための手掛かりは乏しい。複数のピットからは遺物が出土しているが、これらはいずれも古墳時代後期の遺物であった。このため、ピット群を古墳～平安時代の中で扱ったが、覆土にAs-B軽石を含むものがあり、中世以降に作られたものも一部含まれている。As-B軽石を含むピットは、Gh-70グリッド付近に集中し、周囲には同じくAs-B軽石を含む土坑・溝などが分布している。

出土した遺物は大半が小破片で、形状が復元できるようなものは少ない。図化できたものとしては、土師器坏(1・2)・小型甕(3)・甕(4・5)がある。以下に、ピットの一覧表を付す。

第15表 F・G区ピット一覧

No	グリッド	長軸	短軸	深さ	備考	No	グリッド	長軸	短軸	深さ	備考
1	Fm-67	39.0	32.0	27.0		20	Fm-71	28.0	28.0	38.8	
2	Fm-67	39.5	37.0	33.0		21	Fm-71	40.5	38.0	45.6	
3	Fm-67	28.5	26.0	23.5		22	Fm-71	30.0	37.0	47.4	
4	Fm-68	44.0	42.5	41.4		23	Fm-71	42.0	39.0	35.5	第373図-5出土
5	Fm-68	44.5	37.5	29.0		24	Fm-71	44.0	37.5	54.3	
6	Fm-68	37.0	32.0	20.4		25	Fm-71	28.0	26.0	34.3	
7	F1-69	25.5	25.0	22.7		26	Fm-72	40.0	37.0	14.8	
8	F1-69	26.0	25.0	18.8		27	Fm-72	48.0	46.0	18.0	
9	F1-70	36.5	35.0	23.3		28	Fm-72	45.0	42.0	44.2	
10	F1-70	37.0	36.0	64.2		29	Fm-72	45.5	44.0	18.4	
11	F1-70	37.0	30.0	50.0		30	Fm-72	39.0	38.5	48.0	
12	F1-71	33.0	33.0	28.6		31	Fm-72	39.0	38.0	45.0	
13	F1-71	35.5	35.0	27.3		32	Fm-72	39.0	36.5	48.5	
14	Fk-74	52.0	51.5	27.3		33	Fm-73	89.0	81.0	10.5	
15	F1-74	46.5	43.5	28.0		34	Fn-70	42.0	40.0	37.8	
16	Fm-69	28.0	26.5	48.1		35	Fn-70	32.0	32.0	17.9	
17	Fm-69	41.0	41.0	42.3		36	Fn-70	30.5	29.0	15.7	
18	Fm-70	40.0	34.0	29.2		37	Fn-70	33.0	31.0	24.0	
19	Fm-71	58.0	57.0	31.3	第373図-2出土	38	Fn-70	32.5	31.5	22.5	

第2節 F・G区

No.	グリッド	長軸	短軸	深さ	備 考	No.	グリッド	長軸	短軸	深さ	備 考
39	Fn-70	42.5	39.5	38.7		100	Fr-71	28.0	23.0	21.7	
40	Fn-70	34.5	30.5	34.0		101	Fr-71	25.0	21.0	23.8	
41	Fn-70	49.0	42.0	53.0		102	Fr-71	41.0	33.5	20.1	
42	Fn-70	36.0	34.5	31.0		103	Fr-71	33.5	30.5	15.5	
43	Fn-71	44.0	40.0	41.8		104	Fr-71	28.0	25.0	8.7	
44	Fn-71	39.0	37.0	37.7		105	Fr-71	28.0	25.0	17.5	
45	Fn-71	40.0	39.5	29.3		106	Fr-71	26.5	26.0	22.2	
46	Fn-73	98.0	77.5	34.2		107	Fr-71	42.0	41.0	26.4	
47	Fn-73	64.5	57.0	13.3		108	Fr-71	35.0	30.0	27.1	
48	Fn-74	55.0	46.0	39.2		109	Fr-72	32.5	30.5	13.1	
49	Fo-69	53.0	46.0	29.5		110	Fr-72	31.0	27.5	12.1	
50	Fo-69	45.0	44.5	14.7		111	Fr-72	29.5	28.5	17.3	
51	Fo-69	45.0	40.5	21.3		112	Fr-72	37.0	32.5	20.7	
52	Fo-69	30.0	29.0	17.5		113	Fr-72	26.0	24.0	12.5	
53	Fo-69	32.0	23.0	27.1		114	Fr-72	31.0	31.0	11.8	
54	Fo-70	38.5	37.5	35.3		115	Fr-72	39.0	38.0	10.5	
55	Fo-70	32.5	29.0	14.1		116	Fr-73	26.0	25.0	10.1	
56	Fo-70	43.0	39.5	25.8		117	Fr-73	43.0	37.0	28.5	
57	Fo-70	48.0	44.0	31.5		118	Fr-73	41.0	35.0	7.8	
58	Fo-70	47.0	46.0	37.7		119	Fr-74	22.5	21.0	13.5	
59	Fo-70	36.0	35.5	32.9		120	Fr-74	52.5	43.0	47.5	
60	Fo-70	37.0	33.0	25.5		121	Fr-74	42.0	37.0	22.0	
61	Fo-70	36.0	33.0	22.2		122	Fr-74	23.5	23.0	15.0	
62	Fo-70	50.0	49.0	44.4		123	Fr-74	42.0	39.0	47.0	
63	Fo-70	51.0	45.0	37.2		124	Fr-74	33.5	33.0	27.5	
64	Fo-70	44.0	43.0	23.9		125	Fr-74	34.0	33.0	19.5	
65	Fo-70	50.5	44.0	37.6		126	Fr-74	34.0	27.0	29.0	
66	Fo-70	41.0	40.0	32.8		127	Fr-74	56.0	39.0	27.3	
67	Fo-70	35.0	34.5	20.4		128	Fs-74	47.0	37.0	25.1	
68	Fo-70	51.0	46.5	33.2		129	Fs-74	39.0	34.0	33.6	
69	Fq-70	28.0	21.0	43.4		130	Fs-74	54.0	39.0	25.5	
70	Fo-71	49.5	45.0	25.3		131	Fr-75	35.0	35.0	29.0	
71	Fo-71	30.0	29.5	25.6		132	Fr-75	46.0	41.0	33.5	
72	Fp-69	29.0	28.0	28.5		133	Fr-75	45.0	42.0	28.7	第373図-3 出土
73	Fp-69	28.5	27.0	16.8		134	Fq-75	41.0	37.0	31.0	
74	Fp-70	33.0	32.0	25.8		135	Fq-75	50.0	49.0	21.5	
75	Fp-70	33.0	31.0	24.4		136	Fq-75	37.0	35.0	25.8	
76	Fp-70	36.5	35.0	30.0		137	Fr-76	42.0	38.0	47.0	
77	Fp-71	43.0	36.5	25.0		138	Fr-76	39.0	37.0	14.4	
78	Fq-70	38.5	36.5	19.7		139	Fr-76	58.0	51.0	17.8	
79	Fq-70	27.5	27.5	15.8		140	Fr-76	31.0	28.0	9.6	
80	Fq-70	26.5	23.5	17.5		141	Fr-69	32.5	32.5	30.8	
81	Fq-70	27.5	26.5	36.2		142	Fr-69	28.0	27.5	20.3	
82	Fq-70	34.5	33.0	25.2		143	Fs-69	43.0	39.0	13.0	
83	Fq-70	24.0	24.0	25.2		144	Fs-68	21.0	19.0	10.3	
84	Fq-70	34.0	30.5	35.1		145	Fs-68	36.5	34.0	41.4	
85	Fq-71	28.0	28.0	19.5		146	Ft-68	40.0	39.0	21.5	
86	Fq-71	59.0	56.0	51.3		147	Fs-68	23.0	21.0	12.8	
87	Fq-71	39.0	38.5	35.0		148	Ft-68	32.0	28.0	13.9	
88	Fq-71	44.0	37.0	16.8		149	Fs-68	28.0	26.0	36.5	
89	Fq-71	24.0	23.5	26.4		150	Ft-69	39.0	34.0	50.3	
90	Fq-71	33.0	29.0	22.0		151	Fs-68	26.0	24.5	14.3	
91	Fq-73	28.0	28.0	18.4		152	Fs-69	27.0	27.0	26.5	
92	Fq-73	26.5	19.0	10.5		153	Fs-69	25.5	21.0	11.1	
93	Fr-70	38.0	37.0	36.3		154	Fs-69	37.0	34.0	24.3	
94	Fr-70	62.0	58.0	10.1		155	Fs-69	23.0	22.0	13.5	
95	Fr-70	45.0	42.5	15.5		156	Fs-69	60.5	54.0	56.7	
96	Fr-70	45.0	35.0	15.9		157	Fs-69	46.0	44.0	33.6	
97	Fr-70	41.5	34.5	29.8		158	Fs-69	43.0	42.0	22.4	
98	Fr-70	51.5	49.5	11.3		159	Ft-69	37.5	37.0	21.3	
99	Fr-71	24.5	23.0	15.2		160	Fs-69	35.5	34.0	13.8	

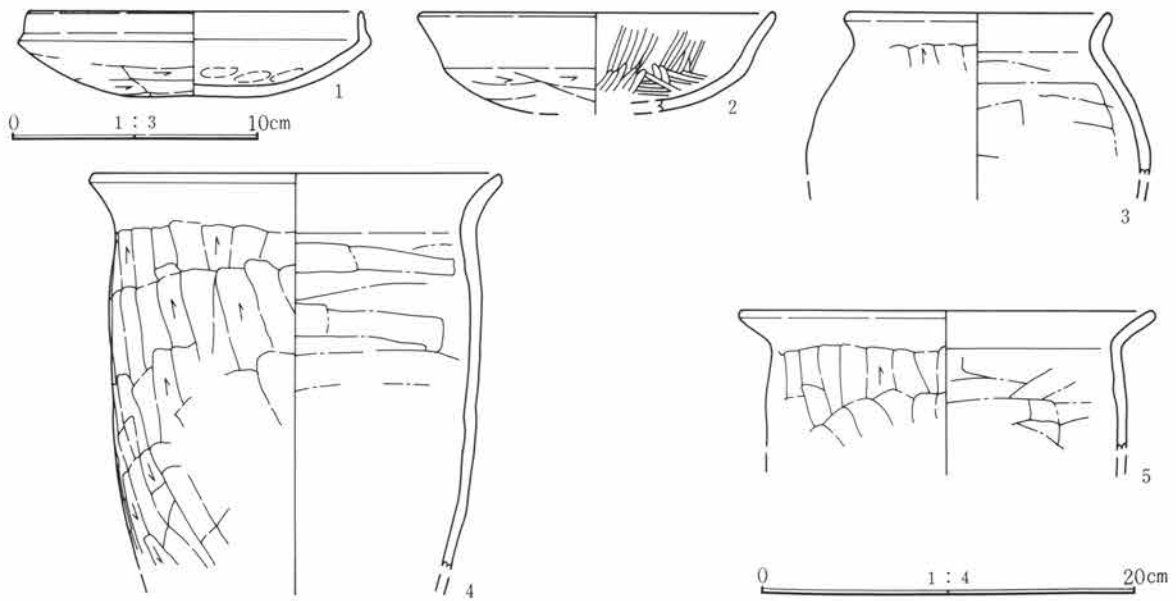
第3章 検出された遺構と遺物

No.	グリッド	長軸	短軸	深さ	備 考	No.	グリッド	長軸	短軸	深さ	備 考
161	Fs-69	34.5	34.5	24.9		222	Fr-78	54.0	45.0	24.0	
162	Fs-69	40.0	39.0	29.7		223	Fs-77	47.5	47.0	23.9	
163	Fs-68	30.5	22.0	34.5		224	Fs-77	49.5	41.0	21.3	
164	Fs-68	40.5	40.5	14.5		225	Fs-77	56.0	42.0	28.8	
165	Fs-68	52.0	40.0	28.4		226	Fs-77	39.0	35.0	17.0	
166	Fs-68	47.0	41.0	56.9		227	Fs-77	31.5	28.5	13.8	
167	Ft-68	72.0	72.0	26.0		228	Fs-77	35.5	32.0	24.5	
168	Ft-69	39.0	34.5	20.6		229	Fs-77	49.5	33.5	19.0	
169	Ft-69	34.0	34.0	44.1		230	Fs-77	49.0	48.0	20.9	
170	Ft-69	36.0	27.5	7.6		231	Fs-77	43.0	42.5	20.8	
171	Ft-69	57.0	64.0	17.4	第373図-1 出土	232	Fs-78	41.5	39.5	34.0	
172	Ft-69	51.0	49.0	50.7		233	Fs-78	64.0	58.0	39.8	
173	Ft-68	35.0	30.0	67.5		234	Fs-78	31.5	26.0	16.0	
174	Fs-68	31.0	29.0	16.3		235	Fs-78	42.0	35.5	21.1	
175	Fs-68	37.0	32.5	27.7		236	Fs-78	52.0	44.5	21.6	
176	Fs-68	80.5	76.0	30.8	第373図-4 出土	237	Fs-78	42.5	42.0	28.8	
177	Fs-68	35.0	34.5	15.9		238	Fq-78	40.5	33.0	31.0	
178	Fs-68	30.0	25.0	21.6		239	Fr-76	30.0	26.5	12.5	
179	Ft-68	25.0	21.5	11.4		240	Fr-76	48.0	40.0	15.2	
180	Ft-68	23.0	21.0	12.4		241	Fr-76	51.5	46.5	18.3	
181	Fs-68	40.0	39.5	24.0		242	Ft-70	37.5	31.5	29.9	
182	Fs-68	38.0	29.0	18.8		243	Ft-70	36.0	35.0	41.8	
183	Fs-68	49.0	45.5	17.6		244	Ft-70	57.0	54.5	33.3	
184	Fs-68	77.0	75.0	27.0		245	Ft-71	52.0	48.0	14.2	
185	Fs-70	49.0	46.5	27.7		246	Ft-72	40.0	32.5	29.1	
186	Fs-70	39.0	26.5	34.4		247	Ft-72	38.0	29.0	16.9	
187	Fs-70	41.0	34.5	26.5		248	Ft-72	39.5	31.0	22.6	
188	Fs-71	64.5	56.0	32.0		249	Ft-72	56.5	55.5	23.3	
189	Fs-71	40.0	35.5	14.3		250	Ft-72	83.0	78.5	36.0	
190	Fs-71	26.0	22.0	11.2		251	Ft-72	38.0	31.0	15.6	
191	Fs-71	25.0	21.5	15.9		252	Ft-73	34.5	29.5	8.7	
192	Fs-71	45.0	43.0	33.9		253	Ft-73	40.5	39.5	16.0	
193	Fs-71	34.0	29.0	22.0		254	Ft-73	31.5	29.0	21.0	
194	Fs-72	31.5	23.0	9.6		255	Ft-73	28.0	26.5	9.1	
195	Fs-72	40.0	38.0	31.9		256	Ft-73	33.0	29.5	27.1	
196	Fs-73	93.0	84.5	24.7		257	Ft-73	43.0	40.0	16.6	
197	Fs-73	43.0	42.5	14.9		258	Ft-73	33.0	26.5	15.5	
198	Fs-73	31.0	30.0	13.9		259	Ft-73	38.0	34.0	17.9	
199	Fs-73	37.5	36.0	23.4		260	Ft-73	65.0	53.5	17.9	
200	Fs-73	25.5	25.0	14.8		261	Ft-73	62.0	55.0	17.2	
201	Fs-73	44.5	34.5	17.0		262	Ft-74	35.0	31.0	9.7	
202	Fs-73	47.0	32.5	29.6		263	Ft-74	51.0	38.0	29.0	
203	Fs-73	45.0	43.5	40.2		264	Ft-77	49.0	47.5	37.0	
204	Fs-73	33.0	28.0	20.7		265	Ft-77	36.0	34.0	23.3	
205	Fs-73	24.0	23.5	12.8		266	Ft-77	46.0	38.5	15.3	
206	Fs-73	25.0	24.0	50.0		267	Ft-77	45.0	44.0	38.0	
207	Fs-74	37.0	35.5	19.5		268	Ft-77	49.0	46.0	40.5	
208	Fs-74	36.5	33.0	16.5		269	Ft-77	51.0	40.0	43.5	
209	Fs-74	41.0	32.5	23.1		270	Ft-77	48.0	39.0	30.3	
210	Fs-74	47.0	40.0	7.1		271	Ft-77	44.0	40.0	33.8	
211	Fr-77	46.5	35.5	26.5		272	Ft-77	49.0	32.0	32.3	
212	Fr-78	42.5	41.5	24.0		273	Ft-78	31.0	28.0	29.3	
213	Fq-78	39.0	38.5	22.7		274	Ft-78	41.0	40.0	22.0	
214	Fr-77	74.5	68.0	29.8		275	Ft-78	35.0	33.0	18.7	
215	Fr-77	49.5	38.0	21.2		276	Ft-78	44.5	44.0	29.6	
216	Fr-77	51.5	50.0	31.4		277	Ft-78	47.5	46.0	31.8	
217	Fr-77	26.0	25.0	10.5		278	Ft-76	56.5	48.5	17.5	
218	Fr-77	38.0	38.0	14.8		279	Ft-76	44.0	43.5	19.7	
219	Fr-77	39.0	36.5	22.6		280	Ft-76	57.5	45.5	38.0	
220	Fr-78	41.5	40.5	27.7		281	Fs-77	34.0	30.0	12.0	
221	Fr-78	62.0	57.0	33.6		282	Fs-77	51.5	51.5	36.0	

第2節 F・G区

No.	グリッド	長軸	短軸	深さ	備 考	No.	グリッド	長軸	短軸	深さ	備 考
283						359	Gg-81	41.5	41.0	15.1	
	欠番					360	Gg-81	42.0	41.5	22.4	
300						361	Gg-81	26.0	23.5	32.1	
301	Ga-67	28.0	27.5	21.7		362	Gg-81	21.0	21.0	34.7	
302	Ga-69	61.5	57.0	66.4		363	Gg-82	17.5	16.0	48.2	
303	Ga-69	47.0	36.0	27.9		364	Gg-82	24.5	23.5	45.8	
304	Ga-69	60.0	54.0	24.9		365	Gg-82	48.0	30.5	41.9	
305	Ga-70	56.5	53.0	12.3		366	Gg-82	24.5	20.5	37.7	
306	Gb-77	26.0	23.0	32.1		367	Gg-82	27.0	26.0	23.5	
307	Gb-77	49.0	44.0	41.1		368	Gh-81	19.5	14.0	24.6	
308	Gb-77	18.0	16.0	19.2		369	Gi-82	36.5	33.0	26.5	
309	Gb-77	32.0	25.0	34.0		370	Gi-82	37.0	36.0	37.6	
310	Gb-77	24.0	21.0	26.6		371	Gi-82	25.0	22.5	8.8	
311	Gb-77	58.5	49.0	41.5		372	Gi-82	44.0	38.0	12.3	
312	Gb-77	25.0	23.0	18.8		373	Gi-82	32.5	32.0	42.4	
313	Gb-77	32.0	24.0	22.3		374	Gi-82	15.0	14.0	21.4	
314	Gb-78	37.5	37.0	22.9		375	Gh-69	19.0	15.0	20.7	覆土にAs-B軽石混入
315	Gb-78	45.0	39.0	40.2		376	Gh-69	41.0	36.0	18.6	覆土にAs-B軽石混入
316	Gb-78	25.5	21.5	17.7		377	Gh-70	35.5	27.0	15.8	覆土にAs-B軽石混入
317	Gb-78	34.5	29.5	37.6		378	Gh-70	29.5	26.0	12.5	覆土にAs-B軽石混入
318	Gb-78	50.0	44.5	41.4		379	Gh-70	39.0	32.0	18.6	覆土にAs-B軽石混入
319	Gb-78	38.0	27.5	18.2		380	Gh-70	38.5	35.0	15.8	覆土にAs-B軽石混入
320	Gb-78	42.5	42.0	30.3		381	Gh-70	22.0	20.0	28.6	覆土にAs-B軽石混入
321	Gb-78	36.0	33.5	22.3		382	Gh-70	23.0	20.5	15.0	覆土にAs-B軽石混入
322	Gb-78	60.0	55.0	34.2		383	Gh-70	28.5	24.5	17.0	覆土にAs-B軽石混入
323	Gb-78	22.0	21.0	28.3		384	Gh-70	16.0	14.5	12.6	覆土にAs-B軽石混入
324	Gg-69	30.5	29.0	10.4	覆土にAs-B軽石混入	385	Gh-70	18.0	17.0	18.7	覆土にAs-B軽石混入
325	Gg-69	20.5	20.5	24.0	覆土にAs-B軽石混入	386	Gh-70	30.0	29.0	11.0	覆土にAs-B軽石混入
326	Gg-70	32.5	31.5	16.9	覆土にAs-B軽石混入	387	Gg-70	56.5	54.5	28.0	覆土にAs-B軽石混入
327	Gg-70	29.5	26.0	12.5	覆土にAs-B軽石混入	388	Gk-81	52.5	50.5	15.8	
328	Gg-70	17.0	16.0	28.0		389	Gk-82	29.5	28.0	11.8	
329	Gh-70	18.0	16.0	7.0		390	Gl-82	17.0	16.0	17.9	
330	Gh-69	28.5	25.0	23.0	覆土にAs-B軽石混入	391	Gl-82	27.0	26.5	10.8	
331	Gh-69	24.0	21.5	21.7	覆土にAs-B軽石混入	392	Gl-82	35.5	32.0	19.4	
332	Gh-70	28.0	24.5	24.5	覆土にAs-B軽石混入	393	Gl-82	48.0	48.0	23.5	
333	Gh-70	27.0	21.5	12.9	覆土にAs-B軽石混入	394	Gl-82	32.5	25.0	20.6	
334	Gh-70	36.5	31.5	17.2	覆土にAs-B軽石混入	395	Gl-82	47.0	23.0	22.0	
335	Gf-80	26.0	25.0	19.4		396	Gl-82	29.0	27.0	11.3	
336	Gf-80	47.0	37.0	34.8		397	Gm-82	30.0	26.0	30.3	
337	Gf-80	33.0	16.0	17.5		398	Gm-82	22.0	21.0	14.0	
338	Gf-80	21.0	20.0	12.7		399	Gm-82	20.0	19.0	10.9	
339	Gf-80	37.0	29.5	54.6		400	Gm-82	18.0	17.0	8.1	
340	Gf-81	18.0	17.0	13.5		401	Gm-82	24.0	23.0	12.3	
341	Gf-81	22.5	22.0	38.9		402	Gm-83	28.0	27.0	16.2	
342	Gf-81	38.0	36.0	20.1		403	Gm-83	122.5	88.0	26.5	
343	Gf-81	27.5	26.0	35.2		404	Gn-82	21.0	19.5	9.8	
344	Gf-81	33.5	30.5	11.5		405	Gn-82	28.0	26.0	16.4	
345	Gf-81	55.5	30.0	53.6		406	Gn-82	24.0	23.0	15.0	
346	Gf-81	25.0	21.5	14.7		407	Gn-82	23.5	23.0	15.7	
347	Gg-80	36.0	35.0	36.5		408	Gn-82	30.0	20.0	16.5	
348	Gg-80	49.0	43.0	55.3		409	Gn-82	25.0	23.0	22.4	
349	Gg-80	24.5	24.0	18.3		410	Gn-83	28.0	27.0	17.8	
350	Gg-80	23.0	20.5	28.3		411	Ga-77	53.5	45.0	26.0	
351	Gg-80	18.0	17.5	22.0		412	Ga-77	35.5	31.0	17.3	
352	Gg-80	41.0	36.0	47.1		413	Ga-78	31.5	27.0	47.5	
353	Gg-81	40.0	28.0	55.8		414	Ga-78	40.5	19.5	27.4	
354	Gg-81	32.5	32.5	41.8							
355	Gg-81	49.0	46.5	42.6							
356	Gg-81	50.0	48.0	40.7							
357	Gg-81	29.0	28.0	25.1							
358	Gg-81	41.0	31.0	15.0							

第3章 検出された遺構と遺物



第373図 ピット群出土遺物実測図

ピット群出土遺物観察表

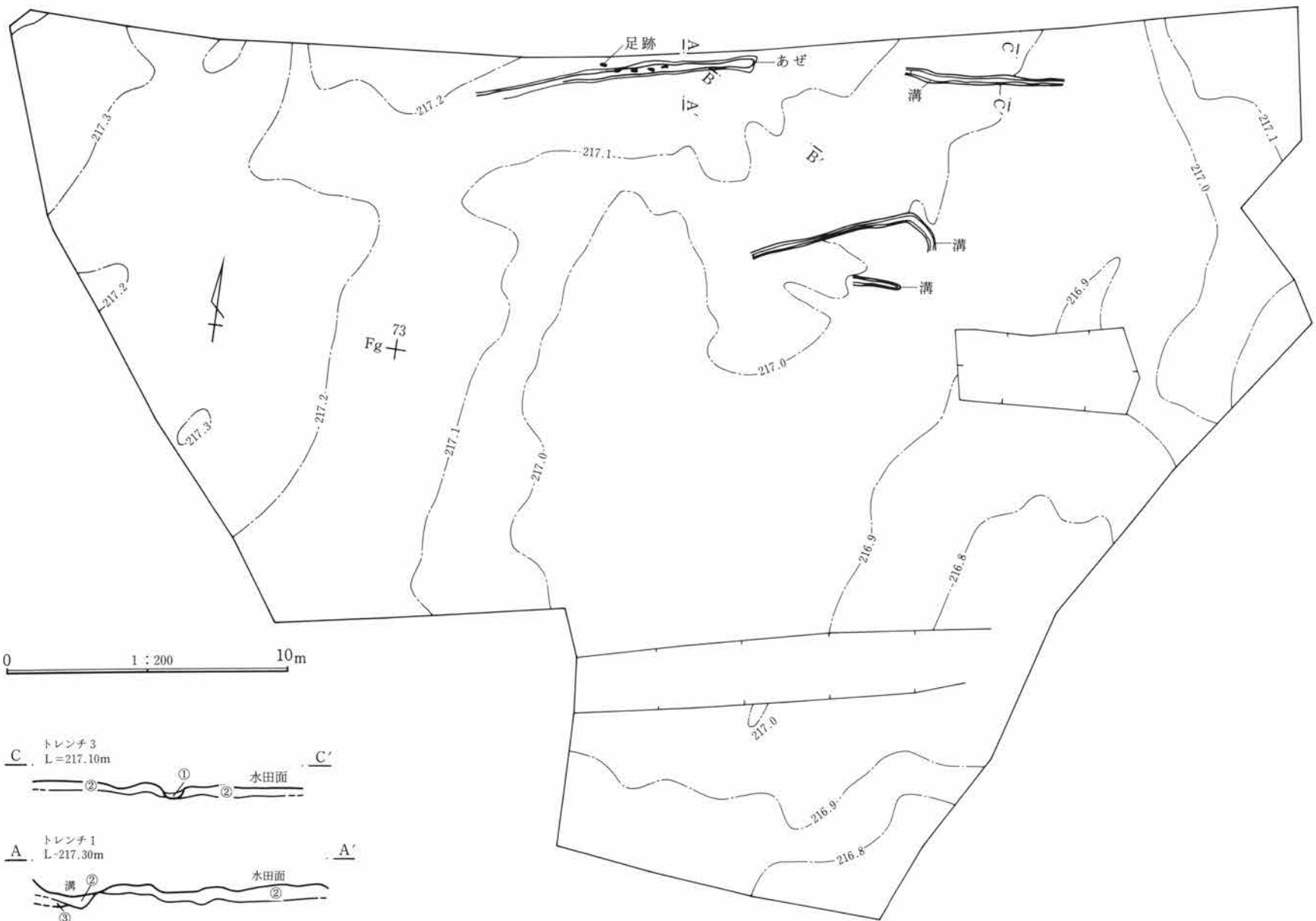
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	ピット 171内 1/2	口(13.2) 底— 高 3.4	①細砂含む ②良好 ③浅黄色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ、指頭圧痕有り。口縁・体部境の稜線は明瞭。	
2	土師器 坏	ピット19 内 1/3	口(13.8) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③灰黄褐色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ後へラ磨き。	
3	土師器 小型甕	ピット 133内 口 ~胴上1/4	口(13.8) 底— 高—	①砂粒(まれに小礫 含む) ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	外面の摩滅激しい
4	土師器 甕	ピット 176内 口 ~胴上1/3	口(21.6) 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	
5	土師器 甕	ピット23 内 口~ 胴上1/3	口(22.0) 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	

水田址 (PL54)

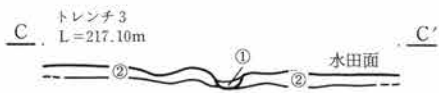
F区南端、中沢川と市道との間で、As-B軽石直下から水田址が検出された。ここは中沢川左岸の低地で、北側の台地先端部とは3m近い比高差がある。ほぼ平坦な地形であるが、中沢川下流の南東方向に向かってわずかに傾斜している。

水田面は、ほぼ全面をAs-B軽石が覆っていたが、南半は残りが悪く部分的にみられる程度であった。一部上面に灰色～黄褐色の砂層に覆われているところもあり、後世の洪水などによって押し流されたかと思われる。一方北側では良好に堆積しており、北端部では厚さ10cm程であった。水田の耕土は黒褐色～暗褐色の粘質土であるが、これも北側ほど良く残っていた。

水田面の残りは悪く、畦畔が1条と浅く狭小な溝が3条検出されたのみである。これらは、いずれも調査区北半のAs-B軽石が良好に残存していた部分から見つかっている。溝の中にはAs-B軽石が堆積していた。また、畦畔の上には、西から東へ歩く人間の足跡が5個みられた。

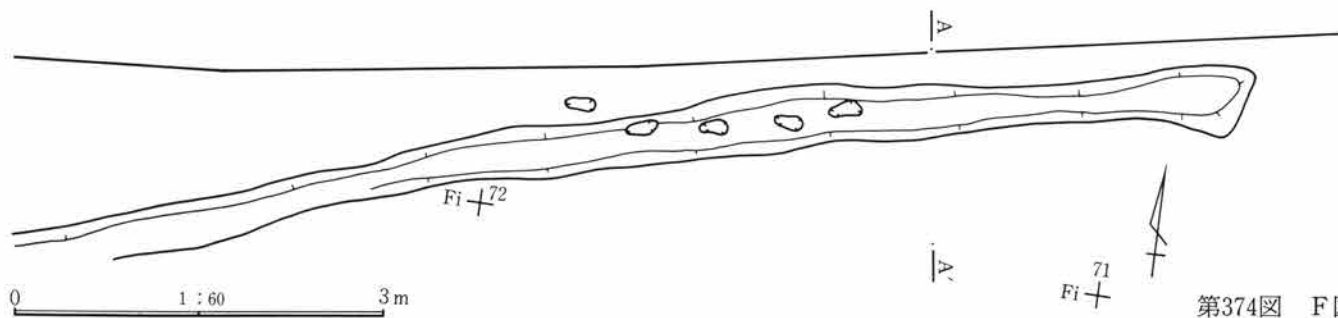


0 1 : 200 10m



- 1 純層のAs-B軽石。
- 2 黒褐色粘質土。水田の床土。
- 3 黄褐色砂層。

0 1 : 40 2m



0 1 : 60 3m

第374図 F区水田跡全景

4 中・近世の遺構と遺物

住居跡

G-36号住居跡 (PL54)

位置 Gi-78グリッド 主軸方位 N-77°-W 残存壁高 0.18m 重複 なし

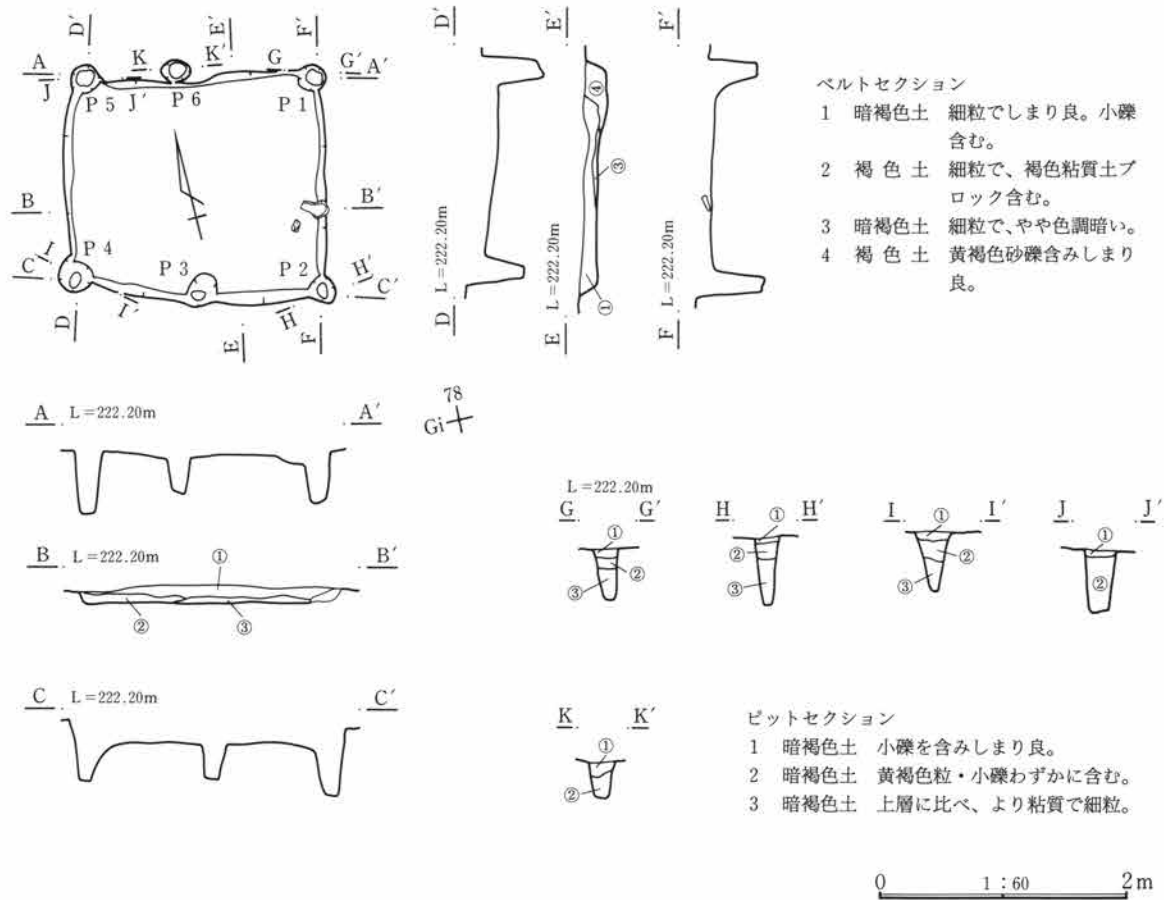
規模と形状 形状は東西方向に長い長方形。長辺2.12m・短辺1.83mと小さい。西壁に比べやや東壁が長い。竈や貯蔵穴を持たず、北壁および南壁際に、それぞれ3基の柱穴がほぼ等間隔に並ぶ。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで床面を形成。貼り床などはみられない。床面は北西隅に向かって、若干落ち込んでいる。

柱穴 北壁と南壁際に各3基、合計6基の柱穴を検出。いずれも壁の外側に若干突出するように掘り込まれており、うち1基(ピット6)は完全に壁の外側に位置している。四隅のピットは大きさ・深さともに類似しており、壁の中央付近に位置する2基(ピット3・6)はこれらよりも掘り込みが浅い。

出土遺物 遺物はほとんどない。内部より比較的大きな礫が出土したのみである。

調査所見 時期を確定できるような遺物は出土していないが、形状から中～近世の遺構と思われる。非常に小規模であり、竈・炉ともに持っていないことから、住居跡とは考えられない。竪穴状遺構とすべきか。



第375図 G-36号住居跡

G-45号住居跡 (PL54)

位置 Gh-78グリッド 主軸方位 N-68°-W 残存壁高 0.25m 重複 なし

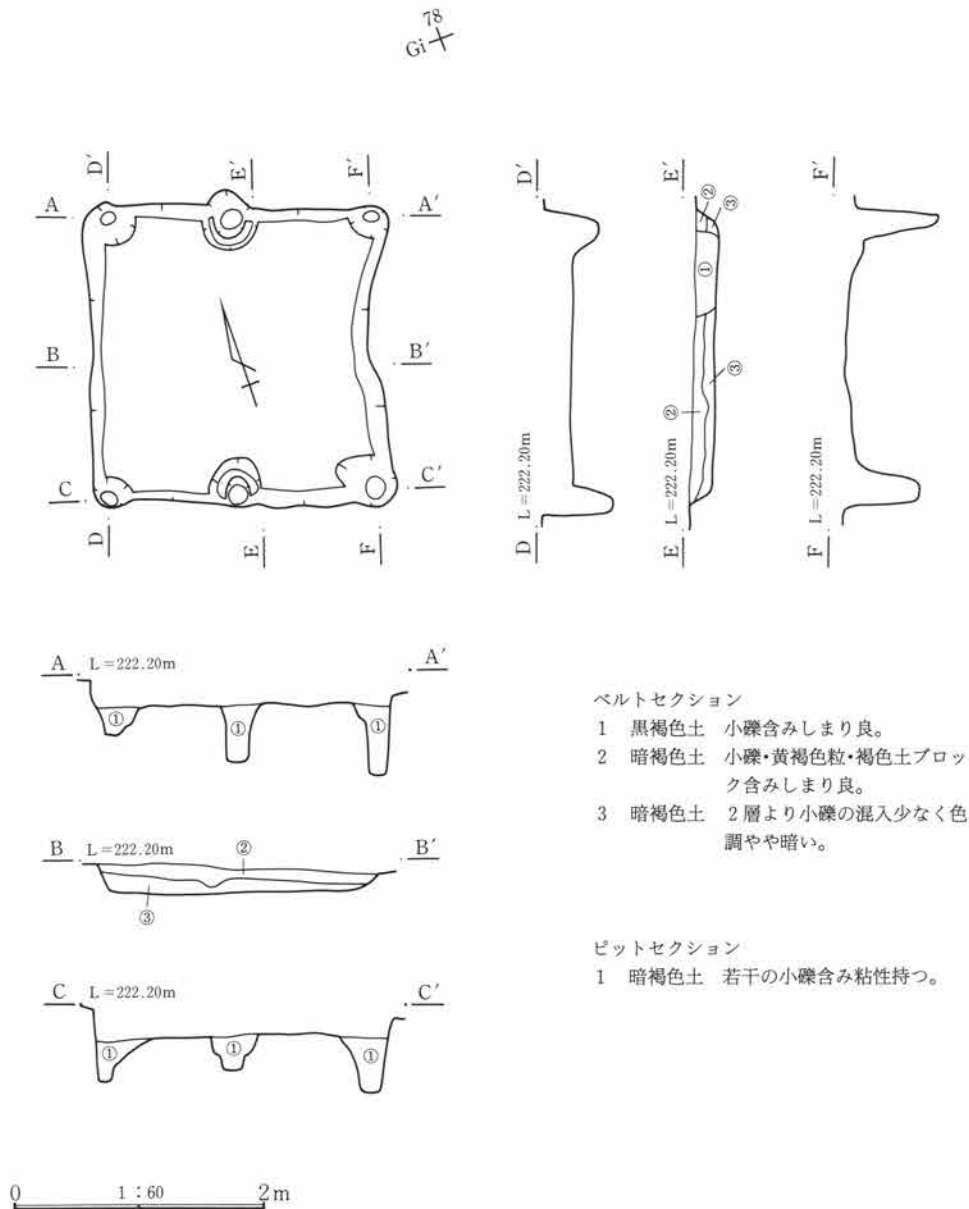
規模と形状 形状はほぼ正方形である。長辺2.48m・短辺2.36mとかなり小さい。G-36号住居の南側に隣接し、大きさ・形状ともに類似する。周壁はやや外反し、また東壁では緩く蛇行しており、形状の乱れがみられる。竈や貯蔵穴を持たず、北壁と南壁際にそれぞれ3基の柱穴が等間隔に並んでいた。主軸は大きく西にふれる。

床面 地山褐色砂礫混じり層を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

柱穴 北・南壁に各3基所在。ほぼ等間隔に並んでいるが、深さは一定していない。

出土遺物 遺物は全く出土していない。覆土中より土師器・須恵器が若干出土しているが、確実に当遺構に伴う遺物はない。

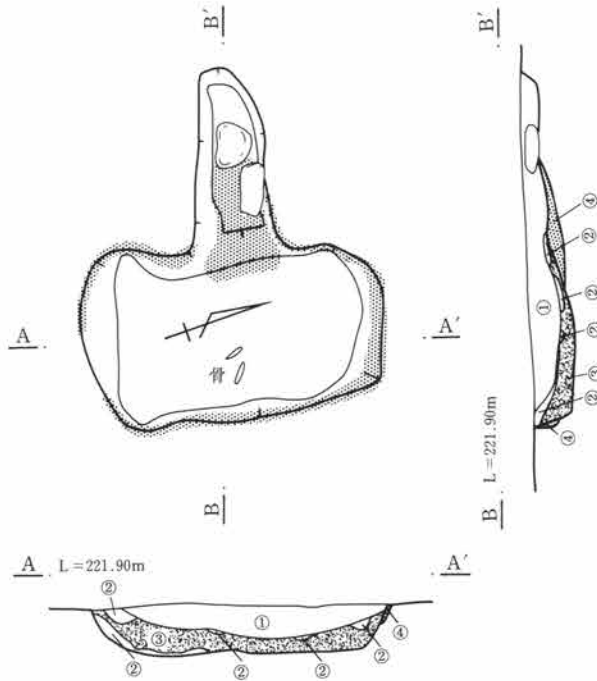
調査所見 時期を確定できる遺物はないが、形状から中～近世の遺構と思われる。



第376図 G-45号住居跡

墓 墳

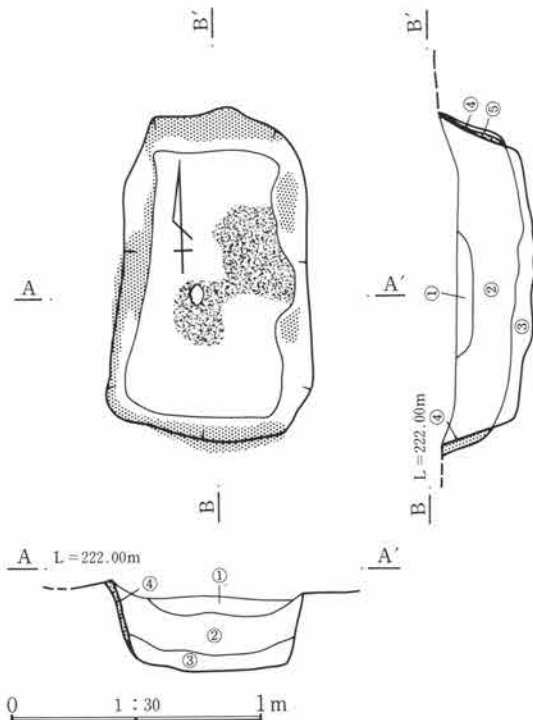
G-1号墓墳 (PL54)



Gj-76グリッドに位置する。形状は、隅丸の長方形の長辺中央部に張り出しをもち、凸字状になっている。長方形部分の長辺は122cm・短辺71cm、張り出し部の長さは71cm・幅32cm。深さは20cm程であるが、張り出し部はより浅い。底面近くの覆土中には多量の炭化物が含まれ、壁と底面の一部は熱を受けて焼土化している。また、内部より焼けた骨片が少量出土した。以上から、本遺構は中世の火葬墓と推測される。

- 1 暗褐色土 白色粒・黄褐色粘質土ブロック・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 粘性あり。
- 3 黒色土 炭化物を主体とし、若干の焼土含む。
- 4 赤褐色土 地山が熱により焼土化した部分。煉瓦状に硬くしまる。

G-2号墓墳 (PL54)



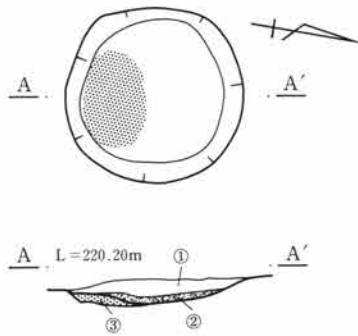
G1-79グリッドに所在。G-76住の覆土を掘り込んで構築されていた。形状は長方形で、長辺131cm・短辺83cm・深さ37cmである。覆土中にかなりの炭化物がみられ、壁面も広範囲にわたって焼土化していた。内部から骨などの出土はなかったが、G-1号墓と形状や覆土の状態が類似しているため、墓墳と判断した。中世の所産か。

- 1 暗褐色土 細粒で、白色粒・焼土粒・炭化物含む。
- 2 オリーブ褐色土 細粒で、白色粒・焼土粒わずかに含む。
- 3 オリーブ褐色土 多量の炭化物を層状に含み、弱い粘性もつ。
- 4 赤褐色土 熱により、煉瓦状に硬くしまった焼土層。
- 5 黒褐色土 熱により黒味を帯びた部分。

第377図 G-1・2号墓墳

土 坑

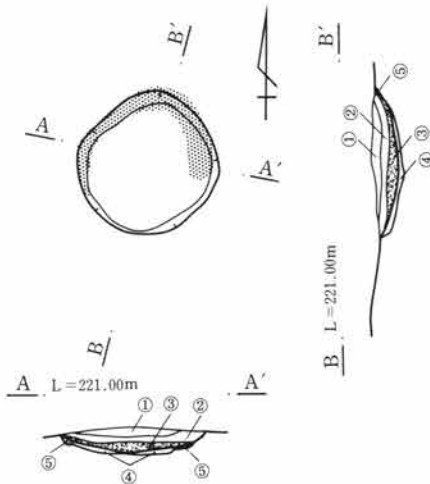
F-1号土坑 (PL55)



Fk-72グリッドに位置する。形状はほぼ円形で、長軸・短軸ともに70cm、深さは10cmである。本来は洋梨形の土坑であったが、上面が削平され燃焼部のみが残ったものと思われる。土坑の覆土の最下層には、均質な灰が2～3cmほどの厚さで堆積していた。底面には焼土面も見られた。遺物の出土はない。

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物・小礫含む。
- 2 黒色土 細粒・均質な灰層。
- 3 暗赤褐色土 地山褐色土が熱により焼土化した部分。

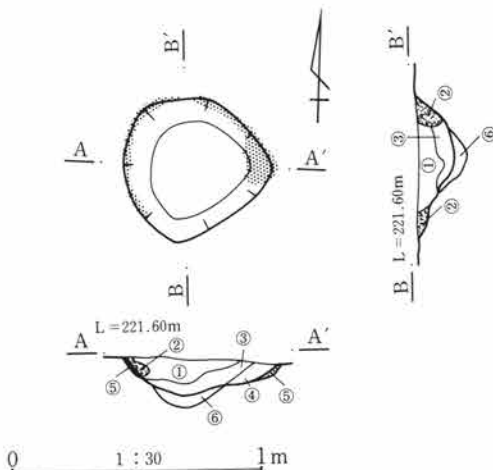
F-2号土坑 (P L55)



Fq-73グリッドに所在。形状はやや歪んだ円形で、長軸58cm・短軸55cm・深さは9cm。洋梨形の土坑の燃焼部である。覆土中には多量の炭化物や焼土が混入し、北壁を中心に焼土面も見られた。遺物の出土はない。

- 1 暗褐色土 白色粒・焼土・炭化物若干含む。比較的均質。
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土ブロック若干含みしまりやや悪い。
- 3 暗褐色土 炭化物・焼土塊・黄灰色土塊雑多に含む。
- 4 暗褐色土 砂質で比較的均質。若干の焼土含む。
- 5 暗赤褐色土 硬くしまった焼土層。

F-8号土坑 (PL55)



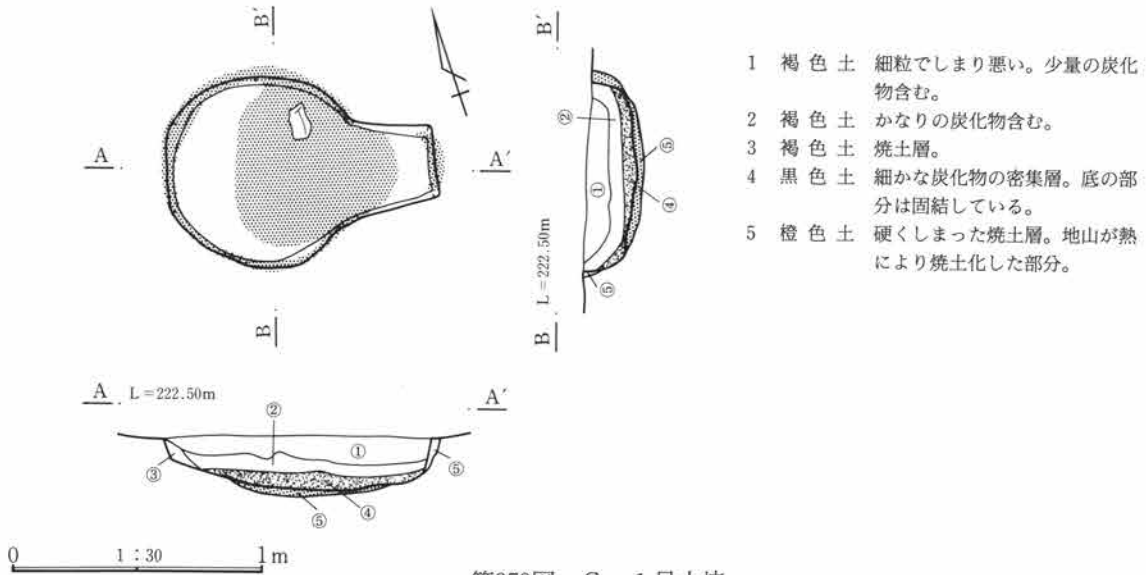
Ft-78グリッドに所在。形状はほぼ円形で、長軸59cm・短軸56cm・深さ15cm。覆土中にはかなりの量の炭化物が混入し、壁には焼土面がみられる。洋梨形土坑の燃焼部である。遺物の出土はない。

- 1 灰黄褐色土 ごくわずかの炭化物含む砂礫質土。
- 2 黒色土 炭化物を主体とする。
- 3 灰黄褐色土 多量の炭化物含む。
- 4 灰黄褐色土 炭化物わずかに含む。ごく弱い粘性あり。
- 5 暗赤褐色土 地山褐色砂礫質土が熱により焼土化した部分。
- 6 暗褐色土 砂質で比較的均質。微細炭化物わずかに含む。

第378図 F-1・2・8号土坑

G-1号土坑 (PL55)

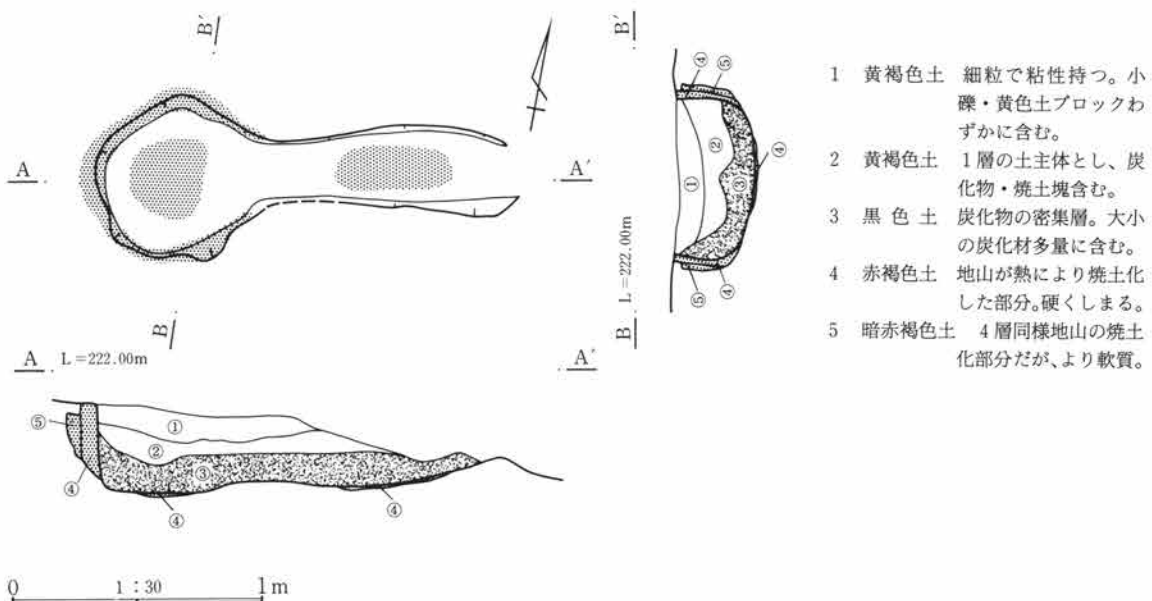
Gf-81グリッドに位置する。形状はいわゆる洋梨形で、全長108cmのうち燃焼部長は75cm。また、燃焼部幅75cm・焚口幅36cm・深さは20cmである。土坑覆土の最下層には炭化物の密集層がみられ、底面近くでは固結して硬くしまっていた。底面と燃焼部の周壁には、熱によってレンガのように硬化した焼土面が見られた。遺物の出土はない。



第379図 G-1号土坑

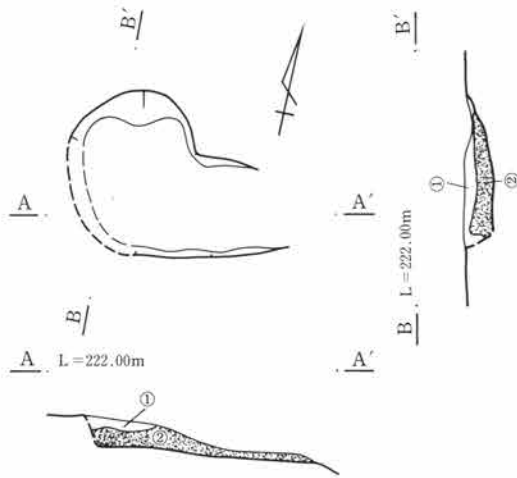
G-2号土坑 (PL55)

Gt-85グリッドに所在。形状は洋梨形で、全長167cm・うち燃焼部長70cm・燃焼部幅67cm・焚口幅33cm・深さ35cmである。内部には、底面から10~15cm程の厚さで炭化物が密集して堆積している。中には、長さが1m近い炭化材も混在していた。底面と周壁には焼土面がみられ、特に壁の部分は非常に硬くしまっていた。また、壁面には鍬のような掘削具で掘った痕跡が観察された。遺物は出土していない。



第380図 G-2号土坑

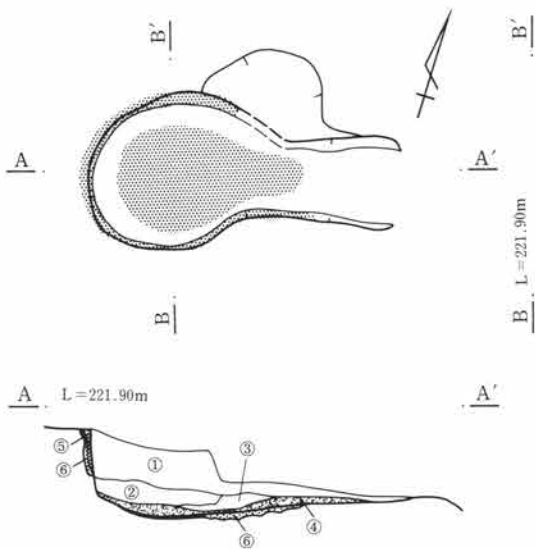
G-3号土坑 (PL55)



Gt-84グリッドに位置する。形状は洋梨形で、全長92cm・燃焼部長52cm・燃焼部幅64cm・焚口幅41cm・深さ13cmである。底面には厚さ5~10cmの炭化物の密集層がみられた。焼土面の発達は弱い。G-4土坑を切って造られている。

- 1 黄褐色土 細粒で粘性持つ。炭化物・焼土ブロック含む。
- 2 黒色土 炭化物の密集層。炭化材をかなり含む。

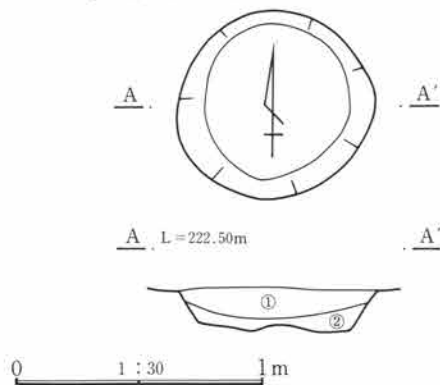
G-4号土坑 (PL55)



Gt-84・85グリッドに位置する。形状は洋梨形で、全長125cm・燃焼部長77cm・燃焼部幅62cm・焚口幅38cm・深さ34cm。底面には細かな炭化物の密集層がみられた。燃焼部の底面と周壁には、熱によってレンガの様に硬化した焼土面がみられた。また、壁面には鋏様の掘削具で掘った痕跡が観察された。

- 1 黄褐色土 弱い粘性持つ。
- 2 黄褐色土 わずかの小礫含む。
- 3 黄褐色土 少量の炭化材含む。
- 4 黒色土 炭化物の密集層。
- 5 赤褐色土 地山粘質土の焼土化部分。硬くしまる。
- 6 暗赤褐色土 地山の焼土化部分だが、5層より軟質。

G-5号土坑 (PL55)

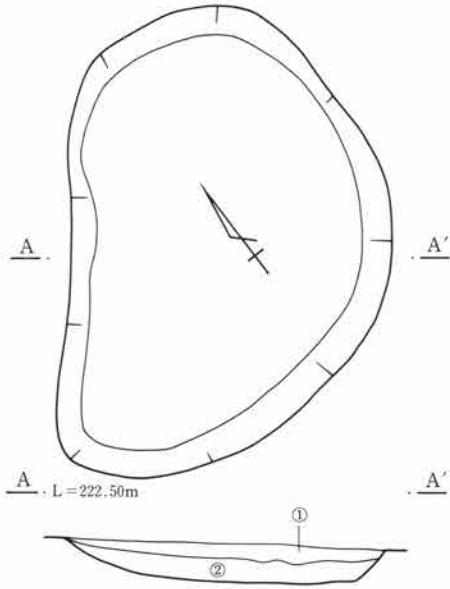


Gk-82グリッドに位置する。形状は円形で、長辺79cm・短辺74cmとわずかに東西に長い。深さ16cm。遺物の出土はなく、時期を特定できない。

- 1 暗褐色土 細粒で弱い粘性持つ。
- 2 暗褐色土 褐色土ブロック含む。

第381図 G-3・4・5号土坑

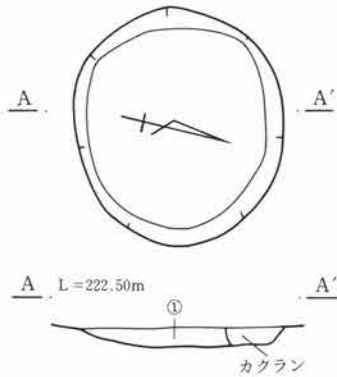
G-10号土坑 (PL55)



Gm-82グリッドに位置する。形状は不正楕円形で北東-南西方向に長い。長辺187cm・短辺128cm・深さ17cm。遺物の出土はなく、時期を特定できない。

- 1 褐色土 小礫含みしまり悪い。
- 2 暗褐色土 炭化物・焼土粒含む。

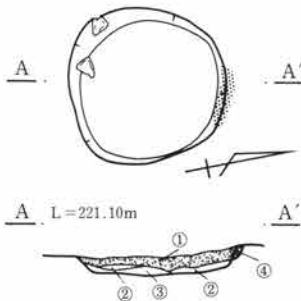
G-11号土坑 (PL55)



Gm-83グリッドに位置する。形状は東西にやや長い楕円形で、長辺94cm・短辺82cm・深さ8cm。遺物の出土はなく、時期を特定できない。

- 1 暗褐色土 多量の褐色土ブロック含む。

G-13号土坑 (PL56)



Gb-73グリッドに位置する。形状はほぼ円形で、長辺64cm・短辺62cm・深さ12cmである。本来は洋梨形の土坑であったが、上部を削平され焚口部が失われている。覆土上位に均質な炭化物層がみられる。焼土面の発達は比較的弱い。周壁に一部硬くしまった焼土がみられる。遺物の出土はなかった。

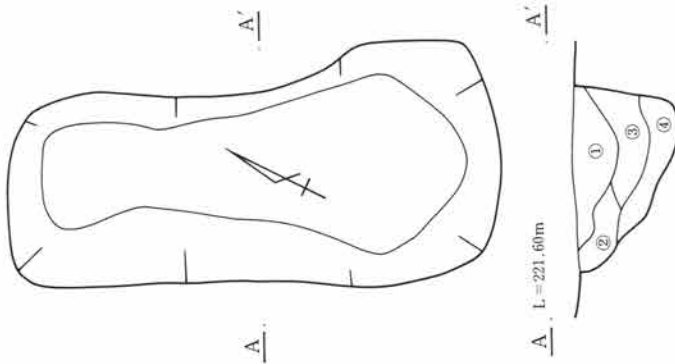
- 1 黒色土 均質・細粒の炭化物層。しまり悪い。
- 2 暗褐色土 細粒・均質でややしまり悪い。若干の焼土含む。
- 3 暗褐色土 少量の焼土・炭化物含む。しまり良。
- 4 赤褐色土 均質な焼土層。硬くしまる。

0 1:30 1m

第382図 G-10・11・13号土坑

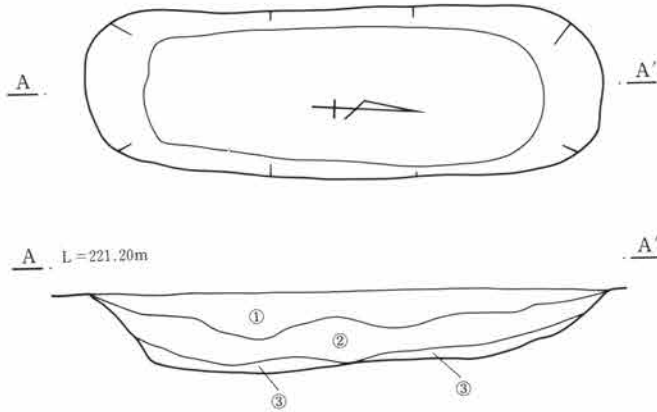
G-15号土坑 (PL56)

Ga-77グリッドに位置する。形状は長方形に近く、長辺196cm・短辺97cm・深さ41cmである。遺物の出土はなく、時期を確定できない。



- 1 暗褐色土 かなりの黄色粒・小礫、わずかの微細炭化物含む。
- 2 暗褐色土 少量の黄色粒・小礫含む。
- 3 暗褐色土 多量の小礫、わずかの黄色粒含む。
- 4 暗褐色土 3層よりも小礫の混入少ない。黄色粒わずかに含む。

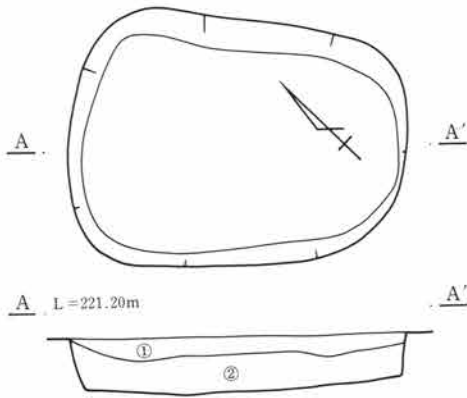
G-18号土坑 (PL56)



Gg・Gh-71グリッドに位置する。形状は長楕円形で、長辺207cm・短辺68cm・深さ32cm。長軸がほぼ真北に一致。遺物はない。覆土中に少量のAs-B軽石含むが、堆積状況から再堆積と見られ、軽石降下後やや時をおいて埋没したものと思われる。中世初頭のものか。

- 1 暗褐色土 若干の焼土粒・微細炭化物含む。As-B軽石若干混入。
- 2 暗褐色土 若干の焼土粒・微細炭化物、わずかのAs-B軽石含む。
- 3 暗褐色土 均質・細粒の粘質土。若干の微細炭化物含む。

G-19号土坑 (PL56)



Gg-70・71グリッドに位置する。形状はかなり丸味を帯びた長方形で、長辺134cm・短辺102cm・深さ22cmである。遺物の出土はない。G-18土坑同様覆土中にAs-B軽石が再堆積の状態に含まれる。位置も近接していることから、2基の土坑は同時期に存在していたものと思われる。

- 1 暗褐色土 若干の焼土粒・微細炭化物含む。As-B軽石若干混入。
- 2 暗褐色土 若干の焼土粒・微細炭化物、わずかのAs-B軽石含む。

0 1 : 30 1m

第383図 G-15・18・19号土坑

G-20号土坑 (PL56)

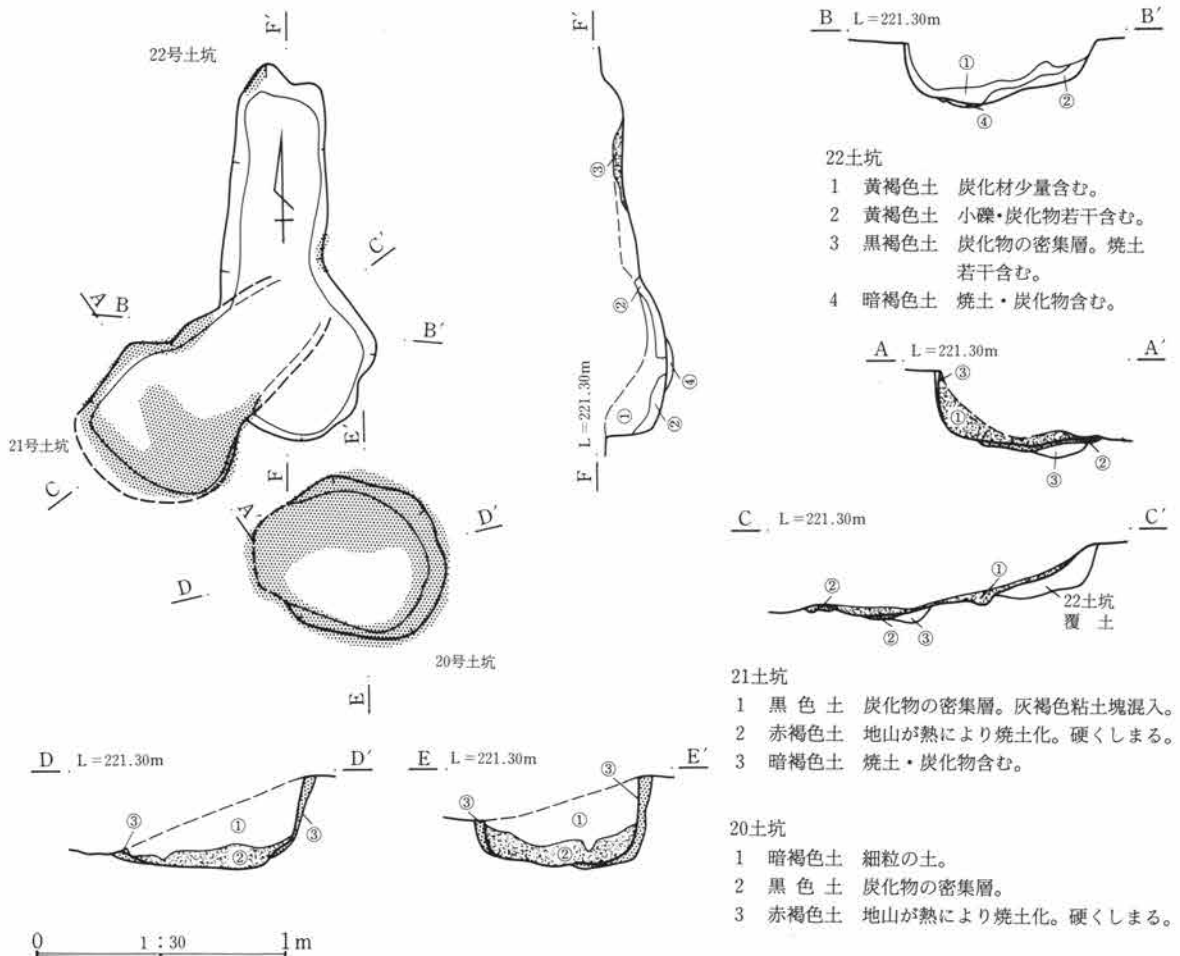
Gi-70グリッドに位置する。本来は洋梨形の土坑であったが、上部を削平されて燃烧部が残っているのみである。大きさは、現状で長辺76cm・短辺62cm・深さ36cmとなっている。底面から10cm程の厚さで、炭化物が密集して堆積していた。焼土面が非常に発達しており、特に壁面はほぼ全面が焼土化し、硬いレンガのような状態になっていた。遺物の出土はない。

G-21号土坑 (PL56)

Gi-70グリッドに位置する。洋梨形の土坑であるが、近年の攪乱によって焚口部のほとんどと燃烧部の端部を失っている。燃烧部長は現状で59cm・燃烧部幅64cm・深さ30cmである。底面には炭化物の密集層がみられた。焼土面も良く発達しており、特に壁面は、レンガのように硬く焼けてしまっていた。22土坑を切って造られている。

G-22号土坑 (PL56)

Gi・Gj-70グリッドに位置する。形状は洋梨形であるが、21土坑によって燃烧部を一部破壊されている。大きさは、全長142cm、うち燃烧部長が63cm・焚口幅40cm・深さ26cmである。他に比べて覆土中の炭化物の量と、壁面の焼土の発達がともに少ない。遺物の出土はない。



第384図 G-20・21・22号土坑

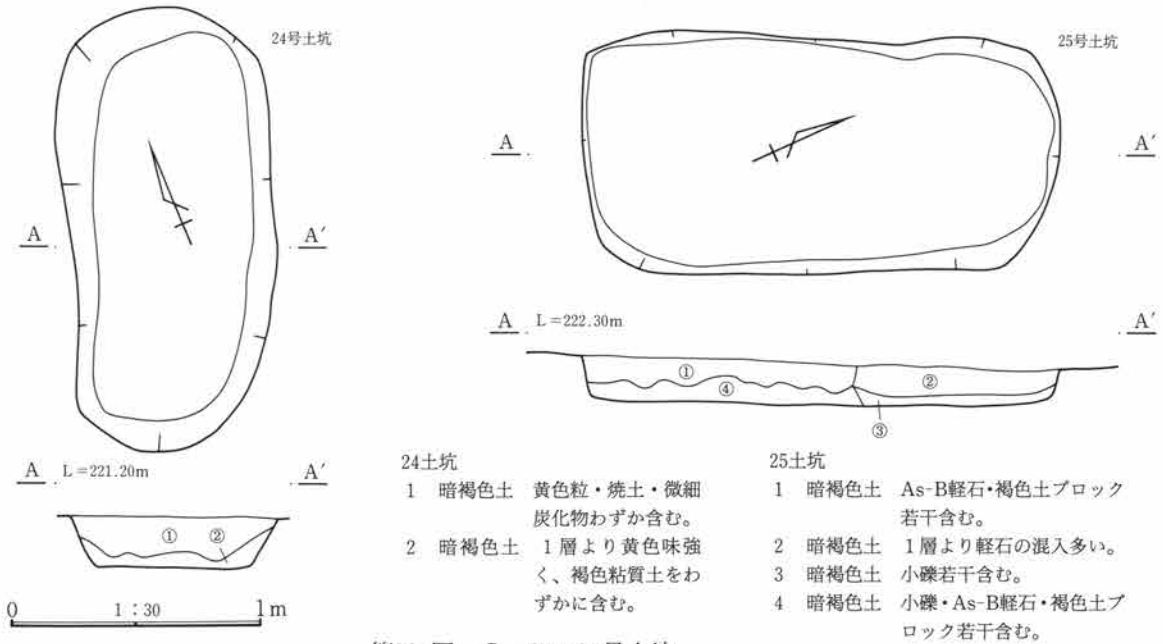
第3章 検出された遺構と遺物

G-24号土坑 (PL56)

Ge-71グリッドに位置する。形状は隅丸の長方形で、長辺175cm・短辺83cm・深さ21cm。遺物の出土はなく、時期を確定することはできない。

G-25号土坑 (PL56)

Gk-80グリッドに所在。形状は隅丸の長方形で、長辺190cm・短辺96cm・深さ18cm。遺物はない。覆土中にAs-B軽石が再堆積の状態で含まれ、軽石の降下後まもなく構築されたものと思われる。中世初頭のものか。



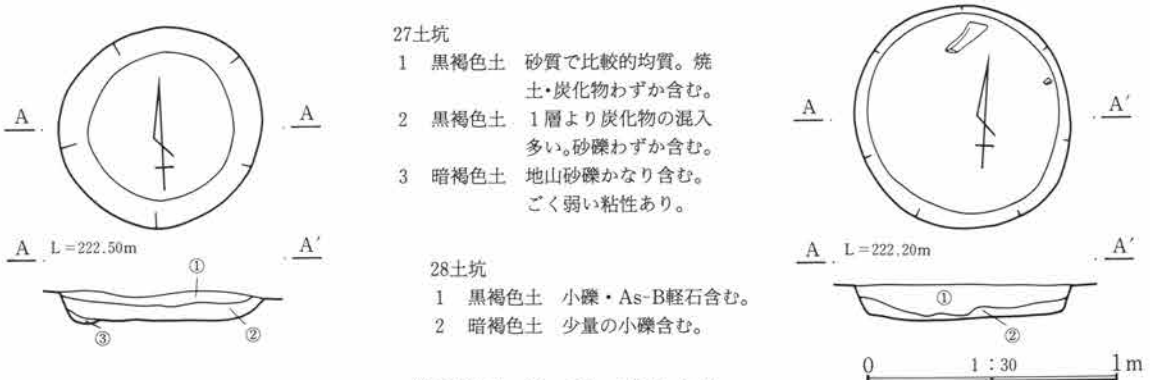
第385図 G-24・25号土坑

G-27号土坑

Gf-81グリッドに位置する。形状はほぼ円形で、長辺82cm・短辺80cm・深さ13cmである。遺物の出土はなく、時期を確定することはできない。

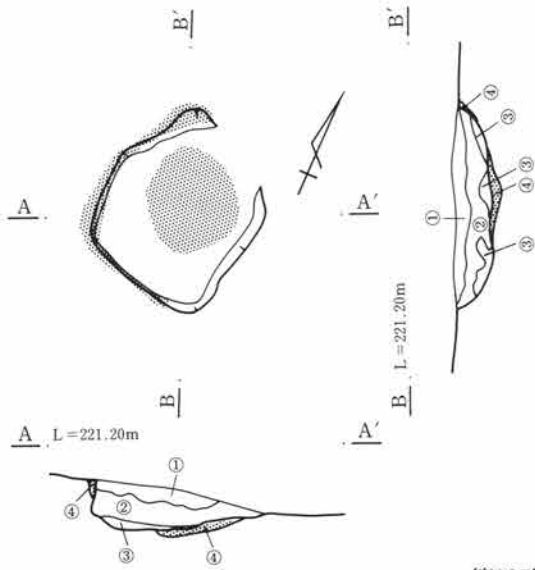
G-28号土坑 (PL56)

Gf-79グリッドに位置する。形状はほぼ円形で、長辺90cm・短辺85cm・深さ13cmである。遺物は、土器の小破片と礫が出土したが、いずれも時期を確定する決め手とはならなかった。



第386図 G-27・28号土坑

G-32号土坑 (PL57)



Gg-76・77グリッドに所在。洋梨形の土坑であるが、上部を削平され燃焼部が残っているのみである。現状の大きさは長辺65cm・短辺61cm・深さ21cmである。覆土中にはかなりの量の炭化物片がみられた。壁面と底面には、熱によって焼土化した部分が観察された。遺物の出土はない。

- 1 にぶい黄褐色土 炭化物わずかに含む砂質シルト。
- 2 にぶい黄褐色土 焼土・炭化物・灰黄色粘質土含む砂質シルト。
- 3 にぶい黄褐色土 2層に似るが、かなりの炭化物片含む。
- 4 赤褐色土 均質な焼土層。地山シルトの熱による焼土化部分。

0 1:30 1m

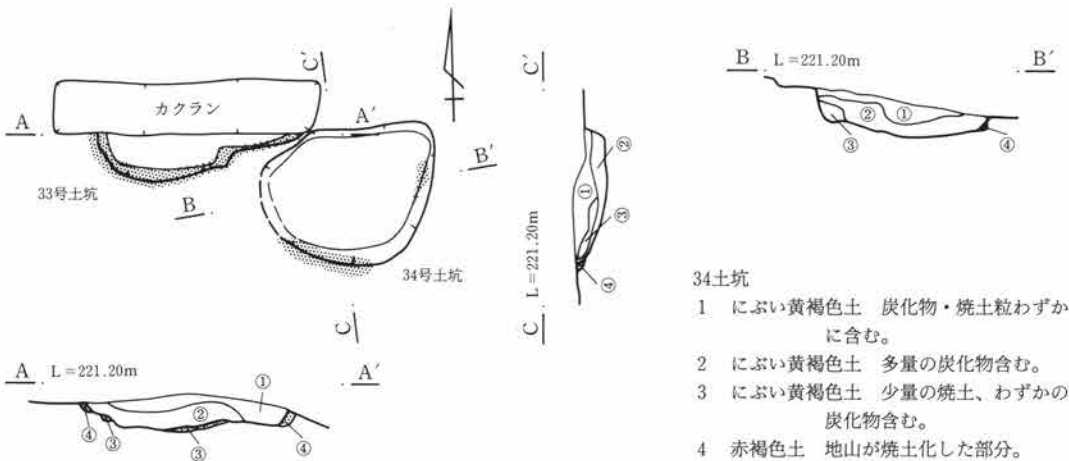
第387図 G-32号土坑

G-33号土坑 (PL57)

Go-74グリッドに位置する。洋梨形の土坑であるが、北側半分以上を近年の攪乱によって破壊されている。現状での大きさは、長辺82cm・短辺19cm・深さ11cmである。壁面は、ほぼ全面が熱によって焼土化し、レンガのように硬くしまっていた。遺物の出土はない。

G-34号土坑 (PL57)

Go-74グリッドに所在。洋梨形の土坑であるが、上部を削平され、燃焼部が残っているのみである。現状での大きさは、長辺71cm・短辺56cm・深さ23cm。底面近くの覆土中には多量の炭化物が含まれているが、壁面の焼土化は比較的弱い。遺物の出土はない。



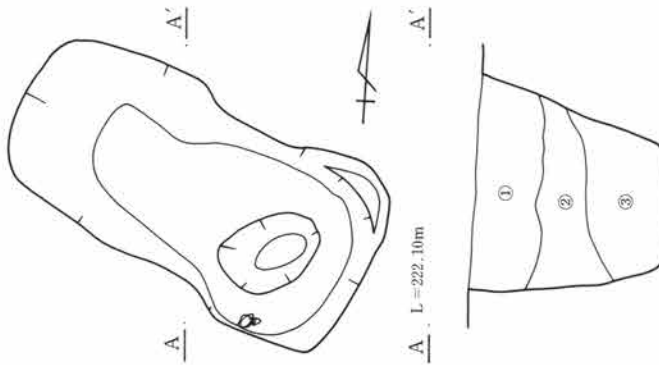
- 34号土坑
- 1 にぶい黄褐色土 炭化物・焼土粒わずかに含む。
 - 2 にぶい黄褐色土 多量の炭化物含む。
 - 3 にぶい黄褐色土 少量の焼土、わずかの炭化物含む。
 - 4 赤褐色土 地山が焼土化した部分。

- 33号土坑
- 1 にぶい黄褐色土 炭化物わずかに含む。
 - 2 にぶい黄褐色土 若干の炭化物、わずかの焼土含む。
 - 3 褐色土 比較的細粒・均質な焼土層。地山の熱による焼土化部分。
 - 4 橙色土 地山の熱による焼土化部分。焼けて硬くしまっている。

0 1:30 1m

第388図 G-33・34号土坑

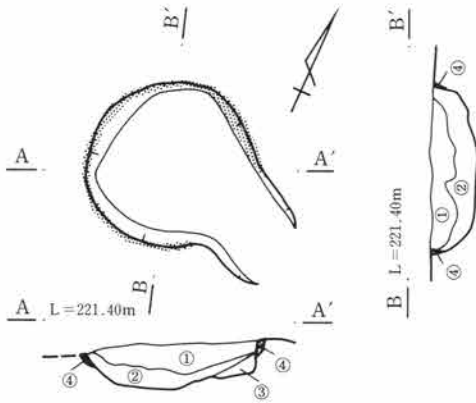
G-35号土坑 (PL57)



Gk-77・78グリッドに所在。形状はやや歪んだ長方形で、長辺154cm・短辺80cm・深さ79cm。G-75号住居・42号土坑と重複し、いずれよりも新しい。土師器の小破片が2点出土しているが、重複する住居からの混入と思われ、時期を確定することはできない。

- 1 暗褐色土 細粒の砂粒を含みしまり良。
- 2 暗褐色土 1層に比べ砂粒の混入少ない。
- 3 暗褐色土 地山褐色土を含む。

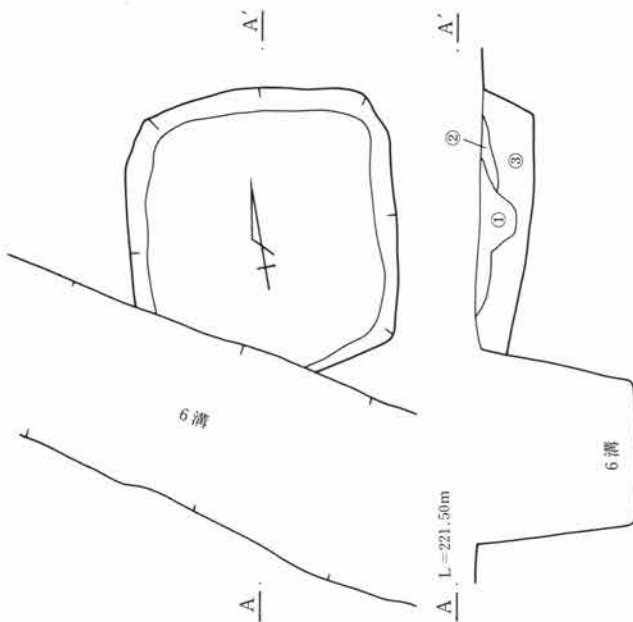
G-36号土坑 (PL57)



Gj-70グリッドに位置する。洋梨形の土坑であるが、削平されて焚口部の大半を失っている。大きさは現状で、全長91cm・燃烧部長64cm・燃烧部幅67cm・焚口幅35cm・深さ18cmである。燃烧部壁面は、ほぼ全面が熱を受けて焼土化している。遺物の出土はない。

- 1 にぶい黄褐色土 比較的細粒・均質で炭化物わずか含む。
- 2 にぶい黄褐色土 炭化物・焼土わずか含む。
- 3 褐色土 少量の焼土・炭化物含む。
- 4 暗赤褐色土 地山の熱による焼土化部分。

G-37号土坑 (PL57)



Gh-73グリッドに位置する。南西隅の一部をG-6溝によって切られているが、形状はほぼ正方形である。長辺は現状で113cm・短辺106cm・深さ21cm。遺物の出土はなく、時期は不明である。

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、焼土粒わずかに含む。
- 2 暗褐色土 白色粒わずかに含む。
- 3 暗褐色土 若干の白色粒、ごくわずかの焼土粒含む。

0 1 : 30 1m

第389図 G-35・36・37号土坑

G-38号土坑 (PL57)

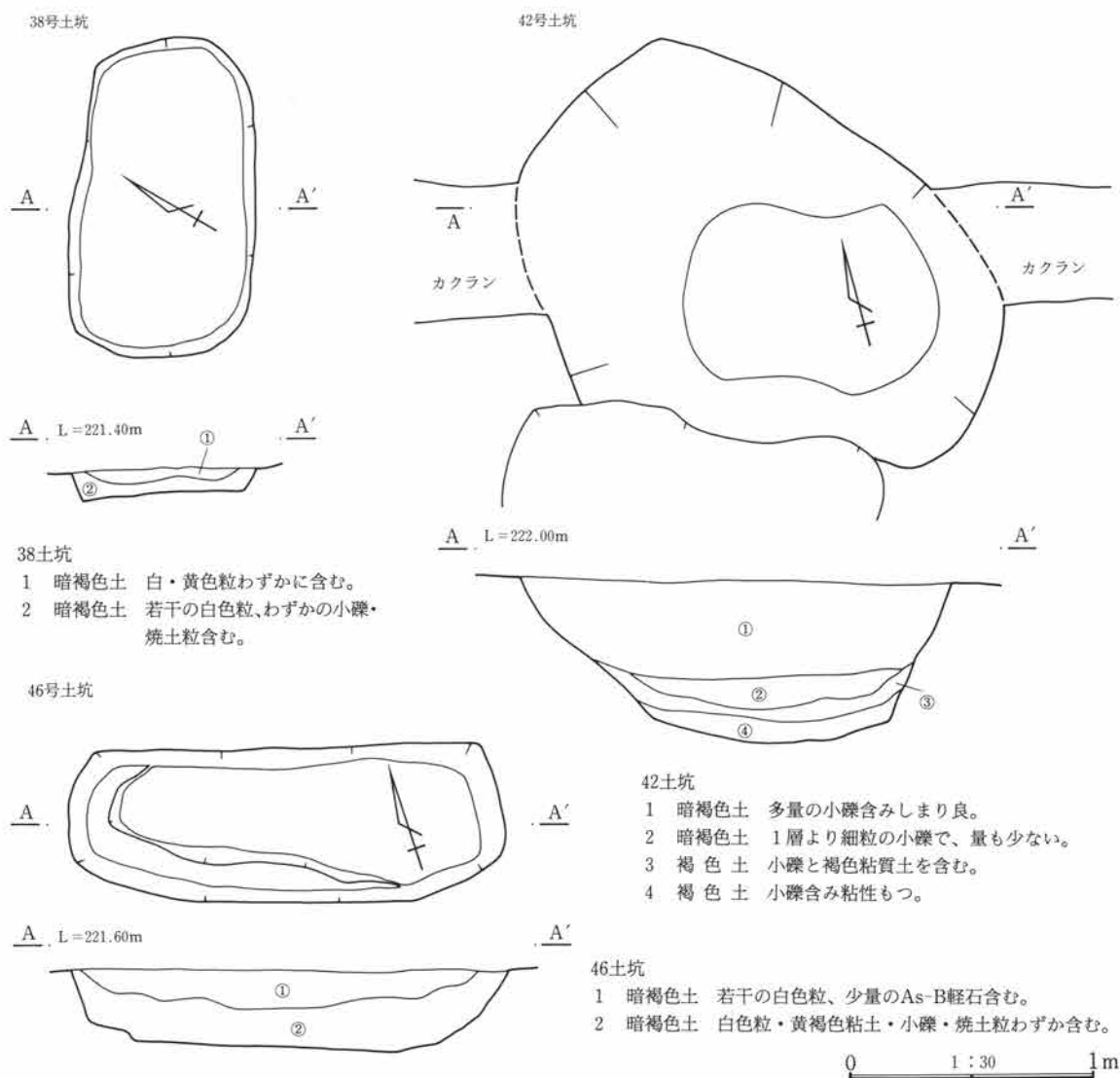
Gf-73・74グリッドに位置する。形状は隅丸の長方形で、長辺130cm・短辺77cm・深さ10cmである。遺物の出土はなく、時期を確定できない。

G-42号土坑 (PL57)

Gk-77グリッドに位置する。形状は楕円形で、長辺210cm・短辺152cm・深さ66cmである。土坑のほぼ中央部に近年の耕作にともなう溝が走り、南壁はわずかにG-35号土坑によって切られている。遺物の出土はなく、時期の確定はできない。

G-46号土坑 (PL57)

Gh-74グリッドに位置する。形状は隅丸の長方形で、長辺178cm・短辺63cm・深さ34cmである。遺物の出土はない。覆土中にAs-B軽石が再堆積の状態に含まれることから、軽石の降下後あまり時間がたたないうちに埋没したものと思われる。中世のものか。



第390図 G-38・42・46号土坑

G-23号土坑

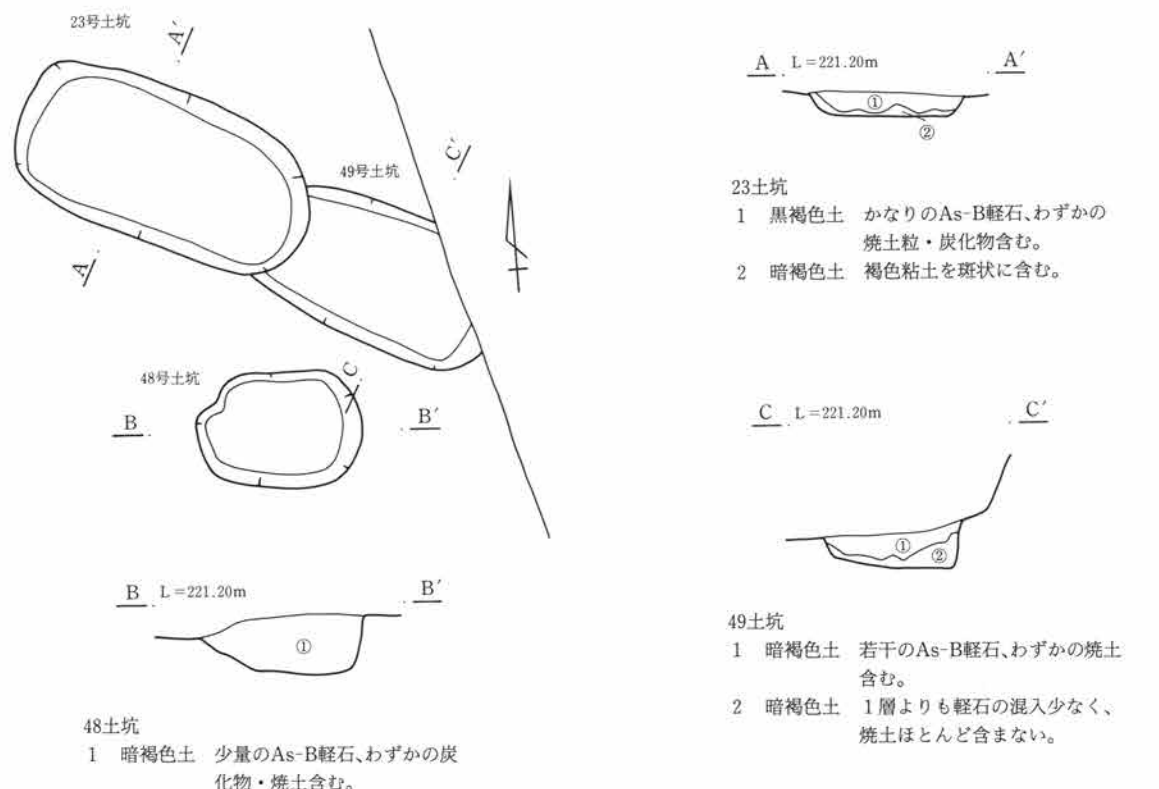
Gh-69グリッドに所在。形状は隅丸の長方形で、長辺122cm・短辺60cm・深さ19cmである。遺物の出土はない。中世初頭と思われるG-49土坑を切っており、形状も49土坑に類似することから、中世の所産であるものと推測される。

G-48号土坑 (PL58)

Gh-69グリッドに位置する。G-41・69住と重複しいずれよりも新しいが、調査時に新旧関係を誤認して41住の調査を先行して行ったため、南半分を破壊してしまった。形状は不整形円形か。現状での大きさは、長辺66cm・短辺24cm・深さ23cmである。遺物の出土はないが、覆土中に再堆積のAs-B軽石を含むことから、中世のものと推測される。

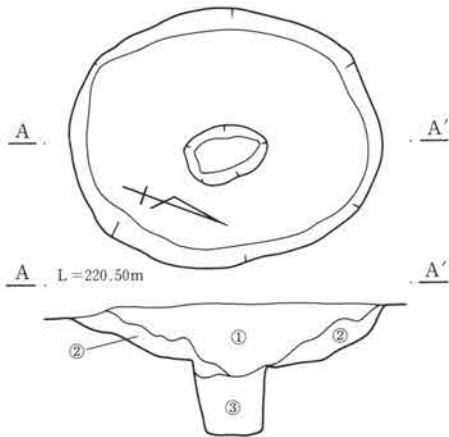
G-49号土坑 (PL58)

Gh-69グリッドに位置する。G-23土坑に一部切られるが、形状は隅丸の長方形と思われる。大きさは、現状で長辺97cm・短辺55cm・深さ18cmである。遺物の出土はないが、覆土中に再堆積のAs-B軽石が含まれることから、中世のものと推測される。



第391図 G-23・48・49号土坑

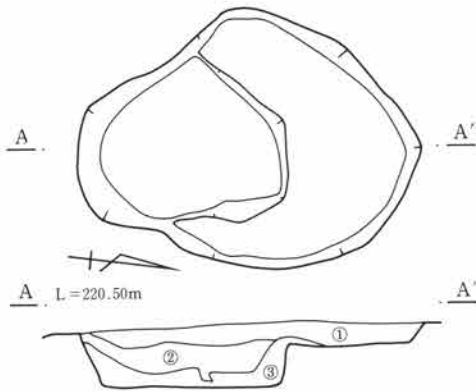
G-50号土坑 (PL58)



Gh-72・73グリッドに位置する。形状は楕円形で、中央部に小ピットが1基穿たれている。長辺125cm・短辺102cm・深さ50cmである。遺物の出土はなく、時期の特定はできなかった。

- 1 暗褐色土 若干の小礫、わずかの焼土粒・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 1層より黄色味強く、混入物の量が少ない。
- 3 暗褐色土 均質な粘質土。炭化物わずかに含む。

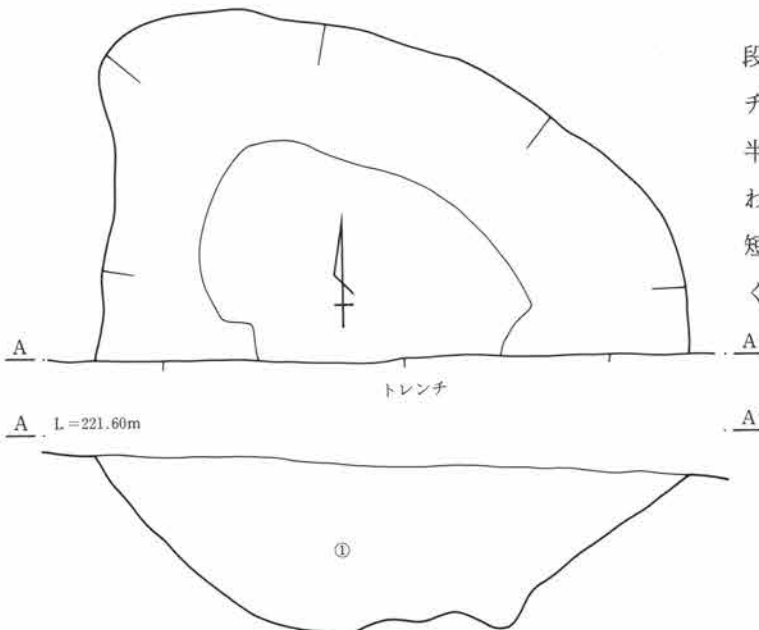
G-51号土坑 (PL58)



Gg・Gh-73グリッドに位置する。形状は不整形形で、長辺137cm・短辺102cm・深さ25cmである。遺物の出土はなく、時期を確定できなかった。

- 1 暗褐色土 わずかの小礫、ごくわずかの焼土粒・炭化物含む。
- 2 暗褐色土 少量の炭化物、若干の白色粒含む。
- 3 褐色土 地山褐色粘質土を主体とし、炭化物わずかに含む。

G-52号土坑 (PL58)



Gd-76グリッドに所在。調査の最終段階に、基本層序確認のためのトレンチを掘削した際に検出されたため、南半が失われている。形状は不整形と思われる、確認時の大きさは、長辺234cm・短辺138cm・深さ73cm。遺物の出土はなく、時期の特定はできなかった。

- 1 暗褐色土 小礫含み粘性もつ。

第392図 G-50・51・52号土坑



第3章 検出された遺構と遺物

G-53号土坑 (PL58)

Gi-70グリッドに所在。G-50住の竈煙道を切って造られており、より新しいことがわかるが、調査時に新旧を誤認して50住の調査を先行したため、南側大半を失っている。形状は不明。現状での大きさは、長辺51cm・短辺25cm・深さ23cmである。遺物の出土はなく、時期を確定できない。

G-55号土坑

Gf-69・70グリッドに位置する。G-39住の覆土を切って造られている。内部より礫が2点出土した。覆土中に再堆積のAs-B軽石を含むことから、中世のものと推測される。

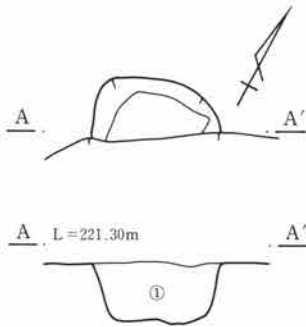
G-56号土坑

Gm-77グリッドに位置する。形状はほぼ円形で、長辺40cm・短辺35cm・深さ8cm。遺物の出土はなく、時期の特定はできない。

G-57号土坑

Gm-78グリッドに位置する。G-46住を切って作られている。形状は楕円形で、長辺57cm・短辺49cm・深さ22cm。遺物の出土はなく、時期の特定はできない。

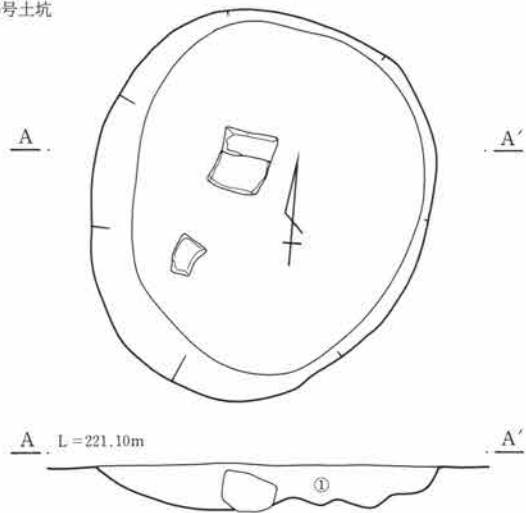
53号土坑



53号土坑

1 暗褐色土 若干の白色粒・小礫・焼土粒含む。

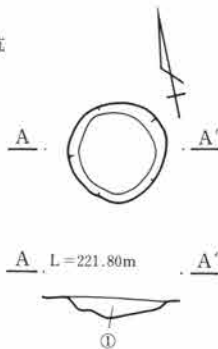
55号土坑



55号土坑

1 暗褐色土 若干のAs-B軽石を含む。

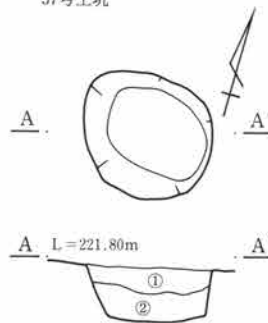
56号土坑



56号土坑

1 暗褐色土 白色粒・焼土粒含み
しまり良。

57号土坑



57号土坑

1 暗褐色土 若干の小礫・微細炭
化物含む。
2 暗褐色土 わずかの小礫含み粘
性もつ。

第393図 G-53・55・56・57号土坑

0 1 : 30 1m

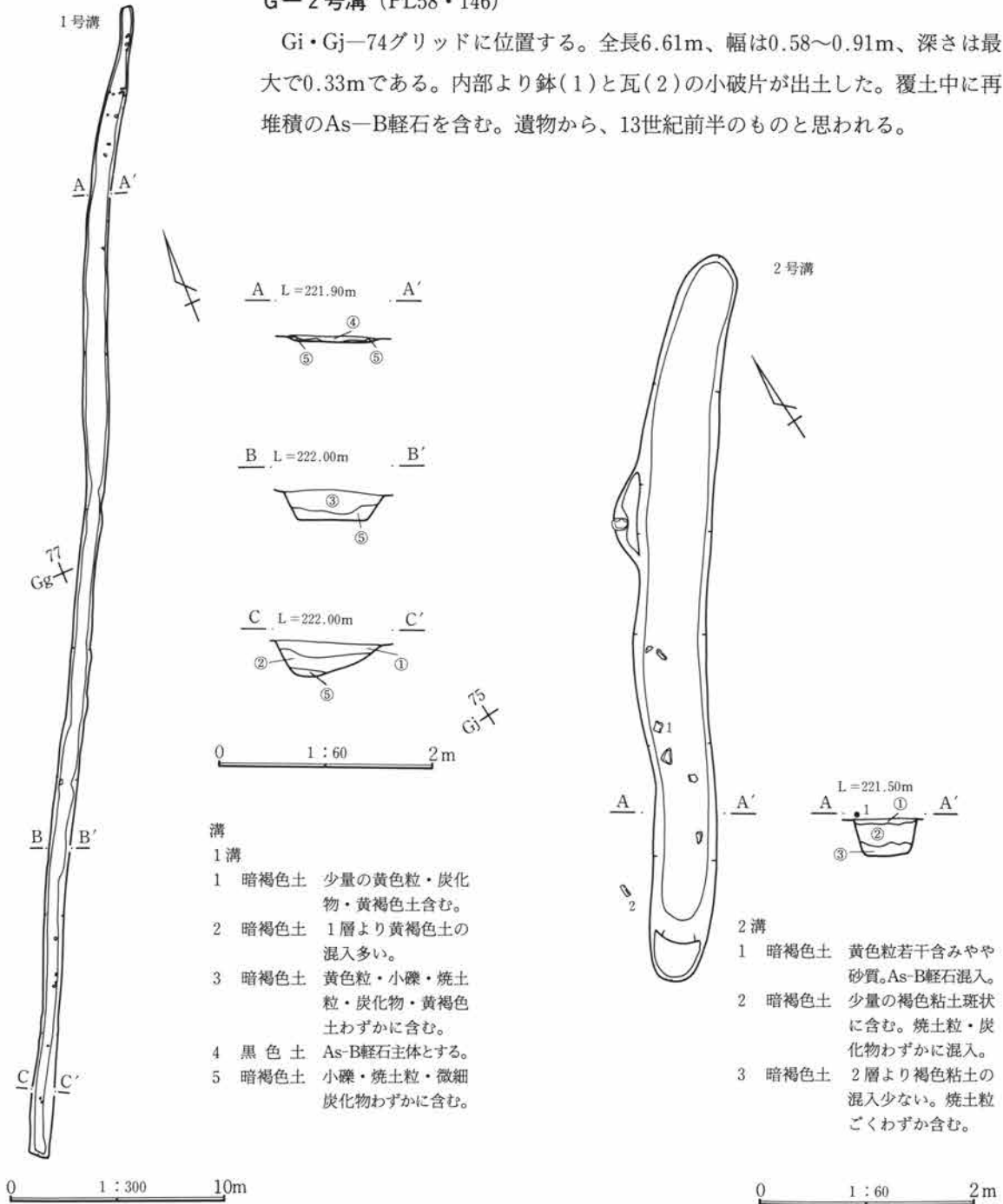
溝

G-1号溝 (PL58)

Gb-79グリッドから北東方向へ延び、Gk-74グリッドに達している。確認した全長は22.4mで、幅は0.4~1.2m、深さ0.05~0.34mである。若干の土師器・須恵器破片が出土したが、時期を特定するにはいたらなかった。一部覆土中に再堆積のAs-B軽石が見られることから、中世のものとして推測される。

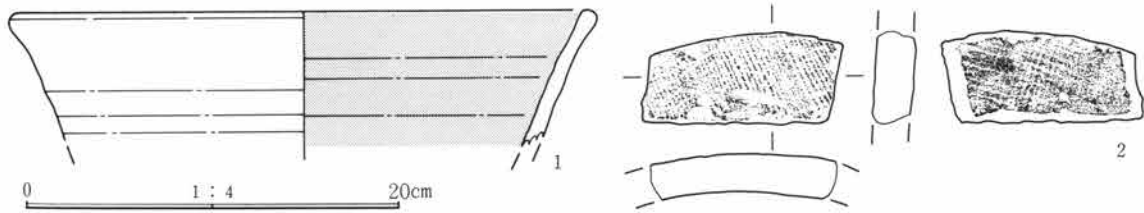
G-2号溝 (PL58・146)

Gi・Gj-74グリッドに位置する。全長6.61m、幅は0.58~0.91m、深さは最大で0.33mである。内部より鉢(1)と瓦(2)の小破片が出土した。覆土中に再堆積のAs-B軽石を含む。遺物から、13世紀前半のものと思われる。



第394図 G-1・2号溝

第3章 検出された遺構と遺物



第395図 G-2号溝出土遺物実測図

G-2号溝出土遺物観察表

番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	軟質陶器 鉢	+39cm 口縁部破 片	口(30.4) 底— 高—	①細砂含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。口縁端部がやや肥厚する。	内面下半にすり面。 渥美系 12~13世紀 前半
2	瓦	+35cm 破片	長— 幅— 厚 2.0	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	平瓦の破片。凸面に斜行する縄圧痕、凹面に糸切り痕。凹面には重ね置きした際の凸面の縄圧痕が写る。	13世紀

G-3号溝 (PL59)

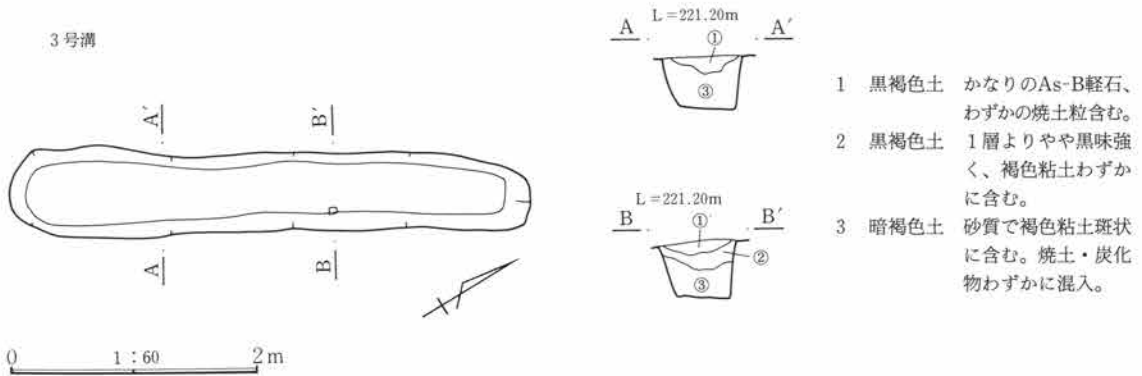
Gh・Gi-70グリッドに位置する。全長4.15m、幅0.58~0.73m、深さは最大で0.42m。遺物は土師器の小破片が1点出土したのみ。覆土中に再堆積のAs-B軽石が含まれることから、中世初頭のものとして推測される。

G-4号溝 (PL59)

Ge・Gf-70グリッドに所在。全長4.85m・幅0.73m・深さ0.40mである。遺物の出土はない。覆土中に再堆積のAs-B軽石を含むことから、中世初頭のものとして推測される。

G-5号溝 (PL59)

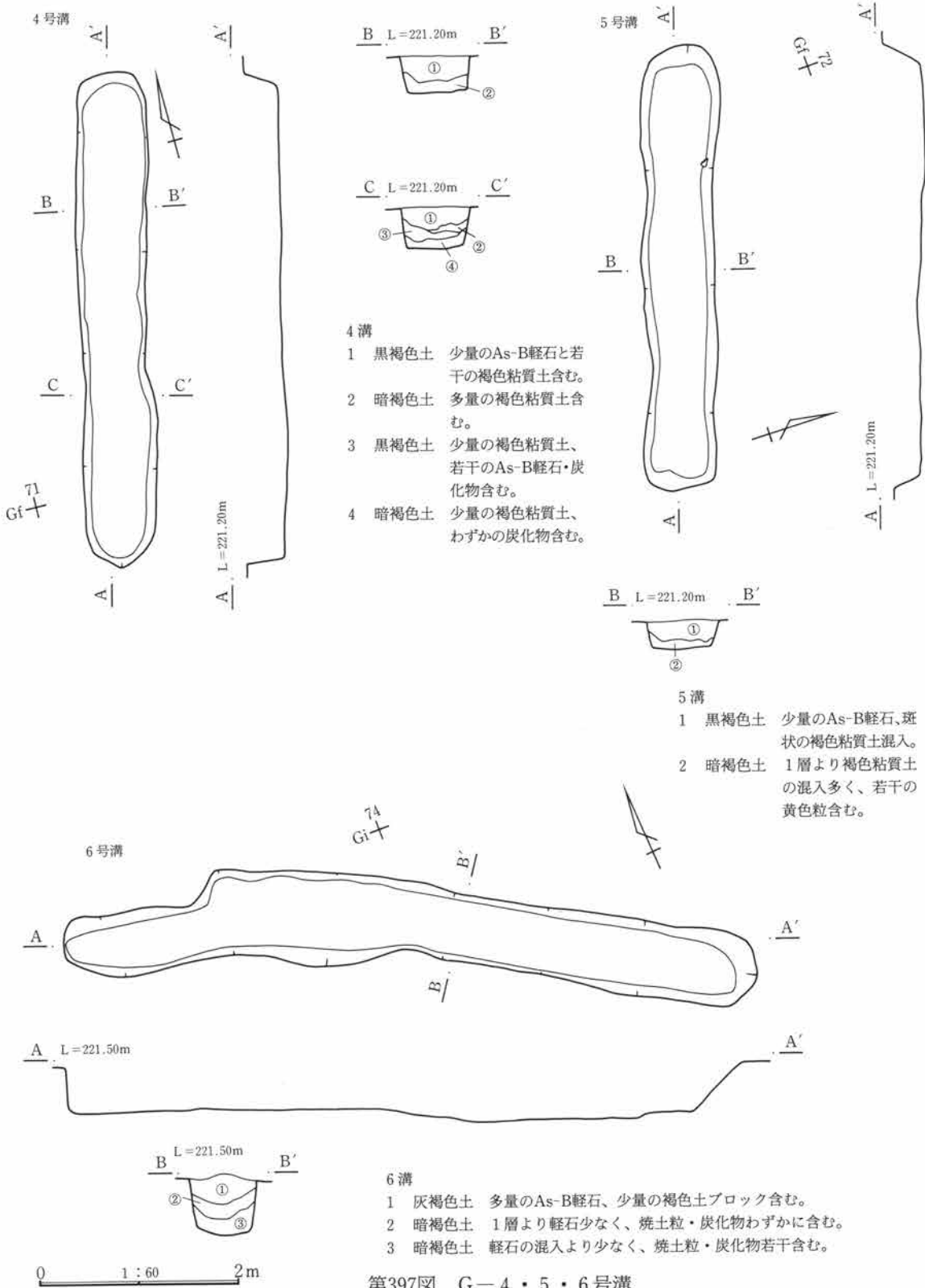
Ge-71・72グリッドに所在。全長4.38m・幅0.77m・深さ0.28m。遺物の出土はない。覆土中にAs-B軽石を含むことから、中世初頭のものとして推測される。前記の4溝と近接し、覆土の状態や形状が類似しているため、同時に存在した可能性が高い。



第396図 G-3号溝

G-6号溝 (PL59)

Gh-73・74グリッドに位置する。全長6.85m・幅0.55~0.92m・深さ0.54mである。遺物の出土はない。覆土中に再堆積のAs-B軽石が含まれ、中世初頭のものと思われる。



第397図 G-4・5・6号溝

G-7号溝 (PL59)

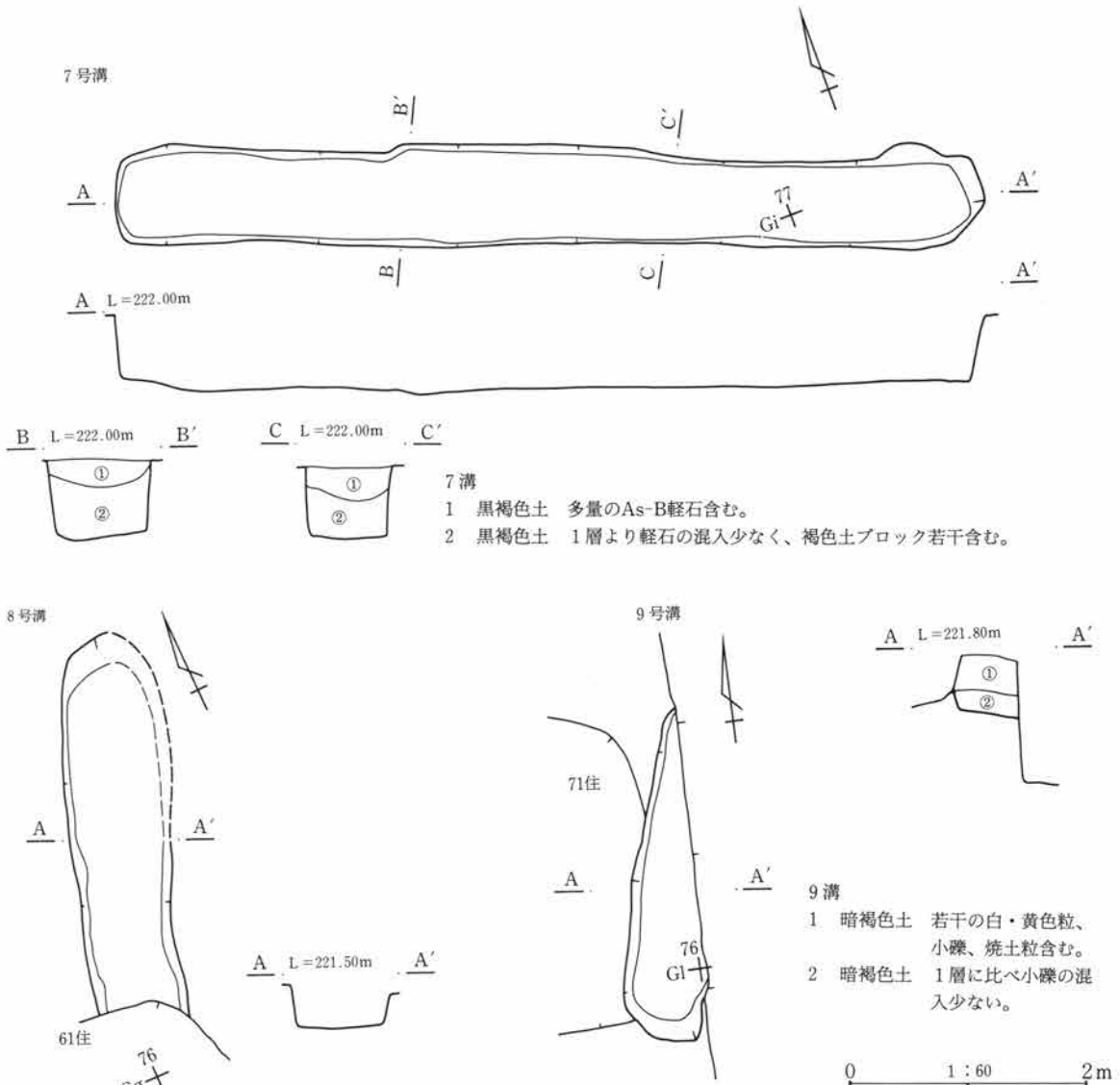
Gi-77グリッド杭付近から北西方向に延びる。全長7.20m・幅0.68~0.85m・深さ0.76mである。遺物の出土はない。覆土中にAs-B軽石が含まれ、中世初頭のものと思われる。

G-8号溝 (PL59)

Gg-75グリッドに所在。調査時に前後関係を誤認し、G-61号住居の調査を先行したため南側を失ってしまった。確認時の大きさは、全長3.15m・幅0.88m・深さ0.45m。遺物の出土はなく時期を確定できないが、形状などから他の中世の溝と同じものと思われる。

G-9号溝 (PL59)

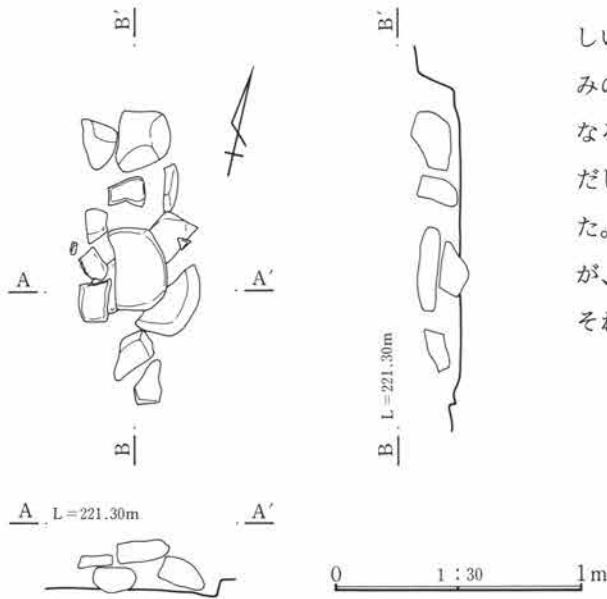
Gk・Gl-76グリッドに位置する。調査の最終段階で基本層序確認のためにトレンチをいれた際に検出したため、遺構の東半分は失われてしまった。確認時の大きさは、全長2.72m・幅0.66m・深さ0.51mである。遺物の出土はなく時期を確定できないが、形状などから中世の所産と思われる。



第398図 G-7・8・9号溝

集石

G-1号集石 (PL59)



Gd-75グリッドに位置する。G-14号住居よりも新しいが、14号住居の調査中に検出されたため、掘り込みの形状などは確認できなかった。大小15個の石からなるが、なかに被熱しているものが数点見られた。ただし、集石の周辺には、焼土や炭化物の分布はなかった。土器などの出土もなく、時期の特定は困難であるが、14号住居が平安時代に位置づけられることから、それ以降のものであることがわかる。

第399図 G-1号集石

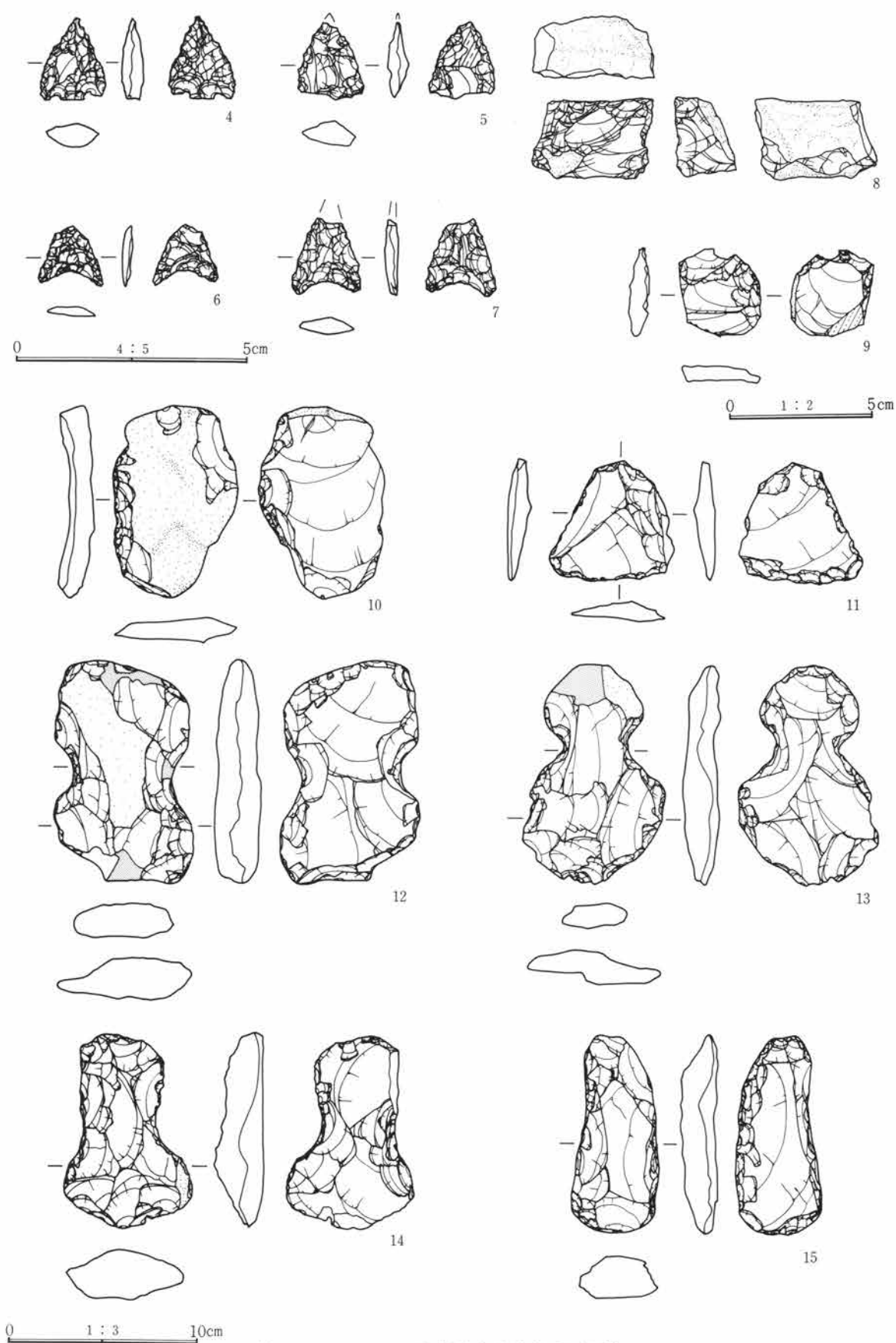
5 遺構外出土遺物 (PL146・147)

遺構外、もしくは他時期の住居から、縄文土器や石器などが出土している。1・2は縄文土器の深鉢の口縁部破片である。石器は、石鏃(3~7)・石核(8)・ピエスエスキュー(9)・スクレイパー(10・11)・打製石斧(12~17)・磨製石斧(18・19)・磨石(20・21)・敲石(22)・石棒破片(23)・石皿(24)があり、この他にも打製石斧の破片や剥片類が出土している。これらの石器は、ほとんどが縄文時代に属する遺物であるが、一部には弥生時代のものも含まれていると推測される。この他に、土師器坏(25)、須恵器塊(26)、用途不明の鉄製品(27)、釘破片(28)などが出土している。

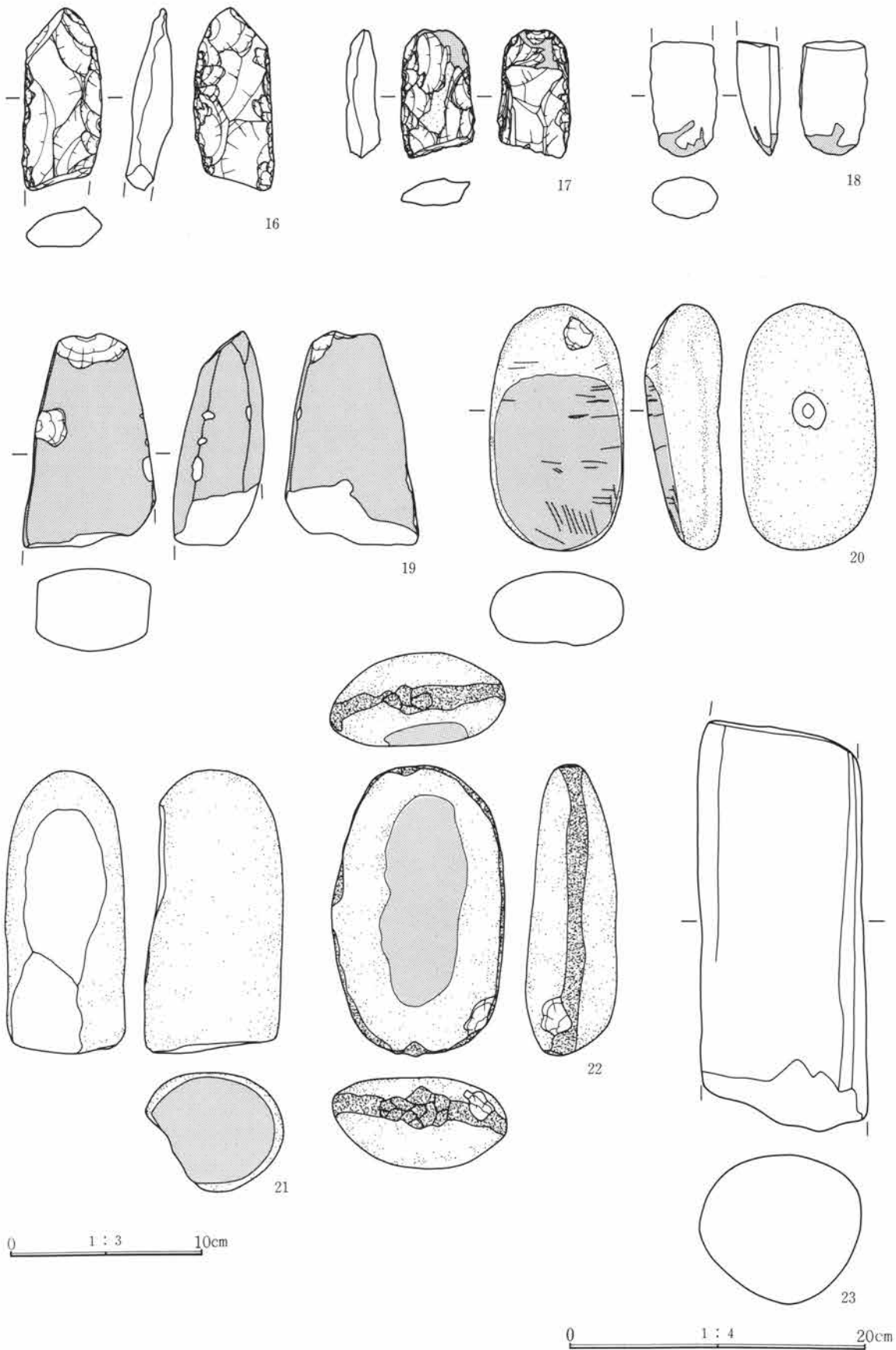


第400図 F・G区遺構外出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物

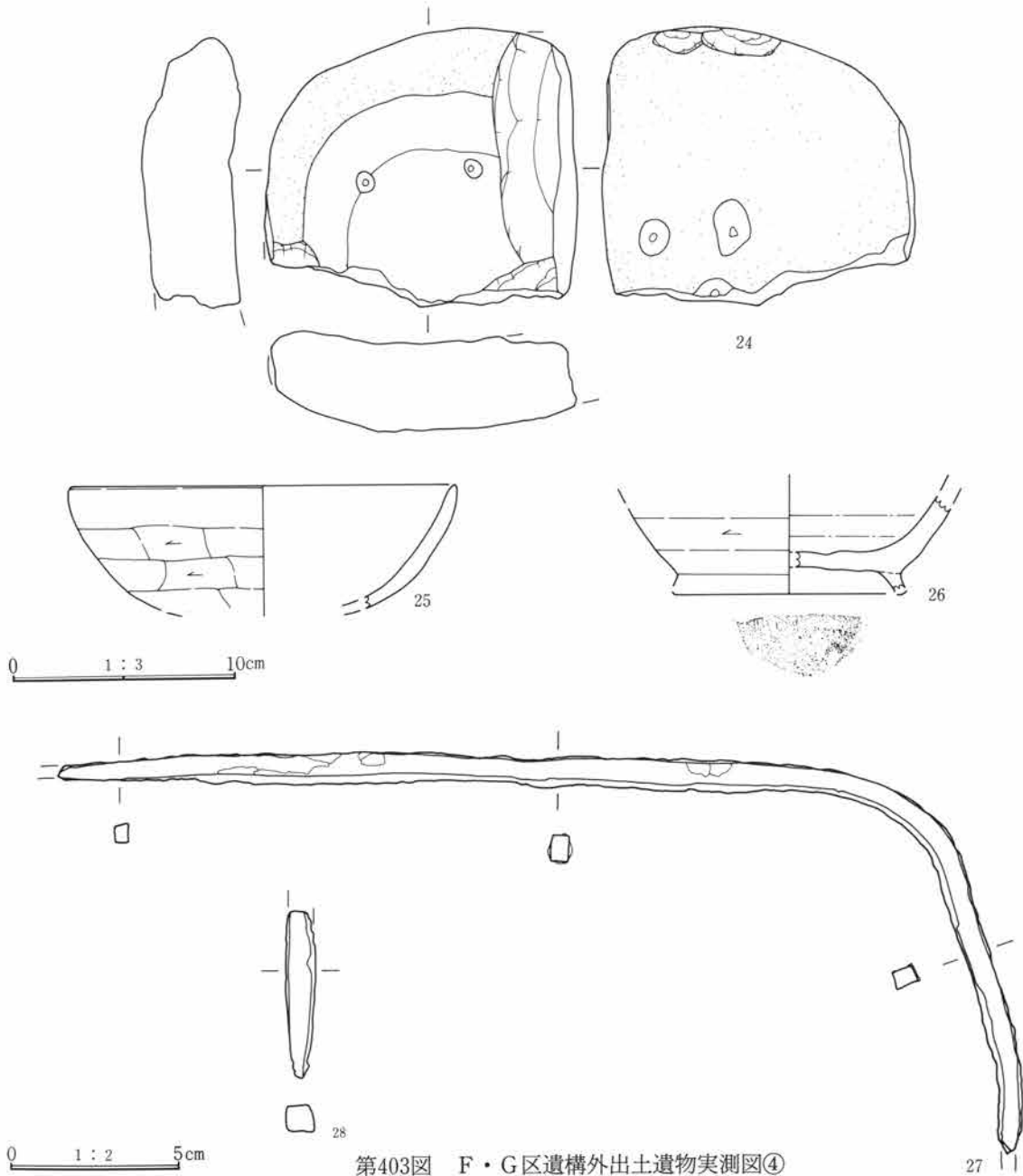


第401図 F・G区遺構外出土遺物実測図②



第402図 F・G区遺構外出土遺物実測図③

第3章 検出された遺構と遺物



第403図 F・G区遺構外出土遺物実測図④

F・G区遺構外出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考		
						①砂粒含む ②良好 ③橙色 ④中期後	①砂粒含む ②良好 ③明褐色 ④中期後	
1	縄文土器 深鉢形土器	F-56住 口縁破片			口唇部突起状に肥厚し、隆線により口縁部に幅狭の無文帯。胴部器面摩滅し施文不明。	①砂粒含む ②良好 ③橙色 ④中期後		
2	縄文土器 深鉢形土器	Fp-69Gr 口縁破片			口縁部に沈線により無文帯、以下縄文RL施文後沈線で曲線文を描く。器面摩滅。	①砂粒含む ②良好 ③明褐色 ④中期後		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
3	石鏃	F-30住 ほぼ完形	2.2	2.0	0.3	1.17	チャート	凹基無茎鏃。両面丁寧に調整。先端に摩耗見られる。左脚の先端わずかに欠損。
4	石鏃	F-42住 基部欠	(1.8)	1.4	0.5	(0.84)	黒曜石	凹基有茎鏃。両側にかえし持つ。基部わずかに欠損。
5	石鏃	G-13住 ほぼ完形	(1.6)	1.4	0.5	(0.7)	黒曜石	両面ほぼ全面に調整及ぶが、下縁は未調整。未成品か破損後再調整途中で放棄されたものか。

第2節 F・G区

番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴
			全長	幅	厚さ	重量		
6	石鏃	G-7住 先端欠	(1.3)	1.4	0.2	(0.25)	黒曜石	凹基無茎鏃。両面丁寧に調整。先端欠損。
7	石鏃	F-36住 先端欠	(1.6)	1.5	0.4	(0.64)	チャート	凹基無茎鏃。両面を丁寧に調整。先端一部欠損
8	石核	G-25住 完形	1.7	2.6	1.3	6.46	黒曜石	小型の角礫の表面において、小型の剥片剥離。
9	ピエスエスキュー	F-20住 完形	3.0	2.9	0.5	6.57	チャート	素材剥片の表面右側・裏面右側に調整。下端表面に微細剥離痕見られる。
10	スクレイパー	G-50住 完形	9.8	6.5	1.8	107.4	硬質泥岩	縦長剥片の背面左側と、腹面左側に調整加え刃部形成。
11	スクレイパー	G-76住 完形	6.2	6.4	1.4	37.2	頁岩	剥片の左側と下端に調整加え刃部形成。
12	打製石斧	G-74住 ほぼ完形	11.3	7.3	2.0	208.3	硬質泥岩	剥片素材で周辺両面に調整。背面両端とえぐり部による摩耗顕著。分銅形。
13	打製石斧	G-59住 完形	11.2	6.3	1.9	124.2	硬質泥岩	両側中央やや上にくぐり入る分銅形で基部小。基部・刃部先端・えぐり部による摩耗。
14	打製石斧	F-50住 ほぼ完形	9.9	6.6	3.1	147.4	珪質頁岩	横長剥片素材。両側が内湾するバチ形。主に湾曲部の両面に調整加え整形。
15	打製石斧	F-21住 完形	10.1	5.0	1.9	99.5	硬質泥岩	横長剥片素材とし両面全周に調整加える。短冊型。
16	打製石斧	G-4住 3/4	(9.2)	4.1	2.4	(78.2)	硬質泥岩	両側両面に調整加え整形。刃部欠損。短冊形。
17	打製石斧	G-70住 1/2	(6.5)	3.6	1.4	(43.8)	硬質泥岩	細身の短冊形と思われる。刃部欠損。基部両面に使用による摩耗見られる。
18	磨製石斧	F-20住 1/2	(5.8)	3.4	2.0	(68.2)	凝灰岩?	細身の磨製石斧。刃部は片刃状。表面の剥落激しく、刃部付近が残るのみ。
19	磨製石斧	F-20住 3/4	(10.3)	6.7	4.6	(519.4)	変玄武岩	両側面を平坦に研磨しており、断面はたいこ形を呈する。刃部欠損。
20	磨石	Fp-69Gr 完形	12.5	6.9	3.5	465.9	変質安山岩	円礫の表面に研磨面。主に横及び斜めの擦痕有り。裏面に凹み1個。
21	磨石	F-30住 ほぼ完形	14.3	7.1	6.0	902.3	流紋岩	下面に弱い研磨面あり。被熱により一部欠損。
22	敲石	F-31住 完形	14.7	8.9	4.7	865.3	変質安山岩	表面に研磨面。側面全周に敲打痕、上下両端特に顕著。
23	石棒?	G-11住 1/2	(27.8)	11.7	10.1	(4400.0)	デイサイト	表面を一部面取りし、円柱状に仕上げである。両端を欠くが、大型の石棒と思われる。
24	石皿	F-10住 1/4	(12.1)	(13.8)	4.4	(1170.2)	黒色片岩	表面はほとんど摩耗していない。表面に小さな凹み2個、裏面により大きな凹み3個。
番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調		成・整形技法の特徴		残存状態 備考
25	土師器 坏	Fq-71 1/5	口(16.6) 底— 高—	①砂粒(まれに小礫)含む ②良好 ③明赤褐色		口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。		
26	須恵器 埴	Fo-72 底~高台部 1/4	口— 底— 高—	①微砂粒・黒色微粒子含む ②堅緻 ③灰色		ロクロ整形。胴部下位回転ヘラ削り、底部回転ヘラ削り。貼り付け高台。		
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
27	不明鉄製品	表採	(36.5)	0.8	0.5	(98.0)	1/2	両端欠損し形状は不明。断面四角形で一端が尖る。近年の耕作痕からの出土。
28	鉄釘	Gf-68Gr	(5.0)	0.7	0.7	(5.6)	1/6	鉄釘の先端部破片。断面四角形。

第3節 H 区

1 弥生時代の遺構と遺物

H-9号住居跡 (PL61・148)

位置 Hj-82・83、Hk-82・83グリッド 主軸方位 N-11°-E 残存壁高 0.31m

重複 H-8住にわずかに切られる。

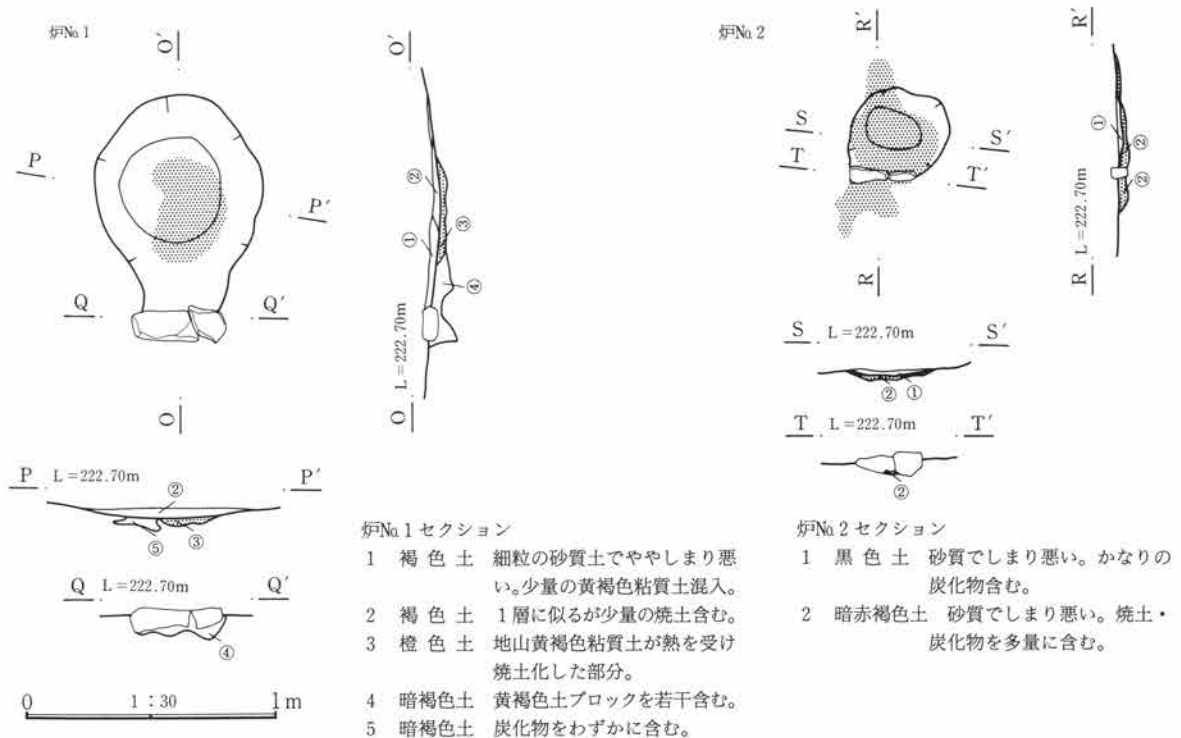
規模と形状 長辺5.26m・短辺4.65mのやや縦長の長方形。周壁はほぼ直進し、線形の乱れはほとんどみられない。住居主軸はやや東側にふれる。

床面 地山黄褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。ほぼ全面に渡って硬くたたきしめている。

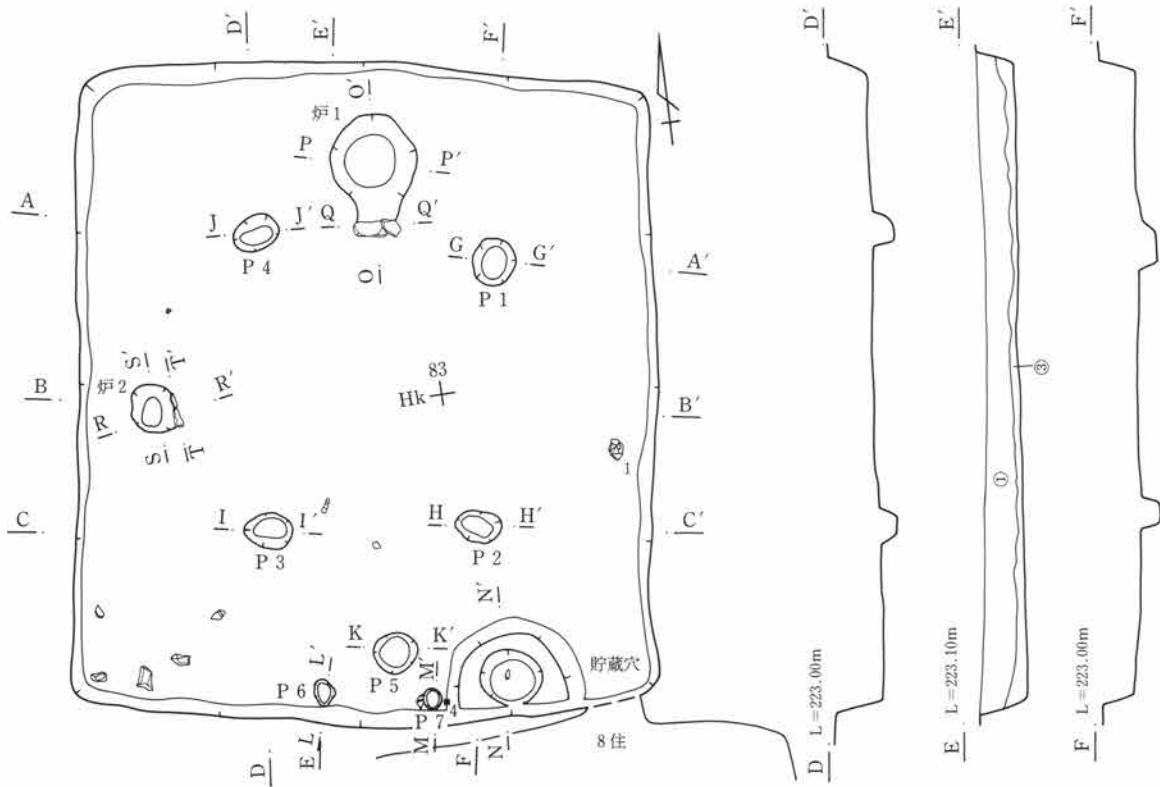
炉 北壁側と西壁側に各1基みられる。北側の炉No.1は、2本の柱穴を結ぶ線よりも北側の中央部分に所在。細長い輝緑岩の円礫を炉石とし、その北側に浅い掘り込みを持つ。掘り込みの幅67cm・長さ97cm。炉の長軸は住居の長辺にほぼ一致する。炉の底面には焼土がみられる。炉No.2は、西壁際のほぼ中央部に位置する。角礫状の砂岩を炉石とし、その西側に浅い掘り込みを持つ。掘り込みの幅は39cm・長さ36cm。長軸は住居の短辺にほぼ一致し、底面には焼土がみられる。

貯蔵穴 住居南壁際の東よりの位置に所在。周囲には、高さ5cm・幅25~30cm程の半円形の土手状に床面を掘り残してある。周溝 なし。

柱穴 7基の小ピット検出。うちP1~4は、ほぼ住居の対角線上に位置し、主柱穴と考えられる。また南壁際のP5~7は、いずれも入り口施設にともなうものと推測される。



第404図 H-9号住居炉



A L=223.00m

B L=223.10m

C L=223.00m

L=222.70m

L=222.70m

L=222.70m

L=222.70m

L=223.00m

L=222.70m

L=223.00m

L=223.00m

N L=223.00m



貯蔵穴セクション

- 1 黒褐色土 砂質土をブロック状に含みややしまり悪い。若干の黄褐色土混入。
- 2 暗褐色土 少量の黄褐色粘質土含みやや良。
- 3 黒褐色土 比較的細粒・均質でしまりやや良。黄褐色粒若干含む。

0 1:60 2m

第405図 H-9号住居跡

ベルトセクション

- 1 暗褐色土 黄褐色土含みしまり悪い。小礫・炭化物わずかに混入。
- 2 黄褐色土 小礫を含む。
- 3 暗褐色土 礫・炭化物をわずかに含み粘性を持つ。

ピットセクション

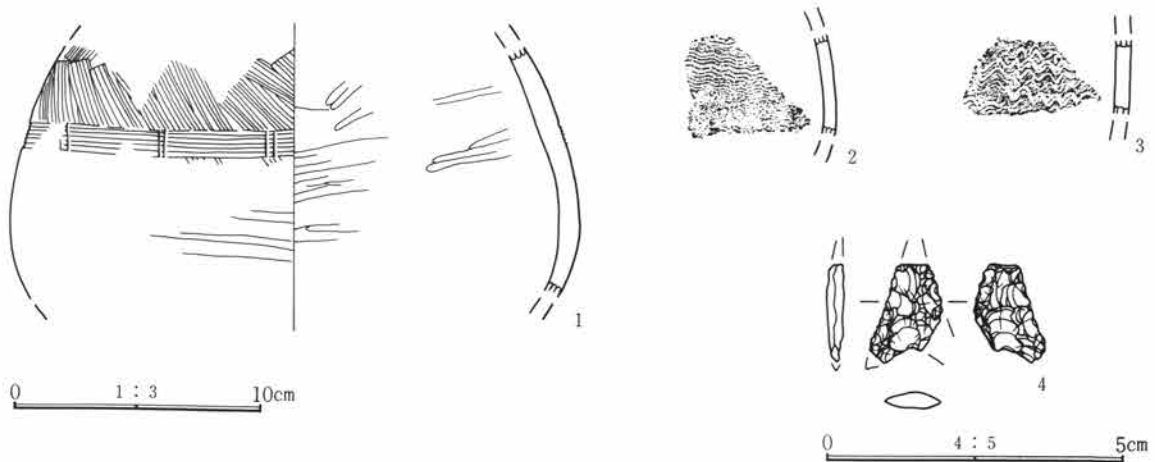
- 1 暗褐色土 地山黄褐色粘質土を少量含む。砂質でやわらかくしまり悪い。
- 2 暗褐色土 砂質でやわらかくしまり悪い。1層に比べ黒味強い。
- 3 褐色土 地山黄褐色粘質土を多量に含み、砂質でしまりやや悪い。
- 4 褐色土 黄褐色粘質土のブロックを主体とししまりやや良。
- 5 暗褐色土 砂質でしまり悪い。黄褐色粘質土塊若干含む。
- 6 褐色土 黄褐色粘質土かなり含みしまりやや良。
- 7 暗褐色土 砂質でややしまり悪い。黄褐色粘質土を層状に含む。
- 8 褐色土 地山黄褐色粘質土を主体とし、砂質土をブロック状に含む。
- 9 黒褐色土 砂質土をブロック状に含みしまりやや悪い。黄褐色土若干混入。

第3章 検出された遺構と遺物

出土遺物 遺物量は非常に少なく、甕の小破片が数点出土したにすぎない(1～3)。他にはチャート製の石鏃が1点出土している(4)。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、弥生時代後期樽式期の住居である。



第406図 H-9号住居出土遺物実測図

H-9号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考	
						全長	幅
1	甕	+22cm 胴部中位 1/3			外面 胴部外面上位に櫛刃状工具による羽状文、下端に6本単位2連止めの簾状文施文以下へラ磨き。 内面 横ナデ後へラ磨き。	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色	
2	甕	覆土 胴部上位 破片			外面上位に波状文、以下へラ削り。内面横ナデ。	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	
3	甕	覆土 胴部破片			外面に波状文、内面ナデ。	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄褐色	
4	石鏃	+17cm 1/3			計測値 (cm・g) 全長 (1.6) 幅 — 厚さ 0.3 重量 (0.51) チャート	凹基無茎鏃。先端と両脚の端部を欠損。	

2 古墳～平安時代の遺構と遺物

住居跡

H-1号住居跡 (PL61・62・148)

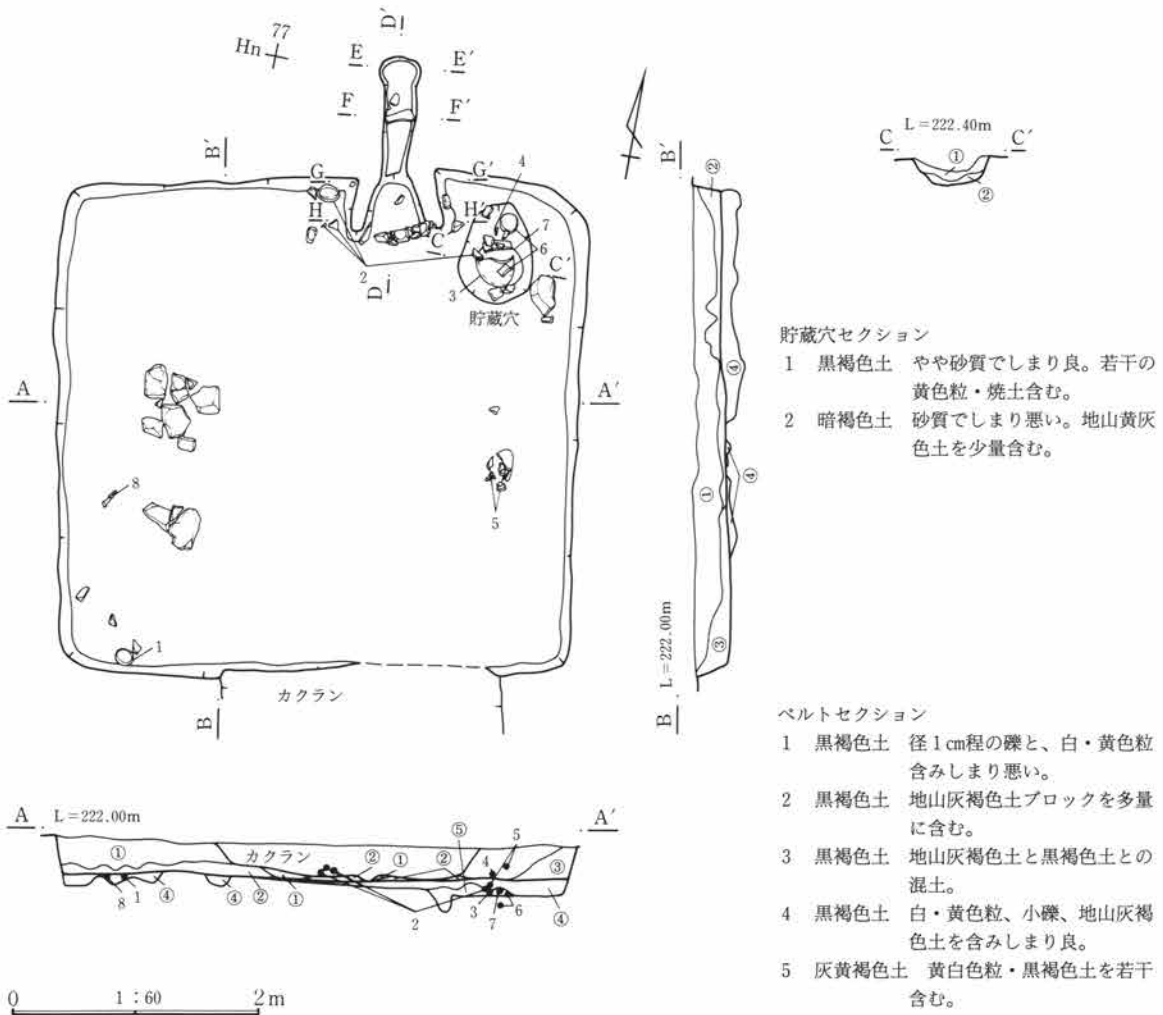
位置 Hm-76・77グリッド 主軸方位 N-9°-W 残存壁高 0.30m 重複 なし

規模と形状 平面形状はほぼ正方形だが、長辺4.26m・短辺3.89mと若干長辺が長い。周壁はほぼ直進し、線形の乱れなどはみられない。竈は北側に築かれる。

床面 不規則な浅い掘り方に、地山黄灰色土混じりの土を埋めて床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の中央よりもやや東よりに所在。袖が住居内に作り出される。焚口幅48cm・燃烧部長49cm。両袖先端部の燃烧部側には、板状の砂岩が袖石として据え付けられ、その上にはやはり板状の砂岩が天井石としてかけられていた。煙道は、上半部は削平されているが、下半部は先端まで残存している。煙道長90cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。平面形状は、住居の短軸方向に長い縦長の楕円形状を呈する。内部より土師器坏や甕などが出土している。周溝 なし。柱穴 なし。



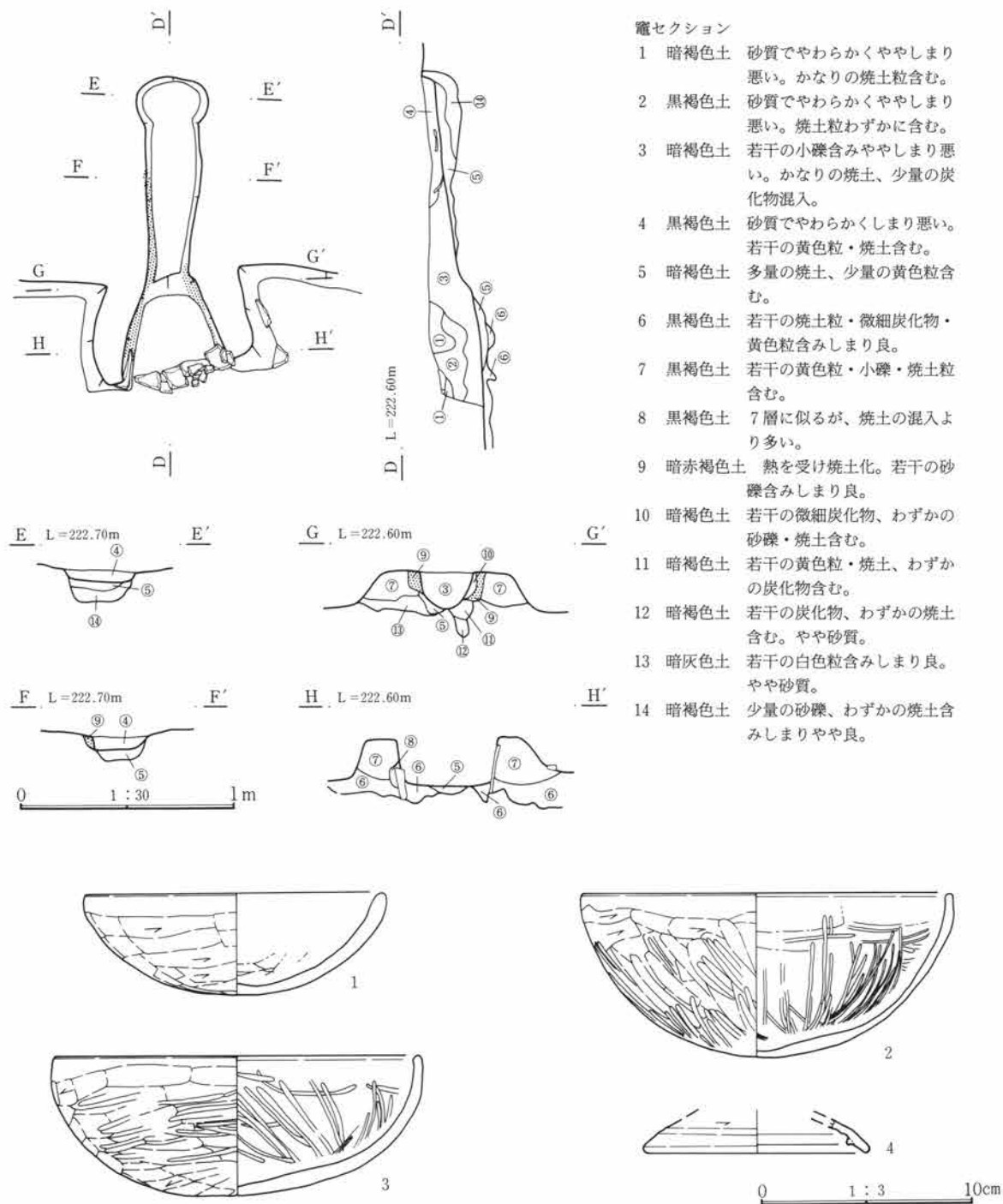
第407図 H-1号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

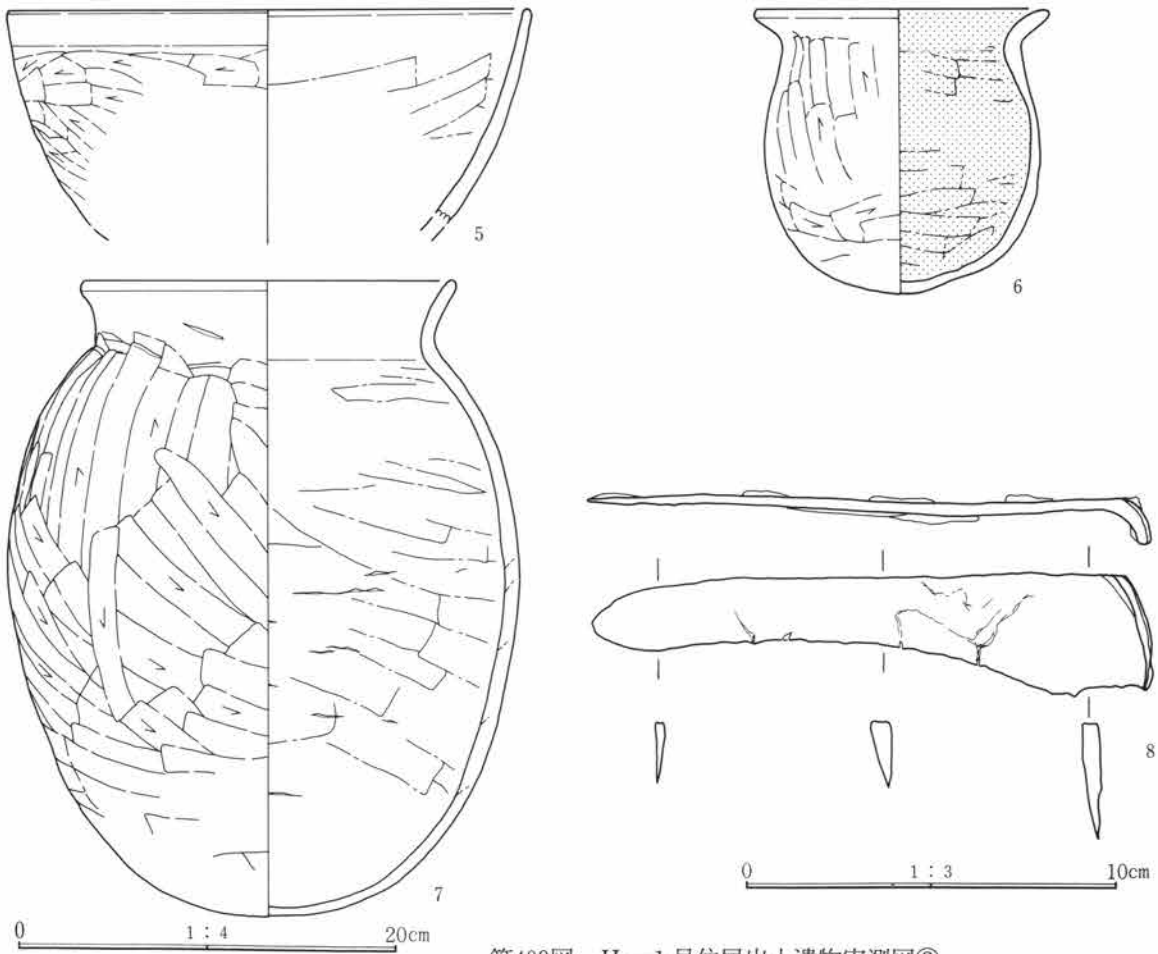
出土遺物 主に貯蔵穴内と竈周辺に分布している。遺物量は少ないが、ほぼ完形にまで復元可能な個体が床面近くや貯蔵穴内より出土している。主な器種は、土師器坏(1~3)・鉢(5)・小型甕(6)・甕(7)、須恵器蓋(4)などのほかに、鉄製の鎌が1点出土している(8)。また、住居西側に比較的大型の礫がまとまって出土したが、出土レベルは床面よりもかなり高く、北側の丘陵部分より崩落したものと推測される。

掘り方 不規則な浅い掘り方が、住居のほぼ全域で確認された。

調査所見 出土遺物より、奈良時代初頭の住居と推測される。



第408図 H-1号住居竈、出土遺物実測図①



第409図 H-1号住居出土遺物実測図②

H-1号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴	残存状態 備考
				口	底	高		
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 13.8 底 — 高 4.7	①砂粒含む ②良好 ③灰黄色		口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ後横ナデ。		
2	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 16.9 底 — 高 7.5	①細砂含む ②良好 ③橙色		大型の坏。口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面横ナデ後ヘラ磨き。口縁端部わずかに内側に肥厚。		
3	土師器 坏	貯蔵穴内 ほぼ完形	口 17.0 底 — 高 6.3	①細砂含む ②良好 ③明赤褐色		大型の坏。口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面横ナデ後ヘラ磨き。口縁端部わずかに内側に肥厚。		
4	須恵器 蓋	貯蔵穴内 口縁部破片	口(10.2) 摘 — 高 —	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色		ロクロ整形。天井部回転ヘラ削り。かえし貼付。		
5	土師器 鉢	掘り方内 口～胴部 上半1/3	口(28.1) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色		口縁部外面横ナデ、胴部外面ヘラ削り。内面横ナデ。口縁端部わずかに内側に肥厚。		
6	土師器 小型甕	貯蔵穴内 口縁1/4～ 底部	口(15.7) 底 — 高 15.0	①砂粒(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	内面全面に弱い煤付着	
7	土師器 甕	貯蔵穴内 ほぼ完形	口 20.0 底 — 高 33.3	①粗砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②良好 ③にぶい黄橙色		口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕あり。		
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
8	鎌	+2cm	14.8	3.1	0.4	33.2	完形	刃部は研ぎ減りによって湾曲。基部は折り曲げてある

第3章 検出された遺構と遺物

H-2号住居跡 (PL62・148)

位置 Hk・HI-77グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.34m 重複 H-11住を切る。

規模と形状 長辺3.78m・短辺3.14mの横長の長方形。周壁は一部蛇行し、線形がやや乱れる。竈は北側に築かれる。

床面 不規則な掘り方に、地山黄灰色粘質土を含む土を埋めて床面を形成。貼り床などは特にみられない。

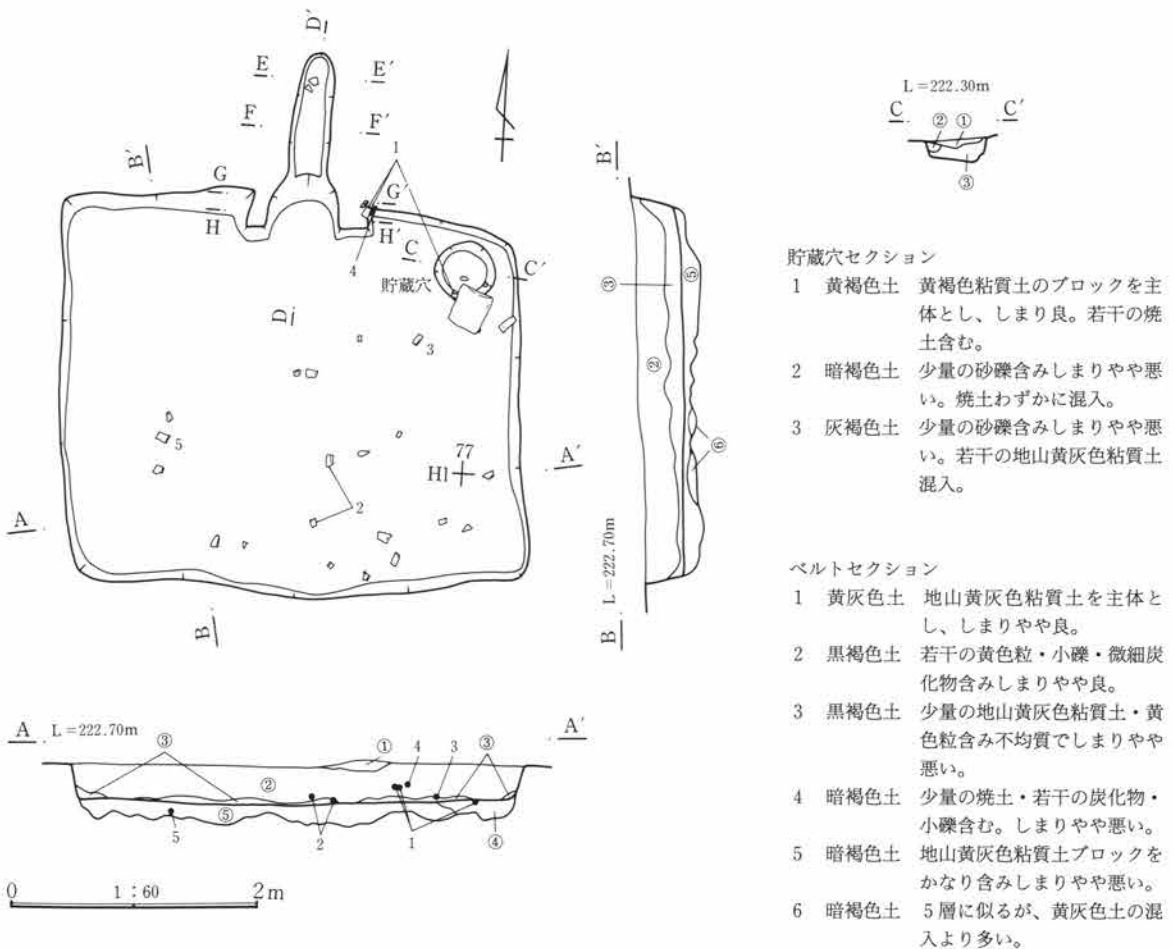
竈 住居北壁の中央部に所在。短い袖が住居内に作り出されるが、燃烧部は住居域外にも張り出す。焚口幅54cm・燃烧部長52cm。煙道は上半を削平されているが、下半は先端部まで残存している。煙道長95cm。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。周溝 なし。柱穴 なし

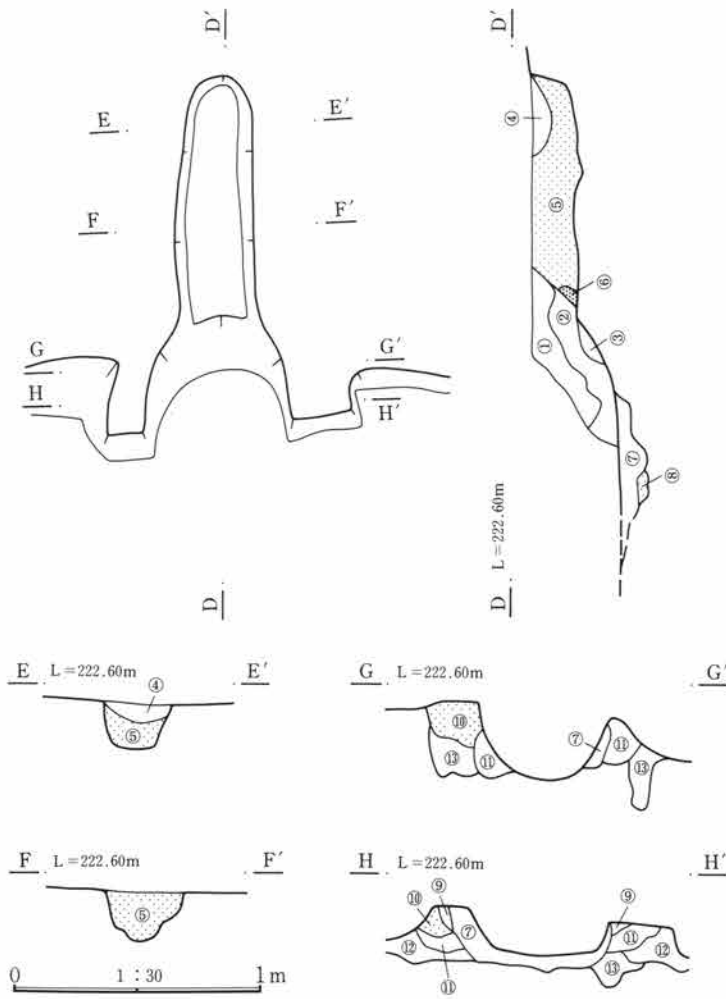
出土遺物 遺物量は少なく、住居内に散在して出土。主な器種は、土師器坏(1)・甕(4)、須恵器坏(2)・蓋(3)・壺(5)がある。

掘り方 住居の南西側2/3ほどに不規則な掘り方がみられる。また、貯蔵穴付近と南壁際から、3基の床下土坑を検出した。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。

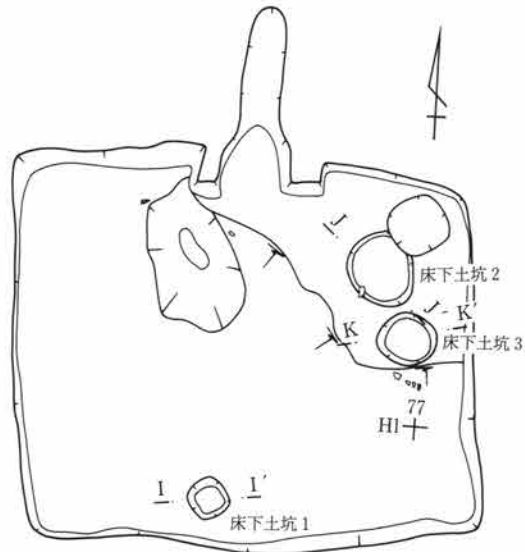


第410図 H-2号住居跡①



竈セクション

- 1 暗褐色土 少量の黄灰色粘質土塊含みし
まりやや良。若干の小礫・焼
土混入。
- 2 褐色土 かなりの焼土含みしまりやや
良。比較的均質。
- 3 黄褐色土 若干の白色粒含みしまり良。
ごく弱い粘性あり。
- 4 黒褐色土 比較的均質な砂質土で、しま
り悪い。やわらかく崩れやす
い。
- 5 灰褐色土 地山黄灰色粘質土を主体と
し、若干の焼土粒・微細炭化
物含む。
- 6 暗赤褐色土 地山黄灰色粘質土を主体と
し、多量の焼土ブロック含む。
- 7 褐色土 多量の焼土、少量の砂礫含み
しまりやや良。
- 8 黄灰色土 砂質でしまりやや良。小礫わ
ずかに含む。
- 9 褐色土 若干の砂礫含みしまり良。一
部熱により焼土化。
- 10 暗灰黄色土 少量の砂礫含みしまり良。
- 11 褐色土 少量の砂礫含みしまり良。黄
褐色土・炭化物・焼土わずか
に混入。
- 12 暗褐色土 少量の砂礫含みしまりやや良。
若干の焼土混入。
- 13 褐色土 地山黄灰色粘質土を主体と
し、若干の砂礫・焼土混入。



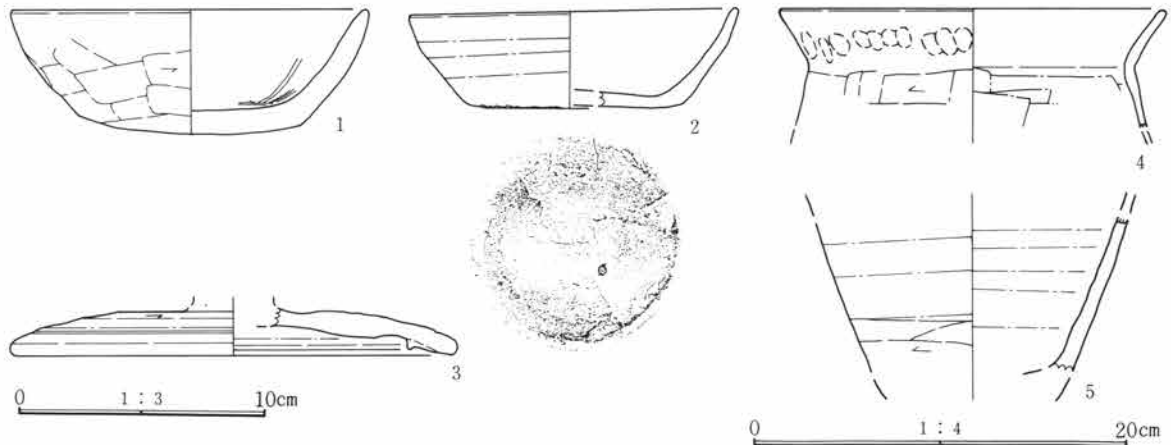
床下土坑セクション

- 1 暗褐色土 地山黄灰色粘質土主体とし、
しまりやや悪い。
- 2 黒褐色土 若干の黄褐色土・砂質土、わ
ずかの焼土含みしまりやや悪
い。
- 3 暗褐色土 砂質土を層状に含みしまりや
や良。
- 4 褐色土 粘質土を主体とし、しまりや
や良。
- 5 黄灰色土 均質な砂質土でしまりやや悪
い。
- 6 暗灰色土 若干の黄色粒・小礫含みしま
りやや良。
- 7 暗灰色土 ごく弱い粘性持ちしまり良。
若干の小礫含む。



第411図 H-2号住居跡②

第3章 検出された遺構と遺物



第412図 H-2号住居出土遺物実測図

H-2号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+7cm 3/4	口 14.1 底 8.8 高 3.9	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ後放射状へラ磨き。	
2	須恵器 坏	+5cm 3/4	口 13.1 底 8.5 高 3.9	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転へラ切り。	
3	須恵器 蓋	+9cm 1/2	口(17.7) 摘— 高—	①微砂粒・黒色粒子 含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。天井部右回転の回転へラ削り。内面にかえし。つまみ欠損。	
4	土師器 甕	+16cm 口縁3/4	口(20.6) 底— 高—	①均質な細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。	
5	須恵器 壺	床密着 胴部下位 1/4	口— 底— 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。胴部外面下位回転へラ削り。底部欠損。	

H-3号住居跡 (PL62・63・148・149)

位置 Hh-78グリッド 主軸方位 N-6°-W 残存壁高 0.43m 重複 なし。

規模と形状 長辺4.68m・短辺3.54mの横長の長方形。周壁はやや外反し、住居南東隅では崩落もみられる。竈は北側に築かれる。

床面 地山黄褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁の東よりに所在。袖を作り出さず、燃烧部が住居域外に張り出す形態をとる。焚口幅50cm・燃烧部長60cm。燃烧部底面・側壁には焼土の発達がみられる。煙道は削平され、残存しない。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。平面形状は、長軸が住居の短辺方向に一致する楕円形。内部より土師器坏(2)・小型甕(8)、須恵器坏(5)が出土している。周溝 なし。

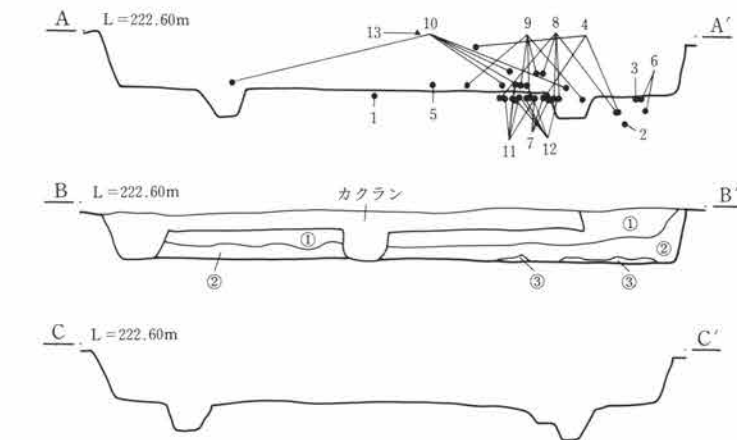
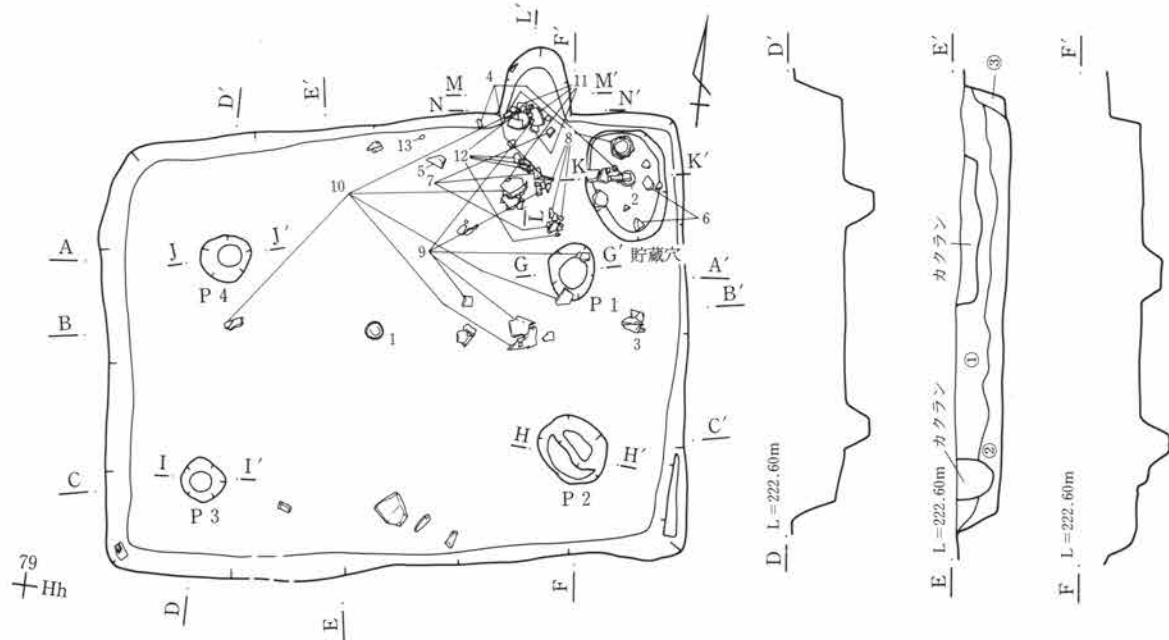
柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するが、北東隅の1基はかなり南側にずれる。竈・貯蔵穴との位置関係の影響か。

出土遺物 遺物量はあまり多くない。大半の遺物は、竈周辺や貯蔵穴内より出土している。前述の貯蔵穴内の遺物の他に、土師器坏(1・3・4)・小型甕(7)・甕(9～12)、須恵器坏(6)などがある。土師器坏には、小型のもの(1・2)と大型のもの(3・4)の2種がある。また、覆土の上位より、小型の鉄製品の破片が出

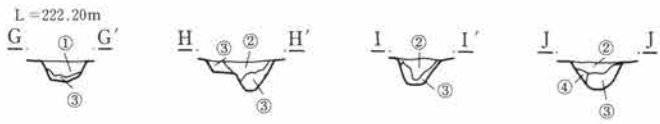
土している(13)。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



- ベルトセクション
- 1 暗褐色土 少量の黄褐色土・小礫含みしまり良。
 - 2 暗褐色土 1層より小礫の混入少なく、黄褐色土より多い。
 - 3 褐色土 地山黄褐色土ブロック主体とする。しまり良。



- ピットセクション
- 1 暗褐色土 若干の焼土・炭化物・砂質土含みしまりやや良。
 - 2 暗褐色土 少量の黄褐色粘質土含みしまりやや良。
 - 3 暗褐色土 1層より砂質土の混入多く、焼土・炭化物含まない。
 - 4 褐色土 かなりの黄褐色粘質土含みしまりやや良。

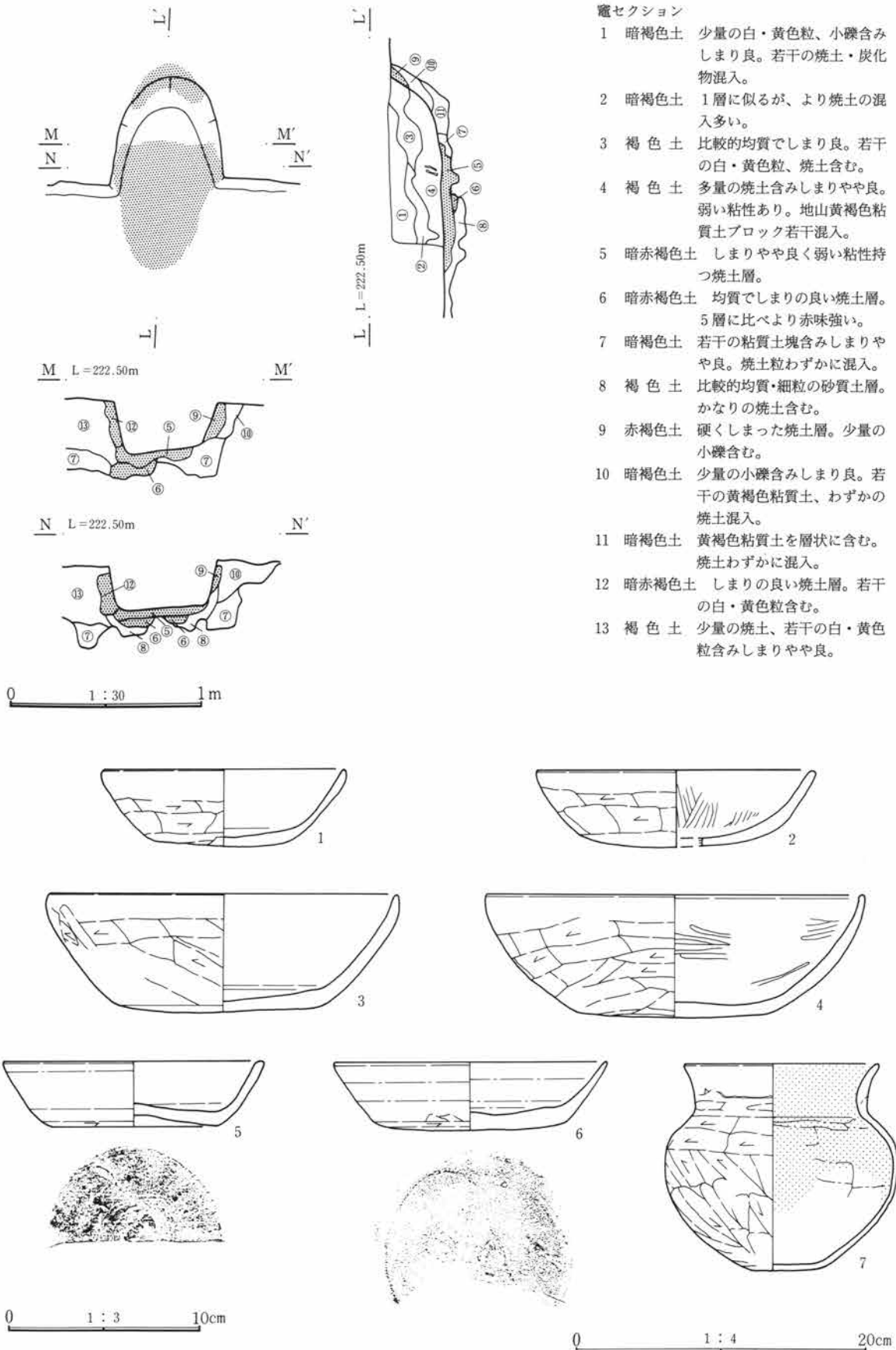


- 貯蔵穴セクション
- 1 暗褐色土 比較的砂質・均質でしまりやや良。焼土若干含む。
 - 2 褐色土 かなりの焼土と少量の黄褐色粘質土ブロック含みしまりやや良。弱い粘性あり。
 - 3 褐色土 黄褐色粘質土ブロックかなり含みしまりやや良。弱い粘性あり。

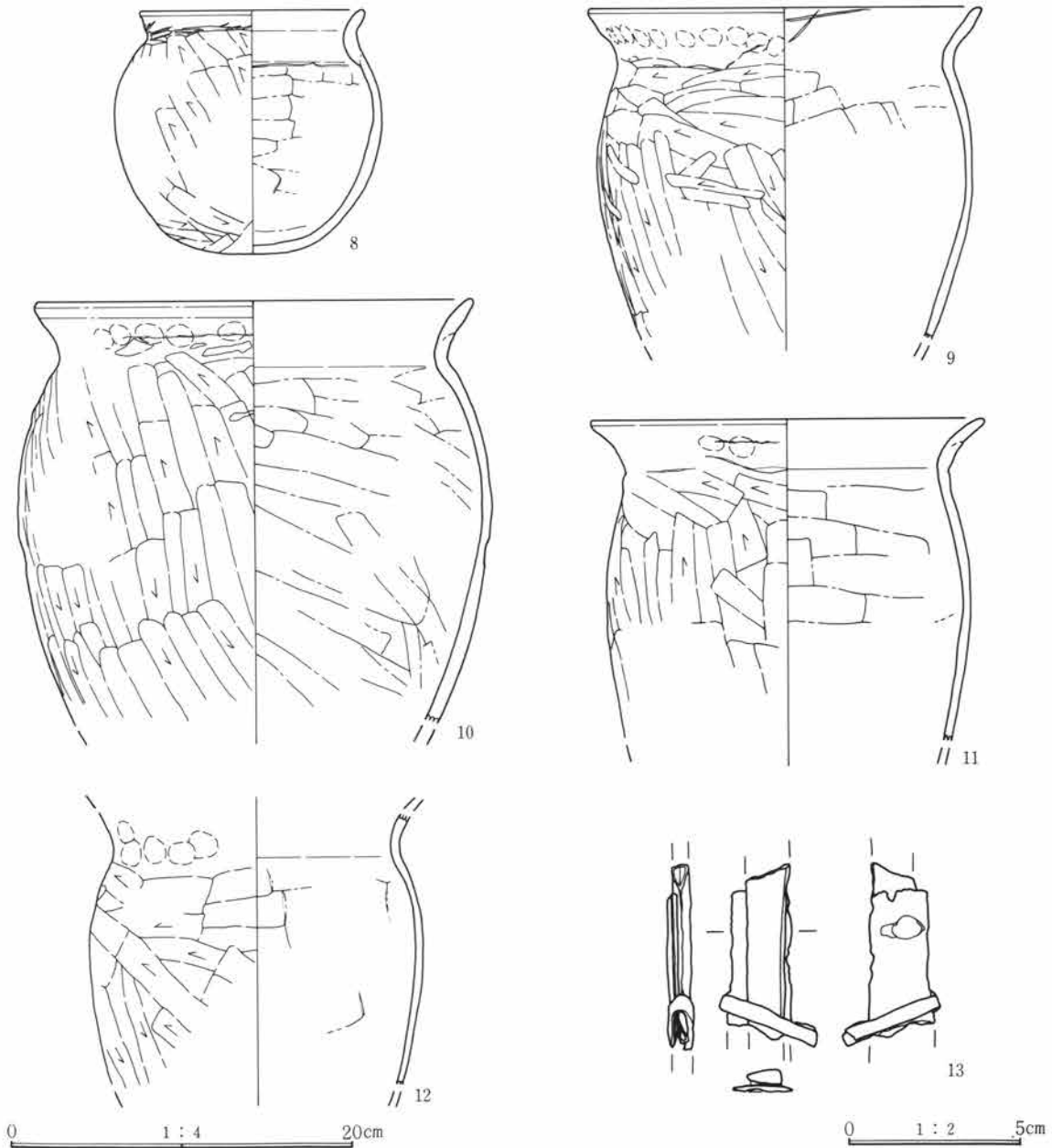
0 1:60 2m

第413図 H-3号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第414図 H-3号住居竈、出土遺物実測図①



第415図 H-3号住居出土遺物実測図②

H-3号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 12.4 底 7.7 高 3.9	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
2	土師器 坏	貯蔵穴内 1/2	口 14.2 底 9.8 高 3.9	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ後放射状へラ磨き。	
3	土師器 坏	床密着 1/2	口 18.8 底 10.8 高 6.0	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色	大型の坏。口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。内面底部に浅い沈線一条めぐる。	
4	土師器 坏	貯蔵穴内 3/5	口(19.2) 底 10.2 高 6.1	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ後へラ磨き。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
5	須恵器 坏	床密着 1/4	口(13.4) 底 8.4 高 3.3	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。			
6	須恵器 坏	貯蔵穴内 1/4	口14.0 底8.7 高3.4	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。			
7	土師器 小型甕	床密着 1/4	口(13.5) 底 5.7 高 14.0	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、底部に指頭圧痕。	内面胴部中位から上に煤付着		
8	土師器 小型甕	貯蔵穴内 1/4	口 13.3 底 7.3 高 14.0	①砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕あり。			
9	土師器 甕	床密着 口～胴部 上半1/4	口(23.0) 底 — 高 —	①微砂粒(ごくまれ に小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	口縁内面にヘラ状工具による線刻		
10	土師器 甕	床密着 口～胴部 1/4	口 25.7 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕・接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
11	土師器 甕	床密着 口～胴部 上半1/4	口(23.0) 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕・接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
12	土師器 甕	床密着 口～胴部 口縁欠	口 — 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
13	不明鉄製品	+46cm	(5.3)	1.7	0.7	(8.2)	1/4	断面三角形の刀子と断面菱形の薄い鉄製品が、責金具状のもので束ねてある。原料として貯蔵したもののか。

H-4号住居跡 (PL63・149・150)

位置 Hi・Hj-79グリッド 主軸方位 N-89°-E 残存壁高 0.30m 重複 なし

規模と形状 平面形状はほぼ正方形であるが、長辺3.81m・短辺3.59mと若干長辺が長い。周壁はやや外反し、南西隅がやや丸味を帯びているが、線形の乱れは少ない。竈は東側に築かれ、住居主軸はほぼ真東に一致している。

床面 住居東半を中心に掘り方が掘られ、焼土混じりの土を埋めて平坦な床面を形成している。ただし、貼り床などはみられない。

竈 住居東壁の中央よりもわずかに南側によった位置に所在。住居内にごく短い袖がみられるが、燃烧部の大半は住居外に張り出す。焚口幅45cm・燃烧部長59cm。燃烧部先端の両壁には、板状の砂岩が複数データ付けられている。またその上には、やはり板状の砂岩を天井石としてかけてある。煙道部分は削平され、破壊されている。

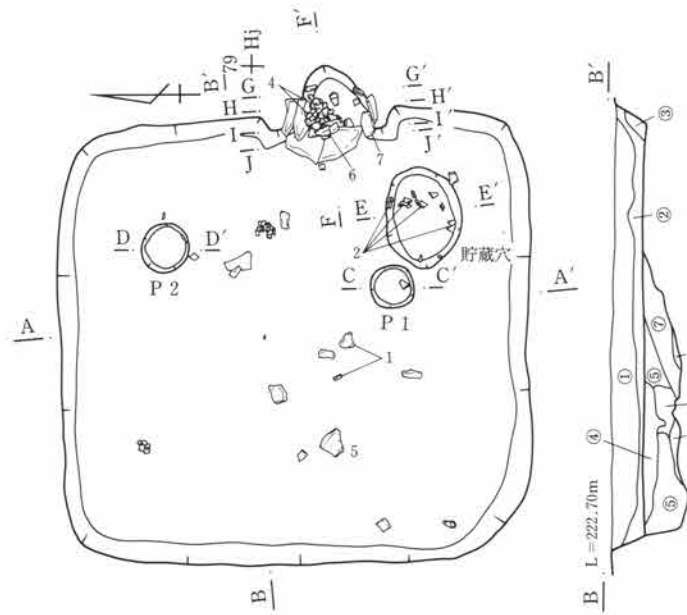
貯蔵穴 住居南東隅に所在。形状は、長軸が住居主軸方向に一致する楕円形である。

周溝 なし。 柱穴 2基の小ピットを検出したが、柱穴である可能性は低い。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、主に竈・貯蔵穴内より出土。主な器種は、土師器坏(1)・小型甕(3)・甕(4・6)、須恵器坏(2)・甕(5)がある。また、竈付近より砥石が1点出土している(7)。

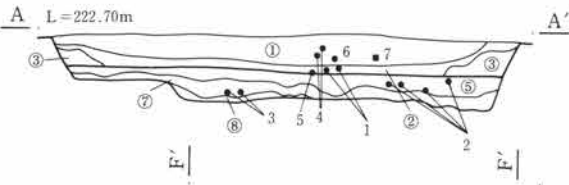
掘り方 住居東半に広く不定形の掘り方が認められる。

調査所見 出土遺物より奈良時代の住居と推定できる。



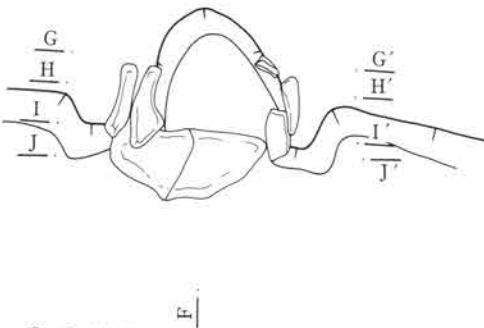
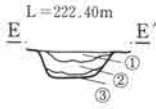
ベルトセクション

- 1 暗褐色土 白・黄色粒、小礫若干含みしまりやや良。炭化物わずかに混入。
- 2 暗褐色土 若干の白・黄色粒、わずかの焼土・炭化物含む。
- 3 褐色土 地山黄褐色土ブロック主体。焼土・微細炭化物わずかに混入。
- 4 黒褐色土 若干の小礫・焼土・炭化物含みしまりやや良。
- 5 暗褐色土 若干の小礫、わずかの焼土・黄色粒含む。弱い粘性持つ。
- 6 暗褐色土 かなりの焼土含みしまりやや悪い。炭化物わずかに混入。
- 7 暗褐色土 ブロック状の砂礫含みしまりやや良。
- 8 暗褐色土 地山粘質土主体としまりやや良。弱い粘性あり。



ピットセクション

- 1 暗褐色土 焼土粒・黄褐色土若干含む。
- 2 暗褐色土 少量の焼土粒、わずかの炭化物含む。
- 3 暗褐色土 比較的均質で細粒の砂質土層。



貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 焼土・炭化物若干含む。
- 2 暗褐色土 黄色粒・小礫・焼土・炭化物若干含む。
- 3 暗褐色土 ごく弱い粘性あり。焼土わずか含む。



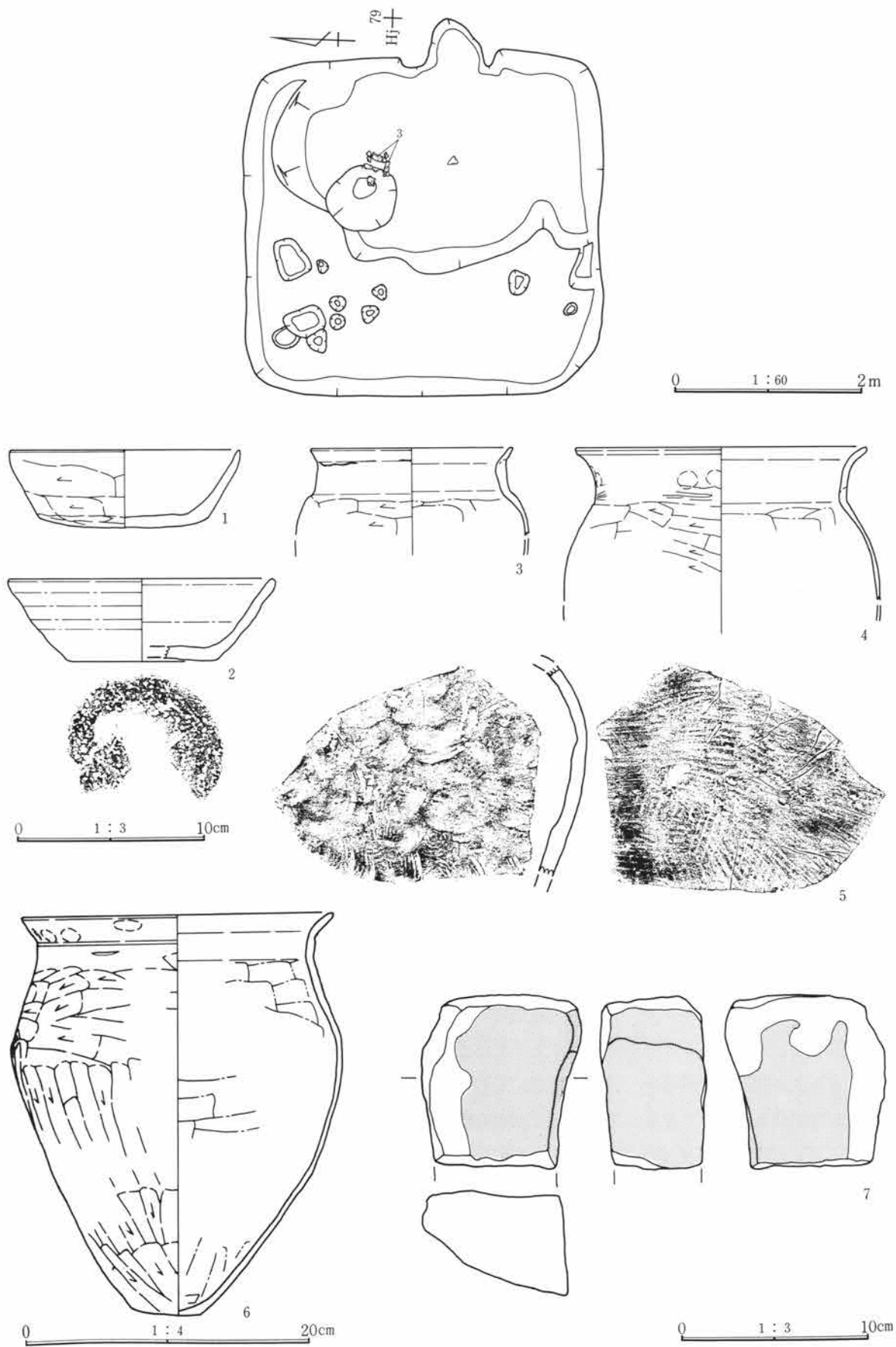
竈セクション

- 1 暗褐色土 比較的均質でしまりやや良。焼土若干含む。
- 2 暗褐色土 しまりやや良。ごく弱い粘性あり。焼土わずか混入。
- 3 暗赤褐色土 均質でしまり良い焼土。弱い粘性あり。
- 4 褐色土 かなりの焼土、若干の黄褐色土含む。弱い粘性あり。
- 5 赤褐色土 均質な焼土層。
- 6 暗褐色土 焼土少量含みしまりやや悪い。
- 7 暗褐色土 少量の黄褐色粘土、若干の小礫、わずかの焼土・炭化物混入。
- 8 褐色土 かなりの焼土含みしまり良。黄色粒わずかに混入。
- 9 褐色土 少量の焼土、若干の白色粒・小礫含みしまりやや良。
- 10 褐色土 若干の白色粒・小礫・焼土含む。
- 11 暗褐色土 若干の白・黄色粒、小礫、焼土粒含みしまり良。
- 12 暗褐色土 しまりやや悪く弱い粘性あり。焼土わずかに含む。
- 13 暗赤褐色土 しまりやや悪く均質な焼土層。
- 14 暗褐色土 多量の焼土含みしまりやや悪い。



第416図 H-4号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第417図 H-4号住居跡掘り方、出土遺物実測図

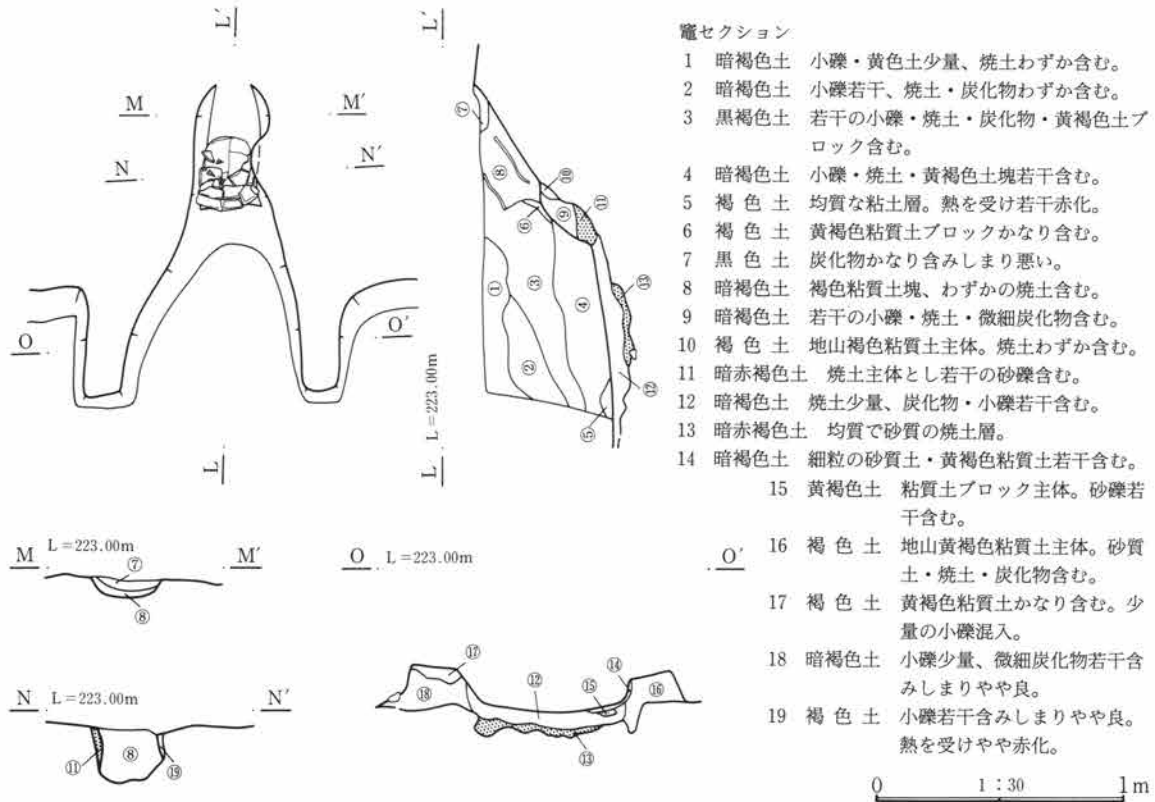
H-4号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	+2cm 1/2	口(12.0) 底(8.8) 高 4.0	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。			
2	須恵器 坏	貯蔵穴内 1/2	口(14.0) 底(7.8) 高 4.3	①微砂粒含む ②良好 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後ナデ。	器表面の剥落激しい		
3	土師器 小型甕	掘り方内 口~胴部 上位1/3	口(13.7) 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁「コ」の字状。口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
4	土師器 甕	カマド内 口~胴部 上位	口 20.3 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁「コ」の字状。口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕・ヘラ状工具のあたり。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
5	須恵器 甕	床密着 胴部下位 破片	口 — 底 — 高 —	①微砂粒・多量の黒色 色粒子含む ②堅緻 ③灰白色	外面平行叩き目、内面青海波文。			
6	土師器 甕	カマド内 2/3	口 21.9 底 4.8 高 27.8	①微砂粒・赤褐色粒 子含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。			
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
7	砥石	+13cm 1/2	(9.0)	8.3	4.2	(528.5)	砥沢石	表裏・右側に研磨面。表・右側面の使用度高い

H-5号住居跡 (PL63・150)

位置 Hk・H1-80グリッド 主軸方位 N-7°-W 残存壁高 0.49m

重複 H-6住をわずかに切る。



第418図 H-5号住居竈

第3章 検出された遺構と遺物

規模と形状 長辺3.78m・短辺2.82mの横長の長方形。西壁に比べやや東壁が長い。周壁はほぼ直進し、線形の乱れなどは少ない。竈は北側に築かれる。住居主軸はやや西にふれる。

床面 住居のほぼ全域に不規則な掘り方が掘られ、地山黄褐色粘質土混じりの土を埋めて床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁のほぼ中央部に所在。袖は住居内に作り付けられるが、燃焼部は一部住居域外に張り出す。焚口幅68cm・燃焼部長78cm。煙道は先端が削平され、燃焼部側が一部残るのみ。煙道の現存長は47cm。煙道と燃焼部の境界部分には、底を抜いた土師器甕(3)が埋め込まれていた。

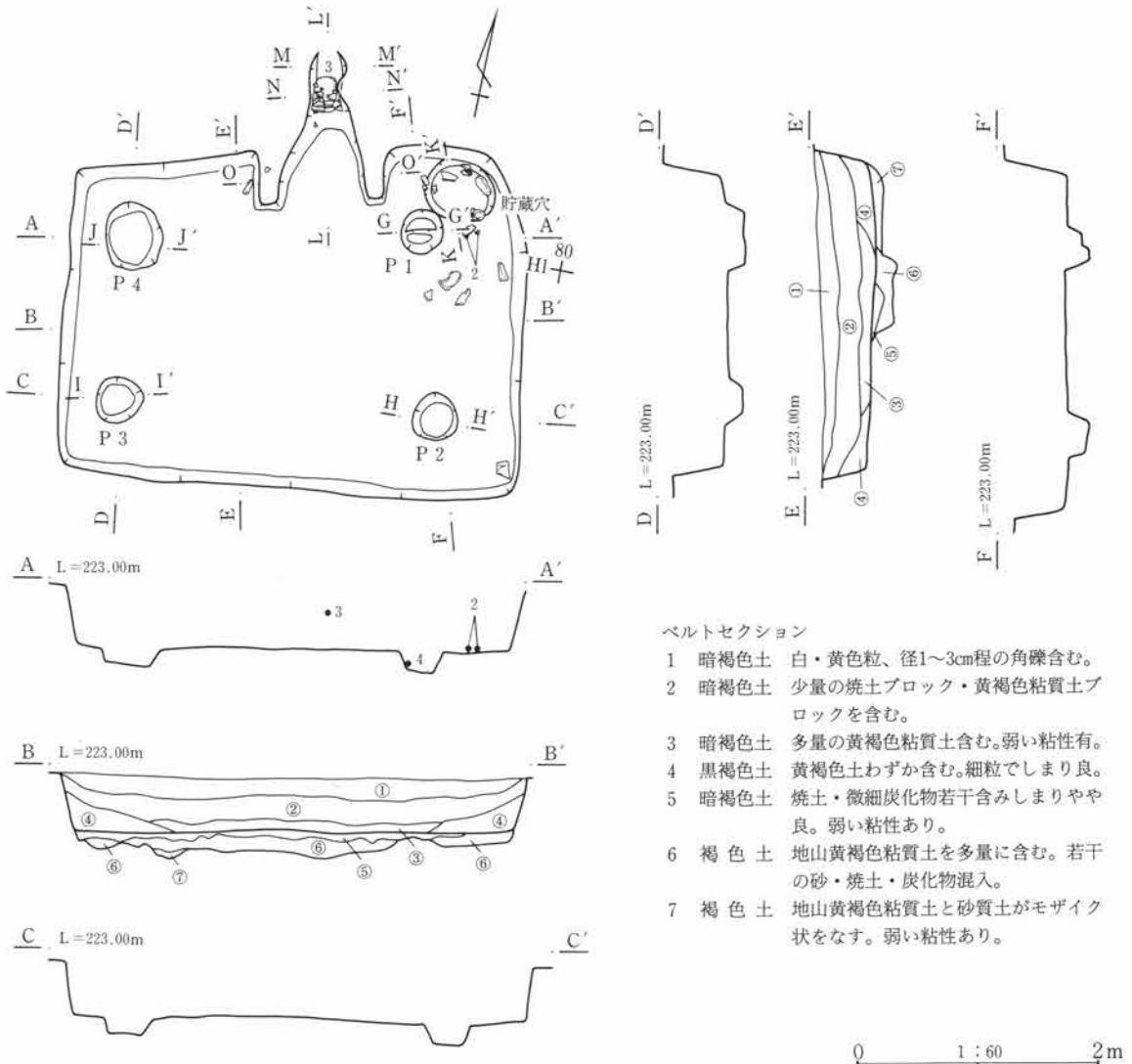
貯蔵穴 住居北東隅に所在。周溝 なし。

柱穴 4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置するが、いずれもかなり浅い。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、竈と貯蔵穴内に集中する。先述の土師器甕の他には、貯蔵穴内およびその周辺から土師器鉢(2)・甕(4)が出土。また、覆土中より須恵器蓋(1)が得られている。

掘り方 住居西壁際と竈前部を中心に、不規則な掘り方が築かれる。

調査所見 出土遺物より奈良時代の住居と推定される。



第419図 H-5号住居跡①



第420図 H-5号住居跡②、出土遺物実測図

H-5号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法 量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 蓋	覆土 天井~口 縁部破片	口 — 摘 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	ロクロ整形。天井部左回転の回転ヘラ削り。	
2	土師器 鉢	床密着 口~胴部 上位1/2	口(34.0) 底 — 高 —	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁は強く屈曲して外反。口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ後ヘラ磨き。	
3	土師器 甕	カマド煙 道 口~ 胴部中位	口 21.5 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕あり。口縁は「く」の字状に屈曲して外反。	内面に弱い煤付着
4	土師器 甕	掘り方内 口~胴部 上半1/2	口 21.0 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。口縁は「く」の字状に屈曲して外反。	内面に弱い煤付着

第3章 検出された遺構と遺物

H-6号住居跡 (PL63・150)

位置 HI-80・81グリッド 主軸方位 N-5°-W 残存壁高 0.12m

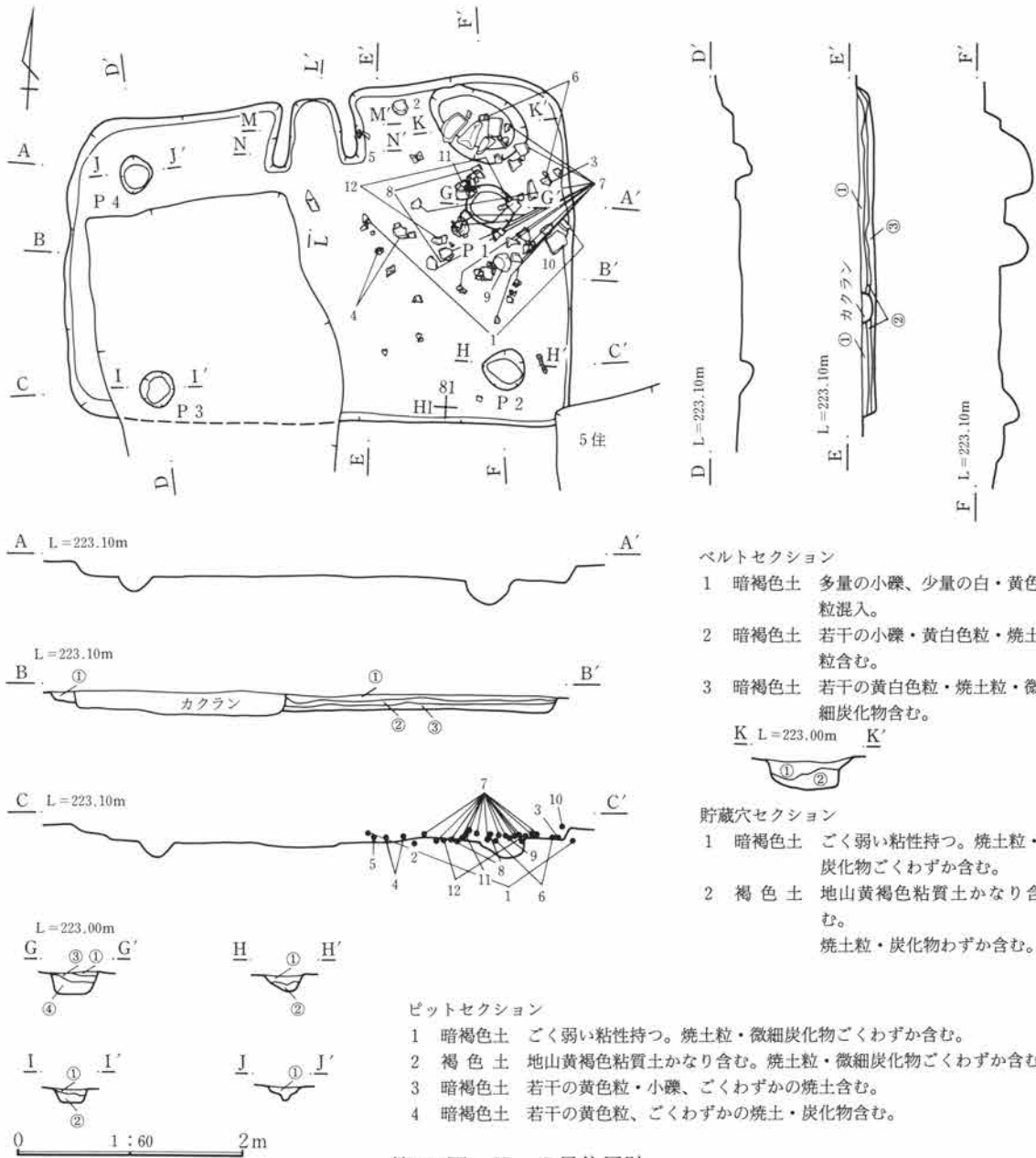
重複 H-5住にわずかに切られる。

規模と形状 長辺4.52m・短辺3.03mの横長の長方形。西壁に比べ東壁がやや長い。上面をかなり削平されており、壁の残存状況は悪い。また住居西半では、近年の攪乱によってかなりの部分で床面が失われている。竈は北側に築かれる。

床面 地山黄褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁中央に所在。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅50cm・燃焼部長59cm。煙道は削平され破壊されている。

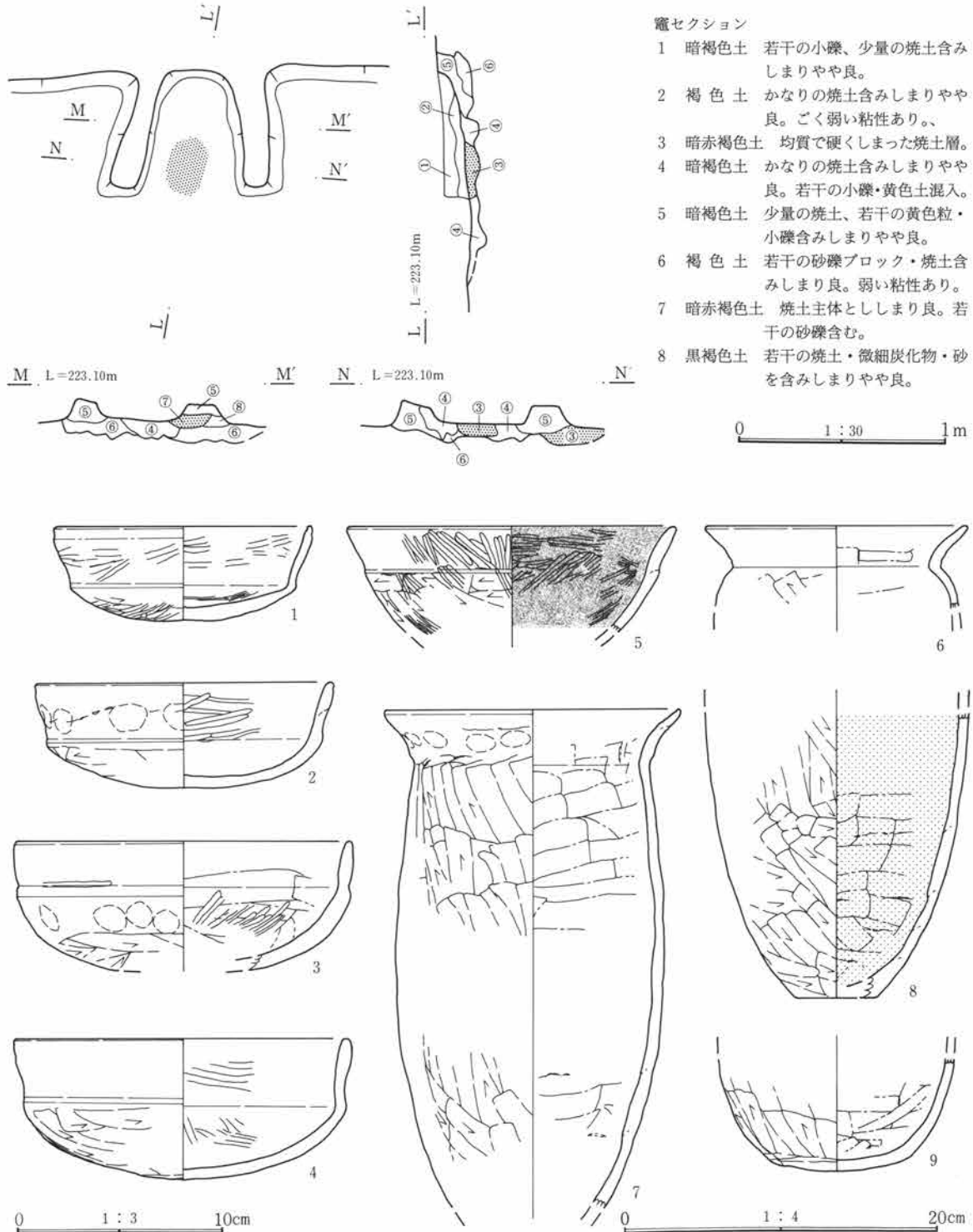
貯蔵穴 住居北東隅に所在。平面形状は楕円形を呈する。周溝 なし。



第421図 H-6号住居跡

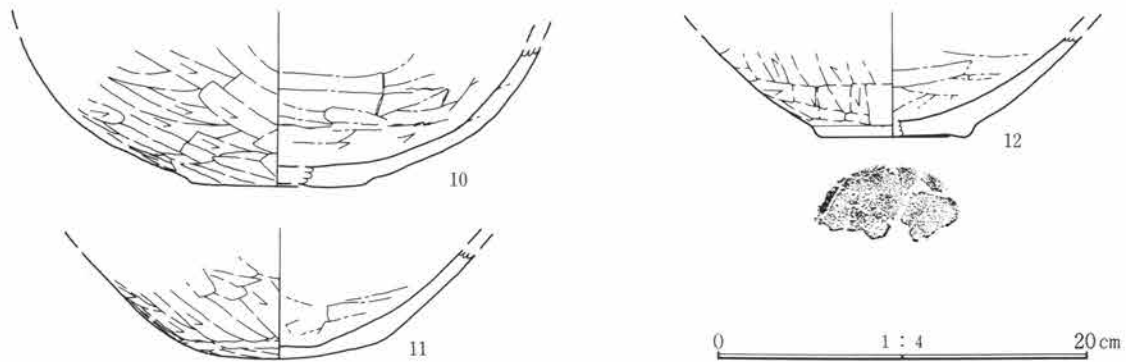
柱穴 4基の小ピット検出。北東隅のP1と南西隅のP3が若干南にずれる。いずれのピットもかなり浅い。
 出土遺物 住居の上部大半が削平され、西半も攪乱によって失われている割に、遺物量は多い。いずれも床面近くからの出土である。主な器種は、土師器坏(1~4)・鉢(5)・小型甕(6)・甕(7~12)などがある。
 掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、古墳時代後期の住居と推定される。



第422図 H-6号住居跡竈、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第423図 H-6号住居出土遺物実測図②

H-6号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/3	口(12.1) 底— 高 4.4	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
2	土師器 坏	床密着 3/5	口(14.1) 底— 高 4.9	①細砂(ごくまれに小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、接合痕・指頭圧痕あり。体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
3	土師器 坏	+6cm 1/4	口(16.0) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面上位横ナデ、指頭圧痕あり、以下ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
4	土師器 坏	+3cm 3/5	口 15.9 底— 高 6.7	①砂粒含む ②良好 ③橙色	かなり大型の坏。口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	
5	土師器 鉢	床密着 口～胴部 上位1/4	口(20.7) 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き。胴部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面横ナデ後ヘラ磨き。	内面黒色処理
6	土師器 小型甕	+2cm 口縁部破片	口(16.6) 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
7	土師器 甕	床密着 口～胴部	口(18.8) 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕あり。	
8	土師器 甕	床密着 胴下半～ 底部1/4	口— 底(5.2) 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕あり。	内面煤付着 底部木葉痕
9	土師器 小型甕	床密着 胴下位～ 底部	口— 底 8.9 高—	①砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。	
10	土師器 甕	+5cm 胴部下位 ～底部	口— 底(9.3) 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、接合痕あり。	
11	土師器 甕	+4cm 底部	口— 底 10.9 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。	
12	土師器 甕	+2cm 胴下位～ 底部1/2	口— 底(7.8) 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい褐色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	底部木葉痕

H-7号住居跡 (PL64・151)

位置 Hj-81・82グリッド 主軸方位 N-10°-E 残存壁高 0.22m 重複 なし

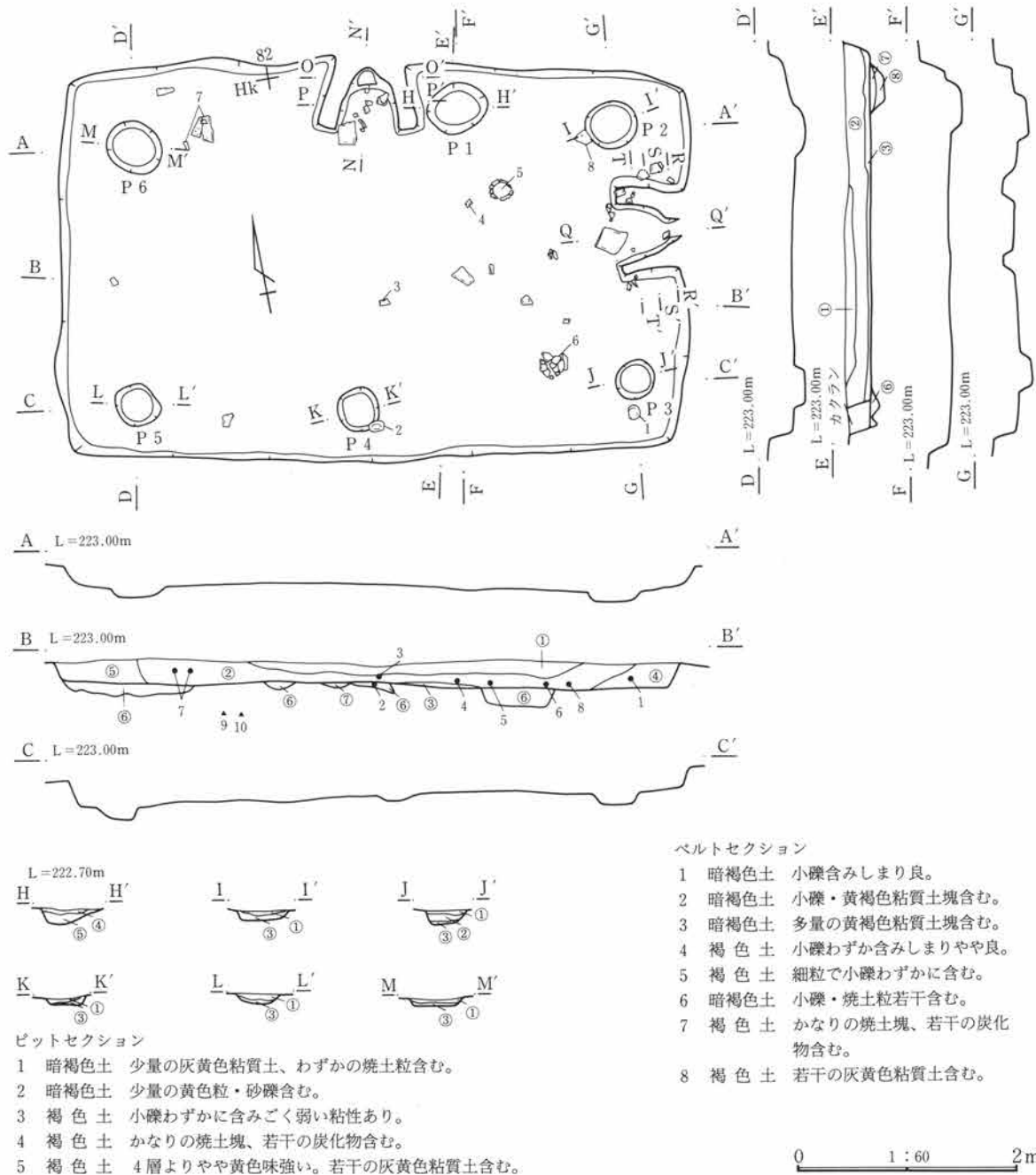
規模と形状 長辺5.70m・短辺3.54mの横長の長方形。周壁は直進し、線形の乱れは小さい。竈は北側と東側に各1基築かれている。

床面 一部床下に土坑などがみられるが、大半は地山の小礫混じりの褐色土を掘り込んで平坦な床面を形成。特に貼り床などはみられない。

竈 北側と東側に各1基築かれる。北側の竈No.1は北壁のほぼ中央に所在。袖が住居内に作り出される形状をとる。焚口幅56cm・燃烧部長59cm。煙道は削平されている。東側の竈No.2は東壁の中央よりもやや北側に所在。やはり袖が住居内に作られている。焚口幅51cm・燃烧部長63cm。煙道は削平されている。

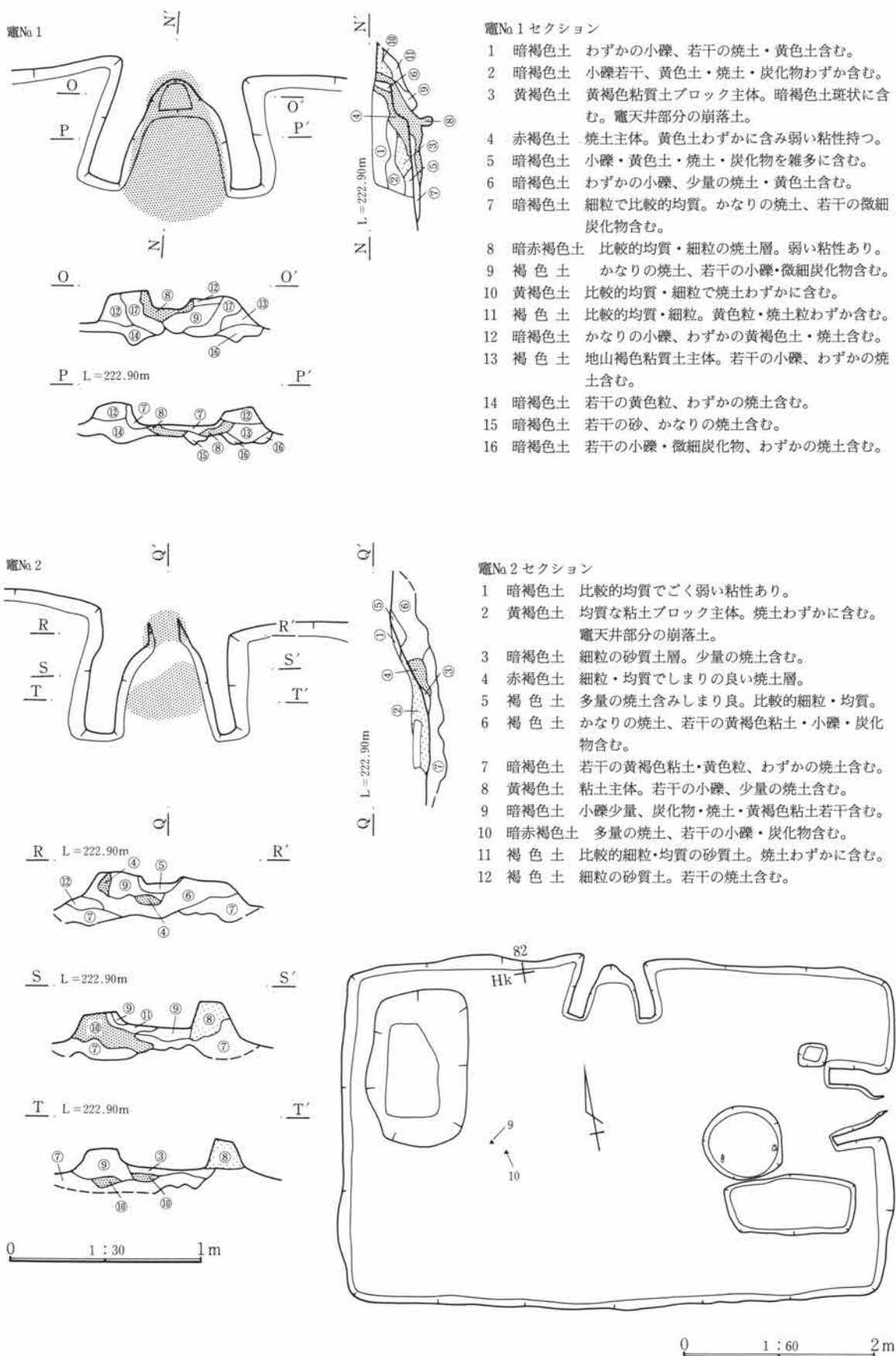
貯蔵穴 なし。 **周溝** なし。

柱穴 北壁・南壁に沿って6基の小ピット検出。東西のピットはほぼ対称する位置にあるが、中央の2基はかなりずれている。竈No.1の東脇にある1基は、貯蔵穴の可能性もある。



第424図 H-7号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物

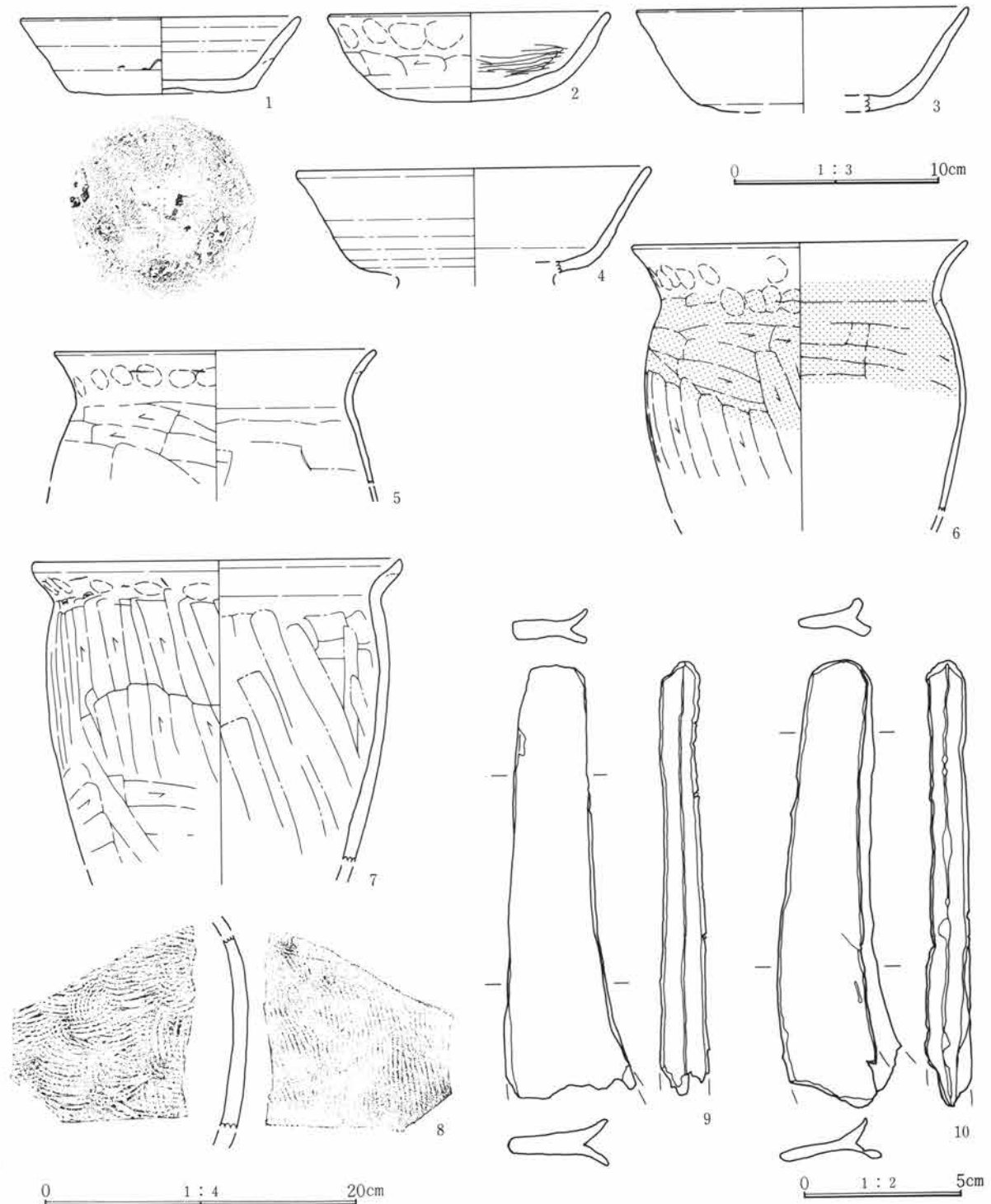


第425図 H-7号住居跡②

出土遺物 遺物量は少ないが、比較的大きな破片が床面近くから出土している。主な器種は、土師器杯(2・3)・甕(5～7)、須恵器杯(1)・埴(4)・甕(8)のほか、床下より鉄製の鋤先(9・10)が出土している。

掘り方 床下より3基の土坑と1基の小ピット検出。

調査所見 竈No1と2は、大きさ・形状ともに良く類似し、住居廃絶以前に破壊された痕跡はみられない。このことから、この住居では2基の竈が同時に存在・使用されていたものと推測される。住居の時期は、出土遺物より奈良時代のものとわかる。



第426図 H-7号住居出土遺物実測図

第3章 検出された遺構と遺物

H-7号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	須恵器 坏	+11cm 1/5	口 13.5 底 9.1 高 3.7	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り。	底部外面「上」の刻字あり		
2	土師器 坏	床密着 ほぼ完形	口 13.5 底 9.0 高 4.2	①細砂含む ②良好 ③にぶい褐色	口縁部外面横ナデ、指頭圧痕あり。体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。			
3	土師器 坏	+8cm 1/4	口(16.0) 底(10.0) 高 4.9	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面の摩滅激しい		
4	須恵器 塊	+5cm 口～体部 破片	口(17.0) 底 — 高 —	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部切り離し後高台貼付。高台部欠損。			
5	土師器 甕	+7cm 口～胴部 上位	口 20.8 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。			
6	土師器 甕	+2cm 口～胴部 上半	口 21.7 底 — 高 —	①微砂粒含む ②良好 ③明褐色	口縁部内外面横ナデ、外面に指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	胴部内外面上位に煤付着		
7	土師器 甕	+14cm 口～胴部 上半1/3	口(23.8) 底 — 高 —	①砂礫含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕・指頭圧痕。胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。			
8	須恵器 甕	+9cm 胴部破片	口 — 底 — 高 —	①微砂粒・黒色粒子 含む ②堅緻 ③黄灰色	外面上位に浅い沈線一条、以下平行叩き目。内面青海波文。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
9	鋤先	掘り方内	(13.9)	(4.3)	(1.6)	(57.4)	1/3	鋤先の基部破片。断面「V」字状。錆化顕著。
10	鋤先	掘り方内	(14.3)	(3.8)	(1.4)	(59.8)	1/3	鋤先の基部破片。断面「V」字状。No.9の鋤先と形状類似しており、同一個体と思われる。

H-8号住居跡 (PL64・151)

位置 Hj-82・83グリッド 主軸方位 N-5°-E 残存壁高 0.12m

重複 H-9住をわずかに切る。

規模と形状 近年の攪乱によって住居南端を破壊されているため、住居形状は推定である。それによると、長辺3.68m・短辺が推定で2.73mの横長の長方形である。上面をかなり削平されているために壁の残存状況は悪い。竈は北側に築かれる。

床面 地山の褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面形成。南端部は攪乱によって上面を若干削られている。

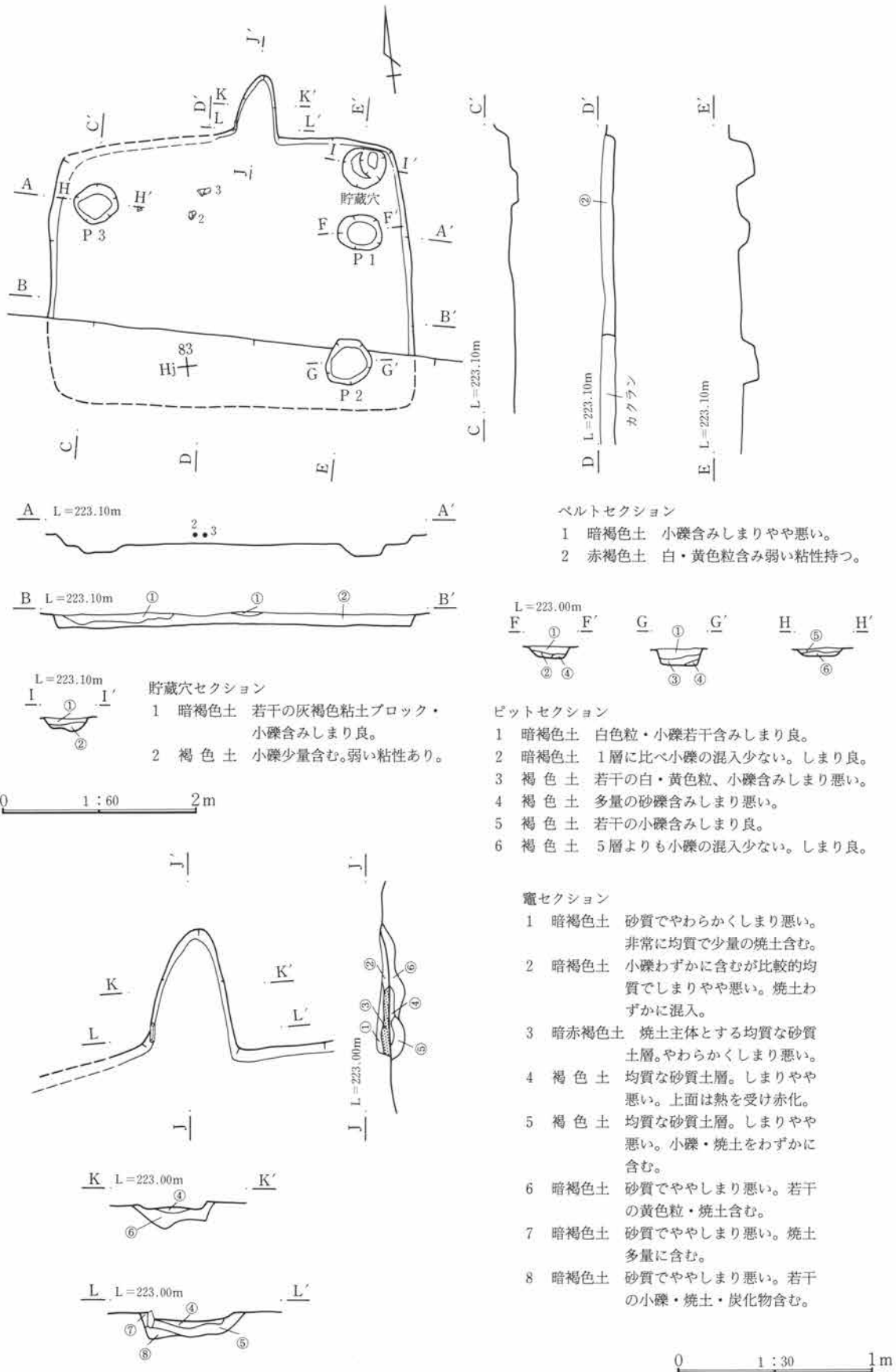
竈 住居北壁の中央よりもわずかに東側に所在。燃焼部は住居域外に張り出し、袖は作られない。焚口幅40cm・燃焼部長64cm。燃焼部左壁の先端部には、板状の砂岩が立てられている。煙道は削平されている。

貯蔵穴 住居北東隅に所在。規模は小さい。周溝 なし。

柱穴 3基の小ピット検出。南西隅のピットは攪乱によって破壊されたものと推測される。ほぼ対角線上に乗るが、P1は貯蔵穴との位置関係からか、やや南側にずれている。またP3は他に比べて浅く、柱穴としての機能があったかどうかは疑問。

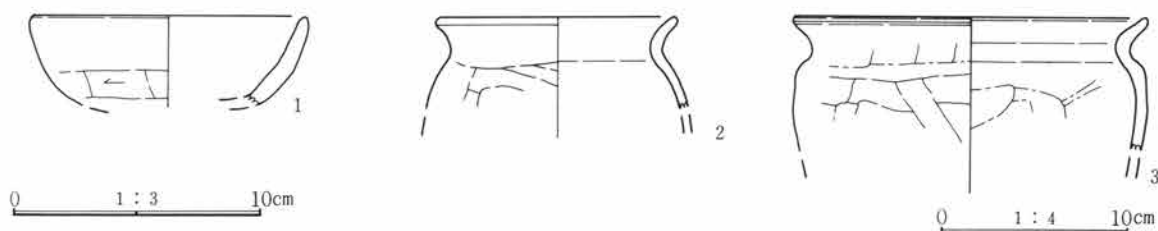
出土遺物 遺物量は非常に少なく、わずかに数点の土器破片が出土したのみ。床面より若干高い位置から土師器小型甕(2)・甕(3)が出土。他に覆土中より土師器坏(1)が得られている。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物と竈の形状より、奈良時代の住居と推定される。



第427図 H-8号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第428図 H-8号住居出土遺物実測図

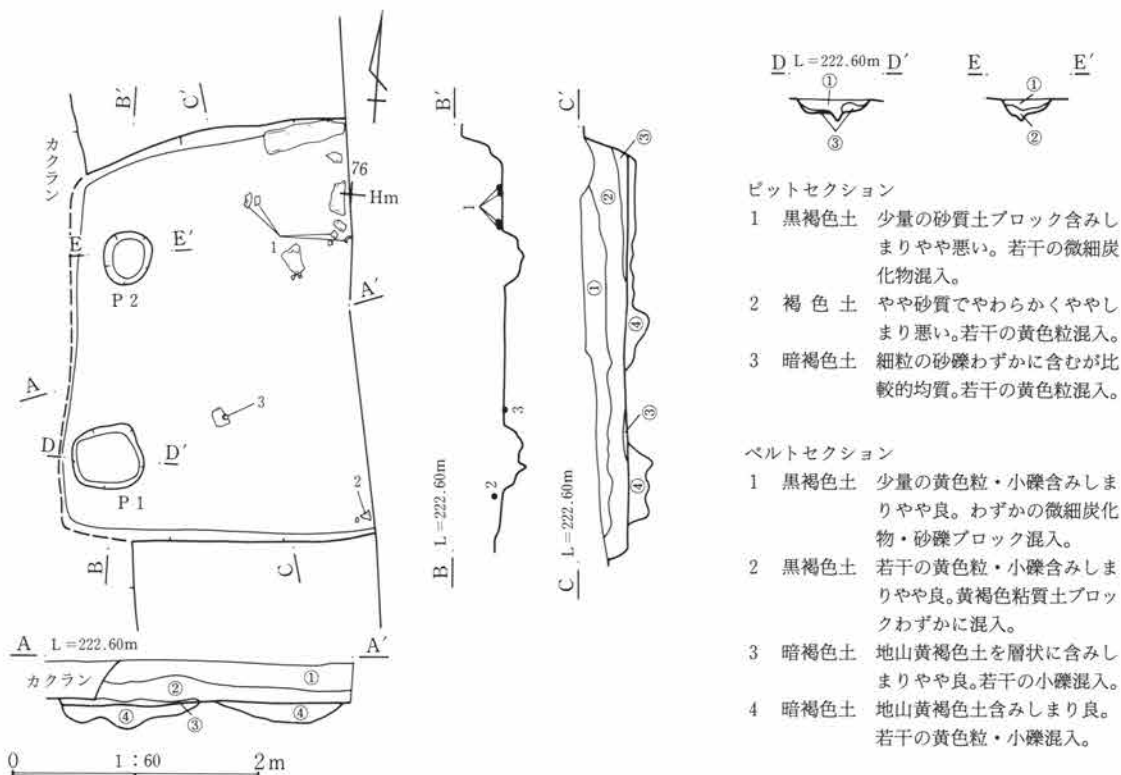
H-8号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	覆土 口~体部 1/6	口(10.8) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	土師器 小型甕	+11cm 口縁1/4	口(13.5) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
3	土師器 甕	+10cm 口~胴部 上位1/6	口(19.0) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③淡黄色	口縁部内外面横ナデ。口縁部外面に段。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	

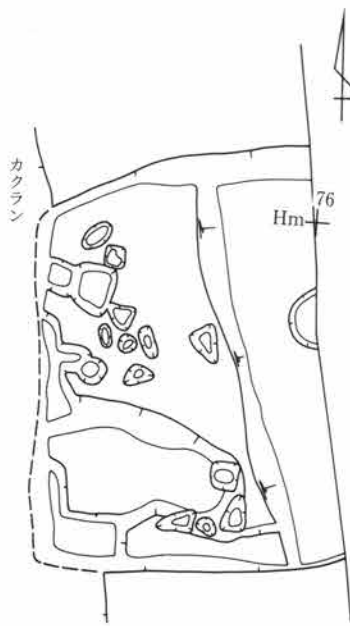
H-10号住居跡 (PL64・151)

位置 H1-76グリッド 主軸方位 N-87°-E 残存壁高 0.33m 重複 なし

規模と形状 住居の半分近くが調査区域外となるため、全体の形状は不明。長辺は3.37mであるが、短辺は計測不能。また西壁は、試掘調査時のトレンチによって、床面近くまで削られている。竈は北壁、もしくは東壁にあるものと推測されるが、調査区域外となるため確認できなかった。



第429図 H-10号住居跡



床面 住居のほぼ全域に不規則な掘り方がみられ、地山黄褐色土を含む土を埋めて平坦な床面を構築。貼り床などはみられない。
竈 検出できず住居東壁に所在するものと考えられるが、調査区域外のため、確認できなかった。

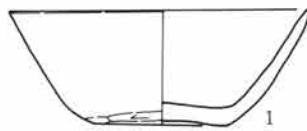
貯蔵穴 確認できず。 **周溝** なし。

柱穴 西壁よりで2基の小ピット検出。他は調査区外のため確認できなかった。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、住居内に散在。床面近くより土師器坏(1・2)、須恵器蓋(3)が出土している。

掘り方 住居全域に不規則な掘り方みられる。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



0 1:3 10cm

第430図 H-10号住居掘り方、出土遺物実測図

H-10号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+2cm ほぼ完形	口 12.0 底 5.3 高 4.3	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	器表面かなり摩滅
2	土師器 坏	+10cm 1/4	口(12.4) 底(9.2) 高 4.0	①細砂含む ②良好 ③黄橙色	口縁部外面横ナデ、体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
3	須恵器 蓋	+5cm つまみ部	口 — 摘 4.2 高 —	①微砂粒・黒色微粒 子含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。つまみ貼付。	器表面に多数のガラス質の斑点

H-11号住居跡 (PL62・64・151)

位置 Hk・H1-77グリッド **主軸方位** N-18°-W **残存壁高** 0.35m **重複** H-2住に切られる。

規模と形状 長辺5.90m・短辺3.81mの横長の長方形。北東隅がかなり外側に広がり、形状が乱れている。そのほかの周壁はほぼ直進し、線形の乱れは少ない。

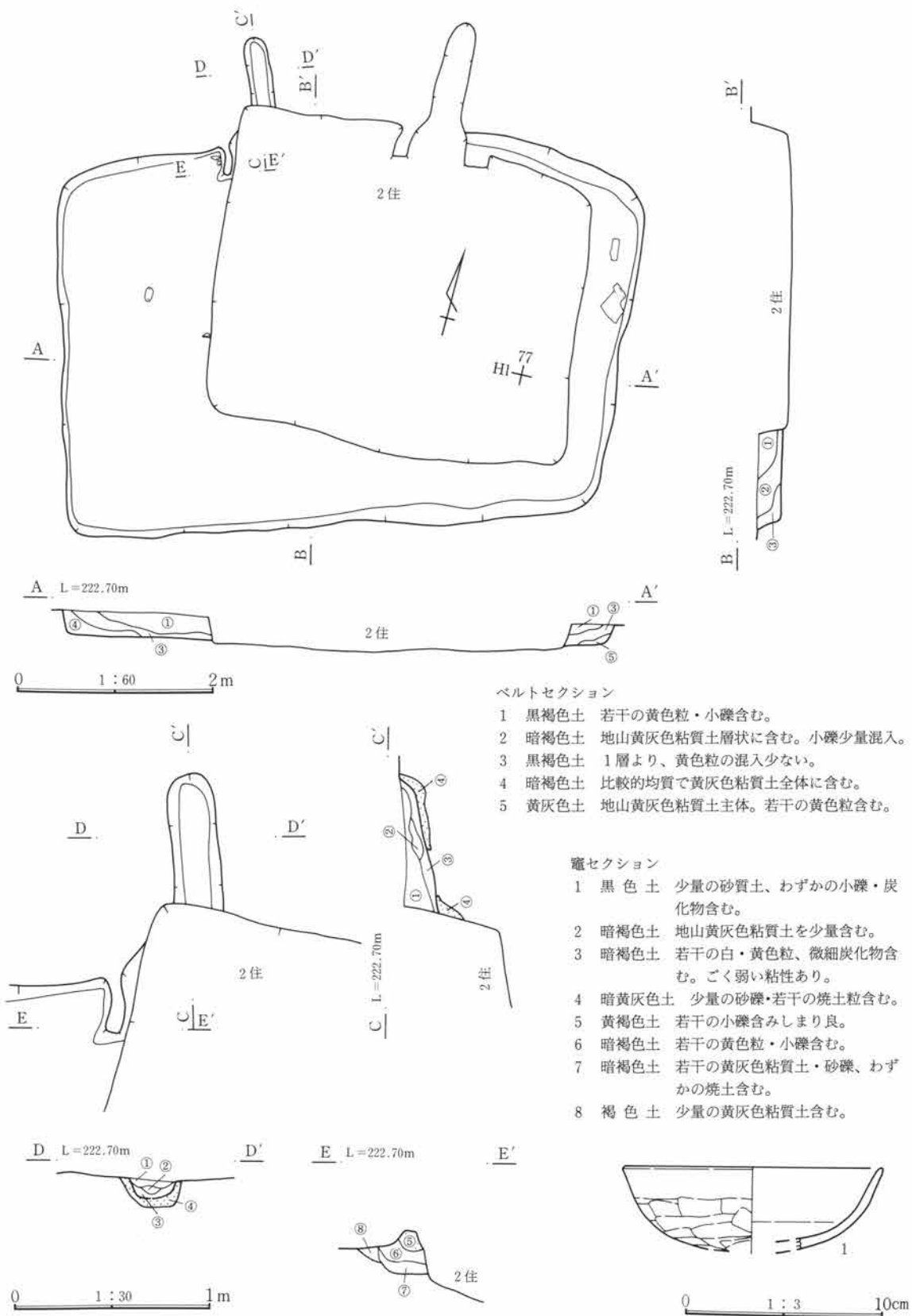
床面 地山黄灰色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居北壁の中央よりもやや西側に所在。重複する他の住居によって破壊され、左袖と煙道部分が残るのみである。煙道の現存長は67cm。

貯蔵穴 なし。重複する住居によって破壊された可能性あり。 **周溝** なし。 **柱穴** なし。

出土遺物 遺物量は非常に少なく、竈付近からわずかに数点の土器片が出土したのみ。器種も土師器坏(1)

だけである。掘り方 なし。調査所見 出土遺物より古墳時代後期の住居と推測される。



第431図 H-11号住居跡、出土遺物実測図

H-11号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	覆土 1/4	口(12.9) 底— 高—	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナ デ。	

H-12号住居跡 (PL64・65・151・152)

位置 Hi-75グリッド 軸方位 N-11°-W 残存壁高 0.47m 重複 なし

規模と形状 住居東半が調査区外にあり全体の形状不明。現存で長辺2.84m・短辺3.48m。竈は北側に構築。

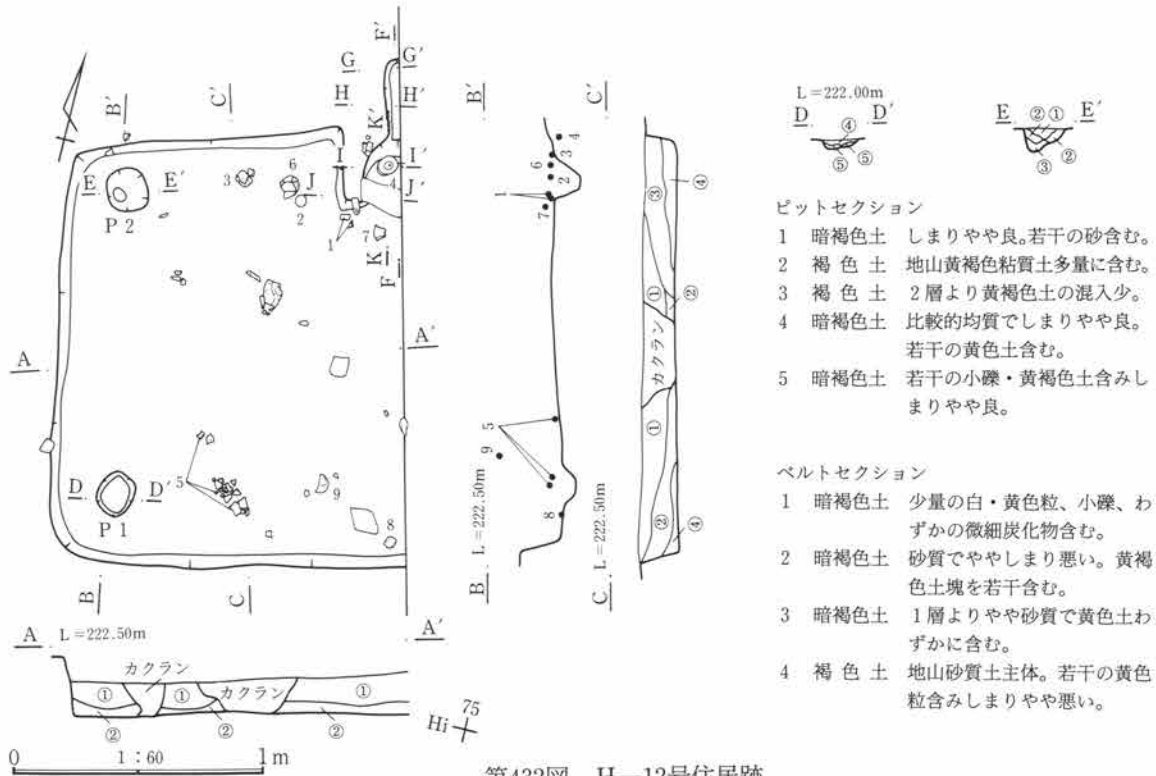
床面 地山暗褐色砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居北壁に所在。東半は調査区外にあり検出できなかった。袖が住居内に作り出される。焚口幅は現存で27cm・燃烧部長53cm。左袖先端の燃烧部側に、板状の砂岩が袖石として据えられ、その上には、天井石として板状の砂岩が置かれている。燃烧部内には、土師器甕(4)が逆位で床面直上に置かれていた。支脚の用途に使用されたものか。煙道は下半部が残存。煙道長64cm。貯蔵穴 検出できず。周溝 なし。

柱穴 2基の小ピット検出。北西・南西隅に所在し、かなり浅いが、支柱穴であったものと推測される。

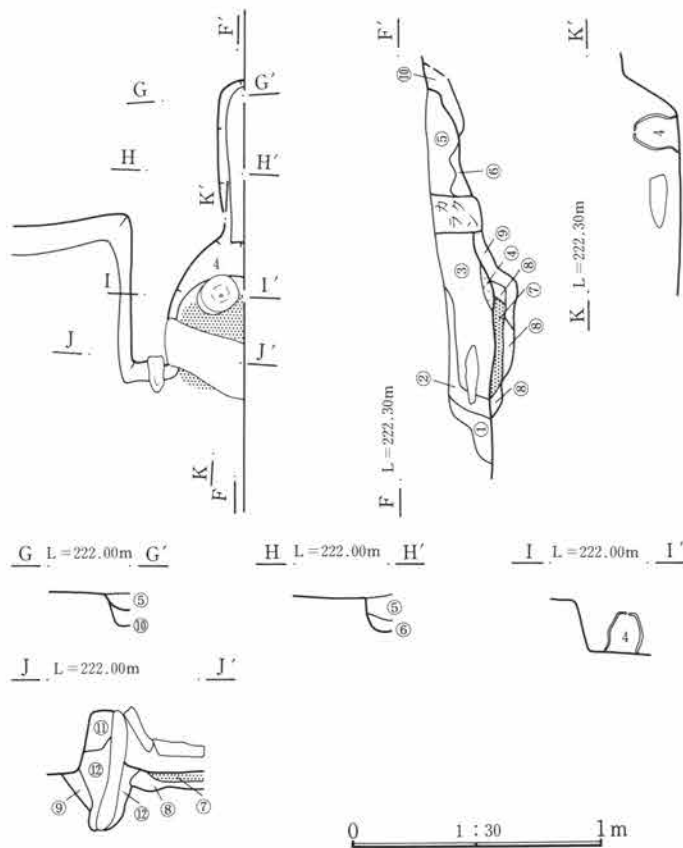
出土遺物 遺物量はあまり多くないが、完形近くまで復元可能なものが多い。先述の甕の他に、土師器坏(1)坏を転用した小型の甕(3)・小型甕(5・6)、須恵器蓋(2)がある。また、覆土上位より須恵器壺の底部(9)が出土している。この他に、他の遺物より新しい時期の土師器坏が2点(7・8)出土しているが、出土位置からは明確に他の遺物と区分することはできなかった。掘り方 なし。

調査所見 遺物に2時期見られることから、調査時に確認できなかったが、他の遺構と重複しているものと思われる。当住居の時期は、竈内の甕から、古墳時代後期と推定される。重複する遺構は、土師器坏(7・8)から奈良時代のものと考えられる。



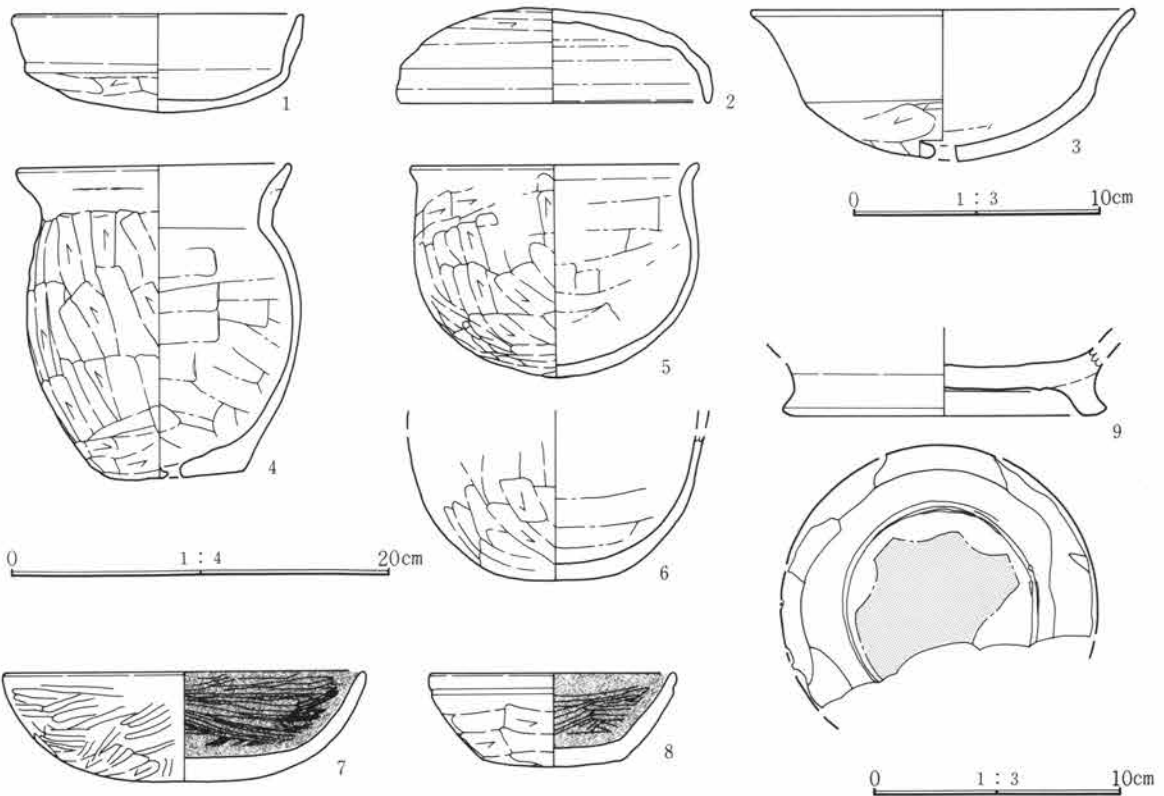
第432図 H-12号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



竈セクション

- 1 暗褐色土 砂礫ほとんど含まず比較的均質。若干の焼土・炭化物含む。
- 2 黒褐色土 やや砂質でやわらかくしまりやや悪い。わずかの焼土含む。
- 3 暗褐色土 地山黄褐色粘質土をかなり含みしまりやや悪い。若干の焼土混入。
- 4 黄褐色土 地山黄褐色粘質土を主体とする。しまりやや良。粘性あり。
- 5 暗褐色土 比較的均質でしまりやや良。ごく弱い粘性あり。若干の焼土含む。
- 6 褐色土 細粒・均質でしまり良。弱い粘性あり。焼土わずかに含む。
- 7 暗赤褐色土 均質な焼土層。砂質でやわらかくしまり悪い。
- 8 暗褐色土 砂質でやわらかくしまり悪い。少量の焼土含む。
- 9 暗褐色土 砂質で比較的均質。しまりやや良。少量の黄色粒、わずかの炭化物含む。
- 10 暗褐色土 細粒の砂質土でしまりやや良。若干の黄色粒含む。
- 11 暗褐色土 しまりやや良。少量の黄褐色土、わずかの焼土含む。
- 12 暗褐色土 しまりやや良。若干の黄色粒、わずかの焼土含む。

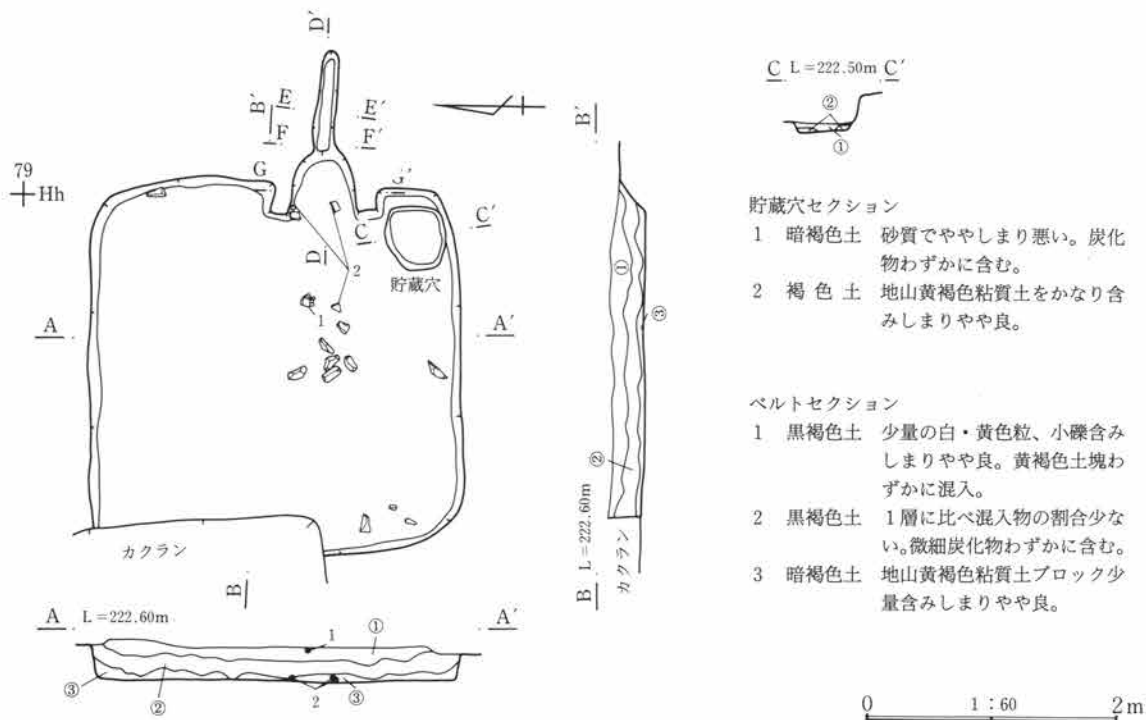


第433図 H-12号住居竈、出土遺物実測図

H-12号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	床密着 1/5	口 11.3 底 — 高 3.9	①細砂・赤褐色粒子 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
2	須恵器 蓋	床密着 完形	口 12.2 底 — 高 3.7	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。天井部右回転の回転ヘラ削り。	
3	土師器 坏	+2cm 1/2	口(15.1) 底 — 高 5.9	①砂粒(まれに小礫) 含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	底部に焼成後の穿孔、甑への転用か
4	土師器 甕	カマド内 ほぼ完形	口 14.7 底 7.4 高 16.8	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。底部に焼成後の穿孔。	
5	土師器 小型甕	+4cm 2/3	口(15.1) 底 — 高 11.2	①均質な細砂含む ②良好 ③灰白色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
6	土師器 小型甕	+5cm 胴部下半 ~底部	口 — 底 7.9 高 —	①砂粒含む ②良好 ③橙色	胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。	
7	土師器 坏	+8cm 1/4	口(14.4) 底 — 高 4.2	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ後ヘラ磨き、体部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面横ナデ後ヘラ磨き。	内面黒色処理
8	土師器 坏	床密着 口縁一部 欠	口 9.6 底 5.5 高 3.7	①細砂含む ②良好 ③浅黄橙色	口縁部外面横ナデ、下位に沈線一条めぐる。体~底部外面ヘラ削り。内面横ナデ後ヘラ磨き。	内面黒色処理
9	須恵器 壺	+47cm 底部	口 — 底(11.2) 高 —	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後高台貼付。	底部外面に弱い研磨面

H-13号住居跡 (PL65・152)



第434図 H-13号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

位置 Hg-78・79グリッド 主軸方位 N-90°-E 残存壁高 0.29m 重複 なし

規模と形状 平面形状はほぼ正方形であるが、長辺2.96m・短辺2.91mとわずかに横長である。北西隅は一部近年の攪乱によって破壊されている。周壁はほぼ直進するが、住居隅はやや丸みを帯びる。竈は東側に築かれる。

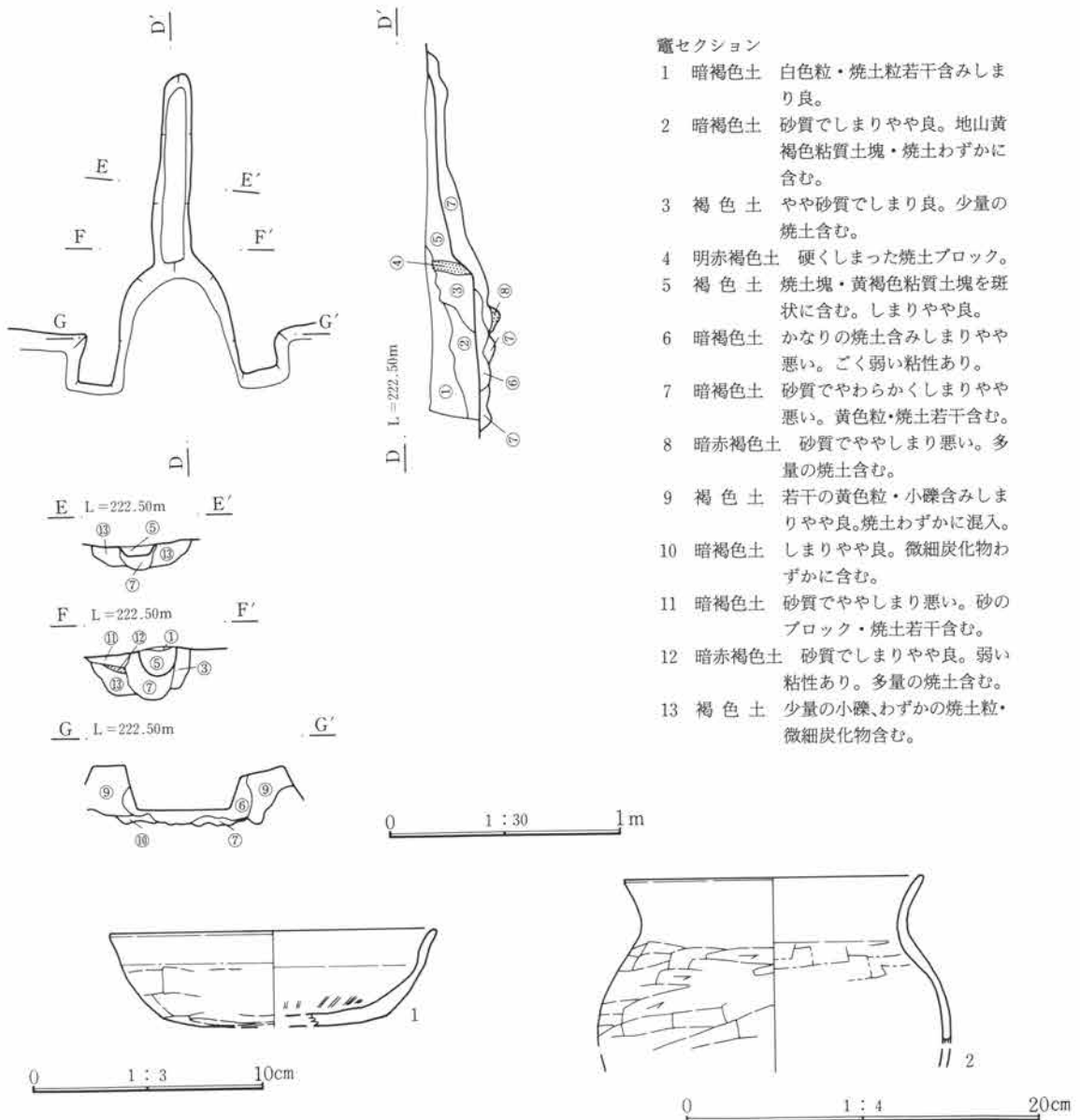
床面 地山の黄褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 住居東壁の中央よりもやや南側に所在。住居内に短い袖が作り出されるが、燃烧部は一部住居域外に張り出す。焚口幅53cm・燃烧部長55cm。煙道は下半部が残存している。煙道長79cm。

貯蔵穴 住居南東隅に所在。小規模で浅い貯蔵穴である。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 遺物量は非常に少ない。土器はわずかに数点が、住居の床面近くより散在して出土。主な器種には、土師器坏(1)・甕(2)がある。掘り方 なし。

調査所見 出土遺物と住居・竈形状より、奈良時代の住居と推定される。



第435図 H-13号住居竈、出土遺物実測図

H-13号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	土師器 坏	+24cm 3/5	口(13.8) 底(9.6) 高 4.0	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③にぶい橙色	体部中位で緩く屈曲し、口縁端部は外反する。口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ後放射状へラ磨き。	
2	土師器 壺	+2cm 口～胴部 上位1/3	口(17.1) 底 — 高 —	①均質な微砂粒含む ②良好 ③明赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面へラ削り、内面へラナデ。	

H-14号住居跡 (PL65)

位置 Hg-74・75グリッド 主軸方位 N-90°-E 残存壁高 0.15m 重複 なし

規模と形状 住居の東側が調査区外にあたるため、全体の形状は不明。竈も検出できなかったが、東側の調査区外にあるものと考えて、主軸方向を決定した。それによると長辺3.96m・短辺は現存で3.56mとなる。周壁はほぼ直進するが、西壁がやや外側に開いている。

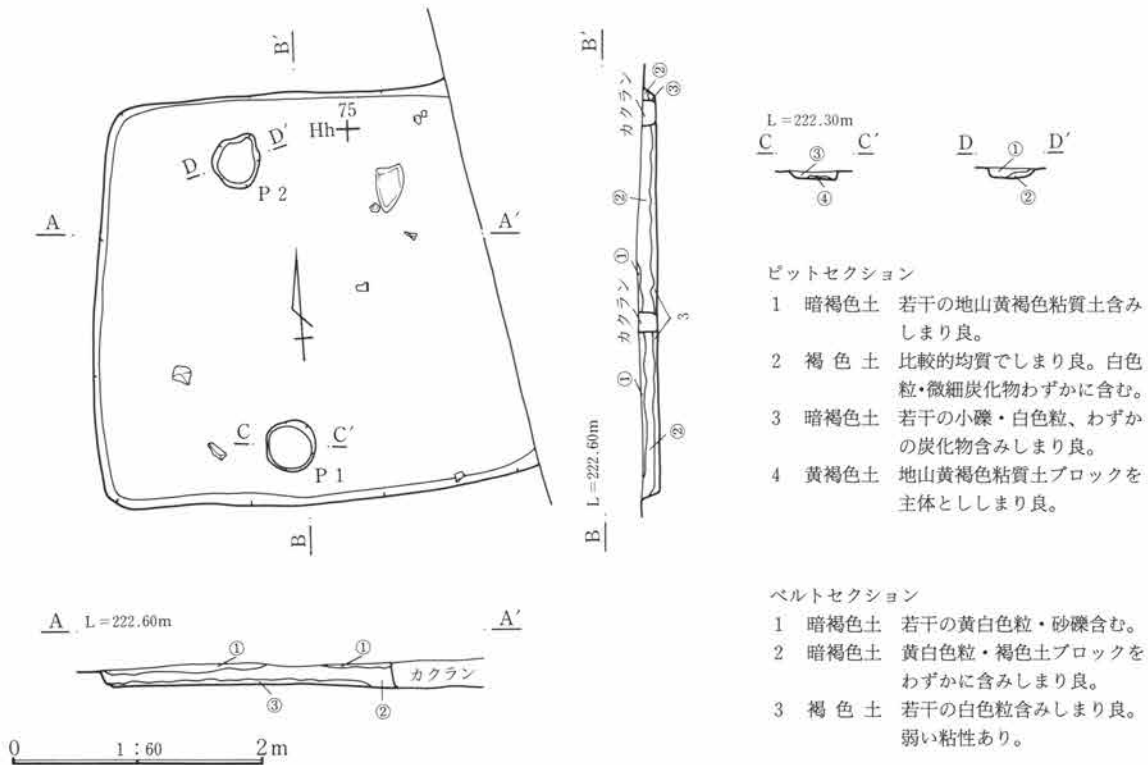
床面 地山黄褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

竈 検出できず。東側の調査区外に所在か。貯蔵穴 なし。周溝 なし。

柱穴 2基の小ピット検出。いずれも想定される対角線上からはずれており、かなり浅いことから柱穴ではないと考えられる。

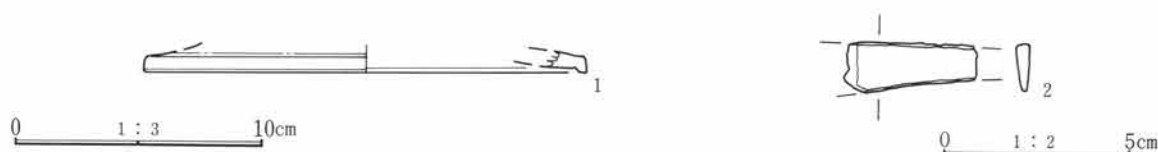
出土遺物 遺物量は非常に少ない。わずかに数点の土器片があるのみである。覆土中より須恵器蓋(1)・刀子破片(2)が出土している。掘り方 なし。

調査所見 遺物が少なく、竈も検出できなかったことから、住居の時期決定は困難である。須恵器蓋の年代から考えて奈良時代の可能性が高い。



第436図 H-14号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第437図 H-14号住居出土遺物実測図

H-14号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 蓋	覆土 口縁部破 片	口(17.6) 摘— 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
2	刀子	覆土	(3.6)	(1.3)	0.4	(30.3)	破片	刀子破片。両端を欠損。かなり錆化が進んでいる。

H-15号住居跡 (P L 65・152)

位置 He-75グリッド 主軸方位 N-1°-E 残存壁高 0.42m 重複 H-17住に切られる。

規模と形状 平面形状はほぼ正方形だが、長辺4.81m・短辺4.57mとやや長辺が長い。南西隅を重複するH-17号住居に破壊されている。周壁は、一部で若干外側に膨らんだり蛇行し、線形の乱れがみられる。竈は北側に築かれる。

床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床などはみられない。

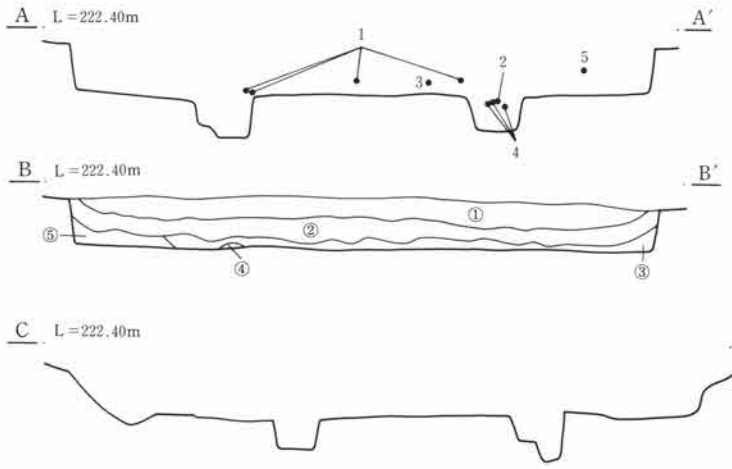
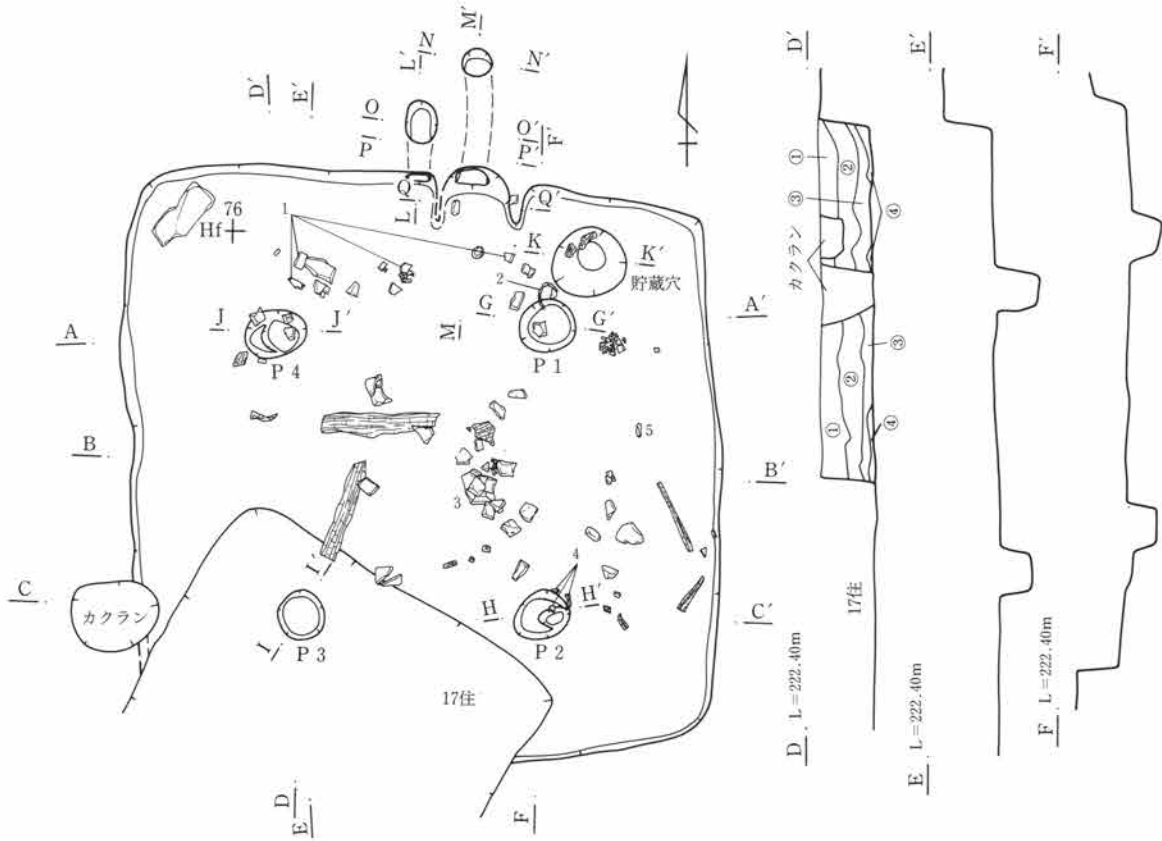
竈 住居北壁に新旧2基の竈がみられる。原形をとどめている新しい竈No.1は、北壁の中央よりもやや東側に位置している。短い袖が住居内に作り出される形態を持つが、調査時に竈の新旧を誤認したため、左袖を破壊してしまった。焚口幅は推定で56cm、燃焼部長49cm。燃焼部の中央よりも左側に、角礫状の砂岩が支脚として据えられていた。くりぬき式の煙道の残存状況は良好で、天井部も残っていた。煙道長92cm。旧竈No.2は竈No.1の西側、北壁のほぼ中央に位置している。竈No.1の構築前に廃棄・破壊され、煙道部分が残っているのみである。煙道はくりぬき式で、天井部分も残存している。煙道長は59cmで、竈No.1に比較してかなり短い。

貯蔵穴 住居北東隅近くに所在。形状はほぼ円形。周溝 なし。

柱穴 形状・大きさともに類似した4基の小ピット検出。ほぼ対角線上に位置する。

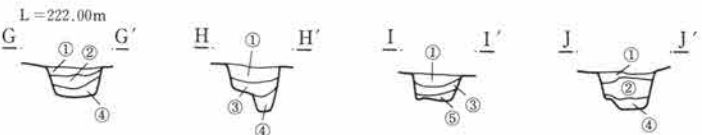
出土遺物 住居の床面近くよりかなりの量の炭化材が出土している。遺物量はあまり多くなく、住居内に散在する。一部床面直上に位置するものもあるが、大半は炭化材よりも上部から出土しており、住居の廃絶・焼失後に埋没したものと推定される。主な器種は、土師器鉢(1)・小型甕(2)・甕(3・4)がある。他に覆土中位より、鉄製の鋤先の破片が1点(5)出土している。掘り方 なし。

調査所見 床面上より炭化材が出土していることから、焼失住居とわかる。ただし、全体に遺物が少なく、出土した遺物も炭化材よりも上位に位置していることから、住居廃絶後の焼失と推測できる。また、新旧2期の竈があるが、新しい竈No.1に比べ、古い竈No.2の煙道の立ち上がりがかなり内側であり、竈の作り替えが、住居の拡張に伴うものであった可能性が考えられる。住居の時期は出土遺物より、古墳時代後期と推定される。



ベルトセクション

- 1 暗褐色土 若干の小礫、少量の白・黄色粒を含みしまり良。微細炭化物わずかに混入。
- 2 暗褐色土 少量の黄褐色粘質土、若干の白・黄色粒含みしまりやや良。
- 3 暗褐色土 若干の黄色粒・炭化物含みしまりやや良。
- 4 暗褐色土 かなりの炭化物・焼土含みしまりやや良。
- 5 褐色土 少量の黄褐色粘質土含みしまり良。



ピットセクション

- 1 褐色土 若干の黄色粒・焼土粒・炭化物含みしまり良。
- 2 褐色土 若干の黄色粒・焼土粒・微細炭化物含む。弱い粘性あり。
- 3 褐色土 若干の黄色粒・砂礫・焼土粒・微細炭化物含む。弱い粘性あり。
- 4 褐色土 比較的均質な粘質土。
- 5 褐色土 若干の黄色粒・砂礫・微細炭化物含む。弱い粘性あり。

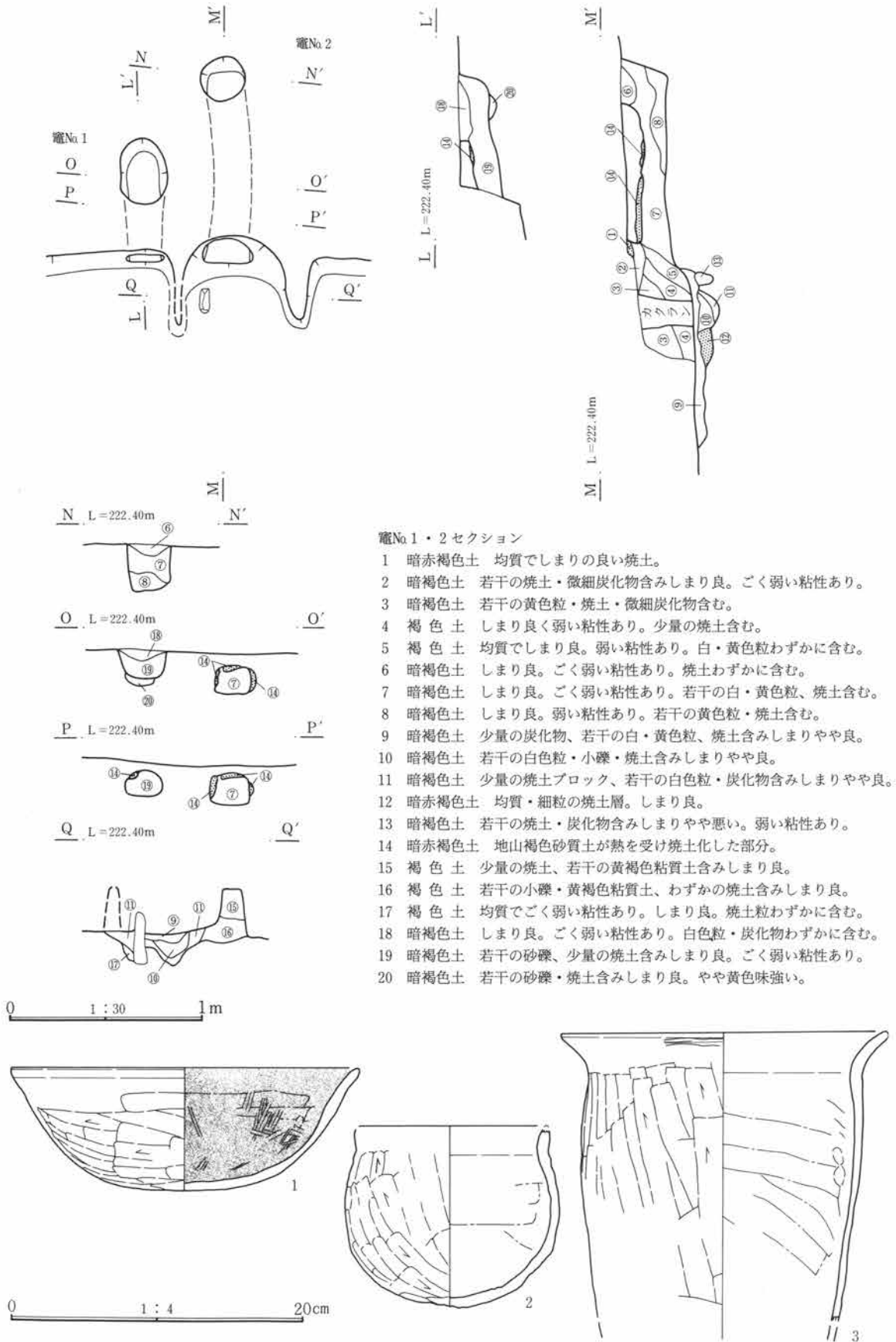
貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 多量の炭化物、若干の黄色粒含みしまり良。弱い粘性あり。
- 2 暗褐色土 1層に比べ炭化物・黄色粒の混入少なく粘性強い。
- 3 褐色土 若干の黄色粒含む。弱い粘性あり。
- 4 褐色土 比較的均質な粘質土。

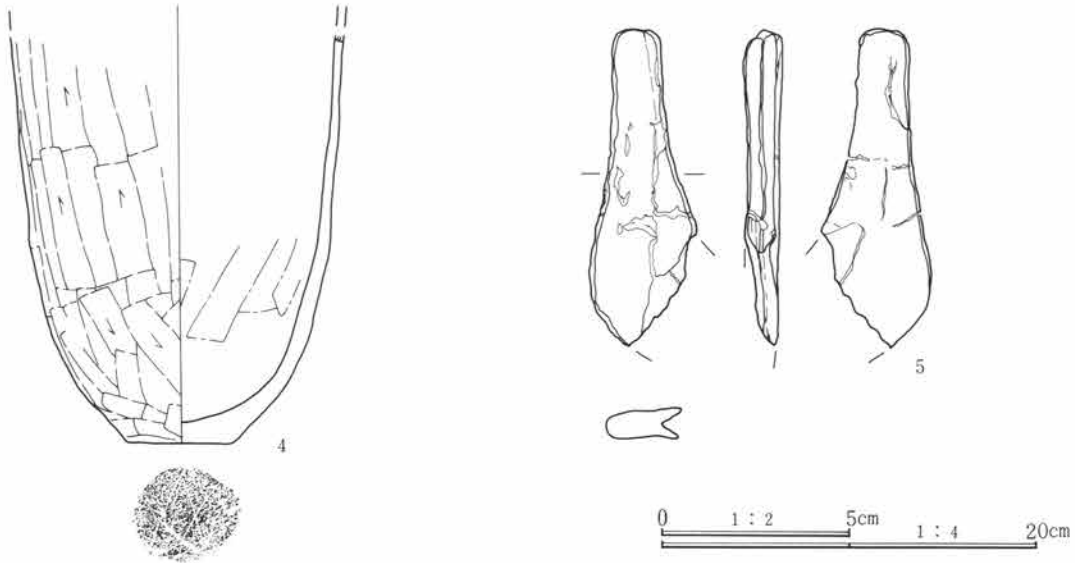
0 1:60 2m

第438図 H-15号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物



第439図 H-15号住居竈、出土遺物実測図①



第440図 H-15号住居出土遺物実測図②

H-15号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 鉢	+12cm 1/2	口(24.1) 底— 高 8.4	①砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ後ヘラ磨き。	内面黒色処理		
2	土師器 小型甕	床密着 2/3	口— 底— 高—	①多量の砂礫含む ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ。			
3	土師器 甕	床密着 口～胴部 上位	口 22.3 底— 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③橙色	口縁部内外面横ナデ。胴部外面ヘラ削り、内面横ナデ、指頭圧痕あり。			
4	土師器 甕	P 2 上面 胴下位～ 底部2/3	口— 底 5.6 高—	①粗砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色	胴部外面ヘラ削り、内面ナデ。	底部木葉痕		
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
5	鋤先	+28cm	(8.2)	(1.9)	(0.7)	(25.1)	1/2	小型の鋤先。断面「V」字状。錆化かなり進行。

H-16号住居跡 (PL66・152・153)

位置 Hh・Hi-79グリッド 主軸方位 N-130°-E 残存壁高 0.24m 重複 なし

規模と形状 平面形状はほぼ正方形だが、長辺3.12m・短辺3.28mとやや縦長である。周壁は若干外反し、四隅が丸みを帯びるなど形状もかなり乱れる。住居主軸は南東方向を指す。

床面 地山黄灰色砂質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

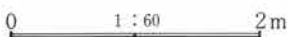
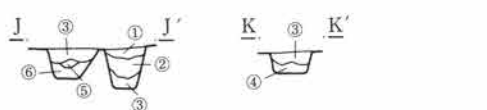
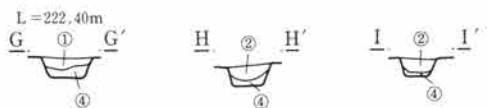
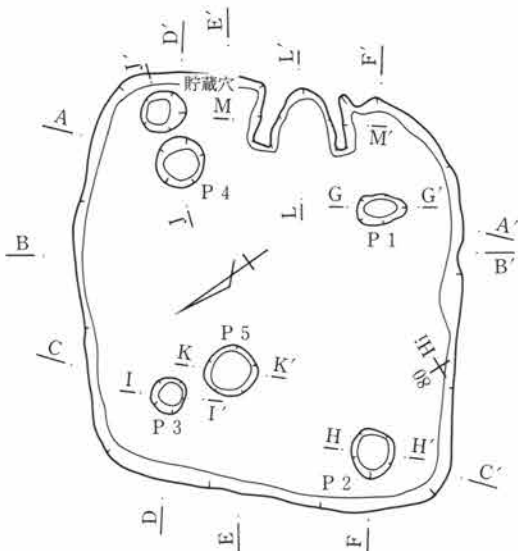
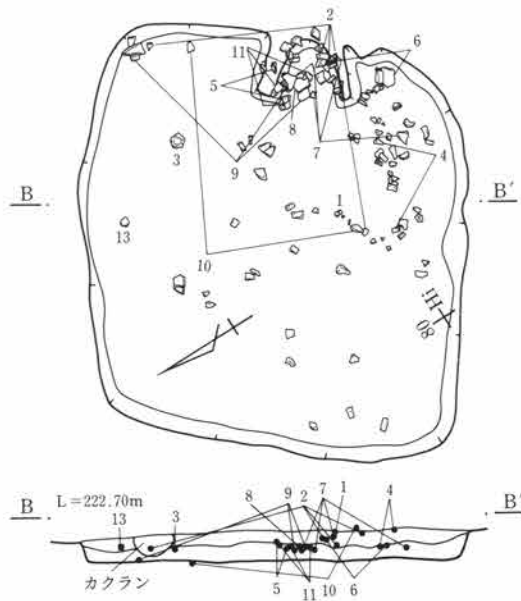
竈 住居の南東壁の中央よりもやや南側に所在。袖が住居内に作り出される形状を呈する。焚口幅46cm・燃燒部長51cm。煙道は削平されている。

貯蔵穴 住居東隅に所在。非常に小規模である。周溝 なし。

柱穴 5基の小ピットを検出。各ピットの位置より、P1～4までが支柱穴と考えられる。

出土遺物 小破片が主体ではあるが、比較的少量の遺物が竈周辺より出土している。ただし、大半の遺物は床面よりも高い位置から出土している。主な器種は、須恵器坏(1)・塊(2)・壺(4)・甕(5・6)・羽釜(7)

第3章 検出された遺構と遺物



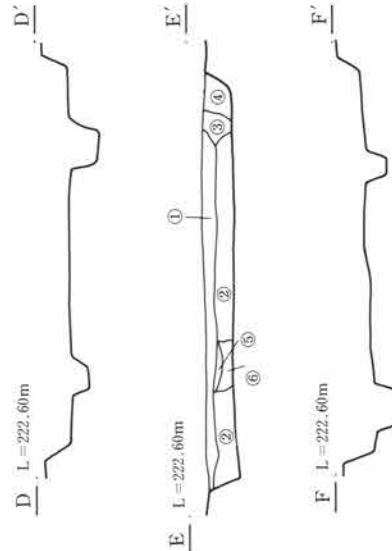
～11)などがあり、特に羽釜の多さが注目される。また、底部の周囲を打ち欠き、底部内面を擦ってある、転用硯とみられる灰釉陶器が1点(3)ある。この他に、小型の石製品(13)と鉄製の紡錘車(12)が出土している。

掘り方 なし。

調査所見 出土遺物より、平安時代の住居と推測される。

ベルトセクション

- 1 黒色土 若干の小礫・黄色粘質土含みしまりやや悪い。
- 2 暗褐色土 若干の小礫、わずかの黄色粘質土・焼土粒含みしまりやや悪い。
- 3 黒褐色土 若干の小礫・黄色粘質土ブロックを含みしまりやや良。
- 4 黒褐色土 若干の小礫・焼土粒・炭化物含みしまりやや良。
- 5 暗褐色土 2層の土を主体とししまりやや悪い。他遺構覆土。
- 6 黒褐色土 砂質で比較的均質。わずかの焼土含む。他遺構覆土。



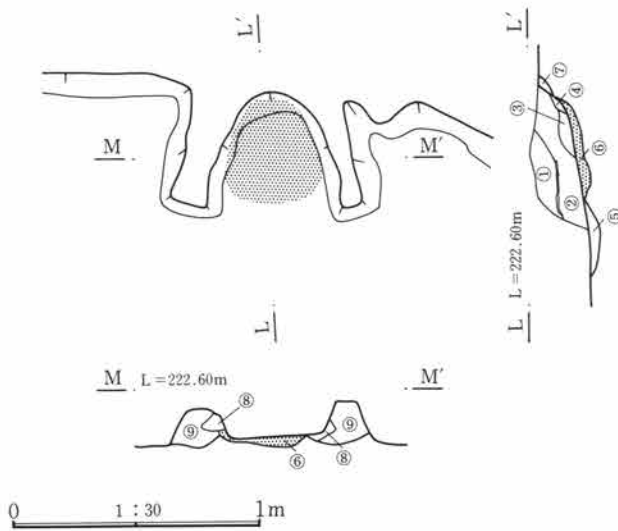
ピットセクション

- 1 暗褐色土 黄褐色土若干、焼土わずか含みしまりやや良。
- 2 暗褐色土 少量の小礫、若干の黄色土含みしまりやや悪い。
- 3 暗褐色土 若干の小礫・黄色土含みしまりやや良。
- 4 暗褐色土 少量の地山黄灰色砂質土を含みしまりやや悪い。
- 5 暗褐色土 ごく弱い粘性持ちしまりやや良。やや黄色みを帯びる。
- 6 暗褐色土 砂質土・黄色土粒若干含む。

貯蔵穴セクション

- 1 暗褐色土 若干の小礫・黄色土含みしまりやや良。
- 2 暗褐色土 若干の黄色粒・砂質土含みしまりやや良。弱い粘性あり。
- 3 暗褐色土 少量の地山黄灰色砂質土を含みしまりやや悪い。

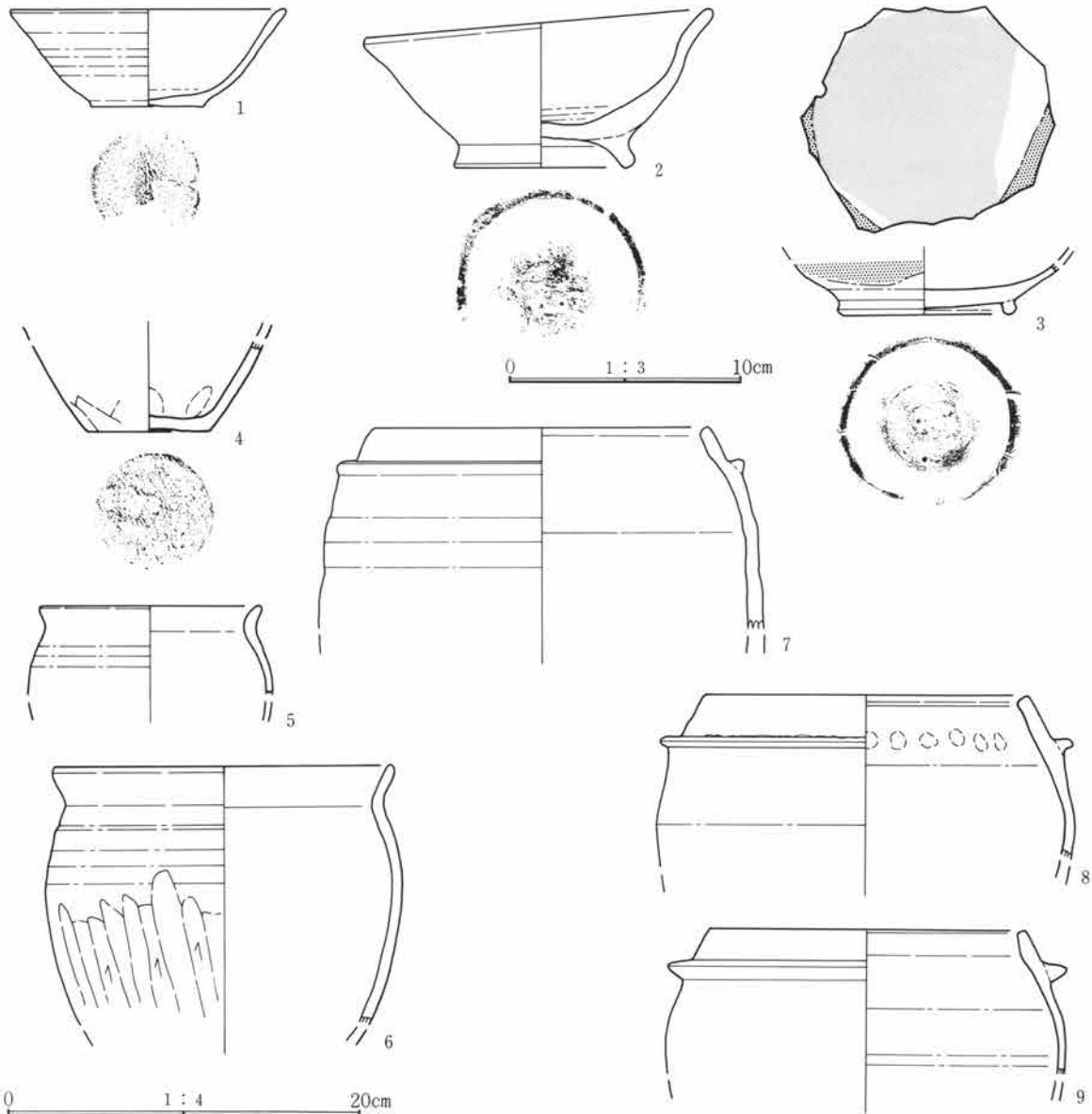
第441図 H-16号住居跡



竈セクション

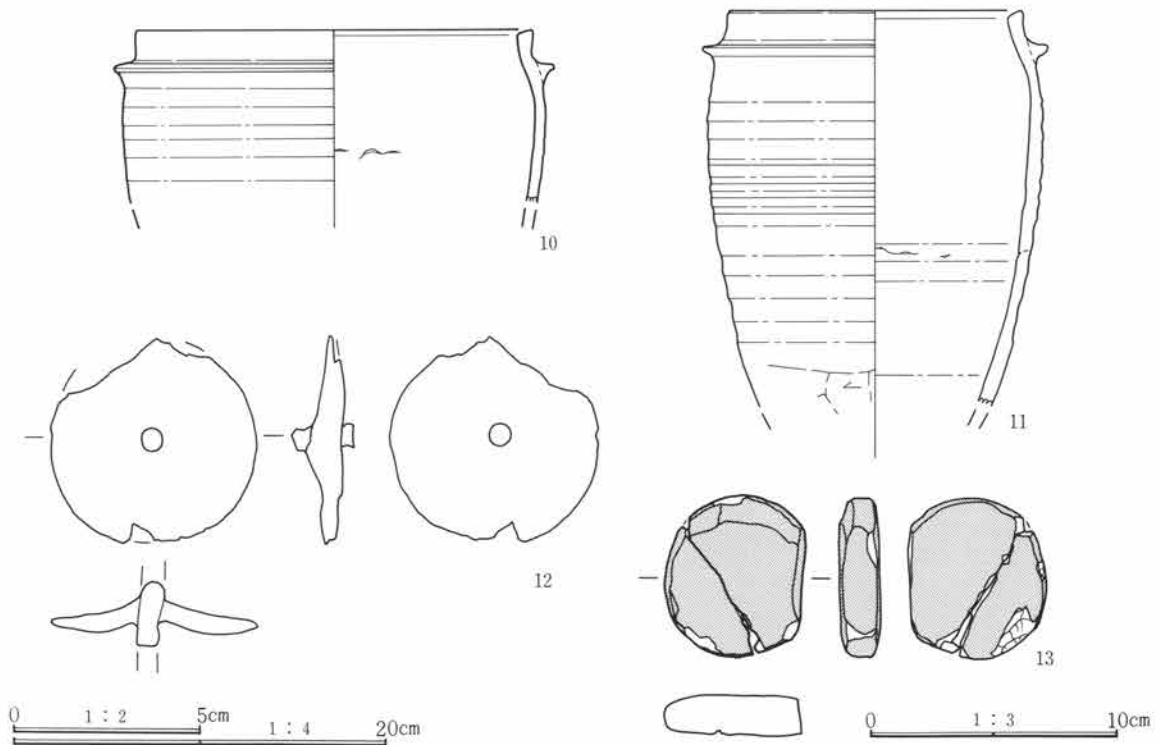
- 1 黒褐色土 比較的細粒・均質でしまりやや良。若干の焼土・炭化物含む。黄褐色土わずかに混入。
- 2 暗褐色土 かなりの焼土・黄褐色土含みしまりやや良。
- 3 黒褐色土 1層に似るが、黄褐色土含まずより均質。
- 4 暗褐色土 細粒・均質でしまりやや良。
- 5 暗褐色土 若干の砂礫・焼土粒含みしまり悪い。
- 6 暗赤褐色土 多量の砂礫・焼土含みしまり悪い。
- 7 褐色土 若干の砂礫・焼土含みしまり悪い。
- 8 褐色土 黄色粒・砂礫含みしまり悪い。若干の焼土混入。
- 9 褐色土 8層に似るが、焼土含まない。

0 1:30 1m



第442図 H-16号住居竈、出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第443図 H-16号住居出土遺物実測図②

H-16号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	+26cm 1/4	口(11.7) 底 4.8 高 4.0	①微砂粒含む ②良好 ③明褐色	ロクロ整形。口縁端部やや肥厚。底部回転糸切り後ナデ。	
2	須恵器 埴	+13cm 3/5	口 14.9 底 7.6 高 6.6	①砂粒(まれに小礫)含む ②良好 ③にぶい黄褐色	ロクロ整形。口縁端部は緩く屈曲して外反。底部切り離し後高台貼付。	
3	灰釉陶器 埴	+13cm 底部	口 — 底 7.6 高 —	①均質・細粒の胎土 ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部切り離し後高台貼付。施釉は漬け掛け。	周辺意図的に打ち欠き、内面に研磨面見られる
4	須恵器 壺	+13cm 胴部下半 1/2~底	口 — 底 6.9 高 —	①細砂含む ②良好 ③灰色	ロクロ整形。胴部下位へら削り。底部切り離し後へら削り。内面に指頭圧痕。	
5	須恵器 小型甕	+6cm 口縁1/2	口(12.5) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁短く外反。	
6	須恵器 甕	+10cm 口~胴部 上位1/4	口(19.3) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁は「く」の字状に屈曲して外反。胴部外面下半へら削り。	
7	須恵器 羽釜	+12cm 口~胴部 上位1/2	口(19.3) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	ロクロ整形。胴部上位から口縁にかけて内湾。罎の形状は断面三角形。	
8	須恵器 羽釜	+8cm 口~胴部 上位1/2	口(16.3) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	ロクロ整形。胴部上位から口縁にかけて内湾。罎の形状は断面三角形。罎の接合部内面に指頭圧痕めぐる。	
9	須恵器 羽釜	+2cm 口~胴部 上位1/2	口(17.8) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③橙色	ロクロ整形。胴部上位から口縁にかけて内湾。罎の形状は断面三角形。	
10	須恵器 羽釜	床密着 口~胴部 上位1/2	口(21.1) 底 — 高 —	①細砂含む ②良好 ③灰白色	ロクロ整形。口縁はやや内湾し、端部で直立。罎の形状は断面三角形。	

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴				残存状態 備考
11	須恵器 羽釜	カマド内 口～胴部 上半 $\frac{1}{2}$	口(15.6) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③灰白色	ロクロ整形。比較的細身。胴部外面上位にロクロ目に沿って沈線数条めぐらす。胴部外面下位へラ削り。				
番号	器種	出土状況	紡輪径(cm)	紡輪厚(cm)	軸径(cm)	軸長(cm)	重量(g)	残存状態	特徴
12	鉄製紡錘車	覆土	5.6	1.1	0.6	(1.6)	(30.3)	ほぼ完形	紡輪一部欠損。軸の断面円形。錆化著しい。
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴	
			全 長	幅	厚 さ	重 量			
13	不明石製品	+12cm ほぼ完形	6.3	5.6	1.5	75.1	砥沢石	ほぼ全面を研磨して円盤状に仕上げている。右側が直線状に削っている。	

H-17号住居跡 (PL66・153)

位置 He-75グリッド 主軸方位 S-60°-E 残存壁高 0.33m 重複 H-15住を切る。

規模と形状 長辺2.82m・短辺2.85mのほぼ正方形。竈半分と住居南隅が、近年の攪乱によって破壊されている。住居主軸は南東方向を指す。竈は南東壁に築かれる。

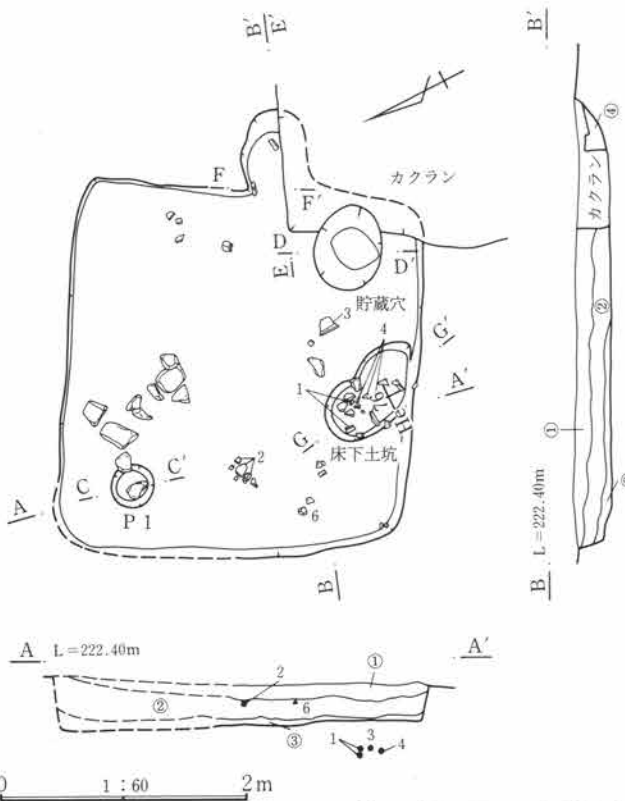
床面 地山褐色粘質土を掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居南東壁のほぼ中央に所在。近年の攪乱によって半分ほどを破壊されている。形状は、袖が作られず、燃焼部が住居域外に張り出す形状をとる。燃焼部長70cm。燃焼部先端の内側には、板状の砂岩が据え付けられている。煙道は削平されている。

貯蔵穴 住居南隅近くに所在。形状は、長軸が住居主軸方向に一致する楕円形。

周溝 なし。柱穴 小ピットを1基検出したが、柱穴か否かは不明。

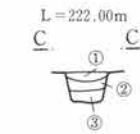
出土遺物 遺物量は少ない。大半は床面近くと床下土坑内より出土している。主な器種は、土師器杯(1・2)・



甕(3)・甕(4)がある。また、覆土中より須恵器小型壺(5)が出土している。

掘り方 床下より土坑1基を検出。

調査所見 出土遺物より、奈良時代の住居と推定される。



ピットセクション

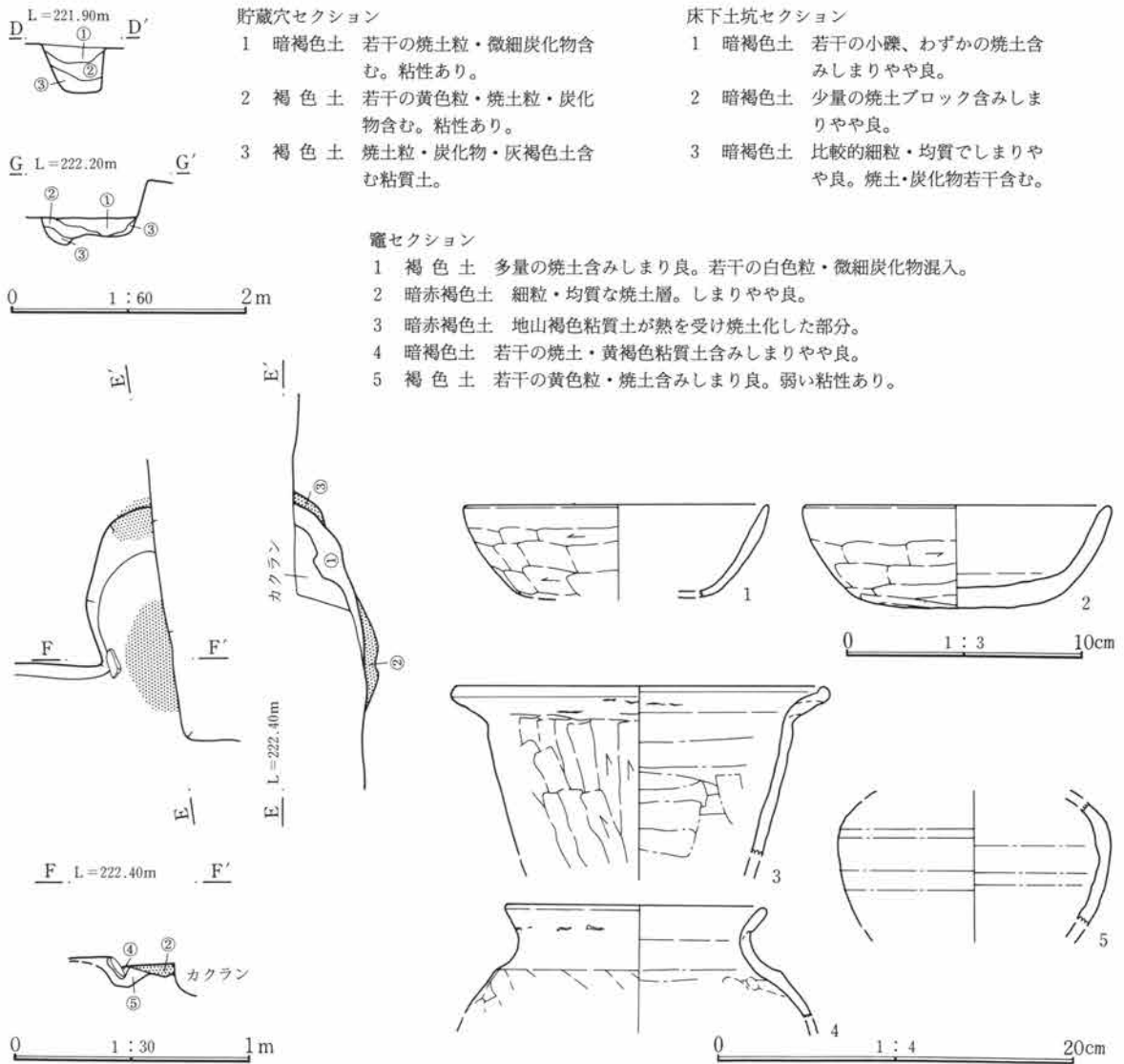
- 1 褐色土 若干の黄色粒・砂礫含みしまり良。弱い粘性あり。
- 2 褐色土 砂礫若干含む比較的均質な粘質土。
- 3 褐色土 非常に均質な粘質土。

べルトセクション

- 1 褐色土 少量の白・黄色粒、焼土粒、微細炭化物含みしまり良。
- 2 褐色土 1層より白・黄色粒の混入少なく、焼土・炭化物多い。
- 3 褐色土 均質でしまり良。若干の焼土粒含む。
- 4 竈部分埋土。

第444図 H-17号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



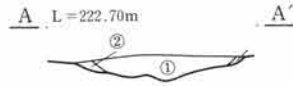
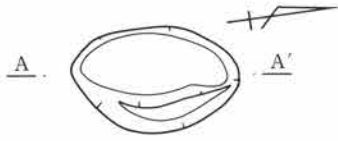
第445図 H-17号住居跡②、出土遺物実測図

H-17号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考		
1	土師器 坏	床下ピット内口～ 体部 $\frac{1}{3}$	口(12.6) 底— 高—	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体部外面へラ削り。内面横ナデ。			
2	土師器 坏	+4cm $\frac{1}{5}$	口 12.7 底 8.3 高 4.2	①細砂含む ②良好 ③橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面へラ削り。内面横ナデ。			
3	土師器 甔	床密着 口～胴部 上位破片	口(20.6) 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁は外反し、端部がわずかに直立。口縁部内外面横ナデ、接合痕あり。胴部外面へラ削り、内面横ナデ。			
4	土師器 甕	床下ピット内口～ 胴部上位	口 14.5 底— 高—	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部内外面横ナデ、外面に接合痕。胴部外面へラ削り、内面横ナデ、指頭圧痕あり。			
5	須恵器 小型壺	+4cm覆土 胴部中位 $\frac{1}{5}$	口— 底— 高—	①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。			
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
6	鉄滓	+24cm	6.6	5.5	2.4	172.0	完形	表面褐色で、土・砂粒付着。

土 坑

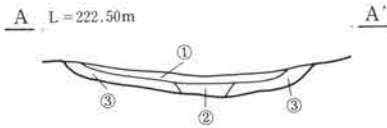
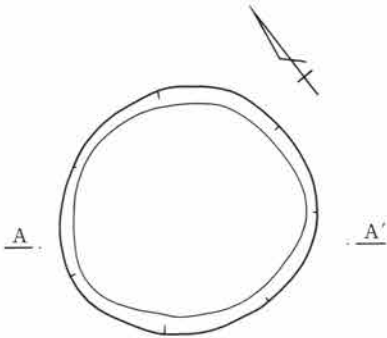
H-4号土坑 (PL66)



Hh-79グリッドに位置する。形状は楕円形で、長軸67cm・短軸41cm・深さ9cmである。壁や底面に焼土はみられないが、覆土中にながりの焼土・炭化物を含むことから、洋梨形土坑である可能性が考えられる。遺物の出土はない。

- 1 黒褐色土 若干の小礫・焼土・炭化物含む。底面に一部層状の炭化物見られる。
- 2 暗褐色土 かなりの焼土、わずかの黄褐色粘土含む。

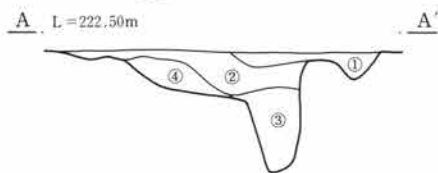
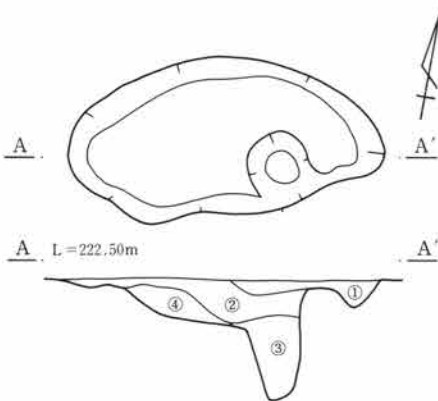
H-5号土坑



Hf-78グリッドに位置する。形状はほぼ円形で、長軸105cm・短軸97cm・深さ11cmである。遺物の出土はなく、時期の特定はできなかった。

- 1 暗褐色土 やや砂質。焼土塊・炭化物わずかに含む。
- 2 褐色土 少量の黄色粒、若干の焼土・炭化物含む。
- 3 黄褐色土 少量の黄色粒・小礫含む。

H-6号土坑



Hg-78グリッドに位置する。形状は不正楕円形で、長軸126cm・短軸63cm・深さ48cm。遺物の出土はなく、時期の特定はできなかった。

- 1 暗褐色土 黄色粒・焼土わずかに含む。
- 2 暗褐色土 少量の焼土、若干の白色粒・炭化物含む。やや砂質。
- 3 褐色土 かなりの黄褐色粘質土含む。
- 4 褐色土 若干の黄色粒、ごくわずかの焼土含む。

0 1 : 30 1 m

第446図 H-4・5・6号土坑

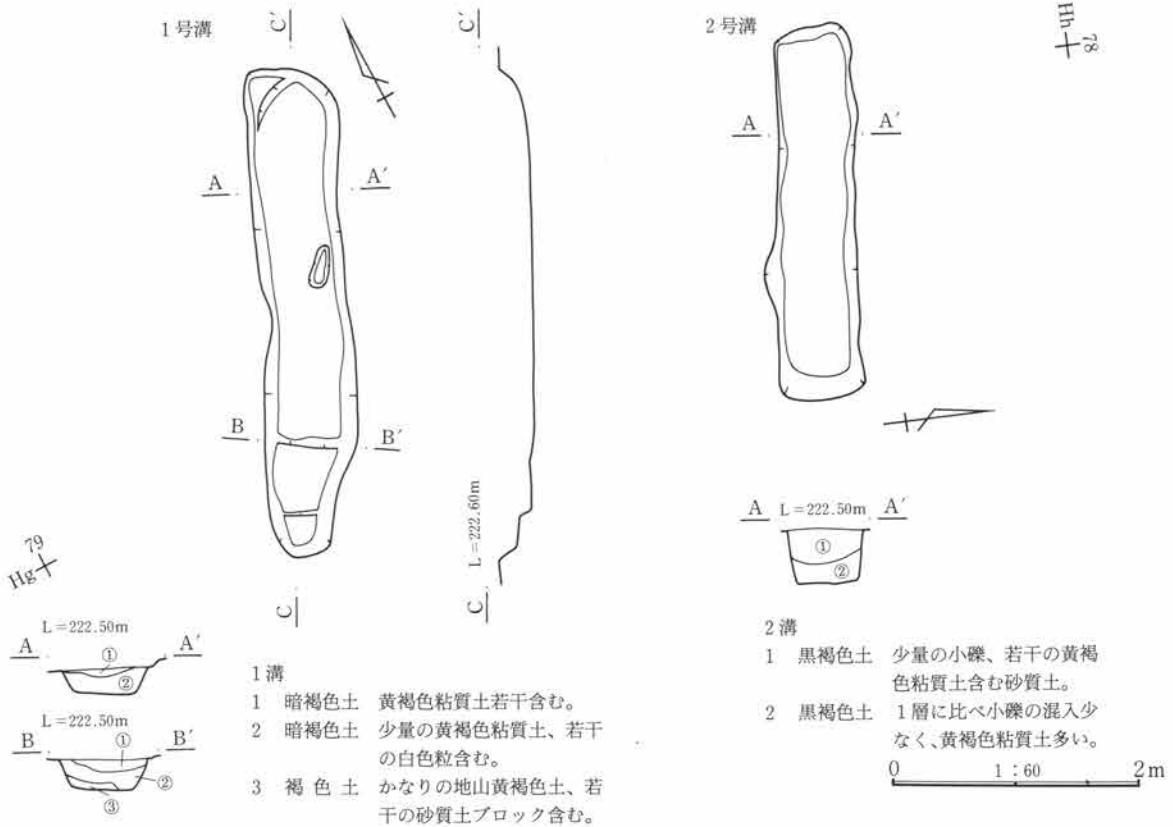
溝

H-1号溝

Hf・Hg-78グリッドに所在。全長3.84m・幅0.72m・深さ0.25m。遺物の出土なく、時期の特定できない。

H-2号溝

Hg-77・78グリッドに所在。全長2.97m・幅0.73m・深さ0.41m。遺物の出土なく、時期の特定できない。



第447図 H-1・2号溝

ピット群 (PL66)

H区では、少数の小ピットが検出された。形状は円～楕円形で、大きさは平均長軸34.3cm・短軸29.3cm・深さ20.1cmである。遺物の出土はなく時期の確定は困難であるが、覆土中にAs-B軽石を含むものがあり、F・G区同様、古墳～中世に至る時期のものと思われる。以下にピットの一覧表を付す。

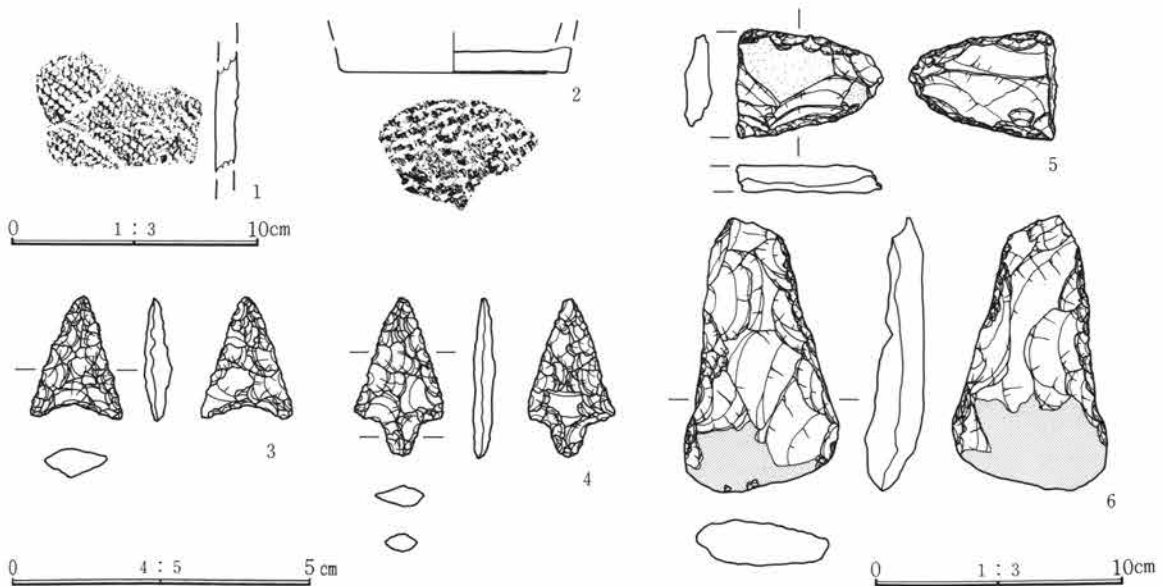
第16表 H区ピット一覧

No.	グリッド	長軸	短軸	深さ	備考	No.	グリッド	長軸	短軸	深さ	備考
1	Hg-75	21.5	16.0	8.8		5	Hh-75	31.0	26.0	38.5	
2	Hg-75	17.5	17.0	9.5		6	Hh-75	24.0	21.0	12.7	
3	Hh-75	29.0	27.0	23.0		7	Hh-75	28.5	27.0	5.5	
4	Hh-75	35.5	30.0	16.0		8	Hh-75	24.0	22.0	11.5	

No	グリッド	長軸	短軸	深さ	備 考	No	グリッド	長軸	短軸	深さ	備 考
9	Hh-75	49.0	31.0	16.0		32	Hj-77	30.5	24.0	11.6	
10	Hi-76	55.0	42.5	13.0		33	Hj-77	40.5	23.0	22.9	
11	Hi-76	25.5	25.0	32.0		34	Hj-77	24.5	23.5	15.5	
12	Hi-76	33.5	22.5	17.2		35	Hj-77	27.5	22.0	14.7	
13	Hi-76	27.0	26.0	22.0		36	Hj-77	46.5	35.0	32.2	
14	Hi-76	29.0	27.0	22.0		37	Hj-77	39.0	37.5	33.0	
15	Hi-76	34.5	31.0	46.0		38	Hk-76	44.5	41.5	20.9	
16	Hi-76	26.5	24.0	19.5		39	Hi-78	60.5	54.0	13.9	
17	Hi-77	70.0	31.5	40.0		40	Hj-79	45.0	39.5	15.0	
18	Hi-77	37.0	34.0	22.0		41	Hj-79	73.5	60.5	28.9	
19	Hi-77	23.5	29.5	23.3		42	Hi-80	38.5	34.5	25.7	
20	Hi-77	24.0	20.5	18.5		43	Hi-80	49.0	40.5	29.2	
21	Hi-76	35.0	32.5	14.2		44	Hj-80	45.5	40.5	26.1	
22	Hj-76	35.0	30.5	18.0		45	Hg-78	25.0	23.5	13.6	
23	Hj-76	21.5	18.5	10.6		46	Hg-78	32.5	29.0	18.5	
24	Hj-76	35.0	24.0	23.1		47	Hg-78	26.0	24.0	11.0	
25	Hj-76	30.0	28.5	28.6		48	Hg-76	24.5	22.0	16.5	
26	Hj-76	21.0	20.5	13.5		49	Hg-76	25.5	25.5	18.2	
27	Hj-76	25.5	23.5	23.9		50	Hg-78	30.0	27.0	12.5	
28	Hj-76	46.0	32.0	30.4		51	Hg-78	25.5	29.0	12.3	
29	Hj-76	38.0	35.5	23.2		52	Hg-78	32.0	30.5	25.5	
30	Hj-76	30.5	29.0	20.9		53	Hg-78	22.5	18.0	10.4	
31	Hj-76	47.5	41.0	11.2							

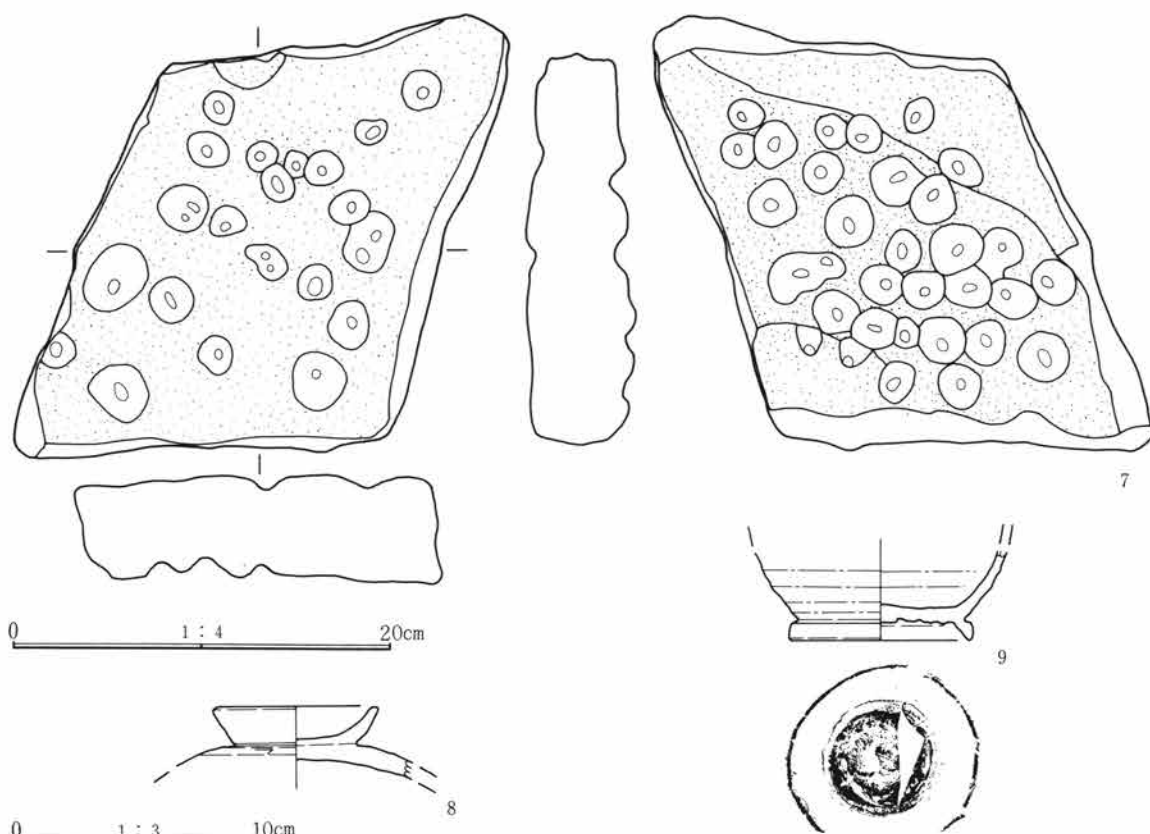
3 遺構外出土遺物 (PL153)

H区からは、縄文時代の遺構はなかったが、遺構外、もしくは他の時期の遺構から数点の縄文土器破片や石器が出土している。1は深鉢の胴部破片、2は深鉢の底部で、外面に網代痕を持つ。3・4は石鏃、5はスクレイパー、6は打製石斧、7は砂岩製の凹石で、いずれも縄文時代に属する遺物であろう。この他に、打製石斧の破片が1点と剝片類が少量出土している。7の凹石は12号住居からの出土で、熱を受けており、竈の構築材として転用されていたようである。この他に遺構外より須恵器蓋(8)・塊(9)が出土している。



第448図 H区遺構外出土遺物実測図①

第3章 検出された遺構と遺物



第449図 H区遺構外出土遺物実測図②

H区遺構外出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形				文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	縄文土器 深鉢形土器	Hh-77Gr 胴部破片						R L縄文横位に施紋、縄端部処理部分の圧痕が部分的にみられる。	①砂粒含む ②良好 ③橙色 ④中期初頭
2	縄文土器 深鉢形土器	Hj-75Gr 底部破片	底(9.0)					わずかに残る胴部には細かいL Rの縄文がみられる。底面に網代痕。	①砂粒含む ②良好 ③明褐色 ④後期
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石材	特徴	
			全長	幅	厚さ	重量			
3	石鏃	H-4住 完形	2.0	1.5	0.4	0.77	黒曜石	凹基無茎鏃。両面に丁寧な調整加えるが、裏面に一部素材腹面残す。	
4	石鏃	H-7住 完形	2.6	1.5	0.3	0.96	黒曜石	凸基有茎鏃。両面に丁寧な調整加えるが、裏面に一部素材腹面残す。	
5	スクレイパー	H-15住 1/2	4.2	(5.7)	1.1	(32.1)	硬質泥岩	横長の剥片の両端・両側に調整加える。	
6	打製石斧	H-16住 完形	10.7	6.1	2.3	126.8	硬質泥岩	厚手の剥片を素材とし、両面に調整加える。刃部両面に使用による摩耗顕著。	
7	くぼみ石	H-12住 1/2	(23.0)	26.3	5.8	(3700.0)	凝灰質砂岩	板状の砂岩の両面に多数のくぼみあり。竈の天井石として転用されていた。	
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調			成・整形技法の特徴		残存状態 備考
8	須恵器 蓋	Hj-76Gr つまみ部	口— 摘(6.6) 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色			ロクロ整形。天井部右回転の回転ヘラ削り。つまみ貼付。		
9	須恵器 塊	H-12住付 近体部 下~底部	口— 底7.1 高—	①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色			ロクロ整形。底部回転ヘラ切り後高台貼付。		
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴	
10	鉄滓	表採	4.4	2.9	1.3	63.0	破片	表面溶けてガラス状。一部粗砂粒付着。	

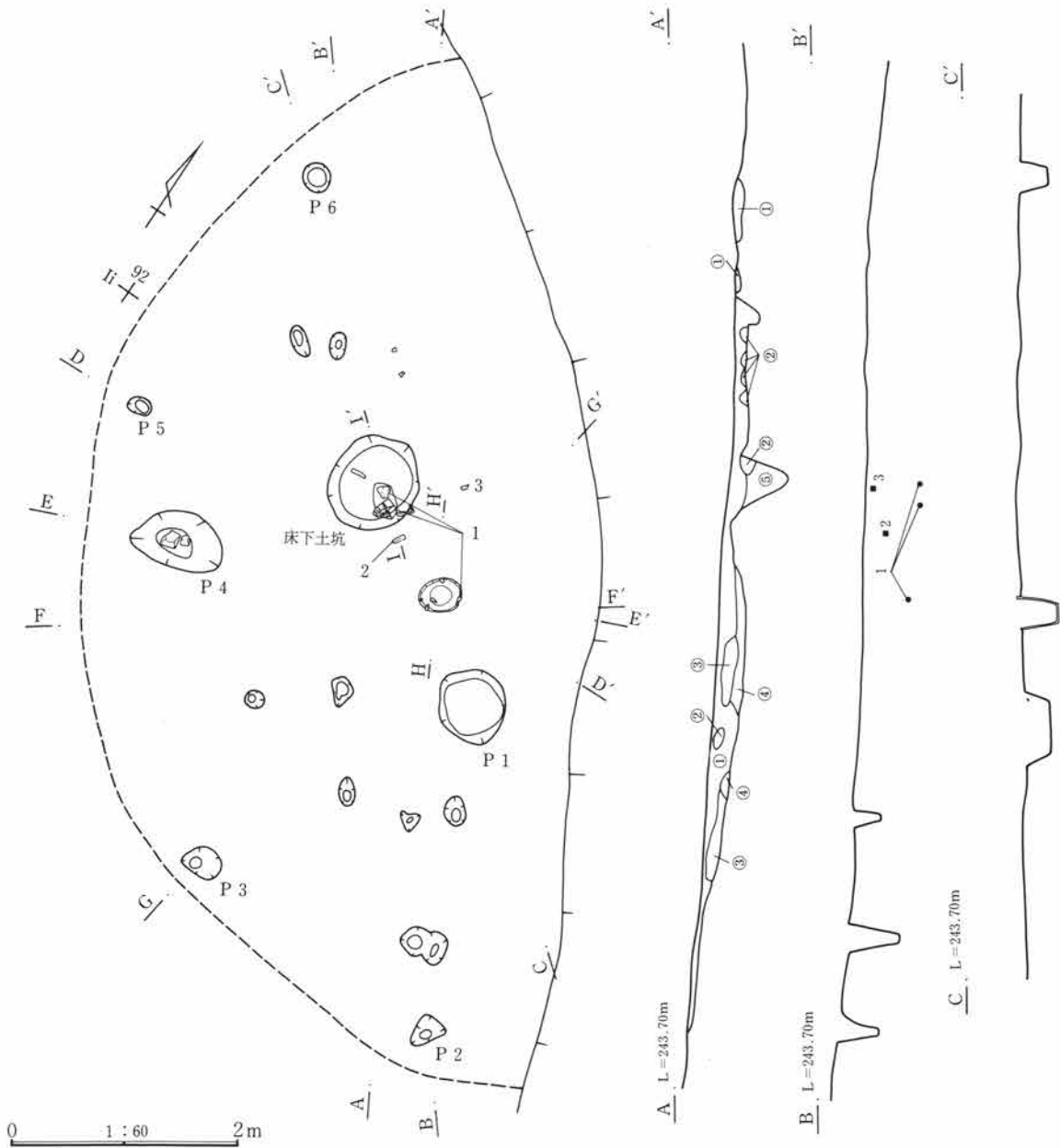
第4節 I 区

1 縄文時代の遺構と遺物

I-2号住居跡 (PL68・154)

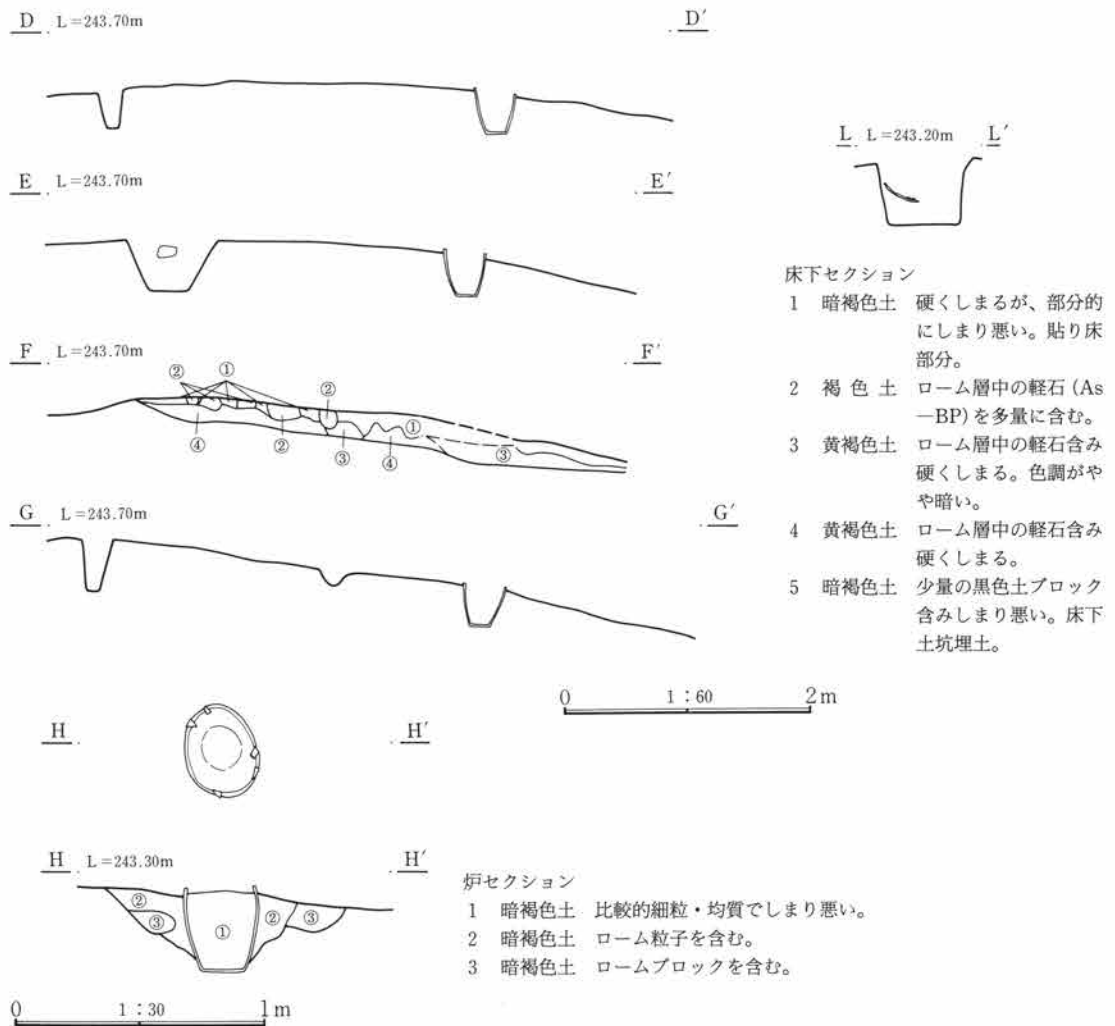
位置 Ii・Ij-91グリッド 主軸方位 不明 残存壁高 0m 重複 なし

規模と形状 住居の北東半分を削平されているため、全体の形状および規模は不明。また、上面が削平され周壁が残っていないため、住居範囲は、床下の状況や遺物の出土状況・柱穴の位置などから推定した。推定最大長は8.82mである。住居のほぼ中央には、大型の深鉢の下半部を埋設した炉がみられる。



第450図 I-2号住居跡①

第3章 検出された遺構と遺物



第451図 I-2号住居跡②

床面 住居全域で不規則な掘り方みられ、ローム含む土を埋めて床面を形成。掘り方内部の土は良く踏み固められており、上面にはロームを含む暗褐色土を硬く叩きしめた貼り床がみられる。床面は、地形の傾斜に沿って北東側が低くなっているが、削平が一部床面にまでおよんでいるため、本来の状態であるかは不明。

炉 住居のほぼ中央部分に所在。大型の深鉢の下半部を埋設してある。甕の内部は二次的な被熱により器面がかなり剥落しており、底から5~10cm程の部分には煤が付着していた。土器埋設部の長さ37cm・幅29cm・深さ32cmである。

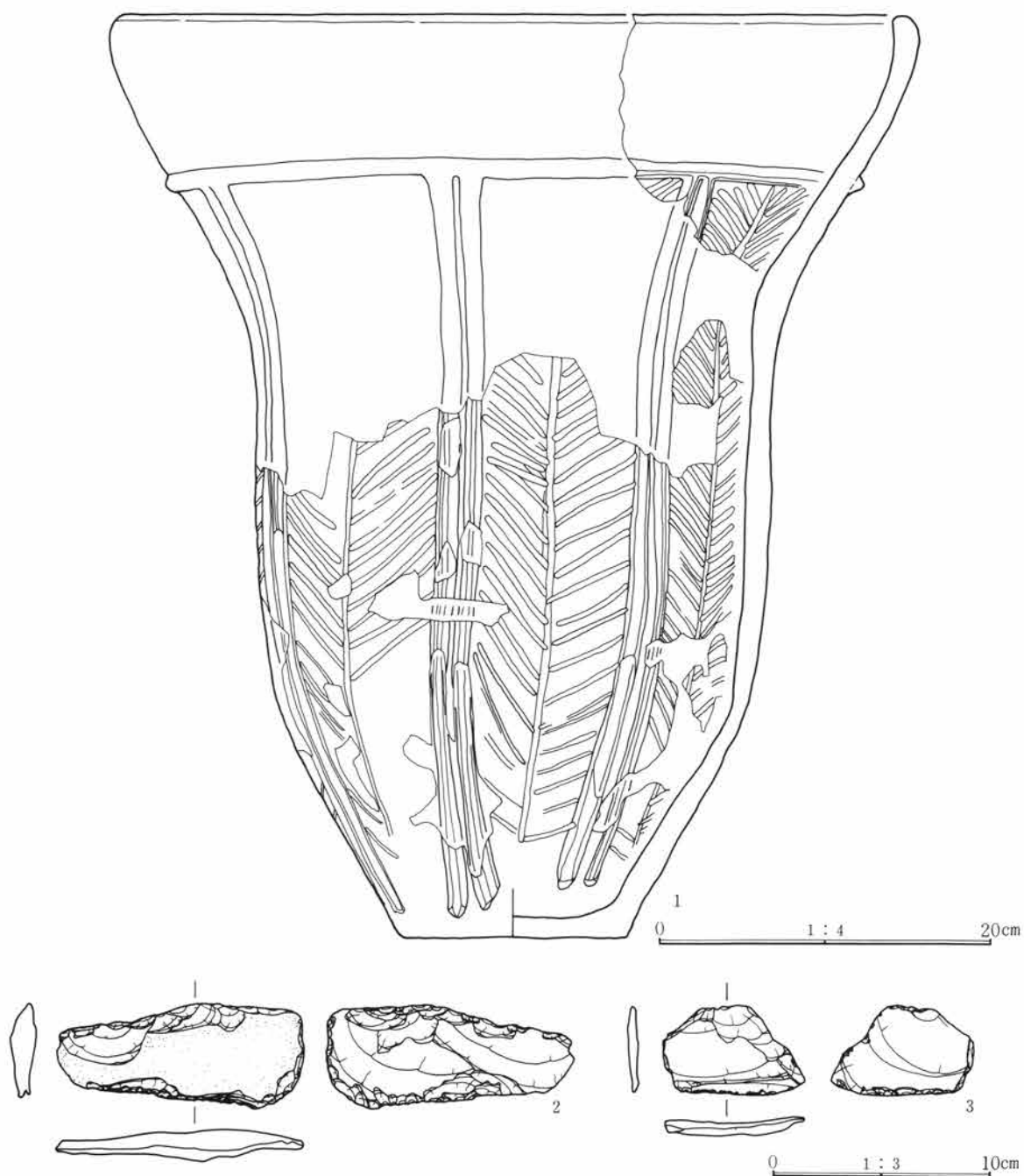
貯蔵穴 なし。 **周溝** なし。

柱穴 大小15基のピットを検出した。比較的大型のP 1・4が支柱穴で、住居壁沿いに位置する小規模なP 2・3・5・6が壁柱穴であろう。そのほかの小規模なピットは、大半が攪乱や木の根の痕跡と考えられる。

出土遺物 住居の覆土のほとんどが失われていたため、遺物量は非常に少ない。炉埋設土器を除けば、数片の土器片と石器が出土したのみである。大型の深鉢(1)は、下半部が炉に埋設してあり、床下土坑内より口縁部破片が出土している。その他にスクレイパーが2点(2・3)得られている。

掘り方 住居全域に深さ5~20cm程の不規則な掘り方みられる。また貼り床の下から床下土坑1基を検出。

調査所見 縄文時代中期。



第452図 I-2号住居出土遺物実測図

I-2号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考				
						全長	幅	厚さ	重量	石材
1	深鉢形土器	炉土土器	口(47.0) 底 13.6 高 55.4	キャリパー形を呈す。	頸部に横に巡らした隆線から2本単位の隆線を8ヶ所垂下させ、その間に沈線による綾杉文を描く。	①砂粒含む ②良好 ③にふい赤褐色 ④中期後半				
2	スクレイパー	床密着 完形	4.6	11.3	1.4	66.0	頁岩	横長剥片素材。上下両端両面に調整加え、下端に直線状の刃部形成。		
3	スクレイパー	床下土坑内 完形	4.0	6.4	0.9	191.0	硬質泥岩	横長剥片の先端両面に細かな調整加え刃部形成		

2 弥生時代の遺構と遺物

1-1号住居跡 (PL69・154)

位置 li-92・93、Ij-92・93グリッド 主軸方位 N-41°-E 残存壁高 0.76m

重複 I-3住に切られる。

規模と形状 長辺7.04m・短辺5.09mの長方形。住居主軸はかなり東にふれる。周壁はやや外反し、特に北隅付近がかなり外側に広がっている。北東側の柱穴間と北西側の柱穴間に、それぞれ1基の炉を持つ。

床面 地山黄褐色ロームを掘り込んで平坦な床面を形成。貼り床や硬質部などは特にみられない。

炉 北東側の2本の柱穴間と北西側の柱穴間に各1基所在。北東側の炉No.1は、2本の柱穴のほぼ中央で、柱穴を結んだ線よりもやや外側に位置する。浅い掘り込みと、細長い輝緑岩の円礫を利用した炉石を持つ。

燃焼部幅43cm・長さ42cm。北西側の炉No.2は、2本の柱穴間の中央よりも南西側に位置する。やはり浅い掘り込みと角礫状の輝緑岩を利用した炉石を持つ。燃焼部幅21cm・長さ25cm。どちらの炉も焼土の発達はほとんどみられない。

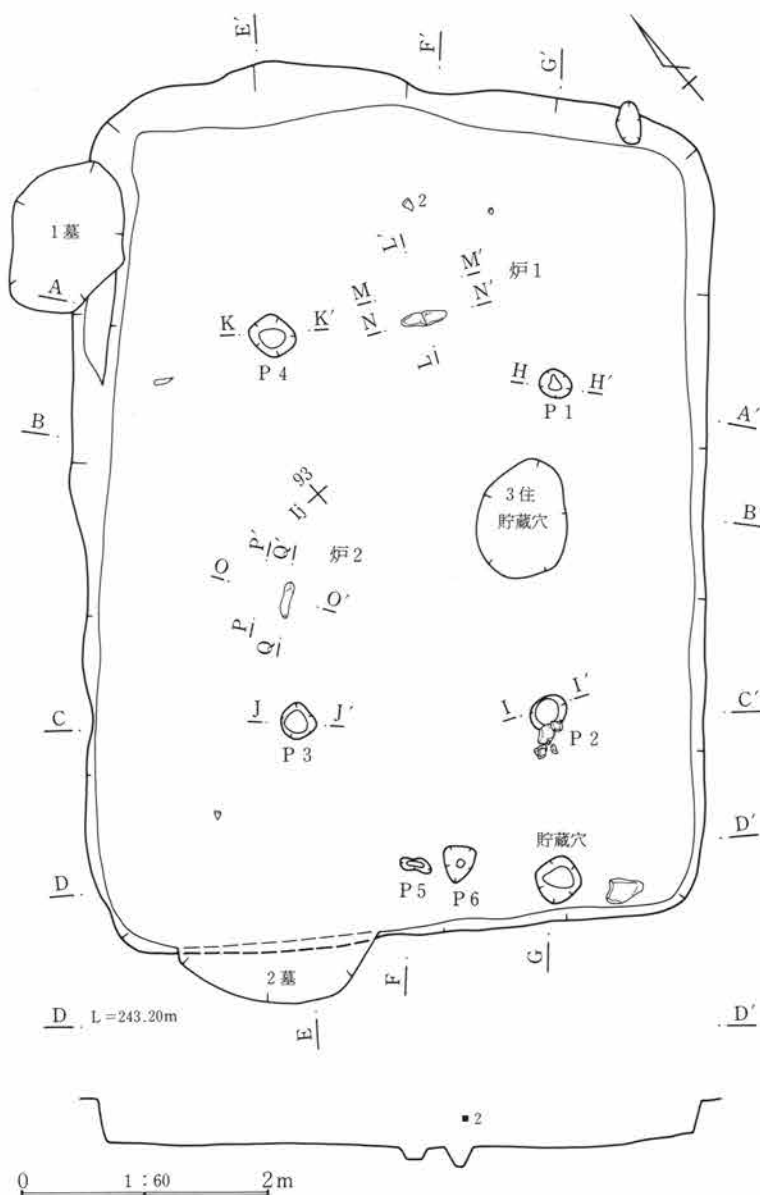
貯蔵穴 住居南西壁際の南よりに所在。かなり深い。上幅などは非常に小規模である。周溝なし。

柱穴 6基の小ピット検出。位置的にみて、P1~4までが主柱穴と考えられる。南西壁際近くのP5・6は入り口施設に関するものとしたが、大きさ・形状ともかなり不規則である。

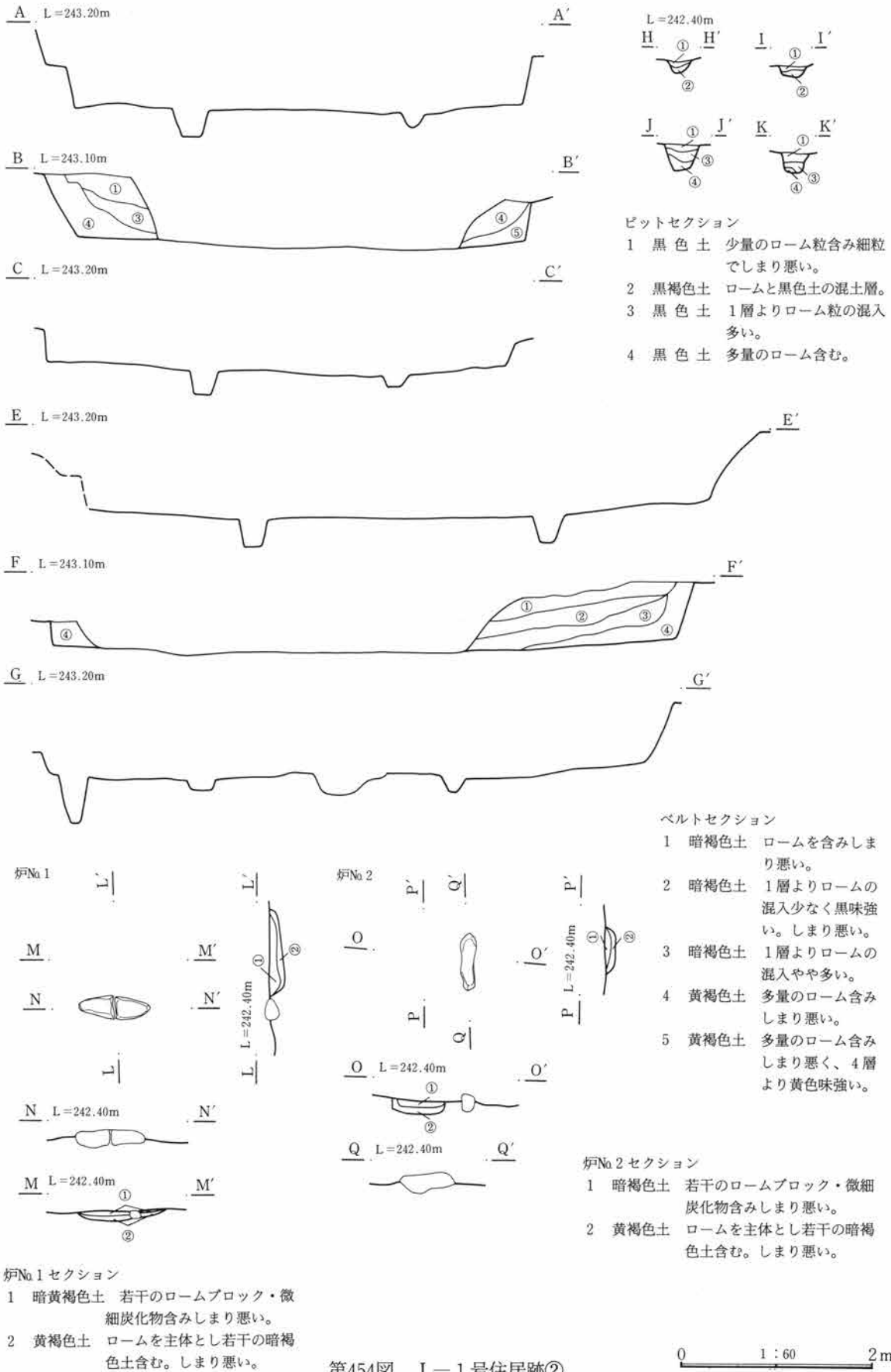
出土遺物 住居の大半を重複する住居によって破壊されているため、遺物量は非常に少ない。I-3号住居の覆土内より出土した赤色塗彩の高坏(1)を、当住居に伴うものと推測した。他に、小型の磨製石斧(2)が出土している。

掘り方 なし。

調査所見 弥生時代後期の住居である。

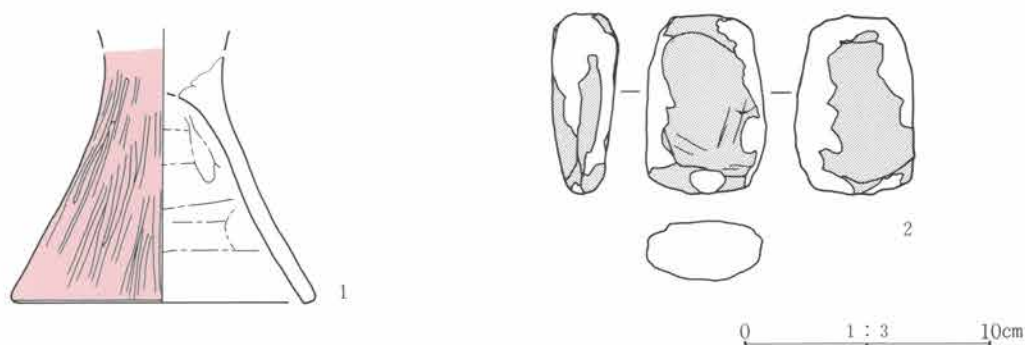


第453図 I-1号住居跡①



第454図 I-1号住居跡②

第3章 検出された遺構と遺物



第455図 I-1号住居出土遺物実測図

I-1号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考		
						①均質な細砂含む ②良好 ③浅黄橙色		
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量		
1	高坏	覆土 脚部 $\frac{1}{2}$	底(11.2)			外面ヘラ磨き、内面ナデ。外面赤色塗彩。		
2	磨製石斧	+28cm $\frac{1}{2}$	(7.0)	4.8	2.2	128.9	蛇紋岩	小型の石斧。被熱のため器表面かなり剥落。

I-4号住居跡 (PL69・70・154~156)

位置 II・Im-96グリッド 主軸方位 N-21°-E 残存壁高 0.89m

重複 塚の下位に位置し、塚下4号墓に切られる。

規模と形状 長辺5.15m・短辺3.69mの長方形。周壁はかなり外反し、崩落がみられる。住居主軸は東側にふれる。

床面 地山淡黄色粘質ロームを掘り込んで平坦な床面を形成。

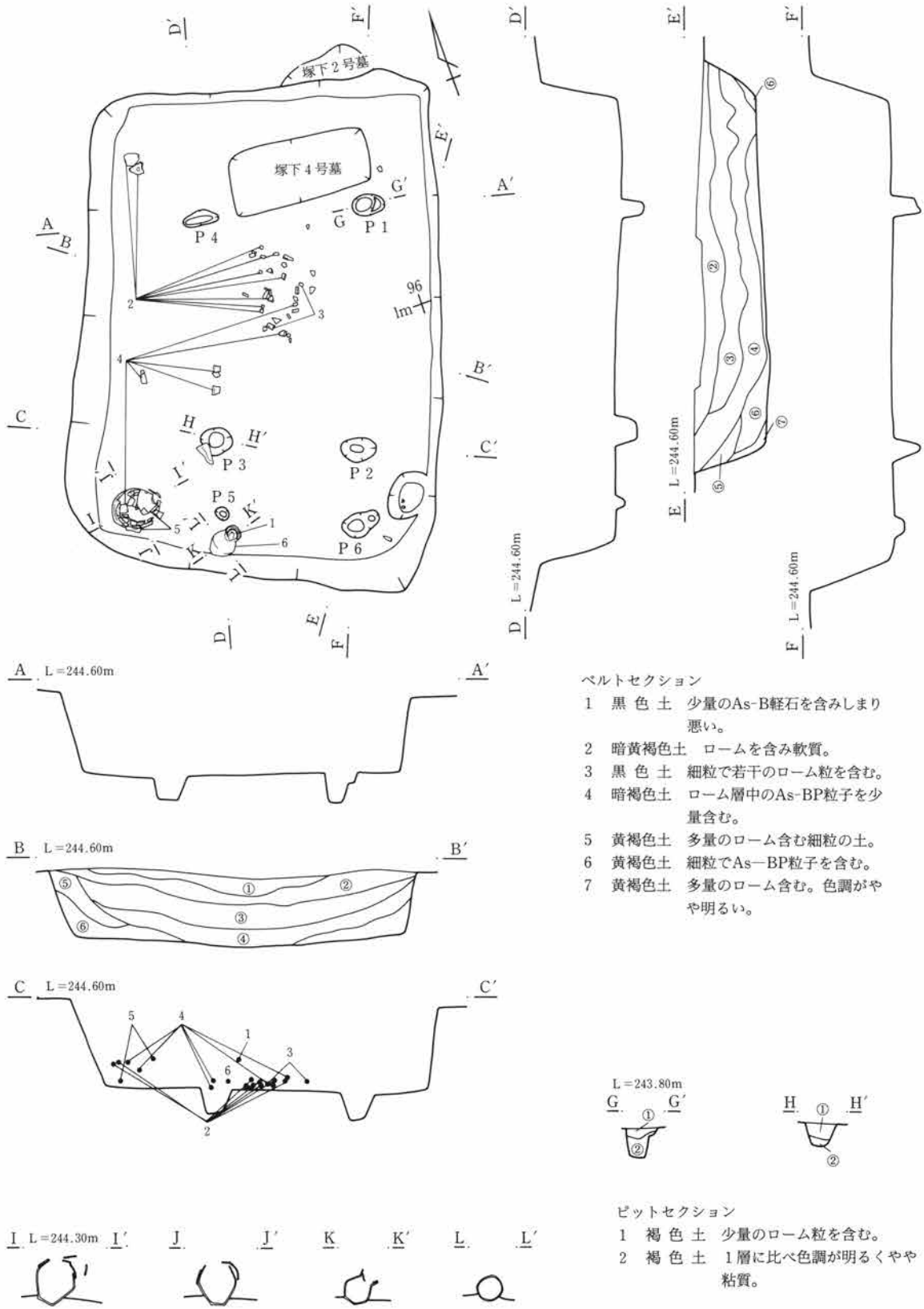
炉 住居北側の支柱穴間にあったものと推測されるが、上面から掘り込まれた墓墳によって破壊されている。

貯蔵穴 住居東壁際の北東隅付近に所在。周溝 なし。

柱穴 6基の小ピット検出。うちP1~4が支柱穴である。全体に、住居の東側にやや片寄って作られている。また南壁付近のP5・6は、他の支柱穴とほぼ一直線上に並ぶが若干浅く、補助的なもの、もしくは入り口施設にともなうものと考えられる。

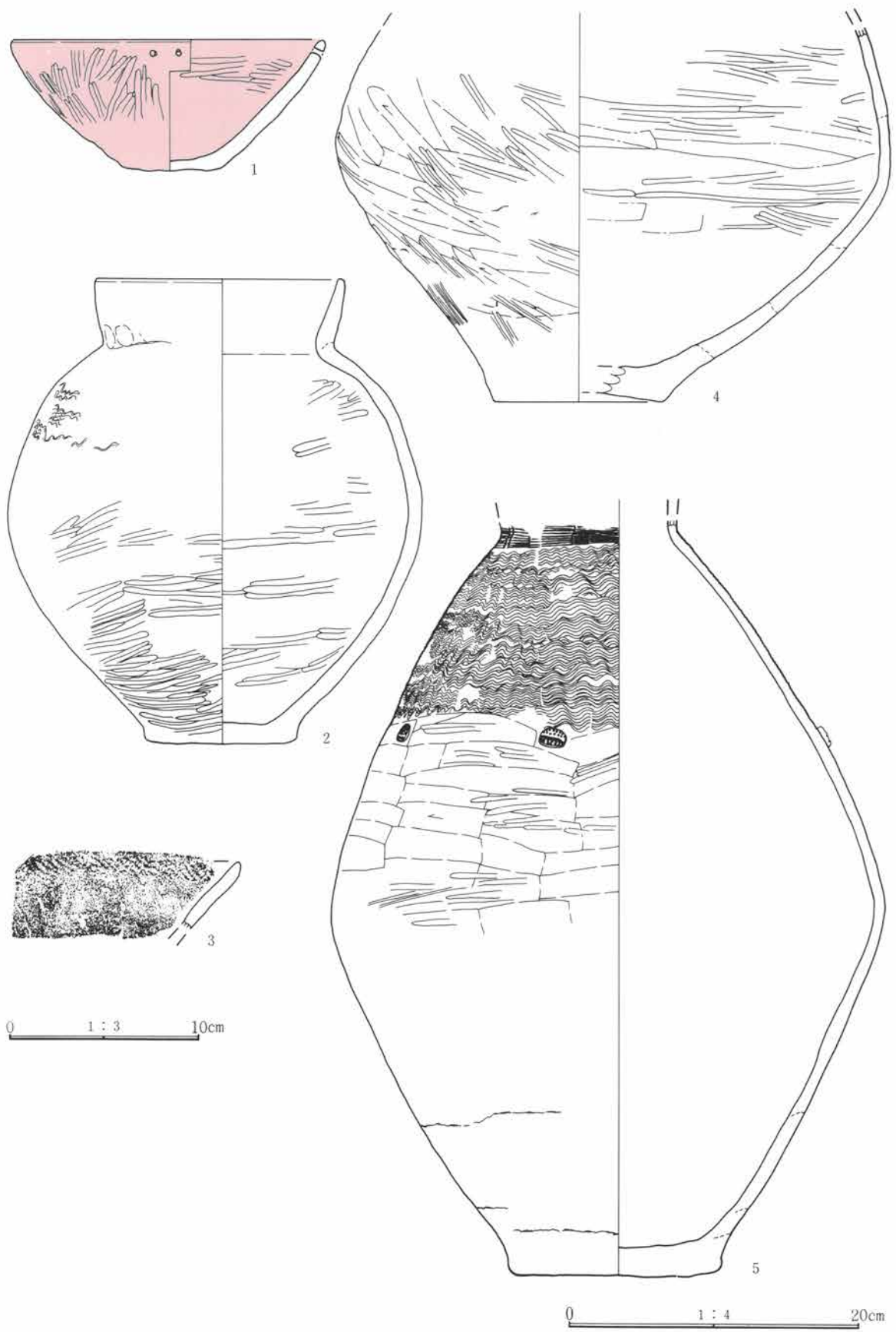
出土遺物 住居南壁際より大型の土器が二ヶ所で出土している。一つは、住居の南西隅で、大型の壺(5)と甕(4)の下半部が重ねられていたものである。これは、口縁部を欠いた大型の壺を、頸部の下1/4程の部分で二つに分割。下半部を正位で置いた上に別の甕の下半部を逆さにかぶせ、さらにその上に上部を正位でかぶせたものである。もう一つは、前記の土器のすぐ東側の壁沿いで、正位に置かれた中型の甕(6)の口の部分に、鉢(1)をいれこ状にかぶせたものである。いずれも非常に特殊な出土状態であり、甕棺墓や再葬墓の可能性も考えられるため、内部および周辺の土壌の脂肪酸分析を行った。これ以外の遺物はあまり多くなく、甕(2・3)と剥片類が若干出土したのみである。掘り方 なし。

調査所見 弥生時代後期の住居である。

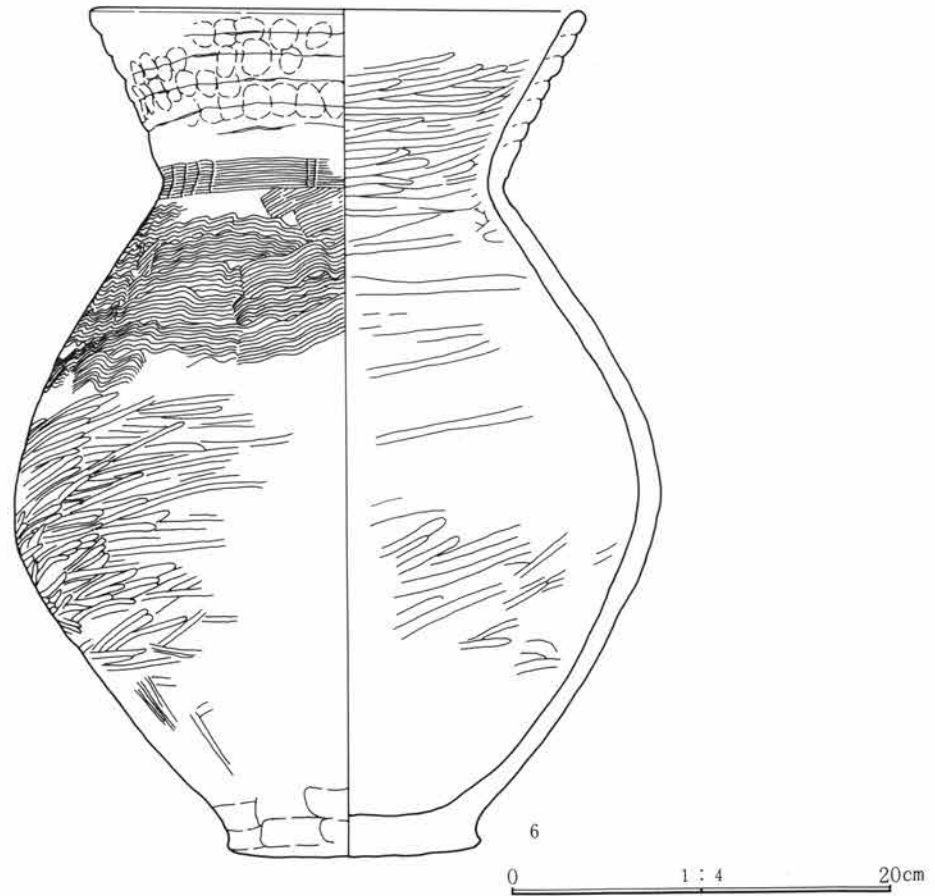


第456図 I-4号住居跡

0 1:60 2m



第457図 I-4号住居出土遺物実測図①



第458図 I—4号住居出土遺物実測図②

I—4号住居出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	鉢	+29cm ほぼ完形	口 15.9 底 5.0 高 6.7	器形は逆「ハ」の字状。口縁部に径2mm程の円孔2個おそらく対になるものと思われる。	内外面ナデ後ヘラ磨き。底部外面を除いて赤色塗彩施す。	①細砂含む ②良好 ③にぶい黄橙色 ④外面底部付近器表面の剥落激しい
2	甕	+5cm 口～底部	口(12.3) 底 7.8 高 23.8	胴部は丸く張る。頸部で屈曲し、口縁が短く直立気味に外反。	外 口縁部に接合痕・指頭圧痕。胴部上位に波状文、以下ヘラ磨き。 内 口縁部横ナデ、胴部ナデ後ヘラ磨き。	①細砂・角閃石微粒子含む ②良好 ③灰白色
3	甕	+10cm 口縁破片			口縁外面上位に縄文施文、以下ナデ。内面ヘラナデ。	①細砂含む ②良好 ③淡黄色
4	甕	+20cm 胴下半～底部	底(11.9)		外 ヘラ削り後ヘラ磨き。接合痕有り。 内 横ナデ後ヘラ磨き。	①細砂(ごくまれに小礫)含む ②良好 ③黒褐色
5	壺	床密着 頸～底部	底 14.8	胴部中位に最大径。	外 頸部2連止め簾状文(単位不明)。胴部上位波状文。波状文直下に上面に刺突持つボタン状貼付文が13cm程の間隔おいて2個。貼付文はこの2個のみで他にはない。以下ヘラ削り後ヘラ磨き。 内 ナデ。器表面の剥落激しい。	①多量の砂粒含む ②良好 ③浅黄橙色
6	甕	+8cm 口縁1/4欠	口 19.6 底 10.0 高 33.5	口縁は、頸部で「く」の字状に屈曲して外反。	外 口縁部粘土帯上に指頭圧痕。頸部に10本単位の簾状文、4連止めを基本とするが2連止めもあり。胴部上位に波状文、以下ヘラ磨き。胴部最下位にヘラ削り。 内 ヘラ磨き。	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色 ④胴部内面下位に一部炭化物付着

3 平安時代の遺構と遺物

I-3号住居跡 (PL70・71・156・157)

位置 Ii-92・93グリッド 主軸方位 N-71°-E 残存壁高 0m 重複 I-1住を切る。

規模と形状 重複するI-1号住居内にすっぽり入った状態であったため、調査着手時には確認できず、周壁などは失われてしまった。したがって、図の住居範囲は、遺物とセクションの検討によって推定したものである。住居主軸は、若干北側にずれるが、ほぼ東方向を指す。竈は北側に所在。

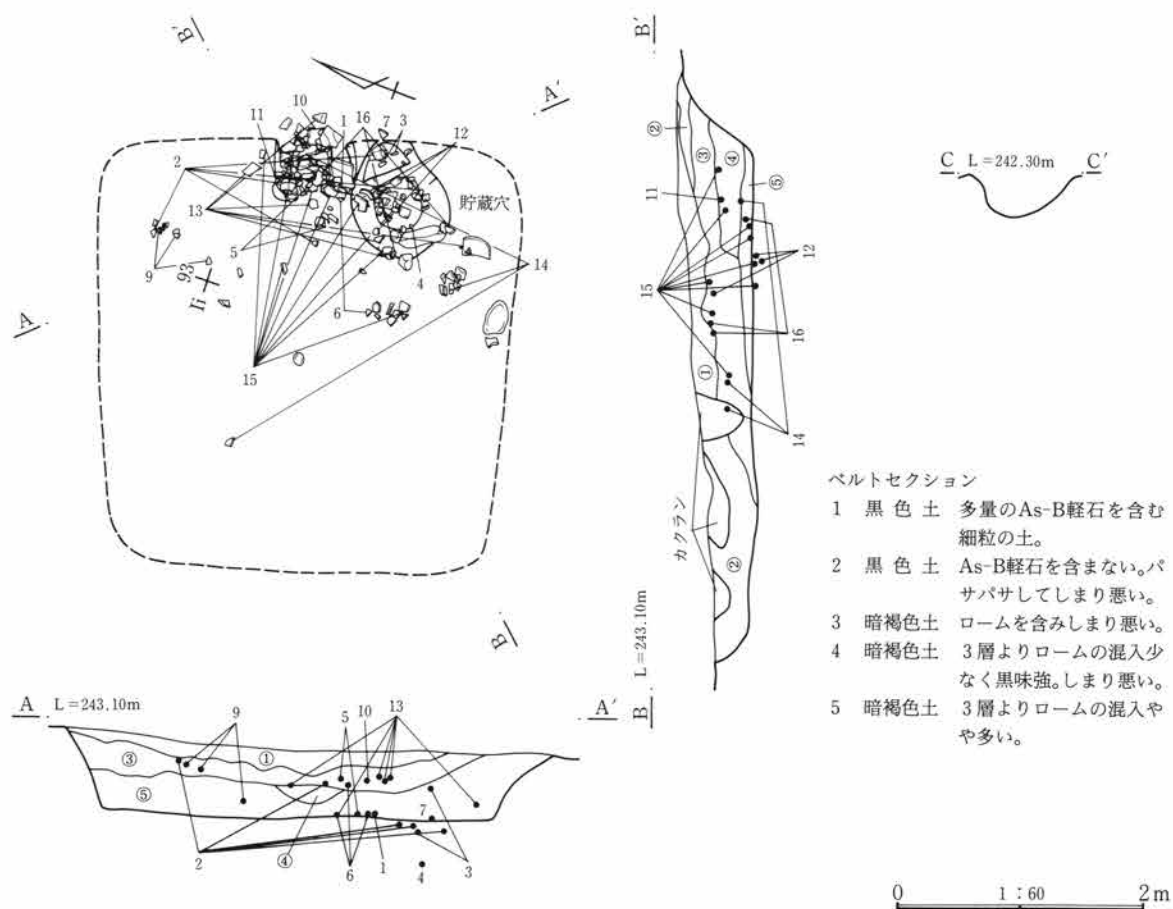
床面 地山黄褐色ロームを掘り込んで平坦な床面を形成。

竈 住居東壁の中央部に所在。袖が住居内に作り出され、燃烧部の内壁および袖の上部には、多数の板状の砂岩が据え付けられていた。焚口幅41cm・燃烧部長は推定で51cm。また細長い円礫が、燃烧部内に支脚として置かれていた。煙道は確認できなかった。

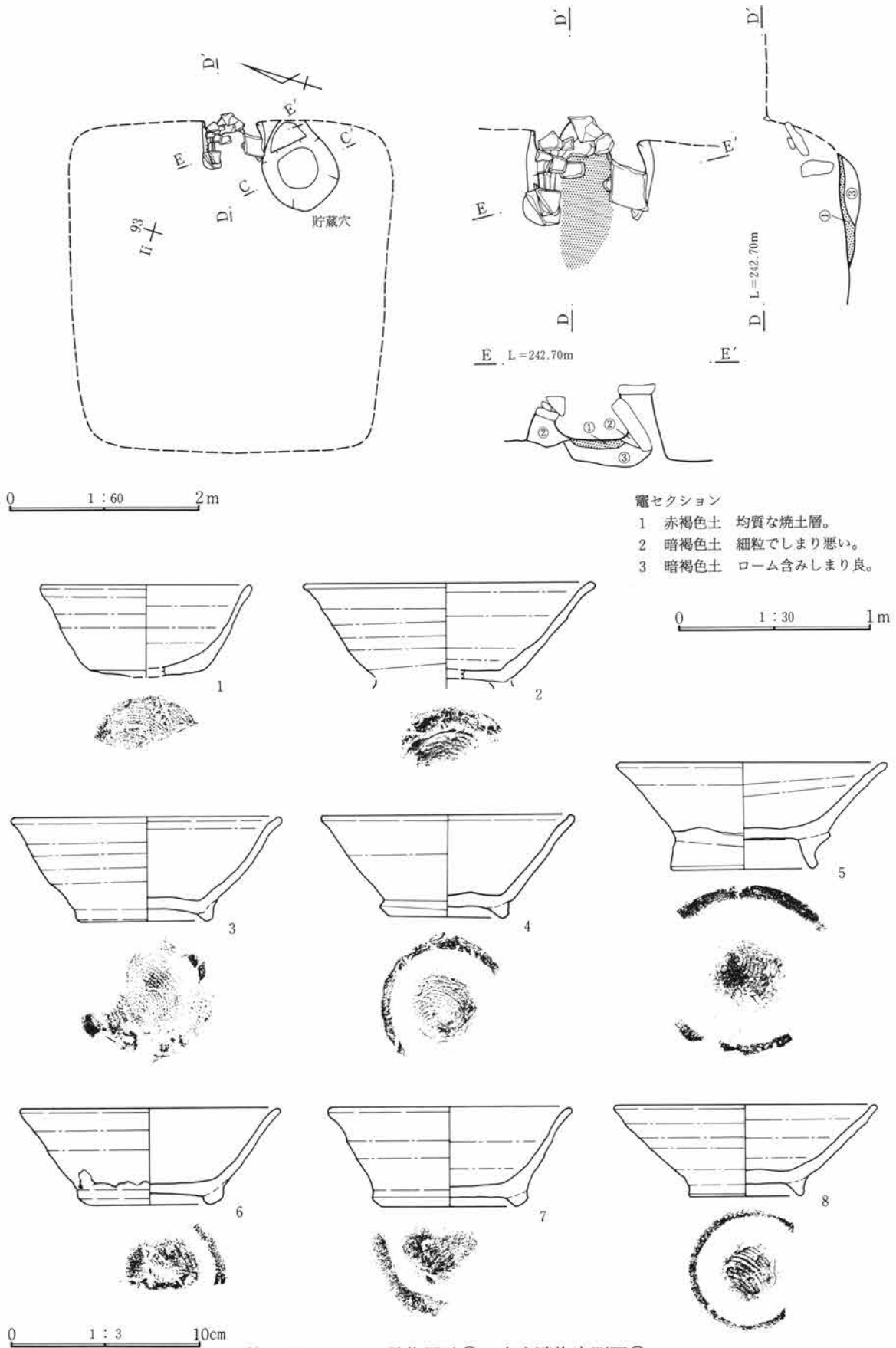
貯蔵穴 住居東壁の竈南側に所在。周溝 なし。柱穴 なし。

出土遺物 小破片が多いが、遺物はかなり多く出土している。特に住居東半の竈・貯蔵穴周辺に多く分布している。主な器種は、須恵器坏(1)・埴(2~8)・甕(9・10)・壺(11)・羽釜(12~15)がある。また、特筆すべき遺物として、3本の脚を持つ小型の羽釜(16)が出土している。掘り方 なし。

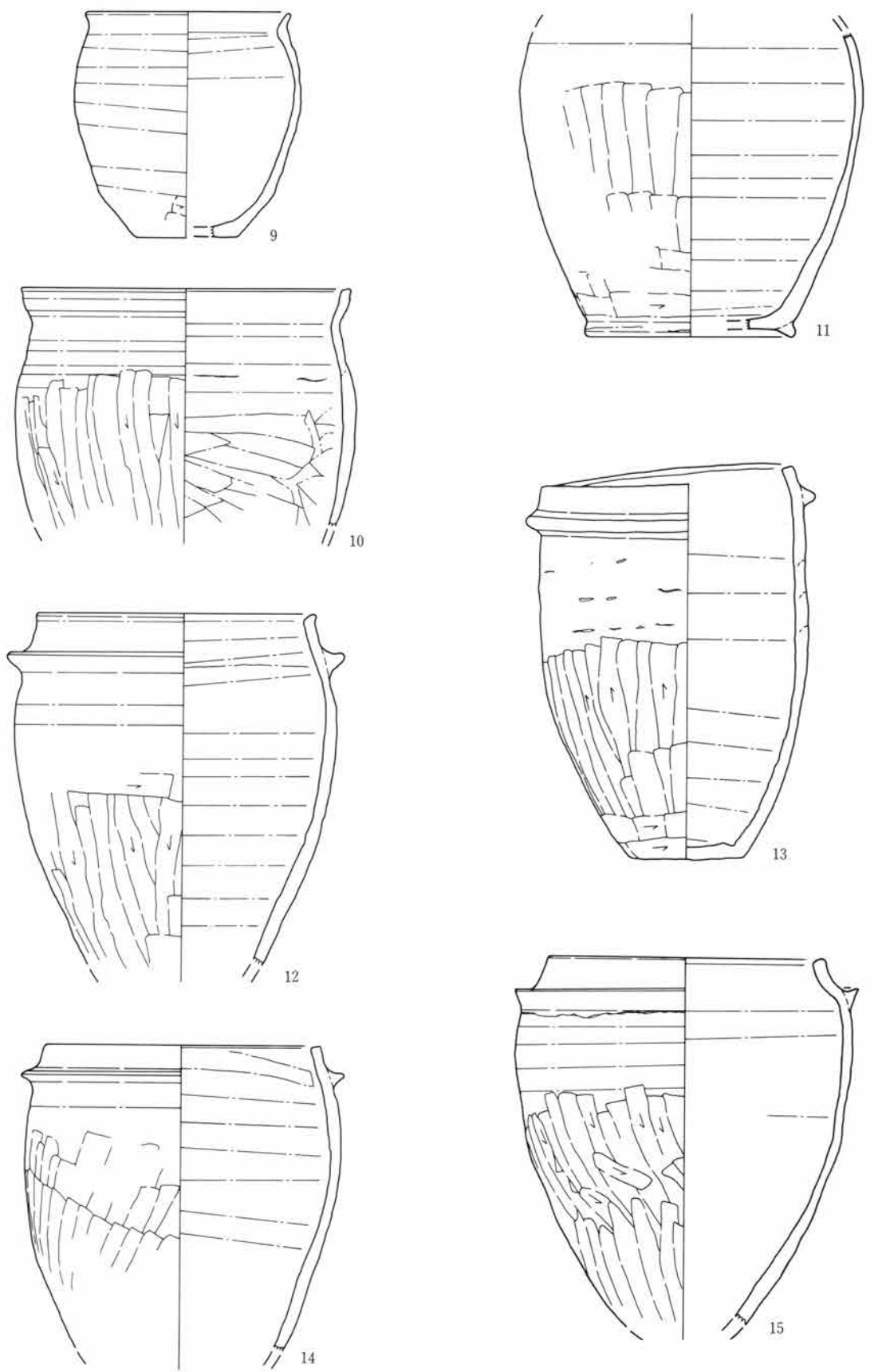
調査所見 出土遺物より平安時代の住居である。



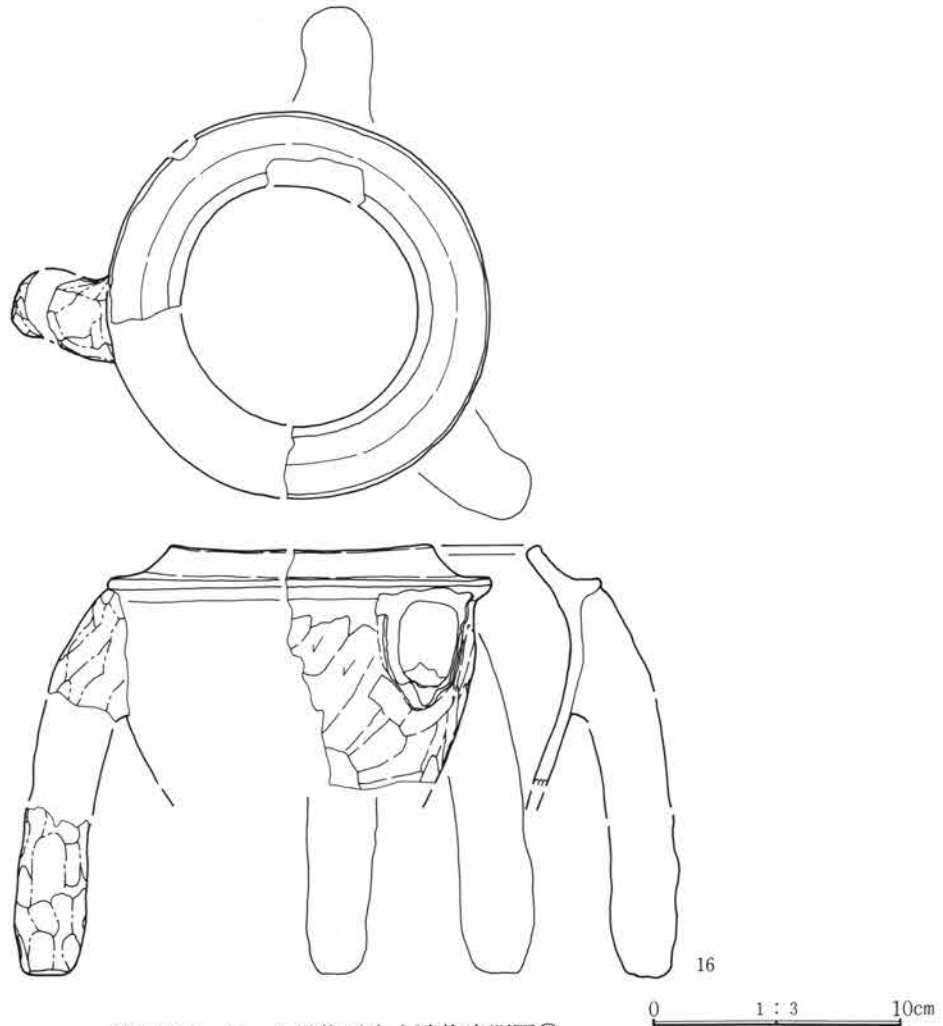
第459図 I-3号住居跡①



第460図 I-3号住居跡②、出土遺物実測図①



第461図 I-3号住居出土遺物実測図②



第462図 I-3号住居出土遺物実測図③

I-3号住居出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
1	須恵器 坏	カマド内 2/5	口(10.8) 底(5.8) 高—	①細砂含む ②良好 ③灰白色	ロクロ整形。口縁端部わずかに外反。底部回転糸切り。	
2	須恵器 塊	床密着 1/4	口15.0 底— 高—	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁端部は外反。底部回転糸切り。切り離した後高台貼付するが、高台部は剥落。	
3	須恵器 塊	貯蔵穴内 2/3	口13.8 底(7.0) 高5.3	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③灰黄色	ロクロ整形。口縁端部外反。底部右回転の回転糸切り、切り離した後高台貼付。	
4	須恵器 塊	貯蔵穴内 2/3	口13.0 底(6.7) 高5.2	①細砂含む ②良好 ③黄灰色	ロクロ整形。口縁端部やや肥厚。底部右回転の回転糸切り、切り離した後高台貼付。	
5	須恵器 塊	カマド内 2/3	口13.8 底7.3 高5.5	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁端部わずかに外反。底部回転糸切り、切り離した後高台貼付。	
6	須恵器 塊	床密着 1/3	口(13.5) 底(7.5) 高4.9	①細砂(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③淡黄色	ロクロ整形。口縁端部わずかに外反。底部回転糸切り、切り離した後高台貼付。	
7	須恵器 塊	床密着 1/3	口(12.5) 底(7.0) 高5.1	①砂粒(ごくまれに 小礫)含む ②良好 ③灰白色	ロクロ整形。口縁端部は外反。底部回転糸切り、切り離した後高台貼付。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種器種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
8	須恵器 壺	覆土 1/3	口(13.5) 底 6.0 高 4.6	①砂粒含む ②良好 ③灰色	ロクロ整形。底部回転糸切り、切り離し後高台貼付。	
9	須恵器 小型甕	+16cm 1/3	口 13.3 底 (6.7) 高 14.9	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁部は屈曲して外反。外面胴部下位へら削り、底部ナデ。	内面胴部上位に部分的に弱い煤付着
10	須恵器 甕	カマド内 口～胴部 上半1/4	口(21.6) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。胴部外面へら削り、内面横ナデ。	
11	須恵器 壺	カマド内 胴下位～ 底部1/4	口 — 底(14.0) 高 —	①砂粒・少量の小礫 含む ②良好 ③赤褐色	ロクロ整形。胴部外面下半へら削り。底部ナデ。貼り付け高台。	
12	須恵器 羽釜	貯蔵穴内 口～胴部 上位1/3	口(18.9) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁部はやや内傾。胴部外面下半へら削り。口縁部内面横ナデ。鏝の形状は断面三角形。	
13	須恵器 羽釜	床密着 1/3	口 16.8 底 7.5 高 26.2	①細砂含む ②良好 ③灰白色	ロクロ整形。胴部外面上位ナデ、接合痕有り。胴部外面下半へら削り、底部へら削り。鏝の形状は断面三角形。口縁部やや内傾。	
14	須恵器 羽釜	カマド内 口～胴部 上位1/3	口(17.8) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③灰白色	ロクロ整形。胴部外面へら削り。口縁部内面横ナデ。口縁部はやや内傾。	
15	須恵器 羽釜	貯蔵穴内 口～胴部 1/3	口(18.0) 底 — 高 —	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	ロクロ整形。口縁部は内傾し、端部でやや直立。鏝の形状は断面三角形。胴部外面中位へら削り、下位へら削り後ナデ。	
16	須恵器 脚付羽釜	貯蔵穴内 口～胴上 半と脚部	口(10.4) 底 — 高(16.7)	①砂粒含む ②良好 ③灰白色	ロクロ整形。口縁部は内傾。鏝の形状は断面三角形。胴部外面へら削り後3ヶ所に脚貼付。脚は成形後指ナデ。	外面は二次的に被熱。

4 中・近世の遺構と遺物

I-塚 (PL71)

位置 Ik~Im-94~96グリッド 主軸方位 N-54°-W

規模と形状 遺跡最北端の、通称「でんじ山」と呼ばれる幅の狭い丘陵の鞍部に位置する。塚は地元でも古くから周知されており、塚の頂上で飛び跳ねると反響音がするという言い伝えも残されている。昭和52年発行の全国遺跡地図群馬県版には、古墳・祭祀跡として登録されている。形状はかなりくずれているが、本来はわずかに長軸方向に長い隅丸の長方形であったと推測される。段築成の痕跡はない。主軸（長方形の長辺方向を主軸とした）は、北西から南東へ延びる丘陵の方向にほぼ一致している。北東方向は、丘陵が近年の土取りによって削平されているため、底辺が一部破壊されている。大きさは、底面が現存で長辺15.60m・短辺11.67m、上面が長辺5.65m・短辺5.51mである。また、表土を取り去った段階では底面の長辺15.04m・短辺11.08m、上面の長辺5.53m・短辺4.90m。現表土からの高さは最大で2.54mである。

出土遺物 塚の盛土内から縄文~平安時代までにわたる各期の土器・石器が出土しているが、出土状況からは確実に塚に伴う遺物は確定できなかった。

調査所見 この塚の構築方法は、まず周囲のAs-B軽石混じりの褐色土やロームをドーナツ状に盛り（一次盛土）、次いでその中にローム混じりの土を入れ込んでいる（二次盛土）。塚の基盤はAs-B混じりの暗褐色土であり、さらにその下部に多量のAs-Bを含む土がみられる。また、塚の盛土の上にはAs-A軽石を含む土がのっていることから、塚の構築時期はAs-B降下（12世紀初頭）後、As-A降下（1873年）以前であることが分かる。塚の盛土直下には小規模な墓壇がみられ（塚下1~3号墓）、多量の焼けた骨片や銅銭（皇宗通宝・熙寧元宝）などが出土している。この他に、大小の礫をほぼ環状に配した集石遺構（塚下1号集石）と、周壁が焼けて焼土化した方形の墓壇（塚下4号墓）が検出されている。また、盛土の直下ではないが、基盤層の上部に、焼けた骨粉と炭化物を含む小さな土坑がセクションで確認されている。これらの遺構が、塚と関連を持つか否かは不明である。塚構築後、江戸時代17世紀になると、丘陵鞍部の南斜面は墓域として利用されるようになり、塚の裾野部分にも複数の墓壇が作られる。また、塚の中央部にはかなり深い堅穴が掘り込まれており、内部より19世紀から幕末期の染付壺破片が出土している（I-2号土坑）。盗掘を意図して掘られたものであろうか。

塚下遺構群

塚の盛土を除去したところ、下部から小規模な墓壇4基・集石1基が発見された。これらは、塚盛土の外縁部の下より見つかった。調査時には、直接塚につながる遺物などは発見されなかったが、他に塚の構築時に近い時期の遺構がみられないことから、何らかの関連を持つと考えられる。そのため、ここでは塚下遺構群として、一括して扱うこととした。

墓壇

I-塚下1号墓壇 (PL72)

II-96グリッドに所在。塚の盛土を除去した段階で検出された。塚の基盤のAs-B軽石混じり黒色土上面に、比較的薄く平坦な長径20~40cm程の礫を3個東西に並べてある。石組の全長は74cm・幅45cm、主軸方位はN-80°-Wである。掘り込みなどは確認できなかったが、石の上と周辺に多量の焼けた小骨片が散らばっていたため墓とした。骨片の他には遺物の出土ない。

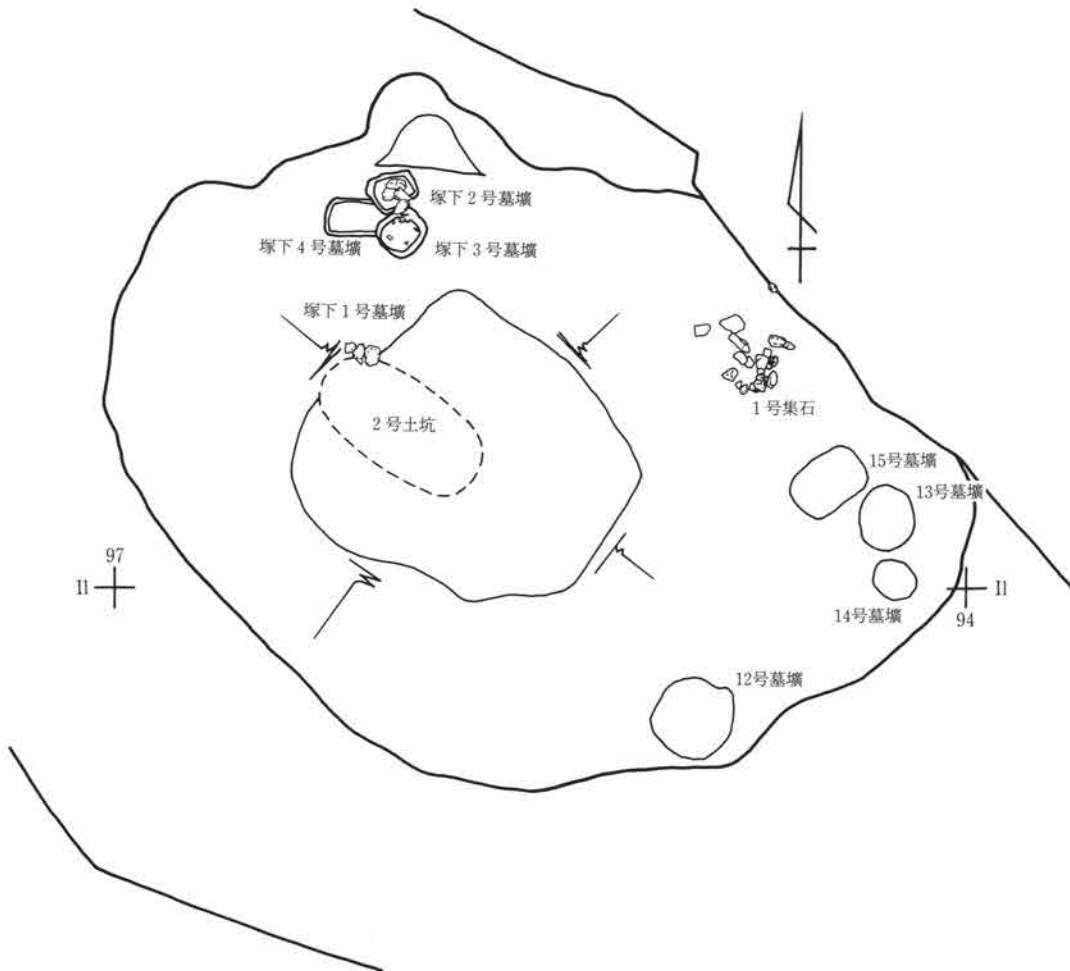
第3章 検出された遺構と遺物

I-塚下2号墓墳 (PL72・157)

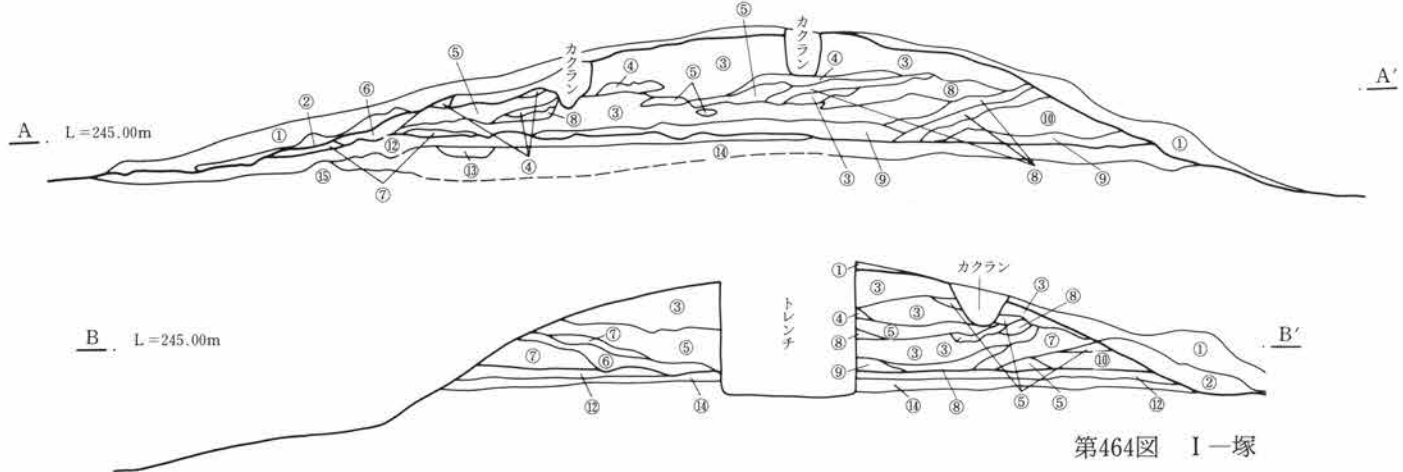
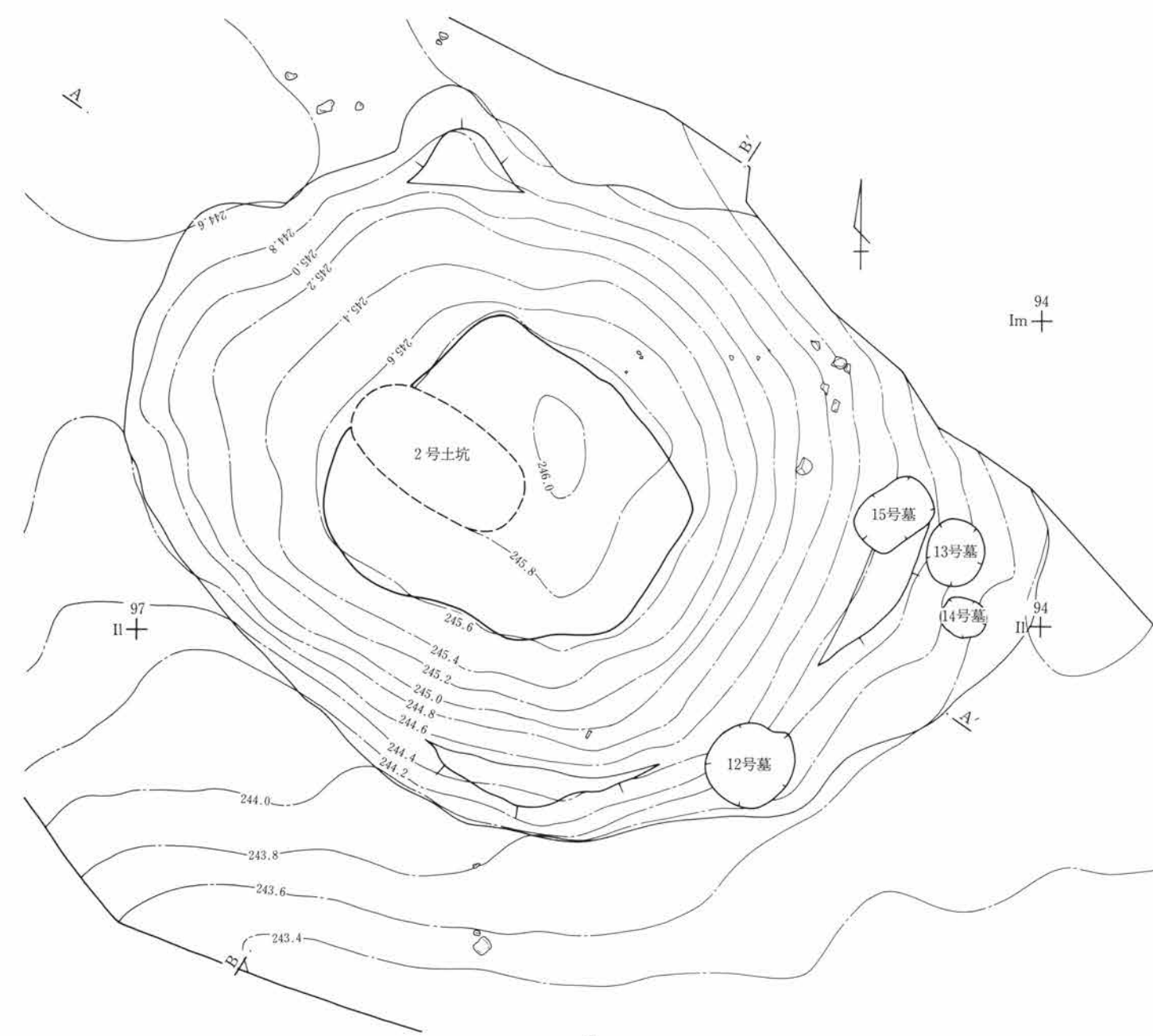
Im-96グリッドに位置する。塚の盛土直下より検出。上面に4個の亜角礫を配し、下部に浅い土坑がみられる。土坑は東西方向に長い楕円形で、長軸105cm・短軸81cm・深さ8cm、主軸方位はN-99°-Eである。この土坑は、塚基盤のAs-B軽石混じりの黒色土上面より掘り込まれている。塚下1号墓と同様、石の上と周辺に多量の焼けた小骨片が散らばっていた。その他に、覆土中より皇宗通宝が1枚出土している。

I-塚下3号墓墳 (PL72・157)

Im-96グリッドに位置する。塚の盛土直下より検出。形状はほぼ円形で、最大径が98cm・深さ16cmである。墓墳の掘り込み面は、塚基盤のAs-B軽石混じりの黒色土上面である。内部には多量の焼土と炭が散らばっていた。この他に銅銭が2枚出土しており、うち1枚は皇宗通宝、もう1枚は熙寧元宝である。



第463図 I-塚下遺構配置図

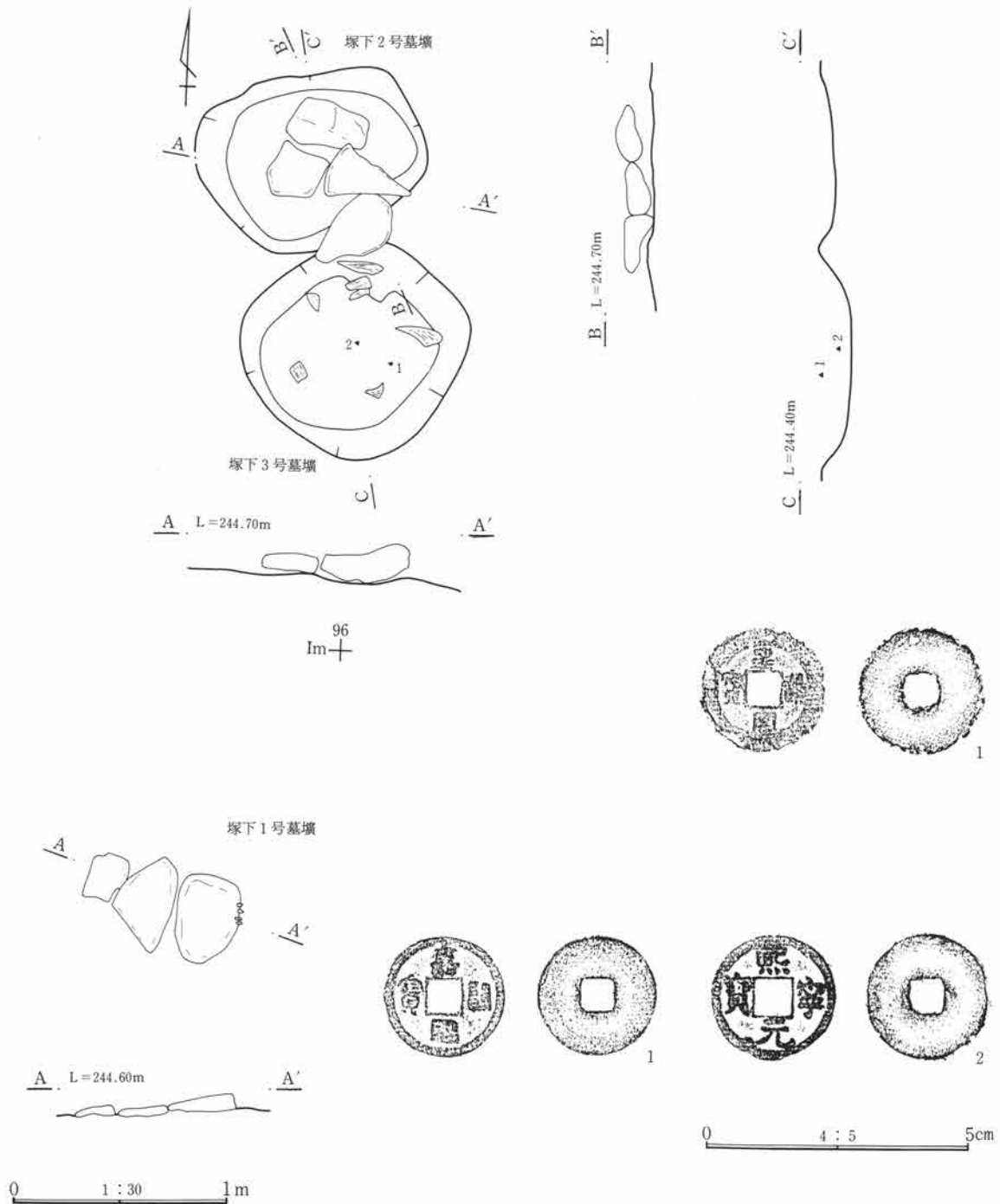


セクション

- 1 褐色土 細粒でしまり悪い。ロームブロックを所々含む。現表土。
- 2 褐色土 バサバサしてしまり悪い。AS-A軽石を含む。塚盛土を覆う。
- 3 黄褐色土 多量のロームを含む。As-BP・褐色土混入。(以下塚盛土)
- 4 黄褐色土 ローム層中のAs-BPを多量に含む。
- 5 褐色土 ロームを含みバサバサしてしまり悪い。
- 6 褐色土 かなりのローム含む。
- 7 褐色土 少量のローム、わずかのAs-BP含む。
- 8 暗褐色土 ローム・As-BPを含む。
- 9 褐色土 ロームと褐色土の混土层。
- 10 褐色土 ロームブロック・As-B軽石を含みしまり悪い。
- 11 黄褐色土 As-B軽石・黒色土含む。
- 12 暗褐色土 As-B軽石わずかに含む。(以下地山)
- 13 黒色土 細粒で炭化物と骨粉を含む。
- 14 暗褐色土 As-B軽石をわずかに含む。12層に比べやや色調明るい。
- 15 暗褐色土 多量のAs-B軽石含む。

第464図 I一塚

0 1:100 5m



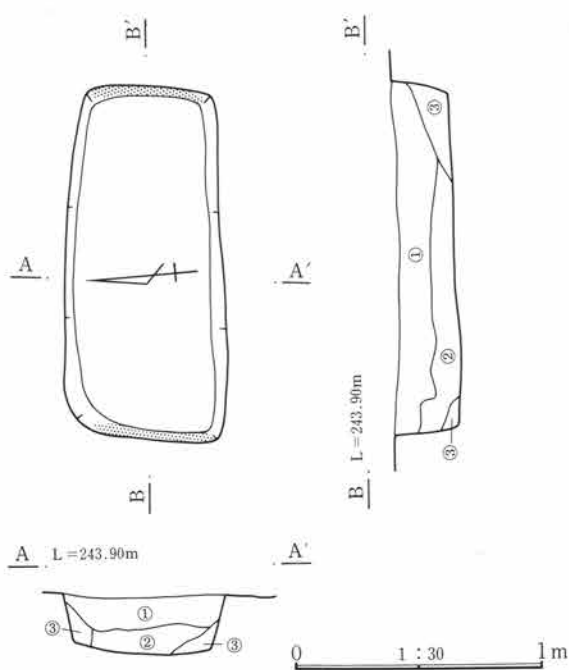
第465図 I—塚下1・2・3号墓壙、出土遺物実測図

I—塚下2号墓出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
1	銅銭	覆土	1.2	0.65	0.1	3.4	完形	皇宗通寶。篆書。

I—塚下3号墓出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
1	銅銭	+14cm	1.2	0.65	0.1	3.4	完形	皇宗通寶。篆書。
2	銅銭	+6cm	1.2	0.65	0.1	2.9	完形	熙寧元寶。真書。



I-塚下4号墓墳

Im-96グリッドに位置する。I-4号住居の調査中に発見されたために、下半部を確認できただけであった。塚の下から検出され、塚下3号墓とも一部重なる。このため、一連の遺構である可能性も考えられるが、調査時には確認できなかった。形状は長方形で、現状で長さ142cm・幅64cm・深さ26cm、主軸方位はN-87°-Wである。覆土中に多量の炭化物を含み、壁は焼けて一部焼土化している。骨片などの遺物の出土はないが、形状から墓墳と考えられる。

セクション

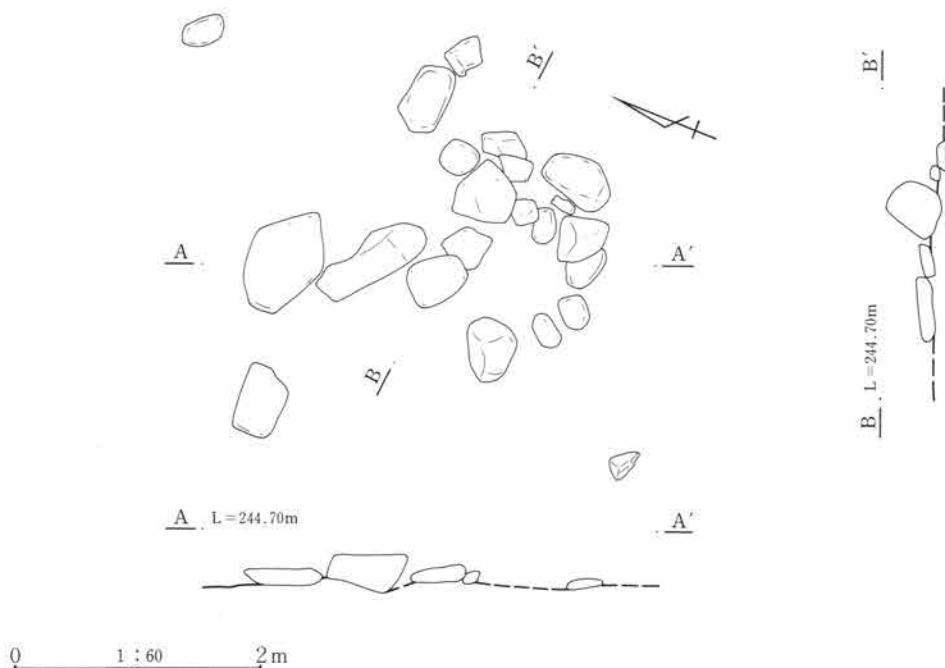
- 1 暗褐色土 少量の炭化物含みしまり悪い。
- 2 黒色土 多量の炭化物含む。下部に焼土混入。
- 3 黄褐色土 地山ロームを主体とし、焼土ブロック含む。

第466図 I-塚下4号墓墳

集石

I-1号集石 (PL75)

II-94グリッドに所在。塚の盛土の直下より検出。一部乱れているが、長さ10~40cm程の大小の礫が環状に置かれている。掘り込みなどはみられない。遺物も出土しなかった。

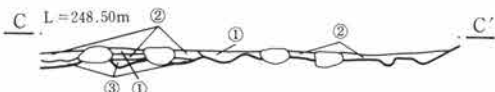
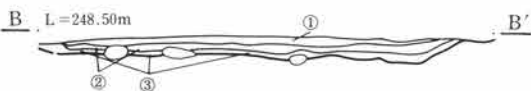
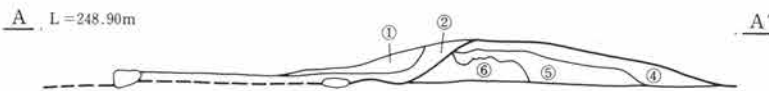
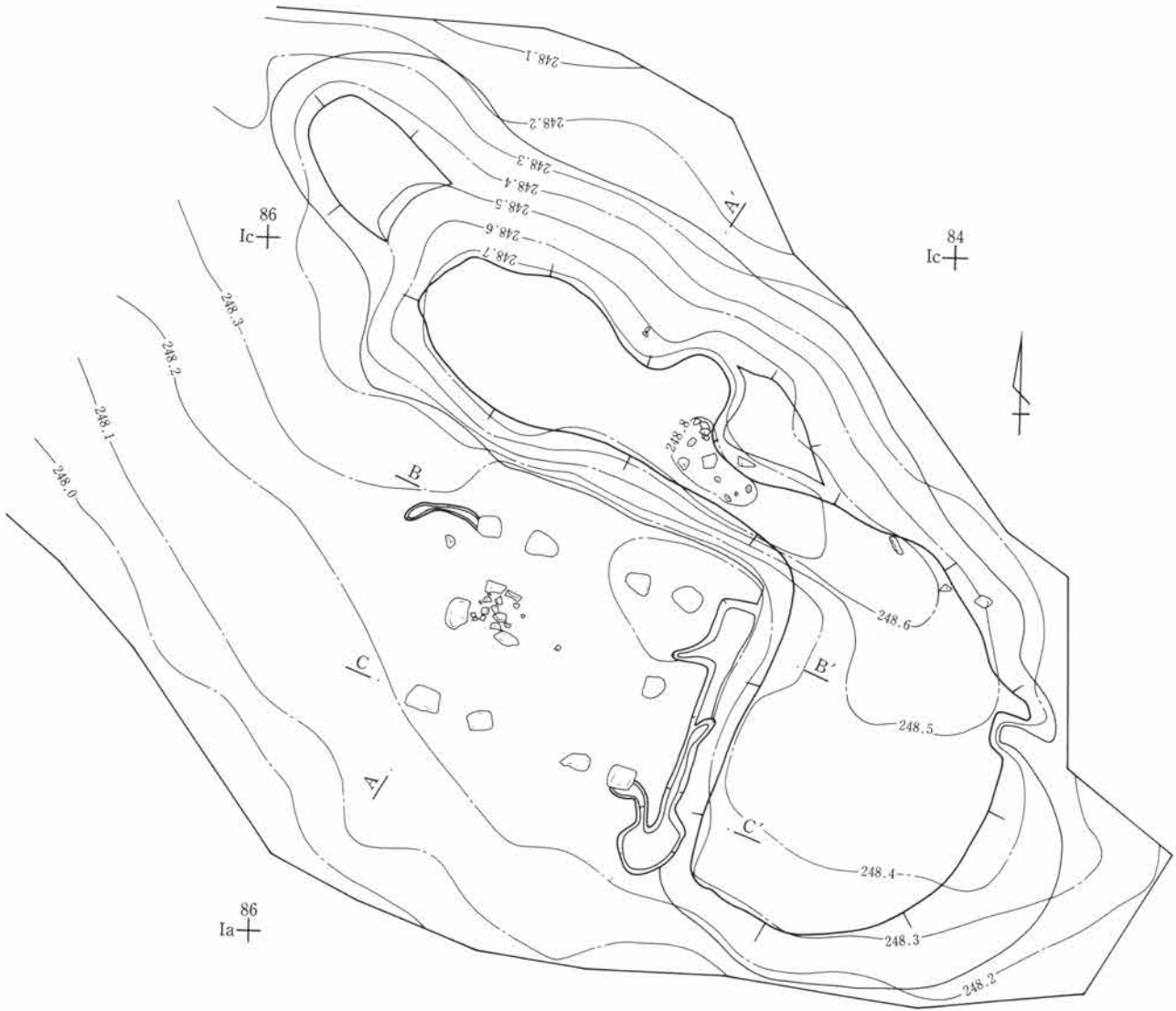


第467図 I-塚下1号集石

I—礎石建物跡 (PL72・73・157・158)

位置 Ia—84・85、Ib—84・85グリッド 主軸方位 N-70°-W

規模と形状 丘陵先端の頂上部分を一部削平して平坦部を造成。削平部では、基盤のかこう岩の岩盤が露出している。北～東側にはL地形に地山を残し、一部盛土した部分がみられる。礎石建物跡はこの平坦部につ



0 1 : 100 4m

セクション

- 1 暗褐色土 As-A軽石を多量に含む。
- 2 褐色土 細粒で弱い粘性あり。
- 3 黄色土 基盤かこう岩起源の小礫を多く含む。
- 4 褐色土 細粒でしまり悪い。盛土部分。
- 5 褐色土 細粒でしまり良。白色粒少量含む。地山部分。
- 6 黄褐色土 基盤かこう岩起源の小礫を多量に含む。地山部分。

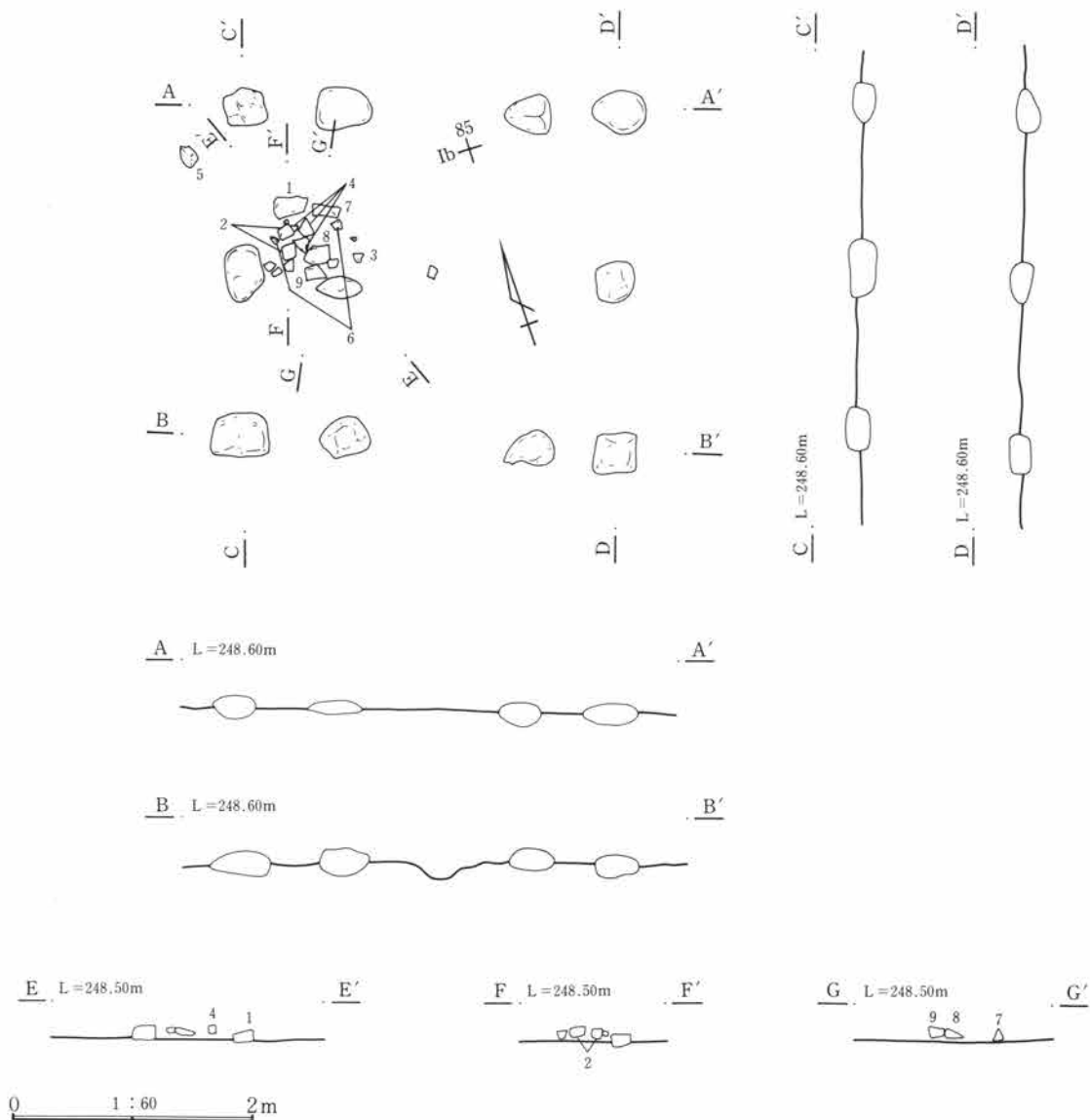
第468図 I—礎石建物跡①

第3章 検出された遺構と遺物

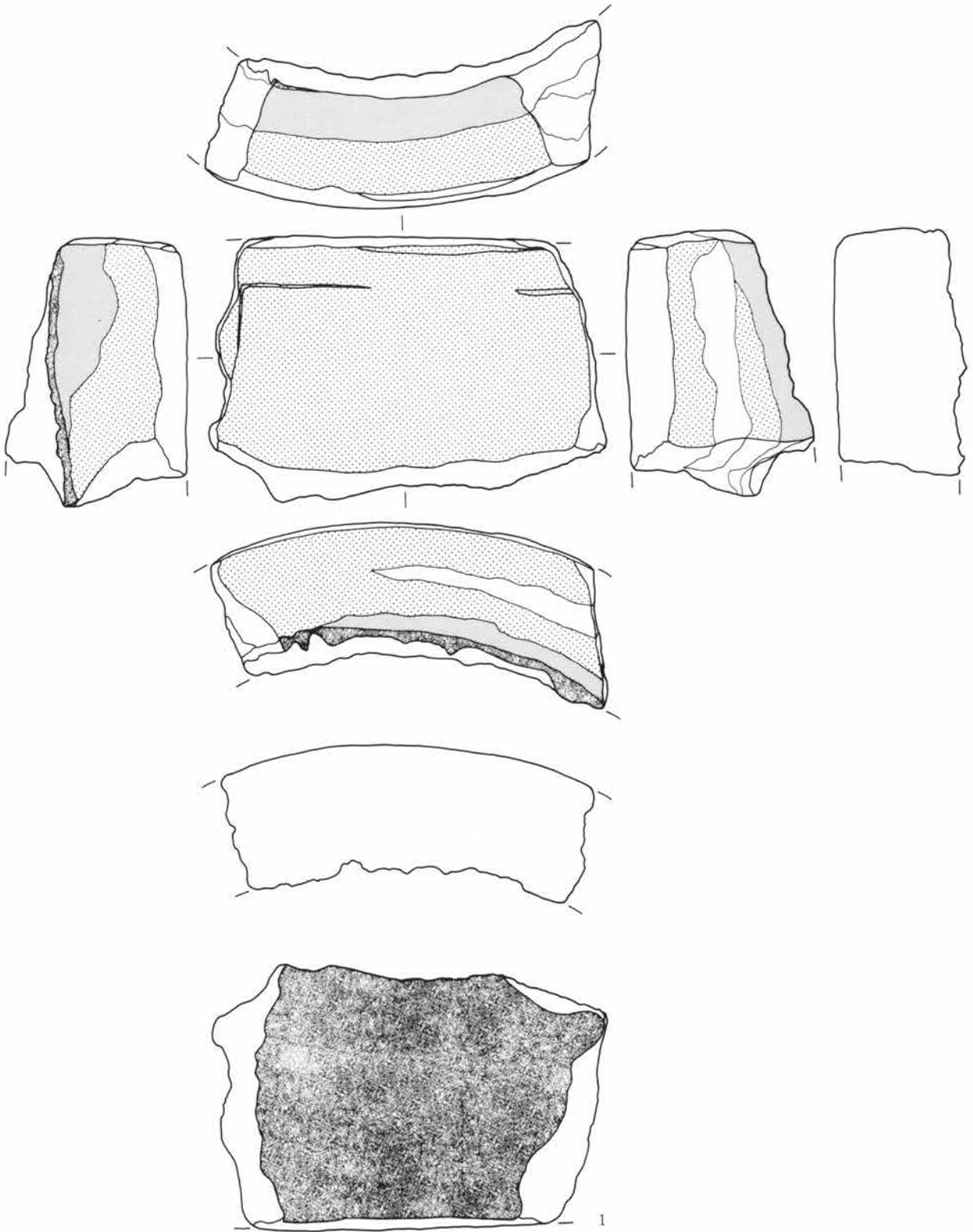
くられている。10個の礎石が、東西方向が長い長方形に沿って東西に4個・南北に3個並べられている。長軸長は3.10m・短軸2.66m。盛土の位置から、この建物は南東方向を向いて立っていたものと思われる。南北の礎石はほぼ等間隔に並ぶが、東西の礎石は中央の2個の間が広く左右がせまい。礎石はいずれも長さ30~40cm、重量2~5kg程もある大きな円礫で、石材は粗粒安山岩・チャート・はんれい岩である。これらの礎石は、基盤の岩盤を浅く削って据えられている。基盤のかこう岩はかなり脆く、比較的容易に削ることができる。建物の東側と北西隅の礎石付近には、基盤を削って浅い溝が掘られている。

出土遺物 西側の礎石間より、溶鉱炉の壁体破片（1~6）と焼けた礫（7~9）が集中して出土した。炉壁破片の内面に粒状の銅が付着していたことから、これらは銅の製造にかかわる遺物と推測される。

調査所見 建物の時期を特定できるような遺物は出土していないが、礎石の上にAs-A軽石を多量に含む層が堆積していたことから、軽石降下以前に構築・廃絶されたものと推定される。建物の性格としては、炉壁などの遺物の出土から、銅の製造にかかわるものである可能性が考えられる。ただし、炉壁の出土した周囲には少量の焼土が分布していたものの、銅滓や羽口・炭化物などは見られなかった。

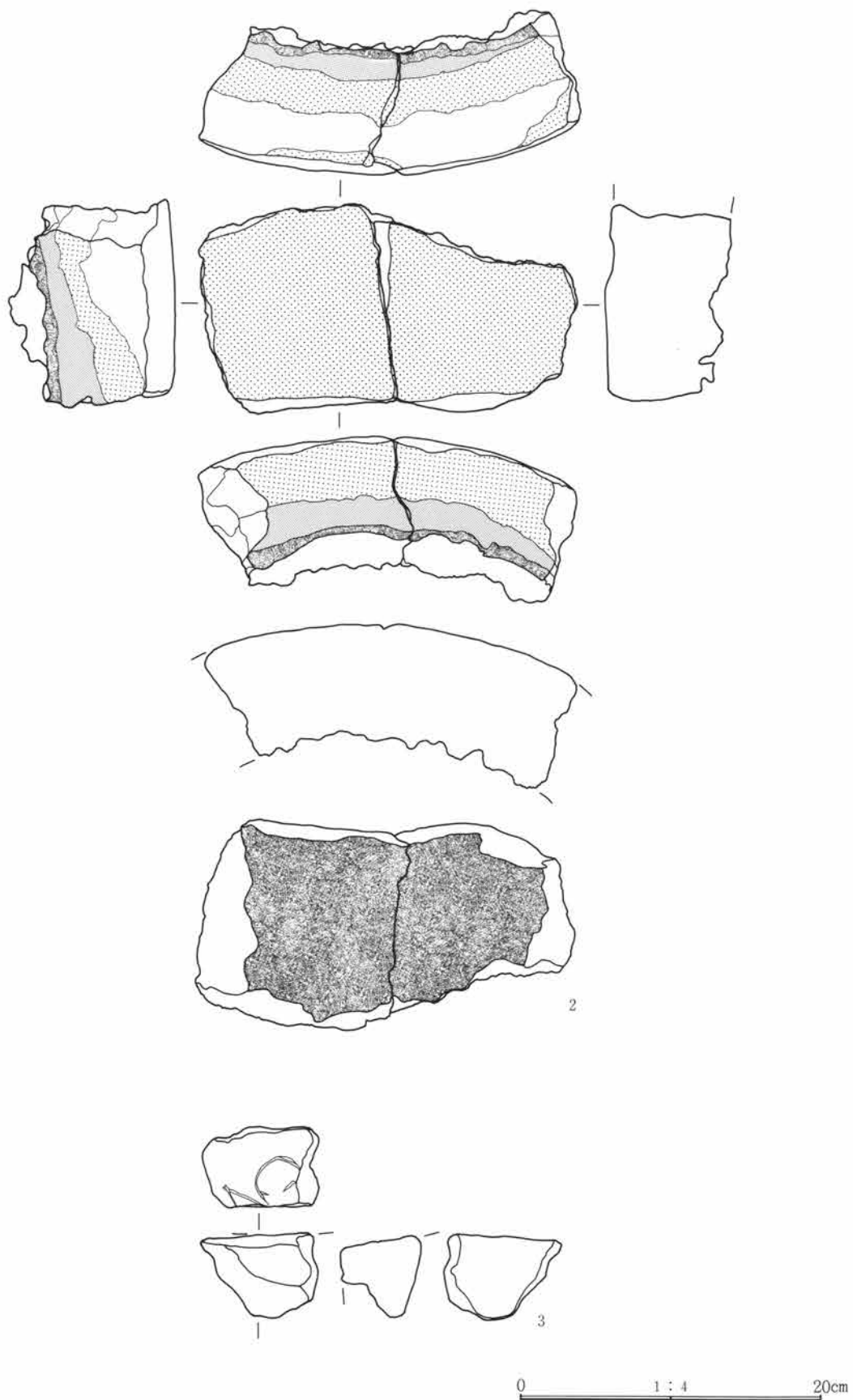


第469図 I—礎石建物跡②

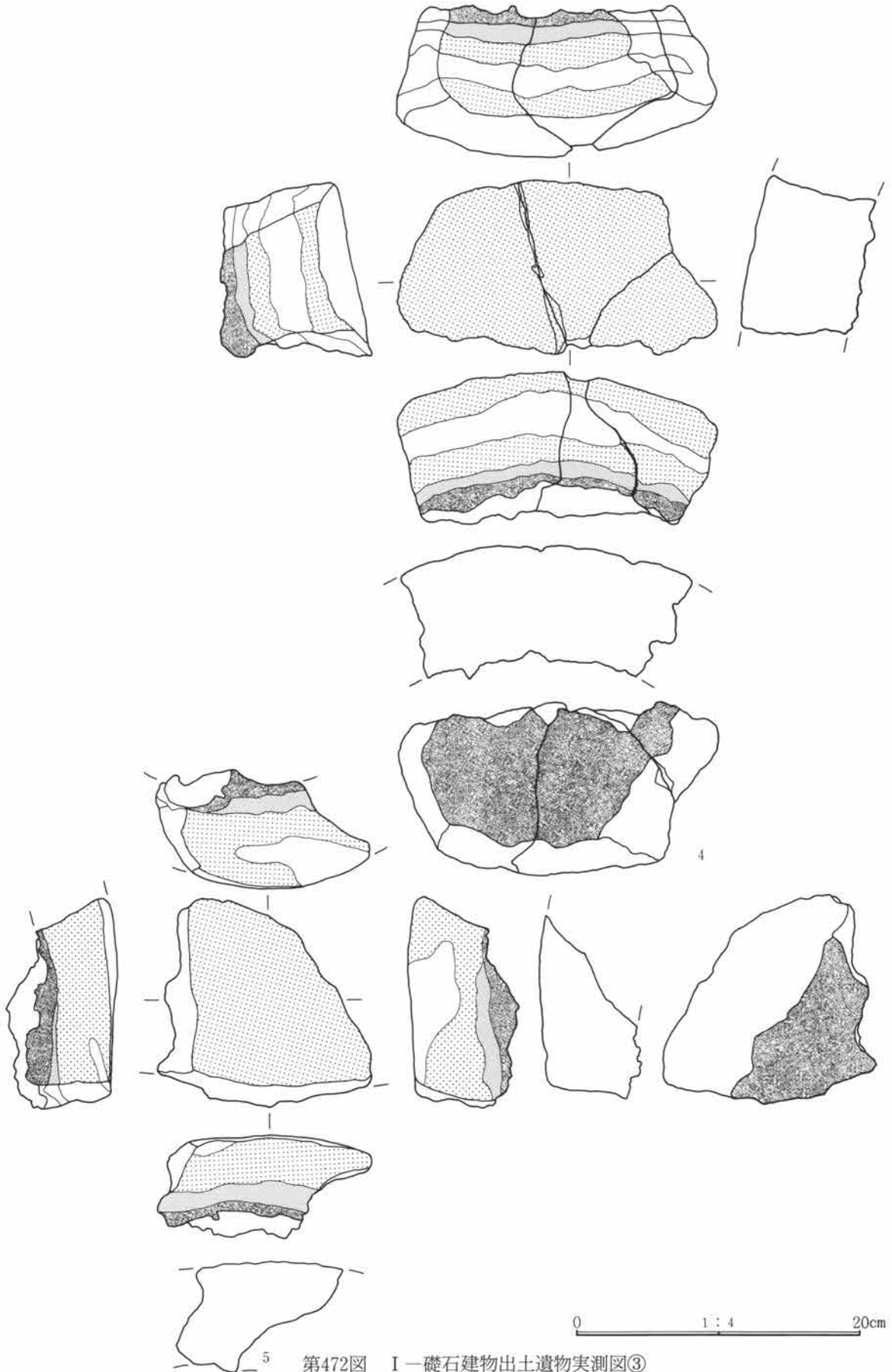


0 1 : 4 20cm

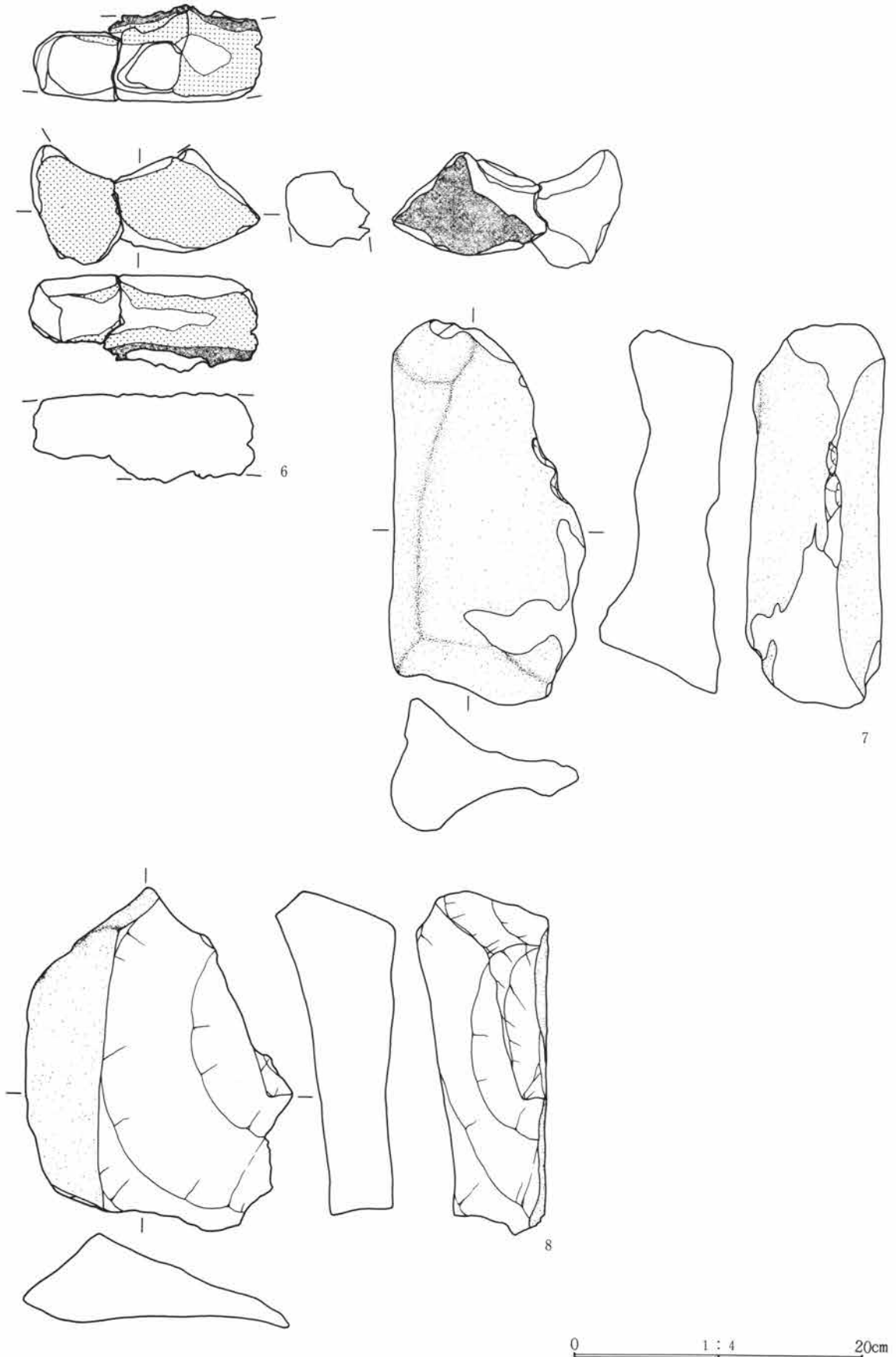
第470図 I—礎石建物出土遺物実測図①



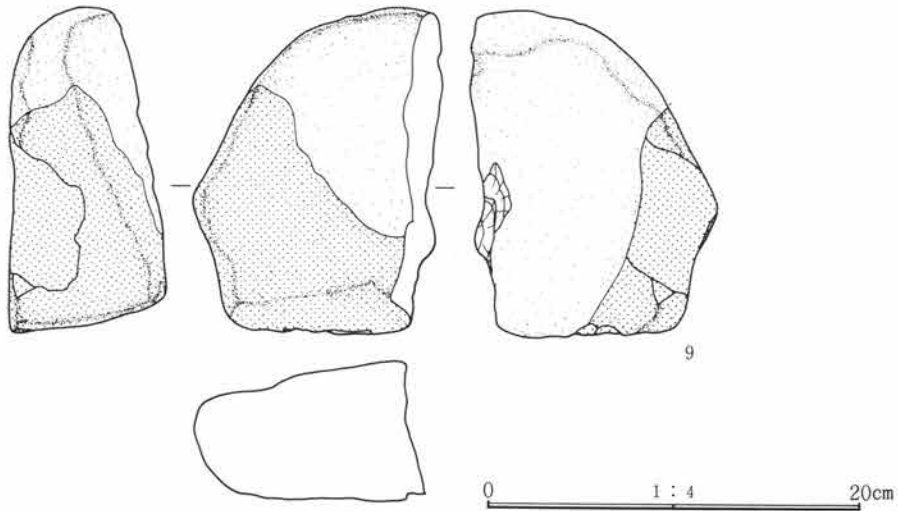
第471図 I—礎石建物出土遺物実測図②



第472図 I—礎石建物出土遺物実測図③



第473図 I—礎石建物出土遺物実測図④



第474図 I—礎石建物出土遺物実測図⑤

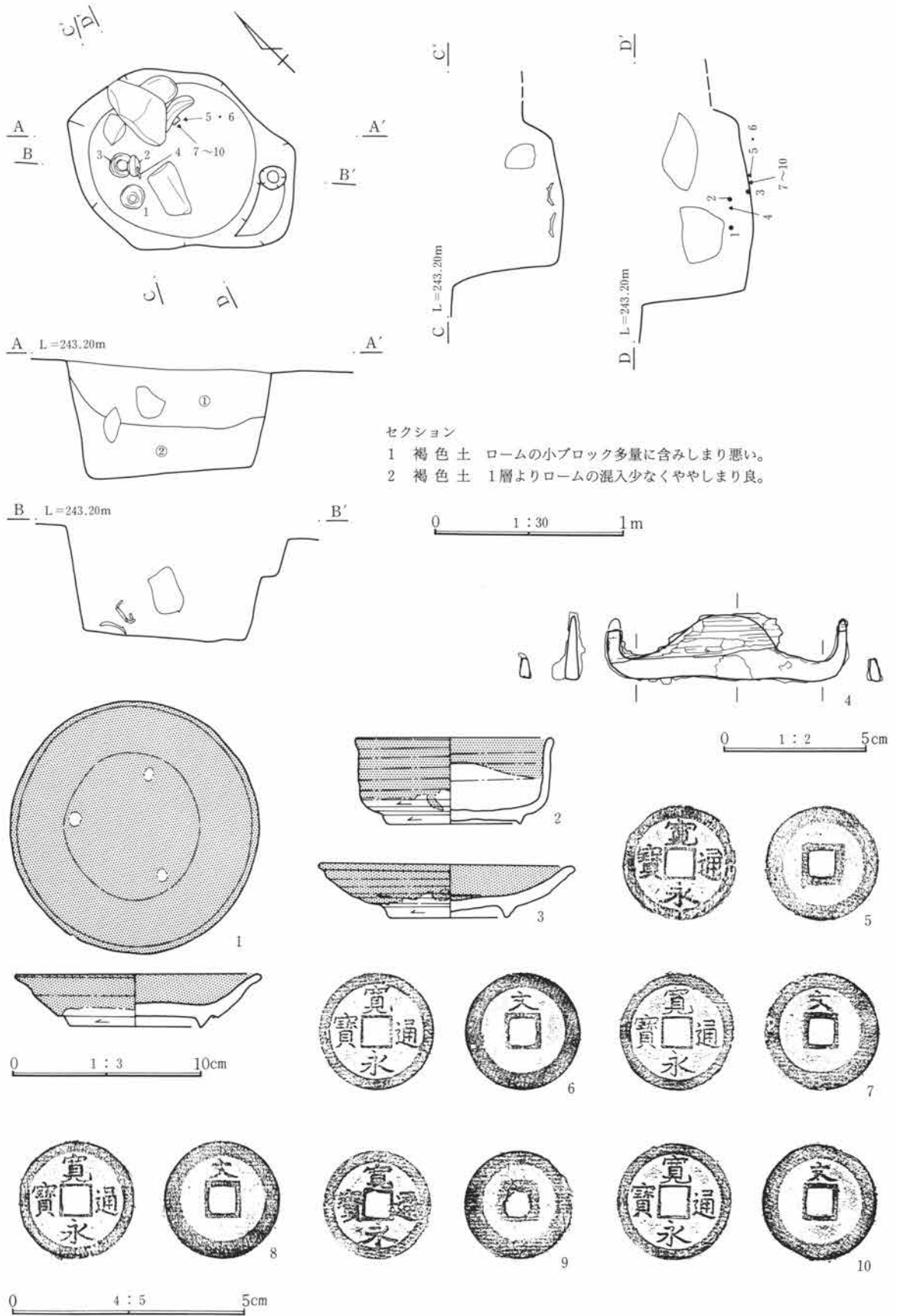
I—礎石建物出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
1	炉壁	床密着	18.0	27.1	8.6	4486.0	破片	炉壁の上部破片。内面は一部溶解してガラス状になっているが、底部より薄い。外面赤化。
2	炉壁	+5cm	13.7	25.1	8.3	2772.0	破片	炉壁の底部破片。内面はガラス状で粒状の金属付着。外面赤化。
3	炉壁	+3cm	5.5	7.7	5.3	164.0	破片	上面にヘラによる線刻あり。外面やや赤化。
4	炉壁	+3cm	12.1	22.4	8.0	2051.0	破片	内面下半一部ガラス状で粒状の金属付着。底部に比べガラス状の部分薄い。
5	炉壁	+8cm	14.5	14.8	4.5	889.0	破片	炉壁の底部破片。内面はガラス状になっており、炭化物付着。外面赤化。
6	炉壁	+3cm	7.5	15.7	6.6	500.0	破片	上面が緩くカーブしている。ふいごの挿入口か。内面はガラス状で粒状の金属付着。外面赤化。
番号	器種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)				石 材	特 徴
			全長	幅	厚さ	重量		
7	磔	+3cm 完形	26.1	13.5	9.1	3380.0	粗粒安山岩	亜角磔状の自然磔。加工の痕跡はない。熱によりほぼ全面赤化。一部表面が剥落している。
8	磔	+3cm 完形	23.3	18.1	9.0	3010.0	粗粒安山岩	盤状の円磔を打ち欠いたもの。一部に火を受けた痕跡あり。
9	磔	+3cm 完形	17.3	13.0	8.3	2490.0	粗粒安山岩	亜円磔を半割。一部熱により赤化。

墓 塚

I—1号墓塚 (PL73・159)

Ij-92・93グリッドに位置する。形状は円に近い楕円で、長辺121cm・短辺93cm・深さ58cmである。主軸はN-46°-Eとかなり東に傾く。埋土上部から大きな磔が出土し、底面付近から17~18世紀の瀬戸・美濃系の火入れ1点(2)・小皿2点(1・3)、火打ちがね1点(4)、銅銭(寛永通宝)6枚(5~10)が見つかる。



第475図 I-1号墓墳、出土遺物実測図

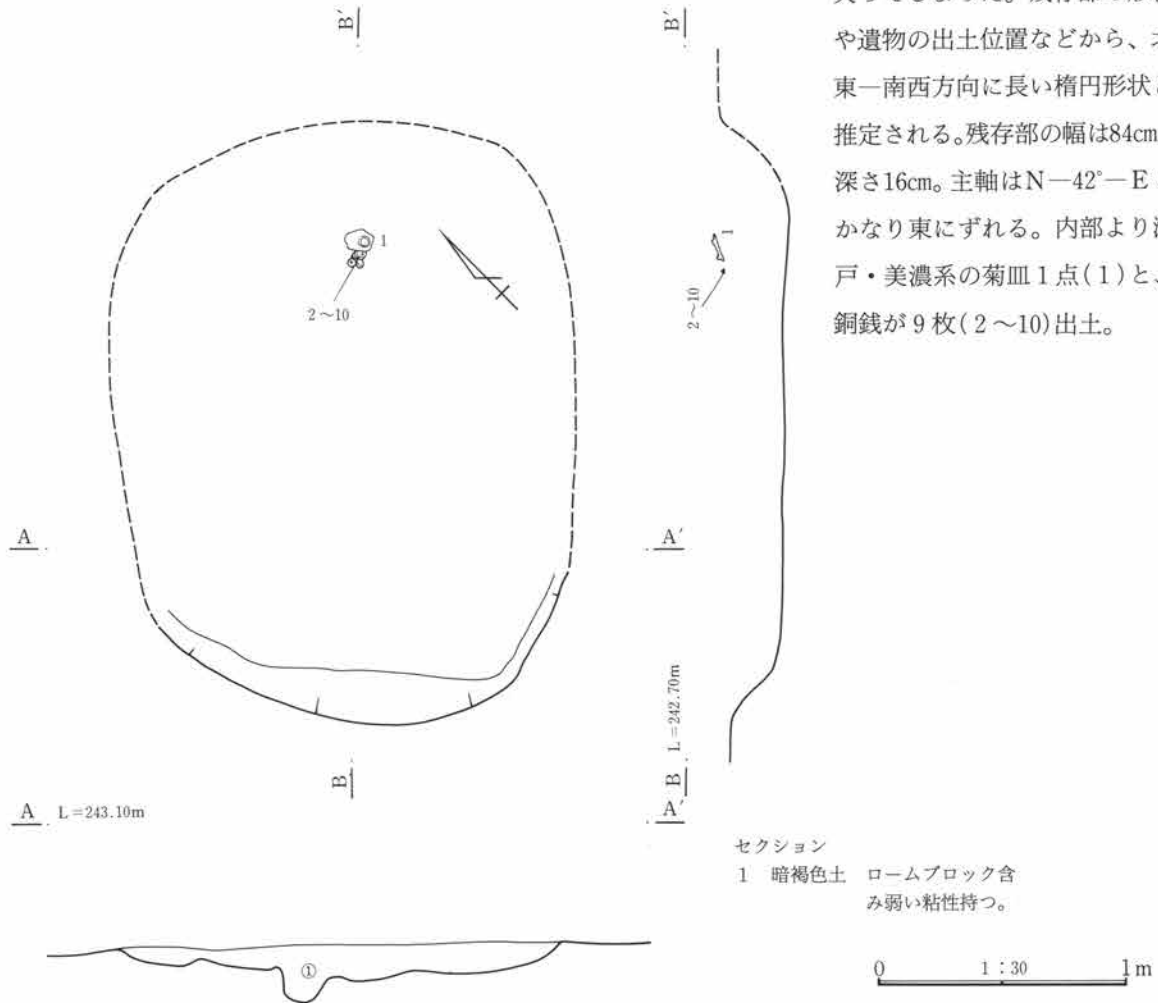
I-1号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量			①胎土 ②焼成 ③色調	特 徴	備 考
			口(cm)	底(cm)	高(cm)			
1	陶器 皿	+12cm 完形	12.6	6.8	2.7	①細砂含む ②堅 緻 ③灰白色	ロクロ整形。削出高台。灰釉。見込に目痕三つ。	瀬戸・美濃 17世紀
2	陶器 火入れ?	+12cm 完形	10.3	7.0	4.4	①砂粒含む ②堅 緻 ③灰白色	ロクロ整形。体部下位回転ヘラ削り。削出高台。錆釉。	瀬戸・美濃 17世紀
3	陶器 皿	床密着 完形	13.4	6.2	2.8	①細砂含む ②堅 緻 ③浅黄色	ロクロ整形。体部下位回転ヘラ削り。削出高台。灰釉。見込に重ね焼時の高台痕。	美濃 18世紀
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
4	火打金	+12cm	8.6	1.1	0.4	16.1	完形	中央部は山形であるが、細くなった両端が上に曲がり菱形との中間のような形態。上部に木質部が残る。
番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
5	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	3.3	完形	古寛永。
6	銅銭	床密着	1.35	0.6	0.1	3.0	完形	新寛永。背文「文」。
7	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	3.4	完形	新寛永。背文「文」。
8	銅銭	床密着	1.35	0.6	0.1	3.4	完形	新寛永。背文「文」。
9	銅銭	床密着	1.2	0.5	0.1	3.5	完形	古寛永。
10	銅銭	床密着	1.35	0.65	0.1	3.5	完形	新寛永。背文「文」。

I-2号墓墳 (PL73・159)

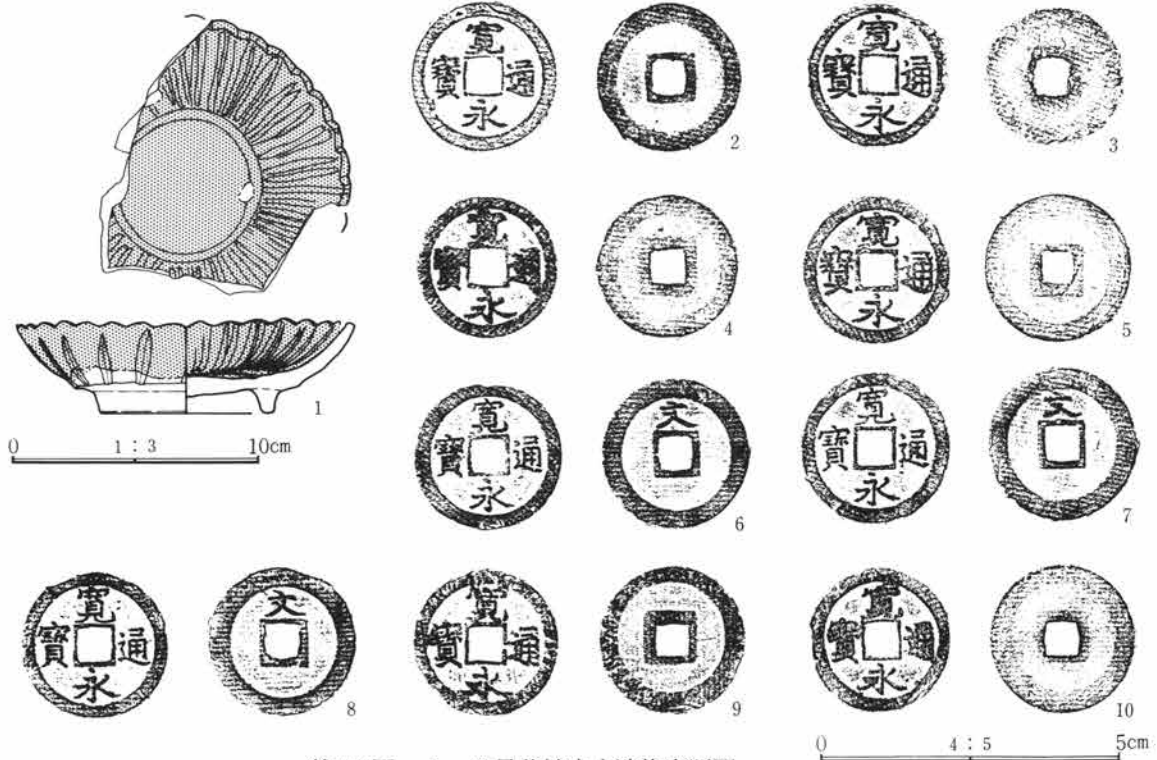
Ii-93グリッドに所在。遺構上面で確認できず、重複するI-1住の調査中に確認されたため、遺構の大半を

失ってしまった。残存部の形状や遺物の出土位置などから、北東-南西方向に長い楕円形状と推定される。残存部の幅は84cm・深さ16cm。主軸はN-42°-Eとかなり東にずれる。内部より瀬戸・美濃系の菊皿1点(1)と、銅銭が9枚(2~10)出土。



第476図 I-2号墓墳

第3章 検出された遺構と遺物



第477図 I-2号墓墳出土遺物実測図

I-2号墓墳出土遺物観察表

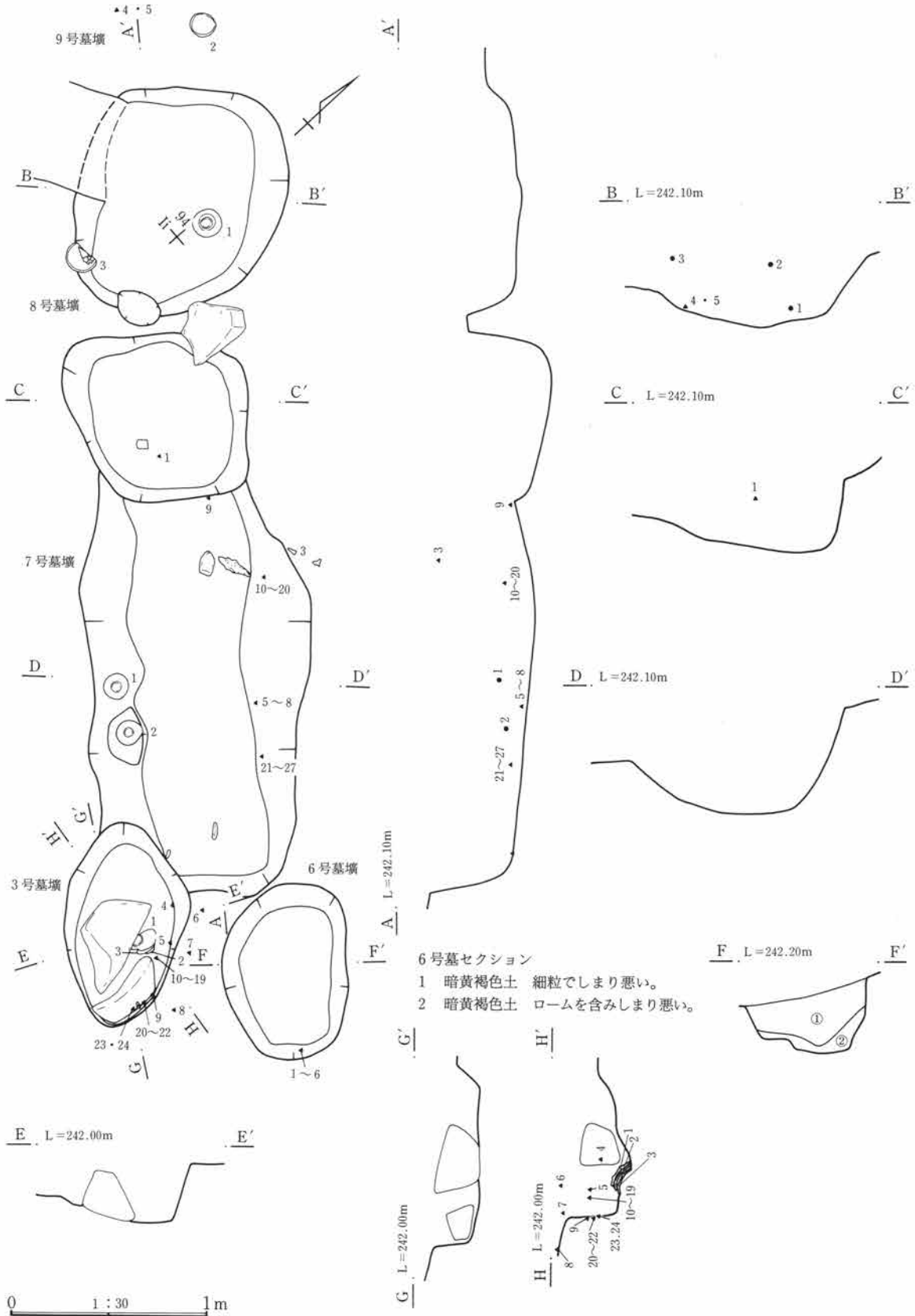
番号	種類	出土状況 残存状況	法量			①胎土 ②焼成 ③色調	特 徴	備 考
			口(cm)	底(cm)	高(cm)			
1	陶器 菊皿	+25cm 1/2	(13.4)	7.0	3.7	①細砂含む ②堅 緻 ③灰白色	ロクロ整形。貼付高台。見込に目痕二つ(本来は三つか)。	瀬戸・美濃 17世紀
番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
2	銅銭	+25cm	1.3	0.6	0.1	3.3	完形	古寛永。
3	銅銭	+25cm	1.15	0.6	0.1	2.8	完形	古寛永。
4	銅銭	+25cm	1.2	0.55	0.1	2.5	完形	古寛永。
5	銅銭	+25cm	1.3	0.6	0.1	3.7	完形	古寛永。
6	銅銭	+25cm	1.3	0.6	0.1	2.7	完形	新寛永。背文「文」。
7	銅銭	+25cm	1.35	0.55	0.1	3.1	完形	新寛永。背文「文」。
8	銅銭	+25cm	1.3	0.6	0.1	4.7	完形	新寛永。背文「文」。
9	銅銭	+25cm	1.25	0.6	0.1	3.4	完形	古寛永。
10	銅銭	+25cm	1.3	0.6	0.1	3.1	完形	古寛永か。

I-3号墓墳 (PL74・159・160)

Ih-93グリッドに位置する。7号墓を一部切っている。形状は北西-南東方向が長い楕円形で、長軸103cm・短軸63cm・深さ34cm。主軸はN-42°-Wとかなり西にふれるが、周辺の等高線の走る方向にほぼ一致する。内部には長さ40~50cm程の大きな礫が2点あり、石の上や墓墳周辺より銅銭21枚(4~24)や骨片が出土している。また底面直上からは、17世紀頃の作と思われる瀬戸・美濃系の菊皿が3点(1~3)重なった状態で見つかっている。

I-6号墓墳 (PL74・160)

Ih-93グリッドに位置する。形状は北西-南東方向に長い楕円形で、長軸89cm・短軸63cm・深さ45cmである。主軸はN-46°-Wで、等高線の方に一致する。内部より銅銭が6枚(1~6)出土している。



第478図 I-3・6・7・8・9号墓墳

I-7号墓墳 (PL74・160・161)

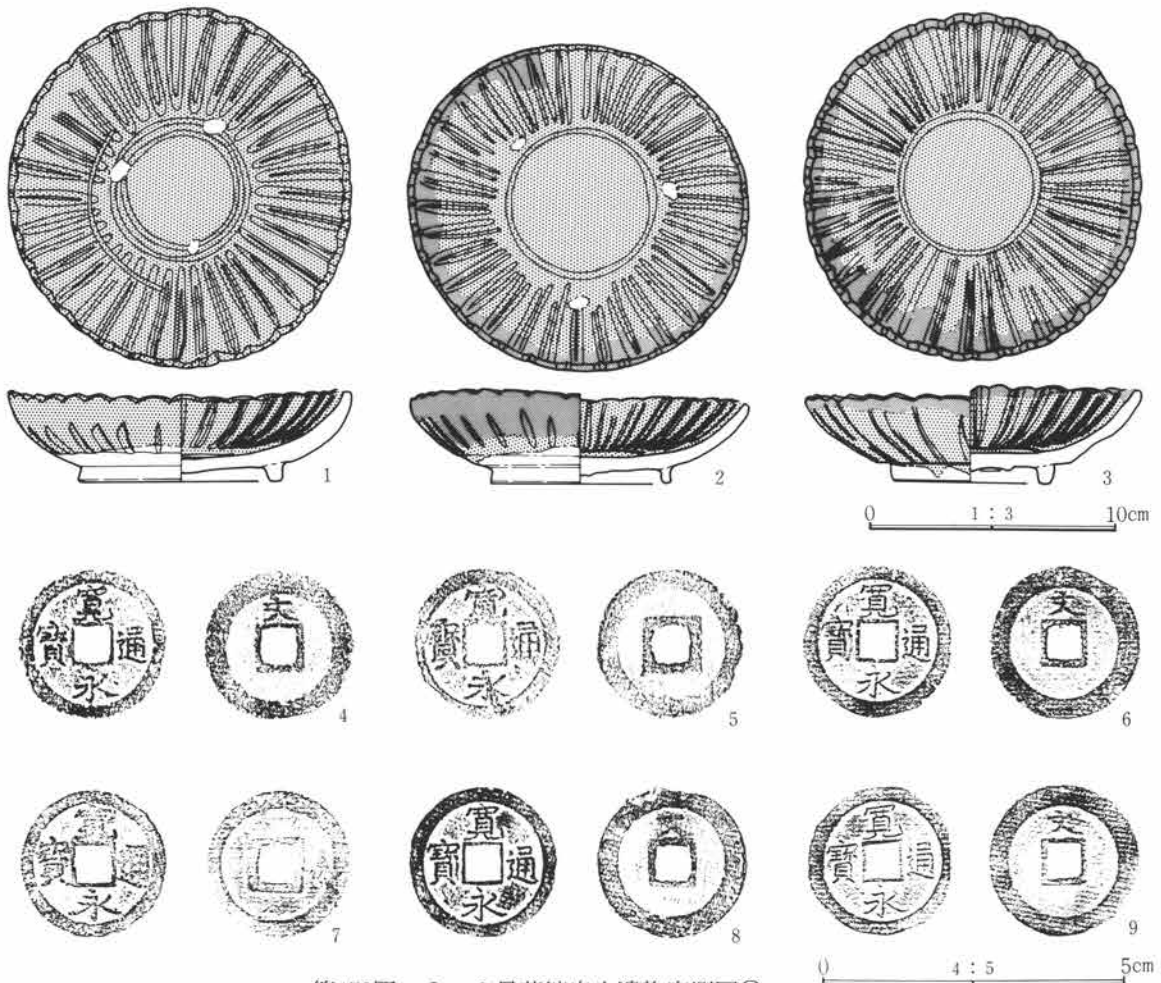
Ih-93グリッドに位置する。3・8号墓に一部切られている。形状は北西-南東方向が長い長方形と推定され、長軸197cm・短軸117cm・深さ62cmである。他の墓墳と比べかなり長軸が長く、2基の墓墳であった可能性もある。主軸はN-51°-Wで、等高線の方に一致する。内部より美濃系の小皿2点(1・2)と、火打ちがね2点(3・4)、銅銭23枚(5~27)が出土している。

I-8号墓墳 (PL74・161)

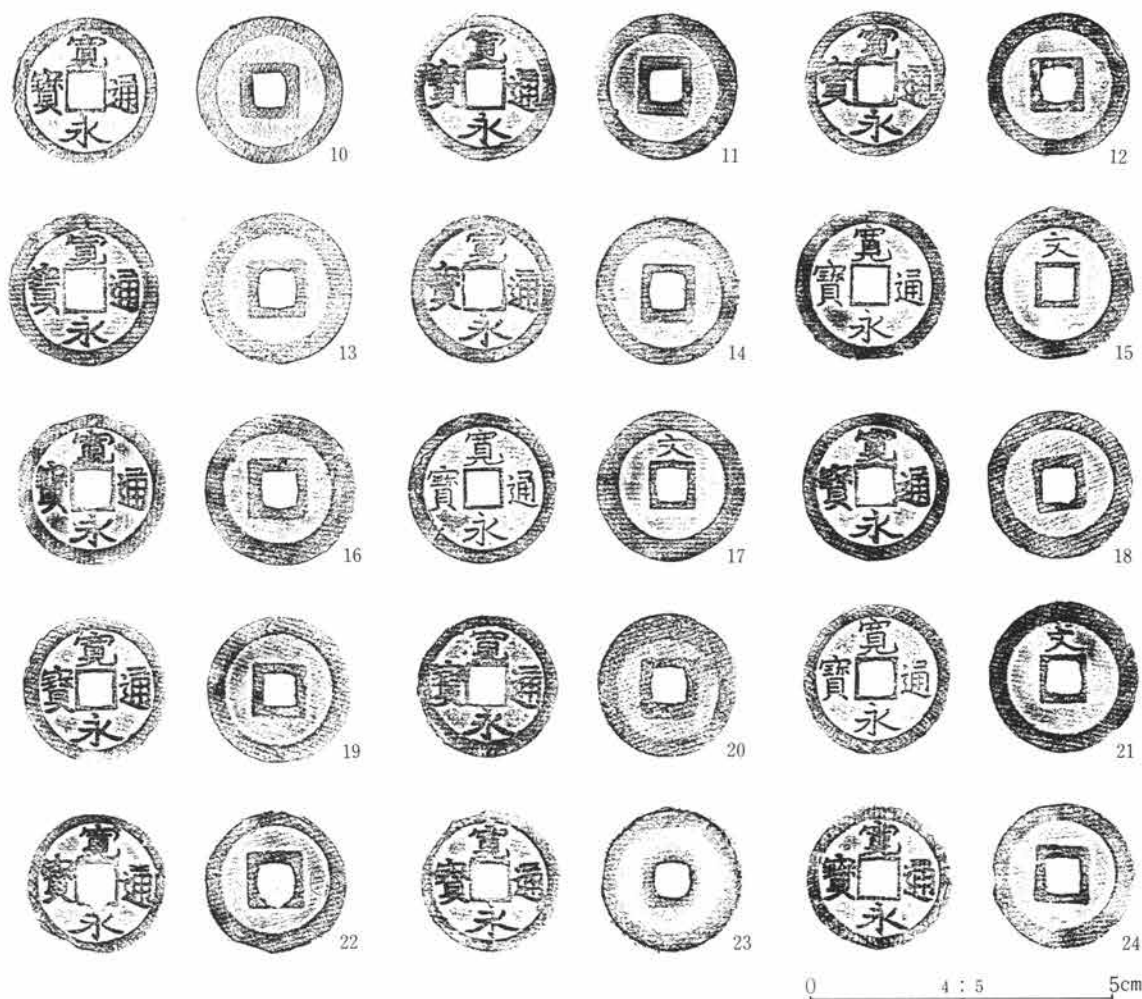
Ih-93グリッドに位置する。7号墓をわずかに切る。形状は、かなり崩れてはいるものの、隅の丸い正方形と推定される。最大径は94cm・深さ53cm。内部より銅銭1点(1)が出土している。

I-9号墓墳 (PL74・161)

Ii-94グリッドに所在。形状は、かなり崩れてはいるが、隅が丸く北西-南東方向に若干長い長方形と推定される。長軸117cm・短軸103cm・深さ44cm。主軸はN-38°-Wで、等高線の方にほぼ一致する。内部より17世紀の作と思われる瀬戸・美濃系の小皿2点(1・3)と銅銭2枚(4・5)が出土している。また、北西外側でも小皿が1点出土しているが(2)、これは17世紀末から18世紀中葉期の肥前系の染付であり、9号墓にともなう可能性は低い。



第479図 I-3号墓墳出土遺物実測図①



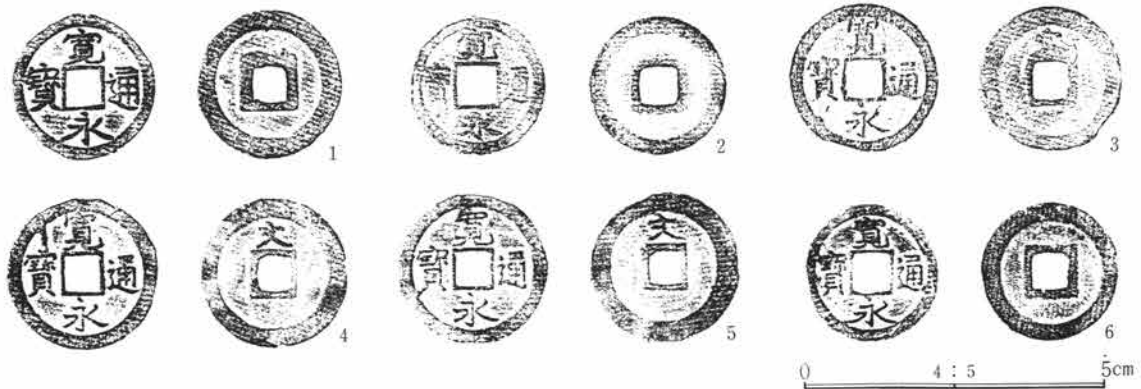
第480図 I-3号墓墳出土遺物実測図②

I-3号墓墳出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量			①胎土 ③色調	②焼成	特 徴	備 考
			口(cm)	底(cm)	高(cm)				
1	陶器 菊皿	床密着 完形	13.4	6.3	3.8	①微砂含む ③浅黄色	②堅緻	ロクロ整形。貼付高台。灰釉。口縁に銅を流し掛ける。目痕無し。	瀬戸・美濃 17世紀
2	陶器 菊皿	床密着 完形	13.5	7.7	3.5	①砂含む ③灰白色	②堅緻	ロクロ整形。貼付高台。灰釉。口縁に銅を流し掛ける。見込に目痕三つ。	瀬戸・美濃 17世紀
3	陶器 菊皿	床密着 完形	13.7	8.1	3.3	①微砂含む ③灰オリーブ	②堅緻	ロクロ整形。貼付高台。灰釉。見込に目痕三つ。内面に布目顯著に残る。	瀬戸・美濃 17世紀
番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴	
4	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	2.4	完形	新寛永。背文「文」。	
5	銅銭	床密着	1.35	0.6	0.1	2.5	完形	古寛永。	
6	銅銭	+30cm	1.35	0.55	0.1	3.0	完形	新寛永。背文「文」。	
7	銅銭	+30cm	1.25	0.6	0.1	1.8	完形	古寛永。	
8	銅銭	+30cm	1.3	0.6	0.1	2.5	完形	新寛永。背文「文」。	
9	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	2.8	完形	新寛永。背文「文」。	
10	銅銭	+4cm	1.25	0.55	0.1	3.6	完形	古寛永。	
11	銅銭	床密着	1.25	0.6	0.1	3.1	完形	古寛永。	
12	銅銭	床密着	1.2	0.65	0.1	3.6	完形	古寛永。	
13	銅銭	床密着	1.35	0.65	0.1	3.6	完形	古寛永。	
14	銅銭	床密着	1.3	0.65	0.1	3.5	完形	古寛永。	
15	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	4.1	完形	新寛永。背文「文」。	

第3章 検出された遺構と遺物

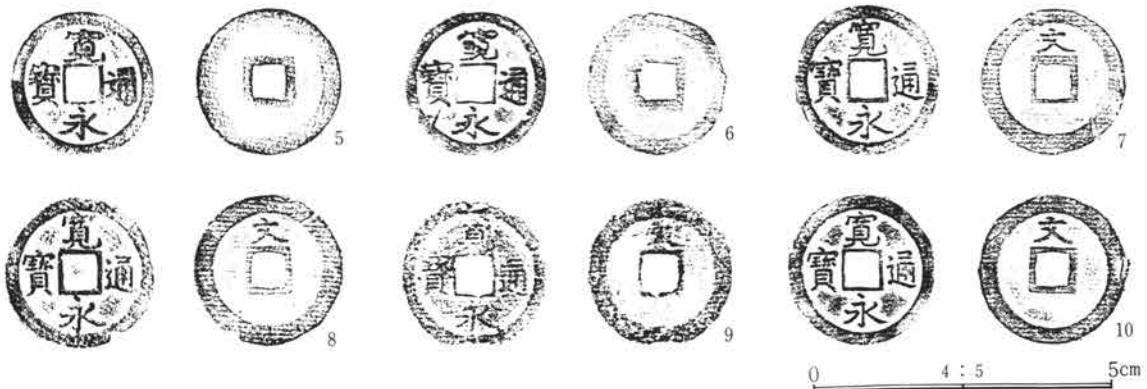
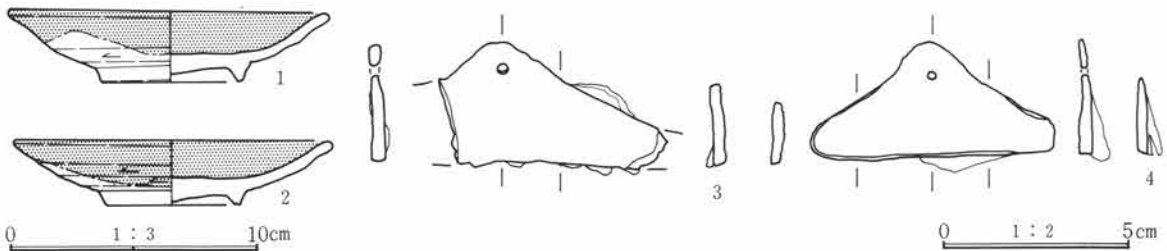
番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
16	銅銭	床密着	1.3	0.65	0.1	3.6	完形	古寛永。
17	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	3.7	完形	新寛永。背文「文」。
18	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	3.6	完形	古寛永。
19	銅銭	床密着	1.25	0.6	0.1	3.2	完形	古寛永。
20	銅銭	床密着	1.2	0.6	0.1	2.1	完形	古寛永。
21	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	3.5	完形	新寛永。背文「文」。
22	銅銭	床密着	1.2	0.6	0.1	3.5	完形	古寛永。
23	銅銭	床密着	1.2	0.6	0.1	3.4	完形	古寛永。
24	銅銭	床密着	1.25	0.6	0.1	3.0	完形	古寛永。



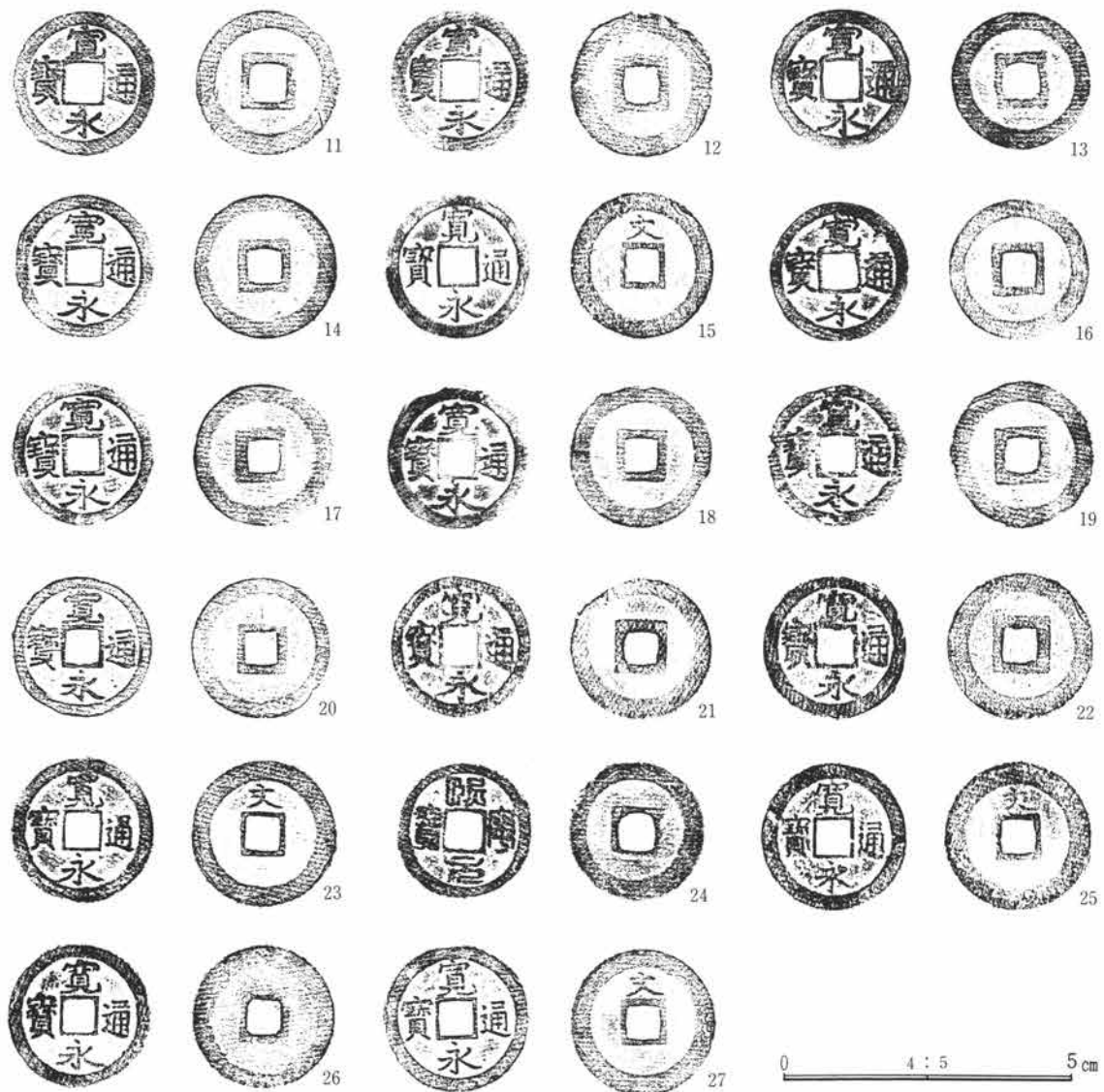
第481図 I-6号墓墳出土遺物実測図

I-6号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
1	銅銭	+35cm	1.3	0.6	0.1	3.2	完形	古寛永。
2	銅銭	+35cm	1.1	0.6	0.1	2.8	完形	新寛永。
3	銅銭	+35cm	1.3	0.65	0.1	2.1	完形	新寛永。背文「文」。
4	銅銭	+35cm	1.35	0.6	0.1	3.6	完形	新寛永。背文「文」。
5	銅銭	+35cm	1.35	0.55	0.1	3.3	完形	新寛永。背文「文」。
6	銅銭	+35cm	1.1	0.65	0.1	2.9	完形	新寛永。



第482図 I-7号墓墳出土遺物実測図①



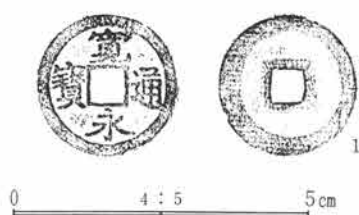
第483図 I-7号墓墳出土遺物実測図②

I-7号墓墳出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量			①胎土 ②焼成 ③色調	特 徴	備 考
			口(cm)	底(cm)	高(cm)			
1	陶器 皿	+16cm 完形	12.8	5.7	2.9	①微砂含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。体部下半回転ヘラ削り。削出高台。灰釉。高台に重ね焼時の痕跡残る。	美濃 18世紀
2	陶器 皿	+10cm 完形	12.6	5.4	2.6	①細砂含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。体部下半回転ヘラ削り。削出高台。灰釉。見込・高台に重ね焼時の痕跡残る。	美濃 18世紀
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
3	火打金	+46cm	3.0	6.5	0.35	11.5	完形	山型の火打金。頂部に透孔あり。錆化著しい。
4	火打金	覆土	3.2	(5.1)	0.35	(13.1)	1/2	山型の火打金。頂部に透孔あり。錆化かなり進む。下縁は使用によりやや湾曲。左側を欠損。
番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
5	銅銭	+3cm	1.25	0.6	0.1	2.8	完形	古寛永。
6	銅銭	+3cm	1.25	0.6	0.1	4.1	完形	古寛永。
7	銅銭	+3cm	1.3	0.6	0.1	2.4	完形	新寛永。背文「文」。
8	銅銭	+3cm	1.3	0.6	0.1	3.5	完形	新寛永。背文「文」。
9	銅銭	+2cm	1.3	0.6	0.1	2.0	完形	新寛永。
10	銅銭	+14cm	1.3	0.6	0.1	3.4	完形	新寛永。背文「文」。
11	銅銭	+14cm	1.3	0.65	0.1	3.4	完形	古寛永。
12	銅銭	+14cm	1.25	0.65	0.1	3.8	完形	古寛永。
13	銅銭	+14cm	1.25	0.6	0.1	3.0	完形	古寛永。

第3章 検出された遺構と遺物

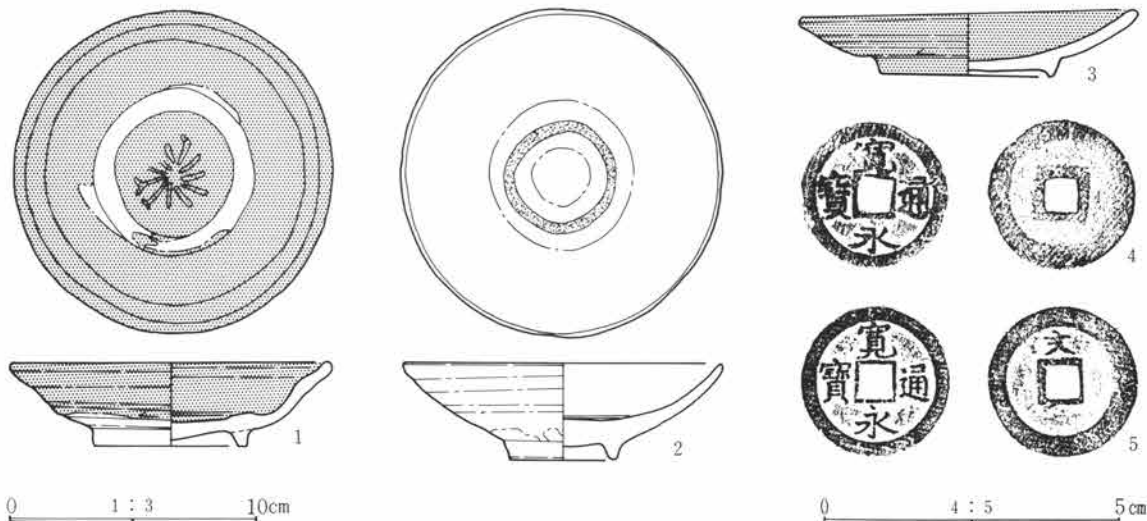
番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
14	銅銭	+14cm	1.3	0.6	0.1	2.9	完形	古寛永。
15	銅銭	+14cm	1.3	0.7	0.1	2.8	完形	新寛永。背文「文」。
16	銅銭	+14cm	1.25	0.6	0.1	3.9	完形	古寛永。
17	銅銭	+14cm	1.3	0.55	0.1	2.8	完形	古寛永。
18	銅銭	+14cm	1.3	0.6	0.1	3.5	完形	古寛永。
19	銅銭	+14cm	1.3	0.55	0.1	3.1	完形	古寛永。
20	銅銭	+14cm	1.2	0.55	0.1	3.7	完形	古寛永。
21	銅銭	+6cm	1.3	0.6	0.1	3.4	完形	古寛永。
22	銅銭	+6cm	1.3	0.6	0.1	3.2	完形	古寛永。
23	銅銭	+6cm	1.3	0.6	0.1	4.1	完形	新寛永。背文「文」。
24	銅銭	+6cm	1.2	0.6	0.1	3.6	完形	熙寧元寶。篆書。
25	銅銭	+6cm	1.3	0.6	0.1	3.0	完形	新寛永。背文「文」。
26	銅銭	+6cm	1.3	0.6	0.1	3.8	完形	古寛永。
27	銅銭	+6cm	1.3	0.6	0.1	3.7	完形	新寛永。背文「文」。



第484図 I-8号墓墳出土遺物実測図

I-8号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
1	銅銭	+24cm	1.2	0.55	0.1	3.2	完形	古寛永。



第485図 I-9号墓墳出土遺物実測図

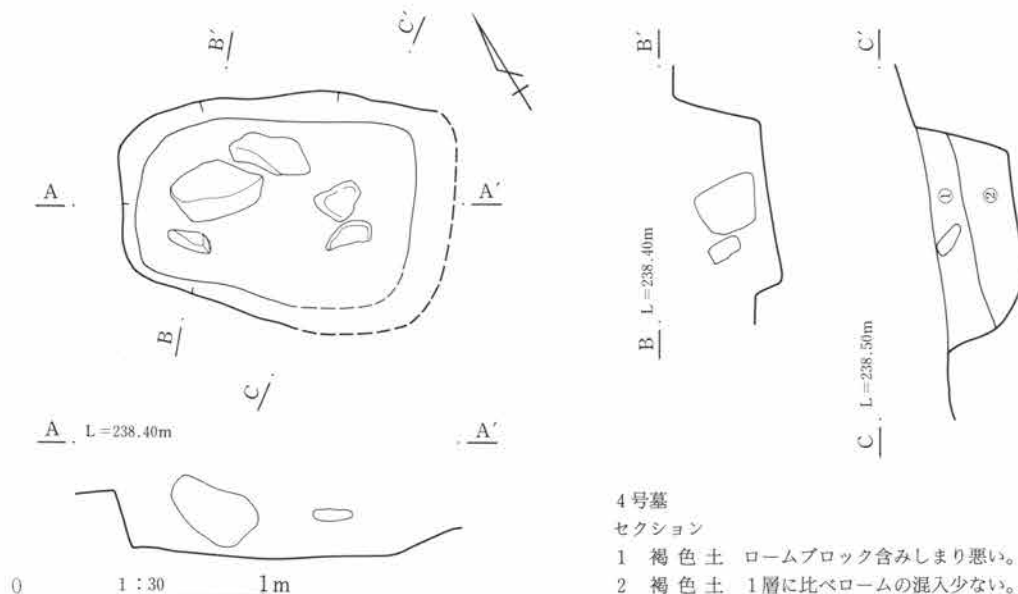
I-9号墓墳出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法 量			①胎土 ②焼成 ③色調	特 徴	備 考
			口(cm)	底(cm)	高(cm)			
1	陶器 輪壳皿	+7cm 完形	12.8	6.1	3.3	①微砂含む ②堅緻 ③浅黄色	ロクロ整形。体部下位回転ヘラ削り。貼付高台。長石釉。見込蛇の目釉はぎ・菊花押印文	瀬戸・美濃 17世紀中
2	陶器 皿	+23cm 完形	12.3	5.3	3.8	①細粒・緻密 ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。削出高台。染付。見込蛇の目釉はぎ。	肥前17後半 ~18前半
3	陶器 皿	+32cm ほぼ完形	13.5	7.0	2.7	①細砂含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。削出高台。灰釉。高台・外面に重ね焼時の痕跡残る。	瀬戸・美濃? 17~18世紀

番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
4	銅銭	+2cm	1.3	0.55	0.1	2.8	完形	古寛永。
5	銅銭	+2cm	1.3	0.6	0.1	2.7	完形	新寛永。背文「文」。

I-4号墓墳 (PL74)

Ih-96グリッドに所在。形状は隅が丸い長方形で、長辺は推定で136cm・短辺93cm・深さ39cmである。主軸はN-52°-Wで、3号墓同様等高線の方法に一致する。内部には大小5個の垂角礫がランダムに投げ込まれたような状態であった他は、遺物の出土はみられなかった。

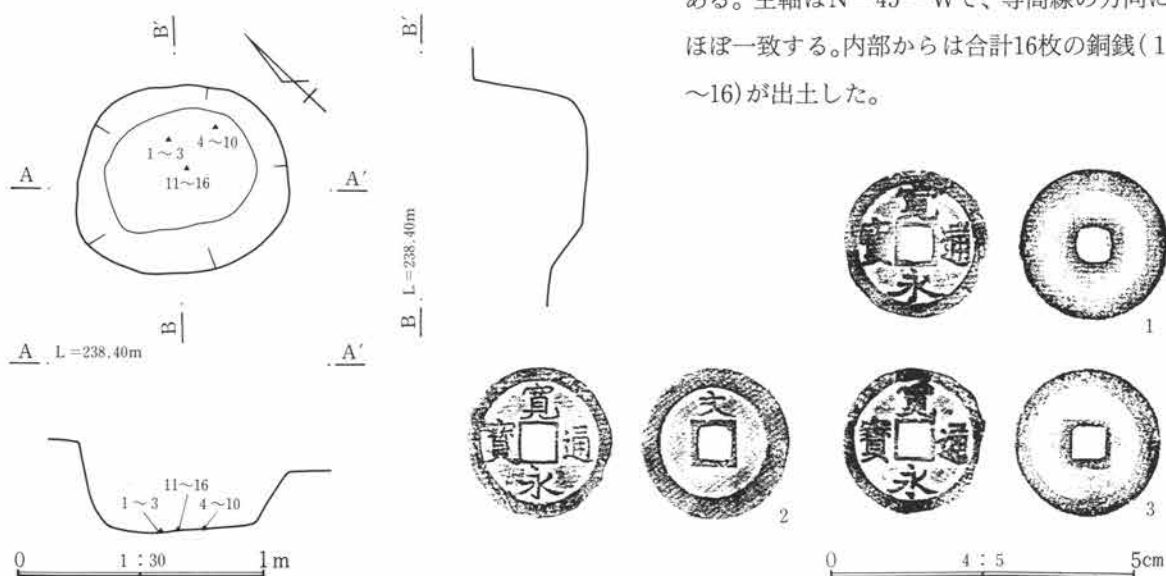


4号墓
セクション
1 褐色土。ロームブロック含みしまり悪い。
2 褐色土。1層に比べロームの混入少ない。

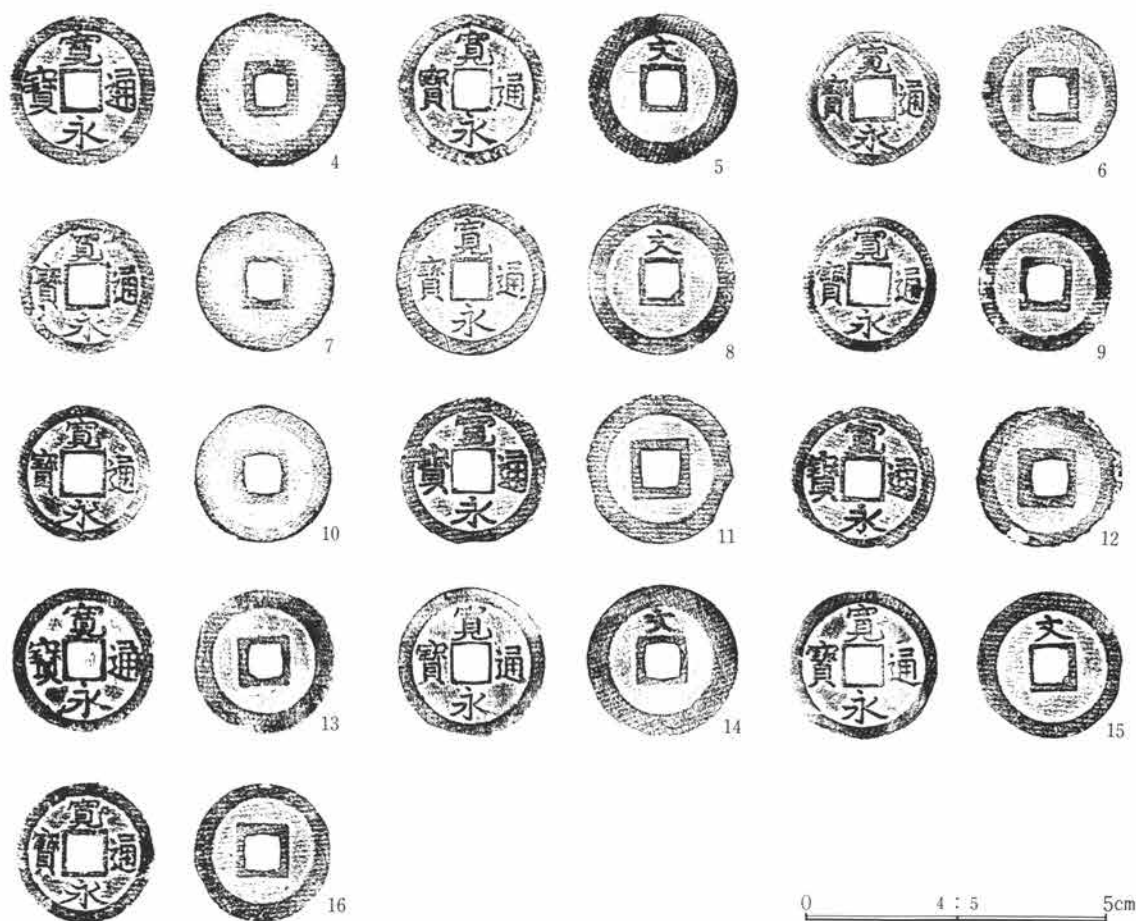
第486図 I-4号墓墳

I-5号墓墳 (PL74・160)

Ih-96グリッドに位置する。形状は北西-南東方向にやや長い楕円形で、長軸83cm・短軸75cm・深さ45cmである。主軸はN-45°-Wで、等高線の方法にほぼ一致する。内部からは合計16枚の銅銭(1~16)が出土した。



第487図 I-5号墓墳、出土遺物実測図①



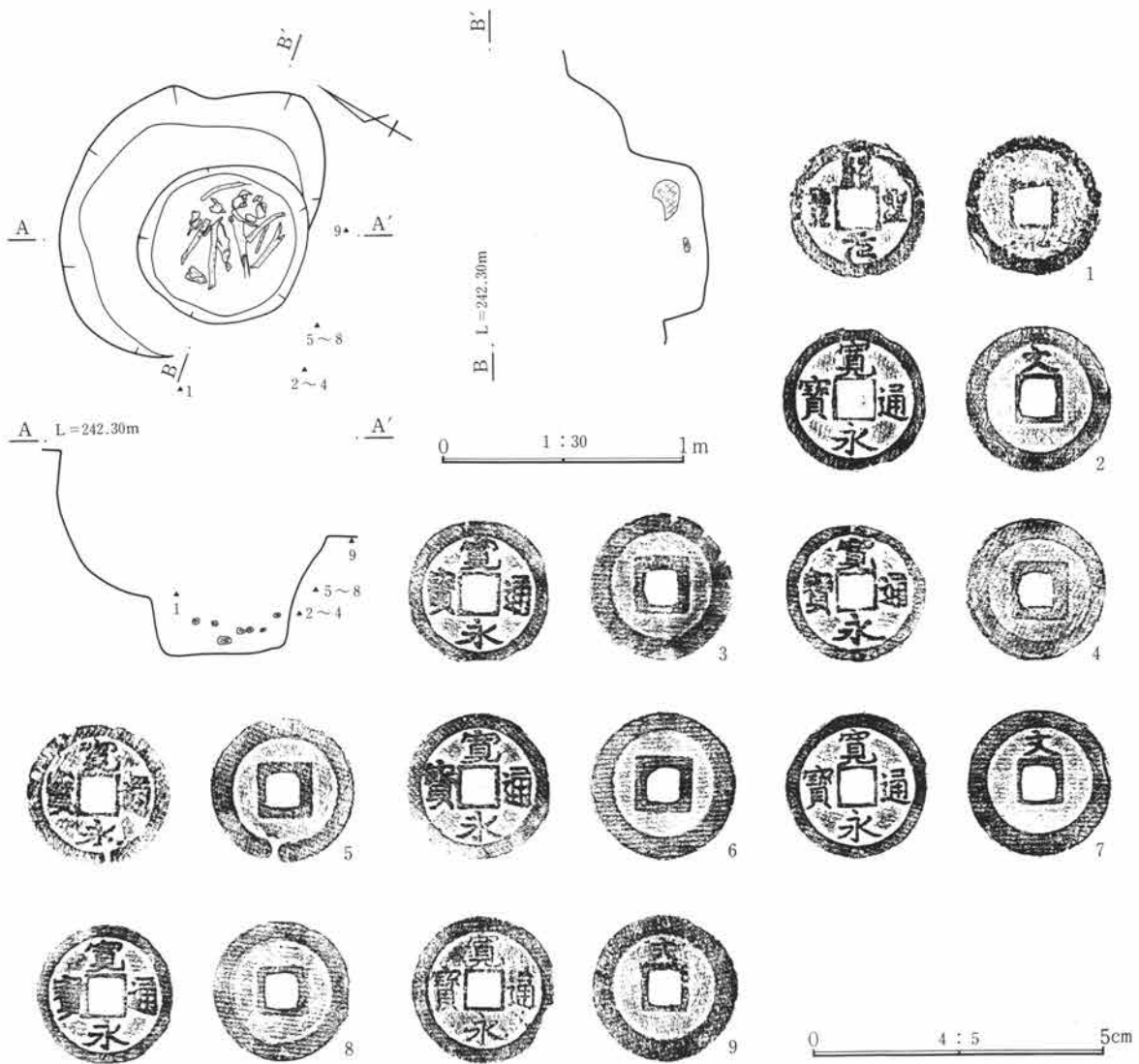
第488図 I-5号墓墳出土遺物実測図②

I-5号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
1	銅銭	床密着	1.3	0.55	0.1	3.2	完形	古寛永。
2	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	3.6	完形	新寛永。背文「文」。
3	銅銭	床密着	1.3	0.55	0.1	3.8	完形	古寛永。
4	銅銭	床密着	1.35	0.55	0.1	3.5	完形	古寛永。
5	銅銭	床密着	1.35	0.6	0.1	2.9	完形	新寛永。背文「文」。
6	銅銭	床密着	1.1	0.6	0.1	2.9	完形	新寛永か？
7	銅銭	床密着	1.1	0.6	0.1	2.9	完形	新寛永か？
8	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	3.3	完形	新寛永。背文「文」。
9	銅銭	床密着	1.1	0.6	0.1	2.8	完形	新寛永。
10	銅銭	床密着	1.1	0.6	0.1	2.6	完形	新寛永。
11	銅銭	床密着	1.3	0.65	0.1	3.6	完形	古寛永。
12	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	(3.7)	ほぼ完形	古寛永。
13	銅銭	床密着	1.2	0.6	0.1	3.3	完形	古寛永。
14	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	3.2	完形	新寛永。背文「文」。
15	銅銭	床密着	1.3	0.6	0.1	3.2	完形	新寛永。背文「文」。
16	銅銭	床密着	1.1	0.6	0.1	2.6	完形	新寛永。

I-10号墓墳 (PL74・161)

Ii-94グリッドに所在。墓墳の底面はほぼ円形であるが、上部は壁が崩落して漏斗状に広がっている。墓墳上場の長軸は127cm・短軸101cm、底面の直径は59cm・深さ91cm。内部には人骨があり、残存状況は良くないものの各部の骨はほぼそろっており、足を折り曲げるようにして埋葬されていた様子が観察できる。また、周辺から銅銭が9枚(1～9)出土している。



第489図 I-10号墓墳、出土遺物実測図

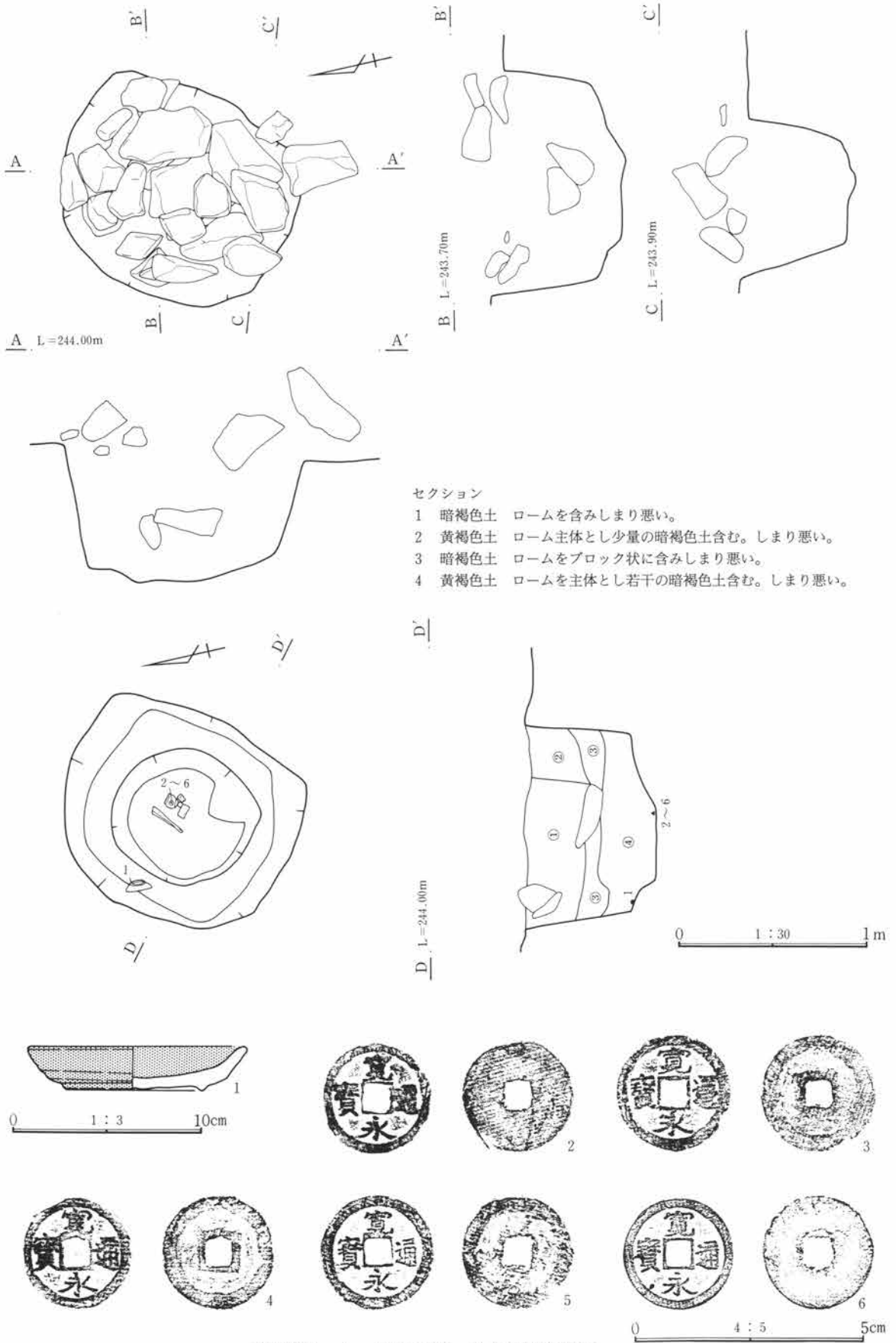
I-10号墓墳出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
1	銅銭	+24cm	1.2	0.65	0.15	3.3	完形	紹聖元寶。篆書。
2	銅銭	+14cm	1.3	0.65	0.1	3.7	完形	新寛永。背文「文」。
3	銅銭	+14cm	1.3	0.6	0.1	3.5	完形	古寛永。
4	銅銭	+14cm	1.2	0.6	0.1	3.3	完形	古寛永。
5	銅銭	+24cm	1.3	0.6	0.1	3.1	完形	古寛永。
6	銅銭	+24cm	1.3	0.6	0.1	3.5	完形	古寛永。
7	銅銭	+24cm	1.3	0.6	0.1	3.2	完形	新寛永。背文「文」。
8	銅銭	+24cm	1.2	0.6	0.1	3.2	完形	古寛永。
9	銅銭	+45cm	1.3	0.6	0.1	3.1	完形	新寛永？背文「文」。

I-11号墓墳 (PL75・162)

Ik-93グリッドに所在。形状は、北東-南西方向がやや長い長方形で、底面に円形の浅い掘り込みがみられる。大きさは長軸125cm・短軸107cm・深さ72cmである。上面に長径15~50cm程の礫を二十数个配してあり、一部は墓墳の内部にも落ち込んでいる。底面付近より骨片、志野系の小皿(1)、銅銭5枚(2~6)が出土している。

第3章 検出された遺構と遺物



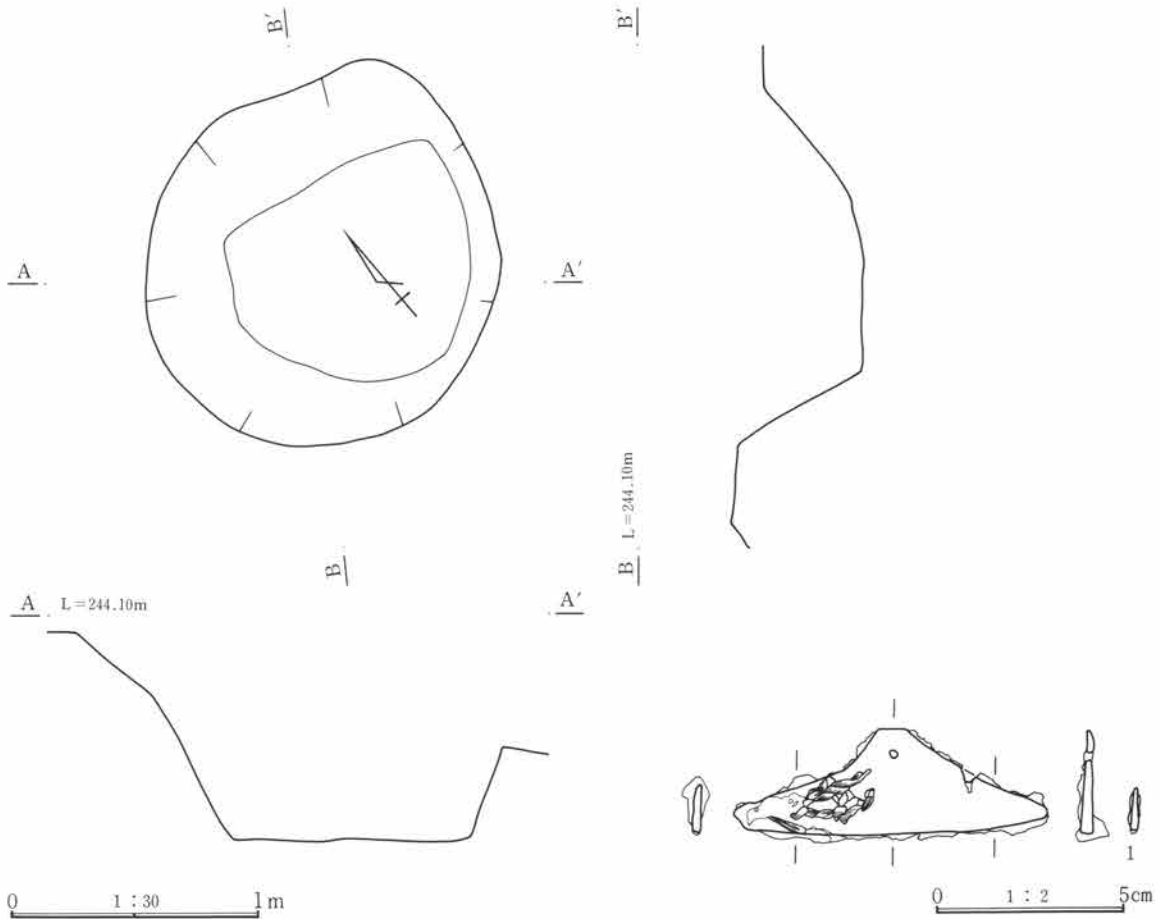
第490図 I-11号墓墳、出土遺物実測図

I-11号墓壙出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量			①胎土 ②焼成 ③色調		特 徴	備 考
			口(cm)	底(cm)	高(cm)	重量(g)	残存状況		
1	陶器 皿	床密着 ほぼ完形	11.5	7.3	2.3	①微砂含む ②堅 緻 ③灰白色		ロクロ整形。削出高台。志野。見込に目痕三 つ。高台内に円錐ピンの痕跡三つ。	美濃 17世紀前半
番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴	
2	銅銭	+5cm	1.3	0.6	0.1	3.8	完形	古寛永。	
3	銅銭	+5cm	1.3	0.6	0.1	3.4	完形	古寛永。	
4	銅銭	+5cm	1.25	0.6	0.1	2.7	完形	古寛永。	
5	銅銭	+5cm	1.3	0.6	0.1	2.9	完形	古寛永。	
6	銅銭	+5cm	1.2	0.6	0.1	2.7	完形	古寛永。	

I-12号墓壙 (PL75・162)

Ik-94グリッドに位置する。形状はほぼ円形で、壁がかなり崩落しているため漏斗状になっている。上場の最大径156cm・深さは60cmである。埋土中より火打ちがねが1点(1)出土している。



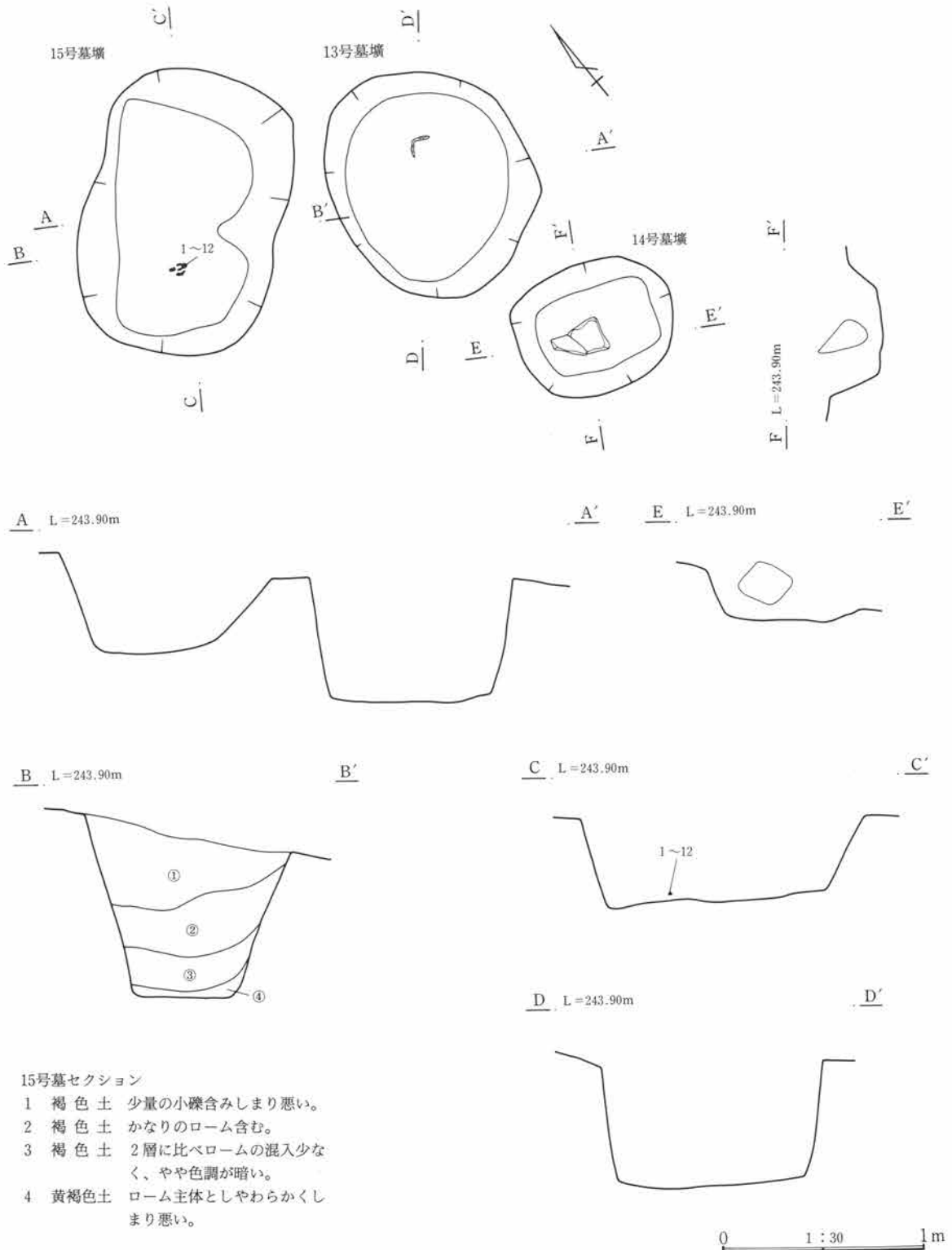
第491図 I-12号墓壙、出土遺物実測図

I-12号墓壙出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
1	火打金	覆土	2.9	8.4	0.3	16.8	ほぼ完形	山型の火打金。頂部に透孔あり。表面に縄状の繊維が 付着している。錆化著しい。

I-13号墓墳 (PL75)

II-94グリッドに所在。形状は北東-南西方向が若干長い楕円形で、長軸108cm・短軸106cm・深さ64cm。主軸はN-70°-Wで、等高線の方角にほぼ一致する。隣接する14・15号墓とともに、塚の盛土を掘り込んで作られている。内部より骨片が1点出土している。



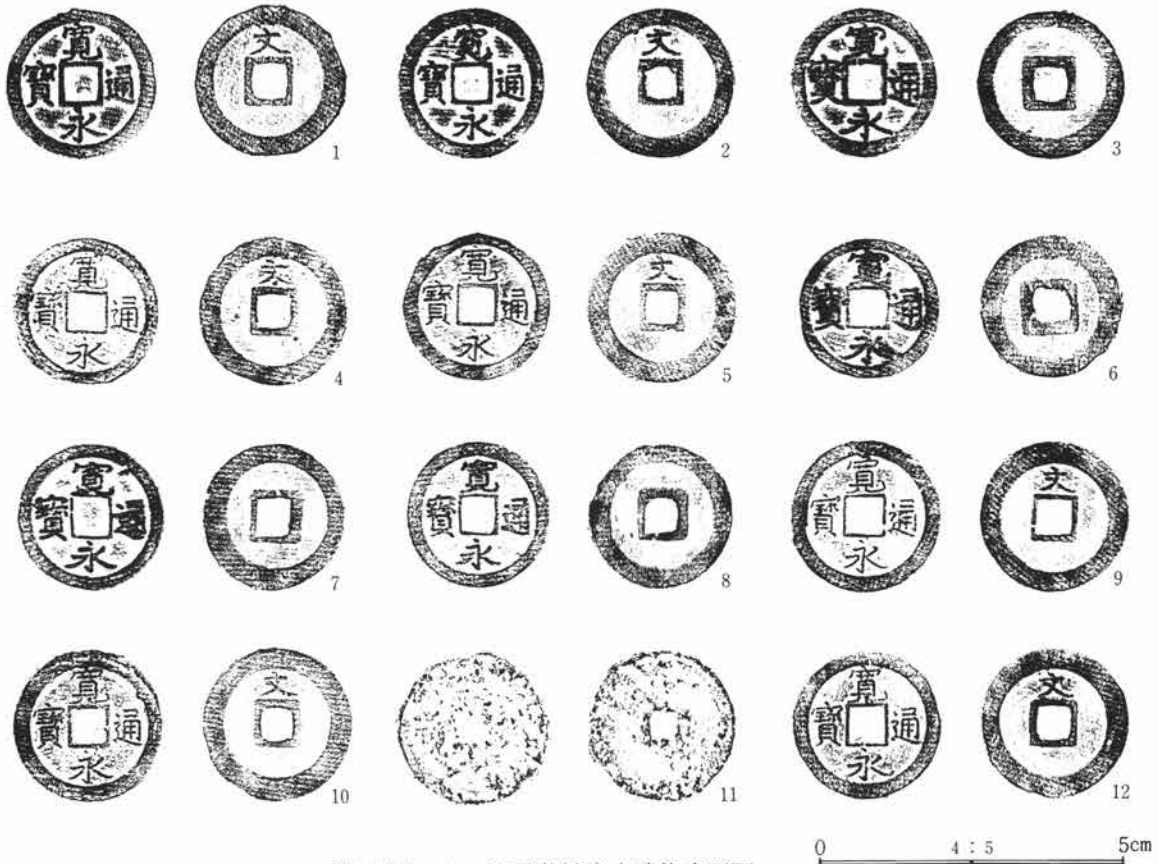
第492図 I-13・14・15号墓墳

I-14号墓壙 (PL75)

II-94グリッドに所在。形状は北西-南東方向が長い隅丸の長方形で、長辺78cm・短辺64cm・深さ28cmである。主軸はN-47°-Eで、隣接する13・15号墓と異なり、等高線に直行する方向を指す。内部には長さ20cm程の磔が1点あるが、その他に遺物はみられない。

I-15号墓壙 (PL75)

II-94グリッドに所在。形状は、かなり乱れてはいるが、北東-南西方向が長い隅丸の長方形と推定される。長辺138cm・短辺101cm・深さ51cm。主軸はN-51°-Eで、等高線の方にほぼ一致する。内部より骨片と毛髪、銅銭12枚(1~12)が出土している。



第493図 I-15号墓壙出土遺物実測図

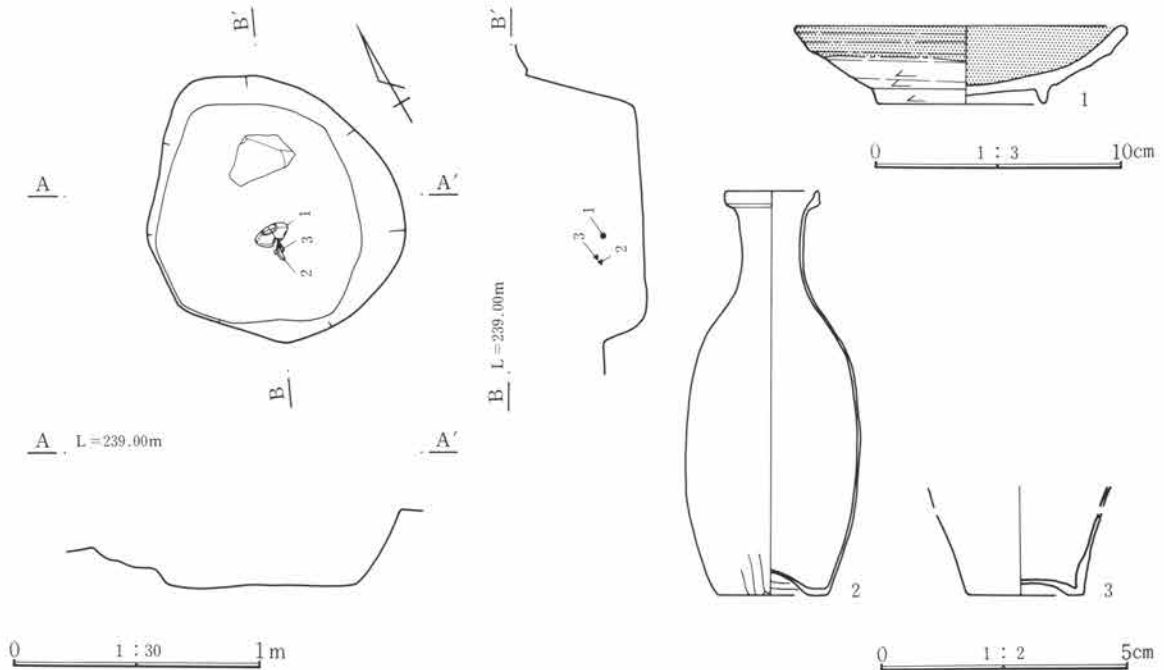
I-15号墓壙出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特徴
1	銅銭	+3cm	1.3	0.6	0.1	3.5	完形	新寛永。背文「文」。
2	銅銭	+3cm	1.3	0.55	0.1	3.6	完形	新寛永。背文「文」。
3	銅銭	+3cm	1.3	0.6	0.1	3.9	完形	古寛永。
4	銅銭	+3cm	1.3	0.6	0.1	3.1	完形	新寛永。背文「文」。
5	銅銭	+3cm	1.3	0.6	0.1	3.4	完形	新寛永。背文「文」。
6	銅銭	+3cm	1.2	0.6	0.1	2.6	完形	古寛永。
7	銅銭	+3cm	1.2	0.6	0.1	3.0	完形	古寛永。
8	銅銭	+3cm	1.25	0.6	0.1	3.3	完形	古寛永。
9	銅銭	+3cm	1.3	0.6	0.1	3.9	完形	新寛永。背文「文」。
10	銅銭	+3cm	1.3	0.55	0.1	4.2	完形	新寛永。背文「文」。
11	銅銭	+3cm	1.3	0.4	0.1	3.9	完形	錆化激しく判読不能。
12	銅銭	+3cm	1.3	0.6	0.1	3.9	完形	新寛永。背文「文」。

第3章 検出された遺構と遺物

I-16号墓墳 (PL75・162)

Ig-95グリッドに位置する。形状はほぼ円形だが、若干南北方向が長い。最大径は111cm・深さ37cm。内部からは長径20cm程の礫1点と、17~18世紀の作とみられる瀬戸・美濃系の小皿1点(1)、金属製の小型の花瓶2点(2・3)が出土している。



第494図 I-16号墓墳、出土遺物実測図

I-16号墓墳出土遺物観察表

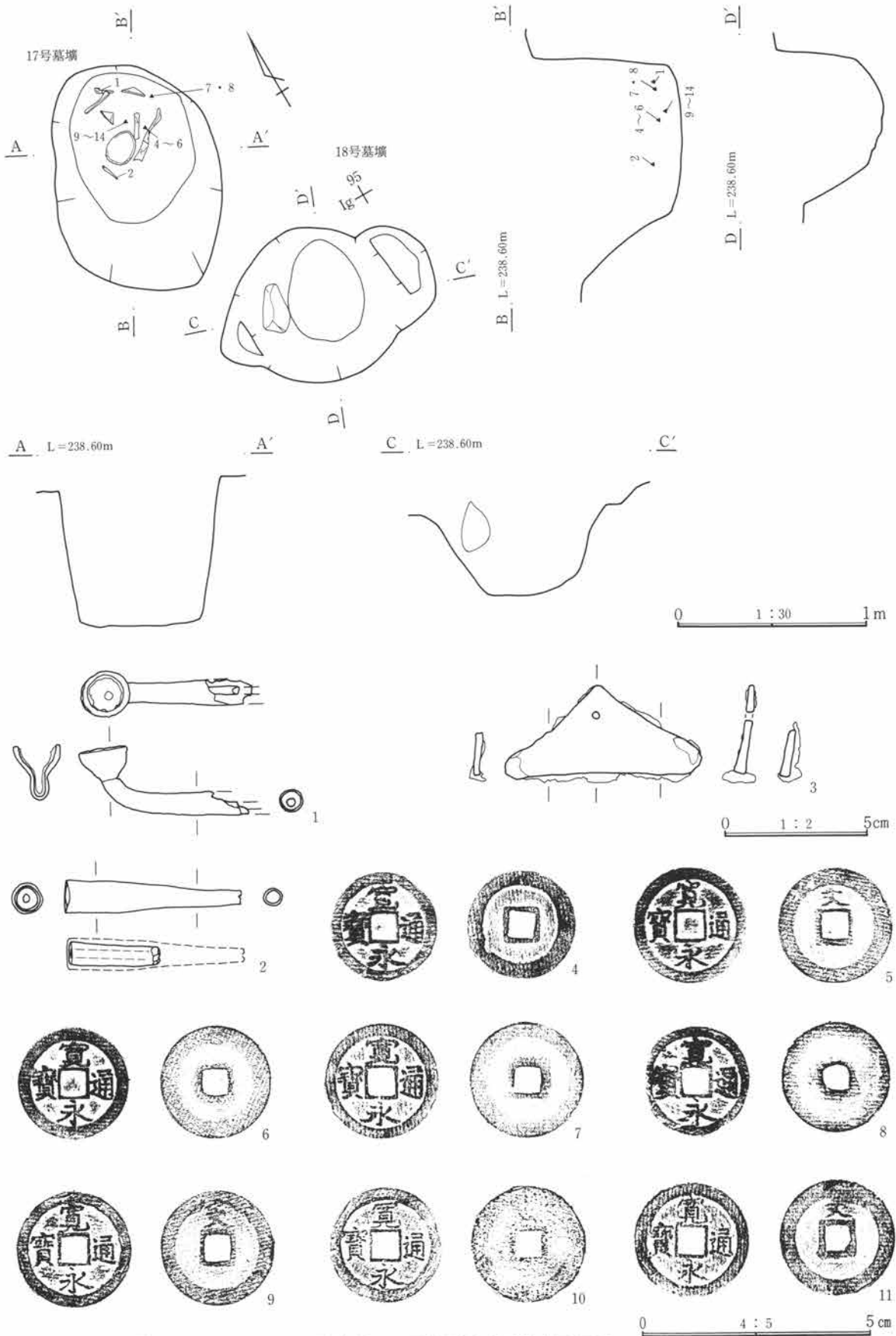
番号	種類 器種	出土状況 残存状況	法量			①胎土 ②焼成 ③色調	特 徴	備 考
			口(cm)	底(cm)	高(cm)			
1	陶器 皿	+16cm ほぼ完形	13.1	6.7	3.1	①微砂含む ②堅 緻③灰白色	ロクロ整形。体部下半回転ヘラ削り。削出高台。灰釉。高台に重ね焼時の痕跡残る。	美濃 18世紀
番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
2	花瓶	+17cm	1.9	8.1	2.3	(32.4)	1/2	器肉非常に薄い。外面に工具痕。No2の花瓶と対になる。
3	花瓶	+19cm	—	—	2.3	(16.5)	底部	器肉非常に薄い。外面には工具で削ったような痕跡が観察できる。

I-17号墓墳 (PL75・162)

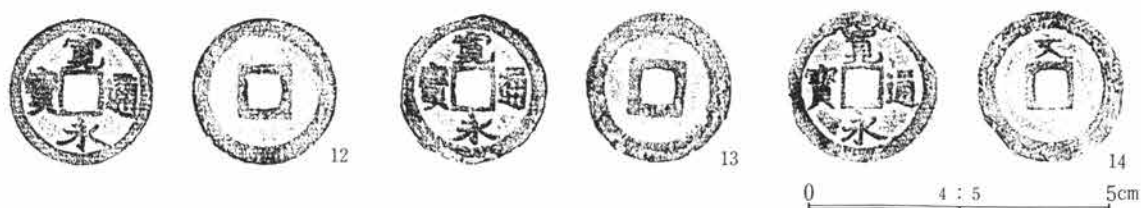
Ig-95グリッドに位置する。形状は北東—南西方向が長い楕円形で、長軸118cm・短軸86cm・深さ80cm。内部からは骨片の他、キセルの吸口と雁首各1点(1・2)、火打ちがね1点(3)、銅銭11枚(4~14)が出土している。

I-18号墓墳 (PL75)

If-95グリッドに所在。形状はほぼ2つの土坑がくっついたような形で、長軸118cm・短軸82cm・深さ59cm。内部には長さ20cm程の礫がみられるが、他に遺物の出土はない。



第495图 I-17·18号墓、17号墓出土文物实测图①

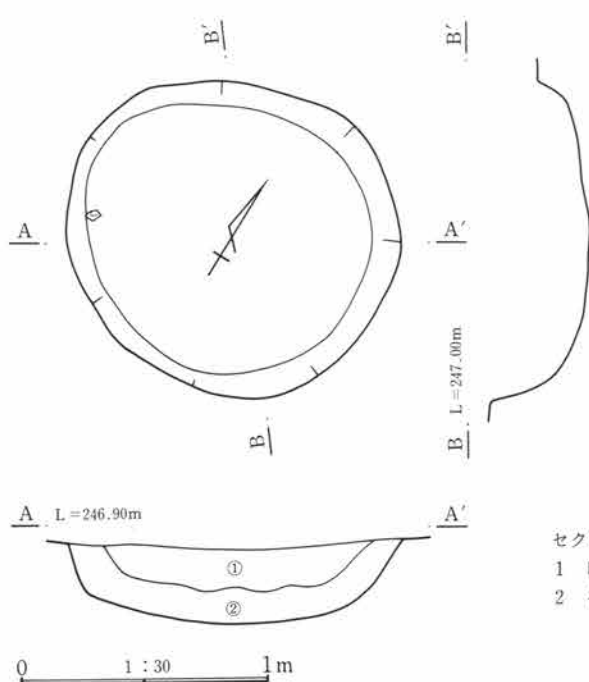


第496図 I-17号墓出土遺物実測図②

I-17号墓出土遺物観察表

番号	器種	出土状況	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
1	煙管雁首	+12cm	(5.9)	1.1	0.2	(6.8)	一部欠損	火皿内に炭化物付着。羅字一部残存(篠竹製)。
2	煙管吸口	+14cm	6.2	1.1	0.1	5.4	ほぼ完形	羅字一部残存(篠竹製)。
3	火打金	覆土	3.3	6.9	0.3	12.2	完形	山型の火打金。頂部に透孔あり。下縁は使用によりわずかに湾曲し、木質が付着している。
番号	器種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴
4	銅銭	+12cm	1.2	0.6	0.1	3.7	完形	古寛永。
5	銅銭	+12cm	1.3	0.6	0.1	3.7	完形	新寛永。背文「文」。
6	銅銭	+12cm	1.25	0.6	0.1	3.1	完形	古寛永。
7	銅銭	+12cm	1.3	0.6	0.1	3.1	完形	古寛永。
8	銅銭	+12cm	1.2	0.6	0.1	3.5	完形	古寛永。
9	銅銭	+7cm	1.3	0.6	0.1	2.7	完形	新寛永。背文「文」。
10	銅銭	+7cm	1.3	0.55	0.1	4.2	完形	新寛永。
11	銅銭	+7cm	1.3	0.6	0.15	4.1	完形	新寛永。背文「文」。
12	銅銭	+7cm	1.25	0.55	0.1	3.9	完形	古寛永。
13	銅銭	+7cm	1.3	0.6	0.1	2.9	完形	古寛永。
14	銅銭	+7cm	1.3	0.6	0.1	3.5	完形	新寛永。背文「文」。

土 坑



I-1号土坑 (PL75)

Ie-88グリッドに位置する。形状はほぼ円形であるが、東西方向がわずかに長い。長軸134cm・短軸123cm・深さ39cm。遺物の出土はない。

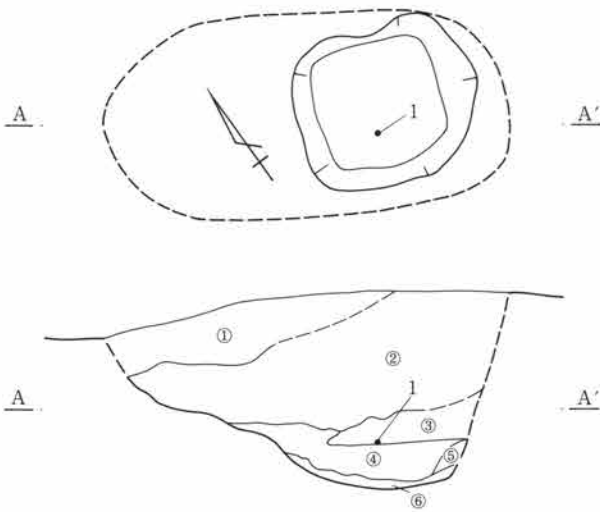
セクション

- 1 暗褐色土 ローム中のAs-BP含みしまり悪い。
- 2 褐色土 少量のローム含みしまり悪い。

第497図 I-1号土坑

I-2号土抗 (PL162)

II-95グリッドに所在。上面で確認できなかったため、上場線はセクション図からの推定である。底面は一

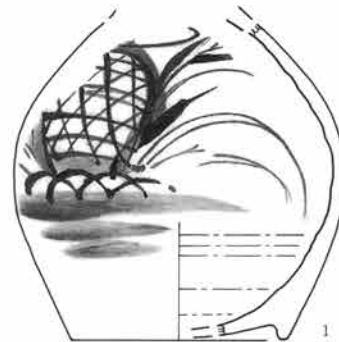


セクション

- 1 褐色土 細粒でしまり悪い。
- 2 黄褐色土 ロームブロック・As-BP少量含みしまり悪い。
- 3 黄褐色土 ロームブロックと黒色土を含みしまり悪い。
- 4 黄褐色土 少量のAs-BPを含み細粒でしまり悪い。
- 5 黄褐色土 4層よりも色調が暗い。
- 6 褐色土 少量の黒色土を含みややしまり良。

0 1:30 1m

辺がほぼ1mの隅丸の正方形で、上にいくにつれて漏斗状に広がる。深さ155cm。底面近くより19世紀頃の作と思われる染付の磁器徳利(1)が出土している。底面の形状からすると墓塚のようにも思われるが、他の墓塚とは時期がかなり異なる。また骨片などもみられないことから土抗と判断した。塚の盗掘を意図して掘り込まれたものか。



第498図 I-2号土坑、出土遺物実測図

0 1:3 10cm

I-2号土坑出土遺物観察表

番号	種類	出土状況 残存状況	法量			①胎土 ②焼成 ③色調	特 徴	備 考
			口(cm)	底(cm)	高(cm)			
1	磁器 徳利	+18cm 胴~底部	—	8.6	—	①微砂含む ②堅 緻 ③灰白色	ロクロ整形。削出高台。染付。	肥前? 19世紀

5 遺構外出土遺物 (PL162~165)

I区では、遺構外もしくは他時期の遺構から、縄文時代~近世にわたる遺物が多量に出土している。特に、塚の盛土中にかなりの量の土器・石器が含まれていた。

縄文土器は、前期後半および中期中葉~後半の土器が出土している(1~19)。前期は諸磯a・b式の土器片が得られているが、遺構は発見されていない。また多くは破片であり、器形が復元できるものは少なく、1・13の2点のみである。1は重機による表土掘削中に発見されたが、底部を除いて器体のかなりの部分が残存しており、何らかの遺構にともなう可能性が高い。ただし、遺構そのものは、掘り込みが浅いためか検出できなかった。

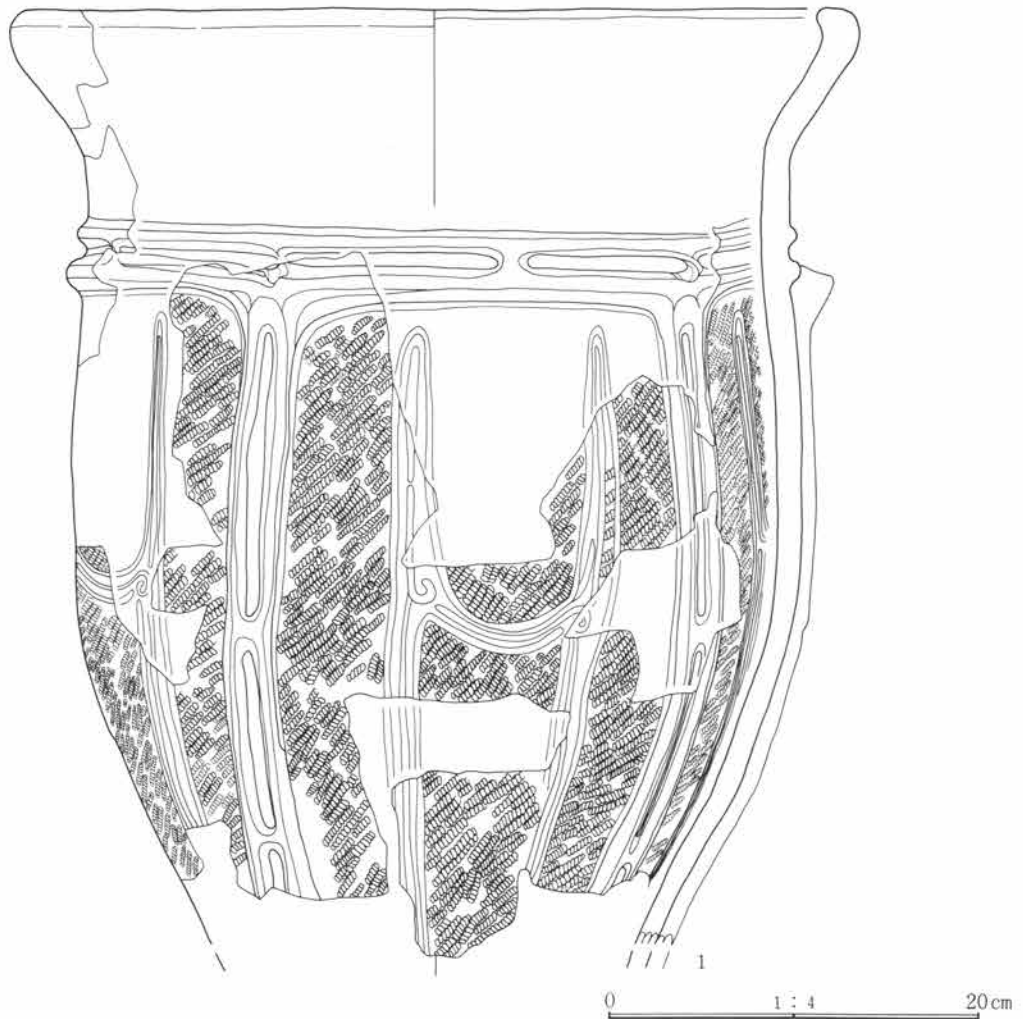
弥生土器は中~後期のものが出土している(20~29)。I区では中期の遺構は発見されていないが、少量の甕の破片が得られている(20~22)。遺物の主体を占めるのは後期のもので、甕(23~27)の他に赤色塗彩された高坏(28・29)が出土している。

第3章 検出された遺構と遺物

土師器・須恵器もかなり出土しているが、量・種類ともに須恵器のほうが多い。器種は、土師器坏(30~32)、須恵器坏(33~35)・埴(36)・壺(38)・高坏(39)・蓋(37)・甕(40)などがある。土師器坏のうち32は、内側一面に漆が付着していた。遺物の時期は8世紀後半~9世紀前半のものが主体となっているが、この時期の遺構は発見されていない。

この他に中世の内耳形土器(41)、近世の仏飯器(42)・小坏(43)が出土。内耳形土器は塚盛土からの出土で、口縁部の小破片ではあるが、塚の年代を示す可能性がある唯一の遺物である。仏飯器・小坏はいずれも18世紀代のもので、近世の墓墳に関連する遺物と思われる。

土器の他に、多量の剥片類を含む石器が出土している。縄文時代に属するものが主体であるが、石鏃(48・50)など弥生時代のものも見受けられる。他に石鏃(44)、スクレイパー(45)、打製石斧(47・49)、磨製石斧(51)、独鈷石(52)、石皿(53)などがある。また、表面採集で寛永通寶が1枚見つかった(54)。

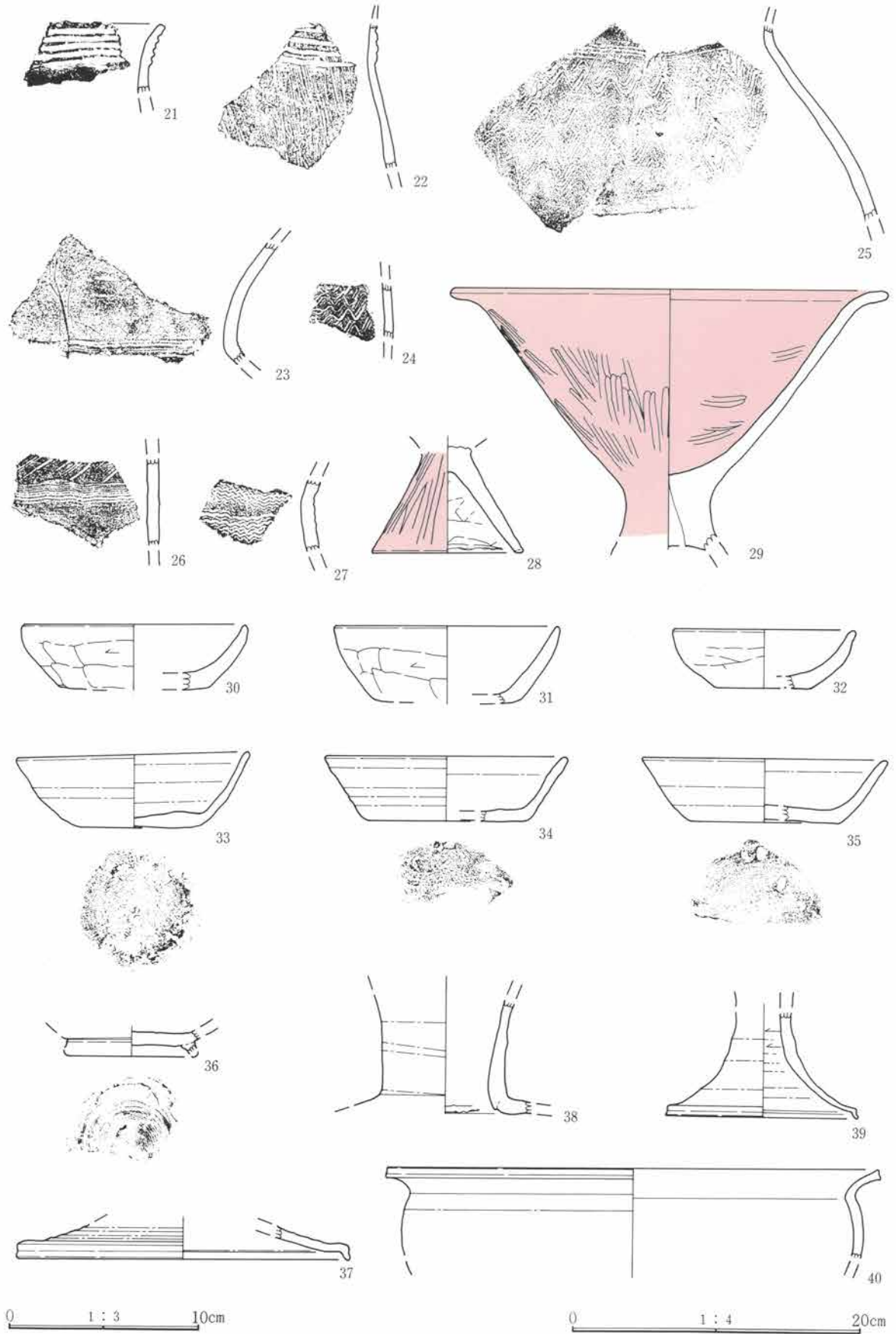


第499図 I区遺構外出土遺物実測図①



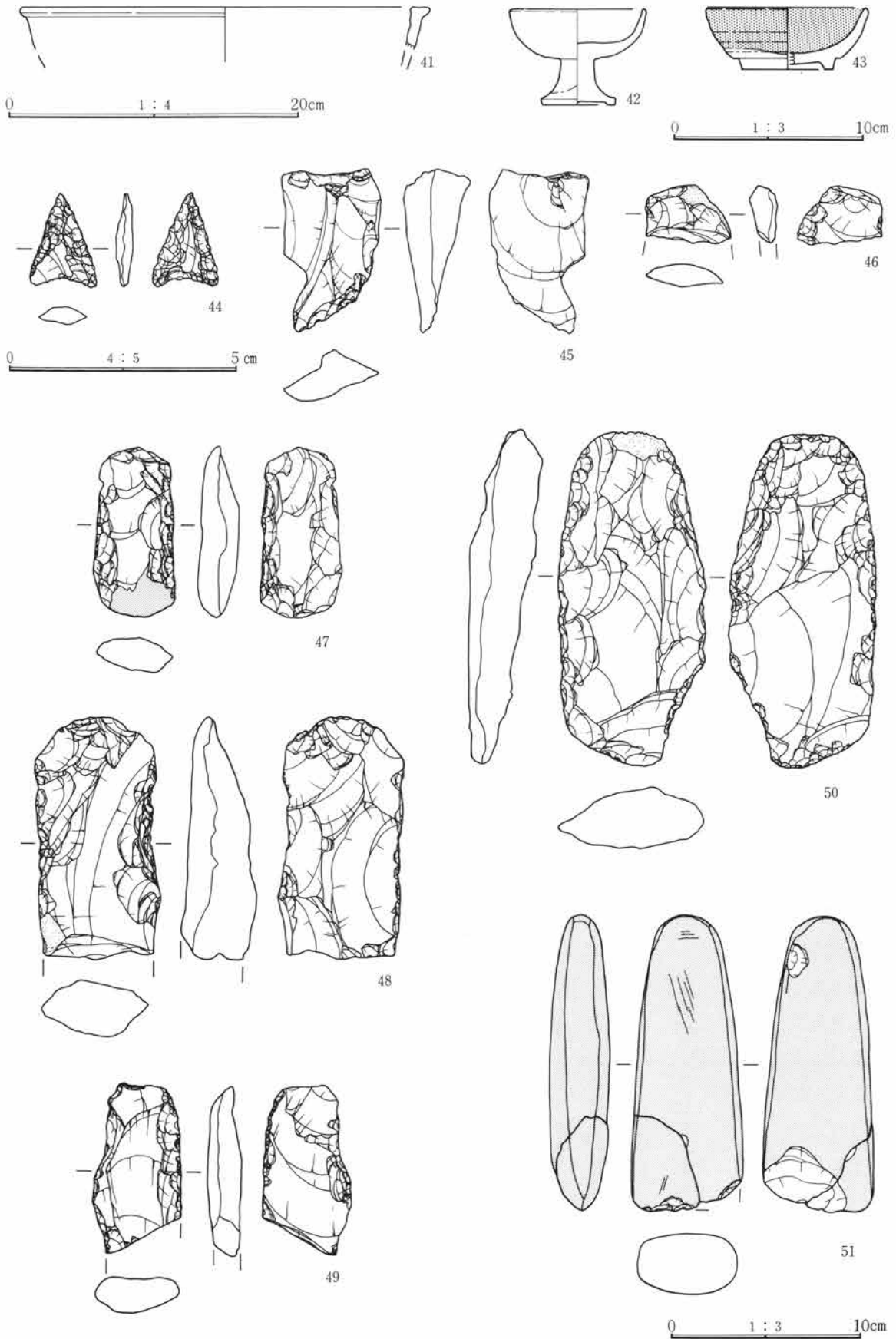
第500图 I区遺構外出土遺物実測图②

第3章 検出された遺構と遺物



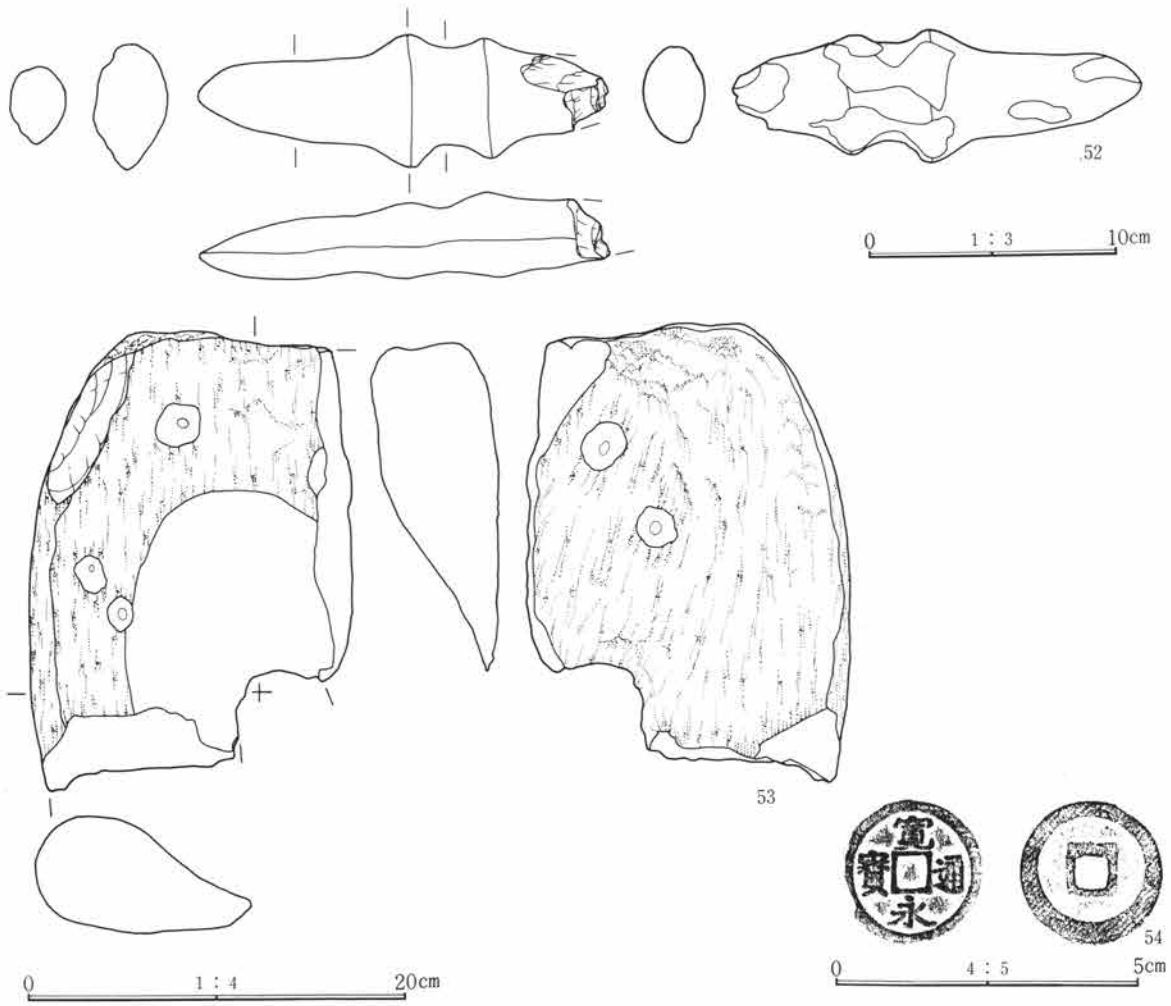
第501図 I区遺構外出土遺物実測図③

第4節 I 区



第502図 I区遺構外出土遺物実測図④

第3章 検出された遺構と遺物



第503図 I区遺構外出土遺物実測図⑤

I区遺構外出土遺物観察表

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
1	縄文土器 深鉢形土器	Ie-89Gr 2/3	口(43.0)	胴中位でやや膨らみ、頸部 でわずかに締まる。口縁部 は外傾、口唇部やや肥厚し 内傾。	頸部に所々でつながる2本の隆線を横にめ ぐらし、さらに5本の同様の隆線を垂下。 その間をR Lの縄文を縦位に充填施文し、 H状のモチーフを2本単位の沈線で描く。	①砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色 ④中期後半
2	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 胴部破片			R L縄文施文後、縦方向に竹管による円形 刺突文。縄文はかなり摩滅している。	①砂粒含む ②良好 ③橙色 ④諸磯 a
3	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 胴部破片			R L縄文横位施文。S字状の結節がみられ る。	①砂粒含む ②良好 ③灰褐色 ④諸磯 a
4	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 胴部破片			R L縄文横位施文。S字状の結節がみられ る。	①砂粒含む ②良好 ③赤褐色 ④諸磯 a
5	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 底部破片	底(10.6)		R L縄文施文。	①細砂含む ②良好 ③橙色 ④諸磯 a
6	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 胴部破片			結節沈線を多段に配す。	①砂粒含む ②良好 ③褐色 ④諸磯 b
7	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 胴部破片			3本単位の横位平行沈線。	①砂粒含む ②良好 ③赤褐色 ④諸磯 b
8	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 胴部破片			平行沈線による菱形文。	①砂粒含む ②良好 ③赤褐色 ④諸磯 b

番号	器種	出土状況 残存状況	法量 (cm)	器形・成形	文様・整形	①胎土 ②焼成 ③色調 ④備考
9	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 胴部破片			平行沈線による菱形・三角文。8と同一破片。	①砂粒含む ②良好 ③赤褐色 ④諸磯b
10	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 口縁破片			斜め方向の平行沈線。口唇部内面の貼り付け部に刻み。	①砂粒含む ②良好 ③赤褐色 ④中期中
11	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 胴部破片			R L縄文施文後隆線文。	①片岩含む ②良好 ③橙色 ④中期中葉
12	縄文土器 深鉢形土器	Il-95Gr 胴部破片			隆線で縦位・横位に区画し、中を縦方向の沈線で充填後、楕円文を描く。	①細砂含む ②良好 ③明褐色 ④中期中
13	縄文土器 深鉢形土器	Ih-91Gr 口～胴部	口(30.3)		口縁部に刻み持つ隆線で文様帯・楕円を画し、内部に縦方向の並行線・S字状の沈線を付す。	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐色 ④中期後半
14	縄文土器 深鉢形土器	Ih-91Gr 口縁破片			口縁部に沿って沈線・隆線を配す。また隆線による曲線文・縦方向の沈線を口縁部文様帯として付す。	①砂粒含む ②良好 ③にぶい赤褐色 ④中期後半
15	縄文土器 深鉢形土器	塚盛土 胴部破片			地文にL R縄文を縦位施文後、沈線を垂下し間に沈線による蕨手文。	①砂粒含む ②良好 ③橙色 ④中期後半
16	縄文土器 深鉢形土器	Ih-91Gr 胴部破片			地文にR Lの縄文を縦位施文後、やや太めの沈線で渦巻文を描く。	①砂粒含む ②良好 ③褐色 ④中期後半
17	縄文土器 深鉢形土器	Ih-91Gr 胴部破片			R L縄文を地文とし、沈線で文様を描く。	①砂粒含む ②良好 ③褐色 ④中期後半
18	縄文土器 深鉢形土器	I-4住 胴部破片			沈線で曲線文を描き、中にL Rの縄文を充填施文。	①砂粒含む ②良好 ③明褐色 ④中期後
19	縄文土器 深鉢形土器	I-4住 胴部破片			無節Rを全面施文後、並行沈線で文様を描く。	①砂粒含む ②良好 ③橙色 ④中期後半
20	弥生土器 甕	塚盛土 口～胴部 下位破片	口(24.8)	胴部上位に最大径。頸部で小さくくびれ、口縁部短く直立気味に外反。	外 口縁部にL R縄文を横位に施文後、沈線を少なくとも4条めぐらす。肩部ナデ、胴部条痕文。内 口縁部条痕文、胴部ナデ。	①砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐色
21	弥生土器 甕	塚盛土 口縁破片		口縁部外反。	外面に縄文施文後沈線5条めぐらす。内面ナデ。	①細砂含む ②良好 ③淡黄色
22	弥生土器 甕	塚盛土 頸～胴部 上位破片			外 胴部条痕文、頸部に少なくとも4条の沈線。沈線は条痕を切る。内 ヘラナデ。	①細砂含む ②良好 ③黒褐色
23	弥生土器 甕	塚盛土 口縁破片			外面頸部2連止め簾状文、口縁部ヘラ削り後ナデ。内面ナデ。	①細砂含む ②良好 ③にぶい橙色
24	弥生土器 甕	塚盛土 胴部破片			外面波状文、内面ヘラナデ。	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐色
25	弥生土器 甕	塚盛土 頸～胴片			外面頸部5本単位2連止め簾状文、胴部上位波状文。内面ヘラナデ。	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色
26	弥生土器 甕	塚盛土 胴部破片			外面上位に櫛歯状工具により斜めに施文、後下位を横位に区画。内面ヘラナデ。	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐色
27	弥生土器 甕	塚盛土 頸部破片			外面波状文、内面ナデ後ヘラ磨き。	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐色
28	弥生土器 高坏	塚盛土 脚部 $\frac{1}{3}$	底(8.0)		外面ヘラ削り後ヘラ磨き。内面ナデ。外面に赤色塗彩。	①微砂含む ②良好 ③にぶい黄褐色
29	弥生土器 高坏	塚盛土 坏部 $\frac{1}{4}$	口(22.5)	坏部斜めに立ち上がり、口縁部で屈曲して外反。	外 坏部口縁横ナデ、以下ナデ後ヘラ磨き。全面を赤色塗彩。 内 坏部口縁横ナデ、以下ナデ後ヘラ磨き。脚部ナデ。坏部赤色塗彩。	①微砂粒(ごくまれに小礫)含む ②良好 ③にぶい黄褐色
番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
30	土師器 坏	塚盛土 $\frac{1}{4}$	口(11.5) 底(7.8) 高 3.4	①微砂粒含む ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	
31	土師器 坏	塚盛土 $\frac{1}{4}$	口(11.7) 底(7.7) 高 ー	①微砂粒(ごくまれに小礫)含む②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面横ナデ。	

第3章 検出された遺構と遺物

番号	種類	出土状況 残存状況	法量 (cm)			①胎土 ③色調	②焼成	成・整形技法の特徴	残存状態 備考
			口	底	高				
32	土師器 坏	Ib-86Gr 口～体部 破片	口 (8.8) 底 (5.1) 高 3.0			①微砂粒含む ②良好 ③にぶい橙色	口縁部外面横ナデ、体～底部外面ヘラ削り。内面 付着物に被われ調整不明。	内面全面に漆付着	
33	須恵器 坏	塚盛土 口～底部	口 12.1 底 6.3 高 3.8			①細砂含む ②良好 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転糸切り後ナデ。		
34	須恵器 坏	塚盛土 1/5	口(12.7) 底 (8.4) 高 3.3			①微砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部切り離し後ナデ。		
35	須恵器 坏	塚盛土 1/5	口(12.9) 底 (7.6) 高 3.3			①細砂・黒色粒子含 む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。底部回転糸切り。	外面に自然釉	
36	須恵器 埴	塚盛土 底部1/5	口 — 底 — 高 —			①砂粒含む ②堅緻 ③褐色	ロクロ整形。底部左回転の回転糸切り後、高台貼 付。		
37	須恵器 蓋	塚盛土 体～口縁 1/5	口(17.4) 摘 — 高 —			①微砂粒含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。	内面に自然釉	
38	須恵器 長頸壺	塚盛土 口～胴部	口 — 底 — 高 —			①細砂含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。内面頸部に接合痕。		
39	須恵器 高坏	塚盛土 脚部1/5	口 — 底(13.5) 高 —			①少量の砂粒含む ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。脚は端部で屈曲。内面上位回転ヘラ 削り。		
40	須恵器 甕	塚盛土 口縁1/5	口(34.6) 底 — 高 —			①細砂含む ②堅緻 ③灰色	ロクロ整形。口縁部強く屈曲して外反。		
41	軟質陶器 内耳形土器	塚盛土 口縁破片	口(28.3) 底 — 高 —			①細砂・結晶片岩片 含む ②良好 ③明赤褐色	口縁端部外面側に肥厚。口唇部平坦。		
番号	種類	出土状況 残存状況	法量			①胎土 ③色調	②焼成	特 徴	備 考
			口(cm)	底(cm)	高(cm)				
42	磁器 仏飯器	塚盛土 1/5	(7.1)	3.8	4.9	①細粒・均質 ②堅緻 ③灰白色	ロクロ整形。染付。雨降り文。	肥前18世紀 前半	
43	陶器 小坏	Ib-86Gr 1/5	(8.2)	(4.6)	3.2	①微砂含む ②堅 緻 ③浅黄色	ロクロ整形。削出高台。鉄釉。見込に銅釉が 付着。	瀬戸・美濃？ 18世紀	
番号	器 種	出土状況 残存状況	計測値 (cm・g)					石 材	特 徴
			全 長	幅	厚 さ	重 量	重量		
44	石鏃	表採 完形	2.0	1.4	0.4	0.69	チャート	凹基無茎鏃。両面に調整加えるが、一部素材剥 片の面残す。	
45	スクレイパー	塚盛土 完形	8.3	5.0	3.5	91.8	硬質泥岩	縦長で厚手の剥片の背面右側に調整加える。	
46	二次加工あ る剥片	表採 1/5	(3.0)	4.4	1.4	(18.8)	玉髓	剥片の腹面左側に調整。先端大きく欠損。	
47	打製石斧	I-6墓 完形	8.7	4.3	1.5	73.6	硬質泥岩	やや小型の短冊形。横長の剥片を素材とし、両 面全周に調整。表面刃部に使用による摩耗。	
48	石鏃	Ih-91Gr 1/5	(12.4)	6.5	2.7	(294.8)	流紋岩質凝灰岩	かなり厚手の素材の両面に調整加え整形。刃部 欠損。基部はかなり薄い。	
49	打製石斧	包含層 一部欠	(8.7)	4.6	1.8	(89.1)	デイサイト	縦長の剥片素材とし、両面全周に調整。形状は 短冊形。刃部欠損。	
50	石鏃	Ie-96Gr 1/5	(17.2)	7.1	3.75	(452.6)	変質安山岩	大型・厚手の剥片素材とし、両面に調整加える 刃部先端やや摩耗。	
51	磨製石斧	Ih-91Gr 一部欠	15.1	5.8	3.1	490.2	変輝緑岩	全面丁寧に研磨。刃部に使用による刃こぼれあ り、裏面の大きな剝離時に刃部が大きく割れた	
52	独鈷石	I-7墓 1/4	5.2	(16.3)	3.3	(287.9)	緑色片岩	敲打によって形を整えた後、全面を研磨して仕 上げてある。被熱により表面一部剥落。	
53	石皿	Ik-94Gr 1/4	(24.2)	(17.3)	5.5	(3600.0)	黒色片岩	大型の石皿。皿の底部は使用によって穴が開い ている。表面に4個、裏面に2個の凹みあり。	
番号	器 種	出土状況	長(cm)	孔径	厚(cm)	重量(g)	残存状況	特 徴	
54	銅銭	表採	1.2	0.6	0.1	3.0	完形	古寛永。	

第4章 まとめ

第1節 時期別の遺構分布

中沢平賀界戸遺跡からは、住居157軒、掘立柱建物5棟、礎石建物1棟、塚1基の他、多数の土坑・墓墳などが見つかっている。これらの遺構は、低地部分を除いてほぼ調査区全域に展開している。ここでは、時期別に遺構の分布を概観したい（第506図）。

縄文時代 遺構は少なく、I区の丘陵上で住居1軒、F区の台地上から埋甕2基が発見されたのみである。いずれも中期加曾利E式期の所産である。この他には、I区の遺構外から少量の前期の土器が出土しているが、遺構は検出されていない。これに対して、当遺跡の南側に広がる南蛇井増光寺遺跡では、前期から後期にわたる集落が発見されている。また、鑄川の対岸にある下鎌田遺跡でも、中期を中心とする大集落が営まれている。

I区丘陵西側の未調査部分に遺構が広がる可能性も残るが、当時の主な居住域は、より鑄川に近接した地域であったものと考えられる。

弥生時代 G区の台地上より中期の土坑1基が検出されている。他にI区の丘陵上より中期の土器片が出土しているが、遺構はこの土坑のみである。周辺では、南蛇井増光寺遺跡の南端で住居4軒、埋甕・土坑などが見つかっている。

後期では、住居15軒が調査されている。これらの住居はF・G区の台地南半に多いが、H区・丘陵上にも造られている。ただし、南蛇井増光寺遺跡に比べると住居数は少なく、遺構密度も低い。縄文時代に引き続き、鑄川沿いの地域が中心的な居住域となっている。

I区の丘陵上には2軒の住居が造られており、このうち1軒からは、甕棺と思われる土器が出土している（付編1参照）。特殊な立地であり、通常の居住地域とは異なっていた可能性が考えられよう。

古墳時代 中期の住居が5軒F・G区の台地上より発見されている。1軒を除いて、台地北半に分布している。中期の住居は、本遺跡の北部に位置する前畑遺跡¹⁾で調査されている以外は、周辺では見つかっていない。小規模な集落が、小さな低地沿いに営まれている状況が看取される。

後期になると遺構量は急増し、F・G区の台地上を中心に集落が展開する。H区はやや少ないが、調査区東側の未調査地域に集落が延びるものと推測される。丘陵上からは、住居は発見されなかった。住居は6世紀代から造られているが、7世紀代のものが主流で、古墳時代住居全体の80%以上を占める。

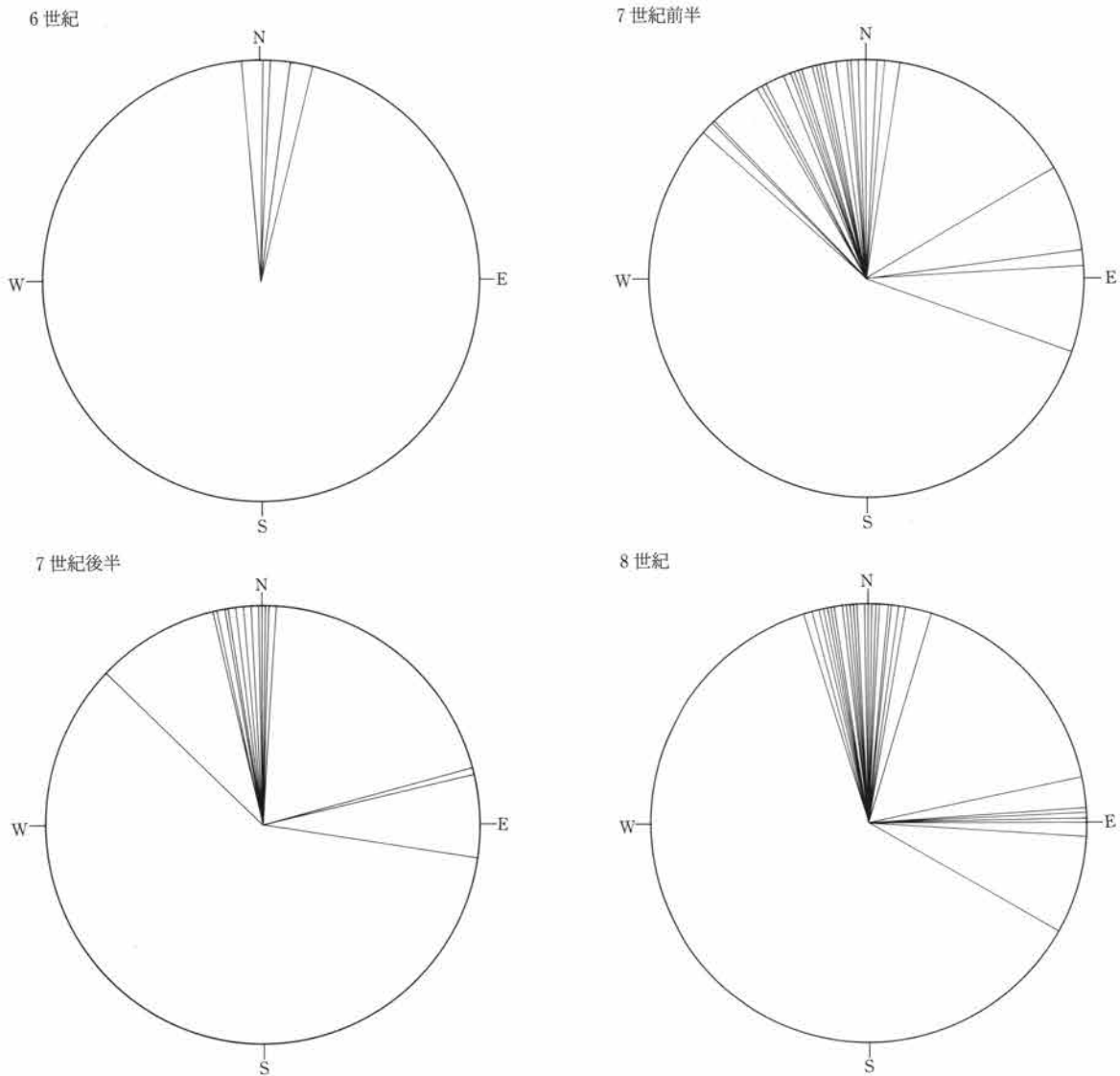
この時期の住居は、大半が北側に竈を持つ。東もしくは西側に竈を持つものもあるが、多くは造り替えの結果であり、住居構築時の竈の位置は北側のものが多い。したがって、住居構築時の竈の軸を住居主軸とした場合、大多数の住居の主軸は北を指すことになる（第17表）。

この主軸方向を検討してみると、磁北に近いものと、西側に20～40°ほど傾くものとに分けられる。時期ごとの主軸方位の傾向をみると、6世紀代には磁北方向に近いもの、7世紀前半には西側に傾くものが主流となり、7世紀後半にはまた磁北方向に近いものが大多数となる（第504図）。主軸が磁北方向にまとまる傾向は、後述する奈良時代の住居にも引き継がれている。これに対し、弥生時代や古墳時代中期の住居では、主軸方向についての顕著な傾向はみられなかった。後期以降、住居の増加にともなって、土地利用の形態に何らかの規制が加えられたものであろうか。

第4章 ま と め

第17表 古墳後期～奈良時代住居主軸一覧

No	主軸方位	カマド	備 考	修正主軸	年 代	No	主軸方位	カマド	備 考	修正主軸	年 代
F-10	N-3°-E	北			6 C後半	H-15	N-1°-E	北			7 C後半?
F-24	N-1°-E	北			6 C?	G-58	N-10°-E	北			7 C?
G-10	N-14°-E	北			6 C前半?	G-60	N-2°-E	北			7 C?
G-32	N-8°-E	北?			6 C後半?	G-72	N-1°-W	北?			7 C?
G-49	N-1°-E	北			6 C後半	G-77	N-3°-W	北			7 C?
G-54	N-5°-W	北			6 C後半	G-78	N-97°-E	東			7 C?
F-5	N-28°-W	北			7 C前半	F-1	N-3°-E	北			8 C
F-12	N-60°-E	東			7 C前半	F-2	N-13°-W	北			8 C
F-14	N-30°-W	北			7 C前半	F-4	N-1°-W	北			8 C
F-21	N-44°-W	北			7 C前半	F-7	N-5°-E	北			8 C
F-22	N-56°-E	北・東	竈2基		7 C前半	F-9	N-11°-W	北			8 C
F-25	N-8°-W	北			7 C前半	F-11	N-3°-W	北			8 C
F-30	N-48°-W	北			7 C前半	F-13	N-86°-E	東			8 C
F-47	N-22°-W	北			7 C前半	F-15	N-87°-E	東			8 C
F-51	N-45°-W	北?			7 C前半	F-16	N-7°-W	北			8 C
G-5	N-9°-E	北			7 C前半	F-17A	N-5°-W	北			8 C
G-6	N-5°-E	北			7 C前半?	F-17B	N-11°-W	北・東			8 C
G-7	N-12°-W	北			7 C前半	F-18	N-4°-W	北			8 C
G-8	N-3°-E	北			7 C前半	F-19	N-8°-E	北			8 C
G-11	N-19°-W	北			7 C前半	F-29	N-1°-W	北			8 C
G-12	N-110°-E	東			7 C前半?	F-32	N-4°-W	北	北壁に旧竈		8 C
G-13	N-19°-W	北			7 C前半	F-33	N-11°-W	北			8 C
G-15	N-88°-E	東	北壁に旧竈	N-2°-W	7 C前半?	F-35	N-1°-E	北			8 C
G-19	N-2°-W	北			7 C前半?	F-40	N-12°-W	北			8 C
G-20	N-18°-W	北			7 C前半	F-41	N-4°-W	北			8 C
G-22	N-87°-E	東			7 C前半	F-45	N-15°-W	北			8 C
G-26	N-77°-E	東	北壁に旧竈	N-13°-W	7 C前半	F-46	N-78°-E	東			8 C
G-34	N-7°-W	北	東壁に旧竈	N-83°-E	7 C前半	F-48	N-7°-W	北			8 C
G-35	N-20°-W	北			7 C前半?	F-49	N-6°-E	北			8 C
G-37	N-4°-W	北			7 C前半?	F-50	N-10°-W	北			8 C
G-50	N-28°-W	北	北壁に旧竈		7 C前半	F-54	N-1°-E	北			8 C
G-53	N-5°-W	北?			7 C前半	F-56	N-17°-W	北			8 C
G-56	N-14°-W	北			7 C前半	F-58	N-S	北			8 C
G-59	N-17°-W	北			7 C前半	G-16	N-3°-E	北			8 C
G-62	N-22°-W	北?			7 C前半?	G-17	N-5°-E	北			8 C
G-66	N-19°-W	北?			7 C前半	G-18	N-2°-E	北・東	竈2基		8 C
G-69	N-27°-W	不明			7 C前半?	G-24	N-6°-E	北			8 C
G-73	N-S	北			7 C前半?	G-28	N-2°-W	北			8 C
H-6	N-5°-W	北			7 C前半	G-30	N-5°-W	北			8 C
H-11	N-18°-W	北			7 C前半	G-33	N-3°-E	北			8 C
H-12	N-11°-W	北			7 C前半	G-38	N-1°-E	北			8 C
F-3	N-46°-W	北			7 C後半	G-41	N-1°-E	北			8 C
F-6	N-81°-E	東	北壁に旧竈	N-9°-W	7 C後半	G-42	N-1°-E	北			8 C
F-8	N-7°-W	北			7 C後半	G-43	N-94°-E	東			8 C
F-20	N-1°-E	北			7 C後半	G-47	N-17°-E	北			8 C
F-23	N-13°-W	北	東壁に旧竈	N-77°-E	7 C後半	G-61	N-3°-E	北			8 C
F-31	N-10°-W	北			7 C後半	G-65	N-S	北	北壁に旧竈		8 C
F-37	N-103°-W	西	北壁に旧竈	N-13°-W	7 C後半?	G-74	N-2°-E	北			8 C
F-38	N-75°-E	東			7 C後半	G-76	N-2°-E	北			8 C
F-42	N-5°-W	北?			7 C後半	G-79	N-1°-E	北			8 C
F-52	N-1°-W	北?			7 C後半?	H-1	N-9°-W	北			8 C
G-4	N-12°-W	北			7 C後半	H-2	N-1°-E	北			8 C
G-9	N-4°-E	北			7 C後半	H-3	N-6°-W	北			8 C
G-23	N-1°-E	北	東壁に旧竈	N-91°-E	7 C後半	H-4	N-89°-E	東			8 C
G-27	N-3°-W	北			7 C後半	H-5	N-7°-W	北			8 C
G-31	N-S	北			7 C後半	H-7	N-10°-E	北・東	竈2基		8 C
G-63	N-2°-E	北			7 C後半	H-8	N-5°-E	北			8 C
G-67	N-80°-E	東	北壁に旧竈	N-10°-W	7 C後半	H-10	N-87°-E	東?			8 C
G-68	N-99°-E	東			7 C後半	H-13	N-90°-E	東			8 C
G-75	N-5°-W	北			7 C後半?	H-17	N-120°-E	東			8 C



第504図 時期別住居主軸方位

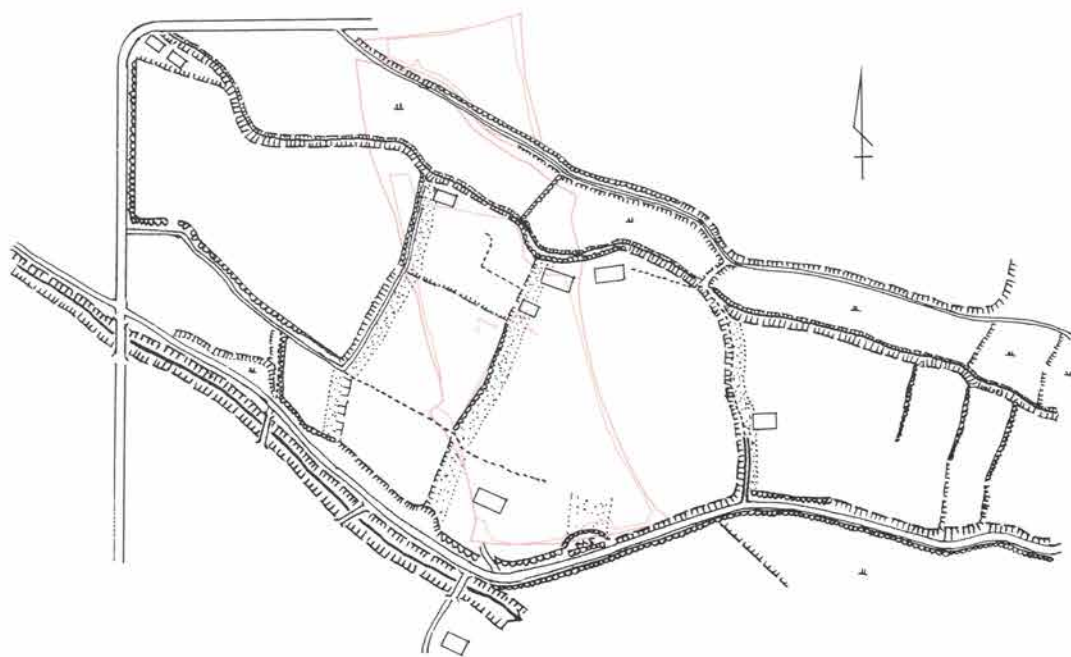
奈良・平安時代 奈良時代の集落は、F・G区の台地上とH区に分布する。7世紀代に引き続いて多数の住居が造られ、7・8世紀代で住居全体の約7割を占める。掘立柱建物や台地南半に多数分布するピット群も、この時期に含まれる。多くの住居は北側に竈を持ち、前代に引き続き主軸が磁北方向に近いものが主流であるが、東側に竈を持つものが増加してくる（第504図）。

平安時代にはいと住居数は急激に減少し、G区とH区境の低地よりにまばらに分布する。南側の南蛇井増光寺遺跡では、引き続き多数の住居が造られており、居住域の中心からはずれるようである。丘陵上にも1軒造られているが、非常に特殊な立地であり、何らかの特別な住居であった可能性も考えられる。

また、中沢川沿いの低地では、As-B軽石に覆われた小規模な水田が見つかっている。

中・近世 中世の遺構は、F・G区の台地上とI区丘陵上に分布する。

台地上からは竪穴住居や溝、土坑、墓墳などが見つかっている。住居は非常に小規模なもので、竈などの施設は持たない。また、溝・土坑の一部には、覆土中に再堆積のAs-B軽石を含む一群がある。このうち、G



第505図 F・G区の中世遺構と平賀城（S = 1/3000 山崎一『古城址の研究 下巻』より一部改変）

一2号溝は、遺物の年代から13世紀前半と推定され、他の遺構についても同時期に位置付けられよう。特に溝については、北東から南西に長く延びるG-1号溝に平行、もしくは直交する方向に造られていることから、何らかの規格性を持っているようである。遺跡地は平賀城の比定地にあたり²⁾、G-1号溝は山崎一氏による想定図の堀切部分にほぼ一致する（第505図）。これらの遺構が、平賀城に関連したものである可能性は否定できない。

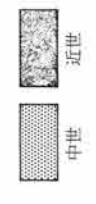
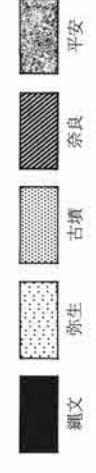
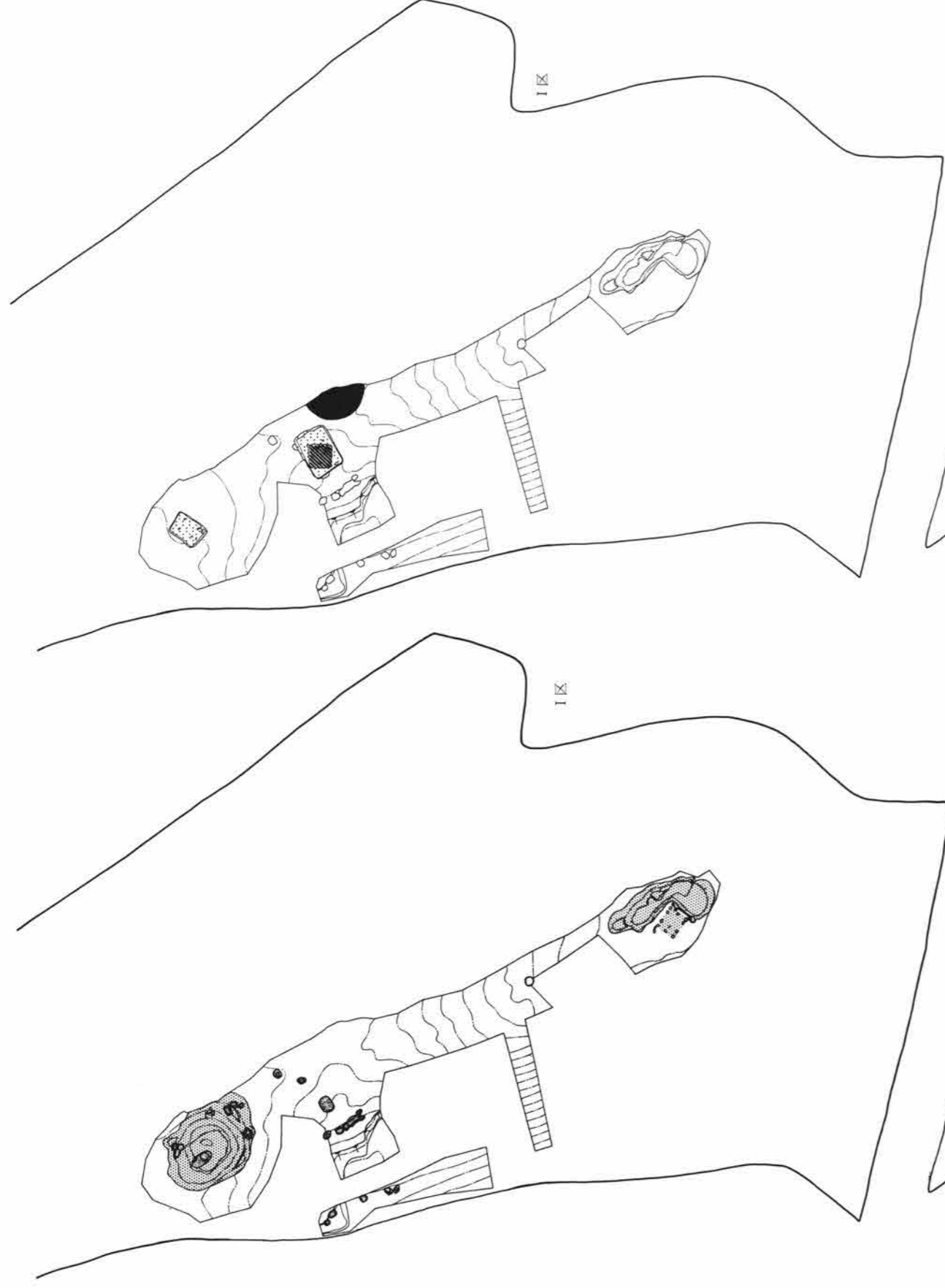
丘陵上からは、塚と礎石建物跡が見つまっている。火山灰との関係からAs-B降下後、As-A降下前に構築されたことがわかる。

塚は、丘陵の鞍部に位置していた。内部施設などは伴っていなかったが、盛土の下位に複数の墓墳が造られていた。墓墳内からは、皇宋通寶・熙寧元寶などが出土しているが、その他に時期を特定できるような遺物はない。

礎石建物跡は、丘陵先端の頂上部分に位置する。地山を平坦に削出し、周囲には一部盛土を施している。建物の内部からは、銅の生産に関わる炉の破片が出土している。この他に建物の性格を特定できるような遺物の出土はなかったが、昭和30年以前の耕地図によると、丘陵上に「堂山」、丘陵北側の低地部に「観音前」という小字名があることから、小規模な堂宇があった可能性も考えられる。

これら以外に中世に属する遺構がないことから、丘陵上は通常の居住の場ではなかったようである。

近世以降の遺構としては、いわゆる「洋梨形土坑」が十数基発見された。F・G区の台地上にまばらに分布するが、北半の台地縁部分に2～3基まとまっているものがある。燃焼部・焚口部ともに残存しているものは、いずれも緩やかな斜面の上位に燃焼部を持ち、下位方向に焚口が延びる形状をとる。遺物の出土はなく時期決定は困難であった。隣接する南蛇井増光寺遺跡E・DN区からも同様の土坑が検出されており、出土遺物と覆土中にAs-A軽石を含むことから近世以降のものと判断されている³⁾。したがって、本遺跡の洋梨形土坑も同様の年代を与えられるものと思われる。用途としては、製鉄関連の遺構とも考えられたが、内部より鉄滓等の出土はなく、その可能性は薄い。



第506図 中沢平賀界戸遺跡時期別遺構分布図

第2節 特殊な遺物について

1 礎石建物跡出土の炉壁破片

I区山頂の礎石建物跡からは、内面に緑色の金属粒の付着した炉壁破片が出土している。これらの破片は、4点の礫とともに、建物跡の西側からまとまって出土した。礫のうち3点は熱を受け赤化している(第473・474図7・8・9)。建物跡からは時期を特定できるような遺物は見つからなかったが、出土状況から、As-A軽石の降下時にはすでに礎石・炉壁片ともに完全に埋没していたことがわかる。従って、建物の時期は、近世前半期以前である。同じ丘陵上には中世と思われる塚があり、何らかの関連も想定されることから、建物の構築時期も中世まで遡り得る可能性がある。

出土した炉壁は、6点の破片に接合された(第470～473図1～6)。うち、より大型の破片4点は、外面が熱を受け赤変、内面はガラス状に溶解し、金属粒や炭化物が付着している(1・2・4・5)。いずれも緩く内湾しており、上端及び下端は平坦に整形されている。破断面の観察によると、内部にはモミガラのような植物質のものが混入されている。上端部の破片から、外径64cm、内径46cmの円筒形状と推測される。また、上端部の外面には口縁に沿ってわずかな段差があり、幅2～3cm程の帯状に表面が剝落している(1)。接合時に金具のようなものを使用した痕跡であろうか。また小型の破片のうち1点は、他と同様に外面が赤変し、内面にガラス状の溶解部がみられるが、やや薄手で、ほとんど湾曲していない(6)。また、上側に半月形のくぼみを持つため、ふいご羽口の挿入口部分と考えられる。残存部分からみて、挿入口の直径は10cm程度と推定される。残る1点は、欠損部分が大きく形状は不明であるが、上面にヘラ状の工具による線刻の様なものが見られる(3)。外面は赤化している。

炉の使用形態であるが、上下が平坦に整形されていることから、円筒形状のものを複数段積み重ねて使用したものと思われる⁴⁾。また、羽口の挿入口部分の破片があることから、ふいごによる送風が行われていたものと思われるが、どの部分に羽口が取り付けられていたのかについては特定できない。加えて、遺構内に炉床部がみられないことなどから、皿状の底部の上に円筒形の炉壁を積み重ねて使用していたものと思われる⁵⁾。従来知られていたものに比べると、かなり大型のものである。

この炉壁がどのような生産活動に関わっていたかを明らかにするために、金属学的解析を依頼した。その結果、銅合金の溶製もしくは、銅製品鑄造時の銅合金の溶解に使用された可能性が指摘されている(付編3参照)。遺跡内でどちらの作業が行われていたかを特定するには、製品鑄造に不可欠な鑄型の出土が決め手となるが、調査では発見されていない。いずれにしても、今回出土したものは非常に断片的な資料であり、これ以上の推測は危険である。作業の内容については、礎石建物跡の性格とも関連する問題だけに、今後類例を待って結論付けたい。

2 木製緯打具

G-5号住居より、炭化した木製の緯打具が出土した。当住居は焼失住居であり、内部よりかなりの量の炭化材が出土した。緯打具は、住居西壁際の床面から若干浮いたところに位置していた。調査時に木製品として認識していなかったため保存処置を取らず、劣化していたこともあり、取り上げる際にかかなりの部分が崩れて失われてしまった。そのため、検出時には長さが25cm程であったのが、現状では14cm程しか残存していない。貴重な資料だけに悔やまれる結果である。今後、焼失住居の調査の際には、炭化木製品が含まれている可能性を考慮し、慎重に調査を行いたい。

第4章 ま と め

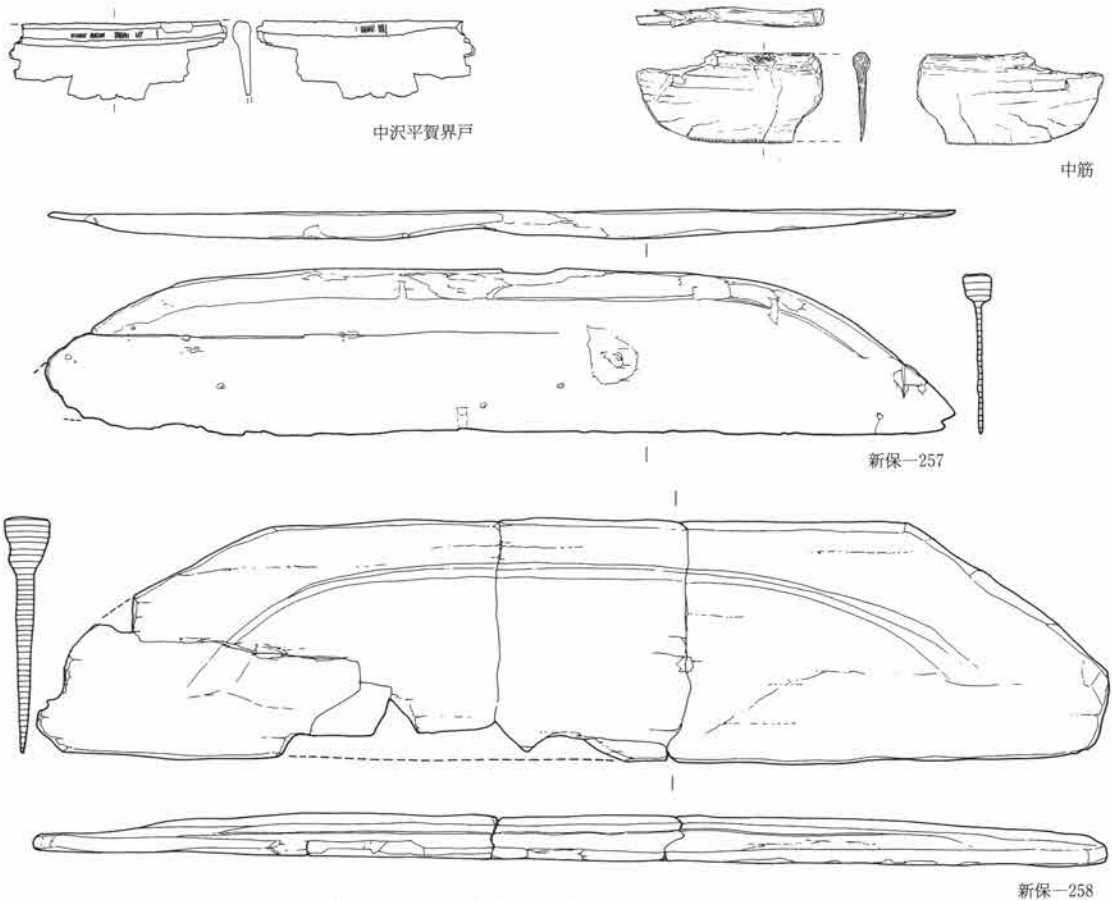
緯打具は、機織りに関連する道具で、緯糸を手前に打ち込むのに使われる。原始機・地機に伴うもので、いままでの出土例から硬い材質の木を材料としている。本遺跡の緯打具は、弓形、もしくは幅のせまい三日月形のもの中央部破片と思われる。背側は残存しているが、刃側は端部を欠損している。背の部分が丸く肥厚し、刃側が薄く削ってある。背の表裏には、開口部に立てて隙間を確保した際に、経糸との摩擦によってできた溝状の使用痕（糸ずれ）が残っている。材質はカバノキ属に類似した種類のものである。

古代の緯打具は、県内では他に新保遺跡、中筋遺跡で出土している（第507図・第18表）。新保遺跡では、古墳時代の大溝の中から2点出土している⁶⁾。いずれも幅広・大型のもので、一部が欠損しているが、全体の形状がほぼ復元できる資料である。素材はともにカシ類である。中筋遺跡のものは、火砕流によって焼失した7号平地式建物内から出土した⁷⁾。新保遺跡例に比べるとかなり小振りで、幅約6cmほどである。本遺跡例のように薄い刃部を作り出し、背側は厚く肥厚している。刃部には糸ずれ痕が観察できるが、背側にはない。素材はカバノキ属である。

これらの類例をみた場合、本遺跡例は、大きさ・素材に付いて中筋遺跡の資料に類似している。この2つ

第18表 県内出土緯打具一覧

遺跡名	遺構名	No.	時 期	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	材 質	備 考	文 献
中沢平賀界戸	G-5住	9	7 C前半	(14.5)	(5.1)	1.2	カバノキ属類似種	背側に糸ずれ痕	本書
新保	大溝	257	弥生末～古墳初	(60.4)	10.7	1.8	カシ類	刃部に使用痕?	註5)
新保	大溝	258	//	72.0	16.0	3.2	カシ類		註5)
中筋	7号平地建物		6 C初頭	(12.5)	5.9	1.0	カバノキ属	刃部に糸ずれ痕	註6)



第507図 県内出土の緯打具 (S = 1 / 5)

の資料は、新保遺跡例よりも後出のものであり、両者における大きさの違いは、機織りの技術そのものの違いを表している可能性も考えられよう。

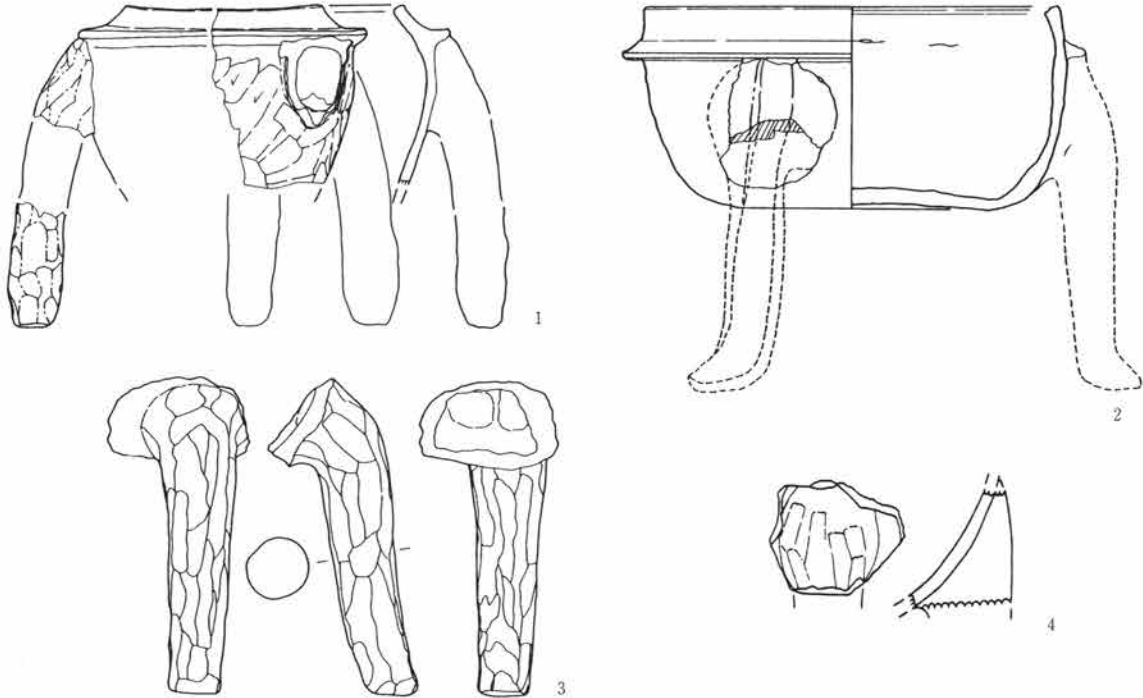
3 脚付き羽釜

I-3号住居の竈内より、3本の脚のついた小型の羽釜が出土した。鏝のすぐ下に脚が付けられており、器表面は二次的に被熱していた。脚は、胴部との接合部と先端がそれぞれ1点づつ出土したのみであるが、胴部には他に2ヶ所脚の剥落した痕跡が認められる。共伴する遺物より、住居の年代は10世紀代と推定される。

このような形態の羽釜は、群馬県内では非常に少数の出土例しかない。県内出土の関連資料一覧を第508図・第19表に示す⁹⁾。まず、本遺跡に隣接する南蛇井増光寺遺跡では、脚部のみ2点出土している⁹⁾。いずれも表採や試掘トレンチ内からの出土であり、遺物の時期はわからない。高崎市熊野堂遺跡では脚部を除く本体部分が見つまっている¹⁰⁾。これは住居の竈内から出土したもので、脚部を欠いたまま浅い土鍋として使用されていたようである。住居の年代は、10世紀の第1四半期に比定されている。前橋市元総社寺田遺跡では、胴部と脚部の接合部付近の破片が出土しているが、全体の形状は不明である¹¹⁾。遺跡内を流れる牛池川沿いの低地で発見されたもので、Hr-FA(6世紀初頭噴出 給源：榛名山)とAs-B(1108年噴出 給源：浅間山)との間にはさまれた河川の堆積物中に含まれていた。また、一覧表には載せていないが、前橋市下東西清水

第19表 県内出土脚付土器一覧

遺跡名	出土位置	時期	備考	図版No.	文献
中沢平賀界戸	I-3住竈内	10C	小型の羽釜に3本の脚が付く。	508図-1	本書
南蛇井増光寺	1区10トレ	不明	脚部破片。	// -3	註8)
南蛇井増光寺	DS区表採	不明	脚部破片。		(H8年度報告書刊行)
熊野堂	98住竈内	10C第1四半期	小型の羽釜に3本の脚が付く。脚欠損のまま再利用。	508図-2	註9)
元総社寺田	VI区III層	Hr-FA、As-B間	胴と脚の接合部破片。	// -4	註10)



第508図 県内出土の脚付土器 (S = 1 / 4)

第4章 ま と め

上遺跡からも、平成7年度の調査で、脚部のみ1本出土している。県内でわずか6点しかない資料のうち、3点までがこの地域に集中することは興味深い。

以上のように、断片的な資料が見つかるにすぎず、確実に時期のはっきりした遺構から、共伴遺物とともに出土したものは、本遺跡例と熊野堂遺跡例のみである。加えて本遺跡例は、不完全ながらも全体の形状を推測できる資料であり、その点からも貴重な例である。

4 砥石素材

本遺跡では、総数20点の砥石が見つかる（第509図、第20表）。すべて古墳時代以降の住居からの出土で、内訳は古墳時代中期1点・後期11点、奈良時代8点である。石材別にみると砥沢石が最も多く、全体の70%を占めている。他の石材としては、砂岩・泥岩類、流紋岩、安山岩類がある。

砥沢石製の砥石については、G-62号住居より全く未使用のものと、研磨面の発達が弱く未使用に近いものがそれぞれ1点ずつ出土している。いずれも全面を面取りし、やや底面側が幅広の直方体状に仕上げている。重量は全く未使用のものが592.5g、他方が352.1gである。他の砥沢石製の砥石も、使用前は同様な形態であったと思われる。砥沢石は、鎗川上流の支流である南牧川沿いに産地が知られている。遺跡からは、直線距離にして南西に約16km離れている。比較的軟質な岩石であることから、遺跡付近の鎗川ではあまりみられない。また、遺跡内では、原石や未製品、砥石を製作した際に生じる剥片類などは出土していない。このことから、これらの砥石は、石材の原産地近くで加工され、製品、もしくは半製品として遺跡内に搬入された可能性が高い。一方、他の石材では、砂岩では竈の袖石や天井石などに多用される板状のものが、また流紋岩や安山岩では円礫状のものが利用されている。これらはいずれも遺跡付近の鎗川周辺で容易に採取できる。また、砥沢石製の砥石は、上記の2点を除くと使い込んであるものが多く、他の石材の砥石に比べて使用頻度が高い。以上のことから、本遺跡においては、製品として搬入された砥沢石製の砥石が主に使われ、遺跡付近で採取できる他の石材のものが補助的に利用されたものと推測される。このような砥沢石製品の搬入は、紡錘車の未製品が出土していることから（第168図5）、砥石にとどまらなかったことがわかる。

砥沢石製砥石を出土した住居は、7世紀～8世紀のものがほとんどである。したがって、このような砥沢石製砥石を出土した住居の一覧

第20表住居出土砥石一覧

遺構名	No	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存状況	石 材	時 期	備 考	図No
F-36住	7	30.0	15.0	8.5	540.0	完形	流紋岩	5世紀	円礫を素材とする	1
F-12住	14	16.6	8.0	4.1	941.4	完形	砥沢石	7世紀前半		10
F-21住	9	17.2	7.5	5.8	1304.6	完形	砥沢石	7世紀前半		11
F-22住	13	15.9	6.8	4.9	587.1	ほぼ完形	砥沢石	7世紀前半		12
F-30住	9	24.8	12.2	3.9	225.0	完形	凝灰質砂岩	7世紀前半	盤状の角礫素材とする	3
G-15住	7	9.9	5.7	2.8	235.8	完形	砥沢石	7世紀前半?		9
G-19住	4	(14.1)	6.6	4.4	(385.8)	1/2	砥沢石	7世紀前半		8
G-26住	31	11.6	5.8	4.9	419.9	完形	砥沢石	7世紀前半		5
G-34住	9	17.7	9.4	3.8	(707.6)	一部欠損	泥岩	7世紀前半		2
G-34住	10	(5.4)	4.5	1.3	(42.2)	1/8	牛伏砂岩	7世紀前半		4
G-62住	3	13.3	7.1	4.7	592.5	完形	砥沢石	7世紀前半	未使用	6
G-62住	4	11.1	5.8	3.9	362.1	完形	砥沢石	7世紀前半	ほぼ未使用	7
F-16住	7	18.3	8.3	2.9	837.4	完形	砥沢石	8世紀		15
F-32住	21	(11.0)	4.9	3.1	(247.1)	1/2	砥沢石	8世紀		19
F-35住	8	(13.5)	4.3	2.4	(199.9)	ほぼ完形	変質安山岩	8世紀	円礫を素材とする	14
F-56住	22	25.2	13.1	4.4	214.5	完形	変質安山岩	8世紀	亜円礫を素材とする	13
G-30住	6	(7.3)	(4.6)	3.1	(128.6)	破片	砥沢石	8世紀		18
G-33住	2	(6.4)	(10.0)	3.2	(360.9)	1/4	砥沢石	8世紀		17
G-74住	25	(11.4)	7.7	3.7	(382.7)	1/2	砥沢石	8世紀		20
H-4住	7	(9.0)	8.3	4.2	(528.5)	1/2	砥沢石	8世紀		16



第509図 住居出土の砥石 (1・3・13のみ1/5、他は1/4)

第4章 ま と め

石製砥石の利用は、7世紀にはすでに確立していたことは明らかである。それ以前については、資料数が十分ではないため、本遺跡の状況からは判断できない。ただし、隣接する南蛇井増光寺遺跡B区では弥生時代の住居から5点の砥石が出土しているが¹²⁾、これらはいずれも板状の砂岩を利用したものである。したがって、砥沢石製砥石の製品としての搬入は、弥生時代にはなかった可能性が高い。

また、砥沢石製砥石の流通した範囲であるが、竊川流域の遺跡では、量に差はみられるが、ほとんどの遺跡で出土している。ただし、竊川の中流域から下流の地域は牛伏砂岩の分布域にあたり、砥石の素材として多用されている。このため、本遺跡のように、砥沢石製砥石が全体の7割を占めるような遺跡は他にない。これは、本遺跡が砥沢石の原産地に近いという地理的な要因によるところが大きいが、本遺跡に居住した集団が砥沢石製砥石の流通に関して何らかの役割をはたしていた可能性も考えられる。今後、他の遺跡の状況も鑑み、検討したい。

註

- 1) 富岡市教育委員会 『前畑・打出1・丹生城西・五分一・千足遺跡』 1992年
- 2) 山崎 一 『群馬県古城壘址の研究 下巻』 1972年
- 3) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『南蛇井増光寺遺跡 II』 1993年
- 4) 五十川伸矢氏によれば、やや小型ではあるが、同様な使用形態の炉が知られているという。
- 5) 註4)に同じ。
- 6) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『新保遺跡 I』 1986年
- 7) 渋川市教育委員会 『中筋遺跡 第7次発掘調査報告書』 1993年
- 8) 脚部だけの資料は、厳密には胴部の形状については不明であるが、脚の形状が類似することから類例として取り上げた。
- 9) (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 『南蛇井増光寺遺跡 IV』 1996年
- 10) // 『熊野堂遺跡 2』 1990年
- 11) // 『元総社寺田遺跡 III』 1996年
- 12) // 『南蛇井増光寺遺跡 I』 1992年

付 編

1. 中沢平賀界戸遺跡出土の土器に残存する脂肪の分析

(株)ズコーシャ総合化学研究所 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏
帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が残存していたこと⁽¹⁾、古代遺跡から出土した約2千年前のトゥモロコシ種子⁽²⁾、約5千年前のハーゼルナッツ種子⁽³⁾に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した⁽⁴⁾。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には、炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と、鎖の途中に二重結合を持つ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のはコレステロール、植物性のはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と原生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺物・遺構に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて中沢平賀界戸遺跡 I 区 4 号住居から出土した土器の性格を解明しようとした。

1 土器および土壌試料

中沢平賀界戸遺跡 I 区 4 号住居内隅から出土した土器No.5 と土器No.6 に関連する試料を分析した。試料採取地点を第510図に示す。試料No.1～6 は土器No.6 のほうで、試料No.1 は土器そのもの、No.2 は土器口縁部、No.3 は土器内中心部土壌、No.4 は土器内上部土壌、No.5 は土器内中部土壌、No.6 は土器内下部土壌である。試料No.7～9 は土器No.5 の方で、試料No.7 は土器内上部土壌、No.8 は土器内中部土壌、No.9 は土器内下部土壌である。No.10およびNo.11は対照土壌試料で、住居外から採取した。

2 残存脂肪の抽出

土器試料418～2694 g と土壌試料584～1466 g に3倍量のクロロホルム-メタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム-メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに2回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られ

た全抽出溶媒に1%塩化バリウムを全抽出溶媒の4分の1容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を第21表に示す。抽出量は土器試料で0.0024~0.0049%、平均0.0037%、土壌試料で0.0012~0.0079%、平均0.0059%であった。この値は以前分析した南蛇井増光寺遺跡B区の土器および土壌試料の平均抽出量と殆ど同じであった⁽⁵⁾。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125°C封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、ヘキサノーエチルエーテル-酢酸（80:30:1）またはヘキサノーエーテル（85:15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した⁽⁶⁾。

残存脂肪の脂肪酸組成を第511図に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16:0）、パルミトレイン酸（C16:1）、ステアリン酸（C18:0）、オレイン酸（C18:1）、リノール酸（C18:2）、アラキジン酸（C20:0）、ベヘン酸（C22:0）、エルシン酸（C22:1）、リグノセリン酸（C24:0）、ネルボン酸（C24:1）の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中での脂肪酸組成についてみると、試料No.1からNo.6までの小型土器No.6関連試料と対照土壌試料No.11はほぼ似通った脂肪酸組成パターンを示し、試料No.7~No.9の土器No.5関連試料と対照土壌試料No.10は、殆ど同一の別の脂肪酸組成パターンを示した。すなわち炭素数18までの中級脂肪酸を見ると、主要な脂肪酸はオレイン酸で約24~33%分布していた。土器No.6関連試料と対照土壌試料No.11ではオレイン酸に次いでパルチミン酸、パルミトレイン酸が分布し、土器No.5関連試料と対照土壌試料No.10ではその逆でパルミトレイン酸、パルチミン酸の順に分布していた。オレイン酸は主として動物性脂肪中で分布割合が高い。植物性脂肪としては特に根、茎、種子に多く分布する。一般に考古遺物にはパルミチン酸とパルミトレイン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミトレイン酸を経てパルミチン酸が生成するため、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物からきていると推定される。一方、高等動物、特に臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計で土器No.6から採取した試料中で約13~19%、土器No.5から採取した試料中で約10~14%、対照土壌試料中で約12~21%分布していた。この分布割合は通常の遺跡出土土壌中のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸3つの合計の約4~10%よりも多少多いものである。

4 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサノーエチルエーテル-酢酸（80:30:1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン-無水酢酸（1:1）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第512図に示

1. 中沢平賀界戸遺跡出土の土器に残存する脂肪の分析

す。残存脂肪から12～17種類のステロールを検出した。このうちコレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど7種類のステロールをガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

各試料中のステロール組成を見ると、動物由来のコレステロールは土器No.6 試料中で約5～19%、土器No.5 試料中で約3～7%、対照土壌試料中で約3～5%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは4～6%含まれている。試料中でコレステロール含量が8%以上であるのは、試料No.1とNo.2で、特に試料No.2ではその含量が約19%と大変高かった。植物由来のシトステロールは土器No.6、土器No.5 試料中で約31～46%分布しているのに対し、対照土壌試料中では約53～63%と圧倒的に多かった。対照試料中ではコレステロールも相対的に少ないことから、対照試料中の高級脂肪酸は植物性のワックスの構成成分に由来していると考えられる。クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロールとスチグマステロールは、全試料中でカンペステロールが約4～8%、スチグマステロールが約5～11%分布し、一般的な植物腐植土中での含量よりは多少多かった。微生物由来のエルゴステロールは対照土壌試料No.10を除き全試料中で約1～6%分布していた。試料No.10ではエルゴステロール含量が約12%と通常の植物腐植土中での5%前後の値よりも高かったが、人為的に微生物を添加した値⁽⁷⁾に比べるとかなり低いので、積極的に何かを発酵させたのではなく、植物性腐植物が自然発酵して微生物が増殖した可能性がある。この成績からも住居の外の対照土壌試料は植物性遺体で占められていることがわかる。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は、土壌で0.6以上⁽⁸⁾、土器・石器・石製品で0.8～23.5^(9,10)をとる。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を第2表に示す。表からわかるように、土器No.6 口縁部である試料No.2の分布比が0.5で土壌の指標値の0.6に近かった。次いで高いのが土器No.6 本体である試料No.1の0.26、土器No.5 内の下部土壌試料No.9の0.21でその他の全ての試料は0.1前後の低い値を示した。特に対照土壌試料のそれは試料No.10で0.04、No.11で0.09と低いものであった。

5 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に出土土壌を土壌墓と判定した兵庫県寺田遺跡の土壌試料⁽¹¹⁾、出土土壌を再墓と判定した宮城県摺萩遺跡の土壌試料⁽¹²⁾、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡の土壌試料⁽¹³⁾、出土土器を胞衣壺と判定した岡山県津寺遺跡⁽¹⁴⁾、奈良県平城京跡遺跡の試料⁽¹⁵⁾、人間の胎盤試料および以前南蛇井増光寺遺跡から出土し、幼児埋葬用甕棺と判定した甕内の底部土壌試料⁽⁹⁾に残存する脂肪酸の類似度とも比較した。

各試料間の脂肪酸組成の類似度をパターン間距離にして表した樹状構造図を第513図に示す。図からわかるように、土器No.6の試料すべてと対照土壌試料No.11が摺萩遺跡の試料とともに相関行列距離0.04以内でA群を形成した。また土器No.5内の土壌試料のすべてと対照土壌試料No.10が0.04以内でB群を形成し、A群とは0.1以内で近似していた。以前の南蛇井増光寺遺跡の試料は津寺遺跡の試料とともにD、E群を形成し、原川遺跡、寺田遺跡の試料のC群、津寺遺跡の試料のE群と近似していた。平城京胞衣壺、ヒト胎盤試料は別にF、G群を形成した。A、B群はC～G群と相関行列距離が0.4近く離れており、これらの群とは類似していないことを示している。

以上のことから中沢平賀界戸遺跡の住居内から出土した小型土器No.6、土器No.5内の土壌は摺萩遺跡の土

壤試料と類似していることがわかった。対照土壌試料No10およびNo11もそれらの試料と類似したのは、植物腐植のワックスを構成する高級脂肪酸が混入しているためと考えられる。

6 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

土器および土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を第514図に示す。図からわかるように、すべての試料が第3象限内にA群とB群に別れて分布した。この位置は試料が植物腐植土であり、土器試料に動物遺体を埋納した可能性が少ないことを示唆している。

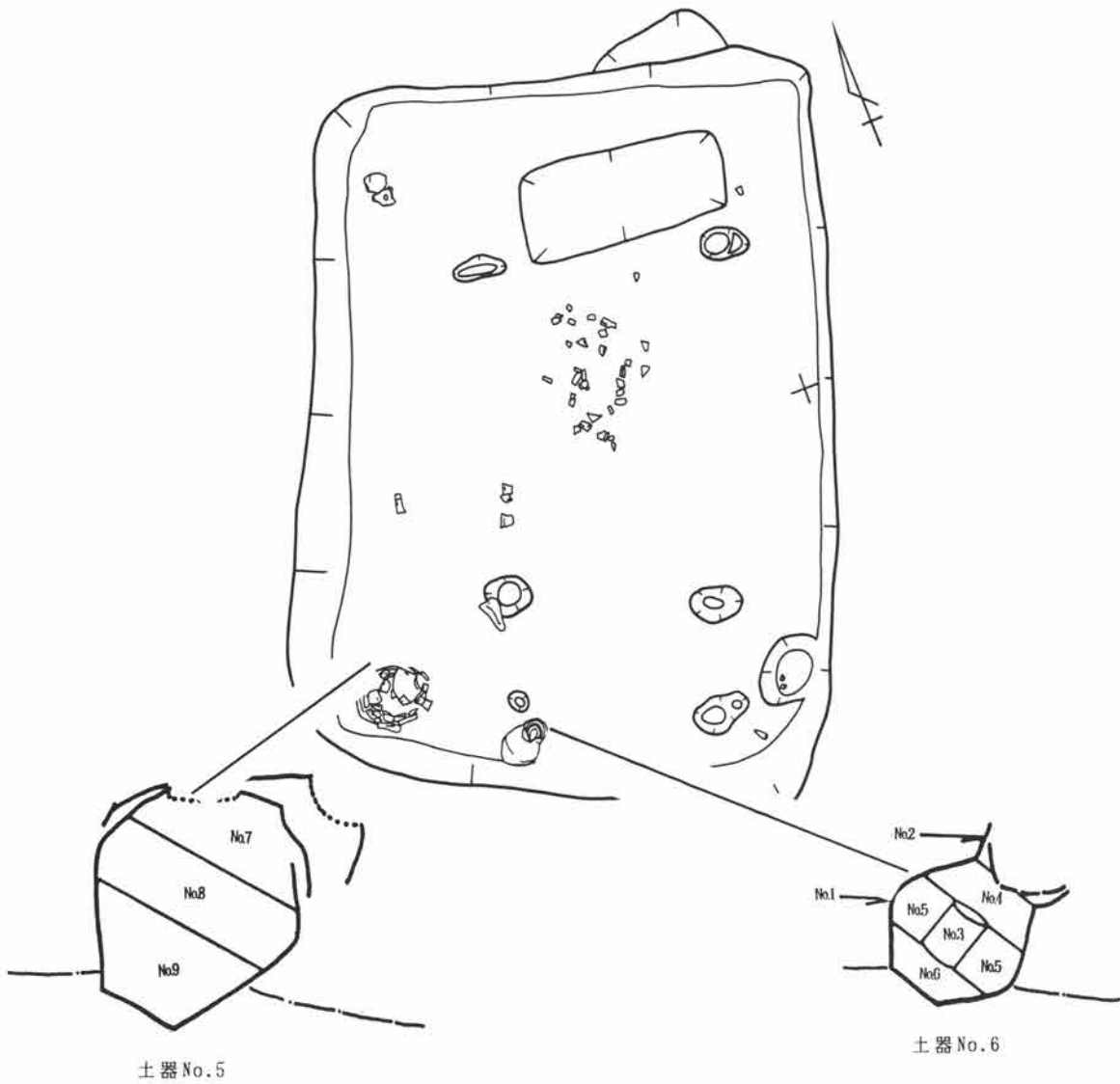
7 総 括

中沢平賀界戸遺跡の住居内から出土した土器No5と土器No6の性格を判定するために土器そのものと土器内の土壌に残存する脂肪の分析を行った。残存する脂肪酸およびステロール分析の結果、動物性脂肪は痕跡しか認められなかった。脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果は、宮城県摺藪遺跡の再葬骨と良く類似していた。これらの成績から土器No5および土器No6の両方に直接ヒト遺体を埋葬したのではなく、骨のみを埋納した可能性もあるが、生活用具として使われた可能性も推測される。

参考文献

- (1) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle : 「Food identification of samples from archaeological sites」 [Archaeo. Physika.], 10巻, 1979, pp260.
- (2) D. A. Priestley, W. C. Galinat and A. C. Leopold : 「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」 [Nature], 292巻, 1981, pp146.
- (3) R. C. A. Rottländer and H. Schlichtherle : 「Analyse frühgeschichtlicher Gefässinhalte」, [Naturwissenschaften], 70巻, pp33.
- (4) 中野益男 : 「残存脂肪分析の現状」, [歴史公論], 第10巻(6), 1984, pp124.
- (5) 中野寛子、福島道広、長田正宏、中野益男 : 「第4章 第3節 井出遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」, [南蛇井増光寺遺跡I], (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第142集
- (6) M. Nakano and W. Fischer : 「The Glycolipids of *Lactobacillus casei* DSM 20021」, [Hoppe-Seyler's Z. Physiol. Chem.], 358巻, 1977, pp1439.
- (7) 中野益男、福島道広、中野寛子、中岡利泰、根岸 孝 : 「残存脂肪分析法による原始古代の生活環境—とくに東北地方の縄文時代前期遺跡から出土したクッキー状炭化物の栄養化学的同定(第7報)」, [日本農芸化学学会東北支部北海道支部合同秋期大会講演要旨], 1987, pp15.
- (8) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教博、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢 : 「古代遺跡に残存する脂質の分析」, [脂質生化学研究], 第26巻, 1984, pp40.
- (9) 中野益男 : 「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」, [真脇遺跡—農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書], 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.
- (10) 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子 : 「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」, [ヘロカルウス遺跡], 北海道文化財研究所調査報告書, 第3集, 1987, pp191.
- (11) 中野益男、中野寛子、福島道広、長田正宏 : 「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」, (未発表), 兵庫県芦屋市教育委員会
- (12) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏 : 「摺藪遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」, [摺藪遺跡], 宮城県教育委員会, 1990
- (13) 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏 : 「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」, [原川遺跡I—昭和62年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書], 第17集, (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.
- (14) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男、福島道広 : 「津寺遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」, (未発表), 岡山県古代吉備文化財センター
- (15) 中野益男、中岡利泰、福島道広、中野寛子、長田正宏 : 「平城京左京(外京)五条五坊十坪から出土した胞衣壺の残存脂質について」, [奈良市埋蔵文化財調査概要報告書—昭和63年度], 1989, pp5.

1. 中沢平賀界戸遺跡出土の土器に残存する脂肪の分析



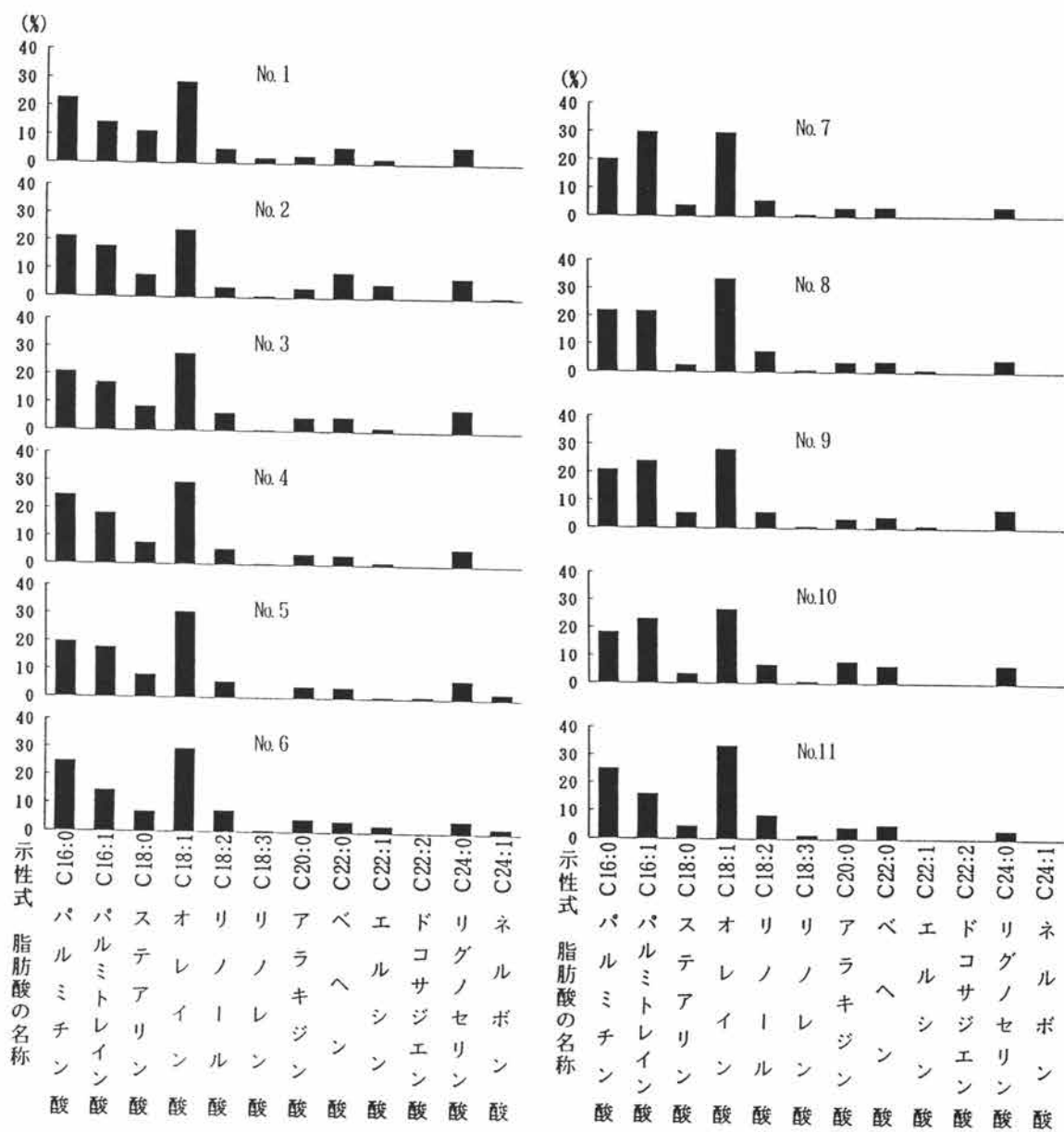
第510図 土壤試料採取地点

第21表 土壤試料の残存脂肪抽出量

試料No	試料内容	湿重量 (g)	全脂質 (mg)	抽出率 (%)
1	土器No 6 本体	2694.5	65.7	0.0024
2	” 口縁部	418.3	20.3	0.0049
3	” 中心部土壤	1017.9	66.3	0.0065
4	” 上部土壤	679.2	42.6	0.0063
5	” 中部土壤	1465.6	116.1	0.0079
6	” 下部土壤	830.2	56.1	0.0068
7	土器No 5 上部土壤	606.7	40.0	0.0066
8	” 中部土壤	583.6	38.7	0.0066
9	” 下部土壤	616.9	36.7	0.0059
10	住居跡外対照土壤	627.7	34.2	0.0054
11	”	793.1	9.7	0.0012

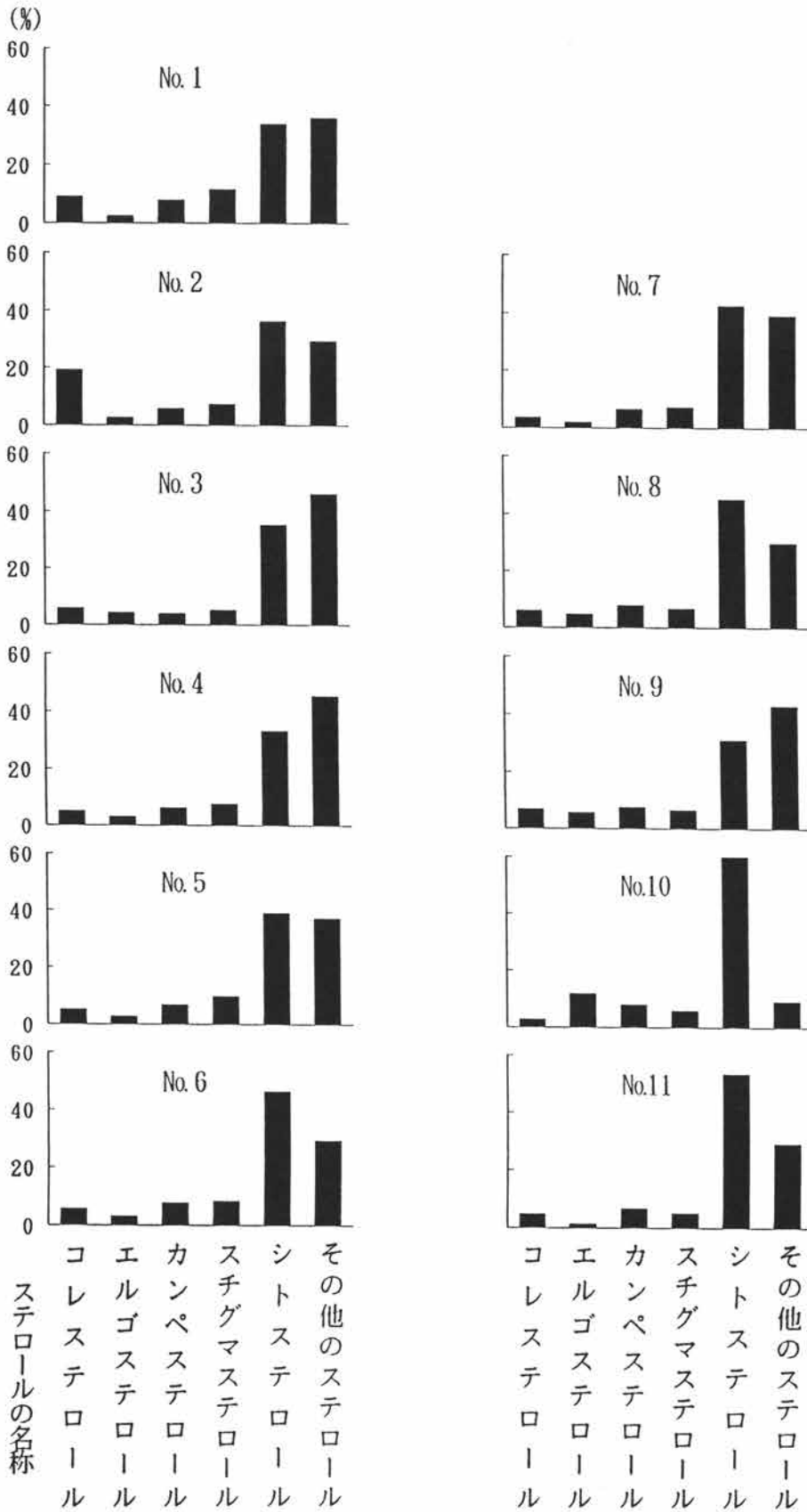
第22表 土壌試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール/シトステロール
1	8.92	33.71	0.26
2	19.13	36.29	0.53
3	5.73	35.07	0.16
4	4.97	33.24	0.15
5	5.06	38.91	0.13
6	5.56	46.30	0.12
7	3.42	42.46	0.08
8	5.94	45.10	0.13
9	6.68	31.07	0.21
10	2.66	62.89	0.04
11	4.67	53.47	0.09

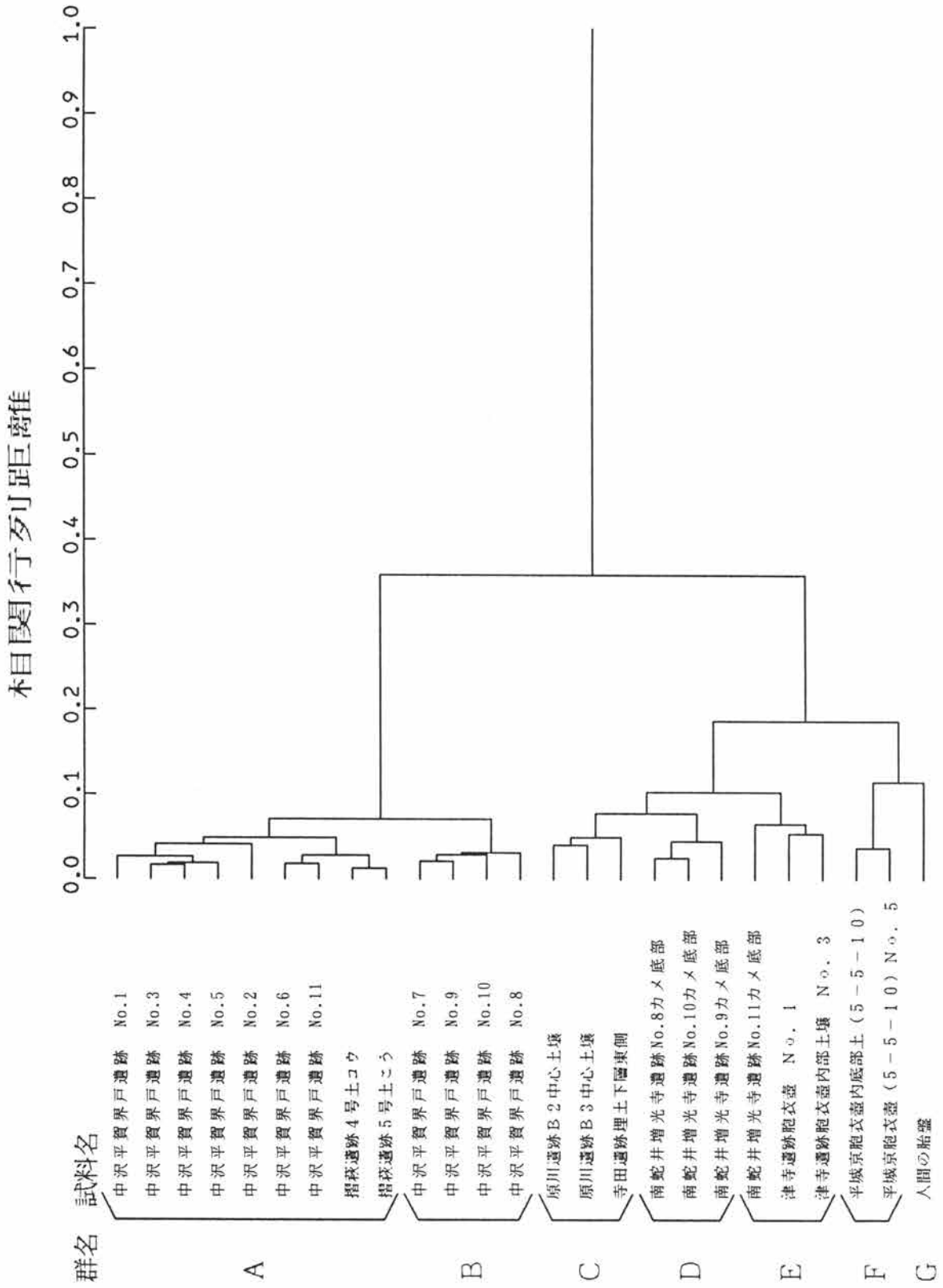


第511図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

1. 中沢平賀界戸遺跡出土の土器に残存する脂肪の分析

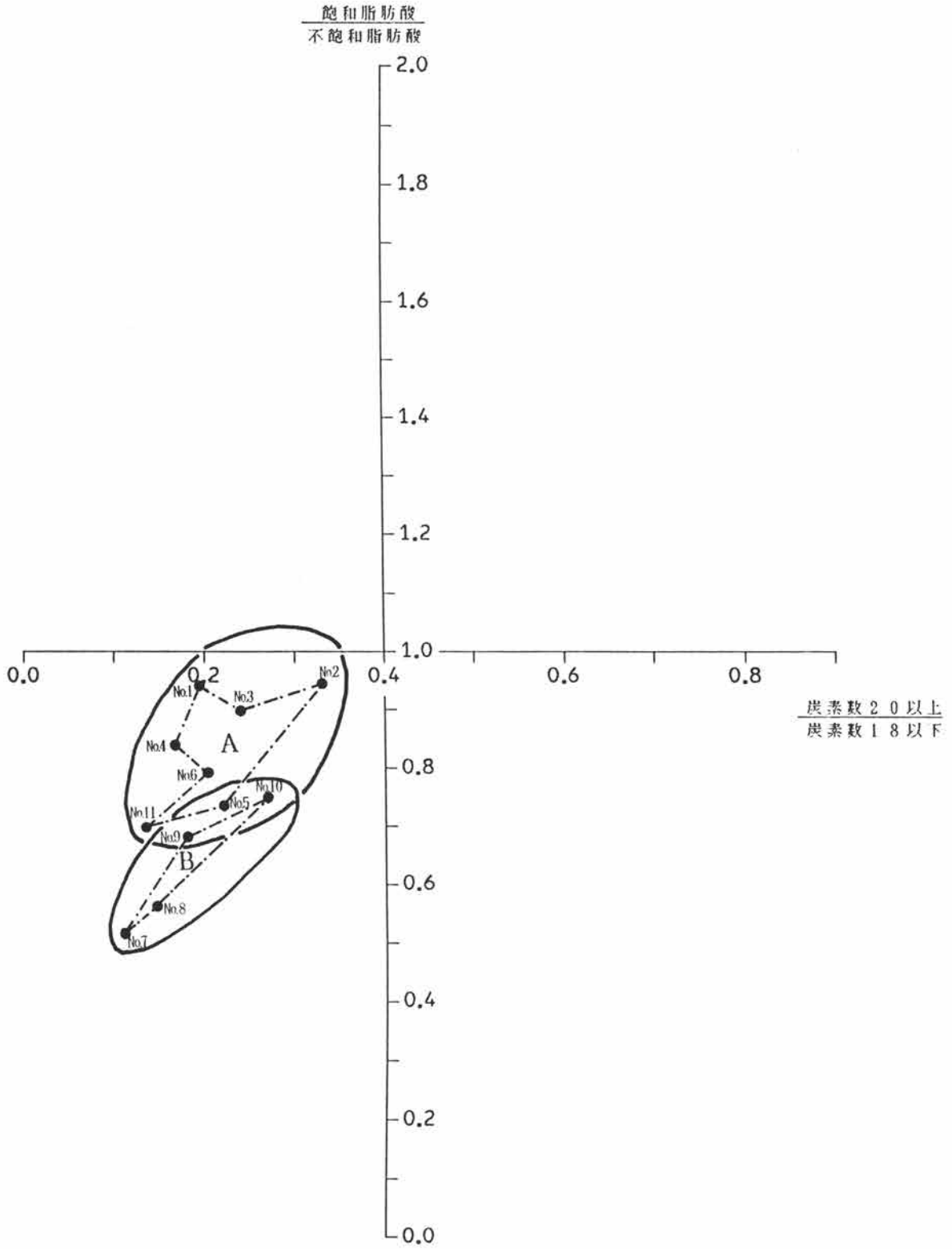


第512図 試料中に残存する脂肪のステロール組成



第513図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

1. 中沢平賀界戸遺跡出土の土器に残存する脂肪の分析



第514図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特异性相関

2. 中沢平賀界戸遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1 はじめに

中沢平賀界戸遺跡では、調査区の一部で浅間Bテフラ直下から足跡状遺構などが検出され、水田跡の可能性が考えられていた。この調査は、プラント・オパール分析を用いて、同遺構における稲作の検証を試みたものである。以下に、プラント・オパール分析調査の結果を報告する。

2 試料

1989年12月6日に現地調査を行い、浅間Bテフラ直下の遺構検出面について、A地点およびNo.1～No.13地点で試料を採取した(第515図)。採取用具は、容量50cm³の採土管などを用いた。試料数は計16点である。

3 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法(藤原、1976)」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾(105°C・24時間)、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40μm、約0.02g)
*電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散(150W・26KHz・15分間)
- (5) 沈底法による微粒子(20μm以下)除去、乾燥
- (6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体由来するプラント・オパール(以下プラント・オパールと略す)を主な対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算計数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10⁻⁵g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94(種実重は1.03)、6.31、0.48である(杉山・藤原、1987)。

4 分析結果

プラント・オパール分析の結果を第23表および第516図に示す。なお、稲作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族(ススキやチガヤなどが含まれる)、キビ族(ヒエなどが含まれる)の主要な5分類群に限定した。

5 考 察

(1) 稲作の可能性について

A地点では、浅間Bテフラ層およびその上下層について分析を行った。その結果、すべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、浅間Bテフラ直下の3層では、密度が5,600個/gと高い値である。また、同層直上の浅間Bテフラ混層では700個/gと低い値であることから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同層で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

浅間Bテフラ直下の遺構検出面では、No.1～No.13地点について分析を行った。その結果、すべての地点でイネのプラント・オパールが検出された。密度は1,600～3,300個/gとやや低いものの、上述と同様に上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、これらの地点で稲作が行われていた可能性は高いと考えられる。

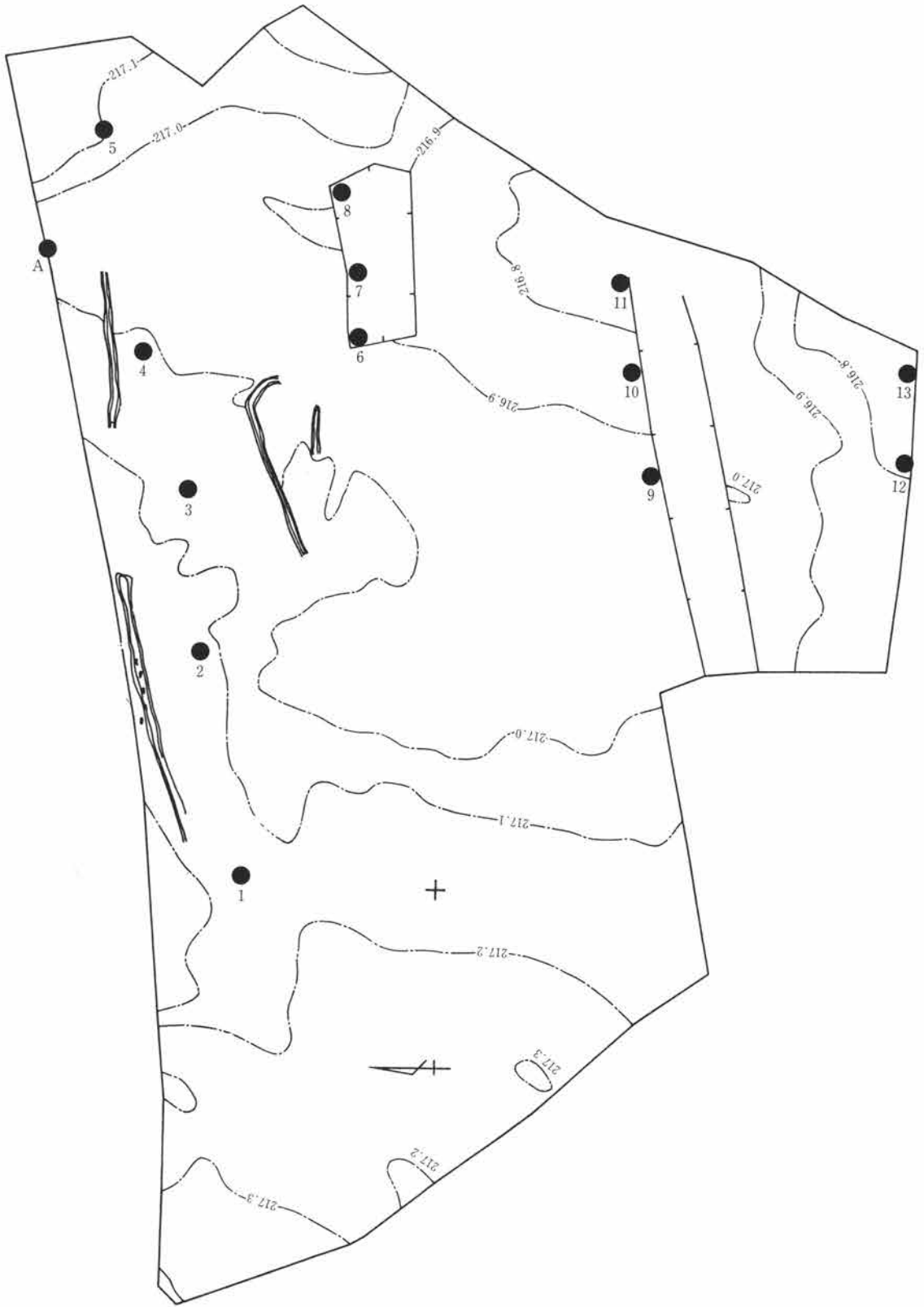
以上のように、プラント・オパール分析によって、浅間Bテフラ直下の遺構検出面で稲作が行われていたことが検証された。

(2) 稲粍の生産量の推定

浅間Bテフラ直下の遺構面について、そこで生産された稲粍の総量を推定した。その結果、面積10aあたり平均2.7tと算出された(第23表参照)。当時の稲粍の年間生産量を面積10aあたり100kgとし、稲藁がすべて水田内に還元されたと仮定すると、同層で稲作が営まれた期間は、30年間弱と比較的短期間であったものと推定される。

参考文献

- 杉山真二・藤原宏志：「川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析」、『赤山—古環境編—』、川口市遺跡調査会報告第10集，1987，281-298
- 藤原宏志：「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」、『考古学と自然科学9』，1976，15-29
- 藤原宏志：「プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O.sativa L.)生産総量の推定」、『考古学と自然科学12』，1979，29-41
- 藤原宏志・杉山真二：「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—」、『考古学と自然科学17』，1984，73-85



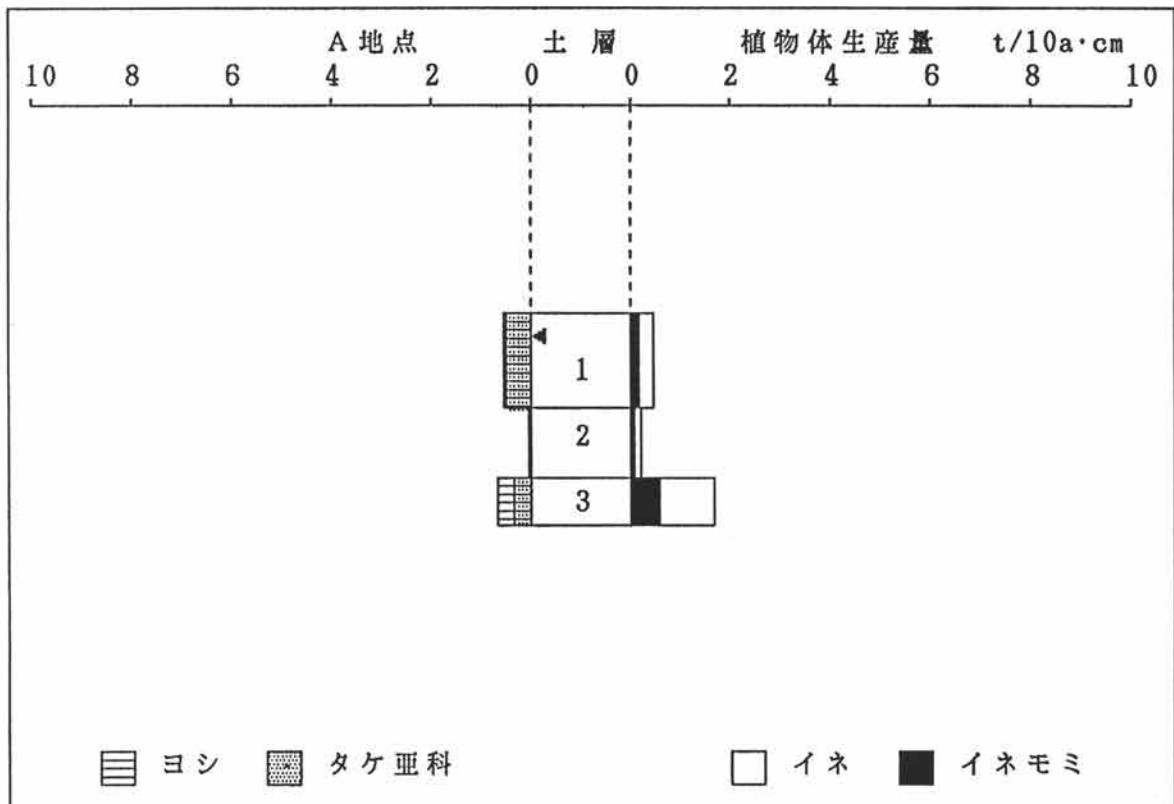
第515図 F区水田部分試料採取地点

2. 中沢平賀界戸遺跡におけるプラント・オパール分析

第23表 プラント・オパール分析結果

A地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
1	45	20	1.00	1,500	3.09	700	10,100	0	0
2	65	15	1.00	700	1.08	0	700	0	0
3	80	10	1.00	5,600	5.77	900	6,500	0	0
試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(籾総量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ亜科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
Na 1	0	10	1.00	2,900	2.99	700	4,400	0	0
Na 2	0	10	1.00	2,900	2.99	2,900	5,800	0	0
Na 3	0	10	1.00	2,800	2.88	900	7,600	900	0
Na 4	0	10	1.00	1,900	1.96	1,900	7,600	1,900	0
Na 5	0	10	1.00	2,200	2.27	700	3,000	0	0
Na 6	0	10	1.00	2,000	2.06	2,000	2,000	0	0
Na 7	0	10	1.00	1,600	1.65	800	6,600	0	0
Na 8	0	10	1.00	2,300	2.37	700	3,100	0	0
Na 9	0	10	1.00	2,700	2.78	0	2,700	900	0
Na 10	0	10	1.00	2,700	2.78	0	8,200	0	0
Na 11	0	10	1.00	3,300	3.40	800	8,400	800	0
Na 12	0	10	1.00	2,800	2.88	900	5,600	0	0
Na 13	0	10	1.00	1,600	1.65	800	4,100	0	0



第516図 主な植物の推定生産量と変遷

3. 遺物の金属学的解析結果からみた

中沢平賀界戸遺跡における鋼の製造と銅の生産

岩手県立博物館 赤 沼 英 男

1 はじめに

上越自動車道の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査によって、群馬県富岡市中沢平賀界戸遺跡は、縄文時代から近世前半にわたる複合遺跡であることが確認された。そして、8世紀代および10世紀代に比定される住居跡からは鉄滓が、また、中世から近世前半と推定される遺構からは緑青が析出した反応面をもつ炉壁が発見され、鉄と銅に関する生産活動が展開されていたことが明らかになったが、それらの具体的な内容については不明であった。

こうした状況をふまえ、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の依頼により、遺跡内における生産活動の内容をより明確にすることを目的として、鉄滓ならびに炉壁片、とりわけそれに付着する鉄滓の金属学的解析を行った。その結果、住居跡から検出された鉄滓はいずれも外部から供給された鉄を脱炭し鋼を製造するという「鋼精錬、操作に伴って排出されたものであり、一方、炉壁片については銅合金の溶製の際に使用されたものである可能性の高いことが明らかとなった。

上述の分析結果、この地域の古代末における鋼製造と鉄器製作活動を広域的な流通経済の中に位置づけて考える必要のあることが示され、併せて中世から近世前半にかけての銅合金の製造についても鉄と同様の問題意識をもって検討しなければならないことが指摘されることとなった。

2 分析資料

分析を行った資料はH区の8世紀に比定される住居跡内出土の1点と表採1点、G区の10世紀代に比定される住居跡内出土の4点、および中世から近世前半と推定される遺構から出土した炉壁片の合計7点の遺物である。

H区出土のNo 1、G区出土のNo 2、No 3、No 5の鉄滓はいわゆる椀状滓（お供え餅を逆さにした形）で、表面は黒褐色のガラス化した部分と茶褐色の錆層からなり、いたるところに空隙が認められた。No 4とNo 6も椀状鉄滓で、それらの表面は黒褐色を呈し、全域に空隙が観察された。

No 1鉄滓はH-17住居跡より出土したものであるが、この住居跡からは炉跡、焼土遺構はもとより、羽口や鍛造薄片といった鉄生産に関連した遺物も未検出である。No 2鉄滓はG-51住居跡から、No 3、No 4、No 5の鉄滓はG-52住居跡から検出された。G-51住居跡からはNo 2の他に7点の鉄滓が見いだされてはいるが、そのうちの1点はカマドの支脚のささえとして埋め込まれていたものである。焼土遺構なども未検出であることを考慮すると、G-51住居跡内で鉄に関する生産活動がなされていたとみることは危険であり、8点の鉄滓は先行する52住居跡に伴うものか、もしくは52住居跡絶後に一括して廃棄された可能性の高いことが財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団桜井美枝氏によって指摘されている。なお、No 6鉄滓はH区からの表採のため時代は不明とされている。

No 7の炉壁は中沢川北側の丘陵山頂部に構築された礎石をもつ建物の西側から、被熱された3点の礫（いずれも粗粒輝石安山岩）とともに検出された6点のうちの1つである。その時期は、火山灰の堆積状況に基づき中世から近世前半に比定されている。発掘調査時、この資料が出土した遺構の観察がなされなかった

3. 遺物の金属学的解析結果からみた中沢平賀界戸遺跡における鋼の製造と銅の生産

め、出土状況の詳細は不明であるが、発掘調査終了後の写真の中に浅い皿状のくぼみをもつ焼土遺構らしきものが認められた。炉壁は曲率を有し、そこからもとの炉の横断面は外径64.0cm、内径46.0cm程度の円形で、その内側には青緑色のガラス化した炉壁反応部分がみられたことから、銅の生産に関係した遺物と推測された¹⁾。

分析を行った資料の名称、検出遺構、推定年代を第24表に、No.1～No.6 鉄滓の外観を第517～520図に、No.7 炉壁片の外観を第522図に示す。

3 分析用試料の調整

鉄滓についてはダイヤモンドカッターを使い中心線に沿って2つに切断した。つぎに切断面を注意深く観察し、錆層に鉄滓が付着している領域がないかどうか調べた。該当する領域が認められた場合にはその部分とそれに対応するもう一方の切断面から、認められない場合にはそれぞれの切断面の中心部分から試料片を抜き出した。

第522図から明らかなように、No.7 炉壁片は内側より反応部分、黒褐色もしくは赤褐色に変色した部分、そして黄褐色を呈する4層からなるが、ダイヤモンドカッターを使って炉壁反応部分と黄褐色部分を別々に摘出し、前者については組織観察と化学成分分析、示差熱・熱重量同時分析(TG-DTA)に、後者については化学成分分析に供した。なお、炉壁反応部分については粉碎の過程で銅色を呈する金属粒を確認できたため、それを分けとり化学組成を求めた。鉄滓の切断位置および炉壁片からの試料摘出位置は第517～520図、および第522図に示すとおりである。

4 分析方法

鉄滓および銅の生産に関係したとみられる炉壁反応部分から摘出した試料片のうちの大きい方を樹脂で固定し、エメリー紙、さらにはダイヤモンドペーストを使って研磨した後、金属顕微鏡で組織の観察を行った。また、それらの生成経路を推定するうえで重要と判断された鉱物については、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー(EPMA)によりその組成を決定した。

摘出した他の試料片はエチルアルコール、さらにアセトンで洗浄し十分に乾燥した後、粉碎し化学成分分析に供した。鉄滓についてはCu、Mn、P、Ni、Co、Ti、Ca、Al、Mg、V、Na、K、Siを、炉壁反応部分についてはSi、Al、Ca、Mg、K、Cu、Sn、Pb、As、Au、Agを誘導結合プラズマ発光分光分析法(ICP-AES法)により定量した。鉄滓中のT.Fe、M.Fe、FeOと炉壁反応部分のT.Fe、FeOはクロム酸カリウム滴定容量法、炉壁反応部分のSは燃焼高周波-赤外吸収法によった。なお、鉄滓のFe₂O₃についてはT.FeとFeOの定量値から計算により求めた。また、炉壁反応部分に混在する微小な金属粒については、それを単独に摘出しCu、Sn、Pb、Ag、Co、As、Au、Sb、Feの各成分をICP-AES法により定量した。さらに化学成分分析の前に粉碎試料の一部を分別し、示差熱・熱重量同時分析(TG-DTA)に供した。

5 分析結果

5-1 鉄滓の化学組成

第25表に住居跡から出土した6点の化学組成を示す。6点ともT.Feが54%を越え、No.3、No.4、No.5 鉄滓についてはFeO分が51～69%にある。鉄滓の相当部分がウスタイト(理論組成FeO)によって構成されているものと推測される。また、Fe₂O₃も10～32%にあり、相当量の赤錆が混在していたこともわかる。No.4 鉄滓の

TiO₂分は4.53%と他の5点に比べ高値をとる。後述する鉄滓中のチタン化合物に起因するものと考えられる。6点の鉄滓の(CaO+MgO)/SiO₂、(CaO+MgO)/Al₂O₃を求めると、第25表右欄となる。No.3とNo.4の鉄滓では(CaO+MgO)/SiO₂がそれぞれ0.225と0.276、(CaO+MgO)/Al₂O₃にいたってはいずれも0.7を越えており、通常の粘土に比べ高値を示す。

5-2 鉄滓のマクロおよびマイクロ組織

No.4鉄滓(第518図a)から摘出した試料片のマクロ組織(第518図b)には一様に灰色の結晶がみられ、ところどころに空孔も認められた。第518図bの領域A部を高倍で観察したものが第518図cであるが、灰色の粒状結晶W、灰色の角状結晶T、暗灰色の結晶F、およびマトリックス(M)によって構成されている。第518図cの枠で囲んだ内部をEPMAにより分析したところ、それぞれウスタイト(理論組成FeO)、FeO-TiO₂-Al₂O₃-V₂O₅-MgO系のチタン化合物、FeO-MgO-SiO₂系の化合物[マグネシウムを固溶した鉄かんらん石、2(Fe,Mg)O・SiO₂と推定される]であることが確かめられた(第518図d)。

No.2鉄滓(第519図a)のマクロ組織にも灰色の結晶が一様に析出した様子を観察できる(第519図b)。第519図bの領域A部には大きさが300~500μmの粒子が観察され(第519図c)、一方、領域B部はウスタイト(W)、FeO-MgO-SiO₂系の化合物(F)、FeO-Al₂O₃系化合物(H)、金属鉄(Me)とその回りを埋めるマトリックス(M)によって構成されていることがEPMAによる分析の結果明らかになった(第519図d)。また、領域Aの粒子は外形が不整であり、粒子内では結晶粒界に亀裂がみられた。第517図の組織観察結果が示すように、No.1、No.3、No.5の各鉄滓もNo.2鉄滓の領域B部とほぼ同じ鉱物組成をとる。ただしNo.5鉄滓はウスタイトの占める割合の多いA部とFeO-MgO-SiO₂系化合物の占める割合の大きいB部からなる。

No.6鉄滓もNo.2鉄滓の領域B部とほぼ同じ組成を示す(第520図b、c)。ただし第520図dのEPMAによる分析結果によると、針状をした暗灰色の化合物OにはMg分のかわりにCa分が含まれており、FeO-CaO-SiO₂系化合物[鉄カルシウムオリビン：2(Fe,Ca)・SiO₂]と判定される。また、わずかではあるが黒色のK₂O-Al₂O₃-SiO₂系化合物(K)の析出も確認できた。

上述によって明らかにされた鉄滓の鉱物組成を整理すると、第25表の最右欄のごとくなる。

6 古代ならびに中世における鋼の製造

古代および中世における鋼の製造プロセスにはいまだに不明な点が多く、いくつかの仮説が出されているが、それらを整理すると以下のごとくなる。

- 1) 原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石)を還元し鉄を生産する段階
 - 2) 1)で生産された鉄から目的とする鋼を製造する段階
 - 3) 2)で製造された鋼を素材とし目的とする鉄器を製作する段階
- ここではとりあえず1)を製錬、2)を精錬、3)を小鍛冶とする。

1)の製錬によって得られる鉄は炭素含有量によって、鋼と銑鉄の2つに分類できる。製錬炉で得られた鉄から極力前者の鋼部分を摘出して、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そしてその鋼を使って製品鉄器が製作されたとする見方がある²⁾。製錬炉で直接に鋼が作り出されるという意味でこの方法は直接製鋼法と呼ばれている。さらに製錬によって得られた粗鉄を精製し目的とする鋼に変えるという操作は精錬鍛冶とされている。しかし、ここでいう精錬鍛冶がどのような設備を用いどのようにしてなされたかという点に関しての具体的な記述はない。不純物の除去と炭素量の増減と

3. 遺物の金属学的解析結果からみた中沢平賀界戸遺跡における鋼の製造と銅の生産

いう複数の操作工程があったと推測されるが、具体的な操作方法が不明である以上、その操作の過程でどのような組成の鉄滓が排出されたのかを論ずることは困難と考えられる³⁾。

1) の製錬では銑鉄の生産も可能である。銑鉄は再び溶解炉で溶解し、鋳型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器となる。また、銑鉄中の炭素を低減させる、すなわち脱炭を行うことによって鋼を得ることもできる。この場合の脱炭の方法としては、半地下式堅型炉もしくは火窠炉の中にあらかじめ用意された銑鉄を投入して炉床部に銑鉄浴を生成させた後、その上から砂鉄、もしくは鉍石粉を投入する方法がとられていた可能性の高いことが遺物の金属学的解析結果に基づき指摘されている⁵⁾⁶⁾。銑鉄を素材とし脱炭材として砂鉄もしくは鉍石粉を使用し鋼を製造するというこの方法は、銑鉄を経由して鋼が得られるという意味で間接製鋼法と呼ばれるが、本論では“鋼精錬、という用語を用いることにする。脱炭材に鉄鉍石粉が使用された場合、鉄鉍石中の酸化鉄は銑鉄中の炭素、もしくはCOガスにより還元されてFeO、さらに還元が進めばFeに変わって溶鉄に付け加わる。一方、砂鉄が用いられた場合にはFeO-Fe₂O₃-TiO₂系のチタン化合物中の酸化鉄は還元により鉄浴に加わり、スラグ浴には還元雰囲気と炉内温度によってウルボスピネル(2FeO・TiO₂)、イルメナイト(FeO・TiO₂)、Ti-O系化合物、Ti(C,N)が析出することになる⁷⁾⁸⁾。実際の操作では投入された脱炭材と炉壁材などが反応しスラグ浴が形成される。脱炭材に鉍石粉が使用された場合にはウスタイト、FeO-MgO-SiO₂系化合物、ガラス質けい酸塩を主成分とする鉄滓が、砂鉄の場合にはそれらにチタン化合物が加わったものが生成する。この脱炭・精製の工程で排出される鉄滓を鋼精錬滓という。そして、このような方法により製造された鋼を用い、小鍛冶によって目的とする鉄器が作りだされることになる。

直接製鋼法では製錬によってただちに鋼を得ることができるから、製錬が行われる場所で実際に使用される原料鉍石は鉄鉍石か砂鉄のいずれかであり、両者が混合して使われることはまずない。一方、間接製鋼法の場合、まず銑鉄が生産され、その銑鉄をもとに鋼が製造される。銑鉄と鋼の製造場所は同じ場合もあるが、生産された銑鉄が他の場所に運ばれ鋼の製造に供されることも考えられる。この場合、脱炭材としては砂鉄と鉄鉍石のうち鋼を製造するところで入手容易なものが利用されることになる。

小鍛冶操作では鍛打・加熱を繰り返して目的とする鉄器への造形が行われるので、鍛打のときは加熱された鋼の表面に生成する酸化鉄(スケール)が剥離(これは鍛造薄片と呼ばれる)する。一方、加熱のときは酸化鉄が半熔融状態になり、火窠炉の底部に溜まる。そこで炉壁材と反応して鉄分に富む半熔融状態の鉄滓状物質を生成し、加熱炉の底で固化する。このようにして生成した“椀形状、(供え餅を逆さにした形)の鉄滓状物質が、鉄生産関連遺跡の発掘調査では小鍛冶滓として扱われている。従って、小鍛冶滓は金属鉄、錆層、ウスタイト(FeO)を主成分とし、他にスケールが炉材と反応した際に生成するFeO-SiO₂系化合物が混在した組成をとるものと推測される。なお、この操作はしばしば鍛錬鍛冶ともいわれる。

上述から明らかなように、2)でいう精錬の中には直接製鋼法の精錬鍛冶と間接製鋼法の鋼精錬という2つの異なった概念が存在することがわかる。精錬鍛冶についてはその操作内容をより明確にする必要があると考えられるが、その問題についてはともかく、ここでは銑鉄を脱炭し鋼を製造するという鋼精錬とは区別して扱うことにしたい。上述を整理すると第521図のごとくなる。

7 鉄滓の組成からみた中沢平賀界戸遺跡における鉄に関する生産活動

マイクロ組織にチタン化合物が見いだされたNo.4鉄滓は、砂鉄の使用による操作の過程で排出された鉄滓であり、小鍛冶滓ではない。6に従えば砂鉄を始発原料とする製錬滓か、あるいは脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬滓のいずれかとなるが、住居跡内からの検出という出土状況を考慮すれば、後者の可能性が高いと

みてよいであろう。No 4 鉄滓の $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{SiO}_2$ 、 $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{Al}_2\text{O}_3$ を求めると、それぞれ0.276、1.13となり通常の粘土のそれよりも高値をとる。鋼精錬操作においてCaや、Mg鉱物を含む何らかの造滓材の使用についても考慮しなければならない。

No 2 鉄滓には300~500 μ の粒子が観察された。粒子の外形が不整であり、しかも粒子内で結晶粒界に亀裂が入っていることから、溶融した鉱滓の中で加熱分解の途中にあった、未溶融の鉱石粉とみることができる。第25表に示すとおり、 $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{SiO}_2$ 、 $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{Al}_2\text{O}_3$ も通常の粘土に比べ高いことを考慮すると、造滓材を用いながら、鉱石粉を投入する鋼精錬操作に伴って生成した鉄滓と解釈できる。

第25表から明らかのように、No 1、No 3、No 5、およびNo 6の4点の鉄滓もNo 2 鉄滓とほぼ同様の組成であり、No 2 鉄滓と同じ操作に伴って排出された鉄滓と判定できる。マクロ組織のいたるところに空孔がみられるが、これは発生したガスが鉄滓の固化とともにその中に閉じこめられてしまったものである。なお、No 6 鉄滓には鉄カルシウムオリビン $[\text{2}(\text{Fe,Ca})\text{O}\cdot\text{SiO}_2]$ が見いだされたが、このこともCa鉱物を含む造滓材が使用された可能性のあることを示している。また、同時に検出された $\text{K}_2\text{O}-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{SiO}_2$ 系化合物は、カリウム鉱物もしくは木灰と、スラグ融液とが反応して生成したものと推定される。

既述のとおりNo 5 鉄滓は主として $\text{FeO}-\text{MgO}-\text{SiO}_2$ 系化合物とマトリックスとからなる部分とウスタイトとマトリックスとからなる部分の2つの組成の異なった鉄滓が付着した試料である。炉内における還元雰囲気局所的に異なっていたか、炉内反応の進行とともに還元雰囲気が変化したことに起因する。

上述の考察によって中沢平賀界戸遺跡では銑鉄を素材とする鋼の製造、すなわち鋼精錬が行われていた可能性の高いことが明らかになった。

ところで発掘調査の結果、No 1はH-17号住居跡から、No 2、No 3、No 4、No 5の4つの鉄滓はG-51号住居跡に先行するG-52号住居跡に伴うもの、あるいは52住居跡廃絶後一括して廃棄されたかのいずれかとされている。鉄滓組成の上からは、脱炭材として鉱石粉を使用した際に排出された可能性の高いNo 1、No 2、No 3、No 5、No 6の5点と、砂鉄を脱炭材とするNo 4 鉄滓とに分けることができる。この分類に従えば、52住居跡に関係するNo 2、No 3、No 5の3点とNo 4 鉄滓とは排出された時期が異なるか、あるいは同時期であるとするれば鋼精錬時、鉱石粉と砂鉄とが共に使用されたことになる⁹⁾。8世紀代に比定されるNo 1 鉄滓とNo 2、No 3、およびNo 5の3点がほぼ同じ組成であることを考慮すると、10世紀代に鋼精錬操作で使用する脱炭材が鉱石粉から砂鉄に変わった可能性も考えられ、この点については今後出土状況の明確な遺物を基に慎重に判断する必要がある。

最後に問題となるのは銑鉄の供給地である。考古学の発掘調査によって、6世紀後半には列島内に製錬技術が定着したことが指摘されている。そこで、まず、列島内での供給を考えなければならない。そのためには製錬炉跡が存在する遺跡において何が生産されているのかを明確にし、その上で鋼精錬の素材となった銑鉄の組成との対比を行い、供給地域を絞り込む作業が不可欠である。ただし、最近の分析によって鉄素材はもちろん、相当量のCu分、Ni分、Co分を含む製品鉄器が確認されている。列島内において銅含有量レベルの高い鉄鉱山としては岩手県釜石市に立地する釜石鉱山、新潟県豊浦市の赤谷鉱山を挙げることができるが、それは大陸の山東半島から揚子江下流域にかけても分布する。時代を考慮すれば後者からの供給を無視することはできない。最近の分析結果は国内はもとより大陸にまで視野を広げ、流通問題について検討する必要があることを示している。

8 中沢平賀界戸遺跡における銅に関する生産

8-1 残存する炉壁片の外観

第522図に炉壁片の外観と断面のスケッチ図を示した。炉壁片は約8cmの厚みをもっている。内面には炉壁反応部分（炉内で浮いているスラグが炉壁と反応し固化したもの）がみられ、その厚さは1～2cmにおよんでいる。その外側は黒褐色および赤褐色に変色した粘土層からなり、最表面は赤褐色と黄褐色の領域が混在した粘土によって覆われている。最表面の黄褐色部分には鋳滓による侵食はみられない。炉壁断面にはモミガラのような植物質のものが混入しているが、これは炉の製作を容易にするために用いられたものと思われる。また、炉壁反応部分にはところどころに緑青に覆われた銅粒らしきものが観察された。

発掘調査を実施した財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の桜井美枝氏によって、分析に使用したものの他に同様の形状をした数点の炉壁片が確認されており、その中に直径10cmの半月状の窪みを有するものが認められているが、これはふいご羽口の装着に使用された可能性がある。

なお、既述のとおり、桜井美枝氏によって出土した炉壁片から炉の横断面は外径は64cm、内径は46cmの円形を呈していたものと推定されている。

8-2 炉壁材と炉壁反応部分ならびに銅粒の組成

鋳滓の侵食を受けていない黄褐色部分から抽出した炉材の化学組成を第26表に、炉壁反応部分のものを第27表に示す。炉材は SiO_2 、 Al_2O_3 を主成分とし、他に CaO 、 MgO がそれぞれ2.14%、2.26%含有されている。この分析値から $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{SiO}_2$ 、 $(\text{CaO}+\text{MgO})/\text{Al}_2\text{O}_3$ を求めるとそれぞれ0.07、0.26となる。通常の粘土に比べ CaO 、 MgO 分を多く含んでおり、良質なものが使用されているとはいえない。一方、内面の炉壁反応部分のそれはそれぞれ0.158、0.621であり、黄褐色の炉材よりもさらに高い値を示す（第27表）。

炉壁反応部分から抽出した試料片のマクロ組織によると、中央部分に金属粒がみられ、それを鋳滓が取り囲んでいる様子が観察される（第523図a）。鋳滓の枠で囲んだ部分をEPMAにより分析したものが第523図bであるが、灰色の化合物Fと暗灰色のガラス質けい酸塩（S）によって構成されており、前者は FeO-MgO-SiO_2 系化合物、後者は $\text{FeO-SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3-\text{CaO-K}_2\text{O-MgO}$ 系のガラス質けい酸塩であることがわかる。

炉壁反応部分の肉眼観察と抽出した試料片の組織観察結果によって、炉壁反応部分には金属粒の残存が確認された。この金属粒のみを抽出し表面に付着している緑青を取り除いたものの化学成分分析結果が第28表であるが、Cu分、Sn分がそれぞれ88.8%、1.57%含有される反面、As、Feといった不純物は0.3～2%と低いレベルにある。純度の高い銅粒といえる。

第524図は炉壁反応部分の示差熱・熱重量変化曲線（TG-DTA曲線）であるが、800～1000°Cに吸熱の微小なピークがみられる。この分析によって炉壁材反応部分の初期融液生成温度は800°C以上にあったと推定される。

炉材、炉材反応部分、および金属粒の化学組成、ならびにTG-DTA分析の結果を総合すると、炉内に羽口で空気を送り込み木炭を燃焼させ、造滓材（化学組成と組織観察結果からかんらん岩が使用された可能性が考えられる）を加えてスラグ浴を造る。そして、その下に銅を主成分とする金属浴を形成させるという操作が浮かび上がってくる。この操作で考えられるのは銅合金の溶製、もしくは溶解である。金属粒に1%強のSn分が含有されていることから、前者の可能性を考慮に入れて遺跡の性格を検討しなければならない。今後、炉壁反応部分から複数の金属粒を抽出し、それらの中に数%ものSn分を含有する金属粒が確認され、さらに羽口が装着された可能性の高い炉壁の反応部分の組成が上述のものと合致することが確かめられれば、その

実施を明確にすることができるであろう。

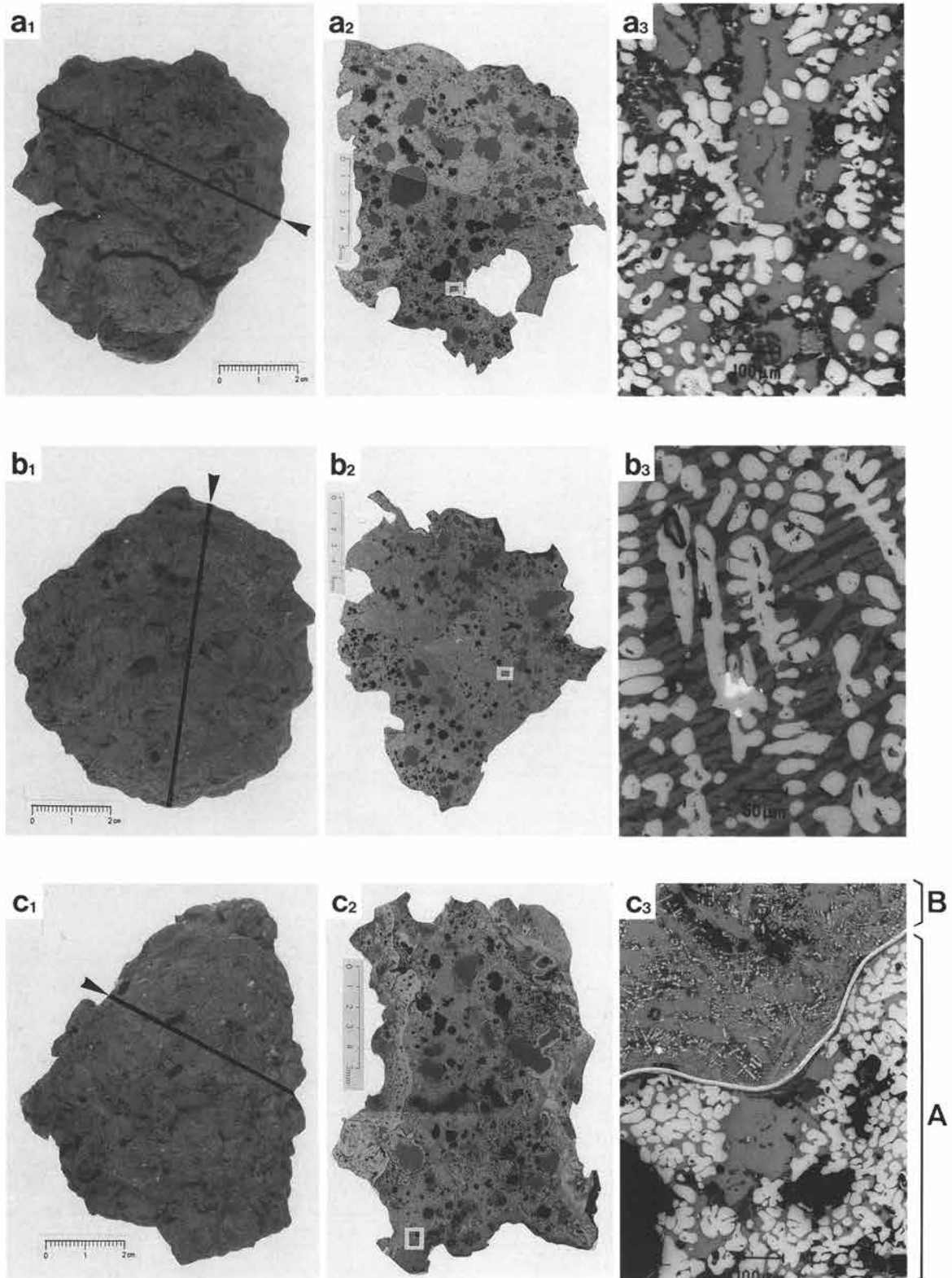
8 まとめ

群馬県富岡市中沢平賀界戸遺跡の住居跡群から出土した鉄滓を分析したところ、8世紀には銑鉄を素材とし脱炭材として鉍石粉を使用する鋼精錬が行われ、10世紀においても同様の操作がなされていたこと、そして10世紀代には脱炭材が鉍石粉から砂鉄に切り替えられた可能性のあることが判明した。なお、素材となった銑鉄については国内はもとより大陸にまで視野を広げてその供給地域の検討の必要のあることが示された。また、中世から近世前半においては、遺跡内で銅合金の溶製がなされていた可能性の高いことも指摘された。

註

- 1) 発掘担当者である財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 桜井美枝氏からの私信による。
- 2) 大澤正巳「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始」『季刊考古学8』雄山閣出版、1984年、pp.36-46。
- 3) 少なくとも精錬鍛冶には脱炭、滲炭、鉍滓の絞り出しという工程が含まれていることが大澤正巳氏によって指摘されている。これら3つの操作を同時に行うことは困難であるから、精錬鍛冶には最低3つの操作が存在したことになる。当然、それぞれの操作に対応する3種類の鉄滓が排出されることになるが、その点に関する検討が不十分であることが佐々木稔氏によって指摘されている⁹⁾。
- 4) 佐々木稔「遺構をはなれて製錬滓と断定できるか—潤崎遺跡出土鉄滓の場合—」『たたら研究34号』たたら研究会、1993年、pp.43-52。
- 5) 佐々木稔「ふたたび古代の炒鋼法について」『たたら研究27号』たたら研究会、1985年、pp.40-50。
- 6) 赤沼英男「いわゆる半地下式堅型炉の性格の再検討—李沢・北沢両遺跡遺物の金属学的解析結果から—」『たたら研究35号』たたら研究会、1995年、pp.11-28。
- 7) 5)に同じ。
- 8) 6)に同じ。
- 9) 遺跡から3 km離れた富岡市の西側に位置する甘楽郡下仁田町には、高品位の鉄鉍石が採掘される中小坂鉄山があり、鉍石粉を容易に得ることができる。明治8年には製鉄所も設立されていた。明治10年代には埋蔵量500万 t 日産20 t とも言われたが富鉍部のほとんどはすでに採掘され現在は休山している。

3. 遺物の金属学的解析結果からみた中沢平賀界戸遺跡における鋼の製造と銅の生産

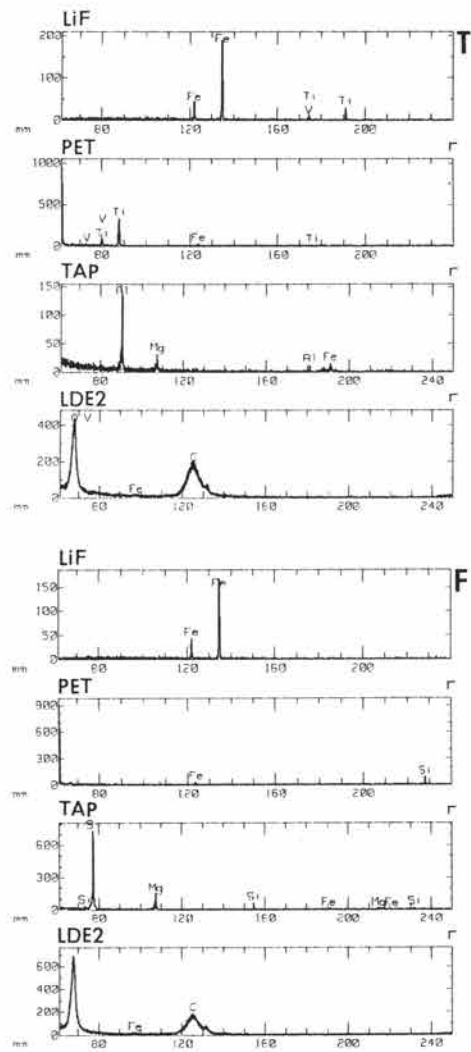
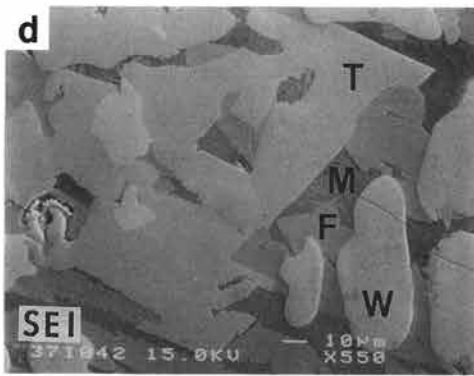
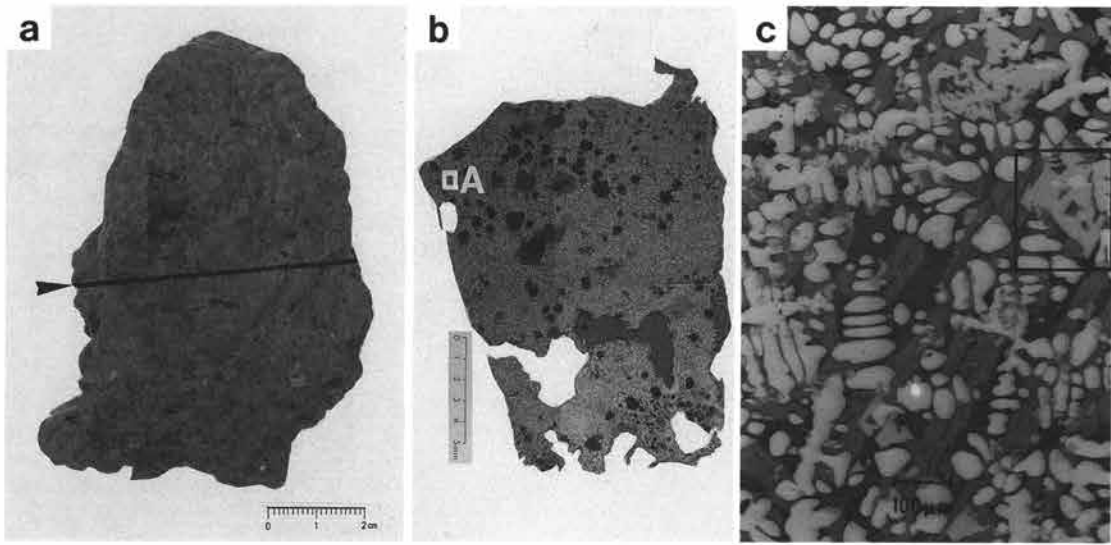


第517図 分析を行った鉄滓の外観と組織観察結果

矢印は試料切断位置、マクロ組織の枠で囲んだ部分はミクロ組織観察位置。

a : No 1 鉄滓、b : No 2 鉄滓、c : No 3 鉄滓

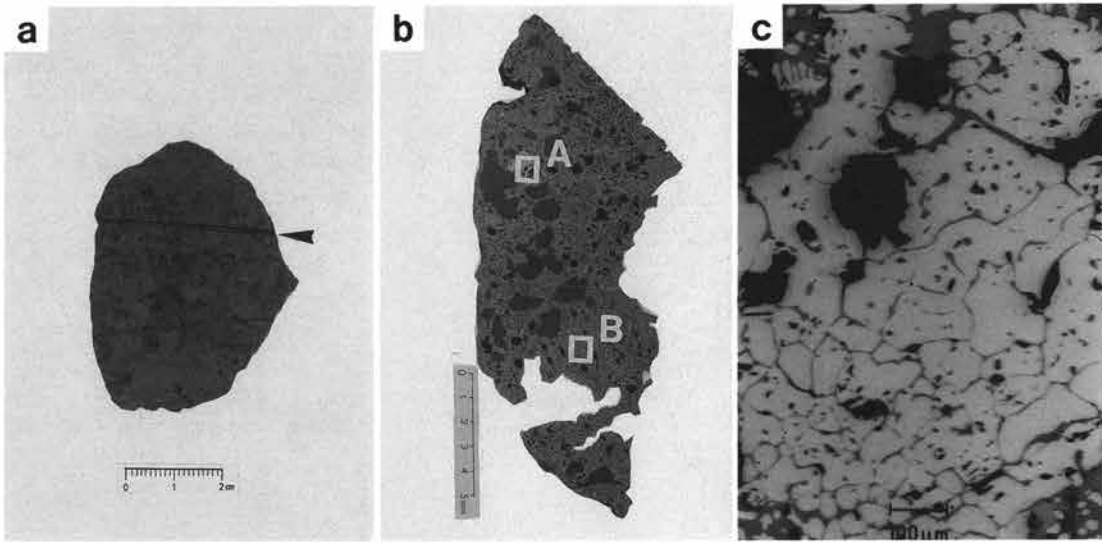
No 5 鉄滓はウスタイトの占める割合の大きい領域（第517図c₃のA部）とFeO-MgO-SiO₂系化合物の占める割合の大きい領域（第517図c₃のB部）からなる。



第518図 No.4 鉄滓の外観と摘出した試料片の組織観察結果

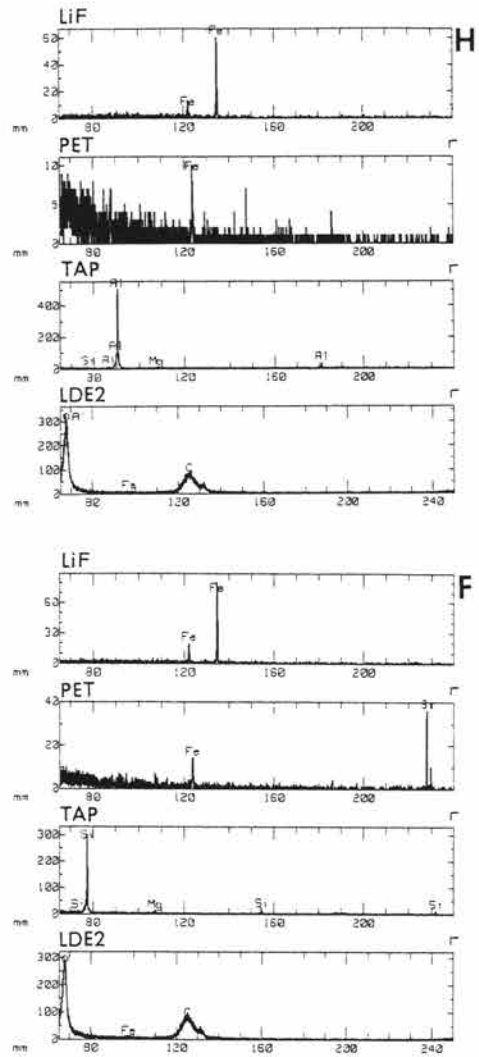
- a : 外観、b : マクロ組織
 - c : bの領域A部のミクロ組織
 - d : cの枠で囲んだ部分のEPMAによる分析結果
 - SEI : 2次電子像
 - W : ウスタイト (理論組成 FeO)
 - T : チタン化合物
 - F : FeO-MgO-SiO₂系化合物
 - M : マトリックス
- 外観に付した矢印は資料切断位置。

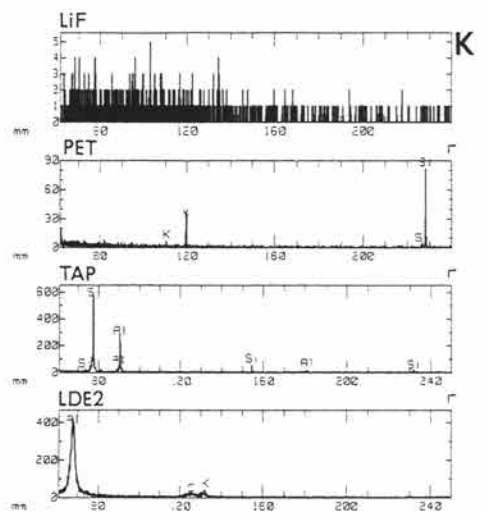
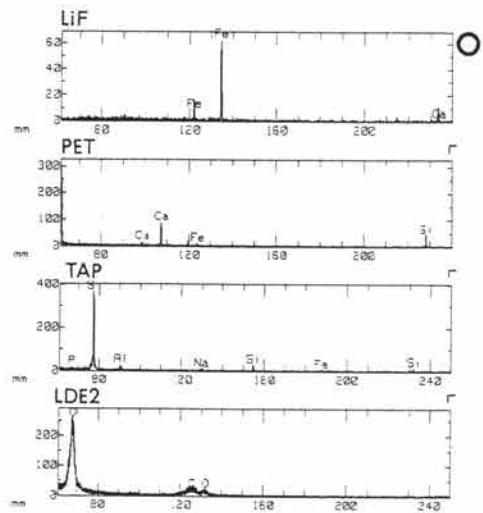
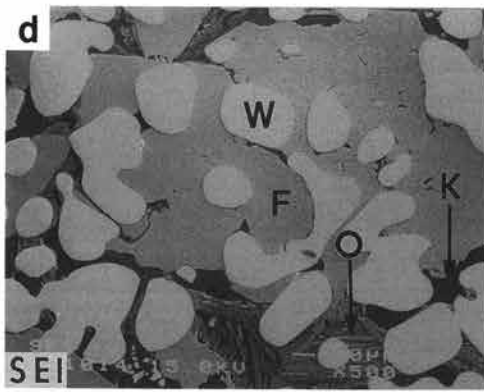
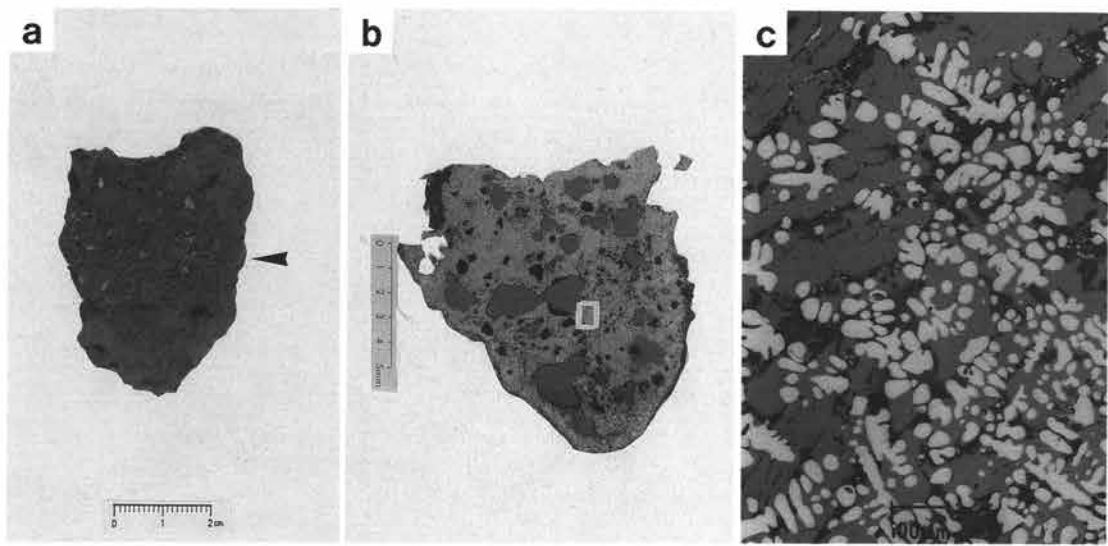
3. 遺物の金属学的解析結果からみた中沢平賀界戸遺跡における鋼の製造と銅の生産



第519図 No. 2 鉄滓の外観と摘出した試料片の組織観察結果

- a : 外観、b : マクロ組織
 - c : bの領域A部のミクロ組織
 - d : bの領域B部のEPMAによる分析結果
- COMP : 組成像
 W : ウスタイト
 F : FeO-MgO-SiO₂系化合物
 H : FeO-Al₂O₃系化合物
 M : マトリックス
 Me : 金属鉄
- 外観に付した矢印は資料切断位置。

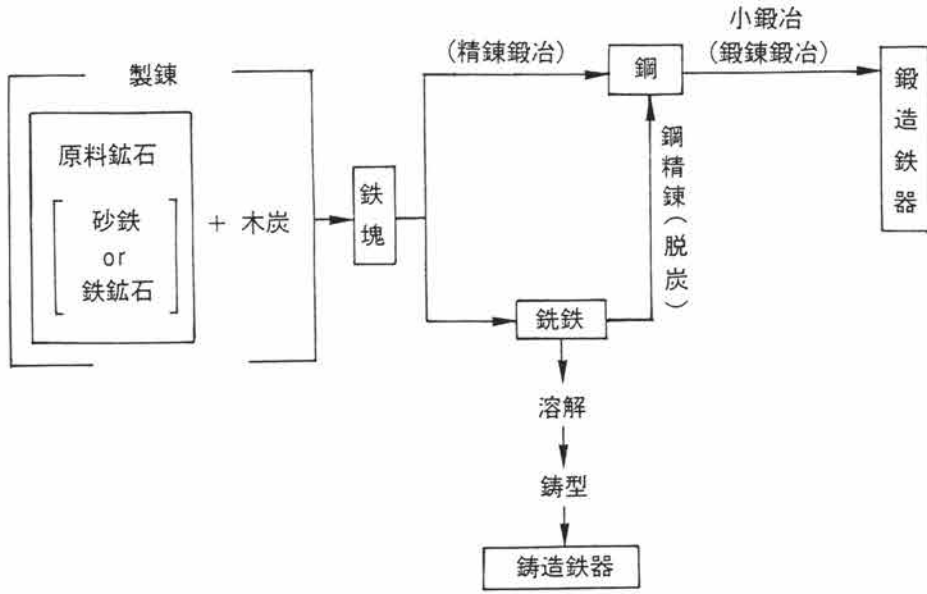




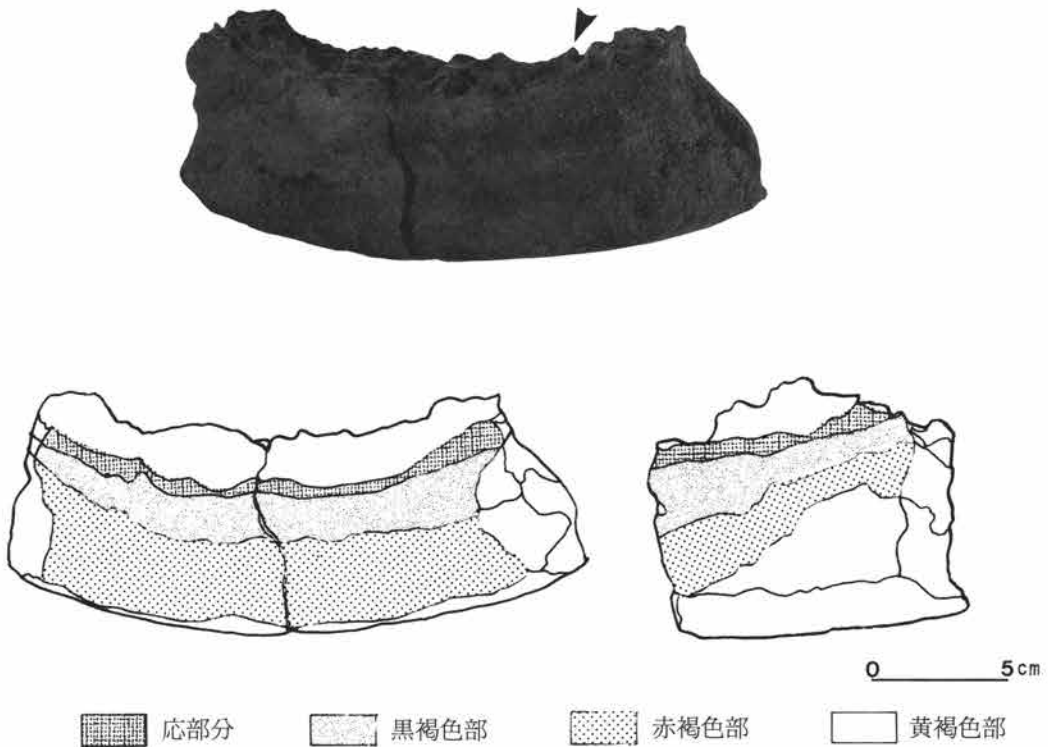
第520図 No.6 鉄滓の外観と抽出した試料片の組織観察結果

- a : 外観、b : マクロ組織
 - c : bの枠で囲んだ部分のミクロ組織
 - d : cの枠で囲んだ内部のEPMAによる分析結果
 - SEI : 2次電子像
 - W : ウスタイト
 - O : FeO-CaO-SiO₂系化合物
 - K : K₂O-Al₂O₃-SiO₂系化合物
 - M : マトリックス
- 外観に付した矢印は資料切断位置。

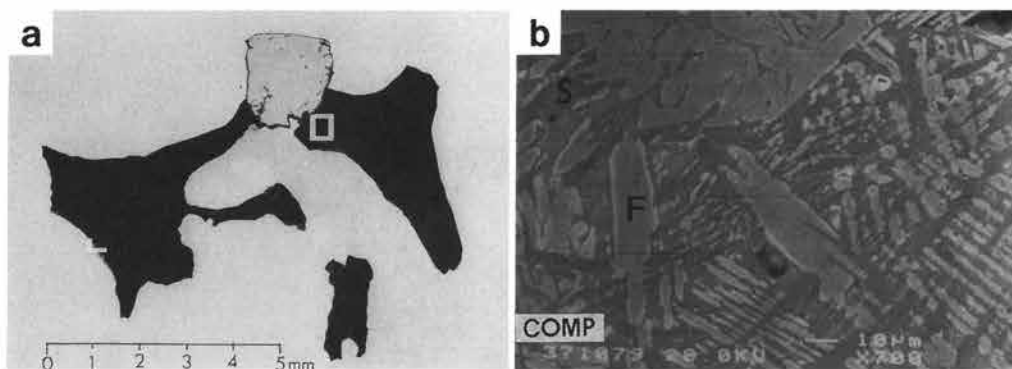
3. 遺物の金属学的解析結果からみた中沢平賀界戸遺跡における鋼の製造と銅の生産



第521図 推定される鋼の製造法



第522図 緑青が析出した炉壁反応部分をもつ炉壁片の外観とそのスケッチ図



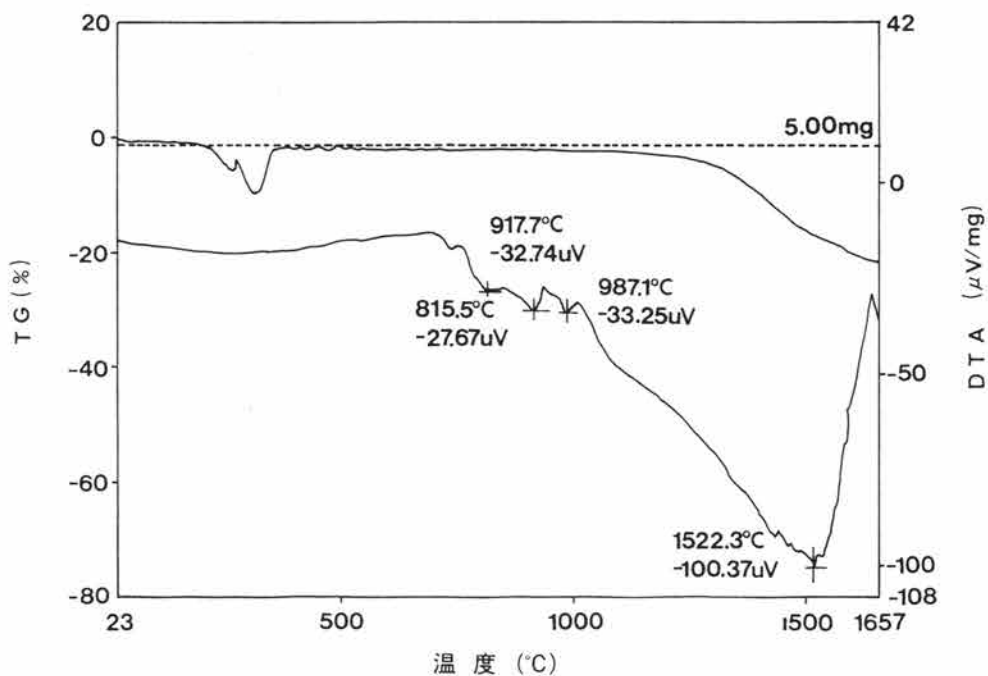
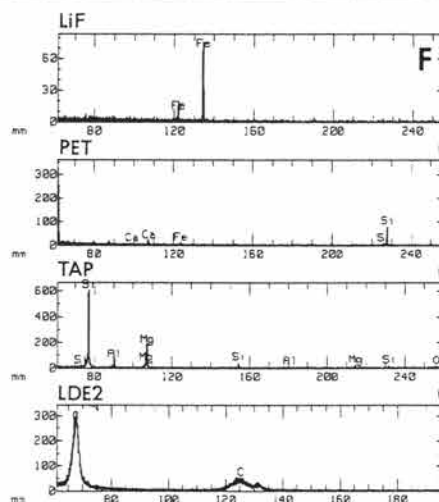
第523図 炉壁反応部分から抽出した試料片の組織観察結果

a : マクロ組織、b : a の枠で囲んだ部分のEPMAによる分析結果

COMP : 組成像

F : FeO-MgO-SiO₂系化合物

S : ガラス質けい酸塩



第524図 炉壁反応部分から抽出した試料片のTG-DTA変化曲線

分析はアルゴン雰囲気下で実施した。

3. 遺物の金属学的解析結果からみた中沢平賀界戸遺跡における鋼の製造と銅の生産

第24表 分析試料一覧

No.	資料名	出土遺構	推定年代	No.	資料名	出土遺構	推定年代
1	鉄滓	H-17住-6 (床上24cm)	8世紀	5	鉄滓	G-52住-6 (床上7cm)	10世紀
2	鉄滓	G-51住-15 (覆土)	10世紀	6	鉄滓	H-Cr-7 (表採)	不明
3	鉄滓	G-52住-5 (床上15cm)	10世紀	7	炉壁片	I-礎石建物-2 (床上10cm)	中世～近世前半
4	鉄滓	G-52住-4 (床密着)	10世紀				

第25表 鉄滓の分析結果

No.	化学成分 (%)																CaO+MgO		鉱物組成	
	T. Fe	M. Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	Cu	Mn	P	Ni	Co	V	SiO ₂		Al ₂ O ₃
1	56.97	<0.10	63.74	10.61	16.17	0.65	2.66	1.24	0.78	0.19	1.38	-	-	-	-	-	-	0.125	0.76	W, F, M
2	54.00	-	-	-	15.51	0.227	3.61	0.984	1.37	-	-	0.012	0.053	0.345	0.007	0.003	0.036	0.152	0.65	W, F, H, M
3	60.67	0.28	68.33	10.41	11.52	0.18	3.37	1.88	0.71	0.24	0.90	-	-	-	-	-	-	0.225	0.77	W, F, M
4	54.29	<0.10	59.76	11.21	14.19	4.53	3.46	1.61	2.31	0.21	0.74	-	-	-	-	-	-	0.276	1.13	W, T, F, M
5	62.17	0.28	51.50	31.26	9.90	0.35	2.04	0.46	0.55	0.07	0.61	-	-	-	-	-	-	0.102	0.50	W, F, M
6	55.80	-	-	-	13.86	0.107	2.01	0.627	0.410	-	-	0.008	0.036	0.052	0.004	0.008	0.004	0.075	0.97	W, F, O, K, M

注) -は分析せず。Wはウスタイト (理論組成FeO), FはFeO-MgO-SiO₂系化合物, OはFeO-CaO-SiO₂系化合物, HはFeO-Al₂O₃系化合物, Mはマトリックス。

第26表 炉壁片の化学組成

T. Fe	化学成分 (%)										CaO+MgO		CaO+MgO
	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	TiO ₂	Cu	Mn	P	Co	SiO ₂	Al ₂ O ₃		
4.20	61.42	16.78	2.14	2.26	0.807	0.024	0.070	0.023	0.001	0.07	0.26		

第27表 炉壁反応部分の化学組成

T. Fe	化学成分 (%)														CaO+MgO		CaO+MgO	鉱物組成
	FeO	SiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	K ₂ O	S	Cu	Sn	Pb	As	Au	Ag	SiO ₂	Al ₂ O ₃			
7.06	2.15	58.95	15.04	4.60	4.74	0.02	0.019	1.85	0.12	0.10	0.03	<0.01	0.04	0.158	0.621	F, S		

注) FはFeO-MgO-SiO₂系化合物, Sはガラス質けい酸塩。

第28表 銅粒の化学組成

Cu	Sn	Pb	Ag	Co	As	Au	Sb	Fe
88.8	1.57	0.836	0.066	0.013	0.388	0.007	0.010	1.56

抄録

フリガナ	ナカザワヒラガカイトイセキ
書名	中沢平賀界戸遺跡
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第35集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第199集
編著者名	桜井美枝
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年月日	西暦1996年3月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中沢平賀界戸遺跡	群馬県富岡市大字中沢字平賀界戸	10210	10005 -00305	36°14′24″	138°49′12″	19891101 19910228	29,000㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中沢平賀界戸	住居跡 生産址	縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 平安時代 中・近世	竪穴住居157軒 土坑・墓壇・溝 掘立柱建物・塚 礎石建物 水田址	縄文・弥生土器 土師器・須恵器 石器・鉄器	縄文中期から弥生・古墳・奈良・平安・中世の竪穴住居多数。 その他中・近世の塚・礎石建物・墓壇等を含む。

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第199集

中沢平賀界戸遺跡

第1分冊《本文編》
関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第35集

平成8年3月18日 印刷
平成8年3月25日 発行

編集／群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社